

混血墮天使が幼馴染を
邪悪な外道にNTRさ
れたので、更生した
おっぱいドラゴンとゆ
かいな仲間たちと共に、
変身ヒーローになって
怪人たちと戦いながら
罪を乗り越えていくお
話 旧題・ハイスクー
ルE×E

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

詳しい話は一番上のお話を読んでみてください。あわないと思ったら即リターン。誰も幸せにならないからね？

この話は、「ガイアメモリの設定とか大好き！ 自分も似たようなアイテム使いたい!!」と「罪を犯した主人公が立ち直る話というテーマで作品を書こう」の二つが悪魔合体した結果生まれた者です。

この作品はD×Dをアンチするものではないです。そこはご了承ください。

目次

序盤（ヘルキヤット編まで）のあらすじ	
初めてきた方はまずご一読を	1
プロローグ 雨の中の悲劇と町中の惨劇	7
設定資料集	19
旧校舎のディアボロス	
1話	30
2話	40
3話	49
4話	60
5話	69
月光校庭のエクスカリバー	
1話	125
2話	139
3話	147
4話	160
5話	170
6話	180
7話	194
6話	76
7話	85
8話	94
9話	105
10話	112

10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	停止教室のヴァンパイア	9話	8話
330	318	306	294	281	268	255	243	232	226		215	201

9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	冥界合宿のヘルキャット	13話	12話	11話
493	483	472	459	445	429	411	395	385		371	358	344

4話	3話	2話	1話	体育館裏のホーリー	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話
640	630	614	602		593	581	569	562	553	541	525	509

17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話
806	795	784	773	761	746	733	724	710	695	684	662	653

10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	放課後のラグナロク	19話	18話
976	962	947	935	923	905	886	875	862	847		832	821

修学旅行はパンデモニウム	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話
	1138	1122	1111	1111	1101	1088	1066	1049	1037	1024	1008	998 986

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話

1305129012771264125112381227120811921181117111631150

1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話	学園祭のライオンハート	1 4 話

14521442143014141405139113791363135213431333 1318

1話	進級試験のウロボロス	2話	2話	2話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話
1645		1633	1623	1607	1585	1571	1561	1549	1507	1491	1475	1463

補習授業のヒーローズ	1話	2話	1話	1話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話
1791	1779	1770	1760	1748	1737	1725	1711	1696	1684	1672	1657	

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話

1949193319201903188818771865185618461836182918191802

1 5 話	1 4 話

19851963

序盤（ヘルキヤット編まで）のあらすじ 初めてきた方は まず「一読を

主人公、井草・ダウンフォールは、無有影雄という男に、幼馴染である行仁伊予と枢五十鈴を寝取られる事からも物語は始まる。

経験豊富を語る五十鈴に、井草が「伊予に告白していざエロい事した時に童貞定番の恥をかきたくないから練習させてくれ」と頼んでいた時期に、その五十鈴から無有と伊予が交わっている映像を見せられる井草。

その混乱状態のに時五十鈴にささやかれた「無有とは話がついているから、伊予と交わってみないか」という言葉に、井草は乗ってしまい……当然の如く後悔する。

そして無有に嫉妬していた事から探偵に調べさせていた井草は、無有が売春斡旋していた事を知り、墮天使としての特性でボコボコにしようとして、返り討ちにある。

義理の姉であるピス・ダウンフォールの介入もあつてかろうじて助かるが、無有の情報を把握していなかったピスのミスで、ピスを警戒した無有は伊予と五十鈴と共に行方をくらました。……神の子を見張る者の捜査によって発覚した、人身売買を無有が行っていたという情報を残して。

幼馴染を奪われた事。幼馴染を一時の情欲に任せて穢した事。そして対応を誤って二人の生存が絶望的になった事。その全てを知った事で井草は自己嫌悪に苛まれ、死に急ぐ。

それを警戒したアザゼルは、兼ねてよりバラキエルが「仲違いした娘が心配」だった事を逆手に取り、その娘である姫島朱乃を眷属悪魔にしている、リアス・グレモリーの監視役にダウンフォール姉弟を任命。

これは「墮天使幹部の朱乃を厚遇するリアスなら、自発的に井草が問題を起こさない限りバラキエルの気持ち配慮して監視役を不必要に無下にはしない」と読んだ為。そして井草は目論見通りに「魔王の妹の監視という、一瞬でも不機嫌度が高まれば抹殺されるから、自分のようなクソの塊という死んでも問題ない者が選ばれた」と思い込み、真面目に仕事をしていく。

その間、三年年上の自分にも忌憚なく接するが、覗きの常習犯である兵藤一誠という少年とその悪友を構成させるといふ偉業を達成。学園内でもそれなりの地位を獲得するも、井草は過去の罪悪感から自己を卑下し続けていた。

そして事態は大きく変わる。

兵藤一誠が神器を制御できずに大災害を起すと判断したアザゼル達が暗殺を敢行。井草に知らせるとややこしい事になると判断して内緒にして動くが、任命された者が悪

質な殺し方をしてしまう。

それに関しては嚴重注意を井草が行う事で済んだ。しかし、上に黙って神器の摘出による自己強化という悪辣な策を目論んでいたレイナーレはそれをきっかけに暴走する。

それを察知し、その神器の持ち主であるアーシア・アルジエントと友達になったイツセーは、アーシアの救出を決意。井草も墮天使側の暴走を阻止する為にリアスに依頼という形で協力を要請して助け舟を出し、リアス達も同意した事でレイナーレ一派の殲滅が決行される。

そこで、アーシアの保護を目的とした教会暗部組織であるプルガトリオ機関と結果的に共闘する事になる。

レイナーレ達は近年世界を騒がせている、謎の怪人イツツとなつてこれに対抗。井草達は苦戦するも、井草のイツツ化、及びイツセーの神器である神すら殺しうる可能性を秘めた赤龍帝の籠手により形勢を逆転させる。だが、割つて入った蟻を模したイツツによつてレイナーレと、レイナーレ達がイツツ化した要因であるはぐれ悪魔祓い、フリード・セルゼンを取り逃がしてしまう。

紆余曲折ありアーシアはイツセーの下にいる為にリアスの眷属悪魔となる。そして、井草は一度神の子を見張る者に戻り、検査を受ける。

結果判明した事實は、井草の中に謎のエネルギー体があり、それがイツツ化の要因だ

という事。そして、その心当たりこそが無有影雄である事だ。

この事実を知れば、井草は間違いなく実験台として使い潰される事を望む。それをどうやって止めるか思索するアザゼルとピスだが、そのタイミングで更に問題が発生。

神の子を見張る者の最高幹部達の中で唯一の開戦派、コカビエル。彼が暴走して独断行動を開始したのだ。

しかも、その方法は教会の最高クラスの装備であるエクスカリバーを奪い、其の力を使つて魔王の妹であるリアスとソーナを殺すという方法。

元より和平の機会を望み、井草の機を逸らしたかったアザゼルはこれを逆手に取り、三大勢力で会談を行う為のだしとして運用。同時に井草にリアス達との共闘を取り付ける事を命令。

その後紆余曲折ありながらも、プルガトリオ機関のメンバーとして共闘した、リム・プルガトリオとニング・プルガトリオの2人がいた事が助かり共闘は成立。なんとか戦争再開は阻止するも、イツ化して本命戦力であるヴァーリ・ルシファーを凌いだコカビエルには逃げられてしまう。

しかし、これがきっかけとなり、三大勢力で会談が行われる。どこの勢力もトップは戦争に嫌気がさしていた事もあり、和平が成立する。

しかし、それを阻止するべく、テロ組織「禍の団」が襲来。それは辛くも撃退するが、

しかしヴァーリ・ルシファアの禍の団への寝返り、無有影雄ことナイアルが禍の団のメンバーである事の発覚などの急展開により、井草達は翻弄される。

そして、夏休みを利用して冥界に行ったりアス達オカルト研究部は、井草と共にアザゼルの指導を受けて特訓する。

そして、冥界で行われたパーティーで、禍の団が降伏勧告を行う。

ナイアルが所属するムートロンは、魔王クラス以上の戦力を千人以上保有する事を告げ投降を進めるが、彼らの目的が「奴隷にした神々など被差別対象を作る事による政権の維持を行いながら、血に濡れた大航海時代を宇宙規模で再開する」ことから交渉は決裂する。

そして行われるムートロン先遣艦隊との戦いで、井草はムートロンの準幹部となり果てた伊予と五十鈴の2人と激突し、叩きのめされる。

悪である事を望み、井草を挑発する五十鈴。精神のタガを外し、何かが決定的に壊れてしまった伊予。二人の姿と攻撃に、井草は心身共に傷つく。

だがしかし、井草の罪を知ってなお井草を認めてくれたニングとリムに背中を押され、井草はイツセー達に全てを語る。

そして、イツセー達はそれでも井草を仲間と認める。そして、彼を助け彼に助けられる道を進むと言われた事で、井草もまた覚悟を決める。

伊予と五十鈴を止める為。三大勢力を、地球に住まう者達を守る為。そして自身の罪を償う為。

井草・ダウンフォールはレセプターイーツへと変身し、イーツ達と激戦を繰り広げる事になるのだった。

プロローグ 雨の中の悲劇と町中の惨劇

「ホント、お前さんはダメだよなあ、少年」

殴り飛ばされ、そのまま崩れ落ちる井草・ダウンフォールは、その言葉に何も反論できなかつた。

「あんな可愛い幼馴染が近くにいる、手を出さねえとか馬鹿だろうに。俺が言うのもなんだが、言い寄ってくる男になびくのは当然だろうよ」

そう蔑んだ表情と共に悪意ある言葉を浴びせながら、その青年はしやがみこむと、井草に視線を合わせて悪意ある嗤いを浮かべる。

「安心しな。俺は自分の女にや気を遣う。俺と一緒にいて幸せだって思わせてや・る・よ」

その言葉と共に、青年は井草に拳を叩き込む。

そして、……今までは違う冷徹な表情を浮かべた。

そこにあるのは弱者を見る愉悅の目ではない。実験動物を見る研究者の目だった。

「……誤作動か？ 変化しないな」

何も言わずに、そもそも何も聞こえないぐらい打ちのめされた井草を興味深げに見たが、やがて青年は首をひねるとそのまま担ぎ上げようとす。

「じゃあねえ。ちよつと本部まで運ぶとす——」

「ねえ、お兄さん？」

その動きを止める、音の楔が撃ち込まれる。

振り返つた青年は、自分が窮地に陥りかけていることに気が付いて、舌打ちをした。そこにいるのは金髪の女性。

出るところが出て、しかも露出度の高い服装をしている。明らかに貪欲な男に好まれ、そしてそれを楽しむような手合いだ。

そして、明らかに人を殺しなれている。

「悪いけど、その子の面倒見てるの私なのよ。最近幼馴染に男ができて荒れてたから、喧嘩売ってしまったかしら？ ごめんなさあい」

「いやいや。その男は俺だから気にすんな。こういうのも、持てる男の税金だしよ」

そう軽い言葉を交わし合うが、青年はさっさと立ち去ることを決定した。

あとで本格的に人員を動かした方がいい。商店街の路地裏での喧嘩ならともかく、この日本で殺し合はさすがに目立つ。

「んじゃ、そいつの説教は任せるぜい？」

「ごめんねえ？ あとできつく言い聞かせとくからあ」

そう話をつけると、青年は足早にその場を去った。

どうせ、少年の住処はすでに把握しているのだ。あとで人員を送って、家族ごと夜逃げを装い連れ去らうことなどたやすいのだから。

幼馴染からそろそろ遊びを終えて戻るようにとも言われている。任務で此処に来ている身としては、最低限の仕事もしないといけない。

……玩具をついでに連れて帰る程度のことには、しても大丈夫だろう。

そして、二人の少女と一人の少年、そして一人の青年及び一人の女性が行方をくらますこととなる。

ただ一つ、青年の予想を超える事態があったとすれば、女性と少年の行方不明は、青

年の組織とはまったく関係ないことだった。

そして数年後の夜、とある都市の一角で爆発が起きる。

その爆発に視線を向けた人々は、その爆炎を平然とかき分けながら出てくる存在に、
一様に目を見張る。

その外見は、まるで爆弾で構成されたかの様な外見だった。

人型ではある。人間サイズではある。だが、人間には見えない。

そして、その人型の存在は腕を勢い良くふるった。

その瞬間、その腕の先にあるビルが吹き飛んだ。

「……逃げろおおお!! 化け物だああああ!!」

誰かが悲鳴を上げ、そして全力で走り出す。

恐怖にかられた者たちがわれ先に逃げ出す中、その化け物はそれに惹かれたのか走り出す。

そして、一瞬で人々の中に現れた。

否。それは転送などというわけのわからないものではない。単純に走るのが速かった。ただそれだけだ。

その証拠に、何人かは弾き飛ばされてビル壁に激突して血しぶきを飛ばしている。そして次の瞬間、爆発が連続して起こった。

吹き飛ぶ肉片と共に、絶叫の協奏曲があたり一帯を支配する。

あり得ないほどのタイミングで現れたその存在は、その後も何の躊躇もなく暴れ続ける。

駆けつけた警官隊の拳銃の一斉射撃をもともしない。

増援としてきた機動隊の機関拳銃の雨あられを、文字通り雨でも浴びてるかのような態度で平然とする。

さらに駆けつけた自衛隊の小銃の攻撃すらものともしない。

結局、戦車及び攻撃ヘリによる一斉射撃によって撃破されるまでの間、この怪物は暴れまわり、千人を超える死者を出すという大惨事となった。

「……まったく。いったいどここの勢力がこのような馬鹿な真似をしたのやら」

心底苛立ちの感情を込めたため息をつきながら、シエムハザという男はこの事件について書かれた新聞を投げ捨てる。

……突然だが、この地球ではあらゆる神話・宗教の勢力が現実存在する。

そして彼はそのうち、聖書にするされし墮天使の準トップだ。

神の子を見張るもの。その勢力に一員にして、副総督を務める彼は、この事態に対して頭痛を感じていた。

この事件を引き起こしたと思しき怪物と同じように、何かを印象付ける意匠の人型の怪物たちが世界各国で出現。そのすべてが、軍隊を投入してもそれ相応の被害をうむほどの被害をうんでいる。

特に日本の影響は甚大で、これをどこかの国の新兵器と判断した国民は、手のひらを返すように軍拡路線を求め、自衛隊は日本軍へと改名。防衛費も国家予算の4パーセントを超えるほどに投入し、最新鋭の兵器を輸入するなどして徹底的な対抗準備を整えているほどだ。

彼は、これを他の勢力が行ったものではないかと疑っている。

地球の現行の技術で、これほどまでの被害を生み出せる人間型の兵器を生み出すなど不可能だ。何らかの形で異能がかかっていると判断するほかない。

しかし、それは暗黙の了解でタブー視されていることだ。どこの勢力が行ったか判明すれば、あらゆる神話宗教の垣根を超えて徹底的に共同して叩き潰しに行くことは間違いない。

傲慢なものの見方だが、人間の欲望は際限なく異能を高めてしまおうだろう。其れこそ、人間の世界が滅びかねないほどに。

だからこそ、どの勢力も人間をある程度重宝しながら、然し国を丸ごと取り込むような真似だけはしなかった。

それを無視するかのようなのタブー。放っておくという選択肢はない。

「バラキエル。我々も対策部隊を講じる必要があるでしょう。……幾瀬君を呼んでください。彼を中心に調査を行いましょう」

その言葉に、同じ部屋で別の新聞の化け物の記事を読んでいたバラキエルはうなづいた。

雷光を操る、墮天使でも一二を争う実力者。先の幾瀬鳶尾を、彼が指導したことがある実力者だ。

「そうだな。まず我々が警戒するべきは、やはり悪魔だろう」

「でしようね。天界や教会が、人間を積極的に殺すような真似をするとも思えません。まあ、あのサーゼクス・ルシファーがかかっている可能性も薄いですが」

戦争継続派である魔王末裔たちを切り捨て、追放した現魔王派のトップたちが、このようなそれ以上の戦争を始める要因になる真似をするとも思えない。

とはいえ、勢力としては真つ先に調べるべき案件だと判断し――

「いや、それは早計だとおれはおもうぜ？」

そこに、一人の男が現れる。

「……アザゼル」

その男は、墮天使総督アザゼル。

研究者気質なうえにマッドサイエンティストの領域に片足踏み込んでおり、よく神の子を見張るものの運営資金を横領する男だ。

だが、同時に無用な犠牲を嫌い。世界の秩序を考慮することができる人物でもある。

ゆえに、その意見は一考に値する。

「どういうことですか？」

「この事件。どうも動きが妙だ。……見ろ」

そういつてアザゼルが差し出したタブレットの画面を見て、シエムハザは目を見開く。

――化物の名前はイーツだと断定。

――あの化け物、イーツっていうらしいぜ？

「イーツという化物の被害が急増しているようだ。」

世界各国で、イーツという呼称が使われ始めている。それも、ほぼ同時刻にだ。

「これは……」

「まさか、あの怪物を生み出したものが、情報を拡散させているのか？」

シエムハザとバラキエルが怪訝な表情を浮かべる中、アザゼルは最悪の推測を口にす
る。

「これは、下手をすると俺たちも知らないまったく別の勢力が動いているかもしれないねえ。それも、極めて強大な勢力だ」

その可能性が事実であることを想定して、シエムハザもバラキエルも背筋を凍らせるほどの戦慄を覚えた。

もしそうだとするならば、この怪物はまだ本気のほの字もだしていないことになる。そこが見えないというのは、それだけで大幅に脅威として認識するほかないということだ。

シエムハザとバラキエルが戦慄する中、アザゼルはため息をついた。

「それと、もう一つ」

「今度は何ですか？」

これ以上厄介ごととは避けたいと、心からの視線でシエムハザが訴えるのに、アザゼル

は苦笑いを浮かべる。

「これはいつもの件だ。……ヤバイ神器反応が観測された。それも、異能と何のかかわりもねえ一般人なうえ、適性も薄いと来てやがる」

その説明に、シエムハザは別の意味でため息をついた。

セイクリッド・ギア
神器。聖書の神が生み出した、人に与えられる異能。

ある理由により、それが原因で教会から排斥されるものもいる。悪魔の血を引きながらも手にする者もいる。使いこなせずに死に至るものもいる。

そして最も厄介なのが、使いこなせないだけでなくそのまま暴走する手合いだ。

しかもこのケースは、場合によっては多くの人々を巻き込んだ大被害に発展する可能性すらある。

「……暗殺ですか」

「ま、いつもいい気分はしねえがな」

2人して微妙な表情を浮かべるのも当然だ。

あまりいい気分になるようなものではない。少なくとも、この千年以上の時で自分たちのメンタルはそういう方向性を持っている。

バラキエルも嫌な気分になりながら資料を見るが、こちらも苦しい表情だ。

「しかも駒王町か。……朱乃と、しかも井草いぐさがいるところだな」

「ピスのことも忘れんじやねえって」

アザゼルは苦笑を浮かべながらも、然し資料を見て眉を顰める。

……いろいろとややこしい場所にいるせいで調査が微妙だが、反応が微妙である。

よほど神器の才能がないのだろう。数値がまちまちで正確なところがつかめない。

それでも強大にもほどがある神器なのはわかる。まともに使うことができれば、至る●●

までもなく上級クラスとすら渡り合える猛者となることは明白だ。

だからこそもつたいたいとも思うし、少々罪悪感もある。

だが、ここで冷徹な判断を下さなければどれだけの被害が出るかもわからない。

何の罪もない無辜の人々を大量に犠牲にするわけにはいかなかった。

ましてやイーツの件もある。今そんな事態が起こり、万が一にでも異形の存在が人類

に知られればことだ。

高い確率で、多くの人々が関連性を疑うだろう。そうなれば自分たちは自滅する。

「……正直残念だ。これが神滅具とかだったら、いつそのこと自滅覚悟で迎えるついで

う手段もとれたんだがな」

そう独り言ちながら、アザゼルは下の者に兵藤一誠の暗殺を指示する。

あとは彼らの判断に任せるとして、アザゼルも思考を切り替えるとイーツ対策に誰を

用意するかを真剣に考え始めた。

この後、
ややこしいことになるのだが、
それはまだ彼も分かっていない。

設定資料集

○オカルト研究部

◇井草・ダウンフオール

年齢：20歳 髪：茶色に金のメツシユ 眼：茶色

E E レベル：4，0から4，5

本作主人公。神の子を見張る者に所属する青年。曰く、ハーフ墮天使。

過去のトラウマで異様なまでに自己を低く見積もっているの青年。三年前の無有影雄絡みのトラブルが原因であり、アザゼル達も頭を悩ませている。

其の為「調べた限り、積極的に仕掛けてこない限り話を通していけば危害を加える可能性が低く、かつバラキエルの娘がいる事から人員を派遣しても納得される理由になる」リアス・グレモリーの監視任務を与えられ、「魔王血族のお目付け役という、ちよつとでもトラブルを起せば切り捨てられる自分みたいな男にはびつたりの任務」と思い込んで真面目に仕事に励んでいる。

イツセー達の覗き行為を抑え込む事に成功し、かつその能力で学園生徒達が理不尽な被害を受けている事を知ると、神の子を見張る者で培った技術を惜しまず使って解決す

る為、二大お姉様や祐斗に次ぐレベルの知名度と人気を保有する。

墮天使としてのスペックも高位。かつ無有によって埋め込まれたエボリューションエキスが人体と一体化し、レセプターイーツになる事ができる。其の為、デビルイーツ化による弱点が増えた事を踏まえても、総合戦闘能力では真女王になったイツセーに次ぐレベル。

☆レセプター・カージ ☆受容の器

井草の保有する神器。神器そのものとしては低位の部類であり、持っていても駒価値が変動するほど上昇しない程度の物。

過剰な異物に対する拒絶反応を抑制するという能力。骨髓移植の成功確率を跳ね上げたり、花粉症にならなかつたり、臓器移植で恒常使用する免疫抑制剤の量を大幅に減らしたりする。

……反面、これが疑似的に保有者のEEレベルを大幅に引き上げるといふ役割を果たしており、墮天使としての肉体もあって、イーツ状態の彼は高位のイーツすらそれだけなら一蹴できる戦闘能力を発揮する。更に聖剣因子を取り込む事で人工聖剣使いに安全になる事も可能。技術発展によって新たな価値を生み出されている神器でもある。

☆レセプターイーツ

井草が変身するイーツ。受容体の情報を基に開発されたエボリューションエキスを

取り込む事で変身する。

倒したイーツの情報を取り込み、そのイーツの特性を多少ながらも具現化する事が可能。其の為、イーツを倒せば倒すほど能力が強化されるイーツでもある。

★モードスパイダー

ドーナシークが変身したスパイダーイーツを倒した事で手にした能力。

手の甲に蜘蛛を模した意匠が追加されており、そこから強靱な糸を射出する事ができる。

★モードケンゴウ

バルパーが変身したケンゴウイーツを倒した事で手にした能力。

腰に草刷が展開され、優れた剣術を行使可能。

★モードデビル

デビルイーツを倒した時に手に入れた能力。

取り込んだ事によって、背中から悪魔の翼が映える。

魔力を運用する事が可能になるが、代わりに悪魔の欠点も手にしてしまう。そういう意味では弱体化に繋がってしまっている。

★モードインキュバス

インキュバスイーツを撃破した事で手に入れた能力。

その手の能力が大幅に上昇する上、毒に毒を突っ込んでも意味がない理論で魅了系の術式などに大きな抵抗力を得る事ができる。因みにレセプターイーツになった時には尻尾が生える。

★モードトール

ロキが変身したトールイーツを撃破した事で手に入れた能力。

これによりミョルニルの系譜の使用が可能になっている。ただし神格の特性を得てしまっている為、神殺しに対して若干弱くなっている。

★モードシャーク

京都で瞬殺したシャークイーツから得た能力。

水中戦闘能力と、強靱な顎を保有。噛み付き攻撃で絶大な力を発揮する。

○仮面ファイターレセプター

冥界大人向けテレビチャンネル「Dシネマ」で放送されている、大人の為のヒーロー番組。

レセプターイーツでの戦闘が基本となってきた井草が、他のイーツとごっちゃの認識で味方から誤射されないように発案されたテレビ番組。それ以外にも冥界の娯楽を増やす事や、アザゼルによる「井草が変な目で見られないように好感度を上昇させた

い」という狙いもある。

ストーリーは、イーツを生み出す悪の異星人ナイアによって、幼馴染を寝取られたうえにイーツにされてしまった青年墮天使イクサが、自らの失態を悔やみ、資格がないと自嘲しながらもイーツが罪を犯すのを見過ごせず闘っていくという物。なお、井草はあくまでモデルという事になっている為、主人公であるイクサはフリーターとして行動しているなど、多少のアレンジは加えられている。

○ニング・プルガトリオ・ルシファー眷属

◇ニング・プルガトリオ・ルシファー

年齢：17歳 髪：アップにして、片方だけ垂らした茶髪 眼の色：茶色

教会暗部組織、プルガトリオ機関のエージェント

アーシアが悪魔側に就く事を了承するなど、悪魔だからというだけで侮蔑したりしない心優しい性格。反面結構しつかりしており、言うべきと思つた事は結構はつきりものを言う。

実は正当たるルシファーの血を継いでいる隔世遺伝の先祖返りでもある。のちに情勢打開……も兼ねた井草の為の決断として、ルシファーを正式に背負い、上級悪魔となる。

☆神器 魔劍創造ソード・パース

ニングの保有する神器。木場裕斗が持っている物と同じ物。

ニングは刀剣の構造を一から調べ、性能重視の魔剣を生み出して運用する。

★禁手 干将莫邪ソード・パース：サクリフ・アイズの如し魔剣

魔剣創造の亜種禁手。

その能力は、代償を捧げる事によって生成される魔剣の性能を上昇させる事。ニングはプルガトリオ機関に拾われるまでの記憶を代償とする事で、聖魔剣と互角に打ち合えるほどにまで魔剣の性能を向上させている。後に子宮の機能を犠牲にする事で、更なる進化を遂げた。

★禁手 下賜ソード・パース：オーダーする騎士の為の魔剣

新たな魔剣創造の亜種禁手。

干将莫邪の如し魔剣で完成した魔剣、エクストラカリバーを他の人物も使用できるようにする禁手。現段階ではリムしかできないが、まだまだ伸びしろが存在する。

◇リム・プルガトリオ

年齢：20歳 髪：ウエーブの入ったセミロングの緑 眼の色：緑

教会暗部組織、プルガトリオ機関のエージェント。

口調はあれだが仕事はしつかりするタイプ。また、来歴ゆえに排他的な信仰心は持っていない。

実は異形技術を保有する組織が製造した、セクサロイド。その為教會的にもグレーゾーンであり、また定期的な性交を必要とするように作られている為、プルガトリオ機関に引き取られた背景を持つ。

ニングの上級悪魔就任に伴い、女王の転生悪魔に就任する。

☆神器 アーム・ザ・リッパ
劍豪の腕

リムが保有する神器。持っている武器の性能を大幅に向上させる。

基本は剣だが練習次第で他の武器も強化可能。その為、彼女が保有する武器はその時点で一線級の装備となる。

◇からくりいすず
枢五十鈴

髪：茶色のセミショートで外ハネ 眼の色：茶色 年齢：20歳 特技：速読 苦手なこと：努力家扱いされること。

EEレベル：6, 0↓5, 0

井草の元幼馴染である、ナイアルの情婦だった女。

……成果をきちんと上げられる努力家なのだがそれらに対してコンプレックスを持ち、

井草や伊予に苛立ちを感じていたところをナイアルに突かれ暴走。のちに正気に戻るも、今更元には戻れないと暴走を起こす事になった女性。

強化施術と過剰服薬の負担で死に至るが、それを予期していたアザゼルの研究を、井草を思ったニングが利用した事で蘇生。ニングの騎士（変異の駒二つ）で眷属となる。

○ムートロン

☆ムートウエポン

ムートロンの上級戦闘員が使用する携行武器。様々な種類があるが、その全てが使い手次第で魔王クラスに深手を負わせる強力な装備。

生成にオリハルコンなどの希少金属を必要とするが、それを精製する技術をムートロンが保有している為比較的数が多い。

◇ホテツプ

ムートロン先遣艦隊の司令官。ナイアルの幼馴染でもあり、彼に振り回される事も多い苦勞人でもある。

科学者でもあり合理的な側面があり、ムートロンの勝率が非常に高い事を冷静に把握し、現政権側に降伏勧告を行う事で、お互いに余計な消耗を避ける事を提案するなど、戦

闘狂ではなくどちらかといえば合理主義。

◇ナイフアーザー

ムートロンの戦闘要員。掌迄黒い黒人である事が特徴。

禍の団の最初の活動の為に、ムートロンの実力を示す為出撃した人物。

実力はあるのだが口が軽く、地球側を見下すがゆえに激高しやすくすぐ情報をしゃべるといふ欠点がある。

☆バイアクヘーイツ

ナイフアーザーが変身する、上位種のイツ。

超高速での空中戦闘能力を持ち、描写はされる予定はないが宇宙空間での戦闘も可能……というよりそちらが主眼。やろうと思えば軌道上から降下しての強襲戦術も可能。

ムートロンの中でも高い能力を持つ者は、このイツを使用する事が多い、いわゆる上級戦闘員。ポジションのイツ

☆フェニックスイツ

ナイフアーザーが人の姿のまま力で発揮する事ができる、デフォルトイツという力。

72柱のフェニックスのような再生能力を保有する。ナイフアーザーは魔王クラスのを発揮しており、その出力の再生能力ゆえに凄まじい力を発揮する。

○ナイアル

EEレベル：7，5

ムートロン先遣艦隊の問題児のカリスマともいえる男。特別中隊（という名の問題児軍団）を率いている。

特殊工作員として地球に潜入している時に、井草達三人の中を最悪の形で引き裂いた元凶ともいえる男。そういう事を趣味にし、現地で少女を墮として人身売買や戦力として利用するなど、ムートロンでも屈指の外道。

ただし実力に関して言えば先遣艦隊でも最強格であり、魔王クラスを千人以上保有するムートロンの中でも、上位二十位に位置するEEレベル7，5かつ独自のアウトターイツとデフォルトイーツを持つ猛者。

☆クイーンアントイーツ

ナイアルが使用するデフォルトイーツ。アントイーツの上位形態であるレベル2。

桁違いの筋力に加え、低レベルのEEレベルのアントイーツの想像が可能。更にアリに通用するフェロモンを生成でき、デフォルトイーツである事を利用して人間にも効果を発揮できる。

☆アウターイーツ クトゥルフイーツ

ナイアルが使用するアウターイーツ。クトゥルフ神話の代名詞、クトゥルフの原型となつた外宇宙の生物の情報を元にしている。

八門のフレキシブルキャノンによる砲撃戦闘特化型のアウターイーツ。ナイアルの場合、一門一門の火力がクリムゾンブラスターを凌ぐレベルに到達している。

旧校舎のディアボロス

1 話

「だーかーらー！ 本当について!!」

駒王学園二年生、そこで悪い意味で有名だった、兵藤一誠はそう友人達に反論していた。

「本当なんだよ！ 本当に彼女ができてたんだってば!!」

兵藤一誠。通称イツセー。

性欲の強さなら誰にも負けないと言い切る、色んな意味で残念な少年である。

ちなみに一年生の頃から半年ほど覗きの常習犯でもある。当然モテない。

そんな彼が、つい最近彼女ができていたと言い張っている。当然誰も信じない。

「だから、そんなこと聞いた事も無いって言うてるだろうに」

同じく覗きの常習犯だった、元浜が眼鏡をキラんと輝かせながら反論した。

そんなことは記憶にないと。

そもそも彼らがそんなことを知れば、嫉妬に燃えて一発ぐらい殴っている。そもそも

最近そんなことが起これば人生最大級の悲劇として記憶に残る。トラウマものだ。

だからそんなことは起きなかったといっている。

「そうそう。その天野夕麻ちゃんだっけ？ そんなの俺ら見たことも聞いたこともねえぞ？」

同じく覗き仲間だった松田も、否定する。

そして、その視線を周囲に向けた。

「だろ？ 聞いた事ある奴いたっけ？」

普通に考えれば、覗きの常習犯だった男に同意を求められても「関わり合いになりたくない」とか思うだろう。

だが、生徒達は普通に対応した。

「いや、聞いてねえぞ？」

「そんな騒ぎ起きたかしら？」

「ねえよ。まったく」

「誰か知ってる？」

「いいやー？」

普通に対応するクラスメイト達だが、それ以上に問題なのは誰一人としてその記憶がないという事だ。

イツセーは心底不安になった。

まさか、本当に彼女はいないのか？

それに、冷静になって考えればおかしな話だ。

自分は昨日、天野夕麻という少女にデートに誘われた。

覗きをある理由によつて克服したとはいえ、それまでの積み重ねがあつた事もあつて

女子生徒からの評判は下の部類な自分が、告白されたという事実には舞い上がった。

そして、その夕麻とデートをした帰りの事だった。

「死んで、くれないかな？」

いきなりそんなことを言つた夕麻は、背中から黒い翼を生やすと、いきなり光ででき

た槍を自分の腹に突き刺した。

……冷静に考えて色々とおかしい。普通に考えたらよくて緊急入院で普通は死んで

る。

と、言う事は……。

「お前、彼女ができないからつてそんな妄想に取りつかれるとか……」

松田に同情の視線を向けられても反論ができない。

実際、一緒に撮つたはずの写真も消えているのだ。スマホを何度も確認したから間違いない。

と言う事は、本当に自分は妄想を数日間続けて気が変になったという事に――「久しぶり、三人とも」

そこに、新たな人物が現れた。

金のメツシユが入った、茶色の髪を持つ青年。

彼は、一年生の自己紹介の時こう名乗った事を覚えている。

『いぐさ井草・ダウンフォールです。一度高校を中退したので既に19歳ですけど、何かあったら相談に乗るので良ければ悪く扱わないでくれると嬉しいですよ』

その特殊な来歴から距離を置かれやすかった井草だったが、しかしとても良い人だった。

クラスメイトが暗い顔をしていたらすぐに勘付き、そしていつの間にか問題を解決する。

例えば誰かに虐められていたら、いつの間にか弱みを握って二度とそういう事をさせないようにする。

親が違法金利の借金を背負っていたら、いつの間にか法定金利内に収まっている。

不良に恐喝されていたら、其の不良がいるグループ全員がボコボコになって謝りに来た。

そんな事を自発的にやる性分から、井草はなんだかんだでこの学園で確固たる立場を

作っていた。

そして、いつの間にやらこの三人衆の問題行動を解決に尽力する事となるのは、もはや当たり前の帰結だった。

三回ほど説教して物理的にお仕置きしたりして、それでもダメだった時、井草はこんな爆弾発言を繰り出した。

『分かった。高校卒業まで覗きを我慢できたら、その時は童貞卒業をさせてくれるお姉さんを紹介するから。お願いだから落ち着いてくれないかな?』

……この瞬間、三人は覗きをピタリと辞めた。

『『『うおおおおお！ 収まれ俺達の煩惱！ 童貞卒業する為にいいいいいい!!!』』』』

などと言って、三人揃ってお互いの額に額をぶつけ合う事もあるなどアホとしか言いようがない。

だが、これ以来半年ほど、イツセー達は覗きをピタリと辞めていたのも事実。其の為、井草は女子生徒の中では英雄扱いすらされている。

そんな井草はしかし、数日程風邪を引いたとかで欠席していた。

「ああ、井草さん。それがね、兵藤が彼女ができたとかいう妄言を吐いてるのよ」

「……………え、!?!」

クラスの匠と称される桐生藍佳に説明され、井草はものすごいあれな表情を浮かべ

る。

……その表情で、井草がどういう認識をイツセーに対して持っているかがよく分かるだろう。

「ひつでえな井草さん！　なんで俺に彼女ができる事がそんなレベルなんだよ!」

「いや、だってイツセーくんは深く付き合うほど味が出るタイプでしょ？　でも覗き魔だったから、この学園の生徒じゃどうしても距離取られるでしょ?」

残酷な言葉だが、最初の褒めているだけマシな部類ではある。

そしてとりあえずイツセーは、その妄言についての内容をしっかりと説明する。

「……やっぱ妄想だろ」

「やば。流石に可愛そうになってきた」

「結構悩み事とか相談すると、具体策はともかく親身になってくれるしな」

「だったら誰か付き合ってやれよ」

「いや、私覗きの被害にあったからちよつと……」

などと外野が同情の視線を向けてくる。

なんというか、イツセー自身妄想な気がしてきた。

井草も流石にこれは妄想と切って捨てると思ったが……。

「……イツセー。ちよつと外に出て空気を吸ってこないか？　一緒についていこう」

……どこか真剣な表情を浮かべて、井草はイツセーを外に連れ出した。

そして数分かけて屋上に出ると、誰もいない事を確認して、振り返った。

「イツセー。その時の話を詳しく話してくれ」

かなり真剣な表情だった。

それも、何やら緊急事態に巻き込まれたような感じの表情だ。

昔、祖父が死んだという連絡を聞いた時の両親の顔を思い出す。其れとはどこか違っているようで、しかしどこか似ている顔だった。

それに引つ張られるように、イツセーは詳しい事を話して聞かせる。

ある日突然、天野夕麻と名乗る少女に告白されたこと。

それを松田や元浜に、彼女の姿を見せながら自慢したこと。

そして初デートをしたこと。

その帰りに、夕麻に「死んでくれないか」と言われて、光でできた槍で刺されたこと。

その時「かみが作ったせいくりっどなんとか」とか言っていたこと。

そして血の色から学園のアイドルであるリアス・グレモリーを連想して、その胸を揉みたかっと思ったこと。

そして意識を失う直前、そのリアスの姿を幻視したこと。

全てでできる限り正確に伝えて、井草は――

「うん。それは病気だな」

はつきりと言いつつ切った。

「俺なんか言うのもあれだけど、そんな状態で胸のことばかり考えるのはどうかと思う。もつとこう、親を悲しませるとかなんでこんな事になったんだとかあるんじゃないか？」

「スケベでごめんなさい!!」

勢いよく頭を下げて謝る他ない。

覗きの常習犯である自分達に、覗きを辞める切っ掛けをくれた恩人。そんな彼にこんなアホなツツコミを入れさせてしまった事が申し訳ない。

そして井草は困ったような笑みを浮かべると、肩に手を置いた。

「分かった。じゃあ、まずはその天野夕麻つてことが本当に要るかどうかから調べてみるよ。それからイツセーのことを知ってるか聞くところから始めようか」

「え!? 信じてくれるんですか!？」

イツセーとしては、この返答は意外だった。

悪友である松田や元浜ですらまったく取り合ってくれなかったのだ。それ位荒唐無稽な話なのは分かっている。

だからそうだとばかり思ったのだが、井草はぼんと肩に手を置いた。

「そんなに真剣に悩んでるなら、少しぐらいは動かないとな。世界にはまだ見ぬものいっぱいあるんだし、悪夢を見せて楽しむ外道がいる可能性もあるからな」

「ああ、そういうえばオカルト研究部の幽霊部員でしたっけ」

暫定的にオカルト研究部に所属しているという話を聞いた事がある。

とはいえ、部活に誘われる事を避ける為の体の言い訳で、部員達との折り合いは基本的に悪いとも言われたが。

そんな彼なら、そういうオカルトを信じていてもおかしくない。むしろ信じているからこそ名義だけでも貸したのかもしれない。

そんな事を思いながら、井草の対応にイツセーは素直に感謝する。

「マジでありがとうございます！ 俺、本当に不安で不安で……」

「気にしなくていいよ。俺にも責任の一端はあるしな」

覗きを我慢させている事だろうか。

しかし、覗きは基本犯罪だ。それを抑制させている井草が褒められる事はあっても、イツセー達に詫げる事はないような気もする。

本当に、井草は良い人だ。

この人は留年生のようなものだけど、それでも信頼に値する好漢だと言い切れる。

こんな人を慕える事に、イツセーは心から感謝し――

「……本当に、こちらの責任かもしれないからな」

……その言葉を、すっかり聞き逃してしまっていた。

2話

井草は放課後、速やかに電話をかける。

「……リアスちゃんかい」

『あら、どうしたのかしら、井草』

返事には棘がある。

リアス・グレモリー。駒王学園の二大お姉様と呼ばれる、海外からの留学生。

才色兼備を地で行く少女で、この学園に入って少しでも立っているものなら知らないものはいないレベル。駒王学園のアイドルと言っても過言ではない。

そのリアスは、基本的に誰に対してもいい対応をするはずなのだが、しかし井草と誰もないところで対話する時だけは棘がある。

当然だ。彼を名義だけとはいえ自分の部活であるオカルト研究部に入れる事すら反対だ。できる事なら学園から追い出したいとも思っている。

それは、井草とリアスの立ち位置が関係していた。

「……上級悪魔リアス・グレモリーに新しい眷属ができたようで何よりだよ」

『あなた達墮天使のおかげね。友人を始末するとは使命に忠実なこと』

皮肉の応酬をしてから、井草は嫌な予感が当たった事に気が付いて、ため息をついた。

井草・ダウンフォールは墮天使である。それも、高位の墮天使と人間のハーフだ。

リアス・グレモリーは悪魔である。それも、名門元72柱グレモリーの次期当主だ。

そして悪魔と墮天使、そして天界率いる教会は、基本的に三つ巴の冷戦状態だ。井草やリアスが生まれる前には泥沼の殺し合いをしていたレベルで仲が悪い。

これに北欧神話体系のアースガルズや、ギリシヤ神話体系のオリュンポスなどの各種神話。更に他の宗教迄加えるとさらにややこしい事になるが、ここは割愛する。

この駒王町は、リアス・グレモリーが悪魔の仕事を行う場所であり、日本神話からも神社に部下を住まわせてもいいと取り決めがなされているほどだ。完全にリアスのホームである。

そんなところに井草がいるのは、ひとえにリアスの監視に他ならない。

「グレモリーの次期当主が、冥界ではなく人間界の学園に来るとは、何かあるのではないか？」という邪推から、監視役として派遣されたのだ。

墮天使統括組織、神の子を見張るものから相当の額の滞在費を渡されているからこそその芸当だが、リアス個人としては腹立たしい。

彼女とその側近の集まりともいえるオカルト研究部に名義貸ししているのも腹立た

しい。できる事ならさっさと追いつきたいが、それでは上の意向に逆らう事になってしまう。

はつきり言えば、リアスにとって井草は目の上のたん瘤だった。

「悪いんだけど、上からイツセー君に関しての情報を欠片も貰ってないんだ。問い質すにしても情報が必要だから、少し教えてくれないかい？」

確実に、後で面倒ごとを押し付けられるんだなあと思いつつ、井草はしかしそう頼み込む。

直接来るとリアスが意固地になりかねないからこそその電話での相談だ。それだけの事をしてでも、井草は今回の件を詳しく知りたかった。

……細かい交友関係まで上には伝えてないとはいえ、駒王学園の生徒をターゲットにするとなれば井草に話が行かないわけがない。それが一番スマートに進めるはずだからだ。

にも関わらず完全スルー。これには井草も立腹だった。

情報を集めて、それを足掛かりとして上に問い詰める。その為の懇願だった。

その覚悟が伝わったのか、リアスはため息をつく、素直に話してくれた。

たまたまチラシをイツセーが持っていて、強い願いゆえに自ら出た事。

そして、兵士八駒を必要とするだけの価値がある事から、イツセーを甦らせることに

した事だ。

悪魔は、戦争で激減した種の数を増やす為に、イヴァイル・ピース悪魔の駒による転生悪魔制度を投入した。

これはチェスの駒をモチーフにした物だ。そして、其れを貰った上級悪魔はその資質と主の力量に依じて、転生にかかる駒のコストが変化する。

兵士の駒一個を1として計算されているそれは、実際のチェスと同じだけの価値計算だ。

即ち、騎士と僧侶は3。戦車は5。女王が9。

しかし複数の駒を必要とする事はマレだ。個と人間なら、高位の神器を保有していない限り駒など兵士一つで事足りる。

それが、八駒。

『言い方はあれだけけど、今回墮天使はきちんと仕事をしているわ。黙ってたのも貴方に対する気遣いじゃないかしら』

リアスの言う事もつともだ。

井草が知る限り、イツセーは異能とは何の関わりもない。彼の両親も、どこにでもいる一般人だ。魔法使いや悪魔祓いなどといった、異形に関わる職業にもついていない。

そんな彼が、そんなレベルの異能の資質を持つていたとして、果たして制御できるか。

「俺如きでも分かるさ。上が暗殺を決行したのも仕方ないのはね」

井草は、どうしようもないといわんばかりの思いを、息とともに吐き出す。

それだけのレベルの異能。それを制御する事は完全な一般人であるイツセーには不可能だ。井草なら指導はある程度できるかもしれないが、おそらく交友関係も洗っていないはずだ。不可能だと判断されたのだろう。

そしてそれだけのレベルの異能が暴走すれば、ほぼ確実に周囲にも大きな悪影響が及ぶ。下手をすれば、この地方都市に変地異が起きるかもしれない。

殺してでも無力化するのには確かに当然だ。墮天使には悪魔の駒のような転生技術もないのだから、当然といえれば当然だろう。

だが……。

「それでも、イツセーの心を弄ぶような真似をしたのは納得いかないからね。俺みたいな口クテナシでも、かなり酷いやり方だっつのは分かる」

『そんなに酷い事したの?』

「ああ。モテない男に告白して、有頂天にさせてから殺したらしい。……そんな奴、墮天使の名に傷がつく」

吐き捨てた戦の言葉に、リアスも僅かだが電話越しに息を呑んだ。

確かに悪趣味極まりない。

リアスもイツセーの悪評を聞いた事はあるが、しかし最近では井草のチラつかせた餌によつて抑えている。

そもそも、覗きの常習犯というのは殺されるほどの罪だろうか。被害にあつた当事者ならまだ分かるが、それにしたつて殺し方というものがあるだろう。

ましてや相手の心を踏みにじるかのような悪鬼の所業。悪魔であるリアスにとつても正直、苛立つやり方だ。

特に覗きを辞めてからは、友達想いの好漢の側面が見えてきて、学内での評判は上方修正されている事も知つている。

仲間思いで体を張れる男。そういう話も聞いていた。

それが問題点こそあれど、こんな悪辣な方法で殺される。

いい気になるわけがない。

『いいわ。後で資料を作成してあなたの家に送る。その上でしつかり文句を言つてちょうだい』

「ありがとう。で、何か言う事はあるかな？」

『結果的に得したけれど、私の領地でそんな悪趣味な真似をするなつて言つておいて頂戴』

その言葉に苦笑し、井草は電話を切つた。

「……総督。俺です」

『よう、井草。その様子じゃ、もう知ったみたいだな』

一人暮らしのアパートの一室で、井草はしかめっ面でアザゼルと画面越しに対面した。

まさか総督が直々に出てくるとは思わなかったが、こちらとしてはリアス・グレモリーからのメッセンジャーとしての側面もある。遠慮なく言ってしまったても問題ないだろう。

「兵藤一誠の暗殺の件です。いや、暗殺自体は俺なんかでも仕方がないって思いますけど、やり方ってものがあるでしょう」

心底文句を言う他ない。

暗殺自体は仕方がない。上だつて無意味に人殺しをしたいわけではないのだから、きちんと仕事をした上でその決定を下すだろう。

だが、あまりにもやり方が残酷すぎる。

いくら覗きの常習犯だった男とは言え、一応の更生はしてるのにこの扱いはあんまりだ。

墮天使の評判を悪化させるような悪辣な所業。これを上が直接指示したというのなら、井草はリアス・グレモリーのところに亡命してもいい。それ位には腹を立てている。そして、幸か不幸か上が直接たてた殺害計画ではなかったようだ。

事情を聞いたアザゼルの表情が、明らかに不快の感情を示す。誰がどう見ても「嫌な気分です」と分かる表情だ。

そして、アザゼルは少しの間席を外すと、すぐにFAXで資料を送ってきた。

『実働部隊はまだその辺で遊んでるらしい。そいつらに指示出した管理職は俺が説教するから、現地の奴らは俺の名代で説教しといてくれや。査問会だと脅しとけ』

「はいはい。あと、イツセーに謝罪は？」

そちらに関しては期待薄だ。

実際、そつちに関しては手をヒラヒラさせた。

『悪い事はしたが必要な事だからな。ま、お前が個人的に謝る分まで止めやしねえよ。』

……悪趣味だった分は菓子折りでも持って行ってやれ、金は払ってやる』

「了解しました。俺なんかが行っても意味ないでしょうが、しないよかマシですよね。

……では」

そうやって通信を切ると、井草は窓の外を見る。

墮天使の人間離れした視力が、そこにある廃教会を捉えていた。

思った以上に近くにある。どこかに行かれる前に、今から説教をしに行こう。

井草はそう判断すると、すぐに出発する事にした。

3話

レイナーレは、中級墮天使である。

墮天使の大半は下級墮天使であることを考えれば、彼女はある種のエリートだといつてもいい。少なくとも、現地で部隊を率いる程度には権力もある。

だが、それで満足するような類では断じてなかった。

悪魔の縄張りに侵入して神器保有者を暗殺する。そんなリスクが高いわりに実入りの少ない仕事にはうんざりだ。

もつと墮天使として、人を墮落させてそのうえで暴利をむさぼりたい。そしてできることなら、墮天使総督であるアザゼルや、武闘派筆頭のコカビエルなどから重宝されたい。

幸か不幸か、其のためのピースが手に入った。

この力が手に入れば、自分は神の子を見張るものの中でも高位の立場になることができる。

まさにオンリーワンといつてもいい至高の存在。下手な上級墮天使など歯牙にもかけない価値。そしてそれからくるだろう、総督たち幹部の寵愛。

それをなしとげるために、自分の部隊の墮天使やはぐれ悪魔祓いと共に作戦を組んでいたその時だった。

「レイナーレさま。お客様がきやがりました」

そんな敬語というものを微妙に理解してない口調で、はぐれ悪魔祓いの1人が声を賭けてきた。

はぐれ悪魔祓いなどに礼儀作法など言っても無駄なのでスルーしているが、しかしこのしやべり方はどうにかならないのだろうか。

などと思いつつながら、レイナーレは振り返った。

「誰かしら？ 特に話は聞いてないけど」

いきなり言われて困ったことではあるが、イラつきはしない。

特に今回は、仕事を終えたので気が楽になっている。

あまりにもからかいがいのある男だった。見るからにスケベで童貞臭いので、純朴な美少女のふりをして演技をしたらあっさり引つかかった。

その時のことを話したら、ほとんどのメンツが笑って会話が弾んだことを覚えてい

る。
グリゴリの幹部に話しても好感触を取れるかもしれない。それ位には愉快的な展開だった。

なので、レイナーレは機嫌がいい。

「なんでも、こつちの悪魔の監視役として派遣された、井草・ダウンフォールとかほぎきやがってますね」

「そう言えば、そんなこと言ってたわね」

なぜか彼には知られないようにと言われていた。直接の上司曰く、「ターゲットの友人だから気に病むだろう」とのことだ。

少しだけ不機嫌になる。

あのハーフ如きに、そんな大任が負かされることも腹立たしい。同時に、あんなつまらない男をそんな風に扱うものが格上なのもむかつく。

上機嫌でいるのも隠さないといけない。勘付かれたらことだ。

「まあいいわ。ちよつと待ってなさい」

「あいあいまーむ」

いい加減な対応をするリムとか言つたそのはぐれ悪魔祓いに適応しながら、レイナーレは表情を整える。

万が一にでも彼に状況が露見したらことだ。

あれを自分に移せ……などといわれたら困る。あれは、自分に移植するための力なのだから。

其のために直属の上司にすら黙って行動している。横から獲物を引っさらわれるのはごめんこうむりたかった。

そして、視界に入ったのは金のメッシュユがいった茶髪の青年。

外見年齢は自分より少し上といったところか。もつとも墮天使に外見年齢などあってないようなものだ。自分もかなりの年月生きているからよくわかる。

「初めまして。それで―」

「―単刀直入に言う。あんたには査問会に出てもらおう」

その断言にレイナーレは凍り付いた。

今このタイミングでの査問会。それは非常に困る。

万が一にでもそろそろ来る予定の彼女とその神器が知られば、自分の預かりにできなくなる可能性がある。

そうなれば、これまでの努力が水の泡になる。

「お、お待ちください！ いったい何が―」

「止めの確認を怠り、リアス・グレモリーに戦力を提供させた失態が一つ。もう一つは、墮天使の面子を傷つけるような悪辣な暗殺方法の実行。……この二つで、あんた達とあんたを選んだ直属は降格もしくは解散の可能性がある」

心底苛立たし気な表情を浮かべて、その井草とかいうハーフは言い切った。

そして一瞬でレイナーレに詰めよると、にらみを利かせる。

「……友達を殺されて怒る資格は俺なんかにはないが、それでも介錯じゃなく弄んだのにはむかついてる。アザゼル総督もいい顔をしてなかつたぞ」

その言葉の後半に、レイナーレは啞然となる。

規範的な天界での暮らしをすて、欲にまみれて人間たちを利用する墮天使。

その長であるアザゼルが、人間を弄んで殺した程度のことですら不快になる？

まったく理解できない状況に周りの者たちが啞然とする中、井草ははつきりと告げた。

「グレモリーには俺から「手出し無用」って言っとく。だからさっさと荷物をまとめて待っている。殊勝にしとかないと心象が悪くなるぜ？」

そう言い放つと、井草はそのまま廃教会から出ていく。

それから数分間、レイナーレは頭の中が真っ白になっていた。

「で、俺はどうすれば上級悪魔になれるんでしょうか、部長」

イツセーは、主であるリアスにそう尋ねた。

本来なら「リアス様」と敬語をつけて呼ぶべき存在であるリアスだが、リアス自身が望んでいるのでここでは「部長」よびだ。

そう、兵藤一誠は悪魔だ。厳密には元人間の転生悪魔だ。

ほぼ死んでいたところをリアスに拾われ、転生悪魔になったと知らされたのはつい最近だ。

リアス本人としては自分自身の変化をちゃんと理解してから説明する予定だったらしい。それが、堕天使に介入されて強引な説明をすることになったそうだ。

「前にいきなり悪魔にした時、かなり動揺されたのよ」

と、同じ転生悪魔仲間である木場祐斗に視線を向けながら苦笑していた。

木場自身も苦笑しており、どうやら本当にあつたことらしい。

で、その悪魔になったというのは素直に受け止められた。

なにせ、自分の体の変化はよくわかつている。

五感は鋭くなり、特に夜目が効くようになった。

身体能力も大幅に上がり、その手のことにははつきり言つて勝てないと思つていた松田と同レベル。夜になれば活性化してさらにその上をいくほどだ。

なので納得はした。そしてちよつとはショックだった。

人間だったのがそうじゃないといわれたのだ。シヨックの一つも受けるだろう。自分から悪魔になったわけじゃないんだからなおさらだ。

だが、そんなものはとつくの昔に吹っ飛んでいる。

なぜなら、上級悪魔になることをメリットを知ったからだ。

そもそもイツセーが転生悪魔になったのは、リアスが眷属悪魔を作る権利を持っているからだ。大前提としてそれがある。

そして、眷属悪魔はメリットとして出世することで上級悪魔を目指することができる。

そして上級悪魔になれば、たとえ元が眷属悪魔で多民族だったとしても眷属悪魔を作れるようになる。

とどめに、上級悪魔が愛人を複数持つのは、珍しいことでも何でもないと来た。

必然的にすべてがつながり、兵藤一誠という男は一つの野望を燃え上がらせる。

ハーレム王になる。

もともからもてたいという昔の一念で、偏差値の高い駒王学園の高等部に入学した男だ。その煩惱はシャレにならないレベルである。

それでも、現実にモテることはあつてもハーレムを作ることにはあり得ないと思つていた。

そもそも日本は重婚できない。当たり前といえば当たり前だ。

だが、冥界の悪魔ならそれができる。合法的にハーレムを作ることができる。

眷属悪魔を女性だけにしてしているものもいるらしい。そういう趣味的なことができる者がいるということだ。

ゆえに乗り気だ。超乗り気だ。

それを可愛いものを見る目で見ながら、リアスはにこりと笑顔を浮かべる。

「まあ、数年間は我慢しなさい。こういうのは、レーティングゲームで決めるものだから」

「レーティングゲーム？」

聞きなれない単語だ。悪魔の社会の専門用語だろうか？

疑問に思うと、二大お姉さまの一人でありかつリアスの眷属悪魔の一人である姫島朱乃が、ニコニコ笑顔でお茶を入れながら答えてくれた。

「上級悪魔とその眷属が戦う仕合みたいなのですわ。実践訓練やエンターテイメントも兼ねておりますの」

なるほど。そういうものもあるのかと、イツセーは納得する。

ようは一流のスポーツ選手が高い年俸をもらうようなものか。普通に納得できる。

「リアスはまだ参加してませんが、将来的にはタイトルを取ることを夢にしますのよ」「わっかかりました！ 俺は新米ですけど、必ずそのための力になって見せます!!」

心からそう思つて、イツセーはそう言い切つた。

今はまだ大した役には立てないが、夢をかなえる方法が分かつたこともあつて、やる気だけはある。

死ぬところを救つてくれた大恩人で、憧れのお姉様でもあるのだ。そんな主の夢をかなえることもできずに、自分の夢をかなえられるわけがない。

だから、必ず力になつて見せる。

そんな決意の言葉を聞いて、リアスはより笑みを深くした。

「ええ。貴方を眷属にして正解だつたみたいね」

「ですね。下手に外見だけを取り繕うような人よりかは信用できそうです」

「……同感」

木場と、残りのメンバーでもある小猫がそう評価してくれる。

一年生のマスコットである小猫はともかく、正直言えば木場は毛嫌いしていた。

二年生のプリンスでもある木場祐斗は、もてない男からしてみれば嫉妬の根源だ。イツセーもまた、「一度豆腐の角に頭をぶつけろ」とか思つたことがある。

だが、こう評価をされて悪く思わないわけがない。

かつての覗きのせいでいまだに嫌われていることも多い身としては、結構身に染みる展開だ。

彼らの力になるのは当然だ。むしろ全力でやってやろう。

そんな決意を込めて、イツセーは気合を入れた。

……そして、ふと気が付いたことがある。

「そういうえば、井草さんも部員なんですよ？ あの人も悪魔なんですか？」

そういうえばそうだ。

オカルト研究部の部員がことごとく悪魔なのだ。当然、井草も遊泳部員とは言え部員なのだからその可能性はある。

……その瞬間、空気が一変した。

全員に微妙な険の色が混じる。

「……イツセーくん。彼のことではできれば話さないでくれるかしら？」

特に嫌悪の感情を浮かべた朱乃が、そうたしなめる。

「彼みたいな人を好んではいけませんよ。イツセーくんには悪いですが、はつきり言つて私達にとつては敵みたくないなものです」

「て、敵い？」

なんというか物騒な言い方に、イツセーは思いつき戸惑う。

井草は確かにかつては浮いていたが、今ではクラスの人気者というか頼れる兄貴分だ。学園内で人気ランキングを作つても、それなりに高いところを狙えるはずだ。

それを敵とは、穏やかじゃない。

というより、自分たちの恩人をそんな風に言われるのはムツと来る。

「あの、朱乃さん。なんでそんなひどい言い方を――」

イツセーとしても少し文句を言いたくなつて、そう強めにいおうとしたその時――

「――それについては、俺から説明するよ」

その言葉と共に、井草が入ってきた。

……背中から、4対の墮天使の翼を広げて。

4話

井草は、あえて翼を広げてオカルト研究部の部室へと入る。

警戒されるかもしれないが、それができる限りの誠意だと思つたからだ。

「井草さん……つてええ?！」

当たり前だが、まだ聞かされてないだろうイツセーは度肝を抜かれた。

この翼に度肝を抜かれるのは果たして何回目だろうか。

夕麻の殺された時が一回目。ドーナシックとかいう男の墮天使に襲われた時が二回目。そして、信頼する人物である井草で三回目だ。

ある意味、この三回目が一番衝撃だと言つていい。

「い、い、井草さんつて、墮天使だったんですか!？」

「それについては後で説明するよ。その前に……」

井草は、両手に何かを構えると、そのままお辞儀をする。

いや、それはお辞儀ではなく謝罪だった。

ついでに言うのと、その手に持っているのは駅前のお菓子店のお菓子詰め合わせ

だった。

何が何だか分からない。

「……今回の件、暗殺そのものとはともかくその手段は全面的にこちらの落ち度だ。墮天使統括組織、神の子を見張るものの一員として、本心から謝罪させてくれ」

いきなりだった。

というか、墮天使の業界ではぐりぐりというのが動かししているということ自体、さつき知った。

訳が分からないが、しかし分かる事もある。

つまり――

「井草さんは、夕麻ちゃんの行動を知らなかった？」

「つていうか、君が神器保有者だって事すら知らなかったよ。流石は俺つて言いたくないくらい愚かだった」

……いつも思うが、井草はなんで自分の評価が低いのだろう。

二言目には「俺ごとき」だの「俺なんか」だの言っている。謙虚と言えば聞こえはいが、時々卑屈にすら思える時がある。

まあ、それは置いておいて――

「でも、俺つて危険な神器を持ってたからその墮天使に殺されたんですよね？ それは

？」

「そこは仕方ないところがある。だけど、だからといって更生した覗き魔をあんな殺し方するのは、悪趣味を通り越して外道だ」

頭を一切上げることなく、井草はそう言つてより深く腰を折り曲げた。

心から申し訳ないと思つていことがよく分かる。心底すまなそうな謝り方だった。

これは流石に予想外だったのか、リアス達もきよんとしている。

「思つた以上に素直に謝るわね」

リアスにそう言われるほど意外だったらしい。

「か、顔を上げてください、井草さんー」

イツセーは井草の肩に手を置いて、何とか顔を上げさせようとした。

確かに墮天使に殺されたというのは事実で、ぶつちやけいえば墮天使に悪印象を覚えたのも事実だ。つていうかこれで好感触を持つてというのが無理である。

だが、兵藤一誠と井草・ダウンフォールとの間にはそれ以上の何かがある。

少なくともイツセーはそう思っている。

だから、井草個人を恨む気はなかった。

「井草さんは井草さんです。俺にとつては、墮天使である前に頼れる井草さんなんですから、そんなに頭を下げないでください」

「だが、俺なんかでもつと早く知っていれば、あんな殺され方は流石に……」

井草はまだ気にしていたが、イツセーはこの際完全に気にしていない。

今の言葉でよく分かる。

井草は、今回の件に一切関わってない。イツセー自身から話を聞いて、ようやく事情を把握したのだ。

なら、墮天使という種族はともかく井草を嫌う必要だけはなかった。

「俺は墮天使には嫌な印象しかわきませんけど、井草さんには墮天使という印象はいだきませんから！ 井草さんは、俺にとつては井草さんです!!」

「イツセー……。俺ごときをそんな風……」

言葉だけ取れば、感動した風に見えるだろう。

だが、井草はむしろ痛みに耐えているかのような表情を浮かべていた。

それだけ責任感が強いのだと思い、イツセーはどうしたもんかと思う。

とりあえず話を変えろべきだ。このままの流れだと、いつになつても井草はすまなそうな表情を浮かべてしまうだろう。

「あ、それにこの菓子めちやくちや高い奴じゃないですか！ これ、井草さんのお金で？」

「え？ あ、いや……。一応上も「殺すのともかく殺し方はアレ」ってことで、後で金出

してくれるって言うてくれてるけど……」

「んじや、ここで食べちゃいましょう！ 井草さんも食べましょうよ、一応オカルト研究部の部員でしょう？」

そうイツセーは言つて、リアスの方を向いた。

リアスはちよつと意外そうな顔をしていたが、しかし微笑を浮かべると肩をすくめる。

「まあ、一応部員だから交流を深めるのは悪くないわね。義理堅い墮天使は嫌いじゃないわ」

そして、井草はあれよあれよという間にソファアに座る羽目になった。

その隣に座りながら、イツセーは井草の肩を叩く。

「俺達、友達でしょ？ そういうの話でいきましようよ」

その言葉に、井草は顔をくしゃくしゃに歪める。

「俺なんかそんなことを言つてくれるなんて……！ お前、いいやつだなあ……」

因みに、その菓子はかなり美味しかったことを伝えておく。

一方その頃、レイナーレは齒ぎしりをしていた。

あと一步で至高の墮天使として神の子を見張るものの幹部にも匹敵する立場になれるかと思つた矢先に、突然の査問会。

寝耳に水にもほどがある。それも、上層部は怒りを覚えているという状態だ。

なんでこんなことになったのか、欠片も分からない。

ただ命令の通りに危険な神器保有者と認識したものを殺しただけ。殺し方だって、ただ楽しんで殺しただけだ。仕事を楽しみながらする程度の事で、何の問題があるというのか。

「ど、どうしますか、レイナーレ様」

自分に付き従う墮天使の一人であるカラワーナが、動揺を隠しきれない声でそう指示を求めらる。

その表情も焦りに満ちており、状況を理解しきれていないのが明白だ。

「お姉様！ もしかして、ウチら悪魔に売られたんじゃ……」

「滅多なことを言うな！ 悪魔如きに我々を売るほど、墮天使は誇りのない種族なわけがないだろう!!」

動揺するミットルテをドーナシークが一喝するが、然しその声も動揺が隠せていな

い。

しかし、井草・ダウンフォールとかいう上級墮天使の顔は真剣だ。加えて上層部からも査問会までの行動の禁止を傳達されている。

信じられない。どこで何を間違えたのかが分からない。

配下のはぐれ悪魔祓いの者達も動揺している。

この状況下、明らかにあれでしかないのだが……。

「それで、どうするのです？」

はぐれ悪魔祓いの一人が、とりあえず建設的な意見を口にした。

確かニングとか名乗っていたはずだ。新入りである。

「……どうするって、そもそもなんでこうなったかが分からないのに——」

「それは分かり切っているのです」

アツサリと、レイナーレにニングは答えた。

「ようは、上層部は快樂殺人を許容しない人物で構成されているということなのです。今のままでは、計画が成功しても上はレイナーレさまを認めないのです」

その冷静な指摘に、レイナーレは愕然とした。

衝撃的な推測だった。しかし、そうだとするならば納得できる。

レイナーレにとって墮天使とは、人間を好きにする生き物だ。

人を利用し、楽しみ玩具にする。至高の墮天使として上層部に食い込むことができた
ら、人間の村の一つや二つを遊び場にするこすら考えていた。

だが上層部がニングの言う通りなら、そんなことをすれば確実に殺されるだろう。そ
もそも許されるはずがない。

否、それどころかニングの言う通り、本来の計画が知られてた時点で終わりだ。その
時点で処罰を受けることは間違いない。もし実行に移していたとしたら、どうなるかな
ど想像したくもない。

「そんな、これじゃあ至高の墮天使だなんて――」

中級墮天使にして優れた美貌を持つ自分が、そんなことになるなんて考えられない。

この詰んでいる状況に、レイナーレは足元から崩れ落ちそうになり――

「だつたらさつきとおさくらばした方がいいじゃないっすかねえ」

などという、緊張感のない声が響いた。

視線を向ければ、そこには白髪を伸ばした少年が一人。

フリード・セルゼン。このチームにいる悪魔祓いの中では最強の使い手。教会でも天
才と称されていたらしい。

だが態度は明らかに質が悪い。下品極まりない性分もあり、評価そのものはかなり低
かった。

「どういふこと?」

「だって、そんなクソ詰まらねえ組織に居たって楽しいぶっ殺しタイムができないでしょくん? だったらさっさとおさらばした方がいいと思うでゲス」

ある意味正論だが、不可能な事だ。

自分達末端の組織がそんな事をして、組織の本部がタダですますわけがない。

最強戦力であるレイナーレですら中級堕天使どまりなのだ。上級堕天使はもちろん、魔王とすら渡り合える最上級堕天使を何人も要する神の子を見張るものを敵に回して勝てるわけがない。

「無茶なことと言わないでよ!! そんなことしたって、勝算が——」

「ありますぜい?」

さらりと、フリードはそんなことを言いきった。

そのあまりの自信に、レイナーレは疎かその場にいた者達全員がぼかんとする。それを愉快そうに見て、フリードはにやりと笑った。

「イーツってやつ、知ってますかい?」

その言葉は、まるで悪魔の囁きだった。

5 話

少し前に、井草は一人暮らしをしていると書いていた。

厳密には少し違う。同居人はいる事はある。

だが彼女は滅多に家に帰ってはこない。表向きの他の仕事場の方に籠りつきりで、たまに戻ってくるぐらいだ。

その彼女が、珍しく帰ってきた。

「たぐだぐいまあ」

……非常に酒臭い息を出しながら。

またかと思いつつ、井草はしかし表情を不機嫌なものにはしない。

演技でも何でもない。彼女に対する感謝の気持ちと、なんだかんだで面倒を見てくれる大事な女性だ。

……あと、人生における最悪の初体験を書き換えてくれた恩人でもある。無碍にできない。

というより、無碍にした場合高確率でそれを突っつかれるのが目に見えているので、ややこしいことになるのを避ける必要もある。

「……また戻る場所間違えてないかい、ピス義姉さん」

「そんなことないわよお。今回はあ、最初から久しぶりにここに戻る気でしたあ」

そう間延びした声でしゃべるのは、ピス・ダウンフォール。

井草の義理の姉という形でグリゴリが戸籍をねじ込んだ、井草の護衛役である。

条件次第ではアザゼルたち神の子を見張るものの幹部クラスにも匹敵する戦闘能力を發揮する彼女が牽制になっているからこそ、リアス・グレモリーという超VIPが担当しているこの悪魔の縄張りで好き勝手出来るのだ。

……ちなみに、ある親バカが相当のシヨバ代を払っていることも要因の一つである。

人間世界での介入をたやすくするため、意図的に戸籍などを登録しているパターンは決してないわけではない。

ピスの場合はその類で、それらもあって井草の義理の姉ということでも活動している。

表向きの仕事は私立探偵。加えて、墮天使側が金銭稼ぎの為に用意している土地の管理者だ。

「もうめんどくさいのお。仕事嫌いだからさぼりたいのお」

「はいはい。ピス義姉さんは頑張ってるね」

どうやら最近の仕事の多さに、やけ酒を飲んでぬくもりを求めていたらしい。

そのままピスは、井草に抱き着いた。

すんすんと臭いをかぎ、そしてほっこりとする。

「ふう。ねえ、今日は一緒に眠ってくれるう」

「義理の姉弟でそういうことするとか、まさに墮天使だね。まあ、俺なんかでいいならしてもいいさ」

……面倒くさがりなこの義姉には敵わない。抵抗するだけ時間の無駄だし、何より周りの迷惑になるだろう。

なので素直に体の力を抜き――

「でも、面倒くさいことはしない方がいいわよお」

その言葉に、井草は一瞬動きを止める。

どうやら、総督から色々と話を聞いたらしい。中々の嗅覚だ。

「別にここは悪魔の縄張りだからあ、悪魔のご機嫌を取るのは当り前よお。その前の友達を大切にするのもいいことねえ」

でもと言わんばかりに、ピスは指を一本立てる。

「自分をきちんと大切にすること、頑張らなきやダメよお」

それは、まっすぐなまでに井草のことを思つての言葉だった。

痛いほどそれが伝わってくる。そして嫌というほど何度も言われてきた言葉。

それが、本心からのものだという事を分かっているからこそ、井草はつらくて堪らな

くなる。

そんな資格は、自分にはないのだから。

「分かってるよ、ピス義姉さん」

だから、井草はあえてこう嘘を言うのだ。

断つて彼女を心配させるのが嫌だから。彼女のおかげで今の自分があることを知っているから。彼女が負の感情を表情に出したりすることが嫌だから。

……自分なんかの為に、人がそんな顔をするのは耐えられないから。

そして早朝、いきなり電話で叩き起こされた。

「……なに、リアスちゃん」

色々あつて寝不足気味なので、ちよつと不機嫌な声が出る。

基本向こうの意向を汲んで、不干渉にはしているのだ。

監視報告業務もあるし、近辺の墮天使絡みの問題解決の為に色々と動かざるを得ない為、その辺りのフォローをしてくれるのは感謝している。部活勧誘を阻害する為に自分

の部活に在籍させてくれるのもありがたい。

だが、極力不干渉をそつちから要求しておきながら、なぜ自分はこつちの都合を考えないのか。

「あのさあ、悪魔としてなら我儘は通せるだろうけど、ここは人間界なんだからもうちよつと節度を——」

なのでちよつと文句を言おうとして——

『イツセーがはぐれ悪魔祓いに襲われたわ。墮天使も関わってるし、契約をしてきた人も殺されてる』

——その言葉に、そんな気分は一瞬で霧散した。

「……神の子を見張るものを離反した連中の可能性は？」

『そこも含めて調べるのを手伝ってほしいの。……そつちこそ、夕麻とか言った墮天使の可能性は？』

「釘は刺しておいた。今ここでグレモリーと揉めれば切り捨てられるのはよほどの馬鹿じゃなければ分かるはずだ」

だが、そのバカの可能性がある事は否定できない。

かなり平和主義でハト派なのがアザゼルだ。神の子を見張るもの全体でタカ派なのは、コカビエルぐらいだろう。それぐらい墮天使というのは平和主義だ。

また、人間界に干渉する事も極力避けている。殺人狂の多いはぐれ悪魔祓いを集めているのは、あくまで戦力を確保しないと何かあった時に対応しきれないからだ。

それが分からず、悪質な行動をとったレイナーレは、馬鹿の可能性は高かった。

「……確認の連絡は―」

「それはこつちでやるわあ」

と、ピスが即座に通話モードを切り替えてそう言い放つ。

「監査と合流してその教会に詰め寄るわあ。なんならついでに監視でもするう?」

『そうさせてもらうわ。とりあえず、井草はいったん合流して頂戴。一通りの情報共有をしたいの』

素早くかわされる会話に、井草もまた頷いた。

そして、通話が切れ、ピスはため息をついた。

「また面倒くさいわあ。ちよつと面倒じゃないのお?」

「ごめんピス義姉さん。俺なんか警告しても理解できなかったみたいだ」

本当に面倒な事になった。

本当にレイナーレがやらかした事だとすれば、彼女は自分達が責任をもつて始末する事になるだろう。

そうなれば、住まわせてもらっているグレモリーに相当の迷惑をかける事になる。

色々とやりづらくなるのは間違いない。

「仕方ないから、今夜中に終わらせるわあ」

……そして、この義姉の本気を見るのは色々と心臓に悪い。

虎の尾の何匹分も同時に踏みつけたレイナーレ達に、井草は心底から「勘弁してほしい」と思った。

6話

そして、事態は急変した。

「……部長!!」

会議中に飛び込んできたイツセーに、井草は目を見開いた。
なにせ、服はボロボロなのに体には傷一つない。

明らかに何かあったとした思えなかった。

「イツセー! どうしたの!?!」

慌てて駆け寄るリアスに、イツセーはすぐに頭を下げた。

「部長! お願います、アーシアを助けてください!!」

明らかに何かあったのは分かる。だが、何があったのかが分からない。

「イツセー。とりあえず、何があったのか俺でも分かる様に説明してくれないか?」

「井草さんまで!?! あ、実は夕麻ちゃんが――」

イツセーが慌てながら説明した事を聞くと、こうまとめれる。

はぐれ悪魔被いのフリードとかいう男と出くわしたイツセーは、傷ついている事もあつて学校を休むように言われた。

しかし気分が晴れなかったので外に出ると、アーシアというシスターと再会したのだという。

なんでも悪魔になってから知り合ったシスターで、実は墮天使と関わっていたらしい。

そして、その原因が――

「――セイクリッド・ギア 凄^セい神^キ器だ。神の祝福を受けてない悪魔まで治療できるなんて――」

通常、神の祝福を受けていない存在が、負傷を急激に回復するのは困難だ。

其の為悪魔や墮天使の急速治療手段は、表の人間と同様の手段に限られる。フェニックスの涙なのは例外もあるにはあるが、それらは非常にコストが高いなど、簡単には使えないものが殆どだ。

それをなすという存在が、どれほど貴重かなど推して知るべきだ。

「あいつら。それだけの存在を秘匿するとか何を考えてるんだ」

井草は舌打ちするが、イツセーは更にとんでもない事を言ってきた。

「その夕……レイナーレの奴、アーシアを使って何か儀式をするとか言ってたんです！」

その言葉に、井草は状況を把握した。

「リアスちゃん。悪いんだけど、俺はすぐに行かせてもらおうよ」

「ええ。その方が良さそうね」

「ど、どういふ事ですか!？」

二人が納得している理由が分からない。イツセーには分からない。

当然だ。悪魔になってまだ一月も経っていないイツセーでは、その辺りの情報がないのだから。分かるわけがないのだ。

だから、井草はかみ砕いて説明する。

「レイナーレは、そのアーシアちゃんの神器を自分に移植する事で、自分の価値を高めて処刑を免れる気だ」

愚策だ。

神器の移植はデメリットが伴う。其れならさつきと報告して、彼女自身を運用した方が遥かに効率がいい。移植するにしても適性が高い人物を選んだ方が効果的だ。

なにより―

「神器を強制的に摘出されれば、高確率で死に至る」

「……そんな!？」

イツセーは衝撃を受け―

「部長! アーシアを助けに行かせてください!!」

―そして、すぐに行動を開始しようとする。

其の在り方を無鉄砲田の考えなしだの罵倒する者もいるだろう。

だが同時に、好感を抱く者も数多い。

「……イツセー。一つだけ聞いわ」

リアスもそれは分かるが、しかしイツセーを失う可能性がある事も分かっている。だから、一応の説得もかねてそれを訪ねる。

「そのアーシアつて子は、つい最近会ったばかりでしょう？　なんで態々命を懸けてまで助けに行くの？」

それは常識的な見地だ。

会ったばかりだ。特に縁もない。

普通は、そういう人を助ける為に命を懸けたりはしない。

ましてやイツセーは悪魔になったばかりの一般人だ。命がけの殺し合いの経験何てない。そして、そういう立場の自覚もない。

にも関わらず、イツセーは決死の覚悟で助けに行こうとしている。

それを尋ねられ――

「俺はアーシアと友達になると誓いました。他に理由がいますか？」

――あまりにもまつすぐな答えが返ってきた。

それを、井草は眩しいものを見る目で見つめる。

自分のような、醜い存在とは違うその姿を見て、彼を押し上げようとした事は間違っ

てないと確信する。

だからー

「リアスちゃん。今から君に依頼を行いたい」

その後押しをするのは当然だ。

「何かしら？」

「レイナーレ一派の無力化を依頼したい。報酬に関しては後で交渉するけど、まあ、俺が払える限りは言い値で払うさ」

どうせ処罰するのはほぼ確定なのだ。これぐらいの独断専行はしてもいいだろう。

「井草さん!!」

イツセーが顔を明るくするのも心地いい。

そして、リアスもまた頷いた。

「ええ。私の領地で好き勝手する墮天使を、堂々と排除できる機会を逃す気もないわ」

そして、リアスは微笑を浮かべて眷属を見る。

「私の可愛い下僕達。悪いけど、ちよつと一仕事に付き合ってもらおうわ」

その言葉に、三人の眷属はあつさりと頷いた。

「もちろんです。公然と神父を切れる機会を逃すつもりはありません」

木場祐斗は、その優しい顔に明らかな戦意を滾らせて剣を構える。

「……もちろんです」

塔城小猫は、指を鳴らしながら言葉少なく立ち上がり―

「当然ですわ。墮天使はできるだけ駆除しませんと」

姫島朱乃はサデイスティックな笑みを浮かべて、全身から雷撃を放った。

「じゃあ、契約成立ね」

「そうだな」

上級悪魔と上級墮天使は、そう言うてにやりと笑った。

そして一時間も経たずに、レイナーレのいる廃教会に殴り込みをかける姿があった。
「……レイナーレえええええ!!」

既に神器を展開して、イツセーは教会の扉を殴り飛ばした。

そして突入すると同時に、そこにいた二人の少女を睨み付ける。

「お前ら、レイナーレの仲間か！」

そこにいたのは二人の少女。

茶色の髪をアツプにした少女と、緑のウェーブの髪をした少女。

恰好からして悪魔祓い。其れもたたずまいから、相応の実力を持っていると思われる。

「……来てしまったのです。降参なのです」

「そうするのが一番ですかい。死ぬのはいやでやがりますからね」

と、あっさり両手を上げて降参のポーズをとつたが。

「どういふつもりだい？」

同じく突入した祐斗に剣を突き付けられても、二人は動揺していない。

その余裕と、しかしあっさりと投降する態度がよく分からない。

しかし、少女達は不意打ちしようという気配を微塵と見せずに座り込むと、ロープ迄取り出した。

「レイナー様が暴走したので、こっちも困ってたのです」

「フリードのクソツタレ野郎の所為でやがります。正直逃げどころを探してたんでさあ」

さざりと言う少女達に不穏なものを感じながらも、然し仕方がないのでとりあえず拘束した。

「逃げたら潰します」

「逃げないから安心するのです」

「んなクソめんどくさいことしねえですから」

小猫の恫喝も涼しげにする当たり不気味なものを感じるが、然しそれはそれとしてすぐに向かわなければならぬ。

「アーシアは何処にいるんだ!? レイナーレを裏切る気なら教えてくれ!!」

「その隠し扉から地下に入ると見つかる出やがりますよ」

さらりと緑髪があっさりばらした。

罨の予感もするが、然しそんな事を気にしている余裕もない。

どちらにしても、自分達は囷なのだから、これでいいのだ。

「行こうぜ、木場、小猫ちゃん!!」

イツセーは、全力でその階段を降り、二人もそれに続いた。

そして、其れを見送ってから茶髪のイングと緑髪のリムは、ふうと息をついた。

「勝てるといいのです」

「ま、私も動く出やがりますがね」

そういうなり、一瞬で拘束に使ったロープがちぎれ飛ぶ。

「しっかし、渡したロープで拘束するとか、まだまだ未熟でやがりますな」

「からめ手には弱いタイプだと思っております」

二人は苦笑しながら、あっさり立ち上がる。

このロープ。錬金術師が開発した特別製で、光力を流すと一瞬で劣化する特別製だ。

レイナーレ達も知らない最新技術の塊である。

「では、こちらも動くのです」

「とつとと動かねえと、やべえですからね」

7 話

一方そのころ、井草たちは裏手から教会の敷地に潜入していた。

「……ここを破壊すれば、地下迄直通だ。72柱の末裔なら簡単だろう？」

「そうね。これぐらいの厚さなら何とかなるわ」

「あらあら。上級の方々は言うことが違いますわ」

さらりと言う上位陣こそが本命。言っては何だがイツセーたちは陽動であった。

イツセーたちが堂々と教会に潜入。そして大暴れを行っている間に、リアスたちが地下に直接乗り込むのが作戦だ。

事前にレイナーレ達について調べて、この廃教会に地下があることは突き止めている。

神器の抽出は目立つため、地下で行った方が効率がいい。なのでそこをつく。

敵の戦力も十全に把握できている。はぐれ悪魔祓いが数十名ほど下つ端としての構成員。その上の幹部として下級墮天使が三人。トップが中級墮天使のレイナーレだ。

まともに戦えば確実に勝てる。数はともかく質においてはこちらが圧倒的に上だった。

「バックアップとしてソーナが周囲に結界を張ってくれているわ。中級レベルなら突破には相当の時間がかかるはずよ」

「生徒会長も動いてくれるのか。それなら、まあ苦勞はしないか」

リアスはどうやら、自分以外の戦力も用意していたらしい。

自分の管轄地で何度も好き勝手に手をされれば面子的にも許すわけにはいかないということだろう。自業自得とは言え、レイナーレも愚かなことをした者だ。

たいていの悪魔の管轄地は、上級悪魔が管轄しているのだ、いかに数をそろえていても、中級堕天使が動かしている実働部隊で正面から挑むのは得策ではない。

おそらく、上に黙ってことを進めるため堕天使の管轄地で行うのを避けたかったのだろう。

とはいえ、そんなことをすれば上はいい顔をしないのは明白。アザゼルは基本的には善良な人物だし、この手の外道行為を行って褒めそうなのはコカビエルぐらいだ。完全に悪手でしかない。

どこも末端や中堅には愚かなものが出てくるものだと、井草は苦笑した。

「うふふ。それでは薄汚い鴉たちを駆除しましょうか?」

「俺も一応堕天使なんだけどね」

朱乃の堕天使嫌いにも慣れてはいるが、もう少しオブラートに包んでほしい。ここに

ハーフとは言え墮天使が共闘している事実を忘れないでほしい。

(まあ、高校生なんてまだ子供だしねえ)

井草はそう思うと、そのまま攻撃準備を整え―

「来たようですな」

其の声に、上を仰ぎ見た。

そこには三人の墮天使がいた。

コートをつなげたドーナシック。スーツを身に着けたカラワーナ。ゴスロリを見に纏うミットルテ。

資料にあった三人の下級墮天使だ。

……どうやら、動きを想定して待ち構えていたらしい。

「ごきげんよう、墮天使の方々。私のことは覚えてるかしら？」

「無論だとも。忌々しいグレモリーの娘だろうか？ 今日には殺させてもらう」

一度対峙したリアスとドーナシックが睨みあうが、それより先にすることがある。

「……その三人。今から素直に投降すれば、命まではとらないと約束する。抵抗はやめた方がいい」

まあ、ここまで動いておいて今更だとは思う。

しかし、井草としてはできれば死人を出さずに終わらせたいのは事実だ。

自分ごときが他者の命を奪えるほど、えらくなっているなどは思えない。必要とあれば奪う覚悟はしているが、それでも殺さずにどうにかできるならどうにかしたかった。

むろん、返答は嘲笑だった。

「断る。というより、我々は神の子を見張るものから抜けさせてもらう」

そして、その返答は想像以上のものだった。

強引にレイナーレの価値を上げることでも乗り切ろうなどという愚行ではなかった。

しかし、ある意味それ以上に問題のある行動だ。

「……この状況下でそんな事をして、まさか生きていられると思ってるのか？ 馬鹿な

真似はやめた方がいい」

「ハッ！ 状況はもう変わってるんですよ！ それを教えてやるツスー！」

ミットルテがそう嘲笑いながら、何かを取り出した。

……目を凝らしてみると、それは某型の注射器のような外見の物体だった。

糖尿病などで使う注射器が一番近いだろうか。それが、彼らの自身の源らしい。

何かはわからないが、しかし警戒だけはする必要がある。

そう思った瞬間――

『スパイダー！』

『コブラー!』

『バット!』

そんな合成音声を慣らしてから、三人はその注射器を突き刺した。

そして、その瞬間に彼らは変貌する。

その音声の通り、蜘蛛・コブラ・蝙蝠をもした外見の化け物へと、一瞬で変貌した。

「……………どういふこと?」

「これは、一体……………」

リアスと朱乃が警戒の色を濃くし、井草もまた違和感を覚える。

それは、ドーナシック達三人ではない。

……………自分の中で、何かが目覚めたような感覚を覚えた。

イツセーが地下に突入した時、そこには大量の悪魔祓いがあつまっていた。

そして彼らがあがめるようにしている祭壇の上では、十字架に張り付けられたアーシアと、その隣に立っているレイナーレの姿があった。

「……夕麻ちゃん!!」

「あら、まだその名で呼んでくれるのね」

と、不敵な笑みを浮かべながらレイナーレは振り向いた。

そして、その表情は嘲りの色に染めあがるのは一瞬だ。

「せっかくアーシアの最期の頼みを聞いてあげたのに、無駄にするなんて本当に馬鹿な子ねえ」

「うるせえ!! てめえは墮天使側からも切られてんだよ!! でも投降するなら情状酌量してくれるって言ったけど!!」

余計なもめ事を押させるため、井草の判断でそういうことになっている。

期待薄ではあるが、それでアーシアが救えるなら、それでもいい。

はつきり言えばレイナーレのことは本気で恨んでいる。それ位には裏切られたと本気で思っている。

だが、レイナーレと揉めて結果としてアーシアが死んだら意味がない。

……どちらにしても悪趣味な真似をした分の処分はすると、井草は言っていた。墮天使総督のお墨付きだとも。

ならそれで我慢してもよかったが――

「――ハッ! あんなどころ、こっちからやめてやるわ」

—返答は、最悪の形だった。

悪魔を敵に回すだけでなく、墮天使の統括組織である神の子を見張るものを抜けるとすら言つてのけた。

明確な背信行為だ。これはもはや、墮天使と悪魔の小競り合いなどというレベルではない。一地区の担当が動くことでもない。

もつと大きな事態が、目の前で起こっていた。

「正気かい？ 中級墮天使ごときが、最上級クラスまで敵に回して勝てるっても？」
「……馬鹿？」

祐斗と小猫も一周回つて感心の境地に至っているが、レイナーレはいたって自然だった。

その自信の表れなのか、彼女は何処からともなく注射器のようなデバイスを取り出す。

「もう受け入れ先も用意されてるの。あとはテストもかねてこれで遊んであげるわ」
『フォーリンエンジェル！』

合成音がデバイスから鳴り響き、そして注射器に似た形を生かしてレイナーレはそれを突き立てる。

その瞬間、レイナーレのオーラが大幅に向上した。

「……な」

「はい、終了」

その瞬間、イツセー達三人は地下空洞の天井にたたきつけられた。

「「~~~~つ!?」」

悲鳴すら上げることができず、激痛に悶えながら三人は地面へと墜落した。

それを眺め、レイナーレは何かをこらえていたが、しかしすぐに大声で笑いだす。

「あゝははははは!!! なにこれ! 最高すぎるわ!! この私が上級墮天使クラスの力を手にできるなんて!!」

高笑いをひとしきりした後、レイナーレは指を鳴らすように構える。

「あとは、アーシアの神器を移植すれば、私は最上級墮天使すら超える至高の墮天使ね」

その言葉に、イツセーは激痛すら忘れて凍り付いた。

レイナーレの目的はアーシアの神器を移植することだ。

神器を抜かれたものは、ほぼ確実に命を落とすとも言われている。

このままでは、アーシアが死んでしまう。

「()……の。やめ……やがれ」

「あら、意外と頑丈ね。でも駄目よ。あなた達にも見せてあげるから、それで我慢してね、イツセーくん♪」

心底からの醜悪な笑顔を浮かべ、レイナーレは――
「はい、スタート」

――装置を、起動させた。

8話

装置は起動させた。

この装置はレイナー達一派が本部から持ち出した物で、神の子を見張るものの技術で作られた、神器抽出装置の最新型である。

これなら確実に神器を抜き出せる。そして、其れをレイナーレは自分に移植する。

結果として、レイナーレは墮天使ですら癒す事ができる存在になる。其の力で自分の権威を高め、上層部に至る事が目的だった。

しかし、上役達は人間なんかを好きに殺すだけで不快を示す者達。そんなところの上役になっても、余計な仕事が増えるだけで意味がない。

既に受け入れ先も出来ている。そちらの方が好きに活動できる余地がありそうだが。少なくとも、自分達の行動を許容して相当の待遇で迎え入れてくれる事を約束してくれ

た。

そのダメ押しとして、しっかりとアーシアの神器は抽出しようとして――

「……………イツセーさん！　しっかりとしてください、イツセーさん!!」

その、他人の心配をする余裕があるアーシアの姿に目を見開いた。

おかしい。少なくともこの装置が起動すれば、アーシアには絶叫するほどの激痛が走るはずだ。というよりそれ相応に派手な事になる。

神器は魂と密接に繋がっている。それを無理やり引き剥がされれば、文字通り死に至る苦痛が走るのは当然。他人の心配をしていられる余裕などあるはずがない。

万が一、イカれていると言い換える事もできる精神力で他人の心配をしていたとしても、それでも装置が反応している。それ位神器の摘出は分かり易いのだ。

だが、まったく装置が反応していない。

「ど、どういう……」

「えっ？ ……えっ？」

レイナーレはもちろん、イツセーも痛みを別の意味で忘れてきよんとした。

状況が、まったく分からない。

見れば、祐斗も小猫も、レイナーレの取り巻きの悪魔祓いも啞然としている。

状況が、まったく分からない。

その間の抜けた緊張感を、足音がかき消す。

「あ、成功してたのですよ」

「マジ最高でやがりましたね」

と、のんきな表情で入ってきたのは、小猫達が拘束したはずの悪魔祓い二名。心からほっとした顔で、アーシアが無事な事を喜んでいる。

その瞬間、レイナーレは全てを悟った。

この二人は、敵だ。

「あんた達、何者よ!!」

即座に光力を放って攻撃を叩き込む。

今の自分の戦闘能力は、並の上級堕天使を上回っている。力の使い方に慣れていけば、下位の最上級堕天使なら対抗できるだろう。

少なくとも、ただの悪魔祓いが対抗できるような手合いではない。

しかし、即座にその二人はその攻撃を弾き飛ばした。

片方は明らかに禍々しいオーラを放つ魔剣。だが、どこから取り出したのかが分からない。

片方は悪魔祓いの基本装備である光の剣。だが、その出力は明らかに異常だ。

今までこんな実力は見せてこなかった。そして、明らかに自分にとって脅威のレベルに到達している。

「……とりあえず、そろそろいい加減キレそうだったのでですよ」

「まあ、元をただせばこっちが悪いんでやがりますけどね」

未だに冷静さを保っている二人を見て、レイナーレは後退して槍を構える。

そして、二人はそんなレイナーレを警戒しながらも、イツセー達に軽く頭を下げた。

「申し訳ないのです。上から「失敗の可能性も考慮して逃げられるようにしておけ」と言われていたのです」

「んなしちめんどくせえことになってるんで、装置の破壊を確認するまで出待ちさせてもらいやした」

「え……えつと……？ 味方でいいの？」

二人の言葉にイツセーはそう聞くが、二人はあっさり首を振った。

そして緑の髪の方が、隠し持っていた十字架を持った。

それは、炎に包まれた意匠を施されていた。

「私らは、教会の者ですぜ、お兄さん」

「教会って……なんでアーシアを追放しておいて!？」

怒りもあるが、それ以上に驚きもある。

アーシアは、悪魔を治してしまった事が原因で魔女扱いされて追放された。

その追放した教会の側が、何故アーシアを助けようというのか。

その疑問に答えを示したのは、茶髪の方だった。

「追放されたので、上は逆に自分達の側に取り込もうとしたのです。……ちゃんとした

信徒を入れないのが、プルガトリオ機関の一線なのです」

その聞き慣れない組織名に、レイナーレは目を見開いた。

「プルガトリオ……!?!」　なんで教会の者が、煉獄の名を組織の名に関するのよ!?!」

レイナーレが何で驚いているのかが分からない。

と、思ったがふと気が付いた。

確か煉獄というのは、地獄ほどじゃないけど天国じゃない場所だったはずだ。

確かに、信徒が好んで付けたがる様なものではない。

「……まともな機関じゃ、絶対ない」

「そうなのです」

小猫の感想に、茶髪の少女がそう答えた。

そして、緑髪の方は胸を張るように答える。

「我ら、主の祝福を受けるに値しない者。されど信仰を守る者」

そして、光の剣の切っ先を、まっすぐにレイナーレに突き付ける。

「我ら、教会暗部プルガトリオ機関。……その子の身柄、我々がもらい受けるツス」

状況は、更に二転三転する。

それを理解したレイナーレは速攻で切り札を切った。

自分達の受け皿を用意した奴を切り捨てるのはあれだが、しかし状況が状況だ。

出せる手札は全部出す他ない。

「……フリード!! こいつらを始末しなさい!!」

「あいあゝい! 天才剣士の出番ですぬい!!」

その言葉と共に、白髪の悪魔祓いがどこからともなく表れて銃を放つ。

その攻撃をさらりと光りの剣で捌きながら、緑髪の少女はため息をついた。

「フリード・セルゼン? あんたにや悪いですが、ちよつと話を聞かせてもらいますぜ?」

「やーだよーん!! リムちゃんこそ、スパイちゃんだからレイプしてもいいよね? 答えは聞かないぜ!!」

即座に銃を乱射するフリードに、リムと呼ばれた少女はそれを弾きながら、一瞬で接近する。

そしてその刃がフリードを切り裂こうとしたその時――

『パイレーツ!!』

注射器型デバイスが、フリードの首に突き立った。

その瞬間、フリードの姿がキレイに代わる。

髑髏を模した顔。ポロポロの海賊服。

そんな怪人の姿になったフリードは、その斬撃をカトラスで受け止めた。

「やるねえリムっち。とっさにパイレーツイーツにならなきゃ、やられてたぜ！」

「シグルド機関の連中は手強いですが、色々としつつこいつつかんたつーか
!!」

そして、高速での剣劇戦闘が勃発。イツセー達の目に留まらない速度での戦闘が発生した。

「チツ！ イーツになったフリードと互角とか、化け物?! ならせめてアーシアだけでも——」

「させないのです！」

アーシアを確保しようとしたレイナーレを、回り込んだもう片方の少女が牽制する。

振るわれる魔剣のオーラによって、レイナーレはアーシアに近づけない。こちらもまた、イツセーとは次元違いのスピードだ。

「邪魔よ、ニング!! 教会の飼犬風情が、私の邪魔をするな!!」

「そうはいかないのです!!」

レイナーレも圧倒的な身体能力で抑え込もうとするが、ニングはそれを抑え込む。

状況は拮抗。そして、時間が経てば井草やリアスも駆けつけてくれるだろう。

だが、レイナーレもそこまで愚鈍の極みではなかった。

「お前達!! 早くアーシアを確保して離脱しなさい!!」

業を煮やしたレイナーレが、はぐれ悪魔祓い達に大声を飛ばす。

それで我に返つたはぐれ悪魔祓い達がアーシアを確保しようとし――

「そうはいかない」

「させない」

――既に持ち直していた祐斗と小猫が、それを阻む。

そんな中、イツセーは悔しさに歯噛みしていた。

アーシアを助けると最初に言い出したのは自分だ。なら、自分が一番動かなければならないはずだ。

にも関わらず、女の子に守られている。

それが、どこまでも悔しい。

それに涙すら浮かべるイツセーの耳に、声が届いた。

「イツセーさん！」

アーシアの、声が届いた。

「大丈夫ですか、イツセーさん！」

アーシアが、心配している。

そうだ。何をぼさつとしている。

自分は彼女を助けに来たんだ。まだ彼女は捕まっているではないか。

ここで手が空いているのは、自分だけだ。だから、自分が動かなくてはいけないだろう。

その決意と共に、イツセーは立ち上がると足を踏み出す。

「……神様……いや、俺は悪魔だから魔王様の方がいいか」

ふらふらと、しかししつかりと足を踏みしめて一步一步近づく。

激痛が走る。あの衝撃だ。悪魔の体でも、骨の一本や二本は折れているかもしれない。

だが、歩くのに支障はない程度の負傷だ。なら、何の問題もないだろう。

『BOOST!』

神器が反応して、少しだけ楽になる。

力も入った。ならば大丈夫だ。

「……あのクソガキ！ させるとー」

「こちらのセリフなのです!!」

レイナーレとイングが激戦を潜り抜けている横を、ゆっくりとした歩みで通り過ぎる。

『BOOST!』

流れ弾が掠めるが、それでも歩みは止まらない。

友達を助ける。アーシアを助ける。今はそれだけを考える。

もとより自分は馬鹿者なのだ、なら、馬鹿なりに出来る事を続けなければいい。いや、それしか出来ない。

『BOOST!』

更に力が戻り、そして歩く速度も速くなる。

「行くんだ、兵藤君!」

「先輩、急いで」

迎撃しようとするはぐれ悪魔祓いを、祐斗と小猫が迎撃する。

もちろん流れ弾ぐらいは飛んでくるが、しかももう効きはしない。

『BOOST!』

そして階段を上り、アーシアのもとに辿り着いた。

「助けに来たぜ、アーシア」

「イツセー……:さん」

涙をぼろぼろとこぼすアーシアの頭を、イツセーは撫でる。

「もう泣くな。これから、一緒に遊ぼうぜ?」

ああ、だから邪魔者は粉碎しよう。

どうせ自分は悪魔だ、なら、悪徳の一つや二つやって見せろ。

「……させるかあああああ!!!」

「あ?」

そして強引にイングを突破したレイナーレが、宙を舞ってイツセーに迫る。

其の戦闘能力は上級クラス。おそらく、リアスや井草でも苦戦するだろう。

だが何故だろう。その動きは、今のイツセーには手に取るように遅く感じられた。

全てがスローモーシヨンのようにゆっくりと動く中、イツセーは一度呼吸を整える余裕すらあつた。

そして思い出す。自分の純情が踏みにじられた時のことを。

加えて思い出す。自分を助ける為にアジアが泣きながら庇った時のことを。

……一瞬で、怒りが沸点を超えた。

「吹っ飛べー」

そして勢い任せの攻撃をかわしー

「クソ墮天使!!」

顔面に、勢いよく左拳を叩きつけた。

9話

一方その頃、井草は血を吐いて膝をついていた。

コブラの意匠を持つ怪人と化したカラワーナの攻撃を受けて、いきなり動きがマヒした。

コブラの合成音声が鳴り響いた怪人だ。おそらく毒を持っていた可能性がある。

それでも翼を広げて何とか距離を取ろうとするが、その瞬間に蛇の尾を思わせる鞭が叩き付けられた。

「ッ!?!」

「ふん。イーツの前には上級墮天使もこの程度か」

カラワーナは平然と、そして高揚感を感じさせる声でそう言い切る。

そして、リアスと朱乃も苦戦していた。

「しつげえっすよ、このポニテ!」

「これは……墮天使風情が……っ!」

蝙蝠の怪人と化したミットルテの超音波攻撃を受け、朱乃の巫女服はボロボロにな

る。

それでも広範囲の雷を放ってまともに戦えているが、しかしこちらも苦戦している。「ふん！ 我が糸を消滅させるのは、滅殺姫といえど難しいようだな」

「何なの、この糸は！」

リアスもまた、蜘蛛の怪人と化したドーナシックに苦戦していた。

あらゆるものを消滅させる、母方の血から受け継いだ消滅の魔力ですら、ドーナシックの生み出す糸を消滅させるのは困難だった。

完全に苦戦を強いられている。上級クラス三人がだ。

しかも、イーツといえば――

「アザゼル総督が警戒してた、最近噂の謎の怪人！ まさか、墮天使が変身する存在だったとはね」

「それは少し違うな」

カラワーナは井草の言葉を否定する。

そこには、どこか屈辱的なものもあった。

「イーツはエボリューションエキスに適性があれば誰でも至れる。我々にこれを紹介したフリードは人間だし、悪魔やこの国の妖怪にも適性がある者がいるそうだ」

「……まさか、それほどまで種族に行き渡っているというの!?!」

ドーナシックが放つ糸をかき消しながら、リアスが瞠目する。

当然だ。墮天使側はともかく、勢力によつては人間の問題とだけで片付けられている事も十分あり得る。

それが、異形達にも行き渡っているなど狼狽ものだろう。しかも下級墮天使が上級クラスと互角に渡り合えるレベルに迄強化されている。

これは、自分達が思っているよりも遥かに非常事態だ。

おそらくイツセー達の側にもイーツと化した者達がいるのだろう。それも、おそらくは複数だ。

なんとしてもここを突破して、イツセー達を助けに行かないといけない。

だが、それを行う余裕がない。

毒の影響で体の自由がきかない。しかも、謎の感覚は強くなる一方だ。

このままだと、動けなくなる方が遥かに速い。

「まあいい。ここで仕留めればそれも終わりだ。……死ぬ」

カラワーナが、右腕の牙上の武器を使って井草に迫る。

このままでは回避できない。

このままだと致命傷だ。

このままだと全滅もありうる。

……それは、認められない。

自分が死ぬのは良い。因果応報という言葉はあるし、まあ墮天使が悪魔の領内にいるのだから、殺されても文句はない。

だが、ここで死んだらリアス達もジリ貧だ。イツセー達もやられるだろう。アーシア・アルジエントは確実に死ぬ。

それはダメだ。

—俺なんかの所為で、死人が出るのは認められない。

その極めて後ろ向きな決意が、最後のスイッチを押した。

その瞬間、ドーナシークは吹き飛ばされるカラワーナを見た。

カラワーナは完全な偶然でミットルテとぶつかり、そして状況をひっくり返す。

「なんだと!?!」

カラワーナが一番有利な状況だった。

なにせ相手は毒を受けて動きが鈍っているのだ。糸を消滅させてくるリアスと相對

している自分はもちろん、広範囲攻撃という意味では同じ土俵で勝負ができる相手の女王と戦っているミットルテも手こずるタイプだ。

一番楽な相手に逆襲された？ 今の墮天使を超えた自分達が？

あり得ないと思い、そして視線を向け――

「……なんだと!?!」

そこには、自分達とは異なるイーツがいた。

よりスマートで人型に近い外見。何かを受け止めるような円錐状の物体を両肩に装着した、そのイーツがカラワーナを弾き飛ばしたのだ。

そして、其れがイーツであることをドーナシックは直感で理解した。

「どういう事だ!?! 基本的に、イーツは我々賛同者とデモンストレーション用のEELベルー以下のものしか使用されてないはず――」

「――遅い」

その瞬間、拳がめり込んだ。

ろっ骨が折れるのが分かる。肺もひしゃげた。

ドーナシックは、狼狽しながらもそれを納得してしまった。

なにせ井草は、ハーフとは言え上級墮天使だ。下級である自分とは戦闘能力の桁が違う。

それが、同じイーツとなればどうなるかなど、言うまでもない。

「……吹き飛ばへ」

そして、ゼロ距離からの攻撃を受け、一気に吹き飛ばされた。

リアスはもんどりうって倒れたカラワーナとミットルテに全力の消滅の魔力をとつさに叩き込んでから、そしてすぐに啞然となった。

いきなり下級墮天使三人が怪物になって自分達を追い込んだかと思つたら、今度は井草が怪物になって怪物の1人を一蹴した。

とつさに隙を見せた墮天使二人を滅したが、然しこれは明らかにおかしい。何がどうなって、井草が化け物に変貌したというのか。

いな、そもそも今の井草は味方と判断していいものか――

「……ん？ どうしたんだ、リアスちゃん」

―味方でよさそうだ。

そもそも状況を正しい意味で理解していない。自分がどういう事になっているのか

すら、よく分かってない節があった。

「……朱乃、鏡を持ってきて頂戴」

「あらあら。墮天使は抜けている人が多いようですね」

呆れ顔の朱乃が出した手鏡で自分の姿を確認した井草は、固まっていた。

ちなみに五分後、変身が解けて冷静になれた。

10話

井草達が教会の地下に突入した頃には、戦局はほぼ決していた。

はぐれ悪魔祓いは殆どが討ち取られるか戦意を喪失している。まともに戦う体制をとっているのは、ドーナシック達と同じイーツだけだ。

そして、レイナーレの方は顔面を押さえてうずくまっていた。

「ありえ……ない。あれは、トウワイス・クリテイカル龍の手じやなかったの……う？」

「ちよつとレイナーレのお姉さあん!? 俺つち一人に戦わせないでくださいよ! あんたそれでも至高の堕天使とかほざいてたのお!？」

海賊を思わせるイーツに文句を言われるが、レイナーレは聞こえていない。

そして、其れをなしたと思われるイツセーはアジアを拘束具から解放していた。

「部長! 井草さん!」

イツセーが真つ先に気づき、歓喜の声を上げる。

それに釣られてリアス達の姿を見て、レイナーレは絶望の表情すら浮かべ始める。

「そんな……っ! これはじゃあ、もうどうしようも!」

「ああない。こうなつたらもう俺の判断で死んでもらう」

流石にこれは看過できない。井草はそう判断すると、冷徹な結論を下す。

そして、戦意を喪失している悪魔祓い達に鋭い視線を向ける。

「首謀者以外は投降を受け入れる。だが、これが最後通告だ」

その睨みに、はぐれ悪魔祓い達は武器を下ろして両手を上げる。

この状況は、既にレイナレにとって詰んでいる。

何故か二人の悪魔祓いは戦闘態勢を取っているが、しかし何故か海賊風のイーツと敵対している状態なので、とりあえずスルーした。

というより、こちらに敵意を剥けない以上、敵対する理由もない。

「と、とりあえずこの男の無力化も頼むのです！」

茶髪の方が即座に応援を要請する。

一瞬躊躇の表情を浮かべるリアスだが、然し警戒心はイーツに向いている。

イーツの脅威は嫌というほど理解した。そのイーツを野放しにする事は、冥界にとつても不利益になる可能性がある。

そもそもレイナレの側に立っている時点で敵だ。情報を聞き出す必要があるから殺すのは避けたいが、しかし殺さずという余裕もないだろう。

ゆえに、リアスも井草も即座に殺す気で攻撃を叩き込み――

「おおっと！　そうはいかねえな」

舞い降りた新たなイーツに、攻撃を弾き飛ばされた。

そのイーツは、例えて言うならば人型の蟻だった。

更に厄介なのは、ドーナシーク達に変化したイーツよりも、遥かに強大な力を持っている事がそれで分かったからだ。

ドーナシーク達が変化したイーツは、井草やりアスの最大出力の一撃ならば滅ぼす事が出来た。すなわち、上級クラスと戦う事は出来るが、決して圧倒的な差が開いているわけではない。殺す事は出来た。

だが、その二人が同時に叩き込んだ最大出力の攻撃を、そのイーツは防いだのだ。

それも防護障壁を張ったとかそういうのではなく、素の耐久力でだ。

明らかに、今までのイーツとはレベルが違う。

その戦慄を感じ取ったのか、そのイーツは嘲笑いの感情を浮かべながらも、手を広げて抵抗の意志に待ったをかける。

「安心しろよ。俺はこのレアケースを回収したいだけだ。気が合いそうだしな」

そう言いながら、蟻のイーツーアントイーツはへたり込んだレイナーレを抱え上げる。

片手で抱え上げてはいたが、乱暴にはない。

それなりに気を使っているとすぐに分かる。ただのレアケースというサンプルにする扱いではない。それ相応にレイナーレを買っていなければいけないだろう。

つまり、このレイナーレを評価するような性根だということがすぐにわかった。

何の罪もない……わけではないとはいえ、下手な不良よりはよほど善良な少年を、悪質な方法で辱めた挙句、殺した事を娯楽として勝たれる性根の持ち主を丁重に扱う。改心する事を信じる聖人君子か、同類として親近感を抱く手合いとしか考えられない。

そして、おそらく前者ではない。

「ふざけんなー！ 確かに一発ぶん殴ったけど、そんな程度で気がすむと思ってるんじゃないぞ!!」

イツセーが、顔を真っ赤にして起こりながら拳を突き付ける。

なにせイツセーはレイナーレに一度殺されている。理由こそ理解の余地がないではないが、殺すまでの過程においてレイナーレに弁明の余地はない。

イツセーが怒るのも当たり前だ。

「それにアーシアまで殺そうとしやがった！ そのこのニングとかリムとかいう人達がいなければ、どうなってたかー」

「うるせえなあ、神器を使いこなす才能もねえ下等人種が」

心底うざそうに、アントイーツはイツセーの言葉を遮る。

「こつちだつててめえら全員殺してからずらかりてえが、今ルシファーに睨まれる訳にもいかねえんだよ。……心配しなくても、リベンジマッチの機会は用意してやるからよ」

そう吐き捨てると同時に、禍々しい霧があたりを包み込む。

「……じゃあな井草・ダウン・フォル！ 出来りやあてめえも連れて帰りてえが、今回は特別に勘弁してやるぜ！ 知らねえ仲じゃねえしな!!」

そんな、特大級の置き土産を残して。

霧が晴れた時、そこにアントイツもレイナーレも、そして海賊の姿をしたイツもいなかった。

残りは全員残っている。どうやら見捨てられたのだろう。

そして、状況は大きく変わる。

「井草あ！ 無事い!?!」

翼を広げて、ピスが慌てて舞い降りた。

その頭上では十人以上の墮天使が飛んでおり、辺りを睥睨している。そしてそれをリアス達が認識する頃には、ピスは井草を抱きしめていた。

「……無事で良かったあ」

「義姉さん!?! ちよ、人が見てる!! 俺なんか抱きしめたらまずいつて!!」

慌てる井草を無視して、ピスはリアスを見ると勢いよく頭を下げた。

「ありがとう! 井草のフォローまでしてくれたみたいでえ!!」

「い、いえ。……むしろ彼に助けられたようなものだわ」

ここで正直に言う事が出来るのは、美徳だろう。

呆気にと取られてつい言ってしまっただけな可能性もあるが、それがリアスの本質の一部だという事だ。

それに微笑を浮かべ、ピスは上を向いて声を上げた。

「悪いけどお! 彼らの捕縛をお願いするわあ!!」

そう言われ、墮天使達ははぐれ悪魔祓いの捕縛を開始する。

それが行われている間に、ピスはアジアを抱き寄せるイツセーを見つけると、駆け寄った。

「あなた達がイツセーとアジアあ?」

「は、は、は」

少々身をこわばらせながら、二人はそう答えた。

なにせ墮天使には殺されたり殺されかけたりしたばかりだ。いきなり墮天使に声を掛けられれば、緊張もする。

如何にイツセーが井草をよく知っているから、墮天使が悪人だけではないと知っていてもだ。これまで関わってきた墮天使の大半が敵では警戒もするだろう。

それを分かっているからか、ピスは一定の距離を保つ。

そして、そのうえで頭を下げた。

「このたびはあ。私達神の子を見張るものの不手際でえ、余計な迷惑をかけたわあ。ごめんなさいねえ」

それにあっけにとられるイツセーに、更に声をかける者もいる。

「アーシアさんに関しては、私達からも謝罪するのです」

ニングはそういうと、同じく頭を下げる。

「こちらにとつて都合が悪いとはいえ、追放した事についてはプルガトリオ機関の不手際なのです。本来ならこちらで保護するはずだったのですが――」

「元々プルガトリオ機関、教会じゃ鼻つまみものなんで、こういう事がありやがるんでさあ」

と、更にリムもそう繋げる。

「て、ってというかプルガトリオ機関ってなに？」

イツセーとしてはまずそれが知りたい。

まったく聞いた事がない組織だ。おそらく悪魔や墮天使と同じ、世界の裏側の組織なのだろう。それはまだ分かる。

だが、全面的な味方と判断するのも危険な気がする。

イツセーがその疑問を口にする、井草がぼんと手を打った。

「……プルガトリオ機関って、確か義姉さんが揉めてなかったっけ？」

「えええ。前にヤーロウという人と一戦交えたわねえ」

何か微妙そうな表情をするピスの言葉に、ニングとリムは目を見開いた。

「ヤーロウさんと戦って撤退させたのですか!？」

「マジですかい。そりゃ激やばですね」

「あの、だからプルガトリオ機関ってなに!？」

イツセーの渾身のツツコミが響き渡った。

「プルガトリオ機関ってのは、教会の暗部なのです」

ニングはそう言うと、アーシアを指さす。

「アーシアさんのように、教会にとつて不都合だけど信仰心はある人物などを引き取って、信仰の妨げになるものとぶつける事を目的とした機関なのですよ」

さらりとえげつない事を言ってくる。

そして、ニングは更に続けた。

「それで、アーシアさん。悪魔の保護を受けたみたいなのですが、逃げたいのですか？」
「え？」

よく分からないといった表情を浮かべるアーシアに、更にニングは告げる。

「……悪魔や堕天使の庇護下にいるのが不本意なら、私達は命を懸けてプルガトリオ機関に匿うのです。もとよりその為の組織なのですから」

その言葉に、その場で緊張感が走る。

この戦いは思わぬ呉越同舟ならぬ魏呉蜀同盟とでもいうべきものになったが、本来三
大勢力は敵同士だ。

レイナーレー一派の暴走が原因でアーシアの命の危機が生まれ、その結果として三勢力
が手を組む形になったが、本来これはあり得ない事である。

つまり、ここでアーシアの返答次第では三つ巴の殺し合いになり替えない。

「……一応言うと、こっちもやばい事態になったんで増援を呼んでやがるので、亡命はで
きまずぜ？」

と、リムが補足説明をした。

それに対し、アーシアは――

「あの、イツセーさん？」

まずイツセーに声をかけた。

その流れにこの場の全員の視線がイツセーに集まり、イツセーは思わずたじろいだ。

「な、何かな、アーシア？」

「イツセーさんは、どこに行くんですか？」

その言葉に、イツセーは――

「いや、俺はリアス部長の下僕悪魔だから、悪魔の味方だけごとく。」

ちよつと戸惑いながらも、迷いなく答えた。

この状況下であまり躊躇しなかった当たり、この男は割と大物のようだ。

そして、その言葉を聞いてアーシアは決意した表情になると、ニングに顔を向けた。

「……私は、イツセーさんのところに残ります」

その言葉は、状況を動かすのに十分だろう。

プルガトリオ機関としては、自分達のところを迎え入れたいというのは善意だけでは
ないだろう。

暗部組織というのはそういう者だ。自分達の戦力として有効活用したいだろうし、悪
魔に彼女を与える事も本意ではない。

悪魔や墮天使は、本来癒す事が出来ない種族なのだ。それを癒す事が出来るアーシア

の神器は、非常に悪魔側に渡ってはいけないものである。

ゆえに、各勢力で緊張感が漂い――

「――なら私達は逃げるのです」

――そのニングの言葉が、緊張感を吹き飛ばした。

「え、ちよ、ニング?」

「リムさん。この状況下は不利なのです。穏健派のサーゼクス・ルシファーならたぶん悪用しないのですから、逃げるべきなのです」

そういつて、戸惑うリムを引つ張りながらニングは階段の方に向かう。

それを見逃すべきかどうかどうしたものかという視線がそれぞれで集まる。

このまま暗部組織を逃がすのもあれな気がするが、余計な殺し合いをする気にもなれないといった感じだった。

「……イツセー。どうするんだい?」

井草はとりあえずイツセーにそう聞いてみた。

本当に何となくだったのが、イツセーは周りを見渡しながら、とりあえず応えようとする。

「あ、アーシアが死ななくて済んだのは二人のおかげだし、俺は見逃してあげたいかな――って思うけど……」

「じゃ、借りは返しとかないとなね」

井草はそう決めると、ピスに苦笑した。

「元々こつちの不手際に巻き込んだんだし、これぐらいは良いんじゃないかな、義姉さん」

「まああ、井草がそう言うならあ。……そつちはあ?」

ピスは視線をリアスに向ける。

自分達はとりあえず手は出さないが、あつちが手を出すかどうかは未知数だった。

「……小猫と祐斗はどう思うの?」

其の主の言葉に、小猫は無表情で、祐斗は不機嫌そうに――

「……一応、借りは返すべきかと」

「教会の連中を見逃すのは嫌ですが、だからこそ卑劣な方法はとりたくありません」

そう答える。

その言葉に、リアスもため息をつきながら苦笑した。

「いいわ。ソーナには私から言っておくから、さっさと帰りなさい」

「言質はとつたのです。じゃ、帰るのですよ、リム」

「ああ。上から叱責されるのが目に見えやがりますが、これは墮天使と悪魔を同時に敵に回すから無理っばいすなあ」

苦笑するニングにため息をつきながらも、リムも自分の意志で歩き始めた。そして、戦いは一応終わった。

のちに、この戦いは三大勢力和平の一つの予兆として語られる。

また、この戦いは全ての始まりとしても語られる。

三大勢力と各神話体系。その彼らを蹂躪しようとする、禍の団との戦いのちに「イーツ戦役」と呼ばれる戦いの、その前哨戦でもあったからだ。

月光校庭のエクスカリバー

1話

墮天使とは、異形社会においても研究関係で一步先を行く勢力だ。

こと神器の研究においては他の勢力の追隨を許さない。神器の生みの親である聖書の神が有する天界及び教会ですら足下に及ばない。それほどまでのアドバンテージを持つている。

既に悪影響があるとはいえ、疑似的な神器の禁手化を行なえるに至った。人工的な神器の開発も、この調子でいけば数年以内に可能とするだろう。各勢力で神滅具を複数持つている勢力もそうはいない。

その墮天使をもつてしても、イーツの存在は手探りの段階だった。

そして最悪な事に、急いで解明してそれを全勢力に公開する必要すらある。

突然現れて強大な力を発揮するイーツ。しかも、人間世界で暴れている手合いより強大な存在が、よりにもよって墮天使側から出ている。それも、一気に六人もだ。

今のところは悪魔と教会にしか知られていない。というより、あれがイーツだと判断

できる者も悪魔側ぐらいだろう。

だが、どこの勢力だつてスパイや買収した売国奴の一人や二人は用意しているはずだ。何時気づかれるか分からない。

イーツの存在は異形達にとつても目の上のたん瘤。それを生み出した勢力は間違はなく全勢力から叩かれる。そして、レイナーレ達に変化したイーツは明らかに他のイーツを上回る性能を發揮していた。

まず間違いなく、技術力に長けた墮天使勢力が生み出したものと勘違いする勢力は出てくるだろう。

ゆえに対策は必要不可欠。速やかに行動を開始しなくてはならない。

そんな中、希望の星を研究するのは、当然の流れだった。

眼を閉じて、何の抵抗もなく井草は検査装置の中に納まっている。

それを困った表情で見て、アザゼルは困り顔になった。

「……………どういふことか」

「何がわかったんですかあ？」

井草が心配で分かる知識もないのについてきたピスに、アザゼルはどういえば分かり易く言えるのか考える。

そして、すぐに思い至った。

「ピス。テラフォ○マ○ズのM○手術は知ってるか？」

「ええ。前にアニメを見たけれどお？」

「今のアイツは、それに近い」

そう言いながら、アザゼルは分かり易くモニターに状況を移す。

「アイツがイーツ化した事で活性化したんだろう。アイツの体内に、俺達が観測した事のないエネルギー体が確認された。……おそらく、それがイーツ化の種だ」

「……まさかあ」

ピスの脳裏に、井草を助けたある日のことが移る。

あの時、井草と探めていた男はボディブローを叩き込んだ後、怪訝な表情をしていた。ハーフ上級墮天使である井草を、ただの一般人が一方的にボコボコにできるはずがない。また、事情を聴き出すとアザゼルも義憤にかられる展開だった。

ゆえに監視しようとしたその後、あの男は彼女達とともに行方不明になった。

念の為の警戒として、自分たちも神の子を見張るものの施設に隠れてみたら、ある意

味で大当たりだった。

その後二年間ほどほとぼりが冷めるまで隠れてから、井草自身が「自分に相応しい捨て駒同然の仕事」を求めてきた為、アザゼルと相談してリアスの監視役につけることにした。

彼女の眷属が心配だった事もある。その対象である朱乃は、自分の墮天使の血を心底毛嫌いしているので、自分達とのパイプ役になる事はあり得ない。なので父親であるバラキエルもなんだかんだで心配していた。

かといって監視役など送り込んだら問題が発生する。三大勢力は今もって冷戦状態で小競り合いも勃発しているのだ。

そういう意味では、井草は適任だった。

ハーフとは言え上級墮天使であるがゆえに、ピスと併用すれば監視役として相応の戦闘能力を発揮する。加えてその来歴まで詳しく説明すれば、善良極まりないサーゼクスなら同情票も入る。朱乃の件もあるので、万が一のトラブルを心配したバラキエルは緊急用の保険をかけておきたかった。そこに関してもお人好しで兄バカのサーゼクスなら理解を示すだろう。

本人はいざという時の捨て駒のつもりだが、その実ほぼ確実にピスという戦力による警護をつけることができる。そしてこちらから手を出す気はないので攻撃される可能

性も低い。そういう、危険に見せかけて安心な任務だった。

……それが、まさかこんなことで躓くとは。

井草は非常に重要な検体だ。

イーツの警戒度は大幅に向上している。元の段階でも中級レベルを超える戦闘能力を発動しているうえに、レイナーレの部下が変化した時には、若手といえど上級クラスと一対一でまともに渡り合った。

つまり、今まで出てきたイーツは弱いタイプだということだ。

そして墮天使達が変わ化したという事は、必然的にこれまでのイーツも素体があると言
う事になる。

……もともと殺人をすることが前提の軍隊等が撃破していたから問題度は薄いだろ
うが、この事実が知られれば世論は割と揺れるだろう。

とにもかくにもイーツについて急激な変化が生まれているのだ。しかも墮天使側か
ら出てきた以上、絶対に勘違いする輩は出てくる。

なので少しでも情報が欲しい。しかしその検体の確保は難しい。

……はつきり言って、井草の存在は非常に貴重だった。

問題は、それを井草自身が知ってしまったということだ。

実験体にされる事を抵抗するとか言う心配はない。むしろ、その逆が心配なのだ。

「あの子、解剖とか志願しないかしらあ」

「俺もそれが心配だな」

二人してため息をつく他ない。

井草・ダウンフォールは自己嫌悪の塊だ。病的なまでに自分が大嫌いだ。

事情を知っているピスやアザゼルからしても、そこが頑なになっている井草の扱いは大変だ。本人がそこで自己完結しているから、中々改善してくれない。

幸い墮天使の寿命は長いので、それを利用してゆつくりと治していくつもりだった。

ところがこれだ。墮天使側の非常事態に対して、自分が貴重な切り札になりかねない事を知ってしまった。

こうなれば危険だ。井草は自己犠牲精神を全力で発揮するだろう。

絶対に、解剖してくれと言ってくるはずだ。その辺は時間の問題だともいえる。

「……どうする？ 親代わりのお前の意見が効きたい」

「何か別のことに意識を向けさせるべきですねえ。例えば、グレモリーとわざと揉めるとかあ？」

確かにそれは効果的だ。

井草は赤龍帝のことを友人として見ている。ゆえにそちらに意識を向けさせれば、先ずはそっちの解決を優先するだろう。

しかしこの状況下で悪魔と喧嘩するわけにもいかない。

ただでさえ異形社会をピリピリさせるイーツ絡みで大変なのだ。ここで攻撃される大義名分を増やすわけにはいかない。

魔王の妹と揉めるなど論外だ。そうなれば、四大魔王はともかく大王派が黙っていない。

……三大勢力での戦争再発など自殺行為だ。人間達魔まで巻き込んで、自分達は滅びるだろう。

できることなら和平に持っていきたいのが本音なのだが、さてどうしたものか。

「……ああ。教会の連中にもイーツ使いが生まれてくれねえだろうか」

「パワーバランス的にはともかく、保身的には最高ですねえ」

二人してそんなことを希望的観測で思ったその時だった。

「総督！ 大変です!!」

勢いよく、配下の墮天使が飛び込んできた。

その顔色は悪く、明らかに問題が発生している事が分かる。

「どうした！ まさかもう他の勢力が仕掛けてきたのか!？」

最悪の想像が頭に浮かぶ。

教会も魔王も、墮天使関係者から大量にイーツに変身する者達が出てきた事は知られ

ている。スパイが他の勢力に情報を漏らしている可能性も十分ある。

そして、其れを知った勢力が勘違いして殴り込みをかけた可能性は普通にあった。

このまま戦争再開かと思ひ、アザゼルは体をこわばらせー

「コカビエル様が失踪しました！ あげく、教会では上位墮天使によつて聖剣エクスカリバーが四振りも強奪されたという情報が出ています!!」

「あの馬鹿野郎があああああ!!」

アザゼルが絶叫したのも、当たり前前である。

恐ろしいほどに全てが繋がってしまった。無論誤解で。

墮天使統括組織、神の子を見張るもののトップ陣営は、殆どがハト派である。

戦争で痛い目を見て懲りた者が大半だし、少なくとも今の時代ではもめ事を起こす気もない。神器など興味を引くものも多いから、その研究に集中したい。なによりこのまま戦争をしても滅びるだけだと思つている。

サタナエルという幹部が暴走して離反した時もあったが、それは神器研究の為だ。研

究の為に世界を混乱に陥れるあほな事をやらかしたが、それはあくまで研究の為に
る。

そんな中、戦争再開を望むタカ派の中で、唯一運営陣の存在がいる。
それがコカビエルだ。

武闘派なだけあり最上級堕天使の中でも強い部類。迎え入れた神器使いを含めても、
上位十指に名を連ねる奴だ。しかも性格も悪い部類である。

そんなコカビエルが消えたと思ったところに、エクスカリバーだ強奪されるという非
常事態。

エクスカリバーは教会の重要戦力にしてたからである。そんなものを奪われたとな
れば、聖書の教えを現状運営しているセラフはともかく、人間側の代表である枢機卿が
黙っていない。

しかもコカビエルの足取りを辿ってみれば、どうも駒王町近辺に潜伏している可能性
が高いと来た。

教会からも、聖剣使いという腕利きの悪魔祓いが駒王町に向かっている。おそらくエ
クスカリバーがそこにあると踏んでいるのだろう。

堕天使に強奪されたエクスカリバーを追って、魔王の妹がいる土地に戦士達が来訪す
る。

そして墮天使の中でもタカ派筆頭であるコカビエルが行方不明になったこの時に起きた事態。

……間違いなく繋がっている。

「あの馬鹿野郎があああああ!!!」

アザゼルがそう絶叫するのが最近の口癖になったのは当然だともいえる。

ただでさえイーツの存在で誤解されかねないこの事態で墮天使はヤバイ。そのうえで魔王の妹とエクスカリバーの元凶がコカビエルだとするならば――

「何かあったら戦争再開だ。それも、天使と悪魔が手を取り合って墮天使に仕掛けかねない」

そうアザゼルは結論した。

最悪な事に、コカビエルと共に行方不明になった物の中に、聖剣使いの人工的な生成を研究していたバルパー・ガリレイという研究者が含まれている。

この男も危険人物だ。何せ、実験の為に何十人もの子供を殺したという。しかも、殺す必要がない事が分かっているのにも関わらずだ。止めにその成果はきちんと出ており、エクスカリバー使いを生産する事は十分可能となっている。

もうこれは黒でしかない。すぐにでも墮天使側が動かないと、本当に墮天使は集中砲火を喰らって滅ぶ。

だがしかし、誰を動かすかも問題だ。

もしココビエルがエクスカリバーの使い手になっていたら、それを止められるのはごく僅かだ。

アザゼルは無理だ。色々状況があれなので、総督は残っている必要がある。

しかし残りでエクスカリバーをもったココビエルをどうにかできそうなものが少ない。

神滅具使い二名も墮天使幹部も全員別件があった。其れも、割と重要度が高い案件だ。

神滅具使いの一人である白龍皇が一番早く終わりそうだが、しかしそれでも時間がかかる。

それまでに魔王の妹であるリアス・グレモリーとソーナ・シトリーがエクスカリバーとココビエルに殺されたら……。

なんとしてでも誰か戦力を派遣する必要があった。

「つーわけで、リアスと親しいお前が言って協力体制を取ってこい」

「いいんですか？ 俺を使ってイーツを調べた方がー」

「其れよりこつちの方が急務だ」

井草の反論を、アザゼルは遮った。

ある意味でこれは好機でもあった。

自己否定と自己嫌悪から自己犠牲精神の強い井草は、自分の親しいものの為ならば平然と命を賭けることができる。

自分の価値が低いから、天秤に乗せた時点ですぐに傾くのだ。これを利用しない手はない。

実際すでに心配が顔に出ている。これなら説得も簡単だ。

それに、これは別の意味でも好機である。

「井草にピス。これはリスクもでかいがリターンもでかい」

「具体的にはあ？」

「上手く活かせば、ミカエルやサーゼクスと直接会談を起せるはずだ」

ピスに応えるアザゼルの狙いは明白だった。

他の勢力に攻め込まれないようにする為の、三大勢力の和平。其れこそがアザゼルの狙いの一つでもある。

そもそも三大勢力は何処もがたがたなのだ。

冥界では本来の四大魔王は戦死し、その後内乱もあって大打撃。サーゼクス達のカリスマ性と戦闘能力、および転生悪魔制度による精鋭の投入で持ち堪えているが、しかしやはりダメージは大きい。

天使・教会側も大きなダメージだ。というより、ある意味であそこが一番大きな打撃を負っている。前提条件が崩壊しているので、余計なトラブルは起こしたくないのがセラフの本命のはずだ。この数百年で20億の信徒がいるが、それもあの地雷が爆発すれば逆に大混乱の根源になる。

墮天使側もタカ派はほぼ全滅だ。人間の神器使いを集めているのも本命は研究。コカビエルさえ何とかできれば、首脳陣は和平で統一できる。

戦争再開の危険性がある今回の事態だが、これを墮天使側が解決に協力すれば逆の可能性も出る。

墮天使が何らかの形でコカビエルをどうにかする事で、自浄作用を示す事ができる。またこれだけの大騒ぎなら、ある程度の情報開示の機会を作る事もできるだろう。とどめにサーゼクスたち新魔王は、揃いも揃って戦争否定派だ。天界も、戦争をしたくてもできない事を首脳陣は理解しているはず。

上手くすれば、三大勢力で和平を結ぶ事ができる。最悪でも、サーゼクス達と和平を結ぶ事で冥界だけは纏められる。

墮天使側で高性能なイーツ変身者が出てきてるこの非常時において、このチャンスは好機でもあった。

極めてハイリスクハイリターン。しかしコカビエルをこのままにすれば戦争再開は

ほぼ確定。

やる他ない。

「とても危険だが重要な任務だ。しかも、これができるのはリアス・グレモリーの眷属である赤龍帝と懇意なお前だけだ」

そう説き伏せ、アザゼルは指示を出す。

「……駒王町の魔王血族二人と協力して、聖剣奪取事件の真相究明及びココビエルの調査を行なえ。……これは最重要任務だ」

このチャンスを、最大限に利用して、最大の成果を上げる。

割と崖っぷちな堕天使勢力の命運がかかった重要任務で、井草の人体実験志願を阻止する事もできる。

一石二鳥の大博打が、今ここで行われる事になった。

2話

そして、移動中の車内で井草はため息をつく。

例のごとくピスとは別行動だ。

井草はイツセーとの付き合いを利用して、悪魔側との協調体制をとる。

其の間にピスは墮天使側からアプローチを行い、可能ならばコカビエルを誘い出す。

どうもコカビエルは他のタカ派にも誘いをかけていたらしく、百人近い数の墮天使が行方をくらましていた。

中には上級墮天使も含まれている。それも、全員タカ派の戦争再開派だ。

さらにはぐれ悪魔祓いもかなりの数が行方不明。もとより牽制のために迎え入れただけで、その大半は殺しが大好きな外道なのでまともな幹部は嫌っていた。

と、いうわけでコカビエルなどの一部を除いて、問題なく殺していいと来たものだ。「俺なんかに殺されるのは、彼らに悪いと思うんだけどなあ」

はあと、少しため息をついた。

井草によって殺されるというのは屈辱だろう。井草は心からそう思っている。

だが、これも仕事だ。其れも重要任務で、今後の墮天使の未来がかかっている。

それにアザゼルの望み通りの結果になれば、悪魔になったイツセーとも普通に付き合
いが持てるだろう。

なんだかんだでいい少年で、井草もスケベすぎるところに困ることはあれど、心から
嫌ってはいない。むしろ好感が持てる。

彼が道を踏み外さないようにすることが、道を踏み外した自分にできることだ。そう
思っている。

「さて、頑張らないとね」

井草はそう決意すると、電話をつなぐ。

今回はリアスではなくソーナの方につなぐべきだと判断してそうする。

ソーナの方が計算高い判断ができる。こういう時の交渉なら彼女の方が優先順位は
高いだろう。

それに、何でもリアスは緊急の用事があるらしいとのメールが来た。墮天使に知られ
たくないのか、商才は機密とまで言われている。

なので、選択肢は一つだった。

『何か御用ですか、井草・ダウンフォールさん』

「生徒会長。うちのトップのアザゼル総督から、緊急の書状がある。魔王様に取り次い
でもらいたい」

速攻で話を本番に持っていく。

今この状態で嫌味を聞いている余裕はない。

自分ごときが相手に強引に話を持っていくのは失礼だとは思う。しかし、ことは一刻を争うのだ。

『なにがあつたのですか?』

即座に状況が切迫していると理解してくれたのか、ソーナは話を促す。

そして、井草は現状神の子を見張るものが確信している内容を説明した。

なにせことは彼女たちの命にもかかわるのだ。防衛のためにも、ソーナたちも動いてくれるだろう。

しかし――

『……そんなことになれば、怒り狂つたお姉さまが戦争を起こしかねませんね』

「冗談だよね?」

本気でそう願いたい。しっかりとしろ外交担当。

などと思つたが、しかしソーナの声色は割と心配の色だった。

『……そういうことなら、リアスを経由してサーゼクス様に伝えた方がいいでしょう。それに、そちらの方が話がまとまりやすいと思えますよ?』

「なんでかな?」

確かに、共闘の件があるからそちらの方が話はたやすいだろうとは思うのだが――
『そろそろ、教会からの使者とリアスが会谈を行いますので』

――どうやら、状況は割と切迫しているようだった。

そして一時間ぐらいいしたころ、まさに爆発寸前の状況になっていた。

まさにそのタイミングで部屋に入った井草は、どうしたもんかと本気で考えた。

「……何事？」

「よ、よりにもよってこんな時に――」

井草は冷や汗をたらりと流し、リアスが顔を引きつらせる。

そして、イツセーとにらみ合っていた女悪魔祓いは殺気を漏らした。

「馬脚を現したな、リアス・グレモリー！ 墮天使が気安く部屋に入ってくるということ
は、悪魔と墮天使の内通は明白だ!!」

もはや語るまでもないと、青い髪に緑のメッシュを入れた少女が、聖剣らしき剣を振り上げ――

「ストップしやがれです」

—その後頭部に光の銃突きつけ、リム・プルガトリオがため息をついた。

「おや、あの時の」

「久しぶりっすな」

と、井草の反応に片手をあげてリムがあいさつする。

「ちよ、ちよつとニングさん？　なんで私に魔剣を突き付けるの？」

「釣られて暴走しそうだったのです」

と、こちら栗毛の悪魔祓いに魔剣を突き付けながら、ニングがため息まじりにそういった。

そして、井草を見つけるとペこりと頭を下げる。

「どうも井草さん。お久しぶりなのです」

「やあニングちゃん。……で、どういうことかなリアスちゃん？」

「……どうもこうもないわよ。私も貴方に話を聞きたいわ」

ジト目で井草をにらみつけるリアスだが、さらに続ける前に井草が動く。

手に持っていた一枚の書状を、リアスに見せ、即座に話す。

「墮天使総督アザゼルから、魔王サーゼクス・ルシファーに緊急連絡があつてね。君を経由して取り次いでほしい」

「……やはり貴様ら、我らを倒すために内通をするつもり―」

「因みに枢機卿にも使者は送られてるからね!!」

先走りそうになった悪魔祓いの言葉をさえぎって、井草はそういった。

そしてとりあえず手っ取り早く、わかっている事情を説明する。

さらにリアスたちの説明も聞くと、どうやら大体こちらの想定通りのようだ。

聖剣エクスカリバーを奪ったのはコカビエル。そして逃げ込んだのはこの駒王町。そして彼女たちはその追撃のための悪魔祓い。

で、青髪のゼノヴィアと栗毛の紫藤イリナは、現地で活動していたことのあるニングとリムをサポートメンバーとしてこの駒王町に派遣された。

ニングとリムはアーシアの件を利用して共闘することも考えていたようだが、ゼノヴィアとイリナはそれに反対。

その上、ゼノヴィアはアーシアを介錯しようとして、イツセーと衝突。

それになぜか祐斗が便乗して、爆発寸前になったところで井草が入ってきたらしい。

「……ああもう。いろいろこじれてるなあ」

心底ため息をついた。

で、とりあえず一つずつ解決しよう。

まずはゼノヴィアの暴走を押さえるべきだ。

「ゼノヴィアちゃんだっけ？ ……君は戦争を起こすつもりかい？」

「なんだと？」

「人様の縄張りで暴れるのを黙ってみてろと言ったうえ、挙句にその眷属を殺そうだなんて。そのまま殺されても文句は言えないだろうに」

信仰心が強いのも困りものだ。

人というものは、正義が自分にあると確信すると何でもできる生き物だ。

特に教会はコンキスタドルなどで虐殺を繰り返した前科がある。そのあたりの反省をしてもらいたいものだが、教義的に滅ぼす対象である悪魔が相手ではこうもなるということか。

正しいのだから黙って従え。そういう盲目的な信仰心が見え隠れしている。

で、これについてはとりあえずおいておいてイツセーだ。

「イツセー君。この子たちはあくまで善意による介錯で動いたから、とりあえずスルーで」

「いや、俺は言いたいことは言ったからもういいけど……」

どうやら鬱憤をこのタイミングで晴らしただけらしい。

おおかた、リアスが止めに入ると判断しての行動だろう。なんだかんだでイツセーは意外と頭が回るタイプだ。自分が怒られて多少の罰をうければ収まると思っただけらしい。

少々考えなしかもしれないが、良くも悪くも宗教関係で緩い日本人らしい発想だ。こればかりは文化の違いと考えるべきだろう。

そして、最後の問題は――

「祐斗くん。悪いんだけど、ちよつと押さえてくれるかな？」

「無理だね。倒したくて倒したくてたまらないエクスカリバーを切るチャンスつてだけでも大変なのに、さらに仲間を殺すとまで言われたのなら我慢できない」

「何があつたのかわからないが、しかしとりあえず事情を聴くべきだろう。」

「リアスちゃん。なんで祐斗くんはエクスカリバーに殺気立ってるのさ」

「僕は彼女達聖剣使いの失敗作だからだよ」

リアスがためらっている間に、祐斗自身がそう答える。

「捨て子だったぼくたちは、教会の連中にいいように騙されて実験体にされ、最後は失敗作だからと毒殺された。……すべてはエクスカリバーのせいだね!!」

そして魔剣の切っ先を、ゼノヴィアに向けた。

「その後生まれれた成功作が、エクスカリバーをもつて、仲間を殺すといった。……これで我慢が効くと思うかい？」

「あ、その元凶はコカビエルと一緒にいるよ？」

ものすごい話を進めるチャンスだった。

3 話

その後、一時間かかって何とか話をまとめる事が出来た。

「…………話をまとめるわよ?」

一応この場で一番偉い立場のリアスが、全員の顔を見渡してからまとめる。

「つまり、今この駒王町には聖剣計画で子供達を殺したバルパーがコカビエルと一緒に潜んでいて、それを追いかけてその後の研究で生まれた成功作が来て、失敗作として殺された祐斗達という…………出来すぎね」

「世の中、意外とそんなものだよ」

とは言え合縁奇縁にもほどがある。

祐斗が聖剣計画の失敗作だという事にも驚きだが、その成功作が今回の揉め事に関わっているのも驚きだ。

しかも、元凶のコカビエルは虐殺を行ったバルパーと組んでいる可能性が非常に高い。

エクスカリバーの名に泥を塗った聖剣計画の汚点が、今この街で清算されようとして
いる。

「……リアスちゃん。そしてリムちゃんとニングちゃん。提案がある」

「何なのですか？」

「一応聞かろう」

ニングもリアスも、大体言いたい事は予想できているようだ。

もとより彼女達は、アーシアを助ける為に井草達墮天使側が尽力した事を知っている。

その最前線で動いた彼が何を言いたいか、すぐに分かった。

「共同戦線だ。僕達墮天使は暴走したコカビエルを処罰したい。リアスちゃん達悪魔側は縄張りを守るのは当然。そして教会としてもエクスカリバーの悪用は断固阻止。……エクスカリバーを悪用して駒王町で暴れようとしているコカビエルを倒すという、利害が一致してる」

そう。この状況は渡りに船だ。

コカビエルはおそらく、教会の至宝を墮天使の幹部が使つて魔王の妹を殺すという真似を行うつもりだ。

それで各勢力のタカ派を動かし、三大勢力の戦争を再開させる。それがコカビエルの

狙いだと、上層部は推測している。

だから、その状況を逆手に取る。

アザゼルはこれを解決する事で、悪魔と天界に会談の機会を作り、そこで和平を提案するつもりだ。

「……どの勢力にとつても今のコカビエルは敵だ。なら、ここでいがみ合うよりまず共通の敵を潰すべきだ」

幸か不幸か、教会からのコカビエル討伐部隊と悪魔の管轄者がここにいる。

井草自身が言った通り、利害は一致している。

「私は賛成なのです」

「こちらも同意見でやがります」

「私も構わないわ。二つだけ条件があるけど」

と、ニングもリムもリアスも賛成してくれた。

祐斗やゼノヴィアはかなり難色を示しているが、ここで反対すれば集中砲火を受ける事は間違いない。

だから、ここは何とかなるだろう。

「条件って何だい？」

井草はとりあえず話を進めようとする。

さつさとその条件を聞いて、変に拗れないうちに共同戦線を張っておきたい。

「……バルパー・ガリレイを捕縛出来たら、その始末は祐斗に任せてほしいわ。それ位はさせてあげたいの」

「ぶ、部長!？」

祐斗が逆に驚くほど、その提案は意外だった。

だが、リアスは微笑すら浮かべて、そんな祐斗を抱き寄せる。

「あの時のあなたの悔しそうな顔はよく覚えているわ。だから、それを晴らす機会を与えるのは主として当然よ」

「……人心掌握にも聞こえるが、まあ、それ位ならこちらはかまわない」

疑心暗鬼状態のゼノヴィアだが、しかし祐斗の来歴に思うところはあらしい。そこは反対しなかった。

井草としてもその程度なら問題ないだろう。最悪、自分が責任を取って処罰されればいいだけだ。

「罪もない子供達を巻き込んだ、教会の恥さらしだもの。それ位の仇討ちなら、主もお目こぼしくださるはずだわ」

「いや、聖書の神って処罰は自分が下すから報復は禁止とか言ってたっけ?」
涙を流して祈り迄始めるイリナに、井草はつい突っ込みを入れたくなる。

だがしかし、深入りすると嫌な予感がする。

というより聖書すら取り出したので、強引に話を元に戻した方がよさそうだ。

「もう一つは？」

その言葉に、リアスは少し罰が悪い表情を浮かべる。

「お兄さまにはつい最近迷惑をかけたばかりで心配させたくないの。出来れば自体が解決するまで、連絡は避けたいわ」

事情は分からないが、何かあったらしい。

顔が赤いところを見ると、かなり個人的な事情があるようだ。

出来る事なら配慮しておきたいが――

「出来ない事を無理にしようとして後で知らされるより、すぐにでも話して助けを求めた方がいいと思うよ？ 先達からの忠告だよ」

「……分かったわよ。後で連絡は入れておくわ」

井草の意見が素直に受け入れられるとは、井草自身思っていなかった。

しかしリアスは意外と素直に忠告を受け入れてくれた。これは意外だ。

とは言え、これは井草としても真面目な話だ。

魔王と真正面から渡り合う事も出来るだろうコカピエルが出て来ているのだ、後で知るよりすぐに助けを求められた方が、サーゼクス・ルシファーとしても精神衛生上都合

がいいだろう。

なにせ彼はルシファーと言っててもグレモリー家の出身。リアスの実の兄だ。しかもシスコンだという話は墮天使側でも耳にしている。

急に知って判断を誤られてもこちらが困る。戦争再開の危機でもあるのだから、ここは慎重に行つてほしかった。

「……ありがとうなのです、井草さん」

話がまとまった時、ニングが井草にそう頭を下げる。

井草としては自分達墮天使の都合もあつたので、正直ちよつと戸惑つた。

「私達は最初から共闘をするつもりだったので、ゼノヴィアさんとイリナさんは自分達だけで死んでも遂行するつもりだったので」

「ああ。殉教上等って感じだったもんね」

呆れ顔のニングに、井草は苦笑を浮かべて同情する。

悪魔祓いというのは中々厄介だ。

行けば天国逃げれば地獄の精神で言っているところがある。だから一定以上の信仰心の持ち主は、玉砕特攻をしかねない。しかも正義を定義する宗教の都合上、頭が固かつたり排他的なものも数多い。

むしろ、ニングやリムが柔軟な対応をしている事の方が驚きだ。

「私達はアーシアさんをリアスさんに預けた所為で、作戦指揮権が与えられなかったの
で推しきれなかったのです」

「その節はうちのレイナーレがご迷惑を!!」

元々自分達墮天使側の暴走が原因なので、その辺については謝る他ない。

しかし、それを見たニングはクスリと笑った。

何か変なことを言っただろうか。嘲笑の可能性もあるが、これだけ綺麗な笑顔でそんな感情が浮かぶとは思えない。

「どうかしたのかな?」

「いい、いえ。墮天使なのに井草さんは良い人だったので、驚いたのです」

なるほど。確かに墮天使に良いイメージをわく者は少ないだろう。

こと彼女は教会の出身だ。悪いイメージしかないのが普通だろう。

だが、実際は違う。

「割といい人が多いよ。俺なんか気に使ってくれる人だらけなんだ」

事実だ。

欲望に負けて墮天した存在ではあるが、しかし彼らは人間臭い。

問題児は数多い。性的に開放的な者も多い。ことアザゼルはカリスマ性はあるし統

治者としても中々有望だが、反面資金横領の常習犯だ。

だが、同時に善良な人が多すぎる。

「俺なんかが所属してるのが悪いぐらい、とっても良い人達だよ」

心からの自慢と共に、井草はそう断言する。

「墮天使が善良？ 正直よく分からないな」

「あ、それは同感。井草さんはともかく、レイナーレの奴が糞過ぎる」

ゼノヴィアとイツセーが、妙なところで共感した。

まあ、長年殺し合いをしているゼノヴィアは当然だ。イツセーも、墮天使だと知って触れた初めてのケースがレイナーレなのは最悪クラスのパターンだろう。

そういうことはよくあるものだ。第一印象はとても重要である。

だが――

「教会だってコンキスタドルとか応援してたじゃないか。悪魔だって、リアスちゃん
は善良筆頭クラスだけど下衆なのはかなり下衆だよ」

だからどっこいどっこいだと、暗にそう言ってみる。

「ほら、墮天使だって俺みたいな屑がいるんだから、その辺はきちんと考えような？」
そう。自分のようなものもいるのだ。

教会にも、悪魔にも、墮天使にも。駄目なものや下衆なものは一定数いる。

この場にいる唯一の墮天使側である自分も、その手の類だ。

そう言い切った井草の唇に、人差し指が押し付けられた。

「ダメなのです」

その持ち主であるニングが、困り顔でそう告げた。

「自分のことを卑下したらダメなのです。今この共闘ができたのは、井草さんのおかげなのですから」

そう、ニングは井草をたしなめた。

井草にしてみればいつものことだ。

ピスにしろアザゼルにしろイツセーにしろだ。もう少し自分を評価しろと言ってくる事など、もう飽きている。

そんな風に自分を評価してくれる人が多いのは嬉しいが、反面それが申し訳ない。

そんな価値のない自分なんかの為に、素晴らしい人達がそんな事を言ってしまう。とてもとてもしてはいけない事な気がする。

だが、暗部出身でよく分かってないところが多いニングの言葉は――

「まあ、その辺は誇ってもいいのかな」

――なんとなくだが、受け入れられた。

よく分かってない人物なのが大きいのだろう。

なにせ、相手は敵対勢力のしかも暗部だ。さつきは偏見について語っていたが、しか

し自分がないとは言い切れない。

少なくとも、敵対勢力の後ろ暗い組織に嫌なイメージぐらい沸いている。そういう勢力の出身だというのが、いい感じに受け入れる為のブレイキをかけてくれた。

だから、よく分からないニングが必ずしも良い人物だとは言い切れない。

だからこそ、ピスやアザゼルやイツセー達の言葉よりも、素直に受け止められた。

そしてお互いににこりと笑い――

「……っ」

なんか、もの凄く可愛かったので、少し顔が赤くなつた。

見れば、ニングの方も顔を赤くしている。

その瞬間、これはまずいという危機察知がされた。

「おんやあ？ ニングつたら墮天使にほだされるなんていけないでやがりま……いや、

スパイにできるからいいでげすな」

「ひゃ!! り、リムさん!! 私はそんなつもりじゃないのですよ!!」

「そうよね!! 墮天使にもいい人はいるかもだけど、今は滅さなきやいけない相手だも

の!!」

いや、今滅さないでほしい。とりあえずコカビエルをどうにかするまで待つてほしい。

というよりリムは後で怒りたい。余計な事を言つて混乱させないでほしい。

「何て失礼な！ 俺なんか惚れるなんてそんな失礼なことを身内に言つたら駄目だ！！」

「……赤龍帝。君は彼と親しいようだが、彼はいつもあなのか？」

「最近痛感してる。つていうか井草さん！ 彼女がいまだにできない俺の前で、何でそういうフラグ立てるんですか！！ ニコポなんて反則ですよ!？」

ゼノヴィアとイツセーもうるさい。心底井草はそう思った。

大体、ニコポナデポなんてイケメンにだけ許された絶技だ。自分如きがそんな奥義を会得できるわけないだろうがと、心の底からそう思う。

さてそれはともかく。

「ついでに共闘の報酬として、これをアザゼル総督から渡すように言われてるよ」話を先に進めよう。

井草はカバンから一つのUSBメモリを取り出すと、それをリアスに渡す。

「……井草さん、何ですかコレ」

「神器関係の技術の一つだよ。既に枢機卿に派遣された使いにも渡されてるから、教会にも送られるはずさ」

ある程度の情報を前もって開示する事で、こちらが問題の解決を望んでいるという事

を見せつける必要があった。

アドバンテージを縮められるという危険性はあるが、和平がなされるならそんなものは無用だ。どうせ共同研究が行われるようになるのだから。その方が、研究速度も飛躍的に向上すると判断された。

「墮天使の技術を利用しろと？ 我々を舐めているのか？」

ゼノヴィアは苦い顔をするが、井草はそれをまっすぐ見返す。

「教会にも、神器を制御できずに苦しんでいる子供がいると聞くよ。なにより彼らを救う事を考えるべきだと思っけどね」

「邪な技術に手を出して地獄に落ちるよりは、神の元にいち早く迎えられる方がいいと思っけどね」

「度し難い考えだね。俺如きには分かりそうにないよ」

これは和平は意外と大変そうだ。

まず間違いないく、三大勢力から離反者が出てくるだろう。そういう意味では戦争に積極的な派閥を既に追放している悪魔側が羨ましい。

まあ、タカ派筆頭のコカビエルを叩き潰す事が出来ればこちらも同じだ。

ただし、教会は厄介だろう。

今まで正義として行ってきた事の正反対をしると言われても、すぐに動けるわけがな

い。信徒達からすれば信仰を裏切れたに等しいだろう。

また、この立場ゆえに知りえた情報もある。それをコカビエルがばらすような真似をすれば、状況次第では世界恐慌だ。

その重要性を覚悟して、井草は決意を新たにした。

4 話

それから数日、何事もない日々が続いた。

駒王町の外側からピスたちがローラー作戦を行っている。コカビエルに協力をした墮天使や悪魔祓いたちはそれで現在四割ほど撃破している。

そして教会の者たちはそれぞれ別行動をしながら、コカビエルを追っている。いかに共同戦線とは言え、完全な協調は心情的に無理なものが二人ほどいたからだ。具体的にはゼノヴィアとイリナだ。ニングとリムには同情する。

悪魔側も、リアスの眷属とソーナの眷属が複合チームで搜索している。祐斗が抑えきれなかったための妥協策だ。

「……まあ、いろいろあつたけど義姉さんが合流するのを待っている間は暇だね。事務仕事は終わったし」

と、井草はお茶をしながら待機していた。

ピスから「リアスやソーナの警護」を命じられたので仕方がない。自分ごときが動くまでもなく高位戦力なのだが、コカビエルはそれより上だから仕方がない。

コカビエルの目的は、高確率でエクスカリバーを利用したりアスとソーナの殺害。それによる激情を利用した戦争再開だろう。

なので、護衛をつけるのは当然という判断だった。

「まあ妥当でしょう。コカビエルほどのものが本腰を入れるのなら、私達をまず真つ先に狙うでしょうから」

と、ソーナは冷静に状況を俯瞰していた。

ピス達にも指示を出しているらしく、ピスもその指示が有効に作用していることを感心していた。

この年でこれほどまでに軍師としての才能があるのは恐ろしい。火力だけなら現役の上位プレイヤーにも匹敵するリアスもそうだが、現四大魔王は家族に恵まれているようだ。

「かなり派手な前哨戦にしたいのでしょうか。ですから、高確率でそれが整うまでは小競り合いに済ませるはずですよ。今回誘いに乗った者たちはほぼ囿でしょう」

「相変わらず、そういう読みでは勝てる気がしないわ」

ソーナの推測にリアスは苦笑した。

まあ、井草からしてみればリアスは前線で動くタイプだから素直に比べるのもあれだ。ソーナは後方で指揮する方が向いているのだから。得意分野の違いだろう。

しかし、それは裏を返せば準備が整えば大きく動くということだろう。

「……それまでに、バラキエル様スラッシュユドッグか刃スラッシュユドッグ 狗が動けばいいんだけど。白い龍アルビオンは戦闘狂で有名だから、コカビエルに乗っかりそうなんだよなあ」

「墮天使も大変ね」

リアスに慰められるとは思わなかった。

彼女は自分のことを警戒していたし、それも当然の立場だ。ここぞとばかりに皮肉の一つぐらいするかと思っていた。

「どうしたのさ。俺なんかを馬鹿にするのも飽きたのかい？」

「貴方、自分を卑下しすぎよ」

あきれ果てたリアスのため息は、然しどこことなく色のある息へと変わる。

「……イツセーが信頼している人物だもの。なら、心配する必要はないと思いなおしたの」

と、顔を赤らめていった。

……何があつた？

一瞬病気かとも思ったが、ソーナが静かに首を振る。

「草津の湯でも治せないあれです。どうも、兵藤君に好意を抱いたようなのです」

「ああ。イツセーはいい男だからね。……変態だけど」

そこはフォローしきれなかった。

あれに関しては本当にフォローしきれない。どうしようもない。

「まあ、あんなだからこそ僕もほっとけないんだけど」

「若気の至りで覗きでもしましたか？」

ソーナにそんなことを言われてしまった。

実際、普通にそう考えるだろう。

だが――

「いや、もつとひどいよ」

――実際は、そんなものではない。

少なくとも自分はそう思っている。

そう、だからこそ、自分はイツセーと仲良くなれたのだ。

兵藤一誠という男は、ドスケベであるため敬遠されやすい。しかし、その奥底に彼のいいところが隠されている。深く付き合うほど味がある人物なのだ。

なので、彼らの面倒を見ることにしなければ仲良くなることはなかっただろう。

そして、そんなことをしたのは――

「彼らを俺なんかと同じような奴にしちゃいけないからね。だから、俺としてもほっとけなかったのさ」

「……何をしたのか気になりますが、あえて聞かなかったことにします」

ソーナとしては深入りしない方向らしい。

正直、自分で語れるほど度胸はない。だから、仕方がないとも思っている。

それを語る時は、この関係が終わる時だ。少なくとも、和平を結ぶことで自分がお役御免になるまでは言うのはまずい。

「そういえば、リアスちゃんはどうしてイツセー君に惚れたのさ？」

と、それとなく話を変えてみる。

イツセーは確かに好漢であるが、しかし深く付き合わないと味がわからない人物だ。

確かにアーシアがらみの非常時でその本質が明かされたが、それでも即座に惚れるとも思えなかつたのだが――

「ちよつと、身内で問題が発生してね。その時イツセーが尽力してくれたり、欲しかった言葉を言ってくれたから……その……」

何ともかわいらしい恥じらい方である。

自分なんか口説いたら失礼だからしないし、イツセーにも悪い。だが、もし昔の自分だったら告白してたかもしれないぐらい魅力的だった。

「兵藤くんはかなり男気を見せましたからね。あれを自分に向けられたら……私も少しは揺るぐかもしれません」

などと、ものすごく冷静な口調でソーナまでそういった。

いったい何をしたのだろうか。それが非常に気になる。

なので話を聞こうとして――

「リアス！」

慌てた表情で、朱乃が飛び込んできた。

「どうしたの、朱乃？」

リアスがすぐに顔を元に戻して、主としての顔で立ち上がる。

それを見て、朱乃も冷静さを取り戻しながら――

「イツセーくんたちが、フリード・セルゼン及びバルパー・ガリレイと交戦したしたわ。祐斗くんがさらに独断先行をしたようですの」

――思った以上に大ごとだった。

イツセー達が無事だったのは良いが、状況はいろいろと警戒必須だ。

井草はリアスが戻ったこともあり、シトリー眷属と共に行動を開始する。

状況は、イツセー達がフリード・セルゼンと激突したことに端を発する。

彼は奪われた四本のエクスカリバーの一つ、天閃の聖剣をもつて、強襲を仕掛けてきた。

イツセー達は好戦し、いいところまで追い詰めたのだが、しかしそれでも警戒は必須。フリードはイツツにならなかつたこともあるので、攻めきれなかつたこともある。

そこにバルパーが介入。匙によつてなされた捕縛をそのアドバイスを生かしたフリードが切り裂き、そしてゼノヴィアたちが合流したことで状況ふりとみなして離脱。その後、激情にかられた祐斗が、ゼノヴィア達と共に追撃を強行し、イツセー達は見失ってしまった。

これは痛恨のミスかもしれない。下手をすれば、祐斗たちはコカビエルの元までたどり着いている可能性もある。

それは、非常に危険だ。

戦っているところを見ていないニングたちはともかく、祐斗の戦闘能力でコカビエルに勝てると思えない。まず間違いなく、コカビエルは余裕で圧倒することができるだろう。

それができてこそその神の子を見張るものの幹部。それができてこそその最上級墮天使。

それができてこそ、聖書に名を記させるほどの存在なのだから。

「……ねえ、ソーナちゃん？」

その搜索を行いながら、井草はソーナに聞きたいことができた。

「なんですか？」

「うちの総督、これを逆手にとつて三大勢力で和平が結べないかと思つてるわけなんだよ」

「……そういうことをここで言いますか」

ソーナの眷属が目を見張る。

ソーナ自身も気になつてゐるが、しかしすぐに令媚さを取り戻してくれた。

「まあ、今の三すくみは他の勢力に仕掛けられかねませんからね。本格的に終戦するとうののなら好都合ですが……難しいのでは？」

ソーナはそう言い切る。

なにせ、千年以上続いている戦争だ。その分の遺恨も残つてゐるだろう。

積極的に戦争を再開させたい勢力は全体の半分以下だろうが、しかし積極的に終戦させたい存在も全体の半分を超えるだろうかと、ソーナは踏んでいた。

「なにより、教会勢力は悪魔や墮天使を絶対的に敵視しています。彼らがそれを了承するとは思えません」

「いや、そつちは何とかなるらしい。なんでも三大勢力の首脳陣は、全員聖書の教えに對する約ネタを知つて、それをチラつかせれば天界と教会は黙るしかないと言つた」

詳しいことは聞かされてない。とは伝えておいた。

どうも、自分達上級クラスですら迂闊に知つてはいけないことらしい。ソーナたちが知らないのもそれが理由だろう。教会でも枢機卿しか知らないかもしれない。

とにかく。総督であるアザゼルはその余地があると踏んでいる。

しかし、今まではきつかけがなかった。

コカビエルの行動を、そのきつかけにするつもりなのだ。

「そういうわけだから、和平した方がいいと思うなら、死んだら駄目だよ？ いざという時は通信をつなげるから、自分達だけでも逃げることに」

「それはそれで屈辱的ですが……。まあ、今の時代で戦争が本格的に再開すれば、被害は三大勢力ではすみませんからね。仕方ないでしょう」

ソーナは了承してくれた。

なら、あとはリアスだけだが――

「……会長！」

そこに、ソーナの女王クイーンである椿姫が、血相を変えて声を出す。

「どうしました？」

「……コカビエルが、リアス様と接触しました」

……どうやら、状況は最悪らしい。

5話

コカビエルの行動はまさに予測の通りだった。

本格的な戦いをせずに小競り合いを続けている状況に業を煮やし、戦争を再開させる為にエクスカリバーを利用してリアスとソーナを殺す算段だ。

そんな事になれば、戦争再開派を止める事は不可能になるだろう。火薬庫の中に火のついたライターを投げ込むどころか、ロケットランチャーを叩き込むような真似だ。

アザゼルがこれを逆手に取る精神もぶっ飛んでいる。火薬庫の中でファイヤーダンスを取るような所業だ。

墮天使はこんなものばかりか。井草はそんなことを思うと、微妙に引き気味に自分の思考に呆れる。

とにかく、コカビエルは派手に開戦の狼煙を上げたいらしい。この駒王町ごと吹き飛ばすと宣言した。

最悪なのは、同時多発的に残存していた墮天使とはぐれ悪魔祓いが暴動を周囲で起こ

している事だ。

これで、ピス達はそちらの火消しに力を注ぐしかなかった。

『そういうわけだえ、あと一時間ぐらい耐えてくれなかしらあ？』

ヴァニシング・ドラゴン
白　い　龍も向かつて

「OK義姉さん。死んでも抑えるよ」

『追加発注よお。死んだらダメだらかねえ』

それは難しい事だ。

とは言え、それぐらいしなければいけない事もよく分かる。

相手はコカビエルなのだ、それも、エクスカリバーが6本も確保された。

イリナは戦闘不能の状態でイツセーの家に投げ込まれた。ゼノヴィア達の詳細は不明だが、エクスカリバーがない以上、ゼノヴィアは戦力としては換算できない。

念押しの一つでもされないと、自分は確実に特攻しそうだ。その辺この義姉はよく分かっている。

「ま、やるだけやってみるよ」

『……あらかた片付いたら部下に全部投げて行く事にするわあ』

どうやら信用もないようだ。

まあ、自分如きにそんなものがあるわけがないし、当然といえば当然だが。

「まあ、死なない程度に頑張るよ。……データも取らなきゃいけないしさ」

『……今はそれでいいわあ。其れじゃあ、できるだけすぐ行くからあ』

通信を切り、そして井草は振り向いた。

そこには、決意の表情を固めたりアスがいた。

「……行くのかい？」

「もちろんよ。ここは、私が魔王様から任されたのだから、この街の危機は私が未然に防がなければならぬわ」

言っても聞きそうにない。

状況は最悪だと言ってもいい。

戦力差は莫大。エクスカリバーが6本全てが敵の手の内にある。バルパーの存在により、それら全ての使い手を見繕う事も可能だろう。そしてコカビエルは現状この辺りでは文句なしに最強の存在だ。

だが、だからと言って負けるわけにはいかない。

「俺はいきますよ、井草さん」

イツセーもまた、左腕に赤龍帝の籠手ブリステッド・ギアを具現化させると、その手を強く握りしめる。

「アイツの退屈しのぎなんて理由で、俺の親や友達を殺させてたまるか！」

その言葉に、井草もまた決意を新たにす。

この街には、何人もの友達がいる。

自分なんかを大事な友達だと思ってくれる、立派な人達。彼等を異形達の勝手な都合に巻き込むなんてまね、許されるわけがない。

こんな塵屑の命を対価にしたところで高が知れているが、しかしそれでも譲れないものはある。

それに、自分は検体として生き残る必要性もある。今後の状況打破の為に、自分のデータはより多くとり実験もする必要があるだろう。

ここで逃げ出すなどもつての他だ。墮天使側が起こした問題を、墮天使が解決に尽力しなくては、どう転んでも事態は悪化の一途を辿るだろう。

負けるわけにはいかない。死ぬわけにもいかない。逃げるわけにもいかない。

井草は決意を込めて、イツセー達に頭を下げる。

「今回は、神の子を見張るものの監督不行き届きにより迷惑をかけるね。レイナーレの時といい、墮天使は君達に迷惑をかけたっばなしだ」

「全くですわ。もっと反省してください」

墮天使嫌いも極まっている朱乃はそういうが、リアスは苦笑でそれを流す。

そして、強い戦意に満ちた目で、まっすぐに駒王学園を覆う結界を見せた。

「まあ、その制裁を加える為に尽力しているあなたにまで、今文句を言う気はないわ。

イツセーの友達に理由もなく酷い事はしないわよ」

そう言うのと、リアスは一步を踏み出した。

「今は、コカビエルを倒す事に全力を尽くしなさい!!」

「ああ。身内の恥は墮天使（堕）が注がないとね！」

そして、前回の戦いとはあらゆるものが段違いの、駒王町の命運をかけ戦いが勃発した。

井草たちが駒王学園の校庭に足を踏み入れるのと、そこで強い輝きが放たれるのは同時だった。

そこにいるのは三人の男。

一人はコカビエル。校庭の上空に玉座を生み出し、その光景を睥睨していた。

一人はバルパー・ガリレイ。彼は魔方陣を用意し、一振りの聖剣を宙に浮かべている。

そして、最後の一人は――

「てめえ、フリード!!」

イツセーが指を突き付け、その者の名を叫ぶ。

それに反応して、白髪の少年が下品な笑みを浮かべた。

「やつほほい、イツセー君！ 数十分ぶりい！」

片手をあげ舌を出して返答する男が、フリードだと井草は認識した。

そういえばあんな顔立ちをしていたはずだ。廃教会地下ではイーツの状態の姿しか

目にしていないが、あとで写真を確認した覚えがある。

「エックススカールイーブアーちゃんやんが融合して一本になっちゃったし、これはあれかな

？ 俺様ちゃん、リベンジの時かなあ？」

などと興奮しながら、フリードはエボリューションエキスを手に持った。

どうやら速攻で戦闘を開始するものと判断したが――

「待て、フリード。ここは私にさせてくれ」

――と、バルパーがそれを制する。

「なんだよ爺さん。俺様ちゃんに使わせてくれるつー話じゃなかったっけえ？」

「二度でいいのだ。その為に態々これまで貰ったのだし、後で使わせてやる。……一度

だけでいいから振るいたかったのだよ」

フリードの文句にそう答えながら、バルパーもまたエボリューションエキスを取り出

す。

そして、躊躇なくそれを突き刺した。

『ケンゴウ!』

その合成音声と共に、バルパーの姿が偉業へと変わる。

そこにあるのは、文字どおり剣豪を化け物へと変質化させたような姿の怪人。

そして、バルパーは一振りの聖剣を手に取った。

「この合一化したエクスカリバー。オリジナルにあと一步のところまで迫ったこの聖剣を、思う存分振るってみたいのだ。私の夢ともいえるのだから、当然だろう?」

「つちえ〜! だったら一人ぐらい残してちよ? 俺つちも色々大変で、そいつらには恨みがあるんだからね〜」

その執念を感じ取ったのかフリードはそう言つて引き下がる。

このままいけば、まずバルパーと殺し合いをする必要に迫られるとも判断したのだろう。意外とその辺りの機微はできるようだ。

「俺は別に構わん。余興ぐらいにはなりそうだしな」

コカビエルは平然としている。

バルパーが勝つのを確信しているのか。フリードが後に控えているから余裕があるのか。其れとも、そんなものに関係なく自分が全て終わらせるから問題ないと思つているのか。

そのどれにしろ、あるいはそれ以外の理由にしろ、これ以上の行動を見逃すわけにはいかず――

「……あ、ぐ……っ!?!」

井草は、しかしそれどころではなくなつた。

ドーナシーク達と戦っていた時と同様だ。

自分の体の中にある何か。それが、目の前にいる怪人とかしたバルパーと共鳴している。

そして、再びその姿が変化する。

両肩に円錐状のパーツを取り付けた、有機的な形状の怪人へと変化し、そしてさらに変化が訪れる。

両手の甲に、四対の虫の足のようなレリーフが追加されていた。

その姿の変化に、リアスと朱乃は怪訝な表情を浮かべるが、井草はそれを気にしない。というより気づいていない。誰も自分の姿を自分でしつかりと確認する事はできないのだ。そもそもイーツと化していたこと自体気づいていなかった井草では、それに気づくのは酷というもの。

そして、其れを目ざとく見つめるのはコカビエルだった。

「……フリード。あれが例の奴か?」

「らしいっすわ。あっちからは確保しとけて言われましたけど、どうしますう、ボオス？」

「捨て置き。俺の目論見通りに行くのならば、奴らのところに行く必要もないのだからな」

その会話に、リアスは警戒心を強くする。

あの時現れたアリのイーツもそうだったが、どうも井草がイーツと化していることは想定外の部分があるらしい。

どうやら墮天使側がイーツを生み出したわけではないようだ。墮天使側の者達ばかりイーツになっているが、それなら態々こんな事をする必要がない。

イーツの性能があれば、悪魔と聖書の教えを同時に敵に回したうえで、各神話勢力に牽制球を放つ事もできるはずだ。それをせずにこんな回りくどい真似をする時点で、墮天使がイーツを生み出した可能性は低い。

なら、イーツとはいったい誰が生み出したのか。

少なくとも三大勢力ではない。悪魔側でこんな大きな成果が上がったのなら自分の耳にも入っている。天界や教会が開発したにしても、聖書の教えを信仰している国などでイーツが暴れるなどという自爆行為をするわけがない。

なら、他の神話体系の介入なのか。其れもまた疑問が残る。

なぜなら、態々墮天使にそれを与える理由が分からない。

自分達で使用して、其の力で三大勢力を襲えばそれだけで済むのだから。そして、それ以上考えている時間をバルパーは与えてくれなかった。

「まずは上級悪魔からだ！」

その切っ先が視界に入ったのは、完全に間合いに入られた後だった。

「……部長!？」

赤龍帝の籠手を高めていたイツセーが反応するが、しかし遅い。

その斬撃が、リアスの首を狙って振るわれた。

6話

振るわれた斬撃は超高速。少なくとも上級レベルでも上位に位置するだろう。

また、相手は聖剣エクスカリバーの合一版。一振りでも並の上級悪魔なら倒しうる強大な力を持った聖剣。それが六本も集まり、全盛期にかなり近い状態になっている。

また使い手も脅威。イーツとは、ニンゲン世界で暴れまわる程度のものですら、軍隊が兵器を投入する必要に迫られるもの。それも、異形社会で運用されたものは更にその上をいった。

はつきり言つて、リアスで対処できる状況ではない。

そしてその斬撃は首元に迫り――

「チツ」

放たれた光弾を捌く為に使われ、かろうじてリアスの命は繋がった。

そして掛ける戦士の刃が、エクスカリバーとぶつかつて衝撃を生み出す。

その一撃の威力はエクスカリバーが上だが、その使い手は上手く殺して一撃を凌ぐ。

「ニングー！ 慌てねえで冷静に対処しやがれデス!!」

「分かっているのです！」

ボロボロのリングはエクスカリバーを捌き、同じくボロボロのリムが牽制の銃撃を放つ。

バルパーは擬態の聖剣の力で幕を作って防ぐが、しかしその弾幕に後退した。

しかしバルパーも反撃を怠らないわけではない。破壊の聖剣の力で地面を壊

し木々を吹きとばして、それをもつてして反撃を行う。

だが、その程度の事は当然読んでいた。

「この学園を荒らさないで頂戴!!」

その叱責とともに放たれるリアスの魔力が、その攻撃を文字通り消滅させる。

上級悪魔、それも元72柱の次期後継者であるリアス・グレモリー。そのポテンシャルは、同年代においては傑出してはいる。

そしてそこに、反撃の攻撃が放たれる。

「イツセー先輩。行つてください」

「やってくれ、小猫ちゃん!!」

小猫に投げ飛ばされる形で加速したイツセーが、その籠手を全力で握り締める。

そして、躊躇う事なく全力でバルパーに殴り掛かる。

「木場の仇!!」

「悪魔風情が!!」

振るわれるエクスカリバーと、赤龍帝の籠手がぶつかり合う。

本来なら、この攻撃のぶつかり合いは間違はなくバルパーの勝利だろう。

如何に神滅具とは言え、至っていない代物。また、悪魔にとつて聖剣は天敵極まりない。まともに打ち合えばイツセーが確実に押し負ける。

だが、その一撃は赤龍帝の籠手を両断することなく、弾き飛ばすにとどまった。

「なんだと?! 悪魔が何故、エクスカリバーを受け止められる!?!」

「誰が言うか、オツサン!!」

驚愕するバルパーに吐き捨てられるイツセーの言葉。

そして、その隙について更に追撃が飛ぶ。

「雷よ!!」

朱乃の雷撃がバルパーに襲い掛かり、そしてバルパーはそれを回避する。

だが、それは極めて単純に逃げやすいところに飛んだだけである。誰でも分かるぐらい攻撃の密度に隙があった。

そこをついて、ニングとリムが再び攻撃を仕掛ける。

「もらったのです」

「喰らいやがっちゃうですよ!」

「チイツー！」

エクスカリバーニヒットドリー

天閃の聖剣の力で即座に離脱するが、然しバルパーは不機嫌極まりない。

当然だ。エクスカリバーを振るっている今の自分は、間違いなく戦闘能力で他を上回っている。コカビエル以外は超えていなければおかしいのだ。

なのに、ふたを開けてみれば数の暴力にさらされているとはいえ五部の勝負という有様。これではエクスカリバーの名に傷がつく。

「己ー！ ドラッグシリリングによって、今の私は優れた剣技を持っているはずなのだぞ！」
「それは簡単だよ」

そして、イーツは一人ではない。

気づけば、そこには井草が立っていた。

イーツの戦闘能力には個人差があるが、素体の性能は重要だ。

バルパーは人間で、しかも基本的に非戦闘員である。

井草は戦闘訓練を積んでいる。それも、ハーフとは言え上級墮天使である。

その差は、歴然だ。

「終われ！」

「ぬーおおおおおおおー!!」

超至近距離から大量の光の槍を叩き込まれ、バルパーはそれを捌き切れなかった。

いかに技量が大幅に上昇しようと、その致命的なまでの経験不足は致命傷だった。バルパーは技量は補えた。だが、それを使いこなすセンスも経験も知識も不足していた。

ゆえに、その攻撃を捌き切れず――

「前座は退場してくれ」

そして、叩きのめされ、爆散した。

爆散した……が、かろうじてバルパーは生きていた。

イーツとしての変身は解除されたが、しかしズタボロになっているがかろうじて生きている。

とはいえこれでもう戦闘は不可能だろう。見ればエボリューションエキスは破壊されて地面に転がっていた。

しかし――

「んじゃあ、こっからが本当のBATTLEだ！」

エクスカリバーは、フリードが確保していた。

「せこい！　せこさが爆発してるな！！」

「爆発に目くらましされたためえが悪いぜ！！」

井草は即座に奪い取りに向かうが、しかしフリードはさらりとかわすと切りかかる。

井草も飛び退って回避するが、然し完全には躲しきれぬ、かすり傷を負う。

その一瞬の攻防で、全員が理解した。

フリードは生身だ。しかしイーツだったバルパーとは次元が違う。

彼は14歳にして正式な悪魔祓いに選ばれるほどの逸材。その彼が、エクスカリバーをその手に持っている。

更に危険になればイーツに変身する事もできる。すなわち、まだ上の状態に移行できる。

この状況に全員が脅威を感じー

「……バルパー、ガリレイ……っ！！」

そこに、聞き覚えのある声が届いた。

全員の視線が集まる中、木場祐斗は渾身の力を込めて魔剣を振るう。

狙いはバルパーただ一人。彼以外など目にも入っていないかった。

当然だ。彼こそ、祐斗は愚か数多くの子供達を実験体にし、そして使い捨てた諸悪の

根源。祐斗からしてみればエクスカリバー以上に恨みのある男だ。

其のためその渾身の一撃は狙い違わずバルパーに飛び―

「そうはいかないにゃん」

―フリードによつて、遠慮なく両断された。

もちろんフリードは祐斗ごと狙ったが、ぎりぎりのところで井草がその服を掴んで引つ張ることで斬撃の半円から祐斗はずれた。

そして、反撃の蹴りがフリードに迫るが、しかしフリードはそれを擬態の力で壁を作る事で器用に回避する。

「そんなぬるいキックじゃ、この聖剣ならぬ聖壁エクスカリバーはくだけないZEE!」

「祐斗から離れなさい!!」
そして放たれるリアスの魔力を器用にスウェーヴアックでかわし、フリードは素早くエクスカリバーを構える。

そして、フリードは祐斗を見るとにやりと笑った。

「そーいや、なんかエクスカリバーつちに恨みがあるつばいけど、なんかあんのかにやあ?」

心底苛立つ声だったが、然しそれに反応したのは、バルパーだった。

彼は立ち上がつて冷静さを取り戻すと、木場に興味深げな視線を向ける。

「……そういえば、実験体が一人逃げ出してたな。毒の影響で野垂れ人だものだとばかり思っていたが、悪魔となる事で生き残っていたとは」

「同士の……彼らの仇……っ！」

「落ち着け祐斗君！ 今はフリードがいるからまずい！」

憤怒の表情で襲い掛かろうとする祐斗を、井草は羽交い絞めにして動きを止める。

それを面白そうに見て、バルパーは喜悦の表情を浮かべた。

「礼を言うぞ。お前達のおかげで、我が研究は完成したのだ」

「完成だ?!」 僕達を失敗作として処分しておいて何をいう!!」

唾をまき散らして激昂する祐斗に、バルパーはしかし得意げな表情を浮かべる。

「私は聖剣が好きだった。しかし聖剣の適性がない事に絶望した。ゆえに、聖剣を使える者を生み出す道を選んだ」

それは、この場においては好都合にも不都合にも働いた。

バルパー自身の戦闘経験が圧倒的に不足していた事もあって初戦は勝った。これは好都合だ。

だが、強敵であるフリードがエクスカリバーを振るえるようになった。これは不都合だ。

皮肉なものだ。バルパーは聖剣使いを作る研究にまい進した事で、それを叶えた。し

かし逆に聖剣を振るう戦士には決してなれなかった。

しかし、それでも聖剣を使って戦えた事が嬉しかったのだろう。それを自身の研究でなす事が狂喜だったのだろう。

バルパーの表情は歓喜で歪んでいた。

そして、彼は一つの結晶体を取り出した。

「長年の研究の末、人が聖剣を使うには体内に存在する聖剣因子が必要だという事を突き止めた。残念な事に、君達実験体はその因子こそあれど、必要なまでの量に達していなかった」

そう。其れでは意味がない。

聖剣の適性を数値として図る事ができるようになっただけでも大したものだが、それが満たされているかどうかは生まれついた時の運に左右される。

それでは、人工的に生み出す事など不可能だ。

だが、バルパーは天才だった。

「そこで私は発想を転換した。因子が足りないのなら、足りるまで注ぎ込めばいいのだ」と思い至ったのだ」

まさに逆転の発想だ。足りないのなら補充すればいい。

そして、其れは確かに形になった。だからこそ、彼は人工的に聖剣使いを生み出す事

ができたのだし、教会でも聖剣使いを人工的に生み出す事ができている。

「……それが死人を生むなど聞いてないのです。間違いなく暗部案件のはずなのですよ？」

ニングが務めて冷静さを持った状態で問い質す。

その言葉に、バルパーは苛立たし気に鼻を鳴らした。

「当然だ。私は用済みになったものを破棄したが、奴らはそんな私を排斥したのだから。搾りかすも生かしておいているのだろうかよ」

つまり、聖剣使いを人工的に生み出す事に死人を出す必要はない。

にも関わらず、バルパーは祐斗達の仲間を毒ガスで殺した。

教会を排斥されて当然だ。正義を謳う組織が、そのような存在を無条件に受け入れるわけがないのだから。

「あいにく私には戦士の才能がないようだが、それでもエクスカリバーを振るえて満足だ。あとは、この私の研究を勝手に使っているミカエル共をエクスカリバーを使って復讐するのみ」

完全な逆恨みで、バルパーはコカビエルに協力を申し出た事がよく分かる。

そして、コカビエルも戦争を起こすのなら戦力が必要だろう。バルパーの研究は悪魔祓いの質を大幅に向上させる。呑まない道理はない。

「手始めに木っ端の聖剣使いを殺す予定でな。バルパーの研究で使い手はいくらでも見繕える。殺した分だけ戦力が強化されるなど、便利極まりないな」

コカビエルが楽しそうに嗤う。

彼からすれば、倒したい敵を倒したついでに戦力が増えるという好都合な展開でしかないのだろう。

もし彼がレイナーレの直属の上司だったのなら、アーシアを巡った戦いは大変な事になつていたと断言できる。

それほどまでに、コカビエルは邪悪だった。

「貴方のような人が、よく今まで神の子を見張る者の運営に携わっていたのかと感心しますよ、コカビエル様」

井草は激情を込めて睨み付けるが、コカビエルはそれを鼻で笑う。

「だったらまずはフリードを倒して見せるがいい。それができなければ話にならん」

その言葉に、井草は舌打ちする。

フリード・セルゼンは天才だという評価がなされている。

フリード・セルゼンはイーツになる事ができる。

フリード・セルゼンは合一化したエクスカリバーを武器として使っている。

素体、強化、武装。

其の三点がすべて高水準にまとまっている今のフリードは、間違いなく強敵だった。うかつに戦えばその時点で首が飛ぶ。少なくとも、下級墮天使だったドーナシーク達とは格が違う相手だ。

ゆえに、誰一人として迂闊に動く事ができず――

「……みんな……そんな……」

それを認識する事もできない程ショックを受けた、木場祐斗だけが一步前を踏み出した。

「ふん。それほどまでに仲間が大事か？ まあいい、どうせ新しく生産する手はずは整っているのだ、冥途の土産に持って行け」

バルパーはそう言い放つと、ぞんざいに結晶体を放り投げる。

地面に落ちてころころと転がったそれを、祐斗は力なく拾い上げた。

「僕だけが……生かされた。僕よりも生きたかった子がいただろうに……っ」

そして、涙が一粒、結晶に落ちる。

そして、結晶体が輝いた。

そこから何人もの子ども達の姿が現れる。

「……あの服は、実験体に用意したものと同じ……？」

怪訝な表情をバルパーは浮かべるが、然し祐斗の目には見えていない。

そこにいるのは、忘れもしなかったあの時の仲間達。

思わず謝罪の言葉を駆けようとする祐斗より先に、子供一人が微笑を浮かべて言葉を投げかける。

—生きててくれて、ありがとう

その言葉に、祐斗は自分の大きな思い違いを叩き込まれる。

彼らは、復讐なんて望んでいなかった。

ただ、祐斗に生きていて欲しかったただけなのだ。

「……祐斗くん。動けるかい？」

そしてフリードをけん制していた井草が、そんな祐斗に声をかける。

「君は致命的な一步を踏み出す前に、気づくことができた。……なら、やることは一つじゃないのかい？」

井草の言葉の真意は分からない。だが、それが祐斗を想つての言葉であることだけは分かる。

そうだ。エクスカリバーに復讐する必要なくなった。

だが、このままでいいわけがない。

自分を助ける為に命を捨ててくれた仲間達。その残滓が目の前の外道にいいように利用されている。そして、其れをなした元凶は更に悪用しようとしている始末。

これを見逃すわけにはいかない。それは、断じて認められない。それを成せば、自分は木場祐斗でもイザイヤでもいられない。

「……僕は、剣になる」

なろう。今度こそ。

自分を死の淵から救い上げてくれた主の件になろう。

暴走した自分を見捨ててくれなかつた仲間達の剣になろう。

その身を犠牲にしてそんな機会をくれた、同士達に誇れる剣になろう。

その決意が、世界の理にすら反逆し、神器を新生させる。

「禁手化」
パランス・ブレイク

静かに、その禁じ手の言葉を唱える。

その瞬間、彼が手に持つ魔剣は新生した。

聖なる力と魔なる力。その二つを併せ持つ、世界の均衡すら崩しかねない剣。

ソード・オブ・レイトレイヤ 双覇の聖魔剣。聖劍因子を取り込んだことで生まれた、亜種禁手というイレギュ

ラー極まりない力が、ここに産声を上げた。

7 話

その光景に、フリードは心底から嫌な気分になった。

敵の悲劇を好む彼にとって、こういう感動ものの展開肌に合わない。心の底から鳥肌が立ちそうになる。

「そういうご都合主義は物語の中でしかはやらねえんだよ。マジうぜえからこのタイミングですっぱり切られて頂戴な！」

まさにその通りの展開になれば、きっと心の底からすつとするだろう。それはもう、この国の漫画で言うなら元旦の朝に新品のパンツを穿いたような展開だ。

だから、遠慮なく天閃を発動させて切りかかり――

「殺気が分かり易いよ！」

それを受け止められ、フリードは目を見張った。

僅かにエクスカリバーが競り勝っているが、しかし拮抗と言っていいレベルだった。

あり得ない。たかが神器で作られた魔剣如きに、完全な状態にあと一歩まで迫ったエクスカリバーが追いつがられるなど。

「……うっわー。奇跡の超スーパーエクスカリバーを使ってこれとか、大恥もんだよ。すいませーん、これ無し、リメイクしまーす!!」

今度は遠慮なく破壊の力も籠める、念の為透明と夢幻の力も使って、刀身のサイズを誤魔化した。

その全てを利用したエクスカリバーの攻撃を、祐斗は剣の群れを地面から生やす事で相殺する。

「技量、速度、踏み込み、それら全てが高水準だ。間違いなく君は天才だよ」

余裕の表情で言われるのが、心の底から腹が立つ。

祐斗は断じて皮肉で言っているのではない。心の底からフリードの才能を称賛している。優れた才能を持っている事を、心底認めている。

しかし、そこには哀れみがあった。

「だけど、殺気が素直すぎる。それでは僕らには届かない」

「んの……野郎!!」

最も最悪なのは、フリード自身の才能が本当に天才的だということだ。

伊達や酔狂で14歳で悪魔祓いに任命されてなどいない。神器も特異な適正もなくそこに至れたのは、間違いなく天賦の才によるものだった。

しかし、それでも今の祐斗には敵わない。

それが腹立たしく、とっさにエボリユーションエキスの使用すら考え―

「―なんだ。まさかと思うが、その程度なのか?」

その新たな乱入者に、フリードは怒りの矛先を向ける。

そこにいたのはエクスカリバーを奪われた、敵の聖剣使い。

確かゼノヴィアとか呼ばれていた。

ただでさえ爆発寸前だったこのタイミングでのこの登場。火薬庫に投げ込まれた火種も同様だった。

「……上等だ、先ずは手前から血祭りにあげてやるぜえええええ!!」

まずはとりあえず人を殺して、すつきりして落ち着いてから対応した方がいい。フリードの中の冷静な部分がそう判断したのは当然。その辺り、彼は間違いなく天才であつた。

しかい、彼我の力量さを見抜くという点が非常に足りていなかった。

ゼノヴィアという聖剣使いは、いまだその本領を一切発揮していないのだ。

「ペテロ・バシレイオス・デオニユシウス・そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

ゼノヴィアの手元が歪み、そして人振りの大剣が姿を現す。

そしてその使を握り、ゼノヴィアは勢いよく引き抜いた。

その余波だけで、周囲の地面にクレーターが発生する。

「子の刃に宿りしセイントの名において、我は開放する。―デユランダル!!」

その名を知らない聖書の教えの関係者はいないと言っただろう。

エクスカリバーと並び称され、単純な威力では最強の聖剣と呼ばれるコールブランドすら超えると言われる。攻撃力においては神滅具すら超えかねない伝説の聖剣。

それを、ゼノヴィアは引き抜いた。

「………何い?」

流石のコカビエルもそれには目を見張る。

そして、バルパーに至っては腰を抜かしていいた。

「ば、馬鹿な!! 奴らの手に渡った研究でデユランダルが使えるわけがない! 今の私の研究ですらできないのだぞ?!」

明らかに狼狽するバルパーだが、それも当然だろう。

聖剣使いを人工的に生み出すことにおいて最前線にいる自負が、バルパーにはある。それが目の前で打ち崩されたのだ。

しかし、ゼノヴィアは静かに首を横に振った。

「私は天然ものなんだ。貴様の技術は欠片も使われていない、正真正銘生まれながらの聖剣使いさ」

「……………」

最早バルパーは言葉もない。

そしてフリードも最悪の気分だ。

エクスカリバーとデュランダルは同格の聖剣。しかしそれは、エクスカリバーが分割されるまでの話。そして今の段階でもまだ七分の六でしかない。

完膚なきまでに、格上である。

「礼を言うぞ。貴様達のおかげでエクスカリバーとデュランダルのどちらが優れているかが確かめられそうだ。こういう時だというのに気分が高揚するな」

「だからあー！ そういうご都合主義はいらねえんだよ、この糞ビッチがああああ!!!」

思わず唾をまき散らしながら叫び、そして強引にエクスカリバーを振るう。

それを、大して力を籠めずにゼノヴィアはエクスカリバーを弾き飛ばした。

一応破壊の聖剣を使って一蹴。まさしく相手になっていない。

単純破壊力において、エクスカリバーはデュランダルの足元にも及んでいなかった。

「……所詮は完全な合一に満たない聖剣か。デュランダルの相手にはならないな」

心の底からの落胆の声が届き、神経が逆なでされる。

それに目の前が真っ赤になった瞬間、殺気を感じて振り向いたフリードは天才だったしかし、それ以上い木場祐斗は優秀だった。

「見ているかい、皆」

一瞬の交錯は――

「僕らの力は、エクスカリバーにも負けなかったよ」

――その一閃で、血しぶきが舞った。

井草はフリードの表情が、諦めのそれになったことに気づく。

そしてフリードはエクスカリバーを投げ捨てると、イーツに変身して距離を取る。

「ちよつとボス!! これぼくちゃん聞いてない!! 流石に勘弁してよん!!」

心底文句を言うが、しかしコカビエルは聞いていなかった。

「……ストラーダの奴がデュランダルを預けるとは、本物だな。しかしまだぬるい部類なのが残念だ」

などつぶつぶつ言っているが、然しそれ以上に問題なのはバルパーだ。

自分の研究の成果がものの見事に敗北した。そのショックで動揺しすぎている。

「あり得ない。聖と魔のオーラは相反するのだ。混ざり合うことなど、それこそ神の奇

跡でも不可能だ……」

ぶつぶつとつぶやくバルパーを捕まえるべく、井草は一步を踏み出す。

そして祐斗もまた、聖魔剣を構えて一步を踏み出した。

「ここまでだ。おとなしく裁きを受けることをお勧めするよ」

祐斗は最後通告をおこなうが、バルパーは全く耳に入っていない。

そしてそのままぶつぶつとつぶやき、何かに気づいたかのように顔を上げる。

その目は、天啓が舞い降りた天才化のようなものだった。

そして同時に、自分に向けられたものではない殺気を感じてとつさに動く。

「そうか、そういうことか!!」

「……チッ」

舌打ちと共にはなれる光の槍。

放ったのはコカビエル。威力は低い、非戦闘員一人を殺すには十分すぎる威力がある、速射攻撃。

ゆえに井草が弾き飛ばすのは容易であり――

「――聖書の神もまた、死んだのか!!」

――ゆえに、その言葉が響いてしまった。

8話

その言葉に凍り付かなかつたのは、たつたの四人だつた。

一人は兵藤一誠。彼に關しては信仰に無頓着なところがある日本人ゆえの無知によるものだ。

一人はニング・プルガトリオ。彼女は悲痛な表情を、顔を真っ青にさせているアーシアとゼノヴィアに向けている。

一人はリム・プルガトリオ。かの嬢は明らかにあちやーという表情で額に手を当てて、そしてすぐに警戒しんをだしてコカビエルに視線を向ける。

そして、最後の一人であるコカビエルは、ため息をつくがすぐににやりと唇をゆがめる。

「……まあいい。どうせ戦争するなら、隠す必要もないな。教会の連中を混乱には落とせそうだし」

そういうと、バルパーに視線を向けた。

「正解だバルパー。証拠を見ただけですぐにそれを理解するのは、お前が優秀な証拠だ

よ」

「そ、そうか！ だから神器の持ち主の中には、そのプルガトリオ機関のように教会に近づけないものがあるー」

それ以上のバルパーの言葉は、井草の拳で遮られた。

ただでさえ衝撃的な言葉で混乱に陥っているのだ。これ以上ややこしいことをされては、状況がさらにややこしくなる。黙らせるのが優先だった。

しかし、是はかなり問題のある言葉だ。

アザゼルが、教会と天界は厄ネタを抱えているから和平に賛同する可能性は高いといっていたが、これのことかと納得する。

なにせ聖書の神をあがめる信徒は数多い。キリスト教とだけでも二十億人を超える。解釈の誓いであるイスラム教徒やユダヤ教徒を含めれば、地球人口の約半数に届く。止めに、その多くがすんでいる国は、世界大国や石油産出国だった。

この前提条件の崩壊が知れ渡れば、世界的な大混乱が発生することは想像に難しくない。

「嘘だ……嘘だあ!!」

「真実さ。バルパーが言っていた通り、聖と魔はよほどことがない限り交じり合わない。その聖魔剣が証拠だ」

その揺るがぬ証拠がある状況では、狼狽するゼノヴィアの否定の叫びもむなしく消える。

そしてゼノヴィアはデュランダルを取り落として棒立ちになった。

そして、同じぐらい衝撃を受けているものが一人。

「そんな……。それでは、神の愛は……」

アーシア・アルジエントは、コカビエルがそれを翻すことを期待して、うつろな瞳で言葉を漏らす。

これは何かの冗談だ。自分たちの混乱を生むための罠だと、心のどこかで言い聞かせて。

しかし、コカビエルはそれを鼻で笑った。

「死んでいる奴の愛など、どうやってもあるわけがないだろう」

その言葉に、アーシアは気を失いかけて崩れ落ちる。

それをイツセーが慌てて支える中、コカビエルはそれすらろくに見ずにさらにしゃべり始めた。

そこには、隠し事をようやく話すことができるもの特有の安心感がある。

ゆえにわかる。これは真実なのだ。

「まあ、聖書の神は奇跡をおこなうためにシステムを作っていたから、それをミカエルた

「ちがうまくやることで持ちこたえている。……それでも取りこぼしは増えるがな」

忌々しげにだがしかし誉め言葉がコカビエルから漏れた。

それはすなわち、忌々しい相手を褒めるぐらいにはセラフは信徒を救うために全力を尽くしていたということだ。

そして、その事実を聞いてリアスは歯を食いしばった。

聖書の神が死んでいたことは驚きだが、しかしそれはまあいい。

問題は、たった一つだ。

「だったら！　なんであなたは戦争にこだわるの!?　世界がそこまで来ているのなら、戦争なんて起こしていいわけがないでしょう!？」

そうだ。最早戦争の前提条件は崩壊した。

戦争を主導した四大魔王と聖書の神はすでにいない。墮天使側も、コカビエルだけが戦争再開を主導しているという。

理解ができない。意味が分からない。リアスにはその理由を推察することが全くできそうになかった。

そして、コカビエルはそれを不愉快な視線で見据えることで答えにする。

「下らん。ならばこそ、誰が世界の頂点であるかを決めるべきだろう。奴らはそれには興味がないようだが、俺にとってはそっちの方が重要だ」

その意味深な言葉に井草は眉を顰めるが、しかしコカビエルは気づかない。

憤怒の形相を浮かべて、コカビエルはそこにいないアザゼルに怒りの感情を叩きつける。

「それをアザゼル共は二度目の戦争はないだど?! そして神器などという玩具の研究にいそしみやがって!! 俺がどれだけ退屈したと思っっている!!」

それは心の底からの怒りだった。

同時に、どこまでも身勝手だった。

「俺は再び戦争を起こす。万が一のためのセカンドプランも用意した。それに、それを望むのは俺だけではないぞ?」

リアスたちをあざけるように、コカビエルは嘲笑を浮かべる。

その言葉と嘲笑に、井草是最悪の創造に思い至った。

「……まさか、この騒ぎは三大勢力合同で――」

「その通りだ」

その言葉に、ゼノヴィアは今度こそ崩れ落ちた。

リアスも愕然となっているのだ。すでに限界ぎりぎりだったゼノヴィアが限界を超えるのも当然だろう。

「おかしいとは思ってやがりました。もちろん上も」

リムは歯を食いしばりながら、コカビエルをにらむ。

そして、問いただすように声を飛ばす。

「聖剣を四つも盗めたのも、最初の討伐部隊がイリナとゼノヴィアの2人だけだったのも、教会の戦争推進派の手引きっすか!!」

「無論。悪魔側もここに潜入するのを手引きしてくれたぞ」

その事実は衝撃的すぎた。

仮にも全魔王死亡後に戦争を継続しようとした魔王の末裔たちを追放迄した現政権の中に、戦争の再会をもくろむ者がいるなど、リアスたちにとっても毒だ。

その事実にも誰かが震える中、コカビエルは莫大なオーラを放つ。

そこにあつたのは純然たる殺意と戦意だ。

彼は、真正銘本気で戦争を起そうとしているのだ。

「俺は一人でもやってやろう! 其のための兵器も手の内にある。そして、其れを望むのは三大勢力内部に腐るほどいる!! そう、我ら墮天使こそが至高の存在だと見せつけるのさ!!」

「ふざけるな!!」

その言葉に、相当で怒りの言葉が叩きつけられる。

静かにアーシアを横たえたイツセーが、先ほどのコカビエルに勝るとも劣らない怒り

の感情を視線でたたきつける。

「さつきから黙って聞いてりや、お前のそんな身勝手な欲望のために、俺のハーレム王の夢を邪魔されてたまるか!!」

その言葉は、理不尽に巻き込まれた人の特有の怒りだった。

「……それが望みなら、俺についてくるか？ 適当にいい女を見繕ってやるが」

「え、マジで!？」

そのコカビエルの返答に即座に霧散したが。

かなりの数がずっこけるのも当然だろう。井草も本当にこけた。

「イツセーくん！ ちょっと落ち着こうか！」

「イツセー！ あなたは何でそう平常運転なの!？」

渾身のツツコミが、井草とリアスの双方から飛び出した。

それで我に返ったのか、イツセーはピンと背筋を伸ばす。

「すいません!! ハーレムの言葉に抗いがたい魅力を感じまして!!」

流石に自分でもまずいと思ったのか、イツセーも即座に謝った。

しかし素直すぎる。素直に謝れるのは美徳だが、欲望に素直すぎるのは悪徳だ。

いや、墮天使や悪魔が多数を占めるこの場においては、実に場にあった人物なのかも

しれないが。

ともかくにも、これで空気が微妙に弛緩された。

なんとというか、微妙にやる気が薄れてくる。

リアスは特に荒れな気分になったのか、心底ため息をついた。

「……もしコカビエルを倒したのなら、好きにさせてあげるとでもいった方がいいのかしら」

「……吸つてもいいなら命かけます。ドライグ、代償は今度は何にすればいい!?」
すさまじい勢いで食いついた。

しかも、明らかにオーラ迄増大化している。すでに並の上級悪魔ならおののくレベルに迄高まっていた。

之にはさすがのコカビエルも、あきれるやら関心するやら、複雑な表情を浮かべている。

「……女を好きにできるといっただけでこの上昇率とは。お前、何者だ?」

その言葉に、イツセーは強い意志を込めて腕を突き出した。

その余波で校庭の隅にある木々が揺れる。衝撃波が結界にぶつかって轟音を立てる。

そんな割とインパクトのあることを、バカげた冗談の鵜呑みにして成し遂げたイツセーは、心の底から己を名乗り上げる。

「俺は兵藤一誠! エロと熱血に生きる、最強の兵士^{ポイン}になる赤龍帝だ!!」

「へえ。こんなところでお目にかかれるとはね」

その叫びに返答が返るとともに、結界が粉碎された。

そして白い輝きが、一瞬でその場に舞い降りる。

龍を模した鎧。背中から生える光り輝く翼。そして、観る者を圧倒するオーラ。

コカビエル相手に勝るとも劣らない力を放つ鎧が、この場のすべてのものの注目を集めさせた。

「……白い龍か」
アルビオン

苛立たし気にコカビエルはそうつぶやき、そして素早く光の槍を形成する。

「貴様も邪魔する気が、どこまでもアザゼルはふざけてくれる!!」

遠慮なく、その槍は鎧の男に放たれる。

一発一発が井草の本気に匹敵するだろう威力。それが一気に十数本。しかもすべてが人体急所を狙っている。

この場の誰もを圧倒するだろう其の力に、全員が目を見張る。

フリードがイーツになった上でエクスカリバーを使わなければ太刀打ちすらできないだろう。少なくとも、単独戦闘能力ならば今の井草すらまともに戦うことはできないはずだ。

それだけの威力の攻撃を、しかし白い鎧は躲そうともしない。

まず間違いなく死ぬ。そう確信した皆の前で、声が響く。

『あの程度ではな』

其の声は、イツセーの赤龍帝の籠手から響いた。

おそらくは、其の声の主こそがドライグなのだろう。かつて三大勢力の戦争に介入し、神器に封印されたウェールズの赤き龍。二天龍の片割れである、主神にも匹敵する存在だ。

其の声の主の余裕の発言に応えるかのように、白い鎧から音が響く。

『Divide!』

その音と共に光の槍は一瞬で弱体化する。

そして鎧にぶつかるが、それは傷一つつけることなく砕け散った。

「俺相手に手抜きができると思っただのか、コカビエル」

「チツ！ 相も変わらず忌々しい神滅具だ」

余裕の声を発す白い鎧に、コカビエルは苛立たし気に顔をゆがめる。

コカビエルの圧倒的な力も驚きだが、しかしそれを意にも介さなかった白い鎧も恐ろしい。

今ここに、神話の戦いが繰り広げられようとしている。

「……たしか、ヴァーリとか言ったっけ」

井草は顔合わせをしたことがあるような内容なそのものの名前を記憶から引き出した。

詳しいことは井草も知らない。だが、あのアザゼルの秘蔵っこにして、ある意味悪魔にとつて重要極まりない人物でもある。

それを伝えるとややこしいことになるので避けるが、然しこの場における最強戦力の片割れなのは間違いない。

「やあ、井草・ダウンフォールだったか。時間稼ぎご苦労」

「まあね。あとは任せていいのかい？」

明らかに能力を下に見ている言葉が飛んできたが、井草は意にも介さない。

上級墮天使と人間の混血である自分が、彼より格下なのは間違いない。

あらゆる意味で彼の方が自分より格上だとわかっているのに、気にする方が問題だとすら思う。

「自分ごときが彼と並び立てるなど考えてもいない。それが上級と最上級の間にあるとても高い壁であつた。」

『覚えておけ相棒。白いのは敵の力を半減しておのれのものとする。どうやら、この勝負はもう決まつたようなものだぞ』

「え、マジで!? 俺のおっぱいは!?」

ドライグの言葉にイツセーが愕然となる。

だが、勝負がもう決まつたという事実ではなく、ご褒美がもらえないということにシヨックを受けるのはいかがなものか。

やはりイツセーは煩惱に忠実すぎる。抑えを聞かせておいてよかつたと、井草は心から思った。

このままほおっておけば、落ちてはいけなところまで落ちてしまったかもしれない。それだけではどうしても見過ごせなかつた。

自分と同じところにまで落ちてくるなど、黙つてみていられるわけもない。

何とか押し上げることができたことに、井草はない心でほつとする。

その合間にも、コカビエルはヴァーリに劣勢に追い込まれていた。

すでに大幅に半減を受けており、コカビエルの戦闘能力は上級の下にまで落ち込んでいる。その分だけヴァーリは強化されており、実力差はどんどん開く一方だった。

「おのれえ！ この、俺が……っ」

「三流のセリフだな。そんなつまらない奴だから、アザゼルにいいように利用されるんだ」

ヴァーリはそう冷たく言い放つと、さらに追撃を叩き込み、地面にたたきつける。

その余波で校庭に大きなクレーターが生み出された。そしてコカビエルを血を吐いた。

ヴァーリはそれを詰まらなさそうに見ると、拳に力を籠める。

「そろそろ終わるか」

「糞が！ この俺が、この俺が……っ」

悔し気なコカビエルは急降下してくるヴァーリをにらみつけ――

「……こんな玩具おもちゃに頼ることになるとはな」

――勝利を確信して嗤った。

『タリスマン！』

その合成音声と共に、コカビエルが怪人へと変貌する。

その瞬間、ヴァーリを除く意識のある全員がイーツになったことを確信した。

フリードとバルパーがイーツである以上、コカビエルがイーツになることは想定できた。あまりの強さにそれが抜け落ちていただけだ。

「下らん。そんな玩具で何ができる」

ヴァーリは一切気にすることなく、拳を振り下ろし――

「――お前を倒すことはできる」

――それを意に介さず放たれたコカビエルの拳を叩き込まれ、宙に打ち上げられた。

9 話

打ち上げられたヴァーリは、少なくとも驚愕に実を染め上げられていた。

まともにやり合っても、自分はコカビエルより強いと思っている。

これに関してはアザゼルも同意見だった。だからこそ、自分をコカビエルの鎮圧に派遣したのだ。

まともに戦っても勝てる。さらに白龍皇の半減の力を使えば、コカビエルを雑魚同然にもできる。

だからこそ圧倒できたのだ。それほどまでに自分は強くなった。

そう、自分は強くなった。禁手を持続させることもできるようになった。覇をある程度運用することもできるはずだ。

そう、そしていずれはあの男を倒す。そこ迄の強さを得なくてはならない。

にもかかわらず、コカビエルごときに逆襲の一撃を叩き込まれた。

「馬鹿な!? この……俺が!？」

驚愕するヴァーリの視界に、コカビエルの姿が移りこむ。

そして、その視界は拳に埋め尽くされた。

鎧にひびが入り、そして地面に叩きつけられる。

自分がコカビエルを使って創り出したよりも大きなクレーターが生まれた。そして全身に衝撃が走って、思わず息を吐き出す。

「ガハッ！」

「三流のセリフだな」

さっきの意趣返しを行いながら、コカビエルは体の調子確かめるように、軽く動かす。

そして、視線をヴァーリに向けた。

「……まあいい。後の同胞をむげにすることもないか」

そして翼を広げると、破壊された結界の隙間から、外に飛び出した。

その明らかに見逃す体制が、非常に癪に障る。

「逃げる気か？ 俺を見逃して、後悔するのは貴様だぞ？」

「ふん。この程度の貴様なぞ、後でいくらでも倒せるさ」

「わけのわからないおもちやに頼っているお前に何を言う権利がある」

「神滅具というおもちやに頼っている貴様に言われたくないな」

ヴァーリの挑発すらサラリと受け流し、コカビエルは遠くに視線を向ける。

「これ以上闘つても望む結果は得られそうにない。なら、新たな戦争をするためにあそこに行くのも一興か」

その言葉に不安をあおられ、一同がいやな予感を覚える。

まさか、他の神話勢力に戦争を仕掛けるつもりなのか。

だがコカビエルはすでに組織を離反したようなものだ。神の子を見張るものは間違いないく追放処分をするだろう。これだけの事態になったのだから、悪魔側や天界側もそれを認めるはずだ。

単純にコカビエルが集中攻撃を受けるだけ。他の形など誰にも予想ができない。

しかし、コカビエルはなぜか不安の表情を浮かべ、そして飛び去って行く。

「戦争のときはもうすぐだ！ お前らにそのつもりがなくても、世界はそうではないことを知るがいい!!」

その言葉と共に、コカビエルは飛び去って行った。

「……………義姉さん。とりあえずこっちは無事だよ」

井草はそれから少しして落ち着いてから、ピスに電話をつなげる。

どうやら向こうも決着がついたようだ。墮天使とはぐれ悪魔祓いはほぼ壊滅。何人かがイーツになったようだがこちらも戦力をそれなりに投入していたので少ない被害で倒すことができた。

結果的に見れば、コカビエルによる戦争再開の危機は墮天使が積極的に動いて解決に尽力した形になるだろう。

だが、交渉は確実に難儀するはずだ。

なにせコカビエルは逃亡に成功している。これは墮天使の責任問題になるだろう。少なくとも、墮天使は身内の暴走を身内で解決することが不可能に近いということを証明していた。

しかも、謎の勢力と内通していると思いきフリードもいつの間にか姿を消している。

元凶の一人であるバルパーは捕獲で来た。だが、彼もまたイーツに変身してこちらに攻撃を仕掛けてきた。

イーツに関してまたも墮天使関係者から出てきたことになる。余計な誤解が広まるのも、時間の問題だろう。

これは、和平交渉の時は相当したでに出ないといけないだろう。

そう思うと、井草は責任を感じてしまう。

自分をもっと動けていればと、どうしても思っていてしまう。

……やはり、自分なんかでできることは大してないだろう。上級墮天使の血と、人間由来の神器を持っていてもこの程度のことしかできない。どこまでも自分は屑でしかなかった。

なら、自分にできることは何か。

決まっている。いつの間にかイーツになってしまったことを利用して、検体として墮天使の利益になることだ。

少しでも多くのイーツのデータを提供することができれば、墮天使の責任をある程度は晴らすことができるだろう。そのためには、イーツである自分の調査が必要不可欠。

そう。自分の死に場所がやっと出てきたのだ。

「義姉さん。それで次の検査はいつになるのかな?」

『ええ? 当分ないわよお?』

その言葉に、一瞬頭が真っ白になった。

何を言われたのかわからない。

イーツ製作者が自分達だと誤解される可能性が高い現状。そのデータを取ることで言い訳をする必要がある状況。イーツである自分は必要不可欠な検体のはずだ。

それが、当分ない?

『今回の件で一杯イーツを捕まえられたもの。まずは彼らを使って実験するのが先でしょお?』

「そんな! 彼らにだつて人権ぐらいはあるだろ!」

井草としては本気でそう言っていた。

以下に暴走して追放されてさらにまた暴走した連中といえど、最低限の人権は保障されるべきだ。

少なくとも、今ここに自発的に検体となる覚悟を消えた者がいる。自主的に検体になる者としてゐる者がいるのだから、自分が優先的に検体になるべきだ。

心底からそう思い、だからこそ語気も強くなる。

『—ふざけないでえ』

だから、その語気を強くしての反論に、気圧された。

『この事態解決に尽力した貴方をお、なんで私達が優先的に切り捨てなければならぬのお?』

悲しさも怒りも混じつたその言葉に、井草は反論を封じられる。

そして、何よりもそんな感情を向けられてしまうことが悲しい。

そんな価値のない存在に、立派な人物が一生懸命親身になってくれている。

それは間違っている。それはおかしい。もつと向けるべき相手に向けるべきだ。

心の底からそう思うが、そういう本音を言うたびに、彼女達は悲しそうな表情をしてみまうのだ。

自分なんかを大事にしてくれる、そんな立派な人たちが、自分のせいでそんな表情をすることに、井草は耐えられない。

だから、こういわれたらもうどうということもできない。

「……わかった。そっちは任せるよ」

『ええ。それと、当分は駒王学園こまおうがくえんに残って中継役をお願いねえ』

「了解了解」

そうできる限り笑顔を超えに乘せると、井草は電話を切った。

そして、心からため息をつく。

「……俺なんかが優先されて、長い年月を生きている古参の方々が酷い目に合うのか」

当然の報いではある。

彼らは上層部の意向を無視して暴走したのだ、それも、下手をしなくても甚大な被害者が生まれるであろう戦争を起そうとした。

それ相応の償いをしなくてはいけない。その罪に見合った罰を受けなければならぬ。それは当然のことで、井草としても反論はしない。

だが、最低の屑である自分が優遇されているのは、やはりどうしても違和感を覚えて

しまうのだった。

「……裏切り者」

そんな、悲しみに満ちた言葉を、井草は遠くから聞いた。

今は、戻ろうとしている教会の悪魔祓いたちをこつそり監視しているところだ。

万が一ばれても、自分なら共闘したものを見送りに来たといつてごまかせる。そういう判断から、気晴らしも兼ねて行った独断だった。

だが、逆にきが曇ってしまう光景を見てしまった。

よくはわからないが、どうやらゼノヴィアは残るようだ。それで紫藤イリナと揉め
いた。

そうこうするうちに飛行機の時間が来てこれだ。見れば、ゼノヴィアもどこか寂しそ
うにしている。

それが見ていられなくて、思わず声をかけた。

「やあ、どうしたんだ？」

「……ダウンフォールか。いや、実は私はリアス・グレモリーの眷属悪魔になってね」

……どういふ展開でそうなった。

声に出してツツコミを入れることすら困難なぐらい、井草はパニックを起こしていった。

それを気合で抑え込み、井草はジト目でゼノヴィアに視線をむける。

「紫藤イリナと喧嘩していたみたいだけど、そりゃケンカもするよ」

「といわれてもな。さすがに彼女に聖書の神の死を伝えるわけにはいかないさ」

と、ゼノヴィアは寂しげな顔のままため息をついた。

詳しく話を聞くと、聖書の神の死でやけを起こして教会をやめたいらしい。教会の上層部も切り捨てることを選んだらしく、デュランダルごとゼノヴィアを放逐したようだ。

教会の至宝ともいえるデュランダルすらあきらめてまで放逐するとは、よほど上層部にとつて聖書の神の死は鬼門なのだろう。

「だからって、転生悪魔になるのはやりすぎなのです」

と、そこに聞き覚えのある声が届いて振り返る。

そこには、私服姿のニングがあきれ顔で立っていた。

「言ってくればプルガトリオ機関に入れたのに、なんでわざわざ転生悪魔になったの

です?」

「……勢い任せで」

ニングの疑問に、ゼノヴィアは思いつきり視線をそらした。

そしてそれも納得の答えだ。

この女、勢い任せで人生を生きてないだろうか? そんなことを井草は考えてしまった。

「あの、そういう生き方見直した方がいいと思うけどね」

井草はそれを素直に言葉に乗せる。

流石に今回は考えなしだろう。信仰心の前提がなくなつたからといって、いきなり敵対組織に入るなど、勢い任せすぎる。

「そういう生き方は感心しない。勢い任せの人生は、どこかで致命的に道を間違えても戻れなくなるからね」

井草はゼノヴィアの両肩に手を置くと、静かにまつすぐその目を見つめた。

……彼女が自分のようになるのを見るのは嫌だ。それは、相手がだれであっても気がいいものではない。

だから、井草は心の底から本音を言う。

「ちゃんと周りを省みるんだ。そして、自分が本当に正しいか考えること。きっと、それ

が一番大事なことなんだから」

「あ、ああ……。わかった」

気圧されながら、ゼノヴィアはそう頷いた。

それを見て、井草はほっとした気分になる。

自分より上のところに押し上げることができて何よりだ。これをすっかり考えて行動してくれば、自分としても叱咤したかいがある。

なぜか、ニングがあきれた目線を向けていたことは黙っておこう。

「まあ、グレモリーにいるのがいやになったら私達にいうのです。プルガトリオ機関には、悪魔や墮天使のメンバーもいたりするのです」

「……それは節操なしではないだろうか」

プルガトリオ機関が暗部で、そういう立場の者たちを集めているのは知っていたが、しかしそれにしても悪魔や墮天使すら参入を認めるとは思わなかった。

ゼノヴィアも軽く引いている。まあ、コレ移管しては同意見だ。

それはニングも分かっているのか、こちらも少し苦笑いを浮かべていた。

そして、その笑顔もまたかわいらしいと、なんとなく井草は思ってしまった。

停止教室のヴァンパイア

1 話

夏。それは、水が恋しい季節。

夏。それはプールが気持ちいい季節。

井草もまた、プールで涼むことに否はない。

否はないが……。

「俺が墮天使だっけ忘れてないかい？」

「なんかもう、どうでもよくなってきたわ」

と、水着姿のリアスは、井草の指摘をサラリと受け流した。

今オカルト研究部は、生徒会からの依頼でプール掃除を行った。

そしてその報酬である、プールの初使用を楽しんでいる真っ最中だ。

イツセーは子猫とアーシアに泳ぎを教えており、なかなかいい雰囲気になっている気がする。

残念ながら祐斗は別件で外れていたが、しかしオカルト研究部の憩いの時間だ。

しかし自分はオカルト研究部だが、墮天使だ。オカルト研究部は本質的には、リアス・グレモリーとその眷属の集まりだということを忘れてはいけない。

神の子を見張るものは和平をしようと考えているが、然し現段階ではそれは墮天使側での希望に過ぎない。

悪魔側も和平には賛同すると予想されているがそれは予想だ。最低でも、そうだと断言されているわけではないのだから。

故に、こうして仲良くプールに入ること自体がどうかしているのだが――

「というより、あなたを經由してアザゼルに文句を言いたいよ。……営業妨害にもほどがあるって」

「……総督は何やらかしたのさ」

正直嫌な予感しかしない。

墮天使総督アザゼルは人格者である。

自分のようなものを受け入れるほどに器が大きい。研究者として超一流であり、その技術はそろそろ人工的な神器の開発に成功するだろうとまで言われている。カリスマ性は莫大で、多くの墮天使が彼に忠誠を誓っている。とどめに戦闘能力も墮天使全体で十指に入り、魔王と真正面から渡り合えるといわれているほどだ。

……そして同時に問題児である。

思い付きでわけのわからないものは作る。まあ大丈夫だと思つたら、平気で人を実験体にする。おまけに費用が足りないと思つたら、平然と神の子を見張るものの資金から横領する。

始末が悪いことに、それをなすための頭脳と技術力を持っている。つまり、彼の目論見は何らかの形で結果を伴つてしまうのだ。

結果としてその後始末に駆り出されたことなどいくつもある。

それは良い。自分のようなものがそう言うことをするのは当たり前であり、当然の義務だ。

だが、和平をするという時期に余計なことをしてつつき倒すいたずらは勘弁してほしいと心から思う。

「総督にはあとで怒っておくよ。……いっても聞かないだろうけどね」

「貴方も苦労してるのね」

心の底から同情の視線を浴びた。

納得できる境遇だと、自分でわかつてしまうところに不条理を感じた。

「で、何をしたのさ総督は」

「こつそり駒王町に潜入して、正体を隠したうえでイツセーのお得意様になつてたのよ」なるほど。井草は納得した。

いつまでたつてもいたずら心を忘れないアザゼルらしい。おそらく、イーツの研究も部下に投げてまでやりたかったのだろう。

まあ、アザゼルの専門は神器の研究だ。神滅具、それもヴァーリと対をなす二天龍の研究は優先的に行うことだろう。

……最も、単純にイッサーがからかいがいのある少年だと思っただけかもしれないが。

「……総督。そういうわけなんで、このデリケートな時期につつくのやめてください」

『悪かった悪かった。へんな先入観とかがないまっさらな状態の反応が知りたくてよ』

かけらも反省してないなと、井草はすぐに理解できた。

この男はこういうところがあるから困る。というより、勢力の将来がかかった重要な会談の前に何をやっているのか。

「……それで、イーツについては何かわかりましたか？」

『とりあえず、会談の時に提出できるだけのデータは手に入った。これで乗り切れると

は思うぜ?』

その言葉は信用できる。

アザゼルは研究者として一流だ。そして、神の子を見張るもの全体が研究機関としての側面を持つ。そして超一流の文字をつけるべきほどだ。

その神の子を見張るものが調べて成果が上がったのなら、確かに情報はつかめたのだろう。

最低限のデータは本当にとれたのだろう。さすがにそうでなければこんな遊びをするわけがない……と信じたい。

「それで、俺はいつ検体として出頭すれば?」

『いらねえよ。お前がぶん殴ったバルパーやら、コカビエルについた連中やらでデータは嫌というほど取れてる。なんで裏切つてねえお前をわざわざモルモットにする必要があるんだよ』

こちらもちちらでこの意見だ。

あまり言うど気に障られるかもしれないので言えないが、しかしそれでも気にしてしまふ。

「いや、俺つて結構経緯が不明ですし—」

『俺は俺の味方には優しいんだよ。だからお前にも優しくさせてもらうてんだ』

その割には、身内を容赦なく実験に巻き込んでいるような気がするのだが。

いや、気安い関係だからこそだと信じよう。もとい、信じたい。

『何が悲しくて、成果上げて尽力してるやつを酷い目に合わせる必要がある。俺はギャグで済む展開じゃなけりやあ、気のいいやつらを実験体にしねえよ』

「ギャグで済むならするんですか!?!」

最悪だこの男。自分とは別ベクトルで最悪である。

自分も人として最低の部類にいるという自負があるが、この男も別ベクトルで最底辺ではないだろうか。

誰だ、この男に権力をあたえたやつは。自分にそんなことを言う資格はないが、しかし一応誰かに代わっていつてやるべきかもしれない。

『ま、そんなわけだからそつちは任せる。俺はいつたん本部でデータをまとめとくから

』よ

その言葉と共に、通話が切れた。

井草はため息をつくとき、とりあえずスマートフォンをしまう。

さて、残りの時間で何をして過ごそうかと考えて――

「!?!」

いやな予感と共に最近会ったばかりのオーラを察知して、慌てて走り出した。

2 話

そのころ、兵藤一誠は、ヴァーリを名乗る少年の接触を受けた。

その名前は聞いている。イツセーはそれを即座に思い出す。

「あんたが……白龍皇？」

「ああ。そういう君が赤龍帝だったね」

そうさりと挨拶をするのは、銀髪の青年だ。

年齢は自分とそう変わらないぐらいだが、しかしどこか危ない雰囲気を見せている。

と、いうよりだ。

井草以外の墮天使とは、たいていの場合ろくな接点がないのがイツセーだ。レイナーレには殺され、その上司のコカビエルはこの街を吹きとばそうとし、とどめにトップのアザベルは自分の暗殺がらみを指令した男だろうし何より悪戯を仕掛けてきた。井草の義姉に関しては、接点が薄いのでノーコメントにする。

そんな存在の秘密兵器みたいな立場の者に接触されても、どう対応していいかわからない。

そもそもなんでこの学園に来たのだろうか。先日アザゼルが正体を隠して自分に接触した権威ついては、リアスが井草を経由して文句を言ってきたはずだ。

まさか、さらにちよつかいを駆けに来たのか。そもそも歴代二天龍はたいがいが激突を繰り返してきたはずだ。こいつもそれを望んでいる可能性は大きい。

イツセーは思わず身構えた。

「何だよ？ 井草さんからは何も聞いてないぞ？」

「井草………というと、監視役の名目で隔離されているあのハーフか」

一瞬考えこんだあたり、どうも井草のことすらろくに知らないらしい。

というよりだ。

今、明らかに気になることを言ってきた。

「井草さんが隔離って、どういうことだよ!？」

「言葉通りだ。彼は自分の死に場所を探している節があるそうだね。アザゼルはもの好きなのかそれを阻止したいらしい」

ヴァーリは特に興味なさげにそういう。

そして、その内容は、イツセーを驚愕させるには十分だ。

……死に場所を探している。それはつまり、井草は何らかの形で死にたいと思つてい
るということだ。

井草は常に自己評価が低い。口癖は「俺なんか」だと、詳しくする人物ならだれもが
知つて知っていることだ。

もはやそれは自己嫌悪の意気だろう。墮天使総督アザゼルから、直々に特使として送
られてきたのだ。それも、その前から魔王ルシファアの妹であるリアスの監視役に抜擢
される。

そんなもの、死にたがりに任せられることじゃないだろう。

なぜならアザゼルは戦争に興味がない。下手に死にたがりを監視役に送り込めば、悪
魔に打撃をあたえんと暴走して、特攻を仕掛けてくる可能性だつてある。

「……アザゼルは戦争をしたくないんじゃないのか？」

「だからさ。井草はコカビエルのような戦争屋じゃないらしい。そして彼は「殺されて
も懐が痛まないから、こんな危険な任務に抜擢された」と心から思いこんでいるそうだ」
イツセーの言葉に返答しながら、ヴァーリは肩をすくめた。

「だが実際は「あのバラキエルの娘を迎え入れるリアス・グレモリーなら、井草・ダウン
フォールを殺そうとはしないだろう」とアザゼルたちは考えてる。知らぬは当人ばかり
なり、さ」

その言葉に、イツセーは驚愕する。

バラキエルの娘というのがまずわからない。確かバラキエルというのは、墮天使の幹部だったはずだが、そんなものの娘をリアスは迎え入れているというのか。

娘といったのなら、その人物は少女だろう。そしてそんな人物が教会の非人道的実験に参加するわけがない。さすがのバルパーも気づくはずだ。

つまり、木場ではない。

当然イツセーでもない。ついでにいえば、シスターであるアーシアの可能性もない。

となると考えられるのは、小猫か朱乃、もしくははまだ紹介されてないもう一人の僧侶ということになる。

それについて考えようと思ったが、しかしそれより先にヴァーリは言葉を続ける。

「だがそんなことはどうでもいい。其れよりも、だ」

興味深そうな目で、ヴァーリはイツセーを見る。

そして不意に、彼の右手が持ち上がった。

「ここで二天龍の決着をつけるのもありだろう。今の君に呪いの一つでも掛けたら」

そして人差し指が向けられ――

「そこまでだ」

「その辺にしてもらおう」

―祐斗の聖魔剣とゼノヴィアのデュランダルが、ヴァーリの首元に突き付けられた。動けば切る、と態度で示す。そこには仲間を守らんとする確固たる意志があった。そしてそのためなら命をとさんという覚悟もあった。

そして双方ともに下級悪魔の次元ではない強さを持つ。祐斗はイレギュラー極まりない禁手を持っているし、ゼノヴィアもまたデュランダルの使い手だ。生半可な上級クラスとなら互角以上に渡り合えるだろう。

そんな猛者たちに剣を突き付けられ、ヴァーリはしかし余裕だった。

ここで攻撃を本当に仕掛けられて、自分が死ぬことなどありえない。相対で示している。

「やめておけ。震えているよ」

―そして、其れは二人ともよくわかつている。

彼が圧倒的強者なのは、コカビエルとの激突で嫌というほどわかっている。この状況ですら、逆に返り討ちにできる可能性の方が大きい。

コカビエルなら、確実に鼻で笑っていただろう。そして嫌みの一つぐらい確実に言ってきているはずだ。

しかし、ヴァーリに嘲りの感情はない。

「恥じなくていい。そういう者たちこそ強くなれ―」

それどころか賞賛の言葉を投げかけようとして――

「……ヴァーリ。その辺にしてくれないかな?」

そこに、井草が現れた。

相当機嫌が悪いのが目に見えてわかる。今すぐにも殴り掛かりかねないほどの怒りを持ちながら、然しギリギリのところまで抑えていた。

「それ以上悪ふざけをするなら、俺は死んでも君を叩きのめす。……総督の悪ふざけでただでさえリアス・グレモリーは機嫌が悪いんだ。ダメなところばかり似てるようだね」

「怖い怖い……と、言いたいところだけど、本当に死ぬぞ、君の能力じゃあね」

それは嫌だろう? と言外に告げるが、しかし井草は意にも介さなかった。

……否。

彼は、無自覚だろうが笑っていた。

ほんのわずかだが口角が吊り上がってる。

まるで、望むところだといわんばかりだ。それ以上に、それこそが望みだといわんばかりだった。

「君と違って、変わりはいくくらでもいる捨て駒だしね。そんなのが死んで会談が無事進むなら、神の子を見張るものにとっても都合じゃないかい?」

その言葉に、何よりイツセーたちが絶句する。

ヴァーリが言った通りだ。井草は死を恐れていない。

それどころか、まさにそれを望んでいる節がある。出なければ、無自覚に笑みなど浮かべるものか。

イツセーはその時になって、井草のことを何も知らないのだと思い知らされる。

自分に更生のきつかけをくれた恩人。駒王学園でも上位に位置する人格者。そして、組織の下した判断の殺しに謝罪し、アーシアを助けるために体まで這ってくれた好漢。

その彼の、裏の側面ともいえるものがさらけ出されようとしていた。

「まあ、安心してくれ。俺は弱い者いじめは好きじゃない。コカビエルとは違うんだ」

「そうかい。史上最強の白龍皇になるといわれた男は言うことが違うね。まだコカビエルに勝てないけど」

皮肉で返してくる井草に、ヴァーリはしかし肩をすくめるだけだ。

「まあ、俺もまだまだ最強には程遠い。あのサーゼクス・ルシファーですら十本の指には入らないだろうしね。まだまだ先は遠いさ」

「まあ、そうだろうね」

何やら意味深な会話が聞こえてくる。

ヴァーリはサーゼクスと何か関係があるのだろうか？ リアスとは似ても似つかない

いから、親族の可能性は低いと思う。そもそも髪の色すら違いすぎている。それについて聞いたただそうとしたとき。

「—どういふつもりかしら、白龍皇」

足音をあえて高く響かせ、リアスが敵意を向けた視線をヴァーリにぶつける。

「貴方は墮天使とつながっている。これ以上の接触は正式に抗議させてもら—」

「二天龍にかかわったものは、みな碌な生き方ができなかった」

リアスの言葉をさえぎり、ヴァーリはそう言い放つ。

その言葉い言いよんどんだリアスをみて、ヴァーリは疑問符を投げかけた。

「—貴女はどうなるんだろうな、リアス・グレモリー」

「馬鹿馬鹿しい」

挑発と受け取られかねないヴァーリの言葉に、井草が鼻息荒く声を荒げる。

「そんな事はそう簡単にはさせないさ。ま、俺の命ごときでどうにかできるかって言われると反論しづらいけどね」

何処まで行っても自分の価値を否定する井草の態度に、ヴァーリは今日がそれがれたのか、鼻を鳴らす。

「まあ、君たち全員力を蓄えるべきだ。この世の中、力のないものは強者に蹂躪されるのが基本だから—」

「いや、そう捨てた者ではないさ」

ヴァーリが言いたいことを言いつくすより先に、新たな参入者が現れた。

カソックを身にまとった一人の中年男性。灰色の髪を短く切りそろえ、黒い目を細めている。体つきはしつかりとしており、かなり鍛えられているのがよくわかる。

彼からはさつきも戦意も感じられないが、然しそれでもただものでないことがわかる。

なぜなら、炎に包まれた十字架のロザリオをつけていたからだ。

イツセーたちはそれを見ている。かつてレイナーレと対峙した時に、ニングとリムが持っていたものと同じだった。

「貴方もプルガトリオ機関の人なの？」

そう尋ねるリアスに、男性は軽く一礼する。

「プルガトリオ機関所属の、ヤーロウ・プルガトリオだ。三大勢力会談の時はミカエル様の護衛をさせてもらう。此処には下見で来ただけだし、一応事前に連絡が届いているはずだ」

「確かに、先日教会のものが下見に来るとは聞いておりますわ」

朱乃が肯定する中、ヤーロウと名乗った男性は、ヴァーリに咎めの視線を受ける。

「悪ふざけはほどほどにするといい。いかに君が強大であろうと、世界全てを敵に回し

て勝てるなどと奢ってはいないだろう？ 若さは武器にもなるが、若気の至りになってはいけないといっておこう」

「説法感謝する。まあ、俺もまだそんな気はないさ」

ヤーロウの説教もどこ吹く風。ヴァーリはつまらなさそうにため息をつくとき、そのまま歩き去っていく。

その背を見送りながら、ヤーロウは何かを危険視するかの表情を浮かべる。

「……危ういな、あれは」

そのつぶやきは、幸か不幸かリアスたちには聞こえなかった。

そして、誰にも勘付かれることなく、ヤーロウは柔らかな笑顔を浮かべると、アーシアに視線を向ける。

「君が、アーシア・アルジェントだね？」

「あ、はい」

素直に返答するアーシアに対して、ヤーロウは頭を下げる。

「改めて、プルガトリオ機関を代表して謝罪しよう。君が死にかけたのは、こちらの落ち度だ」

ニングとリムが謝罪したことを、改めてヤーロウは謝罪する。

それだけで、彼が高潔な人物であることがいやでもわかる。

「き、気になさらないでください！ 私は、イツセーさんと一緒に居られてとても幸せですから……」

そう顔を赤くするアーシアの返答に、ヤーロウは静かに顔を上げる。

そして、苦笑を浮かべた。

「なるほど、聖女といっても、女の子であることに変わりはない……か」

そういうと、イツセー達に軽く会釈をすると、彼もまた背を向ける。

「今度は会談の場で会おう。なに、ミカエル様なら悪いようにはしないだろうさ」

そしてゆっくりとした動きで、しかし遅くなりすぎずに、ヤーロウは去っていった。

3 話

そして、次の日。

井草は何事もなかったかのように登校していたが、然しきちんとやることはやっていた。

むろん、アザゼルに対する説教である。

頼むから好き勝手しない。そして部下の手綱を握る。

之を電話越しでありながら土下座までして要請していたため、割と眠気がある。

いつそのことピスに頼もうかとも思ったが、こちらはこちらで和平会談の警備の準備で帰ってきていない。

世の中、ままならないものである。

「ふわあ」

そんなあくびをしながら、校内を歩いて教室へと向かう。

そして、その背中を目撃した。

「あ、ゼノヴィアちゃん。おはよう」

「ああ、井草か」

サラリとゼノヴィアも挨拶を返す。

教会から派遣された聖剣使いが、魔王の妹の眷属となり、そして墮天使総督の名を受けた者とあいさつを交わす。

いろいろと異常極まりない光景だが、異形の存在を知らない者たちにはそんなことはわからない。

だからみな、そのままスルーしようとして――

「井草。私と子供を作る気はないか？」

――その言葉に全員がスツ転んだ。

それはもう、吉本〇喜劇も感心するほどのずっこけっぷりだった。

そして、真っ先に復活したのは井草だ。

このあたり、奇人変人とよく絡む経験のたまものである。

「とりあえずゼノヴィアちゃん、こっちにいこうか」

「む？ 何もこんなところでしなくてもいいんだが」

「しないからね」

井草は強引にゼノヴィアを引っ張ると、人気のないところで壁ドンを敢行した。

少女漫画とかで多用される壁ドンを、告白とかそういう感じではなく使用することに

なるとは、井草も思っていなかった。

しかし、どう考えても突拍子もなさすぎる。

とにかく話を聞き出そう。まずはそれからだ。

「どういふことかな?」

「なに、君は上級墮天使のハーフだそうだからね。……君と子供を作れば、なかなか強そうな子供ができそうだと思うんだ」

どこから突っ込んでいいか、井草には全く分からなかった。

落ち着け、井草・ダウンフォール。お前は愚図で塵屑だが、仕事はちゃんとこなしてきただろう。

ニングも手腕は褒めていたし、それはつまりそういう能力に長けているということだ。

おまえなら話を聞き出すことができる。がんばれ自分。

そう心に言い聞かせ、井草はとにかく話を聞き出すことにする。

「そもそも、何で高校生の立場で子供を作ろうなんて言ったのさ」

「ふむ。確かにそこから話すべきか」

そこからも何も当たり前である。

「井草。私は今まで信仰のために生きてきた。それで十分だと思っていたよ」

信仰の徒としては、ある意味理想的だろう。

もはや趣味も生きがいも信仰のために生きること。世界がそう言う人物だらけなら、世界はある意味平和だったかもしれない。

だが、その前提は崩された。

信仰心の強さは、聖書の神の死によって反転する。その絶望は、彼女を衝動的に悪魔に転じさせるほどだった。

「だから、悪魔になつてからどうすればいいかわからなくてね。リアス部長に相談したんだ」

「……あの子、意外と貞操観念硬いところあるよ?」

子作りに専念しろなどというあほなこととは言わないと思うのだが。

「ああ。リアス部長が仰つたのは「悪魔は欲望に生きるもの。好きに生きろ」とのことだ」

なるほど、つまりは自分が望むことをしろと。

……で、その結果が――

「そして私は思った。なら、信徒の時は考えもしなかった女の喜びを知ろうとね」

なるほど。確かに子どもを生み出すのは女の特権だ。男は子供を孕ますことはできず、自らの体内で育てることはできないのだから。

そういう意味では悪魔らしい。悪魔は欲を司る生き物だから、種の保存本能という名の欲望を欲するのも当然だろう。

……だが。

「ゼノヴィアちゃん。目先の性欲にかられるのはよした方がいい」

それは、井草としては認められない。

「いや、私は赤龍帝のドラゴンの血や、貴方のような上級墮天使の種を取り込みただけなのだが——」

「いや、それでもだよ」

井草としてはそれは見逃せない。

「短絡的に性欲に従うのはダメだ。それはあまりにも綱渡りが過ぎるし、下手をすれば最低なことをしでかすことにもつながるからね」

ゼノヴィアに届いてほしいと、井草は真剣にそう言い聞かせる。

自分と同じところに堕ちてほしくないと、強く心から願っているから。そんな人たちがいなければそれに越したことはない、本音で信じているから。

だから、なんとしても説得しなければならぬと心から説得する。

「そういうのは、もっと考えて行動するべきだ。初めて会ったときから思ってたけど、君はちよっと即断即決すぎるよ」

「そ、そうか？ これでも一週間ぐらい考えてたんだが」

ゼノヴィアとしては微妙に心外だったらしいが、しかし井草からしては足りないレベルだ。

「じゃあ言い換えるよ。考えが浅い」

酷い言い方ではあるが、これのゼノヴィアの為だ。

井草はあえて心を鬼にして、そう告げる。

「子どもを育てるのは大変だし、SEXつてのはお互いがお互いを想ってするべきだ。今の君は子供が欲しいという感情が強すぎて、独りよがりで考えなしになってる」

それではだめだ。

一時の衝動に突き動かされて、客観的かつ俯瞰的な視野が足りてない。

このままうかつにことに及んでも、それは誰かが後悔するだろう。

それは、黙ってみているわけにはいかなかった。

「第一、俺なんかの子供をはらむなんて屈辱以外の何物でもない。子供にしたって俺なんかを父親にするなんて死んでも御免だろう。そういうところが考えが浅いって言うんだよ」

「……貴方は自分を卑下することがまず考えの根幹にあるな」

あきれたのは心からの心外だった。

それはともかく、今日は公開授業の日だった。

厳密に言えば授業参観だが、しかし中等部などの生徒も見ることができたため、公開授業の方が正しいだろう。

まあ、それにしても親がいない自分にとっては意味がない行事だ。そういう意味では気が楽だ。

加えて授業は英語。個とヒアリングに関しては種族特性で万能といってもいい。書き取りに関しても二年分年上なのでアドバンテージはある。

だから変な方向で恥をかくこともない。失敗する可能性は低いだろう。この想定は、色んな意味で大外れだった。

「……井草あ、大丈夫う？」

まずピスが来ているという想定外の事態が発生した。

確かに戸籍上は義姉ではあるし、保護者でもある。彼女は立場的に来てもおかしくない人物だ。

だが、まさか仕事に休暇を入れてまで来るとは思わなかった。というより、快諾した神の子を見張るものの上層部の判断も驚きだ。

そして、ピスはものの見事に井草を心配していた。

理由は単純。

「あの先生。やっぱり紙粘土は英語と関係ないと思うんです」

「そんな事はありません。こういう英語もあります」

—紙粘土で工作をしろなどという授業では、色んな意味で大丈夫か聞きたくもなるだろう。

具体的には、こんな授業を考えた教師にだ。

これは英語ではなく図画工作だ。もう一度言うが、断じてこれは英語ではなく、完膚なきまでに図画工作だ。いろいろおかしい。

だめだ。これはツツコミを入れなければならない。

万が一にでもほかの生徒にツツコミを入れさせて、万が一にでも内申に響いてはいけない。あり得ないとは思いますが万が一の可能性はきちんと考えるべきだ。

必然的に、自分のようなものが傷を背負うべきだ。

「先生！ 真面目に授業をしてください!! こういうネタ授業は公開授業でやったらいけないかと！」

「何を言いますか！ 私は公開授業では毎回こうしてます」
なぜクビにならない!?

井草は声に出しかけたツツコミをkarouうじてこらえた。

自分ごときにそんなことを言われたら、シヨックで先生が寝込むかもしれない。明らかな問題行動な気がするが、その報いがそれでは酷いだろう。

と、いうわけで何とか精神力を全開にして授業内容の改善を試みる。

「俺なんかツツコミ入れられるんですよ!?! もうおかしい以外のなにもでもないじゃないですか!!」

「何を言いますか。君のような優等生にツツコミを入れられるのはそんな問題行動ではありません」

なぜ周りの人物は自分の評価が高いのだ。

理不尽を感じて頭を抱えたくなった。

自分は小物であることを自覚している。故に謙虚に生きているだけだ。

世の中、素晴らしい人物が優遇され、罵倒されるべき人物がひどい目にあうべきだ。因果応報は必要不可欠だといってもいい。徹底しすぎているのは問題かもしれないが、ある程度は機能するべきだろう。

それなのに、なぜか自分は評価が高い。

この流れはどうかしなければいけないと切に思う。確かに自分は反省しているし後悔もしているが、然しやらかしたことは事実なのだ。それ相応の立場でいるべきだろう。

罪人には罪人の礼儀がある。井草はそう思っていた。

「先生。前から思っていたんですが、俺なんかを高評価するのはあまり―」

「……む!？」

その言葉をガン無視して、英語教諭は視線をイツセーに向ける。

そこには、リアス・グレモリーの裸婦像が出来上がっていた。

ちなみに、完成度に関してはまず間違いなく最高水準だ。普通に商売にできるレベルだろう。再現度が高すぎる。

「……おお!？」

作ったイツセー迄驚いている。鼻血を流していたところを見るに、妄想しながら作っていたらしい。

ほぼ無自覚でこのレベルのものを作る。いつも思うのだが、スケベ根性でパワーアップしすぎではないだろうか。

「どうするんですか先生。イツセーが変なことしてますけど?」

「……私は、また一つ生徒の才能を発揮してしまった。素晴らしい」

井草のツツコミが完全スルーされている。それも、感動の感情で聞こえてない感じだ。

確かにできるは良いから当然といえば当然だ。それについては、芸術に興味があるわけでもない井草にもわかる。

だが、高校生が裸婦像を描くのはいただけない。それも、想像で書いたとはいえ実在する人物だ。第一主の裸である。

いろいろな問題になるから、とりあえず壊すように言おうとし――

「――五千!!」

その言葉で、授業は事実上の中断を迎えた。

ちなみに、イツセーは断固として売らなかつたことだけは伝えておこう。

「まってええええええ！ ソーたん!!」

「昔の呼び名で呼ばないでください!!」

今一瞬、涙を流すソーナと、追いかける魔法少女のコスプレをしたソーナそっくりな

少女が見えた気がする。

ちなみに声も聞こえた。

まあ幻覚だろう。そして幻聴だろう。

井草はそう自分をだますと、ジト目をピスに向ける。

「仕事抜けてまで来るのはどうかと思うけど？」

「大丈夫よお。……前から有給申請してるからあ」

いつ申請したのか。いや、公開授業そのものは昨年もあったから、前もって申請していたのだろう。

しかしだからといって、この忙しくなってしまった時期にそれはどうかとも思う。

「俺なんかのために急務を止めたりしないですよ」

「貴方だからこそよお」

さらりとかわされた。

いつものことだが、この義姉にはかないそうにない。一見するとのんびりしているし、実際面倒くさがりだが、仕事はきちんとするし実力もあるのだ。

その彼女が、自分なんかのために態々時間を割いてくれる。

……その価値がない自分がそんなことをされることに、心苦しい思いがあった。

4 話

兎にも角にも、この会談は何としても和平成立で終わらせる必要がある。

イーツ関連で余計な疑いが入りかねない以上、墮天使は何としても和平を成立して、天界と教会、そして悪魔の力を借りる必要がある。

へたをすれば他の神話勢力が動き出しかねない程、近年のイーツ事件は頻発化している。

世界各地でイーツが出現し、その不意打ちじみた突発性ゆえに、各地で被害は悪化の一途をたどっている。

人間サイズであり、下位の異形に匹敵する戦闘能力を持ったイーツ。軍事部隊が到着するのにも時間がかかり、それまで百人単位の死傷者が生まれることもざらにある。

これが墮天使の仕業だと誤解されれば、あらゆる神話勢力が敵に回るだろう。

その前になんとしても、三大勢力間での情報共有を行う必要がある。そして無罪であることを証明する必要があるのだ。

何より、イーツに関してはそれ以上の危険性もある。

現状どの勢力も、人間世界に不意なかわりはしないのが暗黙の了解だ。

それは傲慢な物言いだ、人間の欲望と技術力の発展を警戒しているからである。人間の急激な技術の発展。ここに異能が絡めば、それは爆発的に発展するだろう。

その結果、人間は核すら超える脅威を生み出し、そして自らの争いで使用するかもしれない。

その結果は人類滅亡すらありうる。それも、自分たちの勢力を巻き込んで滅びることだつて十分あるのだ。

ゆえに、どの勢力も人間世界を大きく巻き込む形での活動はしていない。教会ですら、血で血を洗うような悪魔や墮天使との戦いを表ざたにはしていない。

しかし、イーツは表にも裏にもばらまかれている技術。これはその均衡を崩すことすら十分あり得る。

それに対抗するためにも、被験者を大量に確保することができた墮天使陣営が他の勢力と協調を取ることは必要だ。

最低でも三大勢力で和平することは必要だろう。すでに主要な戦争継続派は死ぬか追放されるかされている以上、現状の主流派同士で敵対するなどあつてはならない。

……そして、自分がその礎となるのは名誉なことだ。

そんな素晴らしいことのためにこの命を燃やせるのなら、自分を少しは赦せるのかも

しない。

井草はそう思い、睡眠時間を削ってまで、自主的な行動を行っていた。

墮天使側の視点での詳細な報告を行うため、何度も資料を作り直した。

会談の会場となるこの駒王学園の自主的な警備も行っている。何度も何度も巡回したし、その時間も意図的にランダムにすることで警戒度を高め、隙あらば入念に確認した。

—そして今日もまた、自主的な警備を行うべく、裏の林を確認して—

「とりあえず、そのヴァンパイアには赤龍帝の血を飲ませることをお勧めするぜ。神器の成長にはドラゴンの血を飲ませるのが手っ取り早い」

「……騙す気じゃないだろうな？」

アザゼルがイツセーたちに助言をして、深読みしたイツセーが警戒していた。

「何をしてるんですか総督!」

思わず殴りにいかずに、ツツコミを入れるだけにとどめた自分を褒めてやりたい。

余計に刺激するなと懇願したはずなのに、懲りずにまたこっちに來ているとはどういうことだ。

しかも、私服によく使っている着流しだ。相当お気に入りの奴を使っている。完全にプライベートだ。

「なんだ井草か。お前からもうちよつと助言つてものを―」

「―副総督。総督がまたグレモリーにちよつかいかけてます。説教の準備をお願いしたいのですが」

即座に連絡を入れる。

アザゼルは何か言っていたが、意図的に無視した。

流石にそろそろ我慢の限界である。これまで以上に神の子を見張るものはアザゼルに監視をしなければならぬということがよくわかった。ひどすぎる。

悪戯好きで好奇心旺盛にもほどがある。者には限度があるし、これは限度を超えかけている。しかも自分の友人^{イッ}に迷惑をかけられては黙つてられない。

いくら相手が自陣営の指導者とはいえ、諫言や苦言は呈すべきだ。自分なんかにいわれることは苦痛だろうが、必要な時はある。それに自分のようなものなら罰せられてもそれほど組織の不都合にならないだろう。

あらゆる理由で密告を行うことに否はなかった。

「お、おま!?! シェムハザはうるさいんだぞ?!」

「だからしてるんですが?」

慌てるアザゼルに、井草はにっこりとほほ笑んだ。

いい加減にしないと一発殴るぞダメリーダー。

そう思い始めている心の声よ届け。っていうか本当に処罰覚悟で言ってるのか。俺はいつでも処刑上等だ、この野郎。

割と本気でそう思っているのが届いたのか、さすがのアザゼルも一步引いた。

「……わかった。もう帰るからバラキエルにまで連絡しようとするのやめろ!! あいつ近くに來てるから、二重に説教受けるじゃねえか!!」

譲歩を引き出せたので、とりあえずスマートフォンはしまうことにする。

相も変わらずこの人には時々困らされる。真剣に組織で対策会議をしてもらおうべきだろうか、そろそろ本気で考えてしまう。

流石のこのピリピリしている非常時に子の悪戯はやめてもらいたい。しかもターゲットが自分の友人ならなおさらだ。

「ゴメンイッサー。……あれ? そちらのお嬢さんは?」

みると、そこには見慣れない少女がいた。

金髪赤目の少女だ。歳はイッサーより少ししただろうか。駒王学園の制服を着ているが、こんな美少女なら噂の一つや二つにはなつてないとおかしいと思うのだが。

などと思っていると、近くにいた匙が肩を落とし、イッサーも視線をそらした。

「井草さん。こいつは男です。女装が趣味な、部長のもう一人の僧侶ピシヨップのギヤスパーク・ヴラディです」

……まあ、趣味は人の自由だから、迷惑をかけない限りは良いだろう。

井草はそう判断して、即座に視線をアザゼルに向ける。

「で、何を適当ぶっこいたんですか？」

「嘘はついてねえよ。そのヴァンパイアの停止世界の邪眼が制御できてねえから、制御方法のアドバイスをそいつらができる範囲でしてやっただけさ」

……なるほど。今まで井草にも教えられてないわけだ。

停止世界の邪眼はかなり強力な神器だ。おそらく神滅具に次ぐレベルの神器だと思われる。

それを制御できていないというのは問題だ。視線が合ったものを手当たり次第に停止させかねない。下手をすれば、常時停止効果を発動させるという排除も考慮しなければならぬ事態が起きかねないのだ。

これが神の子を見張るものなら、すぐにでも制御装置を着用させるところだが、悪魔側はそんなことをしている様子もない。

おそらくそこまで研究が進んでないのだろう。これは和平を進めるにあたって交渉材料を増やすという意味ではいいことだが、リアスたちにとっては大変なことだろう。

つい苦笑して、井草はギャスパーに近づくと、その肩に手を置いた。

「ひ、ひいいいいい!? 墮天使いいいいい!?」

邪眼が発動するが、停止することはない。

上級クラスに位置してゐるものまでは停止できないのだろう。もしくは、自分の中にあるイーツに変身する力の根源が効果を發揮している可能性もある。

それはともかく、井草はそのままポンポンと軽く励ますように叩く。

「……いろいろ、大変だったろうね」

神器の制御がうまくいかないものは、その大半が人生をうまくいかにさせることができないものだ。

聖書の教えが神器の存在を公表して、彼らを崇めるように指導していったのならそうはいかなかったかもしれない。そうなれば、彼らは神の寵愛を受けた者として聖書の教えでは厚遇されただろう。

だが、聖書の神が死んだことで、そももいかなかった。

混乱を避けるためか、聖書の教えは神器の存在を公表しようとしなない。その結果として、能力を人前で発現させてしまった神器使いは、往々にして迫害されている。教会の中ですら、一部の神器使いが追放されているという体たらくだ。

特に制御できていないものは大変だろう。自分の意志で抑え込むことができないから、なおさら迫害されやすい。

だが、少なくとも三大勢力内でもう少しの辛抱だ。

……和平が成立すれば、という前提条件は付く。だがそうすれば、暴走する神器を制御するための装置を提供することも可能だろう。少なくとも、これによつて切り捨てざるえなかつた者たちは大幅に減るはずだ。

「あとちよつとだから。だから辛抱してね？」

言いたいことはちゃんと云つた。

これ以上怖がらせるわけにはいかない。別のそのつもりはないのだが、井草自身が墮天使であることもあつてか、かなり警戒されているようだ。

と、言うことで井草はアザゼルの耳を引っ張りながら、さつさと帰ることにする。

「ほら、帰りますよ総督。ごめんねイツセー君。僕はこの人に説教しとくから」
「痛い痛い！　痛いから指離せ!!」

そんなものはガン無視だった。

「で、懲りてないんですか、総督？」

井草はとりあえずてきとうなカラオケボックスに総督を叩き込むと、そのままドスの利いた声で問いただす。

上下関係はこの際言葉遣いだけで置いておく。

この男には説教が必要だと痛感した。いや、説教だけでは足りないので場合によっては折檻もいるだろう。懲りさせないといけない。

むろん総督にそんなことをすれば厳罰ものだが、自分が厳罰を喰らっても何の問題もないだろう。最悪極刑ものだからこそ、こういうのは自分の役目である。

「いや、聖魔剣の奴はまだ見てないから、ちよつとのぞき見に——」
「あん？」

とりあえず光力の槍を出してみる。

本気とかいてマジと読む状況なのを察して、アザゼルはひやりと汗を一滴たらした。ここに至つてアザゼルはようやくよく理解したのだ。

この男。マジだ。

「わかつたわかつた。会談まではもうしねえよ。わかつたからその槍を仕舞え」

ものすごく疑わしいが、一応言われたとおりにしよう。

「あのですね総督？　今、神の子を見張るもの《グリゴリ》は大ピンチなんです。冤罪でつぶされかねないんですよ？　わかつてますか？」

「わかつてるってわかつてるって。ただそれ以上に好奇心が先行したただけだよ」

馬鹿が馬鹿な子をばかげた口調で言ったので、再び槍を展開した。

やはり一度痛い目を見なければ懲りないようだ。しかし相手は総督なので、やったら敵罰ものだ。つまり自分がやるほかない。

すさまじいまでの己を卑下する性質ゆえに、井草はためらわずに一発急所を外して突き刺そうと試みる。

そこに遠慮はない。躊躇もない。躊躇いもない。

罪悪感はあるがやるしかないので仕方がない。

条件反射でアザゼルが交わしてなければ、本当に脇腹に突き刺さっていただろう。それ位には威力のこもった一撃だった。

「うおおおおい!! 待て、俺が本当に悪かった!! 控える!!」

流石のアザゼルも本気で慌てる。

この男、自己犠牲精神が強いというよりは自己保身を考えてないから判断が速い時は非常に速い。

自分以外に責任を取るものがないと判断したのなら、「まあ俺が死ぬなら問題ないか」などと一瞬で結論付ける。其れゆえに恐ろしいまでに判断が速い上に、躊躇なく行動してしまう。

この問題点をどうにかしなければいけないとは思いますが、さてどうしたものか。

数年越しで考えている事案を改めて考えながら、アザゼルは両手を上げて井草を落着かせる。

「お前には会談に参加してもらわねえと困るんだから、頼むから落ち着いてくれ」

「会談に？　俺なんかが参加したら堕天使の心象が底値を割りますよ？」

本気でそう思っている井草にため息をつきながら、アザゼルはとにかく話を続ける。

方向を変えないと本当に刺されそうだ。自己犠牲で済む範疇内なら遠慮なく行動するこの男は本気でやる。

「悪魔側はリアス・グレモリーたちが参加決定。天使側もニング・プルガトリオとリム・プルガトリオを連れてくるって連絡がきた。だとするのなら、俺もお前を連れてこないと形が整わねえ」

「……紫藤イリナって子は？」

井草はふと気になって質問を出す。

あの事件でコカビエルと相對した面子が参加するのなら、当然彼女もかわると思つたのだ。

これ幸いとアザエルは速やかに唇を動かして言葉を作り出す。

「奴はミカエルから出さないと連絡がきた。……聖書の神の死をうかつに公開するわけ

にはいかねえからな」

「なるほど。確かにそうですね」

信仰心が高い心とにとって、聖書の神の死は劇薬以外の何物でもない。

うかつに知れば信仰心が崩れさる。下手をすれば、狂喜に取りつかれて暴走するだろう。自殺に走る可能性だって十分にある。

そういう意味では、熾天使ミカエルの判断は当然だった。

下手をすれば、枢機卿の中にも知らないものはいるかもしれない。そんな危険な情報を、うかつに他者に教えるわけにはいかないだろう。

「この会談、前提条件として聖書の神がくたばったことは話すだろうからな。お前もそのつもりで頼むぜ」

井草にそう念押ししながら、アザゼルは考えを巡らせる。

このチャンス逃すわけにはいかない。この機に和平を結ばなければ、三大勢力はいつか必ず共倒れだ。どこかの神話勢力に付け込まれるか、自分達だけでくたばるか。そのどちらかしかない。

それに、神の子を見張るものがイーツを生み出したわけでないことを知らしめるためにも、三大勢力だけでも査察団を送ってもらふ必要もある。

このチャンス、生かせば墮天使陣営は首を皮をつなげるが、逃せば確実につぶされる。

墮天使総督として、アザゼルはこれでも決意を決めている。

幸い、こちらにはイーツ関係で確保した実験体からとったデータと、神器に関係した様々な技術がある。

これを生かせば勝ち目はある。そして、其れをつくことにためらいはなかった。

—たのむぜえ、サーゼクスにミカエル。お前らだつて戦争も共倒れも御免だろ？

あのお人よしたちに期待し、アザゼルはそのあと—

「あ、それはそれとしてまず俺から説教させていただきますから」

—悪ふざけの責任を負い、しっかりと説教を受けることとなった。

5 話

そして会談当日、井草は正直居心地が悪かった。

自分なんかがこのような大それた場所に立つ事もそうだ。へまをするかもしれないので、色々緊張感漂うだろう場所にいるのはそれだけで思う所がある。

それに、付き合いが長いのである程度気心の知れたアザゼルはともかく、近くにいるヴァーリが気になる。

アザゼル曰く「史上最強の白龍皇になる男」だそうだが、アザゼルを挟んで自分が隣に立つ事が、とても場違いに思えてしまう。

それに――

「……」

無言で笑顔を向けてくるニングに対して、思うところはあある。

一応和平を結ぶつもりではあるが、それにしたって今は問題だろう。

もう少し緊張感を持つべきだと思うのだが、ニングは割と自然体でミカエルの後ろに立っていた。

「ほほう」

そしてリムもまた、そんなニングと自分を見てにやにやと笑っている。

そして視線がアザゼルと繋がる――

「……っ」

二人してサムズアップをするのは勘弁してほしいものだ。

「さて、そろそろ緊張感を持つべきだぞ。ミカエル様に失礼が無いようにな」

「はっ！」

ヤーロウがとりあえずたしなめ、それに反応して二人とも背筋を伸ばして直立不動の体制になる。

その対応に、彼らの前で座っている男性が苦笑した。

彼こそが、聖書の神亡き今展開をまとめ上げるセラフのリーダー。熾天使ミカエルである。

「そこ迄緊張しなくても構いません。サーゼクスもアザゼルも、この場で争うような真似はしませんよ」

「いえ。一応TPOは弁える必要がありますので」

ミカエルにそう返答するヤーロウだが、しかし表情は柔らかい。

とりあえず警戒はしているが、しかしこの場で三大勢力の三つ巴の戦闘になる事も考

えて内容だった。

まあ、当然といえれば当然だ。

天使側が何を考えているか分からないが、悪魔側と墮天使側は事を積極的に起こす気はないと推測する事は容易だ。

この駒王町は悪魔側の縄張りだ。そんなところで悪魔側が問題行動を起こすのは避けたがる。

墮天使側はコカビエルの暴走に積極的に対応した。ゆえに、今の状況を悪化させる事は考えづらい。

そういう意味では天使と教会が一番の警戒対象だ。

善と正義を展開する側である為、逆に一番暴走しやすいともいえる。人間、正義が自分にあると妄信した手合いほどリミッターが外れるものなのだから。

だが、その天使・教会側が落ち着いているのなら、この会談が物別れに終わったとしてもいきなり殺し合いにはならないだろう。

ならないとは……思うのだが……。

「……総督。外、ここよりピリピリしてませんか？」

外で警備をしている者達の睨み合いを見ると、問題が起きそうで怖い井草である。

「ま、長年睨み合ってきた連中同士が顔を突つき合わせるんだからそうなるだろうよ」
「その通りです。まあ、こちらで何か問題でも起きない限りは動かない人物を選んでますので、ご安心ください」

「最悪の場合、手を出した陣営をその陣営の長が処罰すれば示しはつく。落ち着いてくれて大丈夫だ」

などと三大勢力のトップが行ってくるが、自分如きには到達できない境地な気がする。

「まあ、俺としてはそうなってくれた方が面白いんだけどな」

「ちよつと黙っててくれないかな、白龍皇」

この男を真つ先に倒すべきかもしれないと思い始めてきた。

とは言え、現状実力差は大きく開いている。今ここで揉めても勝てる可能性はごく僅かだ。黙って見ている他ない。

などと不安がっていると、ノックの音がした。

「失礼します」

そして、リアス達が姿を現した。

……ここから、会談が始まる。

三大勢力の戦争の行く末。ひいては、堕天使の未来を駆けた会談が始まろうとしてい

た。

結論から言うと、井草はとても疲れた。

会談自体はスムーズに進んだのだ。サーゼクス・ルシファーやセラフオール・レヴィアタンの後ろで緊張していたリアス達も、少し肩透かしを食らっている印象があった。

「やはり、我々としてはこういう方向性で行きたいのだ」

「それはかまいません。こちらとしてもその辺りの意見は統一しています」

「それは良かったのねん。これは平和的にいきそうだわ」

などと、ルシファーやミカエルやレヴィアタンは和やかに会話していると云ってもいい。

会談そのものは終始平和的なムードで進んでいる。

どうやらこの勢力も、これ以上戦争を継続する意思がないらしい。

「……ま、俺らはその辺どうでもいいんだがあ痛つ!？」

時々からかい半分でアザゼルが引つ掻き回すが、その場で井草が後頭部を叩きのめし

て黙らせている。

「馬鹿総督がすいません」

「いや。彼がそう言う人物なのは知っているから安心したまえ」

「そうです。貴方もそんな人の下で苦労しているでしょう」

「駒が余ってる子を紹介するのよん？」

真剣に謝罪していると、三人とも穏やかな言葉で励ましてくれる。

それはとてもありがたいが、とても絶えられない。

「そんな!? 俺なんかの為にそんな優しい言葉を投げかけるだなんて!! そういうのもつとこう、立派な人!!」

「……アザゼル、彼はいつもこういうのですか？」

「悪い。全然治らなくてなあ」

アザゼルが同情された。解せぬ。

とにかくそんな調子で会議は進み、そしてコカビエルの暴走についての話について進んだ。

その報告そのものはリアスが担当した。そもそもこの駒王町は悪魔の縄張りだからだ。その担当官であるリアスが報告するのは当たり前である。

ちなみに、リアスが終始イツセーの手を握っていた事については大半が微笑ましい気

持ちになっていたが、当人達は全く気付いていなかった。

「……以上で、報告を終わります」

「ご苦勞様。もう座つていいよ、リアス」

サーゼクスの勞りの言葉に、リアスは小さく息を吐いて席に戻る。

そして、視線がアザゼルへと向けられた。

「今回の件、アザゼルとしては何か補足する事はあるかね？」

これはある意味で糾弾ともとれる。

なにせ今回の件、墮天使側の監督不行き届きであると言われれば反論できない。少なくとも、コカビエルを抑えきれなかった事は責任問題だろう。

ゆえにその反応で推しはかろうとしているのだろう。流星は魔王である。

井草としては気が気でない。

なんとしても自分を生贄にしのでほしいと願い――

「いんや何も。強いて言うなら井草は頑張ったから、そこは褒めてくれや」

思わず踵を叩き込んだ自分は悪くないと思う。

「何を言っているんですか!?! そこは俺を生贄にして首脳陣の保身を図るところでしょう!?! 俺なんかの弁護をしている暇がありますか!!」

心の底から全力でツツコミを叩き込んだ。

状況を把握しているのか真剣に考え始める。真剣に組織を抜けた方がいいのではないかと警鐘を脳内で鳴らすぐらいにはツツコミを入れたかった。

しかし、何故か視線は自分に向けられた。

それも同情ではなく「お前何考えてんの？」的なそれである。解せぬ。

「……アザゼル。彼はいつもそうなのですか？」

「そうなんだよ。俺も苦労してる」

何故かアザゼルが同情されている。解せぬ。

「……申し訳ありせん魔王様。彼、どうも自己評価が低いというか自分を卑下する癖があるというか……」

「リアスちゃんも苦労してるのねん。なんか、かわいそうな子が監視役なんだ」

リアスを慰めるセラフオルーの言葉は、井草にとつて救いの光だった。

思わず涙目で跪いた。もちろんセラフオルーに向かって。

「ようやく、ようやく僕の価値を理解してくれる人がいてくれた……っ！　思わず下僕になりたい!!」

心の底から敬意を表するが、何故かセラフオルーからはドンビキの視線が叩きつけられる。

明らかに引いていた。

「……すまんセラフォルー。こいつを連れてきたのは俺の失敗だった」

「貴方も苦労してるのねん、アザゼルちゃん」

何故かアザゼルが同情された。解せぬ。

「まあ、とりあえず俺らの方針としては和平一択だ。つかイーツ絡みで余計な疑いが向けられそうなんで助けてくれねえか？」

明らかに人に助けを求める口調ではないが、それはスルーする。

むしろそれを待っていたといわんばかりに、サーゼクスもセラフォルーもミカエルも頷いた。

「……まあ、それについては言うと思ってたのよ。イーツを生み出したのがアザゼルちゃんじゃない事は読めてたわん」

セラフォルーはそういうと、すぐに資料を展開する。

そこには、いくつものイーツと思わしき存在の姿と、それに変身したと思われる人物の写真が写っていた。

そこに映っているのは、悪魔だった。

「墮天使と全く関わりようがないところで、悪魔によるイーツ変身者が確保されてるわん。他にも、無秩序に各神話勢力にもイーツ変身者による事件が起きている。……各勢力のトップがするような真似じゃないわねん。よくて末端の暴走よ」

その資料と情報には、井草も面食らった。

人間世界や一部の墮天使に行き渡っているだけだと思っていたイーツだが、まさか既に三大勢力だけでなく他の神話勢力にまで広まっているとは思わなかった。

そして、其の中でも数少ない異形側が使用している墮天使陣営は、かなり追い詰められているといつてもいい。

これは和平関係においてどれだけ足元を見られるか……と井草は覚悟し――

「そういうわけだから和平は賛成なのよん。このままいったら悪魔も共倒れだし、ちようどいいと思うわ」

と、あっさり言ってきたセラフフォルーに面食らった。

確かに和平望むところなのは嬉しいが、もう少し吹っ掛けられるタイムミングではあった。少なくとも、彼らにとつての好条件を強引に獲得する事は出来ただろう。

にも関わらずそれをしようとしなかった。

「セラフフォルーの発言は4大魔王の総意でもある。ここで足元を見て利権を吹っ掛ける事もできるが、加減を間違えて戦争再開の愚を犯すよりも、先ず和平を結ぶ事が先決という事で意見は一致したよ」

サーゼクスもそう言いながら、ほがらかな笑みを浮かべる。

少なくとも井草には、そこに悪意や裏の算段を感じる事は出来なかった。

「悪魔も墮天使もこの世界に生きる種族だ。甘い発言と旧家には言われるだろうが、私としては種族が一つ滅びる事を望まないしね」

そういうと、サーゼクスは視線をミカエルに向ける。

ミカエルの判断を探るつもりなのだろうが、ミカエルもまた苦笑と共に頷いた。

もちろんこの状況下で天使が和平を却下しても、冥界が一枚岩になることで状況は不利になる。しかも聖書の神の死という約ネタまであるのだ。戦争を仕掛けても大打撃を受けるリスクが大きすぎる。

しかし、ミカエルの表情もそれとは別の感覚だった。

井草はふと気が付いた。

あ、この人達全員お人好しだ。

「もとよりこちらも和平を結ぶつもりです。そもそも、天使の私が言うことではありませんが戦争の先導者である先代魔王と聖書の神は死んでいるのですから」

その言葉に、アザゼルは吹き出した。

「おいおい。いくら聖書の神のシステムを掌握してるからって、そんな墮ちかねない発言するか、普通」

皮肉とも挑発ともとれる発言だが、ミカエルは慣れたものなのか平然としている。

「亡くなったものに縋り続けることよりも、主の子供らを導き慈しむ事が先決だと、こち

らもセラフ全体で結論しました。こちらのヤーロウ達。プルガトリオ機関も、同意見なので直営として連れてきたのですから」

その言葉に、ヤーロウは静かに頷いた。

「私達大人はともかく、プルガトリオ機関にはそこしか居場所のない子供達もいます。その立場ゆえに望まずとも荒事に投入する他ない子供達に、それ以外の居場所を用意できるならそれに越したことはないと判断しました」

「確かにな。三大勢力で和平を結んで、神器研究を活発化させりゃあ、俺らで抱えたりしている神器持ちも待遇をよくできるしな」

「同意見だ。我々も一部の心無い悪魔に酷使される神器使いなどに権利を与えやすくなる、ぜひとも協力したいところだ」

ヤーロウの意見に、アザゼルもサーゼクスも好意的な反応を見せる。

実際、神器使いの扱いは何処の勢力も困っているのが実情だ。

天界や教会は、一部の神器使いを冷遇する事になっている。プルガトリオ機関という受け皿はあるが、アーシアの事や先程のヤーロウの発言からすると、問題もまだまだあるらしい。

悪魔側も、転生悪魔制度を悪用して強引に下僕にしているケースがある。それを阻止したくても、以下に魔王といえど若輩者でしかないサーゼクス達では中々上手くいかな

いのが現状だ。

墮天使側でも、扱いがピーキーな神器使いを殺す事は必要な事であり、それを打開するにはより高レベルに技術発展が必要だ。それに、保護したとしても敵対組織が多い都合上、組織に属したくない者をそのまま野放しにするわけにもいかなかった。

三大勢力で和平が結ばれるだけでも、大きく状況は改善する。

そして、三大勢力のトップ達は皆それを望んでいた。

「……なんでこんなお人好しの群れなのに、今まで冷戦状態が続いていたんですか？」

「そりやお前、きっかけがないと動けない連中なんていくらでもいるだろうが」

つい出てきた井草の言葉に、アザゼルがツツコミを入れる。

それがきっかけになったのか、全員がぶつと噴出した。

6 話

そして会議はひと段落した。

元より、トップ陣営が全員和平に賛成しているのだから当然だ。これでこじれるのは、よほど政治家や外交官に向いてない者が出張ってきた時である。

そして全員にサーゼクスの女王であるグレイフィアが入れたお茶が行き渡り、そして一息つく。

「これは美味しいのです！ 機会があればもう一度飲みたいのですよ」
「お褒めに預かり恐縮です」

余程美味しさに感動したのか、ニングが顔をぱあつと明るくしてグレイフィアを褒め称える。

グレイフィアは平然と受け止めるが、心なしか少し機嫌が良くなっている風にも見えた。

全体的に場の雰囲気も丸くなっている。外側がピリピリしているのとは正反対だ。ある意味でこれが全体の縮図なのかもしれない。過去の遺恨や戦争に勝利する事を

望む下僕の者達に対して、上の者達は争い事そのものに辟易している節がある。コカビエルのような一部を除いて、戦争を望む上層部はごく少数だ。

その事実が、今の会談の様子からでもうかがい知る事が出来た。

そんなことを思っている井草の視線の先、ミカエルが視線をイツセーに向ける。

「そういうえば、赤龍帝は私に聞きたい事があるという事でしたね」

その言葉に、井草はイツセーを評価するか引くべきか考える。

聖書の教えの現状最高指導者であるミカエルに対して、態々問い質すなど並の度胸ではできない。それだけでも凄い事だ。

しかしそれをこのタイミングで聞いてくるミカエルも意地悪だと思う。普通の神経の持ち主なら、まず間違ひなく言えないだろう。

これは助け船を出すべきかと井草は思い、しかしイツセーはまっすぐにミカエルと向き合った。

「……なんでアーシアを追放したんですか？」

その言葉に、リアス達はもちろんアーシア自身驚いていた。

和平が結ばれていい雰囲気になったタイミングで言いう事ではない。場の空気を読んでないと言われたら、それはそうだというしかない。

「イツセー。流石にそれをこのタイミングで聞くのはまずいと思うけど？」

「すいません井草さん。でも、俺どうしても許せないんです」

井草を制しながら、イツセーは問い質す視線をミカエルに向ける。

「プルガトリオ機関何ていう受け皿があるのに、なんでアーシアを追放したんですか？
何より、悪魔を治してしまった事はそんなに悪い事なんですか？」

「その件に関してはこちらの不手際だ」

真つ先に応えたのはヤーロウだった。

彼はイツセーに対して頭を下げると、苦渋位満ちた声を出す。

「プルガトリオ機関はその特性上、枢機卿の大半からも受けが悪い。ゆえに情報を伝え損ねた事にして、追放という形で放逐したがる者も数多い」

「だから！　なんで悪魔を治しただけでアーシアが追放されなきゃいけないんだって聞いているんですよ!!」

ヤーロウの言い分は理解できたが、それ以前の問題を感じてイツセーは声を荒げる。

そもそもアーシアが追放されたのは、負傷した悪魔を治療した事だ。

悪魔が治療できるなど魔女だ。故に追放する。

宗教観が緩い日本出身だからなのかもしれないが、しかしイツセーからしてみれば理不尽以外の何物でもない。

心優しく、人の善意をまず信じるアーシアのような者こそ、教会がまず尊ぶべき存在

ではないのだろうか。

そんな思いを込めた言葉に、先ず対応したのはリムだ。

彼女はヤーロウとイツセーの間に割り込むと、イツセーを堂々と手で制す。

「まあまあ。大絶賛戦争してる、滅ぼすべき邪悪を治しちやったら、そりやいい顔しない連中が出てきやがってもおかしくないでやがるでしょう?」

とりあえず落ち着けようと、常識的な切り口から論すが、その肩にミカエルの手が置かれる。

「そちらについてはこちらの現状にも問題はあります。……聖書の神が残したシステムについてはご存じで?」

それについては井草も聞いている。

聖書の神は信仰を奇跡に変えるシステムを作り上げた。神器などの運用を行っているのも、そのシステムによるものだ。そして、神が死んだ後はセラフ達がそれを運用する事で制御しているとも聞いている。

「現状、システムを維持する為にはそれに不都合なものを切り捨てざるを得ないのです。

例えば、貴方の赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアもその一つで、アーシアさんの聖母トワイライト・ヒーリングの微笑もそうなので
す」

「……悪魔を治せるってのは、そんなにダメな事なんですか?」

不満げなイツセーに、ミカエルは静かに肯定の頷きを返す。

「聖書の神が滅ぼすべき邪悪とみなした存在を癒せる。これが基本となれば、信徒の信仰心に揺らぎが生じます。現状において、教会に彼女を置いておくのはリスクが大きすぎました」

「本来そう言ったものを招き、信仰の為に異端者と戦わせる事で居場所を作るのがプルガトリオ機関なのだが、それゆえに存在を知る信徒の大半には嫌われていてな。……結果、情報を出し渋られて墮天使側に確保されてしまったのだ」

苦苦しい顔をしながら、ヤーロウが補足する。

そして、そんな彼女をどうするか監視。可能ならばプルガトリオ機関に招き入れる事を目的として、ニングとリムが派遣される。

そしてレイナーレのところへ送り込まれたアジアは、道に迷っていたところをイツセーに道案内される事となる。

それらが絡み合った結果、ややこしい共同戦線が生まれたのは、井草達の知っている通りだ。

「他にも、信仰の維持に不都合な存在を追放することもあります。……そちらのゼノヴィアが該当しますね」

「これまたそういった者もプルガトリオ機関が引き入れるのだが、彼女の場合は――」

「スカウトする前に悪魔に転生したそうですもんね……」

こちらは申し訳なきさそうにする必要はない。ミカエルにしろヤーロウにしてもだ。

井草はそうフォローする。なにせ、やけを起こして即座に悪魔になったのはゼノヴィアなのだから。

だが、ミカエルとしては思うところはあったらしい。ゼノヴィアとアーシアに体を向けると、ミカエルは頭を下げた。

「この件につきましては、我々天界と教会の失態でもありません。本当に申し訳ございません」

その光景に、井草はもちろん、会議室にいる多くの者達が絶句していた。

確かに失態であるとはいえ、熾天使の一角が一回の信徒、それも追放されている者に頭を下げるのだ。過激な信徒は失神するかもしれない光景だった。

そして、ゼノヴィアは静かに首をふる。

「頭をお上げください。長年教会に育てられた者として思うところはありますが、事情を知れば当たり前のことです」

「ですが、我々の至らなきの所為で信徒を裏切る形になったのは」

今まで相当苦渋の決断だったのだろう。ミカエルの顔は痛々しい。

しかし、ゼノヴィアはむしろ笑みすら浮かべて、リアス達を見渡した。

「他の信徒には申し訳ないですが、悪魔になった事で信徒であると気では味わう事ができない幸せも手に入りました。ミカエル様を恨む事などありません」

その言葉に、アーシアも祈りを捧げるように手を組みながら笑みを浮かべる。

「私もそうです。イツセイさんや部長さん達良い人達と出会えて、今は幸せです」

確かに、信徒としてはあれかもしれない。

信徒が悪魔になった事を喜んでいるのだ。配信者として処罰するべきだというものも出てくるだろう。

だが、まだ確定ではないとはいええ和平はここになった。なら、それもまた変えていかねばならない価値観だ。少なくとも、この場にいる者達はそう思っている。

その事実をかみしめたのか、ミカエルは安堵の表情を浮かべて頭を上げた。

「貴方達の寛大な心に、心からの感謝を」

そして話もまとまりかけたところで、アザゼルが視線をアーシアに向ける。

「そうだった。うちのところの離反者がそっちの嬢ちゃんには迷惑かけたようだな」

割と軽いその言い方に、井草は眉間にしわを寄せる。

人によっては神経を逆なでする態度だ。こういうことを面白がってするから、この男は質が悪い。

そして井草が何か言う前に、イツセーがいら立ちをあらわにして食って掛かった。

「そうだ！ あんたをしたってあんたの側に立ちたいと思ってる奴の所為で、アーシアは殺されるところだった！ ニングさんとリムさんが動いてなかったら本当に死んだんだぞ!!」

「そこに関しちやこつちの落ち度だ。今現在生き残った首謀者のレイナーレは指名手配。捕まえたらしつちに引き渡すから、煮るなり焼くなり好きにしている」

「そういう問題かよ！ っていうか、俺なんて殺されかけたんだぞ!?!」

イツセーからすればそこも腹が立つところだろう。

なにせ普通に生きてて、覗きという問題行為もきちんとやめて更生している。それがいきなりあんな悪質な行為で殺されたのだ。

一発ぶん殴ってやろうかという気持ちにはなるだろう。

だが、アザゼルはそこに関しては平然とした態度を崩さなかった。

「それに関しちや必用案件だ。確かにレイナーレのやったことは監督不行き届きだが、殺す殺さないの案件じゃあれは必要だ」

「んの……野郎……っ」

今にも殴り掛かりそうなイツセーに、しかしアザゼルはまっすぐに視線を合わせる。

「悪質な神器保有者や、暴発の危険性がある神器保有者を排除するのは、暗黙の了解で墮天使の役目だ。そこに関しては天界や悪魔、他の勢力も理解してるはずだぜ」

「……そこに関しては否定できないな」

「結果的に汚れ仕事を押し付けている形ではありますが」

「そういうことだ。まあ趣味のいい真似じゃねえが、ああしなけりやこの街が滅びる大惨事が起きている可能性だってあったことを忘れるなよ」

サーゼクスとミカエルの言葉を追い風に、アザゼルはまっすぐにイツセーに言い返した。

それに反論しづらい状況になっているイツセーに、アザゼルはにやりと笑う。

「そもそも謝罪の言葉や土下座なんて、俺みたいなやつじゃ余裕でできる。俺はそんなもんよりちゃんとした詫びの品で返す主義でな。……あとでアツと驚く方法で代償をしてやるよ」

凄まじく嫌な予感を井草は覚えた。

目の前の総督は、色んな意味で問題児だ。

思い付きで突拍子もない行動をする。其れに積極的に人を巻き込む。挙句の果てに

思いつきを実現する技術力を持っている。三コンボだ。

妙な事をする前に止めた方がいいかもしれない。後でピスに相談しておこうと、井草は決意する。

ピスは外側で警備をしているはずだ。アザゼルは彼女を非常に買っているし、井草もその実力に不安はない。

以前模擬戦した事があるが、かなり手加減をされたうえで一蹴された。自分という隠れ蓑の内側に潜む、緊急用の最後の戦力こそがピス・ダウンフォールなのだ。

……実際は緊急用は緊急用でも、緊急時に井草を守る為の戦力なのだが。それについては井草は完全に思い込まされている為仕方がない。

「ま、そういうわけだ。それで、今度はイーツについて話を進めようか」

その言葉に、全員の表情が引き締まる。

「そうですね。人間界を騒がせるだけでなく、適合者によつては我々異形の上位クラスですら手こずらせる、あれは危険な存在です」

「そうなのよねえ。さつきも言ったけど、色んな勢力にばらまかれてみたいで、どこも他の勢力でもばらまかれてるって気づいてないから内密にしてるけど、結構被害が出てるみたいなのよ」

ミカエルとセラフォルが困り顔を浮かべる中、アザゼルは即座に紙の束を取り出す

と、それを広げる。

「その件についてだが、判明した事がある」

その言葉に、全員の視線が集まった。

「そのイーツについてだが、戦闘不能になるまで叩きのめした後、爆発して消滅する個体と謎の物体だけ壊れて、変身者は戦闘不能になるだけで済む場合がある。……そのグレモリー達は知ってるだろ、ウチのはぐれ者が前者で、バルパーが後者だ」

その言葉に、全員が息をのむ。

すなわち、これまで人間界で暴れまわり撃破されたイーツは、素体となる存在がいたということがほぼ確定したのだ。

これで各国の軍隊は、知らずに人殺しを行っていることになる。

むろん、軍隊とは人殺しを行う組織だ。その為の精神的修練なども積んでいるし、それなりの覚悟があつて志願するものだろう。

だが、例えそうだとして問題は多い。

この事実が知れ渡れば、大衆はイーツを生み出した者を叩くだろう。万が一にでも三大勢力がそれだと誤解されれば、大打撃を受ける事は間違いない。

そして、もう一つの事実も明らかになる。

それは、イーツにも種類、もしくは位階があるということだ。

そもそも人間世界で暴れまわっているイーツと、異形達と相対したイーツでは性能が異なっている。

素体となる存在の性能差もあるのだろうが、それを差し引いても戦闘能力の向上値が大きすぎる。

イーツの開発者を直接締め上げねば分からない事も多いだろうが、しかし一つだけ言える事がある。

「おそらく、イーツを作り出した連中は本気を出しちゃいねえ。……イーツがらみの案件は、俺達が思っている以上に厄介な事になるだろうぜ」

「ゾツとしませんね。……そもそも、誰がどうやって開発したのかも分からないというのが恐ろしい」

ミカエルがおぞましも物を見る視線で、資料に視線を向ける。

イーツ。その存在はまだ底が見えず、同時に恐るべき実態も垣間見える。

戦闘不能になると所有者が消滅するか、もしくは所有者が戦闘不能になるだけで済むか。

そしておそらく、これは前座だ。

これ以上の何かがある。その核心と言ってもいい予感が、全員の空気を鋭くさせる。

そしてその瞬間、
時は凍り付いた。

7 話

井草は気づいた時にはイーツになっていた。

そして、周りを見ると三分の一ぐらいが固まっている。

確かに、いきなりイーツになってしまったら驚くだろう。思わず硬直してもおかしくないかもしれない。

だが、自分がイーツになる姿を見てきたはずの朱乃や小猫が固まるのはどうだろうか。ちよつと残念な気分になり、井草は自嘲する。

今更自分にそんな事を思う資格はない。なのに、そんな事を思ってしまうのは暖かい場所について甘くなったからかもしれない。

そう、いつものごとく自己嫌悪を行いながら、井草はしかし違和感に気づく。

硬直というより、本当に固まっている。

精神的動揺による硬直ではない。これは、本当に物理的に硬直している。反応が全くないのだ。

イッサーですら固まったまま動かない。他にも、72柱の直系であるソーナですら動

きを止めていた。

「これは……」

「なるほど。これがイーツですか」

そう感心するミカエルの声に、井草は振り向いた。

何時の間にか、動ける者達は全員が外を見ている。それどころかピスすらこつちに來ていた。

「それでえ、とりあえずどうしますう?」

「ああ、とにかく今は結界を張る事に集中しねえとな」

「いや、何があったんですか?」

二人して何なのか分かっている上司と義姉に、井草はとりあえず状況を把握しようと会話に割って入る。

全く状況が分からない。

いや、おそらく和平阻止を目的とした過激派の行動なのは読んでいる。だが、手段が分からない。

時間干渉を使うにしても、こんなものは強大すぎる。普通の方法ではできないはずだ。

しかも視線を外に向けてみれば、護衛部隊の殆どが時間を停止させていた。

規模があまりにも大きすぎる。こんなもの、魔王クラスが時間停止に特化していなければ不可能だ。

時間干渉ができるといえば、悪魔ではアガレス家が有名だ。しかしそれでも出力が足りないだろう。そもそもアガレス家は現四大魔王にしたがっているから理由がない。勝ち目もない事は理解しているはずだ。

と、思ったその時だ。ガタンという音が聞こえた。

「あ、あれ？」

「イツセー！」

突然動き出したイツセーに、井草はとっさに声をかける。

そしてイツセーはイツセーで、イーツ化している井草を見て目を見開いた。

「何でいきなり変身してるんですか!? つていうかあれ? 朱乃さんにアーシアに小猫に会長達が……つてこれ、ギヤスパアの時間停止!?!」

そのイツセーの反応に、井草はふと気づいた。

井草自身は積極的に関わる事を避けていたが、確かりアスの眷属であるギヤスパアが時間停止の神器を持っていたはずだ。

これは、おそらくそれによるものだと思われた。

「総督! 義姉さん!! これは一体どういう事ですか!?!」

「テロだ」

即答だった。

一瞬、何がどういうことなのかよく分からなかった。

テロ。正式にはテロリズムの略称で、単純に言えば殺害を前提とする大規模な暴力で物事を解決しようとする行動全般。

それが、起きている。

「テアテアテア、テロおおおおおおお!!」

全力でイツセーが驚愕していたが、気持ちちは分かる。

荒事に巻き込まれるようになってから日が浅いイツセーに、いきなりのテロは刺激が強いだろう。

とは言え、井草からすればなるほどと思う事だ。

「まあ確かに言われてみれば、コカビエルに便乗して戦争再開しようとした三大勢力のタカ派が、和平会談なんて成立させたがるわけじゃないですよね」

「確かにそうだけど、ギヤスパーと同じ力が働いているの!!? まさか、テロリストにも停止世界の邪眼の使い手が？」

リアスの言葉はもつともだろう。

彼女は眷属を信頼している。ギヤスパーとは付き合っても長い部類だろう。

ギヤスパーが停止を行うなどとは露ほどにも考えていないのだ。

そして、それはある意味ではあっているがある意味では間違っている。

「いや、おそらくだがあのハーフヴァンパイアの小僧の神器が使われてるな」

はつきりと、アザゼルはそう言い切った。

「…………アザゼル総督？ 如何に和平が結ばれる寸前とは言え、私の眷属を侮辱して、黙っていられると——」

「勘違いすんな。何もあのガキンチョが自分からやつてるなんて言ってるなえよ」

一瞬で沸点に達しかけたリアスを宥めながら、アザゼルは旧校舎の方に視線を向ける。

「おそらくだが、あの坊主の情報を知ったテロリスト共が、坊主を捕らえて無理やり神器を暴走させてるんだろうな。その所為で周囲の護衛連中がピス以外全員停止されたって寸法だ」

そう言いながら、アザゼルは怪訝な表情を浮かべる。

「だがなんで仕掛けてこねえ？ このまま時間をかければ俺らを停止する事も可能かもしれないねえが、それにしたって足止めぐらい必要だろうによ」

「そうですね。これが戦闘中なら、無理に脱出を試みて街に被害を出すわけにもいかなないので牽制になりますが、何も無いのならとりあえず脱出するという手段も取れます」

ミカエルも同意を示しなか、井草はどうしたものかと考える。

この不自然な行動に、何か薄ら寒いものを感じてしまう。

何かとは言えない。だが、何か嫌な予感がする。

誰もがそれを察しているのか、動けない中、声が響いた。

「……待つてくださいい！ ギャスパーが敵に捕まつてるなら、先ずギャスパーを助け出すのが先でしょう!!」

そのイツセーの声に、動ける全員の視線が集まる。

そしてそれに気圧される事なく、イツセーは強い視線を向ける。

「そりゃギャスパーも俺も下っ端ですけど、俺はギャスパーの仲間です。助けに行かせてください!!」

「……そうね。イツセーの言う通りだわ」

その言葉にリアスは微笑を浮かべ、サーゼクスに向き直る。

「魔王様。我が眷属が敵に利用されているというのなら、私がそれを打倒します。眷属を守るのも主の務めですわ」

「それはかまわない。だが、流石に結界は敷かれているだろう。無造作に外に出るわけにはいかないし、転移の妨害もされているだろうがどうするのかね？」

サーゼクスの試すような物言いに、リアスは動じる事なくまっすぐに視線を向ける。

「旧校舎には未使用の戦車ルークの駒が残ってますわ。それを使ってキャスリングを行い、自ら助けに参ります」

キャスリング。それはチェスにあるシステムだ。

キングとルークの駒を入れ替えるという特殊なルール。本来ならキングを安全圏に移動させる為に使用するのが基本だ。

しかし、だからこそ攻め手に使うという発想は薄いだろう。敵が警戒していたとしても、盲点である可能性は高い。

「いい手だ。だが王を一人だけというわけにはいかないな。……グレイフィア、どうにかできるかね？」

「我々が術式を調整すれば、もう一人は送り込めるはずですよ」

即座に術式に当たりをつけ、サーゼクスの女王であるグレイフィアは術式を調整する。

そして、問題は――

「なら、私が行くわあ。この中で動きやすくて一番強いのは、私でしょお、総督？」

――誰が行くのかも、普通ならそうだろう。

いくらなんでもトップが動くわけにはいかないだろう。そして、その中で強い者が行くのが普通でもある。

そういう意味でなら、井草からすれば納得の人選だ。

ヴァーリに視線を向けるが、明らかに乗り気でないのは明白だ。ならピスが出張るのが一番確実。彼女の戦闘能力なら、最上級クラスが万人だとしても勝ちの目はある。

「だったら俺が囷になりますよ。一人ぐらい外から仕掛けた方が、相手も引つかかるんじゃない」

「待ってください!!」

井草がナチュラルに自ら囷になろうと言い出したその時、イツセーが声を荒げる。

それに再び視線が集まり、イツセーは再びまっすぐに皆を見ながら声を上げる。

「ギヤスパーは俺の後輩です!! いくなら、俺が行きます!!」

「……別にいいけどお、貴方達が失敗するところちは荒っぽい手段に出るしかないわよお?」

ピスがそう言うと同時に、ヴァーリは焦れたのか外に向けていた視線を前に向ける。

「いつそのこと、俺が旧校舎ごとそのハーフヴァンパイアを吹き飛ばしてもいいぞ?」

それが一番確実で手っ取り早い」

「ヴァーリ。そういうことを許可なく言うのはどうかと思うよ?」

イツセーが憤るより早く、井草はじろりとヴァーリを睨む。

それを涼し気に受け流しながら、ヴァーリは肩をすくめた。

「いい加減退屈なんだよ。テロリストも、来るならさっさと本命を投入すればいいものを」

「落ち着けよ。最悪そうするが、和平前に余計な揉め事は作りたくないんでな」

ヴァーリをそうたしなめながら、アザゼルは懐に手を入れる。

そして、そこから二つのリングを取り出した。

「おい、赤龍帝」

「兵藤一誠だ！」

「なら兵藤一誠。ハーフヴァンパイアを助けたらこれを付けろ。それでこの停止現象は止まるはずだ」

そう言いながら渡してきた二つのリングを受け取りながら、イツセーは首を傾げる。

「二つあるぞ?」

「もう一つはお前がつけろ。いざという時にそれが禁手の代償になってくれるさ」

そう言うのと、アザゼルはため息をつきながら外に視線を向ける。

「しかしこのタイミング。仕掛けてきたのは奴らかねえ?」

「かもしれないですねえ」

と、ピスも同意のため息をつく。

「あの義姉さん? 何か心当たりでも?」

「まあねえ？　ちよつと諜報部がサタナエル様がやらかした残り火を見つけちゃつてねえ」

凄まじく嫌な予感を井草は覚えた。

これは、絶対にややこしい事が起きている。

「……アザゼル。和平前に不穏な事を言わないでくれ。何かあるのなら今ここで説明してほしい」

「そうだな。ついでにここで説明しとくか」

サーゼクスに促され、アザゼルはぼりぼりと頭をかきながら説明する気になった。

「うちのサタナエルがそつちのメフィスト・フェレスんところの離反者や五代宗家のはぐれ者と大騒ぎを起こした事があつたんだが、そいつらが他にもいろんな勢力のはぐれ者をかき集めてテロ組織を立ち上げようとしてたみたいなんだよ。で、それがサタナエル亡き後も独り歩きして最近でかい勢力になってきてる」

……凄まじく嫌な予感がしてくる内容だった。

そして、それを後押しするようにアザゼルは嫌そうに外を見る。

「おそらく、今回のテロを起こしたのはそいつらだ」

「サーゼクスちゃん。それ、シャルバ達も関わってるんじゃないかしら？」

「あり得るな……」

心当たりがあるのか、セラフオルもサーゼクスも苦い顔をする。

実際、コカビエルと共に裏で動いていた開戦派の行方も知れない。もしかするとコカビエル達が逃げ込んだのがその可能性もある。

「ゾツとしない話ですね。それで、その組織の名前は？」

「禍カオス・ブリゲイトの団。名前の通りに禍を世界にもたらそうってんだから、分かりやすいだろ？」

ミカエルにそう答えながら、アザゼルは更に肩を竦める。

「なによりやばいのは、そのトップに据えられたのがこの世界最強のドラゴンだって事だ」

「「っ!」「」

その言葉に、ただでさえ気色ばんでいたサーゼクスたち首脳陣の顔色が一気に変わる。

そこに映っているのは、明らかな驚愕だった。

「まさか、彼が……?」

「ちよつとちよつと、それってまずくない!」

ミカエルとセラフオルが額に汗すら浮かべる中、サーゼクスは瞠目する。

「無限クロボロス・ドラゴンの龍神オーフィス。……彼が世界に対して悪意を持ったというのか……?」

「え? あの、オーフィスって……?」

よく分かっているイッサーが尋ねようとした、その時だった。

『ええ。禍の団の盟主はそのオーフィスです』

『もつとも、奴は所詮飾りでしかないがな』

其の声と共に、魔方陣が浮かび上がった。

8 話

その紋章を見て、サーゼクスたちは苦虫をかみつぶしたかのような表情を浮かべる。

「この紋章は、やはりそういうことか……！」

「レヴィアタンの紋章ですか。なるほど、今回の指揮官は彼女ですか……！」

サーゼクスとミカエルが舌打ちすらする中、井草はイーツと化した自分の体が何か共鳴現象を起こしているのを感じる。

間違いなく、自分は何らかの影響を受けている。其れも、この紋章の向こう側にあるものだ。

「グレイフィア！ リアスとイツセーくんをすぐに飛ばすんだ!!」

「承知しました。お嬢様、ご武運を！」

「ちよつとまってグレイファー」

サーゼクスの指示に従い、グレイフィアが何かを言いかけたリアスたちを無理やり転送する。

そしてそれと同時に、転送用の魔方陣はより強い輝きを浮かべる。

「待ってください魔王様！ あの紋章は、セラフォル様達が使用する魔方陣とは異なる

る形状です!? それがレヴィアタンとはどういうことですか?」

聖魔剣を構えながら、祐斗が疑問の声を荒げる。

しかし、それに返答するのはサーゼクスでもセラフオールでも、グレイファイアでもなかった。

「いや、あれは間違いなくレヴィアタンの紋章だ」

デュランダルを構えたゼノヴィアが、目を見開いてその紋章を見据える。

「悪魔祓いの教育機関で教えられた。……あれは、旧レヴィアタンの紋章だ!!」

その言葉に、井草もまた状況を把握し始める。

かつて、三大勢力の争いで四大魔王は全員が戦死した。

その後世襲制でその子供たちが悪魔の指導者になったのだが、魔王血族の大半は戦争継続を求めている。

しかし、それをおこなえば種族が減びると考えた派閥がそれに反対。更にそれまでの横暴がたたり、ついに内戦すら起きるほどの争いとなった。

そして結果としてサーゼクスたち現四大魔王を有する現政権側が勝利。旧魔王血族とそれに与する者たちは、辺境へと逃れることになったのである。

そして、その旧魔王の紋章が転送で使われている。しかも関係者以外立ち入り禁止になっっている和平現場に。とどめにテロを仕掛けられている真っ最中に。

答えなどすでに終わっているようなものだ。

そして、その答えを示すかのように男女が姿を現す。

一人は、煽情的な格好をした女性悪魔。

一人は、軍服を身にまとった手のひらまで黒い黒人男性。

その取り合わせにげんげんな表情を浮かべながらも、サーゼクスは当たってほしくない予想が当たった者の表情を浮かべていた。

「旧魔王レヴィアタンの末裔、カテレア・レヴィアタン。一応聞くが、これは何のつもりかね？」

「ごきげんよう、偽りのルシファー、サーゼクス。……わかっているでしょうが、我々旧魔王とその派閥は、すべてが禍の団の参加を決意いたしました」

カテレアと呼ばれた女性の言葉に、サーゼクスはさらに表情を苦苦しくする。

「カテレアちゃん！ どうしてこんなことを!？」

セラフオルーは心から傷ついたような表情をするが、その言葉にカテレアは心から心外だといわんばかりの怒りの表情を浮かべる。

「セラフオルー……っ！ 私からレヴィアタンの座を奪っておきながら、よくもまあぬけぬけと……!」

そのまま攻撃をはなってもおかしくないほどの怒りを見せるカテレアだが、そんな彼

女に黒人男性が声をかける。

「落ち着くがいい。君が上位種の始まりを産む世代になったのなら、下等種のままのものに簡単に怒りを見せてはならない。しよせん敗北者になる者たちの戯言だ」

「……見苦しいところを見せましたね、ナイフアーザー」

取り繕うカテレアを一瞥してから、ナイフアーザーと呼ばれた男は、軽く一礼する。

「お初にお目にかかる、三大勢力の重鎮達。我々は禍の団に所属している組織、ムートロンの実行部隊隊員、ナイフアーザーというものだ。短い付き合いだろうが、お見知りおきを」

慇懃無礼という言葉が似あう声色であいさつするナイフアーザーに、井草は嫌な予感を覚える。

●●●
そう、あの男とどこかが似ている。

そして何より、自分の体が疼いてたまらない。何か彼らに反応しているのが、いやでもわかる。

「……井草！」

その井草の型にピスが手を置くが、しかし井草は反応している余裕がなかった。

その様子を見ながら、ナイフアーザーは踏む踏むと頷いた。

「ふむ、なるほど。貴様が奴の言っていた少年か」

そういいながら、ナイフアーザーは首を横に振った。

「少年、それは一分もすれば落ち着くだろう。おそらく私のエボリューションエキスと共鳴しているのだ。そろそろ慣れてくるだろう」

その言葉は確かに正しい。

先程に比べれば、井草の体の疼きは少しずつだが下がってきていた。

だが、問題はそこではない。

誰もがナイフアーザーに注目していたし、警戒の色も強かった。

「おい、ナイフアーザーさんよお？」

「何かね？ アザゼル総督」

平然と尋ね返すナイフアーザーに、アザゼルは殺意すらにじませながら鋭い視線を向ける。

「察するに、てめえらがイツがらみの下手人か？」

「そのうちの一人ではある」

平然と、その殺意を受け流しながらそう答えるナイフアーザー。

そして彼は、得意げな表情を浮かべながら両手を広げる。

「因みに目的はデモンストレーションとテストだ。すでに一部の小国と提携は完了しているの、そろそろ各地で紛争が起きるのではないかね？」

「そうかい。人間世界もすっかりきっかり巻き込んで、お前さんたちは暴れたいってことか？」

サラリと放たれた危険極まりない情報に、アザエルは頬を引くつかせる。

当然だろう。彼らは人間世界の国家にエボリューションエキスを提供したと告白したのだ。

そして紛争が起きるとすら言い放った。それだけで、人間界に余計な影響をあたえたくない三大勢力としては怒りに燃える事態だ。

そして、それ以上にアザエルは個人的に聞かなければいけないことがある。

一瞬井草に悪いと思いつつも、しかしこのチャンスを逃すわけにはいかない。

「個人的に一つ質問するぜ？」

「いいだろう。だが、私も上から口止めされていることや守秘義務というものが――」

そうペラペラと流れる言葉を無視して、アザエルは即座に問いただす。

もつとも聞くべき個人的なことは、ただ一つ。

「――無有影雄。この名前に聞き覚えはあるか？」

――その言葉に、井草は体の疼きをすべて忘れた。

何もかも次に放たれるだろうナイフアザーの言葉に集中する。

聞き逃せない。聞き逃したい。聞き逃すわけにはいかない。聞き流さなくてはなら

ない。

矛盾する思いを抑え込みながら、井草は次の言葉に耳を傾け—

「—ああ。奴は我々ムートロンのメンバーだ。その少年にレセプターイーツを植え付けたのは、奴の戯れだよ」

—その瞬間、井草はナイフアーザーにつかみかかった。

「どういふことだよ!?!」

胸ぐらをつかみながら、井草は声を荒げる。

今のは聞き逃せない。聞き逃すわけにはいかない。

無有影雄^{むゆうかげお}。井草にとって忘れたくても忘れるわけにはいかない、因縁の男。

そう、あの男を赦すわけにはいかず、しかし恨むわけにもいかない。

なぜならすべては自分の下衆が原因であり、同時に彼の悪性が原因であるから。

「なんで無有が!?! なんで—」

「黙りなさい、混じり物の墮天使風情が」

その瞬間、横合いから魔力のこもった打撃が叩き込まれ、井草は弾き飛ばされる。

それを即座に持ち直しながら、井草はその打撃を叩き込んだカテレアをにらみつける。

「いま取り込み中なんだよ! 後にしてくれ!!」

「この正当なレヴィアタンの末裔にその下賤な口調……！　どうやら真つ先に死にたいようですね」

カテレアは機嫌を損なったのか、魔力を再び高めだす。

井草もまた、光力を全開にしながら戦闘準備を取り――

「落ち着け、馬鹿野郎」

その後頭部にアザゼルの打撃を喰らい、あっけなく悶絶した。

そしてそれでも起き上がろうとする井草の両足が、ピスによって極められた。

「あだだだだだだだだだだ!?!」

「ストツプよお。ちよつと暴走しすぎい」

ピスの声に反応する余裕もないが、しかしそれをアザゼルはスルーすることにしたらしい。

「……で、話を戻すぜ？　お前ら何を考えてる？　人類社会にまで悪影響をあたえながら、三大勢力をつぶそうってか？」

「愚問ですね、アザゼル」

挑発の意をこめたアザゼルに冷笑を浮かべながら、カテレアはそれを嘲笑へと変える。

「いまさらそんな小さなことで済ませますか。我々はオーフィスとエボリユーシヨンエ

キスの力を使い、この世界を禍の団の手中に収めます」

「……世界征服、ということですか」

ミカエルが歯を食いしぼるほどに警戒の色を強める。

各勢力のはぐれ者があつまっている時点で、その影響は三大勢力の垣根すら超えることは想像できていた。

しかし、これは想定外だ。

人間世界にすら影響を与え、そして世界を手中に収める。これはもはや、三大勢力だけで対応するレベルすら超えている。

だが、しかし解せない。

「愚かなことを。君たちは本気で言っているのかね？」

サーゼクスは首を横に振りながら、ナイフアーザーに視線を向ける。

その視線は、愚行を働いているものにむけられるものそれだった。

「確かにイーツの戦闘能力は強大だ。だが、あの程度で核の炎や神々の権能を超えることができると、本気で思っているのか？」

それは、現三大勢力の共通の認識だった。

確かにイーツの戦闘能力は高い。軍事兵器を複数投入しての戦闘でなければ撃破が困難という性能は、規格外といってもいいだろう。

だが、所詮は戦法クラス。それも、人間の科学力でだ。

下級中級では危険だろうが、上級クラスなら十分対抗できる。ましてや神の本気や核兵器相手ではまとめて一掃することも可能だろう。

ゲリラ戦などには絶大な効果を発揮するだろうが、しかし神話勢力が本腰を居れば、決して勝てない相手ではない。

それどころか人類を本格的に巻き込んだこの行動。下手をすれば各神話が共闘する可能性すら大きい。

それは源泉たる事実であり、それすら把握できていないのならばいくらでも対応できるといふ事実であるが――

「ハッ」

ナイフアーザーはそれを鼻で笑う。

それは完全な嘲笑だった。

まさしく完全な嘲り。その程度しかまだわかっていないのかという、相手を馬鹿にする感情がこれでもかと込められていた態度だった。

「まさかと思うが、貴様らはEEレベルの存在にすら気づいていないのかね？」

「EEレベル……だあ？」

アザゼルの反応に、ナイフアーザーは心底あきれ果てたのか肩をすくめる。

そして、興が乗ったのか口を開いた。

「E Eレベルはエボリユーシオンエキスにどれだけ反応できるのかを示したものだ。……撃破するとそのまま爆発して消滅する個体が多いだろう？ あれはE Eレベルが1未満のものがイーツになった場合に起きる現象だ。本来ならよほどのことがない限り致命傷にはならん」

その言葉に、彼らの多くが納得する。

実際イーツの多くは倒されると同時に爆散して消滅していた。しかし、バルパーなどの一部に限り爆発しても本人はポロポロだが生存するという事態もある。

アザゼルも何かあるとは思っていたが、変身者の適性の違いだったということなのだろう。それならば納得がいくことも大きい。

「コカビエルに渡したイーツ変身者のE Eレベルも大半が平均値は1だ。一番高いのはフリードの2，5か」

そう告げるナイファアザーは、そしてにやりと嗤う。

「そして私のE Eレベルは――」

『バイアクヘー！』

その瞬間、翼を持つ異形の姿になったナイファアザーは一瞬でサーゼクスを蹴り飛ばした。

「6,
5だ!!」

9 話

「サーゼクス!?!」

「サーゼクスちゃん!?!」

一瞬で蹴り飛ばされ、壁をぶちぬいて吹きとばされたサーゼクスに、グレイファイアとセラフオールの声が飛ぶ。

だが、問題はそこではない。

威力そのものも確かに高いが、魔王であるサーゼクスなら一撃でどうにかなるようなものではない。それは二人も分かっている。

問題は、その相手の速さであった。

「不意をつかれたとはいえ、我々が反応しきれなかった……っ!?!」

ミカエルの言葉がすべてを物語っている。

ナイフアザーの攻撃は、何よりスピードが桁違いだ。

先程のEレベルの開きにごくわずかな虚をつかれたのが原因とは言え、果たして隙をつかれなかったとしてもあれを完全に捌けるものがこの場にどれだけいるか。

断言してもいい。あのナイフアーザーの戦闘能力は並の最上級悪魔ですら一対一では勝ち目が薄い。

それほどまでの速さを発揮したナイフアーザーは、即座に追撃を開始していた。

「それでは仕事をしよう。死んでくれたまえ、魔王ルシファー!!」

「なるほど、どうやらこの世界を支配するというだけのことはあるようだ……」

既に戦闘は開始された。

母方から受け継いだ消滅の魔力を凝縮した球体を自由自在に動かし、サーゼクスは即座に迎撃を開始する。

その攻撃は、最上級悪魔といえど下位の部類では瞬時に滅ぼされるだろう。それほどまでの実力を持っているからこそ、彼は魔王ルシファーの座を受け継いだのだ。

そのサーゼクスの猛攻を、ナイフアーザーは対応しきっていた。

縦横無尽に迫る攻撃を手を持った散弾銃から放たれる光弾で破壊し、そこから生まれる隙間を縫うようにして潜り抜ける。そして即座に反撃の射撃をはなつ。

それらはサーゼクスの魔力障壁で防がれるが、しかしサーゼクスの攻撃もナイフアーザーには届かない。

音速をたやすく超越するその高速移動はサーゼクスですら完全包围を行うことは難しかった。よしんば包围できたとしても、それが完全になる前に散弾銃で穴を作られて

抜けられる。

其の戦闘は一種の膠着状態に陥っており、まず間違はなく状況は拮抗していた。

「サーゼクスは彼に任せれば当面は問題ないでしょう。では、私はセラフォルを滅ぼすとしましょうか」

その光景を満足げに見ながら、カテレアは一步前に出る。

そして、そこに立ちふさがる影があった。

「ようカテレア。もうちよつといいか?」

「なんですか、アザゼル」

カテレアに立ちふさがったアザゼルは、視線を一瞬だけ後ろの激闘に向ける。

そこではナイフアザーがサーゼクス相手に同等といってもいいレベルの激闘を繰り広げていた。

「あいつらの技術の出所はこの際どうでもいい。で、お前さんたちはそれに乗っかってどうする気だよ」

「決まっています。神も魔王のいないのなら、私達が新たな秩序を構築する。オーフィスにはそのための象徴となってもらう予定です」

そう告げるカテレアに、アザゼルは顔を下に向け――

「……笑っていいか?」

そう、言い放った。

「笑っている余裕がありますか？ イーツの真の脅威は今まさに目にしているはずですが」

カテレアは心底不満げにそう言い放つが、しかしアザゼルの余裕は崩れない。

「少なくともお前は無理だつての。つか、テレビで真つ先にくたばる悪の幹部みたいな台詞を吐いてんじゃねえよ」

心底馬鹿にしたその言葉に、カテレアの頬がひきつった。

「ま、そういう奴に限つてなんだかんだでそこそこできるから困るんだがな。どうせオフィスからも何かもらつてんだろ」

「ええ、彼には力をもらいました。この力で我らは世界をこの手に収めます」

「だからそれが定番だつて言つてんだよ」

そう切り捨て、アザゼルは背中から翼を広げる。

「セラフォルーにミカエル。こいつは俺がもらうぜ、いいな？」

そして利くまでもないと攻撃を叩き込もうとし――

「いや、それは困るんだよ、アザゼル」

それより先に、白い鎧をまとったヴァーリが攻撃を叩き込んだ。

ギヤスパーを救出したイツセーたちは、旧校舎を出て援護に向かおうとしていた。

「部長。あの紋章って何だったんですか？」

「おそらく、お兄さまたちが追放した旧魔王のものだわ」

「こそそんなあ！ 和平会談にそんな人が来たんですかあ!？」

イツセーの質問に答えたりアスに、ギヤスパーが震えながら悲鳴を上げる。

当然だろう。かつての内戦で敗北したとはいえ、魔王末裔は七十二柱より格上の血統だ。其の戦闘能力は推して知れる。

そんな存在がテロをしてきたのだ。これは心底厄介だというほかない。

「それでもお兄さまたちなら、きつとー」

そんな期待を込めた言葉がこぼれたその時だった。

「うおつと!!」

そんな軽い声と共に、勢いよく誰かが墜落した。

その墜落速度はすさまじく、直系十メートルを超えるだろうクレーターが誕生するほどだった。

「うわあああああ!？」

「な、なんだあ!？」

ギヤスパーとイツセーが悲鳴を上げるなか、そのクレーターを作ったアザゼルが、ぱんぱんと槌を払い落としながら立ち上がる。

そして、それを追撃するようにカテレアとヴァーリが舞い降りた。

「すまないね、アザゼル。こう言うことなんだ」

「ええ、彼がそのハーフヴァンパイアを含めた情報を伝えてくださいました。おかげでここまでは想定通りの展開です」

「そうかい。コカビエルにしるお前にしろ、バトルジャンキーには困ったもんだな……っ」と

ヴァーリとカテレアに軽口をたたきながら、アザゼルはクレーターから這い上がる。

そして、肩をすくめた。

「ヴァーリ、白龍皇がオーフィスに下るのか?」

「まさか、あくまで協力するだけだよ。魅力的なオフアーをもらったんでね」

そう答えるヴァーリは、感極まっているのかわずかに震えながら、拳を握る。

「コカビエルの残したコネクション経由でスカウトが来た。「アースガルズと戦ってみないか」……とね」

「本気か？ 今時神話の垣根を超えた争いなんて、世界を滅ぼすぞ」

「だからだよ。俺は強い奴と戦えればそれでいいが、お前は戦争が嫌いだから反対するだろう？」

アザゼルの指摘にもヴァーリはどこ吹く風。

そして、その会話を嘲笑するかのようカテレアは肩をすくめた。

「彼の本質を知っておきながら、放置していた貴方の失態です。正直らしくもない」

「悪かったな、オイ」

痛いところを突かれたのか顔をしかめながら、アザゼルもまた肩をすくめる。

「つたく。魔王の末裔同士つるんでテロとか、勘弁してほしいな、オイ」

そして吐いたその嫌味に、後ろにいた三人が硬直した。

魔王の末裔、それは良い。カテレア・レヴィアタンは正真正銘魔王の末裔だ。

だが、同士とはどういうことか。

その驚愕に気が付いたのか、アザゼルがあつと声を出した。

「そーいや、まだ言っつてなかつたな」

「そうだった。なら、説明するー」

それにつられてヴァーリが声をかけたその瞬間だった。

その後ろに、雷撃を右腕にまとったピスが襲い掛かる。

「裏切り者は見過ごせないわねえ！」

「チツ！」

とっさにかわして迎撃の拳をはなつヴァーリだが、それをさらりとかわすとピスはさらに大筒を向ける。

龍が絡みついたようなその大筒から放たれる砲撃を、ヴァーリはとっさに障壁を張って防御。

しかし、完全に防ぎ切ることはできず、わずか二だが鎧が損傷する。

「やるね。さすがはアザゼル直下の戦士だけある——」

「ヴァーリ!!」

ピスをほめようとしたヴァーリに、再び後方から攻撃が迫る。

それをなすのは井草・ダウンフォール。イーツの姿のまま光の剣で切りかかる井草は、遠慮なく光の剣をふりおろす。

しかし、それをヴァーリは無造作につかみ、勢いよく投げ飛ばした。

とっさに受け身を取る井草だが、体勢を立て直す瞬間にヴァーリはオーラの砲弾をはなつ。

タイミングは的確。そしてそれゆえにかわす余地はない。

だが、その攻撃はピスが雷撃を纏った右腕ではじき返すことで防ぎ切った。

「大丈夫う?」

「ありがと義姉さん。俺は大丈夫」

ピスにそう答えながら、井草はヴァーリをにらみつける。

「ヴァーリ・ルシファー。君は現状を理解しているのか!? イーツを大量に発生させ、世界を混乱に貶めている連中と組むのが誇り高い白龍皇だつて!」

「それが何か? 少なくとも、こうでもしなければ神々と戦うことなど今の世界じゃで
きないだろう?」

「チンピラが……っ!」

平然と世界の混乱すら受け入れる其の在り方に、井草は心底怒りを覚えて歯噛みす
る。

ルシファーの末裔の存在を悪魔側現政権や枢機卿が知れば殺しに来る可能性は大き
い。それを理解していたからこそ、グリゴリは彼の保護を決定したのだ。

その果てがこれ。いかに直接の関与をしていないとはいえ、井草としては怒りを覚え
るほかない。

「俺なんかがこんなことを言う資格はない。だけど、あえて言わせてもらおう……」

心の底からの怒りの感情をこめ、井草はヴァーリに鋭い視線を向ける。

「君を保護したのはグリゴリの落ち度だ。ここで殺すことでしりぬぐいをさせてもら

……!」

本心からの殺害予告を受け、しかしヴァーリは動じない。

「できないさ。少なくとも、君はこの赤龍帝ではね」

そうはつきりといいながら、ヴァーリは残念そうな視線をイツセーに向ける。

そこにあるのは憐憫か、嘲りか。少なくとも、評価を上げるようなものでは断じてなかった。

「ああ、しかし今代の赤龍帝が彼だというのは、実に残念だよ」

あえて正直にそれを言うのは、果たして挑発か、それとも罵倒か。

いや、そのどちらでもないのだろう。

それは純粹な感想。相手を意図的に怒らせるつもりも、相手を不当に馬鹿にするつもりもない。純粹なまでの本心からのため息だった。

もつとも、それで納得できるほどイツセーは我慢強い性格ではない。

「おい、なんだよ人のことを残念残念って!! っていうかそつちのお姉さんは誰だ!」

「……本当に残念な子ね。ヴァーリ、殺すの?」

心底からのカテレアの冷めた目が、イツセーに突き刺さる。

そして、ヴァーリはヴァーリで肩をすくめた。

「正直に言おう、そんな気もなくすぐらい残念なんだ」

そう言い放つと、ヴァーリはその目を井草に向ける。

「どうせなら君が赤龍帝ならよかったよ。イツと赤龍帝の籠手と墮天使の血の複合なら、俺にも負けない価値を持てただろうに」

それは心からの発言だった。

ヴァーリ・ルシファーは自分の血と特性を誇っている。

偉大なる最強の魔王たるルシファーの血を継ぎ、最高峰の龍種であるアルビオンを封じた神滅具を保有している。

現在過去未来において歴代最強の白龍皇になる。そんな形容すらされた自分は、奇跡という言葉を体現しているとすら言い切れる。

にもかかわらず、その相手となる赤龍帝は、赤龍帝であることを除けばただの一般人だった少年だ。

悪魔でも墮天使でもそのハーフでもない。先祖が魔法使いや術者の家系にかかわっていた痕跡もない。最悪悪魔と何度も契約していたのならまだ良かったが、そういうこともない。

「俺のような奇跡の塊と相対する赤龍帝が、君みたいな凡人だなんて、残念を通り越して笑いが出てくる」

そう心の底からの無念を語ると、しかしヴァーリは一本の指を立てた。

「だが、一つだけ君を平凡じゃなくする方法がある。……君が復讐者になればいいんだ」
その言葉に、その場でリアスたちは沈黙を返す。

それを促しと受け取ったのか、ヴァーリは面白そうだといわんばかりにやりと笑う。

「俺が君の両親を殺せば、少しは運命的なものが生まれてくるとは思わないかい？　どうせただおいて死ぬただの人間だ。そっちの方がよっぽどましだとすら俺は思うけどね？」

その言葉に、何かが切れた。

10話

その時、ヴァーリ・ルシファーは何が起きたのかを理解する事が出来なかった。

衝撃と共に、兵藤一誠達が一瞬で遠くに離れていく。

否、違う。

自分が殴り飛ばされたのだ。

「な………に？」

あり得ない。

余裕が油断に代わっていた可能性は認めよう。それほどまでに今のは名案であったと思っている。

だが、それでもそれをなしたのは一体誰なのか。

アザゼルではない。カテレアなわけがない。リアス・グレモリー如きでは不可能だ。

兵藤一誠に至ってはその光景にぼかんとしている。ピス・ダウンフォールも啞然として
いる。

そう、すなわち答えは一つ。

「……こんなもんで済むと思ってるのかい？」

答えに行きついた瞬間、急激に自分体が引つ張られる。

そして一気に元の場所に戻っていく中、ヴァーリはその種に気が付いた。

気づけば、自分の体に糸がついている。

殴り飛ばした時につけたのだろう。結果として、勢いよく引き戻されたのだ。

そして、その糸は蜘蛛を模した手の甲の意匠から伸びており、その意匠を持つのはただ一人。

「今お前は、超えてはいけない一線を越えたんだよ」

井草・ダウンフォールがそのままヴァーリを地面に叩きつける。

「面白い、やればできる奴もいるじゃないか」

「うるさいよ」

褒め称え様とすれば、顔面に拳が叩き込まれてそのまま強制的に口を塞がれる。

そして反撃の拳を叩き込もうとすれば、その腕を掴まれてひねり上げられた。

『馬鹿な!! この私の力を引き出しているヴァーリが、一方的に!』

アルビオンが驚愕し、自分もまた驚愕している。

同じ異形とのハーフで神器を持つ身ではあるが、ヴァーリと井草には大きな隔たりがある。

井草は上級墮天使のハーフラしいが、自分は最上級悪魔を通り越して最強の魔王の血を引いている。

ヴァーリの神器は神滅具の一つだが、井草の神器は戦闘用でもない、低性能の神器のはずだった。

にも関わらず、一方的に殴り続けられている。

打ち身程度はいくつもできたし、骨にヒビが入ったかもしれない。それほどまでに一方的に攻撃を受けている。

なるほど、これがエポリユーションエクスによって変化したイツの力か。

そう納得し、しかしヴァーリも本気を出す。

なにせ、自分は現在過去未来において最強の白龍皇になると称された男。たかが上級の混じり物風情にやられるわけにもいかない。

『Dividi!』

半減を發動させて相手の力を奪い、そして勢いよく絡みついていた糸を魔力で弾き飛ばす。

そして、力が抜けた井草の腹に、全力の拳を叩きつけ弾き飛ばし――

「まだだよー」

そのまま自分まで吹き飛ばされた。

気づけば、弾き飛ばしたと思った糸がまた引っ付いていた。

どうやら攻撃を喰らったその瞬間につけたらしい。

戦闘経験もそう多くないと聞いているが、よくもまあここまでの捨て身の判断ができるものだ。正直関心する。

だが、その程度でこの白龍皇を倒せると思ってもらっては本気で困るという物であり

「言っとくけど、キレてるのは俺だけじゃないんだって分かってるよね」

その井草の言葉と共に、ヴァーリの肩に手が置かれた。

「……おい、このクソ野郎」

そして振り返ったその瞬間――

「ぶち殺すぞこの野郎!!」

顔面に赤龍帝の拳が叩き込まれた。

その短時間の攻防を終え、井草は何らかの充実感を覚えていた。

ふと気づけば、イーツと化した自分の体はまた変化していた。

腰の部分に日本の鎧のパーツらしきものがついている。確か草刷りとかいう名前だったはずだ。

そして、その理由もなんとなく分かる。

「分かってきたよ、このイーツの能力が」

ああ、単純な事だ。

蜘蛛の意匠はドーナシックが変身していた蜘蛛のイーツ。草刷りの部分は、エクスカリバー事件で同じく井草が止めを刺したケンゴウのイーツと化したバルバーの意匠に似ている。

そう、そしてナイフアーザーが教えてくれた自分のイーツの名前。

レセプター。和名は受容体。

細胞の膜に存在し、細胞膜の外の物質と結合して多様な反応を起こす機能を持つ体の一部。

その名を冠すこのイーツの力は――

「……倒したイーツの力を取り込めるってわけだ。漫画の主人公になった気分だよ。

……役者不足にもほどがある」

なんとなく居心地が悪い気分になる。

物語の主人公に自分のような屑がなるなど、最悪ではある。

だが、この状況下では少しは助かっているだろう。

今後のイーツとの戦いにおいて、自分が主力となつてイーツを倒し続けていれば、そのイーツの力をどんどん手に入れることができるということだろう

今後の対イーツ戦において、間違いなく有用だ。

とは言えー

「ああ、これあれだね。普段動かしてない筋肉動かしてすぐに筋肉痛になるアレ。……カラダイタイ」

「井草?! あなた大丈夫?!」

思わずリアスが心配するぐらい体が震えている。

まったく動かしたことの無い機能を怒りに任せて動かしたせいだろう。今までの人生でも経験したことがないぐらい痛い。肉体的苦痛においては人生最高峰である。

正直これ以上闘える自信がないのだが――

「安心してください、井草さん」

イーセーは一步前に出ると井草の肩に手を置いた。

鎧に包まれている状態では表情はわからないが、しかしそこには強い決意が伝わってくる。

「アイツは俺が殴らないと気が済まない。徹底的にぶちのめす」

「分かった。確かに部外者がしゃしゃり出てあれだしね」

それに今の衝撃でさらに痛くなった。とても動けそうにない。

「だからあととらせてください。……赤龍帝の意地を見せてやります!!」

その言葉に、井草はうなづいた。

ああ、そうだ。自分のような屑に、この決意を邪魔する資格はない。

それに共闘するのもあれだろう。それは、赤龍帝の名に傷をつけるようなものだ。

「じゃあ、頑張るといいよ、イツセー」

その言葉と同時に、井草はへたり込み、そしてイツセーは駆け出した。

そして、アザゼルはカテレアに視線を向ける。

「んじゃ、こつちもさつさと終わらせるとするか」

「言つてくれますね、ですが、貴方に勝ち目はありませんよ?」

カテレアがそう不敵に嗤つた瞬間、変化は起きた。

カテレア・レヴィアタンが保有する魔力。その漏れ出すオーラが一気に増大化したのだ。

カテレアは魔王の末裔だけあつて、最上級悪魔クラスの魔力は保有している。

しかし、総合的にセラフォルー達現四大魔王や初代レヴィアタン達旧四大魔王には劣っている。だからこそ内戦で負けたわけだし、魔王の座を奪われる事になったのだ。

そして血統に拘る悪魔は才能が自然に成長する事に任せ、努力を厭う傾向がある。ならばこれは特訓とは思えない。

すなわち答えは一つ。

「まだイーツにはなつてねえな。なら、オフィス絡みか」

その言葉に、カテレアは静かに微笑む。

「どうやら正解らしい。」

「ま、何か持つてきてるとは思つてたぜ」

そう静かに言うのと、アザゼルは懐に手をつ突つ込む。

正直に言えば、これを使う機会が欲しくて堪らなかつたところだ。作つた者のお披露目をしたがるのが愉快犯の気がある自分のようなタイプの技術者というものだ。

故に、遠慮なく開帳しよう。

「俺は神器を研究してるんだが、色々あって人工的に作る研究もしてるのは知ってるか？」

「それぐらいは内通者が話していただけます。ですが、ろくに形にできていないとか——」

「—OK。スパイがどの辺まで潜り込んでるのかは分かった。その程度か」

その言葉に、カテレアは警戒心を強くする。

アザゼルはその戦闘勘を素直に評価する。

正解だ。この切り札は、間違いなくオーフィスの蛇のアドバンテージをひっくり返す。神滅具を使うヴァーリにすら対抗できるだろう。

何故ならこれは、それだけの代物なのだ。

「五大龍王が一画、ギガンテイス・ドラゴン黄金龍君フアーブニル。強力な人工神器開発の為に、コアになつてもらおう契約をしてもらつてなあ。テスト相手が欲しかったんだよ、いやマジで」

「そこ迄開発が進んでいたと!？」

狼狽するカテレアだが、その隙は命取りだ。

「行くぜ、バランス・ブレイク禁手化！」

その瞬間に、瞬時に人工神器を禁手化させる。

现阶段では使い捨て覚悟の暴走でしかないが、しかしそれをするだけの価値のある相

手ではある。

故に見せつけよう、この黄金と黒で彩られた龍の鎧を。

「ダウンフォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍の禁手、ダウンフォール・ドラゴン・アナザー・アーマー墮天龍の鎧。どうだ、カッコいいだろ？」

「アザゼル！ それだけの力を持っていながら、何故あなたは……っつ」
カテレアが何を言いたいのかはなんとなく分かる。

それだけの才覚があるなら世界を変革しろとか、そういう事を言いたいのだろう。
だが、そんな事に対する返答は決まっている。

「お前みたいな小物には分からねえよ」

「な……めるなあああああ!!」

激昂したカテレアは、魔力を最大限に込めてこちらに接近戦を挑む。

それに対し、アザゼルもまた光の槍を展開して迎撃し――

「――よっつと」

「――かはっ!？」

その一瞬の交錯は、アザゼルの勝利に終わった。

当然といえば当然の結果である。

如何に魔王クラスにまで能力を上昇させようと、魔王クラスとすら渡り合える存在が更に龍王の力を宿せば、合計の力量では上回る。

それにアザゼルはカテレアよりも長く生きている分年季が違う。加えて激昂して冷静さを欠いたカテレアと、彼我の能力差を正確に把握して冷静だったアザゼルとの間には、メンタル面でも大きな差が開いていた。

ゆえにこの戦いの勝利はほぼ確定。深手を負ったカテレアでは、勝ち目は無いも同然だろう。

「んじゃ、叩きのめしてとっ捕まえるとすつかー」

「舐めるなああああ!!」

その余裕っぷりに神経を逆なでされたのか、カテレアは懐から何かを取り出す。見れば、それは筒状の何か。

「チッ！ 噂のエボリューションエキスってやつかー」

『シールド』

とつさに倒そうと光の槍を投げつけるも、それよりカテレアがエボリューションエキスを打ち込む方が早い。

その瞬間、カテレアは盾を全身に鎧のように取り付けた異形の怪人になると、全ての攻撃に耐えきった。

シールド。すなわち楯。

名の通りの高い防御力が特徴なのだろう。蛇を取り込んだカテレアが使ったからだ

とは思うが、それだけの防御力を発揮していた。

そして、状況は変化する。

「あ、やべ。時間切れだ」

鎧が砕け散り、一個の宝玉を残して完全に崩壊する。

その宝玉を回収しながら、アザゼルはどうしたもんかと頭を書いた。

「まだまだ持続時間が短いなあオイ。こりや要改良だな」

そんなのんきな事を漏らした瞬間、アザゼルの頬を魔力弾が掠める。

放ったのは当然カテレアである。

「させると思いますか?」

殺意がこれまで以上に叩きつけられるが、アザゼルはどこ吹く風だ。

そして、カテレアはその態度に苛立ちを隠さない。

何故なら、自分がこれ以上戦闘を続行しないという事を見抜かれていると理解しているからだ。

先のアザゼルが叩き込んだ攻撃は、ものの見事に深手だった。できる限り早くの治療が必要だろう。

そんな状態で戦闘を行っても、本領を発揮する事はできないだろう。よしんばアザゼルを切り抜ける事が出来ても、その後はセラフォルーやグレイフィア、ミカエルが控え

ているのだから。

「……覚えておきなさい、アザゼル。この汚名は必ず雪がさせていただきます」

「お前じゃ無理だよ。ま、それでもいいなら好きにしま」

アザゼルとしても今の彼女を捕まえるのは困難なので、見逃す他ない。

それほどまでの耐久力を持っている相手に、今の自分ではどうにかできるとは思えない。墮天龍の鎧が無事なら考えるが、おそらくどちらにしても逃げられるだろう。

そういう意味では痛み分けではあるのだが、意気揚々とこちらを殺しに来たらしいカテレアはそのあたりに気づいていない。

そういうところが小物なんだと思いつつながら、アザゼルはカテレアが転移するのを見送

り――

「よそ見をするとは余裕だな」

その瞬間、後ろから迫ってきたナイフアーザーの攻撃に、反応が遅れた。

とつさに腕を盾にし、更に全力でオーラを流すことでその役目を果たさせることはでき
きた。

が、それが限界だ。

瞬時に向けられたナイフアーザーの持つブレードが、アザゼルの右腕を切り落と
した。

11話

切り落とされた腕をアザゼルが掴む事は出来なかった。

そんな事をして隙を作るつもりもなかったし、何よりナイフアーザーがその確保を優先したからだ。

そのおかげで安全圏までの対比が完璧にできたのは僥倖だが、しかし警戒するべき内容でもある。

アザゼルは確信している。絶対にロクな事を考えていない。

「……何のつもりだよ、こんなオッサンの腕なんて切り取るとか」

「最上級の墮天使の血肉など、研究データの塊だろう？ コカビエルで採るわけにはいかないしな」

あつさりと言い切るナイフアーザーに、アザゼルは舌打ちをするが、しかし同時に占めたとも思う。

「どうやらこの男、脇が甘いらしい。」

「コカビエルはやっぱり禍の団か。教えてくれて助かったぜ」

そう、ならばするべき対処は簡単だ。

「ありがとよ。お前らのおかげで和平は三大勢力備だけで終わりそうにはなくなつたぜ」
その言葉に、ナイフアーザーがピクリと肩を震わす。

つくづく解り易い。アザゼルはほくそ笑んだ。

ああ、どうやら凶星らしい。ここまで解り易いと罠を疑う事すら難しい。

「んじや、聞きたい事は聞けたし倒されな、神々への復讐者さん？」

「貴様、気づいて——」

それ以上の言葉を放つ隙は無かった。

その瞬間、ナイフアーザーは全身を滅多打ちされて地面に叩き付けられる。

その間——

「……ジャスト五秒お」

そしてそれを告げたピスが、軽く息をついてへたり込む。

そしてそんなピスを肩に担いで、アザゼルは素早く飛びすぎる。

そして、そして——

「すまないが、動けない体になつてもらおう」

——大量の消滅の魔力の弾丸が、ナイフアーザーの全身をことごとくかき消した。

「……すまないアザゼル。カテレア達の事だけでなく、私がナイフアーザーを抑えきれなかったばかりに腕まで失わせる事になるとは、失態だ」

そうすまなそうにするサーゼクスに、アザゼルは肩をすくめる。

「んなもんヴァーリが暴れてるっただけでチャラだつての。第一、お前言うほど権力ねえだろ？ 気にすんな」

なんだかんだで諜報の一つや二つぐらいはやってる。ゆえに情報も少しは掴んでいる。

現四大魔王は名目上悪魔の長だが、実験の多くは旧家に握られている事ぐらいは当然掴んでいる。そして彼らの圧倒的年季を考慮すれば、そう簡単に動けない事も確実だ。

ましてや一太刀で自分の腕を切り落とせるナイフアーザーの武装や戦闘能力を考慮すれば、結界の外側の被害を考慮しながらでは限界もあるだろう。

それに、これはこれで旨味もある。

「一度多機能偽腕つてのを付けてみたかったんだ。いやあ、楽しみだぜ」

「……本気で言ってますよねえ、総督う？」

半目でピスに呆れられるが、そんなものは知った事ではない。

ロマンというのは何時だって、ロマンを持つ者にしか理解されないものなのだ。

まあ、それは今はどうでもいい。

今はそれより、貴重な敵の捕虜を確保するべきで――

「――原始生命体如きに全力を出す事になるとはな……！」

その言葉と共に、炎が吹き上がる。

火を噴き上げるのはナイフアーザー。そして、その炎はその肉体を焼く事なく。むしろ欠損部位を再生させていつている。

その光景に、アザゼルは舌打ちをする。

「おいおい、そんなレベルの再生技術まで持つてるつてのかよ。神滅具でも持つてんのか、てめえら」

「そうではない。これは私のデフォルトイーツ、フェニックスイーツの能力だ」

そう返しながら、ナイフアーザーは殆ど完全に修復された体を見せつける。

怪物の姿では表情は分からない。しかし、得意げなのは雰囲気がよく分かった。

「私の再生力はフェニックス家の悪魔でも上位陣でなければできないレベルだ。この程度の欠損など秒で修復できるとも」

そう言い放つナイフアーザーだが、しかしそれに気圧されたのはピスだけだった。アザゼルとサーゼクスに至っては、半分呆れている表情を浮かべている。

「総督う？　今、結構驚異的な情報が出てきませんでしたあ？」

ついそう聞いてしまうピスに、サーゼクスは静かに頷いた。

「確かに驚いている。……：イーツにも色々あるという事か。おそらく肉体を変化させずにイーツ化できる上位種なのだろうね」

ただし、驚きの意味は違う。

そう。ナイフアーザーはまたしても余計な事を言ったのである。

デフォルトイーツという言葉を使った事で、通常のイーツとは違うイーツがあるという事を証明してしまったのだ。

「……ぐうっ」

気づいて歯噛みするが、もう遅い。

アザゼルは肩を震わせながら、ナイフアーザーに半目を向ける。

皮肉気に笑いたいところだが、しかしそれも難しいぐらい呆れていた。

「お前の上司もお前以外を送り込めば良かったって後悔してるんじゃないか？」

真面目な話、本当にナイフアーザーの上司には同情しているアザゼルだった。

この男、上から目線で愉悦しているがゆえに隙がありまくるタイプである。

機密事項とか守秘義務とか言っていたのは何だったのか。どうあがいても重要な情報を多く知るような立場には就けないタイプである。

その視線の意味を痛感したのか、ナイフアーザーはプルプルと肩を震わせている。

「ほぎくな！ 長年にわたる改造と受精卵の段階からの遺伝子調整を組み合わせて、それでも一割程度の人員しか発現できないデフォルトーツを、貴様らがどうにかできるわけがない!!」

激昂してそう吠えるナイフアーザーに、アザゼルはうんと頷いた。

確かに、それだけの事をしているのならそう簡単にベースーツを実用化する事はできないだろう。

実際エボリューションエキスとやらを製造するどころか、どういふものなのかすらよく分かっていないのだから尚更である。

「なるほど。どうやら少なくとも見積もっても君達は数十年前から準備をしてきたらしいね」

「ま、俺の予想通りなら数千年は準備してらるだろうしな。復興も含めて」

それを態々教えてくれるとは皮肉を返したくなるレベルである。

なんだかんだで国家レベルの組織の指導者として合格点のアザゼルとサーゼクスは、すぐに情報を理解した。

脅し文句のつもりなのだろうが、どんどん情報を手強してくれている事実にもはや感謝の念を本気で浮かべてしまう。ピスですらだ。

この調子なら組織の全貌を知るのもそう難しい事ではないのかとすら思ったのだが

「……おーい、ナイフアーザー」

流石にまずいと思つたのか、新たな乱入者が現れた。

その言葉に、ナイフアーザーの口元から歯ぎしりと思しき音が漏れる。

「何の用だ、ナイアル!!」

口があるなら唾をまき散らしているだろう勢いで怒鳴りながら、ナイフアーザーは振り返り――

「警戒心ゼロで振り向いてんじゃねえよ」

――それを意に会する事なく、蟻を模したイーツがナイフアーザーを庇う様にアザゼル達との間に割って入った。

その動きは流れるように自然なもので、一瞬誰もが反応を僅かに遅れさせるほど。

もはや一種の芸術と言つてもいい動きでナイフアーザーのフォローする位置取りについた蟻型イーツは、そのまま視線をピスに向けると片手を上げる。

「ちわー、お姉さん。廃教会ではどもっ」

「……あぁー!? あの時のイーツう!」

そのピスの反応に、アザゼルもサーゼクスもすぐに気づく。

三大勢力が囂らずも共闘したレイナーレ一派との戦闘。

三大勢力がイーツと直接激突したあの戦いで、レイナーレとフリード・セルゼンを逃がした謎のイーツ。

蟻を模したイーツだと報告書に書かれていたが、まさかここに出てくるとは思わなかった。

そして、その状況下にアザゼルは――

「よお、初めましてだな、無有影雄」

――盛大に、鎌をかけた。

「カマかけかい? 俺を後ろの間抜けと一緒にすんじゃねえよ」

「誰が間抜けだ!」

アントイーツにナイフアーザーが怒声を掛けるが、アントイーツは一切気にしていない。
い。

その反応だけでアザゼル達は警戒度を引き上げる。

間違いない。目の前のアントイーツは、ナイフアーザーとは格が違う。

戦闘能力はともかく、油断できるタイプではないだろう。

そして戦闘能力も警戒するべきだ。少なくともこの状況下で出てくる以上、ナイフアーザーと肩を並べるだけの戦闘能力は持っているだろうし、それ以上という可能性もありうる。

三人が静かに戦意を高める中、アントイーツはそれを面白そうに眺め――

「まあ正解なんだがな。確信してんだろ、オツサン」

そういいながら、その姿をイーツから人のそれに変える。

一見すると十人中八人ぐらいが振り返りそうなイケメンの優男。

しかし、その姿を見たピスは目を見開いて怒りの表情を見せる。

「……お久しぶりねえ。その姿を見るのは三年ぶりかしらあ？」

「大体そんなあ感じだな？」

ピスに殺意を叩きつけられながらも、しかし無有は余裕の表情を崩さない。

そしてそのままちらりと視線を向けると、ワザとらしく怯えて肩をすくめる動きを見せる。

「おっと。上司の方もお冠だ。怖い怖い」

その言葉に、サーゼクスは警戒心を解かずにチラリと視線をアザゼルに向ける。

アザゼルは、一見すると表情を特に変えていない。警戒態勢はとっているが、それは戦闘中なのだから当然だろう。

だが、三大勢力の一人としては若輩の部類のサーゼクスも歴戦の猛者である。すぐに分かった。

アザゼルは、かなり怒っている。

「初めましてだな、無有影雄。死にたくねえなら投降するか失せるかしな。そろそろ時間停止の結果も解けるんじゃないやねえか？」

その言葉も、普段通りのようできて殺意が籠っている。

初めて会う相手に何故それだけの感情を込めているのか、サーゼクスには分からない。

だが、予想はできる。

無有影雄。その名前を、アザゼルはついさっき口にしていた。

そう、ナイフアーザーがカテレアと共に自分達の目の前に出てきた時、アザゼル自身がそう告げていたのだ。

そして、その時の出来事もすぐに思い出せる。

今昏倒している井草・ダウンフォール。彼がナイフアーザーが無有の関係者だと認めた時に、激昂して掴みかかったのだ。

そしてアザエルよりも分かり易く怒りの表情を浮かべているピスは、井草の義姉。

井草・ダウンフォールは事情があつて二十歳でありながら高校二年生。そしてその年

数差は三年。

そして、ピスは無有に姿を見るのは三年ぶりと言っていた。

情報が足りないので、全てが繋がったとは言えない。

だが、目の前の男が井草・ダウンフォールに深く関わっている事だけは理解できる。

「まあいい。三大勢力の最強格相手にどれぐらい戦えるかのデータは採れたんでな、撤回するぜ」

その中心に近い位置にいるだろう無有は、振り返らずにナイフアーザーに告げる。

ナイフアーザーも不満げだったが、その言葉に反論せずに頷いた。

そして、その反応を待つ事なく、禍々しい色の霧が二人を包み込む。

「……絶霧か。神滅具保有者が禍の団にいるのは分かったが、面倒なのがいるって事か」

「まあな。神殺しの一つや二つ無けりや、世界を敵に回す事なんてできるわけねえだろう？」

アザゼルにそう答えながら、無有は嗤いながら霧の中に消える。

そして霧そのものが消えるその前に――

「まあ、俺達を倒したいならさっさと他の神話の足でも舐めてお願いするんだな。それぐらいしねえと張り合いもないからよ？」

そんな、挑発的な言葉を残していった。

1 2 話

井草は体の痛みを感じながら、意識を取り戻す。

戦闘中に気絶をするとはうかつだった。イツセーは無事だろうか。

そう思いながら起き上がり――

「小猫ちゃんはなあ、自分のおっぱいが小さいのを気にしてるんだぞ!! そんな子のおっぱいを半分にするとかふざけんじゃねえええええええ!! もう一発殴ってやろうか、この半分マニア!!」

――そんな事を大声で吠えながら涙すら流しているイツセーに目を丸くした。いったいこれは、どういう事何だろうか？

「井草あ! 起きたのねえ!!」

そして、起きた事に気づいたピスに抱き着かれて我に返る。

ちなみに体中の痛みが実感できて悶え苦しむが、それを無理やり我慢する。

今はそんな事を気にしている場合ではない。しかし別のそんな事が気になってしま

とりあえず周りを見渡すと、ナイフアーザーもカテレアもいなくなっていた。つまり少しは気を抜けそうな状況なので、とりあえず聞いてみよう。

井草はそう結論。とりあえず聞いてみる事にする。

「義姉さん。これ、どういう状況？」

「うん、総督がやらかしたわ」

よく考えない方がいいだろう。

井草はそう結論すると、とりあえず立ち上がる。

ヴァーリも相当ダメージが入っているようだが、しかし油断はできない。

ヴァーリ・ルシファーは神と戦ってみたいとか、世界最強になったら世界に興味がなくなるから死ぬとかいうほどの戦闘狂だ。下手をするとこれで逆にテンションが上がるかもしれない。

それにヴァーリにはまだ手札が残っている。禁手すら不完全なイツセーではいくらなんでも発動できないだろう、封印系神器の伏札があるのだ。

あれを出されたら流石に周辺被害がシャレにならない。その前に何とかする必要がある。

「イツセー！ 直ぐにヴァーリを気絶させるんだ!!」

「井草さん！ もう起きて大丈夫なんですか？」

イツセーが振り返ってこちらを心配してくるが、そんな事をしていゝ余裕はない。

「ヴァーリはまだ切り札を持つてゐる！ 出されると駒王町が吹き飛びかねないからすぐに叩きのめして!!」

「ええ!？」

イツセーは明らかに驚愕する。

仕方がない事だろう。兵藤一誠という少年は、まだ戦士ではなく学生に意識が寄つてゐる。そんな彼に即座に敵にとどめを刺せというのも酷な話だ。

だが、それが良くなかつた。

「我、目覚めるは——」

既にヴァーリは詠唱を開始している。

そしてオーラをはなつて接近も阻害している。是では詠唱を阻止する事はできないかもしれない。

このままではまずいと、井草がそう思つた瞬間——

「あらあ、そうはさせないわあ」

——オーラを強引に突き破り、ピスがヴァーリの目の前に立っていた。

「残り57秒、フルボッコねえ」

そして、五十七秒間の地獄がヴァーリに襲い掛かつた。

その乱打、文字通り神速。

その連打、文字通り神殺しに匹敵。

そしてその連撃は、ボロボロのヴァーリでは対処する余裕は欠片もなかった。

五十七秒間、ヴァーリは文字通り何もできずにただ雷撃を纏った右腕で殴られ続け――

「じゃあ、あとはよろしくう〜」

そう、最後に行ったピスと共に、地面に倒れて動かなくなる。

「……………え？」

イツセーはその光景にそんな事を言うしかない。

井草はそれに同情すると、周りを見渡す。

そこには、その光景を予想していたアザエルが面白そうに笑い、隣のサーゼクスはほうほうと感心してピスに目を向ける。

離れたところではセラフオールとミカエルに連れられて停止から回復した者達やその場で停止していたモノを護衛していた者達も来ていた。

そして、大半がぼかんとしている。

「……………あれが、ヤーロウと戦って生き延びた者ですか」

「ええ。私はてつきり、聖書に名前が残された者を相手にしていたのかと思つたものです」

と、感嘆するミカエルにヤーロウが苦笑を返す。

確かにそうだろう。未来永劫歴代最強になるとまで言われた白龍皇を、一分足らず一方的に叩きのめし、しかもそれでほぼKO状態にする墮天使など、最強格だ。

しかし、ピス・ダウンフォールは聖書に名を刻まれていない墮天使である。

その事実には、全員が墮天使陣営の人材の多様さを思い知る。

「ま、こいつはちよつと反則技使つてな。一分でぶつ倒れる代わりに、一分間だけグリゴリ最強になれるんだよ」

と、アザゼルが得意げに言つた時だった。

「……おいおい、ヴァーリの奴やられてるじゃねえかよお」

そんな声と共に、結界が破壊され一人の青年が降り立つ。

中国に由来すると思われる鎧で身を包み、頭には金の冠が付けられている。

その姿を見たとき、井草は自然と一匹の動物を想像した。

そして同時に、義姉の窮地に体が動いた。

「この猿！ 義姉さんから離れる!!」

即座にレセプターイーツに変身し、そして拳を放つ。

だが、その一撃は簡単に受け止められた。

「いい拳だが、まだまだだぜい？」

「だろぅね！」

だが、井草も即座に対応する。

糸を出してピスを確保しつつ、牽制の為にケリを放つ。

そして糸で振り回してピスを投げ飛ばすと、更にその勢いを利用して再び殴り掛かる。

その一撃を喰らった猿を連想させる男は吹っ飛ぶが、しかしその瞬間に井草は失態を悟る。

「まだまだあまいぜえ？」

そう、それは吹っ飛ばされたのではない。わざと吹っ飛んだのだ。

そして、気づけばヴァーリを抱えられていた。

「しまった!?! やはり俺なんかじゃこれが限界か……!」

「兄ちゃん、自虐しすぎじゃねえの?」

敵にまで言われた。解せぬ。

何故敵まで自分を罵倒するのではなく、評価が高い傾向にあるのだろうか?

世の中の理不尽を感じ、井草は一瞬だけ世界の在り方を嘆く。

しかしそんな時間的余裕はない。

よりにもよって墮天使の命運を握る会談に身内がテロリストを手引きしたというの

だ。取り逃がすなどもつての他だろう。

故に遠慮なく踏み込もうとしたが―

「落ち着け。へとへとのお前が勝てる相手じゃねえよ」

その言葉と共に、アザゼルが片手で器用に井草を止めた。

「つたく、美猴じゃねえか。須弥山は禍の団に出資したのかあ？」

「そうじゃねえぜ、総督さんよお。これは俺たちの独断つてやつさ」

そうフレンドリーな二人の会話を聞いて、井草は戦慄する。

どうも知り合いらしい。しかし問題は、須弥山という言葉だ。

異形業界でも五指に入りうる実力者、帝釈天が率いる中国の異形勢力の総本山。アジ

アの神話関係では最大の組織と言ってもいい。

独断という言葉が一安心ではあるが、どうもこの騒ぎ、相当広範囲に広がっていると

みていいようだ。

「あ、アザゼル！ あいつ誰だよ？」

「一発で分かる様に言ってる。孫悟空の子孫だ」

イツセーにアザゼルが馬鹿でも分かる説明をしてくれた。

孫悟空。西遊記に出てくる猿の妖怪。おそらく世界でもっとも有名な猿だろう。

須弥山でも有数の戦力にして、伝説クラスの千人でもある。その子孫ともなれば、七

光り的な考えではあるが、ただものだとも思えない。

そして、そんな人物がテロ組織である禍の団に所属しているという事実は脅威という他ない。

「俺たちは自由に生きるって決めてるんでねえ。気ままに生きさせてもらおうぜい?」
そんなことをのたまいながら、美猴は持っていた棍を地面に叩き付ける。

途端に棍が叩き付けられた場所を中心に地面が泥のようになり、そして美猴はヴァーリと共に地面へと沈んでいく。

まさに逃げようとしているのだ。

「あ、待てこの——」

思わず追撃しようとするイツセーだが、しかしその瞬間に禁手が解ける。

リングの限界が来たということだろう。

元より禁手を疑似的に発動させるなどという無茶な真似だ。長時間運用する事など不可能に近い。更にその状態で禁手を更に高めているヴァーリを一時とは言え圧倒するような真似をして、ただで済むわけがない。

「んじゃ、俺たち達はこの辺で返らせてもらおうぜい。赤龍帝、今度は俺たちとも戦おうぜえ♪」

その言葉と共に、美猴達の姿は消えていった。

「つたく、お前さんは口が軽すぎるぜ」

帰還早々、無有は呆れ半分でナイフアーザーに半目を向ける。

意気揚々と出撃し、実際データを持ち帰り、そしてE Eレベル6以上でなら魔王クラスとすら渡り合えると証明した。

ナイフアーザーは確かに成果を上げた。そこは褒められるべきだろう。

だが、それと同じぐらい情報をペラペラしゃべりすぎである。

流石に機密事項には触れていないし、知られてもそこまで致命的な情報ではなかった。だから罰則を受ける事はないだろう。

だが、優れた研究者でありイーツのサンプルや生態データを持っているアザゼルならある程度の情報でもだいぶ推測できるだろう。というより、既に情報をすり合わせてだいたい想定されている。

どうせすぐにばらすとは言え、これはこれで一応叱責を受けるべきではある。

ゆえにこそからかい目的でそう言ったのだが、そこに凄まじいレベルで怒気の籠った

視線を向けられるのは苦笑ものだ。

「この……いい加減な貴様にとやかく言われる筋合いはない!!」

「そこまで言うなよ？　之でも俺、E Eレベル7，5だぜ？」

それが更にイラつかせていると分かかっていて、しかし無有はあえて言う。

彼はそういう性分なのだ。だからこそ、余計な真似をしてしまったともいえる。

「フン。どうやらあまり楽しめなかったようだな」

そこに、黒髪を伸ばした一人の墮天使が姿を現す。

元神の子を見張るもの幹部、コカビエル。

彼もまた禍の団に参入していた。

彼に接触していたのはごく最近ではあるが、それでも参入した彼は相応の立ち位置を手にしていった。

なにせ禍の団に関わっている墮天使の中では、彼は立場的にも能力的にも最高レベル。加えてE Eレベルこそそこまで高くないが、戦闘経験と基礎能力の高さで下手なムートロンの戦闘員を大きく上回る力を発揮している。

ムートロンの第二の目的から言っても、彼は相応の立場で迎えるべきだった。

「よお、コカビエルさんよ。頼んでた情報でも持ってきてくれたのかい？」

「フン。貴様らがサーゼクス達とどれだけ戦えたのか知りたかったのだな」

馴れ馴れしく声をかける無有に不満げな表情を浮かべながらも、コカビエルは手に持っていた資料を渡す。

そしてそれに目を通しながら、無有はフムフムと頷いた。

「なるほど、井草の野郎の神器が関わっている可能性が大……か。他にその神器もつてそんな奴つてどれぐらいいるよ？」

「本気で探せばそう珍しいものではない。それに、奴を直接奪い取るという方法もあるぞ？」

むしろそれこそ望ましいといわんばかりのコカビエルの返答に、無有はしかし肩をすくめて首を横に振る。

「流石に手間が掛かり過ぎるつての。準備段階でんな手間暇はホテツプが認めねえよ」

そのため息交じりに言いながら、無有は資料をナイフアーザーに渡す。

苛立ちながらも素直に受け取り、そして資料を確認したナイフアーザーはすぐになづいた。

「確かにな。このレベルの神器なら探せば他にいくらでもいるだろう。そいつらを捕まえて実験すれば十分データは採れるか」

無有をあからさまに嫌っているナイフアーザーもその意見で同意している。

という事は、おそらくムートロンそのものがそう言う考えで行動するだろう。井草を

直接狙うのはのちの話になりそうだ。

それに少しだけ肩透かしといった感想を抱きながら、コカビエルはしかし笑みを浮かべる。

自分の予想通りヴァーリも禍の団についた。更にムートロンが提供するエボリューションエキス。とどめに首魁であるオフィスの力。

この戦争、勝つにしろ負けるにしろ相当の規模になるだろう。

それが楽しみでたまらず、コカビエルは嗤う。

それを面白そうに眺めながら、無有は駒王学園での戦いを思い出す。

そして、連鎖的にあの雨の日の事も思い出した。

井草はデフォルトイーツと似て異なる状態に変化している。これはかなりレアなケースだ。

そんな実例を生み出した無有としては、世界初のそのケースを確保したいと思っ
ている。

だがそれ以上に、彼は面白い見世物になってくれそうだとも思う。

何時どのタイミングでその見世物をスタートするか考えながら、無有はこれを幼馴染に渡そうとし――

「そういえば、だ」

ナイフアーザーが、疑問符を浮かべながら声をかけてきた。

「……いつまで無有影雄なんていう名前を使い続けるつもりだ、ナイアル？」

その言葉に、無有影雄と名乗る男は。

ムートロン実働部隊最精鋭の1人、ナイアルは平然と答える。

「今度アイツと会った時にでも、本名で呼ぶように言っただけよ」

13話

無有影雄と名乗るナイアルがあくどい事を考えているその頃、井草は戦後処理もひと段落して、一息ついていた。

自販機でスポーツドリンクを購入し、それを飲みながら力なく空を見上げる。

夜空は星が輝いているが、井草の心はそんな明るいものではなかった。

無有影雄。最低最悪の自分ですら嫌悪する、憎くて堪らない男。

あの男に全責任を押し付けるつもりは毛頭ない。そんな事をする資格など、井草には全くない。

確かにあの男は醜悪で外道で悪辣だ。しかし井草もまた、一時の情欲に流されて最低最悪の真似をした。そういう意味では井草に無有を非難する権利はまずないだろう。

そして、井草は二人の少女の姿を思い出す。

真つ当に成長しているのなら、井草と同じ二十歳になっただろう。

だが、それを井草はとも信じられない。

何故なら知ってしまったからだ。

なんとなく、衝動的に、諦める言い訳を求めて調べてもらった情報。無有影雄の女性遍歴。彼が付き合ってきた女性。そして、その後の遍歴を。

それを知って、井草は義憤に燃えるなどという、資格が欠片もない事をしてしまった。そして見るも無残に返り討ちに遭い、何時の間にやらイーツになる能力を手にした。レセプターイーツの力は強大だ。そういう意味ではプラスのメリットはあるだろう。だが、そんな事を喜ぶ余裕など欠片もない。

何故なら、無有の立場と彼がしてきた所業を考えれば――

「伊予……五十鈴……っ」

そんな資格もないのに、井草は悲しくて目頭を熱くさせる。

彼女達はもう、無事ではないのだろう。

そんな事はずっと前から分かっている。三年前、彼女達が無有と同時期に行方不明になっただけから覚悟してきた事だ。

だが、それが更に最悪の可能性と共に浮かび上がってきた事で、井草の胸は締め付けられる。

そしてそのまま拳を握りしめ――

「ほいほい、落ち着きやがりなさい」

その手を、柔らかい少女の手が包み込んだ。

「ーッ」

その感触に我に返れば、リム・プルガトリオがこちらをのぞき込んでいた。

「停止されてたまんまなのがこっばずかしくてうろついてたら、何してやがるんですかねえ」

そう呆れ顔で言いながら、リムは井草の握り締めた拳を一つ一つ外していく。

そして、苦笑を浮かべると井草の背中をばんと叩いた。

「ま、何があつたかしりやあしませんかねえ、お宅はため込みすぎて自家中毒おこすタイプみてえですし、もうちよつと人に相談した方がいいですぜ？」

「いや、その……」

どう返答すればいいか分からない井草に、リムはウインクをする。

「言い出しつぺつてもんなんで、どうしても他に言えないつていうなら私が聞いてやりますぜ？ ま、とりあえずちよつと愚痴る相手を考え時なせえ」

……その言葉は、赤の他人に近い人物だからこそ響いた。

今の井草を知るものが行つても、井草はそれを素直に受け取れなかつただろう。

だが、リムとは初対面ではないが付き合いはないに等しい。何度か結果的に共闘したぐらいだ。

その、半端な付き合いだからこそできた距離感が、井草の心の壁を絶妙にすり抜け――

「あ、井草さん!!」

―切る前に、イツセーが駆け寄ってきた。

「あれ? どうしたのさいツセー」

「あの、ミカエルさん探してるんですけど、知らないですか?」

……仮にも下級悪魔が、セラフのトップに何をするつもりなのか。

まあ、今回の会談でのミカエルの様子ならどうにかなるだろうと思いい、井草は指で校舎の隅を示す。

「今総督達は向こうで簡単に話し合ってる。たぶんまだいるんじゃないかな?」

「ありがとうございます!! じゃ、急がないと!!」

そう即座に返答すると、イツセーはそのまま走り出していった。

そして、微妙な沈黙が井草とリムを支配する。

なんとというか、絶妙に気まずい。

なんとなく顔を見合わせると、お互いに似たようなタイミングで苦笑いしてしまう。

「……うん、また今度、機会があったら相談するよ」

なんとというか、機会を逃してしまった。

とは言え、おそらくいつかは誰かに言う事になるのだろう。

そう、このままでは自分自身が耐えきれないという自覚だけはあるのだから。

『忘れてた。井草、明日から俺、駒王学園で教師やるからな』

「……………はい？」

そんなことを気にする余裕も一瞬忘れるほど、突然の事態が勃発したが。

「……………というわけで馬鹿やらかしたら俺が殴り飛ばすから、すぐに言ってくれ」

「おいおい、先生を殴るなんてお前それでも生徒かよ」

「いや、漫才しないでいいから!!」

井草は真剣だったのだが、アザゼルが茶化す所為でイツセーに本気と受け取られなかったらしい。実に残念な話である。

「で、アザゼル? あなたなんで教師になってるのかしら?」

「セラフォルの妹に頼んだ」

リアスにあつさりと答えるアザゼルに、井草は心底頭を抱えなくなった。

間違いない、無茶振りされたのである。

心底ソーナに同情しなくなった。

思い付きを行動に移し、しかも形にする事ができるアザゼル。割と日常生活ではストレスが溜まる部類であり、振り回される方としては堪ったものではない。

それにいきなり付き合わされるのは、実に哀れだ。

「あとでソーナちゃんには菓子折りでも持っていてお詫びしないと」

「おいおい、お前はもうちよつと気楽に人生生きろよな」

などと元凶であるアザゼルがほざくが、ここは遠慮なく殴っておくべきだろうか。

ついつい半目になるが、其れをアザゼルはスルーして、一同を見渡す。

「ま、なにも道楽つてわけじゃねえ。ヴァーリの野郎に目を付けられた赤龍帝のイツ

セーと、その仲間達グレモリー眷属は嫌でも強くしねえといけねえからよ。俺はアドバイザー兼いざという時の護衛役ってわけだ」

「あ、アドバイザー……つて？」

イツセーが首を傾げるが、しかし確かにそれはいけるかもしれない。

「イツセー。総督……アザゼル先生は神の子を見張るものにおける、神器研究の第一人者なんだ」

そして、三大勢力において神器研究が最も進んでいるのは墮天使である。

逆説的に、アザゼルは三大勢力で最も神器について詳しい研究者ということだ。

「停止世界の邪眼に聖母の微笑だけでもレアなのに、イレギュラーな禁バランス・ブレイカー主になつ

た魔剣創造や神滅具の赤龍帝の籠手。お前らを成長させるのに一番貢献できるのは俺

だつて事で意見がまとまってるんだよ」

と、アザゼルは胸を張る。

実際問題言われてみれば、どれもこれもイレギュラーな神器である。

十三種全てがオンリーワンの神滅具の赤龍帝の籠手はもちろんだ。邪神の名を冠す

る停止世界の邪眼に、神の祝福すら超える聖母の微笑もすさまじい。双覇ソドオプ・ビトレイヤの聖魔剣に

至つては、前代未聞の新種と言つていい。

そんな非常にレアな神器関係。それをどうにかできるとするならば、確かにアザゼル

ぐらいしかいないのだろう。

そしてアザゼルは随天使の中でも十指に入る実力者でもある。いざという時の用心棒としても優れているだろう。

そういう意味では適任中の適任ではある。

「それに、俺はヴァーリを教えてきたわけだし、その朱乃の親戚の神滅具使いとも関わってるからな。神滅具使いを教えるなら俺が一番適任ってわけだ」

「「「「「「え?」」」」」」

さらりと告げられたアザゼルの言葉に、朱乃を含めた全員が声を上げる。

「アザゼル先生、それはまだみんな知らないと思うんだけど」

「おっと。そうだったそうだった」

困ったものであると、井草はため息をつく他ない。

「幾瀬鳶雄って言うてね。生まれた時から禁手で、しかも禁手を変化させたヴァーリ並みのイレギュラーらしいんだ。確か、禁手で生まれてきた子供が成人したのって彼だけでしたよね?」

「神の子を見張るもの^らが知ってる中ではな」

冷静に考えると凄まじい話ではある。

神の子を見張るものの中でも有数の実力を誇る二人の神滅具使い。その二人はどち

らも神滅具使いとしておイレギュラーなのである。

前代未聞の魔王末裔の保有者と、これまた前代未聞の奇跡の生存者たる保有者。

神滅具使いのイレギュラー二大巨頭と言ってもいい二人に関わってきたアザゼルなら、イツセーもある程度指導できると踏んでいた。

「ま、話は戻すがこれからみっちり鍛えてやるからそう思え。具体的には、禁手使いの場所は一日は禁手を持たせられるようにする予定だ」

「な、長いですね」

祐斗が若干気圧される。

ちなみに、現段階で祐斗は禁手を半日も維持できなかつたりする。

「因みに、ヴァーリはひと月は持たせられるからな。最終的にそれぐらいはできるようになれ」

その言葉に、イツセー達は将来の敵であろうヴァーリの凄まじさを改めて実感したらしい。

それで少しは引き締まった事を見て、アザゼルは少しだけ真剣な表情を見せる。

「因みに、ヴァーリはヴァーリで禍の団で自分のチームを持つてようだ。メンバーはこつちにも来た美候以外には分かっちゃいねえが、噂では英雄の末裔や高ランクのはぐれ悪魔が参加してるとか」

「……アザゼル、其の中にイーツもいるのかしら？」

リアスがその事を懸念するのも当然だろう。

はつきり言つて、リアス達はイーツの脅威を特に受けている悪魔達である。その危険性も強さも身にしみて分かっている。

加えて、ムートロンを名乗る高いE Eレベルの使い手は、周囲の被害を考慮して本気が出せなかつたとはいえ、あのサーゼクス相手に立ち回つたのだ。

それクラスのメンバーがいれば、この戦いの趨勢が禍の団が有利に進む可能性だつてある。

アザゼルもそれは分かっているのか、茶化するような態度を消して、真剣な表情を浮かべる。

「ま、安心しな。ヴァーリはどうもエボリユーシヨンエキスにや興味ねえようだ。禍の団の中でもはぐれ者が集まつてるって感じだな」

とはいえ、それは安心できるかと言われればそうでもない。

逆に言えば、有効な兵器であるはずのエボリユーシヨンエキスをあえて使わないという選択を押し通せる者達で構成されたチームだという事だ。

これまで、歴代の二天龍はことごとく相争つてきた。今代がそうならないと考えるのは、希望的観測ですらない。

それだけの者達が事実上敵に回る。それに、リアス達は気を引き締める。
「私達も強くならないといけないという事ね」

その態度に頷きながらも、アザゼルはしかし力を抜く。

「ま、だからって学生はきっちり学び遊ぶのも仕事のうちだ。本格的なトレーニングは、夏季休暇に入ってからだな」

素晴らしいながら、アザゼルはなんか空中をもみ始める。

「勿論遊びもしつかりするぜ。そう、堕天使の美女を集めて俺もはっちゃけて——」

「だ、堕天使の美女!？」

その言葉に、馬鹿 イッセーがスイッチを入れた。

そして、アザゼルが阿保即座に反応した。

「なんだ、お前さんそういうのが好みか？」

「あ、ああ。俺はハーレム王になるのが夢で頑張ってるんだ」

その言葉に、アザゼルは満足げにうんうん頷くと、イッセーの肩を抱く。

「そういうことなら任せとけ！俺はこれでも過去に何度もハーレムを作ったからな」

そして、イッセーがアザゼルの言葉に肩を震わせる。

「ハーレム！俺、ハーレムできるんですか!?! 童貞卒業できるんですか!?!」

「おいおいまだ童貞なのかよ。だったら夏休みまでによさそうな女を見繕ってやるよ。」

童貞卒業ツアーとでもしやれ込もうぜ？ 喰いまくりフェスティバルだ！」

「童貞卒業！ 喰いまくりツアー!! そんな素敵な旅があつたなんて!!」

「ヴァーリの奴は女に興味があんまりなかったからなあ。鳶雄は下手に手を出すと俺が殺されそうだしな。いやあ、俺も神滅具使いに女を教えるなんていい機会に恵まれたぜ」

「先生！ おっぱいが揉みたいです!!」

「ああ、思う存分もんで吸って、挟んでもらえ」

いつの間にか、内容にさえ目をつむれば感動の後継みたいなムードになってきている。

だがしかし、その瞬間イツセーに強大な怒気が迫る。

「イツセー?」

消滅の魔力を微妙に漏らしながら、リアスがイツセーの耳を引っ張り始めた。

上級悪魔のポテンシャルで引っ張られると、ただの人間なら引きちぎられてもおかしくないだろう。当然イツセーは激痛に悶えるわけだ。

「いだだだだ!!」

「人の貞操に口出ししておいて、自分の貞操は勝手に捨てるなんてどういうこと!!? アザゼルも、私のイツセーの貞操を勝手に捨てさせようとしなくて頂戴!!」

その光景に微妙に微笑ましい感情をいただき、井草は苦笑しながらアザゼルに目を向け
る。

「総督、これ、どうするんですか？」

「アザゼル先生って言えよ。ま、こりや俺の出番はなさそうかねえ」

どっちの出番なのか、それは見るまでもない。

「白は力、赤は女。神がいなくても世界は回るって事か」

そう、神がいなくとも世界は回る。

ならば、自分達にとって良い方向に回すべく方向を変える努力をするべきだろう。

そして、井草にとって都合がいい回り方は決まっている。

自分という屑を燃料に、イツセーやリアス達立派な者達を良い方向に連れていく回し
方だ。

其の為ならば、この命を使い潰してもかまわない。むしろ、使い潰してしまいたい。
その決意を胸に秘め、井草は静かに決意を新たにした。

「あ、そうだ井草」

「なんです、先生」

「ピスは別動隊として活動する事になったから、お前、近いうちに引っ越しだぞ」

唐突の展開に、井草の反応が遅れたのは仕方がない事である。

冥界合宿のヘルキャット

1話

そして夏休みに入る頃、井草の引越しがスタートした。

軽トラに揺られながら、井草は運転するアザゼルに半目を向ける。

「……あの総督、思い付きで行動するのやめてくれませんか？」

「アザゼル先生と呼べ」

軽トラを運転するアザゼルはそう答える。

禍の団が宣戦布告をした事で、事態は大きく動き始めた。

『バルベルデ共和国を中心とする、ムー同盟が国連からの脱退を表明してはや三日。国境近辺の国連軍との衝突では、イーツを実戦投入したムー同盟が圧勝しており、国連軍は本格的な同盟軍の投入を検討にしております』

ナイフアザーの発言通り、世界各国で軍事的紛争にイーツが投入されるようになっていた。

それにより軍事力も国力も小国であるはずのそれらの国家は、国連軍の介入すら押し

のけて軍事的横暴を開始。事実上の鎖国状態を取っている国家も数多い。

むろん、現代でそんな輸出入をほほなくしてしまえば国家は立ち行かないが、それに關しても想定ができる。

エボリューションエキスはムートロンの技術である。そして、ムートロンは詳細は不明だが禍の団の派閥の一つである。

必然的に、彼らは禍の団の支援を受けているのだ。テロリストなのだからこちら側でできる限り避けている異能を利用しているのだろう。

既に三大勢力はこれに対抗するべく、各神話との和平の準備も進めている。また水面下で悪魔祓いなどを送り込んで、ゲリラ戦の形でイーツを減らしていく行動もとっている。結果とすれば現在膠着状態に持ち込む事には成功している。

だが、この程度でどうにかできるかと言われれば不安である。

ムートロンは前座で魔王とも戦う事ができる者を送り込んでくるほどに戦力がある組織だ。そして、彼らが開発したエボリューションエキスの能力は上級クラスを用意する事ができる。

加えてオーフィスの力によるドーピングも驚異的だ。無限の力を持つオーフィスならば、時間をかければ無制限に力を用意する事もできるだろう。

この戦い、まだまだ前哨戦である事は明白である。そして、その行く先には世界全土

を揺るがす戦いが生まれるのだろう。

ならば、こちらもそれに備えた力を得る必要がある。

そういう意味では、この夏季休暇はイツセー達にとって大切な時期になるだろう。

「アザゼル先生。俺も、特訓していいかな？」

「最初からそのつもりだよ。どうやらムートロンにとつてもお前は興味を引く存在っぽいからな」

そう告げながら、アザゼルは軽トラを止める。

しかしおかしい。近くにイツセーの家はない。

直ぐ近くにあるのはビルのような豪邸。そんなものに見覚えないので、イツセーの家の近所というわけでもない。

……否。すぐに気が付いた。

向かい側の道路の建物は、全部イツセーの家の向かい側にあつたものだ。

つまり、この道路は間違いなくイツセーの家のすぐ前にある道路。ここはイツセーの家があつた場所である事は間違いない。

しかしイツセーの家はない。あるのは豪邸だけで――

「ああ、サーゼクス達が建て替えたらしいぜ？」

――一瞬で疑問は氷解した。

異形の技術を使えば、ごく短期間で豪邸を建てる事は可能である。下手をすれば一晩で建て替える事も可能だろう。

だがしかし――

「立ち退き手数料とかちやんと払ってるんですか、コレ？」

「安心しろ。サーゼクス達に限ってその辺を無視したりはしねえよ」

ならいいのだが、それはそれとして豪快であった。

そして、アザゼルが真っ先に入っていく中、井草はとりあえず荷物を運びこんだ。イツセーの家に引越す理由は、割と簡単である。

一つは、保護者であるピスが別の部署に向かう事になった為。

多くの脅威が集まっている禍の団に対抗する為、刃スラッシュ・ドッグ 狗ドッグ チームを中心に、対策チー

ムを作る事が決定。

更に実力者をかき集めて、イツを堂々と使用している国家を中心に行動する事が決

定した。

それに伴い、瞬間的になれば墮天使最強の領域にすら至れるピスも戦力として派遣される事が決定した。

そうなると井草に保護者がいなくなる。しかし保護者抜きだと井草が暴走しかねない。だからといってアザゼルに組ませると井草が酷い目に遭いそうで、主に胃が可哀そう。

そんな判断の結果、表向きには「ヴァーリ・ルシファーが兵藤一誠を狙う可能性があるので、ヴァーリを監督しきれなかった責任を兼ねて墮天使側から人員を出す」という表向きの理由がでっち上げられた。

で、結果として井草が選ばれたのである。

むろん表向きの理由しか教えられていない井草はそれを素直に受け取り、こうして引越したというわけだ。

「じゃ、そういうことでよろしくね?」

「は、はい……」

何故かイツセーから微妙に不満げな返事が出てきた。しかし解せる。

「ごめんねイツセー。疑似的にハーレムだったのを邪魔しちゃって」

「いえ、上の方針には逆らえないですよね。仕方ないですよ、ハハハ……」

心底残念そうである。

まあ、グレモリー眷属は兵藤一誠宅で共同生活を送る事とお達しが下され、しかし祐斗とギヤスパーは辞退したので、グレモリー眷属女性陣だけがごつそりイツセーの家に住む事になったのだ。

これで井草がいなければ、疑似ハーレムといっても過言ではない。イツセーとしてはぜひ楽しみたかっただろう。

正直少し可哀想な気もしないでもなかった。

「な、なんかごめんね……」

「いえ、いいんですよ、ははは……」

なんとというか同情する。

イツセーにも同情してしまうが、井草としてはリアス達にも同情してしまう。

「俺なんかとリアスちゃん達を同居させるなんて、本当にごめんね」

「いえ、確かに残念極まりないけどあなたはもうちよつと自己嫌悪を治した方がいいと思うのだけれど」

心底謝ったのだが、何故かリアスの文句は見当はずれな気がした。

自己評価は正当にできている。むしろ他人の評価が高すぎるはずなのに、何故こんな事になるのだろうか？

心底本気で疑問に思う。いや、本当にどういう事なのだろうか？

まあ、それはこの際置いておく。

問題は、だ。

「夏休みのオカルト研究部の合宿、俺も参加なのかい？」

意外な話だ。

オカルト研究部は確かに部活だが、その実態はリアス・グレモリーの眷属の集まりだ。しかし井草は眷属ではない。神の子を見張る者から派遣された、リアス・グレモリーとソーナ・シトリーの監視役である。

そういう意味では目の上のたんこぶであり、距離を取れる機会があるなら距離を取っておこうべきものだと思うっていたのだが。

しかし、リアスは微笑すら浮かべている。

「あなたが悪い人でないのは分かっているもの。墮天使とも和平が結ばれたし、これぐらいなら問題ないわ
なるほど確かに。」

むしろ現場レベルで協調が取れていると認識される行動をとるのは、和平をアピールする意味で効果的だろう。

それだけ溶け込めたというのは喜ぶべきだろうか。いや、彼女達のような善良な悪魔

達に自分が加わる事は印象を悪くしないでだろうか。

しかし護衛役としての任務まで請け負ってしまった以上、断る理由も存在しない。

さてどうしようかと思つたが、そんな井草の後頭部をアザゼルがわしやわしやとする。

「いいから行くぞ、総督命令だつて」

「いい、いや行きますけど！ だけどー」

リアス・グレモリーの名前に傷をつけないか。それが非常に気になつてしまう。

だがアザゼルは全く意に介してくれない。リアスももう諦めたのかスルーする方向で進んでいつている。

「どうせ井草のトレーニングもお前らと同時期にするからな。纏めてやった方が都合が

いいつてもんだ」

「つ、ついに俺も禁バランス・ブレイカー手に！」

イツセーが勢いよくガッツポーズをするが、それを見てアザゼルは苦笑する。

「出来りやあいいいな。だが、お前がへつぽこなのを差し引いてもそう簡単にはいかなえのが実情だ」

「そんなー！ きつい事言わないでくださいよ、先生!!」

何時の間にやら完全に意気投合している。

「どうやらハーレムうんぬんがイツセーの琴線に触れたらしい。実際アザゼルも冷酷な行動をとる時はあるが、しかし外道どころかお人よしの類なので仲良くなる時はすぐになるのだろう。」

「アザゼルからしても十分スケベの極みなので、イツセーの変態性も意に介さないのは明白である。」

「ま、これはこれで三大勢力和平の象徴なのかな?」

「ならいいのだが、流石に仲良くなるのが速すぎる気もしないではない。」

「良い事だとは思うよ? 禍の団の存在はあるけど、三大勢力の戦争が終わるのは素晴らしい事じゃないか」

「そうフオローする祐斗に、井草は苦笑する。」

「教会が憎いとか言っていた祐斗くんも変わったものだね」

「う……。あ、あの時はちよつと色々あったから」

「皮肉じゃないよ。良い事だと本心から思う」

「そう、憎悪に飲まれるのは問題のある事だ。」

「犯した罪に報いはあるべきである。だが、憎悪に飲まれて大切な事を忘れて憎しみを振りまくだけでは、人は進歩できない。」

「少なくとも、教会に属する者達の多くは悪ではない。善を定義する聖書の教えを信仰

し、善き者であろうとする者は大勢いる。

そんな人達にまで憎しみを振りまいてはいけけない。恨みつらみをぶつけるのは、それに相応する理由を持つ者だけにすべきだ。断じて、憎い相手にいた誰かではない。

坊主憎けりや袈裟まで憎い。その気持ちは分からなくないが、坊主と袈裟の間に一線を引かねばならないのである。

それをきちんとしている祐斗を馬鹿にするつもりは一切ない。むしろ、きちんと褒めていくべきだとすら思う。

「うん、祐斗君は立派だよ。その想いを大切にするといい」

「ははは。井草さんに言われると身が引き締まるよ」

いつの間にもやら重要人物になってしまったものである。

井草は、そう思うと苦笑してしまった。

2話

そして数日後、井草はリアスが保有する列車で、冥界に移動していた。

しかし冷静に考えるとすごいこともある。

魔王を輩出した名門悪魔の保有する専用列車に乗って、ハーフ墮天使が冥界に行く。和平が結ばれてからひと月もたっていないのに、こんなことまでできる。すさまじい速度の交流の速さだ。これが人間の国家ならそうはいかないだろう。

同時にそれだけのことができる善良な者たちの組織同士が、千年以上の長きにわたつていがみ合っていたことが残念でならない。もつと早く協調できていれば、起きることがなかった悲劇はたくさんあつたはずなのだ。

だからこそ、井草は和平に貢献したものの一員として積極的に行動しようと思う。

技術交流による神器によって発生する悲劇の抑制。危険な神器の暴走による悲劇を抑えるだけでなく、そもそもその阻止の方法として暗殺という手段を取らなくても済むようにする技術革新。いがみ合いによって発生する小競り合いによる死者の削減。

それらを成し遂げるために、井草もまた神の子を見張るものの一員としてまじめに仕

事をしていこう。

屑の極みである自分がこんなことをするのはおこがましいが、世界が混とんに包まれるよりかはましだと思う。

だからこそ、全力を出さなければならぬだろう。

それが屑にできるせめてもの貢献だ。それをなすためならば、この命を捧げ尽くしても構わない。

そう決意を込めたその時だった。

「やあ、井草。真剣な表情をしてどうしたんだい？」

と、ゼノヴィアが隣に来てそう聞いてきた。

どうやら相当思いつめた表情をしていたらしい。これはいけない。

自分なんかのために人を心配させてはいけない。ましてや、主の実家に行くという、割と緊張するようなことをしているゼノヴィア達を心配させるのはいただけなかった。

「いや、いろいろな世界も大変だし、せめて頑張つて強くなりたいとなあつて思つてき」

「確かにそうだが、息抜きや休息を忘れるのも駄目だろう。常時張りつめていてはできることもできなくなるほど疲労がたまってしまふ」

確かに、ゼノヴィアの言うとおりである。

ちゃんと自分をメンテナンスしなければ、必要な時に動くことができなくなる。それ

ではかえって逆効果だ。

自分が嫌いいで心底見下げ果てている井草ではあるが、監視役としての責務を投げ捨てるほど愚かではない。実際読書やテレビを見る程度の息抜きはその時もしていたし、おいしい食事に舌鼓を討つ程度のリフレッシュもしている。

最も、井草としては自分が苦勞することでも多くの人たちをより良い方向に押し上げることができている方がはるかに充実感を感じてしまうのだが。

「だげどゼノヴィアちゃんはもうちょつと気を付けてね。強そうな男見つけたら、「私と子供を作らないか」とか言ってきそうで怖いんだけど？」

冗談半分だが半分本気で、井草はそう釘をさす。

実際問題、ゼノヴィアはどうも天然なところがある。そういうことを本気で言うんじゃないかと不安になる時が心底あった。

しかし、ゼノヴィアは心外だといわんばかりにムツとして――

「ああ、そういえば言っていなかったね」

――とはたと何かに気づいた表情になった。

そして、井草に頭を下げる。

「公開授業の時の話は忘れてくれ。私は、イツセーの子供を生みたくてたまらなくなつた。彼の子供をはらみたい」

「うん、ちよつと落ち着こうか」

幸い誰も聞いていなかったが、場合によっては大騒ぎになりそうだった。

一応アザゼルは眠っているのだ。安眠妨害の類をすることは本意ではない。

とは言え、急に一体どうしたというのか。

「とりあえず、どうしてそうなったのかを説明してくれないかな? ……小声で」

「ふむ、実は和平会談の時に決めただよ。私はイツセーの子供を生むと」

その理由を知りたい。

「井草は知らなかったのかもしれないが、禍の団の襲撃を退けた後、イツセーはミカエル様に直談判してくれたんだ」

そういえば、ミカエルを探していて心当たりを教えた記憶がある。

何かするのではないかとちよつと不安ではあったのだが、一体何を直談判したのだろうか?

「それで、なにを?」

「ああ。私とアーシアだけでも主に祈りを捧げて問題ないようにできないか、とね」
なるほど、豪胆であると同時に自由な発想力だ。

悪魔が神に祈りをささげるとダメーシが入る。これはもう当たり前で、どうにかしてもらおうという発想はあまり出ない。

それに、そんなことをしてくれと嘆願するのは、なかなか度胸がいることだ。

兵藤一誠という男が、なかなか得難い少年であることがよくわかる一件だろう。

「その時決めたんだよ。私はイツセーの子供を産みたいとね」

そう顔を少し赤くしながらも言い切るゼノヴィアに、井草は苦笑して首を振る。

「違うよゼノヴィアちゃん。それはね、イツセーのことが好きになったっていうんだ」

そして、それは決して悪いことではない。

兵藤一誠は好漢だ。かつては覗きを繰り返していたが、井草の努力でそれを抑制することもできた。

最大……という言葉すら生ぬるいほどの大きさの欠点。それを抑制することができなくなった今のイツセーは、間違いなく素晴らしい人物である。少なくとも、そこから辺にいる格好だけ取り繕う者たちに比べれば、数段ました。

そして、だからこそ伝えなければならぬこともある。

「ゼノヴィアちゃん。俺なんかの言葉を聞くのは憤慨ものだけど、これはきちんとして聞いてくれ」

「いや、貴方の言葉なら一考の価値はあると思うのだが」

心底解せぬ。

だが、もう慣れたのでいちいち思考を中断するのもあれだ。真剣に話を進めよう。

「ゼノヴィアちゃん。これだけは覚えておいてくれ」

——瞬だけだが、躊躇する。

それが、自分という存在がどこまでも屑なのだと思感させる。じぶんという存在をどこまでも嫌いになったときのことを鮮明に思い出させる。

だけど、それでも。

「一時の性欲に飲まれて、イツセーの心を傷つけることだけはダメだからね」

——これは、きつと伝えなければならぬことだから。

そして列車が目的に到達してからが大変だった。

いきなり極めて大規模の歓迎を受けながら、会議に出席するために別の場所に向かうアザゼルと別れる。

大量の人間に歓迎されておびえるギヤスパをなだめながら、井草たちは馬車に乗ってグレモリーの城へと向かった。

ちなみにいうとすさまじく大きな城だった。しかも、実家の一つ●●とか言っているのだ

から驚きだ。

悪魔の財力はすさまじいと思う。石油王もはだして逃げ出す資金力だろう、これは。そんなことで驚きながらも城の敷地内で馬車から降りると、子供が一人駆け出してきた。

「おかえりなさい、リアス姉様！」

「ミリキヤス！ 久しぶりね」

そう言つて抱きしめ合うリアスとミリキヤスと呼ばれた少年。

特徴的な赤毛同士だし、おそらく親族なのだろう。

「あの子もグレモリーの血筋かな？」

「ああ。サーゼクス様の実子のミリキヤス・グレモリー様だよ」

と、祐斗が井草の疑問に答えてくれる。

その時、井草はふと思つた。

あれ？ 兄の妹なら普通は「叔母様」ではないだろうか？

しかしそれを口には出さない。いえはおそらく殺される気がした。

そして城内に入ると、今度は美少女が出迎えてくれた。

「あら、皆さん。お早いお付きなのね」

リアスに負けず劣らずの美少女である。というより、リアスとうり二つの外見をして

いる。しかし、髪の色は亜麻色だった。

グレモリーの家のものは紅の髪になると聞く。となれば、彼女はグレモリーのものではないのだろうか。

しかしそれだと解せない。普通に考えれば使用人だが、彼女が来ているのは非常に気品のあるドレスだ。

「リアスちゃん、こちらの方は？」

「私のお母様よ」

……五秒ほど固まったが、言われてみれば納得である。

「お、お、お母様ああああああ!!」

イツセーが度肝を抜かれるが、これもしょうがない。

「イツセー。ほら、悪魔って外見を割と好きにできるから。それに寿命も一万年以上あるし」

「そ、そ、そうだけど！ てつきり部長のお姉さんかと思ったよ!!」

イツセーがそう言うのも当然ではある。

彼が出会った悪魔は、その大半が若輩者だ。必然、姿を変えるなどという行動をとっているものは数少ない。

故に外見と年齢をイコールで考える者がほとんどだろう。

だが、確かに彼女はリアスの母なのだろう。

なんというか、身のこなしが落ち着いている。年齢を経た者だけが持つ雰囲気があった。

しかし、ミリキヤスという孫がいるのなら彼女はもう祖母だ。そういう意味でも動きに落ち着きがあるのは当然であ—

「今何を考えました？」

「何も考えておりません、ママ」

殺意すら感じ、井草は秒で思考を切り替えた。

そんなこんなで以上に広い部屋に通されて、井草は正直困りながらも荷物を置いた。之からひと月はここで暮らすことになるのだろう。正直豪華なクラスになれていない身としては落ち着かないのが本音だ。

だが、それはそれとして夕食をいただくことになった。

貴族の家系名だけあって、実に豪華な食事が出てきてしまった。

「……すいません。ここの言うのに不慣れなのでお見苦しいところを見せるかもしれないです」

井草・ダウンフォールの人生史上最高級の食事である。

高級料理店でのマナーなどという物には無縁の男なのだ。しかも、つい先日まで敵対していた勢力の食事でのマナーなどさすがに習得してない。井草は監視院でありスパイではないのだから、知る必要もなかったりするわけである。

しかし、グレモリー家現当主、ジオテイクス・グレモリーは朗らかだった。

「はっはっは。あまり気にしなくていいよ。しよせんこれは身内の食事なのだからね」
「俺なんかそんな優しくしてくださるなんて……!」

思わず感涙するが、逆にジオテイクスが少し戸惑いの表情を浮かべたのはなぜだろう。

塵屑にすら優しくできるのはある種の美德である。素直にそう思ったただけなのだが、おかしなことをしたのだろうか。

などと疑問に思っていたのだが、その前にリアスの母であるヴェネラナ・グレモリーが苦笑を浮かべた。

「とはいえ、リアスと行動を共にする以上会食の機会もあるでしょう。よろしければ、悪魔の礼儀作法を指導させましょうか?」

「ありがとうございます。俺の名誉なんてゴミにすら劣りますが、ごみのせいでリアスちゃんの名誉を損なわせるのは部員の名折れですから」

本心からの言葉だったのだが、ヴェネラナ迄戸惑いの表情を浮かべた。

食事の場でゴミという言葉を使ったのがいけなかったのだろうか？ うかつだった。

と、素直に反省して謝ろうとしたのだが、とりあえず気を取り直したのかジオテイクスは視線をイツセーに向けて。

「そうだ、イツセーくん。君もそんなかしこまらなくていいよ。我が家と違ってくれ」

……どうやら、イツセーはいつの間にかリアスの両親に気に入られてしまっているらしい。

「というか、お義父さんと呼んでくれたまえ」

……それどころではなかった。

「い、いやいや！ 主の父親にそんなことはできませんよ!？」

当然イツセーは戸惑っている。

というより、だ。

そもそもこの男、ジオテイクスの意図に気づいていないだろう。

リアスがじぶんに向ける恋心すら気づいていないのだから当たり前だ。交際する前にあいてのご両親を攻略しているなど創造の埒外だろう。というかふつうしない。

確か、イツセーはリアスの婚約を台無しにしたのではないだろうか？

井草は食事をしながら小首をかしげていると、ヴェネラナが苦笑していた。

「あなた、物事には順序がありますわ。さすがに性急すぎでしょう？」

「しかし、赤と紅でピツタリではないか」

「浮かれすぎです」

反論するジオテイクスも、さらにピシヤリといわれては下がるしかないようだ。

グレモリー家はかかあ天下らしい。まあ、伝承ではグレモリーは女性の姿で召喚されるという話だから、女性が強いのは当然かもしれない。

「兵藤一誠さん。一誠さんとお呼びしていいかしら？」

「あ、はい！」

そしてヴェネラナに対してかしこまってイツセーが答える。

「あなたにはこの夏休みの間、冥界のマナーなどを学んでいただきます」

その言葉に、イツセーはすぐにうなづいた。

まあ、リアスの眷属悪魔である以上、必然的にリアスが出ることになる政治的な催しにもかかわることになるだろう。

となれば、マナーをぶっ飛ばした行動をとるわけにはいかない。そんなことになれば、リアスの名誉に傷がつくのは確定だ。下手をすればイツセーの首が物理的に飛ぶだ

ろう。

そういう意味では何の問題もないのだが――

「あと、ダンスなどの強要も身に着けてもらわねばなりませんね。いずれはリアスと共に我がグレモリー家主権の社交界には主役としてでてもらわねばらないのですから」

……それ以上のレベルは確定だった。

婚約破棄になった直後にこれは、いささか性急ではないだろうか？

「お母様にお父様!! いい加減にしてください!!」

当然リアスが怒り、テーブルを勢いよく叩く。

「さきほどからお二人とも勝手すぎます!! 先程から、私を置いてどんどん話を進めすぎですわ!!」

「お黙りなさい、リアス」

しかし、ヴェネラナも負けてはいない。

鋭い視線でその怒りの視線を真つ向から受け止めた。

「ライザーとの婚約解消を赦しただけでも破格の待遇だと理解しなさい。私達もサーゼクスも、他の上級悪魔にどれだけ頭を下げることになったか。……あなたは「グレモリーのリアス」である宿命を背負っていることを理解しなさい」

辛辣な言葉を叩きつけた後、ヴェネラナはため息を共にさらに続けた。

「一部の貴族には、「我儘娘がドラゴンの力で無理やり婚約を解消した」とまで言われているのです。者には限度がありますよ」

その言葉にリアスは言葉に詰まり―

「―愚者の戯言ですけど、一言よろしいでしょうか？」

―井草は助け舟を出すことにする。

「井草さん？ 申し訳ありませんが、これはグレモリーの問題ですので―」

「いえ、婚約解消はむしろ喜ばしことかと思えます」

相手の言葉を切り伏せながら、井草はそう告げる。

ある程度の事情はすでにイツセー達から世間話の形で聞いている。

ライザー・フェニックス。フェニックス家の三男坊で、接待試合以外でレーティングゲームに負けたことがない若きエリート。

リアスは「自分を「グレモリーのリアス」ではなく「リアスという女」として愛してくれる男」と結婚したいと思っていたのだが、あいにくそれには該当しなかった男。リアス・グレモリーをグレモリーのリアスとして愛している男。

そんな彼は、婚約式の当日にイツセーとリアスをかけた戦いに負けて婚約解消された。

まあ、その程度のこととは知っているが―

「……自分をただのリアスとして愛してくれる人と結婚したい。それがお嬢さんが結婚相手に向ける前提条件です」

「……なんで知って!?! あ、イツセー!?!」

「うわあごめんなさい!! つい世間話で!!」

リアスにイツセーが詰め寄られているが、それは今はスルーする。

とりあえず、だ。

「その絶対条件から外れている相手と結婚しても、お嬢さんはずっと不満をため込んでしまうでしょう。ましてやそんな相手の子をはらむなんて苦痛以外の何物でもないし、そんな子供を愛することができると思えますか? ……生まれてくる子供がかわいそうです」

まあ、貴族ともなれば愛より血統の維持などを重視するのだから、聞いてもらえないかもしれない。

と、思ったのだが――

「……そこをつかれると、確かに急ぎすぎを反省するしかありませんわね」

――思った以上に話を聞いてくれた。

「……正直、一発でそこまで納得してくれるとは思いませんでした」

いった井草がたじろぐレベルだった。

その様子に、ジオテイクスは苦笑した。

「いや、産まれてきた子供を愛さない親には不満をいだいているからね、しかもそれが親族にいたるとなれば、なおさらだ」

どうやら、この情愛にあふれるグレモリー家もそれだけではいられないらしい。

「とは言え、あまりそういうことを言うのは気を付けた方がいいよ？ 私たちは気にしないが、バアルの現当主などにいえば、かなり嫌がらせを受けることになるだろう。アザゼル総督にもご迷惑がかかるかもしれないからね」

と、指摘をしてくれるのはありがたい。

だが、それはいらぬ心配だ。

「いえいえ。その時は俺が責任を取って処刑されればいいだけですから」

何の問題もないとはつきり言い切るが――

「『……………』」

何故か周囲の使用人も含めて、半目であきれられた。

「リアス。彼はこういうブラックジョークが好みなのですか？」

「いいえ、お母様。……百パーセント本気で言ってるのです、彼は」

喧嘩が一発で終焉したのはいいことだが、この反応だけは心底解せぬ。

3 話

兵藤一誠たちは、リアスに連れられて若手悪魔の会合に参加することになった。

この会合、有力な若手悪魔の同期が一堂に会するものである。そして、四大魔王をぶくめた上役たちと会話する形である。

「いい、皆？　皮肉が飛んだりするかもしれないけど、カッとなったりはダメよ？」

リアスがそう言うが、裏を返せばそういうことがあり得るといふことである。

イツセーはふと、リアスの婚約者だったライザー・フェニックスを思い出す。

ライザーは転生悪魔を見下している風潮があつた。「リアスの兵士である以上無様な真似をするな」ととれる警告はしてくれだし、赤龍帝の鎧を発動させた時は脅威であることを素直に認めたところはあるが、なんとなく転生悪魔を下に見ている。

リアスやソーナは違うが、もしかしたらあれが上級悪魔の基本的な思考なのかもしれない。

ライザーの結婚を阻止するときにサーゼクスが助け舟を出したときも、「下級悪魔ごときに」などといつていた。

(なんか、嫌なもの見そうだな……)

なんとなくそんな予感を考えるようになったのは、井草の影響だろうか。そんなことを思っていたら、エレベーターが停止する。

そして、出てきた所に、一人の男が現れる。

「お、リアスじゃないか」

そう言つて朗らかに嗤うのは、実意がタイのいい男性だった。

筋肉質で引き締まった体を貴族服に包む男性は、紫の瞳が印象的だ。

そして、その姿を見つけたリアスは笑顔で握手を交わす。

「久しぶりね、サイラオーグ」

「ああ、元氣そうで何よりだ」

「あの、部長？ そちらのかたは？」

見覚えのない悪魔にイツセーが首をかしげると、リアスはそういえばとはたと気づいた様子を見せる。

「紹介するわ。彼はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主で、私の母方の従兄弟なの」

「一応リアスの結婚式にも来ていたんだがな。あの時は良いものを見た」
その言葉に、イツセーはうげつとした表情を浮かべてしまう。

なにせ勢いに任せて「リアスの処女は自分のもの」などと宣言したのだ。ヴェネラナの言っていたことから考えても、貴族からいい目で見られていない可能性は大きい。

「ん？ ライザー・フェニックスとはいったい誰だ？」

「ああ、実はねー」

當時を知らないゼノヴィアに祐斗が説明するが、そんな事より助け舟を出してくれと切に願う。

嫌味の一つでも言われるかもしれないと正直不安になるが、サイラオーグは朗らかに笑うだけだった。

「いや、いい戦いを見た。ライザー・フェニックスもいい経験をしたと思うべきだと思うぞ、俺は」

「そ、そうですか……か？」

そういう風に見てくれるのはうれしいが、冷静に考えるとちよつとまずいかとも思っている。

少なくともフェニックス家にはいい思いをしていないものも多いだろう。サーゼクスやジオテイクスに迷惑をかけたみたいだし、あとで面倒なことにならないければいいのだがと思う。

「そういえば、サイラオーグはなんで外に出ているの？ 会場に入っていればいいのに」

「なに、下らん喧嘩を見たくないだけだ」

サイラオグがリアスの問いにそう吐き捨て。リアスが首を傾げたその時だった。サイラオグの後方のドアが大爆発を起こし、粉々に吹き飛んだ。

「何!？」

「ビルデとシーグヴァイラが言い合いになってな。こんな場は不要だといったんだが、さすがにこれ以上は見過ぎせんか」

驚くりアスにそう説明すると、サイラオグはため息をつきながら破壊されたドアの方に歩き出す。

そしてそのあとをついていったイツセーは、一触即発の状況を見た。

広い部屋の中では、家具の類がものの見事に破壊されていた。

そして、その中央部では二つの陣営に分かれた悪魔の者たちがにらみ合っていた。

どちらも気品がある悪魔たちだ。しかし片方は武器を取り出していつ戦闘を開始してもおかしくないほど殺気立っている。

反対に、相対する眷属たちは余裕を態度で表しながら、それを悠然と眺めている。……リアスに匹敵する魔力を見せていなければ、問題ないとも思うぐらいだ。

明らかに殺し合いの一手手前である。しかも、片方が完全に仕掛ける一手手前である。

離れたところでフードをかぶった眷属を控えさせた一人の少年がにこやかに紅茶を飲んでいますが、あれはどういう凶太い神経をしているのだろうか？

そして、殺気立っている悪魔たちを率いる眼鏡をかけた女性悪魔が、冷たいまなざしで余裕を見せる悪魔をにらむ。

「……なんと言ったのかしら、ビルデ。訂正するなら今なら許してあげるけど」

その最後通告に、ビルデと呼ばれた悪魔はにこやかに笑みを浮かべ―

「なに。次期大公ですらこの程度で、眷属も有象無象では、冥界の未来は暗いといったのだ」

堂々と、はつきりと、躊躇いなく罵倒をぶちかました。

ここまで堂々と王道と思わせるほどの罵倒を、イツセーは初めて見た。

そして、言われた女性悪魔が額に青筋を浮かべる。

「なら試してみるかしら？　というより殺していいかしら？」

「不可能だよ。君程度では我が眷属を突破することはできん」

いつ激突が始まってもおかしくない状況に、一同は息をのむ。

「ハ、ハ、ハ、これはどういうことですかあああああ!?」

ギヤスパーががくがくぶるぶる震えているが、さすがにこれは怒れない。

一般市民なら血相を変えて逃げ出すだろう。むしろこの場に立っているだけでも成

長の兆しがあるというものだ。

「と、いうより、彼は一体――」

「グラシヤラボラスの次期当主代理のビルデ・グラシヤラボラスだ。開口一番「ろくな次期当主がいけないな、ここは」などといってこうなったんだ。若手は血の気が多くて困る」
リアスをかばうようにしながら目を覆いそうになる祐斗にそう説明し、サイラオーグは一步前に出る。

イツセーは思わず止めようとした。

当然だ。相手は若手の次期当主たち。リアスと同格とみなしてもいいだろう。相当の実力があることは言うまでもない。眷属も自分たちと同格とみるべきだ。

なのに眷属たちも止めようともしていない。なら自分が止めなければならないだろう。

そう思い、意を決して飛び出そうとしたのだが、リアスがその手を止める。

「大丈夫よ。其れより見てなさい」

「え、何をですか部長!？」

加勢した方がいい状況にしか見えないイツセーだが、リアスは何も警戒していなかった。

それどころか、畏怖の視線をサイラオーグに向けてさえいる。

「……サイラオーグは、この世代の若手悪魔で最強の存在よ」

その言葉をイツセーが効いたのと同時、サイラオーグは拳を鳴らしながら二人の間に割って入る。

「アガレスの姫君シーグヴァイラに、グラシヤラボラスの代行者のビルデよ。いきなり最後通告だが、これ以上バカ騒ぎをするのなら俺が相手になる」

その言葉に、シーグヴァイラは垂れ流していた殺気を一瞬で納める。

そして、それを見たビルデはそれを鼻で笑った。

「ふん。この程度かね、臆病も——」

そして、その瞬間にビルデの姿は掻き消えた。

そしてほぼ同時に離れたところの壁が粉碎される。

「——余計な挑発をするな。最後通告だといったはずだが？」

「……ね、強いでしょう？」

リアスの言葉に、イツセーはうなづく余裕もない。

今の動きを、イツセーは一瞬たりとも認識することができなかつた。

しかも周りを見れば、サイラオーグの眷属たちは余裕の表情を浮かべている。大してア—シア達は目を見開いている。

そして、その動きに広間中が静まり返っていた。

そして、ようやく我に返ったビルデの眷属の一人が食って掛かる。

「ば、バアルの無能が、よくも―」

そのまま襲い掛かろうとするが、それより先にサイラオグの掌が彼に突き付けられる。

「愚か者。お前たちがするべきことは、俺の相手をするのではなく主を介抱することだろう。この状況下で俺に剣を向け、何の得がある?」

「……………」

その言葉に動きを止めた眷属悪魔は、しかし動かない。

その態度にげんげんな表情を浮かべるサイラオグに、突如拍手の音が鳴る。

「ふむ、若手最強と称されるものの拳を堪能させてもらった。……存外に軽いな」

「……………ほう」

静かに振り返るサイラオグの視線の先、崩れ落ちた穴から、ビルデは瓦礫を払いながら拍手をしながら歩み出る。

「な……………っ!?!」

「嘘……………無傷?」

シーグヴァイラとリアスが絶句する中、埃を祓ったビルデは、微笑すら浮かべてサイラオグに向き直る。

「とはいえ、いい拳だ。鋼の鍛錬が生み出した、才能に奢るだけの悪魔では決して出せない芸術だ。味わいがいのあるものだな」

「本気ではないとはいえ、無用の加減をしたつもりもないのだがな。どうやらシーグヴァイラを役者不足というだけのことはあるらしい」

そして二人は静かににらみ合う。

しかし、ビルデは苦笑すると肩をすくめて眷属たちのもとへと戻る。

「なんだ、続けないのか？」

「まあね。君でようやく及第点だ。それで若手最強ならば、この世代に興味は失せているよ」

その言葉に、リアスもシーグヴァイラも、そして優雅にお茶をたしなんでいた残りの悪魔も不快な感情を向ける。

当然だ。つまり自分たちは三下程度の扱いを受けているのだ。苛立ちの一つぐらい浮かべるだろう。

そして誰かが口論を仕掛けようとしたその時、足音が響く。

「……これは、いったいどういう状況ですか？」

振り返れば、そこにはソーナが眷属を率いてあきれ顔を向けていた。

そして係員が来て、若手悪魔たちは異様な雰囲気の間際に案内される。

まるで大学の講義室のように高いところに席が置かれ、そこに気品あるといえれば聞こえはいいが、どちらかといえば傲慢さを隠そうともしない悪魔たちが座っている。

そのさらに上に座っている四大魔王派特にそういった雰囲気を見せていないが、しかしイツセーからすると居心地のいい場所ではない。

そのせいか話をよく覚えていないが、かなり長い時間がかかった気がする。

そして、いろいろな話が終わってから、サーゼクスが笑みを浮かべて若手悪魔たちに告げる。

「最後に、それぞれの今後の目標を聞かせてもらえないだろうか？」

その言葉に最初に応えたのはビルデだった。

「私は魔王になるのが目標ですね」

「ほお、被ったな」

そしてサイラオーグがそれに沿う反応し、わずかにどよめきが生まれる。

「大王家から魔王が出たら前代未聞だな」

「グラシヤラボラス家から二人続いて魔王が出て驚くべきことでしょう」

「待て、サイラオーグにビルデよ。魔王になるにはどうすればいいのかわかっているのか？」

上層部の者たちの言葉に、ビルデは余裕の表情を崩さず、サイラオーグは決意に満ちた表情を浮かべる。

「私が実績を積みばいいだけです。実績のない形ばかりの者たちより、成果をきちんと積み上げた者が優先されるのは当然ですから」

「俺が魔王になるしかないよ、冥界の民が感じればおのずとそうなるでしょう」

すさまじい断言だった。上層部の者たちも、何も言い返せないといってもいい。

そして、続いてリアスが我に続けと言わんばかりに前に出る。

「私は彼らほど大言壮語は申し上げませんが、レーティングゲームのタイトルを取るのが夢ですわ」

「ほ、ほう。確かにリアス姫ならできるだろう」

「あの若手の星であるライザーを倒した赤龍帝がいるのだ。やってもらわねば困る」
微妙に皮肉が混じっているが、リアスは涼しい顔で受け流す。

そして、続いてソーナが前に出た。

「私は、レーティングゲームの学び舎を作るのが夢です」

これまた立派な夢が飛び出した。

イツセーからするとどれれもすごいことを言っている風にしか思えない。
だが――

「レーティングゲームを教える教育施設は、既に存在しているはずだが？」

上役の一人が、不可思議なものを見る目でそう尋ねる。

その目を真正面から見返しながら、ソーナは告げた。

「それは上級悪魔だけのものです。私が作りたいのは、下級中級も学べるレーティングゲームの教育環境です」

イツセーは素直に感心すると同時に、首をひねる。

立派な夢だと思う。同時に、それが無いのはどういふことだとも思う。

レーティングゲームで王となる上級悪魔の教育施設があるのなら、眷属悪魔を育成する施設があることはおかしくないので覇とも思うのだが。

しかし、その言葉に上役たちは肩を震わせ始める。

『ハハハハハハ！』

そして、醜悪な合掌が奏でられる。

「はっはっは。まったく、若いというのは恐ろしい！」

「まったく、下級中級など、我らが見出したもの以外にたいしたことなどできないだろう

に！」

口々にソーナの夢を愚かといわんばかりに嘲笑う。

その光景に、イツセーもリアスたちも、文句こそ言わないが深い気な表情を隠すことができない。

イツセーからすればごく普通としか思えないことを、なぜこの悪魔たちは馬鹿にすることができのらるおうか――

「ハ、ハの……！」

よほど我慢できないのか、匙に至っては腕を振るわせて一歩前に出る。

「あんた等！　うちの会長の夢がそんなにおかしいのか――」

そして文句を言い始めたその瞬間――

「オギア」

「ラジャー」

「下がれ！」

その言葉の連発と共に、匙が弾き飛ばされた。

それをなしたのはサイラオーグ。その鍛え抜かれた筋肉によつて太い腕が、匙を薙ぎ払う。

だが、それは断じて悪意をもってなされたものではない。

むしろその逆。サイラオーグは凶刃から匙をかばい、反対側の腕に刃を食いこませている。

「何のつもりだ……っ」

その刃の担い手である、ビルデの騎士は、まるで予想外だといわんばかりに首をかしげる。

「んなもん、主の命令を聞いただけじゃねえかっての。なあ、マスター？」

そして、それを命じたビルデはその騎士の確認に静かにうなづく。

そして心底から蔑んだ眼を匙に向けた。

「紛い物の上、碌な成果もあげていない下級悪魔風情が貴族に反抗的な口を利くな。次は全眷属をもって、塵も残さず吹き飛ばすぞ？」

「な、てめー」

匙が反論しようとしたその瞬間、魔力の一撃をビルデは放った。

しかし、それは割って入った祐斗の聖魔剣によって切り裂かれる。

「次はないと警告したのだ。そ奴が悪いと思わんかね？」

「流石に、友を黙って殺させるわけにはいきません」

「ふむ、ここにも下賤の者がいたか」

それを興味なさげに実ながらも、ビルデは指を鳴らす。

その瞬間、ビルデの眷属は武器を構え、それに呼応するかのようリアス・ソーナ・サイラオーグの眷属たちも武器を構える。

まさに一触即発。先ほどの雰囲気は数倍は険悪化させた空気が張り詰める。

「……ビルデ。匙が愚かなことをしたのは確かにたしなめられるべきですが、人の眷属を勝手に殺そうとはいただけませんね」

「同感ね。正直、私も今の嘲笑には怒りを覚えていたのよ?」

ソーナとリアスの怒りの視線と言葉を真正面から受け、しかしビルデは一切表情を崩さない。

それどころか、明らかに失望の表情を浮かべてすらいた。

「下僕のしつてもできない分際によくほざく。愚者たる蛇を宿すものと、正式な試合で結果を覆した蜥蜴を宿す者。主も下僕も愚か極まりない」

そう嘆息すると、ビルデは肩をすくめてから、上役たちに向き直る。

「皆さま! 先程の願いですが、改めて言い直させていただきます」

そして、そのさらに上段に座る魔王たちに、挑戦的な視線を向ける。

「我が夢は魔王になることですが、詳しく言い直しましょう! 我が夢は魔王になることによる冥界の制度改革。より厳密に言えば、紛い物をもてはやす転生悪魔制度を改革し、真なる悪魔の血を引く者たちこそを盛り立てる制度の結成であります!!」

その言葉に、空気の流れが大きく変わった。

「……まちたまえ、ビルデ・グラシヤラボラス」

静かに、サーゼクスはビルデに向き直る。

「転生悪魔もまた、守るべき冥界の民だ。そのような発言はさすが見過ごせないが」

「では訂正しましょう、サーゼクス・ルシファー。……そのような寝言をほざく貴方から、尊き魔王の座を奪還することが我が願いだといったのです」

その、無謀ともいえる発言に、しかし上役たちは、激昂しない。

「はっはっは。これはまた大言壮語を言い放ったものだ」

「だが、それぐらいの野心があつてこそ悪魔という物でしょう」

「たしかに。形は違えど悪魔の未来を想つての発言である以上、流されよ、ルシファー様」

その、一斉に放たれるビルデを擁護する声。

其の声を聴きながら、ビルデは不敵な笑みを浮かべ、サーゼクスは反対に苦苦しげな表情を浮かべる。

之が冥界の実情である。

冥界の有力者たちの多くは、自分たち尊き上級悪魔以外を悪魔という種族だと認めていない。ましてや、他種族からの転生悪魔など獵犬の類と認識しているものがほとんど

だ。

眷属に不満があるのなら鍛えるのではなく権力をもってして優秀な眷属悪魔とトリードする。優秀な眷属悪魔を手に入れるためなら、多少のあくどい真似は平気です。そして眷属悪魔を道具のように使うことなどよくある話だ。

そして、それを阻止するだけの力を四大魔王は保有していない。

抵抗はできる。多少は削れる。だが、決定打を与えるのは困難だ。

古き血統を重視する旧家たちにとって、現四大魔王は優れた戦力兼お飾りの神輿ではない。故に政治的な権力など必要最小限で十分。そう考えているのが大半だ。

故に、サーゼクスの民をいつくしむ心を嫌う彼らからすれば、サーゼクスより強く貴族を重視する者たちが魔王になるのなら、それに越したことはない。

沈黙が響き、しかし状況は変化する。

「なら、こうしよう」

サーゼクスはビルデに対していぶかしむ眼を向けながら、しかし先ほどの話を切り上げる。

「夢をかなえたいなら成果が必要だ。ちょうどいい、若手同士でレーティングゲームをしてみないかね？」

その言葉に、若手悪魔同士が視線を交錯し合う。

若手の代表である自分たちがレーティングゲームを行う。それは、事実上の若手同士の優劣のつけあいだった。

そして、最初の試合の組み合わせが発表される。

サイラオーグ・バアルVSビルデ・グラシヤラボラス

シーグヴァイラ・アガレスVSデイオドラ・アスタロト

そして、リアス・グレモリーVSソーナ・シトリー

4 話

井草は一人悪魔領の研究所で身体検査を受けていた。

本来ならオカルト研究部は色々あるのだが、井草が辞退したのだ。

実際イツセーは礼儀作法の勉強などに時間を取られているので、なら自分が抜けても問題ないだろうという判断から、こうして動いていた。

とは言えることはかつてグリゴリでうけた検査と変わらない。

少なくとも井草にとっては同じだ。よくわからない検査機器に横になって、体を解析されるだけである。

血液などの採取まで同じようにされるが、これに関しては検査の仕方が異なるからだろう。何十日もたったサンプルではできない検査はいくらでもある。その都度やるのは、当然のことだ。

そして検査もすでに終わり、あとは変えるだけなのだが――

「いやあ、少しいいかな？」

と、そこで声を掛けられた。

振り返れば、見た顔がある。

といつても直接会ったわけではない。冥界の番組などでよく見る顔といったところだ。

「これはこれは。現ベルゼブブ様ではないですか」

「ああ。君がアザゼル直轄の井草・ダウンフォール君だったね。検査に来てくれて礼を言うよ」

そう、井草の目の前にいるのはアジュカ・ベルゼブブ。この研究施設の長にして、ベルゼブブを就任した現魔王の一人だ。

悪魔の駒などの各種技術を開発した、天才の中の天才。サーゼクスと並び称される最強の魔王。文武双方において悪魔でも一二を争うレベルの高レベルを保有する、総合力でならばナンバーワンの悪魔でもある。

その彼に直接声を掛けられるとは、後衛に値するといふべきか恐れ多いといふべきか。

いや、それより先にいふべきことがあるだろう。

「俺みたいな塵屑に直接声をかけるのはあれですよ。もつと自分の立ち位置を考えた方がよろしいかと」

「……サーゼクスの言った通りだな」

なぜか又しても半目を向けられた。

なぜだ。己の立場をきちんとわきまえて、それによつて彼らが迷惑しないように気を使つての発言だというのに。その結果が毎回半目であきれられるのは心底解せない。

仮にも悪魔の長が下賤極まりない塵屑相手に朗らかに話すのは、それはそれでまずいのではないだろうか？

彼ら現四大魔王がフランクでリベラルなのは知っているが、しかしだからといって限度がある。

「俺なんかと話してるとこを見られたら、大王派にシンパが流れますよ？ もつと周りの目を気にしないと、あなた達側であるアザゼル総督にも迷惑がかかるんですから」

「いや、さすがにこの程度でそんなことにはならないと思うんだが」
なぜそうなる。

もう少しこの辺について議論するべきだと井草は思うが、しかしアジュカはそれを置いておく方針のようだ。

「まあ、俺もサンプルの検査などで忙しくなるから時間はあまりないが、それでも君の顔を直接見てみたくてね」

「はあ、理由をうかがつてもよろしいでしょうか？」

井草がそう聞くと、アジュカは「簡単だ」と前置きをしてから告げる。

「君は、おそらくムートロンにとつても興味深い対象になるからだ」

……その言葉に、井草は目を少し開く。

「アザゼル総督の考察と現段階での検査結果を見るに、君はイーツの中でもイレギュラーな存在だ。詳しい説明は確信が持ててからにするが、禍の団……ムートロンが君の身柄確保のためだけに戦力を差し向ける可能性もないとは言えない。何かしらの備えをした方がいい」

「そ、そうなんですか!?!」

思ったより大事な気がしてきた。

「まあ、俺や総督の推測が正しいのなら君を直接狙うより手っ取り早い方法はいくらでもあるからすぐ襲われることはないだろう。だが、別件で君たちと事を構えることになれば、そのついでに君を確保を狙う可能性はある」

その言葉を、井草は頭の中で整理する。

井草にはイーツ関係で何かがある可能性がある。

しかし、それは井草だけとは限らない可能性が大きい。

となれば――

「俺の神器《セイクリッド・ギア》……ですか?」

「俺も総督もそれが根幹にあると考えている」

なるほど。其れなら納得である。

井草の神器は、イツセーや祐斗質のように戦闘で使えるような優れた代物ではない。むしろ日常生活でもそこ迄便利というわけでもない。殆どの人間はそれの恩恵を受けることなく一生を終えることになるだろう。

だが――

「エポリューション・エキスは、人工臓器みたいなものだと考えればいいでしょうか？」
「現代の若者にわかりやすいえば、モザイ○・オーガンとかいうのが近いと俺は踏んでい
る」

なるほど、わかるものには一発でわかるまいようだ。

確かに結構似通っている。

だが――

「テラフオー○ーズ、お好きなんですか？」

「人間の娯楽文化は素晴らしいと思うね」

冥界は平和である。そう心底思うしかなかった。

そのあとアジユカと別れ、そして別口で検査をしたりしていたら日をまたいでしまった。

まあそれは仕方がないとして、井草はグレモリー城へと戻ると、そこにはアザゼルま でいた。

「あ、アザゼル先生。もう会議は終わつたんですか？」

「まあな。つたく、悪魔の旧家共は長つたらしい話が好きで参つちまうぜ」

アザゼルはそういいながら頭をほりほりと書く。

「どうやら本当に疲れているらしい。もとより力を抜くときはかなり抜くタイプなので、旗肘あつた伝統行事などはお気に召さないのだろう。」

「何事にも向き不向きはあるというものだ。こと墮天使は天使が欲に負けて墮落したものである以上、そういうものを苦手とするものが多くておかしくない。」

「で、そつちの検査はどうだったんだ？ 俺はお前の神器がエボリューションエキスに影響していると踏んでるんだが」

「魔王ベルゼブブ様も同意見です。物のついでレベルで狙われるかもしれないから気を付けろと言われました」

井草の返答に、アザゼルは「だろうな」とでも言わんばかりの表情を浮かべる。

「まあ、数世代にわたり遺伝子改良などで適性値をあげるような代物だからな。何か特別な理由があるとは思ってたぜ」

そんなことを言いながら談話室に入ると、そこでは神妙な面持ちをしたイツセーたちがいた。

「あ、井草さんにアザゼル先生！」

「おかえりなさい。ちようどよかったわ」

「おう、何があつた？」

イツセーとリアスに出迎えられ、アザゼルが話を促す。

井草が検査を受けている間、リアスたちは若手悪魔の会合に出席したらしい。

若手の有望な悪魔を呼び出して、顔合わせをしたりおえら方との面通しをする儀式のようなのだそうだ。

そこでいろいろともめ事も起きたそうだが、それは置いておく。

問題は、そこで発案されたイベントだ。

「若手悪魔同士のレーティングゲーム。それも所詮はリアスちゃんたちがソーナちゃんたちとか」

まあ、いずれはそういうこともあるだろうとは思っていた。

共にレーティングゲームに積極的に参加すると決めている以上、ライバルとしてぶつ

かり合うこともあるのだろう。

とは言え、プロデビューする前に公共放送で試合をすることになるとは思わなかった。冥界は自由である。

「ま、いわゆる高校野球みたいなもんだろ。たまに日本のテレビでもやるだろう？」

「甲子園にしては参加者が少ないですけどね」

アザゼルのたとえに祐斗が苦笑するが、実際そんな感じだろう。

「そういうわけで試合までの時間に特訓しようと思つてたのよ」

「あと二十日ちよつとか。ちよつどいい、俺がトレーニンングメニューを考えてやるよ」

リアスにそう答えるアザゼルに、イツセーが目を見開く。

「いいんですか？ 堕天使の総督が一悪魔に肩入れしても？」

確かにそういう意見も出てくるだろう。

和平を結んだとは言え、そしてそれに貢献した悪魔とは言えだ。リアスは次期当主とはいえど若手悪魔の一人であり、ソーナもまた貢献している悪魔でもある。そしてアザゼルは堕天使総督だ。

一総督が度を越えた肩入れをするのはまずいかもしれない。片方に肩入れしすぎるのは公平性を書くといわれても文句は言えないだろう。

だが、そんな心配をアザゼルは一笑した。

「そんな心配はねえよ。俺以外にも技術指導をしたがつてる奴なんて墮天使にも天使にもいるだろうし、その逆だつてある。ソーナのところにもアドバイザーの提案をしてるやつはいるだろうし、案外そつちの方が役立つかもな」

「あり得る。アザゼル先生はいい加減なところがありますし」

井草が割と辛辣なことを言うが、アザゼルはどこ吹く風だった。

そんな事でいちいち目くじらを立てたり反省するのなら、この男はとつくの昔に更生している。

なんだかんだでこんななのに成果を上げるのだ、この男は。それは短い付き合いながら、井草もすっかりと把握している。

「ま、そういうわけだからあんまり気にすんな。おまえらはお前らの夢のためにがんばりやいいんだよ」

「……その通りです、お嬢様」

と、そこにどこからともなくグレイフィアが現れて同意する。

「既にソーナ様は各方面に指導のお願いなどをしているようです。総合的に有利とは言え、油断すれば敗北するのはお嬢様だと忠告いたします」

「そうね。やるからには絶対勝ちたいし、油断しては勝てる者も勝てないわね」

リアスもそれに頷き、全員の気合が張りなおされる。

「あ、そういうえば。グレイフィアさんはなんでここに？」

と、イツセーがそう聞くと、グレイフィアは軽く一礼した。

「温泉の準備が整いました。皆様、会合などをお疲れを癒しなさいませ」

……まさか、温泉まであるとは思わなかった。

井草は、72柱の悪魔のすごさを改めて思い知った。

かけ流しの天然温泉。それをプライベートな風呂として利用しているのがグレモリーのすごさと認識した。

あくまでこの家のものが使用しているだけなのに、小さめの銭湯ぐらいの広さはあるのではなからうか。

そんなことを想いながら、井草は湯船につかって検査の疲れを溶かす。

ほうつと息をつくくと、隣にアザゼルが使った。

「井草、どうよ、一杯」

「あ、じゃあいただきます」

何か酒を進められたが、井草はとりあえずそれを受け取る。

井草は確かに高校二年生だが、既に二十歳である。プライベートで飲酒する分には何の問題もない。ついでにいえばここは冥界なので、日本の法律は適用外だ。

それに全く飲酒をしないわけではない。

自己嫌悪と卑下の塊で、自分のことが大嫌いな井草ではあるが、だからといってストレスを甘んじて受け続けられるほどの精神性を持っているわけではない。

息抜きぐらいはちゃんとする。たまったストレスをアルコールで流すぐらいのことはする。ピスの晩酌に付き合うこともある。なのでこれぐらいは大丈夫だ。

「……ふう。いいお酒ですね」

「ああ、しかもいい湯だ。さすがはグレモリーの城つてところだな」

井草に同意したアザゼルは素晴らしいながら酒をあおる。

そうして飲み会とも言い難い酒を楽しんでいたが、其の間にアザゼルは井草の方をむく。

「なあ、井草」

「何ですか？」

改まって何なのかと思うが、アザゼルの視線は井草をいたわるかのような優しげなものだ。

「お前、まだ自分を赦せないか？」

その言葉に、井草は何も答えない。

というよりは言うまでもないことではある。

それをアザゼルも分かっているのだろう。冥界の空を見上げながら、もう一度酒を一
口飲む。

そして、酒臭い息とともに言葉を吐き出す。

「確かに、お前がかつてやったことは褒められたもんじゃねえ。知ればお前を知る連中の何割かはお前を見放すだろうし、それ以外の連中もお前の評価を程度はともかく下げ
るだろう」

そう、アザゼルはそれをわかっている。

井草の事情を知っているアザゼルは、それが罪だということだけはちゃんとわかっ
ている。

だが、アザゼルは付け加える。

「だが、それでもお前を見放さない奴は何人もいる。お前の過去を許す奴も何人もいる」
だろうでも、はずだ、でもない。

アザゼルは断言したのだ。井草の過去の罪を知っても、井草を大事に思ってくれるも
のはいる。

そう告げ、そしてアザゼルは井草の目を見る。

「お前は悔やんで反省して、やり直そうとして頑張ってきた。もうちよつとぐらい、自分を赦してやれないのか？」

その言葉は心から井草を想つてのものだ。

これ以上井草が苦しむことを望んでいない。もう十分すぎるぐらい、井草は苦しんできた。償ってきた分の報いはあつてしかるべきだ。

その想いが伝わらない程、井草も馬鹿ではない。

罪を償ったものはやり直す機会が与えられるべき。それは井草にもわかる通りだ。

過剰報復を罪とし、公正に裁きを受けてそれで終わらせる。それが、人間にしろ墮天使にしろ、政府という形で人の集まりを形成してきたものの在り方だ。

少なくとも、墮天使の法律で換算しても井草の罪は死に値するものではない。

だが……。

「……無有は、ムートロンだったんですよ？」

井草はそれを受け止め切れない。

「アイツが何をしてきたか、総督だつて知つてるでしょう？　つていうか、調べた結果は知つてるでしょう？」

震えながら、酒器を握り締めながら、井草は絞り出すようにそう告げる。

無有影雄。あの男について調べようと思ったのは、ただの八つ当たりだったと今ならわかる。

自分があくどいのはわかっていた、でもそれを認めきれなくて、悪あがきのように無有のあらを探したかった。

そして、粗どころか猛毒を見つけてしまった。

「女をたぶらかしての売春斡旋。それに気が付いた時点で、俺はさつさと義姉さんに相談していればよかった」

だが、感情的になって無有に直接食って掛かった。

その資格もないのに、自分が裁きを与えようと思った。

そうすれば元に戻るなどと、おこがましいことを考えたから。

その結果、事態は最悪の方向に進んだ。

井草は無有に返り討ちにあい、ピスが助けに来てくれたから自分は助かったものの、事情を説明していなかったために対応が遅れ、無有は行方をくらました。

ただ逃げられたのならまだいい。だが、それと同時に彼女たちまで消え去った。

普通に考えて、無有がかかわっていることは明白だ。しかも追跡調査で、奴が売春斡旋のその先として、快楽に溺れた少女たちを裏社会に売買していたことが発覚した。

結末など決まりきっている。最早言うまでもない結論だ。

「俺は、伊予と五十鈴を助けられなかったどころか突き落とされたようなものなんですよ……っ」

感情的になって短絡的な行動をしたあげく、事態を最悪の方向へと進めてしまった。そもそも、井草にそんなことをする資格はない。

短絡的に欲望に従って、伊予を傷つけたのは自分だ。

無有も五十鈴も同罪だろう。少なくとも、2人がさかしらに、すべてが井草の責任だということのアザゼルもピスも許しはしない。

だが、井草もほぼ同罪であることを井草自身が知っている。ピスもアザゼルもそれを否定したりはしないだろう。

「俺は……、俺が許せない」

絞り出すように、井草は本音を漏らす。

許したくない。それが井草の本音だった。

苦しみ続けたい。其れこそが井草の本音なのだ。

「……ま、たった数年じゃ納得できねえだろうな」

アザゼルはそれ以上の追求をあきらめる。

数年。たったそれだけでは、人は自分が罪を犯したという苦しみから逃れられないのかもしれない。

幸い、井草は墮天使だ。その寿命は永い。

いつか時間が傷をいやしてくれる。それを期待するしかない。

井草は確かに罪を犯した。その償いはするべきだし、その分蔑まれることも仕方がないことだろう。

だが、アザゼルもピスも、もう許されてもいいぐらい井草が悔やんできたことを知っている。

せめて、井草がそう思う者たちの優しさを受け入れられるようになることだけは、祈りたかった。

「おい、イツセー。一流のスケベなら混浴だ馬鹿野郎!!」

「うわあああああ!!」

「何やってんですかこの馬鹿総督ううううう!!」

それはそれとして悪ふざけをしすぎて、アザゼルはレセプターイツとなった井草に物理的に振り回されることになったが。

5 話

温泉でひと悶着あつた次の日、井草達はジャージを着て集合していた。

着ているジャージは駒王学園の物。こんな時でも駒王学園生徒である事を意識する事に、井草は少し苦笑した。

「アザゼル。私達全員のトレーニングメニューを考えてたつて、本当?」

リアスがそう尋ねると、スーツ姿のアザゼルは不敵に笑いながら頷いた。

「ああ、若手の逸材であるお前らをコーチできるとなりやこつちも腕が鳴るんでな。一応それが仕事だし、ちゃんとやるさ」

「気を付けてねリアスちゃん。この人はやるべきことを短時間でパパッと終わらせてから後の時間を趣味に費やすタイプだから。調子に乗らせると苦労するよ」

「この中ではいちばん付き合ひの長い井草にきちんと警告されるが、アザゼルはどこ吹く風だった。」

「まあ、今回のトレーニングメニューは将来性を重視したもんだ。このひと月足らずじゃ目に見えた効果が出る奴ばかりじゃないだろうが、続けていりやあ必ず強くなれ

る。墮天使総督の名に懸けて保証してやる」

「『『『『『『はいー』』』』』』』」

割と重要なものを掛けて保証されたのなら、効果はあるのだろう。

そう信じ、イツセー達は同時に返事をする。

それに頷いて、アザゼルはまずリアスに向き直った。

「まずはリアスだ。ぶつちやけお前はほっといても将来的に最上級悪魔クラスになる」

だがしかし、それをリアスは素直に受け止めなかった。

将来的に強くなる才能はあっても、それを必要な時に生かすことができないのなら意味はない。

そして何より、リアスは最初のレーティングゲームで敗北した。

ライザーとの戦いは勝つ方がおかしいレベルであり、あと一步のところまで行けた時点でほめられても問題はない。

だが、それでも悔しかったのだ。

自分の力不足でそんな思いをするのはごめんだ。それがリアスの意思だった。

そしてアザゼルが提示したのは――別段特別なメニューではなかった。

「アザゼル?」

「いいんだよそれで。ぶつちやけ、お前は総合的にまとまってるから、基本に沿ったト

レーニングで十分だ」

そしてアザゼルは何よりも指揮官としての能力を重視するように告げる。

王は別に眷属よりも強くなる必要はない。眷属より弱い王など、レーティングゲーム業界にいくらでもいる。

故にリアスが知るべきことはレーティングゲームを知ることだとした。

「で、次は朱乃」

「……はい」

心底不機嫌を現しながら、朱乃は前に出る。

井草は事情を簡単にしか説明されていないが、朱乃は墮天使をとて嫌悪しているらしい。

姫島朱乃。神の子を見張るものの大幹部であるバラキエルと、日本の異能業界最大手である五代宗家の一員である姫島朱璃の娘。

そのロミオとジュリエットばりの騒動の末に朱璃はしに、それが原因で朱乃は墮天使が嫌いになったといわれている。

そして、その嫌悪ゆえに墮天使の力を使わなかったことがライザー・フェニックスとのレーティングゲームでの敗因の一つだとアザゼルは容赦なく指摘する。

そして、自分を受け入れられないものは強くなることなどできないと言い切った。

「雷の巫女から雷光の巫女になって見せる。それがお前が本当に強くなる真の方法だ」
「……………」

歯ぎしり返しながら不満をあらわにするが、しかし朱乃は何も言わずに一步下がる。それを少し残念そうにして受け止めながら、アザゼルは続いてゼノヴィアに向き直った。

「で、ゼノヴィアは周りに人里がないところでデュランダルの練習だ。あとはもう一つの聖剣に慣れてもらう」

「ほお。もう一つの聖剣とは何なんだ、先生」

興味深そうにするゼノヴィアに、アザゼルは「それはお楽しみだ」と内緒にする。

井草もそのあたりは全く聞いていない。とはいえ、アザゼルがデュランダルの使いのゼノヴィアに態々使わせる以上、破壊の聖剣クラスのもでなければ役者不足だろう。

そして、それは本当に内緒にするつもりなのかアザゼルは今度は木場に向き直る。

「お前さんは禁手を発動して、その持続時間をのばせ。禁手は必殺技じゃなくてあくまで上位形態。長時間発動できなきや意味ないぜ？」

「分かりました」

なんでも、祐斗は剣術の鍛え直しとして自分の師匠を頼るようである。そういう意味ではアザゼルの指導は少ない方がいい。

そして今度はアーシアに向き直る。

「アーシア、お前は神器能力の発展だ」

聖母の微笑は希少な神器だが、決してゼロというわけではない。ゆえに、ある程度はデータを収集する事もできている。

その点で言えば、アーシアは使い手として回復速度はともかく、回復範囲は触れただけでしかできないの言うのがネックだ。

直接接触よりは効率は落ちるが、聖母の微笑は海部のオーラを広範囲展開や長距離射出する事ができる。それを使う事ができれば、戦術にも幅が広がり、襲われるリスクを減らす事も可能。レーティングゲームでも実戦でも有効だ。

アーシアの性格では範囲を純粋に広げれば敵も回復してしまうが、射出する方向にもっていけばそのリスクも減る。

グレモリー眷属の最大クラスのアドバンテージであるアーシアの回復力。それを安全かつ効率的に運用できるこれは、ぜひ習得するべきものだろう。

「で、ギヤスパー」

「はいいいいいいいいいい!!」

「お前はメンタル面だ。その引きこもり癖を治すプランくんだから、それな」

残念だが当然の対応である。

ある意味ポテンシャルではチート一步手前なのだ。それを妨害しているこのメンタル面の克服が第一歩である。

だが、ここに関してはアザゼルも少し自信な下げだった。

「井草を矯正できなかった俺らがやつても心配かもしれねえから、その気があるならカウンセラーぐらい探しといてくれ」

「どういう意味ですか!？」

自己を正しく理解し、それ意味あつた待遇を求めているだけなのに、理不尽だ。

井草はそう思つて反論するが、しかし周りは違つたようだ。

「元氣出してください、アザゼル先生!」

「そうよ。これはきつと神滅具でも治せない病氣だわ!」

イツセーとリアスが、心の底から激励する。

「全くですわ。これに関しては先生の所為ではありません」

さつきまでアザゼルに不満の表情を浮かべていた朱乃すらフォローに回っている。

そして他のメンツも似たり寄つたり。皆一様にアザゼルに同情の視線を向けていた。

井草の味方は誰もいない。解せぬ。

しかし文句を言つても誰も井草を低く扱つたりしない事も明白。真実を自ら告白する勇氣は流石にない。下手すると告白してもこれかもしれない。

と、いうわけで反論は諦める。

今はそれより強くなる事だ。とにかく効果的な特訓をしなくてはいけないだろう。

なにせ大規模な戦争が始まるうとしているのだ。しかもオカルト研究部は白龍皇ヴァーリ・ルシファーに目を付けられている。力を付けないと殺されてもおかしくない。

戦わなければ生き残れない。不条理に巻き込まれたと嘆くべきだが、しかし世の中なごそんなものだ。

かつて不条理だった自分が文句を言う資格もない。そんな暇があるなら、イツセイ達を庇える様な強さを身に着けるべきだ。

「アザゼル先生。それで俺はどうすればいいんですか？」

「ああ、お前はとりあえず、神器を活かした強化だ」

と、アザゼルは告げる。

「幸いお前は眷属悪魔じゃないからレーティングゲームに参加しない。ある意味でムートロンの連中もついでレベルでなら確保したいだろうし、改造込みで強化する。特訓単体で言うなら、神器の力を引き出す事だ」

その言葉に一同は少し首を傾げる。

そして、代表してイツセイが手を上げた。

「先生、井草さんってなんか特別な存在なんですか？」

「いや、特別度高いならこの中でも低いんだがな？ その特別とエボリューションエキスの相性が良いと言う結論が研究班で出た」

そう言いながら、アザゼルは指を一本立てる。

「井草も実は神器持ちなんだが、この神器はこの場の神器保有者の中ではぶつちぎりでも最下位だ。ぶつちやけ、本来なら日常生活レベルでしかねえ」

「確かに、神器の大半は異形との戦いで使えるようなものではないから、それは驚かないね」

ゼノヴィアが納得する通り、神器とは本来人間世界で通用するレベルのものだ。

足が少し早くなる。頭の回転が速くなる。夜目が効く。睡眠時間が少しぐらい短くてもいい。

そんなレベルの代物が、神器の大半である。イツセー達の用意戦術兵器レベル以上の性能を発揮できるのは、神器の中でもごく一部のものだ。

そして、井草の神器は其の中でも最近になって真価を発揮したものだといえる。

「俺の神器は受容レセプター・カンゴの器っていうんだ。能力は、無益だったり有益な異物に対する拒絶反応の抑制だよ」

井草自身が神器について説明する。

実際、この神器は戦闘に直接有利に働くものではない。

正直に言えば、医療が発達する現代になってようやく価値が上昇してきた神器だった。

よく分かってないイツセー達に、アザゼルが苦笑して、説明を補足する事にした。

「要は、花粉症やアナフィラキシーショックの可能性を大幅に下げる神器なのさ」

「……微妙」

小猫がそう言うが、しかしそうでもない。

「割と現代じゃすごいぜ？　骨髓移植とか相性の良いヤツじゃないと出来ないものも、こいつがあれば相性の良いヤツが数百倍に増える。臓器移植も拒絶反応を防ぐ為に免疫抑制剤を大量に飲んで、その副作用で病気になるり易く悪化し易いリスクがあるが、この神器があればちよつと風邪を引き易い程度の量で済むからな」

とはいえ、そういう病気になる限り、上記の通り花粉症になりにくい程度の役にしかたたない。

だが、イツの登場でその価値は莫大に跳ね上がった。

「要はイツてのは人をパワーアップさせる異物だ。ナイフアーザーが言つてたEELベルつてのは、エポリューションエキスという異物を受け入れられる適性の高さ何だろう」

その説明に、リアスが何かに気づいたように目を見開く。

そして、勢いよく井草に視線を向けた。

「それってつまり、受容の器を宿していればEレベルは高くなるって事？」

その言葉に、アザゼルは満足げに頷く。

「俺達はそう推測している。おそらくムートロンの連中も、この影響は想定外なんだろうな」

その言葉に、井草に視線が集まった。

つまり、井草は強大なイーツになる事もできるとい事だ。

しかも、神器は努力で能力を高めることもできる。それはつまり、疑似的にEレベルを引き上げる事が可能だとい事だ。

改造手術や遺伝子調整。更に其れを代々重ねたと豪語するナイフアーザーですら6, 5とい事事は、Eレベルの上昇は困難極まるのだろう。

しかし、受容の器を持っているものならば、比較的容易に引き上げる事が可能かもしれない。

通常の形態ですら、井草は短時間とは言え史上最強の白龍皇たるヴァーリを一方的に叩きのめす事もできたのだ。

もし、受容の器が禁手に至る事になれば、井草は一体どこまで強くなるのだろうか。

ある意味で、井草はこの中で誰よりも強くなれるのかもしれない。

「いや、俺も興味が尽きないし鼻が高いってものだ」

「いや、確かに井草さんは堕天使ですけど、そこまでアザゼル先生が得意げにする事はないんじゃないですか？」

木場が得意げになっているアザゼルに苦笑するが、アザゼルはどこ吹く風だった。

そして、少しするとアザゼルは特訓メニューの指摘に戻る。

「で、小猫」

「はこ」

小猫はこの中でも特にやる気を示していた。

言葉少なく無表情な小猫だが、しかし強い向上心が見て取れる。

そして、アザゼルは真正面から子猫を見て――

「お前も朱乃と同じだ。自分を受け入れろ」

――その言葉で、小猫のやる気を一発でくじいた。

「……………」

「俺の指導方針は基本的に、「持っているものを受け容れなけりや真の意味で強くはなれない」だ。そしてお前は朱乃と同じように自分の力を封じている。意味は分かるな？」

その言葉に、小猫は一瞬で不機嫌になるとそのままうつむいてしまう。

それを元気づけるようにイツセーは肩を叩くが、小猫は煩わしそうにそれを振り払った。

イツセーは少し残念そうにするが、アザゼルはそんなイツセーの肩に手を置いた。

「イツセー。次はお前のコーチを紹介するぜ」

「え？ アザゼル先生がおしえ……て……」

イツセーの疑問の声、影が差した事で途切れる。

そして上を見た瞬間、何かが舞い降りて地響きが響いた。

それは、でかかった。

少なく見積もっても十メートル以上。おそらく十五メートル前後といったところか。

その姿は、人型のドラゴンとでも形容するべき存在だった。

否、それは真正銘人型のドラゴンであった。

『アザゼルか。いかに和平を結んだとは言え、墮天使の総督がよくもまあグレモリーの城に堂々とこれたものだ』

そんな呆れ声を出しながら、その赤い人型ドラゴンはアザゼルを見る。

そして、そんなことを言われたアザゼルは凶々しくも笑顔で片手を上げる。

「んなこと言うなよタンニーン。俺とお前の仲じゃねえか」

『そこまで仲良くなった覚えはないぞ？ リアス嬢も何とか言つてやつてくれ』

「リアスちゃん。流石にちよつと酷いんじゃないかい？」

「いいえ、これは名誉な事だわ。あの龍王タンニーンと直々に特訓だなんて、やろうと思つて出来る事じゃないもの」

リアスは心から良い事をした感じの表情だった。

一言言おう、善意の鬼教官などある意味で最悪である。

6 話

特訓は必要不可欠。そんな事は井草も分かっている。

無有影雄。あの男との因縁が、こんなところで起きるなど思ってもみなかった。

正直言えば、井草が無有をどうにかする権利があるなど、井草自身が思っていない。

無有は確かに外道で悪だ。だが、井草が恨みに思っている件に限っていえば、井草も人の事は決して言えない。お互い様と言ってもいいだろう。

だがそれでも、井草は無有と戦う事になるのだろう。

そんな事を言う権利などない。あの時の事を嘆くしかしたってないはずだ。自分がバカバカしい八つ当たりをしようとしている事も、痛いほど分かっている。

だけど、それでも、どうしても。

井草・ダウンフォールは無有影雄を赦す事など出来なかった。

ゆえに、その調整を受けて成功したのは当然なのだろう。

神器は想いの力で駆動する物。魂と密接に繋がっている物。

ならば、井草の願いに神器が答えようとするのは、当然の機能のはずなのだから。

「どうであるか、井草」

だが、それでも――

「一発アイツを叩きのめさないと気が済まない。……魔王クラスにならなきゃ、無有には届かないなら、なってやるしかないんだから!!」

そして何より――

「イツセイ達を俺のような奴がいるどん底に墮とすわけにはいかない。俺は、なんとかでも彼らを押し上げる!!」

その決意表明に、サハリエルとアルマロスは微妙な表情を浮かべる。

だが、それも一瞬。井草が気づくより早く取り繕うと、そのまま特訓を開始する為に動き出す。

「では、因子の馴染み具合を確認する為の模擬戦を行うのである」

「グレイイイイイイイイイイイイイイ!!」

そして、グリゴリ幹部二人を相手にした、ある意味で地獄の特訓が開始された。

……否、冥界は地獄なので当然ではあるのだが。

最上級墮天使のそのまた上級。その上変人度においても最上級のグリゴリ二大巨頭。そんな二人に揉まれてる井草も、しかしある意味で恵まれている。

確かに肉体的にも精神的にもきついが、それでも生活環境は十分いい。

ちゃんと料理された食事を食べ。汗をシャワーで流す事ができ、屋根のある部屋でベッドの中でシーツにくるまって眠ることができる。そして訓練時間はきちんと決まっている。

それに引き換え、イツセーの特訓は割と真の意味で地獄だった。

最上級悪魔タンニーンは、攻撃力だけなら魔王クラスである。ある意味神の子を見張る者の幹部であるアルマロスより強いところもあるだろう。

そんなものと、人里離れた山中でマンツーマン。隙を見せれば睡眠中でも攻撃を受ける。スパルタ特訓。

生活環境はサバイバル。幸いその手の知識が豊富なタンニーンが食べられる物を教えてくれるので何とかなるが、夏休みの部活動の一環で、火おこしなどのサバイバル技術を習得するなど以上の一言。因みに寝袋なんて立派な寝具など与えられていない。

イツセーは割と本気で地獄を味わっている。否、ここは冥界なので正真正銘地獄なのだ。

「あははははは！ 部長、おっぱいをもつと寄せて！ アーシアは腕にこすりつけて……

自分でもあれだあああああ!!」

『本当にな! そういうことばかり上手くなってないか、兵藤一誠?』

自分でもタンニーンにも呆れられる事だが、唯一の楽しみである妄想に至っては、過酷な特訓の間でもできるようになっていた。

本気で自分でも異常だと思う。せつかく覗きをやめることもできるようになったのに、別の意味で変態の極みになろうとしているのは正直どうかと思う。

だが、そんな時でも特訓の手は抜かないタンニーンの一撃が、イツセーを勢い良く吹き飛ばした。

「うわあああああああ!」

そして勢い良く吹き飛ばされ、イツセーは其のまま岩に激突しそうになり―

「おっと、流石に危ないな」

その言葉と共に、目の前の岩が砕かれ、そしてイツセーも誰かに受け止められる。

「……無事か、兵藤一誠」

その男は、サイラオーグ・バアルだった。

「あ、サイラオーグさん? どうしてここに……?」

「ああ、俺はお前のことを買っていてな、興味があつたので少し様子を見に来た時、ちようど出くわしてな」

そう言いながらサイラオーグが視線でイツセーを促す。

そして視線の先には――

「……思った以上に苦戦してるみたいだな、イツセー」

アザゼルが、美味しそうな匂いのする籠を抱えながらぬけぬけとほざいていた。

「うみやいよおおおおおおおお!!」

イツセーは感涙しながらお弁当をほうばっていた。

数週間ぶりのまともな文明人の食事である。それも、リアスや朱乃、アーシアの手作りだ。

これで感涙しないようではイツセーではない。それはもはやイツセーという存在の終焉を意味する。言い過ぎかもしれないが間違っではない。

「しかし龍王タンニーン殿とマンツーマンで数週間とトレーニングができるとはな。正直変わってほしいものだ」

「ぶっちゃけ変わってほしいです!! 毎日部長をアーシアに囲まれて眠る生活から、い

きなりドラゴンに襲われる恐れを抱きながら葉っぱにくるまれて眠る生活とかマジでキツイ!!」

冗談半分のサイラオグの言葉に、本気でそう言ってしまおうくらいにはイツセーは苦しめられている。

しかし元凶であるアザゼルは、まったく意にも介さずお茶を飲んでいた。

「いや、ぶっちゃけそれぐらいしらないとお前絶対死ぬし」

残酷だが事実である。

なにせ宿命のライバルであるヴァーリ・ルシファアは、素体の性能・神器の才能・戦闘の経験・訓練の時間のすべてで上回っているのだ。

地獄の密度の特訓を一月。この程度しのぎ切れないようでは、どちらにしても死ぬ。

それほどまでの存在がヴァーリなのだ。ここで下手に仏心を見せれば、それは逆にイツセーの為にならない。

「しかし魔王ルシファアの末裔が神滅具を持ち、テロ組織に与するとはな。史上最強となる白龍皇ともなれば、俺でもこのままでは勝てないだろう」

サイラオグがそう独り言ちると、アザゼルはそれに静かに頷く。

「確かにな。生身の戦いならお前の方が有利だろうが、ヴァーリが鎧を付ければ不利にはなるだろう。ましてや、ヴァーリの奴は覇龍を制御の少しはできるからよ」

『なんだと？ それでは今代の二天龍対決は決まったようなものではないか』

アザゼルに対するタンニーンの反応が不吉すぎ、イツセーは思わずおにぎりを喉に詰まらせかけた。

既に決まったようなものなどと言われては、自分の今までの頑張りが無駄になったようなものではないか。

流石に酷い事を言ってくると思っただが、どうも冗談で言っているわけでもなさそうである。

「あの、覇……って何ですか？ 禁手の更にも上みたいなの？」

「いや、神器の究極は禁手だ。そこより上は、少なくとも神の子を見張る者でも確認していない」

と、イツセーにアザゼルはそう断言する。

「だが、封印系神器にはもう一つ禁じ手があるんだよ。それを総称して、覇と呼んでる」
もう一つの禁じ手。そんなものがあつたとは思わなかった。

なんでも、封印系神器はその封印された者の力を最大限に引き出す能力があるらしい。

魔獣を封印しているものなら ブレイクダウン・ビースト 覇 獣。龍種を封印しているものなら ジャガーノート・ドラゴン 覇 龍

と称されるそうだ。

それらは寿命を高速で消耗するというデメリットがあるものの、ヴァーリは魔王由来の莫大な魔力で、短時間なら抑えられるとの事だ。

……もつとも、理性の消失というもう一つのデメリットに関してはヴァーリも苦労しているとのことだが。

「まあ、ヴァーリに関しちや後でいい。おまえには仲間がいるんだから、きつちり頼りながら頑張ってけ」

そうまとめると、アザゼルはまっすぐイツサーを見る。

「……朱乃や井草のこと、お前に頼んでもいいか？」

「へ？」

いきなりそんなことを言われるとは思わなかったので、イツサーは思わず詰まる。

というより、そんなことを言われるような立場でもない。井草も朱乃もイツサーよりよほどできた大人だ。むしろお世話になっていると言った方が近い。

だが、アザゼルは不安げな表情を浮かべながら空を見上げる。

「朱乃も井草も、見た目ほど大人びちゃいねえ。あいつらはあいつ等で色々あるからな」
そういうと、アザゼルはイツサーに顔を向け直す。

「……朱乃は既にある程度上手く行っただからいい。問題は井草の方だ」

「井草・ダウンフォールですか。確か、ムートロンと名乗る禍の団の派閥に絡まれている

と聞きましたが」

「どうやら、サイラオグ達の耳にも話は届いているらしい。

それに対してアザゼルが頷きながら、少し顔をしかめる。

「あれに関しちや色々あつてな。井草からは話していいと言われてんだが、俺がペラペラしゃべるのもあれだし……」

「井草さんに限つて、そんな黒歴史を作るわけがないと思うんですけど」

心底そう思う。

自分達のような変態にも心から気を使って行動し、クラス中から一目置かれている人物だ。

レイナーレの行動にも心から謝り、しかし墮天使側の意見もきつちりと伝える。そのうえで、個人的に悔やんでくれる。

既に成人しているだけあつて、大人な人物としか思えない。

だが、アザゼルは静かに首を振る。

「いや、逆だ」

「逆、とは？」

サイラオグが聞き返し、アザゼルは一瞬だけ目を伏せる。

「アイツはな？ イおまえッサーえに自分みたいなクソ野郎になつてほしくないって思っている

からこそ、あんだだけ一生懸命フォローしてたんだよ」

その言葉に反応したのは、イツセーではなくタンニンだった。

何かに納得いったかのように、一つ頷いたのだ。

『なるほどな。よくある話だ』

「どういことだよ、オツサン？」

よく分かっているけど、これは仕方がない。

是ばかりはイツセーは経験が薄いだろう。

悪い事をしたと思っただらしくり謝り、周りの人達もそれを受け入れる。そういうあの意味で優れた人間性と、立派な人達に囲まれている環境では解りづらい。

だが、サイラオーグは何か気づいたかのように目を伏せた。

「なるほど。贖罪ですか」

「そういうことだ」

アザゼルは、井草を思い返しているのか遠い目になりながら、サイラオーグの言葉に頷く。

「かつての自分が嫌で嫌でたまらなくて、その結果アイツは更生した。だが、更生して過去が変わるわけじゃないから、アイツは自分を自己嫌悪してんだよ」

そして、アザゼルはため息をつく。

「確かに最低な事したのは事実だが、それを心から反省した以上、俺らはもうちよつと自分を赦してやって欲しいと思つちやいるんだが、どうしても治らなくてなあ。毎回毎回自発的に死んでもおかしくない任務ばつかり引き受けたがつかから、一見危険だが実際は安全牌なりアスの領地のお目付け役をさせたとつてわけだ」

「そ、そういうことだったんですか……」

イツセーは感心した。

実際ヴァーリもそんな事を言っていた。

当人は「切り捨てられる駒だからこんな任務を与えられたと思つている」と言つていたが、そんな事情があつたとは。

「俺ら大人が何を言つても、アイツは「俺に気を使つている」と思つてばかりで進まねえ。それどころか「気を使わせているなんて」と更に勝手に罪悪感を募らせる。……だけどよっ。」

そう言うのと、アザゼルはイツセーを見る。

「それでも、駒王学園に通つて少しはマシになった。屑ならせめて役に立つて死ねばいいと思つてる井草だが、それでも、お前が覗きを止めた時は結構素直に喜んでたんだよ」それは、変わったといえるのかどうかは分からない。

だが、少なくとも、死ぬことだけが贖罪じゃないとは思ったのだろう。

「それに、今のあいつは敵対勢力重要人物の監視っていう「死んでもおかしくない任務」を解かれてるのに、新しくそういう任務を受け取りたがらない。……それだけ、今の立場に執着心があるってことだ」

アザエルはそういうと、ため息をつきなおす。

「人を助けるってのは、悪い言い方をすりや自分より低いところにいる奴を自分と同じぐらいのところはまだ引き上げる行為だ。だが井草は、自分より上のやつが自分と同じところにまで落ちていかないように押し上げるっていう珍しい助け方をしてる」

そして、イツセーに向かって頭を下げた。

「だから頼む。押し上げられるついでに、アイツを引っ張り上げちやくれねえか？ 俺達じゃ、引き上げようにもあいつは伸ばした手に触れてくれねえんだ」

その言葉に、イツセーは――

「よく分からない事もいっぱいあります。だけど――」

答えなど、決まりきっている。

「井草さんは俺達の仲間で、俺達の恩人です！ だから、俺は井草さんの力になります
!!」

それだけは、断言できる。

7 話

そんなことが起きているとは露知らず、井草はいったんグレモリー城へと戻ってきていた。

監視役の任務は和平設立で解かれているが、アザゼルのサポート役件お目付け役として任務を新たにつけられている。

冷静に考えるところがおかしな話だ。

自分は屑だ。自分は塵だ。井草・ダウンフォールは、最低の人種であると井草自身が断じている。

そんな屑が引き受けるべきは汚れ仕事か、死ぬかもしれないリスクはあるが、しかし重要人物や戦力を送るべきでないところだろう。

イーツであり、かつイレギュラーなケースである自分は検体としても魅力的だ。少なくとも定期的な検診は受けている。其のまま人体実験を受け続けるべきだとも思う。

なのに、オカルト研究部の一員として活動することに疑問を抱いていない。

「何やってるんだらうね、俺は」

そう自虐してしまう。

どうにも、いつの間にか、井草はオカルト研究部の一員として、イツセーの友達であることが気に入ってしまつたらしい。

そんな事を望む価値など、自分にはない。それだけは断言できるのに――
そう思つたその時だつた。

「おんやあ？ 誰かと思えば井草さんじゃねーですかい」

其の声に視線を向ければ、そこにはリム・プルガトリオがいた。

「なんでここに？」

「いやいや、今度ですね？ 天界・教会側のスタッフが何人か派遣されることになりやして。教会側のスタッフは「共闘経験があるから」ってことで私とニングに決まつちまつたんですわ」

なるほど。

確かに、三大勢力和平の地である駒王町は重要だ。立地的な意味でも機能的な意味でもない。象徴的な意味でだ。

そして人員も豊富だ。魔王末裔2人が眷属と共に管理をしている。墮天使総督が、イツ係で極めて希少価値のあるサンプルをサポート役として住んでいる。ある意味これだけでも重要地点だ。

その地に和平を結んだ三大勢力の一角である天界・教会陣営がスタッフを派遣していない。これは確かに問題視されるかもしれない。

アザゼル辺りは気にしないかもしれないが、ミカエル辺りは気にする案件である。

「いやあ、俺みたいなダブル通り越したトリプリと同じ学校で会話するのはあれかもしれないけど」

「そりやお構いなく。私も二十歳いつてまさあ」

マジか。

ぶつちやけて言うのと、リムはどちらかというまでもなく未発達な体つきである。ニングもだが。

それでも暗部のアンナピーキーな任務に派遣されるのだから十五は越えていると思っていたが、まさか二十歳だとは。

「クツ！ 実際の年齢を考慮したジョークもいえないだなんて！ 俺はやつぱり屑だ！」

「お兄さん、そんな生き方しててつらくなりやしませんかい？」

心底心配されてしまった。

まあ仕方がない。

自分が高評価されるのは心底心外で心が苦しむ。しかし自分のせいで相手に不快な

感情をあたえたりするのはなおさら駄目だとも思う。ここは落ち着こう。

「まあいいや。とはいえ、俺もこの城の案内ができるほど慣れてないんから、中の紹介とかは勘弁してね」

「いいでさあいいでさあ。ニングとは別行動でちよつと見学してただけでさあ………というかはぐれて迷つてんでさあ」

ちよつと顔を赤くして顔をそらすリムに、井草は苦笑した。

外見相応に無邪気なところもあるらしい。しかし、変に自分を言いつくろわないところは好感が持てる。

「なら、とりあえず大広間までは案内できるから行こうか」

そういうことなら仕方がない。幸い、井草もそれぐらいには内部の知識はある。

そういうことで、世間話をしながら井草たちは城内を歩く。

そうしていると、トレーニングルームに通りがかった。

「あ、ここは城内のトレーニングルームの一室だね」

詳しくは知らないが、おそらく衛兵の訓練などに使うのだろう。

リムもトレーニングは欠かさない性分なのか、興味深げにしている。

それを見て、井草も少し体を動かしたくなってきた。

ここ数週間はトレーニング付けだったからだろう。定期的にきつめのトレーニング

をしないと落ち着かなくなってきた。

「ちよつと、体をあつためるかい？」

「お、いいですなあ。なんならベッドの上で裸であつたため合つてもいいはず？」

「そういうのは良いから」

暗部組織とは言え、教会の一員がそれはどうだろうか。ジョークにしても品がない。

ゆえにサラリと流しながら、井草はトレーニングルームの扉を開け――

「……………」

そこで、倒れている小猫の姿を見た。

「小猫ちゃん!？」

「ただの過労らしいわ。ハードトレーニングで疲れがたまっていたみたいね」

そういいながら、リアスはため息をつきながら近くの椅子にすわりこんだ。

「……………主失格だわ。小猫がこうなる可能性は、アザゼルの指示を聞いた時点で思い至るべきだったのに」

その言葉は、心底この状態を公開していることの証明だった。だが、井草はそれに首を振る。

「違うよ、リアスちゃん」

そういい、井草はリアスの手を取り、目線を合わせる。

「リアスちゃんは頑張ってる。むしろこれは、カウンセラーの類を紹介しない上役たちにも責任はあるさ」

……塔城小猫。その本来の名前は、白音という。

もともとは猫又の中で極めて気象かつ強力な種族の出身だったが、何らかの事故で両親を失ったらしい。

その後、上級悪魔に姉がスカウトを受け、何とか生活できる環境にまで持ち直すことに成功する。

姉猫である黒歌は優秀な僧侶で、駒を二個消費するほどのポテンシャルを秘めていた。

実際、その能力は最上級悪魔クラス。魔力の運用はもちろん、呪術や妖術に長けている。それどころか、専任の類でなければ使用できない仙術も習得し始めていた。

だが、それがよくなかったのだろう。

仙術とは、生命や大地に流れる気を利用する術式である。

その特性上探知などにおいて優れた能力を發揮し、生命力に干渉する都合上、治療などにも効果を發揮する。

生命力に直接関係する以上、単純な防御力ではダメージを防ぎきれないところもあり、なかなか強力な能力でもある。

だが、同時にデメリットも非常に大きい。

特に、人のや世界に漂う邪気や悪意まで取り込みかねないのが危険だ。これにより性格が歪み、力の吞まれるものも数多い。

黒歌はまさにそのたぐいであり、主を殺して逃亡してしまったのだ。

しかも追つても撃退した実力は本物。今ではSSランクのはぐれ悪魔であり、はぐれ悪魔界の星ともいえるだろう。悪い意味でトップクラスである。

小猫も危険視され、サーゼクスがかばわなければ処分されている可能性があった。そのせいで一時期かなりふさぎ込んでいたらしい。

「身内に屑がいると、家族は苦勞するね。俺も、義姉さんが馬鹿にされないか心配だよ」「貴方は何の問題もないでしょうに」

なぜかそんな評価がされた。解せぬ。

「それはともかく、今回はリアスちゃんだけの責任じゃないよ。遠慮なくトラウマに踏み込んだアザゼルや、そもそもカウンセラーをあてがっていない上役にも責任はある」

井草はそういうが、リアスは力ない。

「お兄さまはともかく、上役はそんなこと気にしないわよ。使えないなら捨てればいいのにとでも思ってるんじゃないかしらね」

その言葉に、井草は頭が痛くなる。

まったくもって悪魔の上役は度し難い。そんな者たちに囲まれているサーゼクスたちがかわいそうでならないとすら思う。

三大勢力の和平で少しは変わるだろうが、しかし結果的にアザゼルも苦勞しそうだ。

「いま、イツセーがお見舞いに行っているけど、それで小猫も少しは気が晴れるといいんだけど」

「だよね」

二人してため息をついてしまう。

流星に、これはいろいろと大変だ。

小猫からすればトラウマの根源。其れに手を出さなければならぬなどと、納得できるものではないだろう。

だからといってハードトレーニングをするのもあれだ。ハードトレーニングは体に悪い。トレーニングは出せる限界というものが存在するからだ。

限界を超えて進化する手合いなどごくわずかの例外だけだ。普通は、限界を超えた者

は自壊するほかない。

「……いつそのこと、俺から人工神器のテストに紹介でもしようか？」

これは親切心だ。

アザゼルには悪いが、明確なデメリットがある力を無理に使用させるのも心苦しい。人工神器にもデメリットはあるが、本人が了承するデメリットと了承できないデメリット。それなら前者の方がまだ何か起きても本人が納得できるだろう。

だが、リアスは静かに首を横に振った。

「いえ、もう少し様子を見させてくれないかしら？」

その目には、少しだけ期待の光があった。

その理由に、井草も心当たりがある。

「……イツセーくんかい？」

その言葉に、リアスは小さくうなづいた。

「祐斗は、イツセーが尽力したからこそ復讐心を乗り越えられたところがあるわ。朱乃もイツセーに寄り添って少しは堕天使の血に前向きになれた」

「同じことが、小猫ちゃんにもあり得るかもしれないと？」

「主としては情けない話だけれどね」

そう力なさげに笑うリアスだが、井草は静かに首を横に振った。

「それは違うよ」

そう、それは違う。

「リアスちゃんは色々訳ありの子たちを救って、しっかりと癒してきた。だからこそ、皆リアスちゃんのこと大好きなんじゃないか」

そう、それは確かにそうだ。

確かに皆、リアスのもとで問題を克服することはできなかったのかもしれない。

だが、彼女達が抱えている問題は、本来なら長い年月を掛けて癒していくしかないものだ。まだ子供であるリアスがどうにかできないからといって、仕方のないことである。

少なくとも、朱乃たちはリアスのもとで本心から笑えるようになっていく。それだけでも充分癒されている証拠だ。充分褒められるべきだろう。

そして、癒された彼らをイツセーが起爆剤となって成長させている。

それは確かにすごいことだが、精神が歪んだままではダメな方向に行っていたかもしれないのだ。

リアスが癒し、イツセーが伸ばす。

リアスが救い、イツセーが導く。

ある意味、しっかりと役割分担ができていくことだ。

「ある意味、ぴったりだね、お二人さんは」

「ちよ、ちよっと！ そういうのはやめて頂戴!!」

リアスが顔を赤くして何か言ってくるが、井草はスルーする。

あれだけアピールしておいて、今更な話だ。

リアスも聞いちゃいないと気づいてぶぜんとするが、やがて表情を変える。

それは、いたわるような慈愛の視線だった。

「……あなたも、少しは導かれるのかしら？」

その言葉に――

「……まさか」

――井草はそういった。

「俺は自分が進むべき道をわかっている。だから、変わることは何もないよ」

そう、はつきりと言いつ切った。

8話

そして、訓練期間は過ぎた。

井草は特訓と強化の二つの実感を得て、それをより体感する為に、一人でグレモリー城の周りをランニングしたりなどしていた。

トレーニングは神の子を見張る者の精鋭との激戦。そのうえで、強化措置を受ける事で今後の禍の団との戦いに備える方向だった。

異物の移植に対する適合値の高さこそが売りの、レセプター・カーゴ受容の器。その特性を最大限に發揮するには、自分にはまだ出せないが、しかし特訓の成果は如実に出ている。

その成果に関してはまだ出せないが、しかし特訓の成果は如実に出ている。

今迄ならばバテたであろう距離を、軽く息を切らす程度で走れるようになった。今迄では両手を使わなければ持ち上げられないような物も片手で持ち上げられるようになった。更に墮天使としての力量も上昇している。

之なら、イーツになった時により強くなる事もできるかもしれない。

そして、そうすれば――

「伊予、五十鈴……」

二人の仇を、討てるかもしれない。

そこまで考えて、井草は静かに首を振る。

ふざけた話だ。自分のような屑にそんな資格はない。そんなこと、自分でもよく分かっているだろうに。

贖罪は必要だ。生涯かけて罪を背負わなければならぬだろう。だが、当人がいなければどうしようもない。

井草が罪深い事には変わりないのだ。

だから、井草は自分が嫌いで愛想をつかしている。

自分が誰かの為に生きるのは当然だ。見下されるに値する屑は、それ相応の生き方というものがあるのだから。

イツセー達の変態行為を、ピスに頭を下げてまで阻止したのも当然だ。自分が屑なのが分かりきっているのだから、しなくてはいけないだろう。まだ一線を超えていないものに、自分と同じところに来てはいけないというのは、罪を犯してしまったものの務めだ。

だから、自分は――

「あ、井草さん！」

―その声に、井草は思考を切り替える。

見れば、そこには見るも無残な姿になったイツセーの姿があった。

「イツセー。相当揉まれたみたいだね」

「……はい。サバイバル生活はもうこりこりです」

その言葉に、井草は少し疑問に思った。

サバイバル生活。そんなことをしているとはどういうことだろうか？

そして、すぐに思い至った。

そして、すぐに結論した。

「イツセー。ちよつと先生をしばき倒しに行こうか」

「いやゝ。俺も逃げ帰る事前提で組んでからな。まさか完遂するとは思わなかつたぜ」

「ふざけんな、この鬼教師いいいいいい!!」

イツセーは涙ながらに絶叫する。

しかし、ボコボコにされたにも関わらずアザゼルはからからと笑っている。これは完

全に反省していないノリだ。

この男、面倒見は良いしちゃんと成果もあげる人物なのだがこういうところがあるのが困り者だ。

はつきり言おう。オカルト研究部は基本的に生活環境がちゃんとしているところでトレーニングを行っていた。

城内で生活している者が半分ぐらいいる。祐斗やゼノヴィアは外で特訓していたが、それでもグレモリーの別荘やペンションなどを使わせてもらっていた。井草もそうだ。

イツセーだけだ。イツセーだけが文明人の生活環境をもらわずに特訓させられていた。しかも、睡眠中も不意打ちを喰らうという酷い話だ。サバイバル技術まで鍛え上げる必要に迫られていた。

「鬼ですか、アザゼル先生」

「仕方ねえだろ。ぶっちゃけ、それぐらいしねえとヴァーリには届かねえしな」
「せめて食事ぐらいまともなのを食わせてあげましょうよ……」

言ってくればデリバリーの真似事ぐらいしたのにと、井草は心底反省する。

もし合宿がまた会った時は、他のメンバーの様子を見に行く程度の事はしなければならぬ。

準最年長として、最年長のおふぎけの監視は必要だった。自分が強くなる事に拘り過

ぎたのは迂闊でしかない。

「まあまあ、井草さん。その分イツセー君は遅しくなりましたじゃないですか」
「確かに。体つきが戦士のそれに代わっているのは良い事だ」

「そりゃ、特殊部隊でも根を上げそうな地獄の特訓を超えたんだからね」
祐斗とゼノヴィアの言葉に、井草は半分同意するが、流石に同情する。

まともな戦闘訓練すら受けていない、新米同然の下級悪魔がする特訓ではない。死んでない事がおかしいぐらいだ。というより、逃げ帰りたくても逃げられないだけではないだろうか？

まあ、心が折れて無謀な逃亡をしないという事はそれ相応の精神力だろう。スケベ根性は絶大なのは知っていたが、普通の根性は非常にある事が発覚した。

「でも、禁手にはなれなかつたです。でも、これ以上あんな地獄にはいたくないです……」

いろいろな意味でブルーになっているイツセーを、リアスが無言で抱き寄せる。
井草も、目を伏せながら肩に手を置くしかない。

アザゼルも多少は同情の視線を向けるが、こちらはそこ迄動揺していなかった。

「ま、その辺は想定内の範囲だ。そもそも禁手なんてそう簡単になれるもんでもねえしな」

実際、その通りなのだ。

禁手とは、想いに応える神器の極限。いわば〇解である。

至れただけでも賞賛に値する事であり、至れなかった事を責められる謂れはない。

そも、この場に神器使いは五人もいるが、至っているのは祐斗だけだ。これこそ、禁手に至る事が難しい事の証明だろう。

「木場のパターンを見てみる。人生の根幹に根差した憎悪を振り払って、そのうえで同胞達の残留思念とエクスカリバーをさせるだけの聖剣因子を取り込んだからこそ至れたんだぜ？ 一月の地獄程度で至れるなら、禁手に至った連中の数は桁が二つぐらい違うだろうよ」

実際、地獄と形容できる環境に放り込んだだけで至れるのなら、戦場に生きている者は皆至っていないければならないかもしれない。それほどまでに禁手とは難易度が高いものなのだ。

よほどの精神的なインパクトがあるか、神器を極限迄極めるか。それぐらいしなければ、生涯かけても至る事はできないのが禁手である。

悪魔に転生した神器使いも大半は禁手に至っていない。人間の寿命を遥かに超える年月を生きていてもだ。一月程度で至らるれば、彼らが泣くだろう。

「つつても早いところ至らねえとそれこそ死ぬんだがな。だがこれ以上やると心が折れそ

うだし……」

「いつそのこと、義姉さんに頼むべきかもしれないね……」

アザゼルが考え込むのに釣られて、井草もまた考え込む。

そしてその瞬間、イツセーはガバつと振り返った。

「そ、それはまさか!?!」

「え? 何かあるんですか?」

「何か秘策でもあるの?」

イツセーが目の色を輝かせたのに反応して、アーシアとリアスが驚く。

だが、アザゼルは首を横に振る。

「いや、ピスは確かに神器を三つも移植してるが、どれも至ってねえよ。そもそも反動もでかいしな」

案に参考にならないと言い切るアザゼルだが、その時祐斗が何かに気づく。

「あ、まさか……!」

「どうしたんですか、祐斗先輩?」

ギヤスパーに促され、祐斗は井草に視線を向ける。

「あれは、まだ約束が果たされてないんじゃないかい? それに――」

「分かってる。あほらしすぎて君には悪いと思うけど、それでも可能性はあるんだ」

その言葉に、祐斗は静かに首を振る。

「いや、そうじゃなくて……」

そして、イツセーはプルプルと肩を震わせる。

そして、プルプルと大きく震え始める。

その様子に気づいた全員が目に向けたその瞬間。

「童貞、卒業うううううう!!!」

感極まつて飛び上がり、その瞬間天井に激突した。

そして悶絶しながら床に激突し、更に悶絶。

明らかにあほ極まりないが、しかしそんな事を気にする余裕は井草にはなかった。

なぜならば、その瞬間にリアスに詰め寄られていたからだ。

「……ドウイウコトカシラ?」

「え? いや、イツセーはすぐスケベだから、童貞を卒業すればもしかしたらもしかするかもとー」

その瞬間、リアスによる、魔力を全力で込めたビンタにより、井草はクアトロアクセルを決めて壁に叩きつけられた。

その光景に半目を向けながら、祐斗は納得したかのように息を吐いた。

「……井草さんが知っているイツセー君の童貞を食べてくれそうな人って、あの人だっ

たんですか」

「まあ、あいつは時々逆ナンパするし井草とそういう事をした事もあるから納得だが、どういうこった？」

状況を飲み込み切れないアザゼルに、木場は苦笑をしながら返答する。

「井草さんがイツセー君達の覗きを止めさせる時に、「高校卒業まで覗きを封印したら、童貞を食べてくれる人を紹介する」って約束したんですよ。別学年までには詳細が伝わってなかったみたいですわね。」

その言葉に、全員がなるほどという答えに至る。

人を動かすのに必要なのは、根本的に飴と鞭だ。

だが、イツセー達は何度もしばき倒されても覗きを辞めようとはしなかった。

これは単純な理由だ。目の前の欲求に素直という事。目の前の女体という餌に夢中になり、痛みという恐怖でセーブする事ができないのだ。

なら対処方法は単純。其れより美味しそうな餌に夢中にさせればいい。気にならないぐらいの夢中になる餌に誘導すれば、それより気にならない餌によってくる可能性は減るだろう。

だが、だが、だがしかし。

「井草？ 私のイツセーの貞操を捨てさせようとはいい度胸ねえ？ 特訓の成果を見せ

てあげるわ……」

「待ってリアスちゃん！ こっちが先約、先約だから！」

この調子では、この作戦は中断するしかないかもしれない。

他にどんな餌を用意して気を散らすべきか。井草は真剣に考え始ながら、目の前の脅威を鎮静化させる方法を考える羽目になったのであった。

9 話

この時期、冥界ではパーティが開かれる。

名目上は、会合で紹介された若手悪魔を祝福するパーティだと聞いた。

だが、実態はそれを種に騒ぎたい大人の集まりらしい。おそらく既に大人達は酒を飲んでわいわい騒いでいるともリアスは言っていた。

とは言えだ。

如何に井草が罪悪感で自分を卑下していようと、日々の楽しみを全て投げ捨てれるような性分でもない。

日常的にイツセー達と遊びに行く事はあるし、テレビを見るぐらいの娯楽ぐらいしている。

適度にストレスを発散しなければすぐに倒れてしまう。死ぬにしてもできる限り役に立って死ぬべきなのだから、無駄死にはできない。ピスも悲しんでしまう。

それに、こういうパーティなら美酒の一つは出てくるだろう。食事も高級品が出てくる事は想定できる。

なにせ、元七十二柱を含めた冥界の貴族達が参加するパーティなのだ。それ相応のも

のでなければ、準備をした者の首が飛ぶ。こと今回は和平によって墮天使や天使も出てくるのだ。

とどめに、北欧の主神が参加するという話もある。なんでも真つ先に和平に賛同したとか。

と、いうわけで、井草としても興味はある。

そういう興味を捨てきれないから自分は屑なのだとも思うが、もうこの自己嫌悪は一生付き合っていかなばならないだろう。

英気を養わなければ無有に対抗する琴もできはしない。是もメンテナンスの一環だと思ひ、井草は駒王学園の制服に身を包む。

こういう時に制服がある学園に通っているのは便利だ。冠婚葬祭において礼服をどうするか考える必要がない。手っ取り早く済ませられるという意味では、これほど便利な琴もないだろう。

もつとも、女性陣はドレスを着て参加するとの琴だが。

「で？ 最上級悪魔の元龍王タンニーンさんが背中に乗せてくれるって？」

「ああ！ 眷属を連れて部長達も連れて行ってくれて言ってくれたんです！」

なんだかんだでイツセーは好漢である。スケベを気にしない相手だったり、スケベが介在しない環境なら人を引き付ける魅力が優先されるだろう。それは異形にも効果が

あつたということだ。

実際、覗きを抑制させる琴に成功してからはかなり早めに人気を得てきている。スケベが過ぎるから彼氏にしたくはないが、ある程度距離を置いての男友達としてなら需要は高かった。是もその一環だろう。

「ギヤスパークくんはドレスを着るんだらうけど、祐斗君は遅いね」

「そうですね。アイツ、どこ行つたんだ？」

「ん？ 木場のやつはいないのか？」

会話に入ってきた声に反応すると、そこにはシトリー眷属の匙元士郎がいた。

こちらにも制服を着ている。やはり男性陣は制服を礼服代わりにするという事で向こうも意見が一致したらしい。

とは言え、オカルト研究部と違って生徒会の男は匙只一人。そういう意味ではある意味恵まれた環境でもある。

それに思い至り、井草はイッセーには指摘しないように決意する。

知ればイッセーと匙で確執が発生しかねない。よくは知らないがエクスカリバーを巡る争いで仲良くなつたらしいので、諍いを生むのは気が引ける。明日のレーティングゲームにも差し障るだろう。

そんな琴を考えていると、匙は静かに決意を秘めた表情を浮かべた。

「兵藤。俺達はお前達に勝つぜ」

「いや、俺達だって——」

「まあ待てよ」

イツセーが言い返そうとするが、匙はそれを手を出して制す。

そして、静かに拳を握り締めた。

「俺は、会長が建てた学校で教師になるのが夢なんだ」

そして、こことは別の場所に思いをはせ、静かに苛立ちを浮かべる。

「だけど、その為には乗り越えなきゃいけない壁がいくつもある」

……その辺りについては、井草も聞いている。

ソーナが己の夢を語ったとき、上役である旧家の貴族達の大半はそれを嘲笑ったそう
だ。

さらに、思わず反論した匙は近くにいたグラシャラボラスの次期当主代理に殺されか
けた。

しかも、その次期当主代理はその場で堂々とサーゼクス達を非難。挙句の果てに上役
達はそれを面白がり評価すらしている。その果てがこのレーティングゲームだ。

悪魔側の抱えるいくつもの問題点が噴出した事態といえるだろう。

「レーティングゲームは、悪魔なら平等に参加できるって魔王様が決めた事なのに、上役

の横やりで上級悪魔になるか彼らに選ばれなければゲームに参加できないのが実情だ。会長は、それをどうにかしたいと思ってる」

それは、今の冥界では難しい事だ。

「それだけじゃない。冥界の教育事情は日本とは比べ物にならないぐらい低い。下級中級だと学校に通えない子供だって多くいるって話だ」

それは、今の冥界では克服は大変な事だろう。

「会長はそういった子供達も通える、それこそ階級に関係ないレーティングゲームの学校を作るのが夢なんだ。俺は、その夢が立派だって思う」

それは、きつとつらく苦しく、叶わないかもしれない夢だ。

「俺の親父もお袋も教育関係の仕事しててよ。其れもあつてか、俺、本気で教師になりた
いんだ」

それでも、彼らは諦めていない。

「だから、俺は負けないぜ、兵藤」

それを、目を見るだけで理解できる。

「俺だつて負けねえよ。ハーレム王になる為にも、二連続でレーティングゲームに負けるわけにはいかねえからな」

そして、イツセーもまた夢の為に戦う決意を決めていた。

「いや、俺が勝つからな」

「いやいや、俺が勝つから」

「はいはい。こんなところで張り合わない」

そう苦笑しながらなだめて、井草は気を逸らそうと話を変えることにする。

「あ、それとイツセー君。童貞卒業の話はちよつとリアスちゃんに殺されたくないから無しという事で」

「え、そんな!？」

前の話の流れで想定してくれと本気で思ってしまった。

何故、あの流れでそんな事ができると思ったのか。井草だって無駄死にはしたくないのだ。

しかし、その話を聞いていた匙は、静かにテンションが沈んでいった。

下がったのではない。落ち着いたのでもない。沈んだのだ。

「……兵藤、井草さん。俺、主のおっぱい揉みたいです」

寝言が聞こえた気もするが、井草は我慢した。

なにせ、隣の少年は実際に揉んでいる。その状況下で無理だと言っても誰も信じないだろう。

というより、揉めている少年は心から哀悼の意を示している。本心から、揉めてない

匙を憐れんでいる。

兵藤一誠。彼は自分が凄まじい事を言っている自覚はあるのだろうか？

「俺のもう一つの夢、会長とできちゃった結婚は何時になったらできるのか。まだ足元にも及んでないぜ……」

「その夢はダメだと思うよ？」

井草はついツツコミを入れた。

そしてイツセーは、うんうんと頷いて肩に手を置いた。

「分かる。俺も運がよくないと揉めないからな」

その瞬間、匙がイツセーの胸倉を掴んだのは悪行ではないと井草は思う。

というより、それは止めである。

「運がいいってレベルじゃねえだろ!? なんでそんな頻繁に主様の胸を揉めてんだよお前は!!」

「いや、頻繁じゃねえよ? いつもはお風呂入ったり一緒に寝たりする程度でー」

「イツセー! ある意味もつと凄い事言わない!!」

井草がつい声を荒げるが、もう遅い。

匙は、絶望の表情を浮かべるとその場にへたり込んだ。

……翌日のレーティングゲームは大丈夫だろうか? 心神喪失状態でドクタース

トップなどというオチは流石に哀れ過ぎる。

「さ、匙くん？」

「風呂？ 寝る？ そんな、そんなことしてんのかよ。羨ましすぎる……」

井草の声にも反応せず、匙はぶつぶつと呟き続ける。

血涙を流しかねないほどに落ち込むその姿は、いつそ介錯でもしてやるべきかとすら思う。

そして元凶であるイツセーは、なんでそんな事になつてゐるのかよく分かつていない表情だ。

主と同じベッドで就寝したりする事があり得る事に疑問符を浮かべないのだろうか？ それ以前に、異性愛者の異性が一緒に風呂に入るといふ事がまずおかしい事に気づくべきである。

「イツセー。わざとやつてるなら縁を切るよ？」

「え？ え？」

どうやら自慢でもないらしい。本気で疑問符を浮かべている。

「いや、確かに俺は部長に可愛がつてもらつてるけど……、え？」

目の前の男を見て、井草は信じられないものを見た気になった。

兵藤一誠。ハーレム王を目指す少年。

しかし彼は、悲しいほどに鈍感であった。

ドラゴンには、いくつかの位階とでもいうべき称号がある。

龍種どころか、神を含めたこの世界のあらゆる存在の中でも次元違いの別格と称される存在、龍神。

その下の位階。神滅具の核ともなった存在。主神クラスの力を秘めた一対の龍、二天龍。

そして、その下につく魔王クラスの戦闘能力を持つとされる存在、五大龍王。

それとは別に、邪龍と呼ばれる龍王クラスに匹敵する化け物が複数存在していたが、こちらはほぼ滅ぼされている為除外する。

そして、五大龍王は本来、六大龍王だった。

その六番目の龍王だったのが、今イツセー達を乗せている存在、タンニンだ。

『まあ、大きな争いもなくなったあの時代で強者と戦うにはレーティングゲームが手っ取り早かったのもある』

「ヴァーリとはえらい違いだよ。爪の垢を煎じて飲ませてやりたいね」
戦争を引き起こそうとするテロ組織に寝返った裏切り者を思い出し、井草はため息をつく。

隣のイツセーも、大絶賛目を付けられているので遠い目をしていた。

その様子に苦笑しながら、しかしタンニーンは続けた。

『あとはドラゴンアップルという果物の問題があつてな』

「ドラゴンアップル？」

イツセーが首を傾げるのも無理はない。

これに関しては神話や伝承にも載っていないはずだ。悪魔になりたてのイツセーでは知りようがないだろう。

ましてや、地球では目にする事もない植物だ。これで知っていたら、逆の意味で驚きだというものである。

「文字通り、ドラゴンの為のリングゴだよ。確か、一部のドラゴンはそれしか食べれないって聞いた事があるけど、それですか？」

『ああ。地球では環境変化で絶滅してしまつてな』

それで、大体の理由は分かつたようなものだ。

「冥界には自生しているけど、ドラゴンは自分勝手なのが多いから素直に分けてくれる

わけがない。……だからですか？」

『ああ。上級悪魔以上になれば、魔王から直々に領土をもらえるのでな。望みどおりにドラゴンアツプルが自生する土地をもらえたよ』

以下に転生悪魔に権力を与える事が不満の旧家の上役であろうとも、龍王クラスが上級悪魔に昇格する事を阻止する事はできなかった。つまりはそういう事だ。

そうなれば、旧家に色々と困らされている四大魔王も大手を振って領土を与えられるだろう。

そもそも四大魔王はお人好し揃いだと聞いている。しかもリベラル派の筆頭で有名だ。成果を上げているタンニーンを厚遇しないわけがないだろう。

詳しい事はまだ分からないイツセーも、そこまでくれば答えは分かる。

「じゃあ、オツサンのおかげでそのドラゴンは助かったのか？」

「ああ。人工的に栽培する研究もさせてもらっている。まだまだ大変だが、何時か未来に繋げて見せるさ」

その言葉に、井草もイツセーも感銘を受けてきた。

こと井草は、ヴァーリという悪い例を知っている為感動しそうになる。

淘汰されそうになった種族の為に、誇りを捨ててまで未来をつなげた存在。それが元龍王タンニーンなのだ。

本気でヴァーリに爪の垢を飲ませたくなった。今から強引に叩き込む為にもらっておくべきだろうかとすら考える。

「いいドラゴンなんだな、オツサンは」

イツセーもそういうが、タンニーンは虚を突かれたかのような表情を浮かべると笑いだした。

「ハハハハハ！ そのように言われたのは初めてだ。しかも赤龍帝から言われるとは思わなかったぞ」

しかし、タンニーンはそこでいったん切ると首を振る。

『しかし、同族を守りたいと思う奴がいるのは人間だろうと悪魔だろうといるだろう？

たまたまドラゴンでそう思ったのが俺だったにすぎんさ』

謙遜なのか、それとも本気で言っているのか。

どちらにしても、今自分達を運んでいるドラゴンは、王という称号を得るに相応しい存在である事は言うまでもない。

なんというか、井草は何というか申し訳ない気になってきた。

「いや、すごいってオツサン。俺はとにかく上級悪魔を目指してハーレム作りたいたいだけだしさ」

イツセーが微妙に自虐に入り始めるが、タンニーンはそれを否定するかのように首を

振った。

「若いうちはそれでいい。雄ならば、雌や富を求めるのはごく当たり前の感情だ。ましてや龍ならそれぐらいでなければならん」

しかし、タンニーンはそこで切る。

そして、子を見守る親のような目でイツセー達を見る。

「―だが、それを最終目標にするのはもったいないぞ。強くなれば女が寄ってくるの当然。そこから先が大事なのだ」

その言葉は、イツセーの心にどこか届く。

そして、井草にもタンニーンは言葉を繋げる。

「お前もだ、井草・ダウンフォール」

「え、俺ですか？」

まさか自分に振られるとは思わず、井草はきよんとする。

そして、タンニーンはそれこそ不出来な子を見る親のような目を井草に向けた。

『過去を悔やむのは良い。だが、そのまま沈み続けることを望む親はいないだろう。若者が失態するのは当然。問題はそこからだ』

「そこ……ですか？」

井草は眩き、そしてタンニーンは頷く。

『お前は自分が罪深い事をしたと思つてゐる。だが、人間にしろ悪魔にしろ墮天使にしろ、罪に見合った裁きを受けた者の再起を赦すのが今の世だ。俺とて、ドラゴンとして冥界に嫌われるだけの事をしてきたが、それ以上の成果を上げた事でこうして領地まで持てている。それをお前は否定するのか?』

その言葉に、井草は返答できない。

確かに、タンニーンが今最上級悪魔になつてゐる事を否定する事はできないし、してはいけないだろう。

なら、逆説的に井草は、自分がやり直す事を認めるしかできない。

だけど、それでも、それに領きたくはない。

そうして無言になつてゐると、タンニーンはいつくしむような目を向ける。

「今は考えるだけでいい。だが覚えておけ。アザゼルもお前の義姉も、そして隣の兵藤一誠達も、お前が犯した失態を知つていたり知る事になるだろうが、今のお前のなしてきた事を全否定するようなものではない」

「あなた、どこまで知つて——」

井草は思わず聞いたただそうとするが、それより先にタンニーンはさらに続ける。

「俺は詳しい事は知らん。だが、アザゼルはあれで締めるべきところはきちんとする男だ。……その奴がお前が其のままである事を望まないという意味、よく考えろ」

「……………っ」

その言葉に反論はできない。

分かつてはいるのだ。

アザゼルという男は、どうしようもないがろくでなしではない。井草という男に気を掛けているのは、井草が前を向いてほしいと願っているからだけではない。前を向く資格があると判断したからだ。

神の子を見張る者の幹部達もそうだった。少なくとも、自分と親しい者は皆そうだった。

自分のしたことは相当のものが、しかし自分だけの責任でない事も分かっている。

少なくとも同じぐらい罪深いものが二人いる。そのうちの一人である無有が平然としているのに、井草だけ罪に苛んでいるのも馬鹿らしいかもしれない。

……だが、と反論しようとしたその時、タンニーンは先手を打って続ける。

「今は考えるだけでいい。幸いお前は墮天使の血を引いている。永い寿命があるのだから、少しぐらいくすぶる期間が長くてもいい。だがな？」

そして、タンニーンは前を向きながら告げる。

「お前が過剰に自分を卑下する事は、お前を好んでいる全ての者をまとめて侮辱する事だ。其れだけは忘れるな」

その言葉は、井草の心に響く。

井草とタンニーンは初対面に近い。つい数週間前にイツセーのコーチとして紹介されたのが初対面だ。

だからだろう。ニングのように、リムのように、井草の心に比較的素直に届いてしま

う。

……少しだけ、考え直さなくてはいけないのかもしれない。

そう思おう程度には、井草の心に素直に届いてはいるのだった。

10 話

井草は、パーティ会場の隅でポツンと立っていた。

タンニーンの言葉は、比較的素直に届いてしまった。

ニングの言葉に頷いた時のように。リムの言葉に真実をさらけ出しそうになった時のように。タンニーンの言葉は井草が目を背けていた真実を明かしてしまった。

付き合いが長い相手だと、どうしても素直に受け取れない。

それはそうだろう。井草の罪を知っている者たちが、井草の今の頑張りを見れば、同情心が湧いて出てくると思ってしまう。そういう言い訳を赦してしまう。

逆に井草の罪を知らずに、井草の今を深く知っているのなら、知らないからこそだと思ふ。知れば見下げ果てると思ふ。見下げ果てなくても、実感がわからないからだと思ってしまう。

だが、井草を深く知らない人が言う言葉は、その言い訳を許さない。

ただ客観的に事実を聞かされただろうタンニーンという言葉は、井草に素直に届いてしまふ。

はつきり言おう。今までで一番効いた言葉だ。

……自分でもわかつているのだ。

井草の周りの人たちは、井草に同情することはあっても、それだけではないだろうということは。

井草が罪を犯したことまで否定はしない。彼らは、井草はもう自分を赦してもいいと思ったからこそ井草に優しいのだ。

わかっている。彼らは墮天使ではあるが、邪悪ではない。問題児ではあるが、ろくでなしではない。

許されてもいい存在だと思っっているからこそ、彼らは井草を許しているのだ。

だが、それでも――

「伊予、五十鈴――」

ぼつりと、名前がこぼれる。

きつとひどいことになって、そして二度と会えないだろう二人のことを想うと、井草はどうしても自分を赦すことができない。

「伊予、五十鈴……っ」

己の罪を連鎖反応で思い出し、そして歯ぎしり迄したその時だった。

「……そのお二人が、井草さんがそうなった原因なのですか？」

「まあ、深くかわりまくってやがるんでしょうね」

其の声に、井草は反応して振り返る。

そこには、ドレスを着たニングとリムが立っていた。

どうやら声が大きかったらしい。思いつきり聞こえてしまっていたようだ。

ニングは一步前に出ると、井草の手をそつと握る。

「あの、良ければ相談に乗るのです」

その言葉に、井草は首を横に振る。

「気にしなくていいよ。これは、俺が勝手に悩んでることです」

「人に相談すると、気が楽になりやすぜ？」

井草の言葉をさえぎり、リムも井草の手を握る。

そして、リムは其のまま井草を引つ張った。

「あ、ちよつと」

「あまり人には言えないことでやがるんでしょう？」

反論をさえぎったリムの言葉に、井草は黙る。

確かにそうだ。

覗きなどという軽い犯罪とは比べ物にならない。少なくとも、井草はそう思っている。

それが、井草が人にその事実を話したからないストッパーになっているのは事実だろう。

そこまで気を使ってくれる理由はわからないが、しかしそれでもこれだけは言える。

この二人は、本当にいい人たちだ。

「んじや、教会のものらしく告解をするとしましょうや」

「なのです。墮天使にするのは初めてなので、ちよつと緊張してるのですよ」

その言葉を聞きながら、井草は人気がなくなったのを確認してから話し始めた。

俺はもともと、親戚をたらいまわしにされていた。

やんちゃしていた両親が生んだ子供らしく、母親の親戚に引き取られたけど、結構扱いに困っていたらしい。

アザゼル先生たちは教えてくれなかったけど、たぶん父親の方が墮天使だったんだろ
うね。それも、結構悪かったんじやないかって思ってるよ。ほら、レイナーレみたいな
感じだったんじやないかな？

で、まあ伊予と五十鈴っていうのは、最後に連れていかれた親戚の家の近くに住んでた子供たち。大体物心ついた時だね。

あの時は結構いじめられててき。情けない話だけど五十鈴に助けられて、伊予が慰めてくれてって関係だったかな。

ただ、親戚の方は俺のことを迷惑がってたから、いつか施設にでも預けられるもんだと思ってた。

……そんな時、ピス・ダウンフォールが、義姉さんが俺に会いにきたんだ。

金で解決する形だったけど、その結果引き取られた俺は、伊予と五十鈴から離れたくないって我儘を言って、それは受け入れられた。

親戚は金もらって引越したけど、俺はその家に残って、義姉さんと一緒に住んだんだ。

いろいろ教わったよ。俺は墮天使と人間のハーフで、神器も持っているって。

はつきり言って中二病をこじらせたね。いや、実際に能力を持つてるから違うかもしれないけど、それでも似たようなもんだよ。

いつか、伊予や五十鈴を守り返せるぐらいに強くなりたかった。だから結構トレーニングとかしてたんだ。

毎日三十分ぐらい筋トレして、三十分ぐらい速めのランニングして、三十分ぐらい空

飛んだりして墮天使の力に慣れたりしてたんだ。まあ、中二病だから乗り気になれない勉強とかはいい加減だったけど。

伊予は毎回学年上位一けた台だったし、五十鈴は勉強してないらしいのに十位から三十位ぐらいを行ったりきたりだったね。俺は平均程度だったかな。

……え？ 中二病は努力しないで特別になりたがる手合いだから、それ違う？ いやいや、二時間足らずのトレーニングなんて大したことないよ。

え？ 学生としては十分？ ……二人が言うなら、そうなのかな？

まあ、そんなこんなで高校一年生になるまでこの生活は続いていたね。うん、幸せだった。

中学三年生になるまで、俺2人からバレンタインデーに義理チョコもらってたし。中学から二人とも手作りを作ってくれてたからね。義理なのに本腰入れすぎだよ。

え？ それ、十中八九本命？

……………。

ああ、だからか。俺の罪が増えたな、これは。

ああ、ごめんごめん。あとで纏めて説明するよ。あとありがとう、無自覚に罪を犯すのはひどいことだから、自覚させてくれてありがとうね。勘違いだったら笑い話で済ませられるからまあいいよ。

まあ、たぶん見限られたんだろうね。ちょうどそのころだし。

で、ちよつと話は戻るけど、中学三年生のころにちよつとだけ変化があった。

五十鈴は天才肌で何でもこなしてるんだけど、伊予はなんだかんだで勉強とかよくしてたんだ。それで、家庭教師をつけることになったんだよ。

そいつの名前は、無有影雄。……駒王会談を襲撃した禍の団の派閥、ムートロン。その一人として現れた、ナイアルってやつがそうだったのさ。

ここまで聞いて嫌な予感したよね？ 大隊あつてる。

アイツはイケメンで、外面も良かった。いつの間にか、伊予の話はたいていアイツが中心になった。

それで嫉妬に狩られてさ、義姉さんならみで顔見知りだった探偵に、誕生日プレゼントつてことで報酬はローン払いにしてもらつて、身辺調査してもらつたんだ。

で、これは追跡調査も含めてで発覚したことだったけど、無有はとんでもないクソ野郎だった。

……大学生だったんだけど、アイツは売春の斡旋をしていたことが発覚した。さらに神の子を見張るものが本格的な追跡調査をした結果、女性を奴隷として人身売買組織に売っているという事実まで出てきたんだ。

いわゆるあれだよ。調教系のエロマンガやエロ小説。あれをマジでやってたのさ、ア

イツは。

ここまで言えばわかるだろう。伊予は調教されてたみたいだ。しかも五十鈴もいつの間にか調教されてたみたいなんだよね。

……何も知らなかった自分が嫌いだけど、そんなことを言う資格は俺にはない。これは後で説明する。

まあ、その事実を知って俺は無有に殴り掛かったんだけど、これが見事に返り討ち。あの時はショックだったよ。上級墮天使のハーフ名だけあって、俺って本気出すとあの時でもオリンピックで決勝戦にことごとく参加できそうな身体能力があったからさ。ぶちのめすのが当然だと思ってたからさ。

ぼろつくそに言われたよ。「手を出さないとか馬鹿だろう」ってね。

そのあと気絶する前に、軽いボディブローを叩き込まれたけど、きつとその時にエボリューションエキスを入れられたんだろうね。

……気絶してすぐに、俺のようすを見て気になっていた義姉さんに助けられたみたいだよ。無有も流石にあの段階で大立ち回りをするつもりはなかったんだろうね。

で、無有のやばさを直感で感じ取った義姉さんが俺を連れて行ったん神の子を見張るものの施設に隠れてただけけど、これがよくなかった。

義姉さんはその時からいろいろと仕事してたから、無有が伊予の家庭教師だって知ら

なかった。顔を知らなかったんだ。

だから、姐さんは俺だけを連れていったん隠れた。伊予と五十鈴は後手に回った。

俺が目覚ました時には、伊予と五十鈴は無有と一緒に行方不明だ。たぶん、売られてたんだろうね。

その後、俺は二人のご両親に事情を説明して、殴り飛ばされたよ。

あ、俺が殴り飛ばされたことが不思議かい？ まあ、ここだけ聞くと俺が殴られるのはちよつと理不尽だよ。

ただ、これは俺の自業自得なんだ。アザゼル先生も姐さんも、さすがに何発かは黙つてみてたしね。それぐらいのことを俺はしたんだよ。

で、ここからが本番。俺が何で罪深いかの説明。

あ、その前に、伊予と五十鈴について説明するよ。

行仁ぎょうにん 伊予いよといよ 枢からくり 五十鈴いすず。2人とも俺の幼馴染だつてのは、説明したね。

なんだかんだで、俺たち結構バラバラなタイプだったんだ。

俺はまあ、さつきも言った通り中二病もどき。かつこつけることが第一で、お調子者だつたりしたね。

伊予は大和撫子つて形容してもいい優等生。結構おとなしい子だった。

五十鈴は俺たちをまとめるお姉さんつて感じだったね。高校になったときにはさつ

さといろいろデビューしたらしくて、色事の経験もあるって言ってたよ。

で、俺は伊予のことが好きだった。

そのころの俺は、さつきも言った通りかっこつけるのが大事だった。墮天使の血を引いて神の祝福まで持っているもの。ラノベの主人公になりそうな特徴持ってたからね。だからまあ、ちよつとこう思ったことがあるんだよ。

……好きな子に告白して結ばれるとき、童貞丸出しの恥かしいことはしたくない。で、俺は経験豊富な五十鈴に相談した。

童貞らしく一瞬で果てるとかいやだから、慣れさせてくれって。

……思えば、五十鈴は俺のこと好きだったのは当たり前だよ。

どさくさに紛れてキスの練習とか言い出したからね。……伊予に取っておきたいって断ってたけど。

で、そんなことが続いていた時、五十鈴がある映像を持ってきた。

……無有と伊予が交わっているところだよ。

本当なら、この時点で誰かに相談するべきだったんだ。姐さんも先生もこういうことをする時点で無有がろくでなしの可能性に気づくだらうし、伊予の両親だって動く。

ただ、俺はその時動揺して、そこ迄頭が回らなかつた。

そして、その時五十鈴はこういったんだ。

「影雄さんとは話を通ってるんだけど、井草、伊予で童貞捨ててみない？」ってさ。

……あとはまあ、言わなくても分かるだろうけど、一応言うよ。

俺はそれに衝動的に乗った。で、情けないことに伊予は俺だと知らずに「ものたりない」とか言ったりするわけでき、いろいろとシヨックだったわけだよ。

それでつい俺は自分がそう言うことしてるってばらして、そっからが最悪。

もちろん伊予はパニック起こすわけだけど、そのあと俺が呆然としてると、無有が俺に見せつけるように伊予と交わるわけだよ。

で、調教されてる伊予はそっちに夢中になって、俺はカツとなって帰ろうとしたけど、五十鈴は其のまま。

……俺が馬鹿なことしてる間に、伊予も五十鈴もあいつの虜。そしてその時点で気づいて相談するべきだったのに、俺は数日引きこもって、報告を受けて無有に詰め寄って……さつき言った通りってわけさ。

そこまで言うてから、井草はできる限り苦笑で納めるように努力した。

同情を引くような態度はしない。そんな資格は、井草・ダウンフォールには存在しない。

……嫌われるだろうとは思っている。そうでなければおかしいだろう。

目の前にいるのは女性だ。リムは二十歳だが、ニングは幼い外見だし、2人とも合法口りなどということはないだろう。おそらくとニングは年相応だ。

だから、生理的に受け入れられないだろう。

それでいい。それだけのことをした自覚はある。

ただ、それでもつらいと思ってしまう。

「聞いてくれてありがとう。罵らずに最後まで言わせてくれて助かったよ。気が楽になったし、俺がクソ野郎だってことも自覚しなおせた」

やはりだめだ。

井草は、きつと一生自分が許せない。

それを再認識して、井草は其のまま歩き去ろうとし――

「……大変だったのですね」

その言葉と共に抱き寄せられ、井草は動きを止めた。

ニングは、井草を後ろから抱きしめてくれていた。

そして、リムも慈愛に満ちた笑みを浮かべながら、背伸びをして井草の頭をなでてく

れる。

「ま、いろいろありやがるとは思ってやしたが、まさかリアルでNTR漫画みたいなことになっちまつてるたあさすがに想定外でやした」

リムがそう軽い口調で言うと、しかし額に青筋を浮かべる。

「なんつーか、その無有つてやつや天罰が下るべきつすな、いや、主はもう亡くなられてるんで無理つちやあむりなんですが」

その言葉に、井草は何かが耐えきれなくなる。

「……嫌わないのかい？」

「まあ、普通は嫌悪したりしちまうんでしょうがね？」

そうポリポリと頬を書きながら、リムは井草に視線を合わせる。

そして、そつと頬を撫でた。

「心から罪を悔やんでやがるのなら、許してやるのが聖職者つてもんでさあ」

その言葉は、まっすぐに井草の胸に届いた。

「そうなのです。ずつと罪の意識を宿してきた井草さんは、悪い人ではないのです」

そして、ニングは優しく井草を抱きしめながら、そんな言葉をかけてくれる。

「井草さんは罪を悔いているのですよ。そして、同じような人を生み出さないように赤龍帝を導いたのです。立派に罪を償っているのです」

その言葉に、井草は首を横に振る。

「それは当たり前だよ。あの気のいい子たちを、俺みたいな屑にするわけにはいかないじゃないか」

「それは違うのです」

ニングは、井草の言葉を否定する。

井草からすれば、その行為は当たり前のことだった。

自分がかつてした失態と似たようなことをしようとしている者がいる。彼らはすでに大学生相当の年齢で引かれていた自分にも忌憚なく話しかけてくれていた。

それがいきなりエロビデオの贈呈だったときは面食らったが、変わった子たちだが悪い子ではないと思っただのだ。

だから、彼らが道を踏み外すことを阻止しなかった。

それを、ニングは当然のことではないと言い切る。

「どん底に落ちている人は、周りを気にする余裕はないのです。本当の屑は、人が道を踏み外すのを嘲笑うものなのです」

そういうながら、ニングは井草を暖かく抱きしめる。

「井草さんは、すごい優しい人なのです。理由はどうあれ、井草さんは褒められることをしているのです」

だから、ニングは井草に優しくする。

誰かのために心から行動できるものは、賞賛されてしかるべきだ。

かつて罪を犯していたとしても、それを心から悔いる者には慈悲が与えられるべきなのだ。

彼女たちは、井草のことをよく知らない。

彼女たちは、本来なら敵対する関係だった者たちだ。

そんな彼女たちが、井草の罪を知ってもなお、井草に優しくしてくれる。

それは、井草にまっすぐに染み渡った。

「……ある、のかな」

だから、井草は最後に聞く。

「優しくされる権利が、幸せになる権利が、俺に、あるのかな？」

「ありますぜ、井草」

「あるのです、井草さん」

その言葉に、井草は心から救われそうになって――

「なんだ、この霧は!？」

その言葉に、三人は飛び跳ねるように駆け出した。

11話

パーティー会場に駆け付けた井草たちの目の前に、霧が見える。

その霧を、井草は二回見ていた。

一度目は、三大勢力が図らずも共闘することになった、レイナーレとの戦いするとき。

二度目はつい先日。駒王会談における禍の団の強襲の時。

そして、その二度ともエボリューションエクスがかかわっている状況だ。

考えるまでもない、二度あることが三度あったただけだ。

「……無有!!」

誰もが注目するほどの大声で、井草は叫ぶ。

そして、其の声に返答はあつた。

「ナイアルって呼んでくれや。そっちが本名でな」

そして霧から姿を現すは、無有影雄……否、ナイアル。

そして、彼に引きつけられるように、2人の姿が出る。

一人は軽装の鎧に身を包んだ、長髪の悪魔。

一人は、制服の上に中国の伝統衣装を重ね着した、槍を持つ高校生ほどの少年。

「久しいな、裏切り者の悪魔たちよ。真なる魔王の末裔が凱旋しに来たぞ」

「やあやあ。こういうのは趣味じゃないんだけど、ちよつと様子見をしに来たよ」

憎々し気に声を出す悪魔と、軽々しく声をはなつ少年。

しかし、その場にいる古参の悪魔たちは一様に色めき立った。

「あの方は、シャルバ・ベルゼブブ様か！」

「あの槍は、トゥルー・ロングスの聖槍だ!!」

旧魔王の正当たる末裔の一人、シャルバ・ベルゼブブ。

神滅具の一つにして最強、黄昏の聖槍。

魔王の末裔と最強の神殺し。その二つが霧とともに現れ、一同が色めき立つ。

そして、その後ろから新たなる人影が現れる。

軍服を身にまとい、挑発を三つ編みにした背の低い眼鏡をかけた女性。

彼女たちは一様に色めき立つ悪魔たちを見て満足げにうなづくと、一列に並んだ。

「真なる魔王の一派の長、シャルバ・ベルゼブブだ。改めて覚えるがいい」

「禍カオス・ブリゲイトの団、英雄派。リーダーの曹操だ」

「私はムートロン先遣艦隊の指揮官、ホテップだ。以後よろしく頼むよ」

その言葉に、全員の緊張感がさらに高まる。

旧魔王派閥にムートロンは、駒王会談でテロを起こしたことで有名である。英雄派も、禍の団の派閥の中では有力だ。

すなわち、禍の団の中でも発言力が高い三派閥。その長が三人そろって現れたのだ。衛兵たちが貴族をかばい、いつでも仕掛けられるように態勢を整える。

それを手で制しながら、ホテップとなのつた女性が声を放った。

「まあ待て。我々は降伏勧告をしに来たただけだ。ここで争うつもりはかけらもない」

その言葉に、誰も息をのむ。

言うに事欠いて降伏勧告。テロリストが何を言うのか。

怒りを通り越して呆れの感情すら見せ、誰も絶句する。

しかし、そこに声をはなつものがいた。

「……一応、最後まで話を聞こうか」

「ですね。情報も聞き出したいですし」

このパーティーに参加していたサーゼクスとミカエルが、一步前に入る。

その瞬間、シャルバの顔に殺意が浮かび上がる。

「忌々しいルシファアの名を僭称する偽りの魔王が。ちょうどいい、ここで滅ぼして――」

そのまま魔力を垂れ流すシャルバだが、そこに差し出される光が割って入る。

それをはなつのは曹操が持つ槍。聖槍ロンギヌスだ。

そして、同時に稲光がホテツプから放たれる。

「落ち着きなよ。ここはホテツプの顔を立てようじゃないか」

「その通りだ。話が終わるまで何もしないことを条件に連れてきたのを忘れるな」

二人掛かりで止められて、シャルバはとりあえず魔力を押さえる。

だが、その表情は不満一色だ。すぐにでもサーゼクスたちに襲い掛かりたいのが明白だった。

隙あらば、2人を無視して仕掛けかねない。

「チッ！ 此処は貴様の顔を立ててやろう」

傲慢以外の何物でもないシャルバの言葉に、ホテツプはため息をつきながらもサーゼクスとミカエルに向き直る。

「まあ、降伏勧告の理由は簡単だ。……我々ムートロンの本隊が到着した場合、こちらの勝算は九割九分だ。部の悪い戦争をするのは政治家として悪手だろう？ こちらとしても、戦争をせずに事態を解決できるならそれに越したことはない」

九割九分。ほぼ十割。

そのあきれ果てるほどに高い勝率を告げられ、貴族たちに怒りの表情が浮かんだのは当然だろう。

サーゼクスが手で制さなければ、誰かが速攻で攻撃を叩き込んでいたはずだ。

「……理由を聞こう」

「いいだろう」

サーゼクスに促され、ホテップは悠然と告げる。

「わかっていると思うが、ムートロンの名はムー大陸にあやかったものだ。我々は、数千年以上前に神々に迫害され、外宇宙へと逃れた古代文明人の末裔である」

その言葉に、サーゼクスもミカエルも動じない。

それはつまり、うすうす想定していたということだ。

「まあ、ナイフアーザーの発言が正しければその可能性は十分思い当れますね」

「できれば驚愕してもらいたかったのだがね。ナイフアーザーはやはり叱責するべきか」

ミカエルの言葉にため息をつきながら、ホテップは告げる。

「単刀直入に言おう。そのナイフアーザーと同格、E Eレベル6，5以上のものは我々ムートロンの軍事部隊総力において、四桁存在している」

その言葉に、全員が絶句する。

ナイフアーザーは、魔王サーゼクス・ルシファーと互角に渡り合った存在だ。

それをすなわち、ナイフアーザーは魔王クラスの戦闘能力を発揮するということ。

その時点で、ナイフアーザーはムートロンの中でも最高レベルの使い手だと判断して

いた。

だが、ホテツプははつきりと断言した。

ナイフアーザーと同格以上の使い手は、少なくとも千人以上存在している。

想定している人数と比べて、桁が違いすぎる。

魔王クラス以上が千人以上。それだけの戦力が全力を出せば、三大勢力は愚かあらゆる神話体系を叩き潰すことも不可能ではない。勝率九割九分も妄言ではない。

ある意味でオーフィスを超えるといっても過言ではない戦力。その圧倒的な脅威に、誰もが息を止める。

その光景を見てから、ホテツプはさらに告げた。

「といっても誰も信じないだろう。ゆえに、我々が審議期間を設けさせてもらう」

そして、ホテツプは続ける。

「我々はほかの神話勢力に攻撃を続けながら、本艦隊が到着する来年3月末から4月初めまで降伏を受け入れるチャンネルを設ける。それまでに降伏するというのなら――」

「待つてもらおう」

ホテツプをさええぎり、サーゼクスは声を投げかける。

それにいぶかしげな表情を向けるホテツプを見据え、ミカエルがその言葉の続きをはなつ。

「その前に聞きましよう。旧魔王派と英雄派はともかくとして、貴方方ムートロンの目的は何なのですか？」

「なるほど、これは失念していた」

その言葉に、ホテップは得心したかのようにうなづく。

ちなみに後ろでは「旧魔王」の文字にシャルバが切れかけているのを、曹操が押しとどめるといふ漫才が発生していたがそれは置いておく。

確かに、降伏するにしてもそれ相応の条件というものがある。

そもそもムートロンの目的は判明していないのだ。降伏すればその目的に程度はともかく協力することになるのだろう。知らないでは済まされない。

サーゼクスとミカエルの懸念は、きわめて当然のものだった。

ゆえに、ホテップは当然の権利として告げる。

「大きく分けて二つ。我々を迫害した神々を蹂躪し、奴隷として使役すること。そしてもう一つ」

すでにその時点でサーゼクスたちの答えは決まりきっているようなものだった。

だが、その跡が更に問題だった。

「この地球の人類を労働力として運用し、我らムートロンによる宇宙開拓を行うことだ。いわば、大航海時代を宇宙規模で実行するものと思っただければいい」

大航海時代。

帆船の技術が発達し、人々が広い範囲を移動した時代といえる。

新大陸の発見などで人々が活気づいた時代といえる。

だが、その実態は血なまぐさい。

新大陸にいた者たちを奴隷として扱い、植民地の人々を火球として見下し、酷使する。そんな血塗られた時代。それを、目の前の女は行おうと告げた。

「いいことだろう？」 知的生命体とは虐げることができる弱者を求めるものだ。我々は我々に従うものをエポリューションエキスにより強者にし、従わぬものが蔑まれる世界を作る。不死の神は非常に都合がいい存在だ。一石二鳥とはこのことだよ」

ホテツプはそう告げ、そして右手をサーゼクスとミカエルに伸ばす。

「さて、一応聞いておこう。現段階での返答は？」

「論外だ。論じるに値しない」

「同感です。それは否定させてもらいます」

即答だった。

それに、ホテツプはわずかに目を丸くする。

どうやら、多少なりとも本気で驚いているらしい。

確かに、圧倒的戦力差があるこの状況下で、損な発言が出てくることは想定しづらい

だろう。

だがしかし、サーゼクスもミカエルも、迷いなく断言した。

「悪魔も天使も墮天使も、そしてもちろん人間も。この世に滅びていい種族などなければ、理不尽に虐げられていい人々などいない。甘いことを言っている自覚はあるが、私は冥界を変えたいのだ。悪化させる君の提案を飲むことは、私の目が赤いうちはさせる気はない」

「同感です。かつて犯した過ちを繰り返すなど、それこそ主に対して申し訳が立たないという者。一応審議はしますが、セラフは全員が徹底抗戦を主張するでしょう」

その全否定の言葉に、ホテツプはため息をついた。

「全滅戦争を避けるために和平ができる頭脳があるのなら、飲んでくれるとも思っただが。……まあいいか」

失望を見せながらも興味を明らかに薄くして告げ、ホテツプはシャルバに視線を向ける

「よかったな。これでお前の望み通りだ」

「ふん。偉大なる悪魔を汚す偽りの魔王共が、飲むわけなどないだろうとは思っていた
せい」

その言葉と共に、霧から新たな影が現れる。

四肢を持ちながらも、人間とは似ても似つかぬ姿をした、人型の異形。

そう、それは、数百体のイーツだった。

「特別に調整した使い捨てのイーツだ。疑似的にEレベルを3，0まで引き上げさせてもらったよ」

その言葉と共に、大量のイーツたちが攻撃を開始する。

「さて、それでは彼等との戦いで自分たちがどれほど無謀なことをしているか、痛感してくれたまえ」

その言葉と共に、ホテップはシャルバと曹操を連れ、霧の中へと戻っていく。

それと入れ替わるように、更に数百体のイーツが現れ、そしてパーティ会場で暴れ始める。

衛兵たちの多くがイーツに弾き飛ばされる中、貴族たちも戦闘を開始する。

そして、パーティ会場は阿鼻叫喚の戦場へと早変わりした。

その光景を見て、井草は即座にイーツへと変身しようとした。

まだ無有は残っている。あの男をここでどうにかすることができれば、何かが変わるかもしれない。

今度こそ。たとえ命に代えても、無有を倒す。そして罪を償わせる。

その衝動のままに井草はエポリユーションエキスを活性化させようとして――

「ダメなのです!」

その瞬間、ニングに止められてつんのめった。

「……ニング! あそこには、無有が!!」

「落ち着くのです!! ここです! イーツになったら、ほとんどの悪魔たちが敵と誤認するのです!!」

ニングの懸念は当然だ。

イーツは形状からして多種多様だ。とりあえず、着ぐるみやボディスーツを着た人のような外見をしているが、だからこそ紛らわしい。

井草の変身するレセプターイーツの姿こそない。だが、そんなことは何の慰めにもならないだろう。

とりあえずイーツは全て敵。そういう思考になる可能性が非常に大きかった。

となれば、井草がイーツになればその時点で井草も攻撃の的になりかねない。

「それでも――」

それでもいい。今までの井草ならそう答えていただろう。

だが、井草はなぜかその発言を一瞬躊躇してしまふ。

……それほどまでに、ニングとリムのあの言葉は救いだった。

井草はわずかながらにも自分を赦せた。ほとんど自分のことをよく知らない相手だからこそ、井草の心にその許しの言葉は届いた。身内出ないからこそできることだった。

その事実には井草が正負双方の面で衝撃を受けた、その時だった。

「お、いたいた」

あろうことか、無有自身が井草を見つけて近寄ってきた。

まるで久々に会ったかつての同級生に対する態度で、軽く片手を上げながら、親し気に声をかけてくる。

井草は一瞬で沸点に到達しかけるが、それより先にニングとリムが動いた。

得物を引き抜きながら、2人は井草をかばうように前に出る。そして無有をにらみつける。

「無有影雄なのですね」

「ちよ〜つち馴れ馴れしすぎやしやせんかねえ?」

静かな怒りを見せる二人を見て、無有は少しだけきよとんとする。

そしてその瞬間、獣人の転生悪魔が後ろから爪を構えて無有に迫った。

堂々と真つ先に霧から出てきたことから、人間の姿のままであつても禍の団の一員だと認識されたらしい。事実そうなので問題ない。

だが、その行動は無謀だった。

「……あ、オタクら知ってる類か」

そうぽんと手を打ちながら、無有は相手を見もせずに適当に足を動かして蹴りを叩き込む。

その動きは一流の武芸者のごとき完成度で、美しさすらあつた。何事も追及すれば一種の芸術になるとでも言わんばかりの自然な動きだった。

そして、その蹴りは蹴りでその転生悪魔の腕を文字通り粉碎する。

「ぎゃあああああああ!!」 お、おれの腕がああああ!!」

「意外だなあ。そりゃ俺が一番悪いけどよ? そいつも結構やらかしてる側だと思っただけどなー、マジで」

悲鳴を上げる転生悪魔を意にも介さず、無有は二人にそう尋ねる。

一言で言おう、無有の戦闘能力は規格外というほかない。

一見して普通の生身の姿であるにもかかわらず、最上級悪魔でもできないような芸当を平然として見せた。

断言してもいい。この状態ですら、無有はナイフアーザーの足を引つ張らない程度の戦闘を行うことができるレベルに到達している。

間違いなくリムもニングも勝てない。井草が参戦しても勝ち目はないだろう。それほどまでの絶望的な戦力差が目の前に立ちふさがっている。

それでも、2人は気丈にも鋭い視線を無有に向けていた。

「反省も後悔も更生もしてるやつを、ねちねちといじめるつもりはねーんですよ」
「当事者ならともかく、第三者として一線は引くのです」

その言葉に、無有はふむふむと頷いて納得の様子を見せる。

其の間にも衛兵や眷属悪魔が無有に襲い掛かるが、しかし無有はそれを見ずに迎撃して返り討ちにする。

そして、はたと気づくと指を立てながらにやりと笑う。

「後ナイアルって呼んでくれや。そっちが本名でな」

「辞世の句はそれでいいのかな？」

井草は光力を剣にしながら、歯を食いしばって無有を、否、ナイアルをにらむ。

それを面白そうに眺めながら、ナイアルはしかし首を振った。

「いやいや。俺も一応、ムートロン先遣艦隊のエースの看板背負ってんでな？ 流石に初期段階で討ち死にするわけにやあいかねえな」

上級悪魔クラスの魔力砲撃を裏拳で相殺しながら、ナイアルはそういう。そして、その視線が井草の右側にむけられる。

「ツーわけで、そいつは任せませ、五十鈴に伊予？」

―その言葉に、井草は頭の中が一瞬まっさらになった。生きている可能性はゼロではなかった。

イーツの実験体にされている可能性も、考慮はした。

だが、この展開はあんまりだろう。

隣に視線を向け、その姿を認め、そして手に持つているエボリユーシヨンエキスまで認識して、井草は渾身の憎悪を込めてナイアルに叫ぶ。

「ナイアルうあああああああああああつっ!!!」

「ま、そういうわけで悪いけど、悪党させてもらおうね、井草」

『ハストウール』

「ごめんね、井草君。ナイアルさんに褒められたいから」

『クトウグア』

その瞬間、とつさにレセプターイーツになった井草は、暴風と灼熱に飲み込まれて弾き飛ばされた。

12話

一方そのころ、兵藤一誠は覚醒を遂げていた。

塔城小猫こと、白音を強引に自分のもとへと連れ去らんとする、SSランクはぐれ悪魔、黒歌。

禍の団の、それもよりにもよってヴァーリチームの一員となった黒歌。美候と共に暇つぶし目的でこのパーティをのぞき見してきた黒歌は、たまたま小猫と出会ったことをいいことに、連れ去ろうとする。

リアスと共にこの窮地に追い込まれたイツセーは、本当に苦境に追い込まれていたと知っている。

タンニーンがたまたまこちらを気にして参戦してくれたおかげで美候を抑え込んでくれている者の、しかし黒歌は単独でも脅威だった。

空間を遮断して逃亡も増援も防いだうえに、毒霧をもつてしてこちらを封殺にかか

る。
イツセーこそなぜかよくわからないが無事だったが、リアスと小猫はそれで封殺。し

かもよりによって、赤龍帝の籠手が、禁手になりかけたことでバグを起し、まともに運用ができなくなっていた。

いかに地獄の特訓を乗り越えて強くなったイツセーといえど、あいては最上級悪魔クラスの実力者。神器が根幹であるイツセーでは、新規が使いぬ現状で太刀打ちできないものではない。

だが、イツセーは禁手へといたった。

……主であるリアス・グレモリーの乳首をつつくことによつて!!

……井草が童貞を卒業させることによる覚醒を画策したことはあつたが、その井草も絶句するだろうことは想像に難しくない。

ちなみに、ドライブは天龍の誇りを投げ捨てる勢いで「しまいにや泣く」とまで言った。心労がたまっているようである。

とはいえ、神すら滅ぼす神滅具の禁手は伊達ではない。

なんとなくドライブに言われて放った一撃で、空間遮断結界は愚か、その先にあつた山が吹き飛ぶほどの大火力を発揮。その上、黒歌の術式攻撃が直撃しても、傷一つないという頑健さまで見せつけた。

もとより、黒歌の本領ともいえる戦術は直接破壊力に劣るのが難点。本質的に相手の攪乱や状態異常などを中心とする黒歌は、攻撃力で言えば最上級悪魔でも低い部類だったのだろう。レーティングゲームのタイプで言うのなら、サポートタイプよりのウィザードタイプといったところか。

シンプルに強い赤龍帝の鎧との相性は最悪だった。黒歌が直接戦闘でイツセーを打倒する可能性は、極めて低い。

「この……クソガキ……っ」

手も足も出ない状況下に追いやられたと察し、黒歌は歯ぎしりをしながらもいったん飛び退る。

とはいえ、黒歌に勝ちの目がないわけではない。

幻術を主体にして時間稼ぎに徹し、禁手の発動限界まで持ちこたえれば、状況は再び

有利になる。もとよりなり立てかつ素質の低いイツセーの禁手では、長時間の戦闘は不可能だろう。

とはいえ、普通にいけば増援が来る可能性は絶大だ。イツセーとしてもこの状況は有利だと思つてはいるが――

「こりや面白いことになつてきたぜい！ 龍王と天龍が相手つてのは、マジで楽しめる展開じゃねえかい!!」

テンションを上げる美候に、イツセーはうんざりする。

犯罪行為をして迄求める者はイツセーにもある。だが、女体と戦闘ではポイントがズレすぎていて、どうも共感がわかないのが実情だ。

それに、毒霧も吹き飛んだのでリアスと小猫も回復していつている。この調子なら戦闘はどんどんこちら側が有利になるはずだ。

『まったく、悪ガキというのはしつげが肝心だとはよく言ったものだ。テロリストにまで落ちぶれて、ただで帰れると思わんことだな』

タンニーンもあきれながら、しかし戦意は決して消えない。

もとより、この場で最も最強なのは間違いないタンニーンだ。その点でも、イツセー達に有利なところは数多い。

そして、激突がなされようとした、その時だ。

「……まったく。いったい何をしているのですか、黒歌も美候も」

そんな呆れ声と共に、黒歌と美候の後ろの空間が、切り裂かれた。

そこから現れるは、まるで英国貴族を持ってきたかのような青年男性。

しかし、その腰に挿している二振りの剣からは、悪魔が本能的に拒絶をしてしまいたくなるオーラがあふれている。

『三人とも下がれ！ そいつの持つている剣は厄介だ!!』

タンニーンすら警戒する、その剣。

その名は――

『最強の聖剣、聖王剣コールブランド。……もう片方も聖剣か!』

其の声に、聖剣を担った青年は静香に頷く。

「はい。かつて教会より紛失した、最後にして最強のエクスカリバー。支配の聖剣です」

最強のエクスカリバーに、さらにその上を行く最強の聖剣。

単刀直入に言うべきか。質が悪すぎる。

その事実^ににおおされるイツセー達をみて、その青年はふと何かに気づいたのか、眼鏡を直す。

「自己紹介が遅れました。私はヴァーリチームのメンバーの一人、アーサー・ペンドラゴ

ンと申します」

そう告げると、アーサーは黒歌と美候に半目を向ける。

「まったく。突然我々小規模組織に緊急通達が来た時は、貴方を急いで連れ戻さねばと多少焦りましたよ」

「なんだよお。シャルバのやつが何か言ってきたのか?」

美候が怪訝な表情を浮かべるが、アーサーは軽くため息をつく。

そして、ホテルの方に視線を向けて、複雑そうな表情を浮かべた。

「なんでも、ムートロン首魁のホテツプが三大勢力に降伏勧告を行うとか。場合によっては使い捨てのイーツをまき散らして示威活動をするそうですよ?」

その言葉は、イツセー達に戦慄を走らせるのに十分だった。

このタイミングで堂々と降伏勧告。それほどまでにムートロンは勝てると踏んで禍の団に参加しているということなのか。

反面、アーサー達は誰もが詰まらなそうな顔をしていた。

「まったく。あいつら正直面倒だぜい。俺らにもエボリユーションエキスを使え使えうるせえしよお」

「ホントにねえ」

「正直、英雄派の方が個人的にはまだましですね」

其の三人の態度に、イツセーは首をかしげたくなる。

大きな組織が派閥争いだがみ合うというのはよくある話だが、それにしてもここま
で嫌われているとは思わなかった。

もしかしたら、コレ質問したら答えてくれるかもしれない。

「なあ、そもそもムートロンって何なんだよ?」

ダメもとで、聞いてみた。

「ん? ああ、なんでも数千年前に神々に喧嘩売ってボコられて地球から逃げ出した連
中の末裔だってよ」

美候があつさりと答えてくれた。

まさか本当に答えてくれるとは思わず、イツセーは愚かタンニンやリアス迄唾然と
する。

「その後、数千年かけてエボリューションエキスを含めた技術を開発して、再び神々を倒
してから本格的な宇宙開拓活動を行うために派遣された先遣艦隊。それが、禍の団に所
属しているムートロンです」

「後方支援員とか食糧生産をしてる連中も含めた本艦隊の総人口は二億人強で、27艦
隊のうち、一個艦隊を先遣隊として派遣したらしいわね」

アーサーと黒歌もぺらぺらとしやべる。

ナイフアーザーもぺらぺらと重要な情報をしゃべっていたとは言うが、これまたぺらぺらとしゃべってくれていた。

しかし、ナイフアーザーはあくまでついしやべっていただけだ。感情に任せてどんどんしやべっていたが、意図的にばらすつもりはなかったと思われている。

だが美候たちは隠すつもりがない。むしろ教えてやろうといわんばかりだ。

「因みに例のEEレベルっての？ 地球人の平均は1, 0で、ムートロンの連中は3, 0だつてよ」

「改造手術とかでもレベルは一つか二つ挙げられるらしいわね。ま、適性検査で引つかると絶対受けさせてくれないそうだけど」

「大半の派閥はムートロンの傘下に近いですね。ムートロンによる地球制圧の後に、ムートロンの一般市民より上の待遇で地球人の監督官をする契約を禍の団とかかわしているとか」

これまた三人そろっていろいろとしやべってくれていた。

隠す気がないというか、教えてくれた分だけ話してくれる勢いだ。

『正気かお前ら？ 一応同じ勢力だろうに』

タンニーンがあきれるのも当然だろう。組織人としてあまりに致命的だ。

だが、三人そろってどこ吹く風だった。

「いえいえ。我々はどうもムートロンとはそりが合わないのですよ」
そうアースーが言うのと、隣の2人の当然といわんばかりに頷いた。

「まったくください。自由気ままにいききたいから禍の団に参加したつてのに、下働きなんて御免下さい」

「同感。ま、ヴァーリはオーフィスと仲いいからある程度自由にさせてもらってるんだにゃん」

……その光景を見て、イツセーはなんとなく思った。

あ、こいつら自由人の群れだ。ヴァーリもそんな感じだった。

「……組織人失格です、姉様方」

毒から回復し始めている、小猫の辛辣なツツコミが黒歌たちにとんだ。

「やーん。妹から冷たい視線向けられちゃったにゃん。誰か慰めてほしいにゃ」

どこ吹く風である。

「まあ、そういうわけですので我々はそろそろお暇させてもらいます。事実上勝手に作戦に介入したようなものなので、すぐにでも戻らないと他の派閥に何を言われるかわかった者じゃありません」

「うっへえ。シャルバとかねちねち小言を言っつきそう下さい」

「仕方ないわね。じゃ、帰りましょうか」

そんなのんきなことを言いながら、三人がアーサーの切り裂いた空間に歩き出す。追いかけたいのはやまやまだが、そんな事態でもなさそうだ。

状況的に余裕もないし、見逃すほかないと判断するしかなかった。

そして三人の入った空間が閉じるその時、アーサーがふとこちらに振り返る。

「そうそう。ヴァーリがあなたと戦いたがっているように、私は聖魔剣の使い手やデュランダルの担い手と戦いたい。黒歌はそちらの妹君が相手になるでしょうし、できればお伝えいただきたいですね」

「え、あ、はい」

なんとなく返答してしまった。

そして、切れた空間が閉じたその時――

『三人とも、俺の陰に隠れろ!!』

其の声と共に、タンニーンがその巨体でイツセーたちを包み込む。

阻止てのその瞬間、莫大な熱が辺り一面を包み込む。

イツセーたちが驚くよりも早く、タンニーンは魔力をもってして結界を張る。

そして結界の外側では、森の木々が一斉に燃え上がった。

「なんて熱量!! この出力、最上級悪魔クラスでもそう簡単には――」

『気を付けろリアス嬢! どうやらムートロンの連中のようにぞ!!』

リアスとタンニーンが警戒する中、さらに新たな参入者が現れる。

真上から、何かが地面に激突してクレーターを作る。

そして、その姿はイツセーたちもよく知っているものだった。

「井草さん!？」

「イツセー先輩、上から来ます!」

慌てて駆け寄ろうとするイツセーを押しとどめながら、小猫が声を上げる。

そして、2人のイツツが姿を現す。

一人は毛皮の代わりに灼熱を纏ったかのような獣人のようなイツツ。

一人は、黄色の外套を身にまとった、緑色の体をしたイツツ。

その二人のイツツに見下ろされた、井草が変身したレセプターイツツが、身じろぎする。

立ち上がりたが、すぐには立ち上がれないといったところだろう。それほどまでにダメージを受けているのは明白だった。

「なんで……、なんで……だ……」

それでも、井草は強引に立ち上がり、2人のイツツを見上げる。

其の声は、丸で泣き出しそうで、聞くだけで辛くなる。

そして、井草は近くににいるイツセーたちに気づくことなく、2人のイツツに向かって、

あらんかぎりに叫んだ。

「なんでこんなことをしてるんだ、伊予、五十鈴!!」

13話

その言葉に、真つ先に外套のイーツが返す。

「いや、私達はナイアルの女だもの、井草」

そして、獣人のイーツも続けて答える。

「ナイアルさんの頼みだからだよ、井草君」

その二人の返答に、井草は拳を握り締めて、ブルブルと震えだす。

それは怒りか。其れとも悲しみか。

だが少なくとも、井草はその事実を認めたくないのだけはよくわかった。

「俺の、俺のせいなのか？　俺が、あんなことをしたからなのか!？」

その、死刑の判決を受けた罪人のようなつらそうな声に、獣人のイーツは何処かすまなそうな態度を見せた。

「ううん。あれは、私が悪かったと思ってるの」

「………は？」

信じられない。そんな感情を全力で出す井草に、獣人のイーツは続ける。

「本当にごめんね？ 井草君、初めてだったんだからもっと感じた声を上げればよかったよね？」

その言葉に、井草は崩れ落ちた。

だが、獣人のイーツはその反応が意外だったらしい。

小首をかしげ、なんでそんな反応なのかわからないと体全体で示している。

それを寂しげに見つめた外套のイーツは、しかし肩をすくめると嘲笑うように声を上げる。

「アツハハ！ 驚いたでしょ、あれからいろいろ経験したから、伊予にあんな程度でシヨックを受ける感性はもうないわよ」

そして、嘲笑を態度で示しながら、外套のイーツは

井草を見下ろす。

「私も悪党が染みついちゃったわ。ええ、今からあなたを痛めつけるぐらいには、悪党をするって決めてるの……よ!!」

そして、即座に井草に接近すると、その拳を井草に向けて振り抜き――

『少しその口を閉じろ、外道』

振るわれたタンニーンの拳を回避するため、即座に飛び退った。

そして宙に舞い上がりながら、外套のイーツは肩をすくめる。

「危なかったわ。さすがに、準魔王クラスの最上級悪魔相手だと油断できないのよ、E E レベル6，0の私や伊予は」

「大丈夫、五十鈴ちゃん？」

五十鈴と呼ばれた外套のイーツは、伊予と呼ばれた獣人のイーツに氣遣われながら、しかし余裕の態度を見せる。

そして、嘲笑の感情を態度で示しながら、井草を見下ろした。

「無様ねえ、井草。悪党の私相手によくもまあ、そんな負け犬みたいな姿をさらせるようになったもんね」

そして、やれやれといわんばかりに首を振ると、鋭い視線を向けた。

「正義の三大勢力様なら、本気で仕掛けてきなさい。テロリスト風情に容赦するとか、あきれ果てて声も出ないわね」

そして、五十鈴は両手を広げながら殺意を込める。

「来なさい。是でも私は性能だけなら最上級悪魔クラス。……殺す気で来ないと死ぬわよ。」

その言葉と共に、五十鈴の両手の直線状で一对の竜巻が形成される。

それらは周囲の燃える森の影響を受け、炎を纏った灼熱の渦と化して井草たちに襲い掛かる。

だが、その攻撃は井草には届かない。

『させると思うか！』

「いい加減にしなさい!!」

大出力のタンニーンのブレスとリアスの魔力が、その攻撃を相殺する。

そして、即座にリアスは消滅の魔力を五十鈴たちに向けて放つ。

並の上級悪魔なら一撃で大ダメージを受けるだろう一撃。アザゼルの指導を受けたリアスは、既に現役の王^{キング}ですら、戦闘能力だけなら対抗できるレベルになっていた。

しかし、その魔力は五十鈴には届かない。

横合いから、伊予と呼ばれた獣人のイーツが灼熱の奔流をはなち、それを相殺する。

「ごめんね？　ちよつと直撃は五十鈴ちゃんが怪我しそうだから」

そう、なんてことの内容に伊予は言い放つ。

その様子からは一切の気負いを感じない。間違いなく上級悪魔でも上から数えた方が早いだろう攻撃を相殺したにもかかわらずだ。

相手はまだ本気を出していない。その事実にも、リアスは己の力不足を察して歯噛みする。

そしてそんなリアスの苦悩を意にも介さず、伊予は困った風に首を傾げる。

「あの、ナイアルさんに言われたのは、井草君を叩きのめすだけで殺せって言われてないの。だから、それだけしたら帰るからね？　お互いに死ぬかもしれないのは、避けたいでしょ？」

ようは、井草を痛めつけるだけ痛めつけたら帰るといつているのだろう。

そして、その邪魔をして殺し合いになるのはお互いのためにならないとも言っている。

挑発のつもりはなさそうだ。おそらく本心から言っているのだろう。邪気もなければ悪意も感じない、善意の言葉だ。

そう、彼女は善意で言っている。

それが、イツセーたちの神経を逆なでした。

「……ふっざけんな、この野郎!!」

イツセーは激昂すると、赤龍帝の鎧がまだ維持されているのをいいことに殴り掛かる。

その加速力はすでに並みの上級悪魔を一蹴するレベル。かつて神や魔王すら超える
と称された、赤龍帝の力の一部を見せつけていた。

まさか断るどころかいきなり攻撃するとは思わなかったのか、伊予は一瞬隙を見せる。

しかし、その攻撃は割って入った五十鈴によって止められた。

まるでエアバッグを殴りつけたかのように、拳を柔らかくとめられる。

そしてその手をつかんで動けないようにしながら、五十鈴はイツセーをにらみつけた。
た。

「悪いわね。伊予ってばタガが外れちゃってて、今のが侮辱に近いこともわかんないのよ」

「みたいだな、反吐が出るぜ……っ!」

奥歯をかみしめながら、イツセーは五十鈴と伊予をにらみつける。

女性に殺意を抱いたのは、レイナーレ以来だ。

それほどまでに、今の伊予の言葉がイツセー達の神経を土足で踏みにじった。

井草・ダウンフォールは、イツセーの恩人だ。

井草・ダウンフォールは、イツセー達の友達だ。

井草・ダウンフォールは、イツセー達オカルト研究部の仲間だ。

そんな井草を目の前で痛めつけられるのを邪魔するな？

あり得ないことだ。その時点で、目の前の伊予という獣人のイーツは、イツセーたちの敵以外の何物でもない。

その殺意のこもった眼に対して、二人の反応はそれぞれ異なる。

伊予は、首をかしげて疑問符を浮かべている。本当に、殺すわけじゃないのだからそこまで怒らなくてもいいではないかといわんばかりだ。

反対に、五十鈴はどこか満足げだった。まるで、そういわれることがうれしくてたまらないといわんばかりだ。

『……下がつてろ、兵藤一誠』

そして、タンニーンが怒気を溢れさせながら一歩前に出る。

そのオーラは絶大で、イツセーの目の前の2人より強大であることが見て取れる。

火力だけなら、魔王クラス。タンニーン自身が言っていたことが、何ら間違っていないことを皆が理解する。それほどまでの密度のオーラを、タンニーンは纏っていた。

そして、それを叩きつけられれば伊予も五十鈴も軽傷程度では済まないのも確実だ。

『貴様らが難敵で、そして遠慮をする必要がない相手であることも理解した。言っておくが、今見る限りではお前たちに情けを掛ける必要を感じないぞ?』

その言葉に、伊予も五十鈴も戦闘態勢を取り直すことで反応する。

「うーん。そんなに怒らなくてもいいのに……」

「そうでなくっちゃ。悪党に向ける態度はそうじゃないといけないのよ、ドラゴンさん?」

伊予は戸惑いながら。五十鈴は嬉しそうに。

お互いに態度は異なりながらも、しかし戦闘を取る意志だけは消さずに戦う準備をし

「いやいやあ。私達も怒らせてくださいませよ、ドラゴンの旦那」
「流石に、少し怒ってるのですよ」

二人のプルガトリオが、真後ろから二人のイーツに切りかかった。

14話

「つてさっきの、生きてたの!？」

驚きながら、五十鈴は切りかかるリムに対して回し蹴りで反撃を行う。

その攻撃は高速で渦巻く大気の奔流が纏わりついており、触れば一瞬で人間など削り取られるだろう。

しかし、その攻撃をリムは持っていた光の剣で受け止める。

そしてその攻撃を受け流しながら着地。そしてそれと同じタイミングで光の銃を放った。

その弾丸は回避行動をとった五十鈴の体をかすめ、僅かにだが裂傷を刻み込む。

その事実には、五十鈴は驚きの感情を浮かべた。

本来なら、悪魔祓いの装備ごときで上位イーツであるアウターイーツと化した五十鈴を傷つけるなど有り得ない事だ。

しよせん悪魔祓いの装備など、基本的にはよくて上級悪魔クラスとの戦闘を考慮した物。人間に当てたとしても、頭部を吹き飛ばすのが関の山だ。

光の剣にしてもそうだ。先ほどの五十鈴の蹴りは、間違いなく最上級悪魔クラスにす

ら通用するレベルの威力がある。

EEレベルの高さは、イーツの性能に匹敵する。高ければ高いほど強くなり、1上があれば格が一段階上昇すると言っても過言ではない。

6, 5のナイフアーザーが、最強の魔王であるサーゼクスに相性上有利とは言え互角に渡り合ったのだ。6, 0の五十鈴や伊予のイーツ時の戦闘能力も非常に高い。一対一でもカタログスペックに限定すれば、タンニーン相手に勝負になるだろう。

例えて言うのならば最上級悪魔の平均より上のレベル。それが、EEレベル6, 0。断じて悪魔祓いがかでできるようなレベルではない。どうかできるなら、悪魔と墮天使はとうの昔に滅びているはずだ。

だが、彼女の攻撃は確かに五十鈴に通用した。

そして、その理由も何とか理解できる。

「……何の神器？」

「ふっふーん。知りてえっすか？ 知りてえっすよね？」

めちやくちや得意げにしながら、リムは両手の武器を見せびらかすように掲げる。

よく見れば、その武器には光力とは別の意味でオーラのようなものが纏わり付いていた。

「これぞ神器、アイム・ザ・リッパ剣豪の腕！ 所有する武器の性能を大幅向上させる、素敵神器ちゃん

すぜ、旦那あ」

その言葉に、五十鈴はワザとらしい舌打ちを返す。

ただの悪魔祓いの装備を、最上級クラスにすら通用する兵器へと変える装備。

これは確かに強力だが、しかし喰らっても精々が軽傷だ。

之なら、十分勝算がある。

勝算はある……が。

「コイツを相手しながらタンニーンを相手するのは、流石に厄介ね」

嬉しそうに、五十鈴はそう表した。

一方、伊予と対峙したニングは、ニコニコと笑顔を浮かべていた。

そして、それを見た伊予は、寒気を感じていた。

理由は簡単だ。極めて分かり易く説明できる。

本心から激怒している者の笑顔は、恐怖を与えるモノである。

「あの、私は井草君を痛めつけたら帰るから、別に邪魔しなくていいんだよ？」

「その口を閉じるのです」

そう言い切ると、ニングは即座に魔剣を構える。

それに対して伊予は即座に対応した。

とりあえず空高くに舞い上がったのだ。

悪魔祓いは陸上戦闘しかできない。空の敵に対抗する事はできても、光の銃如きでは高速移動すれば当たらないし、当たってもかすり傷にすらなるか分からない程度だ。

だから、とりあえず安全を確保してからゆっくり説得しようとして試みて――

「……逃がすと思わないのです」

その時点で、目の前にニングの顔が映った。

あり得ない。既に自分は地上から五十メートルは離れている。

ジャンプで届くような距離だとは思えない。そして、魔法を使っている風にも思えない。

その疑問は、一瞬で解決した。

僅かに距離を取れた事で、視界が広がる。そしてニングの全身を見る事ができた。

……そこに、悪魔祓いにはあつてはならないものがあつた。

悪魔祓いとは、悪魔を殺す者である。

和平が結ばれてその役目は意味をなさないとはいえ、基本的に悪魔を殺す人間であ

る。それぐらいは伊予とて知っている。

ゆえに、あり得ない。

悪魔祓いであるニング・プルガトリオに、悪魔の翼が生えているなどありえないのだ。

「え？ あれ？ あなた、その恰好は悪魔祓い——」

「そうなのです」

戸惑う伊予に、ニングは即答する。

そして、ニングはその隙をついて大上段に魔剣を振りかぶる。

……伊予は知らぬ事だが、ニングはかつて、井草にこう言った事がある。

プルガトリオ機関には、悪魔も所属している。

プルガトリオ機関。それは、様々な理由で普通の強化印は置いておく事のできない者を集め、信仰の為に戦いに関わる事で居場所を作る暗部組織。

悪魔を癒すがゆえに信仰に悪影響を生む、聖母の微笑の持ち主であるアジア・アルジエントすら参加が許される暗部組織。

その底知れなさは、真正銘信仰さえ持てば悪魔すら迎え入れる。

その呆れ果てるほどにまで無節操な懐の深さに、伊予は負傷以上の衝撃を受けた。

そして、それだけで終わる事はない。

「隙あり！　くらえ必殺、洋服崩壊!!」
ドレスフレイク

イツセーが一瞬で五十鈴に触れ、煩惱だけで構成された必殺技を叩き込む。

「私達を忘れないで頂戴！」

意地とプライドで戦意を奮い立たせたりアスの消滅の魔力が、伊予をかすめる。

プルガトリオの2人に気を取られ、五十鈴も伊予も隙をさらしてしまった。

だが、隙をさらした事とそれが効果を発揮したのかという事は全く別の問題。

「イーツの私は服着てないのも当然だつての！」

五十鈴は意に介する事なく反撃の暴風でイツセーを弾き飛ばす。

「危ないなあ、もう」

伊予も灼熱を放って消滅の魔力を相殺する。

如何に今代の赤龍帝であろうと、如何に現ルシファアの妹であろうと、今の2人では

E E レベル6, 0には届かない。

だが、更に気を散らせる事には成功した。

『俺がいる事を忘れてもらっては困るな!!』

その一瞬のタイムラグで、タンニーンが最大出力のブレスを連発で放つ。

僅かな一瞬のスキを突かれ、伊予も五十鈴もその攻撃を回避する事はできなくなつた。

お互いに暴風と灼熱で防御を行うが、しかしそれも防ぎ切る事はできない。

EEレベル6、5のナイフアーマーで、魔王であるサーゼクスと互角の戦いが関の山だった。それはすなわち、0、5も違う伊予と五十鈴では魔王クラスの戦闘能力は発揮できないという事でもある。

そしてタンニーンは元龍王。其の戦闘能力は最上級悪魔でも最高峰。火力だけなら魔王クラスとも評される其の力に、嘘偽りは存在しない。

二人では、タンニーンの全力は防ぎきれない。

「……ハハッ！ これでもいいのよ、これで!!」

「あ、熱……熱い!」

圧倒的な火力。

その一撃に、五十鈴は笑い、伊予は戸惑い――

『この冥界で好き勝手出来ると思うなよ、外道!』

タンニーンの一撃は、2人を勢いよく弾き飛ばした。

15話

弾き飛ばされた二人のイーツが、地面にたたきつけられる。

その一撃は隕石の衝突を思わせ、数十メートルを超えるクレーターすら生み出した。普通なら、これで決着だと誰もが判断するだろう。少なくとも、人間世界で流通しているイーツならこれで終わる。

だが、誰もがこれで終わったなどとは思っていない。

EEレベル6，5のナイフアーマーは、小国を単独で滅ぼしかねない魔王であるサーゼクスと互角に渡り合った。そして、伊予と五十鈴は自己申告では0，5しか変わらない。タンニーンの攻撃にも、隙を見せなければ対応してのけたのだ。

魔王クラスの攻撃を一発もらった程度で終わるわけがない。そんなことはわかりきっていた。

「……立ち上がって来いよ！ 井草さんをここまで痛めつけて、ただで済むと思ってんじゃねえ！」

「そうね。人の部員を傷つけて、この程度で済むと思ってるのかしら？」

イツセーもリアスも、怒りを収めることができずに魔力を纏う。

「ま、これでようやく一矢報いたってかんじですなあ」

「ここからが本番なのです」

リムとニングも、油断せずにここからが本番だとすら判断する。

『お前ら、前衛はあくまで俺がする。サポートに回っている』

そしてタンニーンは、この場で最も彼女たちを警戒していた。

わずかな戦闘で、相手の性能はある程度把握できた。

断言してもいい。いま戦っている二人は龍王クラスともまともに渡り合える猛者だ。

油断すればこちらが殺される。

平均して上級悪魔クラスの上であるイツセー達では、戦力にはなるが単独では勝ち目がない。前線に出来てはいるが長時間戦えば地力の差で確実に負ける。

ゆえに、うかつに仕掛けて四人から離れないように気を使いつつ、タンニーンはにらみを利用させる。

「……いいわよあんたら。悪党の相手にはちようどいい正義の味方じゃない。私を倒してくれるのかしら？」

「ど、どうしよう。今ので変身がちよつと切れちゃったよ？」

楽し気な五十鈴と、困っている伊予の声がして、そして煙が晴れる。

そして、五人はそれを見た。

「さあ、私にふさわしい死をくれてやりたいなら、もっと全力……で……っ!?」

「もう! こうなったら私達も全力……あ」

全裸の五十鈴と、半裸の伊予の生身の姿を。

多少の沈黙が時間を稼ぎ―

「……きやあああああああああああ!?!」

「五十鈴ちゃん? どうしたの?」

絶叫を上げ、手で局部などを隠しながらへたり込む五十鈴に、伊予は何も隠さずに声をかける。

全裸になったとはいえ、顔を真っ赤にして涙目にすらなる五十鈴に、半裸で済んでいるとはいえ、平然としている伊予。

その光景に一瞬あつけにとられた一同を責めることなどできないだろう。

それぐらい、五十鈴はあからさまにパニックに陥っていた。

それぐらいに、伊予は一切の動揺を示さずにいた。

服の破け具合と同様ぐらいに異常なレベルのアンバランスを示した二人に、イツセー達は動揺を示す。

異常者としか思えない行動を示してきた伊予はまあいい。だが、五十鈴に関しては少々気後れしてしまう。

あれだけ盛大な悪役ムーブをしてきたのだ。それがいきなり外見年齢相応のムーブをしてきては、イツセーですら一瞬戸惑ってしまう。

「……う」

だが――

「うっひよおおおおおおお!!! 可愛い女の人の裸あああああああああああ

!!!!」

――一瞬で煩惱が優先するのが、兵藤一誠さがの性であった。

「見るな馬鹿野郎おああああ!!!」

、五十鈴が即座に指向性の暴風をたたきつける。

その出力はイーツの時に比べれば、子供の癩癩レベル。しかしそれは比較対象が悪すぎる。

当然ではあるが、イツセーは直撃した。回避する精神的余裕がないぐらい、イツセーは煩惱に支配されていたので当然である。

三十回転ぐらいしながら、燃え盛る木々に全身をぶつけるイツセーだった。

「が、眼福……っ」

「辞世の句はそれでいいのね?! 殺していいのね?!」

あからさまと形容してもいいレベルで涙目を浮かべながら、五十鈴が殺意をまき散らす。

裸を見られたという状況では仕方ないのかもしれないが、それにしても他になかったのだろうかという雰囲気だった。

正直な話、シリアスな空気が完全に霧散している。

之ばかりはイツセーのせいだけではない。五十鈴にも責任の一端はあるだろう。

だが、流れるにイツセーがボコられるのは自然の摂理でもあった。慈悲はかけらもなかった。

「……この格好で戻ったら、ナイアルさん興奮するかな?」

と、伊予は伊予で、自分の姿を確認しながらそんなことを発現する。

その、自分が裸身をほぼさらしていることを意にも介していない態度に、リアスは何か寒気みたいなものを感じていた。

この、伊予と呼ばれた少女は何かが外れている。それが、羞恥心の欠如という形で表れていた。

「……井草」

この二人の存在に激昂した、監視役だった仲間を想う。

常に自分自身を低く扱い、心のどこかで自分が嫌いだといわんばかりの発言を繰り返している井草。

彼女がこうなった原因に、心当たりがあるのではないか。だからこそ、井草はあんなったのではないか。

そして、それはイツセーも思っていたらしい。

ふらふらと立ち上がりながら、五十鈴と伊予に指を突き付ける。

「お前ら！ 井草さんがあんなふうになったのは、お前たちのせいか!」

その言葉に対する反応は、双方で全く異なっていた。

「え？ 違うよ。そんなことしてないもん」

伊予はそう言って、きよとんとする。

だが、五十鈴は体を腕で隠しながら、イツセーに不敵な笑みを見せる。

否、それは挑発的ではなく、挑発そのものだった。

「正解。厳密には、私を恨めばそれで済むのに、真面目な井草が自己嫌悪にさいなまれて

るだけよ」

あきれながら告げられたその言葉に、イツセーはそれを理解する。

ああ、目の前の女は。間違いなく俺たちの敵だ。

井草・ダウンフォールを苦しめるのなら、苦しめ続ける原因なら。最早、遠慮をする必要はない。

「上等だ。ぶちのめして——」

「……イツセー、だめだ」

震える声が、攻撃を仕掛けようとしたイツセーを押しとどめる。

其の声に振り向けば、小猫に支えられながら、井草がかるうじて立ち上がっていた。

苦しように、心と体の痛みには耐えながら、しかし井草は前に出ようとする。

そして、井草は声を絞り出す。

「そこは、駄目だ。ナイアルのところは、駄目だ。アイツは、駄目なんだ」

「馬鹿ね」

肩をすくめ、五十鈴は井草の懇願を切って捨てる。

そして、自分の体をなまめかしくなでる。

そして何かを思い出したのか、蠱惑的な表情を浮かべながら、顔を赤らめた。

「私達はもう跡形もないわよ。あれから、何人の男に抱か……貪られたと思ってるの？」

その言葉に、井草はわかつていたのかうつむく。

「うん。昨日の旧魔王派の人たちはすごかったよね！ ストレスがたまってたから激しくって！ やっぱり、たまにはああいう強引なものもないと、楽しくないよね」

そして、まるで遊園地ではしゃいだ記憶を思い出したかのように、伊予は明るく楽しくに井草に語る。

それも想定していたのか、井草は拳を握り締めるだけで、何も言わない。

だが、イツセー達が衝撃を受けるには十分すぎる。

話を聞くだけでなんとなくわかる。五十鈴と伊予の2人の少女は、その性的魅力を商品として扱っている。

そしてそれを純真な子供のように語る伊予の精神は、どこかが完全に外れている。

そして伊予と違い、井草が苦しむとわかつて発言した五十鈴は、どこかが歪んでいるとしか思えない。

そして、五十鈴はため息をつくと、

「まあいいわ。そろそろ私達も帰らないといけないしね」

「あ、そうだった！ 今夜は魔法使いの人たちのサバトのお手伝いだった！」
割とあれなことを平然と語りながら、五十鈴も伊予も戦闘意識を放棄する。

「でも五十鈴ちゃん。井草君痛めつけきれないよ？」

「どっちにしても撤退時間だったの。おいてかれたらSE〇できないわよ?」
 「すぐ帰ろう!!」

一瞬戸惑った伊予を説得してから、五十鈴は静香に気を失いかけている井草に視線を向ける。

その目は、どこか期待の感情が乗っていた。

「殺しに來なさい、井草。悪党が因果応報で殺される、そんな定番ネタを完遂してみせてよ」

『ハストウール』

「じゃあ、バイバイ。可愛い子もいるから一緒にエッチしてもいいんだけど、敵同士だから縁が合ったらつてことで」

『クトウグア』

イーツへと戻りながら、五十鈴も伊予も素早くパーティー会場にむかつて飛び上がる。

そして、パーティー会場から漏れ出る霧に飲まれて、その姿を消していった。

『……絶霧か』
ディメンション・ロスト

その霧の正体を察して、タンニーンは苦苦しい顔をする。

イッサーの持つ赤龍帝の籠手を超える、上位陣滅具の一つ。

たとえて言うならば霧型のバリア発生装置にしてワープゲートとでもいべきだろうか。あの霧は施設ごと包み込んで最上級悪魔クラスの砲撃を防ぐこともできる。不利になったら施設を丸ごと別の場所に転移させるというまねすら可能だ。

そんな神滅具の使い手までもが禍の団に参加。これは本当に非常事態というほかなかった。

「……………いよ……………いす、ず……………っ」

その思考を遮断するかのように、声が聞こえる。

「井草さん!」

「井草、しつかりしなさい!!」

崩れ落ちた井草をイツセーが支え、リアスが肩を叩いて意識を確認する。

リムとニングも血相を変えて駆け寄るが、井草は反応を返さない。

「……………気の乱れ具合からして、肉体のダメージと精神的ショックの二つに耐えていた精神の糸が、あの二人の撤退で切れたみたいですよ」

「まじですか!?! いや、これ、アーシアさん呼んできた方がいいんじゃないやねえすか!?!」

小猫が心配を押し隠しながら井草の体を確認し、けがのようすを見たリムもパニックを引き起こしかける。

イツーが解除された井草の体は、打撲や火傷の後で体中が埋め尽くされている。

このわずかな時間でここまでの負傷を与えることができた。そんな人物を相手にしていることに、リアスたちは息をのむ。

何より、話を聞く限り、井草とあの二人は顔なじみ以上の関係だ。

それを遠慮なく叩きのめせる精神性。其れこそが、あの二人を脅威とする厄介な側面を証明していた。

「あれが、上位イーツの力……!」

『油断できんな。小娘二人があそこまで強くなるのか……』

その強大さに、リアスもタンニーンも威圧を感じる。

「とにかく、下手に動かすのはかえって危険なのです。アーシアさんと呼んでくるのです」

そして、我に返ったニングが、悪魔の翼を広げながら、ビルのパーティ会場があった階層に飛んでいく。

これまでは、井草・ダウンフォールは苦しみながらも誰かを助ける生活を続けてきた。

それを贖罪と受け取るものは多いはずだ。

だがしかし、この日から井草の行動は大きく変わることになる。

井草の贖罪は伊予にも五十鈴にも届かない。届かせるためには、前に踏み出さねばならない。

彼は踏み出す決意を持てるのか。それが、今後の世界を大きく左右することになる。

16話

「まったく。何をやっているのですか、悪魔は」

悪魔側の警備担当に対してのシエムハザの小言。

それをBGMにしながら、アザゼルは鋭い目つきで破壊された壁と、その先にある風景を睨んでいた。

禍の団でも最強クラスの総合力を發揮する三派閥。

旧魔王派。

英雄派。

そして、ムートロン先遣艦隊。

それぞれの派閥の長による降伏勧告。そして断られる事を前提としたがゆえに行つた、示威活動としてのイーツの大量投入。

結果的に貴族に死亡者こそ出ていないが、被害は甚大だ。

フェニックスの涙は大盤振る舞いだった。アーシアも広範囲回復オーラも大活躍。

この二つの要素が無ければ、相当の死者が出てくる事になるだろう。

だが、それだけで済むとも思えなかった。

E Eレベル4といわれたそのイーツは、特殊な処置が行われていたのが、撃破したイーツはエボリューションエキスごと吹き飛んでいた。

残骸をいくつか回収する事には成功したが、これだけでエボリューションエキスの量産に成功するかわわれれば、それもまた難しい。

何より、ムートロンの規模が凶悪という他ない。

魔王サーゼクスと互角に渡り合った、ナイフアーザーがE Eレベル6，5。

その6，5が本艦隊の者達と合計すれば少なくとも千人以上。それも、更に各上だろ
う者達も含めてだ。

はつきり言つて、現状では絶望的だ。三大勢力だけでどうにかできる戦力ではない。

対抗するには、こちらにも相応の戦力を用意する必要があるだろう。和平を迅速に進め
て各神話体系と連携を取らなければならぬだろう。和平を迅速に進め

それをもつてしても、このままでは高確率で負ける事になるだろう。こちらにも本気を
出して対策を立てなければならぬ。

……人工神器技術の発展は絶対条件だ。安定した人工禁手の方法を編み出す事がで
きれば、それだけで戦力は大幅に強化する事ができる。

だが、そこに回さなければならぬ頭の回転は、上手く回っていなかった。

「井草……っ」

井草・ダウンフオールは昏睡状態で治療室に運び込まれている。

全身の負傷はアールシアが治療したが、しかし体力の消耗までは治せないのだ。全身が傷だらけなうえ、精神的な疲弊まであった以上、その疲れが回復するまでは起きることはないだろう。

それほどまでに、彼は深いダメージを負っていた。

無有影雄ことナイアル。生身の姿で上級悪魔クラスを粉碎するその戦闘能力も脅威。そして、それ以上に連れてきた者達が最悪だ。

行仁伊予と、枢五十鈴。井草・ダウンフオールの幼馴染。ナイアルに惑わされ、井草が傷つけ、そしてそのまま神の子を見張る者が動いても見つけられない場所に引きずり込まれた、神器も持っていないかつただの少女達。

その二人を、ナイアルは高位イーツにして井草に差し向けてきた。
否、おそらくイーツそのものには既になつていたのだろう。

EEレベルが高かったからか。其れとも井草が墮天使である事に気づいて、自分達神の子を見張る者対策に用意していたのか。それ以外の理由もあり得るだろう。

とにかく問題は、2人は理由はどうあれ自分の意思で禍の団に属し、あの龍王タンニーンですら手こずるレベルの戦闘能力を發揮しているという事だ。

そして、2人は精神を変質させている。

自覚的に悪を名乗り、井草の神経を逆なでするかのような言葉を吐く五十鈴。悪意こそ見せていないが、それゆえに恐怖心すら感じさせる発言を繰り返す伊予。

理由はなんとなく分かる。なんだかんだで訓練を積んできた動きだったそうだ。それに、初の実戦が三大勢力の重鎮が軒並み揃っているこの会場という事もないだろう。

断言してもいい。あの二人は、ナイアルの下に行つてから殺し合いの経験をしているはずだ。

それに伊予の発言からすると、出資者などに枕をしている可能性もある。

それだけあれば、人間の精神を歪めるには十分だ。成れの果てとでも形容できるようになるのも、時間をかければ簡単だろう。

そんな、見るも無残な存在になり果てた二人によつて、井草は心身ともに痛めつけられたのだ。

……自分が直接会う覚悟を決めた時。井草がナイアルに叩きのめされ、ピスが施設に匿つた時。

今でも忘れない。あの時の井草は、死んだ魚の方がマシなぐらい、目が死んでいた。あれを、また見る事になるのかもしれない。

そう思い至つたその時に、アザゼルは齒を食いしばつて拳を握る。

「ただじゃ済まさねえぞ、ナイアル……っ」

墮天使総督は決意した。

いかな理由があろうと、ナイアルをそのままにしてのムートロンとの講和はあり得ない。

自分でなくてもいい。しかし、ナイアルにはその因果に見合った応報を味合わせろ。

その決意を込めて、アザゼルは今後の行動を思案し始め――

「アザゼル。そういえばあなただけホテツプとやらと話していなかったようですが、どこで何を？」

「言うな。カジノで遊んでる間に井草がボコられて俺も落ち込んでる。当分カジノはしねえ」

「……………カジノお？」

—シエムハザに余計な事を言つてしまい、正座で説教をされる羽目になった。

井草は、病室で目を覚ました。

しかし、すぐに起き上がるような事はしなかつた。

ただぼんやりとした表情を浮かべ、そしてそうなるまでの記憶を思い返す。

その可能性は確かにあつた。

ある意味で、それは救いだつたのかもしれない。

大量の薬物を打ち込まれ、精神が完全に崩壊している可能性があつた。そしてそのま
ま処分されている可能性もあつた。人間の姿をしていない可能性すら考慮していた。

だが、しかし、あれは成れの果てだ。

ことあるごとに悪である事を自慢げに語り、挑発を仕掛けてくる五十鈴。

一見すると変わっているようには見えないが、しかし何処か精神の在り方が狂つてい

る、伊予。

自分も変わり果てているのは分かっていたが、しかし、これはあまりにむごかった。許されても、いいのかもしれないと思った。

リムとニングの言葉を受けて、井草は前を向いてみようとという気にもなった。

たくさんの人が井草の事を好いてくれている。その好意に応えてみようとという気にもなった。

だが、それも全て壊れてしまいそうだ。

伊予も五十鈴も、もう井草の知っていた二人ではない。

ナイアルによつて変えられたのか。それとも変わるしかなかったのか。それは分からない。

だが、しかし分かる事は一つだけある。

そんなものは四年前から分かっていた事だ。だが、その実感があまりにも足りなかった事だ。

……もう、あの頃には戻れない。

その事実には井草は涙を浮かべ――

「――井草さん!？」

通路から顔を覗かせた、イツセーの声に顔を向ける。

「やあ、イツセー。心配かけたね」

努めて明るく振る舞うと、イツセーはわたわたとしながら、しかし笑顔になる。

「無事で良かったです！ えっと、ナースコールはー」

そこから少しの間は騒がしかった。

駆けつけた医者者に体の診察をされ、其の間にイツセーはリアスを緊急招集。

オカルト研究部に生徒会。更にアザゼルにリムとニングまで来て、大きめだった病室は満員状態になる。

「大丈夫ですか、井草さん！ なんかさっげえボコられたって聞いたけどー」

「今の匙君の方がボコボコだけど？」

何があったのかは分からないが、匙の顔は傷だらけであった。

というより、何故かオカルト研究部員と生徒会役員は疲労困憊といったところだった。より厳密にいうならば、リアス・グレモリー眷属とソーナ・シトリー眷属だが。

「既に数日経っています。レーティングゲームは予定通り行われたものでして」

「ソーナの作戦に完全にはまってね。大半のメンバーが脱落する激戦だったわ」

ソーナとリアスの言葉に、井草は驚いた。

「どうやらかなりの間意識を失っていたらしい。」

見れば、皆が井草が意識を取り戻した事に安堵すらしているようだ。

……それが、あまりにも耐えられなくて、井草はうつむいてしまう。自分は赦されない存在だ。それだけの事をしてしまった。

そして、その結果大事な人の変わり果てた姿すら目にする事になった。自分には、皆に無事を喜んでもらえる資格なんてない。

そう、口にしようとしたその時だった。

「……井草さん」

静かに、ニングが井草の手を包んでいた。

その暖かに、井草は沈んでいた気持ち但至少だけ浮かぶのを感じる。

そして、その表情は、少し心配の色があるものの、人を安心させてくれる微笑だった。井草さん。事情を、話してみるべきなのです」

「え、いや、でも」

あの事情を話して、いいのだろうか。

嫌われるのは仕方がない。だが、あの内容はあまりに毒だ。

其れゆえに躊躇する井草に、ニングは優しく包み込んでいた手を放す。

そして、身を乗り出すと井草自身を抱き寄せて包み込んだ。

柔らかい体で井草を包み込みながら、ニングは井草の頭をなでる。

……その光景にリムを除いた皆が啞然とする中、ニングは井草をあやすように慰め

る。

「大丈夫なのです」

なにか、大丈夫なのか。

「皆さん、誰もが優しく立派な人なのです」

そんなこと、知っている。

「井草さんがずっと頑張ってきた事も、ちゃんと知ってるのです」

……

思考ですら沈黙する井草に、ニングは抱きしめる身体から力を抜いて、顔を見る。

そして、満面の笑みを浮かべた。

「きつと、井草さんを受け入れてくれる人はいるのです」

その言葉に、井草はふと気づいた。

井草の心に恐怖があった。

それは、嫌われる事に対する恐怖だ。

嫌われて当然。嫌われるべき。嫌われなければならない。

それはいつも井草が心のどこかで思ってきた事だ。

だが、今に限っていえば真逆の感情を抱いていた。

それほどまでに、井草にとって駒王学園とは居場所だったのか。

それに気づいて呆ける井草の手を、ニングは優しく掴む。

「もし駄目でも、許した私とリムがいるのです。……だから」

微笑と共に、ニングは井草を導く言葉を紡ぐ。

「……勇気を、頑張つて出すのです」

その言葉が、まさに勇気そのものだった。

「……皆に、聞いてもらいたい事がある」

震える声で、井草はそれを開示する。

きつと、ここから先に進むにはこれが必要だ。

嫌われるかもしれない。それだけの事をしてしまった。そしてそれが怖い。

だけど、許してくれた人がいる。

まだよく知らないが、しかし自分を赦してくれた人がいる。

まだよく知らないからこそ、許される事を自然を受け入れさせてくれた人がいる。

だから、次を言おうとして、しかしやはり嫌われるのが怖くて言い出しづらくて――

「落ち着きやがりなさいな」

空いたもう片方の手を、リムが包んでくれた

視線を向けると、不敵な笑みを浮かべるリムの姿が映る。

「既に知ってる私らが保証しやす。大丈夫でさあ」

―その言葉に、勇気が上乘せされた。

よく知らないのに、悪い事だけを知っているのに、2人は赦してくれた。

彼女達の事をよく知らないからこそ、井草は前に進もうという意識を持てた。

だから、2人がいてくれるのなら―

「俺が犯した罪。伊予と五十鈴を間接的にとは言えああした、俺の犯してしまった事を、話させてくれ。」

17話

「……これが、俺が伊予と五十鈴にしてきた事。俺の、罪だ」

全てを話し終えて、井草はまっすぐ前を見る。

まず視線を向けるのは、アザゼルにだった。

「本当に話して、良かったのか？」

気づかわし気な視線を向けられて、井草は苦笑する。

「これ以上、皆にこの事実を隠すのもあれですよ。伊予と五十鈴がナイアルに引きつられて出てきた以上、ナイアル達が小芝居をしながら話すぐらいの覚悟もしないといけませんし」

事実だ。

あのどこかが致命的に歪んだ伊予と五十鈴なら、自分からその辺りの出来事を話すだろう。それも、大衆の面前でするぐらいの事もあり得る。

それで混乱が生まれる事も考えれば、実際にここで話しておくというのは一つの手ではあった。

だが、同時にこれで嫌われる事も考えるべきだろう。

慈悲深い聖職者であるニングとリムは赦してくれた。だが、それが普通の意見ではないと思う。

なにせ、井草がやった事は強姦一步手前だ。法で訴えられれば確実に負けるし、事情が知られたら引つ越す事も考えなければならぬレベルで白い目で見られるだろう。

目の前の彼らは、真つ当な正義感を持っている立派な人物達だ。井草のこの行動を怒るのが当然の反応なのだ。

ゆえに、井草も覚悟を決めている。

駒王学園を辞める事も考慮している。少なくとも、オカルト研究部や退部すべきだろう。

「……そうして欲しいなら、オカルト研究部からも駒王学園からも去るよ。それぐらいの事をしてる自信は——」

最後まで言い切る前に、拳が叩き込まれた。

それは甘んじて受ける。

当然だ。かつて二人の両親に話した時殴られた。

だから、その拳を放ったのがイツセーであつても驚かない。

赤龍帝の籠手を具現化させたうえで殴ってきたのも、そうおかしな事ではないのだから。

「……井草さん。今、俺が何で殴ったのか分かってないだろうから言っておきます」
赤龍帝の籠手を戻しながら、イツセーは怒りに満ちた鋭い視線を井草に向ける。

そして、涙ぐみながら声を張り上げる。

「なんで、俺達がそんな事を望むと思うんですか、この馬鹿野郎!!」

其の声に、井草は目を見開いてきよんとしてしまふ。

見れば、大体の人達が同意見といわんばかりの表情を浮かべていた。

「馬鹿ね。貴方がしてしまった事は確かに罪深いけど、それを心から悔いている貴方を糾弾するほど、私達は悪趣味じゃないわ」

「同感です。前から思っていました、井草さんは自罰的過ぎるところがあるようですね」

リアスとソーナが、呆れ半分苦笑半分の表情で、そう言い切る。

思わぬ展開に、井草はかなり面食らう。

正直、もう嫌われているのが基本だとばかり思っていた。

それだけの事をしていたのだ。知れば多くの人達が嫌うだろう。

だが、井草の目の前に井草に敵意や嫌悪感を浮かべている者達は一人としていない。

「まあ、これが公表されれば学園としてはある程度の対応をするかもしれませんが。知られてないのなら問題ないでしょう」

ソーナの女王である椿姫が現実的な観点から告げるが、それはつまり告げ口はしないというようなものだ。

それに対して生徒会全員がうんうんと頷いた。

「ま、あれだよ。……心底後悔して、やり直そうとしたんでしょ？ だったら俺達は井草さんを赦しますよ。それ位の事、駒王学園でやってきたじゃないですか」

匙の言葉に、部屋中の人たちが頷いた。

「いや、それは当然じゃないか。俺みたいな低い場所に堕ちるだなんて、見過ごせるわけがない」

井草の反論に、全員が「お前何言ってるの？」みたいな目線を向けてきた。

心底解せぬ。

顔全部を使ってその感情を見せる井草に、アジアはその手を取ると微笑を浮かべて首を振る。

「井草さんは心優しい方です。それを当然と言える井草さんだからこそ、私達はあなたを赦します」

「……同感です」

「そうですわ。それだけのことを、貴方はしてきたじゃありませんの」

小猫と朱乃が同意し、それに皆が頷く。

「井草さん。貴方は確かに間違えてしまったんだろう。だけど、そこからあなたは這いあがってきた」

「だ、だったら、オカルト研究部の仲間として手を差し伸べたいです!!」

祐斗とギヤスパーも続き、そしてイツセーが再び前に出る。

そして、右手を井草の前に出す。

「……井草さん。井草さんは俺達が間違わないように頑張ってくれた。だから、俺達は井草さんが正しい道を進めるように力を貸したいです」

そして、イツセーはあえて自分から井草の腕を掴まない。

それでは駄目とは言わないが、しかしもっとして欲しい事がある。

「力を貸してください、井草さん。俺は、俺達は仲間だから、その分俺達も力を貸して見せます!!」

その言葉に、井草は一瞬戸惑う。

だが、周囲の視線が井草の背中を押す。

「井草、お前やりたい事あるんだろう?」

そして、アザゼルがにやりと笑いながら、井草を促す。

「どうすんだよ。お前のなしてきた事という功績と、お前を想う友情という対価を、どう使う?」

その言葉に、井草は一瞬目を伏せる。

確かに、そうだった。

井草の罪は真実で、井草が積み上げてきた事もまた真実。

それらを見てきたからこそ、彼らは井草を肯定した。その罪を受け入れ、それでも仲間と呼んでくれている。

なら、井草は—

「イツセー、皆」

—その手を掴み、頭を下げる。

「力を貸してほしい」

心からの願いを、井草は告げる。

「あの頃には戻れない。どうすればいいかも分からない。殺すしか手がなにかもしれないくらい、2人は変わってしまったている」

それでも—

「伊予と五十鈴を止めたい。どうか、力を貸してくれ……！」

—この願いは、本心なのだ。

そして、それに応えるように全員が頷いた。

胸から暖かいものがこみ上げて、井草はぼろぼろと涙をこぼす。

こんなに泣いたのは四年ぶりだ。かつて、伊予と五十鈴が行方不明になったと知った、その時以来だ。

だが、今流れる涙は暖かい。

嬉し涙をここまで流す事が、自分にできるとは思っていなかった。

「……井草さん」

「井草さんや」

その背中をなでながら、ニングとリムは笑顔を向ける。

「大丈夫なのです。私達も力を貸すのですよ」

「アンタは赦されるだけの事を積み上げたんですぜ？ だから、前向きやしようや」

その言葉に頷きながら、井草は決意する。

卑下し続けるだけの、自罰し続けるだけの人生はもうやめよう。

ここからは、文字通り立ち直る為に生きる。

善行はする。誰かも助ける。ただし、そのうえで自分を好きになる努力を始めよう。

そのうえで、どんな結果になってもよしとする。

「ありがとう、皆。俺は、2人を、止めて見せる」

この願いだけは、どうなっても必ず叶えて見せる。

しかし、そんな井草にも試練は当然訪れる。

そして、それは容赦なくイツセーにも襲い掛かる。

「宿題やってなかった……っ」

地獄の猛特訓に夢中になって、学業を見事におろそかにしていたツケがやってきた。

駒王学園高等部の夏季休暇が終わるまであと数日。井草とイツセーは見事に夏休みの宿題の存在を忘れていた。

完膚なきまでに真っ白な夏休みの宿題。これを数日で全部終わらせるのは、まず間違いない大変だったりするのである。

そして、イツセー達に衝撃が走る出来事があって、宿題を手につけるのも一苦労だと

いう一大事になるのだが、それはまたのちの話。

体育館裏のホーリー

1 話

夢を見ていた。

今より少しだけ若い自分が、駒王学園とは違う制服を着て、今より少しだけ若い伊予と五十鈴と一緒に、かつて通っていた高校から家に帰るところだ。

「漸くテストも返ってきたぜ。今回も平均点前後はしつかりキープっと」
「得意げに言うな得意げに。うちの高校は名門でも何でもないんだから、赤点回避なんてできないや駄目だったのに」

得意げにアホな事を言う自分に、五十鈴が呆れ顔でツツコミを入れる。

我ながら実に勉強ができていない状況だった。調子が良ければ学年上位どころか上から一桁台を取る事もある今の井草からは想像できないだろう。駒王学園生が見たら、目を疑うかもしれない。

だが実際、この時の井草は学業は適当なレベルもあつた。

スポーツに關しても部活に所属していたわけではない。とはいえ、体育だけは五段階評価で五を取れるのだが。これは墮天使なので当然ともいえる。

墮天使とのハーフという事実にて得意げになり、それ相応の努力はしているが、それこそ自分より努力している者などいくらでもいると言つていい程度の努力。

半端に特別な何かを持っているがゆえに、半端に傲慢な中二病。それが当時の井草だった。

とはいえ人気があつたかどうかで言うと、そうでもないともいえる。

特に問題行動を起したりはしなかつた。しかし、両親と死別している事をあえて隠していない為、そこから気後れされているところがあつたかもしれない。

自然、幼少期から付き合いがあつて抵抗の少ない伊予や五十鈴とつるむ事が多かつた。それ以外では墮天使絡みでの関係もあつたので、気にはしていなかつたが。

「まったく、あんたは塾にでも通いなさい。私みたいな天才じゃないんだから、天才じゃ」

「そういうのは学年一位とつてから言えよ、伊予にも負けてるクセに」

ちなみに、ニコニコしながら見ている伊予は学年三位。五十鈴は上位十番台である。そして痛いところを突かれた五十鈴から、プツンという音が聞こえてきた。

そして、その瞬間に襟を掴まれたガクガクと揺さぶられる。常人では首が心配になる勢いでだ。

「あんですつてえ！ 人が気にしてる事を！！ いいのよ私は天然で之なんだから！！ 伊

予は家庭教師が優秀だから別枠!!」

「俺は気にしてねえし!! 義姉さん經由でコネ就職決まってるから問題ねえし!!」

実際、井草は墮天使なので大学卒業後は神の子を見張る者に就職が決まっている。

もつとも、この素質はあつても無自覚に自堕落だった自分では下っ端がいいところだろう。当時の自分はエリート扱いされると無自覚に思っているから始末が悪い。

まあ、良くある話になつていたのである。根拠ない自信をへし折られ、適度に構成しながらそこそこの生活を送る。もしくは猛省して努力をし直し、それ相応の地位にくく。

どちらにしても、今の井草のような立場には、なっていないのだけは分かっている。

そして、この生活がどれほど基調だったのかも、個の井草はよく分かっていたいなかった。

なんとなく、墮天使側が用意したダミー企業に就職。其のまま正体を隠しながら二人と仲良くなり続ける。そんな程度の事しか思っていなかった。

「もお。二人とも喧嘩はダメだよ?」

そして苦笑しながら、伊予が仲裁に入りお互いに矛を収める。

……もうこの時、伊予は無有を家庭教師にしていたのだ。なら、既にこの時には半ば手遅れだったのだろうか。

そう、だから――

「伊予、五十鈴」

目の前の過去の井草の口で、今の井草は決意を表明する。

「……必ず、止めて見せる。できる事なら、救って見せる」

だから――

「その時、もし俺の事を赦してくれるなら――」

その時は――

「また、一緒に笑い合って――」

「あああああああああしあああああああああ!?!」

「うっひゃあ!?!」

肝心なところで、莫大な音量によって飛び起きてしまった。

慌てて部屋から飛び出して周りを確認するが、特に敵意も殺意も感じなければ、火事が起きている様子もない。

これは一体どういうことか。寝ぼけ半分の戦では理解できなかったが――

「……おはようございます。井草先輩」

と、こちらにも安眠を妨害されて不機嫌になっっているらしい小猫が挨拶をしてきてくれた。

この可愛らしい美少女と同棲しているというのは、中々役得なのかもしれない。

だがしかし。既に彼女はイツセーに夢中になっている。そういう意味では全く手の出されようのない状況ではあった。

「あ、おはよう。で、どんなことになってるの、コレ？」

どうもイツセーの叫び声だったっぽいけど、状況がちよつとよく分かってない感じだったりする。

その井草に対して、小猫は静かにため息をついた。

「ディオドラ・アスタロトのせいです」

「……ああ〜」

井草は、その光景を思い出しした。

「宿題、あと三割……っ！」

「今夜は、徹夜ですね……っ」

宿題を高速で処理する事で疲労を溜めながらも、井草もイツセーも何とか新学期までにどうにかできる余地ができていた。

地獄を潜り抜けてきた井草とイツセーが、この程度の事でくじけるわけにはいかない。

夏休みに宿題程度できなくてどうするのか。自分がこれから挑むのは、地球征服を過程として宇宙進出を狙う、強大な戦力なのだから。

「大丈夫ですか、イツセー先輩」

「うん。大丈夫だよ小猫ちゃん」

気づかわし気に見つめてくる小猫に、イツセーは双から元気で返す。

しかし小猫はそれを半ば無視して、そつとイツセーに触れた。

単刀直入に言っつて、井草はふと思つた。

何が起きた、と。

当然イツセーも思いもよらなかつたようで、きよんとする。

「えっと、小猫ちゃん？」

「体内の気の巡りをよくしています。これで、少しは気分が楽になるはずです」

仙術とは、意外と日常生活においても便利な代物であつたらしい。

とはいえ、つい先日まで仙術を使うことを忌み嫌っていたにしては急成長だ。

朱乃も墮天使の血に向き合うようになったらしい。そして井草自身も、少しだけ自分を赦せるようになった。

すべてはイツセーのおかげである。そういう意味では、小猫の態度もすぐに察するこ
とができた。

だが、肝心のイツセーがよく分かかっていなかった。

「あ、じゃあ井草さんにも頼むよ。井草さんの方があの戦いで大変だったしさ」

「……………いや、確かにあとでするべきですけど」

「イツセー。それはない、ないよ」

小猫が複雑極まりない感情を浮かべ、井草も流石にツツコミを入れるほかない。

目の前の男は、デリカシーにかけている。

井草もそんなに詳しいわけではないが、しかしこれは空気が読めていない。

さて、イツセーにはどういえば納得するのかと考えた、その時だった。
「きやあー！」

アーシアの悲鳴に、2人はすぐに振り返る。

観れば、アーシアに優男が近づいていた。

井草はその光景に怪訝な表情を浮かべる。

……ここはグレモリーの施設である。それ相応の術式的な警備も仕掛けられているはずだ。

それをかいくぐつての潜入にも関わらず、不意打ちでもなんでもなく、戦意すら感じない。

しかし、それを気にしている余裕もなかった。

「てめえ!! アーシアに何してやがる!!」

とつさにイツセーが割って入る。

が、その優男は一切気にせずアーシアに視線を送る。

「やっぱりアーシアだ。あの会合ではまさかと思つてたけど、悪魔になつていたとは思わなかつたよ」

「ど、どちら様でしょうか……?」

アーシアに対して感動の再開を思わせる感慨深い声を出す少年に対して、アーシアは

戸惑っている。

イツセーはイツセーでアーシアを守らんと立ち塞がりながら、しかし状況が分からず戸惑っている。

そして、井草は何故か彼に嫌悪を覚えていた。

初対面の相手、それも敵意を見せていない。立ち振る舞いからも敵対している者の様子を見せていない。

にも関わらず、嫌悪感が先に立つ。

何故かは分からない。だが、井草は彼にナイアルに近いものを感じていた。

「……ディオドラ？ あなた、ディオドラね？」

そして、リアスがふと我に返って声を上げる。

そして、それにつられる形でグレモリー眷属の者達が次々にはつとなった。

「えつと……う？」

「……どちらさんだ？」

井草とアザゼル。グレモリー眷属ではない二人はよく分かっているのに首を傾げるしかない。

それに気づいて、祐斗が戸惑いながらも振り向いてくれた。

「ディオドラ・アスタロト。アスタロト家の次期当主です。先日の会合で顔を合わせま

した」

なるほどと、井草もアザゼルも納得する。

確か、大王家及び大公家を含めた現魔王を輩出した家系が、次期当主の会合に参加していたはずだ。

そして件のビルデ・グラシャラボラスが大騒ぎを引き起こしたのも聞いている。

確かに、その会話の中でディオドラという名前は出てきていたはずだ。アガレスとグラシャラボラスの睨み合いを平然と見ていたとかいう剛の者だった。ちらりとしか出てきていないから、すぐには思い出せなかったのだ。

しかし、そのアスタロト家の者が何でアーシアに関わっているのか。

それが気になって首を捻っていると、ディオドラは悲しげな表情を浮かべる。

「覚えていないのかい？ ……仕方がないね、あの時は顔を覚えてもらう余裕もなかった」

……以前どこかで会った事があるのだろうか？

だが、アーシアは教会の聖女とまで呼ばれた少女である。悪魔と接触する機会など用意されているはずがない。

その後も墮天使側に引き込まれて、レイナーレが秘匿していたはずだ。そしてリアスの眷属となるが、悪魔と接触する機会など、あの会合までならソーナたちシトリー眷属

ぐらいだ。アスタロトとかかわる機会がない。

なのにどうしてと思っていたら、おもむろにディオドラが服をはだけさせた。

そして、それにツツコミを入れようとする皆が、彼のあらわになった胸板をみて目を見開く。

……底には、深い傷跡が残っていた。

「あの時はありがとう。傷は残ってしまったけれど、君のおかげで僕は命を救われた」

その言葉に、井草はふと思いつ出した。

そもそもアーシアがレイナーレに囲われたのは、アーシアが教会を追放されたからだ。

それは悪魔を治癒する事ができる聖母トワイライト・ヒーリングの微笑が原因だ。しかし、それが発覚したのは、アーシアが悪魔を治療してしまった事が原因である。

そう、アーシアは確か、重傷を負った悪魔を治療した事があるのだ。

「貴方は、あの時の……!」

「そう。僕はディオドラ・アスタロト。君に癒された悪魔だよ。君にお礼を言いたかったんだ」

息をのむアーシアに、ディオドラは思い出してくれた事への喜びが籠った声を出す。だが何故だろう。

井草はそれが信じられない。どこか薄っぺらいものに聞こえる。演技の類としか思う事ができない。

その井草の懸念に気づく事なく、ディオドラは――

「君と出会えたのは運命だ。どうか、僕の妻になってほしい」
爆弾発言を叩き込んだのだった。

2 話

夏休み明け。それは、学生達が張つちやけた事を告白する時期。

ギャル化する女子。童貞を卒業して余裕を見せる男子。とにかく、大人の階段を上つた少年少女が、テンションを上げる時期である。

「……ただし、それはいわゆる中二病なんだよ」

井草はそう断言する。

「重要なのはそこからどうなるかだ。童貞の卒業なんて風俗に行けば簡単にできる。下手にそこで格好つけようとしている男は、まだまだ未熟なんだよ」

「は、はあ……」

などと、調子ぶっこいていた男子生徒を捕まえて、そう諭すのが井草であった。

「井草さん、本当に人を更生させるのが好きだよな」

「ああ。だがあいつ等にはイラつと来たからちよつと助かるな」

などと松田と元浜は言うが、イツセー達は苦笑いするしかない。

つい先日知った井草の童貞卒業を鑑みれば、まさに自らの肉を食いちぎって我が子に

当たえる狼の所業に匹敵する。

こういう事ができるからこそ、自分達は井草の事が嫌いになれなかったのだが、流石にもうちよつと自制しろと言いたい。

「イツセー。井草さんは変な方向にアクセルを踏んでしまったのではないだろうか？」

「言うなゼノヴィア。やばくなったら俺達で止めてやればいいさ」

事情を知るゼノヴィアの心配ももつともだ。

あの日以来、少しは前向きになった井草だが、前向きになっても自虐癖が完治したわけではない。

実際やらかしているのは事実なのだ。そういう意味では「それを償ってきた」事を認めただけ。自分がかつてやらかしてきた事実は変わらないと認識しているし、そこを否定することはイツセー達にもできない。

実際、駒王学園の生徒達が事情を知れば、井草から距離を取る者もいるだろう。それぐらいには井草はやらかしている。

勢い余つてそれをこの場でばらしたりはしないだろうか。そんな不安を二人は覚え

た。「いいかい。これは俺の経験論だ。俺の数百段マシな卒業をしてるからって、そこに胡坐をかいてちやいけなわけだよ」

「え？ 井草さんはどんな童貞卒業をしたんですか!？」

「まさか、逆レイプ被害者!？」

ほらこうなった。

「井草さん!! ここには女子もいるんで、もうちよつと抑えめでお願いします!!」

「その通りだ井草さん! 男は過去を語る生き物ではないぞ!!」

即座にフオローに入るイツセーとゼノヴィアだが、しかしこれはこれで一気に注目を集めてしまう。

「そういえば、井草さんの過去ってあまり知られてないわよね? ちよつと気になるわ」

「桐生! そんな事より俺の華麗なる夏休みの記録について語らせてくれないか!？」

桐生が余計な事を言ったのでイツセー話を逸らそうとするが、しかし半目を向けられ
てしまう。

「いや、あんたのナンパ失敗談なんて誰も聞きたくないから」

「してねえよ!! したくてもできなかったよ!!」

本当にできなかつたのでこれは酷い。

イツセーは滝のような涙を流しながら、崩れ落ちる。

「桐生ちゃん!! イツセーは、アザゼル先生の所為で講習も受けていないのにぶっつけ
本番で三週間近くサバイバル生活を山の中でしてきたんだ!! もうちよつと優しく対

応してあげてよ!!」

「そうだと桐生! その所為でイツセーは拗らせて、乳と対話する為だけに悟りを開きかけたんだぞ!!」

「ゼノヴィアちゃんも、余計な事を言わなくてよろしい!!」

詳細を話したらいけない類の話なのは、イツセーの夏休みも同様である。

そういう意味での大ポカをやらかしたゼノヴィアに、井草のツツコミが飛んだ。

しかしこれはまずい。

イツセーの夏休みを語るのは、異形社会のモラル的にまずい。

かといって井草の童貞卒業もまずい。かなり低ランクの童貞卒業。知らればスキャンダルだしPTA辺りがうるさい事になる。

イツセーは崩れ落ちて役に立たない。井草は自分の事には考えが及んでいない。そしてゼノヴィアは天然な節があるのである意味心もとない。

そして、最後の希望であるアジアに関しては一

「……………」

この事態に全く気付いておらずぼんやりとしている。

その事に気づいたのか、桐生は首を傾げた。

「ところでアジアっちはどうしたのさ? なんか調子が悪いみたいだけど」

その言葉に、全員の意識がそっちに映った。

何故ならアーシアは皆のマスコットである。つまりイツセーは死ぬ、である。

しかしこちらにもまた説明が大変である。

イツセーもゼノヴィアも井草も、どう説明したらいいのかわちよつと困ってしまふ。

かつて教会にいた時に助けた、リアスの故郷の同レベルの金持ちが求婚してきた。

当たり障りのない言葉にすればこうなるのだろうが、そこから更に踏み込む手合いが出てくる事は確定である。そうなった時のフォローが大変だ。

できる事なら記憶操作などはしたくないのだ。それぐらいには三人ともクラスの者達の事を大切に思っている。

かと言って話を井草の童貞卒業やイツセーの夏休みに戻すわけにもいかない。それはそれで色々大変である。

さてどうしたものかと三人が考え込んだ時――

「た、たいへんだあああああ!!」

ドタバタドタバタと走りながら、男子生徒の一人が教室に駆け込んできた。

なんだなんだと全員の注目を集めたその少年に、井草達三人は感謝する。因みにアーシアはまだぼんやりしている。

そして彼は息を整えると、クラス全員に聞こえるように報告した。

た。てつきり用務員かとばかり思っていた。

それに天界からのスタッフが学生というのもあれだ。

何故なら、天使達は数百年前の聖書の神の死で増えなくなっている。つまり、天使は低く見積もっても数百歳なのだ。教師か用務員だろう。

おそらくは人間との間に生まれたハーフなのだと思う。そうでなければ年齢が開きすぎている。

とはいえ、初めて顔を合わせるだろう事を考えると、連携を取るのも大変だろう。

そう思っていたのだが――

「ええー。この時期に珍しいですが、我がクラスに三人の新しいお友達が編入される事になりました。さあ、三人とも」

と、担任教師の言葉によって三人の転校生が入ってくる。

そして、その姿を見て、イツセー達三人も、井草も目を見開いた。

そのうち二人は想定通りリムとニング。これは井草は驚かない。知っていたのだから当然だ。

だが、残りの一人は流石に驚いた。

これも、存在を聞いていなかったイツセー達と、知っていた井草と出は驚きの方向性が異なる。

何故なら、三人目は天使ではなかったはずだからだ。

しかし、現実問題彼女はそこにいる。そしてロザリオを輝かせながら、真つ先に挨拶をした。

「初めまして、紫藤イリナです！ その兵藤一誠くんとは幼馴染で、駒王町にも少しの間住んでました。よろしくお願いします！」

ちなみに、この爆弾発言でイツセーが男子達に詰め寄られたのは言うまでもない。

そして、放課後、オカルト研究部でイリナ達三人を出迎える事になった。

「紫藤イリナさん。リム・プルガトリオさん。ニング・プルガトリオさん。私達オカルト研究部は貴方達を歓迎するわ」

リアスの挨拶に合わせて、井草達は拍手で答える。

そして、イリナ達もにこやかに反応した。

「よろしくお願いします！ 天界からのスタッフで派遣されてきた、紫藤イリナです！」
「そして教会から派遣された、リム・プルガトリオです。改めてよろしくお願いします」

ぜ？」

「ニング・プルガトリオなのです。是でも十七歳なのですよ」

と、次々に挨拶を改めてされ、和やかなムードになる。

一応顧問になったアザゼルは、その対応に若干苦笑していた。

「つたく。ミカエルのやつも気にしすぎだぜ。態々自分達から人員を派遣するたあな」

「まあまあ総督どの。そりゃあ三大勢力和平の地で、墮天使の総督と魔王の妹がいるんですぜ？ こつちもそれなりの人員は派遣しねえと、体面的にまずいでさあ」

と、リムが言うが、しかしそこには少し気になるところがある。

そのずっと気になっていたところに深く踏む込むべく、井草はあえて尋ねる事にした。

「でもリム。確か天界から一人で、教会からリム達って言つてなかつたっけ？」

そう。そこが気になる。

何度も共闘したリムとニングが派遣されるのは良い。今後連携していく事もあるのだから、むしろ考えられた方だろう。

だが、三大勢力のうちに勢力が重鎮を派遣しているこの地に、天界側から誰も派遣されていらないというのはどうだろうか？

リムとニングは実力者だが、所詮は暗部の出身である。墮天使総督と魔王の妹という

ネームバリューに対応しているとは言い難い。

イリナもエクスカリバーの担い手だったが、しかしそれでも無理がある。そもそも天界側から派遣される予定だったはずだ。

そこが気になったのだが、リムもニングも悪戯が成功した子供みたいな表情を浮かべる。

イリナに至っては、めっちゃくちや得意げであった。

「ふっふっふ。違うのよ井草さん！ 私は、それだけのネームバリューを得て帰ってきたのよ!! 駒王町よ、私は帰ってきた!!」

そんな事をのたまいながら、イリナは祈りのポーズをとる。

イツセー達が頭痛に苛まれないかと不安になるが、そんな疑問は一瞬で吹き飛んだ。

イリナに光が差したその瞬間、イリナの頭上に光の輪が生まれ、背中からは一對の白い翼が生える。

それはまるで、天使そのものだった。

井草達が目を見開く中、アザゼルが興味深そうに目を細める。

「なるほど。転生天使ってわけか」

「転生天使、ですか？」

イツセーが聞くと、リムとニングが苦笑しながら頷いた。

「そうなのです。転生悪魔技術を流用して、天界は転生天使技術を開発したのですよ」
「今はセラフだけなんですけどね？ いずれ上級天使全員が王のポジションになる予定ですぜ」

そして、イリナが手の甲を見せる。

そこには、Aの文字が光り輝いていた。

「そう！ 私は天使長であらせられるミカエル様のエースなのです！！ 天使長直属ともなれば、ネームバリューでも負けてないのよ、井草さん！！」

確かに、これはいけるだろう。

流石に墮天使総督には負けるが、魔王の妹には負けていない。

少なくとも、名義的には十分だ。

「ふふふ。主の不在を知らされた時は一週間は寝込んだけれど、だけどミカエル様直属の天使になれたこの栄光があれば、頑張れるのよ！！」

感動なのか絶望なのかどちらなのか分からないが、とにかく涙を垂れ流しながらそんな事をイリナは言う。

どうやら、イリナにも聖書の神の不在は伝えられていたらしい。

まあ、この駒王学園はある意味で重要拠点だ。そして、関係者の大半は聖書の神が既に死んでいる事を伝えられている。そこに派遣される人員なのだ。

当然教えられているだろう。というより、肝心の天界からのメンバーがそれを知っていないなどあつてはならない。

「大丈夫か、イリナ？　むりはするなよ」

「そうです、イリナさん。私達もついていきます」

ゼノヴィアとアーシアが、イリナに歩み寄りながら元気づける。

二人とも、聖書の神の死を知ってショックを受けた者の一人だ。信仰心が強いイリナのショックを理解しているのだろう。

そして、イリナもそんな二人に慰めなれ、涙ぐむ。

「ゼノヴィア、この前はごめんなさい！　アーシアさんも、ひどいことを言ってしまったわ!!」

イリナは別の意味で涙を流しながら、2人に謝罪する。

確かに、エクスカリバーをめぐる争いでは諍いを起した関係ではある。

だが、ゼノヴィアもイリナも静かに気にしていないと首を振った。

「気にするな。あれは相談もしなかった私にも責任がある」

「そうです。イリナさんは悪くありません」

その言葉に、イリナはさらに涙ぐむ。

申し訳なさなのか感動なのか、どちらにしてもイリナは感極まっていた。

そして、勢いよく翼をはためかせながら再び祈りのポーズをとる。

「ああ、主よ!! この心優しい二人にお慈悲を!!」

すでに死んでいるのを瞬間にだが忘却しているようだ。

しかもテンションに同調して、ゼノヴィアもアーシアも祈りを取る。

ついでにリムとニングもつられて祈りのポーズをとった。

「「ああ、主よ!」」

ほほえましい光景である。

悪魔と堕天使がこの光景をほほえましいと思える。其れこそが、三大勢力が手を取り合つて物事に立ち向かえるようになったという証拠だろう。

その光景に井草はほんわかとしながら、しかしふと気が付いたことがあった。

ゼノヴィアとアーシアは良い。彼女たちは、天使長ミカエルの慈悲によつて手に祈りを捧げて罰を与えられることはない。

人間であるリムや、転生天使であるイリナに関しては問題の余地がない。二人はそもそも祈りを捧げることに問題何度欠片もないのだから。

だが、問題は――

「そういえばニング。君は悪魔だけど大丈夫なのかい?」

そう、ニングは悪魔だ。

伊予との戦いでその姿を見ている井草としては、少し気になってしまふ。

「ああ、大丈夫なのですよ」

しかし、ニングは問題ないと言いたげに、しかし困っているかのように苦笑を浮かべる。

「私は悪魔の血を引いているようなのですが、何故か何の問題もないのですよ」

「何故か十字架も聖水も悪影響ないんですぜい、ニングは。隔世遺伝で血が濃くなっているはずなんですがねえ」

リムの補足説明に、アザゼルが興味深そうな表情を浮かべる。

「なるほどな。もしかしたら『超越者』なのかもしれねえな」

その言葉に、一同の視線が一斉に集まった。

「超越者……ですか？」

「ああ。悪魔の中でも、次元違いの特性を持つている連中の事を指す」

イツセーの疑問に、アザゼルはそう答える。

「サーゼクスやアジュカ、そしてヴァーリの爺さんの三人が該当すんだ。三人とも、強い弱い次元とは別ベクトルで凄まじい異能を持つてたそうだ」

そして、アザゼルの眼がニングに向けられる。

ぶっちゃけて言おう。ものすごく興味津々だった。

「名前を付けるなら神罰無効化能力つてところか。今度サンプル取らせてくれよ」
「さ、サンプルなのですか!？」

マッドサイエンティストの目に、ニングが微妙にびくつく。

流石に黙ってみていられず、井草はアザゼルの後頭部にハリセンを叩き込んだ。

「先生、ステイ」

「冗談だつての。やるならミカエルの許可ぐらいとる」

凄まじく不安になるが、とりあえず最低限の一線は引いているようだ。

それはともかく、井草はニングとリムに微笑みかけた。

……彼女達がいなければ、井草は過去を告白する事はなかつただろう。そして、それがイツセー達に受け要られる事もなかつた。

全ては彼女達が井草の罪を受け入れてくれたからだ。だからこそ、井草は一步前に進む事ができた。

その感謝の気持ちはどう表せばいいか分からない。

だから、井草は心からの笑顔で二人を受け入れる。

「これからもよろしくね、ニング、リム」

その笑顔に、ニングとリムは――

「ふふつ。よろしくなのです、井草さん」

「まあ、結構気に入ってやすからね、よろしく頼んますぜ？」
そんな、可憐な笑顔で答えてくれたのだった。

「……なにこの反応」

信じられないものを見るかの視線に、井草は少し引く。

というより、転向して日が浅いイリナ達はもちろん、アーシアとゼノヴィアも状況が読めずに驚いている。

逆に、イツセーは何やら微笑ましいものを見るかのような視線だった。立場が逆転している気がする。

そんな視線の中、生徒の一人が目を見開いて、涙を流す。

それどころか、クラス中から嗚咽を漏らす者が続出した。

意味が不明だ。心底解せぬ。

そんな状況に井草含めた数人が気圧される中、桐生が目元をぬぐいながら感動の表情を浮かべる。

「こういう時「じゃあ俺が一番誰もなりたくないのを選ぶよ」と真っ先に言っていた井草さんが……っ」

「ああ、自分からしたいのも選ぶだなんて、選ぶだなんて……っ」

松田まで嗚咽を流しながら、喜びの表情を浮かべている。

そして、元浜に至っては眼鏡を落としながら歓喜に震えていた。

「このクラスで一番報われるべき井草さんが、井草さんが、ついに自分から何かを欲する

い。

「井草さん。本当に井草さんだったんですね……」

「ああ。井草さんはもう少し自分に自信を持つべきだ」

「だけど井草さんは変わったのね。成長したのね！ ああ、主よ井草さんの未来に光を
!!」

「ここまで言われるほどだとは思わなかったのです……」

「つたく、井草は反省するべきでさあ」

教会五人衆から凄まじいツツコミを喰らってしまった。

そして何とか胴上げから抜け出すと、そこにはイツセーが。

「井草さん」

「な、何かな？」

そこには、苦笑があつた。

「井草さんは、それだけ心配されるぐらい、色々やってたんだって自覚した方がいいですよ。」

「……分かった。気を付ける」

流石にここまでされるほどだとは思わなかった。これからは気を付けよう。

井草は心底反省すると、少しは自発的に何かを求める姿勢をするべきだと猛省した。

「負けんぞイリナ!」

「こつちのセリフよ、ゼノヴィア!!」

体育の授業にて、ゼノヴィアとイリナがデッドヒートを繰り広げている。

既に国体どころかオリンピックレベルである。あの二人は自分達が異形だという事を忘れてないだろうか。

そんな事で少し不安になるが、しかし周りの生徒達は普通に楽しんでいる。

なら、大丈夫なのだろう。

「しかし、揺れすぎるおっぱいは堪能しづらいな」

「ああ。おっぱいは適度に揺れないとな」

「まったくだぜ」

松田、元浜、イツセーと、変態三人衆がその光景を見ておっぱいについて語り合っている。

まあ、この三人はこれぐらいの悪ふざけで怒られることもないだろう。かつての三人

「皆！ 胴上げだ!!」

「また胴上げえええええええ!!」

思わず井草は全力疾走で逃亡した。

そして5分ぐらいかけて逃亡し、最後に体育館の屋根に上ると、一息ついた。

まさか、自分の欲求を少し出したただけでこれとは思わなかった。大騒ぎにもほどがあるというものだ。

それほどまでに、井草のいつもどおりは周りの皆の心配を生んでいたのだろう。

心底反省する。

反省する。しかし、それと同時に少し怖くなってしまう。

「……伊予と五十鈴の事、知らせた方がいいのかなあ」

駒王学園の人達は、井草が4年前に何をしてきたのかを知らない。だからこそ、井草を評価している節もある。

嫌われるのは怖い。追いつかれるのはやはり怖い。だが、皆に真実を伝えずに持ち上げられるのは、少しだけ罪悪感を感じてしまう。

「伝えた方が、いいのかなあ」

「……その時は、弁護ぐらいはさせてもらいますぜ」

まさか返答が返ってくるとは思わず、井草は慌てて振り返った。

そこにいるのは、体操着姿のリム。そして、後ろにはニングもいた。

「2人とも、何時から？」

「何やらフリークライミングをしている姿を見かけたので、ちよつくら追いかけさせてもらいやした」

「ビックリしたのです」

どうやら心配を掛けさせてしまったらしい。

「あ、なんか……ごめんね？」

思わず謝ると、ニングは静かに怒り顔になった。

「そういうところは治すのです」

そう言つて、ニングは人差し指を井草の口に押し付ける。

そして、少し困り顔になって叱責した。

「井草さんはしつかり苦しんだのです。そして、反省して立ち直ったのです。だから、井草さんは自分の事をもっと許していいのです」

その言葉に、井草はもう申し訳なく思わない。

そうだ。イツセー達は井草を認めてくれた。罪を償ったと思つてくれている。

そう思わない者もいるだろう。井草を嫌つてしまう者もいるだろう。

それでも、井草を赦してくれる人はいるのだ。

だから、それに恥じない生き方をしなくてはいけないだろう。

「うん、そうだね」

その言葉に、ニングはほっとしたように表情を緩める。

「よろしいのですよ」

それに井草もまたほっとして、しかしふと気になる事が生まれた。

そういうえば、そもそもだ。

「……なんで、再会した時から俺の事を気遣ってくれるんだい？」

そう、そこが気になってしまう。

井草は墮天使だ。ニングとリムは、教会側の勢力だ。

本来、敵対しているのだ。共闘こそ何度もしたが、それもたまたまの側面が強い。

そんな時期からですら、ニングは井草に気を使ってくれた。井草のことをたしなめてくれた。

そんな立場の者だったからこそ通ったものもあるが、しかし本当ならおかしな話である。

そして、ニングはというと――

「……うう………っ」

何故か、顔を赤らめてしまった。

そして、リムその後ろではニヤニヤとしていた。
……井草は、深入りしてはいけないと判断した。

4話

そして数日たった放課後。井草たちオカルト研究部は集合してある映像を見ることとなった。

「集まったわね、皆」

グレモリー眷属が集合したのを確認してから、リアスは真剣な表情を浮かべる。

「これから、私達と同時期に行われた、若手悪魔のレーティングゲームの映像を流すわ」
それに、井草は納得する。

同期のライバルたちの試合を見るのだ。すこしは緊張感も高まるだろう。

ましてや若手悪魔同士でのレーティングゲームがあるのだ。すぐにでもぶつかるところになると思うと、気にしないわけにもいかない。

しかし、リアスの表情はそれだけでも思えないほどに鋭かった。

「……大番狂わせが二つも起きたわ。シーグヴァイラとサイラオーグが、それぞれデオドラとビルデに敗北したの」

「!!!!!!!!!!?!」

その言葉に、全員が驚く。

若手悪魔のレーティングゲーム開始前の前評判からすれば、あり得ないことだ。

1位、サイラオーグ・バアル。2位、シーグヴアイラ・アガレス。3位、リアス・グレモリー。4位、ビルデ・グラシャラボラス。5位、デイオドラ・アスタロト。6位、ソーナ・シトリー。

そんな中、三位であるリアスのチームを半壊させた六位のソーナは、金星といつても過言ではなかった。

だがしかし、一位のサイラオーグと二位のシーグヴアイラが敗北を喫して、それ以上の大金星をビルデとデイオドラは上げたことになる。

「こと、ビルデは規格外だわ。自分の眷属は全員生き残り、サイラオーグのチームは全員が敗退した。サイラオーグもかろうじて生き残っただけだったもの」

「そのサイラオーグって人、そんなにすごかったのかい？」

詳しく知らないので、井草はそこがわからずリアスの言葉に首をかしげる。

そこに対して、アザゼルは静かにうなづいた。

「ああ、少なくとも、王^{キング}単体の戦闘能力なら文句なしにリアスやシーグヴアイラより強い」

そして、アザゼルが指を鳴らすと、若手悪魔の王六人のステータスが展開される。

其の中でも規格外なのがサイラオーグだ。魔力の値は全く見えないが、王のランクは

ビルデと同格でリアスやソーナを超える。そして、パワーと書かれた部分はほかの誰のどの素質すら引き離し、天上を横切り反対側の壁にまで届いていた。

次点がビルデの魔力だが、それでも天上には届かない。

その光景に井草が唖然とする中、アザゼルは告げる。

「サイラオーグってやつは、魔力を生まれつき持たないハンデキャップを背負っていた。だが、奴は若手悪魔の中でも規格外の力を持ち、消滅の魔力を持っていた次男を下してバアルの次期当主となった男だ」

「それって何ですか？」

「努力だよ。文字通り血がにじむほどのな」

イツセーが効くと、アザゼルは即答する。

「奴の戦闘能力は桁違いだ。既に最上級悪魔ともともに勝負ができるレベルだろう。はつきり言って、グレモリー眷属でも一対一でまともに戦える奴はいない。イツセーが女王に昇格しても、今のままじゃあ勝ち目がないだろう」

それほどまでの大絶賛をした男が、然し敗北。

そして、その映像が映し出される。

どちらも眷属は全員投入していない。

ビルデは女王のスリエールと書かれた人物が、所要により欠席と連絡があつた。仮面

をつけており、詳細がわからない。というより、ビルデの眷属は戦車の片割れのエウクレイテスというメンバーも仮面をつけている。

サイラオーグもまた、仮面をつけた兵士が欠席。こちらは名前も明かされていない。しかし、試合内容はすさまじいものだった。

ビルデの騎士もビルデの僧侶も、圧倒的な力でサイラオーグの眷属たち相手に有利に立ち回っていた。

騎士オギアと僧侶デイナは二駒使用しているらしく、その駒価値に見合うだけの働きをして、上級悪魔血族らしいメンバーを相手に二対一で立ち回っている。相手方の戦車エウクレイテスも高い素質を持っているのか、サイラオーグの女王を単独で追い込んでいた。

それに反して、サイラオーグの戦車2人は兵士たち四名を引き連れたビルデの残りの戦車であるラウバレルを相手に互角に立ち回っていた。

そして、サイラオーグとビルデもまた、真正面から戦闘を行っていた。

こちらに関しては、ビルデが試合開始直後から挑発を仕掛けてきたことが原因だ。

眷属を分散させながら堂々と独りで歩き「貴様を倒してやるから出てくるがいい。其れとも臆病風に吹かれたか？」などと挑発したらしい。

サイラオーグ・バアルは相手の挑戦は基本的に受ける性分らしく、それを承諾。

そして、壮大な戦闘が勃発した。

サイラオーグの力は圧倒的だった。間違はなく、その場の戦士で最強だった。

ただの拳の余波でビルデの壁が粉碎される。そして、放たれるビルデの魔力攻撃をたやすく弾き飛ばす。

「ビルデの魔力攻撃は、リアスとともに打ち合えるレベルだ。それをたやすくはじくアイツは本当に化物だな」

「ええ、さすがに二対一では絶対に勝てる気がしないわ」

アザゼルの評価にリアスも文句を付けず、納得している。

そして、その砲撃をたやすく防いだサイラオーグはそのまま拳を叩き込もうとする。

……情勢が動いたのは、そこからだ。

放たれるサイラオーグの拳。それに、ビルデは横から手のひらを合わせる。

そして次の瞬間、サイラオーグの拳はビルデに当たらず、さらにその体が地面にたたきつけられた。

『……まあ、あれだ。さすがに貴様に力で勝てるとは思わんよ』

思わず目を見開くサイラオーグにそう告げ、そしてビルデはぽんと手を触れる。

その瞬間、サイラオーグは一回転して地面に転がった。

その光景に誰もが目を見開く中、ビルデは静かにサイラオーグを見下ろし、断言する。

『だが、そんなものはいなせばいい。そもそも王の武力は護身ができれば十分だ』
『……なるほど、言うだけのことはあるようだ!!』

そして、その後の攻防は激しかった。

言葉だけで言うなら、ビルデが一方的に防戦に徹している風に見える。

だがしかし、サイラオーグの拳は完全にいなされ、ビルデに一発たりとも届かない。

それをなすのはビルデの魔力運用。

彼は攻撃以外の魔力を両掌に集中。それでサイラオーグの拳を的確に受け流している。サイラオーグの圧倒的な力を、防御する箇所を限定することで対抗しているのだ。

言うだけなら簡単だが、その難易度は桁違い。一発でも捌き損ねれば敗北に直結する。それをなす技量と胆力は、サイラオーグと同格かそれ以上だった。

そしてその打撃戦を凌ぎながら、ビルデは魔力を一発一発丁寧に叩き込んでいく。

ダメージは入らない。負傷にはつながらない。

だがしかし、すべての攻撃をいなされながら攻撃を当てられるという事実は、サイラオーグの評価を削っていく。

そして、それが十分もたったとき、状況が動いた。

突如サイラオーグがけいれんを起こしたかと思うと、そのまま地面に倒れ伏す。

『……………ふむ、ようやく聞いてきたか』

『貴様、何を……しいらあ』

すでに呂律も回っていないサイラオーグに、ビルデは何を言っているのかといわんばかりの表情を浮かべる。

そして、軽く肩をすくめると――

『なに、フィールドの商店にあつた物を調査して、筋弛緩剤を作らせてもらっただけだ。それを眷属に風下から流させてもらった』

――あつさりと、言い切つた。

筋弛緩剤。文字通り筋肉を弛緩させる薬剤だ。

そんなものを吸つてしまえば、筋肉でしか戦えないサイラオーグは動けなくなる。

『無論魔力を使えばシャットアウトできるが、魔力のない貴様では不可能だろう？

……レーティングゲームは素晴らしい。フィールドにあるものを運用して相手に毒を盛る程度なら、ルールの範囲内なのだから』

「ありなの!？」

井草は思わずツツコミを入れるが、リアスたちも哑然としていた。

そんななか、アザゼルはふむふむと頷いている。

「まあ、ソーナもフィールドにあつたショッピングモールの中のニンクを使ってギヤスパーを倒したしな。薬局や医院がある場所で、それを利用して戦術を組み立てるのはあ

りだな」

アザゼルはそういうと、苦笑する。

「ま、これに関しちやそんなことができるだけの知識量を持っているビルデ達が褒められるべきか。逆にサイラオーグは知らなくても無理はねえし、責められるべきじゃねえんだが……」

「……バアル家の上役は、ここぞとばかりに追求するでしょうね」

リアスが懸念を浮かべるように、サイラオーグもまた歯を食いしばりたがっているが、しかしそれもできない。

そして、そんなサイラオーグを見下ろし、ビルデは嘆息する。

『王が無策で一対一などという酔狂な真似をすとしても思ったか？ 戦場における王の役目とは本来、戦意向上以外に必要なものだ。こうして動かざるを得なかったのも、貴様の手抜きに合わせたハンデを負うためにすぎん』

その言葉に、サイラオーグが目を見開く。

そしてそれが何を意味するのか分かっていいのか、ビルデはうなづいた。

『ああ、貴様の兵士がどういふ物かは知っている。教えてもらったとも、貴様が魔力で防げるだけの薬毒すら防げんということも含めてな』

その言葉に、怒りによって震えだすサイラオーグだが、しかし反撃はできない。

すでに筋力は大幅に低下し、更にビルデも魔力で鎖を作り、拘束しているからだ。完全に詰んだこの状況。しかし、ビルデは決定打を放たない。

それどころか、すぐさま身をひるがえすと隠れていた兵士たちを引き連れ、即座に他の場所の戦闘に参加する。

まずはサイラオーグの女王に集中攻撃を行い殲滅。そして数の利を生かして戦車を叩き潰し、その後は分散して騎士と僧侶を倒していった。

ビルデの眷属たちは、兵士こそ傷だらけではあったが、しかしほかの眷属は軽傷ですみ、全員が健在。それに対して、サイラオーグの眷属たちは全滅。

この時点で勝敗は決していた。

しかし、全員でサイラオーグの元に戻ってきたビルデたちは、サイラオーグにとどめを刺そうとしない。

それを不思議がる井草たちだが、ビルデはその理由を説明してくれた。

『……さて、それでは勝利の宴をするでしょうか』

その言葉と共に、ビルデたちは酒すら取り出してサイラオーグの前で祝杯を挙げる。

しかしサイラオーグは動けない。

映像を見ていればわかる。サイラオーグに近くに、定期的に筋弛緩剤と思わしく薬物が散らされて、サイラオーグの動きを封じているのだ。

そして、ビルデたちはその影響を受けない。下級悪魔だろう兵士たちですら、平然としている。

その理由は単純だ。サイラオーグが一切持っていない魔力を運用して、筋弛緩剤を無力化しているから。

『すまん。私もこういう悪趣味な真似は好みではないのだ』

苦笑を浮かべてビルデは謝罪するが、しかし手は緩めない。

『だが、私が臨む未来のために、貴様は邪魔だ、ここで徹底的に地位を失墜してもらおう』
そして、サイラオーグに対して静かに嘲りの表情を浮かべる。

否、そこには嫌悪の表情すらあった。

そして、同時に敬意の表情もあった。

矛盾する感情を浮かべながら、ビルデは告げる。

『私は、貴様を戦士としては評価している。魔力を持たぬという圧倒的なハンデを乗り越え、我ら若手悪魔の中で最強の力を手にしたこと、心の底から認めているとも。貴様
は最強の戦士だ』

だがしかし――

『貴様は、悪魔としては落第点だ。魔力の有無以前の欠陥品でしかない』

――そう、はつきりと告げる。

『……聞くぞ、サイラオーグ・バアル。……貴様はバアルを継いだ時、自らと母を排斥した者たちに報復人事をする気があるか?』

その言葉に、サイラオーグは答えられない。

しかし、ビルデはかまわず続けた。

『自らを愚弄した下級共を僻地に追いやる気は? その権力をもつてして、豪遊をする気はあるか? おのが欲望の限りを満たさんとする気概はあるか?』

その言葉にサイラオーグは答ええない。

だが、目で感情を示すことはできた。

そこにあるのは、心底から否定。

そんなことはしない。ふざけるな。

そんな、誇りを汚された者特有の怒りの視線をぶつけられ—

『だから貴様は悪魔ではないのだ』

—それこそが答えだと、ビルデは告げる。

『悪魔とは、悪にして魔性なもの。自身の欲望を叶えるために生きるものだ』

そして、心底から嘆息する。

『利他のために動く貴様は、悪魔として落第点だ。魔力を持たないなどというレベルではない。冥界から消え失せよ、落伍者が』

その、心からの悪魔としての侮蔑の言葉を最後に、試合終了のベルが鳴る。そして、その映像が終了したその後、リアスは静かに告げる。

「……サイラオーグの後援者は、その全てがビルデの傘下になつたそうよ。ビルデはサイラオーグの弟のマグダレンを次期大王に推すことを条件に、それを受け入れたらしいわ」

「そ、そんな!? たった一回の敗北で!？」

イツセーが信じられないものを見るかのような顔になるが、しかしそこに嘘偽りはない。

アザゼルですら、仕方がないと言いたげにため息をついた。

「利用価値がなくなれば、すぐに手の平を返す。傲慢な悪魔の旧家共からすれば、思想は認められないが利権を得るには必要だつたサイラオーグよりも、それ以上の利益を与えてくれるだろうビルデに与する方が得だつてわけだ」

そして、静かに真剣な視線をイツセー達に向ける。

「覚えておけ。……これが、レーティングゲームだ。一度の敗北ですべてを失うこともある。ことサイラオーグは対戦相手の心を殺す気で挑んでいた。その反感もまた、大きかつたつてわけだ」

その言葉に、誰もが沈黙する。

井草はよく知らないが、サイラオグはリアスの親族だという。なら、リアスの古参眷属はよく知っていただろう。その人柄も、よく知られていたのかもしれない。

それがここまで無様な展開になっては、思うところもあるはずだ。

「……それに関しては次にしましょう。今は、ディオドラとシーグヴァイラの試合を――」
そう、リアスが気を取り直させようとした時だった。

突如床から魔方陣が展開される。

その魔方陣は転移に使用されるもの。そして、その紋章は――

「――アスタロト家の家門？」

祐斗がそうつぶやいた時、魔方陣から一人の少年が姿を現す。

「ごきげんよう、リアス・グレモリー。御相談があつてきました」

そこから現れたのは、アーシアにプロポーズをした少年悪魔、ディオドラ・アスタロトその人だった。

5 話

なんとなく悪魔同士の会話に混ざるのも気になったので、井草は外に出て缶ジュースを買ってくることにした。

で、戻ってきたら何やら大変なことになっていた。

というか、顔面に塩がたたきつけられた。

「はうおわあああああああ!?!」

「あ!?! ごめんなさいね、井草さん」

墮天使嫌いの朱乃が素で謝るぐらいのジャストタイミングだった。悶絶ものだった。顔面に見事に塩が直撃した。クリティカルヒットである。痛恨の一撃である。

三分ぐらい悶絶し、アーシアが持つてきてくれた水で塩分を流してようやく一息付けた。

いかに井草とてさすがにムツとする。かつての罪を償われたといった者たちにこの仕打ちを受けるのは、実にキツイ。

なので流石に反感を抱いた顔で軽くにらむ。

「酷くない？ 罪を償ったって認識してくれてたと思っただけど!」

朱乃にさすがに不満を言う井草だが、しかしなぜか頭を下げたのはアジアだった。

「すいません井草さん！ 私のせいでー」

「え？ かけたの朱乃ちゃんだよ？」

それで何でそういう展開になるのか。

まったくわからないが、イツセー達はアジアに意識を向けていた。

「気にすんな！ アーシアは悪くない!!」

「ああ、塩をまくのは朱乃副部長の当然の判断だ!!」

イツセーとゼノヴィアなど、ものすごい勢いである。

だが、それはそれとして井草としては不満がある。

少なくとも、罪を償ったと判断した彼らが、井草にこんな仕打ちをするのは理不尽で

はないだろうか？

そこに気づいたのか、リアスが苦笑しながらも不機嫌な様子を見せるという荒業を叩き込んできた。

「ごめんなさいね。ディオドラがあまりに悪趣味だから、塩をまくことにしたのよ」

「な、なにがあつたのさ？」

気になって聞いてみたが、確かにリアスたちが怒りそうな展開だった。

まずこのディオドラ、アーシアと自分の眷属をトレードしようと言い出した。

この時点で、眷属をモノ扱いする風潮かつ、好きな相手をその様なやり方で手に入れようとする考えにリアスが怒りを示した。

その反応を見て、ディオドラはさらに神経を逆なでするようなことをする。

あろうことか、次のレーティングゲームの勝敗で賭けを行ってきた。その勝敗でアーシアのトレードの了承を行ってきたのだ。

好きな女をモノ扱いするような態度に、その場で殺し合いが勃発してもおかしくない空気になったのは言うまでもない。

しかもディオドラはその口でアーシアに愛をささやいて、すり寄ってくる始末。

当然だが、イツセーはかなりキレた。そしてディオドラの腕をつかんでにらみつけるというまねすらしした。

そしてそのうえでディオドラはこう言い放ったのだ。

「下賤な下級悪魔^ゴことに触れられるのは不愉快だ」と。

今度はアーシアが珍しく怒り、ディオドラを平手打ちにすると、いう事態が勃発した。

しかしディオドラはにこやかなままで、あろうことかイツセー達に惑わされているという始末。

そしてアザゼルが連絡を聞いて、試合がちょうどディオドラとリアスになったのだ。

当然戦意は抜群である。

で、ディオドラが退出した後に塩をまけという話になった。そして、まいたタイミン
グで井草がドアを開けて、塩が直撃したのだ。

「……ねえ、まさかと思うけどディオドラが上級悪魔の平均ってことはないよね？」

心底不安になるが、リアスも苦労した表情になった。

「流石にライザーの方がましってところね。上級悪魔の中には他種族からの転生悪魔や
下級中級を差別するものも多いけど、あそこ迄なのはそこ迄……いないと思いたいわ」
「完全否定してよ」

心底からそう思い、井草はそうぼやく。

ここまでひどいのが割というのか。大丈夫か悪魔業界。

心の底からそう思い、井草はため息をついた。

その日の夜、井草は一人ディオドラの眷属の資料を見つめていた。

流石にディオドラにアーシアを差し出すという真似は看過できない。そんなことに

なってもアーシアが幸せになるとも思えない。そもそもアーシアの想い人はイツセーなのだから、方向性が真逆のディオドラは無理がある。

うっかりテンションに任せて賭けを飲んでしまったリアスやイツセーには後で苦言を呈す。しかし今更なかつたことにするとするのは、話に聞くディオドラの性格からして望み薄だろう。

なので少しぐらいは尽力できればと、井草もいろいろと調べてみたのだが――

「なんかこれ、妙だな」

ふと、違和感を覚える。

かなり精密に情報が書かれた眷属の情報ではある。

少なくとも、悪魔になってからの情報は精密だ。此処の能力はもちろんのこと、それ以外にも日常生活についても詳しく書かれている。

これだけで書いたものの性格が知れる。プライベートというものを、一切気にしていない書き方。この悪魔たちのことを道具程度にしか思っていない、人権を考慮しない書き方だ。

この時点で井草はディオドラに勝たせるわけにはいかないという結論に至る。

だが、井草はどうしようもない。何もできはしない。

レーティングゲームの勝敗で賭けを成立させた以上井草は眷属悪魔ではないのでか

かわれない。残念なことに、井草が常時イーツになってしまっている以上、眷属としての駒価値は五では済まないのでリアスの戦車の駒も使えない。

そして、これはどうすればいいのか本気で気になってしまう。

そして悩んで首をかしげていると、廊下の向こうからがやがやと音が鳴り響く。

「あ、井草さんの部屋なの、こゝろ？」

「おやあ？ お悩みのようすで、どないしましたか？」

「イリナさんにリムも、ちよつとぶしつけすぎなのですよ？」

と、天界・教会からの派遣組が顔をのぞかせる。

どうやらドアを開けたままだったらしい。悩んでいる様子を気づかれて、のぞき込まれてしまったようだ。

まあ実際のところ、井草の部屋は見られて困るようなものはない。家具に関しても基本的なもの一式だ。趣味的なものも自罰的なありかたゆえにろくにない。ギャルゲー主人公の部屋の方が、まだ凝った部屋になっているだろう。

直すべきだとは思っているのだが、さすがに一週間やそこらでは治らないというものである。

まあ、今回はそれに助けられたようなものなのだが。

「ああ、リアスちゃんとディオドラのレーティングゲームで、情報戦ぐらいは役に立てない

かと思つてね」

「ああ。結構質の悪い輩だそうすなあ」

直ぐに気づいたのか、リムが苦笑しながらぼんと手を打つ。

ニングとイリナも思い至つたのか、不機嫌な表情になった。

「とてもほめられた人格には思えないのです」

「ホントよ！好きな人を何だと思つてるのかしら!？」

まったくもつてその通りだが、井草はなんだか嫌な予感がしてならない。

そもそも、第一印象からして最悪だ。

あの時点では特に悪辣な真似をしてなかつたのにもかかわらず、井草はディオドラにナイアルのような印象を抱いていた。

あの時は失礼なことを想つたとすら思ったが、今ではそう思つてしまうことに違和感を覚えない。

何か嫌な予感がする。しかし、それを形にするには何か足りない。

ピースが足りない。証拠が足りない。物的な根拠になるものが、決定的に足りていないのだ。

そういうわけで、ダメもとで井草は相談してみる。

「あのさ、このディオドラの眷属たちんだけど、何かわかることないかな？」

「え？ どういうこと？」

と、のぞき込みながらイリナが首をかしげる。

とはいえ、井草も感覚的なものなので、詳しく説明することはできないのだ。

さてどうしたものかと首を傾げ、しかしふと気づく。

同じように興味深げにのぞき込んでいるリムとは別に、ニングが険しい表情でその資料を見ている。

そして、真剣な表情を井草に向けた。

「井草さん。この人、本当に転生悪魔なのですか？」

「え、あ、うん。確かにそうだけど？」

ディオドラがトレード用に持ってきた資料なのだ。間違っているとは思えない。

それを聞いて、ニングはさらに詰め寄った。

「転生悪魔になる前の情報は、ないのでですか？」

「……そういえば、ないね」

言われてみると、すごく気になるものだ。

転生悪魔になった後の情報は、個人のプレイヤーとを無視したレベルで書かれている。詳細にというレベルを超えたレベルでだ。

だが、転生悪魔になる前の情報が一切書かれていない。

転生直前の職業すら、書かれていなかった。

「そういや、この情報は不自然にばらつきがありやすねえ」

「そうね。っていうか、眷属を何だと思ってるのかしら？」

げんんな表情を浮かべるリムに同意するように、イリナが不機嫌な表情を浮かべる。

それは当然の不満だったが、ニングはそれに領かず、言葉を紡いだ。

「何とも思っていないのかもしれないのです」

「「え？」」

やけに確信した言葉に、三人がニングに視線を向けり。

そして、はっとなった。

ニングは、心底からの警戒の表情を浮かべて、その資料を凝視していた。

「すいません。ちよつと手伝ってほしいことがあります」

「……何かな？」

どうやら、この資料はアシアの将来以上に重要な何かが隠れているようだ。

その核心を覚えた井草にまっすぐに視線を向けて、ニングは汗を一筋流す。

「この人。どこかで見た覚えがあります」

6話

そして、ディオドラとリアスのレーティングゲーム開始の数時間前。

井草達は、プルガトリオ機関の資料室に来ていた。

ここには教会関係の資料の八割以上のコピーが揃っている。それは教会に入れない者達が殆どのプルガトリオ機関の者達が情報収集に困らないようにする為だ。

そうしなければならぬという事に、無情を感じる。聖書の神の死による、システムの不調。それが今に至り悲劇の一環であると思うと、井草も思うところはある。

だが、今はそれどころではない。

レーティングゲーム開始まで後数時間。既にリアス達は冥界に移動している頃合いだろう。

出来る事なら、その前にこの違和感の答えを知りたい。

だが……。

「数が、多すぎなんですよ、これは」

うんざりとした様子で、リムがぼやいた。

今は二手に分かれて行動しているが、しかしこれはかなりきつい。

……単純に資料が多すぎる。しかも、根拠に乏しい為他に人の力を借りたりするのも困難だ。

正直井草も気分転換をしたい。しかしどうしたものかとも思う。

とりあえず、探しながら世間話でもするしかないのだろう。まあ、それぐらいの気分転換はしてもいいだろう。

そう判断すると、井草はリムと共通の話題がないか考える。

そして、ふと気になる事があつた事に気づいた。

間違いなくプライベートに関わるのだが、しかしふと気になってしまふ。

そして、井草は長時間の資料探りで判断力が鈍っていた。

「……そういえば、リムってなんでプルガトリオ機関に所属しているのさ？」

つい、気になっていた事を聞いてしまった。

プルガトリオ機関。諸事情あり教会においておけない者達を集め、戦力として運用する事で居場所を作る事を目的とした機関。その特性上、任務の質に関係なく暗部組織と

して公式には認められない。

ニングはそうだろう。先祖返りの悪魔というだけでも、当時の教会には置いておけない。聖書の神のシステムが彼女の存在をスルーするなど前代未聞だ。信仰に悪影響が出ると判断するのも当然だろう。

だが、リムはどうしてなのだろうか？

本当に、ふと気になったのだが――

「ああ、私は犯罪組織がセクサロイド目的で作ったデザイナーズチャイルドっつーもんでしてねえ」

――想像以上に重い返答が来た。

一瞬で、精神的疲労で麻痺していた精神が正気に戻ってしまった。

「……………ごめんなさい」

付して詫びたい気持ちになった。

だが、リムは全く意に介さず資料をあさっている。

「別にかまやしません。確かに術式的にそういう技術を体に叩き込まれてやすし、定期的にそういう事しねーとホルモンバランスが崩れやすが、元からそういうもんとして生まれてんですから、そういうもんだと納得しちまってますしね」

本当に、リムはなんて事が無いように言い切った。

本当に、リムにとってはなんて事もないのだろう。

生まれた時からそういう存在。そしてそんな環境が当たり前。

だからこそ、リムからすればそれは当たり前でしかないのだろう。

だが――

「……リム、あえて言うよ」

これは、誰かが言わなければならない事だろう。

そして、井草はあえてそれを自分が言う事を決めた。

きっと誰もが言えなかった事だろう。だが、誰かがあえて指摘する必要がある事でもある。

そして、リムに恩のある自分がそれを言うのは、ある意味で恩返しだろう。

人によっては恩を仇で返すという形に受け取るのかもしれない。

だが、誰かが言わなければならぬ事ではある。そして、井草はそれを引き受けたい。それほどまでに、井草はリムに恩を感じている。

だから――

「それは、きっと不幸な事なんだよ」

――あえて、それを指摘する。

「ある種の悪意で産まれさせられる。そのスタートラインは、きっと不幸だ」

万人が、愛情を持って産んでもらえるわけではない。

祝福されない産まれはある。井草もその可能性がある。

だからこそ、言わねばならない。

「酷い事を言ってるのは分かっている。だけど、それを当たり前だと思っちゃいけない」
自分が不幸だと理解もできない。それはきつと、とても不幸な事なのだ。

もちろん、今のリムがその環境を気に入っている事も十分あり得る。ましてや、気のいい人達が集まっている駒王学園に転入してきた事は、きつといい経験になる。

だが、その始まりは、きつと不幸なのだ。

不幸なものは、それを自覚しなければいけない。出なければ、そこから這い上がる必要性も自覚できない。

「……そっか。私、不幸だったんですかい」

そして、リムはそれを受け入れた。

そこに驚愕はない。絶望もない。

だが、納得はあった。

「まあ、道具として生まれて暗部に引き込まれたら、普通不幸ですわな」

「ああ、それは——」

「でも良かったですぜ」

その言葉に、井草は目を見開いた。

何故、そんな事が言えるのか。

そんな思いを胸に振り返れば、そこにはリムがこちらを慈しむ様に見つめている視線が合った。

「だって、少なくとも一人救えちまったわけでしょう？」

「……あ……………」

確かに、そうだ。

少なくとも、リムと出会っていなければ井草は救われていなかった可能性がある。

自分の不幸を自分の所為だと思い、救われてはいけなすとすら思い込んでいた。そんな井草を救うのは、至難の業だっただろう。

たまたま関わっただけの、そんなリムやニングが井草の罪を知ったうえで許してくれたからこそ、井草は前を向く切っ掛けを得る事ができた。

そう、確かにリムの不幸は、井草の復帰のピースになったのだ。

「そりゃまあこちとら不幸なんでしょうがね？　んなもん気の持ちようですぞ？」

そんな風に、リムはなんて事が無いように言う。

それが、井草にとっては眩しくて――

「――リムは強いね」

そう、素直な感想が出た。

「ああ、強い。俺は君の強さに救われたんだよ、きつと」

そう、感謝の気持ちすら言葉に出た。

リムならそれを笑ってすましそうだと思ったのだが――

「……っ」

何故か、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

……落ち着け井草。そう、井草は自分を叱咤する。

これは違う。これは違うはずだ。勘違いするな、井草・ダウンフォール。

現実にはニコポナデポなどありえない。勘違いするな井草。これは違う、なんか違う。

もつとこう、惚れるきつかけつてもものが必要だろう現実には。

だがだとすればこの流れは何なのかと思うが、とにかく井草は自分を律する事にした。

そして井草達は、とりあえず平静を取り戻すとニング達と合流する。

同じく調べていたニングやイリナと話をして、きっかけを掴みたかった。

運が良ければ、2人が既に調べを付けているかもしれない。其れならそれで好都合だ。

と、思ったのだが――

「お、そちらさんが噂のイーツくんかい?」

と、そこにはなんとというか、微妙に軽そうな男がいた。

あと、そこそこの年齢の男性と、少年少女。

そして何故か、イリナと親しそうだった。

「お、お、おおっ!? こんなところになんて!」

「こんなところなんて言っちゃダメだって。プルガトリオ機関だって立派な教会の組織だろ?」

と、驚愕するリムに、軽そうな男がにこやかに言う。

どうやら、教会側の重要人物らしい。

「えっと、どちら様で?」

井草がそう言うのと、何故かイリナが胸を張った。

「ふふん! なんと、たまたまここに來ていた四代天使のAと、なんとなんとジョーカーと出くわしちゃったのよ!!」

その言葉に、井草も流石に面食らう。

つまり転生天使。

確かトランプを参考にはしているとは思っていた。しかし、まさかAが全員揃ったうえで、ジョーカーまでいるとは思わなかった。

「俺はウリエル様のA、ネロ・ライモンディさ！」

「ガブリエルさまのA、ミラナ・シヤタロヴァです」

「ラファエル様のAを務めている、ディートヘルム・ヴァルトゼーミュラだ。よろしく頼む」

「あ、これはどうもご丁寧に。神の子を見張る者の井草・ダウンフォールです」

と、丁寧に挨拶を交わす。

仮にも現状アザゼルの直属である井草も、四代天使直属の転生天使と立場的には近い。今後も関わる事は多いだろう。

となれば、ここで第一印象をしっかりとすべきではあるのだが――

「……ヤバイ。マジ気後れ」

「いやいや、あんまり気にしなくていいよ。和平結んでるしね」

と、ジョーカーらしき青年がにこやかに手をのばして握手を求める。

「よろしくね、井草きゅん。俺はジョーカーのデュリオ・ジュズアルドさ」

「ど、ども、よろしくです」

心底気後れするが、井草はとりあえず握手に応じる。

と、其れで挨拶も終わり、話は探し物に移る。

「でね、皆？　この人達なんだけど、心当たりないかしら？」

と、イリナが該当の眷属の写真を見せる。

転生天使達は皆一様に首を捻る。どうやら心当たりはないらしい。

「ふむ、だが何故彼女達が気になるのかね？」

デイトヘルムが当然の意見を言う。

確かに色々揉めている悪魔の関係者だ。過去の来歴だけが書かれていないのも気になる。

だが、冷静に考えればそれがどうしたというのだろうか。

まさに当然の意見なのだが、しかしニングは真剣な表情を向けた。

「色々と嫌な予感がするのです。なんていうか、片手間に聞いただけな気がするのですが、流れる的に見過ごせないような何かを感じるのです」

ニングの意見に、全員が考え込む。

事情は既に皆知っている。なので、真剣に気にしてくれている。

なにせセラフが直々に祈りを捧げる許可を出した悪魔である、アーシアが関わってい

るのだ。天使にまでなった信徒からすれば、少しは気に掛ける対象だろう。だが、それはそれとして誰も思い出せない。

ではどうしようもないと思ったその時、井草はふと思った。

「……だったら、ちよつと別ベクトルから攻めてみたらどうかかな？」

「別ベクトル？ 例えば？」

ネロがそう聞くと、井草は資料ページをめくりながら答える。

まあ、大した事ではないが気分転換にはなるだろう。

「他の眷属の情報だよ。一応記載されてたし、悪魔被い上がりなら、一戦交えた事も——」
そう言ったその時だった。

「……待ってくださいー！」

突然、ミラナが声を上げて、ページを掴む。

そして、いきなりページを開くと、目を見開いた。

覗き込めば、そこにいるのはディオドラの眷属の1人。

名前から判断してロシア系統。だが、それ以外にはあまり詳しく書かれていない。あくまで参考資料程度の内容だ。

「あ、ミラナさんは正教会の出身だったわね。……それで、どうしたの？」

イリナの言葉で、井草も少しは理解した。

正教会はロシアの派閥だ。其れなら、心当たりがあるのかもしれないが――

「……同期です」

震える声で、ミラナはつぶやいた。

そして、顔を跳ね上げる。

「この子、教会から行方不明になった同期のシストラです!!」

……その言葉に、一同が固まった。

シストラは正教会におけるシスターの呼び名だ。

しかしそんなことはどうでもいい。重要なのはそこではない。

教会の出身のシスターが、悪魔の眷属にいる。問題はそこだ。

「待ちたまえ。確かに悪魔の眷属にシストラがいるのは驚きだが、それを言うならリアス・グレモリーの下にいるゼノヴィアとアーシア・アルジェントのケースもあるだろう？」

デートヘルムが冷静にそう論すが、しかしその時飛び跳ねるように動いた者がいた。

「待つのです！ 確かこの辺りに……あつた!!」

そしてファイルを取り出すと、即座にページを開く。

そしてそのファイルの中に――

「あー、いたー！」

井草が思わず声を上げる。

そこには、探していたディオドラの眷属が映っていた。

疑問の一つが解消されるが、しかしそれ以上に不安が勝り始めていた。

ミラナの同期がディオドラの眷属にいた。そして、そこから連鎖反応でニングが思い至つたリストに、ディオドラの眷属がまた一人。

「……ニング、このリストは？」

井草は、微妙に震える声で問い質す。

凄まじく嫌な予感がする。

踏み込んではいけなしかももしれない。だがしかし、踏み込まなくてはいけないだろう。

そんな嫌な予感は、ニングが無言で示したファイル名で解消される。

—悪魔が関与したと思われる、教会関係者の行方不明者リスト。

「「「「「「……」」」」」」

ニングを除く全員が息をのみ、そしてすぐに行動に移った。

ディオドラの眷属のファイルと行方不明者のリストをばらし、総当たりで調べる。

結果、そのディオドラの眷属の大半がリストに名を連ねていた。

「ちよ、ちよつと！　これ……どういふこと?!」

「考えてみれば、おかしな事ではない」

イリナが動揺するが、デイトヘルムは比較的冷静だった。

彼はこの中でも最年長。ゆえに、教会と悪魔の戦いで起こった出来事の経験も多い。

故に分かる。これが、かつてはよく起こっていた事を。

「若い信徒が信仰だけの人生に疑問を持ち、そこを悪魔がついて眷属にする。……そんなよくある話だ」

「だけども、旦那！　それにしたって多すぎねえか!？」

ネロが反論するが、しかしこれに関しては井草が断言できる。

そう、井草は最初から勘付いていた。

デイトドラ・アスタロトと、無有影雄ことナイアル。その二人を連想するほどに、井草は本能で判断していた。

そう、これは単純な事。

「ただの性癖じやないのかい?　……シスターフェチなんて日本のエロスじや定番だよ。イツセー達もその手のエロビデオをちよくちよく見てた」

「場を和ますジョークなら、落第点ですぜ、井草」

リムが酷評し、そして舌打ちする。

「……こりゃ、アーシアに対する告白も本心とは思えねえですな」

リムの言葉は全員の意見だ。

ディオドラ・アスタロトの性格が、人間の視点では褒められたものでないのは既に分かっている。

そして、この眷属構成から見てディオドラがシスターを眷属にしたがる趣味なのはいまでもない。

ディオドラはアーシアにけがを治療された。しかし、それが切っ掛けとなつてアーシアは教会を追放される事になった。

全ての情報が、嫌な予感を皆に知らせてくる。

「……ですが、アーシアさんって人は墮天使に拾われていたと聞きます」

「それ、ディオドラの予定通りだったんじゃないかい？」

ミラナが最悪の予想を信じたくなくて言った反論を、デュリオは静かに首を振って否定する。

「その時アーシアちゃんって子は死にかけてたんだろ？ グレモリーの領地だから手を出し損ねただけで、その時にタイミングよく助けるつもりだったんじゃないかな？」

……非常に有効な手だろう。

教会から追放され、墮天使に利用された哀れな少女。その彼女がまさに命を落とそう

としたその時、助けに入る少年。その少年はかつて少女に救われた者で、彼らは運命の再会を果たす。

小説で定番のシチュエーションだろう。年頃の少女が実際に経験すれば、恋に落ちても不思議ではない。

……井草は吐き気と殺意を催しながら、即座に通信をアザゼルに繋ぐ。

『「なんだ、井草？ 俺はちよつと忙しくて」』

「アザゼル先生！ 直ぐにリアスちゃんとディオドラのレーティングゲームに待ったをかけてください!!」

そう怒鳴りつけてから、井草はこの情報を即座に伝える。

無論、和平を結んだ以上ディオドラを今から処罰する事は難しいだろう。

かつてのそういつたもめ事に関する事情を、ある程度は水に流さねばならないのが和平を行うにあたっての前提条件だろう。それはそれで軋轢を生むが、これがある程度受け入れねば、和平など不可能だ。

だがしかし、新たに生むというのなら話は別だろう。

少なくともディオドラには話をしなければいけない。

だが、アザゼルの返事は――

『駄目だ。俺の命にかけてもそれはできない』

「何でですかっ!?!」

信じられない。

確かにアザゼルは非道を許容できるが、外道ではない。

ましてやアーシアは自分の教え子だ。身内に甘いところのあるアザゼルが、見捨てるなどおかしいはずだ。

しかし、アザゼルは諭すように通信を続ける。

『井草、そこにいるイリナ達もよく聞け。――ディオドラは禍の団の旧魔王派と繋がっている』

その言葉は、青天の霹靂だった。

『あいつらはこのレーティングゲームを利用して、観戦しているゲストごと現魔王関係者を抹殺する気だ。……イツセーがヴァーリに忠告を受けた事と、ディオドラのアガレストとのレーティングゲームでの異様な力から裏が取れた』

確かに、ディオドラのパワーアップはおかしかった。

レーティングゲームにおいて苦戦しながらも、突如強大な力を発揮してアガレス相手に無双。そんな逆転劇で勝利を掴んだのだ。

それにはリアス達も懸念を示していた。いくらなんでも急激に戦闘能力が上昇しすぎていくと。

デイオドラは典型的な上級悪魔だ。才能と血統を重視し、努力を軽視する。自然な成長で強大な力を手に入れるがゆえに、特訓してまで急激に強くなるうという意識が薄い悪魔だ。

それが短期間での急激すぎる成長。カテレア・レヴィアタンが使用していたというオーフィスの蛇を連想する事も十分あり得る話だった。

『……リアスには悪いとは思っている。最悪、俺の首を物理的に飛ばす事も覚悟の上だ。だが、禍の団の有力派閥である旧魔王派を潰すこのチャンス、逃すわけにはいかなかった』

「……ああ、もう!!」

気持ち痛いほどよく分かるから、怒るに怒れない。

だが、だからといってこのままにはしておけない。

「先生！俺も一枚かませてください!! ……資格がないのは分かっていますが、デイオドラの奴は殴らないと気が済まない!!」

その言葉に、沈黙が僅かに響く。

『……言っても聞きそうにねえな。リアス達には言うな。これが飲めるならフィールドに緊急対応班としてお前らを潜り込ませてやる』

「当然。知らせる前に終わらせます」

こんな事はアーシアに知らせるわけにはいかないだろう。

世の中には、知らなくていい事もある。特に人生を大きく揺り動かした出来事の裏にあつたのは、まさに最悪の真実だ。

アーシアが知る前にカタを付けるべき。これはそういう内容だ。

そして、井草はニング達に振り向くと、頭を下げる。

「……力を貸してくれないかな？ 流石に、俺一人だと俺が死にそうだ」

そう簡単に死ぬわけにはいかない。それでは伊予と五十鈴を止めれない。

正直心苦しいが、人に頼る事も必要だ。

そして、彼女達はむしろ心外だといわんばかりの表情だった。

「行くなつつつても行かせてもらいますぜ？」

「こんな話、黙っていられないのですよ」

「その通り！ アーシアさんの友達として、ディオドラ・アスタロトは裁いてあげるわ！！」

リムの、ニングの、イリナの言葉に井草は自然と微笑んでしまう。

自分は、アーシアは、本当に人に恵まれた。

「三人とも、ありがとう！」

そして、八人は走り出した。

八人は、走り出した。

「「「え？」」」

うち四人が振り返る。

具体的には、井草とリムとニングとイリナが振り返る。

そして、四人を見る。

具体的には、デュリオとネロとデイトヘルムとミラナを見る。

「……なんでついてくるのです？」

代表して、ニングが聞いてみた。

それに対して、心外だといわんばかりに苦笑しながら、デュリオが告げる。

「ちよつとちよつと。今の話を聞いて、天使になった信徒が黙っていられるわけないでしょ？ 俺らも力貸すよ」

「その通りだ」

と、デイトトヘルムがそれに続いた。

「それに、こういう事態を転生天使や墮天使、悪魔が共同して阻止すれば、「実際に悪行をしている悪魔の処罰まで妨害されている」悪魔祓い達の不満も抑制できる。誰もが得をする行動だろう」

確かに、今回のデイオドラの行動は悪質極まりない。

それでも和平を結んだ以上、其れだけで罰するのは困難だ。

だがしかし。デイオドラがこれだけの事をしでかしてくれたのだ。徹底的に処罰すれば教会側のガス抜きに使う事ができるといふものである。

「まったく！ 悪党をぶっ飛ばすのは俺の特技だしな。頼ってくれていいぜ？」

「同期を助けたいです。手伝わせてください」

と、ネロもミラナも乗り気だった。

……井草は一瞬考えこむ。

そして、決意した。

「正直な話、俺にデイオドラを殴る資格はない。……俺はかつて下衆な行為をしたから、

ディオドラと同じ穴の貉となじられれば、反論できない」

大まかにだが、自分の事情を説明する。

何時かは詳しく話す機会があるかもしれない。その時は嫌われるかもしれない。

だが、彼らにはあえて静かに受け止めてくれた。

それに感謝し、井草は走りながら頭を下げる。

「……それでも頼む、友達を助けるのを手伝ってくれ」

井草の言葉に、デュリオがはっはっはと笑い飛ばす。

そして、にやりと笑った。

「勿論さ。これでも俺、前からいい悪魔や堕天使とは仲良くしたかったんだよ。今度美

味いもん食べに行こうぜ、井草きゅん」

「あ、だったらグレモリー眷属と一緒に打ち上げしやしようぜ?」

などとリムがのっかり、皆が苦笑した。

そして、全員が転送魔方阵の上に乗る。

「……さあ皆! 悪すぎる悪魔をお仕置きしに行くわよ、アーメン!!」

イリナの決意表明と共に、全員が一気に転送された。

7 話

そして数十分後、イツセー達はレーティングゲームのフィールドに転送される。

転送されたフィールドは、古代遺跡と思しき建築物がいくつもある、広大なフィールド。

どうやら、今回のレーティングゲームは今までとは経路が違うらしい。

ライザー・フェニックスとのレーティングゲームでは、駒王学園のレプリカが使用された。

ソーナ・シトリーとのレーティングゲームでは、駒王町近辺にあるショッピングモールが使用された。

どちらもフィールドとしてはこのフィールドとは比べ物にならないぐらい小さい。どうやら今迄よりも戦略的な戦闘をすることになるのだろう。そうイツセーは考える。

ディオドラは単騎で、リアスより格上と評されたチームを圧倒するほどの力を持っている。前評判ではリアスより下の評価だったが、全く信用できなかった。アザゼルが見せたステータス表も参考にならないだろう。

だがしかし、単純なパワーならまともにやり合える者たちは何人もいる。聖剣アスカロンとデュランダルに、聖魔剣という、悪魔の天敵ともいえる力もある。

単騎で突貫してくるなら好都合。集中砲火で叩き潰せばいい。

それより眷属と連携を取ってこられた方が厄介だ。こちらはまだ戦車が一枠空いている。その上、イツセー自身が駒を八駒も消費しているので人数では確実に負けるのだ。数を生かしたからめ手で来られると苦戦必須である。

と、そこまで考えて、イツセーはふと気づいた。

……いつもならもうなされているはずの、侵犯のアナウンスが全く聞こえてこない。

「……おかしいわね」

リアスもそれに違和感を覚えたのか、ふと辺りを見渡す。

リアスやイツセー以外のメンバーも、げんげんな表情を浮かべている。やはり彼らから見ても違和感があるらしい。

そしてその瞬間、周囲を霧が包み込んだ。

「……へ!? こんな近くでいきなり!?!」

「違うわ! これは悪魔の転送魔方陣じゃない!!」

フィールドの広大さを無視した近距離での短期決戦を予想したイツセーだが、リアスはそれを否定する。

ギヤスパーが震えるのも当然。これはあまりにも非常事態。

だがしかし、イツたちはこちらを囲むだけで誰一人として攻撃してこない。それに誰もが首をひねったその時――

「キャッ!」

突如アーシアの悲鳴が聞こえ、イツセー達は振り返る。

しかし、そこには誰もいない。アーシアの姿が欠片も見えない。

「アーシア!? どこだ!?!」

「い、イツセーさん!!」

イツセーの声にこたえたアーシアの声は、イツセーたちの上方。

振り上げば、そこにはアーシアをとらえたディオドラの姿があった。

「やあ、リアス・グレモリーに赤龍帝。アーシア・アルジエントはいたかくよ」

「……てめえ、アーシアを放せ!! ゲームで決着をつけるんじやなかったのかよ!!」

イツセーの叫びに、ディオドラは表情を変える。

それは、今迄の優男じみたさわやかな笑みではない。邪悪という言葉が実に似合う、醜悪な嘲笑だった。

「馬鹿じゃないのかい? そんな面倒なことでアーシアを手に入れる気なんて、さらさららないよ。君たちはここでムー同盟から派遣されたイツ部隊に殺されるんだ」

ムー同盟。ムートロンが提供したイーツを軍事力として運用する、小国の連合組織。その時点で禍の団の技術供与を受けていることは断定されていたが、ここにきて本格的に異形たちとの戦闘にまでかかわってくるとは、想定外だった。

そして、彼らの協力をうけ、彼らがディオドラの行動を待っていたことから、答えは一つ。

「あなた、禍の団に通じていたというの!! しかもゲームまで穢し、私の可愛いアーシアを奪い去ろうとするなんて!!」

すべてを察したりアスの怒りの視線を、ディオドラは涼しい顔で受け流す。

そして、堂々と首肯した。

「彼らについた方が、僕は好きなことを好きなだけできそうだからね。和平のせいでも困っていたんだよ」

そう言い放つと、ディオドラはしたで唇をべろりと舐め、アーシアに視線を向ける。

その目は、愛情ではなく情欲が彩られていた。

「君たちが悪あがきをしている間に、僕はアーシアと契らせてもらうよ。意味は分かるね、赤龍帝? 文句があるなら神殿の奥に来てみるといいさ」

「て……………めえ……………っ!!」

奥歯をかみ砕かんばかりに、怒りに震えるイツセー。

しかし、其れより先にゼノヴィアが動いた。

「イツセー！ アスカロンを!!」

「ああ!!」

即座にイツセーはアスカロンを射出。ゼノヴィアはそれを受け取り、ディオドラに切りかかる。

だが、ディオドラも決して雑魚ではないのか、素早くその攻撃を回避して反撃の魔力をはなつ。

ゼノヴィアはそれを聖剣で防ぐが、そのせいで距離を取られてしまった。

「イツセーさん！ ゼノヴィアさー」

アーシアの声も転移と共に掻き消える。

そして、それと同時にイツツたちが一斉に攻撃を開始した。

ディオドラの転移を合図に攻撃を開始するのが最初からの作戦だったのだろう。攻撃開始の声すら、マイクなどを使用したのか聞こえない。

人間の軍隊のプロらしい動きに、イツセー達は反応が遅れ――

「ほっほっほ。尻を触る暇もないわい」

――そんなのんきな言葉と共に、その攻撃がすべて霧散される。

そして、それをなした人物が、いつの間にかイツセー達をかばうように立っていた。

長いひげを顎に蓄えた、隻眼の老人。

そして、イツセーは其の人物を知っている。

「お、オーデインの爺さん!」

「オーデイン様!」

イツセーとともにリアスも叫ぶ。

2人は、ソーナとのレーティングゲーム終了後にオーデインの挨拶を受けた。なので、顔はよく知っている。

北欧神話の主神にして、戦争と死の神。片目を大小に絶大な魔術の知識を得たことでも有名である。

そんなオーデインが、あごひげをさすりながらうんうんとうなづく。

「まだまだ甘い、イツの攻撃もそこそこのものじゃな。ムートロンの技術、侮れんわい」

「いや、爺さんこそなんでここに!? っていうかどういいう状況!」

のんきなオーデインに、イツセーは思わずツツコミを入れる。

大絶賛集中攻撃を喰らっているのだが、どこ吹く風のオーデインである。アジアが誘拐されて気がでないイツセーとしては、大声もあげたくなる状況だった。

「いや、相手は北欧の主神なんだけど、イツセー君!」

「……無礼すぎでは」

祐斗と小猫はイツセーに、呆れが一周回った感心を覚えてしまっていた。

そしてオーデインは気にもせず、あごひげをなでながらイツセー達を見渡す。

「端的に言うぞ？ このゲーム、禍の団の襲撃を受けておる。貴賓席がある会場も攻撃を受けておる真つ最中じゃ」

「そんな、そこまでののですか!？」

リアスが思わぬ事態に驚愕するが、オーデインはしかし平然としている。

「今は運営側と各勢力の神々が連携を取って迎え撃つとる。あと、手を引いていたのはアスタロトの坊主じゃ。急激なパワーアップもオーフィスの蛇じやろうて。……少しうるさいのう、グングニル」

会話をいったん切って、オーデインは槍を構えるとオーラをはなつ。

そしてそのなんとなくはなつたいちげきで、イツが数十体まとめて跡形もなく吹き飛んだ。

それに警戒したのか、イツ部隊が散会してそれぞれ物陰に隠れたりしながら警戒の色を向ける。

それを半ば無視して、オーデインは再びイツセー達に向き直った。

「そして意外なことに、結界の方が強大な上、そこそこの戦力が送られておつてのお。こ

れはまずいということ、結界に侵入できるレベルの力を持つ儂が、部隊を引き入れるついでに物見遊山でおぬしらを助けに来たというわけじゃ」

「この目があればなんとかなるしのお」といいながら、オーデインは義眼を自慢げに見せる。

その義眼を見て背筋が凍る思いをする一同だが、すぐに気を取り直した。

そして、それに合わせてオーデインも槍を構える。

「結界の使い手もなかなかやりおる。わしが破れぬ結界などそうそうないんじやがお。ま、これだけはお前たちに渡してくれと、アザゼルの小僧に頼まれておったのじゃ。ほれ」

そういいながら、小型の通信機がオーデインの手からイツセー達に渡される。

そして、オーデインは槍を構えるとイツツ部隊をにらみつける。

「ほれ、ここはこの爺に任せて神殿まではしれ。北欧の主神が戦場で援護するなど、滅多にない機界じゃぞ?」

「え、でも。爺さんは大丈夫なのかよ!?!」

流石にイツセーは心配になるが、しかしオーデインはほっほっほと笑う。

「なに、若いもんは心配されるほど儂は弱くないわ。北欧の主神じゃぞ、これでも。……それに」

その瞬間、オーデインから莫大なオーラが放たれる。

イツセードころかヴァーリですら勝てないだろう圧倒的なオーラをはなつ中、オーデインは静かに告げる。

「……奴ら相手におぬしらをかばい切れる自信がない。悪いが足手まといじゃ」

その言葉と共に、2人の男が現れる。

見たことのない人物だが、人形のような勘定の鬱さない男と、明らかに危険人物と思われる狂気をもった男。

そして、その軍服が所属を示していた。

「ムートロンの幹部?!」

「……了承する。ムートロン先遣艦隊、特務旅団所属、ブラツクス」

「シュゴラーンだ。俺は強い奴には興味ねえ。いたぶりがいのあるお前らの方が楽しめそうだなあ?」

『『バイアクハー』』

瞬時にバイアクハーイツツへと変化し、同時に仕掛けるムートロンの幹部。

ブラツクスはオーデインに、シュゴラーンはリアスたちにその武装を向け――

「愚か者。貴様らは儂一人で十分じゃ」

その直後、オーデインが放った魔術の弾幕を回避するため、いったん距離を取った。

そしてその隙を逃さず、オーデインは声を張り上げる。

「行け！ きやつらを相手にしたうえで、おぬしら迄かばうのはさすがに骨じゃ!!」

その言葉を背に向け、イツセー達は走り出す。

悔しいが、主神と魔王クラス2人の戦いに割って入る能力は、今だイツセー達にはない。

そして、その圧倒的な破壊の嵐を追い風に、イツセー達は神殿まで一目散に走りだした。

8 話

イツセーたちが神殿に到着したころ、通信機から通信が届く。

『—お前ら、無事か!』

「アザゼル!」これはどういふことなの!」

通信機から漏れるアザゼルの声に、リアスが怒鳴りつける勢いで詰問する。

当然といえば当然だ。オーデインの話によれば、どうもディオドラの内通はある程度予測されていた節がある。

にもかかわらずこの事態。どういふことかと聞きたくなるのは当然だろう。

そして、アザゼルもそのあたりは想定範囲内だったのか、静かに語りだす。

『イツセーがヴァーリに、ディオドラについて忠告を受けた件は知っているな? その時点でディオドラが禍の団に内通していることはほぼ確定していた』

その言葉に、イツセーたちがわずかに息をのむ。

そして、アザゼルは追加で驚くべき報告を告げる。

『そしてこちらはこつちの想定外だ。ビルデ・グラシヤラボラスがクーデターを引き起

こした。それに呼応してビィディゼ・アバドンを筆頭とするレーティングゲームのトッププレイヤーが賛同してやがる』

「……なんですつて!?!」

その言葉に、リアスは本心から絶句した。

ビルデ・グラシヤラボラス。リアスたちと同時期のレーティングゲームにて、若手最強と称されたサイラオーグ・バアルを圧倒した若手の規格外。

ビィディゼ・アバドン。レーティングゲームのトップランカー。三位の地位に立ち、魔王クラスとすら称される最強格の純血悪魔の1人。

この冥界でもトップクラスの知名度を發揮しているだろう二人が、冥界でクーデターを起している。

その事実には、リアスはアーシアのことを一瞬忘れるほどに驚愕してしまった。

『……そっちのクーデターは、旧魔王派が逃れた辺境側に集中し、同時に数多くの下級や中級悪魔……転生悪魔じゃない純血悪魔の類が移動してやがる。大型の空飛ぶ機械の船が現れて、そいつらを輸送しているそうだ。護衛はイーツだよ』

どう考えてもムートロンである。そんな超科学文明はムートロン意外に考えられない。

まさかの二正面作戦に、リアスたちは歯噛みする。

それはアザゼルも同意見だったのか、通信越しですらしたうちの男が聞こえてくる。『とにかくだ、旧魔王派が俺たち首脳陣の抹殺をもくろんでテロを起し、そこについてビルデがクーデターで戦力を確保しつつ考えだろう。おそらくどっちにも切り札がある』……どうやらこの戦い、カウンターのつもりが後手に回っているな』

「……先生！ そんな事より、アーシアがさらわれたんです!!」

イツセーはそういうほかない。

確かに、ビルデが起こしたクーデターは緊急レベルというほかない。

だが、それと同じぐらいアーシアの身も危険だ。そちらをまずどうにかしなければならぬだろう。

アザゼルも想定外だったのか、再び舌打ちの音が聞こえてくる。

『そうきやがったか！ ……だが、そつちには別動隊が向かっている。おまえらは神殿内部の避難スペースに避難を—』

アザゼルはそう言うってくるが、しかしそれは聞けない相談だ。

「いえ！ 俺たちが助けに行きます!!」

『……状況、わかってて言ってるのか?』

通信機越しから怒気が漏れるが、しかしイツセーは引く気はない。

「半分も分かってないです！ だけど、アーシアは俺たちの大事な仲間です！ 俺たち

が助けに行かないで、どうするんですか!!」

その言葉に、リアスたちも皆頷く。

誰もが、仲間の救出を誰かに任す気はなかった。

「そうね。私の眷属を奪い、レーティングゲームを汚したディオドラをそのままするのは我慢できないわ。これはグレモリー家次期当主としての決定よ」

「先生？ たしか、わたくしたちは三大勢力で不審な行為を行うものに実力行使をしてもいい権限がありますわ。今がまさにその時ですわよ？」

リアスと朱乃も続き、アザゼルも通信機越しに唸る。

実際、目の前で愚行を行ったディオドラを、処罰権限のあるものが処罰するのは当然の行動だ。ここに関しては何の問題もない。

やがて、アザゼルもため息を漏らして折れた。

『へいへい。悪魔らしく口が回るこつて。わかった、譲歩する。アーシアの救出には参加してもいい。だが、アーシアを確保したらすぐにお前たちは避難しろ。最低でもアーシアはディオドラから隔離しろ』

そして、静かに一息ついてからアザゼルは告げる。

『……ディオドラの眷属の詳細情報を井草たちがつかんだ。アイツの眷属の大半は、教会から行方不明になっていたシスターや聖女だ』

その言葉に、寒気が走る。

ディオドラの腐り果てた性根とその情報で、最悪の方程式が生まれる。アーシアとの出会い。そしてそこから生まれるアーシアの波乱万丈の人生。それらすべてに、薄ら寒いものが見え隠れする。

誰もが怒りに燃え、震えるが、しかしすぐに鎮静化する。

なぜなら、その誰よりも怒り狂っているものがすぐ近くにいます。

「……先生」

『ああ、わかっているさイツセー』

イツセーとアザゼルは、お互いが何を言いたいか理解した。

『……ディオドラが追撃してきて、かつ投降しないのなら殺して構わねえ。責任は俺がとる』

「殺しはしません。だけど、アイツは一生後悔させてやらないと気が済まない……!!」

逆鱗。下位の龍ですら上位の者に追いつくほどの力を発揮させる、決して触れてはいけない部分。

ディオドラ・アスタロトは、兵藤一誠の逆鱗を踏み抜いた。

そして――

「あ、ごめんね？ ナイアルさんから邪魔するように言われてるんだ」

その言葉と共に、熱が空から注がれる。

その、殺意のない熱に空を見上げれば、そこにいるのは灼熱の毛皮を纏う、一人のイー
ツ。

「だから、おとなしくしてないなら、殺しちゃうね？」

クトウグアイーツ。行仁伊予。

龍王とすら渡り合える猛者が、イツセーたちを強襲した。

「さて、これで準備は完了したか」

そう告げるのは、ディオドラでも彼の眷属でもなかった。

眼鏡をかけた一人の青年が、アーシアを謎の装置に拘束して、嘆息する。

「後は任せるぞ、ディオドラ・アスタロト」

「ああ、礼を言うよ、ゲオル……クだっけ？」

忘れかけた名前を思い出し、ディオドラは舌なめずりをする。

そして、アーシアに対してどろどろとした悪意のこもった視線を向ける。

それを見ながら、英雄派の幹部であるゲオルクは内心で吐き捨てる。

（まったく、この程度のやつに権力を持たせるとは、シャルバたちもどうしようもないな）

蛇をもつてしても、自分クラスの英雄派の幹部なら一蹴できる程度の実力しかない。あのアジユカ・ベルゼブブの親族とは思えない小物。それがゲオルクによるディオドラの評価だ。

シャルバも血筋だけの馬鹿だとは思っているが、ディオドラはさらにその上を行く。ムートロンとしては使いやすい駒という認識なのだろうが、正直彼らと共闘するのは困ったものだった。

今も嬉々として、アーシアに自分がしたことを喜んで語っている。

……聞くに堪えない。すぐに帰ることにしよう。

既に仕事は負えている。若干手を抜いたが、自分が作った結界装置は神滅具ですら破壊するのは困難だろう。

ゆえに、問題はないと判断し――

「……ディオドラ」

「なんだい？　ここからがいいところなんだけど――」

愉悦を邪魔され、不機嫌になったディオドラに、ゲオルクは舌打ちと失望の表情を向

ける。

「気づいてないのか？ 直ぐに戦闘準備を取れ」

そういうなり、即座に魔方陣を展開、攻撃魔法を一斉に放つ。

その出力は一つ一つが上級悪魔の全力に匹敵。あたれば最上級悪魔でも負傷は免れないだろう。

その行動にディオドラはげんな表情を浮かべ―

「ディオドラ・アスタロトおおおおおお!!!」

その攻撃をかくぐつて突撃を仕掛ける、イーツ化した井草に面食らった。

「な、お前はリアス・グレモリーの―」

「同じ穴の貉の俺が言うのもなんだけど―」

ディオドラの言葉を聞く気もなく、井草は踏み込み―

「―お前だけは、ぶちのめす!!」

その顔面に、遠慮なく拳を叩き込んだ。

圧倒的な威力で吹き飛ばされたディオドラを、井草は追撃するべく突撃する。

それにあっけにとられたディオドラの眷属が我に返るより早く、ゲオルクは即座に魔方陣を展開。

だが、それはディオドラを助けるためのものではない。井草を屠るためのものでもない。

追撃してくる、新たな敵達に対するためのものだった。

「来るぞ、迎撃しろ!!」

放たれる魔法は攻撃ではなく迎撃。

一斉に投射された光の槍を、その魔方陣が一斉に相殺する。

「……防がれちゃった」

残念そうな声を出すのは、ガブリエルのAであるミラナ・シャタロヴァ。

そして、彼女を追い抜き拳を構えるのは、ウリエルのエース、ネロ・ライモンディ。

「覚悟しな悪党! 聖……拳!!」

聖なるオーラが付与された拳が、ゲオルクに向かって振るわれる。

それをゲオルクは霧を生み出して、防ぎ切った。

十三ある神滅具の一つ、ディメンション・ロスト 絶霧。

強大な結界にして、強大な転移装置である霧を生み出し操る神滅具。上位神滅具の一つと称されるそれは、セラフ直属の転生天使の打撃すら防ぎ切る。

そしてカウンターの魔法が直撃し、ネロはのけぞった。

しかしそれはジャブ。本命である大出力の魔法攻撃がとどめとして放たれる。

しかし、その攻撃によるダメージはネロに先ほどの魔法と同等のダメージしか与えなかった。

「神器か！」

「その通り！」

その言葉とともに、新たな聖拳が連打で放たれる。

そして、その体の負傷もまた即座に回復される。

「カパーをする身にもなつてほしいものだ」

軽くため息をついたのは、ラファエルのA、ディートヘルム・ヴァルトゼーミユラー。

そして、我に返ったディオドラの眷属たちが攻撃を開始しようとし――

「あら、させないわよ？」

真つ先に動いた女王の首元に、ミカエルのAであるイリナの光の剣が突き付けられる。

さらに其れに動揺した隙をついて、光の弾丸と魔力弾が牽制のために床に着弾した。

「はいはい！ その辺で無理無茶無謀はやめときやしようぜ〜と」
「ディオドラ・アスタロトに従う必要は、ないのでですよ」

リム・プルガトリオとニング・プルガトリオの2人の牽制に、ディオドラの眷属たちは動きを止める。

そして、最後に現れた男の放つ攻撃が、ゲオルクですら防ぐのが困難な数値として叩き込まれた。

そしてそれを防ぎ切ったと思ったその瞬間、大気の流れが霧をはぎ取り、あらぬ方向に流していく。

「我が霧を!? この大気の流れは、禁手か!?!」

「—いいいや? 俺は禁手を使う相手は選ぶ主義なんだよね?」

驚愕するゲオルクにそう答えながら、ジョーカー、デュリオ・ジユズアルドが姿を現す。

そして、涙を流すのも忘れて唾然とするアーシアにほほ笑んだ。

「この調子だと、知られちゃったみたいだね。だけど大丈夫、俺たちが来たからにはあいつらしつかりボコつとくからさ?」

「その通りよ!! 安心して、アーシアさん!!」

デュリオに続き、イリナもまた声を張り上げる。

「私達が来たからには、もう大丈夫!! デイオドラ・アスタロトなんてボコボコにしちゃうんだから!!」

そしてさらに視線をデイオドラの眷属たちに向ける。

「あなた達もよ!! デイオドラなんかに従う必要はないんだから、投降して頂戴!!」

その言葉に、戸惑うものもいたが戦意を絶やさぬものもいた。

「ふざけるな! 我々を舐めるのもいい加減にしろ!!」

「そうだ! デイオドラ様に恥はかせられん!!」

「転生天使たちは私達が倒すんだから!!」

その敵意に満ちた言葉に、デユリオは軽くため息をつく。

「あーうん。ま、そう簡単に説得するのは難しいんだろうね。でもさ?」

「そういいながら、デユリオは両手から大量のシャボン玉を生み出すと辺りにばらまいた。

「それが、本当に大切なもんなのかは試させてよね?」

そして、シャボン玉は辺り一面に広がり、その場にいる者たちに触れ手ははじける。

そして、デイオドラの眷属たちは皆が一様に涙を流した。

「あ……………あ……………」

「……………え? なん……………で?」

その涙は、悲しみなのか喜びなのか。

その光景を見て、ゲオルクはげんげんな表情を浮かべる。

「これは……？　精神干渉の禁手か何かか？」

「いや、ちよつと違う。これはただの応用技だよ」

ゲオルクの推測を、デュリオは否定する。

「これはね、触れた人の大切な思い出を思い出させる技さ」

そして、デュリオはしずかにディオドラの眷属たちに微笑みかける。

「悪いようにはしない。天界のジョーカーの名に懸けて誓うよ。だから、シスターだった頃が大切なら、降参してくれないかな？」

その言葉に、ディオドラの眷属たちはほとんどが崩れ落ちる。

崩れ落ちなかった者たち数名も、勝ち目がないと悟や投降の意思を示した。

そして、そこにいる禍の団はゲオルクただ一人。

「これは……まずいか？」

想定外の事態に、ゲオルクは舌打ちする。

そして、デュリオは状況がこちら有利に傾いたと確信して、イリナ達の方を向いた。

「アーシアちゃんたちを連れて、先にグレモリー眷属の子たちと合流してよ。ここは俺たちで十分だと思っからさ」

「そ、そうなのです！ 井草さんも心配なのです!!」

「そうですな。ほら、行きやがりますよ！ そっちもつて!!」

「任せて頂戴！ あ、意外と重い……っ」

そうして、イリナとリムとニングがアーシアを結界装置ごと連れて合流のために先行する。

それを見送りながら、デュリオはゲオルクを向き合った。

「じゃあさ、できれば投降してくんない？ おれとの相性が悪いのは、もうわかったと思うんだけど」

「確かに、これでは逃げるのも困難だな……っ」

じつさい、デュリオはゲオルクに取っ払い相性が悪い相手だ。

絶無は優れた防御力を持っている、最硬の神器だ。だが、霧である以上どうしても軽い。

大気の流れにより霧を排除できる、デュリオとの相性はかなり悪い。

加えて、神器そのものが相性を通り越した差を持っているのも事実。それを、ゲオルクは嫌というほど思い知った。

「曹操の聖槍に継ぐ、準最強の神滅具、煌^{ゼニス・テンベスト}天雷獄……！ まさか、ここ迄とは……っ」

その言葉に、デュリオは苦笑を浮かべながらうんうんとうなづく。

「ま、そういうこと。俺もさ？ あんたたちが何でこんなことしてるのかわからないけど、あんまり酷いことしたくないんだよねー」

だから、投降してほしい。

そう言おうとしたその時――

「いや、させるわけないでしょ？」

高速で飛来する液体が、デュリオにたたきつけられる。

とつさに氷の防壁で防御したデュリオだが、威力を殺し切れず勢い良く吹きとばされる。

「「デュリオ!？」」

弾き飛ばされたデュリオに声をかける三人のAを通り過ぎ、突撃するのは外套を身にまとった緑のイーツ。

「ゲオルク！ あんたはそいつら抑えてなさい、適度なところで撤退!!」

「了解した。任せるぞ、枢五十鈴!!」

ゲオルクの言葉を背に受け、天界の切り札に襲い掛かるは、ムートロンの飼犬。

ハストウールイーツ、枢五十鈴。ここに戦場へと突入。

9話

放たれる灼熱の奔流に、グレモリー眷属は拮抗していた。

放たれる灼熱の奔流の火力は、最上級悪魔クラス。それがあつた程度の連射速度で放たれたことで、周囲は溶岩のように溶けていた。

しかし、其れに拮抗するのはグレモリー眷属。

最大出力をチャージして放つアスの消滅の魔力。

攻撃力だけならコールブランドすら超えると称される、伝説の聖剣デュランダルを振るうゼノヴィア。

合一化されたエクスカリバーすら打倒した、木場祐斗が振るう聖魔剣。

そして、極めれば神すら止めれるといわれる、停止世界の邪眼を操るギヤスパーク・ヴラディ。

その連携によつて、放たれる攻撃をぎりぎり相殺もしくはそらすことに成功していた。

塔城小猫と姫島朱乃も上級を超える攻撃で反撃を行い、攻撃の密度を低下させる。

そして、前衛を張るのはグレモリー眷属の要。

赤龍帝の鎧を身にまとった兵藤一誠が、拳を握って殴り掛かる。

「邪魔をするんじゃない!!」

「ごめんごめん。でも、ナイアルさんから頼まれてるから、ちよつと無理かな」

伊予の灼熱を纏った打撃を、龍のオーラを込めた打撃で相殺する。

女王に昇格したうえで、の殴り合いで戦いながら、しかしイツセーは苦戦していた。

格闘の技量ならイツセーの方がうえだ。それほどまでに地獄の特訓をしてきたこともあるが、伊予の戦闘技術はそれほどでもない。

だが、性能で大きく差が発生している。

赤龍帝の鎧を身にまとったイツセーは、SSランクはぐれ悪魔の黒歌すら圧倒した。

だが、目の前のクトウグアイーツを身にまとった伊予は、単純性能でそれを凌いでいる。

このままでは、地力の差で押し切られる。

イツセーはそう確信し、そしてゆえに煩惱をもってして對抗する。

洋服崩壊は使えない。イーツ状態では意味がないし、裸になっても意にも介さない人物なのはもう知っている。

なら、やるべきことはただ一つ。

あの地獄の夏休みの特訓で開眼した、もう一つの奥義。シトリーとのレーティング

ゲームで相手の作戦を底の底まで知り尽くした、新技。

相手の乳と対話する、イツセーの煩惱奥義。名を、バイリンガル乳語翻訳。

今が、使う時だった。

「広がれ、俺の夢空間!!」

その言葉共に乳語翻訳のフィールドが形成される。

こうなれば、イツセーの質問に伊予が答えられないなどということはできない。

前代未聞の乳と会話する能力。そのアプローチゆえに、これまでの読心術対策など欠片も通用しない。理不尽極まりない空前絶後であつてほしい変態技。

これをもつてして、イツセーは伊予の本音を聞き出したかった。

井草の幼馴染を傷つけるのは本意ではない。できることなら、平和的に解決してほしいとすら思う。

彼が語る伊予や五十鈴との思い出は、とてもきれいなものだった。語っているだけで、井草の表情は大切なものを語っていることがわかる顔になっていた。

そんな人たちが、本当に悪に堕ちているなんて思いたくない。何か理由があるのなら、どうにかできるのなら、何とかしてやりたい。

だからこそ、真っ先に質問することはひとつだ。

「アンタ、井草さんやナイアルってやつのことをどう思ってるんだ!？」

……その質問は、本心から重要だと思ったから聞いた。

いやいやナイアルにしたがっていているなら、演技で之を隠すことはできない。井草のことが大切なら、それを偽ることもできない。これはそういう技なのだ。

だから、彼女の本音は余すことなく知れ渡る。

『うん。二人とも大好きだよ♪』

—しかし、それが常人の思考だとは限らない。

「……は？」

その言葉に、イツセーは違和感を覚える。

井草のこともナイアルのことも大好き。

それは、矛盾しているのではないだろうか？

なぜなら、井草のことが大好きなら、井草を傷つけるような真似を嬉々とした声できるわけがない。

『井草君は、どこかカッコいいし、何か違うところがあつた。私たちのことを大切に思ってくれて、守れる人になろうともしてくれた。彼と一緒になら、まだ見えない景色が見れると思つたの』

そんな、夢見がちな少女の語る口調で、伊予の胸は井草を評価する。

「だったら—」

イツセーは問い詰めようとするが、しかし旨の声はまだ続きがあった。

『でもナイアルさんと一緒にいるととっても楽しいの。今まで見たことない体験をさせてくれる。だから、私はナイアルさんのことがとっても大好きっ』

—その言葉に、イツセーは先ほどの言葉の裏の意味を察して寒気を感じる。

行仁伊予は、まだ見ぬ景色を求めている。

こことは違うどこかに行きたい。それは、日常に退屈しているものがよく考えることだ。

中二病が生まれる理由の一つもそこにある。此処とは違う世界を求めながら、ここという世界にしか入れない。その不満が、特別な自分を作りたいという形になる。

そして、伊予は確かにこことは違う世界を見たのだろう。

そう—

『毎日可愛がってくれるナイアルさん。ナイアルさんが紹介してくれる男の人。ナイアルさんがくれた力で働いたあの戦場。血の色、悲鳴、スリル！ あんな世界、初めて見た!!』

—ナイアルの悪によってだ。

イツセーは、ヴァーリ達戦闘狂を理解できないといった。

平和な日常と煩惱を愛するイツセーにとって、平和な日常を退屈として、命がけの戦

いを楽しむヴァーリ達は理解できない。

だが、其れも伊予に比べればまだまだ。

ヴァーリと伊予のそれは似ているが、しかし根本から何かが違う。

伊予は本心から、ナイアルに殺しやまくら商売の道具にされていることを望んでいる。その快樂や殺戮の快樂に、酔いしれている。

それは平凡な日常とはまったく異なる世界。その意味では、伊予は確かに望み通りの世界に到達している。

同時に、快樂に満ちた世界はイツセーにも理解できる。それはイツセーもまた望んでいる世界の一つだ。

だから、イツセーには理解できない。

自身の願望と似通った願いをかなえながら、自身の願望と正反対の願望を喜ぶその精神が、理解できない。

「あんたは……」

イツセーは、それでも、もう一度だけ質問する。

井草が信じた、井草が愛した、井草の大切な思い出が、穢されてないと信じたかった。

「アンタは！　今の生活が昔より良かったって言うのかよ!？」

井草との日常が。

両親のいる生活が。

その平和な日常が。

それだけの価値しかなかったのか。

その言葉に――

『うんっ！ 私、今の毎日がとっても大好きっ♪』

彼女は、自身も本心も素直に答える。

『退屈な日常を壊してくれた、ナイアルさんがくれた毎日が、本当に楽しいの！』

その、まごうことなく嘘偽りのない言葉に、イツセーは愕然となる。

言葉だけならヴァーリも似たようなことを言っていたはずだ。だが、その言葉の質は何かが決定的に異なっている。

悍ましい。恐ろしい。気持ち悪い。気味が悪い。

そして、気づけばイツセーは乳語翻訳が使えなくなっていた。

「……な、なんで!？」

『落ち着け、相棒!!』

ドライグが、イツセーを叱咤する。

『精神が動揺したただけだ！ お前があの子の胸の内を聞きたくないと思ったがゆえに、胸の内を聞きたいという願望を形にする乳語翻訳が一時的に使えなくなった。それだ

けだ!!』

そう。確かに、言葉にすればたったそれだけ。

乳語翻訳は魔力運用法だ。そして、魔力はイメージで操作する。

乳語翻訳はイツセーの煩惱を魔力で形にした者。それは、イツセーの本能がぼんのを超えれば使えなくなる。

だが、その事実はとても大きい。

それはすなわち、イツセーが彼女を本心から拒絶したということなのだ。

そんなイツセーはもう、彼女を人間とは思えない。

あれを、同じ存在と扱えない。あれは、人間とも悪魔とも違う、化け物だ。

「……井草さん、俺、無理です……っ」

イツセーは、呆然と本心をつぶやく。

できることなら、伊予と五十鈴を救いたい。井草は確かにそういつた。

だが、その伊予の本心はあまりにも悍ましい。五十鈴の本心もこれに近いのかもしれない。

なら、彼女達は――

「――本当に、救う価値があるんですか……!?!」

「え? いららないよ?」

そして、その絶望的な隙は伊予にとつての好機に他ならない。

イツセーの動揺に気づいて、グレモリー眷属も動きがわずかに遅れる。そこを伊予は見逃さない。

「わたし、今が本当に幸せだから」

その灼熱の砲撃が、赤龍帝を蹂躪した。

デュリオ・ジユズアルドは、最強の転生天使である。

転生天使である、ブレイヴ・セイント御使いは、通常トランプのセットになっている。

四代天使がそれぞれトランプの柄の一種類を担当し、そこからAからQまでの十二人を保有。自身がKとして行動する。

そして、それとは異なる独立した存在がジョーカー。

代理としての存在も複数人候補がいるが、代理ではないデュリオはまさに特別な存在だった。

その根幹ともいえる、神滅具、ゼニス・デクス煌天雷獄。

その能力は、あらゆる属性を支配し、天候を自在に操る。

広域殲滅ならば間違いなく最強。総合的にいても二番目に属する強大な神滅具だ。

だが、そのデュリオはまさに苦戦を強いられている。

「そりゃまあ、天候操作は確かに凶悪だけどね？」

五十鈴がそう言うのも当然だ。

五十鈴に対抗するために、デュリオは全力を出そうとした。

だが、属性攻撃だけでは倒しきれない。

すさまじい身体能力と速度を発揮する五十鈴は、そのハストウールイツの能力を最大限に発揮して、ヒット&アウェイで打撃を叩き込む。

デュリオの戦闘技術では、それをとらえきれない。

ならば天候操作による広域攻撃で大雑把に殲滅するしかないのだが、それができない。

天候が、操作できない。

「天候って、基本的に気流の影響を受けるじゃない？ 雲とか気圧とか。そしてハストウールイツは気流を操作することができるの。つまり——」

——五十鈴がハストウールイツを使用しているときに、デュリオは天候操作を使用することができない。

総合的に相性が悪い。少なくとも、デュリオが煌天雷獄を使用する場合に限つていえば、相性が絶望的に悪い。

それでも、デュリオは対抗する方法があった。

スベランツァ・ボツラ・デイ・サボネ
虹色の希望。デュリオが編み出した、煌天雷獄の応用技。

つい先ほど、ディオドラの眷属たちの大半を戦意喪失させるきっかけになったシャボン玉だ。

能力は、シャボン玉に触れた者の忘れている大切なことと大切な物を思い出させる効果。攻撃力は一切ないが、それを補つて余りあるほどの精神干渉能力がある。

大切なことや大切なものを忘れて迷走しているものを説得する場合に限つていえば、これは自身の禁手すら超える。それを思い出せば、今までの愚行を反省するほかないのだから。

そしてそれは既に発動し、そして五十鈴はすでにいくつも触れている。

だが、五十鈴は一切意に介さず、戦闘を続行している。

「アンタのその能力、効かない相手がいくつかあるわ」

そう告げながら、五十鈴は再び接近する。

「一つ。大切なものを失つたことで復讐する相手。その人が復讐を望んでいると思ひ込んでる相手や、やるべきことを重視する相手には効果はあるだろうけどね？」

反撃の光力の矢を弾き飛ばして、ケリが叩き込まれる。

「だけど、「自分の中で区切りをつけるため」とかの「自分のため」に復讐する相手には意味がないの。そして、復讐するのは本来「自分に絶望をあたえた相手に絶望を与え返す」ためにするものだから、たいていの「真の」とか付けられる復讐者には効果ないわよ、それ」

そして気流が至近距離で叩き込まれ、デュリオは地面にたたきつけられる。

「他には、思い出す必要がない相手。殺しの快樂とか最初に相手を絶望に叩き落した瞬間とかを大切にしている相手は、それを思い出しても悪行をやめたりしないわ。常に大切なものを心を持って、そのうえで行動している相手とかにも効かないわね」

そして起き上がるより前にサッカーボールを叩き込むように蹴りが叩き込まれる。

さらなる追撃を牽制しながら、デュリオはそれを痛感する。

確かにそうだ、そういつたろくでなしだって何人もいる。そんなことは知っている。

だが、だがしかしだ。

「だつたら、アンタは何番目なんだ!？」

最大級の光力をはなちながら、デュリオはそう問いたです。

それに対して、五十鈴は微笑んで答える。

「――一番最後よ。私は、大切なものを思い出したからこそ、悪党やってるんだつての!!」

光力を真正面から言葉と共に蹴り壊し、五十鈴は最強の転生天使を圧倒した。

この戦いの趨勢の原因は、偏に相性が悪かったことに由来する。

もし、デュリオの相手が五十鈴ではなく伊予だったのなら。

もし、イツセーの相手が伊予ではなく五十鈴だったのなら。

井草・ダウンフォールの決意は、この時点で完遂できていたであろう。

それほどまでに、この戦いは誰にとっても不幸な戦いだったのだ。

井草にとっても。

イツセーにとっても。

デュリオにとっても。

そして――

伊予と五十鈴にとつても、不幸な戦いであつた。

10話

そして、灼熱の奔流に吹き飛ばされたイツセーと、気流を利用しての連続打撃に弾き飛ばされたデュリオが激突する。

「あ痛あ!?!」

こう頭部を強打して悲鳴を上げる二人。

そして、追撃してきた伊予と五十鈴は、お互いを発見する。

「あ、伊予じゃない。そつちも順調?」

「結構苦戦しちゃった。でも、乳語翻訳は効かなくなったよ?」

そう和やかに会話した二人は、しかしそこから即座に飛び跳ねるように移動。

そして、そのタイミングで数々の攻撃が追加する。

「イツセー君! 大丈夫ですか!?!」

「無事かデュリオ!!」

朱乃の雷光とデイトヘルムの光力が、連続攻撃を受ける窮地を打破する。

そして、グレモリー眷属と御使いがあつまり、2人のアウターイツと相対する。

しかし、クトウグアイツとかした行仁伊予も、ハストウールイツと化した枢五十鈴も、警戒はすれど恐れの内容はない。

勝機はある。十分ある。負ける可能性よりは勝てる可能性の方が大きい。

それがわかつているからこそ、2人はまだ負ける気がなかった。

「ナイアルさんの頼みだもん。負けないよ?」

「正義の味方がぞろぞろと……! 悪党冥利に尽きるつてもものね」

かわいらしく気合を入れる伊予と、どこかうれし気に戦意と滾らせる五十鈴。

その二人を前に多くの者たちが警戒心を高ぶらせる。

……しかし、最も深く戦闘を行っていたイツセーとデュリオは、不快感を示していた。

「……いやあ、ほんとここまでのろくでなしは初めて見たよ。さすがにイラってきたね

……!」

「……本気であんたらの胸の内を知りたくねえ。心の底から吐き気がする!」

「デュリオ? どうした?」

「イツセー? 彼女の胸の内は何を言っていたの?」

その態度に、デイトヘルムとリアスが怪訝な表情を浮かべる。

だが、その返答より先に状況が新たに動いた。

きっかけは、小さな風切り音だった。

しかし、それは徐々に大きくなり、騒音に近くなる。

そして次の瞬間、何かが自分たちの真後ろに激突した。

「……っこの、野郎！」

そして、飛び跳ねるのはレセプターイツ、井草・ダウンフォール。

そして、それをなしたものが追撃を開始するために接近する。

そのものの姿をみて、全員が目を見開いた。

「ふははははは!! たかが混じり物の堕天使風情が、このアスタロトのディオドラに勝てると思ってるのかい？」

莫大極まりない魔力を構えながら接近する、その存在は――

「――ディオドラあああああ!!!」

イツセーが激怒と共に吠えたとおりの、ディオドラ・アスタロト本人だった。

一方そのころ、アザゼルは思わぬ人物と合流していた。

「おいおいサーゼクス、お前はこっち来ていいのかよ？」

「すまない。だが、無理だとわかっていてもどうしても説得がしたかったのだ」
サーゼクスがそう言う相手を、アザゼルはすぐに予想する。

旧魔王派の幹部、シャルバとクルゼレイだろう。

すでに二人はこの戦場に出撃している。カテレアもまた戦場で戦っているという情報があつたので、旧魔王派の発覚している幹部は全員が動いているのだろう。

魔王血族ゆえに彼らはなんだかんだで強い。少なくとも、並の上級悪魔眷属では勝てないだろう。蛇によつて高められた力は魔王クラスに届くと推測されている。そこにイツツまで加わっているのだから難易度が非常に高い。

それに対抗できる悪魔は、単独でという条件を付ければそれこそ魔王クラスのみだろう。

そして、確実に勝てるのは超越者たるサーゼクスとアジユカのみだ。

この二人が悪魔の中でも規格外なのは証明されている。それほどまでの実力者がいたからこそ、旧魔王派は追放されたのだから。

そして、サーゼクスは確かに甘いかもしれないが、それでも悪魔の王だ。

限度を超えた者を倒すことに、躊躇はあつても中止はない。事実、彼は初代ベルゼブの実子を消滅させている。限度のラインをどこに敷いているのかの差はあるが、それでも彼は王なのだ。

ゆえに、サーゼクスが本気を出せばシャルバたちを滅ぼすことは不可能ではない。むろん三人が同時に動けば状況は変わる。だが、それでもそれだけでなければ勝ち目は十分にあるのだ。

この場合はアザゼルの存在だ。人工神器を併用すれば、アザゼルの戦闘能力は魔王クラスを超える。単独で一人をどうにかすることも可能だろう。そのあいだにサーゼクスが残りのうち一人を集中攻撃で倒せば、あとは時間の問題である。

そう、勝ち目は十分にある戦力がそろってしまったのだ。ゆえに――
「あつぶねー。言われた通りに来て正解だったぜ」

――対抗戦力を送り込むのは、当然のことだった。

そして、其の声に真つ先にアザゼルは反応する。

「……無有っ！」

殺意を込めた光力の一撃が、振り向きざまに放たれる。

その威力、まさに魔王クラス。光力そのものが悪魔にとつて天敵であることを考慮すれば、最上級悪魔クラスも下位の存在なら一撃で滅ぼせるだろう。

だが、それをナイアルは生身のまま、素手で迎撃する。

そして轟音と共に光の槍が破壊される。

そして、軽く赤くなっている手を振りながら、ナイアルは地面でため息をついた。

「うっへー。サーゼクス・ルシファアの足止めを命令されたら、アザゼル総督までいるじゃねえかよ。ついてねえなあ」

そのため息をついた瞬間、ナイアルは再び飛んできた光力の一撃を蹴りで破壊する。そして、今にも憤死しそうな表情のアザゼルに半目を向ける。

「おいオッサン。いい歳こいて落ち着きねえぞ?」

「お前を殺すのに躊躇はねえよ死ね」

速攻で三発目が飛んできた。

今度はナイアルも流星にまずいと思ったのか、莫ステップで直撃を避ける。

地面に当たった光力の一撃は隕石の衝突を思わせるクレーターを作り上げた。その破壊力、真正銘魔王クラス。

ナイアルも余波で空を舞うが、即座に空中で態勢を整えると、空に浮かんで制止する。

見ればベルトがわずかに起動音がしている。どうやらムートロンの科学技術によるものだ。某猫型ロボットのプロペラ付き飛行装置よりは理にかなっている。

「総督さんよお。ここはエースクラスと指導者クラスの戦闘前会話とかしね? ナイ

ファアザーほど口軽くねえけど、いろいろ解禁されたし、少しぐらいはしゃべれるぜ?」

「半殺しにしてとつつ構えてから、拷問まがいの尋問してやるから安心しな。いやなら死ね」

子馬鹿にしているとしか思えないナイアルに、アザゼルは速攻で墮天龍の閃光槍を取り出す。

それを、サーゼクスは手でつかんで静止した。

「……一応言っておこう。投降するというのなら、捕虜として最低限の人道は保障する」
サーゼクスとしても、アザゼルから井草に関する事情は聞いている。

目の前の男が侮蔑に値する手合いであることは間違いない。リアスたちは殺意を覚えているのも聞いている。サーゼクス自身、必要とあれば消滅させることに躊躇はないし、消滅させた後も一瞬たりとも苦悩しないだろう。

だが、犯罪者といえど人権はある。

少なくともサーゼクスはそう思う主義だ。投降するものを殺すのは虐殺でしかないのだから、それはやめるべきだと思っている。

甘い意見なのだろうが、それでも人権だけは保障したい。若い者には更生の可能性も与えたい。それそのものはある種の正論であるはずだ。

ゆえにサーゼクスは本気でそうする気であり、しかし内心では断ってほしいとも思う。

そして、ナイアルは――

「……やだね。俺はこっちの方が性に合ってたんだ。気に入った女を好きにできる生活を

捨てるぐらいなら、死んでやるよ」

―その返答に、サーゼクスは一切の躊躇をしないことを心に決めた。

この男は、大義も正義もない外道だ。

ゆえに、良心の呵責もなく、サーゼクスは消滅の魔力を大量に形成する。

それを見て、ナイアルは静かに一つのエポリューションエキスを構える。

「……言つとくが、ナイファアーザーは確かに強いし相性も良かった。だが、俺は相性以外は上を行くぜ?」

その言葉に嘘はないのだろう。

ナイファアーザーを差し置いて、わざわざ出撃命令が下されたのだ。それだけの能力があるということは間違いない。

その自信が余裕を生んでいる。ゆえに油断は一切なく―

「ムートロン戦闘序列20位、ナイアル。E Eレベル7, 5以上が変身できる上位イーツであるアウターイーツの力、デフォルトイーツ込みで試させてくれや」

『クイーンアント』
『クトウルフ』

そして、この戦場における最強同士の戦いが勃発した。

1 1 話

井草は立ち上がりながら、すぐ近くに伊予と五十鈴がいることにも気が付いていた。

「イツセー、デュリオー！ 相手を代わってもらっていいかな!?」

無謀なのはわかっている。

伊予と五十鈴は間違いないこの場で最強格だ。それは間違いない。

EEレベル6，0。上位イツであるアウターイツ。そして、元龍王タンニーンの本気の一撃ですら耐えたその能力。

すべてが強敵であることを示している。井草の実力では一人相手でも勝ち目がない。だが、それでもだ。

井草は、伊予と五十鈴にかかわる問題で、自分が前線に立ちたいと願っていた。

今でも、あの時の思い出は宝物だ。

取り返せないだろう。それでも、せめて少しぐらいその時に近づきたい。

元通りにはならないだろう。それだけのことをされた。それだけのことをしてしまつた。でも、少しぐらい修繕できるかもしれない。

その気持ちをばねに、井草は立ち上がり――

「いや、駄目だね」

まっさきにデュリオがその手をつかんでとめ、

「井草さん。この人たちはもうだめです」

イツセーも、井草を二人に近づかせないように割って入る。

その行動に、井草は薄ら寒いものを感じる。

デュリオはわからないが、イツセーはこちらの事情を理解してこんなことをしたがる類ではない。デュリオにしても、大切なものを取り戻したいという願いをむげにする類ではないだろう。

その二人が、あえてこんな態度をとる。

その嫌な予感は、2人があえてわからせる。

「あの五十鈴って子は、大切なものがあるからこそ悪事をしてると言つて、実際俺の虹色スベランツァ・ボツラ・デイ・サボネの希望が効かなかつた。……相当のろくでなしの可能性がでかいね」

「伊予つて人もそうです。あの人の胸の内を聞いたけど、正直もう聞きたくないです。あの人、何かが終わつてる！」

2人とも、嫌悪の感情を隠しきれていない。

それはつまり、井草にとって認めがたいだろうその言葉が、事実であることを示している。

そして、それを肯定するかのように五十鈴も伊予も胸を張る。

「ええ。私は大切な思い出が胸にあるからこそ、こう生きてる。……そこに嘘は全くないわね」

「この生活はすつごく楽しいの。だから、邪魔しないでくれると嬉しいかな？」

その言葉に、事情を把握したりアスたちは絶句する。

そして、デュリオとイツセーは、苦虫をかみつぶした表情を浮かべる。

事情をどれだけ知っているかの度合いはあれど、誰もが井草のことを心配していた。

それほどまでの事実だ。井草の心をへし折ったとしてもおかしくない。

そして、その反応に井草は――

「――それでもだ」

静かに、イツセーとデュリオを振り払って一步を踏み出す。

その目には決意の色がある。その足には覚悟を感じさせる音がある。その動きには、願いがこもっている。

そもそも、井草はその可能性を考慮していた。

あそこ迄変わり果てた姿を冥界で見せつけられて、希望的観測を抱くことはできない。墮天使としての仕事の間で、後戻りする気もないほど墮ちた者も見てきた。そんな現実には痛いほど理解している。

だけど、

それでも、

そうだとしても。

「俺は、2人を止めたいと願った。できることなら救いたいと思った」

一瞬だけ目を伏せ、そして井草はまっすぐ五十鈴と伊予を見つめる。

その目に、最早絶望はない。

「救えなくても、これ以上間違えさせたりはしない。俺が、命に代えても止める!!」

その言葉に、嘘偽りなど欠片もない。

最悪の事態は覚悟している。もしそうするほかないとしても、井草はできれば自分の

手でしたいと思っていた。

大切だから。傷つけたから。そして、譲れない思いがあるから。

想定できていた可能性程度で、それが折れることなどありえない。

「……覚悟はある。俺は、君たちを殺してでも止めて見せる!!」

その言葉に、五十鈴は戦意を一瞬やわらげた。

「……なんていうか、成長したわね、井草」

そこには確かないたわりがあった。

そして、伊予もまた一瞬だけだがその井草に見とれてしまう。

「……うん。前よりかっこよくなった」

そして、井草は二人の反応に苦笑で返す。

「ま、以前の俺は準中二病の馬鹿だったからね。大人になったって言ってくれていいよ？」

その雰囲気には、イツセー達は手出ししづらくなってしまう。

そこには通じ合う者たちだけの何かがあった。時がたつても変わらない何かがあった。立場が変わつても壊れない何かがあった。

確かに、井草たち三人はかけがえのない仲だったと、誰もが一瞬で理解する何かが残されていた。

だが、それはとてつもなく歪んだものでもある。

伊予は喜びを全身で表しながら、しかし全身から灼熱の前兆を生み出して構える。

「じゃあ、そろそろ始めようか？」

その言葉に、井草は構え――

「いや、帰るわよ伊予」

――唐突にそういった五十鈴によって、瞬間的に高まった全員の戦意が霧散する。ノリのいい面子の中には、本気で脱力してこけるものまでいる始末だ。

なんというか、空気が読めてない。

「お前ら!! 僕の援護じゃなかったのか!?!」

ディオドラがそう文句を言うが、しかし五十鈴は取り合わない。と、言うか無視した。

すでにその視線は伊予にだけ向いており、相手をする気が全くない。

「ほら、私は赤龍帝の変態技の被害に合いたくないし、伊予もあのシャボン玉は喰らわな
い方がいいからね? ナイアルも魔王と総督の冥界トップコンビで手こずってるみた
いだし、そつちの援護に行くわよ」

「え!? ナイアルさん苦戦しているの!? じゃ、じゃあ助けに行かないと!!」
伊予も一瞬でその方向に意識が傾くと、井草の方に向いて頭を軽く下げる。

「な、なんかごめんね? バイバイ!」

五十鈴も、井草に片手を立てながら首を軽く下げた。

「じゃあ、なんか悪いけど撤収するわ。じゃあね」

そして、一気に飛び去って行った。

沈黙が、響いた。

そして、井草たちは視線をディオドラに向ける。

ディオドラが一瞬たじろぐほどに集中していた。

当然の話だが、ディオドラの悪事はすでに知れ渡っている。

井草たち襲撃組はそもそもその事実を発見した側だ。そして、イツセーたちもその井草たちからの情報をアザゼルを経由して知っている。とどめに、襲撃組に至ってはアシアがショックを受けている姿を目撃している。

「……一応聞くけど、アシアちゃんの一件、君の計画かい？」

全員を代表して、井草がそう問いたです。

そして、ディオドラはその顔をゆがめた。

「まあね。内通していたシャルバ達が教えてくれたんだよ。アシアの神器の情報をね」

―その言葉に、全員の殺意が一気に高まる。

「……そして、アシアを追放させるためにわざと怪我をして治させたの？」

リアスが、美少女がしてはいけない表情を浮かべながら、大声を出すことすら忘れて詰問する。

これまた、ディオドラは苦労したといわんばかりの顔をして胸を張る。

「まあね。傷跡が残ったのは残念だけど、これまでにない獲物だったから、まあ必要経費と判断したよ」

全員の怒りのボルテージが、一段階上昇した。

「だったら、なんでアシアをそのままにしたんだ！ そのせいでアシアはレイナー

レに――」

「その後助けるつもりだったんだよ。そうすればアーシアは僕に夢中になってくれると思っただけさ。君たちが邪魔してくれなければ、こんな面倒なことにはならなかったのに、迷惑してるよ」

むしろ怒るのはこちらの側だといわんばかりのデイオドラの態度に、全員が無言で判決を負える。

死刑、もしくは半死半生。無罪判決は無し。

その決定が暗黙の了解でなされた瞬間、イツセーは飛び出した。

そして、井草がそれに気づいて声を上げる。

「あ、イツセー気を付けて!!」

その言葉とほぼ同時に、デイオドラは魔力を集中させる。

「笑わせるなよ、下賤な下級悪魔が!!」

そして、イツセーもまたドラゴンショットをはなつ。

「ドーピングだよりで痺がってんじゃねえ!!」

その二つの砲撃はぶつかり合い、そして、大爆発を起こす。

威力は互角。だが、それでイツセーは間合いを詰める。

すでに怒りは限界だ。殺していいともアザゼルにいわれている以上、勢い余って殺し

てしまう可能性もある。

レーティングゲームが始まる前に、イツセーはアーシアと話をした。

アーシアは、デイオドラを治したことを後悔していないといった。

それを、デイオドラは自分自身の手で穢したのだ。

アーシアは、イツセー達と離れる気がないといった。

だから、イツセーはアーシアを守ると決めた。

目の前のデイオドラを、許す理由は何処にもない。

「俺たちのアーシアに、手を出すんじゃねえええええええ!!!」

そして、間合いに入ったイツセーは即座に拳を振り抜き――

「やだね! あんな最高の獲物は初めてなんだ」

デイオドラが形成した魔力結界に、拳を受け止められる。

そしてその瞬間、いくつもの魔力の矢じりがイツセーの鎧に突き刺さる。

その全てが装甲の厚い部分。意図的に狙ってなければ不可能な攻撃方法だ。

そして、その攻撃は確かに通用していた。

「ぐあつ!」

思わずうめくイツセーを見下し、デイオドラは吠える。

「オーフィスの蛇とデビルイーツの力があれば、僕は最上級悪魔クラスだ!! お前ごと

きが相手にできる存在じゃないんだよ!!」

そして顔面にディオドラの手が突き出した時、イツセーは気づく。

ディオドラは、井草と戦っていた。

そして、井草を弾き飛ばしていた。

つまり、ディオドラは相当に強化されている。

そこ迄気づき、イツセーはディオドラが想像以上に強くなっていることを理解し――

「……それがどうしたあ!!」

放たれた砲撃を無理やり突っ切り、そのまま渾身の頭突きをディオドラに叩き込んだ。

鈍い音が響き、ディオドラが鼻血を出す。

そしてその痛みにディオドラが隙を見せた瞬間に、イツセーはさらに拳を連続で叩き込んだ。

「俺の!」

悪魔を治して追放されても、信仰を捨てなかったアースシアを、

「俺たちの!」

オカルト研究部での生活が大事だといったアースシアを、

「大事なアースシアを傷つけて!!」

その彼女を悲しませた目の前の男がどれだけ強かろうと――

「その程度の強さで逃げれると――」

――天龍の逆鱗を踏み抜くには、程遠い。

「――思ってるんじゃないやねえだろうなあ!?!」

目まぐるしい連撃を叩き込まれ、ディオドラは全身を血まみれにして地面にたたきつけられる。

「が、が、あああああ!?!」

激痛にもだえ苦しむディオドラは、信じられないといった顔でイツセーを見る。

「嘘だ!?! あり得ない!?! アガレスを倒したんだぞ、僕は!! 無能のサイラオーグにも勝てる性能なんだぞ!?! 煩わしいビルデよりも強力なイツーになったんだぞ!?!」

全身から血を垂れ流しながら、ディオドラは両手を構える。

渾身の出力の魔力が結集し、イツセーを吹きとばそうと狙いが付けられる。

「その僕が、情愛の深いグレモリーの愚か者の眷属なんかに負けるわけがない!!」
その言葉を無視して、イツセーもまた魔力を込める。

渾身のドラゴンショットの発射体制が整い、そして向けられる。

「この、人間崩れの下賤な紛い物が――」

「この、見下げ果てたクソツタレ悪魔が――」

お互いに殺意と怒りを込め、そしてさらに魔力が高まり―

「この僕を見下すなあああああああああ!!」

「アーシアに近づくなああああああああ!!」

全力の叫びと共に、同時に砲撃をはなつ。

その砲撃は拮抗し、しかしディオドラがわずかに競り勝ち始める。

当然だ。兵藤一誠という男は、魔力の扱いが増えてなのだ。その手の勝負では子供の悪魔にも負けるところがある。

腐つてもディオドラは上級悪魔の血を引くもの。それが、エボリユーシヨンエキスによつて強化されている。

魔力による戦いなら、ディオドラがわずかに有利だった。

「どうだ!? 下賤な下級悪魔が! この僕を、魔力でどうこうできるわけがないだろうが!!」

その事実には勝利を確信し、そしてディオドラは吠える。

しかし、徐々に競り負けているのにもかかわらずイツセーは動揺を一切見せていなかった。

「なあ、ディオドラ。お前大事なことを忘れてるぜ」

と、言うより心底あきれ果てていた。

そして、それにディオドラが首を傾げようとしたその時――

「あなた、喧嘩を売った数すらわかってないようね」

――リアスの、その凜とした言葉に、ディオドラは凍り付いた。

気づけば、周囲には大量のオーラが集められている。

聖なるオーラ。魔力。光力。雷光。種類は様々だが、しかし一つだけ断言できることがある。

そのどれもが、間違いなく若手の範囲内では規格外というべきレベルだった。

そして、そのオーラを構える誰もが、ディオドラに対して怒りを抱いていた。

その彼ら彼女らの気持ちを表し、リアスは告げる。

「……殺さない程度に手加減するけど、死んでも恨まないことね。あなたには資格もないのだから……っ」

その瞬間、一斉に放たれた砲撃が、ディオドラを四方八方から滅多打ちにした。

1 2 話

ぼろ雑巾という言葉がまだましと思える状態で、デイドラは倒れ伏していた。体中焼け焦げ、全身の骨は二けたは砕け、皮膚が消滅している個所も多数ある。

単純明快に言って再起不能だ。少なくとも、この状態で戦闘を行うなど寝言の一言で片づけられるだろう。

正直全員が本気の本気で放った節がある。殺さない程度の全力で放ったが、しかしそれが十人以上いれば普通に消滅してもおかしくない。

かなり高いE Eレベルだったようだ。オーフィスの蛇による強化も生きたらしい。デイドラはそれなりに強いイーツだったのだろう。

とはいえ、其れゆえにデイドラは激痛にもだえ苦しんでいたが。

「……部長、イッサー。殺しても構わないとアザゼル先生も言ったのだから、首をはねてもいいんじゃないか？」

「流石にまずい。いろいろ聞き出すことややこしい政治的問題があるからね」

怒りが冷めやらないゼノヴィアがデユランダルを構えるが、しかし一人いやいやなが

らディオドラを治療する井草は首を振った。

その井草とて、ディオドラに情がわいたわけではない。

むしろ井草が一番ディオドラを嫌っている。似たようなことをしていたことがあるが故の同族嫌悪もあり、さらに下衆であることから生理的に受け付けない。目の前で仲間の心を蹂躪されたこともあり、殺意だつて消えてはいない。

だがしかし、それでも井草は冷静だった。

「彼の言う通りだ。総督殿が責任を取るとはいえ、実際に殺せば問題は生まれるだろう。すでに戦闘不能になっている以上、公式に処罰すればそれで十分だ」

「そういうこと。禍の団との戦いでややこしいんだから、いらぬトラブルやもめ事は避けられるなら避けないと」

ディオトヘルムの援護射撃を利用して、井草は皆の説得を試みる。

じつさいアザゼルが責任を取ったとしても、責任を取るということは問題が発生するということだ。そうなるとどうしても手間も負担も生まれる。

それを避けられるのなら、避けた方がいいことは多い。

どちらにしてもディオドラは裏切りの罪で処罰されるのだ。なら、法にのっとって行動した方がスムーズに進むことになるだろう。

万が一にでも老害がこれを利用して墮天使側から利権を貪るなどという真似をして

こられてはたまらない。殺しさえしなければ言い訳は立つのだ。アザゼルの責任問題にはならない。

とはいえ、油断はできないところではある。

「……さて、五十鈴と伊予の代わりが派遣される可能性はあるんだよねえ。それを警戒しないと」

「OK。それは俺たちがやっておくよ。君たちはアシアちゃんと合流しな」

井草の懸念をすぐに理解して、デュリオ達御使いが動く。

彼らにはとても助けてもらった。

少なくとも、デュリオ達がいなければ、ディオドラの眷属と神滅具使いをどうにかすることはできなかつただろう。

それを理解しているリアスは、誰もが見ほれるような微笑を浮かべながら軽く一礼する。

「ありがとう。アシアの救出にも一役買ってくれたみたいだし、お礼を言うわ」

「気にすんな！ 悪い悪魔をぶっ飛ばすのは俺たちの仕事ってね!!」

「同期の子を助け出せたので、よかつたです」

ネロとミラナがそう答えながら、先行する。

そしてデュリオも続き、デイトヘルムも飛び立とうとして――

「……できれば、合流は早めにした方がいい。絶霧使いは取り逃がしてしまったのでね。彼が作ったと思われるアーシア・アルジェントの拘束具については不明な点が多い」
「わかりました。重ね重ねありがとうございます」

デイトヘルムのその言葉に、祐斗が代表して返答する。

そしてデイトヘルムも飛び立ち、彼らの背にむかつてイツセーが声を張り上げた。

「……本当にありがとうございます!! アーシアを助けてくれて、助かりました!!」

心からの本音で、まっすぐな感謝の言葉をイツセーは伝える。

それを笑みを浮かべて受け止めながら、御使いたいは周囲の警戒のために飛び立っていった。

神の子を見張るもののエージェントであるハーフ墮天使、井草・ダウンフォール。

冥界の機体のルーキーたち。リアス・グレモリー眷属。

そして、教会プルガトリオ機関と、天界の御使いであるA達とジョーカー。

三大勢力の和平を象徴するかのような共闘は、またのちの戦いにおいても組まれることになるのだが、それはまた別の話である。

「あ、イツセー君!!」

そして、すぐに合流できた。

なにせ目立つ拘束具と、それをえっちらおっちら運ぶ信徒二人に天使一人。目立つ。むしろ今までよく襲われなかったと思いながら、井草たちは合流した。

「お、イツセーさんじゃねえですかい。井草も無事つぼくてなによりですなあ」
「まあね。デイドラはしつかりボコつて拘束済みだよ」

リムにそう答えながら、井草はとりあえず苦笑する。

なにせアーシアは拘束されたままだ。そのせいで微妙にシニールである。

「イツセーさん!! 井草さんも怪我をしてるじゃないですか! あうう……。なぜか神器が使えないんです」

「気にしないでいいのです。仲間を助けるのは普通のことなのですから」

イツセーたちの負傷に気づいたアーシアが、役に立たないことを落ち込んで、ニングがそれを励ました。

そして、ニングは困り顔でイツセー達に視線を向ける。

「あの、この拘束具が頑丈で壊れないのです。イツセーさんに任せたいのです」

どうやら、拘束具のまま運び続けていたのは間が抜けていたわけではないらしい。

仮にもプルガトリオ機関の若き精鋭と転生天使のAが壊せないとは、驚くべきか感心するべきか。

しかし、この運びづらい拘束具をそのままにする選択肢はない。さつさと隠れるためにも身軽になった方がいいし、アーシアの精神衛生上にも悪い。というより、目立つ。

ゆえにイツセーが鎧を展開したままだったので引きちぎろうとし――

「あれ? ……ビクともしないぞ?!

ひびどころか、きしむ音すら産まれなかった。

一同はそれに目を見開く。

なり立て手で未熟とは言え、神滅具の禁手で壊れない。

その時点で、ただの拘束具どころの話ではない。異常事態だ。

「祐斗くんにゼノヴィアちゃん! とりあえずためしにその辺をダブルアタックでたたいてみて!」

「ああ!」

井草の指示にゼノヴィアが頷き、祐斗も即座に聖魔剣を生み出す。

そして、たたきつけられた。

二人の戦闘能力はイツセーにも匹敵する。デュランダルは近接攻撃力なら鎧状態のイツセーにも届く。聖魔剣の木場祐斗は、まず間違いなく赤龍帝のイツセーと並び称さ

れるレベルの実力者だ。

だが、傷一つつかなかつた。

「嘘でしょ？ イツセーにゼノヴィアに祐斗の三人でも壊せないだなんて!!」

リアスが目を見開くのも当然だ。

そして、井草はすぐに反応して行動する。

事情を知っているだろう者をすぐ近くに連れて生きている。彼は今回の主犯の一人といつてもいい立場で、拘束具に拘束するところも見えていたはずだ。

そもそも、この作戦が読まれている可能性は予期されている。それでも強行した以上、旧魔王派も勝算の一つぐらいは持つているはずだ。わざわざアーシアの誘拐というディオドラの趣味を優先したなんて理由ではないだろう。

つまり、アーシアはピースの一つかもしれない。

拘束具の異常性からそれに思い至り、井草は素早くディオドラをつかみあげる。

「……死にたくなければすぐに説明するんだ」

その行動に、ディオドラは震える気力すら無くしたのか、淡々と答える。

「その装置は、ロンギヌス神滅具の一つである絶ディメンション・ロスト霧の禁手で作られた結界装置だよ。所有者の望む結界装置を霧の中から作り出す、創造系の亜種禁手、霧の中の理想郷。ディメンション・クリエイトその装置は特別製で、機能の関係上使い捨てだけど、逆に一度使わないと停止できないようになつ

ている」

その言葉に、井草たちの嫌な予感は一時的に膨らんでいく。神滅具の禁手を使って、わざわざアーシアのための拘束具を作る。其れも特別製の結界装置でだ。

ディオドラの趣味に、態々英雄派が付き合ったとも思えない。というより、戦場の中でそんなことをする意味もない。

間違いなく、アーシアの拘束具は個の襲撃のピースの一つだ。

「結界装置の発動条件と能力、そして効果範囲は？ ……言え」

祐斗が危機感に突き動かされ、聖魔剣を突き付けてさらにうながす。

そして、ディオドラはようやくわずかに震えながら、すぐに口を割った。

「この場合は、僕が倒されたから発動したんだ。の、能力は、枷にはめられたアーシアの能力を増幅させて反転^{リバーズ}させる」

その言葉に、井草たちは目を見開いた。

「反転!? それって神の子を見張るものが研究してた!？」

「っていうか、それって確か会長とのレーティングゲームで会長たちが使ってた奴じゃねえか!？」

シトリーとのレーティングゲームを伝聞でしか聞いていない井草の叫びに、イツセー

の事情を知っているが故のさらに焦った声が重なる。

井草が気絶している間に行われた、リアスとソーナのレーティングゲーム。

その試合において、ソーナたちは神の子を見張るものから提供された反転の技術を適格に運用した。

もともと相反する属性を反転させる能力だが、それを併用することによって、聖剣のオーラを反転させて悪魔が受け止められるようにしたり、治癒の力であるフェニックスの涙を反転させて攻撃に転用するなどの運用を見せた。

そして、ソーナ達が最も反転を生かしたのは、アーシアを倒した時だ。

アーシアが回復のオーラを広範囲に展開したそのタイミングで、ソーナの僧侶の一人である花戒桃がその範囲に飛び込んで反転を使用。回復のオーラを反転させることでアーシアと相打ちになったのだ。

お互いの戦略的価値からみて、戦術的勝利といってもいい戦いだだったが、それはまた別の話。今回重要なのは、そこではない。

「効果範囲は、このフィールド全体と観覧席だよ」

アーシアの癒しの力は非常に強大。致命傷寸前のけがすら短時間で治すことができる。そんなものが反転し、しかもディオドラの言う通りの効果範囲だとすれば――

「……いま戦っている各勢力のトップが、根こそぎやられるかもしれない」

その可能性を言葉にした祐斗はもちろん、全員の表情が青ざめる。

是こそが、旧魔王派の作戦の根幹。

絶大な治癒の力を反転させることによる、重鎮の全滅こそが本命。

「オオイ、ドライグ何とかならないのかよ!? おまえだつて神滅具だろ!」

イツセーが焦りながら、籠手に封印されているドライグをたきつけようとするが、ドライグはあきらめムードだった。

『無理だ。赤龍帝の籠手《ブーステッド・ギア》は確かに神滅具だが、絶霧はその上だ。禁手同士でも一歩劣るだろう。覚えておいてくれ、俺より格上の神滅具も存在するんだ』

「くそー! こうなつたら波状攻撃でやるしかない!!」

井草はディオドラを投げ捨てると、素早くレセプターイツに変身。そして拳を叩き込む。

しかし、イツセー達と共に攻撃を叩き込んでも、まったくもって傷一つつかなかつた。

そして、其の間に結界装置は駆動し始めているのか、起動音をはなつ。それが全員の焦りを増大化させる。

このままでは、自分たちはもちろん首脳陣も全滅。

その可能性が脳裏をよぎったとき、アーシアの声が届いた。

「イツセーさん。いつそ私を―」

「ふざけんな!! 次そんなこと言ったら、アーシアでも許さねえぞ!!」

イツセーは怒鳴りながら結界装置を攻撃する。

だが、今だからすり傷一つつかない。

「イツセーさん! このままでは先生もミカエルさまも……。そんなことになるぐらいなら―」

「それでもだめだ! 俺は二度とアーシアに悲しい思いをさせないって決めた。絶対に助けて見せるから!! 一緒に変えるんだ。父さんと母さんがアーシアを取るんだから―」

イツセーはアーシアを諭しながら、結界装置を壊そうと試みる。

「……だけど、時間がない」

「それで、やがりますね」

結界装置の発動は目前と思われた。

井草も、リムも、最悪の手段を考慮し始める。

「井草さん!! リムも!! そんなこと―」

「……ですが、このままでは間に合わないのです。なにか突破口が無ければ、全員死んで

しまうのですよ……っ」

イツセーを諭すように、ニングも歯を食いしばりながらそう告げる。

そう、現実問題時間がない。

ここで全員全滅するか、アーシアを見捨てて残り全員が生き残るか。

その究極の選択肢を皆が突き付けられる。

「ああもう！ 伊予と五十鈴の件でもきついのに、ここでこれは心が折れそうだよ……っ！」

「井草さん、ここは暗部の私達がするのです」

「いや、これは年長者の俺がすべきだ……っ」

「いや、私は井草と同じで二十歳ですからねえ。ここは私が汚れるしかー」

井草にニングにリムといった、汚れ仕事の必要性を知っている者たちは、リアスたちの代わりに泥をかぶろうとすらしている。

そして、その言葉がイツセーに天啓をあたえた。

「……………あ」

そう、五十鈴だ。

その言葉で、イツセーは最後の可能性に思いいたった。具体的には、全裸を思い浮かべながら。

この装置は、アーシアを拘束している。拘束しているということは、アーシアに密着している。すなわち、身に着けている者の一部である。

……とてつもない拡大解釈で考えれば、アーシアの衣服の一部とも考えられないこと
もない。

「ドライグ、お前を信じるぞ!!」

『相棒? 嫌な予感がするのだが―』

「アーシア、先に言うけど御免!!」

「え?」

すさまじく嫌な予感を周囲に覚えさせながら、イツセーは渾身の力を込めた。

そう、これを衣服の一部と仮定することができるのなら、絶大な効果を発揮する力がある。

それだけでは難しいだろう。ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手だけでも難しいだろう。

だが、それが二つそろえばどうなるか。

「高まれ、俺の性欲、俺の煩惱!!」ドレス・ブレイク洋服崩壊、バランス・ブレイカー禁手
ブーストバージョン!!」

そして、その絶大な力が結界装置と拮抗する。

一瞬だが、拮抗した力は結界装置が押し返そうとするが、しかしイツセーは負けなかった。

「いけ、俺の煩惱と神セイクリッド・ギア器!! アーシアは死なせない! アザゼル先生たちも死なせない!! そして—」

そう、負けれない理由はいくつもある。

それがある以上—

「—井草さんだろうがリムだろうがニングだろうが、俺の仲間_にアーシアを殺させて溜まるものかあああああ!!」

—不可能を可能にするぐらい、やっつてのけねばならないのだ。

そして、結界装置はアーシアの衣服ごと粉々に分解。

慌てて顔をそむける祐斗に、対応が遅れたギヤスパアの自分の腹部で隠しながら背を向く井草。

そしてイツセーは、歓喜の鼻血を流していた。

いろいろと題無しである。

13話

旧魔王派が主体となって行った、テロ行為。

うまくいけば、この戦いの決着が一発でつくほどの、すさまじい作戦だったというほかない。

だからこそ、井草は同情の感情を抑えきれない。

だってそうだろう。よりにもよって、よりにもよって、よりにもよって……。

「眼福、です!!」

——今日の前で鼻血を流している、イツセーの変態技で台無しにされたのだ。しかも相手を裸にする要領で中核を担う装置が大破したのだ。

この事実を知ったら、この作戦を考案したり実行までに動いた旧魔王派の関係者はショック死するかもしれない。

とりあえずアーシアはへたり込んで前を隠しているようだ。井草や祐斗やギヤスパーは見えないようにしているのでよくわからないが。あと、イツセーはしっかりガン見している。

「あらあら。大変ですわ」

と、朱乃が魔力で新しいシスター服を生成して、アーシアに着せたようだ。とりあえず振り返る。

しかしまあ、なんというか、ひどい話であった。

最悪の手段として汚れ役をする必要がなくなつたのは良い。井草としても、アーシアを殺したら一生心に苦いものが残るし、悔やむ。そういう意味では完全無欠のハッピーエンドだ。

だがしかし、もうちよつとこう……何かなかつたのだろうか。

「いや、あの技つて服を破壊するだけじゃなかつたんですかい？」

リムも頬を引きつらせているが、しかしほつとしながらイツセーに質問する。

イツセーも、若干照れて頬を書いている。

だが、アーシアが助かったことだけではなく、リムたちに嫌なことをさせなかつたことも喜んでるのが簡単にわかつた。

こういう男だからこそ、井草も救われたのだと、改めて井草自身が実感した。

「いやー。アーシアの体に密着してたなら、衣服の一部としてみなせないかなーって思つて。五十鈴と戦つた時もイツ化していた時ですら衣服を破壊できたし、それができるならこれぐらいできるんじゃないかって思つてさ？」

「あの、それでも格上の神滅具の禁手を壊すだなんてすごいのですよ!!」

ニングがイツセーの説明に、やっぱり信じられないと言いたげに大声を出す。気持ちにはわかる。痛いほどわかる。というより、信じたくないと思うところもないではない。

イツセーも、手段があれなのは自覚しているのか、すこし照れながら視線を逸らす。だがしかし、それでもなにかを考えていたらしく、言葉が続ける。

「それでも、普通にやったら無理だったと思うよ？ あれは禁手でブーストしてたからできたと思うんだ。グレーゾーンを無理やり力業で突破したって感じかな？」

流石に洋服崩壊単体では不可能だということだろう。

そしてもちろん、赤龍帝の鎧でも不可能なのはすでに実証されている。

だから、イツセーはそれを合体させることに賭けた。

洋服崩壊という特攻性と、赤龍帝の鎧によるブースト。その二つの特性を組み合わせて、ことで、上位神滅具という難敵に挑んだ。そして、賭けに勝ったのだ。

とつきの判断力と、そしてそれだけで終わらない思考の回転。その二つがあつたからこそできた、奇跡といっても過言ではない勝利である。

井草たちもそれを理解しているからこそ、イツセーを素直に認めるほかない。

リアスに至っては、歓喜の涙を浮かべながら、イツセーの鎧をなでる。

「それで結果を出したのだから、大したものよ。——お疲れ様」

そのリアスの対応に、歓喜の震えを示すイツセー。

そして、そのイツセーにアーシアが抱き着いた。

「イツセーさん！」

「アーシア!!」

イツセーもそれにこたえるように、アーシアを抱きしめる。

涙を流すアーシアに、井草たちも涙ぐんでしまう。

だがしかし、アーシアは知らない方がいいことを知ってしまったていた。

その事実を思い出したのか、リムが気まずそうに頭をかきながら、アーシアに頭を下げた。

「あー、すいやせん。私らの到着が遅れたばかりに、つらいことを聞かせちゃいました」

ディオドラの話したであろうこと。アーシア追放の最悪の真実。

アーシアにとっては死の宣告にも等しいかもしれない。少なくとも、それを後悔していないといったアーシアにとって、とてもつらいことだろう。

だが、アーシアはリムの手を取ると笑顔を向ける。

「平気です。確かにシヨックでしたが、私にはイツセーさんがいますから」

その言葉に、イツセーが涙を流す。

すさまじい勢いで感動しているのがよくわかる。この勢いでアーシアがイツセー争奪戦のトップに躍り出るのも十分あり得る話だろう。

などと井草が思っている、こんどはゼノヴィアがアーシアを抱きしめる。

「アーシア！ 無事でよかった！ おまえがいなくなってしまったら……」

「何処にもいきませんよ。イツセーさんとゼノヴィアさんが、私のことを守ってくださいから」

その言葉に、ゼノヴィア迄感動の涙を流して、うんうんとうなづいた。

「ああー！ お前は私が守る!! 絶対だ!!」

そして、抱き合う二人を見て、井草は苦笑した。

「アーシアちゃんを介錯しようとしたゼノヴィアちゃんがこういうとは、人は変わる時は一気に変わるものだねえ」

皮肉を言うつもりではないのだが、打ち解け合うのが速すぎる気もしないではない。

だが、それにたいして アーシアがむっとした。

「井草さん、それはもう過ぎた話です。ゼノヴィアさんも私に気を使ったからこそその話なんですから、蒸し返したら駄目ですよ？」

「痛いところを突かれてしまったな。だが、二度とそんなことをする気はないぞ!!」

もはや十年來の友といってもいいような関係であった。

そして今度は、リアスがアーシアを抱きしめる。

「貴方が助かってよかったわ、アーシア」

「部長さん。ありがとうございます、私のために」

アーシアのその言葉に、リアスは苦笑する。

そして、一層強く抱きしめた。

「アーシア。そろそろ私のことを部長と呼ぶのはやめていいわよ？ 私はあなたのことを妹のように思っているのだから」

「——はい、リアスお姉様!!」

「はいはい。気持ちはわかるけど、そろそろ気を引き締めようか」

このままだと、避難するのにいつまで時間がかかるかわからない。さすがにそれはまずいと、井草は気を引き締めさせにかかる。

まだ戦闘は続いている。それも、最上級悪魔クラスが激突する戦いだ。

作戦が失敗した以上、旧魔王派は撤退を選ぶだろう。禍の団のほかの派閥も残るとは思えない。

だが、作戦の要に何かがあったのだ。様子を見に来る手合いは出てくるだろう。

そもそもイツセーたちはアーシアを救出したらすぐに避難スペースに逃げ込むことになっているのだ。これ以上戦場に残っていれば、アザゼルの雷が落ちる。

何より、万が一にでもこの結果に切れた旧魔王派の実力者が、八つ当たりで襲つてきたら面倒だ。

ニングやリムもその可能性には気づいているのか、2人して警戒しながら周りを見渡している。

「とにかく急ぐのです。ここにきて誰かが死ぬことになったら、死んでも死にきれないのです」

ニングが大人びた説教をして、皆が決まらずげに視線を逸らす。

それに井草が苦笑した、その時――

「――アーシアさん!!」

突如、リムが必至の表情でアーシアにぶつかり、そしてそのまま転がる。

それにあつけにとられかけた皆だが、しかしすぐに状況を理解する。

アーシアのいた場所に光の柱が立ち上る。リムがとっさにもろとも突き飛ばしていなければ、巻き込まれていただろう。

そして、舌打ちの音が三つ鳴り響いた。

「……霧使いめ、手を抜いたな。作戦が台無しだ」

「それも、あの時の未熟な赤龍帝のせいなどと。最悪といつても過言ではありませんね。ヴァーリが殺していれば済んだ話だったのですが」

「我らの大望を阻むとは、万死に値する」

三人の男女の声。そして、そのうちの一人は数名が聞き覚えのある声だった。

井草は一瞬だけ記憶を探り、そしてすぐに女の言葉から正体を察する。

ヴァーリの手引きで駒王会談を襲撃した実行犯。アザゼルに切り札を使わせ、しかしエボリユーシオンエキスの力で逃げ切った女。そして、現魔王政権を恨む、旧魔王の血族。

最悪だと、井草は寒気を感じた。

「……カテレア・レヴィアタン!!」

井草はとっさにレセプターイーツに戻ると、素早く殴り掛かる。

しかし、その拳はシールドイーツと化したカテレアに傷一つつけることはできない。

そして次の瞬間、莫大な魔力と聖なる刃が、井草を穿ち切り刻んで、弾き飛ばす。

そして地面にたたきつけられた井草は、その三人のイーツを見た。

盾を模した意匠のイーツは、カテレア・レヴィアタンだ。

しかし、他にエボリユーシオンエキスの反応を見せながらも人の姿のままの悪魔が一人。そして、騎士の恰好をした、しかしイーツと思しき悪魔が一人。

彼らは一様に殺意を向けながら、リアスにまず視線を向ける。

「いきげんよう、忌々しきサーゼクスの妹よ。先日ぶりですが、カテレア・レヴィアタン

です」

カテレアに続き、今度は変化していない男が告げる。

「偽りの魔王の血族よ。我こそは真なるアスモデウスの末裔、クルゼレイ・アスモデウスだ」

そして、最後に騎士の姿をしたイーツが、名乗りを上げた。

「そして、私はもつとも偉大なる魔王、ベルゼブブの血を継ぐ者、シャルバ・ベルゼブブだ」

レヴィアタン、アスモデウス、ベルゼブブ。

四大魔王の末裔。しかも、ルシファーを除く三人が一堂に会するこの事態に、全員が寒気を感じる。

敵が襲撃してくる可能性は考慮していた。最悪の想定として、最上級悪魔クラスが来る可能性も理解していた。

だが、魔王末裔が三人も来るなど、さすがに創造の斜め上の非常事態である。

そして三人ともが、エポリューションエキスを使用している本気モード。おそらく蛇も使用済みだろう。

考えるまでもなく最悪の事態だ。目の前の三人は、全力でこちらを殺す気で来ている。

そして、渾身の殺意のこもった視線で、シャルバがイツセイ達をにらみつける。

「忌々しい偽りの魔王の血族が、我らの作戦を台無しにするとはな。……このまま逃げおおせると思うな、死んで償うがいい……!!」

その言葉と共に、魔力でできた大量の蠅が周囲を取り囲む。

そして、一斉に砲撃が放たれ、リアスたちに襲いかかった。

そしてそのころ、冥界では戦闘が勃発していた。

ビルデ・グラシヤラボラスが筆頭となったクーデター。

すでに各地で根回しがされていたのか、多くの者たちが転移を行い、クーデターが引き起こされた辺境地帯に移動している者たちがいた。

そして、鎮圧のために動いた冥界の兵士たちは撃退されることになる。

その理由は、大きく分けて三つ。

一つは、魔王クラスとすら称される、レーティングゲーム第三位、ビィディゼ・アバドンがクーデター軍のエースとして行動したこと。

そのネームバリューがさらに離反者を生み、鎮圧部隊の士気をくじいたのだ。中には鎮圧部隊の中からクーデター陣営にくら替えするものまで出る始末である。

二つ目は、クーデター部隊が使用した謎の巨大人形。

全長9メートル前後の巨大な人形は、一体一体が上級悪魔の上位クラスの戦闘能力を發揮。それらが総数千機以上で各地で戦闘を行ったのだ。

これにより戦線は完全に瓦解。最上級悪魔タンニーンとその眷属すら、数十機掛かりで撃退されたことで戦意が大幅に削られることになる。

そして、最後の一つ。それは数である。

鎮圧部隊を待っていたのは、数十万を超える悪魔の大軍であった。

誰もが見たことのない、悪魔たちの大軍。それによつて数の差すらひっくり返された鎮圧部隊は、大打撃を受けて大敗することとなる。

一人一人は下級悪魔であったが、しかしその数はまさしく脅威だった。

千機以上の人形兵器と数百万人以上の下級悪魔。質と量がそろったその軍勢は、今の冥界では考えられない。

そして、それをなしたビルデが、クーデター成功の会見を、全異形勢力の放送コードで行い始める。

強大な勢力の重鎮が、旧魔王派のテロで釘付けになっているこの状況下。それを阻止

することはどの勢力にも不可能だった。

そして、会見が始まろうとしたその時。

井草・ダウンフォール達は、旧魔王派の幹部たちによって、窮地に追いやられていたのである。

14話

放たれる大量の魔力弾は、一発一発がリアスたちを殺すのに十分すぎる威力だった。

魔王ベルゼブブの血を受けつぎしシャルバ・ベルゼブブ。彼はオーフィスの蛇を取り込んだことで、初代ベルゼブブと同等レベルにまでその能力を強化していた。

カテレアやクルゼレイも同等の能力であることは間違いない。そして、更にエボリューションエキスによってイーツ化している三人の戦闘能力はさらに上を行くだろう。

その死中に対して、しかし生き残る可能性は残っている。

「……間に合ったあ!!」

ポロポロになっていたデュリオが、滑り込むようにその弾幕の中に入り込む。

そして弾幕がリアスたちに当たるよりも早く、あらゆる力がその弾幕と激突した。

厚さ数メートルはある氷の壁。鉄すら一瞬で溶解させる熱量の炎のカーテン。さらに台風を思わせるほどの半径の竜巻。

それらすべてが弾幕を迎撃し、そしてお互いに相殺する。

その光景にリアスたちが驚くと同時に、シャルバたちも舌打ちを返す。

「足止めは突破されたか！ 忌まわしい天使擬きの分際で!!」

それに激昂したクルゼレイが、素早く魔力砲撃を叩き込む。

だが、それを見逃すほどリアスたちも愚かではない。

「させると思ってた!!」

「やらせるものか!!」

リアスの消滅の魔力とゼノヴィアのデランダルのオーラ。

若手悪魔の次元ではない、絶大な威力の攻撃が二つ。それが抜き打ちだったことも幸いして、クルゼレイの攻撃とぶつかり、打ち消し合った。

そして、そこからの追撃は井草たちの方が早い。

「イツセー！ まずはカテレアをつぶすよ!!」

「了解!! 広がれ、俺の夢空間——」

井草と共に突撃したイツセーが、素早く乳語翻訳の体勢をとる。

乳語翻訳を発動させれば、カテレアの行動を先読みできる。カテレアも読心術対策ぐらいはしているだろうが、アプローチが全く異なるイツセーの乳語翻訳を防げるとは思えない。そこに井草がサポートをおこなえば、抑えることは不可能ではない。

だがしかし、そんなことは敵も理解しているのだ。

「薄汚い転生悪魔の蜥蜴風情が!! 俺のカテレアに何をするか!!」

激昂したクルゼレイが割って入り、目にもとまらぬ速度でイツセーを殴り飛ばす。

そして、カバーに入ろうとした井草を蹴り飛ばし、即座にイツセーに連続攻撃を叩き込んだ。

「下賤な! 虫けらが! 俺の! カテレアに! あの! ふざけた! 気持ち悪い!

技を! 使おうと! するな!!」

「ぐおおおおお!! な、なんかごめんなさい!!」

どうやら、クルゼレイとカテレアはできていたらしい。

イツセーも流石に謝ってしまう。

なにせ、オカルト研究部でNTRはご法度だ。もとより悪趣味なうえに、井草の件もある。

その反応にクルゼレイは一瞬戸惑うが、しかしすぐに両手に魔力を展開した。

「ならば死ぬがいい! 貴様らの後にサーゼクスたちも送ってやる!!」

「そうはいかない!!」

「やらせないわよ、アーメン!!」

聖魔剣を引き抜いた祐斗と光を剣にしたイリナが、イツセーをカバーするため割って入る。

それを翼まで使って迎撃しながら、クルゼレイは即座に声を飛ばした。

「カテレア！ シャルバのカバーを!!」

「わかっていきます!!」

その言葉と共に、カテレアは魔力を最大限に高める。

そして龍の形をとった魔力が、デュリオを弾き飛ばした。

「うお!？」

「デュリオさん!? 大丈夫なのです—」

「遅い!!」

最強戦力であるデュリオが弾き飛ばされたことに気を取られたニングが、シャルバによって弾き飛ばされる。

其のまま数十メートルは吹き飛ぶニングを目で見送りながら、シャルバは一瞬怪訝な反応を示した。

「今の魔力防壁の感覚は……まさかな」

すぐに気持ち切り替えるシャルバだが、しかし一瞬のスキができる。

そして、その隙を逃さず光の刃がその頬を浅く切り裂いた。

「くそ！ 流石魔王の末裔でやがりますなあ!!」

剣豪の腕によって強化された光の剣は、最上級悪魔クラスにも傷をつける。急所にあ

てれば形勢を変えることができるだろう。

リムはそう思ったからこそ、この攻撃にすべてをかけて渾身の一撃を叩き込んだ。そしてそれは命中した。

だが、しかし。いまのシャルバは文字通り魔王クラス。悪魔の中でも上位十指に入るだろう、最強クラスの実力者。その上、イーツによって性能がさらに高まっている。

そんな彼を倒すのに、最上級クラスに届く程度の攻撃はあまりに軽かった。

そして、それはシャルバの怒りを買うのには、あまりにも十分すぎた。

「この、下賤な人間ごときがあ!!」

「がっはっ!?!」

鳩尾にケリが叩き込まれ、リムが弾き飛ばされる。

そして、額に青筋迄浮かべたシャルバは、苛立ち紛れに何かの道具を展開する。

「この偉大なるベルゼブブの末裔に傷をつけおつてえ! 貴様は楽には殺さん、次元の狭間の無にあてられ、消え去るがいい!!」

「……リム先輩!」

「リム!」

小猫と朱乃がカバーに入ろうとするが、大量に展開された魔力の蠅がそれを妨害する。

そして、シャルバが機械を操作すると、かろうじて立ち上がったリムの周囲を光が包む。

「…リム!？」

リムは立ち上がれているが、しかし動ける余裕がない。そして、井草もニングも間に合う距離にいない。

そして光は柱になり――

「リムさん!!」

――リムを突き飛ばしたアーシアと共に、跡形もなく、消え去った。

一方そのころ、クーデター政権による放送は、各地に届いていた。

そのカメラの群れを真正面から見つめ、クーデターの首謀者であるビルデは、軽く一礼ののちに言葉を紡ぐ

「――諸君。悪魔とは、なんだ？」

その質問を吟味させるためか、ビルデは十数秒の間沈黙する。やがて時間は十分だと判断し、再び口を開いた。

「私はこう思う。悪である魔性だ」

そして、自分をまっすぐに見つめる悪魔たちに微笑を向ける。

「自身の我欲のために他者を利用する。其れこそが悪魔だ。そういう意味では、人間と極めて近い存在だ」

悪であるということ。其れこそが悪魔の存在意義。

ビルデはそう言い切る。其れこそが悪魔だと。

「しかし、その悪魔は今、生ぬるい存在へと変わっていつている。……ほかでもない、悪魔の資格無きサーゼクス・ルシファーによってだ」

堂々と、彼はサーゼクス・ルシファーを否定する。

そして、怒りを示すかのように拳を握り締めて、震わせた。

「己が我欲のために悪をなす存在こそが悪魔にもかかわらず、悪魔の王となった彼奴らは、他の勢力のために、悪魔全体の活動を阻害しようとしている。……断言しよう、これが愚行でなくて何だという!!」

檄を飛ばし、彼はサーゼクスを非難する。

「彼奴は悪魔という種の存続のためだというが、彼奴がしたことは転生悪魔などという

紛い物を作つて数を誤魔化しただけだ。より強大な力を持つ駒を作り上げ、それにより本来の悪魔を強化するという手段をとる選択肢を、あの男たちは自ら捨てたのだ!! その証拠は、ここにがある!!」

そして、彼は一つの駒を取り出すと、良く見えるように前に出す。

「これは王キングの悪魔の駒。一定以上の実力者が使用すると死ぬという欠点こそあるが、使用したものの力を絶大的に強化する、彼奴等が秘匿した悪魔の駒である。つい先日、我々はこれの製造に成功した」

それは、冥界の最大級の秘匿事項。

四大魔王が危険性を考慮して、秘匿を決定した禁忌を、ビルデははつきりと示して見せたのだ。

「これがあれば、我々は天使などと同盟する必要はなかった。他種族を紛い物の悪魔にし、彼らに権利を与える必要もなかったのだ!!」

そう言い切り、ビルデはさらに告げる。

「転生悪魔を妬んだことはないか? 偽物が権利を得ているのを見て、力なき己を悔やんだことはないか?」

それは、転生悪魔よりも下の地位につけられている悪魔への勧誘だった。

「求めたことはないか? 下等種族を力によつて迫害し、暴力という美酒をたしなみた

いと思つたことはないか？」

それは、自分と異なるものを排斥したいという欲望を持つものへの勧誘だった。

「否定するな。認めていいのだ。悪魔、人間、獣人、墮天使。人種にかかわらず、知的生命体とは他者と自己を比較し、他者が自分より劣ることに愉悦を感じる生き物だ。……私は、それを肯定しよう」

そして、ビルデは声を張り上げた。

「我々は、悪をなす!! ムートロンと共に虐げられるものを作り、そして君たちを、この王の駒とその技術で作られし悪魔のための悪魔の駒、さらにはエボリューションエキスによつて、彼らを虐げるに足る力を君たちに与えることを誓おう!!」

そして、笑みを浮かべると彼は手を差し伸べる。

同時に彼の後ろの幕が開かれる。

そこにあつたのは、数百メートルを超える、結晶物の塊。

そして、ビルデは断言した。

「これはムートロン先遣艦隊がアステロイドベルトから回収した、悪魔の駒を構成する結晶体と同種の隕石だ。……今いる悪魔たちに駒を提供する分には問題ない」

そして誘うような笑みを浮かべ、ビルデは告げた。

「我欲のために悪をなそう。我々大魔王派は、魔王血族の了承のもと、私を長として虐げ

られる者たちを作るために全力を尽くすことを誓う」

そして、その言葉と共に、三人の少年少女が立ち並ぶ。

彼らは、ビルデの眷属である戦車と僧侶と騎士だった。

そして彼らを誇らしげに見てから、ビルデははつきりと言いつつた。

「改めて、紹介しよう。彼らは私を悪魔の王になるものと認めた、旧魔王の血族たちだ」

—その言葉に、映像を見ていた者たちは皆が目を見開いた。

そして同時に、証拠となる遺伝子情報が映し出され、それが事実であることが判明する。

「……私、ラウバレル・アスモデウスが用意しよう。王の駒を得ることができぬものにも、弱者を虐げるための力を」

「……私、ディナ・レヴィアタンが認めるわ。悪をなし、善を忌避するあなた達こそが悪魔である」と

「……俺、オギア・ベルゼブブが許すぜ？ 弱者を蹂躪し、好き勝手に奪って暮らす生活を送ることをな」

彼ら魔王末裔を配下にした、ビルデは確かなカリスマ性を得た。

そう、彼はもはや、グラシャラボラスの器に収まる男ではない。

彼こそは、真なる悪魔の王を僭称する、新たなる勢力の長——

「私は、ビルデ・グラシヤラボラス・サタンはここに宣言する。我ら大魔王派こそが、真なる悪魔の組織である!!」

このクーデターにより、悪魔は正真正銘二分された。

同時に、各地域でムートロンの舞台とムー同盟の軍隊が襲来。各地をカバーし、新魔王派の者たちは追いやられる。

多くの悪魔たちが墮天使側に疎開する中、ついに禍の団との戦いはより激しくなっていく。

ビルデ・グラシヤラボラス・サタンによる、冥界政府へのクーデターは、旧魔王派を取り込んだことで大成功を取めたのだ。

新魔王派と大魔王派の数的比率は、5対6。旧魔王派の数を取り込んだことで、正真正銘大魔王派は主流派となった。

ここから、冥界は再び争いに包まれた混沌の時代を迎えることとなったのだった。

15話

ビルデがクーデターを成功させたそのころ、井草たちは皆が目を疑っていた。光に包まれ、消え去ったアーシアの姿を探してしまう。

「……アーシ、ア?」

アーシアに突き飛ばされて光の柱から逃れたリムが、呆然とつぶやく。

彼女は、アーシアを助けに来たのだ。そして、実際に助けたのだ。そのはずだったのだ。

そのアーシアが、リムをかばって光に消えた。

その事実のリムが呆然と立つ中、しかしカバー委はいる者はいる。

「リム! しつかりするのです、敵は減っていないのです!!」

「しつかりするんだ、リム!!」

ニングと井草は、ぎりぎりでもカバーに入ることになった。

そして、シャルバたちも追撃してこないのには理由がある。

「しつかりするんだ! まだこいつらは退く気はない!」

「クッ！ この、天使擬きが……っ！」

「下がれカテレア！ ここは私が！」

デュリオがあらゆる属性の攻撃を乱れ撃ちにすることで、何とかカテレア達を押しとどめているからこそ、何とかアジア以外はいま無事なのだ。

だが、リアスたちは呆然となって動けない。

無理もない。彼女たちの多くは、味方との死別をろくに経験していないのだろう。

伊予と五十鈴の件で精神が鍛えられている井草は何とか戦意を忘れていないが、ここにきてリアスたちの実戦経験の質が問題になった。

地獄のごとき戦いを潜り抜けたら、はぐれ悪魔の撃破などを行っていたリアスたちだが、しかし味方との死別の経験はろくにない。

ゆえに、致命的な隙をさらしてしまっている。

「……………アジア？」

とくに、イツセーの衝撃が大きい。

当然だ。この中でも一二を争うほどにアジアを溺愛していたのだから。

そして、もつとも精神が一般人に近い。争いの経験が一番少ないのもイツセーだった。

ゆえにこそ、その衝撃は非常に大きいのだ。

そして、そのイツセーに、攻撃から逃れたシャルバが愉悦交じりに見下ろす。

「下劣なる転生悪魔と汚物同然のドラゴン。二つを掛け合わせるなど、グレモリーの姫君は趣味が悪い」

そして、呆然としているイツセーに、シャルバの嘲笑が届く。

「その赤い汚物。あの娘は次元の彼方に飛ばした。すでに次元の狭間の「無」にあてられて消えているだろう。……わかりやすくいつてやる、死んだのだ」

その言葉に、イツセーの動きはびたりと止まる。

そしてその瞬間、ぎよろりと、イツセーは首を曲げてシャルバに視線を向けた。

そしてその時、突然ドライグが言葉を発する。

『リアス・グレモリー。すぐに全員を連れてこの場を離れろ。死にたくなければ急いで退去した方がいい』

その言葉に背を押されたかのように、イツセーは立ち上がると体を震わせ始める。

そして、怒りに燃えているかのような、それでいてあきれ果てたかのようなドライグの声が響いた。

『その悪魔よ。シャルバとかいったか？ おまえは――』

あまりに無機質で無味無臭な声が、イツセーの口からこぼれる。

『――選択を、間違えた』

その瞬間、圧倒的な力としか形容の余地がないオーラが、イツセーからあふれ出した。

井草は、その瞬間に何が起こっているのかを悟った。

なぜから、ヴァーリに対抗するために念のために映像資料を見ていたのだ。具体的には、ジャガーノート・ドライブ覇龍の発動映像を。

『我、目覚めるは――』

〈はじまったよ〉〈始まってしまっうね〉

詠唱と共に、老若男女の声が響く。

ここまで似通っているとは思わなかったが、これで確信できた。

間違いない、イツセーは衝動的に覇龍を発動させようとしている。

『覇の理を神より奪いし二天龍なり――』

〈いつだつて、そうでした〉〈そうじゃな、いつだつてそうだった〉

このままではイツセーは暴走する。それも、寿命を高速で消費して。

そもそもイツセーはそれをなせるだけの実力を身に着けていない。下手をすれば一

万年を超える悪魔の寿命を一瞬で消費してしまうかもしれない。

だが、どうすればいい？

『無限を喰い、夢幻を憂う』

〈世界が求めるのは——〉〈世界が否定するのは——〉

何かが必要だ。イツセーを正気に引き戻すだけの何かが。

しかし、あれだけの状態のイツセーを正気に戻せる何かなど——

『我、赤き龍の霸王と成りて——』

〈いつだって、力でした〉〈いつだって、愛だった〉

いや駄目だこれはいくらなんでもしかし本当にこの状況はまずいだけだよっぱり人としていけないというか本当に成功したらそれはそれでシヨックを受けるというかでもそれぐらいしか今のイツセーの気をそらせるようなものはないしいやでもしかしだけどそれでも——

「「「「「「「——汝を紅蓮の煉獄に沈めよう——」」」」」」」」

「ああもう時間がないリアスちゃんゴメン!!」

「え?」

井草は決断するとリアスの胸元の服を破いてから速攻で駆け出してイツセーの後頭部にたたきつけた。

「おおおおおおおおっばいばいばいでアーシアがおっばいでいなくてとりあえずあいつ殺しておっばい!! ……………あれ?」

自分で試しておいてなんだが、成功したことが実に悲しい。

「イツセー。やっといてなんだけどないよ、それ、無い」

「い、井草さん!! 俺どうなってるんですか!? っていうかアーシアは大丈夫なんですか!？」

複雑な感情をもろに浮かべる井草に、イツセーはパニックを起こしながらも質問する。

しかし、イツセーはおっぱいの感触をしっかりと理解している。鼻血がだらだらと流れているのがその証拠だ。

同時にアーシアがほぼ確実に死んだことも理解しているのか、涙もポロポロと流している。

単純明快に言おう。この男、本能が変化球すぎる。

よく自分は、このど変態おっぱいマニアを更生できたなあ。そんな感想を一瞬抱き、井草はすぐに我に返った。

今は、そんなことを気にしている場合ではない。

「……………? ……………なんだ?」

あまりの急展開に、シャルバはぼかんとしている。

「カテレア。あれが、本当に今代の赤龍帝なのか?」

「ええ。残念なのは知っていましたが、まさかここまでとは…………」

クルゼレイの質問に、カテリアは頭痛をこらえるように額に手を当てて目を伏せる。之には文句をつけることはできないだろう。誰がどう見てもアレすぎる。

だが、そんなことは今はとりあえず置いておこう。

それよりも、なによりも、するべきことが残っている。

「……イツセー。アーシアちゃんはたぶん助からない」

「……………」

井草の残酷な言葉に、イツセーは震える。

だが、井草はそれをあえて癒さずに、はつきりと告げる。

「このままだと、すぐに俺たちも後を追うことになる」

そう。このままでは、多くの仲間たちが後を追うことになるだろう。

オーフィスの蛇とエボリューションエキスの相乗効果で強化された旧魔王派の三人

は、それだけの化け物だ。

こちらにも神滅具使いのデュリオがいる。時間をかければ、ここにきているオーディン神などの増援も期待できる。それが間に合えば、生き残ることもできるだろう。

だが、それまでに全滅する可能性だって十分になる。

そして、それをひっくり返せる要素は、ただ一つ。

「イツセー、頼む。俺のためじゃない、リアスちゃんたちの未来のために……戦ってく

れ」

井草はそういいながら、一步を前に踏みだす。

酷いことを言っている自覚はある。

だからこそ、たとえ弾除け程度にしかならなくても、自分は戦おう。

それが、アーシアに対する弔いであり、イツセー達に対するせめてもの誠意であると、井草は思ったから。

そして、イツセーはいつの間にか井草に並び立っていた。

「……大丈夫です、井草さん」

イツセーはそう言って、鼻血と涙をぬぐう。

そして井草の肩に手を置くと、静かにシャルバたちをにらみつける。

「アーシアを殺した奴はぶちのめす。部長たちも死なせない。どっちもやらなきやいけないんですよね？」

「……ああ。赤龍帝のつらいところだよ」

イツセーは、強かった。

正気に戻って、事実を受け止めて、そして前に進もうとしている。

そんなことができる彼だからこそ、できることなら泣かせてやりたい。

だが、状況はそれを許さない。なら、戦ってもらえないのだ。

これ以上、誰一人として、アーシアの後を追わせないために。アーシアの仇を討つために。

目の前の悪魔たちを、一人残らず叩き潰す。

その決意を込め、イツセーはシャルバをにらみつける。

「いくぜ、クソ野郎。アーシアを殺しといてただで済むと思つてんじゃねえ!!」

『Transferrer!』

譲渡の力を井草に流し込みながら、イツセーは一瞬で距離を詰めると、シャルバを一撃で殴り飛ばす。

「ぐおおおお!!」

「シャルバ!」

その一瞬の出来事に隙を見せたクルゼレイとカテレアに、井草はそくぎに突撃を開始する。

譲渡の力によって戦闘能力は大幅に増大化している。今の状態ならば、井草でも魔王クラスと戦うことができるだろう。

何より、人生を翻弄され続けてきたアーシアを、ある意味で最悪のタイミングで死なせた者たちには怒りを抱いている。

情報を吐いてもらう必要もあるので、殺すのはできる限り避ける。だがしかし、絶対

に殺さずなどという考えもない。そんな余裕は、実力的にも精神的にも存在しない。

ゆえに、全力で叩き潰す。

「さあ、覚悟してもらおうか!!」

背中から五対の翼を広げ、井草は戦闘を再開した。

16話

一瞬で殴り飛ばされたシャルバは、その一瞬で一気に怒りの沸点を超えた。

「赤い汚物風情が、この私をおおおおお!!!」

遠慮なく、全方位から、魔力の蠅による包囲殲滅を行う。

もはや目の前の汚物を屠ること以外に思考が回っていない。

ゆえに、シャルバの攻撃が相殺されるのは当然の結論だった。

炎、氷、雷、岩、光、闇。

あらゆる属性が乱舞し、シャルバの攻撃をかき消してイツセーを守り切る。

そして更にその瞬間、何かに引つ張られるようにシャルバの体が動き、イツセーの目の前まで引つ張られる。

「なっ!?!」

「ちよつとそこの魔王さん? 何人に喧嘩を売ったのか忘れたのかい?」

「俺達は、特にあんたを叩きのめしたくて堪らないんだよね」

攻撃全てを迎撃したデュリオと、抜け目なく糸を付けていた井草。

その二人の怒気の籠った声を聞きながら、シャルバは目の前のイツセーの顔を見る事

になる。

「……覚悟はいいか、クソ野郎」

其れこそは、逆鱗を踏み抜かれた龍の怒り。

初めて見る事になるそれに、シャルバは一瞬だが戦慄した。

そして、更に打撃を喰らう。

一撃でアバラの一本が砕け、そして再び引き寄せられる。

クルゼレイとカテレアは援護に走ろうとするが、しかしデュリオが発生させた竜巻で妨害を受ける。

そして三度打撃が叩き込まれ、しかしシャルバ・ベルゼブブは意地で体を動かした。

「汚物如きが私に触れるなあああああ!!!」

怒りと共にオーラを剣の形に形成。

そして、オーラで形成された剣は、真正銘の聖剣へと姿を変える。

「アスカロン!!」

その斬撃はカウンターとなり、イツセーの鎧を切り裂き、肉にまで届く。

そしてそのの一撃はイツセーの肉体そのものをかき消し、そして全身を焼いた。

「ぐああああ!!」

その悲鳴が憂さ晴らしになったのか、シャルバはイツセー嘲笑い、更に斬撃を繰り返

す。

「ヴァーリを黙らせる為に宿したゲオルギウススイーツの力はどうか？ 私のE Eレベルなら、アスカロンの再現も可能なのだよ!!」

そして斬撃を叩き込み、シャルバは一方的な戦闘を開始する。

そしてそれに乗じるように、クルゼレイとカテレアも攻撃を再開する。

カテレアが魔力結界とシールドスイーツの力でデュリオの攻撃を防ぎ、そこをクルゼレイが桁違いの魔力量の砲撃を乱れ討つ。

その出力は、最早魔王クラスすら凌いでいた。

「アザゼルの一撃すら防いだシールドスイーツの鎧を、紛い物の天使が突破できると思わない事です!!」

「そして我がデビルイーツによつて増幅された魔力！ 神すら殺せる力に平伏するがいい!!」

その猛攻にデュリオは一瞬押されかけ――

「いや、だからアンタ達は――」

「―ケンカを売った相手の数ぐらい把握してほしいね!!」

―後ろに回り込んだ井草の姿を見て、笑みを浮かべた。

そして井草は、手に持った剣を全力で振るう。

それをクルゼレイは魔力障壁で防ごうとするが、しかし、あっさり切り裂かれて背中に裂傷を刻み込まれた。

「なああああああ!?!」

「クルゼレイ!?! よくも—」

その光景にカテレアはカツとなって井草を切ろうとするが、しかしそんな余裕を与えないほど、こちらこそ愚かではない。

その背中にデュリオの光の連撃が叩き込まれ、不意打ちだった事もあってカテレアは負傷する。

そして更に動きが止められた隙について、井草は再び剣を構える。

そのタイミングになって、漸くクルゼレイもカテレアもその剣に気が付いた。

そして、同時に驚愕の声を叫ぶ。

「—デュランダル!?!」

「ああ、ゼノヴィアちゃんから借りてきた!!」

井草・ダウンフォールは人工聖剣使いである。

つい先日の夏休みにおいて、受容の器の能力を最大限に活かすべく、バルパーの置き土産である因子を取り込んだのだ。

とは言え肝心の強力な聖剣のあてに困っていたが、しかしそこは何とかなった。

なにせ、グレモリー眷属にはアスカロンとデュランダルの二つの伝説クラスの聖剣がある。

必要な時にそれを借りる事ができるというだけでも、十分すぎるほどの戦術的価値がある。

事実、天然物の聖剣使いであるゼノヴィアはイッセーからアスカロンを借りていた。聖剣因子を取り込んで聖剣使いの適性を得た祐斗も、ゼノヴィアの了承の下、デュランダルを借りて戦った。ならば人工聖剣使いである井草がそれをなせない理由はない。

今この場において、オカルト研究部の中でも圧倒的身体能力を発揮する井草に、敵に対する特攻作用のある矛を持つるといふ価値は非常に大きい。

今この一点において、井草・ダウンフォールはこの場で最強格の攻撃力を手にしていた。

「死なない程度に切り刻む!!」

「OK。じゃ、俺もすっかり援護するよ」

井草に攻撃を一旦任せ、デュリオは反撃の為の手段を作り上げる。

そして生成されるのは、巨大なシャボン玉。

それがシャルバ達三人を包み込むが、彼らの心には何の作用もされない。

それは、彼らが大切な思い出を持っていないというわけではない。

何故なら、これは虹色の希望にあらず。あまねく敵を叩き伏せる、上位神滅具の禁手による絶望なのだから。

「禁手化、パランス・ブレイク、フラジエツロ・デイ・コロリ・デル・アレコパレーノ、スベランツァ・デイ・プリスコラ 聖天虹使の 必 罰、終末の綺羅星!!」

その瞬間、シャボン玉に包まれたシャルバ達に、天罰が襲い掛かる。

遍く属性の天罰が一斉にシャルバ達に襲い掛かり、その強靱な肉体を痛めつけた。

「ぐあああああああ!!」

思わぬ攻撃に絶叫を上げる三人は、其れゆえに致命的な隙を晒してしまふ。

そして、その隙を逃すほど、イツセーも甘くなかつた。

「……アスカロン!!」

籠手からアスカロンを引き出し、そして全力でシャルバの腕を切り落とす。

そして返す刀で、その脇腹に聖剣を突き刺した。

「があああああ!!」

「オリジナルのアスカロンはこっちにあるんだよ、この糞悪魔あああああ!!!」

絶叫を上げるシャルバの顔面に、あらゆる感情を込めたイツセーの右の拳が叩き込まれる。

そして、シャルバはイーツ化を維持できず爆発して、通常の状態へと戻ってしまった。

「シャルバ!!」

「一隙を見せたね？」

そして、その事実には驚愕したクルゼレイもまた、致命的な隙を見せる。

その瞬間、井草は大上段にデュランダルを振りかぶり、そして因子を収束させる。

文字通りの全力中の全力。これを外せば井草はすぐには動けないだろう。

ゆえにこそ、この一撃は外さない。

「眠つてろ、三下魔王!!」

「……しま——」

最後まで言わず、井草の渾身の一撃がクルゼレイを叩き切る。

かろうじて致命傷だけはしのいだクルゼレイだが、こちらもイーツ化を維持できず爆

発。そしてシャルバ以上のダメージにより、意識を失って地に落ちた。

「クルゼレイ!! ……貴様らあああああ!!」

そして、2人の同士を傷つけられ、カテレアが怒りに燃える。

全力中の全力で、ボロボロになりながらもデュリオのシャボン玉を粉砕、そしてデュ

リオを蹴り飛ばすと、井草に掴みかかる。

文字通りの全力を出した井草は躲し切れず、首を掴まれ持ち上げられた。

「ぐ……っ」

「よくもクルゼレイを!! その首をへし折ってあげましょう!!」

怒りによって目を血走らせたカテレアは、そう言い放つ。

そして、それを確かに実行するべく、掴んだ右手に力を籠め―

「……その殺意、今の私達全員があなた達に持つていると気づきなさい!!」

―そのがら空きの中に、リアスたちの一斉攻撃が叩き込まれる。

彼女達が今まで何もしようと思わなかったわけがない。

アーシア・アルジエントはそう思わせるだけの価値を持つ。グレモリー眷属の大切な仲間だった。

しかし、正攻法で今のカテレア達を倒せるわけがない。其れもまた分かっている事だった。

だからこそ、力を込めてそれを解放する瞬間を狙っていた。その為に雌伏して、隙を伺っていた。

そして、その隙をカテレアは見事に晒したのだ。

その攻撃によって生まれた隙。それを見逃すほど井草も愚者ではなかった。

「……ゼノヴィアちゃん!!」

奮起してカテレアに組み付くと同時、井草はデュランダルを投げて返却する。

そして、ゼノヴィアはそれを掴むと飛び上がった。

その光景を見て、イツセーもまたアスカロンを射出する。

「使え、ゼノヴィア!!」

「ああ、使うとも!!」

二振りの聖剣をその手に構え、ゼノヴィアはそれを振りかざす。増幅された莫大なオーラは、まさに天を衝く柱の如し。

「アーシアは、私を赦してくれた。アーシアは、私の無二の友達だった」
そして、涙をこぼしながら、カテレアを睨みつける。

「そのアーシアの仇だ!! その身で受けるおとおおおお!!」

「ま、待ちなさい! 今放てばあなたの仲間も——」

その瞬間、井草はカテレアから離れ、その体を暴風が掬い取る。

「—そんなミス、流石にしないって」

「そういう事だよ、お姉さん」

ざまあ見ろとでも言いたげな、井草とデユリオの言葉と同時に、ゼノヴィアの斬撃が叩き込まれる。

そして、胴体に深い斬撃の痕を残しながら、カテレアはシャルバの居たところにまで吹き飛ばされた。

未だかろうじてイーツを維持してはいるが、しかし大きな負傷を負っている。

「おのれえ……っ! この、真なるレヴィアタンのこの私を……っ!!」

17話

戦場から離れた場所で、五十鈴と伊予はナイアルを出迎えていた。

僅かに負傷の痕を残したナイアルを見つけて、伊予は思わず駆け出して抱き着いた。

「ナイアルさんっ！」

「よ、ご苦労さん」

ぼんぼんと伊予の髪を撫でた後、ナイアルは伊予に口づけする。

最初は軽く、しかしすぐに舌を入れて唾液を流し込むディープキス。

そして、そのキスを堪能した伊予は、唾液を飲み込むと体を震わせて陶醉する。

「はあああ……っ！ ナイアルさん」

泥酔したような顔でナイアルに倒れこむが、

ナイアルはそれを器用に片手で受け止めると、ボールをパスする感覚で、部下に渡した。

「んじや、俺は野暮用終わらせてから戻るわ。それまでそいつらに可愛がつてもらいな」

「はあい……。よろしくお願ひしますう……」

うつとりとしながら、伊予は其のまま男にしな垂れかかる。

それを下心が丸見えの下品な目つきで見ながら、ナイアルの部下は伊予を連れていく。

「んじゃ！ 隊長もすぐ来てくださいいね！」

「新しい女も集めたんで！ 隊長には洗礼をお願いします!!」

「隊長の分、ちゃんときまいますから!!」

そう口々に言う部下に片手で応じながら、ナイアルは五十鈴に目を向けると、軽く抱き寄せる。

そして同じようにキスを交わすが、五十鈴は涼しい顔でそれを終わると、ナイアルが抱えている少年に目を向ける。

抱えられていたのは、ディオドラ・アスタロトだ。

ナイアルは作戦失敗に気づいた時点でアザゼルとサーゼクスから逃亡。そして様子を見に来た時にディオドラが生きている事を確認して、戦闘中にこっそり回収してきていたのだ。

五十鈴としては、ディオドラにそれだけの価値を感じない。それならシャルバ達を援護したり、井草達を始末した方が効率的なはずだ。

結果的には好都合だが、だからこそ理由が分からない。

「……意図が読めないんだけど?」

心底疑問に思ったので聞いてみるが、その返答は単純だった。

「いや、ムートロン（俺）が同盟結ぶにあたって、好都合なのはビルデの方だし? ぶっちゃけシャルバ達は無能すぎて困ってたんだよ」

なるほど。自分達に都合のいい同盟相手にトップになって欲しいという事か。

それは分かった。だが、他にも分からない事は多い。

何故、やばくなったら見捨てていいと言っていたデイオドラを態々回収したのか。そして、シャルバ達を倒した隙について井草達を始末するという真似をしなかったのは何故か。

その疑問に気づいたのか、ナイアルはまずデイオドラに視線を向ける。

「ま、こいつとは趣味が合うからな。組織としての優先順位は大した事ねえからあの指し出したけどよ? 俺個人としちゃこいつと一緒に女墮とす話で楽しみたかったからよ」

「酷い男」

そう言いながら、五十鈴はしかし気にしてない風を装う。

伊予がこれを聞いても、まったく意にも介さないだろう。ナイアルの他の雌達も気にしないだろう。そういう風になってしまっているのだから。

だから五十鈴もそういう風に見せかけ、そして最後の疑問を解消する事にする。

「で、井草達を殺さなかったのは？ 貴方がクトウルフイツで一斉射すれば、大半は潰せたでしょ？」

その質問に、ナイアルはなんて事が無いように、あつさりと答えをくれた。

五十鈴の手が僅かに震えているのを見向いて。しかし、それを隠せていると思つていゝる五十鈴を嘲笑いながら。

心底楽しそうにしながら、実際愉しみだといわんばかりに――

「お前か伊予が殺した方が、あいづらは苦しんで死ぬだろうからだよ」

――そう、はつきり言い切つたのだつた。

井草達は、力なくへたり込んだ。

戦いは終わった。既に禍の団は撤退もしくは撃破または捕縛されたとの事だ。

残敵警戒は必要だろうが、しかし井草達はそれをする余力がなかった。

特にないのはイツセーだ。既に崩れ落ち、地面に手をつけている。

「……………アーシア……………っ！」

歯を食いしばり、涙をこぼしながら、イツセーは震えるしかない。

そしてそれはリアス達も同じだ。特に仲が良かったゼノヴィアは、声を出す事なくボロボロと涙をこぼしている。

敵の目的を挫く事はできた。旧魔王派の幹部であるシャルバ達は撃破し、カテレアとクルゼレイは拘束している。

だがしかし、失ったものとはとても大きかった。

何時かは在り得た事だ。このまま戦いが続けば、味方の中に死人が出てくる事も十分に考えられる。誰一人として死なないなど、希望的観測にもほどがある。

だが、それでもこれはショックという他ない。

「アーシア……………アーシア……………」

アーシアの名前を何度もいうイツセーに、井草たちは見ていられず目を背け—

—目が点になって思考停止した。

そして、それに気づかずイツセーは泣き続ける。

アーシアを失ってしまった。守ると誓った少女を、目の前でなくしてしまった。

仇は討ったが、其れで喜ぶような少女でないことは自分たちがよくわかっている。

だからこそ、イツセーは悲しくてたまらない。

「アーシア……っ」

「は、はい」

だから、その返答に反応が十秒ほど遅れた。

「兵藤一誠、こちらを向け。なんというか彼女がかわいそうだ」

と、さらに宿敵の声まで届いた。

いやいや待って待って、ちょっとおかしい。

なんでその二人の声が届くのだ？ 取り合わせがおかしいにもほどがあるだろう。

だがしかし、一縷の希望を込めて振り返ってみれば――

「い、イツセーさん！ 大丈夫ですか!!? ボロボロじゃないですか!!」

そこには、ボロボロになっているイツセーを心配する、アーシアの姿があった。

「まったく。覇龍を見に来たと思ったら、既に解除されているとは残念だ」

「まあいいでしょう。シャルバ達三人を撃退したのなら、見どころは十分以上にあるの

ではないですか?」

と、残念そうにしているヴァーリを、アーサーがなだめている。

はつきり言おう、井草達もわけが分かかっていない。

だがしかし、井草も分かることが一つだけあった。

「……ここで戦うべきなんだろうけど、流星に余力がないね」

「その方がいいぜえ？　俺っち達も弱ってるあんた達を叩きのめすなんてマネはしたくねえしな」

勝ち目が見えないことにいら立つ井草の気持ちを知ってか知らずか、美猴はそうからからと笑う。

しかし、問題はそこではない。

「あの、なんであなた達がアーシアと一緒にいるのかしら？　いえ、助けしてくれたのはありがたいのだけれど」

全く状況が呑み込めていないリアスが、ぽかんとしながら質問する。

それに応えたのは、眼鏡をくいとあげたアーサーだった。

「いえ、次元の狭間を搜索していると、いきなり彼女が転移してきましたので。ヴァーリがそちらの関係者だと言ったので、保護する事にしたのですよ」

ものすごくたままだっらしい。

それで捕虜にするでもなく自分達に返しに来る辺り、それはそれでどうなのかとも思う。指摘して手のひらを返されても困るので、井草は何も言わなかったが。

流石に今の段階でヴァーリとの戦闘は不可能だ。アーシアを助けてもらった借りもあるので、ここはぐつと耐える。

「うわああああああん!!　アーシアああああああ!!」

「あ、ああああああアーシアああああああ!!」

「キヤツ!」

ゼノヴィアとイツセーが勢いよくアーシアに抱き着いて、アーシアは軽く驚いた。

漸く事態を理解したらしい。アーシアが無事だということ飲み込めて、一気に反応したという形だろう。

それを苦笑しながら、ヴァーリは肩をすくめる。

感謝しなくてはいけないが、組織の裏切り者に素直に感謝するのもあれではないだろうか。というより、謝罪を求めるべきではないだろうか。

などと考えている井草の視線に気づいたのだろう。ふつと笑いながら、何かを気にしたそぶりを見せる。

「まあ、ただの気まぐれだから感謝の言葉はいらない。もし感謝してくれているのなら、後一分ぐらい待っていてもらえるといいんだが……おっと、来たぞ」

何が来たのか。

一同がそう思いながら上を見上げると、空間が裂けて巨大な龍が現れる。

全長百メートル以上の赤いドラゴン。まず間違いない、伝説に名を残していてもおかしくないレベルの存在だ。

「……おいおい、こんなところにグレートレッドが出てきやがったのかよ」

「この地に集った強者達に惹かれた……わけではないな。この程度では彼の興味を引く事はない」

「……見つけた、グレートレッド」

と、そこに新たな者達の声が届いて、ふと振り返る。

そこには、割とボロボロの恰好になっていたアザゼルとサーゼクスがいた。

後、ゴスロリを着た黒髪の少女が離れたところに立っている。

「アザゼル先生!?!」

「お兄さま!?!」

井草とリアスが驚いて声を上げれば、アザゼルとサーゼクスは苦笑を浮かべながら向き直る。

「よー！ 無事なようで何よりだな」

「無事で良かった。こちらは少々格好がつかないがね」

そう言いながら苦笑する二人に、ヴァーリが興味深げな視線を向ける。

なんとというか、何かの感想を聞きたがる子供のような表情だった。

「ナイアルが足止めに動いたと聞いてたが、その様子だと凌いだみたいだな、アザゼル」

ヴァーリのその質問に、アザゼルは心底嫌な顔をする。

ヴァーリに対してそんな顔をするようなタマではない。と、いうことはナイアルには

逃げられたのだろう。

それを察して、井草も不機嫌な表情になった。

「ゴキブリ並みにしつこいね、アイツ」

「まったくだ。アイツイーツ化したら主神クラスの化け物になりやがったぞ」

更に酷い情報であつた。正直、井草は胃が痛くなつた。

井草がナイアルに復讐する資格があるかどうか、井草自身はよく分かつていない。

確かにナイアルが一番悪いとは思うのだが、しかし井草も井草でいくつもの問題行動を起こしている。ことレイプまがいの行動をとっているのはアレすぎる。伊予本人が気にしていないのも救いにはなりはしない。

しかし、だからと言って、ナイアルをどうにもしないなどという事はない。伊予と五十鈴を止め、可能なら救い出すと決めたのだ。その邪魔になる事が確実なのだから倒す他ない。

しかし、最強の魔王であるサーゼクスと、墮天龍の鎧を使ったと思しきアザゼル相手にそこまで言わせたのだ。井草が倒せるとはとても思えない。

「あの、先生。そもそもあれ、何ですか？ あと彼女は？」

イツセーが状況を飲み込めず、見知らぬ少女と赤いドラゴンを交互に指さす。

そういうえば、井草も赤いドラゴンはともかく、少女の方はよく知らなかった。

「あーあーあーあーそういうことかよ。お前、そんなに次元の狭間にいたいのか？」
「そう。我、静寂がほしい」

「そういうわけにはいかないな。今の我々にとつて、変質した貴方を次元の狭間に置く事を了承する事は危険すぎてできないのだよ」

オーフィスの言葉に、サーゼクスが僅かに戦意を見せながら警告する。

だがしかし、オーフィスはそれを意にも介さない。

「……我は静寂を手に入れる。けど、今は帰る」

そういうなり、オーフィスはいつの間にか姿を消した。

眼のも止まらぬ早業とは、まさにこのことなのだろう。

「やれやれ。我らが長は自由な事だ」

「君が言うな」

ヴァーリの感想に、井草は心から突っ込みを入れる。

自由すぎるという意味では、ヴァーリも対外すぎる。チーム全体が対外すぎる。

イツセー達から話を聞いていたが、どう考えても組織人として向いていない。禍の団からもいづれ排斥されるのではないだろうかと思ふ。社会不適合者の群れではないかと、井草は考え始めていた。

だがまあ、今は何というか戦える状態ではない。

井草達は満身創痍だ。アザゼルとサーゼクスも割と披露しているうえに、戦意を見せていない。

これで突っかかっても、叩きのめされるのは井草の方だ。それぐらいには井草も状況を理解していた。

「つていうか、グレートレッドつて、何なんだ?」

イツセーに至っては、グレートレッドの方に意識が向いていた。

まあ、あれだけ巨大なドラゴンを見た事があるわけなので、仕方がないといえ仕方がない。

「あれは二天龍の上に存在する、最強の存在の一角さ。アボカリユブス・ドラゴン真なる赤龍神帝、グレートレッド。黙示録にしろされし赤い龍、真龍とすら称される偉大な存在だ」

そう説明するヴァーリは、どこか輝かしいものを見る目で、グレートレッドを見る。

「今回の俺達やオーフィスの目的は、あれの姿を確認する事だ。シャルバ達の作戦はどうだつていいのさ」

「で、ウチのリーダーの夢はアイツを倒したいんだつてよ。すつげえ無謀な夢だけど、面白そうだろ?」

などと美候が茶化すように言うが、ヴァーリはむしろ誇らしげだった。

「赤と白は並び立つ存在だ。だが、白には神龍という称号を持つものがない。グレー

トレッドと同格の白い龍がないってのは、どうも気になってね。だから俺は、其れに
なりたいたんだ」

凄まじくまつすぐな瞳で、ヴァーリはそう言い切った。

そして、その目はイツセーにむけられる。

その目は、すさまじく興味の色で埋め尽くされていた。

「しかし兵藤一誠。君もすごいな」

「へ？ 俺？」

イツセーがきよんとすると、ヴァーリは苦笑する。

「覇龍を制御したんだろう？ 俺たちは遠巻きに途中から見つめていたが、俺でも寿命の消耗を抑えることはできても、完全な制御は難しいんだ。さすがは俺のライバルといいたいところだが、君はまだ未熟すぎるから種があるんだろう？」

確かにそのとおりである。

覇龍のデメリット。それは、寿命の高速消耗と暴走状態の突入である。

ヴァーリは魔王の血に由来する莫大な魔力によって消耗を防いでいるが、暴走に関しては苦労している。

逆にイツセーは、寿命は高速で消耗しただろう。だが、完全に覇龍を制御していた。それがすごいと思うのは当然なのだが――

「それは、井草さんの機転と部長のおっぱいのおかげだな」

—理由が凄まじくあほらしかった。

「……………イツセー。言わないで……………」

「ゴメン。本つ当にゴメン」

リアスと井草がうつむいて言葉を漏らし、それが本当であることを証明した。

ヴァーリも流石に何とも言えない表情になる。是はヴァーリは全く悪くない。

「リアス・グレモリーの乳房は、兵藤一誠の制御スイッチなのか？」

帰り際、ヴァーリはそんなことを言ってしまった。

「ぶはははは！ いいねえ、スイッチ姫ってか？」

などと美猴が漏らしたが、これが悲劇を生む事になるとは、誰もまだ知らなかった。

18話

そして、別口で帰還した、ムートロン先遣艦隊の母船の一つ。

ナイアルが自分の部隊と一緒に運送する専用の船で、五十鈴は自分が与えられた部屋に一旦戻る。

これからナイアルより先に集まっている部屋に行つて、男達の慰み者になりに行くのだ。週に最低一回はしている、いつもの事だ。

戦闘の為に着用していた機能的な服を脱ぎ棄て、男の劣情を高ぶらせる事に特化した煽情的な服に着替え始める。

既に伊予や他の女達は楽しんでゐる頃だろう。ナイアルが刈り取つた女達を貪る男達の楽しみではあるが、伊予を含めてそれに恐怖や嫌悪感を覚える女は、この船には一人しかいない。

そして、服を着る前に、五十鈴は全裸のままトイレに入る。

そして、数秒後。

「……………うえつ。げええ……………っ！」

胃の中のものを全て吐き出し、胃液すら出す。

一分かけて中身を全て吐き出すと、今度は口を漱いでから錠剤を取り出し、それを大量の水で流し込む。

……数分後。落ち着きを取り戻した五十鈴は、蠱惑的な表情を作りながら部屋を出て、乱交する為の大部屋へと向かう。

そして、そんな中、五十鈴は男に食られる事ではなく、井草達が強くなっている事を喜んだ。

彼らは順調に強くなっている。井草もまた、戦闘の為の手段を一つ手に入れた。その上、新たなイーツの力も手に入れたのだ。

これは良い事だ。ナイアルの目的の為でなく、五十鈴の願いの為に良い事だ。

井草・ダウンフォールは強くなる。今回の戦いで五十鈴はそれを理解した。

かつて見限ってしまった、中身が格好と釣り合っていない少年はもういない。あそこにいるのは明確ないい男だ。そして、彼を支える仲間達もいる。その上彼らもまた強くなるうとして強くなっているという展開だ。

思わずほくそ笑んでしまい、慌てて表情を戻す。

ばれてはいけない。そうなれば、五十鈴はナイアル達に殺される。

それでは駄目だ。それでは、五十鈴の願いは叶わない。

「井草。私は悪党を張らせてもらうわ。だから、あんたは正義の味方をやりなさい」
正義の味方は悪を倒す者だ。そして、拍手喝采されるのである。

そう、だからこそ――

「私達を殺しに来なさい、井草。貴方が倒すべき私邪と伊予悪は、ここにいるんだから」
だからそれまでに強くなれ。

手加減はしない。遠慮もしない。自分は邪悪であり続ける。

そして最期の時が何時来るのかを愉しみにしながら、五十鈴は男に貪られる為にドアを開けた。

そして、旧魔王派の襲撃が終わった夜の事だった。

井草は自室で、ベッドの上でぼんやりとしていた。

今日は本当に疲れたと言っている。人生でもここまで激戦をしたのは初めてだ。

旧魔王派の幹部である、三人の魔王血族。それをかつての魔王クラスにまで強化する、オーフィスの蛇。とどめにムートロンの主力兵器である、エポリューションエキス

によるイツ化。

あらゆる意味で旧魔王派で最強だろう三人だった。イツセーが覇龍にならなければ、全員が生き残る事は不可能だろう。全滅だつてありえた。

だが、その戦いで旧魔王派は致命傷を受けたわけではない。

確かに大規模な作戦は失敗した。投入した戦力は四割が撃破あるいは捕縛されたとどめに、これまで旧魔王派を主導していた三人の内、カテレアとクルゼレイは捕縛され即断でコキュートスでの永久冷凍刑。シャルバ・ベルゼブも作戦を主導していた事と、2人を見捨てて逃げ帰った事が原因で、権威を失墜。ヴァーリはどうやら旧魔王血族でありながら、旧魔王派の指揮などには一切関わりないと断言したらしい。

魔王血族である事を誇りにしながら、魔王としての責務は果たさない。どうやらヴァーリは本当に勝手気ままに行きたいらしい。どうしようもない。

まあ、そういうわけで旧魔王派は大打撃を受けた。

だがしかし、其れ以上の莫大な戦果を敵は上げる事に成功したのだ。

ビルデ・グラシヤラボラス・サタンによるクーデター。

それに仕える三人の魔王末裔の存在。

そして王の駒による強化手段の公表。

更には追加で、新たなる悪魔の駒も発表された。

王の駒の安価版とも、女王の駒の上位版ともいえる貴族ノウブルの駒。また、出生率を向上させる為、母体としての能力を高める母親マザーの駒が発表された。

どちらも、チェスの駒には存在しない物。完全な戦略戦術的な運用を考慮したものだ。

更に、ビルデの領内では既に試験的なテストも終了。それらを千個以上使用しているからこそそのあの大勝だと断言されていた。

それだけで、ビルデはレーティングゲームという「ゲーム」ではなく、将来的な各勢力との戦争と、その勝利を見据えた戦略をとっていたという事がうかがえる。

戦争を忌み嫌い、できる事なら和平を望んだ。そして、和平を結び機会を得たと同時に、急速に各勢力との和議を推し進める。種の繁栄は、戦争で減らない以上は自然に任せれば十分だ。

そんな、平和と調和を前提としているサーゼクス達ではやろうとも思わない事を、ビルデはしてのけた。

闘争と勝利を前提とする政策をとったビルデに、多くの悪魔達が「勝利して、肥え太る」未来を見た。

それは、サーゼクス達がとってきた「敗北せず、痩せ細らない」未来とは方向性が異なっている。

そしてその結果、悪魔は明確に二分されたのだ。

中には旧家の者達も数多く参加しており、バル家の血筋も四割以上がビルデについたとされている。

比率としては6対5で、大魔王派の方が僅かに上。更に彼らはムー同盟に所属する国から、兵士達を派遣してもらって一気に勢力圏を確保に成功。アクア側の冥界は、その三割を奪い取られる事になった。

ディオドラ・アスタロトの内通による襲撃。そしてビルデ・グラシヤラボラス・サタンによるクーデター。

政治家達はその責任を、2人のいた家系から排出された魔王であるアジュカとファルビウムに求めたが、これに関しては残った大王派の重鎮や、サーゼクスやセラフォルが宥めて収まった。

数多くの技術を生み出した、替えの利かない存在であるアジュカ・ベルゼブブ。冥界きつての軍師であり、こういう状況であるからこそ必要な存在であるファルビウム・アスモデウス。

彼らを排斥するのではなく、彼らに事態解決を担わせる事でこそ、責任を取らせる方法である。そういう事になったらしい。

新魔王派の悪魔達は、その三割以上が疎開として墮天使領に避難したらしい。

不幸中の幸いは、これによって強者育成が重要視された事だろう。

ソーナ・シトリーが提唱する、下級中級が上級と同じような教育を受ける事ができる学園。

本来ならそんなものを認めたくない旧家達ではある。

だが、そうも言つてられない。

強者の育成には時間がかかる。実戦で切り覚えれば早いかもしれないが、其れで生き残れるのはごく一部の例外だけだ。

そんな賭けをするより、まずは一定以上の教育を行うべき。その方が安全に戦力を集める事ができる。

そう考えた旧家達は、レーティングゲームの部門を小さめながらも作る事を認め、代わりにソーナに軍学校化を要求した。

ソーナとしても複雑ではあるが、誰もが通えるレーティングゲームの学校をまず作れるのは僥倖。結果的にこの状況下を利用してその学校の価値を高めれば、旧家が相手でもレーティングゲーム分野の発展を押し切れると判断したらしい。

清濁併せ呑む覚悟を決めたソーナは、それを受け入れて準備を進めている。

何事も、良い事と悪い事がある。これはつまり、そういう事なのだろう。

そして、井草は静かに目を伏せる。

その事も重要だ。だが、井草としてはどうしても身内の心配をしてしまう。

あの後、イツセーは意識を失って搬送された。

もとより禁手になりたてで未熟な使い手。歴代最弱とすら称されるのが、イツセーと兵藤一誠である。

それが、衝動的にいきなり覇龍を発動させた。

暴走こそ井草のヤケクソじみた機転で止めれたが、寿命の消耗まではどうにもできなかったのだろう。急激すぎる生命力の消耗が、イツセーの意識を失わせたのだ。

そして、その結果はすぐに出た。

余命百年足らず。それが、イツセーが支払った代償だった。

前魔王以上の強さを発揮する、強化された魔王血族。それも、三人がかり。

それらを切り抜けるだけの力を手にしたのだから、当然の代償といえれば当然だろう。ましてや、一人は龍殺しの力まで持っていたのだ。下手をすれば逆に負けていた可能性だってある。

だから、これは仕方のない事だと考えるしかないだろう。

だが、それでも――

「それで済ませるわけには、行かないよなあ」

つくづく思う。自分は弱い。

伊予と五十鈴はE Eレベル6，0で、タンニーンが相手でも戦う事ができる。

ムートロンの精銳は更にその上を行く6，5で、魔王クラスの戦闘能力。

ナイアルに至っては7，5とのことだ。戦ったアザゼル曰く、主神クラスにも匹敵している。

それに比べて、井草はまだまだだ。

井草、デュリオ、ニング、リム、イツセー、リアス、朱乃、祐斗、ギヤスパー、小猫、イリナ。以上、合計11人。

桁違いの力を持つとはいえ、魔王クラスに毛が生えた程度の者達三人を相手にするのに、これだけの人数が必要だった。

其の中でも、上位神滅具のデュリオは別格で計算できる。覇龍を発動させたイツセーも、事実上一人でシャルバを抑え込んでいた。

しかし、井草は違う。

イツセーから覇の力を譲渡してもらってすら、一人を抑え込む事もできなかった。完全な総力戦だから勝てたのだ。それも、デュリオがいなければどうなっていたか分からない。

つくづく思う。

力が足りない。

必要なものが、足りていない。

これでは、伊予と五十鈴を取り戻す事などできはしないだろう。止める事すら難しいだろう。

イツセーは二度と覇龍を使うとは出来ない。それに、井草は使う事を受け入れる事もできない。だから覇龍の力には頼れない。

デュリオの存在が運がよかつただけだ。本当なら彼は天界側で仕事をしている以上、そう簡単に協力は仰げない。いないと考えるべきだ。

その状況下で、ナイアルが、伊予と五十鈴を連れて仕掛けてきたとしよう。

……井草には、勝てるビジョンが浮かばなかつた。

「ホント、前途多難だなあ……」

そうため息をつき、井草はとりあえず寝る事にする。

今のまま考え込んでいても、何の役にも立ちはしない。

それなら一回眠ろう。そしてスッキリした頭で考えるべきだ。

もしくはアザゼルに相談して武器を用意してもらうか。武器に頼っているようでは三流だが、しかし悪い武器を使うよりかはいい武器を使う方がいいだろう。

そう思い、井草は睡眠薬を飲んで強引に眠ろうとして――

コンコン

—そんな、ノックの音を聞いた。

こんな夜更けに誰が来たのだろうか。

と、いうより態々人に会いに行く余裕はないだろう。誰もがイツセーの寿命の急激すぎる消耗にショックを受けているのだから。

そんな形で不思議に思い、井草はドアを開け—

「すいやせん。こんな事、井草にしか頼めやしなかつたんで」

そう言ったリムが、いきなり井草に唇を押し当てながらベッドまでダイブした。

19話

とつさに井草は受け身を……取り損ねた。

リムをかばう必要があるので、両手を使うことができなかつたからだ。片手では二人分の重量を支え切ることができなかつた。

幸いマツトの上だったので問題は無い。それに墮天使の肉体なら、よほどのことが無ければ重症にはならないだろう。

だが、是はちよつといただけでない。

いきなり人の唇を奪つたあげく、こんな危険なことをされては実に困る。

ゆえに井草は悪ふざけを叱ろうとムツとなり――

「……ぐすつ」

――泣き顔のリムを見て、それを思いとどまる。

どうやら、相当地に訳ありの理由らしい。それも、ニングではなく井草にとびかかるあたり、ニングにはできないことなのだろう。

怒る前に事情を聞こう。まずはそれから出なければ、どれぐらい起こればいいのかもわかりはしない。

そう考えなおすと、井草は苦笑を浮かべる。

「……で？ 何を頼みたいんだい？」

「抱いてほしいんでさあ」

……

三秒ぐらい沈黙してから、井草はぎゅつとリムを抱きしめる。

なんだかんだで柔らかい。なんというか、抱きしめ心地のいい身体である。

とは言え、こんなボケでごまかされてくれるリムではない。

「わーい井草あー♪ ……これもいいですがねい、ちよつくら一発私の股の穴にナニをぶち込んでほしいんでさあ」

「率直すぎるよ」

この少女、しゃべると下品なのが困り者だ。

とは言え、事情はよくわかっている。

リム・プルガトリオは異能によって生み出された、セクサロイドとしてのデザイナーズチャイルドだ。

その体は定期的に性的に交わらないと不調になるように設計されていると、以前自分でしゃべっていた。

どうやら今がその定期的な時間帯……だということなのだろう。

「メンテナンス相手はきちんと用意してもらった方がいいよ。そりゃあ、俺は義姉さん
にいろいろと仕込まれてるから下手じゃないと思うけどね？」

実際問題、井草はトラウマのリハビリという名目で、ピスを中心とする女墮天使から
寢床での技を徹底的に仕込まれている。

要因の一つは童貞で慣れていないが故。伊予を性的によがらせることができいた
のなら、話は変わっていたのではないか。そんな微妙に明後日の方向で、しかし理由の
一つにはなつてそうな判断である。

井草自身が自己嫌悪の塊の時期だったので、基本的には女性主導。だが女性陣からの
意見で「男が奉仕する形じゃないと満足しない女もいる」という指摘があり、攻めるス
マイルもそこそこ習得している。むろん、舌も指を習得している。

ちなみにキス関係は一切手を加えていない。井草は心底からその辺がトラウマなの
で、完璧にキス童貞だ。

だがしかし、リムはしずかに首を振る。

「……まだかなりもちやす。本当は、こっちで手ごろな相手を探す予定だったんでさあ」
だったらなんだ。

井草は本気でそう思う。

だが、ふと気づいた。

井草の胸元に湿った感触がある。

井草はすでにパジャマを着ている。そして、水をこぼしたりはしていない。濡らしたのは、リムの涙だった。

「……私は、守る側なのに……っ」

リムは震えながら、ぽろぽろと涙をこぼしていた。

『マジですいやせんでした!! 守る側に守ってもらうなんて、失敗でさあ!!』

と、すべてが終わってからリムはアーシアにそう土下座して謝った。

しかし、そんなリムを責める者は誰もない。

アーシアにかばわれ、シヨックを受けていたのは誰もが知っている。そんな彼女を責めるといのは酷だ。なにより、イツセー達はそんなことでリムを責めるような者たちではない。

『気にしないでください。私たちはお友達ですし、リムさんは私を助けてくれたじゃないですか』

と、アーシアはにっこりと微笑んで、その手を取る。

そこに怒りも恨みもない。本心から、アーシアは赦すも何もリムに責を求めている。なかった。

『だから、私もそうしたんです。助け合うのはお友達として当然でしょう?』

『……さいですな。 つつても気になるんで、今度学食でも奢らせてもらいやすぜ』

と、リムがアーシアの言葉にそう答えて、それは終わったはずだ。

だが……。

「友だちだつて、そういわれちまつたんでさあ」

リムは、顔を真っ赤にしながら涙をこぼしていた。

「……仕事のつもりだつたんでさあ。プルガトリオ機関のものとして、あくまで外様だつて、そう思つてたんでさあ」

それは、彼女が暗部だからだろう。

そもそも彼女は、教義的にグレーゾーンだ。そのうえ、男と定期的に交わらなければ生きていけない。

プルガトリオ機関にしか、居場所がなかったのだろう。だから、本当の意味で聖女といてもいいアーシアたちと、距離を置いているつもりだったのだ。

「庇つたのは、仕事のつもりでした。でも、アーシアは私を友達だつて……っ」

その背中をなでながら、井草は言葉を選ぶ。

どうも罪悪感を感じているようだ。それで、男に抱かれて何かを発散したいと思つているのだろう。

だが、それはダメだ。

衝動的に性交に逃げるのは、何かが違うだろう。というより、その対象として井草を選ぶとかちよつと勘弁してほしい。

まあ、イツセーは大絶賛昏睡状態。祐斗やギヤスパーは絶対断ると思つたからの人選だろう。妙なところで人を見ています。

だが、井草だつてリムを見ているのだ。

「リムはさ、優しいよね」

「……へ？」

井草の突拍子のない言葉に、リムは顔を上げる。

井草は自然に微笑が浮かぶのを自覚しながら、言葉を続ける。

「イツセーたちも、ニングもそうだったけどさ？　普通、強姦行為した男を許してくれるやつなんて、そうはいないって」

そう、井草は罪を犯した。

彼氏や関係者の了承があつた。それは事実だ。

だがしかし、肝心の伊予が何も知らない。そんな状態で、井草は伊予と交つたのだ。それは強姦と何ら変わりない。

そんな事実を知つて、果たして相手を許すといった。それはすごいことだ。

「いや、でも、許してくれたお人さんたちは何人もいやすし——」

「でも、リムとニングは俺のことをよく知らないのに、許してくれた」

それは、すごいことだと思う。

アザゼルたちはいい。井草がそのあと、どれだけ絶望したのかを見て生きているのだから。

イツセー達もまだいい。そのあと、井草がどれだけそうではない人間になっていたかを知っているから。

だが、リムとニングは違う。

二人は井草という存在を詳しく知らない。井草がどれだけ罪の意識を感じてきていたか知らない。井草がそのあと、どういう生き方をしてきたのかも知らない。

にもかかわらず、2人は本心から井草を許し、慰めてくれた。

「あれがあつたから、俺は前を向けるんだ。あれが無ければ、イツセーの言葉も届かなかつただろう」

罪悪感という鎧と、罪を犯したという前提条件。

その二つで武装した井草には、誰の言葉も秦には届かなかつた。

だがしかし、お互いによく知らないものからの、しかし心の底からの許しの言葉は、それをたやすく突破してしまった。

それがあつたからこそ、イツセーたちの言葉を受け止める余裕が生まれたのだ。

感謝している。それは当然だ。

だから、井草はこの想いを言葉にする。

「リム。君は君が思っているより優しい子だよ。きつと、仕事でなくても君はアーシアを助けたと思う」

そう、井草は心から信じられた。

付き合いは短い。知らないことも多い。知っていることの方が少ない。

だが、少ないながらも知っていることはある。

「だってそうだろう？ 君は、付き合いの浅い俺のために、本心で伊予と五十鈴に怒ってくれたんだから」

そう。その事実だけで彼女の本質が理解できる。

リム・プルガトリオは本当に心優しい少女だ。

罪を犯した井草を許し、そして彼に襲い掛かった理不尽に対して、心から怒りの感情を浮かべた。龍王と対峙できるようなものに、果敢に挑むぐらいにだ。

それは、誰にでもできることではないだろう。

だから、これだけは断言できる。

「君はいい人だよ。俺は、君のことが好きになってしまいそうだ」

「……………」

顔が完璧に真っ赤になって、リムが悶絶した。

そして井草ははたと気づく。

あ、コレ殺し文句だ。俺、間違いなくはたから見たら口説いてるよ、コレ。

そこ迄気づいて、井草もまた顔を真っ赤にさせる。

いかに改心して更生したとはいえ、井草は元性犯罪者である。これはまずい。

否、其れでも相手が受け入れてくれたというのなら、それはそれで認められてもいいのではないか。それが愛というものではないだろうか。

いやいや落ち着け、井草・ダウンフオール。

それは、リム・プルガトリオと付き合ってもいいということだろう。そうではない、そうではないのだ。

そもそも、リムとは付き合いが短すぎる節がある。仕事でかかわったのが二回。夏休みに何度か顔を合わせた。そして、夏休み明けから少しの間しかたっていない。

これで付き合うとか、いくらなんでもお互いのことがよくわかっていないだろう。相手にとっても自分にとっても失礼ではないか。

いや、世の中にはお試し感覚で付き合うというのものもある。しかし井草の趣味ではないわけ……。

ではない。そもそもなんで井草はリムと付き合うことを前提に会話しているのか。

そもそもリムの意見をちゃんと配慮しなければ――

そこまで考えて、井草は自分の胸元にいるリムに視線を向ける。

そこには、完全に顔を真っ赤にして目を潤ませたリムがいた。

「……………井草は、私のこと、恋人にしているとか思ってたやがるんですか？」

……………十秒ぐらい考えた。

時間にしては短い。だが、頭は高速で回転させていた。

そのうえで、静かに答える。

「まだ、それを言うには時間が少なすぎるって思っているよ」

その言葉に、リムは――

「……………あうう……………」

これまでにないぐらい可愛い反応を見せた。

誠実に対応したら、我慢の限界を超えそうな態度で返された。うかつだった。

それでも、それでも井草は渾身の精神力でそれを抑え込む。

強姦まがいの行動をして、それを心から悔やんでいるのが井草・ダウンフォールである。

その井草が二回目をするなどとあり得ない。それこそ致す前に舌を噛んで死ぬべきかと考え始めている。

このままではまずいから、とりあえず冷たい水をかぶろうか。

などと考えたその時、耳元で声が響いた。

「あの、提案があるんですがねえ？」

蠱惑的な雰囲気を見せたリムが、耳元で艶やかな声をはなつ。

「……お試し期間ってことで、先ずは○フレから始めてくださりやせん？ こつちとしても、信頼できる発散相手は欲しいんでさあ」

リムにとっても都合がいいという逃げ道をあたえられたせいで、井草は断り切れなかった。

「つーわけで、当分は男あさりはしなくてすみそうですぜい」

と、数日後の体育祭で、リムはニングにそう報告した。

暗部由来の特殊な発声法で、リムは二人三脚で並んでいる状況下にもかかわらず、ニングにのみ聞こえる声で話すことができていた。

そして、ニングから静かに、擬音にすると「むー」と形容するべきオーラが流れてくる。

「……ひどいのです。手は出さないって言ったのですよ？」

同じ発声法で文句を言うニングだが、リムは不敵な笑みを浮かべると首を振る。

「気は使うって言ったんでさあ。それ以上に井草がかっこよすぎて、ハートを撃ち抜かれちゃったんですぜ」

ニングには悪いことをしたと、リム自身そう思う。

だがしかし、これでもとりあえずギリギリのところまで踏みとどまったのだ。

お試し期間という言い訳を作った。恋人ではなくセフ〇という関係に落ち着かせた。そして、それはあくまで体の定期メンテナンスのためにも必要だということにしたのだ。

実際に定期的に性交をしないと、リムの身体は不調を訴える。これに関しては嘘偽りなど一切ない。仮にも聖職者なのだから、できる限り虚言は言わない主義である。

そしてその言い訳によって、井草もまた自分をごまかせる。

これはリムの身体のためである。あくまで恋人ではなく、リムの身体のためのセ〇レである。

それに、実際に癒しは必要だろう。

伊予と五十鈴。彼女達はあの戦いで異常性をさらに示してしまった。

井草はそれでもくじけなかった。救えなくてもせめて止めるという決意を持っていた。それをカツコいいと、2人は心から思う。

だが、それでも癒しは必要なのだ。

最初にあの二人の変わり果てた姿を見たときの、井草の姿を思い出す。

後一步で完全に折れ、一生沈み続けるような人生を送っていたかもしれない。それほどまでに、井草は追い詰められていた。

もし二人で井草の背中を押さなければ、井草は前を向くことなどできなかつただろう。

それがいやだと思うからこそ、リムはたまった精神的動揺を発散することを兼ねて、井草に迫ったのだ。

性的衝動の発散は、ストレス解消には効果的なのだ。それによって誰かの心がいやせるのなら、それに越したことはない。

リムは井草と恋仲になる気は、あまりない。

それはニングも知っているし、感謝もしている。むしろそうしようと思わせてしまったことに後ろめたい思いも感じている。

だがしかし、それとこれとは話が別なのだ。すっかり割り切れるほど、ニングも大人にはなりきれなかった。

「ぶーなのです」

「へいへい。マジすいやせんって」

そういい合いながら、2人は二人三脚の順番を進める。

見れば、先に始まる男女の部にイツセーが間に合った。

どうやら意識が回復したらしい。これで、とりあえずこの一件はいい終わり方だ。

「アーシアさん！ イツセーさん！ ファイトなのです!!」

「いい感じに場をあつたためてくだせえよお!!」

その二人の声援にこたえて、イツセーとアーシアは見事一着を取る。

そして、今度は二人三脚女子の部。ニングとリムの番だ。

「……ニング」

「なんなのです」

ピストルがなり、そして一斉に走り出す。

昔からタッグを組んで行動することが多かったこともあり、ぶつちぎりトップで一位

を獲得。声援が鳴り響く。

そして、ゆったりと戻りながら、リムはニングにいたずらっ子の微笑を向けた。

「あんまり遅いと、私も我慢できずにもらっちゃいやすんで、その辺お気をつけてくださいな」

「むっっ！」

おもわずニングはぽかぽかとリムを叩いてしまう。

「リムの意地悪なのですっ!!」

「はっはっは！ 相棒からの叱咤激励ですぜ!!」

そして、その様子を見る井草は、ふとした予感に捕われた。

そして五秒後、それを振り払った。

「うん、ないない」

放課後のラグナロク

1話

兵藤邸のリビングで、オカルト研究部が集まっていた。

ビルデのクーデターで一気に窮地に陥った冥界。その沈んだ雰囲気打破する事もあつて放送される事になった子供向け特撮番組。それを皆で大画面で見ることになったのだ。

なつたのだが――

『……はあ』

「はあ〜」

ドライグとリアスが、沈んでいる。

なんというか、一時期の井草並みに沈んでいる。

光を通さぬ暗き闇の中に沈んでいる。

その理由は単純である。

いざ、目の前でピンチに陥ったヒーローが、ヒロインの力で反撃する場面到達した。

これぞ一種の定番シーン。この番組のヒーローは、ピンチになった時はほぼこれで確実に状況を打破するのだ。処刑用BGMをかけるのだ。

そして、そのヒーローとヒロインの名前は――

『さあ、おっぱいドラゴン！ おっぱいよ！』

『おお、スイッチ姫！ これで勝てる!!』

……これである。

ちなみに、おっぱいドラゴンのモデルはイツセーで、スイッチ姫のモデルはリアスである。ネーミングもアイディアもアザゼルだったりする。

「先生。土下座した方がよくありません？」

「いいじゃねえか。分かり易いネーミングで、子供達からの人気は抜群らしいぜ？」

井草の苦言もどく吹く風で、アザゼルは満足そうだったりする。

乳龍帝おっぱいドラゴン。ドラゴンと契約した若手悪魔、イツセー・グレモリーが悪魔の軍団と戦うストーリーである。

イツセー・グレモリーはこの手の番組のお役遅くで毎回ピンチになるが、その都度スイッチ姫のおっぱいを揉む事でパワーアップして処刑用BGMである。一応おっぱいは画像修正されている。因みに発案者はアザゼルである。

グレモリー辺りからクレームが来ても驚かない。悪魔と墮天使の関係が悪化するか

もしれないと思つた事もある。初めて聞いた時は何の嫌がらせかと井草は思った。だがしかし、サーゼクス達はむしろノリノリだった。

おっぱいドラゴンの主題歌であるおっぱいドラゴンの歌は、作曲がサーゼクスらしい。ダンス振り付けはセラフォルードそうだ。とどめにアザゼルが作詞を担当している。

本来は悪魔側だけの放送の予定だったが、和平そのものは順調に進んでいるうちに、ビルデのクーデターによる悪魔側のイメージ悪化に対抗する為により大々的に報道される事となった。和平された勢力圏内ではケーブルテレビの感覚で放送されるらしい。

「もう、冥界を歩けないわ……」

「俺も、ちよつと外に出たら「おっぱいドラゴンおっぱいドラゴン」とか言われるのかなあ」

リアスとイツセーが仲良く黄昏れる。

しかし、それを遥かにしのぐレベルで落ち込んでいる者がいた。

その者は、凄まじくどんよりとしたトーンで、先から落ち込んでいる。

『フフフ、いいじゃないか。どうせ俺とお前はおっぱいドラゴンだ』

ドライグである。二天龍の片割れと称された、赤龍帝ドライグである。

まさか神や魔王すら超えると称された準最強の龍である自分が、おっぱいドラゴンなどという頭の悪い名前のヒーローのモデルになるとは思ってたなかっただろうである。思う方がどうかしているが。

そんな実力と伝説ゆえに、プライドも割と高い方だったようだ。相当沈んでいる。

「まあまあ、ドライグの旦那。大昔に三大勢力に散々迷惑かけたんですぜ？ これぐらいは大目に見ましようや」

リムがそうフォローを入れるが、しかしドライグは沈んでぶつぶつ言っているだけだ。

冗談抜きで酷いダメージらしい。これは酷い。

確かにリムの言う通りではある。そもそもドライグが神滅具のコアになった理由は、三大勢力の戦争に割って入って二天龍同士で喧嘩をしたからだ。それで結果的に袋叩きに合って、封印されたという自業自得といえれば自業自得な内容である。

しかし、もう少しなんとというか他に何かなかつたのだろうかと井草も思ってしまう。

始末に負えないのが、別にこれは三大勢力によるドライグへの復讐でも何でもないという事だ。

ディオドラとのレーティングゲームの前から、ノリノリで企画されていたそうさ。シトリーとのレーティングゲームでの禁手化や、おっぱいネタが子供達に大受けしたのが

きつかけらしい。

そもそも戦術的な駆け引きもあるレーティングゲームは、冥界の娯楽でありながら子供の受けがあまり良くなかったらしい。子供達はタンニーンのような怪獣じみた異形の戦いを怪獣映画のノリで楽しんでいる程度だそう。

そこにイツセーの良くも悪くも個性的なあり方だ。相当子供受けがいいらしい。

それはともかく。

とりあえず苦笑をしながらその番組を見ていた井草達だが、ここからがいつもと違った。

『ふっ！ いつも通りの代わり映えのしない戦術で、我々を何度も出し抜けると思ったら大間違いだ!!』

其の声と共に、どこからともなくネットが飛んでスイッチ姫が捕縛される。

そして、新たに祐斗をモデルにした敵キャラクター、ダークネスナイト・ファングが、これまでおっぱいドラゴンに出てきた怪人を連れて現れたのだ。

『スイッチ姫!? ダークネスナイト・ファング、貴様あ!!』

『敵の力の供給を妨害するのは戦術の内だ。悪く思わないでもらおうか!』

スイッチ姫という覚醒スイッチを先に抑え込まれた事で、おっぱいドラゴンは大苦戦に追いやられる。

とは言え、リアスの騎士である祐斗をリアス達の敵にするのは正直どうだろうか？

井草はいぶかしむが、悠斗は面白そうに見ているのでとりあえずスルーする。

そして画面に視線を戻した瞬間――

『そうはいかない!!』

その言葉と共に現れた、青い変身ヒーローのような怪人が、スイツチ姫を拘束していた怪人達を殴り飛ばした。

そして、アザゼルと井草を除く全員があつと驚く。

井草は色々と頭痛を堪える形で、目を伏せて頭を抱える。

とどめにアザゼルがしてやったりといった表情になる。

『あ、貴方はいったい……』

『新手だ?!? おのれ、何者だ!?!』

驚愕するおっぱいドラゴンとダークネスナイト・ファンク。

その二人の言葉に、再びスイツチ姫を奪おうとする怪人達を薙ぎ払いながら、そのヒーローは告げる。

『俺は、仮面ファイターレセプター。……ただの罪人さ』

そして、おっぱいドラゴンと仮面ファイターレセプターのタッグが怪人達と戦闘を開始し、CMに入る。

そこでは仮面ファイターレセプターが、イーツをモデルにしたらしい怪人達と戦っている映像が映し出される。

そして、井草と似通った姿の墮天使が、苦悶の表情を浮かべながらどこかでうずくまる映像も流れた。

『一かつて罪を犯した青年イクサは、そのきつかけとなり、彼の幼馴染達を怪人イーツへと変えたナイアによって、自身もまた怪人イーツへと変えられる』

そして、涙を流し泥にまみれながらも、決意を決めた表情で立ち上がるイクサは、ポーズをとる。

『俺にその資格はなくても、それでもその罪、俺が裁く!!』

『イーツの力に墮天使の心を宿したイクサ。彼は仮面ファイターレセプターと名乗り、己の犯した罪を償う為、そして自分と同じ被害者を生まない為、ナイア達によってイーツに変貌された悪人達と戦うのだ!!』

そして「仮面ファイターレセプター」の文字が、大きく映る。

『Dシネマ、仮面ファイターレセプター!! 大人の為のヒーロー番組、ここに登場!!』

そして、CMが終わるとおっぱいドラゴンと仮面ファイターレセプターの共闘が再開する。

だがしかし、一同の視線は井草に集中していた。

『……井草、お前何やってるんだ？』

ドライグの言いたいとは分かる。

あの主人公。あくまでそれとなく似ている人物を起用しているだけで、井草の顔をはめ込んでいるわけではない。

だがしかし、仮面ファイターの恰好は完璧にレセプターイーツをモデルにしている。どう考えても井草のキャラではない。井草は悪役を受ける事はあっても、自分がモデルになつてヒーローをするようなキャラではない。

そして、井草も顔を赤くしながら苦虫を噛み潰したかのような表情になる。

「俺も流石に反論したよ。どこの世の中に強姦まがいな真似をした男をモデルにヒーロー番組を作る奴がいるんだって。でも——」

「大人向けの娯楽番組も必須だと思つてな。牙○とかを参考に、大人が楽しめる特撮番組を考えてみた」

と、アザゼルがドヤ顔でサムズアップする。

しかしすぐ真顔になると、井草に視線を向ける。

「それにこいつはイーツの力を使って戦うからな。その外見をたくさんの連中に教えておかないと、イーツとやり合つてる時にもろとも攻撃されかねえ。そういう意味でも都合が良かったのさ」

「なるほどなのです。それに、旧魔王派の幹部を捕縛した井草さんならピッタリの大活躍なのです」

ニングがそれに納得して、ぽんと手を打つ。

実際問題。井草が今後戦うに当たって、敵に間違われるデメリットはどうかするべきだった。

なにせイーツは同技術で開発されているので、どうしても意匠に近しいものがある。見る人が見れば勘違いしてもおかしくないだろう。

だからこそその仮面ファイターレセプター。

広く多くの人々に周知させれば、間違われる可能性は低くなる。そうすれば、乱戦状態でも井草はレセプターイーツになる事ができるはずだ。

「まあ、俺は荒稼ぎする気はないし実際にやった事がやった事だからね。あくまでモデルってだけだよ」

そう井草は謙遜する。

如何に少しは前向きになったとはいえ、この方向性はあれだ。流石に井草も躊躇する。

「因みに、モデルってことで井草には相応の報酬が提供される予定だ。金に困ったら井草に相談しな。コイツなら無利子で貸してくれるさ」

「貴方が払ってくださる国家元首クラス。っていうかりアスちゃんいるでしょ」

井草の墮天使としての給料は、少なくともアザゼルより下である。

そんな井草をサラ金代わりに進めるアザゼルに、井草は容赦なくハリセンを叩き込んだ。
だ。

「幼馴染とその兄貴分が特撮ヒーローになるなんて、人生って分かんないものね。昔が懐かしいわ!!」

そして、そんなことを言いながらイリナはポーズをとる。

どうもこの天使、子供の頃は男勝りだったらしい。

そしてイツセーも過去を思い出したのか、ふとイリナを見ながらうんうんと頷いた。

「ああ、まさか男の子みたいだったイリナが、こんな可愛い天使になるんだからな。人生ってホントに分からないよなあ」

そんな事をしみじみと呟けば、今度はイリナが顔を赤くする。

そして天使の翼が白黒に明滅した。

どうやらときめいて墮天しかけているらしい。

榮譽極まりない転生天使の第一陣が墮天使化。それも、天使長ミカエルの一番槍であるAがこの短期間に墮天使になる。もしなったら醜聞以外の何物でもない。

それが哀れになり、井草は取り合えずジューズを取り出すとそれをイリナに渡した。

「はい。これ飲んで落ち着いて」

「あ、ありがとうございます!! んぐ…んぐ…ぐぼあ!」

そしてイリナはむせた。

明らかに女の子が上げていい声ではない。なんとというか残念な反応である。

それを憐れんで見なかった事にしながら、井草は話を変える事にした。

仮面ファイターレセプターの話はこつぱずかしい。乳龍帝おつぱいドラゴンも蒸し返されてイリナが墮天使化しそうだ。このノリで今の情勢について語るのも空気が読めない。

と、いうことで。

「じゃ、そろそろイツセー君に行く罰ゲームの発表会をしようか」

「今やるんですか!」

イツセーが抗議の声を上げるが、イツセーが何気ない言葉でイリナの墮天使化を進めたのが原因なので井草はスルーする。

それにどちらにしてもする予定だった事だ。おつぱいドラゴンも終わってキリがいいし、ちょうどいいだろう。

……残り百年あるかないか。それが、イツセーの覇龍の代償である。

リアスもアーシアもシヨックを受けた。井草ですら、正直思うところがある。

人間であつたイツセーからすれば、十分な時間だろう。そもそも人間の平均寿命は百年もない。

だが、イツセーは悪魔だ。一万年以上生きる事ができる悪魔では百年は短い。人間の年齢に換算すれば、赤子の時に死ぬようなものだ。

あの場でイツセーが覇龍にならなければ、この場の者達の大半が死んでいたとしてもおかしくない。そういう意味では、攻める事はできないかもしれない。

だがしかし、ケジメはいる。

と、いうことで罰ゲームという形でイツセーを叱責して、もうちよつと自愛の感情を持たせようという試みだった。

ちなみに、井草は人の事を言えないので今回は参加しない。自分がつい最近まで自愛という言葉からかけ離れている生き方をしてきた自覚ぐらいはある。どの口が言うのかというツツコミを受けるつもりはない。

まあ、とりあえず皆もこれをレクリエーションのノリでやっているから、そこまで酷い事にはならないだろう。

ちなみにリムが「公開手〇キ」などとネタで言いながら書いたので、とりあえずハリセンを叩き込んだ。

まあ、あれはネタなのは間違いない。その後あつさりもう一枚取り出して「お気に入

りのエロ本の朗読」というマシな方向になったので、こちらは許容する。

別の意味で地獄だという意見はスルーされる。これはイツセーに対する罰なので、イツセーに対しては苦痛でなければならない。そういうものだ。

「じゃあ、公平が期待できる井草が適当に中の紙を抜き取ってね」

とのリアスの意見に満場一致。井草が箱の中に入った紙を抜き取る事になった。

あまり時間をかけるのもあれなので、つまらないと言われそうだが一瞬で選んで抜き取る。

そして折りたたまれた罰ゲームの書いた紙を開いて――

「……姫島朱乃とデート？　朱乃ちゃんとのデートなんて罰ゲームでもなんでもなくな
いっ。」

――心底意味不明だった。

姫島朱乃。リアス・グレモリーの女王にして、学園二大お姉様の一人。

転生悪魔としては少々Sっ気の強いところがあるのだが、それを除けば非常に優良物件である。

その朱乃とデートする事は、イツセーにとつても願ったり叶ったりなのだが――

「……朱乃ちゃん？」

「あらあら。外れると思つてネタで書いたのが当たつてしまいましたわ」

井草が軽く睨むと、朱乃はわざとらしく微笑んだ。

イツセー以外の皆が理解した。というか、分からないイツセーに問題がある。

—この女、罰ゲームにかこつけて自分の願望を叶えに行きやがった！

「……え、え、え？」

そしてイツセーは、どういふことはあまり理解していなかった。

リアスやアーシアの嫉妬の視線も、おそらく意味が分かかってないのだろう。

井草としては指摘した方がいいのではないかとすら思う。

なにせ、五十鈴と伊予が井草の事を好いていた事に気づいていなかったのだ。それが要因の一つとなって、ナイアルの悪意の翻弄されたともいえる。厳密には想像でしかないが、ニングとリムの意見出した分あっているだろう。

イツセーの鈍感な井草以上だ。最悪の事態になる前に指摘した方がいいような気がするが—

(……今指摘したら、逆にこっちが死ぬ！)

この爆発寸前の火薬の群れの中にいるイツセーに、火炎放射器をぶつ放すのは自殺行為だ。

井草も自分を守ろうという意識を持ち始めている。持ち始めた時にこんなギャグ展開で死ぬのはごめんこうむりたかった。

「イツセー」

「は、はい」

なので、言う事は一つだ。

「聴くなろうね？」

「は、はあ」

とりあえず、今度チャンスがあつたら恋愛相談に乗ろう。

資格も能力もないとは思うが、しかしそれより下の能力値にぐらいは、比較的マシになる意見を言えるはずなのだから。

2 話

禍の因との戦いは、激化の一途を辿っていると云つていい。

人間世界においてムー同盟は勢力を拡大させつつある。

ストーリートチルドレンやホームレス、借金で見持ちを崩した者達といった人生の敗北者を利用して、イーツを増やしているのだ。

それらは軍事的な作戦行動というより、テロじみた作戦に運用される事が多いが、しかしそれゆえに脅威である。

どうも、人間世界の資産家などがより資産を増やす為に、ムートロンの宇宙開拓計画に一枚噛んでいるらしい。そこから出資を得る事で、人生の落後者達に復帰のチャンスを与えているのだ。

実際に成功した者はそこそこ金を貰っているらしい。その上で暴力の快楽に酔いしれ、圧倒的な力への依存が組み合わさった為、軍事力の一端になっている。

更に冥界の広大な土地をビルデ達大魔王派によって確保できた事で、食糧問題などにおいても対処の余地が増えてきた事も大きい。

ビルデは母親の駒を利用して昔から育成したという悪魔達を利用して、それらの開拓

を大幅に進めている。

三大勢力が和平を行うのに数百年の年月を掛けている間、ムートロンは水面下で急速に動き、侵略の為の足掛かりを作っていた。

だがしかし。それは、決して完璧ではなかった。

必要とあれば落伍者たる人間を利用する事すらいとわない。被差別対象をあえて作り、彼らを迫害する事で多くの民の安定化を図る。そして神々すらその対象とする。

それは、数多くの良心を持つ者の嫌悪感を生んだのだ。

しかし、素直に投降してそれが上手く行くかどうかとも分からない。それがどうしても足かせになる。

そこに対して、幸運の光が与えられた。

バイリンガル 乳語翻訳。乳と対話する事で間接的に相手の考えている事を把握するという、異次元

の発想で産まれた妙技。兵藤一誠だけが使う事のできる、奇想天外な技。

あらゆる読心術対策をスルーし、明確な対策ができていない新機軸の思考把握方法。これに対抗する能力は、現段階において開発されていない。

それはすなわち、今の内ならば、女性限定でいいなら、絶対に自分が嘘をついていないという事を証明する事ができるという事だ。

ゆえに、今ここに禍の団の下部組織ともいえるムー同盟に関わっていた女性中心の団

体が、亡命を示したのである。

連絡があつてからリアスが協力が要請され、そしてそれをリアスが承諾してから準備を整えるまで数日。この数日で禍の団が脱走を把握している可能性は充分ある。

その所為か、亡命者を受け入れる港では、半径数kmの範囲で警戒網が敷かれ、転移による襲撃も考慮されていた。

「……さて、そろそろイツセーが乳語翻訳をしてくる頃かな？」

「そうじゃないですか？ イツセーくんのいやらしい技が大活躍するなんて、思つてもみなかったです」

と、亡命者との合流場所の近くで警備を担当している井草とイリナが、そうぼやく。

あまり数が多すぎると相手を警戒させるとのこと、井草達はこうして近辺の警備に回される事になった。

それに関しては仕方ないと井草は思おうが、しかしイリナは残念そうだった。

「あーあ。改心した禍の団の方々を、天使として許してあげたかったのに」

「まあ、それはしなくていいと思うのですよ」

と、同じ警備担当に回されたニングが、イリナをなだめる。

ちなみにリムは、アザゼルと共に別の箇所を担当している。人数的な問題と、いざという時の戦術的な連携を考慮した形だ。

何故カリムがニングのいる班に井草を進めたのでこうなった形だが、どう判断すればいいか、井草は迷う。

なんというか、お互いに理性をフルスロットルにしてなった、セフ○以上恋人未満な関係。それが、井草・ダウンフォールとリム・プルガトリオの関係である。

すでに何度も逢瀬を交わした。因みに、主導権は状況次第で握る側が変わる関係である。

文字通りその為に生み出されたリムはポテンシャルが高いが、井草も決して負けっぱなしではない。

トラウマ克服の一環として、ピスを中心とする墮天使の女性と関係を持った事は多数だ。

自虐癖が崇つて主導権を明け渡すか、奉仕属性が強い方向になったので消極的なプランになったが、ピスは気晴らしになると判断したのか井草と何度もそういう事をする。

結果、主導権が入れ替わる事が多々あるレベルとなっている。誇るべきか節操無しと自分に呆れるべきか。

まあともかく、どうも井草はリムに気に入られているらしい。

ただし、ベッドを共にする関係にはなってもそこから先には進展しない。

井草も、伊予と五十鈴のことを引つ張っている自覚はある。それが枷になって、リムとの関係が進まなくなっている節はある。

とは言え、その二人があんな事になったのだ。しかも、イツセーとデュリオは匙を投げている。

五十鈴は、デュリオの技をもつてしても動揺を示さなかった。伊予はイツセーが聞いた乳の声は異常者のそれだった。

井草は、決して二人を救う事を諦めてはいない。しかし、同時に救えない可能性を理解してないわけでもない。そのどちらかが高いなど、救えない方だという事ぐらいは理解している。

絶対に救うなどという事はできない。それぐらいには、井草はつらい現実を知り、人のダメなところを持ってしまっている。

だからだろう。自分に好意を寄せてくれたリムとの関係を深めたいと動いた事はあ

る。その一環として二人でこっそり遊園地に行こうとしたり、食事に誘った事がある。

結果、全部断られた。

どうも、リムは誰かに遠慮しているのか井草との関係をセ〇レ以上にしようという気がないようだ。

しかし、可能性があるとするならば伊予と五十鈴だろう。

だがしかし、変わり果てた二人しか知らないリムが、2人に対して遠慮するだろうか。それが疑問で、どうしても首を捻ってしまう。

「井草さん？ ぼんやりしていると大変なのですよ？」

と、ニングにたしなめられてしまった。

「ごめんごめん。頼れる仲間がいるからか、ちよつと気が抜けてたよ」

と、言い訳めいた事を言いながら謝ったのだが、それがいけなかった。

ニングは顔を赤くすると、もじもじと照れ臭そうになってしまった。

……………どうも、自分は女殺しの気があるらしい。

まあ、自分でも顔は整っているという自負はある。かつては勉学に実が入らなかつた身だが、今では授業を真面目に受けて予習復習もしているので、塾に通うことなく学年上位すら取る事もある。身体能力に関してには上級墮天使との混血なので言わずもがな。変態三人組の更生を行った功績は偉大である。それ以外の問題解決にも尽力している自負があるし、今更辞めるつもりもない。そういう意味では正義感も強い。

そして三大勢力側唯一のイーツ。しかも受容の器の力もあつて、其れなりにレベルの高いイーツでもある。素体の性能も含めれば、相当のエース格とも渡り合えるだろう。財力についても、危険性が高いと判断された仕事（だと未だに思い込んでいる）ゆえ

に危険手当は貰っている。それがなくなつた後も総督直属なのでそれなりに高給取りだ。とどめに仮面ファイターレセプターのモデルという事で、別途冥界から金が入ってきている。リアスには完全に負けているが、かなりの金がある。

結論してみた。

答えは明快。過去の失態という傷跡さえなければ、井草・ダウンフォールはかなりの優良物件だと自覚できる。

自分のことながら、これは流石に凄いだろうと関心するやら呆れるやら。

……とは言え、過去の失態が本来致命的だ。

ほぼ強姦と言つてもいい行動。この事実があれば、大抵の女性は敬遠するだろう。そして、それを隠して付き合うような不誠実な真似を、井草はする事などありえない。

だがしかし、リムはそれを知つたうえで井草を許している。

そういう意味では最大のハードル……もとい、ガントリークレーンを飛び越えているのだ。自分で言うのもなんだが、凄まじい事である。

そして井草も、リムに対して好意を抱いている自分に気づいている。

人生最大のトラウマを癒してくれた一人。そういう意味では、そりや惚れるだろうと普通に思う。

そして、つらい出生を持ち、それを自覚しながらも前向きになれる心の強さ。これも

また、井草からすれば惹かれるものだ。

正直、お互いに時間が少なすぎるとは思う。だがしかし、関係を深めたいとも思う。しかし、同時にリムが一線を引いてくれている事に感謝の気持ちもある。

シャルバ達によるレーティングゲーム襲撃。そして、そこに支援として参加した伊予と五十鈴。

二人はそれぞれデュリオとグレモリー眷属にぶつかり戦闘を行った。そして、伊予にはイツセーが乳語翻訳を使い、五十鈴もデュリオの虹色の希望をもらうことになる。

その二つは、説得において非常に優れた能力を持つ。

方や、読心術対策すら突破して相手の本音を聞き出せる魔力運用法。方や、様々な事情により意外と忘れやすい、当人にとって本当に大切なものを思い出させる神器運用法。

どちらも説得の余地がある相手に対しては有効だ。イツセーの乳語翻訳は、相手の本心を知れるから、いやいや闘っていたり複雑な事情があればそれを知ってとっかかりにできる。デュリオの虹色の希望は、会心のきっかけになりそうなる事を忘れていたものがあるなら、絶大な効果を発揮する。

だがしかし、2人には効かなかった。

伊予は、本心から今の状況を楽しんでいると胸の内が語った。五十鈴は、大切なもの

があるからこそ、悪をやっていると言い切った。

イツセーとデュリオが井草を止めたのも当然だ。伊予と五十鈴は、手遅れだと言われ
てもおかしくない。

それは、分かっている。それでもと、思っている。

だがしかし、井草は殺す覚悟も決めている。

殺してでも止めたい。できる事なら、救いたい。

そんな矛盾する井草の心は、縫れる何かを求めているのかもしれない。

そんな心情から生まれた恋心は、すなわち二人の代わりとなる癒しを求めている事に
他ならない。

それはリムにも失礼だ。井草は心からそう思う。

だから、リムが一線を引いてくれることは嬉しいのだが――

「それが理由じゃ、ないんだろうなあ」

「え？ どうかしたんですか？」

ぼつりと呟いた言葉をイリナに聞かれるが、井草は適当に誤魔化した。

確かにリムなら気づいていてもおかしくないが、しかしそれだけでも思えなかった。

なんというか、こちらに対する気遣いというか、誰かに対する遠慮というものを感じ
てしまう。

これはあれだ。荷物持ちだ。
もしくはあれだ、男避けだ。

勘違いをしてはいけない。リムとそういう関係になっている井草は安全牌だと判断されただけだ。

井草はそう自分に言い聞かせる。

リムとそういう関係になりたいと思ったその時点で、井草はもつとこの事実に気づくべきだった。

……その条件はニングも同じなのだ。

いかん、おちつけ、冷静になれ。ステイ、待て、お座り。……最後は何か違う。

とにかく井草は冷静になろうと努力する。

それは流石に無節操だろう。リムとそういう仲になりたいという感情ですら、一種の逃避の可能性があるのだ。

それが、ニングが買ひ物の手伝いを頼んだ程度で一気に揺らぐなど男として最低だろう。

とにかく勘違いをするな。これは断じてアレではない。

そう、アレではないのだから――

「あら、あらあら！　もしかしてデートのお誘い!？」

イリナが余計な事を言つて、井草が思考ですら言葉にしなかつた単語を言い出した。さてどうしたものか。

井草は渾身の精神力で、それをイリナの勘違いだと断定。自身の思い違いを全力で投げ飛ばそうとして――

「……………あう」

――滅茶苦茶恥ずかしそうなニングの様子に、可能性がでかいと否でも認識を改める事になる。

いかん。これはいかんぞ、井草・ダウンフォール。

自分はこんな無節操な男ではないはずだ。いや、墮天使はハーレム作ろうが問題ないが。

とはいえ、ニングもリムも信徒である。いや、ニングは悪魔でもあるが。しかし悪魔でありながら信徒である。

そんな信徒を誑かすなどいかんだらう。しかも恩人である。

信徒を誑かして越に浸るディオドラとの一件があつたばかりでもある。ましてや井草は貞操観念関係でやらかしてトラウマである。拒否反応が強い。

ゆえに、リムに惹かれている自分がニングにまで惹かれるなどというわけにはいかないだらう。

「あ、ゴメン。そういうのは祐斗くんに頼んだ方がいいと思うよ?」

などと、あたりさわりのない返事で断ろうとするが――

「駄目よ、井草さん! 井草さんも負けてないんだから自信もって! 決心したニングさんがかわいいそうだよ!!」

ちよつと黙つててくれないかな、この駄目天使! 略して駄天使!

井草は心から罵倒したが、口に出すのだけは渾身の精神力で抑え込んだ。

とにかく状況を何とかしないとイケない。っていうか、今は仕事中である。いつ襲撃が来るか――

『こ、こちらギャスパ―ですううううう! 禍の団の英雄派が亡命者をどうにかしに来

ましたああああ!!!』

グツドタイミング。

井草は不謹慎ながら、心から禍の団に感謝した。

「敵襲! 行くよ皆!!」

井草は凄まじく話を逸らせる事に感謝しながら、全力で駆け出した。

3 話

「ぐああああああ!? くそ、神器とイーツの組み合わせでも勝てないのか……!」

その言葉と共に、イーツが爆散して倒れ伏す。

そして井草の腰から、いわゆる悪魔の尻尾のイメージがする尾が生えた。

ちなみに、背中からは悪魔の翼を思わせる意匠が刻まれている。

着々と力を取り込んでいる事実を受け入れながらも、井草はため息をついた。

「いや、インキュバスって戦闘能力高かったっけ?」

男としてはうれしい力かもしれないが、井草としては喜ぶべきか微妙な力でもある。

いや、夜伽の能力が高まるのはいいことだ。そういうのでトラウマがある身としては、そういう技量を高めることでトラウマを払拭することはできるかもしれない。というよりナイアルに太刀打ちできないのはなんか嫌だ。

だがしかし、それを何で戦闘要員として送り込んできたのかが、ちよつとよくわからなかった。

まあともかく、とりあえず敵を打倒することには成功したようだ。ニングとイリナも

無事である。

そして、イツセー達もまた敵を撃破して大体無事だった。

「井草さん！ そつちは大丈夫ですか？」

「ああ。こつちは何とかしのいだよ」

共にサムズアップで答えるが、しかしイツセーは少しだけ残念な表情をした。

「1人逃がしてしまいました。しかも厄介な奴で……」

「あら、そうなの？ どんな人だったのかしら？」

イリナがそれに首をかしげるが、それに対してゼノヴィアがうんうんとうなづいた。

「ああ、影を操る敵だった。攻撃を影で受け流して別の場所から放ってきたよ」

「味方の攻撃にも使用して応用を聞かせてきたからね

。正直部長の機転が利かなければ大変だった」

祐斗もそういいながら、念のための周辺警戒をする。

其れなりの人数で仕掛けてきた敵だったが、しかし全員ほぼ無傷。

グレモリー眷属の戦闘能力は高いということだろう。覇龍の使用やデュリオの協力があったとはいえ、オフィスの蛇とエボリユーションエキスの合わせ技で仕掛けてきた旧魔王末裔三人を凌いだのは、伊達ではないということか。

「捕縛した敵は記憶を失っているようです」

「全部忘れてるみたいです。あと、一応眠らせました」と、小猫とギヤスパーがそう告げる。

英雄派は、世界各地から戦闘に使える神器保有者を捕縛して洗脳しているとのことだ。そして、それらを戦力として運用しているらしい。

現実における英雄も、虐殺などの悪事を働いているものは数多い。そも、英雄とは戦いでなる以上、殺人とは無関係でいられない。

英雄派。彼らは英雄の負の側面を如実にあらわにしている組織といえるだろう。

それを言うならば大航海時代もそうだ。英雄と同じように輝かしいものでありながら、同時に血なまぐさい側面が裏に隠れている。

まさに禍の団の一員として、ムートロンと肩を並べるにふさわしい組織だった。

「……アザゼル先生、念のために彼らの検査をお願いします」

井草は、嫌な予感にかられてアザゼルにそう告げる。

洗脳を解除する必要があるが、同時に嫌な予感も覚えている。

なにせ、相手は人間を改造して使い捨てのイーツにするような組織だ。万が一に備えての口封じの仕掛けを用意していてもおかしくない。

それにはアザゼルも思うところがあったのか、少し考えこむとすぐにうなづいた。

「任せろ。神の子を見張るものの施設で検査しておく」

その言葉に、井草は少しホツとする。

ナイアルによつて歪まされ、身も心も怪物に変貌している伊予と五十鈴。

そんな真似をするムートロンと肩を並べる英雄派が、洗脳した兵士たちをただ解放される真似をすると思えなかつた。

それらを考慮するとどうしてもいやな予感がぬぐえず、井草は彼らの将来をおもつてため息をつく。

そして、同時に鼻歌を聞いた。

視線を向けると、朱乃が機嫌よくステップを踏みながら帰るところであつた。

「朱乃？ やけに機嫌がいいわね？」

そう聞くりアスに、朱乃は満面の笑みを浮かべる。

その顔を見て、井草はふと気づいた。

あ、この子、さつきまでの俺たちの話を全く聞いてない。

「だって、明日はイツセー君とのデートですもの。運がよかつたわ」

その言葉に、一部……というより半数以上のオカルト研究部の空気が固まつた。

「あううう……。イツセーさんが、デート……」

「おややあ……。こりや、イツセーも隅に置けねえですなあ」

アーシアの嫉妬の視線とリムの茶化し目的の視線が、イツセーにむけられる。

しかしイツセーはよくわからず、戸惑いながら首をかしげる。

井草は、自分のことを柵に上げられなかったので、呆れたくてもできなかった。

「イツセー。鈍感もほどほどにね」

そう、肩をとりあえず叩く。

「え、え、えつと……え？」

イツセーの反応からして、前途多難ではあるようだった。

そのころ、禍の団の施設ではナイアルがビルデと出くわしていた。

英雄派の施設だったので、お互いの縄張りではない。それに旧魔王派あらため大魔王派は、ムートロンとは密接な関係を取っている。

なので何の問題もないが、なんとなくおかしな出会う場所でもあるのでちよつと驚いた。

「どうしたのだ、ナイアル殿？　こちらは曹操達と今後の作戦について話していたところなのだが」

「俺はあいつにエボリユーシヨンエキスを勧めようように言われたんだよ。ま、俺の番ってことはもう無理なんだろうがな」

お互いに苦笑すると、彼らは曹操のいる部屋に視線を向ける。

英雄派の首魁、曹操。

なんでも子供頃に新滅具を発現させて、それが原因で親に売られかけたそうだと。

その過程において才能を開放させた彼は、一種のカリスマ性を発揮し、こうして英雄派を結成するに至った。

彼は禍の団の中でも独自性がある。

オフィスの蛇を実験目的に使用することはあっても、肉体の強化に使用することはない。

Eレベルのそこそこあるものにもかかわらず、部下が使用することを止めることはなくても、自分が使用することはない。

その根幹にあるのは、たった一つの理念。

人間は、強大な異形たちの中でどこまで行けるのか。というより、数奇な運命をたどった自分は何処まで行けるのか。

そのためなら必要な非道を行うことに躊躇はない。そして、宇宙にある様々な強者たちに挑戦することもいとわない。

そんな、大魔王派ともムートロンとも組むことができる理念の持ち主。それでいて、悪意とはまた微妙に異なる理念の持ち主だった。

「ふむ、どう見る、ナイアル殿？」

そう、ビルデは聞く。

「聞くに、エボリユーションエキスの技術を利用して禁手への至り方を模索していると聞いている。できると思うか？」

「さてね。俺は技術研究班でも解析班でもねえからなあ」

そう返答するナイアルだが、しかしその表情は面白そうなものを見る者のそれだった。

「だが、そいつらの話じゃそろそろ行けそうだって言ってたぜ？　ちようどグレモリーに亡命する連中がいたから、至りかけてる連中とやり合わせて、起爆剤にするつもりだとよ」

……そう、亡命者を狙ったと思われる襲撃は、亡命者の始末が目的なのではない。

もとより彼らの大半は末端だ。語れる情報などたかが知れており、最早知られても大勢に影響のないレベルでしかない。

こと、ムートロンとしては禍の団およびムー同盟を味方につけた段階で橋頭保の確保には成功している。今更一年足らずで三大勢力がほかの神話との和議を結ぼうと、勝

算は九割を超えるのは確實だった。

その本当の目的は、禁手の覚醒を行うための意図的な窮地。

神器を高め、ムートロンの技術で刺激を加え、オーフィスの蛇すら使用して、覚醒させるための強制的な暴走を引き起こさせた。

そして、それに方向性を与えるために強敵とぶつけることが、この作戦の本命。

歴代最弱でありながら、しかし急速に成長する赤龍帝。禁手になりたてで覇に覚醒したその力は異質。なにより、禁手になる方法が前代未聞。

聖書の神の死によって生まれた、イレギュラー極まる禁手、聖魔剣。ムートロンの技術部は、そのもう一つの可能性を懸念している。

実力で勝手気ままに行動することを認めさせるヴァーリチームの黒歌の妹である猫又、塔城小猫。

変異の駒によって転生した、神器を宿したデイルイトウオーカー。ギヤスパーク・ヴラディ。

更に回復系神器の最高峰を持つアーシア・アルジエント。聖剣デュランダルの担い手であるゼノヴィア。

墮天使の長であるアザゼル。新世代の天使である紫藤イリナ。さらには神器使いのデザイナーズチャイルドであるリム・プルガトリオも見逃せない。

魔王サーゼクスの妹である、リアス・グレモリー。墮天使バラキエルの娘である姫島朱乃もなかなかだ。

彼らとの戦闘経験は、神器の覚醒に一役買ってくれようことだろう。

そして――

「井草・ダウンフォールとニング・プルガトリオ……か。さすがに見過ごせんな」

「あ、じゃあ俺の女動かそうか？」

考え込むビルデに、ナイアルがそう告げる。

この二人は、ある意味で当人も知らないがゆえに重要なのだ。

特にニングは、こちらの大義名分に大きな影響を与えかねない。できることなら真相を知らせ、そのうえで動向だけでも把握しておきたかった。

ビルデはそう考え、そしてすぐにうなづいた。

「いいだろう。A アーマーホデー Bを一個中隊ほど使うといい。もとはそちらの技術が母体だ」

「お、気前がいいねえ！　じゃ、それに乗つかるとするか！」

喜ぶナイアルだが、しかしビルデは少し考えこんだ。

戦力を提供するのには良い。そも、技術提供や資材提供などを受けているのだ。少しぐらい戦力を提供するぐらいでなければ、バランスが取れない。機嫌取りは必須だ。

だがしかし、A Bという戦力は割と目立つ。

駒王町のご真ん中で使用すると、否応なく秘匿が不可能だ。必然、他の勢力からの集中攻撃のターゲットにされる可能性がある。

仕掛けるタイミングは計らなければならない。うかつな攻撃は避けるべきだ。

「ナイアル殿、すまぬが仕掛けるタイミングに心当たりはないか？ 流石に何も知らぬ民衆の住まう街にA Bを投入すれば、他の神話共が大魔王派（マ）に集中攻撃を仕掛けてきかねない」

その頼みに、ナイアルはなんてこともないように頷いた。

「それは大丈夫だ。……ちよūdいタイミングで、スパイが面白い情報をつかんできやがったんでな」

そして、ナイアルは悪意を込めて嗤う。

この強敵、グレモリー眷属では勝ち目が薄いだろう。まず間違いなく死人が出る。

その後押しを自分ができれば、それに越したことはない。

きつと井草は苦しんでくれるだろう。そして彼女も苦しんでくれるだろう。

彼女の、それを隠し通そうとする光景を眺めて愉悦に浸れるかもしれない。井草が、苦悶の果てにまたあの弱った姿を見せてくれるかもしれない。その二つを同時に見ることができるかもしれない。

それが起きればいいと心から思い、ナイアルは含み笑いを漏らす。

そして、それを見てビルデもまた笑みを浮かべる。

悪とは気持ちがいいものだ。そして、悪魔である自分はそれをなす魔性だ。

ゆえに、自分に被害が被らないのならばそれを愉しみ、応援したい。

ぜひナイアルの願望が、自分たちにしわ寄せが来ない範囲内で成功してほしい。

二人の悪鬼は、お互いの愉悦が成立することを願って、悪意に満ちた笑みを浮かべた。

4 話

結局、井草は押し切られてしまった。

買いい物に巻き込まれた井草・ダウンフォール。そして、よりもよってリムに送り出されてしまった。

戸惑う井草に、服のコーデイネイトなどを手伝い、そして送り出した。その過程で、アドバイスマでしてくれている。

『ニングは暗部の仕事があまり好きじゃないんでさあ。仕事から離れられる休暇が大好きなんで、しつかり楽しませることで、井草』

……そんなことを言われたら、できる限り頑張るしかない。

元より、ニングが暗部の仕事に向いていないのはわかっていた。

もとよりあの性分である。暗部の仕事というのはストレスがたまるだろう。

だが、彼女は自棄を起こしたり精神を病むようなタイプでもなかった。それは褒められるべきことだ。

しかし同時に、それが彼女にとって本当に幸福だったのかはわからない。

結局は、つらく悲しい道のりをすすんでいるようなものだ。結果的にそれが正しい道に近かったとしても、本人が苦しいだけならば、それはきつと悲しいのだ。

井草のように自罰的な道を歩むつもりだったのなら構わない。だが、ニングは井草がその道を進むことを止めてくれた優しい少女だ。そんな道は似合わない。

アーシアの時だつてそうだった。任務を考慮するのなら、強引にでもアーシアを確保するべきなのだ。それが無理でも、悪魔のもとに悪魔すら治療する神器の持ち主を置いておくのは問題だろう。和平前の状況では処罰を受けてもおかしくない。

それでも、ニングはそれがアーシアのためになると思ったのだ。リムもそうだったが、彼女はニングの説得を受けて悪魔と堕天使を同時に敵に回すことを避けた一面がある。

……リムが先日的一件でダメージを受けたのは、案外そこにも要因があるのかもしれない。まあそれは良い。

そういうことならば、ストレス発散に協力することにやぶさかではないのだが――
「これ、誘われてるのかなあ」

などという予感を、井草は感じる。

リムは、井草に対して○フレ以上の関係になることを避けている節がある。

そして、ニングとのデートに助力している。

ニングは、リムが井草と〇〇レになったことでリムとちよつと揉めていたことがある。

そして、イリナに買い物に付き合おうをデート扱いされて赤面した。

ここから導き出せる答えがある。

つまり、ニングはリムと井草がそうなる前から井草に恋心を持っていた。そして、それを知っているリムが遠慮している。

リムが井草を性的に誘ったのは、リムの事情からある程度見逃されると思ったからか。もしくは、いっぱいいっぱいその余裕がなかったからか。果てはその両方か。

リムとニングはパートナーとして行動している。そういう意味でも、お互いがお互いに一定の信愛を抱いているのだろう。

そのリムの期待に応えるべきか。

だが、それはすなわちリムに対する今の想いを裏切ることではないだろうか。

リムに対する想いを貫くべきか。

いや、そもそもそれを言うなら少し手順が違うだけで、ニングも条件は同じである。

そうではない。そもそも伊予と五十鈴のことはどうするつもりなのだ。

などと思考が煮詰まり始めていく。

どうしたもんかと思つたその時だ。

「あ、井草さん……」

そのニングの声に、井草は飛び跳ねるように振り返る。

そこには、意外とシツクなワンピースに身を包んだニングがいた。

思わず五秒ほど見とれた井草は悪くない。

男とは、可愛い美少女に見とれてしまう哀れな性を持っているのだ。それが好意を持つている少女ならなおさらである。

「ごめんなさいなのです。誘ったのは私なのに、待たせてしまったようなのです」

双申し訳なさそうにするニングは、どうも井草が待たされたことに思うところがあると思つたらしい。

直ぐに誤解を解かねばならない。そも、井草が早く来ただけなのでそれは違うのだ。

「ニング、一つ覚えてほしいことがある」

井草は、ニングの肩に手を置いて――

「男は！ 可愛い女の子とのデートで！ 「いや、俺も今来たところだよ」というために何十分も前に待ちたがる生き物だから!!」

――緊張していたのか、つい大声で言ってしまった。

……当然のことだが、周囲の人々の注目を集めてしまう。

完全にやらかした。悪目立ちだ。

もしクラスメイトに見られたら、明日からニングが騒がれることになる。

井草自身はどうでもいい。ニングやリムたちからは何か言われるかもしれないが、前向きになったとはいえかつてやらかしたという事実まで無視できるわけではないのだから。

だが、ニングが悪目立ちしたら、それはちよつと心苦しい。

それが心配でどうしたものかと思いつながら、ニングの方を向きなおすと――

「……デート？ デートって、思ってくれていたのですね？」

そう、はにかみながら顔を赤らめてくれていた。

これは、明らかに辺りである。

ニング・プルガトリオは、井草・ダウンフォールに、L・O・V・E、LOVEしている。

しちやつているのである。

「……いい、行こうか？ 何を買うんだっけ？」

「あ、はい。修学旅行に備えて、実用性重視だった寝間着などを新調したいのです」
想像以上にハードな買い物だった。

これは確定事項である。どう考えてもニングは井草に恋愛的な好意を抱いている。

同性のリムや、アジア達教会トリオではない。異性である井草に寝間着の新調で付

き合いを求めるということは、高確率でそういうことだ。

しかもデート扱いされて喜ぶなど、完璧にそうではないか。

「が、ががが頑張るよ！　じゃ、じゃあいこうかかかかかかかな!」

「……はいなのですっ!」

すごいもってしまった井草だが、しかしニングはうれしそうなのでいいことにする。

そして、買い物も終了した。

途中で食事にも言った。ニングに配慮してヨーロッパ料理にするつもりだったのだが、ニングが興味があるということで日本料理になった。

「日本料理、気に入ったのかい?」

「はいなのです。イツセーさんのお母さんが作る料理は、どれもおいしくて大好きなのです」

そういわれると、イツセーの母も喜ぶことだろう。あとでそれとなく伝えておこうと

井草は思った。

「そういえば、井草さんは日本生まれの日本育ちときいたのです。日本料理も好きなのですか？」

と、聞かれるが、実際その通りだ。

日本生まれでも日本育ちでも日本食が好物だとは限らない。逆に外国生まれの外国育ちでも日本食が気に入るものもいるだろう

とは言え、井草の大好物は日本食だ。それも、日本人でも敬遠するものが好物である。

「俺は癖の強い日本食が好みなんだ。日本人でも苦手な人が多くてね」

「……納豆とかいう発酵食なのですか？」

ニングが真っ先に思いつくぐらい、納豆は日本の食事というイメージがあるらしい。

しかし違う。もっとマイナーである。

「鮎ずしだよ。鮎っていう淡水魚の発酵食品」

「……ヨーロツパで言うシュールストレミングみたいな感じなのですか？」

流石にそこまでひどくないと思いたい。シュールストレミングを試す度胸はないの
で言い切れないが。

「結構においぎついいから、納豆より人を選ぶかな？ あ、でもウオツシユタイプとかい

うチーズに近いにおいらしいよ?」

「あれは日本人受けはしなさそうですね。井草さんはいわゆる通なのですね」

そういわれると、なんだか食にこだわりのある美食家みたいな気がする。

「単純に味が気に入ってただけだよ。あと、先生がワルノリして日本酒まで持ち出してきたときに相性がよかったからかな?」

と、そこまで言つて、井草は苦笑する。

「そういえば、ここ数年食べてなかった。今度こつそり食べに行くかな」

「そうなのです。いったいいつから?」

そういわれると困るが、嘘を言うのも気が引ける。

なので、ムードを阻害するとは思つたが素直に言うことにする。

「……大体、四年ぐらいいさ」

「……井草さん」

やはり、悲しげな顔をされてしまった。

実際、食べる気にはなれなかった。二十歳になったときに少し思つたこともあるが、結局その気にはなれなかったものだ。

大好物を食べる資格を、井草は自分にあると思えなかった。それほどまでに、井草は罪深いことをしたと自分を苛んでいた。

だが、それももうやめるべきかもしれない。

ニングは井草の罪を許してくれた。十分すぎるほどに償ったといってくれた。リムも、ピスも、アザゼルも、イツセーも、皆が井草を認めてくれた。

なら、井草はそれに恥じない自分でいなければならぬだろう。

井草自身、そんな自分になりたいと思っっている。皆も、そんな井草でいてほしいと思うだろう。

過去の罪は忘れない。其れで人が離れていくことも覚悟する。

だがしかし、それだけで終わることだけは、もう選ばない。

「今度、食べに行くよ。さすがに人には勧めないけど、お土産に何か他のものを買って帰ることにするさ」

だから、井草はそういうことにする。

まだ抵抗はある。胸の痛みは確かにある。そして、伊予と五十鈴のあの変わり果てた姿を思い出せば、そんなことをしていいのかもしれないと思いたくなる。

だが、井草は自分を愛することをもう一度したいと思う。その資格があるといってくれた、皆の期待にもこたえたい。

事実、その言葉にニングは顔をほころばせた。

「それが、いいのですよ」

その言葉に井草も頷くと、話をほかの方向に進めようと思う。

「だけどもあ、ニングも大変だよね？ 悪魔の血が先祖返りしたせいで、プルガトリオ機関なんて向いてないところに転がり込む羽目になるなんてさ」

「確かにそうなのです。でも、ヤーロウさんもリムもいい人なので助かっているのですよ」

そう告げるニングは、ニコニコ笑顔だった。

だからだろう、きつとニングは、いい親に育てられたのではないかとも思う。

もしかすると親の記憶が無くて孤児院育ちなものかもしれないが、しかしそれでもいい孤児院だったのではないだろうかとも思う。

だから、ふときいてみた。

「そういえばさ、ニングのお父さんとお母さんって、どんな人だったのかな？」

本当に、流れでなんとなくだった。

怒られそうになったら怒られそうになったで、井草はすぐに謝るつもりだった。だつたのだが――

「そ、それは……っ」

――なぜか、ニングは息を詰まらせた。

顔色も悪い。というより、明らかに動揺している。

何かを思い出すようにしながら、しかしそれが苦痛になってくるかのような、そんな反応だった。

「ゴメン。俺も覚えてないのに聞いたのは失礼だったね」

「い、いえ。事故死したけど、いい人たち……だったと聞いているのです」

謝る井草にそういうニングだが、どこか他人事のような雰囲気がある。

どうやら、ニングにとつて両親との思い出は薄いものらしい。あるいは、井草のように物心がつく前に死別したか。

これは話を変えた方がよさそうだ。それも、できる限りすぐに。

「そ、そうだ！ そういえばメモを見ながら歩いていたみたいだけど、あとは何処に行くのかな!？」

すさまじく情けないが、とりあえず話を逸らすことを井草は考える。

この空気はダメだ。事実上のデートの真っ最中に、それはダメだ。

それはニングも察してくれたのか、メモ帳を見せながらニングも慌てて笑顔を作る。

「ハイなのです。リムが、帰る前にここによるべきだって言ってくれた……の……で、す……?」

そのメモ帳を見た。

住所はすぐ近くだった。というか、隣だった。

そして、井草とニングはそれを見る。
というより、このあたりに来た時点で気づくべきだった。

ラブホテルだった。

「ニング」

「はいなのです」

「帰ったら、リムを怒ろう」

「当然なのです。ジャパニーズセイザなのです」

余計な気をまわしすぎである。そもそも、なんでリムが井草ですら知らないラブホテル街の場所を知っているのか。というよりおすすめの場合なんてものまで把握してい

るのか。

いろいろと問い詰めねばならないと真剣に判断しながら、井草もニングもこの状況をどうやって変えるかを考え—

「朱乃、これはどういうことだ……？」

などという、井草にとって聞き覚えのある声を聞いた。

井草は耳を疑った。

なんでここに彼がいるのか。なんで朱乃を叱責する内容なのか。つていうかこの状況を説明することが自分にできるのか。

どうせアザゼルが井草がデートしているうんぬんは言っているはずだ。それがラブホテル街にいるなどと知られれば、想像する展開などひとつだ。

間違いなく怒られる。

そして、そこまで至って井草も勘付いた。

朱乃はイツセーとデート中である。そして、イツセーに焦がれる少女たちは、誰もかれもアプローチがちよっとずれている。そしてイツセーは意外とその辺はしつかりとしている。

どさくさに紛れて朱乃がホテルに連れ込もうとしているところを、目撃してしまったのだらう。

「……やっぱ！ イッセー君があぶない!!」

「へ!? わ、わかつたのです!!」

井草が思わず叫ぶと、ニングが慌てて魔剣を生み出しながら駆け出した。

その瞬間、井草は失敗したことを悟る。

今の発言では、イッセーがピンチだということしかわからない。しかも割りと命の危険を察したせいで、緊迫感が強すぎた。

ニングは勘違いしている。間違いなく、イッセーや朱乃が神の子を見張るものが知っている危険人物に絡まれていると思っている。

まずい。具体的にはニングがまずい。

彼は神クラスとも渡り合えるだろう傑物。三大勢力でも最強クラスの実力者だ。うっかり攻撃をはなつてニングが死んだらという可能性も否定しきれない。

「待つて待つて待つてニング待つてええええええ!!」

慌てて追いかけて角を曲がれば、そこには思った通りの光景が広がっていた。

明らかにラブホテルに近い位置にいる朱乃と、その近くにいるイッセー。そしてガタイのいいよく知る大男。

大男は朱乃の腕をつかんでおり、勝つが隊がいうえに強面なので、勘違いを促しやすい。

そして、当然のことだが、ニングは魔剣を振るって大男に切りかかった。其れも敵意満々でだ。

それに対して、男は雷光を纏った右腕で迎撃を行う。

突然の事態に手加減を忘れている。かなり本気モードだ。

聖魔剣すら打倒したコカビエルより格上の存在である彼の一撃だ。魔剣創造であるニングの魔剣では受け止め切れない。

「ストッ—」

ダメもとで停止を呼びかけようとしたその瞬間だった。

その雷光を切り裂き、斬撃が男性の腕を割と深めに切り裂いた。

「「「なっ?!」」」

イツセー以外のその場にいた全員、朱乃と男性、そして近くにいた老人と女性が驚いた。

と、いうか老人と女性はこういう組み合わせだろう。愛人関係か売春だろうか。

……などと現実逃避をしている場合では断じてなかった。

ニングは再び攻撃態勢を取り、イツセーも警戒態勢を強めている。

男性も男性で、脅威度を上方修正して、全身から雷光をはなち始める。

かろうじて、町中であることを考慮して誰もが全力を出しづらいついた状態。それがかろうじて均衡状態を作っていた。

そして、そのチャンスを逃さず井草は飛び込んで――

「すいません俺のミスです!!」

――ニングをかばうようにして、男性に向かって土下座を敢行した。

緊張感が微妙に霧散する。

そして何より、井草の対応でニングも男性も不幸な行き違いに気づいたようだ。

「……井草か。と、いうことは彼女は君の知り合いかね?」

「そうなんです! あなたの声が聞こえて「あ、これイツセーが勘違いで死ぬ」と思ってた慌てたせいで、敵襲だと勘違いさせてしまったんです!! 本当にごめんなさい!!」

男性には事情が分かったようでは何よりだ。

そして、井草が説明台詞を行ったことで、ニングも勘違いを確信してくれたらしい。慌てて魔剣を消すと、ニングも土下座を敢行する。

「ごめんなさいなのです!!」

「……いや、かまわない。朱乃を大事に思ってくれていたからだろう。感謝する」
彼が悪人でなくて助かった。と、いうよりかなりの善人で助かった。
それにほつとすると、井草とニングは元凶を怒ることにする。

「朱乃ちゃん?」

「朱乃さん?」

当然、イツセーではなく朱乃だった。

当たり前のことだが分かっている。

兵藤一誠という男をよく知っているのなら、誰もがそう認識するだろう。

兵藤邸で行われるアプローチ合戦を見れば、誰もがそう認識するだろう。

「イツセー(さん)をラブホテルに連れ込まない!」

「(イ、イ)めんなさい……」

状況がややこしくなった自覚はあるのか、朱乃も素直に謝っていた。

そして、男性はショックを受けて崩れ落ちる。

「朱璃……。朱乃は、朱乃は……。ふしだらな娘になってしまった……。っ」

「いや、墮天使あなたの娘なんだから当然でしょう」

崩れ落ちる男性に、井草は残酷なことを告げる。

神の子を見張るものの重鎮達から、目の前の男性も大概あれであると聞いている。母親の方も結構な人だったらしいとも聞いている。仲良くあれだったと聞いている。

なら、娘の朱乃が男をホテルに連れ込んでもおかしくないだろう。

血はきちんとながつている。井草からするとそういうほかない。

しかし納得できなかつたのだろう。男性は井草に詰め寄った。

「あ、朱璃はそんなふしだらではない！ 朱乃だって、これは何かの間違いだ!! 娘はそんなみだらな子じゃない!!」

「いや、言いにくいんですけどね? 兵藤邸でイツセーは女性にエロエロアプローチされてます。現実見てください」

井草はそうはつきり言つて首を振るが、しかし問題はそこではない。

とりあえず、いまだ混乱しているイツセーに説明をするのが先決だろう。

「あ、あの、井草さん? そ、その人、朱乃さんのことを娘つて……」

そのイツセーの反応に同情しながら、井草はとりあえず紹介することにする。

「イツセー、ニング。こちらは神の子グッを見張るものコの幹部の最上級墮天使、バラキエルさ

ん。
……朱乃ちゃんのお父さんだよ」

5話

バラキエル。神の子を見張る者でも最強クラスの存在である、最上級墮天使。

雷光の力を持つ凄腕であり、単純戦闘能力なら神の子を見張る者でも随一だ。

DMという救いがたい性癖カルマを持つ事を除けば、変人揃いの神の子を見張る者でも真面目な人物。彼は神の子を見張る者の教育機関である墮ちてきた者達ネで教官を務めていた時期もあった。その時の教え子達はヴァーリと肩を並べて戦った事もある凄腕のエンジニアトとなっている。

そんなバラキエルだが、娘に関しては実に色々と複雑な関係だ。

井草が駒王町に派遣されてきたのも、バラキエルの娘である朱乃がリアスの眷属になった事が原因である。バラキエルが心配で心配で堪らないから、監視役を派遣するという話になったのだ。

……実際には、それをダシにして井草を危険に見えて実は安全な任務に送り込むという策ではある。しかし、井草は知らないでこれは飛ばしている。知らぬは当人ばかりなり。

で、バラキエルは朱乃が嫌っている事もあり、駒王町には基本的に近寄らなかつた。

しかし、それをあえてやめて、こうして来た理由がある。

その理由は――

「ほっほっほ。また会ったの、赤龍帝にサーゼクスの妹よ」

――目の前の老人にある。

北欧神話体系、アースガルズ。そのアースガルズの首脳陣であるアース神族の長、オーデイン。

それが目の前の老人である。

なんでも、来るべきムーロンの本艦隊に対抗するべく各勢力で和平が進んでいるらしい。こじがみ合いの関係から和平を結んだ三大勢力が、その仲介を行っている。

その一環として、アザゼルの仲介でアースガルズは日本神話と和議を結ぶことになったのだ。

もとより日本神話はその手のことで穏健派が多い。駒王町にある神社も、管理者がいなかったこともあるが朱乃が管理をして一時期住んでいた。和平ムードが始まる前から、日本出身の神の子を見張るもののエージェントに、初詣をさせてくれる神社まであるなど、鎖国で有名な日本だとは思えないくらい緩い。

むしろ鎖国的なのは、人間側の異形勢力である五代宗家だ。外来の者たちはもちろん、内部のイレギュラーにも敏感だったらしい。件のバラキエル教室の者たちも、その

あおりを受けた形で異形たちとかわかることになったらしい。

とにかくそういうことで、オーデイン神は来日が決定していた。

其のため護衛も必要だと判断されている。こと、ムートロンの精鋭はたった二人掛かりでオーデイン神と互角に渡り合い、決着がつかなかったほどの戦力だ。それなりの護衛が必要だろう。

その護衛として呼ばれたのがバラキエルだ。魔王クラスのバラキエルでなければ、護衛にならないともいえる。

そして、本格的に会談が始まるまでの間、イツセーたちを護衛の一環にすることにしたらしい。

ムートロンの幹部クラスが相手では足手まといになりかねないが、あちらも雑兵を用意してくるだろうことは想像に難しくない。そちらの担当も必要だ。

それに関してはグレモリー眷属が適任だと判断されたようだ。ちよくちよく英雄派やムートロンは各地でテロを行っているので、大人の精鋭は動きづらいのだ。若手でこれが出て日本出身で、かつオーデイン神と接触しているイツセーやリアスがいるここが一番だと判断されたようだ。

そんなわけで、井草・ニングとイツセー・朱乃のデートは中止。突然来訪してきたオーデイン神が悪いともいえる。

しかし、其れ以上に問題なのは朱乃だ。

作り笑顔すら無くして、終始不機嫌。それほどまでにバラキエルが近くにいることが不愉快らしい。確執があるのは井草も知っているが、ここ迄とは予想外である。

そんなわけで、お茶を出すのも今回はリアスであった。

仮にも主にこれを代行させるとはあれである。それほどまでに、朱乃は不機嫌だということだろう。実質的に友人関係なのが裏目に出た形である。

しかし、オーデイン神は気にしていない。

事前にその辺の情報を伝えられていたのか。それとも、お茶を差し出す時に見えるリアスの谷間に満足しているのか。

「しかし相変わらずでかいのお。眼福じゃわい」

……間違いなく後者だと、井草は確信した。

イツセーが嫉妬にかられて暴れださないことを祈ろう。オーデイン神は笑ってノリで済ませてくれそうだが、配下の者たちがいろいろ文句を言ってきそうだ。暴れる前に鎮圧することも考えなければならぬ。

しかしその前に、オーデイン神の後頭部にハリセンがたたきつけられた。

「オーデイン様！　いくらなんでも失礼すぎます！　相手は魔王ルシファア様の妹さんなんですよ!?!」

お付きの女性が正論で叱責する。

仮にも同盟を結んだ勢力の長の妹だ。それを長とは言え、相手が失礼なことをしていたわけでもないのにセクハラじみたことをするのはあれだろう。

だがしかし、オーデインはどこ吹く風だった。

……思わず井草はアザゼルを見た。

そして、ハリセンで叩いた女性に目を向ける。

なんとなく、目があった。

そして、心も通じ合った。

—お互い、本当に大変ですね

—はい、心中お察しします

何かが通じ合った。

だが、それが悪かったのだろう。

考えればすぐにわかることだ。オーデインがアザゼルと似通っているところがあるのなら、ここぞとばかりにからかってくる。本来すぐにわかることだった。

「おいおい井草、ヴァルキリーを目で口説くとかやるじゃねえか」

「そりゃいいいわい。こいつはロスヴァイセというんじやが、彼氏いない歴が年齢じやからの。もらってやってってくれるか？」

テレパシーでもして交信しているのかといわんばかりの勢いで、アザゼルとオーディンが連携でからかってきた。

そして勢いよくロスヴァイセが崩れ落ちて号泣した。

「余計なこと言わなくていいじゃないいいいいいい!!! わたしだって処女を卒業したいのよおおおおお!!!」

すさまじく気になっていたらしい。ものすごいことを絶叫している。

だがしかし、これが悪かった。

「あ、ヤベ！ 爺さんまずつた!!」

「え、何がじゃ?」

アザゼルが驚きオーディンが首をかしげるが、遅かった。

「……失礼、ロスヴァイセさん。貴方は間違っています!!」

井草が見事に暴走した。

童貞や処女の卒業の仕方については、井草はやらかしてしまっているせいで暴走スイツチである。

どうやらアザゼルはテレパシーで念話していたわけではなかったらしい。そのせいで状況がややこしくなってしまった。

そして井草は、ロスヴァイセの肩をつかむと、まっすぐに目を見つめる。

「処女や童貞を卒業するなんて簡単です。少なくとも日本には女性向けの風俗店も存在する。ただ未経験な自分をやめたいだけなら、それで十分なんです」

井草はロスヴァイセの肩をつかみながら力説する。

「それをやれ「絵になる卒業をしたい」だなんて考えて形にこだわってはいけません。重要なのは卒業した上でどうするか、そしてそれらの恥ずかしい真似という意味を履き違えないことなんです!!」

涙すら浮かべて力説した。

「それに俺を彼氏にするのは難易度が高いです、覚悟必須ですからね、覚悟」

「そ、そうですか？ 墮天使総督の直轄で、特撮番組の主人公のモデルで、三大勢力唯一のイーツと選ばれたもの的な感じがするんですが――」

「パニック起こして強姦じみたことで童貞卒業しました。……そんな男を彼氏にしたいですか、貴女は」

しかもほつきりと言い切ったほどだ。やりすぎである。

ロスヴァイセも目を丸くして、ぽかんとしている。

そして井草をしつかりと見て、上から下まで確認する。

視線がイッサー達に向けられると、イッサー達はうなづくしかない。

そして、井草に視線が戻る。

「……冗談ですよね？」

「事実です。だからおっぱいドラゴンのレギュラーじゃなくて大人向け番組なんです」

「……あのな、ロスヴァイセ。当人本当に後悔して猛省して、拳句に被害者に「感じてあげればよかった」なんていわれてシヨックで昏睡状態に陥ったぐらいなんだ。あまり言わないでやってくれや」

井草が肯定し、アザゼルが額に手を当てながらフォローする。

そして、オーデインが珍しく額から汗を流しながら嘆息した。

「まあ、戦士たちが敗者を凌辱するなどという話は昔は多かつたしの。儂らアース神族も若いころはヤンチャしておった。……ケジメはつけたのじやろう？」

そう聞くと、アザゼルはうなづいた。

「まあな。親御さんには事情を説明してぶん殴られた。それに恨むべきはムートロンのナイアルだしよ」

その返答に、オーデインは一つ頷いた。

「なら、深入りはしないでおくかの。おぬしもそれでいいな、ロスヴァイセ」

「は、はい。ちよつと抵抗はありますが……」

流星にちよつと戸惑っているロスヴァイセだが、これに関してはロスヴァイセの反応が普通だろう。

強姦の前科はそれだけ重い。井草もそうだと思っているし、イツセーたちもそれはわかっている。

それで一応話を終わりにして、アザゼルはため息をつきながら話を進めることにする。

「まあ、そういうわけで俺らで面倒を見ることになった。俺はちよつと最近忙しいんで、バックアップ要因はバラキエルになる」

「よろしく頼む。あと、井草が世話になったな」

言葉少なげだが、バラキエルは簡単に挨拶をする。

さらにサラリと井草について礼もいう。ひと悶着起きたときに冷静だったことから見て、彼も井草の事情はよく知っているのだろう。だからこそ、ある意味で出しにされたのだろうが。

とりあえず一息ついてお茶を飲んでから、アザゼルは反目をオーデインに向ける。

「つーか爺さん。予定より早く日本にくんじゃねえよ。おかげでひと悶着起きちまった

し、今回はミカエルやサーゼクスの仲介も必要なんだぞ？」

朱乃のことを言っているのだろう。アザゼルは勘弁してくれという表情だった。

実際、娘が男とデートなど、親としては気になる展開だ。ラブホテル街で出くわしたのはトラブルだが、アザゼルもそんな面倒なことをしないように気は使うだろう。本来の予定でブックキングするなら朱乃に忠告ぐらいはするはずだ。

そんなアザゼルの当然の文句に、オーデインは嘆息をつきながらあごひげをなでる。

「実は厄介な奴に非難されておつてのお。奴が何かする前に日本に向かつておきたかつたんじゃよ。アースガルズわも閉鎖的じゃったわけじゃが、それが原因でいろいろあつてのお」

その言葉に、今度はアザゼルが嘆息しながら頭をかく。

禍の団だけでも厄介なのに、他の勢力からもめ事というのは余裕が全く持つて足りない。かといつて、散々迷惑をかけた三大勢力である。掌返して和平を進めたこともあるの

で、何かあつたら積極的に動くほかない。

「おいおい、ヴァン神族とでも揉めたのかあ？ 頼むから神々の黄昏ラグナロクを日本で起こすな

よな？ 高天原たかまはらだつてさすがにキレルぜ？」

「いや、ヴァンはどうでもいいんじゃない？ まあ、そんなことをここでするのもあれ

じゃ。ちよつくら日本観光でもするかのお」

そのオーデインの言葉に、アザゼルは少し考えこむ。

そして、明らかにいやらしい顔をした。

「因みにどこがいい？」

「おっぱいパブとやらに行きたいのお」

とりあえず、アザゼル以外の全員がずっこけたことを追記しておく。

日が変わった深夜になって、井草は兵藤邸に戻ってきた。

アザゼルとオーデインがそろって風俗店に行くというあれな事態。ロスヴァイセはそれでも護衛としてついていくと言い出したので、井草はアザゼルの護衛としてついてきたのだ。

男性向け風俗店に女性を連れて行くなどセクハラまがいである。性犯罪関係でやらかしている井草としては黙っていられず、自分が代わりに行くと言い出したのだ。

で、数店ほど付き合わされて、ようやく帰ってこれたのである。

「つ、疲れた……」

とりあえずダイニングに行つて水を飲もうと判断した。

アザゼルとオーデインの会話を聞いたが、どうも今度は寿司を食べにいったりするらしい。あとキャバクラにもいく気らしい。

今後はイツセー達も巻き込まれるだろう。なにせその場所は駒王町の外側だ。仮にも護衛が家に残っているわけにはいかない。

イツセーあたりは嫉妬で狂いそうなので、何かフォローを考えておかないといけないだろう。

そう思いながら、井草はダイニングに入った。

「……………朱乃…………」

すさまじく落ち込んでいたバラキエルが、水の入ったコップを片手に落ち込んでいた。

姫島朱乃とバラキエルの確執は、朱乃の出生に由来する。

日本の異能者の中でも最大手。国家とすら密接な関係を持つ、五つの異能者の家系。その五大宗家の一つが、姫島である。

ほかの勢力と揉めて重傷を負ったバラキエルは、その姫島の中でも有力の使い手だった姫島朱璃に救われた。

しかし、それはロミオとジュリエットのようなものだった。

当時の五大宗家は非常に排他的で、バラキエルはもちろん、朱璃との間に生まれた朱乃すら嫌っていた。

朱乃が姫島の異能である火の属性があればよかったのだが、残念なことにバラキエルの血が濃く、雷に適性が偏っていた。

それらがこじれにこじれて、バラキエル相手に五代宗家が刺客を放ったこともある。もつとも、三大勢力でも有数の実力者であるバラキエルはそれをこともなげに撃退した。

が、その後がまずかった。

撃退された五代宗家の刺客は、八つ当たりで墮天使と敵対している勢力にそのあたりの情報を提供した。そしてタイミング悪くバラキエルが仕事で離れることとなる。それが見事に重なったのだ。

結果として、朱乃をかばった朱璃は死亡。そのあと下手人はバラキエルが倒したのだが、そのトラウマで朱乃は墮天使を嫌うようになった。

実際、井草が監視役としてのみの関係で深入りするまでは、朱乃には嫌味を言われる関係だったのだ。井草が自己嫌悪がひどすぎるのでまったく通用しなかったのだが。

最近はいぶ普通の関係になったのだが、これは井草の事情が明かされたからだろ

う。それほどまでにナイアルがやらかしたともいえる。

とは言え、これからはそうもいかない。

朱乃から、井草に対しては嫌悪感が向けられていた。当然アザゼルにもだ。

バラキエルとの確執は、それほどまでに根深いらしい。

「あの、バラキエルさん。大丈夫ですか？」

「……井草か。ああ、大丈夫だ」

そう答えるバラキエルだが、やせ我慢なのは誰が見ても明らかだ。

「朱乃と話をしようとしたときに、乳龍帝と出くわしてな。それがきっかけで朱乃から本格的に嫌われたようだ……」

バラキエルはそういうと、更に沈み込む。

どうやら、イツセーに突っかかってしまったらしい。

父親としてはまあ、確かに気にしてしまうのだろう。かなりスケベな性分なので、気になってしまうのは仕方がない。

ちなみに自然と乳龍帝呼ばわりだが、そちらはスルーする。ドライグはイツセーが目じゃないぐらいやらかしているので因果応報ということしておこう。

「とりあえずイツセーは大丈夫ですよ。確かに一時期覗きの常習犯だったけど」

「そんな男に朱乃を任せられる——」

衝動的に切れそうになるバラキエルだが、井草を見てとつきに踏みとどまる。

それを言うなら井草は強姦犯だ。一度しかしていないのと常習犯とはまた問題にするべき点が違うが、しかし罪の深度で言うなら井草の方が上だろう。

そこで自虐的なモードに入るかと思つたが、井草は自然な表情だった。

「まあ気になるのは当然ですけどね。でも、彼はいい子ですよ」

そう、井草はにつこりと微笑む。

「努力家で仲間思い。名前の通り誠実。悪いと思つた時は素直に謝れるのも美德です。……裏を返せば覗きを大した事だと思つてないわけですが」

最後に問題点を入れるが、しかし井草はイツセーをとても褒めれる。

入学当初19歳の井草は、当然それをばらしたので距離を取られていた。

しかし、イツセー達は気にせず付き合ってくれたのだ。それは間違いなく美德を持っている証明だろう。

そしてイツセー達を更生させた事をきっかけに、井草は見事に学園で有名人になり、評価されるようになった。

だからこそ、言える。

兵藤一誠に好意を抱いた姫島朱乃は、いい男を選んだと。

「安心してください。彼は一点特化型の欠点こそありますけど、それさえ気にならない

人には優良物件です」

「しかし、胸を食するような男を信用していいものか」

「んなわけないです。どうせアザゼル先生が馬鹿な事言っただけでしょう？ そんな事信じないでください」

まったくもって、心配性の親バカである。

「……信じて、いいのだろうか？」

「大丈夫ですよ。彼は、それだけの人物です」

バラキエルに、そう断言する。

そう、兵藤一誠は確かに変態だ。だが、それさえ除けばあれほどの好漢もそうはいない。

だからだろう、なんとなくだがイツセーがいれば大丈夫だと井草は思う。

きっと彼は、この問題もいつか解決してくれるはずだろうと、そう思えた。

「……ビルデ。問題が発生しちゃった」

『どうしたのかね、ナイアル殿?』

「スパイからの追加報告で、ロキの研究はかなりやばいレベルで完成しちまつてる。しかも俺がやらかしたのが原因でなあ。ホテップが激怒してるんだよ」

『何をやらかしたのかは聞かないでおこう。で、どうなったのかね?』

「無駄に戦力を消耗したくないから、グレモリー眷属をうまく使えとよ。三つ巴は禁止でロキ撃破に集中しろとか言われちまつた」

『よりもよってあなたを使ってそれができると?』

「代金はもらってるから大丈夫だ。……あと、ヴァーリチームがいらんこと考えてるから便乗しろってよ」

『あいつらはいつもいつも勝手な行動を……っ』

「ま、その分ゲットしたらラッキーな獲物もいっぱいだ。迷惑かけた分そつちにくれてやるよ」

『まあいいか。データを取るだけなら共闘でもできる。それで、その研究成果はどれほどの完成度で?』

「……戦力筆頭を手にしたとよ。こりや、死人が大量に出てもおかしくねえぜ？」

6話

イツセーたちがおっぱいドラゴンのイベントで冥界に出張している間、井草は静かにトレーニングをしていた。

……冥界、それも悪魔側はいろいろ大変だ。

王の駒を使用する大魔王派と、それと連携する禍の団。さらにムートロンによる下位のイツツによる、世界各地での犯罪の多発。

今冥界には、明かりが必要だ。

その一つが、乳龍帝おっぱいドラゴン。そして、小競り合いで勝利しているという事実。

この大問題は結果として、何人かの不遇な者たちに光明を与えてくれた。

一人はソーナ・シトリ。

彼女の誰でも通えるレーティングゲームという夢は、其のままでは上役たちが妨害をしてくるだろう。それぐらいには、上役たちにとって嫌なものである。

だが、それも言っていられない。

一気に減少した新魔王派の悪魔。その悪魔の勢力を盛り返すには、有望な実力者を増やすことが必要不可欠だ。

実践訓練としても使えるレーティングゲーム。そして、それを運用する指揮官としての王。さらには少数精鋭の実力者となる眷属悪魔。

それらを少しでも多く用意しなければならない。そして、血筋を重視する旧家からすれば、これ以上貴族が戦死することはできれば避けない。

必然的に、使い捨てにしても困らない下賤な民草を強化しするしかない。そういう結論になるのは、すぐだった。

結果、軍学校としての性質が強くなるが、レーティングゲームの勉強もできる学園の設立は必要不可欠と判断。ソーナの夢は、多少不本意ではあるがかなえやすくなった。

また、その過程として実力者が優遇されているのも事実である。

とくに貴族ではあるが、諸事情あつて冷遇されていたものは、眷属悪魔込みで即戦力となつていた。

むろん、若手悪魔の中でも個人戦力では最強のサイラオーグは取り立てられている。

次男であるマグダレンが、大魔王派についたバアル家のものに担ぎ出されたこともあつて、一時危うかったバアル家次期当主の座も回復したのだ。さらに旧家たちは、貴族たちを矢面に立たせないため、彼を指導者とした「バアル義勇軍」を設立しようなど

といっている。

之も裏の意味として、サイラオーグのシンパを危険な戦場に送り込んで減らすのがもう一つの目的なのだろう。だが、同時にサーゼクスたちの尽力で勲功としての昇格が認められてもいる。

ビルデによる冥界のクーデターは、現魔王派にも大きな変革を生み出そうとしていた。

それらの情勢に対応するには、井草もまた強くならねばならない。

強くならねば、ナイアルを倒せない。

強くならねば、伊予と五十鈴を止めることができない。

そしてさらに強くならねば、2人を救うことなど――

「っ!？」

その時、足元がぐらついて勢いよく転んでいしまった。

とつさに受け身を取るとするが、しかしバランスを崩してブロック塀に激突してしま
う。

「……痛っ」

額に手を当てながら、井草は視界がにじむのを感じる。

……救えるのか、本当に。

そんな疑念が、井草に浮かぶ。

悪を自任し、悪であろうとし、井草を意図的になぶる五十鈴。

ナイアルに心酔し、刺激を愛し、井草を無意識になぶる伊予。

二人とも、致命的に変わってしまったている。少なくとも、一首の邪悪といつてもいい存在になってしまっている。

それを、改心させることが本当にできるのか。よしんばできたとして、それが二人のためになるのか。

もしまともになつたとしても、井草が知る二人は、かつてしてきたことを受け止めることができるのだろうか。

それよりも、一思いに殺してやった方が彼女達のためになるのではないか――

「……………っ!!」

そんな想像をしてしまい、井草は全力で駆け出した。

わかつている。それしか手がないのなら、殺す覚悟はある。そのつもりだった。

だが、やはり井草は弱い。ふとしたことで最悪の想像がよぎり、心が軋む。

走りながら、過去を思い出す。

悪を自任する五十鈴は、井草の面倒をよく見て、いじめられていた時はいじめっ子に殴り掛かってきてくれた。

狂気に満ちていた伊予は、心優しく、井草と五十鈴の喧嘩を苦笑しながらなだめてくれている。

それが、今ではあの様だ。

なにより悪いのはナイアルだ。それは、断言できる。

だが、悪の素質を介抱してしまった二人は、もう井草の幼馴染といえるのか。

その感情に翻弄されながら、井草は兵藤邸へと戻る。

そしてドアを開けると、そこにリムがいた。

散歩から帰ってきたところらしい。ちやうど靴を脱いで、スリッパに履き替えているところだった。

「ちよ、どうしたんですかい!? なにがありやした!?」

井草の様子を見て、ぎよつとなつて心配してくれるリム。

井草は、そんなリムを抱きしめる。

「……今夜は、一人になりたくない……っ」

こんなことを頼めるのは、リムしか居なかった。

一時間ほどして、ようやく井草は収まった。

そして、そんな井草に抱きしめられながら、全裸のリムが苦笑する。

「……突発的に不安になっちまったってわけですかい。ま、そういうこともありますわな」

「なんか、ゴメン」

正直本当に恥ずかしい。

昔の女がらみで不安に駆られて、今の女友達に性交を求めるなど、最低だ。

自己嫌悪がぶり返しそうになる井草に、リムは微笑むとその体を抱きしめる。

小ぶりな体は井草を包み込めないが、それでも井草の心は包み込まれた。

「ま、私は話に聞いたあれにはドンビキっすけど、井草にとってはいろいろな思いい出もあつたんでしようなあ」

その言葉に、井草は無言で頷く。

その背中をぼんぼんとたたきながら、リムは井草をあやす。

リムもまた、伊予と五十鈴の狂気を直接目にせずすんだ側だ。

だからこそ、井草の苦悩に触れることができる。

イツセー達ではだめだ。どうしても色々見てしまったことが影響して、そこに關して

は共感をすることができない。

「まあ、人って何かの出来事で一気に変わりやすからね。井草だってそうでしょう？」

そこを言われると、反論できない。

かつての井草と今の井草は、大きく変わっている。

傲慢な中二病だった井草は、過去の罪悪感から大きく変わった。

そういう意味では、伊予と五十鈴とは方向性が違うだけで同じだ。ある意味おかしなことでも何でもない。

その言葉に井草はあきらめようとして――

「でも、変わってないものもあっちまうんでしょう？」

――その言葉に、はっとなる。

反射的にリムを見れば、リムは苦笑しながら井草をなでてくれた。

「もしかしたら、変わってねえところもあるかもしれやせんぜ？　そして、それがわかるのは井草だけじゃねえんですかい？」

その応援に、井草はぽつりと漏らす。

「……できる、かな？」

「ま、それは私にはわかりませんがねえ」

あつさりとそのことを言ったリムは、しかし井草をまつすぐ見つめる。

「やるなら思い残しがねえぐらい頑張りなせえ。私は、そのサポートぐらいはさせてもらいやすぜ?」

その言葉に、井草は苦笑した。

「リム、それ、殺し文句だよ?」

「おっと! 井草にはニングと一緒にしてもらいてえんで、今のはなかったことにさせてくれやせんかい?」

「ああ、やつぱりニングに気を使ってたのか」

慌てたリムがぼろを出し、井草はリムの行動を確信する。

「どうやら、井草との関係をセフ○止まりにしたのは、ニングとくつつけたかったから
のようだ。」

顔を赤くするリムは、しかしそれが決定打になったのだと確信したのか、観念したように井草の胸に顔を埋める。

「……ニングは、いい子なんでさあ」

「知ってる」

そんなことはよく知っている。

いきなりろくに会ったこともない男が、かつて強姦まがいの行動をした。そんなことを知って、相手が後悔しているからって許してくれるのは優しい証拠だ。

人によつては甘さとも思うだろう。だが、ニングはあれで言うべきことはきつちりいうタイプだということも分かっている。

だから、それは甘さではない。優しきなのだろうと井草は思う。

「でも、それはリムも同じだろう？ 俺はどつちかを選ぶのは大変なんだけど？」

「なら、同情心で選んでくれても構いやせんぜ？」

井草の冗談交じりの皮肉に、リムは即答でそう返す。

そして、プルプルと震え始めた。

井草は、最初笑っているのかと思った。そういう冗談交じりの展開だと思った。

だが、違う。

直ぐに気づく。これは、井草がついさつきしていた震えと同じだ。断じて笑いの類ではない。

これは、泣いているのだ。

「リム……？」

「井草、疑問に思ったことはねえですかい？」

何をといたくなくなったが、それより先にリムは告げる。

「コカビエルの一件、リムは魔剣創造で何と打ち合つたと思つてんですか？」

その言葉に、井草は一瞬思い出すのに集中した。

そして、ふとあり得ないことに気が付いた。

ニングは、ケンゴウイツとなったバルパーからリアスを守った。

その時ニングは、魔剣を使用していた。魔剣創造で生み出したものだ。

だが、それはおかしい。

バルパーがその時使っていたのは、エクスカリパー・デイストラクシオン破壊の聖剣を融合させた合一化させたエクスカリパーだ。

ニングと同じく魔剣創造を使っている祐斗は、ゼノヴィアが使っていた合一化していない破壊の聖剣で魔剣を破壊されていた。魔剣創造の魔剣が、破壊の聖剣よりも強力な合一化エクスカリパーと何度も打ち合えるとは思えない。

なら、何があればいいのか。

禁手だろうか？ しかし、それも妙だ。

合一化したエクスカリパーと打ち合えるレベルに、祐斗の禁手はなった。

だが、祐斗の禁手である双覇ソード・オブ・ビトレイヤの聖魔剣はイレギュラーだ。聖魔剣の性能は、並の魔剣創造の禁手を超えている。

「……ニングの禁手は、祐斗の禁手とまともに打ち合えるレベルでさあ」

そう告げるリムは、しかし様子がおかしい。

友の力を誇らしく思っているわけではない。友の強大きに嫉妬の感情をいだいてい

るわけでもない。

ただただ、悲しんでいた。

「聖剣の特性を持つちやいやせんが、頑丈差だけなら伝説クラスにも引けをとりやしません。上級吸血鬼とやり合った時に、増援が来るまでしのぐために至ったからでさあ」
その過去をの思い出を語るリムは、静かに震えながら井草に縋っていた。

先程と逆転した状況に、井草は静かに抱きしめる。

「……ニングは、優しい子なんでさあ。そして、優しすぎるせいで、自分を犠牲にしてしまいかねないんでさあ」

「そっか。確かに、そうだね」

アーシアの意向を尊重して、ニングはリアスにアーシアを預けることを決めた。それは、和平を行う前では問題だ。悪魔に悪魔を癒す力を与えるのだから。処罰を受けた可能性だってある。

井草が伊予と五十鈴に襲われたとき、ニングはリムと共に助けに来てくれた。だが、伊予と五十鈴は龍王クラスですら楽には勝てない。それは本当に命懸けだ。断じて、最低なことをした付き合いの薄い相手にやることではない。

その優しさは、それゆえに自身を傷つける刃にもなる。

「でも、俺たちはそれを止めれない」

そう、それは井草たちもそうなのだ。

きつと井草は、リムは、イツセーは、リアスたちは。誰かが同じことになったら助けに行くだろう。

だから、ニングを止めるのは井草たちには不可能に近かった。

「強くなるう、リム。ニングが自分を犠牲にしなくてもいいぐらい、俺たちも強くなるう？」

そんな、あたりさわりのないことしか言えない自分に、少し嫌悪感が出てきてしまった。

7 話

そして数日後、井草たちはトレーニングを行っていた。

イツセーや祐斗との模擬戦は、いい訓練になる。

なにせ二人はそれぞれ別ベクトルですさまじい能力を發揮している。その二人との模擬戦は、間違いなくいい訓練になる。

イツセーは圧倒的な力の具現だ。最大出力の攻撃ならば、既に最上級悪魔クラスはあ
るだろう。

祐斗は技と速さの申し子だ。聖魔剣の性能も含めれば、総合力ではイツセーすら凌ぐ
だろう。

そして、その二人との戦いで、井草は総合的に苦戦を強いられていた。

総合性能では二人とそこまで差があるわけではない。そもそも、素体の性能でならば
井草が上だ。

だがしかし、想定外のトラブルが発生してしまった。

「聖剣と聖魔剣、悪魔にとってここまで害があるだなんて……」

「ど、ドンマイですー」

思わずぼやく井草に、ギヤスパーが励ますようにスポーツドリンクを差し出してきてくれた。

その優しさに涙を浮かべながら、井草は自棄飲みで一気にあおる。

旧魔王派幹部との戦いで、井草はクルゼレイを撃破した。

クルゼレイはイーツと化していたので、その際に彼のイーツを取り込んだ。結果として、さらなる力を得たといえる。

だがしかし、それがよくなかった。

クルゼレイが使用していたのは、デビルイーツ。文字通り悪魔の力を手にするイーツだ。ディオドラも使っていた。

どうも、ディオドラの時にも残滓の一部を取り込んでいたらしく、クルゼレイ撃破の際にさらに取り込んだことで高出力になってしまっている。それがよくなかった。

デビルイーツの能力は先ほども書いたがわかりやすい。所有者に悪魔の力を与えるというものだ。

これが悪魔なら、単純に能力が上昇するというだけで済んだだろう。だが、そうは問屋が卸さなかった。

井草は墮天使である。そして、墮天使には三大勢力でも優位点がある。

それは目立った欠点がないということだ。

天使は墮天する危険性を考慮するため、メンタル的な隙がどうしても発生する。強い欲望を持つことができないといってもいい。エロスなどもつてのほかだ。

井草は墮天使でよかつたと思うが、しかし問題はそこではない。

悪魔は欠点が多い。

なればどうってことはないが、日光にも影響を受ける。十字架や聖水などに触れると肌が焼けただれる。聖剣などの聖なる物体に触れると大ダメージだ。

そう、聖剣が効くのである。

兵藤一誠は、三大勢力のバックアップの元、アスカロンをもらっている。アスカロンは龍殺しの聖剣である。

木場祐斗は、聖魔剣を生み出す禁手を持つ。聖魔剣は、魔剣と聖剣が融合した、いいとこどりの武器である。すなわち聖剣の上位互換といってもいい。

結論を言おう。井草は聖剣で過剰にダメージを受けてしまうようになっていた。結果的に、井草は総合的に二人に対して弱くなってしまった。

戦闘経験と訓練の数、イーツ化による手数により、イツサーに対しては技で立ち回れる。反面、総合的な性能では劣ってしまう。

上位墮天使の血を継いでいるため、身体能力などの差で祐斗に対しては力で立ち回れ

る。反面、天賦の才を持つ祐斗のテクニクには勝てない。

そして今までは、堕天使の光力が悪魔である二人に有効だった。結果として、2人相手でも優勢な勝率を持っていた。

が、デビルイーツの特性を得たことで条件が互角になると、しのいでいる部分で押し切るより劣っている部分で押されることが多くなってしまうた。

「俺って大したことなかったんだなあ。わかっちゃいたけどやっぱりシヨックだ」

かつてナイアルに圧倒されたときほどではないが、しかしシヨックはシヨックである。

伊予と五十鈴を止めるために、できることなら救うために、井草は力が必要だ。

協力者はいる。だが、井草のわがままで始めることなのだから、井草が前線を張れるぐらいの力が必要なのだ。

しかし、条件が互角になっただけで負け越す始末だ。これはさすがにシヨックである。

「いや、井草さんも強いですって！俺たち結構ぎりぎりですもん」

「イツセー君の言う通りです。僕なんて勝率は4対5じゃないですか」

イツセーと祐斗はフォローしてくれるが、しかしさすがに思うところがあるのである。

というより、祐斗の場合は足を止めれば一気に火力で押し切れるのだから比較的有利だ。

なにせ井草にはスパイダーイツの力がある。蜘蛛の生態を最大限に生かして、接近する時点で相手が引つかかるように巢を張ることはできるのだ。

その相性をもつてしても負け越している。これはやはり思うところがある。

「……でもさ、俺、伊予と五十鈴をできれば救いたんだよ？　もうイツセー君たちを巻き込めないしきさ？」

「い、いやー。俺は、てつ、てつだ……」

井草にイツセーは手伝うといいそうになるが、しかしどもつてしまう。

それをすまなそうにするイツセーに、井草は苦笑を浮かべながら首を横に振った。

バイリンガル
乳語翻訳によって伊予の胸の内を聞いたイツセーは、乳語翻訳が出せなくなるほどのシヨックを受けた。

それでも井草は救えるなら救いたいと思ひ、冷徹な決断ができない可能性を覚えていく。

手伝ってくれるのはうれしいが、直接戦うのは井草がすべきことだと思っただ。
だ。

だが、伊予も五十鈴も強い。具体的には、今のイツセーでは仲間たちの協力がいるぐ

らい強い。イツセーに負け越している井草では勝ち目が薄いのは明白だ。

「希望はあるって思いこみたいだけなのはわかっている。だけど、それでも救える余地を残したいのが俺のわがままだ。そこまでイツセー達を巻き込めないよ」

井草はそういうが、しかしそこに反論が飛んでくる。

「それは、違うと思います」

なんと、ギヤスパーが首を横に振った。

その思わぬ反応に皆がきよとんとすると、ギヤスパーは死線の集中に戸惑いながらも、しかし言い切った。

「大好きな人を救いたいと思うのは、当たり前のことだと思います。僕も、ヴァレリーが大変な目にあつてたら助けたいですから」

その言葉に、井草は眩しいものを感じた。

そのヴァレリーという人のことはわからない。おそらくだが、ギヤスパーの知人だということだけだ。あとは推測で、ギヤスパーにとつて大切な人だということぐらいだ。

あの臆病だったギヤスパーが、それほどまでの決意を見せてくれた。この成長にもほっこりする。

だが、違うのだ。

望んで悪に堕ちている、伊予と五十鈴は根本が違う。ヴァレリーについてはわからな

い。しかし、ギヤスパーのしるヴアレリーと、今の伊予と五十鈴は違うのだ。

だが、このギヤスパーの決意を否定するのも大人げないので――

「じゃあ、停止世界の邪眼が必要な時は、手伝ってもらおうかな?」

そんな、あたりさわりのないことしか返せなかった。

休憩時間になったので、なんとなく一人で歩いていると、ニングと出くわした。

しかもなぜか、バスケットを持っている。

そして何故か、顔を赤くさせている。

直感的にフラグが立ったことを自覚して、井草は少し離れたところにいるイツセイ達に視線を向ける。

……器用におにぎりを食べながら全力疾走で距離を取っていた。

――計ったな!?

井草はそう思ったが、しかし表情には出さない。

そして、ニングは故に気づかず、バスケットを差し出した。

「あの、軽食にサンドイッチを作ったのです！　一緒に食べたいのです!!」

「うん、ありがとう」

そう返事をしながら、井草は少し前のことを思い出す。

ニングは禁手に至っている。しかし、リムの話から判断すると、それは何らかのデメリットを持っているようだ。

リムはニングに禁手を使わせたくないようだ。使わせたことを心から悔いているようだ。

きつと、それが理由なのだろう。リムは、ニングにこそ井草と結ばれてほしいと思っている。惚れた相手と付き合ってほしいと思っているのだ。

だから、井草も踏み込もう。

「ニング、俺のどこが気に入ったんだい？」

ストレートすぎるが、しかしこれぐらいの方がいいだろう。

間違いなく、ニングは井草に好意を抱いている。

その、理由は知りたかった。

そして、ニングはいきなり聞かれて顔を赤くする。

だが、深呼吸一つで切り替えたいらしい。すぐに冷静になると、ほんのり頬を赤らめさせながら告げた。

「……人を好きになるのに、理由がいるのですか？」

その言葉に、井草は返答できない。

井草は、伊予が好きだ。

だが、理由を説明できない。

あのかけがえのない日々で、なぜ五十鈴ではなく伊予を望んだのか、それがわからない。

ゆえに答えられない。

それに気づいたのか、ニングは苦笑すると頭を下げた。

「意地悪な質問だったのです。ただ、最初は一目ぼれだったのですよ」

と、そんな答えが飛んできた。

一目ぼれ。それはもはや、どうすることもできないものだ。

自分で言うのもアレだが、確かに以久は養子が整っている方である。それも、十分あり得るだろう。

「ただ、見た目だけで敵対勢力の人と恋愛関係だなんて問題なのですよ。だから、その時はついてなかつたですませるつもりだったのです」

だが、そうはならなかつた。

ニングもリムも、コカビエルの暴走によって発生したエクスカリバー強奪事件に駆り

出されることとなった。

そして、また井草と出会い――

「その時の、井草さんの態度がとても気になったのです」

その理由はのちにわかるが、その時から気になってしまった。

優秀で、かつこよくて、そして優しい。

そんな人が、自分のことを卑下するのが何となく嫌だった。

そして自分の言葉でそれをフリとはいえ直そうとしたところを見て、更に深いところまで落ちてしまった。

「そして、井草さんの理由を知って、あの二人の態度を怒って。そして、井草さんの決意を見て」

自分の責任だと背負い込みたがる、そんな生真面目な性分を見た。

大好きな二人に裏切られ、ショックを受ける姿を見て悲しくなった。

そして、そのうえで二人を止めようとする、決意に満ちた表情を見た。

結果、ニング・プルガトリオは井草・ダウンフォールに恋をした。

「だけど、付き合ってほしいというわけではないのです」

ニングはそう言って苦笑する。

「だって、リムも井草さんのことが好きなのです」

その言葉に、井草は自分の判断が勘違いでなかったと悟る。

リム・プルガトリオもまた、井草・ダウンフォールに恋をしている。

「リムのことを、不幸といつてくれてありがとうなのです。それをリムが自覚できたのは、きつといいことなのです」

素晴らしいながら、ニングは苦笑する。

「スケコマシなのは欠点だと思うのですが、これはもう惚れた弱みなのですよ」

「う……………」

痛いところを突かれ、井草は思わず息を詰まらせる。ついでにサンドイッチものに詰まらせた。

それを笑いながら、ニングはお茶を井草に差し出す。

そして、まっすぐに井草を見つめる。

「井草さん。どうか、リムの方を選んでほしいのですよ」

ニングは、そうはつきりといった。

それに対して、井草はちよつとムツとなった。

「自分のことを大切にしろって、君は俺に言ったじゃないか」

そのニングが、自分の恋心を優先しないのはどういうことだろうか。

恋のさや当てをして、リムと仲たがいしろと言っているわけではない。

だが、それはちよつと違うのでは仲と思うのだ。

「確かに、ちよつとリムに嫉妬した時期はあったのですが、でも考え直したのです」

そう反論するニングは、苦笑を浮かべていた。

「……きつと、次に私は未来を生み出せなくなるのですから」

—その言葉の意味を、井草は理解できなかつた。

そして理解するとき、井草はもつと早く理解しなかつたことを後悔することになる。

8話

そんな事を繰り返していた日々の夜。

オーデイン神は駒王町の外側にも出ては、寿司を食べたりキャバクラに行ったり遊園地で遊んでいたりしている。

完全に観光である。和議を結ぶ為の会談の為に来たのではなかったのだろうかと思ふ。

だがしかし、時々日本神話が関係している施設に行ったりしているので、完全に忘れてたわけではないのだろう。

「ほっほっほ。キャバクラは楽しいのお」

……偶然だけの気もしないではないが。

まあ、そういうわけで井草は空を飛んで周辺警戒中だ。

スレイプニルという、八本足の巨大な軍馬。その軍馬が引く巨大な馬車に、オーデインとロスヴァイセ、そしてイツセーとリアスとアジアが乗っている。リムとニングは留守番だ。

そのリムとニングがいけないこのタイミングに、井草は聞きたい事を知ってそんな人物に聞いてみる事にする。

「……ねえ、ゼノヴィアちゃん。ニングについて聞きたい事があるんだけど」

警戒を緩めるのもあれだが、井草はどうしても気になつて集中力が散つてしまつていゝる。この方が問題だろう。

リムについては知つている。ニングについても知つている。

だが、リムが伝えていない、ニングの秘密がある。

それが理由で、ニングは自分の恋心を諦めようとしている。リムもまた、ニングに自分の恋を譲ろうとしている。

何があつたのか、とても気になる。当事者としては尚更だ。

だが、ゼノヴィアは戸惑うだけだ。

「いや、私も初めて顔を合わせたのはコカビエルの一件が初だ。知つている事は貴方とそう変わらない」

実に残念な答えだった。

とはいえ、教会もかなり大きな組織だ。

ゼノヴィアとイリナはエクスカリバーの使い手で、タッグで任務に挑むのが基本だった。それ以外のメンバーは任務次第という事らしい。

そしてニングとリムは暗部であるプルガトリオ機関の人員だ。本来ならプルガトリオ機関の者達とだけでチームを組むだろう。

逆にいえば、それほどまでにコカビエルのやらかした事は大きいという事だ。

「……神の子を見張る者から出た人がご迷惑をお返しました。いや、教会クビになったのは本当あれだよね」

「いや、それについてはもういいのだが」

ゼノヴィアが軽く返し、それにイリナもうんうんと頷いた。

「そういえば、ニングさんって悪魔の血を引いているのよね？ ……どんな悪魔だったのかしら？」

そういえばそれも気にならないわけではない。

とは言え、その辺に関しては望み薄だ。

どうも三大勢力の大戦終了前の時に交わった血が先祖返りしたらしい。今更その時の資料を探すのも難しい。

そも、遊びで抱いた結果生まれてしまったというのなら、資料すら残っていないだろう。今から探すのは至難の業だ。

大戦や内戦で滅びた血筋だとするなら、絶望的でもある。

とはいえ、これ以上の踏み込みはプライベートの心外でもあるだろう。

……気にはなるが、踏み込みすぎるわけにもいかない。

そう考え直した井草だが、しかしイリナの興味深そうな視線が向けられていた。

「そういうえば、井草さんはリムさんとニングさんのどっちを選ぶのかしら？」

「……………コラ、その天使」

下世話である。張り倒したくなった。

いい加減にしろ、この駄天使と思うが、しかしそこは口には出さない。

とは言え、井草もいい加減自分を客観的に見直す事はできている。

顔は整っている。能力は優秀である。自分で言うのもあれだが、癖が強い性格ではあつても邪悪な性格ではないと思う。止めに金もある。

総合的に見て、これだけ見ればモテるだろう。

最大の欠点は強姦の前科持ちという事だが、それについても心底後悔しているのだ。

それを認めているリムとニングからすれば、大きな問題ではないのだろう。

結論。リムやニングからしてみれば、井草は非常にいい男である。

だが、それゆえにかリムとニングは、互いが互いにあるあなたが井草とくつつけばいいと考えている節がある。

……………これは井草が決めるしかないのか。

そう、井草がとりあえず覚悟を決めて色々と考えようとして――

「井草さん、やっぱりハーレムにするの?」

だからお前は駄天使なんだ。

イリナの突拍子もない発言に、井草は軽くキレかけた。

ハーレムというのは、そう簡単にできる事ではない。

少なくとも、誰かを選ぶのが嫌だからそうする……なんて優柔不断な理由でいいものではないだろう。

加えて言えば、ハーレムというのは男の負担が大きいものだ。

体力、財産、器量などといった素質は必要不可欠。下手をすればどろどろの人間関係になる可能性だってある。

ハーレムだから勝ち組の男なのではない。勝ち組の男になれる奴だけがハーレムを作れるのだ。

「イリナちゃん。俺がハーレム作れるような甲斐性持ちだと思ukai?」

「それは大丈夫だろう」

以外にも、バラキエルが乗った。

「おそらくアザゼルよりは大丈夫だな。人間の血が濃い事もあるのだろう」

なんかとんでもない事を言ってきた。

「バラキエルさん? 愛妻家がなんて事を言っているんですか!」

「別にハーレムを否定しているわけではない。私も墮天使……待て!!」
「空気が弛緩しかけたその時、バラキエルは声を上げて皆を制止させる。
そして、井草達の目の前で空間が歪み始めていた。」

「……ほう。情報通りだ」

「はあ。気まずいわね」

馬車からイツセー達が顔を出し始めるのと同時、歪んだ空間から何人もの人影が姿を現す。

先頭に立つのは、眉目秀麗を地でいく男性。そして、そのオーラはアザゼルやバラキエルすら上回る。

その両隣に立つのは、一組の男女。

何処か病んだ空気を纏った眼鏡の黒髪男性と、ヴァルキリーの鎧を纏った女性。更に後ろには、複数の鎧を着た戦士達を乗せた船が空に浮かんでいる。

全員が井草達に敵意を向けてくる中、戦闘の男性が両手を大きく広げて声を放つ。

「初めまして、三大勢力の諸君！ 我の名は、北欧の悪神、ロキだ!!」

その名に、殆どの者達が目を見開く。

悪神ロキ。北欧神話におけるトリックスター。

北欧神話に詳しくなくとも、そもそも北欧神話を知らなくとも、ロキの名を聞いた事があるものは多いだろう。

知名度ならオーデインすら凌ぐかもしれないぬ、北欧神話のある種の顔。それがロキ。

そのロキが、今日の前で大軍を連れてオーデインの進む道に立ち塞がっている。

「……そういえば、オーデイン様は——」

「——厄介な人に非難されているとか言っていたですう……」

祐斗とギヤスパアの言う通りだ。

アザゼルはヴァン神族が関わっていると踏んでいたが、どうやらそれよりもっと身内が揉めていたらしい。

そして、ロキはその言葉を耳ざとく聞きつけていたのか、堂々と頷いた。

「その通りだ、若き悪魔よ。……我らが主神殿が我ら以外の神話体系と仲良くしようなど苦痛でしかないのです、こうして邪魔をしに来たのだ」

はつきりと、堂々と敵対宣言を言ってきた。

そして、ロキが引き連れる戦士達もまた、敵意を馬車から出てきたオーデインに向け
る。

「神々の黄昏を乗り越えるのではなく、避けようなどと……っ」

「主神殿も毫碌されたようだな」

「ならば、我らが新たなアース神族となる他あるまいて」

「……いい感じに過激な連中が集まっているな、オイ」

アザゼルが呆れる中、ロキはそれを無視してオーデインに鋭い視線を向ける。

「我らが主神に最後に聞こう。……本当に、他神話体系などと和議するという愚行を行うつもりか？」

その殺意すら込められた言葉に、オーデインはしかし、余裕綽々だった。

ほっほっほと笑うと、顎鬚を優雅に撫でる余裕すら見せている。

「勿論じゃよ。少なくとも、お前よりはアザゼルやサーゼクスと話していた方が面白い。わしは日本の神道を知りたくての。あちらもこちらのユグドラシルに興味を持つてるので、和議を果たした後に異文化交流を検討しとる」

その言葉に、ロキは心底から落胆の意思を全身で放つ。

後ろにいた戦士達も、殺意を通り越して呆れの感情を示していた。

そして、ロキの隣に立っている男性が、ロキに顔を向ける。

「どうします？　これ、話し合いで済みそうにないですよね？」

「愚問だアスク。最早ここで黄昏を執り行う他ない」

アスクという青年にそう答えると、ロキは視線を隣にいるヴァルキリーへと向ける。

「カルネテル。周辺警戒をしろ。アザゼルが伏兵を用意しているかもしれん」

「承知しました」

ヴァルキリーの一礼を待ってから、ロキは静かにこちらへと向き直る。

明らかな臨戦態勢。いつ戦いが始まってもおかしくない。

しかし、その前にアザゼルは人羽ばたきぶん前に出ると、ロキに指を突き付ける。

「最後に聞くぞ！　てめえ、まさか禍カラス・ブリゲイトの団と繋がってるなんて事はねえだろうな!!」

その返答は、明らかな不機嫌という感情で返される。

「神を奴隷にするなどとうそぶく、愚者の群れと一緒にしないでもらおう。奴らの技術を利用する事はあっても、共闘などありえ—」

その瞬間、莫大なオーラがロキに激突した。

三秒ぐらい、ロキの後ろにいた者達がぼかんとする。それほどまでにタイミングがよい一撃だった。

思わず井草が後ろを見れば、そこにはいい笑顔をしたゼノヴィアがいた。

間違いない、デュランドルをぶつ放したそれだった。

「な、なななにしやがる!？」

思わず戦士の一人が怒鳴るが、ゼノヴィアは意にも介さない。

「返答は聞いた。敵対はしている。ならば先手必勝だ」

暴論だが正論だった。

確かにロキは敵対を宣言している。そして、最後の質問と言ったアザゼルの問いは、あつさりとしてロキが答えてくれた。

なら、確かに速攻で攻撃を叩き込んでも問題はない。

問題はないが、空気は読めてない。

そして効果もあまりなかった。

「ふむ、流星は音に名高い聖剣デュランドル。いい波動だ」

などと、余裕綽々で言い放ちながら、ロキは姿を現す。

ローブには僅かな損傷があるものの、そこに負傷は全くなかった。

「だが、この程度では神には届かん、素振りからやり直すがいい」

平然とそう告げるロキは、確かに神そのものだった。

おそらく北歐神話でも上から数えた方が早いレベルの神。其の力は、魔王すら超えているだろう。

その脅威を改めて認識し、祐斗もイリナも獲物を構える。

それを見て、ロキは愉快そうに目を細めるだけだった。

「これが人間なら英雄エインヘリヤルに迎えたい素質を持つ者達だな。だが、神を相手にするには程遠い」

そう言いながら、ロキは魔方陣を展開し――

「させねえよ!!」

「同感だね!」

既に禁手になっていたイッセーと、レセプターイーツになっていた井草が殴り掛かる。

その連続攻撃をさらりと回避しながら、ロキはふむ、と感心した。

「中々いい動きだ。赤龍帝はともかく、三大勢力唯一のイーツというのも興味深い。

……が」

しかしその瞬間、魔方阵から大出力の魔法が放たれようとする。

「神の相手にはまだ早いぞー！」

「舐めんな、この野郎!!」

それに対して、イツセーも事前にチャージしていたドラゴンショットを放つ。

二つの波動がぶつかり、大爆発が発生。

そして、その爆発を目くらましに井草は突貫する。

「イツセー！ アスカロン、パス!!」

「はい!!」

イツセーが射出したアスカロンを受け取り、井草は速攻で切りかかる。

アスカロンなら普通に光力の剣を使うよりかは攻撃力がある。イツセーは剣術には長けていないが、井草はケンゴウイーツの力もあつて相応の技量があつた。

ゆえに連携。当たれば効果は見込める。

しかし――

『トール』

その合成音声と共に放たれた拳が、井草を勢いよく弾き飛ばした。

そして煙から出てくるロキは、その姿が変わっていた。

巨大な籠手と腰巻を付けたその姿が、悪神というよりは戦神に近い。

そして、その姿を見たオーデインとロスヴァイセが、目を見開く。

ロスヴァイセはともかく、オーデインすら驚愕する。それだけで、この事態が異常である事がよく分かった。

「その力、そんな、まさか!？」

「ロキ!? 貴様、何をした!？」

その驚愕の声を受け止めながら、ロキは不敵な表情を浮かべる。

そして、全身から稲光を放ちつつ、強大な戦意を放つ。

「単純な事よ。……数年前、アスクを経由して確保に成功したエボリューションエキス。それを参考に、我もまたエボリューションエキスを開発したのだ。個人個人に調整した特注品をな」

その言葉に、アザゼルすら瞠目した。

エボリューションエキスは、人間世界である程度は流通している。それによるイーツ犯罪も数多い。

だがしかし、それを回収して独自に開発したなどという話は聞いた事がない。

その驚愕が心地良かったのか、ロキは微笑すら浮かべている。

「未だ研究段階故にオーデインにも秘していたが、結果的に好都合だったようだ。……

量産体制の確立まで二か月もかからぬ。この力があれば、我らアースガルズのみでムー
トロンと渡り合う事もできるというもの」

そううそぶくロキは、しかしオーディンの周りにいる井草達を見て、ため息をついた。
「……赤い髪の悪魔は、現魔王の血筋のグレモリーか。墮天使幹部も二人。さらに噂の
聖魔剣とデュランダル。とどめにイーツと赤龍帝。ただの護衛にしては嚴重というか
豪華というか」

「実際にお前のような馬鹿が来たんじや。むしろ足りぬぐらいじやろうて」

ロキにそう言い返すオーディンだが、流石にその表情は険しい。

それほどまでに、ロキの隠し玉は強大だった。場合によっては、ロキだけで井草達全
員を相手にして渡り合えるほどに。

しかし、ロキの警戒心はその余裕を上回っていた。

「なら、こちらも本命を呼ぶとしよう。――来い、我が息子よ！」

一瞬の後、空間が歪む。

そこから現れたのは、体長が十メートルを超える巨大な狼だった。

そして、そのオーラは今の状態のロキと同格。それだけで、その脅威の度合いが知れ
るという物。

戦慄する者達に愉快気な表情を向けながら、ロキは告げる。

「これぞ、
私の切り札。
――神喰^{フエ}狼^{ンリ}である」

9 話

フエンリル
神喰狼。それは、アースガルズに属する者たちの中でも最強と称される魔獣。

悪神ロキの生み出した魔獣の中でも最強。其の力は、ギリシヤの魔獣達の王、テュポーンと並び称される。

その名を聞き、その存在を認識した皆が戦慄する。

そして、アザゼルは状況を把握しきれないイツセーにすぐに声を張り上げる。

「イツセー、そいつに近づくな!! そいつの牙は神すら食い殺す! おまえの鎧もひとたまりもねえぞ!!」

「嘘でしょお!?!」

驚愕するイツセーだが、しかしロキはフエンリルをなでながら肯定するかのようになつていた。

「その通りだ。全盛期の二天龍とすら渡り合える、我の自慢の息子でな。試したことはないが、どの神話体系の神にすら届くだろう」

そして、その視線は井草たちを値踏みするかのように見渡してくる。

「本来北歐のもの以外に我が子の牙を使いたくないのだが……まあ、これもまたいい経験か」

そんな不吉さが満点の言葉と共に、視線が止まる。

その先にいたのは、リアス・グレモリーだ。

「まずは魔王の血筋からだな。―やれ」

―ウオオオオオオオオオオオン!!

ロキに応えるかのように、フェンリルの遠吠えがこだまする。

その鳴き声に、皆が一瞬だけが恐怖に震えた。

そして、フェンリルが駆け出すにはその一瞬で十分だった。

全員の反応が遅れる。否、全員の反応速度を超える速さで、フェンリルが駆ける。

リアス・グレモリーは反応できない。非常に優秀な存在とは言え、今のリアスは期待の若手上級悪魔ではない。天龍クラスと渡り合うには、何もかもが足りなさすぎる。

だが、天龍なら届く。

「俺の部長に触れるんじやねえええええ!!」

イツセーの条件反射じみた拳が、フェンリルに突き刺さる。

フェンリルは素早く回転しながら宙で止まるも、攻撃を回避できなかつたことにわずかに驚きの感情を見せていた。

「部長、大丈夫ですか!？」

「え、ええ。大丈夫、イツセーのおかげよ」

その返答にイツセーはほっとし―

「あれ？」

しかし、視界が歪んで倒れこんだ。

見れば、腹部から血が勢いよく流れている。

そして、フェンリルの前足の爪には血が滴っていた。

あの一瞬のカウンターに、フェンリルはさらにカウンターを合わせてきた。

その事実には皆が戦慄し、しかしその結果にロキは不満げだ。

「一瞬とはいえ我が子の動きに追いつくか。赤龍帝、予想以上に難物だな」

「イツセーさん!!」

そのつぶやきを聞かず、アーシアがすぐに駆け寄った回復を仕掛ける。

だが、その動きにロキは不満げな表情を見せた。

「させん。さすがに不確定要素なのでな、ここで始末させてもらう」

「させるかああああ!!」

ロキがフェンリルに指示を出させるより早く、アザエルとバラキエルが攻撃を叩き込む。

だが、ロキはそれを魔方阵で容易に受け止めた。

「北欧の術か！ くそ、俺らのところより発達してやがるな、オイ!!」

舌打ちするアザゼルをよそに、今度はロスヴァイセが動いた。

「なら、同じ術式で!」

魔方阵が展開され、そしていくつもの魔法攻撃が放たれる。

だがしかし、その攻撃は横合いから放たれた魔法によつて相殺される。

「……させません」

魔方阵を展開したカルネテルが、無表情にそうつぶやく。

しかし、その言葉を紡ぐ隙をついて、井草が駆け出した。

極めて高い敏捷性を持つフェンリルより、それに指示をだすロキを狙う方がまだ攻撃が当たる。

そう判断した井草が、再び攻撃を叩き込もうとして――

「……させないよ」

『フェンリスヴォルフ』

その言葉と共に、フェンリルを人型にしたようなイーツが割って入る。

爪をもつてしてアスカロンを防ぎ、空いた腕で井草の腹部に一撃を叩き込むは、ロキと並んでいたアスクと呼ばれた青年。

その動きは非常に早く、井草はロキに集中しすぎて対応しきれなかった。

「ぐ……っ！ こいつもイーツ……！」

「カルネテル、やってくれ」

其のまま井草を蹴り飛ばし、アスクはカルネテルに声をかける。

返答は、井草に対する砲撃だった。

そして、それと同時にフェンリルもまた踏み込みを掛ける。

狙いはイツセー。そして、イツセーをかばう小猫とゼノヴィア。

ロキとフェンリル。二つの窮地は確かに脅威であり、対抗できるものなど、一人もこの場にはおらず――

「……敵影確認」

「悪いが、彼は俺の得物なんだ」

「そして、彼は私と戦わなきゃいけないのよ」

新たに表れることはあつた。

『H a r f D i m e n s i o n
』

『ハストウール』

フエンリルの空間が歪み、そしてフエンリルの動きを封じる。

対気流の流れが攻撃となって襲い掛かり、カルネテルをけん制する。

双方ともに一瞬で対応し、戦闘態勢をとる。

それを真つ向から見返しながら、白い龍と黄色い外套が、それぞれ助けた者に挨拶を掛ける。

「久しいな、兵藤一誠」

「シャンとしなさい、井草」

「ヴァーリ!？」

「……五十鈴?」

驚愕するイツセーと、ぽかんとする井草。

五十鈴は井草を見ると、呆れたかのように肩をすくめる。

「あんな紛い物のレベル2擬きに負けないでよね。貴方は、私という邪悪と相対する正

義の味方なんだから。私を殺す前に他のやつに殺されるとか、ないわ」

そういうなり、五十鈴はロキに視線を向けると、親指を立てて下に向けた。

ぶち殺すぞ、コラ。と態度で見事に示してのけたのだ。

「人の宿敵に手を出さないでくれる？ ……殺すわよ？」

「ふっ。出戻りの敗残者に媚びる女が。貴様ごときでに何ができるといー」

そう告げかけたロキの周りで、紫電が飛び散る。

そして、一瞬で莫大な雷撃がロキを埋め尽くした。

その出力、まさに最上級悪魔クラス。その上、その範囲は広大で、周囲のアスクとカ
ルネテルも巻き込んで動きを封じ、フェンリルにすら届いた。

一瞬で発生したその大規模広範囲攻撃に、その場にいた一同が目を見開く。

「……五十鈴、何をしたの？」

代表して井草が訪ねると、五十鈴はふふんと得意げな態度を示した。

「大したことはしてないわよ。気流操作の応用で、アイツの周りを積乱雲と同じ環境に
しただけ」

ふふんと、得意げなのが妙にかわいらしく、井草はぶつちやけて言うのと、萌えた。

俺の幼馴染は得意げなんだ！

などとガッツポーズをしたくなった。

「因みに、大気を圧縮して個体にまで相転移させて武器にすることもできるわ。もちろん気体に急激に戻して、爆弾の代わりにすることもできるの。どう、すごいでしょ?」
そして情報をしゃべりすぎである。

もはや意図的に自分の情報を垂れ流しにしているとしか思えないほどだ。

あれ? 五十鈴ってこんなポンコツだったっけ?

思わず首をひねってしまふ井草である。

「……ちなみに聞くが、行仁伊予の能力は何なんだ?」

「伊予はシンプルね。灼熱のエネルギーを運用するだけ。あの子の場合は両手からの砲撃や両手に纏っての打撃が中心……っっていうか、それで十分最上級悪魔とも戦えるから、他に手札が要らないシンプルに強いタイプね。私とは対照的だわ」

ゼノヴィアの質問にもあっさりと答えてくれた。

なんとというか、沈黙が響く。ヴァーリですら沈黙している。

お前、何考えてるの?

そんな視線に気づいたのか、五十鈴はあたりを見渡すと胸を張った。

「こう言うの、邪悪っぽいじゃない」

形から入るタイプだったらしい。残念である。

「おいおい、おっぱいドラゴンは致命傷かよ!? 強いのか弱いのかわからねえ……っつて、

そして、駒王学園の校庭にいったん降り立った馬車の近くで、井草たちはにらみ合いとなっていた。

イツセーは失血多量で失神している。さすがにこれは仕方がない。

今はアーシアと小猫が治療中だ。失った血液は戻せないが、傷の治療と気の流れの調整で持ち直せるだろうと判断されている。

そして、禍の団のメンバーもまた、微妙な距離感だった。

「あらあら。一人だけ派遣だなんて、ムートロンも貧乏くさいわねえ」

黒歌が、自分達ヴァーリチームとは少し離れたところにいる五十鈴に、厭味つたらしい視線を向ける。

五十鈴はハストウールイツを崩さずに、同時に態度も崩さずに肩をすくめた。

「うるさいわよ、駄猫。そっちこそ、すり寄ってきてる大魔王派の連中は連れてきてないのかしら？」

「必要ありません、我らのリーダーはこれ以上の責務を負う気はありませんので」

「そもそも何も背負ってないくせによく言うわね」

アーサーの言葉に、五十鈴はそう皮肉を返す。

明かに、ヴァーリチームと五十鈴たちは仲が悪い。それも当然といえば当然だろう。

ヴァーリチームは元より自由人で社会不適合者寸前の集団だ。国家クラスの軍事組織、すなわち縦社会が基本のムートロンとはそりが合わないのだろう。

五十鈴もそれはわかっているのか、すぐに興味を失ったのかヴァーリチームから視線を逸らす。

「……まあいいわ、悪党のふるまい方もできない三流なんかと口げんかする気もないわね」

「悪党として一流って、正直どうよ？」

「チンピラの不良よりはマシよ」

美候の反論を切つて捨て、五十鈴は一步前にでる。

「……邪悪らしく恥も外聞もなく言うけど、そつちはムートロンウや英雄派の襲撃でててこ舞いで、増援がこれそうにないでしょう？」

その言葉に、アザゼルは肩をすくめる。

「まあな。上からも「ロキは基本そつちで何とかしてくれ」とお達しが来たよ」
ため息交じりのアザゼルのボヤキに、ヴァーリは不敵にほほ笑む。

「オーデインの会談を成功させるには、ロキを撃退しなければならぬ。しかしアザ

ゼルたちだけでは勝ち目がないのも事実だ」

そういったヴァーリは、視線を馬車の方に向ける。

それにつられれば、イツセーがアーシアと小猫に支えられながら、馬車から降りてきていた。

「イツセー！ 傷は大丈夫？」

「ええ、大丈夫です部長、それよりー」

リアスを安心させるために微笑みながら、イツセーはヴァーリに顔を向ける。

「偉そうに言ってくれるけどよ、お前がフェンリルを倒してくれるっていうのか？」

そして、警戒心を隠さずにそう聞いた。

当然だろう。戦力を送ることができないのは、ヴァーリや五十鈴が所属する禍の団カオス・ブリゲイトのせいなのだ。苛立ちもする。

しかし、ヴァーリは意にも介さずに苦笑するだけだ。

「いや、さすがいまの俺でもフェンリルとロキを同時に相手取るのは不可能だ。こと、ロキは疑似的にイツツ化までしているしな」

「偉そうに言つといてお前もそのザマかよ」

流石に切れそうになるイツセーだが、しかしヴァーリの言葉は続いた。

「だが、二天龍が手を組めば話は別だ」

その発言に、イツセー達は息をのむ。

そしてヴァーリが続けようとしたとき、五十鈴が一步前に出た。

「……アザゼル総督、主神オーティン殿。今回の件について、ホテツプ艦隊司令より言付かっているわ」

ヴァーリをさえぎって五十鈴は――

「我々ムートロン先遣艦隊及び大魔王派、そしてそのヴァーリチームは、ロキ一派の殲滅のために、三大勢力との共闘を行いたいとのことよ」

10話

ロキ襲撃の翌日。オカルト研究部はシトリー眷属を加えて、兵藤邸の地下にある、大広間に集まっていた。

そして、そこには共闘を申し出たヴァーリチームと、ムートロンから派遣された五十鈴もいる。

ヴァーリチームは普段通りの様子だが、五十鈴は戦闘になる事を考慮しては、ハストゥールイーツの状態で参加していた。それが緊張感を生み、井草達は臨戦態勢をとる。

流星に現場の判断で即断できる事でもなく、その日はいったん保留となった。

そして、その答えを聞きにヴァーリチームと五十鈴が兵藤邸に招かれたというわけだ。

「まず一つ聞けぞ？俺達と共闘する理由は、一体なんだ？」

「純粹に神と戦いたいだけだ。美猴達も付き合うと了承してくれている。是では不服か、アザゼル？」

睨み付けるようにして放たれるアザゼルの詰問に、ヴァーリはそうさりと答える。

だが、それに対して五十鈴が肩をすくめた。

「嘘つきなさい。白龍皇アルビオンの力と支配エクスカリバールの聖剣でフェンリルを我が物にするのが目的でしょうに。うちの内部監察班が突き止めてる……っていうか、食堂でする会話じゃない

わよ？ 馬鹿なの？」

その言葉に、井草達は警戒心を強くする。

神と敵対する禍の団。その禍の団に、神殺しの力を持つ魔獣が渡る。

どう考えても警戒する他ない。

そして、ヴァーリチームの怒気が籠った睨み付けが、五十鈴に集中する。

「……英雄派にしろムートロン君たちにしろ、こちらの都合を考慮してほしいな」

「アンタ馬鹿？ こつちが下出に出ないといけない状況で、目的も話さないとか考えられない。しかもアンタ、神の子を見張る物の裏切り者でしょ？ 恥の概念とかないわけ？」

苛立ちを露わにするヴァーリに、鼻で笑う五十鈴。

むしろこの場で禍の団による内乱が勃発しそうな雰囲気であった。

「……英雄派やムートロンとお前らが、反りが合うわけないか」

「当然だ。英雄派とは不干涉という事で落ち着いている。ムートロンの連中とも関与し

たかないのだが、たまたま出くわしてな。いい迷惑だ」

「こつちのセリフよヤンキーども。組織に属してるなら、最低限のルールぐらい守りなさい。報告連絡相談は基本でしょうが」

お互いに殺意すら向ける状態に、アザゼルは本気でため息を吐いた。

そして、それに対して想うところがあつたのか、五十鈴は持つてきたトランクケースを取り出す。

「アザゼル総督。ムートロンも大魔王派も、この恥知らずとは違います。敵対勢力に共闘を申し込んだ以上、それ相応の対価を持つてきました」

「……待った。改めさせてもらうよ」

井草はそれに割って入って、トランクケースをひったくる。

そして、ヴァーリチームの近くまで移動してトランクケースを開けようとする。

「……何故、私達の前で？」

「罨だつたら困るからだよ」

アーサーの言葉に、井草はこともなげに答えた。

完全に、巻き込んでも問題ないと思ってるからこそその対応だつた。

「裏切り者の舎弟なんかには遠慮する必要ないし。共闘したいならぜひ盾になつてくれな
い？」

「そうね、本当に爆弾でも仕込むべきだったかしらね」

脊髄反射レベルで井草に乗っかる五十鈴に、美猴は心底嫌そうな顔になる。

「お前ら、息ぴったりだなオイ」

「幼馴染だし」

完全にハモって返答されては、美猴も苦笑いするしかない。

そして、空けられたトランクケースの自身は、高品質のオリハルコンだった。

あまりの質の良さに、価値を知るアザゼルとリアスが瞠目する。

それを見て、五十鈴はさらりと言いつつ切った。

「精鋭用のムートシリーズはオリハルコンが必須らしいから。既にムートロンは、神の御業すら再現できると思っただ方がいいわよ？」

「世界全てを敵に回して、勝率九割以上を断言するだけの事はありますね」

ソーナが苦苦し気に漏らすなか、アザゼルは頷いた。

「共闘の代金は確かにもらった。だが、そっちの目的が知りたい」

「……上からは「スパイが掴んだロキの研究が流星に看過困難なので、三つ巴の予定を中止して共闘する」って言われてるわ。それともう一つ」

五十鈴は指を立てながら、ため息をついた。

「井草とそっちのニング・プルガトリオが気になるらしいわよ？ そのデータを取って

来いって話よ」

「……私なのですか？」

思わぬ展開に、名指しされたニングは自分を指さしてぽかんとする。

想定外の展開に、一同は目を見はる。ヴァーリチームも聞かされてなかったのか、興味深そうな視線をニングに向けてきた。

五十鈴もそれは想定内だったようだが、しかし首を横に振る。

「悪いけど、私は小間使いだから理由は知らないわ。あと、データ取りのセンサーは埋め込まれてるから、もう終わってると見ていいわ」

そう言いながら、手のひらを上にして肩をすくめる。

それに対して、井草は苦笑した。

「ペラペラしゃべりすぎだよ。口封じされそうだけど？」

「それも下っ端の邪悪らしくていいわね。でも、あなたと決着つける方が好みだわ」

その口ぶりに、井草は苦笑する。

「で、どうします、先生」

井草に聞かれ、アザゼルは頭を悩ませながらも領いた。

「……戦力が必須なのは確かで、一応交渉の態度を取ったムートロン側は弾除け程度にはなるだろう。ヴァーリに関しては、サーゼクス達は旧魔王末裔のコイツを無下にする

事はできないとよ。断つたら断つたで三つ巴になるだけだろうしな」

「分かつてるわね。上はそのつもりよ」

「俺達もだ。まとめて相手をするのも面白そうだ」

さらりとアザゼルの指摘を肯定した五十鈴とヴァーリに、周囲の警戒度は更に上がる。

しかし、アザゼルは肩をすくめると仕方なさげに笑つて見せた。

「甘い判断ではあるが、野放しにするよりは協力してもらつた方が賢明だろうしな」

「現場としては納得しきれないけどね」

リアスは不満を露わにする。それは、この場にいる三大勢力の関係者の意見そのものと言つてもいい。

だが、トップである魔王が良しとしているのなら、悪魔側は良しとするしかない。少数派のイリナ達天界側も反論の意味はないだろう。

「いざとなれば、俺が後ろから刺すから大丈夫さ」

「そう簡単にやられないさ」

井草の反目の指摘に、ヴァーリはそうこともなげに返した。

そして、本題ともいえるロキとの戦いの会議となった。

「で、だ。ロキ対策にドラゴン関係者は後で別の部屋に集まってもらおう」

「え、何ですか？」

イツセーが首を捻るが、それに応えたのは五十鈴だった。

「ロキが生み出したのはフェンリルだけじゃないのよ。そのうちの一角、五大龍王の一臂である『終末の大龍』スリーピング・ドラゴンのミドガルズオルムと接触するんでしょね」

その説明にイツセーは思わず頭を下げ、しかしすぐに飛び跳ねるように頭を上げると、五十鈴を睨み付ける。

「つて、なに仲間みたいな態度をしてるんだよ！」

「一応共闘するんでしょ。割り込んだ身として説明ぐらい請け負うわよ」

そう返す五十鈴だが、しかしイツセーは睨み付けるのをやめない。

「……あんなだけ井草さんを痛めつけたくせに、よくもまあぬけぬけと……っ」

「イツセー、ストツプ」

食って掛かるイツセーを止めたのは、井草だった。

それに対して、ヴァーリチームすら含めた全員が程度はともかく驚いて見せた。

何より、五十鈴に至っては変身が解けてしまうほどに驚いていた。

「……井草？ あんた、何考えてるのよ……おおつと！」

『ハストウール』

とつさに再変身するが、しかしそれを妨害するものは何処にもいない。

それぐらいには、井草の対応は想定外だった。

特にイツセーヤリアスに小猫。リムとニングは唾然としている。

それほどまでに、五十鈴が井草に対してとった態度は辛辣なものだった。

だが、逆に井草はその対応に戸惑っていた。

「……あれ？ どういうことかな？」

「ちよ、井草大丈夫!？」

なんとというか、五十鈴が一番心配していた。

額に手を当てると熱を確認。その跡脈拍数を確認。ついでに顔色や瞳孔の様子まで確認し始める。

「ちよつと！ あんたは邪悪である私と殺し合うのよ!? 体調管理をミスってその前に死ぬとかやめてよね!?! ……アザゼル総督にリアス・グレモリー！ あんたら井草の体調ぐらい管理しなさいよ!!」

「んなこと言われても困るわ!! 俺達も想定外だよ!!」

「そうよ！ 第一あなたがそれを言わないでくれるかしら!?!」

喧嘩腰になり始める三人だが、そこに井草が割って入った。

「はいはい！ 落ち着いて三人とも！ 共闘するんでしょ?」

「誰の所為よ（だ）!!」

三人がかりで井草は怒られた。

井草は「解せぬ」という三文字を顔全体で表現しながら、何を言ってるんだこいつらはという顔をした。

「いや、上から目線な上に要請だけしているヴァーリチームと違って、五十鈴はきちんとして対価を持つてきてるし？　なんだかんだで律儀で、なんか懐かしくなったし」

そういうと、井草は笑みすら浮かべて見せる。

それに対して、アザゼルと五十鈴は顔を見合わせて沈黙した。

「……調子狂うわ。帰っていいかしら？」

「ああ、とりあえず連絡先だけ用意しろ。合流タイミングがつかめねえ」

「あ、それなら使い捨てのスマホをもらってるから、それでお願い」

「へ？　は??　え???!」

訳が分からないといった表情をしている井草を置いて、五十鈴は肩をすくめながら大広間から転じていった。

そして五十鈴が転移してから、アーサーは静かに眼鏡を直す。

「……相当の因縁があると聞きましたが、平然としてますね」

アーサーの意見は全員の総意だった。

だが、井草はきよんととして首を捻るだけだ。

頭大丈夫か、こいつ？

そんな疑問が全員の共通認識になる中、井草はぽんと手を打った。

「……ああ、そういうことか」

漸く気付いたと苦笑しながら、井草は懐かしむように額に手をやる。

そこに触れた五十鈴の体温を思い出しているのか、井草は穏やかな笑みを浮かべていた。

「昔いっものの五十鈴の雰囲気だったからね。なんだが、ほつとしちやつてたよ」

……その言葉に、皆は何も言う事ができなかつた。

11話

そして、アザゼルとバラキエルは準備のために大広間から出ていく。

準備が終わればミドガルズオルムと交渉するので、ヴァーリチームには残ってもらわないと困る。なので、どうしてもここで待機してもらおうことになる。

微妙にグレモリー眷属は緊張感が漂う。

しかし、そこで美候が手を上げた。

「赤龍帝！」

「な、なんだよ？」

警戒心をだすイツセーだが、しかし美候はフレンドリーにこやかだった。

「この下にある屋内プールを使っているかい？」

……こけた人が出てきたのは、何も悪くない。

禍の団にとって、兵藤邸は基本的に敵地である。さらにシトリー眷属までいる状況下で、ある意味警戒態勢である。とどめに「共闘しろ。しなければ両方と戦う」などという我儘極まりない発言まで言ってきた。その上、その理由は「神殺しのフェンリル

を取り込みたい」であり、しかも隠していた。

五十鈴を派遣したムートロンが理由を素直に話し、先払いで代金迄支払ったこともあつて、図々しいとしか言いようがなかった。

当然のことだが怒りを見せる者もいる。

リアスがその筆頭だ。ずいっと迫ると美候をにらみつける。

「ちよつと！　ここは私と兵藤一誠の家よ!?　勝手なふるまいはしないで頂戴」

「リアスちゃん、改装費用出したとはいえ、ここは「兵藤」邸だからね？」

サラリと放たれた自分の物宣言に、井草は一応ツツコミを入れた。

が、勿論リアスは聞いてない。

美候も聞いておらずへらへらと笑っていた。

「硬いこと言うなよ、スイツチ姫——」

その瞬間、魔力を全力で込めたリアスの一撃が、美候に頭に直撃する。

相当ダメージが入ったのか、美候は涙目にすらなっていた。

「いってえええええ!!　なにすんでい、スイツチ姫!!」

文句ももちろん言ってくるが、リアスはリアスで涙目である。

「あなたね！　あなたのせいで、私はもう冥界をまともに歩けないのよ!!」

スイツチ姫と呼ばれる羽目になって、リアスは本気で苦悩していた。冥界を出歩きた

くないぐらいにはトラウマである。

そして、スイツチ姫の名は、美候が言い出したことである。アザゼルがスタッフに提案したのが原因だが、事の発端は美候である。

そういう意味ではリアスの怒りをもっともだった。

が、美候はまたしてもどこ吹く風で、どこか誇らしげだった。

「いいことじゃねえか、俺たちもおっぱいドラゴンは見てるけどよ、自分のつけたネーミングが採用されて光栄だぜい？」

「……………この猿……………」

一触即発の空気になり、さすがに井草は介入しようかと考えた。

というか、周りのメンバーは何とか和気あいあいとなっている。

イリナはアーサーと聖剣談議に花を咲かせているし、アジアはヴァーリにお礼を言いにいった。黒歌は小猫と姉妹喧嘩をしている。

此処は井草が行くしかない。

「その猿。デリカシーって言葉を学んでから出直してきな」

当然リアスの味方である。

正直、リアスには同情していた。加えて美候は敵である。どっちに味方するなど考えるまでもない。

そして井草は墮天使の翼を広げて牽制しながら、白い目を美候に向ける。

「そもそも、図々しいにもほどがある。敵の拠点の遊興施設を使いたがるとか、馬鹿なの？」

「そこまで言わなくてもいいじゃねえかよ。興味があるだけだつて」

美候はそう返すが、井草は頭痛を感じて額に手を当てる。

目の前の男とはそりが合いそうにない。

ヴァーリにもそう思っていたが、この男もだ。気があうどころかチームメンバーになっただけのことはあるようだ。

「いい加減にしないと、君の首を共闘の代金にするよ？ 五十鈴も言ってたけど、恥の概念を持ったらどうだい？」

軽蔑の視線すら向ける井草に、美候はさすがにイラだったのが軽くにらみを利かせる。

「どうやら、五十鈴の件を持ち出されたのがイラついたようだ。」

「おいおい。あんな女にまだ気があるのかよ？」

「少なくとも君たちよりはね」

嫌味に対して即答する。

ヴァーリチームは五十鈴たちを自分たちより下に見ているようだが、井草はそうは思

わなない。

それに関して嘘偽りはない。そして、それは感情に任せただ者でもなかった。

「邪悪であることを自覚して、それでも礼節をわきまえた五十鈴が、下衆野郎の自覚もないチンピラより下だった？ 寝言は寝て言ってくれ」

心の底から本心だった。

自由というのは権利と責任を負って、枠の中で行使されるものである。

少なくとも、自分の欲求に従って法のくびきから抜け出たヴァーリチームのそれは、井草の中では勝手というものだった。

邪悪という勝手であるという自覚がある、今の五十鈴の方がまだ許容できる。それが井草の心からの本心だった。

「禍の団に同情するよ。君達みたいなの首根っこを捕まえられないとか、苦勞してるだろうに」

「い、この野郎……っ。そこまで言うか？」

辛辣極まりない物言いに、美候は怒りを通り越してわずかに引いている。

どうやら自覚が本当になかったらしい。井草は、本心からコレより下に見られた五十鈴に同情した。

「言われたくないなら自粛したら？」

言つとくけど、

ホモサピエンス

人間君は学問的に類人猿より上位

の種族だよ？」

「コイツまじでむかつく！ 本気でぶちのめすぞ!」

すさまじい勢いでデイスられて、美候はついに涙目にすらなつた。

「井草、さすがにちよつと言いきすぎじゃない？」

リアスにまでドン引きされた。心底解せぬ。

そんなこんなでミドガルズオルムとの通信がつながり、ヴァーリチームは帰つていった。

その日の夜、井草は珍しく酒を飲みに出る。

ヴァーリチームとの共闘は、さすがにストレスをため込んでしまう。何かで発散しないとどこかでミスをしでかしそうだった。

とはいえ、金の無駄遣いはしない。安い立ち飲み酒場で一杯ひっかけるだけである。

学生が酒場に行くのはあれかもしれないが、しかし井草は成人しているので問題ない。私服に着替えてもいる。

そんなこんなで立ち飲み酒場に来てみれば、割と混んでいた。

それでも空いている場所を探すと、隅の方に一人分空いているのを見つける。

隣には女性がいるが、まあいいだろう。井草としてはリムとニングの件でもいいっばい

いっばい。とどめに伊予と五十鈴のこともある。気にする余裕はかけらもない。

「あ、そこ使つてもいいですか？」

「あ、どうぞどうぞで」

と女性は顔を見ずにそう返すので、井草もあえて顔を見ずに注文をする。

そして、酒とつまみが来たところで手をのばし――

「あ」

その手が、その女性とぶつかった。

「すいません」

と、謝りながら顔を向ける。

「……あ」

――五十鈴だった。

「井草？ あんた何してんの？」

「ヴァーリチームにイラついたから、ストレスを酒で溶かしに」

その言葉に、五十鈴はしずかにうなづいた。

完全に納得したらしい。

「確かに、真面目になったあんたからすると、自由人のあいづらは反りが合わないわよね」

「五十鈴はもとからあいそうにないよね。ぶつちやけ、貧乏くじ引いた気分でしょ？」
お互いに同情するが、しかしそんな関係でもなかったはずだ。

井草と五十鈴は敵同士。それも、五十鈴は自らを邪悪と称している。
だが、どちらも戦闘態勢を取ろうとはしない。

今は共闘を約束した立場だ。その事実が、2人を心理的に落ち着かせていた。

「伊予は、元氣？」

井草は、気になっていることを聞くことにする。

五十鈴もまた、それを隠したりはしなかった。

「元氣ではいるわね」

内容については、深入りしない。

少なくとも人前で話すようなことではないのだろう。態度がそれを証明している。

それでも、伊予は元氣で楽しくやっているらしい。

「五十鈴は、今の暮らしは楽しいのかい？」

「少なくとも、邪悪でいる分には都合がいいわね」

そつけないが、しかし答えてくれた。

無視することも突き放すこともない。そういうところは変わってないと、これまた安心してしまう。

そして沈黙しながら酒とつまみを消化していると、今度は五十鈴が視線を向けてきた。

「そつちはどうなの？　なんか、私をにらんでた女がいるけど」

リムとニングのことだろうか？　あの時は気づかなかつたが、警戒していたらしい。

まあ、当然といえば当然だろう。

五十鈴はムートロンの準幹部である。必然的に敵であり、警戒しない方がどうかしている。

普通のことだと思ったのだが、五十鈴の感想は違うらしい。

「あの小柄な二人、あんたのことを心配してるみたいね。……墮天使らしくハーレムでもする気？」

からかいの感情がこもってないその質問に、井草はため息をついた。

そうなる可能性は確かにある。だが、いい加減な気持ちでそうするつもりはない。

「五十鈴？　ハーレムってのは器量体力財源の三つが必要で、それに重いものだよ？」

「それなら大丈夫でしょうに」

即座にそう断じられる。

なんでそんなことを言えるのかと思うが、五十鈴はあきれ果てたかのように半目を向ける。

おまえは自分のことを理解していないのか。そう口ではなく目でものを言っていた。「今のアンタなら大丈夫でしょ？ わたしと伊予よりいい女じゃない。私達過去にこだわるよりあの子たち《未来》に目を向けたら？」

酒に酔っているのか、五十鈴はそんな気づかわし気な言葉すら言つてのけた。

それに苦笑して、井草はしかし首を振る。

無論、リムカニングと付き合う可能性はあるだろう。墮天使としての特権をもつてして、ハーレムを作ることもあり得る。三大勢力和平のあかしとしてもはやされそうでもある。

だが、井草が否定したのはそういうことではない。其れとはまったく違うことを否定したのだ。

それは、伊予通と五十鈴去を気にするなという、その一点だった。

「今迄の過去があるからこそ、今の俺があるんだ。それをないがしろにして未来をつかもうなんて、虫がが良すぎるよ」

「……」

その意見に、五十鈴は沈黙を返す。

それを理解してなお、井草は言い切った。

「決着はつけるさ。その決意を捨てて2人に逃げるのは、リムとニングだけじゃなく伊予と五十鈴にも失礼だ」

その言葉に、五十鈴は目を伏せる。

何を考えているのかはわからない。だが、真剣に何かを想っているのだけはわかって
いた。

しかし、それを言葉にすることはなかった。

「店長さん、お勘定」

そういうと、五十鈴は手早く井草の伝票までとると、まとめて払う。

そして荷物をまとめて、井草に背を向けた。

「大事なものを間違えるんじゃないわよ。私は邪悪であなたは正義。そのことを忘れな
いでくれないと、こっちが困るわ」

そう言つて、五十鈴は店から立ち去る。

その背中を見送つて、井草は静かに思う。

―間違えていないさ。俺は、今でも二人が大切なんだ。

それを聞いたら、イツセーにすら苦言を呈されるだろう。それぐらいには、五十鈴は

邪悪となっている。

だが、それでも、だとしても。

あの頃の思い出は輝いている。それを否定してしまつては、何か大切なものを失つてしまう。

だから、井草は一抹の寂しさを感じて酒を勢いよくあおつた。

その目の前に、焼き鳥の乗つた皿と酎ハイのグラスが置かれる。

「……頼んでないよ?」

「奢りだよ。振られたやけ酒ぐらい許してやるさ」

その店主の気遣いに、井草は苦笑するしかなかった。

1 2 話

そして、作戦会議の日が来る。

五十鈴はいない。作戦の概要だけ連絡すれば、こちらで合わせるとだけ返してきたらしい。

数日前の立ち飲み酒場での一件を気にしているのだろうか。それが原因でロキに後れを取らなければいいのだが。

井草はそう責任を感じるが、しかし言葉にはしない。

今はただ、作戦を頭に叩き込むことだけに集中するべきだと判断した。

「とりあえず切り札は手に入った。ミヨルニルのレプリカはマジであった」

と、アザゼルは不機嫌な表情で告げる。

なんでも、ミドガルズオルムの話でオーデインがミヨルニルのレプリカを隠しているとの話を聞きだしたらしい。

この状況下で切り札になるものを隠されていては、アザゼルとしてもいら立つのだろう。こと今回は北欧神話側の問題なので、当然といえば当然だ。

そしてアザゼルはイツセーを手招きする

「とりあえず、これはお前が使つとけ」

「オーデイン様は、このミヨルニルのレプリカを赤龍帝さんにお貸しするそうです。どうぞで」

ロスヴァイセがミヨルニルを差し出し、イツセーはとりあえずそれを受け取る。

そして軽くぶんぶんと振り回してみる。

「そうじゃねえ。オーラを流し込んでみる」

と、アザゼルのアドバイスに従ってイツセーはオーラを流し込む。

が、流し込みすぎた。

「うわ!？」

一気に巨大になったミヨルニルは、それに見合うどころの騒ぎではない重量にもなつたらしい。

イツセーが支えきれずに地面におとす。

それを持ち上げようとイツセーは力を込めなおすが、うんともすんとも言わなかった。

「あの、先生? これ使えないんじゃない?」

井草が心配になって聞いてみるが、アザゼルは想定内だったのか平然としている。

「ま、禁手になれば使えるだろうさ。ただし、むやみに使うと主神クラスの雷撃でこの辺吹っ飛ばから気を付けろよ?」

「ま、マジですか……」

とんでもない威力にイツセーは退くが、しかしこれに譲渡をくわえれば、ロキにも届くかもしれない。

多くの者たちがこの切り札に期待を寄せるが、しかしアザゼルは楽観視をしていないようだった。

「ただし、ロキはトールの力を使つてやがったことを忘れるな。下手すりゃ、アイツもミヨルニルのレプリカを用意してる可能性がある」

「まじですか!?!」

イツセーが狼狽するのも無理はない。

疑似エボリューションエキスでパワーアップしたロキは、フェンリルに並ぶ化け物と化している。例えていうのなら、剛力のロキに神速のフェンリルといったところか。

そのロキがミヨルニル迄使えるのなら、鬼に金棒以外の何物でもない。

そして、状況が悪いのはそれだけではない。

「それから増援のあてが付いた。……大王派が戦力を提供してくれるそうだ。これでムートロンやそっちのヴァーリ共が土壇場で裏切っても、三つ巴の上で勝算ができた

な」

「それは面白い。手の平を反すのも面白いかもな」

アザゼルの皮肉にヴァーリは挑発的な言動を返す。

とは言え、今のところ本気ではないようだ。冗談めかして言っているので……大丈夫だと井草は思いたかった。

「まあいい。それじゃあ作戦を説明するぞ」

と、アザゼルがホワイトボードを出しながら、作戦を説明する。

増援として派遣されてくるのは、タンニーンと大王派の戦力。彼らと合流したうえで、先ずロキの出現を待つ。

シトリー眷属は転移陣の形成を担当。戦闘はオカルト研究部とヴァーリチーム。そしてロスヴァイセと増援が行う。

転移する場所は採石場跡地。そこにムートロンたちが先行して包囲し、攻撃を叩き込むのが前提である。

指揮官はバラキエルが務める。アザゼルは万が一のためのオーデインの護衛と、会談の進行役などがあるため、今回の作戦にはサポートでしかない。

「ロキ戦のオフエンスは、ミョルニルを持ったイツセーと、サポートとしてヴァーリ。フェンリルはグレイプニルで捕縛し、オフエンスの援護をグレモリー眷属とヴァーリ

チームで行う」

しかし、それだけではいかなるのが実情だ。

ロキは幾人もの戦士たちをシンパとして連れて生きている。しかも、疑似エボリユーシヨンエキスでイーツ化した戦士たちをだ。

「イーツ共の相手はイーツがするべきだ。ムートロンと大魔王派はそっちの相手。そして――」

そして、アザゼルの視線は井草にむけられる。

「お前もそっちだ、井草。……今後に備えて、お前はイーツを一人でも多くぶちのめして糧にしろ」

「はー！」

井草はしつかりと返事をする。

疑似エボリユーシヨンエキスの方まで取り込めるかはわからないが、しかし取り込めるのなら取り込めるべきだ。

どうせ彼らの相手もしなければならぬのだから、その担当はその結果得をする者かするべきである。

「ニングとリムはその援護だ。……五十鈴のやつが井草に何かして来たら、俺が許すからぶちのめせ」

「了解できさあ」

「ハイなのです」

その、気にしすぎぶりの三人のやり取りに、井草は軽く苦笑する。
とはいえ、気持ちはあるがたい。

そして、増援のあてもできたことで勝機は見えた。

後は、強敵を打ち倒すのみである。

作戦決行は数日後。北欧神話と日本神話の会談当日。

今後の世界の趨勢にすらかかわる、大きな作戦がスタートしようとしていた。

その日の夜、井草はアザゼルの手伝いをするために兵藤邸で作業を手伝っていた。
無言で作業のフォローをしていると、アザゼルは井草の方に視線を向ける。

その意味は、井草も分かっていった。

「……五十鈴のことは、正直迷っています」

「そうか。いや、そうだな」

井草の素直な言葉に、アザゼルは理解を示す。

枢五十鈴。

天才肌で、特に勉強をしていないのにもかかわらずテストでも高得点。体育に関しても五段階評価で三以下を取ったことがない才媛だった。

伊予は身体能力は高くないので、そういう意味では身体能力抜群の井草を含めて、つり合いはとれていたと思っっている。

「面倒見のいい、いい子だったな。今でも、その面影が残ってるみたいだな。監視映像をピスが見てそう言っていた。」

「今回の作戦、義姉さんは？」

ピスがいれば百人力だと、素直にそう思う。

だが、アザゼルは首を横に振った。

「……直接会ったら冷静ではいられないって、辞退したよ」

その言葉に、井草は納得する。

仕事の関係で中々会えなかったが、ピスも二人とは仲が良かった。

その彼女が、変わり果てた二人と直接対面すれば、調子を崩すだろう。

当人が苦戦するだけならまだしも、感情的になって五十鈴たちと戦い始めては、本末転倒だった。

「なあ、井草」

アザゼルが、苦笑する井草に面と向かって、何かを言いかける。

一瞬だけ迷い、そして、アザゼルは口を開いた。

「お前は、両親のことを深く知りたいと思うか？」

その言葉に、井草はすぐには答えられなかった。

井草は、両親のことを深く知らない。

物心ついた時には親戚にたらいまわしにされていたし、アザゼルたちに拾われてからも、なんとなく聞きづらかった。

そして、それに――

「特に気にしてないです」

井草は、素直に答える。

「多分愛されてなかったと思う。それが不幸なことだとも思う。……だけど、大丈夫です」

そう、なぜなら――

「義姉さんや先生は、俺のことを大事にしてくれたから。俺の家族はあなた達です」

――神の子を見張るものでの生活は、それだけのものなのだから。

罪を犯した井草を、それでも大事に育ててくれた。

罰を求める井草に、あえて危険な任務を与えてくれた。

そのうえで、ピスもアザゼルも井草のことを大切に思ってくれていた。神の子を見張るものの者たちに、井草は育ててもらったのだ。

「だから、それだけで充分です」

心からそう思い、井草は心底からの笑顔を向ける。

それを見て、アザゼルは目を伏せ—

「井草。実は、お前の両親は—」

「あ、先生」

そのタイミングで、イツセーが部屋に入ってくる。

「……朱乃さんのこと、グレイフィアさんから聞いたんですけど—」

「—だったら、2人で話すといいよ」

ちようどいいタイミングだ。井草も少し疲れていた。

適度なところで休憩を取らないと、ミスをしでかしてしまいそうだ。

それに、朱乃の話は深入りしない方がいいだろう。

「あ、ああ。じゃあ、少し休んでな」

「了解です。じゃ、イツセー？ 俺はちよつと仮眠をとってくるよ」

そういいながら、井草は廊下を歩き—

「あ、井草さん」

「……うおっとお」

——ニングと、出くわした。

13話

そしてニングは、井草の部屋にまでついてきた。

すさまじく嫌な予感を、井草は覚える。

この展開は、きつとあれである。

死ぬかもしれない戦いで、せめてその前に想いを遂げようとする、あれだ。

さて、この場合選択肢は二つある。

1 それを受け入れる

2 とにかく論じて止める。

1 場合、思い残すことがないとして死に行く可能性がある。逆に2の場合、思いのこしができてそれが足を引っ張る可能性がある。

そして何より、井草に躊躇があつた。

リムに関しては、彼女の体質上男と交わることが必須という言い訳があつた。だからこそ、井草も体を許してしまったといえる。

だが、ニングに関してその言い訳はない。それが、心理的ブレーキになっている。

しかし、そのリムはニングとむすばれてほしいと井草に願っている。

そして、ニングはリムと井草が結ばれることを結論付けた。

つまりは、井草の決断ですべてが決まる。

そして、井草はここで「どっちも大事だからハーレムで」などとは言えない。

少なくとも、今の段階でそれを決めても逃げでしまないだろう。優柔不断な結論ではない。

覚悟を決めて、2人をまとめて愛して見せるという気持ちになつてからでなくてはならない。そうでなければ不誠実だ。

そして、伊予と五十鈴のことを投げ捨てて、損な決断ができるとは思わなかった。

五十鈴とあつてそれが断言できた。井草にとって、伊予と五十鈴は居間でも大事な幼馴染で、大好きな存在なのだ。

その二人との決着を付けなければ、答えを出せない。

……そこまで自分を見つめなおして、井草は結論した。

今この流れでニングを抱くことは、不誠実だ。

「ニング、俺は――」

そして顔を上げ――

「――」

—そこにカウンターが叩き込まれる形で、ニングの唇が押し当てられた。完璧な不意打ちだった。想定外すぎて対応ができなかった。

感情のボルテージが暴走しかかる。男の劣情が一気に上昇する。

それを、井草は渾身の全力で耐える。

このまま感情に任せれば、井草は同じことを繰り返す。

何もわかつていなかった、過去の自分に戻る気はない。少なくとも、劣情に任せて相手を傷つけるような真似は断じてしない。

ゆえに、怒りすら込めて井草はニングを正面から見据える。

「ニング！ お願いだから落ち着いて—」

「はい。もういいのです」

そのあっさりとした返答に、井草は唾然となる。

ニングは本当に満足したかのような表情で、微笑みながら立ち上がる。

「これで思い残すことはないのです。いろいろと迷惑をかけてすまなかったのですよ」

そして、ニングはそのまま謝罪の一例をすると外に出ようとする。

本当に、キスをしただけで満足したのだ。それだけで、心残りがなくなってしまうのだ。

……それが、耐えられなくて、井草はニングを後ろから抱きしめた。

「……ニング」

「え……う？」

いきなり抱きしめられて、ニングはあつけにとられたのが動きを止める。

その反応で、確信は決定に代わる。

ニング・プルガトリオは本当に満足していたのだ。ただキスただけで、想いを終わらせようと思ったのだ。

それが、たまらなく悲しい。

「……ニング。君はもつと優遇されるべき子だ。リムと同じぐらい、求められてしかるべきなんだ」

井草は心からそう思う。

聖職者にふさわしき自愛の精神を持ち、井草を許してくれた、ニングとリム。

二人が背中を押してくれたからこそ、井草は全てを皆に告白することができた。その結果として、受け入れられたのだ。

井草は、2人のことが好きだ。

優柔不断で最低なことだが、井草は一人を選べない。

それ以上に、伊予と五十鈴のこともある。

本当に最低だ。イツセーのようにハーレムを作るといふ決意すら持てない。優柔不

断なだけなのだ。

だが、しかし、それでも。

ニングが自分の幸せを優先しないのは別問題だ。

「……ニング。君は俺よりも幸せになるべきだ。それだけのことをしているじゃないか」

しっかりと抱きしめて、嘘偽りのない言葉を投げかける。

「コカビエルの時の言葉を返すよ。……自分のことを卑下したら駄目だ」

あの言葉が、最初のきっかけになったのだ。

そのきっかけをくれたニングが、自分の幸せをないがしろにするなんて、何かがおかしい。

なぜ、そんな風に自分を卑下するのだ。

井草は、罪を犯したからこそ自分を卑下した。それはある意味で当然の反応で、しかしリムはそれを立派だといってくれた。

なら、井草もまたニングを認めたい。

少なくとも、理由を知りたい。なぜそういう考えになってしまったのか、そのわけを知りたい。

「……私は、捨ててしまったのですよ」

静かに、ニングは告げる。

寂しげにはほ笑みながら―否。

自虐の笑みを浮かべながら、ニングはうつむいた。

「私は、両親との思い出を目的のために文字通り捨ててしまったのです」

その言葉の意味は分からない。

だが、それでもわかることはある。

ニングもまた、何かを背負っているのだ。

何かをして、それに苦しんで、そして自罰的意識を持つている。

だから―

「ニング。一つだけ言う」

井草はニングを抱きしめ、一つだけ言い切った。

「それを悔やめるのは、きつと褒められることをしていると思う」

それは、ニングが言ってくれたことと似通っていた。

ニングは、井草をほめてくれた。

誰かのため意心から行動できることを。罪を犯して、それを心から悔いることができ
たことを。井草が当然で、それをしたところで最低なことに変わりはないと思つていた
ことを、ほめてくれた。

だからこそ、井草は救われたのだ。

だから、井草もまたニングをほめる。

どのような理由があろうとも、それが酷いことだとしても。

それを悔やんでいるニングを、ほめてやりたかった。

「……………ニング。自分を嫌いにならないでくれ。俺は、そんな君を見たくない」

「……………ありがとうなのです」

井草の懇願に、ニングは苦笑で返す。

そして振り返ると、其のまま井草を抱きしめ返して、胸元に顔をうずめる。

「なら、少しだけこうしてほしいのですよ。五分でいいのです」

「ああ、それぐらいなら大丈夫さ」

井草は、小さく柔らかいニングの身体を抱きしめながら、こう思う。

この子が背負っているものを、リムが背負っているものを、少しぐらい一緒に支えてやりたいと。

……それと同じぐらい、井草はやはり伊予と五十鈴を救いたいとも思ってしまった。

それが、たまらなく優柔不断に思えて、井草は自分を久しぶりに本心から自虐した。

そして、北欧神話と日本神話の和議会談が行われる当日。井草たちは久しぶりに駒王学園に来ていた。

ここ数日間は、ロキとの決戦のためのトレーニングや休養などで学校は休んでいた。そのために態々使い魔を変身させて対応していたほどだ。

しかしまあ、最期になるかもしれないので、気を使われたということなのだろう。で、オカルト研究部の部活動も行っている。

ただでさえ修学旅行が迫っている現状だ。さらにそれが終わるとすぐ学園祭も待っている。割と忙しい時期でもあるのだ。

なので、今のうちに出し物を決定しておかないと忙しいことになるのだが――

「おっばいメイド喫茶を希望します!!」

「イツセー。一回死ぬ?」

本能以外が介在していないド級の発言をぶちかましたイツセーに、井草は珍しく本気の怒気をたたきつけた。

思わぬ展開に、イツセーは冷や汗を思いつきり流す。

リアスたちも流石にあっけにとられる中、井草は墮天使の翼を広げながらレセプター
イーツにまでなつて威圧を開始した。

「ニングとリムのおっばい迄見ようつてのかな? イツセー、君はさすがに節操無しになつたね、ん?」

「ま、まつてください井草さん!! でも、部長と朱乃さんのおっばいがあれば、この学園祭の天下を取れますよ!」

「取れるのは逮捕状だからね?」

井草は光の槍まで出して牽制を行い、イツセーも赤龍帝の籠手を出しながら食い下が
る。

その光景に祐斗がさすがに苦笑した。

「イツセー君。もし君の意見が通つたら、他の男子に部長と朱乃さんの胸を見られるこ
とになるよ?」

「……あ」

完全に失念していたらしい。イツセーは愕然とした表情で崩れ落ちた。

……本当に本能と煩惱だけで発言していたらしい。さすがの井草も頭を抱えなくなる。

こういう時に深く考えてくれないのがイツセーの欠点だ。色欲が前面に出てくるのさえなければ、覗きをやめた時点で彼女の一人もできただろうに。

そもそもそんな風俗店まがいの出し物を出したら、部の存続すらマズイ。本当に警察が来る可能性だってある。

「くそー！ これじゃあおっぱいお化け屋敷も駄目か!!」

「……そんなくだらないことを考えてたんですか?」

崩れ落ちるイツセーのセカンドプランに、小猫が心底からあきれ果てたのも当然であつた。

「あのねイツセー? 確かにエッチなのは人を寄せるかもしれないわ。でも、生徒会が許さないでしょう、普通」

「では、手堅く去年と一緒にしますか?」

イツセーを諭すリアスが祐斗が意見するが、それにはリアスが首を振った。

「去年と同じは芸がないわ。それに、ソーナから「本当のお化けを使うのはルール違反」

と怒られてるもの」

「そんな事をやらかしてたのですか？」

リアスから語られる衝撃の事実には、ニングがちよつと引いていた。

実際あの時は井草も駆り出された。そして仕事の無い妖怪を雇って、お化け屋敷を開催したのだ。

そしてリアスの言った通り、ソーナに説教されたのである。

「むー。じゃあどうしやすかねえ？　いつそのこと、美少女軍団でライブでもしやすか？」

そんなことをリムが言ってくる。

確かにそれは人が集まりそうだなにせ、オカルト研究部の女子部員は全員が美少女である。

だがしかし、それでは――

「男の出番がないんだけど」

井草の意見の通り、男たちの出番がない。

「あらあら。なら男性陣は男性陣でボーカルユニットを組んだらどうかしら？」

朱乃がそう助け舟を出す、それは危険度が高かった。

「……ごめんなさい朱乃さん。それやると、俺と木場のホモ疑惑が加速しそうなんでマ

ジで勘弁してください」

イツセーが絞り出す用意懇願する。

実際問題、イツセーのホモ疑惑はどんどん高まっている。

全面的に、嫉妬した松田と元浜が原因なのだが、祐斗がイツセーのことを大好きすぎるため、それが加速している。

とどめに井草も巻き込まれ始めている。三角関係あつかいはまだいい。今の腐った女子たちのトレンドは、誰を頂点とするハーレムなのかということをつかんでいる。正直井草は法的に訴えたい。

これに関しては松田と元浜の責任ではないが、きっかけを作ったのはあの二人である。さすがに説教案件だと思いい始めている井草であった。

「あの、そもそもここはオカルト研究部ですから、オカルト的な研究発表はどうでしょうか？」

と、ギヤスパーが極めて正論を出してくる。

実際問題、オカルト研究部として活動しているのだから、オカルト関係で出し物をするのが一番な気はする。研究発表なら部活動でそれぞれ特色も出てくるだろう。

だがしかし、これには致命的な問題が存在する。

「……んなもんに興味持つ若い連中なんぞ、たぶんレアケースじゃねえですかい？」

リムが言ったとおりである。研究発表では上位に食い込めるとは思えない。どうせならトップをを目指すのがリアスのやり方でもある。

だが、それならどうすればいいか……。

「どうしましょう？ 何かいい案があればいいんですが……」

「ふむ、こう言った出し物の場合、私達は経験不足であり意見が言えないな」

と、アーシアとゼノヴィアも困り顔だ。

「なら、一緒にミサをしましょう!! 布教よ!!」

「却下」

そして事実上オカルト研究部のイリナが飛んでもアイディアを出して、リアスに却下された。

当然である。

むしろ布教ではなく不況になる。

というより、メンバーの大半が保健室送りになりかねない。和平をぶち壊す暴挙である。

皆が唸る中、イツセーがぼつりとつぶやいた。

「……なら、オカルト研究部の女子限定のミスコンとか？」

なんとなくのつぶやきであった。イツセーも、そこまで深く考えての発言ではないだ

ろう。というより本能重視である。

だが、その一言で皆が顔を見合わせる。

先程も言ったが、このオカルト研究部のメンバーは基本美男美女がそろっている。

女子は多すぎるので男子で言おう。

なんだかんだで顔は整っており、肉食系でワイルド要素ありのダークホース。イツ

セーこと兵藤一誠。

駒王学園を代表するイケメン。女子生徒たちの王子様。木場祐斗。

男子からの人気も莫大。完全無欠の男の娘。ギャスパー・ヴラディ

二十歳の場違いなんのその。皆が認める好青年ならぬ更生青年。井草・ダウンフォー

ル。

ワル系が好きなら彼に任せろ。我らが顧問の新任教師。アザゼル先生。

割とジャンルがばらけているのも特徴的な、イケメンがそろっている。

そして女子はさらにその上を言っているのだ。

ミスコンテストとミスターコンテストをしてみれば、かなり人が集まることは間違

ないだろう。

「なるほどねえ。だったら、オカルト系のコスプレをしてみりゃいいんじゃないですか

い？」

と、名案だと判断したリムがのっかってくる。

確かにオカルト系の恰好でミスコンをすれば、オカルト研究部の特色も出てくるだろう。

井草は自分は何の恰好をするか考えながら、その意見を助長しようとし――

「なら、一位は私ね」

そのタイミングで、リアスと朱乃が同時に自信満々の発言をしてしまった。

途端に始まる、目と目の視線がぶつかることで産まれる火花の乱舞。

その結果、この日の会議はこれでご破算となった。

そして、部活動終了のチャイムが鳴る。

そのチャイムの音をBGMに、アザゼルが窓からを外を見る。

時間帯は夜間際。故に夕日が差し込んでいる。

……神々の黄昏を予言された神話の者たちの命運を決める戦いは、黄昏時に始まろうとしていた。

「……黄昏、か」

アザゼルの言葉に、全員が真剣な表情を見せて、立ち上がる。

その決意のこもった教え子たちを自慢げに見つめながら、アザゼルもまた、立ち上がった。

「神々の黄昏にはまだ早い。……お前ら、気張っていつてくれ！」

14話

そして、日も暮れた夜。

オカルト研究部とシトリー眷属、そして五十鈴とヴァーリチームは、会談を執り行うホテルの屋上にいた。

既にムートロンと大魔王派の部隊は、転送先の採石場付近に待機している。アザゼルもまた、会談の為にオーディンと同じくホテルの会議室に向かっている。

そこでイツセー達は増援と合流する事になっており、転移用の魔方陣が展開された。現れたのは百人を超える下級中級の悪魔の群れ。

そしてそれを率いる二人の悪魔に、イツセーが真つ先に反応する。

「……タンニーンのオッサン！ それにサイラオーグさんも!!」

最上級悪魔であるタンニーン。そして、紆余曲折あり次期大王に返り咲いたサイラオーグ・バアル。

戦力としては十分すぎる二人の姿に、イツセーは感謝しながらも驚いた。

タンニーンは良い。ミドガルズオルムと接触する為に協力してもらったし、合流する

事も知っていた。

だが、大王派から派遣されてくる増援を率いるのがサイラオーグだとは思っていなかった。

「久しぶりだな。リアス、それに兵藤一誠」

「サイラオーグ！ あなたが増援だったなんて。百人力だわ」

気負いなく挨拶してくるサイラオーグに、リアスは頼もしく答えながらも戸惑いが隠せない。

その意味を理解しているのだろう。サイラオーグは少ししかめっ面になった。

「上役達は「バアル義勇軍と共に戦功を立てるついでに、グレモリーに恩を売ってこい」などと言ってた。……実態は、俺に賛同する者達を激戦で減らす事が狙いだろうがな」
『まったく。大王派の連中は腹に一物抱えている者が多すぎて困る』

タンニーンがため息をつくのも当然だろう。

敵対派閥に恩を売るついでに、面倒な連中を激戦で駆除する。大王派の重鎮達からすれば一挙両得といったところなのだろう。

今後の趨勢がかかった状況下ですら、その手の謀略がはびこってしまう。人間達の醜さをネタにした創作物でも多くある展開だが、冥界も似たようなものらしい。

大魔王派の所為で追い込まれているにも関わらず、この状況。いや、大魔王派の所為

で純血悪魔の多くが離反したからこそ、大王派はそういう動きをする他ないのかもしれない。

政治とは難しい。イツセーは素直にそう思った。

そして同じぐらい、サイラオーグには同情心が湧いてしまう。

そんな気遣いの視線に気づいたのか、サイラオーグは再び気負いない表情を浮かべると、イツセーの肩に手を置いた。

「とは言え、冥界の未来にも大きく関わるだろうこの戦いだ。俺達も何かしたいと思っていたから、好都合といえれば好都合だな。力を貸させてくれ、兵藤一誠」

「は、はいー」

強い人だと、イツセーは心から思う。

彼の来歴はリアスやアザゼルからある程度は聞いている。

何も持たずに生まれて、大王の血筋でありながら底辺にまで追いやられた人生。そして這い上がってきたかと思えば、ビルデにしてやられた事が原因で暗雲が立ち込めた未来。

しかしそれでも腐ることなく、前を向いた進み続けてきた強さは、イツセーからしても憧れるモノだ。

素直に、彼のような強さが欲しいと思ってしまう。

そんなサイラオーグは、朱乃の方を向くと、気づかわし気な視線をリアスに向けて。「リアス。お前の女王クイーンは、確か墮天使と確執があつたと聞いているが」
ある程度は事情を知っているらしい。その目は気遣いもあつたが、懸念の色もあつた。

しかし、リアスは心からの安心の表情を浮かべながら首を振る。

「大丈夫よ。イツセーが男を見せてくれたわ」

その言葉に、サイラオーグはイツセーと朱乃に視線を交互に向ける。

「……下世話なことになるが、リアスはそれでいいのか？」

どうやら、そういうことだと勘違いしたらしい。

『割と嫉妬心の強いリアス嬢が、成長したものだ』

タンニンも勘違いしている。

どうもイツセーの童貞卒業で認識が統一しているらしい、勘違いも甚だしい。

イツセーは童貞であるという事実には悲しみを覚えながら、慌てて首を振った。

「違いますよ!!? そんなやり方、間違ってますって!!」

心底そうだと思う。

その場しのぎで抱かれて安心を得ようなどと、そんな悲しい真似を認めるわけにはいかなかった。

だから、抱いた事は抱いたが、抱きしめたただけだ。それ以外のことは断じてしていない。心底綺麗並みで、純潔極まりない童貞である。

その事実には涙を流すイツセーを、リアスは苦笑しながら抱きしめる。

「ふふ、こんなイツセーだからこそ、私達は大好きなのよ」

『……なるほど』

その態度に、2人も納得の表情を浮かべる。

「どうやら、俺の親戚はいい伴侶に恵まれたようだ」

『ああ。ドライグの今回の宿主は、中々スケコマシのようだ』

その二人の反応に、イツセーは小首を傾げてしまった。

……知らぬは当人ばかりなり。罪作りかつ女泣かせな赤龍帝であった。

一方その頃、井草は五十鈴と顔を突き合わせていた。

「五十鈴、ムートロンはナイアルを送り込んでくるんじゃないだろうね？」

心底そこが気になる。

ただでさえ敵対者同士の同盟だ。ロキの厄介さゆえに呉越同舟となったが、しかしそれでも連携が上手くいくかは悩ましいところである。

こと人選は重要だ。此処でナイアルが出てきたら、誰もが連携を取れないだろう。下手をすればその場で三つ巴である。

しかし、五十鈴はため息をつくど額に手を当てる。

「んなわけないでしょ。ナイアルは艦隊司令部も扱いに困ってるのよ。今回は中隊の分隊が一つ出てきて、大魔王派からはA B二個中隊と悪魔一個中隊が派遣されるわ」

五十鈴はそう言うと、半目を井草に向ける。

「ナイアルは、性格の悪い問題児を集めた愚連隊を率いてるのよ。戦闘能力は上から20番目の化け物で、しかも性格上下衆野郎が慕ってくる事するから、ホテップ艦隊司令も扱いに困ってるの」

どうやら彼は、ムートロンでも問題児らしい。

性格に問題があっても、実力があるのなら使うという事だろう。実際魔王クラスを超える千人以上の戦士がいるとはいえ、主神クラス以上がナイアルクラスだと考えると、多く見積もっても数十人といったところだろう。

中々困っているようだ。一瞬ムートロンに同情しかける。

「言っとくけど、ホテップ艦隊司令の序列は2位よ。E Eレベルも8, 0の準最強。龍神

はともかく、主神クラス程度じゃ一対一ぐらいなら余裕だと思いなさい」

そう得意げに言うのと、五十鈴は何かに気づいて視線を井草の後ろに向ける。

そこには、微妙に敵意を向けているリムとニングの姿があった。

二人は井草を庇う様に前に出ると、軽く睨みを利かせる。

なにかすれば、戦闘を開始する。その覚悟を感じさせる態度だ。

「ずいぶん、井草さんにフレンドリーなのですな」

「邪悪らしい態度ありがとうございやすね。もうこれ、演技臭いレベルでさあ」

それなりにむかっているらしく、挑発的な言動まで飛んでくる。

ここでもめるのはまずいと思い、井草は五十鈴の様子を伺い――

「……………」

何故か、五十鈴は息を詰まらせていた。

そして井草の視線に気づくと、プルプルと頭を振ってから、挑発的な表情を浮かべる。

「ふふっ。可愛い子に好かれてるじゃない。私みたいな邪悪なんか気にせず、その子達

を大事にすることね！」

指を突き付けながらそう言うのと、五十鈴は背を向けてバラキエルの方へと向かう。

どうやら、作戦の最後の詰めを行うらしい。バラキエルが指揮官なのだから当然の態

度といえれば当然だろう。

その姿を見送りながら、井草は静かに目を伏せる。

……彼女は敵だ。そして、手遅れの可能性すらあるほどに代わってしまっている。手遅れなのかもしれない。助けられないかもしれない。

だけど、それでも助けられるのなら、やっぱり助きたい。

井草は今の会話でそう思ってしまった。

確かに彼女は変わってしまった。しかし、今の会話は何処か昔を思い返させてくれる。

演技の可能性が高い。そういう精神攻撃なんだろうとも思っている。それでも、井草はやっぱり五十鈴のことが大事なのだと確信してしまった。

……やはり、駄目だ。

「ニング、リム」

井草は、静かに告げる。

「……やっぱりだめだ。俺は、伊予と五十鈴がまだ大事で、振り切れない」

本心を隠さず、井草はそう言い切った。

酷いことを言う。今から始まる戦闘に差し支えるかもしれない。

だが、これを隠したまま死ぬのは失礼な気がした。

「こんな想いを抱えたまま、俺は二人の内どちらかを選ぶなんてできないし、まとめてな

んて優柔不断すぎる」

だから――

「俺のことは、諦めて――」

「――なるほど、小細工なしか」

「――ふっ。恐れ入るね」

バラキエルとヴァーリがそう漏らし、そして空間が歪む。
ホテルの屋上であるヘリポートの直情が歪む。

そしてそこから三隻の空を飛ぶ船が現れる。

それらの船首にいるのは、ロキとアスクとカルネテル。

アスクとカルネテルの後ろには、それぞれ数十名の戦士達が、臨戦態勢で待機。更にロキの後ろにはフェンリルが伏せている。

ロキ一派。嘘偽りなく絡め手もない。正々堂々と正面からの登場だった。

「目標確認。作戦を開始する」

バラキエルが無線ですぐ伝えると、屋上全体が巨大な魔方陣で包まれる。周囲のビルに散っていたシトリー眷属やバアル義勇軍の後方支援部隊による、強制転移魔法だった。

ロキはその内容にすら気づいたようだが、笑みすら浮かべてそれを甘んじて受け入れる。

そして光に包まれ、それが消え去ればそこは採石場だった。

採石場全体を取り囲むように、数百を超える悪魔がロキ達を睨み付ける。

更には、井草達と対をなす位置に十人足らずのイーツの姿があった。

その中央、リーダー格は、どこか五十鈴のハストウールイーツと似た感じのイーツだ。半魚人をヒロイン風に仕立て直したかのような、ヒロイックな意匠のイーツ。胸部が膨らんでいるのを見るに、変身者は女性なのだろう。

「じゃ、ナイアル様にご褒美もらう為にも頑張らせてもらおうね」

そのイーツはそう告げると、いつでも跳びかかれるようにかがみ、両手を地面につけ

る。

短距離走を思わせるその姿は、まるで陸上部でなんども練習してきたかのように様になっていた。

そしてイツセーも禁手化のカウントダウンを開始。井草もレセプターイーツに変身。他のメンバーも戦闘態勢をとる。

それをロキは、あえて悠然と受け止める。

その余裕を持った態度に、思わずリアスは声を投げかけた。

「……逃げないのね」

「想定範囲内故に、必要も感じない。最早オーデインには何があっても退場してもらうので、先ずは脅威である貴様達を排除するだけだ」

その言葉に、バラキエルが顔をしかめる。

ロキは、オーデインを完全に見限っているらしい。三大勢力や他の神話と和議をして、ムートロン対策の為に足並みを揃える。それを完全否定するという結論に至ったのだろう。

それほどまでに自身の疑似エボリューションエキスに自信があるという事なのだろう。かなりの自信家なのか、それともそれだけの性能を引き出せたのか。

「ラグナロクを何が何でも成就させる。危険な考えだな」

「それはこちらのセリフだ。そもそも三すくみであった貴様らの協調から全ては歪みだしたのだから」

バラキエルの言葉に、ロキはそうすげなく返す。

戦士達もそれに同意するかのよう、周囲の者達に敵意の籠った視線を向ける。ロキと思想は一つのようなだった。

その光景を見てから、バラキエルは静かに首を振る。

「……やはり、話し合いは不毛か」

そして、バラキエルは雷光を両手に纏う。

そのタイミングでイツセーのカウントダウンも終了、ヴァーリも合わせるかのように禁手化を行う。

そして、井草もまた一步を踏み出した。

「イツセー。アスカロン貸して」

「はい！ ドラゴンはいないから大丈夫です！」

イツセーが投げ渡すアスカロンを受け取り、井草はそれを両手に握る。

そしてそれを見て、ロキは不敵な表情を浮かべる。

「二天龍の共演とは見応えがある。なら、こちらも我が子を出すのが礼儀というものか」

そしてロキは指を鳴らし、採石場にその音が響き渡る。

それを合図にフェンリルが飛び出した。

15話

ロキ一派の最強戦力であるフェンリル。

北欧最強の魔獣が飛び出す、そんなものの対策は当然用意している。

「黒歌！ グレイプニルを！」

「りよーかいにゃ♪」

リアスの指示に素直に従い、黒歌は異空間に格納していたグレイプニルを引き出す。

それと同時に、ハストゥールイーツになっていた五十鈴が一瞬でフェンリルの前に飛び出すと、素早く両手を振るう。

そこに生まれるのは半透明の双剣。相転移によって形成された、固体化した大気の剣だった。

その斬撃こそあつさり回避するフェンリルだったが、それに気を取られたことでグレイプニルがフェンリルを絡めとる。

「愚かな、グレイプニル対策程度、当然——」

ロキはそう言いかけて言葉を止める。

そう、グレイプニルの対策を取るのは当然の判断。

しかし、それが分かっているなら更にその対策を取るのには当たり前である。

ダークエルフによる強化は既に行われている。事実、グレイプニルはフェンリルを縛り上げた。

これで最強戦力は防がれた。そして、そのタイミングに合わせて総軍が動き出す。

「いくぞー！ 我ら三大勢力の大敵を打ち倒せ!!」

「きたきた出番！ さ、頑張つてナイアル様達に褒められよう!!」

サイラオーグとイツが声を上げ、それに応えるかのように周囲の兵士達が一斉に攻撃を開始する。

空高く飛ぶ後衛が砲撃を放ち、低く飛行する前衛が突撃する。

それに対抗するように、戦士達もまた迎撃に動く。

「ooooooooooooooooooooo」

その音声と共に、狼を擬人化したような形状の疑似イツ達が飛び出して、前衛と激突する。

そしてその激突を眺めながら、しかしロキは余裕を崩さなかった。

最強戦力がいきなり封殺されたというのに、この余裕。井草達は何かを予感して不安をよぎらせる。

そして、それは的中した。

「さあ、親とオリジナルが捕まったぞ。……出番だ」

その言葉と共に、空飛ぶ船から新たな影が飛び出してくる。

神すら殺す牙と爪。そして、並の魔獣を歯牙にもかけない圧倒的なオーラ。

総合的に見劣りこそしているが、間違いない。

新たに、四体のフェンリルがその姿を現した。

「……………なあ!? フェンリルって一匹しかないんじゃないんじやなかったのかよ!」

「これは、中々面白い……………っ!」

ほとんど全員の驚愕を代表するイツセーに、ただ一人歓喜の表情を浮かべるヴァーリ。

対照的な二天龍の反応を愉しみながら、ロキは得意げな表情を作り上げる。

「ムートロンに対抗する為にはそれなりに数もいるのでな。フェンリルの子供であるス

コルとハテイに、クローン体であるヴァナルガンドとローズヴィトニルだ」

それぞれのフェンリルの分身が、咆哮を上げて素早く動く。

その狙いは、フェンリルを拘束するグレイプニル。

それに気づいた者達が攻撃を放つが、最上級悪魔クラスはあるであろう魔獣達は、攻撃を意にも介さずグレイプニルに食らいつく。

そして、フェンリルはすぐさま解放された。

「……クッ！」

「ロキを舐めてかかりすぎていたか！」

リアスが悔しがり、タンニンもまた歯噛みをする。

その光景を愉快気に見つめながら、ロキもまた戦闘態勢を取った。

『トール』

トールイーツとなったロキは、更に空間をゆがめると一本の戦鎧を取り出す。

禍々しい装飾を施されたそれは、まるで色違いのミヨルニルだった。

「そして、我専用のミヨルニルレプリカ、ムジヨルニア。この一撃で滅びるがいい!!」

その言葉と共に、ロキはムジヨルニアを構えると一気に突撃する。

そしてそれに対抗するべく、イツセーが一気に突っ込んだ。

構えるのは、オーデインから貸与されたミヨルニルレプリカ。

目には目を、歯には歯を。ミヨルニルに対抗するにはミヨルニルを使うのは当然の成り行きである。

そして美麗なうごきで横薙ぎに振るわれたロキのムジヨルニアと、豪快な一撃を叩き込むミヨルニルレプリカ。

そして次の瞬間、勢いよくイツセーは弾き飛ばされた。

「うわあああああ!!? あれ? 雷は?!」

想像していたレベルどころか、一筋の稲光すら放たれていないことに、イツセーは狼狽する。

話が違う。駒王町を吹きとばすほどの雷撃が出てくるのではなかったのか。これではロキが倒せない。

心から慌てるイツセーに、ロキの嘲笑が届いた。

「フハハハハ！ 邪な念を持つ者にミヨルニルは使えん！ トールの力と専用調整を施した、ムジヨルニアでさえオリジナルの出力を出せないのだからな！」

その言葉に、イツセーは心底納得してしまった。あとオカルトイツセーを知るもの研究部員も完全に腑に落ちてしまった。

兵藤一誠。おっぱいを愛しおっぱいに生きおっぱいに死ぬもの。

リアスの乳首をつついて禁手に至り、リアスの乳首を押し当てられれば覇龍による暴走状態ですら正氣に戻る。

子供悪魔より無い魔力を、裸を見たいという一念で強大な技へと進化させた。乳との対話という正氣を疑う願いを込めて、実際に形に変える剛の者。

そんな男に、邪な念よこしまを持つな、などとは言えない。というより不可能以外の何物でもない。

この作戦、根幹から大失敗であった。

そして、そんなイツセーにフェンリルが迫り―

『よせると思うな』

その瞬間、そのフェンリルにも匹敵する巨体が、フェンリルとぶつかり合う。

轟音が響き、フェンリルの巨体が揺らぐ。

そして、ロキ一派の全員がその事実には驚愕した。

ロキ一派の最強戦力がフェンリルである。其の戦闘能力はトールイツと化したロキすら凌ぐ、北歐最強の魔獣と言っている。

その魔獣相手に、一瞬とは言え追いつき、通用する打撃を放つ。

それが、どれだけの偉業であるかなど言うまでもない。

そしてそれをなしたのは、黄金の獅子。

フェンリルに勝るとも劣らぬ巨体を持つ、圧倒的なオーラを放つ巨大な獅子の姿がそこにはあった。

「……ネメアの獅子だ?!? オリユンポスまでもが動いたというのか?!」

ロキは驚愕し、しかしすぐに何かに気づく。

「いや、この感覚は神器！ まさか、ロンギヌス神滅具の一つ、獅子王レグルス・ネメアの戦斧か！」

獅子王の戦斧。それは、13ある神滅具の一つ。

ギリシヤ神話における最高峰の魔獣の一種、ネメアの獅子。其の中でも強大な存在を封じた、魔獣封印系神器のなかでも最強の一品。

本来は文字通りの斧である。その一撃は山すら両断する最高峰の近接戦闘武器であり、かつ、所有者を飛び道具から守る防護の加護を与える。そういう武器としての具現型神器だ。

だが、神器は時として亜種になる。おそらくその形が獅子としての具現化なのだろう。獅子を封じた神器である以上、十分考えられる事だ。

「……よもや獅子王の戦斧の担い手すら確保していたとは——」

「否、そうではない」

感心するロキの声を、サイラオーグが否定する。

全身から闘気を放ちながら、サイラオーグは静かに首を振った。

「俺が所有者を見つけた時は、既に怪しげな一団によって殺されていた。だが、獅子王の戦斧―レグルスは、獅子の姿に変じて主の仇を討ったのだ」

そう言い放ちながら、サイラオーグは静香に構えを取った。

「母方の、ヴァプラの血との縁を感じてな。ゆえに俺の兵士^{ボーン}として、その時転生させたのだ」

「神滅具の担い手ではなく、神滅具そのものを悪魔にするとは。アジユカ・ベルゼブブは一体何を作り上げたというのだ……！」

サイラオーグのなした所業に、ロキは魔王ベルゼブブを警戒して歯噛みする。

そしてその歯噛みした一瞬の隙について、サイラオーグはロキの眼前へと移動していた。

放たれる拳をロキはツールイツの怪力で受け止め―弾き飛ばされる。

その事実にもロキが目を見開いたその瞬間、連撃を叩き込まんとヴァーリの魔法攻撃が一斉に放たれた。

それをロキが自身の魔法技術をもって迎撃すれば、今度はイツセーのドラゴンショットが叩き込まれる。

今度はムジヨルニアによって弾き返すが、その時点でロキは三人に包囲されていた。

「さて、旧魔王の末裔と現大王の息子が共闘か。更には赤龍帝までもいるとは中々豪勢だな」

サイラオーグが構えを取り―

「ふふふ。雷神トールの力を宿した悪神ロキを相手にするにはこれぐらい必要か。……俺もまだまだ未熟だな」

ヴァーリが激戦の予感に喜び―

「ミヨルニルは使えなくても、俺はまだ戦えるぜ!!」

イツセーは気持ちだけは負けないと気合を入れる。

其の三人の強者の戦いを彩るは、獅子王レグルスと神喰狼フェンリルと激闘。

『赤龍帝！ フェンリルは俺とレグルスで抑えておく。ロキは任せるぞ!!』

更にタンニーンまでもが参加し、最早怪獣大決戦の様相となる。

その戦いに一瞬だけ視線を向け、ロキは苦笑した。

「なるほど。なら、我も出し惜しみは無しでいこう」

その言葉と共に、船倉から何十匹もの蛇のようなドラゴンが姿を現す。

「ミドガルズオルムの量産型も用意させてもらった。これもムートロンに対抗する為、大量生産させてもらっているぞ!!」

『―なら、それはこちらで対応しよう』

『ブランド』

『ああ。私の開発したAアーミーボディ Bならそれができる』

『リアクター』

その瞬間、爆発が量産型ミドガルズオルムの群れに発生した。

そして姿を現すは、重厚な鎧騎士の姿をした、巨大な兵器。そして、美麗な騎士の姿をした、二機がそれを指揮するかのように表れる。

すぐさま戦闘を開始する巨大兵器とドラゴン。

そのうち、美麗な騎士の姿をした機体の内、片割れから放たれた声にサイラオーグが驚きの視線を向ける。

「—マグダランか？」

『そうだ、兄上。……バアルにも戦功が必要ゆえ、こうして戦列に参加させてもらった』

最上級悪魔クラスの消滅の魔力を放ちながら、美麗な機械人形—Aアーミーボディ Bアルケリオ

スに搭乗する、マグダラン・バアルはそっけなく返答する。

サイラオーグとは異なり消滅の魔力を受け継いだ異母弟。しかし、消滅の魔力を受け継がなかった異母兄たるサイラオーグに次期当主の座を奪い取られた男。

のちにサイラオーグに決定的な敗北を刻み込んだビルデのシンパと化した、サイラオーグの後援者達の手によって祭り上げられるも、それゆえに大魔王派の側に立つ事に

なった彼もまた、この戦場に参戦していた。

「まさか、こんなところで俺達が肩を並べるとは……」

『心配か？ まあ、安心するといい』

そして、もう一機のアルケリオスから、サイラオーグを安心させるかのように声が投げかけられる。

そちらはそちらでマグダラン機を超える魔力を放ちながら、得意げな声を出した。

『ビルデ殿の戦車^{ルック}である、この私！ ラウバレル・アスモデウスが設計した悪魔型機動兵器^{アーモロボティクス} A・B！ その量産型であるタイランティオを超える貴族専用機アルケリオスがあれば、この程度の敵などに遅れはとらん!!』

そう得意げに言い放ちながら、ラウバレルは猛攻を加える。

既に魔王クラスに到達するほどの魔力を乱射しながら、ラウバレルのアルケリオスはサーベルを引き抜くと、量産型ミドガルズオルムを相手に大立ち回りを演じている。

そしてその横では、マグダラン機の周囲から大量の樹木が伸び、量産型ミドガルズオルムを絡め捕っていた。

それを不愉快げに見ながらも、しかしロキは余裕を崩さない。

「……まあいい。この程度の戦闘を潜り抜けねば、神々の黄昏^{ラグナロク}は成就できんしな」

そう言い放つと、ロキはムジヨルニアを構えてイツセー達を見据える。

神滅具を担う者達が三人。悪神を倒すのに神殺しの担い手を三人も投入するのは過剰戦力といえれば過剰戦力。

だがしかし――

「神滅具の共演とは、光栄といえれば光栄だろう。……だが、胸を貸すなどという真似はせん！　すべて討ち取り摘出し、我らの戦力として運用してくれるわ!!」

その瞬間、この戦場で最も激しい戦いが巻き起こった。

16話

そしてその頃、井草もまた戦闘を開始していた。

目の前に立つのは、アスクと呼ばれた疑似イーツ化した男。

フエンリスヴォルフという疑似イーツの力は強大であり、そう簡単に倒せるものではなかったが――

「チッ！ 流石にできる!!」

飛び退るアスクは、そう吐き捨てる。

最初の打ち合いでは見事に敗北した井草だが、しかしそれは一対一だったからだ。

そう、今この場は四対一。圧倒的に有利な状況である。

状況であるのだが――

「精々盾になってくたせえよ、五十鈴さん？」

「邪悪が盾になるわけないでしょ。あんたがなりなさい」

横目で睨み合うリムと五十鈴に、井草はどうしたものかと頭を抱えなくなった。

結果的に共闘の体勢となったが、非常に連携が取りづらい状況下だった。

「と、とりあえず仲良く……は無理なのですが、最低限の協調姿勢がほしいのですよ」
ニングがそう取り成すが、しかし若干五十鈴から離れている。
さて、これはどうしたものか。

井草は真剣に悩みたいが、しかしそんな余裕もない。

「隙あり!!」

「させないから!!」

当然その不協和音を狙いながら仕掛けてきたアスクを、井草は手に持った聖剣で迎撃する。

この為に神の子を見張る者の技術で用意してもらった聖剣。それも二刀流である。

片方は頑丈さ重視のカトラス。もう片方は取り回し重視のマンゴーシユ。どちらも、攻撃に対する防御を重視した形である。

とにかく放たれる攻撃を防ぎ、光力による攻撃で撃破する。これが井草がアスク対策で考慮した対策だった。

とは言えカトラス型の聖剣もマンゴーシユ型の聖剣も、量産型である為、頑丈さ重視といっても聖魔剣には確実に劣る。

長期戦になれば、刀身が持たない。

なのでできる限り短期決戦で仕留めたいところだったのだが――

「とった!」

「もらった!」

「ふぎや!?!」

同時に攻撃を放とうとして、五十鈴とリムが激突する。

「もらった!」

「させないのです!!」

振るわれるアスクの爪を、ニングが魔剣で受け止める。

そして井草が光の槍を展開して距離を取らせるが、しかしこのままでは流石に厄介だ。

とにもかくにも、連携を取らせないと確実に負ける。

だがしかし、リムと五十鈴がいがみ合っている現状ではそれも難しい。ニングですら連携を取りづらそうにしているのだ。これはキツイ。

「邪魔なんですがねえ。余所行ってもらえませんか?」

「此処で井草を殺されると困るだけよ。そっちこそ、雑魚は失せなさい」

「……あ?」

既に敵意が殺意になりかねないレベルで睨み合いが勃発している。

そういえば、冥界での降伏勧告時に二人は激突していた。其れなりに勝負になってい

たとも聞いています。

それもあつて、更に敵意が増しているのだろうが――

「……はあ。仕方ないな」

これでは逆に負けかねない。

井草はそう判断すると、2人に向き直った。

「邪魔。他の連中の相手をしててくれないかな? ……五十鈴もリムも」

「……ええ?! 私も!」

シンクロして驚愕する二人だが、井草はいったん変身を解除して睨み付ける。

お互いにお互いが足を引っ張っている現状。フォローの為に井草もニングも余計な労力を背負っていると云つていい。

必然的に井草達からすれば、別の戦力を別々で相手してくれている方がまだ助かるというものだ。

「……そうなのです。ぶっちゃけ足を引っ張りすぎなのです」

と、ニングもまたそう告げる。

「呉越同舟ができないのなら、下がっているのです、ここは私と井草さんで頑張るので
す」

それなりにトサカに来ていたらしい。額に青筋が浮かんでいる。

「ちよ、待ちなさいよ！ E Eレベル6，0の最強戦力を外す気！！ わたしという邪悪を倒すまで井草に死んでもらったら困るんだけど！！」

「相棒を邪魔扱いたあひひでえじやないですかい！！ 二つの火が合わさって炎になりや、こんな奴いなくてもいいじゃねえですかい！！」

二人して文句を言うが、井草が何か言うよりも先に、ニングが一步前に出る。

「い・い・か・ら！ ……さっさと、行くのです」

表情は笑顔だが、しかしそこにあるのは圧倒的な王者のオーラ。

臣民を人睨みで黙らせる、圧倒的格上の畏怖がそこにはあった。

「……ひい！！」

思わず抱き合って震える五十鈴とリム。

そして、ニングの微笑が深くなった。

「返事は？」

「イエスマム！！」

直立不動で返事を行い、そして一目散に周囲のヴォルフイーツへと向かっていく二人。

そしてイーツ達がどんどん叩きのめされていく中、井草とニングはため息をつくど、アスクに向き直る。

「……は！　なんか呑まれてた！」

アスクが我に返って戦闘態勢を取り、そして井草とニングも構え直す。そして戦闘が仕切り直しになったその時――

「いや、陽動には十分だったぞ」

ロキが嘲笑い、そしてフェンリルが井草達の後ろに立つ。

『いかん！　弾き飛ばされたのを利用されたか！』

『下がれ、2人とも!!』

レグルスとタンニーンが慌てて駆け付けようとするが、しかし遅い。

井草達も反応しきれない速度で、フェンリルは爪を振り上げ――

『いや、そうはいかない』

その瞬間、アルケリオスの内、ラウバレル機が体当たりを行う。

そして背部のハッチからラウバレルが飛び出すと、即座にスイッチらしきものを構える。

「悪いが、彼女に手出しされるわけにはいかないんでな!!」

そしてスイッチが押し込まれると同時に、アルケリオスが大爆発を起こした。

その勢いでフェンリルが弾き飛ばされる中、ラウバレルは素早くニングをカバーする体制になると、何かしらの機器をニングに向ける。

そして数秒後、その機器のモニターを見て、ラウバレルは苦笑した。

「やはりか。シャルバが苛立つわけだ。……コード011」

そのラウバレルの指示を受け、ラウバレル配下の11機のタイランティオが、ニングをカバーするフォーメーションを組む。

明らかに、ラウバレル達はニングを庇う態勢で行動している。

その事実には、何よりニングが目を見開いて驚いていた。

「な、なんなのですか!？」

ニングが戸惑うのも当然だろう。

確かに今は共闘しているが、しかし自分達は敵同士である。

三大勢力の一角である、新魔王派にニングは協力している。ラウバレルは、大魔王派の幹部の一人である。

必要以上に庇う理由がない。それが理解できない。

それを理解したのか、ラウバレルは苦笑を浮かべる。

そして――

「――前ルシファアの血を引いているのが分かった以上、改めて勧誘するまでは死なれて困っては困るしな」

――そう、言い切った。

その発言に、井草もニングも戦闘の手を止めてしまう。

……その可能性が、絶対には言い切れない。

ニングは悪魔の血が先祖返りした存在だが、どの悪魔の血を継いでいるのかは分からなかった。

そして大昔の悪魔は人間を道具の様に扱ったとも聞いている。性処理の道具として

扱う事もあつただろう。

万が一。万が一ではあるが、ニングが旧魔王の血を引いている存在だある可能性は想定できるかもしれない。

だが、それを本当に想定する者などいるわけがない。

「……冗談でしょ?」

「そんなわけがない。計器を使って調べた結果だ。そも、枢五十鈴も君と彼女を大魔王派が気にかけているのは伝えているだろう?」

井草に対して大真面目に返すラウバレルに、井草もニングも啞然とする他ない。

その状況下で二人が無事なのは、偏にラウバレルの部下がカバーに入っているからだ。

それほどまでに、ラウバレル達はニングの動向を確認したいらしい。

つまり、これは真実なのだ。

真実、ニング・プルガトリオは、初代ルシファアの血を継いだ者。ある意味でヴァーリと同等の存在である。

「こちらとしては大魔王派の威光をより強める為に参加してもらいたい。所属して名義を貸してくれば、諸問題はビルデ殿が殆どをやってくれる。……待遇も相応のものを保証するが、どうかな?」

そんな誘いすらかけるラウバレル。

間違いなく事実だ。だからこそ、ラウバレルはここでスカウトを掛けている。

そしてニングは動揺しながらも、呼吸一つでそれを整え――

「それは――」

答えようとした、その時だった。

「朱乃!!」

その叫びと共に、血しぶきが舞い踊った。

血しぶきを吹き上げたのは、バラキエル。

そして、その下手人はフローズヴィトニルとヴァナルガンド。

乱戦状態のさなか、朱乃を狙ったその攻撃を、バラキエルが受け止めたのだ。

そして崩れ落ちるバラキエルを、朱乃がとっさに支える。

慌ててアーシアが回復のオーラを掛ける中、朱乃は震える声を出そうとし――

「……だ、誰だお前!？」

そんな、めちやくちや狼狽したイツセーの声がそれをかき消した。

「イツセー?! どうしたの?! 敵の精神攻撃!」

状況が読めず、井草はとりあえずまずイツセーに声をかける。

付き合いが比較的長いからわかる。イツセーは本気でパニックになっている。

朱乃を相手に誰だといったようだが、どうもその相手は朱乃ではないようだ。

何やら異常な事態が起こっていると考えていい。そうでなければ説明がつかないぐらい、イツセーは戸惑っていた。

そして、イツセーは井草に振り向くと――

「あ、朱乃さんのおっぱいにダメもと乳語バイリンガル翻訳を掛けたら! 朱乃さんのおっぱいが自分はおっぱいの精霊だと言ってきたんだ!!」

その発言に、誰もが固まったのは言うまでもない。

比較的付き合いが長いゆえに、井草に「お前何とかしろよ」という視線が集まってし

まうのも無理はない。

いろいろととんでもない事態が連発している中、とりあえず井草は深呼吸をして――
「……あの、そのおっぱいの精霊さんに直接話させるとか、できない?」

ダメもとで聞いてみた。

――いいでしょう。乳神さまがこの異世界で見出したものが狂人扱いされるのはたまりません。

本当に声が出てきた。

――初めまして。私はこことは異なる世界、エウイェトウルゲ「E E」に住まう善神が一柱、乳神さまに使える精霊です

なんかすさまじいバックボーンが出た。

「……確かに今までに知らぬオーラを感じる。まさか机上の空論であつた異世界の存在がここで実証されるとは」

「興味深い。だれか、すぐにデータを取れ!!」

ロキが真剣な表情で感心し、ラウバレルが慌ててデータを取ろうとする。

どうやら、マジっばい。

――乳神様は全てのおっぱいを司りし神。乳龍帝、貴方のかたくなまでのおっぱいへの渴望が、私を呼んだのです。

その言葉に、イツセーが打ちのめされる。もちろん誰もが啞然としている。ロキとラウバレルは興味深げだった。

なによりイツセーが戸惑っている。自分のおっぱい好きは自覚しているが、異世界から神が直接目を付けるレベルなどは想定外すぎる。想定できる方がどうかしている。

そしてナチュラルに乳龍帝呼ばわりだった。ドライグの精神に地味にダメージを叩き込んでいるが、あまりの事態に誰もがそれには気づかなかった。

—乳龍帝。今この場には、本音を隠して悲嘆の道をすすもうとしているものが二人います。その者たちのおっぱいを救うためにも、貴方の乳語翻訳が必要です。乳神さまの力で乳語翻訳を増大化させますので、其の力で本音を聞いて、乳神様の力をここに降臨させるのです。其の力によって、貴方が望む奇跡が起こることでしょう

なんかとんでもない展開になってきた。

タイミングとイツセーの行動的に、朱乃の本音を聞き出すということなのだろうか。井草がぼかんとしていると、イツセーも訳が分からないなりに納得したらしい。

「……朱乃さんのことかな？ でもかなりプライベートだからなあ……。朱乃さんの胸の内、俺と朱乃さんとバラキエルさんだけがわかるようにしてくれないか？」

それなりに気を使えるイツセーであった。

そして乳神の精霊も、それに理解を示したらしい。

—いいでしょう。では、この娘たちの胸の内を聞きなさい。その言葉と共に、対象の胸が輝きだす。

そして、イツセーはパニツクのため聞き逃しをしていた。

本音を隠して悲嘆の道をすすもうとしている者。その一人が朱乃であることは言うまでもない。

だが、おっぱいの精霊は2人•••••といったのだ。

ゆえに、乳房を輝かせるものは朱乃のほかにもう一人—

「—へ？」

枢からくり 五十鈴いすずもまた、その乳房を光り輝かせていた。

「ちよ、え、なに……っ?!」

戸惑っている五十鈴だったが、すぐに我に返ると、その顔色を真っ青にさせる。

そして、鬼気迫る表情になるとイツセーに顔を向けた。

イツセーは朱乃に意識を集中させていて気づかない。気づいていたら、すぐに何らかのフォローを入れていただろう。

そして、それゆえに五十鈴は慌てふためき――

「さ、させるかあ?!」

とつさに大気を相転移させ、ブレードを展開するとイツセーに切りかかろうとする。

『――ッ! 何をやっている!!』

「ちよ、五十鈴待って?!」

慌ててたまたま近くに居たマグダランと井草が止めに入る。

攻撃をマグダランがアルケリオンを盾にして防ぎ、井草が五十鈴を羽交い絞めにした。

しかし、それでも強引に五十鈴はイツセーに危害を加えようとする。

「放して! ダメ、ダメなの!! 知られたら、知られたらダメなの!!」

真っ青を通り越して真っ白になった顔で、五十鈴はイツセーの乳語翻訳の発動を止めようとする。

17話

それは、惨劇の光景だった。

場所としては中南米だろう。密林の中にある集落は、虐殺の現場となっていた。

その場所は、ムー同盟に参加した国内で麻薬生産を行っていた、麻薬密売組織の保有する畑であった。

ムートロンはムー同盟を結成するために、多くの利益を与える必要に駆られていた。其のために最も有効なのは、勧誘している国家の問題を解決することだ。

それにこの麻薬生産施設を抑えることができれば、ドラッグで洗脳して使い捨ての雑兵を作ることまでできる。総合的に願ったりかなったりであった。

そんな場所に五十鈴が来ているのは、偏に彼女の訓練も兼ねていたからである。

ナイアルに誘われてムートロンに所属した五十鈴。そして戦力として運用するため、そこそこ高い適正だったEEレベルを利用することが決定した。その流れで数多くの強化改造と投薬が行われ、文字通り命を削った末に、五十鈴は劇薬を欠かさず飲む代わりにEEレベルを最上級悪魔クラス上位と同等レベルである6,0にまで高めること

ができた。

そして、伊予と共に肩慣らしとして麻薬生産私鉄の制圧を担当。基本的には小銃程度しか持っていない者たちを殺戮することになったのだが――

「……あ」

手についた返り血をみて、五十鈴はふとこう思う。

――何やってるの、私？

疑問を持つ必要はない。ただ、ナイアルのために働くために、練習をしに来たただけだ。出撃前の口づけはとても甘美だった。まるで酒でも飲んだみたいに、それ以上に、多幸感がこの身を覆ったものだ。

だから、帰ってからそれもそれを味わいたい。あの幸せなキスを行いたい。

だから頑張つて殺さなければと思いなおし――

「……かあ、さん」

――その言葉を聞いて、何かが目醒めた。

その言葉は、ただ家族と会いたいという願望だった。

犯罪組織に身を置いて、何人も人間の人生を狂わせたものでも、家族はいる。

そんなことを自然に思い、そして何かに気づいて、五十鈴は醒めたのだ。

――そうだ、自分は家族を捨てた。友だちを捨てた。井草を捨てた。

………なんでだ？

そんな自問と共に、五十鈴の記憶は過去へとさかのぼる。

「……………ふわあ」

午後11時30分ジャスト。9時半から続けてきた予習復習を終わらせ、五十鈴はあくびをする。

そして立ち上がると、十分ほど読書を行う。

本棚から本を取り出すと、それをばらばらとめくる。

適当に斜め読みしている風にしが見えないが、それは違う。

五十鈴の人に言っていない特技は速読術だ。中学一年生の時に存在を知り、父親が何となく買ってきたがあきらめたハウトゥー本をこっそり持ってきて習得してから、五十鈴はこの寝る前の速読を365日三年間欠かさずに行ってきた。

ちなみに今日読んでいるのは、「誰でもできる基礎体力。体育の授業で高評価を取れる身体づくり」である。

そして本棚の一部に目を向けると、五十鈴はフンと不満げに鼻を鳴らす。

その棚に置かれているのは、どれもが趣味の為ではなく自分を高めるために置かれている本だ。

美味しくできる料理講座―これさえ守ればまずくはならない。

非効率的勉強法からの脱却―ガリ勉よりもテストをこなせ！

綺麗な女性の日常生活―気品を持った女性になるための100の方法。

素敵な猫の被り方。人に見られたくない自分を隠す魔法のワンポイント。

等々、合計十数冊。

これを一日ずつローテーションを組んで、速読で毎回頭に叩き込む。

そして毎日一時間基礎体力を向上させるトレーニングを積み、そして二時間の間習得した高効率の勉強方法で学問を鍛え上げる。

五十鈴は天才肌だ。何事も要領よくこなしてしまうと。

井草や伊予、そしてクラスメイトなどにはそう見せかけている。

だがその実態は、井草を超える努力をしたうえで、毎日の時間をある程度削っているからこぞできることである。

はつきり言えば、五十鈴はこんな自分が好きではない。

努力をしなければよりよく見せることができない、秀才止まりの自分が情けない。

これだけ努力してなお、伊予や井草に届かない自分が、五十鈴は嫌いだった。

……枢五十鈴は、年頃の少女だ。

この頃の学生としては珍しく、人の数倍の努力をして、それに見合った成果を出すことができる。それは間違いなく美德である。

だが、同時にどこまで五十鈴は年頃の学生だった。

努力をどこかで格好悪いものとして見て、努力を隠す。そして、そんな努力をしなれば高い成果を出すことができない非才であることがいやでたまらない。

彼女にとって不幸なのは、幼馴染である井草と伊予が、そんな五十鈴の努力を上回る成果をしっかりと上げていることだった。

総合バランスでは五十鈴がうえだろう。だが、身体能力では毎日のんきに過ごしている節がある井草に負ける。勉強においても、効率のいい勉強方法を常に考えているわけではない伊予に負ける。

二人が大事な幼馴染であることに偽りはない。五十鈴も、2人と一緒に過ごす日常が温かいものだと感じている。

しかし、それと同時にどうしても二人に対する嫉妬心が隠せないのが、彼女の幼稚さであった。

それに気づいたのは、中学三年生の冬だった。

より厳密にいうなら二月だ。バレンタインデーの時に、はたと気づいた。

毎日早朝一時間かけて基礎体力を鍛えて、さらに夕方にもトレーニングをこつそりしているのに、井草に体育の成績で勝てない。

そんなくだらない嫉妬心で、いつも義理だとかまかして作っている、チョコレートは今回は作らなかった。

どうせ、伊予が作るしいいだろうと思つたら、伊予も珍しく作つていなかった。

そのせいで井草が少し拗ねていたので、帰りにコンビニでの買い食いをちよつと奢つてやろうと思ひながら、五十鈴は学校からの帰り道をいつもの三人であるている。

そんなとき、通りすがつた車が止まつたのだ。

「お、伊予ちゃんじゃん♪ 今帰りかい？」

「あ、無有さんっ」

ちよつと顔を赤らめながら、車の窓を開けて声をけてきた男に伊予はそう返事を返す。

「伊予、その兄ちゃん、いったい誰だよ？」

「無有影雄さんつていつて、私の家庭教師さん。大学生なんだ」

井草は伊予に説明されて、これまたちよつとぶぜんとしている。

だが、五十鈴はすぐにわかつた。

ごくわずかだが、伊予は声のトーンが少しだけ上がっている。どこかうれしそうな女の声だ。

……なるほどお。恋に恋する女の子つてわけね？

年頃の女の子が、馬鹿に見える同年代の少年より年上のイケメンに憧れるのはよくあることだ。伊予もその口だつたのだろう。

まあ、すぐに冷めて井草の元に戻るだろうと思いながら、五十鈴はしかし、どこか心の中で黒い感情が芽生えるのを感じていた。

そしてそれをごまかすように、しかしその感情に乗っかるかのように、五十鈴は無有に笑顔を見せたのだ。

「よろしくね、お兄さんっ。私は枢五十鈴で、こっちのオバカは井草・ダウンフォールつて言うの」

……思えば、これが運命の分岐点の一つだったのだろう。

自分を特別に見せたい。今の自分より上の存在になりたい。

たいていの人間が一度はそう思い、そのために馬鹿をやる時期がある。

五十鈴の場合は、努力を格好悪いものとみなす風潮だったが、しかし彼女はさらにもう一つ馬鹿をした。

「え？ あんたたちまだ未経験なの？」

「うっせえな！ どうせ俺は童貞だよ!!」

「わ、私も……そうかな？」

茶化すようにそういえば、井草はあからさまに動揺しながらやけになり、伊予は顔を赤らめながらそう答える。

だが、五十鈴はすぐにわかった。

伊予の反応は、凶星をつかれた者のそれではない。其れとは別の、何か照れくさくて嘘をついたもののそれだ。

どうやら、無有と致したらしい。大学生ともあるうものが、高校一年生になったばかりの少女に手を出すとは、無有もいわゆる馬鹿という類らしい。

しかし、そこを問題にする精神的余裕は、五十鈴にはなかった。

……五十鈴はこの時点で処女である。これもネタの一環であり、あとでばらすつもりだった。

気の置けない関係だからこそできるバカ騒ぎ。これはそのつもりだった。

だが、伊予が自分より先に進んでいるという事実が、五十鈴の心をざわつかせる。

—自分は、また伊予に負けるのか。

「……で？　そういう五十鈴はどうなんだよ？」

井草がこういつてくることは想定内だった。

この馬鹿は。どこか人と違うところがあって、それに惹かれるところがあるが、しか

し馬鹿である。

このどセクハラにしてデリカシーの無いところが、年頃の少年らしくてほつとすると
ころもあるのだが、しかしタイミングが悪かった。

「……フツ」

得意げな風を装って、五十鈴は演技する。

伊予に負けたくない。井草にカツコつきたい。

そんな、くだらない嫉妬心と虚栄心から、五十鈴は道を踏み外した。

「しつかりきつかり高校デビューしたわ。井草も、童貞を拗らせそうになるぐらいなら
相手したげるから、相談しなさい？」

そう、得意げに言うことしかできなかった。

それから一月後だ。井草に呼び出されたのは。

「大切な相談があるから、伊予に知られずに来てほしい」

少し考えれば、これが五十鈴に対する告白ではないことは簡単にわかる。

大切な話ではなく、相談という時点で簡単にわかる。むしろ伊予に関する話になるとぐらいい、少し考えれば想定できそうなものだ。

だが、五十鈴はこの呼び出しに歓喜していた。

「こ、これ、まさか愛の告白!？」

などと勝手に舞い上がる。

ずっと好きだった幼馴染の少年。

昔はいじめられていたのを正義感から庇って、それからなんとなく腐れ縁が続いていた。

しかし、普通の少年らしいところを作りながらも、見る見るうちにスポーツ万能になつていった少年が、眩しく思えた。

そしてどこか人とは違う物を感じさせるところに、惹かれ始めた。

枢五十鈴は、井草・ダウンフォールが好きだ。

これだけは、伊予には譲れない。そんな対抗意識が芽生えてしまう。

そして、伊予は無有に夢中だった。この隙は大きい。

このチャンス逃すわけにはいかない。必ずOKと言おう。

そんな、負け続けのライバルによく勝てた喜びを胸に校舎裏に呼び出され――

「……卒業式に、伊予に告白しようと思つてんだ」

—完璧に、自分が独り相撲を取っていることを思い知らされた。

「だから、さ？　そうなたらつまりエロいことするだろ？　その、童貞丸出して失敗したくねえんだよ」

顔を真っ赤にさせて、気恥ずかしいのか視線をそらしながら告げる井草に対して、五十鈴はいたずらつ子のような笑みを意図的に浮かべる。

この時、五十鈴は子供じみた虚栄心で、内心の怒りを出さないように努めていた。

そして五十鈴はこの時には気づいていなかったが、これは五十鈴の身から出た錆である。

経験があるから、そういう経験を積みたくないなら自分に頼め。五十鈴自身がそう言ったことだ。井草はそれをうのみにしたに過ぎない。

だがしかし、子供であった五十鈴はそれを認めることができず、井草に内心で怒りの感情を持っていた。

「……すんません五十鈴さん！　入学式の時のあの話、本気にさせてください!!」
そんな、勢いよく頭まで下げる井草。

ここで大人の女らしく、「それは気にしすぎである」とでもいえばよかった。
それともはつきりと、「伊予は無有に夢中だ」といえば話は変わっただろう。

むしろここで「ぶざけんな！」と怒って本音を告げれば、井草の性格ならうまくいっ

たかもしれない。

だが、五十鈴はここで虚栄心にしたがってしまった。

「……しつかないわね！　このお姉さんが手取足取り教えてあげるわよ!!」

……この日、枢五十鈴はさらに道を踏み外した。

それから数日でS○Xのハウトゥー本を読みこんで、技術を取り込んだ。

そして童貞ゆえにその手の経験など皆無の井草をごまかしながら、五十鈴はアプローチを重ねる。

ことあるごとにキスをねだり、それとなくデートの練習を誘ってみたりした。

だが、井草はそれを固辞する。

「それは、伊予に取っておきたい」

その言葉が繰り返されるたびに、五十鈴の心の中の闇は増えていった。

そして、其の間も五十鈴は伊予の様子から、無有との経験が増えて言っていることを察していた。

それもまた、五十鈴の心をゆがめていく。

そのうちに、五十鈴の中で一つのアイデアが思い浮かんだ。

……無有にモーションを掛けて、自分が無有の彼女になってしまえばいい。

名案どころか愚策でしかない。どう動いても今の関係が壊れるリスクが大きい、明らかな失策だった。

だが、五十鈴は知らぬ間に追い詰められ、視野が狭くなっていた。

この愚行こそが、自分にとっての最善策だと思うぐらいには、五十鈴は周りが見えていなかった。

伊予も井草も裏切って、家族もそんなことをしてきた五十鈴にいい顔をしないだろうことも、考えればわかる。

だが、子どもゆえに向こう見ずさはまさにそれを考えさせることがなく――

「いいねえ。俺、そういう展開大好きだよ」

この流れを、五十鈴は予想できていなかった。

もつと戸惑うものだとはかり思っていた。もしくは、大人らしく説得してくる可能性すら考慮していた。

故に、五十鈴は無有の行動に対応できなかつた。

「じゃあ、先ずはあいさつ代わりに――」

近づく唇に、どういふことか理解することができない。

ただ、心のどこかで優越感があつたのは確かだ。

伊予を超えられる。伊予に勝てる。

そんな優越感が拒否感を上回り、五十鈴はそのまま唇を預ける。

舌が入り、そして唾液を交換する大人のキス。いきなりそれなのはびっくりだが、しかしそれゆえに勢いに飲まれるままに飲み込み――

そのあとのことは、幸せな感覚に飲まれるままでよく覚えていない。

ただ覚えてるのは、無有が告げたこの言葉だ。

「だったら一度復讐したらどうだよ？」

その言葉に、五十鈴は救われたかのように勢いよく振り返り―
「すごい頑張ったねっ。きつとナイアルさんもほめてくれるよ！」

―そう、変身を解除して満面の笑顔を浮かべる伊予の全身は、
返り血で真っ赤に染まっていた。

その瞬間、五十鈴は全てを悟る。

―何もかもを間違え続けてきたのだ、自分は。

努力していることを隠さず、堂々としていればよかったのだ。

頑張っているのに何でと、最初から文句の一つぐらい言えばよかったのだ。

見栄を張らずに、処女だと告げていればよかった。

井草の頼みに、断るなり怒るなりすればよかったのだ。

無有に……否、ナイアルにモーションをかけるなんて、
八つ当たりをする必要なんてなかったのだ。

だが、すべてが遅すぎた。何もかもが手遅れだ。

伊予はもう、手遅れだ。五十鈴も、既にこの手を汚している。

なんで、ナイアルの本性とこの裏の顔を知ったのに、
素直に言うがままにナイアルの与える快樂という褒美を望むままに欲してこんなことをしたのかはわからない。

それほどまでにストレスがたまっていたのか。なら、
そこまで歪んでいてなんで今更

正気に戻ったのか。

だが、それでも断言できる。

もう、手遅れなのだ。

今更正気に戻ったところで、戻る場所などない。家族も井草もクラスメイトも、今の五十鈴を受け入れてなどくれないだろう。資格もない。

逃げ出したところで、行く当てなど何も無い。

抵抗したところで、殺されるだけだ。

なら、もうするべきことはただ一つ。

「……………そうね」

作るべき表情を覚悟し、五十鈴は変身を解除する。

そして、露悪的な笑顔をつくって五十鈴に微笑んだ。

「しっかりいっぱいご褒美をもらいましたよう？ それぐらいしかたのしみもないんだから」

—もう、ニゲルコトナドテキハシナイノダカラ。

そしてそんな日々が一年ほどたった。

本性を現したナイアルは、自分たちをほかの男にあてがったり、枕営業のような真似を要請した。

伊予はそれをキス一つで快諾する。戸惑っていても、キスをされればその喜びのままに自発的にやるようになっていた。

ゆえに五十鈴もそれに倣う。

……初めてナイアルにキスをされたときの喜びはもうない。厳密に言えば酒の酔ったかのような気分になることもあるが、それも自分がしていることを思えばむなしいだけだ。

それでも、男に貪り食われる悦楽だけを唯一の縋りどころとして、何度も何度も殺し合いを続ける。

悪を装うことも慣れた。だが、それに何の意味があるのだろうか。

どうせこのままいけば、自分は野垂れ死ぬだけだ。なら、これ以上罪を重ねてまで生きて何の意味があるのだろうか。

何度も精神的苦痛で吐いた。こっそり外に出て、精神安定剤を手にしたこともある。しかし、それでもこれ以上隠し通せる気もしなかった。

いつそのこと、伊予と無理心中をすることすら考えた、その時だった。

……将来的な敵対組織の一員の中に、ピス・ダウンフォールの名を見つけたのだ。

ピス。井草の保護者だった、年齢不詳の女性。自分や伊予と会うことはめつたになかったが、あつたときは何かを奢ってくれたりなど優しくかった。

この世界に入ってから知った、天使や悪魔などの裏の存在の实在。そしてその一角である墮天使陣営、神の子を見張るもの。その有力警戒対象である指導者アザゼルが直轄している部下。

そのメンバーに、ピスがいた。

ピスは井草と共に行方不明になっていた。なら、井草もいるのかもしれない。

だいぶ行動を共にしてきたことで権限もあつた。ゆえに、勘付かれないように調べぬいた。

そして、井草の姿を見つける。

……悲しみのあまり泣きたくなつたのは久しぶりだった。

井草はカッコよくなつた。大人の雰囲気を漂わせ、しかし意図的に飾ることのない、落ち着いた青年となつていた。

同時に、井草が自分の煽りで伊予を犯したことを心から悔やんでいることも分かつた。それほどまでに、井草は自罰的で自分を評価しない人物になつてしまつていた。

五十鈴はこの時に決意したのだ。

「……なろう」

正義の味方ではない。今更、どの面を下げてそんなことができるというのか。

井草の味方にでもない。あれだけ傷つけておいて、そんなことをする資格もない。癒す権利などないし、守る許可など下りるはずがない。

そう、なりたいのそんなものではないのだ。

血と臓物と悪逆に汚れた自分になるべきなのは、井草のためになるべきなのは――

「邪悪に、なろう」

井草・ダウンフォールが心から自分たちを憎んでくれるように。

憎しみを全力で叩きつけられるにたる、邪悪になろう。

そうすれば、井草の自罰的な感情も薄まるだろう。恨みと憎しみをたたきつけて自分たちを殺せば、井草も踏ん切りがつくだろう。そして、少しは前を向けるはずだ。

幸いなことに、井草の周りには井草の過去を知っても彼を受け止めてくれそうな人がたくさんいた。

そして、実際にあって恨みを買うような真似をしてみれば、井草のために怒ってくれる者たちが何人もいた。

なら、五十鈴自身が悪としてふるまい、悪逆らしく井草の心を踏みにじる形で過去を

暴けば、彼らは必ず井草に味方し、自分を敵視するだろう。

彼は人に恵まれている。なら、自分も伊予も必要ない。むしろ、邪魔なだけだろう。殺されよう。恨みのままに、憎しみのままに。

全ての邪悪を自分たちが背負い、井草が被害者だと思われるようにふるまおう。

そうだ。きつと、自分は――

「ただ、殺そのためされるだけに生き恥そさらしてきたのよ、きつと」

その決意だけが、五十鈴の望みとなったのだ。

18話

そして、その胸の内は全てがさらけ出された。

それを不幸だと、あつてはならないことだという乳を司るといふわけのわからない神のおせっかいで。

「……あ、いく、さ……」

動揺する視線が、井草にむけられる。

井草もまた、明らかに動揺していた。

幼馴染の歪みをしつて、嫌悪感を抱きなおしたのだろう。

それは願つてもないことだ。嫌われてさえしまえば、五十鈴を殺すことに躊躇もなくなるだろう。

そして殺すことでけじめを付けければ、井草は今度こそ前を向ける。

頼れる仲間たちに支えられ、未来に生きることができる。寄り添う二人の少女のうち、どちらかを選んで添い遂げるだろう。もしかしたら墮天使らしくハーレムでも作るかもしれない。

だが、五十鈴はどこかで胸が締め付けられるのを感じていた。訳が分からない。今更だろう。

あれだけのことをした。それから人を殺し続けてきた。そして、何度も井草の心を抉った。

そこまでしたのは憎悪を向けられたいからだ。そうでもしなければ、井草は躊躇してしまおうと思ったからだ。

だから、これでいい、これでいいはずなのに――

「あ、その、これは……」

想像以上に動揺している自分に、五十鈴は困惑する。

そして思考を回転させて、すぐに気づいた。

ああ、これはまずいではないかと。

邪悪をしているふりでは、意味がないではないか。それでは恨まれないかもしれない。い。

そしたら、井草は吹っ切られられないかもしれない。それはまずい。

「い、いやねえ。こんな、わ、訳の分からない、ち、ち、乳神とかいう奴の細工なんか、ホントに、ホントに信じてるの？」

唇が震える。どもってしまふ。

「私は好きででで邪悪に生きてるのよ。そ、そして、本気の井草と殺し合いがしたくてたみやらないの」

呂律まで、回らなくなっている。

「だから……だから……だからね？ あなたは私に同情する必要のないのよ？ 思う存分恨んで、憎悪を叩きつけなければいいわけ、わけ……で……っ」

早く続きを言わなければならぬ。

そうしなければ、井草が恨んでくれないだろう。

恨まれなければ、罰されなければ、殺されなければ――

「あなたは、私を殺しにきなきやいけないのよ。だってそうでしょ？ そうでもしないと――」

――あなたは、引きずられてしまうから。

そう言おうとした瞬間だった。

「この……馬鹿――」

涙すら流した井草に抱きしめられ、五十鈴は言葉を詰まらせる。

抱きしめられた瞬間、五十鈴は全てを悟った。

「なんで、なんで……俺に気づいた時に助けを求めてくれなかったんだ……っ！」

震える井草の身体を感じて、五十鈴はようやく自分がまた間違えていたことを悟つ

た。

「俺が、頼りなかったからだよな？　ゴメン……ゴメン……俺が君を助けられるだけの強さを持つてなくて、本当に……ゴメン！」

――井草は、枢五十鈴を殺したら一生引きずってしまいうぐらい、五十鈴のことを大切に思い続けてきたのだ。

あれだけ邪悪にふるまって、ヘイトを高めようと努力して、徹底的に痛めつけて。そのうえで井草は五十鈴のことも伊予のことも嫌っていなかった。

ずっとずっと、大切な幼馴染が邪悪になっていてのを見て苦しんでいただけだったのだ。憎むなんて考えもしていなかったのだ。

「馬鹿でゴメン！　デリカシーが無くてゴメン！　あんなお願いをして、本当にゴメン！！」

泣きながら、全力で後悔を口にしながら、井草は五十鈴を抱きしめる。

井草の中は後悔でいっぱいなのだろう。

五十鈴の気持ちに気づいていればよかったのだ。

五十鈴の努力に気づいていればよかったのだ。

五十鈴の努力を認めてやればよかったのだ。

五十鈴にあんなことを頼まなければよかったのだ。

もつとうまく対応して、ピスに最初から助けを求めていればよかったのだ。

可能性が低くても、五十鈴が何人も殺している間に五十鈴たちの行方を捜していればよかったのだ。

そうすれば、五十鈴がここまで苦しむことはなかったのにと、心から後悔していた。

「だから、だからさ！ 頼むから……」

そして、まっすぐに井草は五十鈴を見つめて、涙を浮かべながら優しく微笑む。

「—これ以上、自分から邪悪に染まろうなんて、考えないでよ」

その言葉に、五十鈴は本心から後悔する。

「……ごめんね、井草」

馬鹿なことをした。またしても、根本からやり方を誤った。

そして、どちらにしても—

「……本当に、ごめんっ！」

—もう、手遅れなのだ。

その言葉共に五十鈴は井草の鳩尾に拳を叩き込む。

そして生まれたすきを利用し、五十鈴は距離を取ると空に舞う。

「い、すず……っ？」

崩れ落ちながらも、五十鈴に手を伸ばす井草に、五十鈴は本心からの微笑を見せる。

もう、十分だ。

欲しかったものはもらった。罪にまみれた自分には、あまりに多すぎる物をもらってしまった。

だから、もう十分だ。

「ごめんね、井草。……でも、もう手遅れだからっ」

これ以上は、もらえない。

「私、何人も殺しちやっただから。勝手な理由で、意味のない自己保身のために、何百人も殺し続けちやっただからっ」

涙はこぼれる。それがたまらなく申し訳ない。

「何人殺したかわからない。数えたかったけど、余裕がなかったから無理だった。顔も……名前も……っ」

命がけの戦いの中で、殺した人数を数え続けられるほど五十鈴は傑物ではなかった。五十鈴は誇り高い悪になることもできない。せめてもの弔いも、贖罪もすることはできない。

そんな五十鈴を、井草に背負わせるわけにはいかなかった。

「だから……ごめんね。そして——」

本心から謝り、しかしそれだけではなかった。

受け止めようとしてくれた。五十鈴が一番悪いのに、心から井草は悔いて謝ってくれた。

今ので確信してしまった。

からくりいすず 枢 五十鈴は、井草・ダウンフォールが好きだ。一人の男として愛している。

昔の、ちよつとしたものではない。本心から、一人の女として、五十鈴は井草に惚れ直している。

それがわかった。それだけで、十分すぎるほどもらってしまった。

だから、最後にこれだけは伝えなければならぬ。

そう、本心からの――

「――ありがとう。私、貴方を好きになって、ホントによかった――」

――本心からの笑顔で感謝の言葉を告げ、五十鈴は其のまま飛び去って行った。

その光景に、イツセー達は何も言うことができなかつた。

それどころか、イツセーは後悔すら覚えていた。

最初に五十鈴と対峙した時。ディオドラとのレーティングゲームで、お互いに合流した時。もしくは、五十鈴が共闘の使者として派遣されたとき。

もし、五十鈴に乳語バイリンガル翻訳を使っていれば、追撃する余裕ぐらいはあったはずだ。

その時に使っていれば、本心を聞き出していれば、井草は五十鈴を捕まえられたかもしれない。自分たちで捕まえることができたかもしれない。

だが、今は不可能なのだ。

「隙だらけだぞ、赤龍帝!!」

「邪魔すんじやねええええ!!」

ヴォルフイーツを渾身の力で殴り飛ばし、イツセーは吠える。

五十鈴を追撃する余裕はない。この激選では不可能だ。

「……抜けたか。しかし追撃をする余裕はないな」

ラウバレルも舌打ちをするが、しかしこちらも戦闘を重要視しているため、五十鈴を追撃できない。

出なければ、事実上の脱走を行った五十鈴を頼ってはおかないだろう。殺しに行く可能性は十分あった。

それぞれが別の理由で五十鈴に気を取られているなかもっとも冷静だったのはロキ一派だった。

「よくわからんが、しかしその隙は逃さん！　まずは譲渡が面倒な赤龍帝からぶっ潰しだ!!」

ムジオルニアを構えて、ロキはイツセーに迫る。

それを回避しながら、イツセーは乳の精霊に声を張り上げる。

「おい！　いつになったら加護つてのは来るんだよう!」

―申し訳ありません。加護が莫大すぎて、すぐにはもたらせないようです。

タイミングが最悪だと、イツセーは歯噛みする。

五十鈴の隠された真実に、皆が動揺している。

五十鈴の在り方に怒りや嫌悪を覚えている者たちは多かった。そして、それでも井草

は五十鈴を想っていた。

そんなところでこれである。完全に動揺してしまうだろう。

ふざけるなど怒るものもいるだろう。逆に嫌悪感がわく者もいるだろう。

だが、イツセー達は人が良すぎた。

五十鈴に対して憐れみを覚えてしまう程度には、人が良すぎた。

このままではまずい。誰かが殺されてしまう。

そして、その動揺についてロキだけではなくフェンリルまでもがイツセーを狙う。

このままでは乳神の加護が来る前に、イツセーは追いつかれて―

「俺のライバルに手は出させないさ」

その瞬間、ヴァーリが空間ごと半減を行ってロキとフェンリルを足止めする。

そして、それと同時に莫大な力が放たれる。

「動揺しているところ悪いね。俺たちは本来の目的を果たさせてもらおう……！」

その言葉に、イツセーは思い出す。

五十鈴はヴァーリ達の目的をこういつていた。

ヴァーリたちの目的は、ジャガーノート・ドライブ 覇 龍 と支配の聖剣を使ってフェンリルを自分たちの

ものとするのだと。

それに気づいた瞬間、ヴァーリは渾身の力を介抱する。

「我、目覚めるは——」

〈消し飛ぶよっ！〉〈消し飛ぶねっ！〉

「覇の理にすべてを奪われし、二天龍なり——」

〈夢が終わる！〉〈幻が始まるっ！〉

「無限を妬み、夢幻を想う——」

〈全部だっ！〉〈そう、すべてを捧げろっ！〉

「我、白き龍の覇道を極め——」

思わぬ展開で動揺した隙をつかれて、ヴァーリに目的を果たされてしまった。とはいえ、ヴォルフイーツたちを相手に美候たちは大立ち回りを演じている。どうやら共闘はきちんとしてくれるようだ。

そして、その時ミヨルニルが一気に軽くなった。

—乳龍帝。乳神様の加護が届きました。これで当分はミヨルニルを使えます。精霊の言葉の通りに、ミヨルニルは雷撃をはなち、莫大なオーラを纏う。

その出力はムジヨルニアと同格。これなら、トールイーツと化したロキとも互角に渡り合えるだろう。

—あなたは巫女のおっぱいを救い、イーツのおっぱいを救う一手を打ちました。ゆえに乳神様の加護は大盤振る舞いです。三十分は使えるので、ご自由にお使いください。三十分間ミヨルニルのレプリカが使い放題。

まさに大盤振る舞いである。というより、それだけのことができる乳神はどれだけ高レベルの神格なのだろうかと、ふと疑問に思う。

とはいえ、今は戦うことしかできない、余裕もない。

なら、せめて負けない。

ロキを倒し、皆で生き残る。そして、井草を五十鈴に合わせなければならない。

その決意を込め、イツセーはミヨルニルをロキに突き付ける。

「覚悟はいいか、神様？」

「ほう？ このムジヨルニアとトールの力を持つロキに、その程度で勝った気になったのか？」

「いまだ余裕を残すロキに、イツセーは静かに戦意を向ける。」

「そして、宣言する。」

「あんたは！ 俺たちが叩き潰す!!」

「そして次の瞬間――」

二つのミヨルニルがぶつかり合い、周辺を一気に吹き飛ばした。

19話

その余波に翻弄されながら、井草は何とか戦闘を行なおうとして、しかし動揺を隠しきれなかった。

五十鈴の本音を知った。

五十鈴の後悔を知った。

五十鈴の苦しみを知った。

五十鈴の本質を知った。

そして、五十鈴の覚悟を知った。

どこまで自分はバカだったのかと、井草は心から罪の意識を感じる。

何でも要領よくこなす天才肌。そんな風に五十鈴を見て、そこに至るまでの努力を斟酌するどころか、努力しているなどと考えもしなかった。

彼女が張った見栄をうのみにして、なんて酷い事を頼んだのだと後悔もする。

その結果がこれだ。五十鈴は拗らせてあんな目に遭った。

むろん、その殆どは五十鈴の自業自得で自己責任だろう。井草を責める者などそう多

くなく、五十鈴を責める者の方が多いだろう。

だが、大切な幼馴染に大事なことを隠して、挙句大切な幼馴染の苦勞を知らずにのほほんと生きていた。

そして五十鈴が苦しみながらも自分なりにけじめをつけようとしている間、井草は自己嫌悪にさいなまれて死に急ぐだけだ。

誰が許しても、誰が保証しても、井草は五十鈴に罪悪感を抱いてしまう。

そして、そんな状態でフェンリスヴォルフーツを、アスクをどうにかする事などできなかつた。

「遅い!!」

振るわれる爪が聖剣を弾き飛ばし、そして井草を切り刻む。

それを何とかしのごうとするが、しかし井草の乱れた精神では、それに対応する事などできない。

「井草さん!」

「井草!」

援護するべくニングとリムが駆け付けようとするが、しかし量産型ミドガルズオルムやスコルとハティがそれを妨害する。

リアス達も残りの敵の相手をするので精いっぱいだ。とても援護する余裕がない。

バラキエルの戦闘不能と五十鈴の戦線離脱が、大きく状況を動かし、ヴァーリの不在も影響は少しはある。

タンニーンを含めた、この場の四強のうち三人がいなくなった。この事実には状況は混乱していたのだ。

そして何より、五十鈴の真実を知った井草の動揺が最も大きい。そして井草自身、この戦場においては有数の戦力なのである。

敵のエース格が不調の間をつく。ごく当たり前の駆け引きだった。

「くそー……ここで、死ぬわけにはいかないんだよ!!」

何とか強引に振り切ろうとするが、しかしアスクの動きはそれを上回る。

「……あなたには同情するよ」

どこか共感を感じさせる声で、アスクは井草にそう言う。

しかし攻撃の手は緩めない。むしろ、今迄よりも攻撃は鋭さを増していた。

「だけど、負けられないんだ、こっちも。だから、死んでくれ!!」

そしてその攻撃が、井草の腹部に突き刺さる。

アーシアの回復は間に合わない、それほどまでの乱戦になってしまっている。

遠距離からのピンポイント回復を当てる余裕はない。広範囲回復では敵すら大量に回復してしまう。近寄ればその時点でアーシアは殺されるだろう。

そして、今のリムとニングでは、アスクを倒す事はできない。それほどまでの実力の開きがあった。

井草は詰んでいる。

だが、しかし、それでも――

「死ね、る……か」

かろうじて急所を避けながら、井草は唸る。

知ったのだ。分かったのだ。漸く理解する事ができたのだ。

五十鈴は井草の知る五十鈴の実像とはかけ離れていたかもしれない。

だが、井草の信じる五十鈴はまだ残っていた。

取り戻したい。

戻つても罪を背負い、償いの日々を生きる事になるだろう。下手をすれば、極刑もあ

るかもしれない。

だが、しかし、それでも。

……このまま野垂れ地ぬなんて結末だけは、迎えさせたくない。

抱きしめ足りない。謝り足りない。言葉を尽くし足りない。

そう、まだ五十鈴に何もできていない。

何よりも、何よりも――

「俺は、まだ―」

枢五十鈴という、努力の方向性を間違えやすい、それでも井草に償おうとした彼女に

「―なにも、償って……ないんだ……っ！」

「いや、終わりだよ」

その残酷な宣誓が、井草の命の命脈を断ち切る―

「させないのです」

―前に、ニングが割って入って魔剣でその一撃を受け止める。

強引な防御で、エクスカリバーとも打ち合えるだろう攻撃を受け止める。

魔劍創造で作られた程度の魔劍では、本来防げない。一撃で粉碎されるところか、受け流す事ができなければそのままニングも切り裂かれるだろう。

だが、その一撃をニングの魔劍は防いでいた。

「な……っ!？」

「させ、ないのです……っ」

其の在りえない光景にアスクが戸惑った隙について、ニングはアスクを蹴り飛ばす。そして、静かに魔劍を正眼に構えると、静かにオーラを収束させる。

小さいながらも、しかし戦意を感じさせるその背中。

だが、井草にはそれが嫌な予感を感じさせる。

「ニング? なに……を?」

ダメージが大きすぎて、すぐには動けない。

そして、リムは敵の攻撃を回避するのに手いっぱい、間に合わない。

「ニング!? やめやがりなさい! それは……だめですぜ!」

それでも強引に止めに行こうとするが、それがよくなかった。

後ろから量産型ミドガルズオルムの砲撃が放たれる。

リムはそれを回避には成功する。だが、着弾した余波までは防ぎ切れず、三十メートル

ルほど吹き飛ばされる。

そして、それが致命的なまでに状況を手遅れに挿せていた。

「死なせないのです。井草さんも、皆さんも……っ！」

オーラの奔流は増大化し、魔剣に輝きが生まれる。

そして、彼女は再び至ってしまった。

「やめやがれええええええええええっ!!」

バランス・ブレイク
「禁手化」

リムの絶叫と共に、ニングの魔剣が変化する。

その姿は、コカビエルとの戦いの時に使われた、合一化されたエクスカリバーにどことなく似ていた。

そして、そこから放たれるオーラの質と量は、極めて莫大。それこそ、合一したエクスカリバーを凌ぐレベルだった。

「なん——」

そして、一旦警戒の為に飛び退ろうとアスクが腰を落とす——

「——まずは一人!!」

——瞬で追いついたニングが、一撃でアスクを弾き飛ばす。

「な!？」

「アスク!？」

それに周辺のヴォルフイーツ達慌てる中、ニングは更に魔剣を量産型ミドガルズオルムの群れへと向ける。

その瞬間、魔剣が先別れしながら伸び、ミドガルズオルム達を貫いた。

貫かれたミドガルズオルム達は絶叫を上げる。その傷口からは煙すら吹き出ており、明らかに龍殺しの力を受けている事が分かる。

「龍殺し! 創造系神器では作り出すのは難しいと聞いたのだがな」

ロキはそう判断すると、イツセーが振り下ろすミョルニルを、ムジヨルニアで弾く。そして、素早く指示を出した。

「スコル! ハテイ! その女は任せる!!」

「ウオオオオオオオンツ!」

ロキの指示に従い、高速で駆け出すスコルとハテイ。

それぞれ左右から距離を詰め、そして神にすら届く爪でニングを切り裂こうとし――
「そうは、行かないのです」

一瞬で飛び上がって回避したニングは、紐で繋がった二振りの魔剣へと魔剣の形状を変える、其のまま二匹の子フェンリルに突き立てる。

そして、魔剣から莫大な力が放たれた。

「支配の聖剣でフェンリルを支配下に置けるのなら！ わたしでも子フェンリルぐらいは……！」

その言葉と共に、スコルとハティがどんどん小さくなっていく。

見る見るうちに力と共に小さくなっていった子フェンリルは、いつの間にか大型犬程度のサイズにまで縮まっていた。

そして、それを見たニングはちよつとおかしそうに微笑んだ。

「ふふっ。かわいらしいのです……よ……」

そして、ニングは力なく倒れこむ。

しかし、子フェンリル達は襲い掛からない。

むしろニングを守るように近づきながら、ペロペロとその頬を舐めるだけだ。

その光景を見て、ロキが唸る。

「スコルとハティを支配下に置いただど!? おのれえ……ならば!!」

その言葉と共に、ロキはマントを伸ばす。

その陰から、新たに十体の量産型ミドガルズオルムが現れ、火炎を撒き散らす。

「そろそろ終わりにしよう。今度こそ赤龍帝からぶつ殺しだ!!」

その抹殺宣言に、イツセーは決して引かなかつた。

ミヨルニルのレプリカを構えると、まっすぐに突撃しながらロキを睨み付ける。

「させるかよ！ ニングさんが頑張ったんだ、ここで俺が勝たなくてどうするんだ!!」
そして、再び莫大な雷撃がぶつかり合い――

「グオオオオオオオオオオオオ！」

突如現れた巨大な龍が、黒い炎を辺り一帯に撒き散らした。

20話

その黒い炎は、ヴリトラによるものだった。

匙元士郎を、切り札の一つとして神の子を見張る者が強化するという話があった。

その方法としては、おそらくヴリトラを封印した神器を使うのだろうとも思っていた。

だが、あれはもはや全部突っ込んだとしか思えない。ヴリトラがほぼ復活している。とはいえ、井草にそこまで気を向ける余裕はなかった。

「ニンググ……っ」

敵がヴリトラに翻弄されている隙に、井草はニンググに駆け寄る。

呼吸は安定している。脈は若干弱いのが、戦闘中だった事を考えれば落ち着いている方だ。顔色が少し悪いのは気になるが、すぐに命に係わるほどの様子ではない。

スコルとハティもこちらに敵意を向けてこない。本当にニンググは支配してしまったらしい。

状況は分からないが、しかしニンググは大きく状況を傾けた。

敵の精鋭であるアスクに大打撃を与えた。量産型ミドガルズオルムの多くを撃破した。そして、ロキの切り札である子フェンリルの内、二匹を無力化したのだ。

十分すぎる程に成果を上げた。それが、他人事なのに誇らしい。

その誇らしさこそが、井草の中で答えを出す。

「……そっか、俺、ニングの事も好きなんだ」

過去の輝きの象徴である、五十鈴と伊予。

未来へ進む希望を作った、リムとニング。

別ベクトルであるがゆえに、等しく大事な四人の女。

何て愚かな事だろう。不誠実にも程がある。

……目が覚めたら、断るべきか。

そんな事を考え始め――

「ニングー！ ニングニングニングニング!?」

――血相を変えたリムがニングに駆け寄って、井草は漸く思い出した。

リムは、こう言っていた。

ニングの魔剣は脅威だと。強度だけなら聖魔剣と互角だと。

これは、裏を返せば強度以外は聖魔剣に劣るという事だ。

にも関わらず、ニングの魔剣は聖魔剣すら超えるだろう成果を挙げた。

リムは、こうも言っていた。

ニングは優しい子だと。ゆえに、自分を犠牲にしてしまうのだと。

禁手についての話でこの言葉が出てくる。その意味は考えればすぐに分かる。

ようは、ニングの禁手は、自分を犠牲にする禁手なのだ。

「……リム？ ニングは……」

寒気すら感じて井草は聞こうとするが、それより先にリムは首を横に振った。

「死にやあしないでしょう。ですが、ただじゃあ済んでねえはずでさあ」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、リムはニングの手を掴んで首を垂れる。

「またやっちゃまった……！ また、ニングに禁手を使わせちゃまった……っ」

それが後悔だというのがすぐ分かり、井草は恐怖心すら感じる。

リムがニングに井草を譲ろうとするほどのもの。それだけの、強大な代償。

それは、一体何なのか。

その答えは、リムがすぐに話してくれた。

「ソード・ベース・サクリフアイズ干将莫邪の如し魔剣。その名の通り、干将莫邪と同じ理屈で魔剣を作る事で、桁違いの性能の魔剣を生み出す亜種禁手でさあ……っ」

干将莫邪。それは、中国にある伝説だ。

妻がその身を文字通り薪にして、その炎で夫が作った剣。

そんなを冠す亜種禁手。それをニングが改めて使ったという事は。

「……ニング!？」

井草は顔を真っ青にさせて、ニングを揺さぶろうとし、リムに止められる。

「万が一内臓でも差し出してたら、安静にしねえとまずいでさあ！ スコルとハティ！ 私がアーシアを連れてくるまで、ニングを守りやがるです!!」

「待つんだリム！ 前にも使ったって……その時は何を!？」

寒気がする。聞きたくない。

だが、聞かずにはいられない。

その時の代償の重さで、ニングが今回失った物の重さも理解できる。

理解する事は怖いだが、使わせてしまった自分がそれを知らないわけにはいかないのだ。

そして、リムは顔を俯かせて、絞り出した。

「……プルガトリオ機関に来るまでの、記憶でさあ……っ」

形勢は少しずつだが傾き始めている。

匙を何とか正気に戻す事に成功した事で、大半の敵は動く余裕すらなくなった。

その隙をついて、リアス達が、ヴァーリチームが、ムートロンが、そして大魔王派が敵を掃討して行っている。

「よし、戦闘不能になったフローズヴィトニルとヴァナルガンドを回収しろ！ ビルデ殿への手土産にする!!」

などとラウバレルが動いているが、今はそれを止めている余裕もないので、イツセーはロキに集中する。

「ろきいいいいいい!!」

「舐めるなあ!!」

両手で振るわれるミヨルニルレプリカを、ロキは片手持ちのムジヨルニアで迎撃。そして空いた右腕に魔法を籠めて、イツセーを殴りつける。

殴り飛ばされたイツセーは、勢いよく石切り場の隅にまで激突。半ばめり込んでしま

う。
それだけの事をロキはしてのけた。しかも、龍王化した匙が放つ黒炎を物ともしていない。

「トールのを宿した我を、龍王如きがどうにかできると思うな！ 貴様を殺したら次

は奴を始末してくれる!!」

そして、イツセーが起き上がるより早くロキが迫る。

「クソ! やられるかよ!!」

とつさにムジョルニアをミヨルニルで迎撃するが、片手で使った事がまずかった。

勢いよく、弾き飛ばされた事で胸ががら空きになる。とつさに火を噴いて牽制する

が、一瞬で飛びのいたロキは魔方陣を展開していた。

そして、その多重砲撃がイツセーに襲い掛かり――

「そうはいかんで、悪神」

割って入った影が、その全てを受け止めるなり弾き飛ばすなりしてのけた。

これにはイツセーもロキも度肝を抜かれる。

今この場にそれだけの事が出来る者がまだいたなど信じられない。

しかし、そんなとんでもない事をしてのけた男は、聞き覚えのある声をイツセーに投げかける。

「無事か、兵藤一誠。加勢に来たぞ」

「さ、サイラオーグさん!」

その男は、若手最強とも称されたサイラオーグ・バアル。

だが、その姿は趣が変わっていた。

黄金に輝く、獅子の鎧。

そんな莫大なオーラを放つ鎧を身に付けていたサイラオーグは、悪神ロキの魔法攻撃を完全には迎撃できなかつたのにも関わらず、戦闘に全く支障がなかつた。

それをなす理由こそ、黄金の鎧。否—

「獅子王の戦斧の亜種レングルス・ネメア禁手パランス・ブレイカー、獅子王の獣皮だ。お前の鎧にも引けを取らんどぞ？」

そう言いながら、サイラオーグは立ち上がるイツセーの隣に立つ。

ちようど、ロキがムジオルニアを持っていない方の手と相對する形だ。

「怪力は俺が受け持つ。お前はムジオルニアに集中しろ、兵藤一誠！」

「……はい!!」

言葉はいらない。必要な事は十分聞いた。

サイラオーグもイツセーも、付き合いはろくにならない。

だが、分かる事がある。

イツセーの愛するリアスは、サイラオーグを信頼していた。

サイラオーグの親族であるリアスは、イツセーを心底愛している。

肩を並べるのに、それ以上の理由はいらなかつた。

「いくぜ、神様さんよお—」

「悪いが、貴様を冥界の敵と断定する!!」

「よかろう、来るがいいー」

その瞬間、大規模な激戦が始まった。

文字通り神速で攻撃を行うロキを相手に、イツセーとサイラオーグは真つ向から食らいつく。

振るわれるムジヨルニアを、渾身の力で振るわれるイツセーのミヨルニルレプリカが迎撃する。

トールの怪力を宿したロキの打撃を、鍛えぬかれたサイラオーグの拳が凌ぎ切る。

余波だけでヴリトラの炎が弾き飛ばされるその光景は、まさしく神話の再現だった。桁違いの圧倒的攻撃が、連続で放たれる。

戦闘中にも関わらず、思わず見惚れる者達までいるその光景に、しかしロキは苛立つていた。

北欧を代表する神の一角である自分。北欧の戦神の代名詞であるトール。

その二つの力を組み合わせなお、たかが若手悪魔二人すら倒せない。

ゆえに、ロキも加減を完全に放棄する。

一瞬のスキが形成を逆転させかねない打撃戦の最中に、ロキは大量の攻撃魔法用の魔方阵を展開する。

そして、正確にイツセーとサイラオーグに狙いを付けた。

「神の御業を知るがいい！ 回避する余裕など、与えん！」

「ならば——」

「撃たれる前にぶっ飛ばす!!」

サイラオーグとイツセーの攻撃の密度が上昇する。

この極僅かな時間で倒さなければ、ロキに負ける。

ロキが勝ち抜けば、今度はオーデインやアザゼルが死ぬ。

そうなれば和平を結ぶ事も不可能だ。一気に情勢は傾いてしまう。

それだけは何としても阻止しなければならぬ。その覚悟で、徹底的に攻撃を叩き込む。

だが、しかし一歩足りない。

防戦に徹したロキの防御を崩す事はできず、そして魔方陣は発動され——

「——邪魔なんだよ、あんたは」

——数百もの光の槍が、魔方陣を一つ残らず貫いた。

「何だ?!」

思わず振り仰ぐロキの顔面に、踵落としが叩き込まれる。

それをなすは、レセプターイツ、井草・ダウンフォール。

鬼気迫る表情が仮面ごしにも分かる。

そんな状態で、井草は心から怒りをロキに向けていた。

「五十鈴は追いかけれない。リムは泣いた。伊予は今でもおかしくなってる。そして、ニングは自分を犠牲にした」

震える声を漏らしながら、井草は渾身の力を籠める。

それを、イツセーとサイラオーグの迎撃で手いっぱいだったロキはどうする事もできない。

そんな事を意にも介さず、井草は渾身の力を拳に込め――

「――そんな時に邪魔しないでよ、あんたはあ!!」

その拳が、ロキのイーツの力を爆散させた。

そして、その瞬間を逃すサイラオーグとイツセーではない。

残滓でムジオルニアを叩きつけようとするロキの懐に、サイラオーグが潜り込む。

「これで終わりだ、悪神ロキ!!」

そのボディブローが、ロキのあばらにヒビを入れる。

「があ……っ!? な、めるな!」

だが、ロキはその勢いを利用して距離を取る。

そして瞬間的に転移魔方陣を展開。一瞬で転移の態勢を整え――

「さっせんぞー!」

「いつて、イツセーくん!!」

二条の雷光が、転移魔方陣を吹き飛ばした。

そこにロキが視線を向ければ、そこには手を取り合つて雷光を放つた、バラキエルと朱乃の姿。

「……雷光うおおおおおおおおお!!」

最後のチャンス上台無しにされ、ロキが吠える。

だがしかし、それは最後のあがきでしかなかつた。

「終わりだ、ロキいいいいいいいい!!」

渾身の力で、イツセーはミヨルニルレプリカを叩き付ける。

そして、その全力にミヨルニルは応えた。

発生する莫大な雷撃の前に、ロキはもはやどうすることもできない。

「おのれ! 聖書の神は何を考えている! なぜ、人間に神すら殺す力を与えるなどと
いう狂気のさたをおおおおおおお!!」

そのロキの絶叫をBGMに、大出力の雷撃がその一帯を包み込んだ。

21話

ロキとの戦いの場だった採石場から数百キロ離れたところで、五十鈴は地面を掘り返していた。

正直井草は心配だが、あそこにいる事はできなかつただろう。

ムートロンや大魔王派が、あんな真実を知つて五十鈴を放つておくとも思えない。そして、そんな事になつて、井草は黙っていないだろう。

五十鈴は井草を読み間違えていた。あれだけ邪悪になれば、井草は五十鈴を心から恨んでくれるものだとばかり思つていた。本心から敵意を向けてくれるものだとばかり思つていた。

ところがこれだ。井草は未だに五十鈴を大事に思つていてくれた。五十鈴の本心を知つて、井草は自分の無力さや愚かさこそを恨んでいた。五十鈴のことを想つてくれた。いた。

だが、もう手遅れだ。

悪党同士の殺し合いではあるが、五十鈴は何人も殺している。

それだけなら、井草も墮天使の仕事で何人も殺してきたといい返すだろう。我を忘れ、井草をそそのかして傷を作った。

それだけなら、井草は乗せられた自分も悪いと言ってしまっただろう。

伊予が悪い男に引つかかっていると分かり切っていないながら、しかし自分もまた引きずり込まれて悪の道に行ってしまった。

それだけなら、井草は墮天使側でありながら対応を間違った自分にも責任があると
言ってくるだろう。

だが、これだけはどうしようもない。

「……………ぐ……………」

心臓が驚掴みにされるような激痛を感じ、五十鈴はすぐに錠剤を取り出すと唾液で飲み込む。

そして薬が効いてくるのを待ちながら、苦笑した。

どうやら、色々あった所為で時間が過ぎていたらしい。薬の影響が切れたようだ。

そして、薬の補充は限られている。ムートロンに戻れないのだから当然だ。

「ははっ。あとどれぐらい生きれるのかしらね」

そう言いながら、五十鈴は掘り返したトランクケースを取り出すと、慎重にカギを開ける。

掘り返された形跡はなかったが、ムートロンの超技術を舐めてはいけない。

とつこの昔に勘付かれていて、爆弾を仕掛けられているという可能性だつてあつた。ゆつくりと、ハストウールイツに変身してから開ける。

そこには、ビニールに包まれた札束と錠剤があつた。

……万が一に備えた、その場しのぎの生活費と薬だ。ムートロンにいられなくなった時の為に、こつそりくすねていたものの一部だ。

それを手にしたリユククサククに詰め直しながら、五十鈴はもう一つのトランクケースも確認する。

こちらでも中身は無事だつた。なら、ケジメはつけれる。

その事実心安ししながら、五十鈴は空を見上げた。

満面の星空が輝き、その美しさに思わず一瞬見惚れる。

昔の自分は、夜空がこんなに綺麗だという事を知らなかつた。

地方都市のなかで、ごく一部の人間と一緒に、代わり映えのしない毎日を送つていた。井草は期待していただろう。いつかそこから飛び立つ時が来ると妄信して、その立

場で、伊予や五十鈴を庇護するのだと、傲慢な優越感に浸つていた。

伊予は閉塞していただろう。その代わり映えのない毎日から飛び立ちたくて、しかしできなかつたので引つ張り出してくれる人を待つていただろう。

自分は、どうだったのだろうか。

そんな事を考えて、五十鈴は首を振ると立ち上がる。

今更そんな事を考えても、もう手遅れだ。

この錠剤が尽きるときが、五十鈴が死ぬ時だ。其れ迄せいぜいムートロンを引つ掻き回してやろう。

……ナイアルの目を盗んで、ムートロンの手が回っている日本の企業などはある程度掴んでいる。

後はもう、そこを潰す事で贖罪をしよう。ついでに金もごっそり手にしたし、ちよつとぐらい人生の最後を遊んでもいいかもしれない。

なら、どこを一番最初にするかを考えて――

「……そうだ。京都市こう」

今まで一度も行つてなかつた事を思い出して、五十鈴は観光がてらに悪党同士の喰い合いをする事を決めた。

「……ゴホツ!? ゴホゴホツ!」

そして、むせた。

肺に勢いよく入ってしまったらしい。かなりむせる。

思わず目に涙すら浮かぶが、しかし呆れ果てる。

「……こんなの、ニングに比べれば、ちやちなもんだよ」

そして、そのまま屋上に寝転がって、空を見上げる。

ぼんやりと夜空を見上げていると、足音が聞こえてきた。

「井草さん、飲みすぎですよ。後食べすぎです」

「……やけ酒ぐらいさせてくれない?」

イツセーにたしなめられ、井草は苦笑しながらそう言い返す。

普段と逆転している状態だが、しかしそれぐらい井草はダメージが大きかった。

イツセーもそれは分かっているのか、井草の隣に座ると、井草が残っていた柿の種を食べ始める。

ポリポリと音が響き、しかしそれだけだ。

その沈黙が十分も続いた時だろう。井草はぼつりと呟いた。

「子宮の機能が、ほぼなくなつたそうだよ」

その言葉に、イツセーは答えない。

当然イツセーも知っているだろう。アザゼルが検査したのだから、イツセー達の耳にも入っているはずだ。

ソード・パリス・サクリファイス
干将莫邪の如し魔剣。

ニング・プルガトリオが至った、禁断の亜種禁手。

所有者に二度と戻らぬ代償を背負わせる事を引き換えに、生成する魔剣の性能を莫大なものにする亜種禁手。彼女はそれを二回も使ってしまった。

一回目は、上級吸血鬼と戦い、増援が来るまでのぐ為に。二回目は、今回は、ロキ達の戦いで井草達を守る為に。

その結果は莫大だった。

一回目は、しので見せた。それから彼女の魔剣は、合一化したエクスカリバーや聖魔剣とも打ち合える頑丈差を得ている。

二回目は、趨勢を一時的に傾けて見せた。龍殺しの力で量産型ミドガルズオルムを倒し、敵の精鋭であるアスクを弾き飛ばした。更にスコルとハティを支配下に置き、今は突貫工事で作った兵藤邸の庭にある犬小屋で眠っている。

調べてみたが、エクスカリバーの性能を基本したうえで、聖剣でないがゆえに使えない祝福の力をアスカロンの龍殺しで補ったようだ。総合性能も、エクスカリバーの推定最高出力の八割ほどを發揮していた。

間違いなく絶大な成果だ。ロキを倒した井草やイツセーを超える成果を、オカルト研

究部で上げている。

だが、その反動はあまりにも大きすぎた。

一回目で、ニングはプルガトリオ機関に入る前の過去の記憶を全て失った。

今回は、子宮が機能をなくしている。卵巣こそ無事らしいが、受精卵を着床させる子宮が機能しない以上、最早自ら子供を生み育む事はできない。

どちらも大きな代償だ。人生を大きく左右するレベルだろう。

それだけのものを、ニングな自分達を助ける為に差し出したのだ。

「……弱いよね、俺達」

井草のその言葉に、イツセーは何も答えない。

そして、井草は続ける。

「俺は、結局変わっちゃいない。強いと妄信してた事から、強くなりたくないと願っているだけだ。弱すぎる……」

井草はそう弱音を漏らす。

五十鈴の苦しみに気づかなかった。

伊予と五十鈴が悪の道に引きずり込まれている事に気づきながら、対処を誤った。

そして、五十鈴の迷走に気づく事がなかった。

乳神の使いが来なければ、井草は五十鈴が悪に落ちたと思ひ込んでいただろう。そ

していつか、五十鈴の間違った願い通りに殺し合いをしていたはずだ。まったくもって愚かすぎる。未だに、井草・ダウンフォールという男は、愚か者だった。

「俺は、結局このざままで―」

「違うでしょ、井草さん」

イツセーが、井草の言葉を断ち切った。

その言葉に、井草はイツセーに視線を向ける。

イツセーは、まっすぐに井草を見つめていた。

辛くもある。悲しくもある。だが、決して絶望だけはしていない。

「弱いなら、強くなりましょう。進めないなら、今から進むしかないでしょう。一歩一歩、前に進むぐらいいしかできないでしょう、俺たちは」

「イツセー……」

イツセーもまた、シヨックを受けている。

だが、しかし、だからこそ。

イツセーは、もつと前に進もうと決心していた。

「……そう、なのです」

そして、その言葉を聞いて飛び跳ねるようにして起きる。

「ニング!?!」

見れば、リムに肩を貸してもらいながら、ニングが屋上へと出てきていた。

「どうしても、井草に会いたいわって言ってるもんでしたから……」

そう言うリムの言葉に、井草は頭痛を感じる。

「だったら俺を呼んでくればいいじゃないか」

「……あ」

どうやらリムも、相当動揺しているらしい。

二回も使わせてしまったのだから、相応にショックを受けているという事なのだろう。ある意味自分達よりも動揺してはおかしくない。

その事実を改めて認識しながら、井草は慌てて駆け寄った。

「いきなり夜風はちよつとあれだよ。すぐに中に――」

「井草さん」

とにかく気を使う井草に、ニングはまっすぐその目を見る。

そして――

「――ようやく、希望が見えたのですね」

そう、華やいだ。

「……………っ」

いきなり、何を言っているのだ。

そんな事より、もっと自分を大切にしろと言いたい。

自分が言う事でもないかもしれないが、そもそもニング達がいたからこそ改善出来てきた事だろうに。

そのニングが、なんで自分を大切にしないのだ。

思わず怒りたくもないが、それより先にニングのほつとした声が届く。

「少なくとも五十鈴さんには希望があるのです」

「そんな……ことは……っ」

「あるのですよ」

反論しかけた井草に、ニングはそう首を振る。

「確かに、五十鈴さんは自分の意思で罪を上塗りしたのです。なら、その罪を償わなければならぬのです」

そう、厳しい現実を突きつけながら、しかしニングは微笑を浮かべていた。

「でも、彼女の心は悪ではないのです」

そして、ニングは井草にまっすぐ目を向ける。

「だから、罪を償った五十鈴さんの居場所に、井草さんはなるのですよ」

「……なんだ」

井草は、そう言う他ない。

なんで、そんな事が言えるんだ。

「俺達が、いや、俺が不甲斐ない所為で君は、子供が生めないんだよ？ そんな目にあつて、なんでそんなに君は人に優しくできるんだ」

「それは違うのです」

静かに、ニングは首を横に振る。

井草が怒られる事などない。自分が怒る事などない。そんな事など、何も無い。

そう言外に告げながら、ニングはイツセーに視線を向ける。

「イツセーさんも、リアス部長を助ける為に、左腕を犠牲にしたのです。これは、それと変わりないのですよ」

その発言に、イツセーはぐつと息を詰まらせている。

そういえばそんな事があつたらしい。それが巡り巡って、リアスをフォーリンラブさせる事になったようだがまあそれはそれだ。

「大事なものを犠牲にしたのは確かにごめんなさいなのです。でも、それしか手がないなら、井草さんもリムも、イツセーさんもしたのではないのですか？」

その言葉に、井草は反論できない。

イツセーは献身の精神が強いので、確かにそれしか手がないならするだろう。

井草もリムも、汚れ仕事の必要性を知っている。だから、それを否定する事などできない。

「たまたま、私がする番だっただけなのです。だから、気にしすぎたらいけないのですよ？」

そう、これはただそれだけの事。

誰も死ななかつた。誰かがつらい思いをする必要があつた。その誰かがたまたま自分だっただけのこと。

だから――

「井草さんは責任を感じて、五十鈴さんを諦める事はないのですよ」

そう言つて、ニングは井草を抱きしめる。

その優しさに満ちた抱擁に井草は泣きそうになる。

「皆が知りました。みんな優しいのです。きつと、五十鈴さんに手を差し伸べることを否定しないのです」

そして、ニングは心から、それでいてどこか寂し気に、につこりと微笑んだ。

「私の事を大切に思ってくれるのなら、大事な人を手元に置いておく努力を欠かさない事をしてほしいのです」

そう、出ないと――

「色々なくしてまで守りたかったものが曇ったら、私が馬鹿みたいなのですよ」
その言葉に、井草は――

「――なら、俺はニングもあきらめたくない」

――心から、そう思った。

そして、井草はニングを抱きしめ返す。

壊れないようにやさしく。しかし逃がさないように強く。

繊細に、かつ豪胆に。井草はニングを抱きしめた。

「は、はわわわわ!!」

突然の事態に慌てだす、ニングに、井草は告げる。

さらに井草は器用に、リムもしっかり抱きしめていた。

「なにしゃがるのです!?!」

「あわわわ!!」

「なななな!?!」

リムもニングも、後ろのイツセーも慌てていた。

それを意にも介さず、井草ははつきりと決意を決めた。

ここまでさせたのだ。ここまでさせてしまったのだ。

なら、井草はそれに見合った何かをしたい。

だから、今から井草は最低最悪な決断をした。

「ニング、リム。俺は、墮天使だ」

そう、はつきり告げる。

そう、井草は墮天使だ。欲望に堕ちて黒く染まった天使の末裔だ。

なら、これを言う事に何もおかしい事はない。

「罪を悔やむ事しかなかった俺に、前を向かせてくれた。俺は、2人のことが大好きだ」

「にやあ!?!」

想定外の二連続告白に、2人揃って顔を真っ赤にする。

知った事か。言ってやれ。

後で素直に相談しよう。困った時はハーレム経験者のアザゼルだ。

井草・ダウンフォールは兵藤一誠の兄貴分だ。それはつまり、ハーレム王の兄貴分なのだ。なら、別にやろうとしてもいいだろう。

この優しい二人に優しさを返そう。幸せを諦めさせないでくれた二人に、幸せを返そう。

「2人が俺の背を押してくれた分、俺は二人を幸せにしたい。……いやならいやといってくれ。無理強いをする気だけは断じてない」

「い、いやいや、その、あの、私達教会の信徒なんですがねえ!」

しどろもどろになってリムが言い訳するが、しかし井草はここにして気はする。

「そこは置いて考えてよ。和平結んでるんだから少しぐらいいいでしょ? アーシアちゃんとゼノヴィアちゃんは悪魔だけど祈れるし」

「はうおわあ!?!」

言い訳を潰されて、リムは顔を真っ赤にして沈黙してしまう。

「あの、私、子供は産めないのですよ!?!」

「世界には代理母出産という便利なものがあるよ。それに、墮天使の技術力で何とかしてもらえるかもしれない」

ニングのその言い訳は許さない。そんな言い訳で彼女の幸せを奪いたくないから、この覚悟を決めたのだ。

「割とむちやくちや言ってるのは自覚してる。だけど、俺は君達が二人とも好きだって自覚しちゃったんだ」

「あの、ハーレム王作ろうとしている俺の立場は?」

イツセーが後ろから何か言ってきているが、それは無視する。

そして、井草は心底からまっすぐに二人を見つめ――

2 2 話

一方その頃、ナイアルはものの見事に呼び出されていた。

「……申し開きはあるか、ナイアル？」

「ナイアル殿、これはないぞ」

「流石にこれは、ちよつと問題だね？」

「ナイアル、汗かいてる」

上から順に、ホテツプ、ビルデ、曹操、オーフィスである。

はつきり言おう、これは査問会も同然だった。

そんな中、流石のナイアルも軽く冷や汗を流しながら視線を彷徨わせる。

「……隠し通せてると思ってるのが面白くて、放置してたらしつぺ返し喰らっちゃった。すまねえな」

素直に本音を言ったら、ホテツプから雷撃が放たれる。

流石に生身だと死にかねないので避けるが、今度は殺意が叩き付けられた。

とはいえ、ホテツプのE Eレベルはナイアルすら超える8, 0。アウターイーツまで

使った総合戦闘能力なら、禍の団ではオーフィスに次ぐ化け物である。シヴァやインドラと単独で互角以上に渡り合えるだろう。

そんな女の攻撃を受ける覚悟は、ナイアルにはなかった。

「コイツが幼馴染だったばかりに、私の部下にこいつが来る事になるとは……っ！」

「遊びが過ぎるのだよ、ナイアル殿。単独で行動させたのは完璧に失態だな」

ホテツプは頭を抱え、ビルデもため息をつく。

オーフィスは特に気にした風でもなくうつらうつらと舟すらこいでいるが、曹操もまた苦笑していた。

「どうするんだい？ どうも彼女、俺達が作戦をする予定の京都に向かいながら、ムートロンそちの息がかかったところを潰して回ってるようだけど？」

そう、問題はそこである。

五十鈴は戦線を離脱すると、何時の間にやら情報を集めていたのか、ムートロンの息のかかった企業を潰して回っている。

既に橋頭保の確保が出来る以上問題度は低いが、しかし野放しにするのもいただけない。

なにより、京都では英雄派が本格的な活動を開始するところなのだ。これは英雄派としては目の上のたん瘤になりかねない。

「責任はとってもらいたいね。誠意つてものを見せてもらいたいんだが」

「分かっているって。俺達、ムートロン先遣艦隊所属特務中隊は英雄派のグレートレッドおびき寄せ実験に協力する」

これは仕方ないといわんばかりの表情で、ナイアルはそう言う。

だがしかし、五十鈴に関してはそこ迄重要視してない風だった。

「それで、枢五十鈴に関しての刺客はどうするんだい？」

「そうだな。彼女を放置するのは些か問題になりかねないが」

曹操とビルデはそう意見するが、しかし、一番ナイアルを問題視していたホテツプは首を横に振った。

「……必要ない。半年もたぬ命の為に、戦力を態々送り込むのも面倒だ。本格的に我らに仕掛けてきた時に潰せばいいだろう」

そんな会議があつた次の日の朝、イツセー達に新しい仲間ができた。

「それでは皆さん。さつきまでアースガルズのヴァルキリーをしていたロスヴァイセです。今からリアスさんの戦車ルックになりました。よろしくお願いします」

と、何やら洗脳されたかのような表情を浮かべてそう挨拶するのは、オーデインのお付きだったロスヴァイセだ。

「冥界の年金や健康保険がアースガルズより魅力的で、将来の安定度が高いので悪魔になりました！ よろしくお願いします」

見事にヘッドハンティングされたようなものだ。

とはいえ、実際に福利厚生などでリアスの眷属はオーデインのお付きよりいいようだ。そこに嘘はない。

何よりこれはオーデインのミスでもある。

何とオーデイン、会談が終わった後、戦後処理をしていたロスヴァイセを放っておいて帰って行ってしまったのだ。

リストラ扱いされてもおかしくないだろう。なににより、今更戻っても何を言われるか分かったものではない。

そもそも未だにオーデインからの連絡がない。これは、完全に忘れ去られているのだろう。

と、いうわけでそこを置いてリアスが勧誘。実際問題グレモリーの眷属悪魔としての

待遇は、オーデインのお付きより好条件だったのが効いた。

北欧神話体系、アースガルド。どうやらグレモリーと比べると職場環境はブラックよりらしい。

「ふふふふふ。これでオーデイン様も知ったこつちやないわ。今度会ったらどうしてくれましょうか……っ」

しかも相当ストレスが溜まっていたらしい。オーデイン神の今後が心配である。

しかし実際、主神に手を出したら国際問題である。その時はロスヴァイセを取り押さえねばならないという、責任問題がリアス達について回る事になるのだろう。

そんな光景にイツセー達が苦笑する中、朱乃がタッパーをイツセーに差し出した。

「イツセー君、あまりものだけど、良かったらこれどうぞ」

イツセーが中身を確認すると、中身は肉じゃがだった。そしてかなり美味しそうである。

それをイツセーは一欠けらほどつまみ、口に入れる。

その瞬間、イツセーの表情がほころんだ。

「美味い！ なんつーか、おふくろの味？」

「うふふ。母様直伝の味ですわ」

そういつた朱乃は、すぐにふとイツセーの口元に目を向ける。

「あらあら、口にジャガイモの欠片が付いてますわ」

そういつた次の瞬間、朱乃は口でそれを取った。

つまり、唇で唇に触れたのだ。

「な、なななな!?!」

「うふふ、一応ファーストキス、ですわ」

いい笑顔で告げる朱乃だが、しかし問題はそこではない。

イツセー大好きイツセー派の女子部員達が見ていないわけがない。当然大ピンチである。

その絶対零度の空気に、状況は分からないがイツセーは窮地を感じ――

「はい、あーんでやがります」

「水なのですよ」

「え、あ、うん」

――その甘い空気に、全員の氣勢が削がれた。

なんとなく見てみれば、そのソファア―で、顔を真っ赤にした井草が、されるがままになつてた。

そして両隣にいるリムとニングが、やれ食べ物でも口に運んだり飲み物を注いだりしている。

「……違う、これ、キャバクラ。いや、行った事ないから知らないけど」

顔を真っ赤にさせてどうしたもんかとなっている井草に、2人はにつこりと微笑みながら抱き着いてきた。

それを甘んじて受ける井草に、2人は幸せ以外の何物でもない笑顔を浮かべる。

「殺し文句をもらっちゃったのです。責任はとってもらおうのですよ」

「信徒を墮落させちまったんですからねえ？　せめて面倒は見てもらいやせんと」

そう言いながら体を密着させてくる2人に、井草は悶える。

未発達ながらも柔らかい二人の感触に、井草は顔をさらに真っ赤にさせた。最早トマトである。

「……おのれえ、井草さんめ！　俺よりも早くハーレム王の道を進むだなんて……っ！」
大絶賛ラブコメをしているのに気づいていないイツセーが、嫉妬の視線を珍しく井草に向ける。

―井草のとんでもないプロポーズに、2人はそれを受け入れた。

イツセーの目の前で井草の頬にキスをした。イツセーは嫉妬でもだえ苦しんだ。井草は自分からプロポーズしておいて、照れすぎて倒れた。

そしてこれである。告白した井草が一番照れて、仮にも聖職者であるリムとニングがデレデレである。

「半ば一目ぼれしてから惚れさせ続けてきたのです、あんな言葉を言ったのですから、覚悟するのですよ?」

「まったく女殺しですなあ。ま、あんなこと言ったんですから、腹をくくりなせえ」
「は、はい! 頑張ります!!」

井草はそう答えるほかない。

そして、そう言ってから表情を改める。

戸惑うだけから、真剣に、何かを受け止める表情に。

「うん。頑張るしかないね、これは」

幸せそうに微笑みながら、しかし真剣な表情で顔を引き締める。

幸せを受け止め、そしてそれだけではなく守る為。更にはそれ以上を求める為に。

「受け容れてくれてありがとう。それに応えられるぐらいには、なってみせるよ」

その言葉と共に、井草は二人を優しく抱きしめる。

「えへへっ」

満面の幸福の表情を、リムもニングも浮かべていた。

「木場、ギャスパー。俺は、井草さんを祝福するべきか呪うべきか分からない……っ」

兵藤一誠は血涙を流してうずくまる。

それに対して「人のことは言えない」とツツコミを入れるべきかどうか、祐斗とギャ

「スパーは心から悩んでしまった。」

『アザゼル。何か良い事でもあったのかい？』

「まあな。バラキエルと朱乃の問題が解決した。井草も、ちよつとは光明見えてきたし、それ以上に良い事があったよ」

『そうか。しかし……ニング・プルガトリオがルシファアの末裔だとは思わなかった』

「ヴァーリを検査した時のデータと、ニングから貰った血液を照合したが、間違いねえ。そつちの上役が慌てそうだな」

『ゼクラム・バアルは取り込みを画策しているようだ。既に駒を一セット用意するよう
にアジュカに通達したようだよ』

「動きの速いこつて。ま、ニングもそのつもりらしいから問題ないがな」

『そうなのかね？ 信徒としては悩むところもあると思つたのだが』

「……井草がニングとリムに同時に告白した。で、2人はそれを受け入れたよ」

『なるほど、愛は全てを超えるからね。私も気持ちは分かるよ。そうか、それでか』

「ああ。リムはデザイナーズチャイルドだが人間だからな。同じ時を生きる為に、転生悪魔にしたいんだろうな。仲良いにも程があるぜ」

『だが、そのような友がいる事は良い事だ。イツセー君からすると、井草君が羨ましいだろうね』

「だな。あいつらさや当てが激しいからよお。ま、井草は連携で責められるわけだから別ベクトルできついわけだが」

『……井草君か。しかし、ロキとの戦いは衝撃が多すぎたようだ。異世界エヴィー・エトウルデの乳神もそうだが、枢五十鈴の真相は……』

「ああ、完璧に拗らせてやがったな。それに、色々とナイアルの能力で怪しいものもある」

『では、行仁伊予も……?』

「ああ。俺の推測が正しけりやな。……今更正気に戻しても、それこそ伊予が正気でいられるかどうか、正直分からん」

『……ナイアルには、それ相応の報いを受けさせねばなるまい』

「ああ、それとその五十鈴の件なんだが、吉報が入った」

『何かね?』

「五十鈴がこつちに、ナイアル達からちよろまかしたつばい高性能型のエポリューショ

ンエキスを大量に送ってきやがった。トランクケース一つ分だ」

『なるほど、ロキの研究施設はムートロンが攻撃を行っていたので望み薄だったが、これで—』

「ああ。イーツに対する対抗策、後一月も経たずに形にして見せるぜ」

「帰還しました、ホテップ司令」

「ご苦労、カルネテル。……ロキの研究データはどうした？」

「コピーは八割ほど取れました、そして、そのデータのオリジナルは全て破壊する事に成功しました。修復は困難かと」

「……よくやった。なんとかロキに潜り込ませる事が出来て、僥倖だったぞ」

「しかし、ナイアルの遊びが過ぎた所為で、問題は生まれています」

「まったくくだ。あの馬鹿、そろそろ首輪をメなおす必要があるな」

「とはいえ、ロキの研究に割って入れたのは僥倖でした」

「だな。ヴァルキリーイーツによるアースガルズへの潜入。同性のヴァルキリーそのも

のをエキスの材料にする事で成功したが、おかげで助かった」

「こちらに関してナイアルの遊びが原因ですからね。彼には相応のペナルティが必要かと」

「本隊到着までは、これ以上のペットの確保は禁止させるしかないな。これ以上遊ばれると何が起こるか分かったものではない」

「そうですね。それと、京都での英雄派の作戦についてはどうしますか？」

「ナイアルへのペナルティとしては特務中隊そのものを支援班に送る事で決着した。もつとも、その成果が芳しくなければ更にペナルティを増やすが……な」

修学旅行はパンデモニウム

1 話

「個人的に、将来は悪魔からヴァルキリーに就職する者を出せたら面白いのではないか
と思っっています」

「はっはっは。リアスの新たな眷属は、中々将来の事も考えていて期待させてくれる
じゃないか」

「お褒めにあずかり光栄です」

と、ロスヴァイセとジオティクスが和やかに会話している。

グレモリーの城において、オカルト研究部はお茶会をしていた。

「まさか、こんな短期間に二度もグレモリーのお城に来る事になるとはね」

「天使の私が悪魔のお城でお茶会だなんて、主と魔王様に感謝です」

「まったくなのです。そういえば、最初に挨拶に行った時は井草さんに会えなかったの
です……」

「まあ、再会してすぐにトラブルだったので、羨まし気にしないでいいですが、ニング」

とまあ、部員ではあるが眷属ではない井草達四人もお茶を楽しんでいる。

三大勢力の和平が結んだ光景でもあるが、同時にグレモリー現当主であるジオテイクスの人柄も分かる光景だった。

これがバアルだったらそうもいかないだろう。サーゼクスを生んだ血を感じさせる、情愛の深いジオテイクスだからこそその光景だ。

「とは言え、これから忙しいので中々会えないかもしれないからね。リアスちゃんはもつと会話に参加した方がいいんじゃないのかい？」

「気にしなくていいわよ。二年生と違って、三年生と一年生は比較的余裕があるもの」
井草にそう答えるリアスの言葉に、ヴェネラナが何かに気づいたようにはたと手を打った。

「そういうえば、駒王学園はそろそろ修学旅行の時期でしたね」

リアスが二年生だった頃もこの時期が修学旅行だったので、知っていたのだろう。そういうえば、グレモリーの城にある温泉は日本風だった。

日本に興味があるのは、決してリアスだけではないのだろう。

となれば、日本の文化筆頭である京都についてはそれ相応に興味があるはずだ。今後の関係を想うのなら、お土産を考えるべきかと井草は考える。

「お土産はもちろん買ってきます。よければ、要望をお聞きますよ」

「あら、気になさらなくていいのよ？」

井草の提案にヴェネラナはそう言うが、しかしそうもいかないだろう。

「お構いなく、三人で一緒に選ぶので、ちよつと高いものも大丈夫なのです」

さらりとのろけたニングに、リムが顔をわずかに赤らめながらもニヤニヤと笑みを向ける。

「ルシファアの末裔の気遣い、断つたら逆に面倒ごとですぜ？」

「リム？　そういう冗談はあれなのですよ？」

「うんうん。ニングはルシファアである前にニングなんだから、そういうジョークは禁止！」

と、リムの軽口にしつかりとニングと井草が釘をさす。

その光景を面白そうに見つめながら、ジオテイクスもヴェネラナもイツセーとリアスにも視線を向ける。

「これはリアスも負けてられないな」

「全くです。リアス、少しは進展の話聞かせて頂戴」

「お、お父様にお母様も！　そう言うのはイツセーがいなくていいところまでしてください!!」

リアスが顔を真っ赤にして、2人に大声を上げる。

それにオカルト研究部一同がくしようするが、一人だけ例外がいた。

その例外は、何かにシヨックを受けたかのように崩れ落ちる。そして泣いた。

「ぶ、部長に彼氏ができるかもしれない!? 進展!?! ああ、祝福したいけどめちやくちや恨めしいiiiiiiiiiiiiii!!!」

—イツセーである。

とりあえず、お前は何を言っているんだという視線が集中したのは、言うまでもない。その視線が集中する中、ジオテイクスが席を立つと、井草に耳打ちする。

「……井草君。君が一番客観的に見れると思うのだが、進展はないのかね?」

「……さや当ては起きてますが、肝心のイツセーが気づいてないですね」

「……ぜひ君は彼女達と仲睦まじくしてくれたまえ。それに反応すればイツセー君もリアスと進展するかもしれない」

それでいいのかと井草は思う。

とは言え、流石にちよつと鈍感が過ぎる気もしないではない。

聞けば、体育祭の時にはアーシアはイツセーにキスをしたという。

普通に考えれば、恋愛感情を持っていると認識するべきだろう。S E Oだけを目的としてそういうことをする者もいるが、アーシアがそう言うタイプでない事は明白だろう。

しかし、どうもイツセーは恋愛感情に結びつけていないようだ。

なんでも「妹とか恋人と力とは違う、家族つて感じ」だとかいう寝言を言っている。正直張り倒すべきかとも思ったが、しかし何か嫌な予感もする。

ついでに言うのと、つい先日リアスに巻き込まれる形で、魔王四人＋グレイフィアによる魔王クラス五名で「魔王戦隊サタンレンジャー」などというバカ騒ぎをしながら、魔王たちがイツセーの花婿試験をしたらしい。グレイフィアは怒っていいと思う。

見事合格し、無茶振りで行われたサタンレッツドとの戦いも及第点ももらった。グレモリーの城では成功を記念してパーティーをされたらしい。垂れ幕には「おめでとう、婿殿！」とか書かれていたとか。

にも関わらずイツセーはこの調子だ。病気だろう、コレ。

……何やら真剣に、かつての井草の自己否定精神に近いものを感じてしまう。

—コレ、ちよつと真剣に考えた方がいいんじゃないだろうか？

そんな予感を、井草はふと覚えていた。

そして、そんな予感を吹きとばすほどの打撃が放たれる。

目の前で、赤龍帝の鎧を纏ったイツセーが吹き飛ばされる。

それをなすのは、バアル義勇軍のリーダーにして、バアル次期当主のサイラオーグ・バアル。

ロキとの戦いで見せた獅子の鎧は身に着けていない。正真正銘生身である。

その生身で、イツセーは殴り飛ばされた。

なぜ、こんな事になったのかをまず説明しよう。

お茶会の後、ジオテイクスはリアスに、サーゼクスが帰って来ている事を伝えて、リアスが会いに行こうとしたのだ。

そして会いに行ってみれば、サイラオーグがサーゼクス達に挨拶に来ていた。

そして追加で説明すると、駒王学園での文化祭の時期に、連続でレーティングゲームが行われる事になっている。

大魔王派のクーデターなどの数々の禍の団絡みのトラブルによる、民衆の不安を何とかする為のイベントだ。

そしてその中で、デイドラやビルデの所為で中断されていた若手悪魔のレーティングゲームを執り行う事になった。

サイラオーグ・バアルVSリアス・グレモリーの戦いが特に注目されている。それに比べれば地味だが、シーグヴァイラ・アガレスとソーナ・シトリーの試合も注目されて

いる。パワー対パワーと、タクティクス比べの二種類の試合ということか。

更に今回は派手にいこうと、デビュー前の若手によるレーティングゲームを複数行う事になっている。今後の若手の実力を示す為のイベントという事になるだろう。

それにおいて、サイラオーグは公式レーティングゲームでは制約が付くであろうリアスのチームの特徴をすべて解禁することを頼みに来たらしい。

効果が絶大すぎるイッセーの乳技も、未だ完全制御が難しい事から禁止されているギヤスパアの停止の力もだ。

曰く、リアスの眷属の全てを受け止めなくては、バアルの次期当主は名乗れない。大物の風格を見せすぎである。

実際、若手悪魔の中ではサイラオーグとリアスは別格扱いだ。

徹底的な強化が施された、旧魔王幹部三人を、転生天使などの助勢があれど返り討ちにした、リアス・グレモリー。

バアル義勇軍を率い、数多くの戦場で成果を上げた、サイラオーグ・バアル。

ロキとの戦いにおいても死者ゼロで潜り抜けたその成果も相まって、とにかく注目されている二人の若き王^{キング}。

その二人の激突は、とにかく注目されるだろう。

その二大巨頭の一人として、もう片方に制限を掛けたの戦いは、勝敗に関わらず沽券

が関わるといふべきなのだろう。

そして、その様子を見たサーゼクスは、イツセーとサイラオーグの模擬戦を提案してきた。

その結果がこの戦いだ。凄まじいと言う他ない。

イツセーは戦車に昇格して何とかしのいでいるが、しかしそれでもサイラオーグが凌いでいる。

事実、ロキとの戦いでもサイラオーグはイツセーと肩を並べて戦っていた。

サイラオーグも獅子王レグルス・ネメアの戦斧の力を使っていたとはいえ、イツセーは赤龍帝の籠手の上にミヨルニルのレプリカを使用している。

それらの条件を引いたうえで戦えば、神滅具抜きでもサイラオーグがイツセーを上回るといふ事なのだろう。

「すごいね、あの人」

「全くですなあ。この場で二番目に強いんじゃないですかい？」

井草が感嘆すると、リムもまたそう呆れの領域になった言葉をだす。

実際、単純な性能ならこの場でサイラオーグを凌ぐのは、魔王サーゼクス・ルシファーぐらいであろう。それほどまでの実力だった。

しかし、サイラオーグは突然攻勢をやめると、首を傾げる。

「あれ、なのですか？」

まだ優勢なのはサイラオーグなのにも関わらずの急な戦闘停止に、ニングは首を傾げる。

そして、サイラオーグはイツセーに質問した。

「どうした？ 何やら戸惑っているようだが、俺が相手では不服か？」

「い、いえ！ むしろ今まで戦ってきた中でもかなり強いです！ ただ……」

どうやら、イツセーの方が戸惑っていたらしい。

何故かは分からないが、しかしすぐにイツセーが答えてくれる。

「なんていうか、ライザーさんにしろディオドラにしろシャルバ達にしろ、俺と戦った上級以上の悪魔は俺のこと基本馬鹿にしてきたんで、サイラオーグさんが俺のこと評価してくれるのがちよつと不思議な感覚というか……」

「「ああ」」

そういえばそうだと、井草達三人は納得する。

件のライザーは知らないが、しかしディオドラもシャルバもイツセーを基本見下していた。

戦闘で追い込まれていたとしても、それを屈辱に思う事こそあれ、イツセーを評価するという方向には至らなかつたのだ。

そんな上級悪魔とばかり闘っていれば、サイラオーグの態度には不思議なものを感じるのかもしれない。

そんなイツセーの様子を見て、サイラオーグはなにやら嘆き悲しんでいた。

「そうか、お前は不当に評価され続けてきたのか。多少は同情するぞ」

そして、サイラオーグは真つ向からイツセーを見返し、拳を握る。

「安心しろ。ロキの戦いでお前の強さは痛いほど知っている。俺はお前を低く見積もるなどしないぞ？ そんなふざけた真似、お前にもリアスにもその仲間たちにも失礼だからな」

共闘したがゆえにこそ分かる、価値観なのだろうか。

否、違う。

サイラオーグ・バルは、イツセーの力を見るのが初めてであったとしても評価しただろう。

それだけの大きな人物だということがわかる。彼は、ディオドラとは根本からして違う男だ。

「さあ、来るがいい！ おまえの拳に、俺も拳を持って応えよう!!」

「……はい!!」

その言葉に、イツセーもまた嬉しげに拳を構える。

そして、お互いに最高の一撃をもってお互いをほめたたえようとして――
「イツセーさん！ おっぱいですう!!」

――アーシアの渾身の言葉に、2人の空気が停止した。

「……何言ってるやがんですか、アーシア」

あきれ果てたリムのツツコミが当然飛ぶが、アーシアは不服そうな表情を浮かべる。

「こちらのセリフです！ ここは、リアスお姉様のおっぱいです!!」

渾身の意味不明の反論だ。

しかし、残念なことにイツセーが絡むと納得できてしまうワードだった。

事実、ゼノヴィアも天啓がひらめいたかのようにはつとなつた。

「そうだ！ イツセーの覚醒とくれば、リアス部長お乳房だなー!」

「そうよ！ イツセー君は煩惱がパワーの源だわ!!」

「そうです！ イツセー先輩におっぱいは無敵の組み合わせですう!!」

イリナとギヤスパーも同意見だった。

確かに間違っていない。間違っていない。

乳首をつついて覚醒し、生乳にふれて正気に戻り、異世界から乳を司る神まで加護を

あたえにやってきた。

兵藤一誠という男にとって、女性の乳房は最重要キーパーソンだ。そこに否を付ける

ことは不可能だろう。

だがしかし、主の胸をこんなところでさらけ出させるのはいかななものか。

「あの、できれば非常時以外はTPOをわきまえた方がいいのです！」

「いやです！ イッセーさんが負けるなんて、そんなのダメです!!」

ニングの苦言に、アーシアは涙すら浮かべながら反論する。

愛する男が負けるところを見たくないと思うのはりっぱだと思う。

だが、敬愛する主の乳房を遺制の前でさらけ出させるのはいかなものか。

サイラオーグも目を丸くしている。

「乳の神が異世界から来訪したのはこの目で見たが、つつくだけで本当に覚醒するの

か？」

「……誠に遺憾ながら、真実です」

小猫がはつきりと言い切った。

「ま、毎度こういうノリなのですか？」

「え、ええ、まあ……」

ロスヴァイセの質問に、祐斗は正直答えに困っていた。

だが真実ではある。現実是非常である。

「それで、リアスはどうするの？」

「い、い、イツセーが、望むなら……っ」

朱乃に聞かれて、リアスも覚悟を完了し始めている。

「イツセーさん！ ここはしっかり断るのです！」

「いやいやニング。イツセーがつつくチャンスを断れるわけがねえでしょう」

ニングの言葉にリムがツツコミを入れるが、その通りではある。

実際、イツセーは鼻血を流してガン見していた。

「……あの、ごめんね？」

井草は、とりあえずサイラオーグに謝るほかなかった。

2 話

「京都、京都ー♪」

「京都なのです♪」

「楽しそうだね、2人とも」

歌いながら頭をリズムで振る、リムとニング。

それを見ながら、井草は微笑ましい気持ちになる。

信徒ゆえに娯楽とは遠い生活を送ってきたリムとニング。

それが、日本を代表する観光名所である京都に行けるという事で、テンションが上がっているらしい。

三大勢力が一角である、天使・教会勢力、かつ暗部であるブルガトリオ機関の一員である二人は、この手の場所に観光に行く事が困難だ。

だが、悪魔側を経由する事でパスを発行してもらっているのです、今回は問題なく行ける。更には京都の妖怪と三大勢力で和平が結ばれる可能視絵が示唆されており、それがなされればパスすら必要なくなるだろう。その気になれば行き放題である。

そうなれば、リムとニングももつとも笑顔になるかもしれない。

そう思うと、井草はそれが叶って欲しいと切に願う。

「いやー。駒王町の担当になるまでは、観光旅行に行ける立場になるなんて思わなかったですぜ！」

と、リムはかなりテンションが高い。

既に京都の観光雑誌を手に持っている。財布もお土産購入用のお札が詰まっており、いつもより厚かった。

「他のプルガトリオ機関の連中も、そこそこ観光ができるようになってますからね！ 和平さまさまですぜ！」

本当にハイテンションだった。

「ふふ。リムは楽しみにしていたのです」

「そういうニングも楽しそうだけどね」

と、ニングに井草はそう茶化す。

実際、リムだけでなくニングも楽しそうなのは、誰が見ても明らかだ。

だから、井草はなんとなく願う。

何かトラブルが起きるのは仕方ない。だが、どうか楽しむ時間ぐらいできればいいと。

そんなこんなでリムやニングといったん別れ、井草は席に戻りに行く。

リムとニングは残念ながら別の班だ。というより、2人とも交友範囲を広くしており、別々の班で活動するようだ。

実際問題、ニングとリムまで含めると班わけが流石にきついのが現状でもある。

井草はこういう時、イツセー達三人と組むのが定番だ。そこにイツセー狙いのアーシア、ゼノヴィアが入り、三人組と化しているイリナも参加。アーシアが絡むという事で桐生も参加している。

この時点で班の人員は八名、大体他の班も似たり寄ったりだ。

あまり多すぎるとフットワークが重くなり、観光が楽しめなくなる。それはいけない。

それに、井草としても二人に友達が増えるのは良い事だと思っている。

「うん。友達が多ければ多いほどとは言わないけど、少ないのもあれだしね」

友人関係が伊予と五十鈴ぐら이었다った自分の過去は、正直寂しいと言われてもおかし

くない。

両手が必要なぐらいいいでもいいだろう。それも、イツセー達とは異なる関係であれ
ばなおいいはずだ。

井草としては、愛するリムとニングには幸せな人生を送ってほしい。

せめて、これまで体験する事のなかった学生生活ぐらいいは幸せでいてほしかった。

なので、ちよつと寂しいが、別行動だ。

そんなこんなで席に戻り――

「い、井草さん！ 俺の可能性知りませんか!?!」

――意味不明なイツセーの言葉に、目が点になった。

「井草さん！ おれ、おっぱい欠乏症になったみたいなんです!?!」

――追加で、松田の悲嘆に満ちた意味不明な言葉に、頭痛すら感じた。

「うん、とりあえず松田君から説明」

精神力をフルに使って、とりあえず話を聞く。

松田は、なぜか無性におっぱいをもみたくなり、元浜にすり寄った。異常、もとい
上。

とりあえず、何かドラッグでも盛られたのかと思つた井草は悪くない。それぐらいい
は意味不明な事態だった。

「……今度、義姉さんにはふばふだけでも先行でしてくれないかどうか話してみるよ」
ピスに「覗き防止の為に童貞を食べてくれ」とは言っているが、どうやら先行でおまけをする必要があるらしい。

真剣に返つたら頼むべきかと考える。それどころか、今から頼んでおかねば時間が取れないかもしれないとも考え始める。

それぐらいには、松田の異常行動に責任の一端を感じている井草だった。

覗きはしないのが当然だ。だが、イツセー達の色欲は常軌を逸している為、我慢するのも苦痛ではある事ぐらいは理解している。

その人の個性にあったご褒美を用意するべきではある。その辺の配慮が足りてなかったと、井草は反省した。

「マジ頼みます！ 俺、なんかホントに壊れかけてるみたいで……っ」

「しつかりしろ松田！ 修学旅行が終わったら、エロビデオ見よう！」

あまりの松田のシヨックぶりに、久しぶりに元浜がエロ発言を場所をわきまえずに言っているが、流石にお目こぼしをするほかない。

むしろ修学旅行でエロビデオを持ち込んでない事に、成長を感じるべきである。

「……それで、イツセーの可能性って何の話？」

後松田と元浜の注意が逸れたので、井草はイツセーの方に話を戻す。

「あ、はい。実はサタンレンジャーの時にアジユカ様に……」

話を簡潔にまとめると、こういうことになる。

イツセーの花婿試験（当人の自覚無し）の時に、魔王ベルゼブブがイツセーの悪魔の駒を調べてみたらしい。

そこで何かを想ったのか、アジユカはイツセーの悪魔の駒のリミッターを解除したり、調整を行なったりした。

それほどまでに興味が惹かれたのか、それともイセーを個人的に気に入っているのかは分からない。

だが、それによって赤龍帝の籠手に変化が訪れた。

赤龍帝の籠手の中には残留思念が存在する。その多くは憎悪の念に凝り固まって、今代の所有者を暴走させようとしている。それをどうにかできれば、新たな成長ができるとして、あえて接触を試みているのが今のイツセーの取っている方法だ。

そして、数少ない例外が接触を図ってきた。

女性赤龍帝最強の存在、エルシャ。男性赤龍帝最強の存在であるベルザードと話し合いをした結果、協力を申し出てきたのだ。

そして彼女の協力の元、アジユカの施した調整と赤龍帝の可能性がカギと鍵穴の形で発動したのだが――

「それが、どこかに飛んでいったと」

「……はい」

これはイツセーを責めるべきではないだろう。

可能性が飛んでいくなど、普通誰も考えない。というより、正直訳が分からない。

ドライグの話では必ず戻ってくると言っているし、まあ深く問題にする事でもないだろうと、井草は考える。

「とりあえず、今出せる能力を出す分には問題ないんでしょ？　なら、修学旅行中ぐらい

は気にしなくていいと思うよ？」

「そ、そうですねか？　なら、いいんですけど……」

井草はそう言ってなだめるが、イツセーは困り顔だ。

だがしかし、現実問題何処に行ったのかも分からない状態ではどうしようもない。

それに激戦続きの毎日で、修学旅行をそんな意味不明な理由で退場させるのも可哀想だ。流石にそれは忍びない。

なので、後でアザゼルに頼んで捜索部隊を擁してもらおう。少なくとも、修学旅行を楽しんでから探しても問題ないだろう。

そう井草は判断すると、イツセーの肩に手を置く。

「大丈夫だよ。流石に妖怪が集まっているうえに、神様だつてゴロゴロいる京都に襲撃

しかけるなんて恐れ知らずな真似。禍の団だつてムートロンの本隊が来るまではしな
いでしょ」

敵地の中でも重要拠点。それが京都である。

そんなところにいきなり襲撃を仕掛けるような恐れ知らずな真似、そう簡単にするわ
けがないだろう。

そう判断し、井草はイツセーをなだめた。

この考えが、あまりにも甘かった事を反省するまで、後一日もなかつたりする。

3 話

「おっばいを、おっばいをくれええええ!!!」

「いやあああああ! ちか—」

「そいや!」

女性に襲い掛かる痴漢に対し、井草は買ったばかりの缶ジュース（中身満タン）を股間に叩きつけた。

悶絶する痴漢を周りの大人や駅員が取り押さえる中、井草は絶妙な身のこなしで離脱する。

そして、早業にあっけにとられる班のメンバーに、苦笑を返した。

「お待たせ。さ、面倒ごとにならないうちに行こうか」

問題解決において定評のある、井草・ダウンフォールの鮮やかな手口であった。

「なんだろうな、あの人。……他人ごとと思えねえ」

凶行に及んだ事を色んな意味で後悔している松田がぼつりと呟き、男性陣はしんみりとしたがそれはご愛敬。

とにもかくにも修学旅行。その舞台である京都に到着したのだ。

「アーシア！ 伊勢〇だぞ!!」

「はい！ 伊〇丹ですね、ゼノヴィアさん！」

「〇勢丹ね、2人とも!!」

教会三人娘は、かなり興奮気味である。

「おお！ ここが古都京都！ いやっほうですな！」

「たまやーなのです!!」

離れたところではリムとニングもテンションが上がっている。

その様子を見ると、井草は心からほんわかしてしまう。

「2人とも、楽しそうで良かった良かった」

「井草さん。なんかリムとニングに思うところでもあるのか？」

「まさか井草さんって、こいつの同類？」

ほんわかしている井草に、元浜と桐生が怪訝な表情を浮かべる。

お世辞にも年相応とは言えないニングとリムの体つきである。それだけでは井草の趣味がロリコンだと思われるのは仕方がない。

だが、伊予と五十鈴は年齢より発達している体つきである事をイツセーは知っている。

つまり、ストライクゾーンが広いのである。

「で、どこが俺達の泊まるホテル何だっけ？」

話を変えてやろうとイツセーがそう言うと、地図を確認していた桐生は指をさした。

「あ、あそこね」

そして指をさした先に、井草達の視線が集中する。

—京都サーゼクスホテルと書かれていた。

ちなみに、すぐ近くには京都セラフオールドホテルがあつた。

悪魔は日本を経済的に侵略しているのだろうか？

そんな事を井草が思つたのも、無理はない。

「イツセー。これ、札幌ファルビウムホテルとか、那覇アジユカホテルとかあるんじゃない

いかな？」

「アザゼル先生もホテル持つてそんな気がしてきました」

二人して苦笑したのは、言うまでもない。

そして、ホテルに入ったのは良いのだが――

「……………はあ」

「な、なななんじやこりやあああああ!!」

井草は額に手を当ててため息をつき、イツセーは絶叫する。

その理由は、イツセーと井草の部屋であった。

駒王学園の男子生徒が入る階ではなく、もちろん女子の階でもない。そんな場所の、隅にある引き戸の部屋。

其の中は、八畳ほどのボロい和室であった。

「……………ロスヴァイセ先生。説明をお願いします」

井草は、松田と元浜にからかわれているイツセーを置いて、ジト目をロスヴァイセに向ける。

むろん後で元凶であろうアザゼルにも向ける予定だが、とりあえず事情説明を求めべきだった。

「仕方がなかったんです。この部屋は緊急時の会議室として用意された部屋です」

確かに、緊急事態に異形勢力が会議する為の場所は必要だろう。それは井草も理解できる。

だが、井草とイツセーが同じ部屋に入るのだから、普通にホテルの部屋でも良かったはずだ。

……というより、何故この高級ホテルでこんな部屋があるのか、心底謎だった。

「面白がつて作つたんだとしたら、流石にアザゼル先生達は後でやる」

そんな事を言えるぐらいには、井草も流石に腹が立っていた。

後で必ずアザゼル先生には詰問する。

井草は、そう決意した。

とりあえず、この部屋を使う必要がない事を祈ろうとも、井草は心から思った。

そして、その井草の祈りもむなしく、イツセーは襲撃を受けていた。

時間的に余裕があつたので、伏見稲荷に行く事になつたイツセー達。

悪魔になつた事で体力的に余裕のあつたイツセーは、なんとなく先行した。

そしていやらしいお願い事をしていたところで、襲撃を受けたのである。

カラス天狗に狐面の狩衣を着た男。更には巫女迄より取り見取り。明らかに妖怪関

係だと分かる者達である。

「母上をどこにやった！ 早く言わんとただではすまんぞ!!」

そして、率いるのは小学生ぐらいの年齢の、狐耳の少女である。

全く心当たりがないのだが、しかし相手は話を聞いてくれない。

仕方ないので全力で逃げ回るが、しかし意外と戦えている。

なにせイツセーはまだ鎧を身に着けていない。倍加すらろくに行っていない状況下で、しかし多数を相手に凌げていた。

—俺、強くなってるんだなあ。

などと自分の成長に感動するが、しかし相手は一向に引いてくれない。

どうしたものかと、困ったその時だった。

「—何やってるのよ、赤龍帝」

そんな呆れ半分の声と共に、暴風が吹き荒れる。

イツセーを庇う様に発生した暴風は、妖怪達の大半を吹き飛ばす。

その圧倒的な出力の暴風に妖怪達が面食らうなか、それを引き起こした存在が、イツセーと妖怪達の間割って入った。

「……人違いで冥界の英雄様を襲うなんて、外交問題確定よ。これ以上はやめておきなさい」

そう言い放つ茶髪の女性は、どこか疲労の色が見て取れた。

そして、実に見覚えのある女性だった。

「か、からくりいすず 五十鈴!？」

「ええ、まさか京都で会うとは思わなかったわ。……修学旅行か何か？」

驚くイツセーにそう挨拶する五十鈴は、ため息をつきながら妖怪達に向き直る。

その圧倒的な力に恐れおののくものまでする妖怪達を見て、五十鈴はため息をついた。

「こんな前座でビビってるような奴が、赤龍帝に勝てるわけないでしょ。怪我しないうちに帰りなさい」

五十鈴の警告に、妖怪達は明らかに驚愕する。

中には腰を抜かしてへたり込む者まで出てくる始末。イツセーの想像以上に赤龍帝の名は絶大なものらしい。

だが妖怪達を率いる少女は、気丈にもイツセーと五十鈴を睨みつける。

「……赤龍帝は現魔王政府のものであるろう！それがなぜ母上をさらったのじゃ!!」

「だから違うって!」

イツセーはとにかく誤解を解いてもらいたいと思いつつ、とにかく否定する。

とは言え誰も信じていない状況下に、五十鈴はため息をついた。

「……許可証持ってないの？ それを見せれば一発じゃない」

「あ」

その指摘に、イツセーはうつかりしていた事に気が付いた。

そしてすぐに、制服のポケットに入れていた許可証を見せる。

「ほ、ほら！ これ、そっちが発行した奴だろ！？ 俺達は修学旅行で来てるだけなんだよ。お前のお母さんの事は全く知らないって！！」

その言葉と許可証に、妖怪達は少しだけ敵意を薄めていく。

そして、それが付け入る隙だと判断したのか、五十鈴は一歩前に出た。

「そういう事。学生服でうろついている奴を襲う暇があるなら、潜入しているはずの禍の団の英雄派を探りなさい」

「禍の団じゃと！？」

狐の娘が目の色を変える。

そして、そのチャンスを逃す五十鈴ではなかった。

「ほら、この子は駒王学園の兵藤一誠って言うの。場所も名前も分かってるんだから、あとで会いにあげばいいでしょ？」

「……いいだろう。いったん引き上げるぞ！！」

五十鈴の言葉に少女は頷くと、妖怪達を引き揚げさせる。

それを見送ると、五十鈴は肩をすくめて振り返った。

「赤龍帝。この辺りで英雄派の連中がうろついているわ。今のうちに増援を呼んでおきなさい」

「え？ いや、どういう事だよ!？」

五十鈴の言葉に、イツセーはすぐに問いかける。

英雄派といえ、禍の団でも有数の規模の派閥だ。

ムートロンや大魔王派に継ぐ一大派閥。英雄の子孫や神器保有者が集う、実力を持った人間の勢力である。

それが京都で活動しているとはどういう事なのだろうか。

だが、五十鈴も詳しい事は知らないのか肩をすくめる。

「ナイアルの情婦如きがそこまで知ってるわけないでしょ？ ただ英雄派が、靈的スポットと龍王クラスを使った実験をしたがってるとナイアルから聞いた事があるわ。たぶんそれね」

そういうと、五十鈴はイツセーに背を向ける。

「あ、オイ——」

「——今更合わせる顔なんてないわ。じゃ、そういう事で」

『ハストウール』

イツセーが呼び止めるのも聞かず、五十鈴はハストウールイーツに変身すると、勢いよく飛び立つ。

その風圧に五メートルほど吹っ飛ばされながら、イツセーは声を張り上げる。

「井草さんは！ まだ待つてるんだぞ!!」

其の声が届いたのか、五十鈴は一瞬だけ速度を緩め―

「―もう、時間も無いのよ」

そんな言葉を、残していった。

4 話

「……それ、本当？」

夜、イツセー達オカルト研究部二年生組は、イツセーの部屋に集合していた。

京都での妖怪による襲撃の話ではない。そこに関してはアザゼル達が動くので、イツセー達は修学旅行を楽しめと言われている。あと、リアス達には状況が分かるまで心配させない為に連絡するなども言われている。

だが、五十鈴に関しては話が別だ。

井草にとって大事な幼馴染。そして、伊予とは違い罪悪感に駆られている彼女は、ただこちら側に戻せる可能性がある。

もちろん、数多くの悪行をなした彼女は、それ相応の罪に問われるだろう。彼女自身、井草に対する負い目は強く、暴走の末に起こした悪行に対しても罪悪感はある。

なので逆に戻ってくる可能性は低いのだが、だからこそイツセー達も同情意識を持つていた。

何より、井草にとってみれば、大切な幼馴染なのである。

どうしても皆が気になってしまい、こうして集まって会議擬きをやっているという事だ。

「はい。枢に助けられなかったら、更に揉めてたと思います」

イツセーも素直に答えるが、しかしそれはそれとして大問題だ。

禍の団を事実上脱走した五十鈴。京都の妖怪が許可証持ちを襲った事件。そして、五十鈴から提供された禍の団の英雄派が京都にいるという情報。

そのどれもが、この修学旅行が大変な事になるという予感を感じさせていた。

「英雄派というと、英雄の末裔や神器保有者で構成されている禍の団の派閥だったな」と、ゼノヴィアが聞くと、イリナも頷いた。

「結構大きい派閥よ。たぶん、大魔王派とムートロンの次ぐくらいじゃなかったかしら？」
それだけの規模の派閥が、この京都で暗躍をしている。

明かに緊急事態だ。しかも、京都の妖怪の動きから判断すると、既に相応の被害が出ていると考えていい。

井草としても、警戒心を強くせざるを得ない。

「しっかし、英雄派つーとあれですな。アーシアを拘束した結界装置を作ったやつがいる派閥でやしたよな？」

リムの言葉に、井草達も思い出す。

ビルデの大魔王派に取り込まれるまでの旧魔王派。その一大作戦だった、ディオドラとのレーティングゲームを利用した首脳陣抹殺作戦。

その最重要ともいえる、アーシアの神器を増幅反転する結界装置を生み出したのが、英雄派のゲオルグである。

神滅具、ロンギヌス、デイモンシヨン・ロスト 絶霧を保有する、英雄派の魔法使い。御使いのAが三人がかりで挑ん

だのにも関わらず、結局逃げ延びた実力者でもある。

その男が所属していて、しかも最強戦力でもリーダーでもない。この時点で、英雄派の人材の豊富さは脅威といって過言ではない。

「どうするのです？ アザゼル先生は自分達が調べると言ってきているのですが……」
ニングは自分から動こうという意識すら見せる。

だが、井草は静かに首を振った。

「いや、ここは待機でいいと思う」

その言葉に全員の視線が集中するが、井草はあえてそれを受け止める。

「俺達はいくまで学生だ。考えて行動するのは上層部の仕事だよ。今の段階で現場レベルが勝手に動くのは、現場の判断じゃなくて現場の暴走だ」

縦社会の現実ともいえる意見を、井草は口にした。

組織とは、上からの命令に現場が対応するのが基本である。

現場レベルでの独自裁量を認めない組織は崩れる事が多いが、だからといって現場の判断だけで全ての行動を決められるわけではない。

これは断じてただの傲慢ではない。

上層部と現場では視野が違う。現場はあくまで戦術での判断を行うものだ。それに対して、上層部およびそのトップである首脳部は、戦略的な判断を担当する。

基本的に、戦術とは一作戦の趨勢を決めるのが限界だ。そして、戦略はいくつもの作戦の重ね合わせなのである。必要とされる技能も視点も全く異なるのが実情だ。一つの作戦で失敗しても、取り返す余地がないわけではないのが戦略である。

戦術を重視しすぎた現場の判断で戦略が乱されるなど、あつてはならない。

そして、アザゼルは神の子を見張る者のトップ。戦略を担当する人物である。

その人物が、戦術レベル、それも一部分を担当するイツセー達に待機を指示した。なら、余程の事が無い限りはそれを守らえば今後の行動に支障をきたしかねない。

「でも、アザゼル先生達が心配になるんですが」

「それでもだよ。俺達の権限は限定的だ。その部を弁えずに動けば、返って先生達にも迷惑がかかる」

一応年長者として、それは言っておかねばならない。

組織行動というものはそういうものだ。

独断行動がしたいのなら、はぐれ者として生きるほかない。組織に属する以上、恩恵の代わりにそれ相応の拘束を受けるのが対価というものだ。

「ま、井草と私はもうこの国でも成人ですからねえ。なんかあるなら連絡来ると思いますが？」

と、これまた年長者であるリムも同意見だった。

そして、まさにそのタイミングだった。

「お、見かけねえと思っただらここに集まっていたのか」

「全員集まっていますよかったです。これから、現状分かっている事を説明するそうですよ」

と、アザゼルとロスヴァイセが姿を見せる。

実際問題、自分達が一切関わらないという可能性も低い。

悪神ロキの猛威を潜り抜けた、若手の精鋭。

その事実は、こういう時に戦力として計算されるという当然の宿命を作り出しているのだから。

そして、呼び出された料亭にはセラフオルがすでにおり、事情を説明された。冥界の現魔王派と、中国の須弥山、そして京都の妖怪で和議が結ばれる予定となっていた。

が、そこでとんでもない緊急事態が勃発する。

京都の妖怪の長。会談に参加する予定だった九尾の狐である、八坂が行方不明になったのだ。

ちなみに、八坂にはまだ小さい子供がいるそうだ。九重という小学生程度の少女らしく、イツセーを襲った一団を率いていた少女と容姿が一致しているので、彼女の暴走によるものだとは判断されている。

「……兵藤、お前、なんでそんなに面倒ごと巻き込まれるんだ？」

「俺が知っていてえよ！ しかも枢五十鈴に助けられなきゃ、もつと大立ち回りしてるところだったし……」

二年組の生徒会も呼び出されていたので当然いる匙に同情され、イツセーも正直途方に暮れる。

悪魔になつてからトラブルに巻き込まれ続けているといつてもいい。というより、球技大会と時期を同じくしたコカビエルの問題にしろ、体育祭直前で起きたディオドラの

馬鹿にしろ、なぜか駒王学園のイベントと前後してトラブルに巻き込まれている気がする。

そして、アザゼルは料亭で出された料理や酒をたしなみながら、はつきりと言いつつた。

「下手人は禍カラス、フリゲイトの団で間違いない。それもー」

「その枢ちゃんの言った通り、英雄派が関わってるみたいなのよん」

アザゼルもセラフォルも真剣な表情だった。

禍の団の英雄派。禍の団の中でも有力派閥の一つである彼らが京都で動いていると
いうだけで、かなりの非常事態だった。

「……ですが、井草さんには悪いですけど、枢五十鈴を信用していいんですか？」

と、シトリー眷属の由良が指摘する。

これは当然だろう。

五十鈴は徹底的に井草をぼろつかすにこき下ろしていたのだ。その話を聞いている
側からすれば、心象は悪い。

井草達も真実を知っているが、しかしそれでもかなりのヘイトを稼いでいるのだ。素
直に信用する気にもなりにくいだろう。

だが、アザゼルもセラフォルもそこは心配していない要だった。

「それについてだけど、枢ちゃんは完璧に禍の団と手を切ってるみたいなのよん」

そう言って魔力で映し出す立体映像には、破壊された暴力団事務所や中小企業の姿が映し出されている。

加えて監視カメラの映像が映し出され、井草達は目を見張る。

そこでは、イーツを叩き潰しているハストウールイーツの姿があった。

「裏取りが済むまで黙ってたんだが、あの戦いの後、五十鈴らしいハストウールイーツがあああの採石場近辺から京都に向かう直線ラインで、いくつもの企業などを襲撃してた。……ちよつと前に全部確認できたが、全部禍の団やムートロンと裏で繋がってやがった」

その言葉に、井草達は呆れるやら関心するやらだ。

確かに、これだけの事をしているのなら五十鈴はムートロンと手を切って敵対しているらしい。

だが、それならこちら側に来てもいいだろうにも思う者達も数多かった。

「因みにね？ こつちも安全確認が行われるまで黙ってたけど、五十鈴ちゃん名義でエポリユーションエクスがトランク一個分郵送されてきたのよん」

……どうやら、裏切る事も想定していたようである。枢五十鈴は要領がいいらしい。

しかし、そこまで手土産があるのなら、投降するという手段はとつてもいいだろうと

は誰もが思う。

「ま、五十鈴のやつが何考えてるかはこの際置いておく。……今気にするべきは、英雄派がやろうとしている実験だ」

アザゼルはそういうと、静かに京都の夜景に目を向ける。

「京都は優れた呪術機構でもあり、九尾の狐は龍王クラスの妖怪。……五十鈴の言っていた「霊的スポットと龍王クラスを利用した実験」つてのに合致してやがる」

その言葉に、全員が気を引き締める。

五十鈴の言っていた英雄派の実験に必要なピースは、二つとも揃っている。

なら、英雄派はこの京都でその実験を行おうとしているのだろう。そう考えるのが自然だった。

当然、イツセーは何かしなければならぬという使命感にかられる。

「先生！ 俺達は何をすれば――」

「お前らは、指示を出すまで修学旅行を楽しんどけ」

イツセーが言い切る前に、アザゼルが出鼻を挫く。

それに戸惑う一同だが、しかし井草達三人は冷静だった。

「まあ、俺達は任務できてるわけじゃないですしね」

「下手に学生まで動かすと、京都の面子も傷つきやがるわけですわな」

井草とリムはそう言いながら、日本酒をあおる。

断っておくが、2人は成人しているので日本でなら酒が飲めるのである。二十歳万歳なのである。

「いや、面子って、そんな場合なのですか？」

「大人の世界はややこしいんですけど、ニング」

現実問題、大人の世界は子供の世界とは別の意味でややこしいのだ。

大人の都合で生み出された命であるリムは、ニングよりその辺りの機微が聡い。なのでたしなめる側に回っている。

アザゼルはそれに苦笑しながら、納得いかない様子だったイツセーの頭をなでる。

「何かあったらちゃんと呼ぶよ。だが、お前らガキにとつちや修学旅行は大事なイベントだろ？ アーシア達に至つちや、人生最初で最後なんだからよ」

そう、学生にとって修学旅行は、間違いなく大事なイベントである。

更にアーシアやゼノヴィア、イリナにリムとニングは、これが最初で最後になるのだ。できれば楽しんでほしいと願うのが保護者の見方である。それに、大人として子供のイベントを台無しにしてまで子供を巻き込む事に思うところはあ

「井草。五十鈴について分かったら連絡するから、今は旅行を楽しんで思い出を作りな」
その慈愛に満ちたアザゼルの視線に、井草は苦笑する他ない。

どうもこの総督は、井草に対して想うところがあるらしい。

事実上の保護者をやつてもらつてゐる立場としては、これは断れない。

「了解です」

「じゃ、呼び出しちやつた分楽しんでね？　ここは私が奢つちやうから♪」

そのセラフオールの気前の良さに、皆がそれに乗つかる事にする。

とは言え、誰もが心のどこかで思つていた事がある。

何かあれば、自分達も動こう。禍の団の好きにはさせない、と。

5話

そして次の日、井草は早朝から京都でランニングをしていた。

あんなふうに言われたとはいえ、いざという時は動かなければならないだろう。その為の準備ぐらいは一応しておかなければならない。

そして、その時オカルト研究部の指揮を執るのは、主柱であるイツセーか、年長者である井草もしくはリムだ。年長者としては指揮を執らなくても補佐はしなくてはいけないと思う。

なので、軽く近辺の地理を確認するついでにランニングをしている。

周囲の地理を確認しながら、井草は全身に負荷をかける術式を掛けながら足早に走る。

ランニングとは言ったが、そのスピードはマラソンの世界大会クラス。常人の全力レベルだ。負荷がかかっている事を考えれば、中距離層の世界大会レベルの付加でランニングを行っている。

これぐらいを生身で行えなければ、ナイアルと戦う事などできないと思っっているから

こそ、これぐらいはしているのだ。

「……五十鈴」

幼馴染の名前を、ぼつりと呟く。

井草が知っていた気になって、しかし全然知らなかった幼馴染。

中二病、と言われれば、それで済むようなものだった。

泥臭い努力で這い上がる事を嫌い、一を聞いて十を知る事にこそ価値を感じたがるのは、子供の頃によくある精神状態だ。

井草もまた、方向性は違うが一種の中二病だった。

特別な生まれとちよつとした特殊能力。ただそれだけのことで自分は選ばれた者だとおごり高ぶり、身の程を知らぬ上から目線だった。

だが、それらが悪い方向に噛み合ってしまった結果、五十鈴は悪逆の世界にどつぷりとハマる事になってしまった。

五十鈴の責任は重いと言う人は多いだろう。井草の責任は軽いと言う人もいるだろう。五十鈴の方が失態をしていると、多くの者は結論付けるだろう。

だが、井草はどうしても自分の責任を強く感じていた。

彼女の苦悩を知ら無かった事に、井草は自分に怒りを覚える。

過程の話だが、井草が五十鈴に馬鹿な事を頼まなければ、五十鈴はナイアルにモ―

シヨンを掛けるなどという馬鹿な真似をしなかっただろうと思う。

むろん、それも五十鈴が見栄を張ったのがきっかけだ。しかしそれでも、井草は責任を感じてしまう。

……五十鈴は、井草達の元に戻ってこようとしなない。

その手は既に血に汚れている。何人も彼女は殺してきた。そして、その顔も名前も人数も、彼女は覚えるだけの余裕がなかった。

その罪の意識が、五十鈴を縛る。

……救いたい。だが、救う事ができるのか。

彼女は止まった。だが、それは井草が止めたわけではない。

そんな風に思考が空回りしていこうとして――

「漸く追いついたのです」

と、その言葉に気づけば、ニングが井草の隣を並走していた。

「まったく、そういうことするなら誘いやがりなさいな」

と、リムまでもが反対側を並走する。

「リム、ニング……」

「井草さん。私達は付き合ってるのではないのですか？」

と、ニングは少しむっとしながら、井草と並走する。

「つたく。見えないところで頑張りたがりですなあ」

同じく並走を続けながら、リムは茶化すようにニヤニヤしている。

その二人の同時攻撃に、井草はどうしたもんかと思ってしまう。

だが、そんな対処の余裕を二人は与えない。

「井草さん。少しは頼ってほしいのです」

ニングは、そう言いながら微笑んだ。

「井草さんは、私が捨てた者に見合うぐらい立派になろうとしている。なら、私達もそんな井草さんに並び立てるぐらいには頑張るのですよ」

「いやいや、ニングは頑張りすぎでさあ。ここは私に任せちゃくれませんかねえ？」

と、リムはニングに反論する。

そして、その視線が井草に向けられる。

「頑張りましょうや、井草。ニングが私達の為に大切なものを差し出した分、私らはそれに見合う奴にならなきゃならねえんですから」

リムの言う通りだ。

ニングは、井草達を救う為に、子を育む能力を差し出した。

……それに見合うだけの価値が、自分にあるのか。

井草はそう自問自答した事もある。

だが、しかしそれは違う。

価値があるとかないとかいう問題ではない。価値を誰もが見いだせるぐらいになれば、ダメなのだ。

そして、それはつまり――

「ニング、リム」

井草は、自分を見つめ直してはつきりと言う事にする。

言つてしまえば後には引けない。もう実行する他ない。

だが、それぐらい断行しなければ、井草はニングが差し出した物に見合う物を彼女に見せれない。

リムもニングも愛すると誓った。その井草・ダウンフォールが、自らの過去にけじめをつけないなど、2人に対する非礼である。

「俺は、少なくとも五十鈴を取り戻すよ。そして、伊予を止めて見せる」

「そう来なくっちゃあ!」

パチンと指を鳴らしながら、リムは応える。

ニングも、何も言わないが井草に微笑んだ。

これでもう、後には引けない。

正気のまま迷走し、そしてさらに返り血にまみれた五十鈴。

罪を償い必要はある。だが、その為の居場所ぐらい作って見せる。

その決意を形にしてこそ、ニング・プルガトリオとリム・プルガトリオを抱える資格が井草に与えられるのだと、井草は勝手にそう決める。

「……そしたら、2人は俺のお嫁さんだ」

「……はいっ」

格好を決めすぎて、井草は感極まった二人に抱き着かれた。

走っている最中だったので、三人そろって顔面をアスファルトで強打する羽目になったのはご愛敬である。

それはともかく、言われた通り観光を楽しむ井草達ではある。

まずは清水寺に向かい、三年坂でビビるものを多数発生させながらも楽しんだ。

イツセーとアーシアがおみくじで相性が抜群だということになり、松田と元浜が嫉妬したのはご愛敬だ。

「殺意が生まれる！」

「後でイツセーを殴る!!」

「落ち着きなつて。あとでなんか奢るから」

殺意の波動すら出しそうな二人をなだめるのに、井草は苦勞した。

リムやニングといちやっけないのに、イツセーとアーシアのいちやつきを見る事になつて井草も少々残念ではあつたりするのに、他者のフォローをする辺り苦勞人体質な井草である。

そして銀閣寺ではゼノヴィアがショックを受けた。

銀色でない事にショックを受けたのだ。残念な事に、駒王学園で使われている教科書では銀閣寺の写真はないので知らなかったようだ。

ちなみに名前に反して、銀を使う予定は欠片もなかったという話があるそうだ。閑話休題。

そして金閣寺は金色なので、ゼノヴィアは狂喜乱舞した。アーシアとイリナも祝福していたのには苦笑ものだった。

と、そんな観光を楽しんで、今は茶屋で休息をとっているのだが――

「おっばい！ おっばいは何処だああああ!!」

などという絶叫で、色々と台無しになった。

ちなみに井草は五秒で麻酔術式を掛けて鎮圧した。観光旅行を汚す者には相応の報いアレ。

「……マジで何なんだ、あれ？」

「お前も新幹線でやらかしてただろ」

松田と元浜の会話をとりあえず聞き流しながら、井草はどうしたものかと頭を悩ませる。

いくらなんでも痴漢の発生率が高すぎる。昨日の今日でまたしても痴漢を見るなど、相当のレアケースだろう。

運が悪いというべきか、それとも何かしらの異能が関わっている時にするべきか。

しかし、異能を使って痴漢を増やす意味もない。不用意に異能の存在を知らしめるのはタブーだ。禍の団も、痴漢を増やすなどというわけの分からない真似よりもとる方法はあるだろう。

やはり運が悪いだけだと考えて、井草はとりあえずお茶を飲み――

「あれ、なんか……眠い……」

そう言いながら倒れる桐生を支えて、井草はため息をついた。どうやら、白昼堂々と仕掛けてくる連中が出てきたらしい。

既にイツセー達も警戒態勢をとる中、井草は立ち上がると声を張り上げる。

「……俺達が、リアス・グレモリー眷属及び、天使長ミカエルと墮天使総督アザゼル直属のものだと知つての狼藉かい!？」

そう言いながら、井草は現れた妖怪を睨み付ける。

場合によつては本気で攻撃を行う事も考えた、その時だった。

「……落ち着いてください。これは戦闘の為ではありません」

ロスヴァイセが、思わぬ戦闘勃発に慌てながら割つて入った。

「あ、ロスヴァイセさん! どうしたの?」

イリナが一瞬でいつもの調子になりながら聞けば、ロスヴァイセはあっさりと告げる。

「誤解が解けました。ついでには、事情説明と謝罪をしたいとのことですよ」

「謝罪……ですか?」

アーシアが首を傾げながら、妖怪の女性に視線を向ける。

その女性は、静かに頭を下げながら口を開いた。

「先日は誠に失礼をいたしました。我らが姫君もあなた方に謝罪をなされたいと申され

ているので、どうか私達に付いて来ていただけなんでしょうか？」

「……具体的にどこにだ？」

多少警戒心が残っているゼノヴィアの質問に、狐の女性は答えた。

「我ら京の妖怪が住まう裏京都でございます。魔王様と総督殿も既にいらっしやっております」

となれば、最早断る理由はないも同然だった。

そして、井草達が連れてこられたのは、ある出江戸時代に戻ったかのような街並みだった。

異空間なだけあり空は暗い。そして、そこに住んでいるのは数多くの妖怪だった。変な脅かし方をする妖怪もいるが、いちいち反応するにつけあがるので井草はスルーする。

「おいおい、悪魔に天使に墮天使だよ」

「三大勢力が揃いも揃って、なんでここに？」

「学生服だぜ、めんこいなあ」

などと、珍しい客人の姿にひそひそ話も聞こえてくる。

「な、なんか……歓迎されてないのか？」

「ま、和平ブームはつい最近だしね」

戸惑うイツセーに答えながら、井草は道案内をする狐の妖怪に付いて行く。

そして連れてこられた先は、巨大な屋敷だった。

明らかに権力者が住んでいると分かる屋敷の前に、アザゼルとセラフオールが少女を挟み込むようにして待っていた。

「よお、悪いな」

「やつほー☆」

そんな挨拶を返してくる2人に背を押される形で、少女が前に出る。

そして、道案内をしていた狐耳の妖怪が恭しく頭を垂れた。

「九重様、皆様をお連れしました」

その言葉と共に、女性は炎となって消える。

そしてそれを確認してから、九重と呼ばれた少女はさらに前に出た。

「私は表と裏の京都に住まう妖怪たちの長、八坂の娘である九重と申す」

そして、少女は勢いよくイツセーに頭を下げる。

「先日は誠に申し訳なかつた。こちらの早とちりで赤龍帝殿にはご迷惑を――」
それを言い切る前に、手刀が軽く叩き込まれる。

「ちよ、井草さん!?!」

イツセーが驚くのも無理はあるまい。

井草・ダウンフォールは、速攻でそんな事をしでかしたのだから。

ちなみに、手刀が振り下ろされたのと同時に凄まじいレベルの怒気と殺気が屋敷中から放たれる。

当然といえば当然である。VIPである九重に暴力を振るつたのだ。妖怪達からすれば激怒案件だろう。

しかし、井草は逆にその怒気に向けて本気の怒気を向ける。

「……ケジメ一つつけただけでこの案件。三大勢力と和平結ぶ気が感じられないね」

……少なくとも見積もつても数十人単位で出したであろう怒気と、同等レベルの怒気を井草は向けていた。

その表情には、怒気を向けてきた者に対する失望と軽蔑の感情が見える。

「大方、ろくな説教すらしてないんだろう？ あわや戦争すら起こしかねないだけの事をしてかしたんだ。子供だろうと主の娘だろうと、最低限のけじめはきちんとなきゃならないじゃないか」

心底からそう言うと、井草は九重に向き直る。

すっかり屈み込んで目線を合わせたうえで、井草はその両肩に手を置いた。

「九重。君がやった事は、下手をすれば君が将来面倒を見る事になるだろう妖怪達の多くを不幸にする事だ。……今のは最低限のけじめで、子供だからこそこの程度で済んでる事を、きちんと心に刻み込むんだよ？」

「う、うむ」

軽くとは言え上級墮天使クラスの手刀を喰らった九重は涙目である。

だが、井草の真摯な態度に思うところがあつたのか、真剣に頷いた。

それに頷いた井草は立ち上がると、今度は屋敷からまだ残っている怒気に殺意すら向ける。

「……いい大人が子供の暴走に乗つかつて戦争を起こしかけるとか、情けない。従者なら、処罰覚悟で子供に示しを付けるのが責務じゃないのかい？」

「ぐ……」

「せ、正論ではあるが……」

屋敷から少し反論擬きが飛んでくるが、井草は鼻を鳴らすとそれを無視する事にする。

反省の気配を見せている者もいるようだ。あとは身内で示しを付ければいい。

そう考えると、井草はもう一度屈み込んで、九重を視線を合わせ直す。

「……俺も子供の頃はとてつもない失敗をしたし、それが遠因でたくさん悲劇を起した身だから、これ以上は言わない。だけど、ちゃんと覚えておくんだ」

それは、罪を犯した井草だからこそ説得力がある言葉だ。

不甲斐ない大人に変わって、井草・ダウンフォールは嫌われ役を買って出ても、将来重職に就くだろう九重に、教えなければならぬ事を教える。

「君の行動は、本当に戦争を引き起こしかねなかった。酷い話だけど、君は普通の子供より責任がある事を忘れないように。……いいね？」

「う、うむ！ わかったのじゃ」

その素直な反応に、井草は苦笑するとイツセーに向き直る。

「で、被害を受けたイツセーはどうするんだい？」

「いや、俺は特に何もありませんけど？」

むしろ、井草が何かしすぎだとすらイツセーは思っている。

過去にやらかしてしまった経験があるからこそ、井草はこういう時に積極的に大人として示しを付けたたり、道を踏み外させないように行動する。

イツセーもその恩恵を受けた一人であるので、ちよつと苦笑してしまいそうになる。

とは言え今は九重の事だ。イツセーはとりあえず、井草に倣って視線を合わせる。

「えっと、九重だっけ？ お母さんのこと、心配なんだよな？」

「と、当然じゃ」

「だったら間違える時もあるさ。そりゃ井草さんの言う事は正論だけど、ちゃんと九重は間違っていたって知ったから、謝ってくれたんだろ？」

「う、うむ……」

その言葉に頷いて、イツセーは九重の肩に手を置いて、微笑んだ。

「だったら、俺はもう何も言わない。ケジメは井草さんがつけすぎたぐらいだしさ」

その言葉に、九重は先ほどの手刀とは別の理由で涙目になる。

「……ありがとう」

そのお礼に頷きながら、イツセーは立ち上がる。

そして、アザゼルとロスヴァイセはほっこりとした表情だった。

「流石は子供のヒーロー、おっばいドラゴン」

「はい、冥界の英雄と言われるだけではありませんね」

「ま、まさかおっばいドラゴンを京都で布教するなんて……っ！ れ、レヴィアたんも負けないんだから！ 魔法少女は女の子の夢なんだから!!」

セラフォルーは何やら對抗意識を燃やしていた。

そして、そこにゼノヴィアが井草の方を向く。

「仮面ファイターレセプターも布教したらどうだ？」

「あれは、子供向けじゃないからね？」

DシネマはVシネマの冥界版なので、子供を対象にしていない。むしろ十八歳以上推奨だ。

情操教育にも悪いので、井草はモデルとしての布教活動をする気は欠片もなかったりするのだった。

6話

そして、屋敷の奥に連れられて井草達は事情を説明される。

京都の妖怪達を束ねる存在。九尾の狐が一匹、『八坂』。

彼女は、須弥山のトップである帝釈天が送つてきた使いと歓談するべく、数日前にこの屋敷を出た。

しかし、その会談の場に八坂が姿を現さなかったのだ。

当然これは大騒ぎだ。京都側が慌てて調べたところ、同行していた烏天狗の一人が瀕死の状態で見つかった。彼はすぐに死んでしまったが、かろうじて伝えてきた事がある。それが、霧に包まれたという言葉だった。

そこで大慌てになった京都の妖怪達が怪しい者をしらみつぶしに探しに行った結果、たまたまいやらしい願いをしていたイツセーだったという事だ。そして襲撃したところを五十鈴が見つけ、割つて入つてたまたま見かけたらしき英雄派の情報を出して誘導したという事である。

そして実際に英雄派のメンバーを京都の者が発見して小競り合いが勃発したらしい、

そのうえで、アザゼルとセラフォルも接触して事情を説明した事で、禍の団が関与しているという判断になった。

「……総督殿、魔王殿。八坂様を助ける可能性はないだろうか?」

「まあ、たぶんまだ生きてるだろうし、可能性はまだあるだろ」

と、妖怪の代表にアザゼルはそう伝える。

どういふことかよく分かっていない井草達に、アザゼルは京都を示す。

「京都は世界有数の術式都市だ。その今の中枢である八坂姫が京都にいなかったり死んだりしてるのなら、この辺りの場が乱れてなきやいけねえ」

「えっと……。つまり、異常が発生してない事が八坂さんって人が生きている証拠って事ですか?」

イツセーが自分の中にかみ砕きながら確認すると、大人達が頷いた。

「そうだ、八坂姫の姿を知らなかったな。絵姿でよければすぐに出せるぞ」

その妖怪の配慮で、八坂姫の絵が描かれた巻物が開かれる。

そこに描かれているのは、九重の面影のある美人の姿。因みに巨乳である。

イツセーが本能に忠実になってにやけているので、気づいたアーシアが嫉妬で太ももをつねるのはご愛敬だ。

そして、それが目に入っていない九重はお辞儀をする。

「頼む。……いや、お願いします。どうか、母上を助けてくださいませ」

その姿に、誰もが英雄派に対する怒りを覚えた。

「任せてくれ！ 八坂さんは、俺達が必ず助け出す!!」

イツセーが即座に返答する。

それは良い。むしろ、そういうところがあるからこそ子供達のヒーローをやっているのだらう。おっぱいドラゴンの面目躍如である。

だがしかし――

「イツセー。流石に鼻血を流しながらってのはどうかかな？」

――井草のツッコミに、イツセーはようやく自分が鼻血を流している事に気づいて大慌てした。

その日の夜、井草は屋上で一人黄昏ていた。

……この話がスムーズに進んだ理由の一つは、五十鈴の提供した情報だ。

英雄派は、術式都市と龍王クラスを用意して、何かを企んでいる。その事実は、アザ

ゼルの頭脳と現状が結びついた結果、八坂姫の生存の可能性をとても上げた。

それどころか、五十鈴が速やかにその情報を妖怪側に提供しなければ、イツセー達との小競り合いで怪我人が出ていたかもしれない。

五十鈴には感謝しても足りない。本当に、一度会ってお礼を言いたい。

だが同時に、井草はそれだけでは止まらないと自覚していた。

抱きしめたい。謝りたい。取り戻したい。

その感情を抑えきれないだろう。それほどまでに、井草は五十鈴に想いを寄せていた。

圧倒的にふざけた話だ。

井草・ダウンフォールはリム・プルガトリオとニング・プルガトリオの2人を同時に愛するなどと決意したのだ。

そのうえで幼馴染まで毒牙にかけようなど、何を考えていると糾弾されるかもしれない。

何より、五十鈴自身がそれを望まないだろう。

彼女は間違えて、井草を傷つけた。

その果てに、伊予を変貌させた。

そして井草に憎まれる事で贖罪しようと、悪逆の側に立った。

戻れと言われて戻るのならば、そもそも既に投降しているだろう。そう言われれば返す言葉もない。反論の余地すらない。

だが、しかし、それでも。

井草・ダウンフオールは五十鈴や伊予との日常が、掛け替えのない宝だと痛感した。

井草・ダウンフオールはそれを取り戻したいと、今でも願っている。

井草・ダウンフオールは、枢五十鈴の隠された一面を知って、それを受け入れた。

……どうしたものかと自分でも思ってしまった。本当に、どうしたものか。

そんなことを悩んでると、いつの間にか背中に柔らかな感触があつた。

未発達の少女の身体。それも、2人分。

「リムに、ニング？」

「そりゃそうじゃねえですかい？」

「すぐに気づいたのは嬉しいのですよ」

そう苦笑する二人に、井草はちよつと恥ずかしくなる。

二人は、五十鈴を取り戻す事を認めてくれた。そして、その勢いでプロポーズ迄した時、喜んでくれた。

既に決めている覚悟を決め直す。そして、井草は考え直した。

「……ニング、リム。その、言いたいことがあるんだけど」

「なんなのです♪」

「ふふくん？」

何なのか分かり切っているうえで、あえて二人ともそれを聞くまで待つてくれている。

それに感謝しながら、井草は言い切った。

「……卒業したら、冥界で結婚式を挙げたい」

言った時点で、ものすごく真っ赤になっているのが分かる。

そして、ニングの井草を抱きしめる力が増大化した。

「……子供、産める身体じゃないのですよ？」

「かまわない。俺を助ける為に大事な物を捨ててくれたんだ。それぐらい背負わせてくれ」

ニングの言葉をそう切り捨てると、井草は振り返って微笑んだ。

「俺を救って許してくれた、大事な未来ニ人と一緒にいたい。これが、俺の本音だよ」

ああ、そのために、井草・ダウンフォールは全てを掛けよう。

……大事な過去ニ人を取り返し、今手元にいる未来ニ人を裏切らない。

そう、井草は決意して――

「……なら、今夜は三人仲良くしましょうかねえ？」

―と、リムのニヤついた笑みを見た。

その手にあるのは、駒王学園生徒に与えられた部屋とは違う、ホテルの部屋の鍵。「こんなこともあるのかと、上層階の部屋を一つ予約してるんでさあ」

そういつたリムは、ペロりと唇を舐め、井草とニングの頬ずりする。

「……複数人でのハーレムプレイ、まずは練習しやしようか？」

流石にそのまま眠りはしなかった。とだけ伝えておく。

そして次の日、井草たちの班は何人か寝不足だった。

ついでに言う、井草は寝不足とは別の意味でげんなりしていた。

結局、ロスヴァイセにバレてしまった。

「……井草さん。修学旅行で羽目を外しすぎないでください。他の先生方には内緒にしますが、ばれたら面倒ごとになる行動ですよ、これは」

「すいません。テンションが上がって賢者タイムに入るまで頭が回りませんでした」

ロスヴァイセの小声の小言に、井草は素直に頭を下げる。

ちなみに、リムとニングも説教確定である。一応武士の情けでメールでばれた件は伝えている。離れたところでは二人が慌てていた。

賢者タイムに入った事で冷静になった井草はすぐさま部屋に戻ったのだが、其処では既にイツセーが就寝していた。

そこで油断してすぐに自分も寝たのだが、どうもその前にロスヴァイセは部屋に入っていたらしい。

井草・ダウンフォールが品行方正なのは知っている。だがいないという事は何かあったのだろう。そして、井草はつい最近リムとニングに告白して受け入れられたばかり。

そこから帰結してカマを掛けられ、井草は素直に白状したというわけである。

ちなみに、ゼノヴィア達が井草がいない隙にイツセーの部屋で子作りを敢行しに来たらしく、ゼノヴィアから「仲間！」的な視線を向けられている。困ったものだ。

そして勝ち組負け組がはつきりしているので、詳細を知られるとややこしい事になる

かもしれないと、井草は戦々恐々としていた。

「井草さんにしろアーシア達にしろ、なんか眠そうなのはどうかしら」

「……まさか、イツセーから寝取」

「その眼鏡。それ以上言ったら本気で殴るからね？」

最悪な勘違いをされかけたので、本気で釘を刺す。

NTTRなどするぐらいなら、井草は腹を切つて死ぬ。それぐらいにはトラウマである。

それはともかく。

自由に観光できる日ではあるのだが、イツセー達はとりあえず駅前で待機中である。

前回の騒動のお詫びという事で、九重がイツセー達を案内してくれる事になっているのだ。其の為、一旦駅で待っているのである。

とはいえ、いきなりの事なのでよく分かってない者もいる。

そのうちの一人である松田は、首を傾げてイツセーに質問してきた。

「しかしイツセー。なんでまだ出ないんだ？」

「いや、京都を案内してくれる奴がいるんだよ。その子を待つてるんだけど……」

イツセーが、待ち時間を確認しながら辺りを見渡したその時だった。

「おお、見つけたぞイツセー！」

ちょうどそのタイミングで、狐耳だけを隠した九重を駆けよつてきた。

井草はなんとなく周囲を確認するが、どうやら彼女だけらしい。

「イツセー。おまえこんな子供をナンパしたのかよ?」

「うっひよおおおおお! 小さくて可愛い!!」

「イツセーなにこの子! マジで可愛いじゃない!!」

と、三者三葉で九重に視線を向ける。

とりあえず、井草はそれとなく誤魔化す事にする。

「彼女は九重くのっていつて、アザゼル先生や会長のお姉さんの知り合いの子供なんだよ。今は事情があつて三人とも席を外してるんだけど、少し前に色々あったから観光案内をしてくれるつてことになってね。いわゆる特別ゲストつてやつだよ」

とりあえず、嘘にならない程度の情報をあたえてお茶を濁す。

まあ、実際問題現地に慣れている人がついていてだけでも効率はいぶ変わるだろう。

それに、九重にとっては気晴らしにもなる。

どちらにしても、修学旅行の間に八坂姫が見つかる可能性は低いだろう。なら、駒王町の担当が基本の自分達はこれぐらいのサポートで十分のはずだ。

そう考え、井草は空を見上げる。

……修学旅行が終わったなら、アザゼルに頼んで京都に派遣してもらおう。そうでもしなければ、五十鈴に会えない気がするか。

そして天竜寺、二尊院、竹林の道などを案内してもらい、今は九重おススメの湯豆腐屋で昼食をとっている。

一口食べて、井草はかなり唸った。

「いいね。出汁も聞いてるし、ポン酢も豆腐のいい味してるよ」

「井草さん。あなたけっこう趣味が渋いのね」

食レポ一步手前になっている井草の感想に、桐生は感心している。

「和の味、いいな」

「はい、いつもお家で食べているお豆腐とは何かが違います」

「日本の味……いいわあ」

教会トリオも満悦である。松田や元浜もかなり唸っている。

そして満足げな九重だが、しかしなぜかしんみりいた。

「此処の湯豆腐も良いが、やはり母上の湯豆腐が一番好きじゃ……」
その言葉に、事情を知る井草達はしんみりとなる。

そして、できる限り力になろうと皆が決意しながら食べ終えー

「ん？ おまえらもここで昼食とつてたのかよ」

と、お猪口を傾けているアザゼルと遭遇した。

隣にはロスヴァイセが座っており、困り顔だったりする。

「ちよ、アザゼル先生!!」 教師が昼間っから昼酒はいかんでしよう!!」

イツセーは即座にツツコミを入れるが、しかしアザゼルはどこ吹く風だ。

「いいじゃねえか。こっちは京都の調査がひと段落ついたんだぜ？ ガス抜きぐらいさせてくれや」

「……諦めた方がいいよ、イツセー。この人こういう人だから」

平然と寝言を起きて言うアザゼルに、井草はため息をついた。

「おいおい、酒を教えてやった俺になんて口だ」

「教わったのは未成年の頃ですけどね」

そう井草はため息をつく。

あの頃はただのピスの親戚だとばかり思っていたのだが、まさか墮天使の総督だとは思わなかった。

かなり悪い遊びを教わった気がする。上司運はもしかすると悪いのではと、井草はふと思いつく。

「……ごめんくださいーい！　ここ、昼酒やってますかー？」

……聞き覚えのある声でした。

「やってるなら一番高いお酒と、それと一番相性のいいメニューを……」

そして、相手も井草たちに気づいた。

二十歳ぐらいの、茶髪の女性。

髪型は軽くそとはねしているミディアムヘア。目つきからして活発な印象を与える、サバサバした感じの女性。

単刀直入に言おう。枢五十鈴だった。

「……あ、用事思い出しちゃった。これ、騒がせ賃ね？」

速攻で一万円札を近くのお盆に置くと、五十鈴はわき目を振らずに全力で走り去った。

「逃がすかあああああああ!!!」

井草もまた、周りを一切無視して全力疾走で走り出した。

「待つてよ待つてよ待つてよ待つてよ待つてよ!!」

「待たない待たない待たない待たない待たない!!」

二人は全速力で逃走と追撃を行っていた。

そのスピードは、ここが人間世界だということも自分たちが人間離れた身体能力を保有することも忘れた、完全な本気モードである。

時速数十キロは普通に発揮し、速度制限のある道次第では、車を追い抜くことすらあった。

「お願いだから待つて! 話がしたいんだ!!」

「話すことなんてないでしょう!」

五十鈴を止めようとする井草に、五十鈴は全力で逃走する。

本気で必死に五十鈴は逃げるが、井草もまた必死に追いかける。

「謝りたいんだ! 今までのことを!」

「必要ないでしょ! 悪いのは、全部私なのよ!」

五十鈴は本心からはつきりとそう言い切った。

「勝手に嫉妬して! 勝手に裏切って! 自分勝手な贖罪をしようとして!! 私に、井

草のそばにいる資格なんてない!!」

そうはつきりと言い切りながら、五十鈴は其のままさらに速く走り―

「…………ふざけるな!!」

―井草もまた、怒りに身を任せてさらに走る。

「なにが資格がないだ! 資格があろうがなかろうが、五十鈴は俺の大切な人だ!!」

「あんた自分が何言ってるかわかつてる!?!」

すさまじいことを言われて、五十鈴は顔を真っ赤にする。

そのうえで全力疾走をする五十鈴もすごいが、井草も負けていない。

「わかつてるさ! なくしてからようやく気付いた! 五十鈴は俺にとって、空気みた

いに重要だった!」

走って、走って、走って走る。

「だから、いて当たり前だと思い込んでたから、五十鈴をイラつかせてしまったんだ!

心から悪いと思ってる!!」

逃がさない。逃がすわけにはいかない。逃がしたくない。

その想いを足に乗せて、井草はとにかく駆けた。

「土下座しろというならいくらでもする! 殴りたいならいくらでも殴ってくれていい

!!」

それぐらいのことはされるつもりだ。それでいいなら安いものだ。

「そして五十鈴もすっかり償つてくれればいい！ 死んで償えなんて言わないし、死ななくて済むように俺も頭を下げる!!」

もちろん、五十鈴も償わなくてはならないだろう。

だが、それでも死なないのなら何年でも待つ覚悟はあった。

だから――

「お願いだよ五十鈴！ ……戻ってきてくれ!!」

それは、魂からの言葉だった。

そして、五十鈴は――

「……無理よ」

――それでも、五十鈴は止まらない。

そして、わずかずつだが井草との距離を話していく。

捕まらない。捕まりたくない。捕まるわけにはいかない。

そして、もし捕まったとしても――

「もう、私は手遅れ何だから!!」

――もう、意味もないのだから。

『ハストウール』

そして、人気がないところであるのをいいことに、イーツへと変身して飛び上がる。井草もまたレセプターイーツになってから墮天使の翼を広げようとするが、しかしそのタイミングで足をもつれさせて転んでしまう。

直ぐに受け身を取って態勢を整えるが、その一瞬で五十鈴を見失ってしまった。

「……………クソー！」

思わず地面を殴りつけるが、それで五十鈴を捕まえることができるわけではない。

「……………くそお……………」

眼に涙が浮かぶ。視界がにじむ。

自分で言っていて、情けなさに気づく。

井草・ダウンフォールにとつて、枢五十鈴は大切な女性だ。

一緒にいたいと、心から思ってしまう。

ふざけた話だとは思う。リムとニング相手に告白をして、しかも逢瀬を交わしたうえで、感情的になつての発言とは言えこれだ。

だが、しかし、それでも。

井草・ダウンフォールは枢五十鈴が大事なのだ。行仁伊予と同じぐらい、大事な存在だと痛感した。

それでも五十鈴は戻らない。

手遅れだと、時間がないと、そう五十鈴は言った。

……その意味を、今だ井草は正しい意味で理解していなかった。

そしてそれに気づくことなく、井草は携帯を取り出した。

これ以上の我儘は許されない。すぐにみんなと連絡を取らなければならないだろう。

そして、井草はとりあえずイツセーに電話を繋ぐ。

『井草さん!? 大丈夫ですか!?!』

「……ゴメン、逃げられた」

息を切らしているイツセーの声に、井草はかなり心配させてしまったようだと思省する。

せめて移動しながら場所を説明する事ができればと思ったのだが、そうもいかなかった。

とにかく合流しようと考えていたのだが、イツセー達は真剣な声でこちらに指示を飛ばしてくる。

『ホテルで合流しましょう。木場やニング達の班も、適当に理由をつけて生徒会と一緒にホテルに向かってくるそうです』

その声は、急に現れた五十鈴というイレギュラーに関するものではない。

それにすぐ気づき、井草も表情を切り替える。

間違いない。どうやら、京都での大騒ぎはいきなり新展開に突入したらしい。
「何があつたの？」

『英雄派の連中が、俺達に宣戦布告してきやがつた……っ！』

7 話

井草が合流したのは、自分達に割り当てられた和室だった。

アザゼルとセラフオールを上座に置き、それを囲むようにして、グレモリー眷属とシトリー眷属が着席。ニングとリム、イリナは何故か押し入れの中に入っていた。井草もとりあえず角の方に立つ。

「よし、全員来たから作戦を伝えるぞ」

そう言いながら、アザゼルは畳の上に地図を広げる。

そこに書かれているのは、二条城を中心とした京都中心部の地図だった。

「現在、二条城と京都駅を中心に、非常警戒態勢を敷いた。京都の探索を行っていた悪魔と墮天使の関係者を総動員。京都の妖怪からも腕利きを中心として集まってもらっている」

「先生。それに対して英雄派の反応は？」

未だ状況を読み込み切れていない井草は、より詳細情報を聞き出す為に質問を入れる。

その積極的な態度に、五十鈴に引つ張られて作戦に集中できないか心配していたアザゼ

ルを含めた数人のメンバーがほつとする。

しかし、アザゼルはすぐに表情を引き締め、地図を睨む。

「現状動きは見られない。だが、京都の各所から上場に向けて、不穏な気の流れが観測されている」

「気の、流れ……なのですか？」

ニングが首を傾げると、アザゼルは静香に頷いた。

「京都が術式都市なのは知ってるな。京都は陰陽道や風水を組みこんで作られていて、各所にパワースポットの類がいくつもある」

井草の観光した場所にも、それなりに在ったのだろうとふと考えてしまう。

だが、そんな事は露すらず、アザゼルは地図にその気の流れをいくつか書き込んでいた。た。

「とにかく、だ。それらが現在、乱れに乱れてに二条城にパワーを流し込んでいる」「なんですかいそりや。戦略攻撃でもするんですかねえ」

リムがそんな不吉な事を言うてくるが、しかしアザゼルは首を捻った。

「そんな単純なもんならまだマシなんだろうがな。ま、奴らはこの都市の気脈を司っていた九尾の狐を使って、実験とやらを開始しようとしている。そこを踏まえたうえで作戦開始だ」

そして、アザゼルの視線はまずシトリー眷属に視線を向ける。

「シトリー眷属は、万が一の為のホテルの警備だ。結界もしつかり張っているが、万が一って事があるからな」

「リーダーは私なのよん♪ いぎと成ったら大暴れしちゃうから」

アザゼルの言葉を継ぎ、セラフオルナーが腕をまくる。

用意できる限り最強クラスの守護者である。優先順位の問題もあるし、敵にはご愁傷様と言うほかない。

「で、グレモリー眷属とイリナに井草ハーレム」

「先生ふざけないで」

「文字数節約だ。お前達はいつも通りで悪いがオフエンス任せる。二条城に直接向かってくれ」

井草のツツコミをあつさりスルーしながら、アザゼルは難しい顔をしながら地図の上の二条城をにらむ。

「ぶつちやけ敵戦力は未知数だ。危険な賭けになるんだが、とにかく八坂姫の救出が最優先、それができたらソツコーで逃げろ」

「『『『『『』』』』』』はい！』』』』』』

いつも通りに強敵とのぶつかり合いが確定しながらも、いつも通りなので気負い仕儀

ない返事で答える。

その様子に苦笑しながら、アザゼルはほっとさせるように告げる。

「それと、須弥山からの助っ人を連れて、ピスも来てる。合流出来たら占めたもんだ。思う存分頼れ」

「え？ 誰なんですか？」

イツセーが気になっていたようだが、アザゼルは悪戯心を出したのかニヤニヤ笑うだけだ。

「ま、間違いなく最高レベルの戦力だつて事だけは約束するぜ。こつちがこの作戦で投入できる中じゃ、問答無用で最強だ」

その言葉に、井草達はセラフォルーを見る。

そこに特に反感を見せていないという事は、それぐらいの人物なのだろう。

魔王が認めるほどの強者。そんな人物が来てくれるとなると、かなり助かると言うほかない。

「……それと、こつちは悪い知らせだ。フェニックスの涙は、この作戦では二個しか支給されなかった」

その事実には、井草達は情勢が意外に悪いという事を思い知らされる。

フェニックスの涙は治癒の力において最高峰だ。今回オフェンス陣営はアーシアが

いるのでそこまで酷い事にはならないだろうが、しかし自分の判断で使える回復薬は、重要ではある。

それが二個しか使えない。これは若干緩んだ緊張感を締め直すにも十分すぎた。

「とりあえず、両方の班に一つずつ渡しておく。あとは二つだけあるから、それを聞いたら作戦開始だ」

そして、アザゼルはまず匙に顔を向けた。

「匙。お前は今回オフエンス組だ。龍王の力ならグレモリー眷属にも引けを取らねえだろうしな」

「は、はい!!」

龍王ヴリトラの力を復活させた匙は、その時点で一級品レベルの戦力とみなされていた。た。

まず間違いなくシトリー眷属最強。それだけの力を持っているのである。

そして、アザゼルは次に視線をイツセーに向ける。

「イツセー。オフエンス班の指揮はお前に任せる」

「……ええ?」

思わずきよとんとするイツセーに、アザゼルは安心させるように肩に手を置いた。

「細かいところは実戦経験豊富な仲間に頼れ。だが、全体を引っ張るのならお前が一番

「さて、そろそろ動いたみたいね」

枢五十鈴は、静かに伏せていた眼を開ける。

人生最期の観光として京都を一旦目標地にしていたが、こんな流れになるとは思わなかった。

だが、起きてしまったのなら介入しよう。

……正直、英雄派の中二病ぶりには憐れみすら感じているのだ。それで死人が出るなど、かつての自分の焼き増しな気がして見過ごせない。

それに何より――

「井草の敵を減らすぐらいはさせてもらおうわ。……命までは獲らないから覚悟しなさい」

『ハストウール』

枢五十鈴、参戦。

「ナイアルさん。遅いなあ」

京料理を食べに行つたナイアルを待ちながら、行仁伊予はしかし時計を見て時間を確認した。

「もう戦闘開始時刻なんだけど。……まあ、二条城ふたじょうの人をざつくり追い払うだけなら私だけでもいいって言われているし……やろつか」

『クトウグア』

そして、伊予は何のためらいもなくクトウグアイーツになると、二条城の敷地内に飛び込んだ。

「い、イーツだああああ!!!」

「逃げろ、逃げろおおおお!!!」

慌てて散り散りに逃げていく人達を追いかけず、五十鈴は適当に全身から灼熱を放つ。

その圧倒的火力とイーツの登場という事実には、二条城の人達は慌てて敷地外へと避難を開始した。

そしてそれをあまり気にせず、伊予は首を傾げる。

「あ、でも井草君来てるんだっけ？　もしかして、ここに来るのかな？」

そうなたらいいと思う。

悪意も邪気も欠片もない、純粋な楽しみの感情で、伊予はそう願う。

「久しぶりに井草君とお話しできるんだらうなあ。うん、何を話そうかな？」

……本心から、伊予は井草と世間話をするつもりだった。

これだけの事をして、多くの人間に恐怖を叩き込んで。そこに急行するだらう人との世間話を楽しむ。

何かのタガが完全に外れた行仁伊予は、何かを致命的に壊した状態で井草の登場を心から待っていた。

そして、ナイアルはいきなり隔離されていた。

京料理をたらふく食べて、酒まで飲んでテンション爆上がり状況下。

さて、京都でのイーツ暴動の傘下を命じられたので、イーツの真の恐ろしさをこの日本で思い知らせてやるぜ！ というわけでノリノリだったのである。

それが一気に醒めていくのを感じながら、ナイアルはため息をつきながらデフォルト

イーツを発動させる。

『クイーンアント』

女王蟻の力を最大限に發揮し、ナイアルはまっすぐ視線を向ける。

そこにいるのは二人の中国の民族衣装を着た男。

片方は豚で、片方は髪の色が特徴的だった。

そして、ナイアルは当然の事だが帝釈天が送り込んだ、京都への使者の詳細も知っている。

なので、当然の如く敵対者である事も分かっている。

「………つたく。腹いっぱい食った後で豚料理は胃もたれしちまうじゃねえか」

「こっちは、腹減ってんだがなあ」

豚が恨めしそうにそう言う中、ナイアルはそれを無視すると半目を向ける。

「………で、カツパさんは頭の皿どうしたんだよ。キュウリ買ってやるから帰ってくんね？」

「あ、馬鹿………」

その挑発にすぐ反応したのは、豚の方だった。

そして相手の方は静かにプルプルと肩を震わせ――

「河童言いやがったな、……死ぬか、ああん？」

その激怒を叩きつけられ、ナイアルはファイティングポーズを取りながら愉快気に嗤う。

「いいねえ。そつちの方が面白そうだ」

京都市の一角におけるこの遭遇戦。

事実上、古都京都の激等において最高峰の戦いが、主戦場から離れた場所で始まろうとしていた。

ムートロン先遣艦隊所属特務中隊隊長、ナイアル。

西遊記の三英傑の内、猪八戒と沙悟浄。

割と冗談抜きで神話の戦いが、街はずれで勃発した。

8話

一方その頃、イツセーは崩れ落ちていた。

「あの、どうしたのですか？」

ニングが気になるのも当然だろう。

なにせ、イツセーはオフェンス陣のリーダーだ。

指揮官としての経験の低さは経験豊富なメンバーで補えばいいが、リーダーがこれでは士気に関わるのは明白。

ついでに言えば、イツセーはニングの友達でもある。普通に心配になる。

「ああ、気にしてやるな。ちよつとこいつの可能性が京都で迷惑な事をぶちかましやがってな」

アザゼルが苦笑いするが、しかしそこでドライグの苦渋に満ちた呻きが聞こえてくる。

『勘弁してくれ、相棒……』

「いや、俺も何が何だか……」

凄まじく落ち込んでいる。

ニングはそれが訳が分からず、首を傾げるとアザゼルに向き直る。

ここは当事者より、客観的に語れる第三者に頼るべきだろう。年季の差もあるので、分かり易く教えてくれるはずだ。

「どういうことなのです？」

「ああ。……京都で多発していた痴漢は、イツセーの可能性が引き起こしてやがった」
意味が分からない。

ホントに意味が分からなかったが、アザゼルはすぐに事情を説明してくれる。

魔王アジユカ・ベルゼブブによる駒の調整と、赤龍帝の籠手に眠る残留思念の内、憎悪に捕われていなかった二人の先代。

その協力により、イツセーは赤龍帝の籠手の可能性を解き放つ事に成功した。

……そして、それはどこかに飛んで行ってしまった。

ここまでは良い。明らかにトンデモな事態ではあるが、しかしここまでは良かったのだ。問題はここからである。

そのイツセーの可能性は、人へ乗り移って移動していたらしい。

……その過程として、その人のおっぱいへの渴望をイツセー並みにまで高めるといふ余計な真似をしたうえで、だ。

「イツセーさんのおっぱい好きは、常人の理性では制御できないということなのです?」
「ただだけおっぱい好きなんだろうなあ」

「自分でもちよつとシヨックだったりする……」

三者三葉で複雑な表情になるのも無理はない。

自らの可能性を解き放つたら、文字通り飛んで行った。きちんと帰ってきたのは良いのだが、その過程で人々の迷惑をかけまくっている。というより、可能性と一緒の煩惱まで飛んでいくとはどういうことだ。しかも本人に影響がないレベルなのに、他人には悪影響がありすぎるという質の悪さ。

前代未聞すぎて意味が分からない。

「と、とにかくフォローはしないとなのです! おっぱいドラゴン関係で金はありま
すし、再就職までのお世話をすべきなのですよ!」

「だ、だよね!! 俺の所為で逮捕されちゃった人達に、とにかくお詫びしないと……」
若干慌て始めるニングとイツセーだが、しかしアザゼルは落ち着かせるように両手を
掲げる。

「そつちのフォローはこつちでやつとくから気にすんな。お前らはとにかく作戦に集中
しろ」

「お、お願いします!! 俺の所為で痴漢させちゃったなんて、流石にちよつと可哀想すぎ

るってどうか、目も当てられないってどうか……」

本心から、色んな意味でショックを受けているイツセーだが、それはそうだろう。

彼は基本、善性なのだ。自分の所為で犯罪行為をしてしまったものがあるなら、その事を悔やむぐらいの感性はちゃんとある。ましてや、それがこんなアホな事で人生に悪影響などと、下手したら一生気にしかねない。

アザゼルもそれは分かっているのです、しつかりきつかりちゃんとする事は決意していた。

「……しつかし、こいつの可能性は特殊すぎるな。乳の力と書いて乳にゅーぼわー力なんてあるんじゃないかねかと本気で思ってきたぞ」

「理解不能な事ばかりする人です。人を救ったり迷惑を……かけた……うえつぷー」

アザゼルに乗ったロスヴァイセが、顔を真っ青にしてうずくまる。

アザゼルの昼酒に業をにやしたロスヴァイセが、勢いに任せて自分でひったくってしまつた結果がこれだ。

酔っ払いの因縁つけそのもので英雄派が割とマジ防御する攻撃を放つたりして仕切り直しにしたのは良いのだが、それからずっとこの調子である。

ニングはその背中をさすりながら、とりあえずビニール袋を差し出した。

「エチケツト袋を貰ってきたのです。一応持っておくのです」

「ありがとうございます。……その前に、とりあえずトイレで出せる分だけ……っ」
ロスヴァイセはトイレに直行していった。

「……間接的に原因になったのですから、職務中のお酒は控えるのです」
「悪かったよ。しかし、ゲロ吐きヴァルキリーか……」

そんなロスヴァイセが知ったらマジギレしかねない愛称を付けながら、アザゼルは
イツセーの可能性の宝玉をイツセー本人に渡す。

「とりあえず、どんなきっかけで力を発揮するか分からねえからお前が持つとけ」
「はい」

イツセーもこれ以上迷惑をかけるわけにはいかないと、割と真面目に受け取ると、ポ
ケットにしまった。

しかし、同時にイツセーは何かを考えこんでいる。

それが足かせになってミスをされたり判断が遅れたらあれだ。ニングはガス抜きを
進める事にする。

「何か気になるなら、相談に乗るのですよ」

「あ、ありがとな、ニング」

イツセーはそう笑顔で礼を言うと、首を傾げながら自分の考えを捻り出した。

「……三国志の曹操って、どんな人だったのかなあって思ってたさ」

「チャイニーズは、炒飯美味しいですぐらいしか、分からないのです」

……中国の文化には疎いニングでは、相談に乗れなかった。

それに苦笑しながら、アザゼルは何かを思い出すかのように指を顎に当てる。

現実問題、彼はその頃も生きていたはずだ。もしかするとリアルで見ていた事もあるのかもしれない。そんな気に、イツセーとニングはあった。

「酒飲むなーとか国家統一とか功罪は多々あるが、個人的に目を向けているところがあるってなら、人材の発掘だな」

「人材？」

二人して首を傾げるのを笑みで見ながら、アザゼルは続ける。

「ああ。曹操は才能さえあればどんな身分のやつでも登用したところがある。それが原因かは知らねえが、後の歴史家も魏は人材に富んだ国だと評されるようになったからな。血がなせる業なのか、英雄派の曹操も人材登用にはこだわりがあるようだ」

「とはいえ、それはあまり褒められたやり口ではないのですよ」

と、ニングはため息をつく。

「拉致も同然の方法で人材を集め、洗脳して兵士にする。どう考えても悪党のやり方なのです」

「ところがどっこい、流石に曹操ほどじゃねえが、国民を強引に兵士にするなんて話、中

世にさかのぼれば大抵の国でしてゐる事なんだよな。いまだ徴兵制のある国家なんて珍しくもねえしな」

アザゼルはそう告げると、何かを思い返しているのか、天上を見上げる。

そこにアザゼルが映し出しているのが何なのか、ニングにもイツセーにもよく分からない。

「英雄もそうだ。簡単にまとめれば特別な何かを持っていて、それを使って大きな事をした連中の総称だ。……その華々しい功績の裏で何百何千人も死んでるし、功績を得る為に後ろ暗い事をしてゐる連中もゴロゴロいる」

「そ、そういうもんなんですか?」

イツセーがちよつと戸惑うのも当然だろう。

一般人が持つ英雄のイメージとは、基本的に清廉潔白かつ高潔な騎士道精神を守るイメージがある。

だが、実際には英雄も人の子なのだ。

「……ギリシャ神話の英雄ヘラクレスは酒癖が悪くて師を誤射で死なせた事がある。オurlレアンンの聖女ジャンヌ・ダルクは、苦情を言ってきた女性を殴りつけた事がある。龍殺しの英雄シグルドも、そのやり方は穴に隠れての不意打ちだ」

アザゼルが語る、英雄達の栄光という光に隠された黒い光景。

それにイツセーが戸惑う中、アザゼルは軽くため息をつく。

「……ムートロンが勝ち宇宙開拓時代ができれば、それに貢献した曹操達は、名実ともに英雄になれる。勝者の側で勝利に貢献したんだから当然だ。それが現実だよ」

「身もふたもない残酷な現実なのです」

アザゼルの言葉に、ニングは思わず頭痛を感じる。

それに苦笑を感じながら、アザゼルは更に続けた。

「ま、英雄になるのはそう簡単にはいかねえって事だ。「英雄になれる力を持っている」という事と「英雄になる事ができる」はイコールじゃねえ。神器所有者とか英雄が持つ力に相應しいが、むしろ悪人の方が多かった」

そこから生まれた悲劇や、それを阻止する為の自分達の汚れ仕事に思いをはせているのか、アザゼルの表情は僅かに暗い。

そして、イツセーは首を捻る。

「しっかし、ムートロンが勝てば曹操は名実ともに英雄かあ。じゃ、俺なんか倒すべく邪悪そのものですよね。悪魔でドラゴンだし」

その言葉に、アザゼルは少しばかり目を丸くすると、心底呆れた感じの表情になる。

「おいおいイツセー。悪魔になった自分の存在と英雄——か人間という存在について考えてたのかよ。……ったく。じゃあ、お前は何になりたいんだったか思い出してみ

ろ」

「上級悪魔になってハーレム王!! 眷属や仲間の為に頑張ります!!」

即答だった。

脊髄反射レベルの即答だった。

だが、それに満足げになりながら、アザゼルはうんうんと頷いた。

「それでいいんだよ、悩むこたあねえ。お前はそれで十分だ」

「確かにそうなのですよ」

ニングも、苦笑交じりだが確かにほほ笑んでいった。

「それにイツセーさんは立派に三大勢力の英雄なのです」

「え、マジで? どこが?」

真剣に分からない感じのイツセーに、ニングは苦笑を深める。

「駒王会談防衛に尽力し、旧魔王派幹部三人を自身の寿命と引き換えに撃退して、更に悪神ロキによる和議妨害を防ぎ切った戦士。英雄的行動をいくつもとっているのに、気づいてないのですか?」

首を傾げてニングが言った事を思い返すが、しかしイツセーはピンとこない。

「いや、俺は皆の為に一生懸命頑張っただけだって。英雄とかそんなんじゃないと思うぜ?」

「イツセーはそう答えるが、その答えにニングとアザゼルは顔を見合わせると噴出した。」

「え、え、え？」

「気にすんな！ お前はお前のままでいて良いってこった！」

「なのです。現実の英雄はともかく、子供達の英雄ヒロコに相応しい心意気なのです」

二人が何でそんなに嬉しいのか分からず、イツセーは首を傾げるしかできなかった。

そして二条城に向かうメンバーが集まる中、彼らは其の為の移動手段である用意された車を待つていた。

「……英雄派の連中、誰が来るんだろうな」

「少なくとも、曹操かジーク、あとゲオルクと誰か一人は来ると思うね」

緊張する匙がぼつりと漏らした言葉を聞いて、祐斗はそう答える。

井草の聞き覚えがない人が何人か出てくるが、すぐにそれに気づいたゼノヴィアが教えてくれた。

「英雄派の首魁とサブリーダーだ。それぞれ三国志の曹操と、北欧神話のシグルドの末裔だそうだ」

「特にジークは教会でも有数の戦力だったの。伝説の魔剣にいくつも選ばれてて、カオス・エッジ魔剣ジークって呼ばれてるぐらい凄い人なのよ。……なのに禍の団に就くなんて！」

「アーメン！ 主よ、このショックをお癒し下さい!!」

などとイリナはかなりショックを受けているらしい。

とは言え、それだけの実力者となると要警戒だろう。

しかも聞いてみれば、曹操はあの最強の神滅具、トゥルー・ロンギヌス黄昏の聖槍の担い手らしい。まとも
に戦えばこちらが確実に負ける。

ジークも最強の魔剣である、魔帝剣グラムの保有者だそうだ。更にそこに、ノートウ
ングやバムルンクなどといった伝説の魔剣を保有。神器が亜種で腕が増えるというコ
ンボだ。

間違いないく、この場の全員で言っても勝てるかと断言できないだろう。それほどまでの
強敵だった。

「……これは、姐さんが連れてくる助っ人が来るまでは防戦に徹してた方が良さそうだ
ね」

井草がそう考えたその瞬間――

「赤龍帝!!」

其の声に全員が振り向くと、そこには九重がいた。

九重はイツセーを見つけると、急いでこちらに駆け寄ってくる。

イツセーはそれを見て、とりあえず屈み込んで視線を合わせた。

「九重! ホテルで待つてろつて言われただろ?」

「私も行くぞ! 母上を助けたいのじゃ!!」

その目は力が籠っていて、梃子でも動きそうにない。

だが、この状況下で流石に幼女を連れて行くわけにはいかないだろう。

井草はそう考えると、再び心を鬼にして九重を掴み上げる。

「却下! 万が一にでも君に何かあれば、それこそややかしい事になる。足を引つ張らないのも助力だと理解してもらおうよ」

「放してくれ! 母上が! 母上がああああ!!」

「ちよつと待つててイツセー。すぐに誰かに預けてくるか!」

—ら、と続ける時間的余裕は、生憎全くなかった。

振り返つた井草の目には、イツセー達は映らなかつた。

映つたのはただ一つ。彼らをすつぽり覆い隠すほどの、黒い禍々しい霧だつた。

「ニング、リム!」

慌てて駆け寄るも、しかしそれより先にイツセーたちの姿は霧と共に消え去る。

あの霧は、おそらくは神滅具の一つである絶デイメンション・ロスト霧によるものだろう。そして、絶霧

の使い手であるゲオルクは英雄派の幹部の一人だ。

……グレモリー眷属達を余興として招待していたのは知っていたが、まさかこんな形で態々迎えに来るとは思わなかった。

「……上等だよ」

井草は歯を食いしばると、素早く二条城へと視線を向ける。

結果的に出遅れたのは事実だ。既にイツセー達は戦いを始めているだろう。

だが、そうだというのならさっさと追撃を行なえばいい。

直ぐに二条城に辿り着いて、そしてすみやかに戦闘に介入する。それだけの話だ。

「待っててくれ、ニング、リム、皆!!」

即座にレセプターイーツにへ変身すると、井草は周りの目も気にせず全力で走り出した。

9 話

二条城近辺では、三大勢力と妖怪の連合軍が、英雄派及びムートロンの部隊と睨み合っている状態になっていた。

ナイアル率いるムートロンの特殊中隊は、素行が悪いが腕は立つという人物と、ナイアルが狩ってきた女で構成されている。

女性陣は若い間だけ使えればいいという事で負担が大きい改造手術を施されている。そして、そんな女の雌としての部分をナイアルの許可の下楽しませてもらっている通常構成員は、その精神性ゆえに庇護してくれるナイアルに対してそこそこの忠誠心を持っている。

全員がE Eレベル4，5を超える、上級悪魔クラス以上。更に、現地のチンピラを利用して作り上げた使い捨ての下位イーツ部隊をまき散らす事で戦線を混乱状態にさせている。

そして英雄派もまた強敵である。

ムートロンの協力によって、構成メンバーは余程の事が無ければ全員禁手に到達している。この時点で、上級悪魔クラスでも苦戦必須の化け物達となっているのだ。

更に、英雄派メンバーの一人であるレオナルドが厄介だ。

彼に保有する神滅具は、アナイアレイション・メーカー魔獣創造。

創造系神器の最高峰であり、自身が思い描いた魔獣を生み出す、最悪の神滅具とも呼ばれる代物。使い手があまりに子供である為本領を發揮しきれていないが、それでも中級悪魔相当の魔獣をぽんぽん作り出せるのは強敵以外の何者でもない。

対悪魔、対妖怪、対天使堕天使。それらのアンチモンスターを大量に作り出し、足止めに徹した遅滞戦術をとっているがゆえに、連合軍は中々進軍できていない。

使い捨てイーツと魔獣部隊。これらの壁と混乱を前に、連合軍は完全に進行が停止していた。

そして、そこからゲリラ戦の要領で英雄派とムートロンが仕掛けてくるのだ。

お互いに大きな被害は出ていないが、このままで英雄派の実験は何らかの結果を出す事になるだろう。

「クソ！ 英雄派に八坂姫を好きにさせるわけには！」

妖怪の一人がそう歯を食いしばった、その時だった。

「うおおおおおおおおお!!」

声と共に、地響きが鳴る。

否、それは地響きではない。足音だった。

まるでガトリングガンの斉射のように大きな音を連続でたて、味方陣営側から禍の団側に向かうように、足音が向かってくる。

その足音に、誰もが何事だといわんばかりの感情で視線を音のする方に向けた瞬間――「そこをどけええええええ!!」

――軽く見積もって100を超える光の槍が、量産型魔獣を一気に減らした。

「!？」

「あんだあ?」

イーツが反応して攻撃態勢を取ろうとすれば、糸に絡め捕られて身動きが取れなくなる。

英雄派のメンバーが禁手を発動しようとすれば、そのイーツを叩き付けられて鎮圧される。

そして次の瞬間、その要因が駆け抜ける。

両肩にある円錐状のパーツが特徴的な、全体的に青っぽい、イーツと思しき何か。

それはアツという間に走っていくと、魔獣達が再び増えるよりも先に二条城へと走っていく。

そして魔獣達の攻撃を迎撃しながら、連合軍は口々に慌てていた。

「あ、あれなんだ!？」

「知らねえよ！ でも味方じゃね？」

「こつちにひと目もくれなかつたぜ？」

妖怪達が戸惑う中、しかし三大勢力はすぐに理解していた。

なにせDシネマは三大勢力はもちろんのこと、三大勢力と和平を結んだ勢力なら誰でも見れる。

こと娯楽が少ない悪魔側にとつて、彼の知名度はかなり高かつた。

「仮面ファイターレセプター!？」

「俺知ってる！ あれ、たぶんモデルの井草・ダウンフォールだ!!」

「確か京都（こゝろ）に修学旅行に来てたんだったな。助っ人つてのはグレモリー眷属か！」

「あれ？ でもイクサって二十歳のフリーターじゃ……」

「そこはDシネ風に調整されてんだよ。井草・ダウンフォールは和平前はリアス・グレモリーの監視役で、其のまま駒王学園高等部に在籍したまんまだ」

などと口々に悪魔や墮天使が言い合う中、しかし誰もが少しだけ士気を上げていた。

そして、井草はそれに殆ど気づいていない。

敵味方の識別はついている。なので誤射は一切していない。

全力疾走状態で、敵味方が入り乱れていないとはいえ、乱射で誤射ゼロ。

この時点で、井草の戦闘能力は高水準だという事の証明である。ここまでの事ができ

るからこそ、井草は魔王の妹であるリアスの監視役に抜擢されたのだ。ただ危険に見える安全圏だから死にたがりの井草があてがわれたのではない。何かあつたとしても、それを遂行できる能力があつてのものである。

だが、その井草は判断はしていても認識はしていない。

ともかくにも二条城に向かう事に全力を傾けているのが現状である。

ものの見事に一人だけ絶霧から逃れてしまった。

イツセー達は今頃命がけの戦いを英雄派と行っている頃だろう。

そして何より、リムとニングが窮地に追いやられている。

井草・ダウンフォールはとにかく焦っていた。

要人の、仲間の、そして愛する者達の窮地を救わんと、とにかく全力で二条城に向かつていた。

……実際に二条城に着いても意味がない事に気づくまでは、そう遠くない。

そして、二条城に井草が向かっている事に意味がない理由は簡単である。

英雄派もイツセー達も、二条城にはいないからだ。

確かに、英雄派の実験は年規模の術式装置と龍王クラスの存在が必要不可欠である。その目的とは単純明快。グレートレッドのおびき寄せだ。

そもそも禍の団のトップであるオフィスの目的はグレートレッドの打倒。厳密には、グレートレッドを打倒する事で、オフィスの故郷である次元の狭間で静寂を得る事である。

それを考慮するならば、グレートレッド撃破に貢献する事ができればオフィスから恩返しとしてこれまで以上の恩恵を得る事ができるだろう。

そもそも、グレートレッドはその強大さゆえに確な情報がない。それをしらべることができるだけでも、研究者の類に交渉することは容易であり、おびき寄せて観察するだけでも値千金である。

更に、英雄派は隠し玉を保有しており、それを使う事も考慮していた。

そしておびき寄せの方法として、英雄派は術式都市クラスの術式装置と、龍王クラスの存在が必要だと判断した。

しかし龍王クラスを確保するのは神々でも苦労する難行。そう簡単に事は運ばない。

そこで英雄派は龍王そのものの確保を断念。同格の存在と術式装置がセットでいる、京都と八坂姫を利用する事にしたのだ。

……が、そこで英雄派は一捻りを加えてきた。

英雄派の幹部である、神滅具の使い手、ゲオルク。

彼の持つ神滅具、絶霧の禁手は、絶霧を精製工場として結界装置を作り出す、ディメンション、クリエイト霧の中の理想郷。

英雄派はこれを応用する事で、京都とリンクする疑似京都を作り上げ、そこで実験を行っていた。

その余興としてイツセー達をおびき寄せたわけで、二条城にいる英雄派は囷と言つてもいい。

……井草・ダウンフォールが余計なトラブルに巻き込まれるまで、あと十分もかからない。

そして、それより先にイツセー達は二条城で曹操達と睨み合っていた。

それぞれ別々の場所に転移して、前座として英雄派の中堅どころと戦闘するが、全員何とか潜り抜けた。

イツセーは物理攻撃を無効化する禁手の使い手と戦う事になったが、運良くリムやニングと一緒にいた事もあり、取りうる攻撃手段を総当たりで使用。その結果、気温などの影響までは無効化できない事を利用してドラゴンの炎で蒸し焼きする事で撃破する事に成功した。

そして疑似二条城で曹操達と対峙。

ゼノヴィアが、ギリギリで間に合った新兵器、デュランダルをエクスカリバーで包み込んで制御するエクス・デュランダルで開幕速攻を叩き込むが、しかし平然と凌がれて、今に至る。

「さて、貴様らもエボリユーションエキスを持っているのだろうか？ さっさとイツになるといい」

再び大出力攻撃を叩き込まんとするゼノヴィアが、しかし曹操達は首を振る。

その意味を図り損ねて皆が警戒するが、曹操は肩をすくめた。

「悪いが、俺達の中でイツになるのはジークだけなんだよ」

「一応彼らにも勧めたんだけどね？ どうも乗り気じゃないみたいなんだ」

ジークも苦笑するが、彼と肩を並べる英雄派の幹部達は、揃いも揃って肩をすくめた。

「宇宙に逃げ出した出戻りの力に頼りつきりは、ちよつとねえ？」

「まったくだ。ジークフリート、てめえ腑抜けてるぜ？」

「禁手化の研究には使っただろうに。拘りすぎだよ」

などと口喧嘩一歩手前になりながらも、しかし彼らは全員イツセー達に視線を向けていた。

そして、その後ろでは、強敵に暴走させられた八坂姫が、九尾の狐の状態となっている。

これら全ての対処を行わねばならないという時点で、まさに難題であり――
「では、さっさと片づけるのです」

「そうなりやすねえ」

いうが早いか、即座にニングとリムは得物を抜いて戦闘態勢を取る。

そしてそれを見て、曹操達は面白そうに笑みを浮かべる。

「じゃあ、誰が誰をやる？ 俺は赤龍帝とやりたいんだけど」

曹操の言葉に、三人は全員一瞬考え――

「じゃあ、僕は聖魔剣とデュランダル使いをやり合いたいね。ジャンヌは？」

その言葉に、ジャンヌと呼ばれた金髪の女性は考え込む。

「そーねー。あ、ヘラクレスはどうなの？」

と、大男にジャンヌはふり、ヘラクレスと呼ばれた大男はそれに対して値踏みする視線をイツセー達に向け――

「いやいやー。相手に選ばせてやるほど善良じゃねえですぜ、こっちは」

—彼が何か言うよりも早く、リムは速攻で襲い掛かった。

素早くワイヤー付きの手榴弾をどこからか取り出すと、そのままピンを抜いてワイヤーの先端を掴んだまま投擲。

そのスムーズな動きに一瞬反応が遅れたヘラクレスは—

「あ、オイコラー—」

そのまま至近距離で爆発に巻き込まれ—

「—だったら俺の相手はてめえだな—」

—それを意にも介さず、即座に反撃の為に殴り掛かった。

それを飛び退って回避するリムのいた場所は、爆発によつてクレーターが生まれる。

「どうよ！—これが俺の神器、マイティング・デトネイション 巨人の悪戯だ!!」

「躲しちまえばどうって事ねえですなあ？ 間合いに入らなけりや意味ねえでしょうしっか?」

そう挑発しながら、リムは光の銃を構えるとそれを連射。

それを意にも介さず受け止めたヘラクレスは、それに対して笑みを浮かべる。

「なら見せてやるよ! バランス・ブレイク 禁手化ううううう!!!」

その瞬間、オーラの増大と共にヘラクレスの各所からオーラで構成された突起物が展

開する。

そして、それは噴煙を上げて射出された。

一言で、言おう。

それは、どうしようもなくミスイルだった。

「アリですかい!?!」

「アリさ! これが、俺の禁手、超人による悪意の波動お!!」

即座に連射で半分を撃ち落として空いた弾幕の隙間に滑り込んでダメージを押さえるリムだが、そこにヘラクレスが迫りくる。

対格差で何とか回避して反撃に転じるが、しかしヘラクレスはそれを意にも介さない。

如何に手に持つ装備を強化する剣豪の腕であろうと、それだけでは限界がある。

禁手に至った者とそうでない者との大きな差が、ここでリムを苦しめていた。

だが――

「ほれ! こいつは私が受け持つちまうんで、さっさと他の連中倒して援護プリーズ!!」

――その言葉に、全員が動き出す。

そして何より、その戦闘の隙をついてニングは駆け出していた。

彼女の至った禁手によって生み出される魔剣。銘をエクストラカリーバー。

その名の通り、エクスカリーバーの力を基本として模倣された魔剣。其の中には、当然の如く支配の聖剣も含まれる。

ゆえに、術式で支配されている八坂姫の支配権を奪い取る事も不可能ではない。だが、そんな事を許すほど、相手も馬鹿ではない。

「あらあら、お姉さんがさせないわよう！」

後ろから追いつがるはジャンヌ・ダルク

其のまま何もないとところから剣を生み出すと、即座にニングに切りかかる。

それを振り返りざまに切り碎いて、ニングは眉を顰める。

「聖剣創造なのですか。ですが、それだけなら！」

「そうね。これだけだと流石に勝てないわね」

そう、ジャンヌも即座に肯定する。

聖剣創造。それは、魔剣創造の姉妹品ともいえる神器。

能力は魔剣創造の聖剣版そのもの。ゆえに、魔剣創造の亜種禁手の中でも最強格である干将莫邪の如し魔剣には届かない。

「だがしかし――」

「禁手化」

―至っているのなら話は別だ。

その瞬間、ジャンヌの聖剣は龍へと変じ、ニングに襲い掛かる。

エクストラカリバーの龍殺しで迎撃するが、しかしその瞬間にジャンヌがニングに切りかかる。

とつきの迎撃の結果は、双方ともにかすり傷。

そして、お互いに強敵とみなして警戒の度合いは遥かに高まる。

「私の断罪スレイク・ビクティム・ドラグーンの聖龍にも対応できるなんて。お姉さんたぎっちゃう」

「そちらも亜種なのですか。これは、面倒なのです」

聖剣の特攻性はニングには通用しない。

だがしかし、強敵が二人になったという事実だけでも難易度は高くなっているのだ。

そして、残りのメンバーにはそれぞれ曹操とジークが戦闘を開始している。

これでは八坂姫の救出は困難だというほかない。

「チイ！ 井草を取り込まなかったのは――」

「―あくまで余興だからなのですか！」

リムとニングが同時に歯噛みする中、戦闘は激化していった。

10話

『シヤーク』

「死ねえ墮天使！ 禁手——」
バランス・ブレ

「邪・魔・だ・よ!!」

イーツ化したうえで更に禁手化まで使用した英雄派の構成員に全力の攻撃を叩き込んで、井草は即座に周囲を確認する。

撃破された英雄派を無視して、井草は仲間達を探す。

だが、明らかにおかしい。

先程の井草が倒した英雄派のメンバーとの攻防（一瞬）以外、戦闘の痕跡がほぼない。それどころか、聖槍のオーラなどの反応すらろくにない。

……ここに至って、漸く井草は――

「まさか、もう逃げた？」

――まだ勘違いしていた。

まあ、普通に考えて京都とリンクする疑似京都を作ってそこで術式を展開しているな

どと思ひ至る方が少数派だろう。ここは井草を責めるところではない。

そして、その勘違いを是正してくれる者は確かにいた。

「あ、英雄派の人達は、疑似京都の方にいるから、そつちじゃないかな？」

その言葉と共に、足音が響く。

何より、声そのものがとても覚えのあるものだ。

井草は、その人物をいやというほど確信して、そして静かに振り返る。

そこにいたのは、灼熱の毛皮を纏った、女性型のイーツ。

「……伊予」

「うん。久しぶりだね、井草君」

華やいだ笑顔を見せている事が、イーツ化している状態でも分かってしまった。

伊予は、本心から井草と会えた事を喜んでゐる。それが分かる。

そして、ナイアルの命令に従って井草と戦う事も一切躊躇していない。

その証拠に、既に両手は灼熱を纏っている。臨戦体制なのが明白だ。

井草はそれに対して戦闘態勢を取りながら、静かに考える。

—どうして、こうなつたんだろう。

全てはナイアルの所為だと言うのは簡単だ。だが、それは言い過ぎだろう。

井草は、無自覚に傲慢だった。

五十鈴は、不満を溜めていた。

きつといつか爆発していただろう。そして、三人の関係にはヒビが入っていたはずだ。

だからこそ、知りたい事がある。

「……伊予。君に、聞きたい事がある」

「うん。何かな？」

小首を傾げるその動作は、あざといというより天然だ。そこに色仕掛けや裏の意味などという物はなく、本能レベルでやっている事だ。

そういう事を自然にやってのけるからこそ、伊予はとても可憐な少女だった。

それが、いつの間やら何人も殺してしまった。

何かされた事は明白だ。五十鈴もなんでそんな事をしていたのか理解しきれてないところがあつた。おそらく、それと同じ事があつたのだろう。

しかし、それだけではない。

それだけなら、五十鈴のように正気に戻っている可能性だつてあつた。

あるのだ。何かが。

そのまま突き進んでしまうほどの、何かが。

「……伊予。君は、何をナイアルに求めている？ 何を俺に求めてた？」

それが知りたい。

伊予が自分に好意を抱いていた事は、五十鈴の視点から知っている。

そしてそのうえで、伊予はナイアルを選んだ。無有影雄を選んだ事も知っている。

伊予は何かを井草に見て、ほのかな思いを抱いた。そして、無有影雄にそれ以上のものを見て、彼の下へと走った。

それが何なのか、井草はどうしても知りたかった。

「そうだね……。なんて言えばいいんだろう……」

少し考えこむ伊予だったが、やがて何か思いついたのか、ポンと手を叩いた。

「……見た事ないものを見せてくれる、かな？」

その言葉は、心からのものだった。

井草は無言で答えない。そして、伊予はそれを促していると受け取ったのか、話を続ける。

「……何年前からかな。なんていうか、いつもの毎日がどこか退屈に思ってた」

そう語る伊予は、苦笑を感情で浮かべてくる。

少なくとも、井草にはそう見えた。

「井草君が墮天使の血を引いているからかな？ 井草君は何処かずれてる感じがして、い

つかそこに連れて行ってってくれるんじゃないかって思ってた。そして、いつの間にか好き

になつてた」

それは、確かにそうなのだろう。

井草は墮天使の血を引き、神器を持つている。それだけでも、どこか人からずれた者があつただろう。

自覚していたのだから尚更だ。人にばらさないようには言われていたが、しかしどこか優越感を持つていた。行動の節々にそれが漏れていたのかもしれない。

しかし、それは裏を返せば――

「でも、ナイアルさんは見せてくれたの」

――実際にまだ見ぬ世界を見せた者がいれば、そこに転がつてしまうという事だ。

「ナイアルさんはこつそり夜に連れ出してくれた」

そして、そこから先は簡単だったのだろう。

「初めてのお酒の味。初めての夜のドライブ。初めてタバコはちよつとのどにむせたかな」

要は簡単な事だったのだ。

日常生活に閉塞感を感じている真面目な生徒。彼らが酒やタバコに手を出して、其のままずると堕ちていく。そんな人生の落後者になるドロップアウトの物語。

其の中には、悪い友達に誘われるという展開がよくあるものだ。

「始めてディープキスされた時、私はずっと心に残ってた井草君と五十鈴ちゃんの事を忘れちゃった。それぐらい、ナイアルさんのキスは素敵だった」

そう告げる伊予は、どこか陶醉していた。

「ナイアルさんのキスは、私にとって最高の。キスされてからする体験は、何時だって何時だって素敵になるの」

その言葉に、井草はあえて割って入るように聞く。

それは、聞かねばならない事だからだ。

「……それは、殺しでもかい？」

「うん」

即答だった。

「死ぬかもしれない戦いも、圧倒的な蹂躪も、歯応えのある拮抗も、全部が全部楽しいの。私、戦闘狂だったみたい」

そう言い放つ伊予は、陶醉状態に近かった。

日常に閉塞感を感じ、非日常に焦がれるのは日常に生きる人間にとって、よくある事だ。

中二病の基本形態の一つだろう。日常系以外の創作物が読まれる理由の根幹だともいえる。

とはいえ、それを楽しめるのは創作だからだ。

実際に非日常に巻き込まれれば、そう都合よくはいかない。

大怪我による激痛はもちろん、死ぬかもしれないという精神的重圧は大きい。更には過酷な環境という苦しさに満ち溢れた環境にいるというだけでも、非常に大きなストレスを發揮する。

大抵の訓練も精神的な心構えもできていない者は、すぐに心折れるのだ。正真正銘それを楽しめる、非日常を日常としたがる者などごく一部である。

大抵の非日常に憧れる者は、非日常を経験して日常に戻る事を選ぶ。もしくは、未成年飲酒などの低レベルな事で、欺瞞交じりの自己満足を得る方向で留まるぐらいだ。

だが、それは裏を返せばごく一部は適合してしまうのだ。

ヴァーリ・ルシファーのように強敵との命がけの戦いに愉しみを感ずる者もいる。

人の命を奪うという、日常では基本的にあり得ない事に快楽を感じる殺人狂だっている。

中には恐怖心を一種の悦楽として捉える、吊り橋効果のような精神状態になった者もいる。

伊予がそのうちのどれかなのか、それともそれ以外の類なのかは分からない。

だが、これだけは言える。

行仁伊予は、最悪の形でその素質を目覚めさせてしまった。

非日常に焦がれ、非日常に適合できる。その稀有な素質を、よりもよつてナイアルによつて、その素質を開花させてしまった。

そして彼によつて悪質な形で非日常を経験してしまった事で、伊予は歪んでしまったのだろう。

五十鈴と伊予の違いは、きつとそこだ。

非日常に対する潜在的願望の強さの違い。それが薄かったからこそ、五十鈴は正氣に戻った。それが強かったからこそ、伊予はのめり込んだ。

五十鈴は結局、井草と伊予の意趣返しがしたかっただけなのだろう。だからこそ、殺人の衝撃をきつかけとして、正氣に戻った。

伊予は逆に、非日常に行きたくて堪らなかつたのだろう。だからこそ、殺人の衝撃という日常では普通味わえない感覚に、酔いしれた。

……それが、致命的なレベルにまで伊予を泥沼の中へと引きずり込んでしまったのだろう。

もしもだが、伊予が神の子を見張る者に入れば、きつと適合しただろう。

彼女は神器は持っていないようだ。だが、魔法などといった超常の技術は少なからず存在している。それを学ぶ機会はいくらでもあつただろう。

そうなれば、適度の非日常を知る事ができて、伊予はここまで変わらずに済んだのかもしれない。

だが、全てはもう、過ぎた事だ。

仮定の話にしても、意味がない。

「……分かった。もう、いいよ」

井草は、静かに構えを取る。

大量の光の槍を展開して戦闘態勢を取りながら、井草は静かに伊予を見つめる。

倒せるのか。それは、分からない。

殺せるのか。それも、分からない。

だが、一つだけ断言できる事はある。

戦える。それは、断言できる。

「悪いけど、これ以上は好きにさせれない……っ！」

「え、いやだよ？ だつてまだまだ楽しみたいんだもん」

その言葉と共に、井草と伊予は激突する。

先ず先制攻撃として、井草は莫大な光力の槍を投射する。

その攻撃力は上級墮天使クラスとしてなら最高峰だろう。あたれば並の上級墮天使

なら一撃で大打撃となるレベルだ。

それに対して、伊予は何の躊躇もなく拳を向ける。

「えいやー！」

そして、可愛らしいが渾身の気合を込めた打撃で、それを粉碎した。

打撃そのものも高い身体能力に由来する高い攻撃力だ。

だが、それ以上に両手に纏っている灼熱の威力が大きい。

二つ合わせた総合攻撃力なら、戦車の駒ルীগに昇プロモーション格した状態のイツセーの攻撃力すら上回るだろう。

EEレベル6，0。元龍王タンニーンですら脅威とみなす、圧倒的なまでのエボリューションエキスの適性。それによって変化する上位イーツであるアウターイーツ、クトウグアイーツ。

その圧倒的な出力が、今度は反撃となって襲い掛かる。

「次はこっちの番だよー！」

そして殴り掛かる伊予。

その一撃の威力は絶大だ。まず間違いなく今までの井草では対抗する事などできないだろう。

単純威力で対抗できるのは、ゼノヴィアかイツセーぐらいだ。それも、あくまで一撃の威力であって連打ではない。

長丁場になれば、通常攻撃で平然と連発できる伊予が凌ぐ。

これが、アウターイーツ。これが、E E レベル6, 0。これが、クトウグアイーツ。それを脅威に思いながらも、井草はしかし攻撃を回避して、はたと気づいた。

そういえば、五十鈴はこんな事を言っていた。

伊予が変身するクトウグアイーツは、灼熱を纏つての打撃と灼熱による砲撃が基本だと。

そして、こうも言っていた。

そもそもそれだけで十分強いと。

そして、それゆえに井草は気づいた。

……この戦い、実は結構有利なんじゃないかな？

なんとというか、回避が非常に楽だった。攻撃を回避しやすい。

そして、その理由にすぐ気づいた。

「伊予、そういえば運動音痴だったっけ」

「酷いよ!!」 2はとつてるよ!!」

反論が飛ぶが、しかしそれは自慢にはならない。

なんというか、虚弱体質というわけではない。なので、体力は人並みにある。

だがしかし、なんというかセンスがない。運動神経が鈍いのだ。

その所為か、体力があれば大抵の事はどうにかなるスポーツは人並みでいけるが、球技などのセンスや技術が必要になる競技だと、一気に下手になる。

どうやら、ナイアルはその辺りも考慮したらしい。

単純にぶっぱすれば勝てるタイプの能力を選んだという事だろう。

……なら、勝機はある。

そして、それを見逃すほど井草も愚かではなかった。

「……伊予。悪いけど、君になら俺は勝てるよ」

静かに一旦距離を取りながら、井草はそう告げる。

そして、腕を前に突き出した。

それに、伊予は僅かにムツとした。

「むー！ そんな簡単に負けたりしないからね！」

その言葉と共に、伊予は灼熱の砲撃を放つ。

その出力は、最上級悪魔ですら出せる者は数少ないだろう。

まず間違いなく魔王クラスでも当たり負けしかねない破壊力。このまま放たれば、

京都が壊滅的な打撃を受ける。

……そんな事は、させない。

井草はそれを決意しない。

ただ単純に、それが容易だからという判断で、井草はそれを引き出して振るう。

そして、放たれた砲撃は斜めに軌道を逸らして宙へと消えた。

その圧倒的な攻撃力の根源は、一振りのバスターソード。

無骨な外見を創造するバスターソードだが、何故か流麗な装飾が施されており、まるで芸術品のような美しさがある。

そして、そのバスターソードからは高出力の雷撃が放たれていた。

「……ロキが開発したムジヨルニアを、俺用に仕立て直したのがこれだよ」

「へ、嘘でしょ?」

井草の言葉に、伊予は明白に驚いた。

ムジヨルニア。それは、ミヨルニルのレプリカである。

出力はオリジナルには確かに劣るが、しかし桁違いの高性能を誇る装備である。

それを、バスターソードに仕立て直し、戦用の武器として作り直したのだ。

理由は単純。ケンゴウウィーツの力を持つ井草が使用するなら、剣の形にした方が遥かに効率的だからだ。

そして、それを構えながら井草は静かに腰を落とす。

「この、ツールセイバーで君を止めるよ。……覚悟を決めてくれ、伊予!!」

その言葉を決意表明として、井草は勢いよく駆け出した。

11話

そしてその頃、祐斗達はジークフリートを取り囲んでいた。

ともかくにも、敵を減らす必要がある。

既にイツセーは曹操に狙いを付けられている。ならば、もはや残りのメンバーで敵を一人減らすしかないだろう。

木場祐斗、ゼノヴィア、紫藤イリナ、ロスヴァイセ。

四人がかりで敵を減らす。それが、残りのメンバーが稼いでいる時間に報いる最後の手段だった。

そして、それをなせる可能性は十分ある。

グレモリー眷属の真のエース。伝説の聖剣使い。天使長ミカエルのA。^{エース}主神オーデインの直属の部下。

若手においては規格外ともいえる来歴を持つ四人は、必然的に強者である。その実力は生半可な上級悪魔をしのぐほどのものだ。

「いいね。揃いも揃って現役の上級悪魔の眷属をしのぐ猛者揃い。これに滾らなければ

「英雄の末裔なんて名乗れない」

だが、その四人と対峙してなお、ジークフリートは余裕の表情だった。

強者との戦いに興奮はある、だがそれだけだ。恐れがない。

自分が負ける事など微塵も考えていない、それが見て分かるほどにまで、どこまでも高まっていた。

「これは僕も本気の出しがいがあるというものだよ。ジャンヌとヘラクレスにばかり禁手を見させるのもあれだしね……！」

その言葉と共に、ジークの背中から四つの腕が生え、そのうち三つが魔剣を構える。

最強の魔剣である魔帝剣グラムを筆頭に、五本の魔剣を保有する、ジーク。

その神器、トウワイス・クリテイカル龍の手は本来籠手型だが、ジークは背中から文字通り龍の手が生える

という亜種の形で具現化する。

そして、その数が増えているという事は――

「禁手、というわけかい？」

「ああ。カオスエッジ・アスラ・レヴイツジ阿修羅と魔龍の宴というんだ。凄いだろう？」

祐斗にそう得意げに答えるジークは更に余った龍の手で一本のエボリユーシヨンエクスをとる。

『ゲオルギウス』

そして、騎士の鎧を身に着けた姿になると、更にその空いた手にアスカロンに似た聖剣が具現化する。

「あれは、シャルバ・ベルゼブブが使っていた……っ！」

「悪魔に裏切り者が聖人の力を使うだなんて!? ああ、主よ!!」

ゼノヴィアが瞑目し、イリナに至っては嘆きのあまり天に祈りを捧げている。

「あの、ここで祈られるとこちらにダメージが入るので後にしてください!!」

ロスヴァイセが苦言を呈す中、ジークは面白そうに四人を見ながら、悠然と六本の伝説の剣を構える。

「龍殺しの末裔が龍殺しのイーツになるのも粋だろう? それに、聖剣なら君の魔剣で台無しになったりもしないしね」

そして、祐斗に興味深い視線を向けながら、ジークはグラムの切っ先を突き付ける。

「さあ、僕を楽しませてくれよ。特にグレモリー眷属の裏エースである君とは全力で戦ってみたかったんだ!!」

そして次の瞬間、六振りの伝説の刃が周囲一帯を切り刻んだ。

「じゃあ、これはどうかな!!」

軽快な動きで曹操はイツセーの攻撃を回避しきり、聖槍を振るう。

相手が本気を出してない事は分かるが、本気を引き出させる余裕もない。

さつき軽く不意打ちで攻撃を受けただけで、アーシアが回復してくれなければ死んでいた。それほどまでに、彼の持つ聖槍と悪魔である自分との相性は悪い。

これが最強の聖遺物。これが、最強の神滅具。

それを保有する曹操は、間違いなく強敵だった。

英雄派のトップというのは伊達ではない。イツとオーフィスの蛇を使っていたシャルバともまともに渡り合えるだけの実力が彼にはある。

その二つを使っていないのにこの実力。下手をすればムートロンの幹部クラスにも引けを取らないだろう。

だが、それでもやりようはある。

向こうはどうもこつちを計りに来ている節がある。

だから一気に勝負を付けず、悪い言い方をすれば遊びに来ている。

そう、だから――

「ドラゴンショット!!」

「甘い甘い」

さりとここちらの攻撃を、回避してしまつた。

「そんな単純な射撃に当たるほど、こっちは甘く」

そう言いかけた曹操は、しかしすぐに気が付き、目を見開いた。

「避けるヘラクレス!!」

「あん……ぐおお!」

リムを相手に爆撃を敢行していたヘラクレスに、曹操が回避したドラゴンショットが直撃する。

大したダメージにはならなかったが、リムがその意図を察するには十分な時間を稼ぐ事ができた。

「でかしやがりましたね、イツセー!!」

その言葉と同時にリムは懐からワイヤー付きの手榴弾を取り出すと、それを投擲。

それはワイヤーによって強化されたままで、ニングと戦闘中のジャンヌが作った聖剣の龍を揺るがした。

「ちよ、何やつてるのよヘラクレ……すう!」

「おつとはずしたのです!!」

その隙を突いたニングの斬撃は躲されるが、しかしそれだけで十分だ。

相手がそれぞれの相手に集中できると思い込んでいた隙をつき、そのバランスを一瞬崩す。

なるほど、どうやら言った位置ではこちらが不利のようだ。しかし、これは集団同士の戦いでもある。

ならば――

「捕縛なのです!!」

「うお!!」

――チームワークで戦闘を行えば、それだけでも十分勝機がある。

ニングの禁手による魔剣、エクストラカリーバーが擬態の力でヘラクレスに巻き付き、そしてその瞬間にイツセーもまた組み付いた。

そして――

ルーラー

「支配!!」

ブーステッド・ギア・ギフト

「赤龍帝の贈り物!!」

明確に、的確に、お互いが最善手を打つ。

エクストラカリーバーの力で一瞬だがヘラクレスは制御され、そしてイツセーの譲渡で出力が大幅に向上する。

その意図に気づいた曹操は妨害に入ろうとするが、その瞬間盛大にずっこけた。

「ぐお!? わ、ワイヤートラップ!？」

「ふふくん。暗部出身なんで仕込み武装の一つぐらいはありやすぜえ?」

得意げにニヤニヤするリムに曹操は一瞬殺意を浮かべるが、それが良くなかった。

「隙だらけだぜ、曹操!!」

一瞬で安全圏に退避するついでに、イツセーはアスカロンを振りかぶる。

「曹操!？」

「そちらも隙ありですなあ?」

そして同時にリムは、曹操に気を取られたジャンヌに迫り―

「終わりなのです!!」

「お、おいまして―」

ヘラクレスは強化された出力で地面に向けて爆発のオーラを発射させられ―

爆発と二つの斬撃が、明確に英雄派に痛打を与えた。

「吠えろ、トールセイバー!!」

振るう雷撃を纏った斬撃が、灼熱の本流を上へと受け流す。

最上級悪魔でもそうは出せない、火力だけなら魔王クラスに届く砲撃。

それを井草は確実に安全圏へと逸らし続ける。

そして同時に光の槍を連発で放ち、確実に伊予に当てて行っていた。

心は痛む。激痛すら感じる。

だが、ここで伊代を止めなければそれ以上に被害が増えてしまうだろう。そうなれば、もっと心が痛くなる事は断言できる。

井草自身ではない。五十鈴の心が痛むのだろう。

それは、看過できない。

「ここで止めるよ、伊予!!」

「やだよ! まだまだ楽しみたいんだもん!!」

その言葉と共に放たれる砲撃を、井草はしかし脅威と思わない。

当たればただでは済まない。下手に躲すと京都に酷い爪痕ができる。死人の数も千

や二千では聞かないだろう。被害総額も数百億を超えるだろう。

だがしかし、確実に対処ができるというのなら話は別だ。

これまでの戦いでよく理解した。

ナイアルは、伊予と五十鈴をよく見たうえでイーツを選んでいる。

五十鈴は優秀だ。努力家で、要領だつて悪くない。動機と方向性はともかく、イーツとしての力も努力して身に着けている。

何より戦闘センスがそこそこ以上ある。だからこそ、単純火力では劣るが汎用性の高いハストウールイーツの力を生かして、ロキにすら手傷を負わせるほどの力を発揮しているのだ。

しかし逆に、伊予は戦闘センスが欠片もない。

元々運動神経も鈍い方だったが、戦闘になれば力任せに振るうしかできていない。具体的には、脳筋なのだ。

そして井草の場合は、戦闘訓練も実戦経験も全て肥やしにして、優れた戦士として成長している。

例えイーツの力がなくても、並みの上級堕天使なら確実に倒せるだろう。それぐらいには井草の戦闘能力は向上している。

単純明快に言おう。井草は伊予を倒すのに負担は少ない。冷静に対処していれば、確

実に倒せる相手ではある。

大火力をいなす手段が必要ではあるが、しかしそれは取り込んだトールイーツの力で振るうトールセイバーがあれば余裕があった。

「伊予、ここまでだよ」

「むー！　なんかこれ、全然楽しくない!!」

かみ合わない会話を気にせず、井草は一步を踏みこみ、加速する。

渾身の力で接近し、そしてトールセイバーを振りかぶる。

……心の痛みは、あえて無視し――

「おおつとさせねえぜおらあ!!」

その直後、顔面に拳が叩き込まれた。

爆発に吹き飛ばされたヘラクレスが、そのまま腕を切り落とされた曹操のところに墜落する。

「ぐほっ!？」

「ヘラクレレス！ 結構喰らってるね」

「みたいね。こっちも結構痛くて勘弁って感じかしら？」

同じく腕を深く切り裂かれたジャンヌもまた、カバーをしてもらうつもりなのかするつもりなのかはともかく、曹操のところに戻る。

しかし、しかし、流れは明確にこちらに傾いている。これなら勝ち目はあるかもしれない――

「だけど、ちよつと甘いかな？」

――だが、その余裕は曹操が取り出した物を見た事で、驚愕と共に崩壊する。

それは小さな瓶に入った液体。

それぞれの物はイツセー達も知っている。むしろ、何度か使った事もある代物だ。というより、自分達も携帯している。

だが、それはこちら側の物であり、しかも自分達はごく僅かしか携帯できなかった物だ。

「フェニックスの……涙……だつて!？」

イツセーが驚愕するのも無理はない。

英雄派達は一人一個使つて即座に負傷を治療させている。

だが、テロリストである英雄派が本来手にできる代物でもない筈なのだ。

「……こういう情勢下では、裏で横流しする馬鹿が出やがるとは思ってやしたが……っ」
「多すぎなのです……っ」

リムとニングが歯噛みし、そして曹操は苦笑する。

「全員分手に入れるのは流石に骨が折れたけどね。まあ、ムートロンの方が最終的に有利だと理解できる連中は多いのさ」

そう苦笑する曹操は、しかし感心するかのようにイツセー達に視線を向ける。

「しかしやるじゃないか。こちらの立ち回りを見抜いて一種の隙について連携戦闘に移行した。プルガトリオ機関の二人はともかく、赤龍帝は実戦経験どころか戦闘訓練だつてまだ一年も経験していないだろうに」

賞賛の言葉に、しかしイツセーは戸惑いと不愉快さを感じる。

「その程度じゃ俺は倒せないって言いたいのかよ」

「まさか。今のは首を狙われていたら危なかった。間違いなく君は優秀な赤龍帝だよ」
イツセーに対してそう答えると、曹操は本心からの笑みを浮かべる。

「俺たちは君対策をいくつか考えていたが、この機転の利きっぷりだと逆手に取られそう。どうやら真つ向勝負で行った方が有効らしい」

そう言いながら、曹操は静かに視線を向け――

「具体的には、天敵である龍殺しを投入するとか、ね」

その言葉に、イツセー達は振り向いた。

「なんだ、まだやってるのかい？」

そこには、祐斗達四人をぼろ雑巾のようにしながら、平然と立っているジークの姿があった。

「な……っ！」

「皆さん!？」

イツセーとニングが絶句する中、即座にリムは動く。

剣豪の腕で強化した光の銃を速攻で射撃。

狙いは頭部と心臓。二発ずつ遠慮なく放つ殺意しかない撃ち方である。

それだけの相手だと分かっているからこそその射撃だったが、しかしその程度では意味がない。

ジークは迎撃も何もせず、それを受け止めながら前に進む。

血相を変えたアーシアが祐斗達を治療するのも止めはしない。

「高いE Eレベルと禁手に至った神器、そして、最強の魔剣を筆頭とする伝説の力」

得意げに体を震わせながら、ジークは魔剣の切っ先をイツセー達に向ける。

「僕こそ現代の英雄だ。さあ、その伝説の礎になつてくれ」

1 2 話

顔面に叩き込まれた打撃に吹き飛ばされながら、しかし井草はすぐに態勢を整える。

追撃の為に放たれたエネルギー弾を光力の槍で弾き飛ばし、素早く翼を広げて空中で姿勢を整える。

そして後ろから迫ってきたバイアクヘーイツの斬撃をツールセイバーで受け止めた。

「ヒヒヒヒっ！ ナイアルの兄貴がトラブってるんで代役で来てみりやよお？ てめえがここに来てるとは思わなかったぜえ？」

下品な笑い声を浮かべながら、バイアクヘーイツが再び攻撃を叩き込む。

それを即座に距離をとって躲しながら、井草は反撃の光力の槍を叩き込もうとし――
「後ろにもいるぜえええええええ!!」

「横にもなあああああ!!」

十字砲火を放たれ、素早く上昇して回避。

即座に放たれるイツ達の砲撃を翼で叩き落しながら、しかし井草は情勢の不利を察

する。

何時の間にやら敵の増援が大量に表れている。それも、EEレベルの高い者達は愚か、幹部クラスのバイアクヘーイツまでもが複数体。

「ちよ、何人来てるのさ!？」

「あれ? 今回ナイアルさんと私だけじゃなかったっけ?」

伊代がきよとんとすれば、バイアクヘーイツ達はゲラゲラと笑う。

そして面白そうにしながら、井草を取り囲む。

「勝手に来たんだよ。ホテツプの奴は俺らに「やれ殺す前に犯すな」とかうるさくて嫌いだしな!!」

「原住民殺す程度でいちいちうるせえ奴なんざ知るか! 敵のエース殺せば黙るだろうよ!!」

そう口々に言いながら、バイアクヘーイツ達はムートウエポンを井草に向ける。

醜い笑顔を浮かべているのが馬鹿でも分かる。下衆である事がよく分かる典型的なセリフ。

問題は、その全員が少なく見積もってもEEレベルが5, 0以上はあるだろう実力者の群れだという事だ。

このままでは押し切られる。否、勝ち目がない。

その事実には歯噛みしたその時――

「つくづく、ホテツプ指令には同情するわね、ほんと」

「外宇宙航行までする超文明と言っても、性根は悪党の群れっぽいようじゃのう」

その声と共に、三人のバイアクヘーイーツが地面に叩き落された。

一人を叩き落したのは、黄色い外套を身に纏ったイーツ。二人を同時に叩き落したのは、サイバーなサングラスを付けた一匹の大きめの猿だった。

だが、その存在を知っている井草は目を見開いて驚くしかない。

「五十鈴?! それに……あなたは?!」

五十鈴の存在にも驚くが、それ以上に目の前の存在に驚愕するほかない。

それもそのはず。目の前の猿はただの猿ではない。

中国神話体系須弥山の所屬。その中は愚か、全精力を見渡しても上から数えて二桁には入るだろう実力者。日本ですら知らない方がどうかしている伝説の存在。

「闘戦勝仏、孫悟空……っ!」

井草達の観点からすれば、美候の先祖というべきだろう。

生きた伝説。伝説の英傑。日本でもっとも有名な猿の妖怪。そして、中国神話体系の実力者の筆頭格。

その伝説の存在が、何故か五十鈴と共にここにいた。

そしてその猿はキセルをぶかぶかと喫いながら、辺りを興味深そうに見渡した。

「全く、陰の気が強いだけでなく、荒くれ者どもが揃つとる様じゃのう。こりや聖槍の坊主のところに行くのは手間取りそうじゃい」

「ごめんなさいね。まさかここまで馬鹿が揃つてるとは思つてなかつたから、準備が足りてなくつて」

溜息をつく鬨戦勝仏に五十鈴はそう言うのと、一步前に出て伊代に視線を向ける。

「資格はないけど、止めに来たわよ」

「え、必要ないよ？ だって五十鈴ちゃんには感謝してるもん」

そうあっさりと返答する伊代は、変態した姿でも分かるほどにつこりとほほ笑んだ。

「だって、毎日が楽しいもん。五十鈴ちゃんやナイアルさんのおかげだよ？」

「……………」

それに肩を震わせた五十鈴は、しかし深呼吸一つで切り替える。

「井草！ ここは私とそこのお爺ちゃんて引き受けるわ!!」

「その方が良さそうじゃのう。こ奴ら、仙術を叩き込んだのに気が乱れとらん。儂じゃなけりゃあ手が足りんわい」

その言葉とともに、バイアクヘーイーツたちは立ち上がる。

そして怒りでプルプルと肩を震わせながら、一斉に武器を構え直す。

殺意が垂れ流されていると言つてもいいほどに怒りに燃え上がっている。この何と
いうか、二条城の無事を心配したくなるほどだ。

やっぱり手を貸した方がいいような気がしたが、しかしそんな井草に五十鈴は小さな
機械を投げ渡す。

「ムートロンが開発した、緊急用の結界干渉装置よ！ それがあれば赤龍帝達のいる疑
似京都に行けるはず!!」

そして、五十鈴は暴風の結界を作ると苦笑する。

「あんたはまず、友達を助けなさい」

「……………っ！」

その言葉に、井草は奥歯を噛み締め、そして覚悟を決める。

「分かった！ 任せたよ、五十鈴!!」

そして、機械を起動させる。

「玉龍！ お前も行ってこい!! 京料理たらふく奢ってやるからさぼるんじゃねえぜい
!!」

『うつへえ〜！ 引退したおいらを巻き込むんじゃねえよ畜生!』

そして上から降りてきた龍と共に、井草は開いた空間へと飛び込んだ。

ジークの圧倒的な力が振るわれようとした直前、その真上の空から何かが舞い降りた。

「お、グレートレッドが引つかかってくれたかな？　ドラゴン・ライダー 龍喰者……を準……備……ん？」

行動に移ろうとした曹操が怪訝な表情を浮かべる。

曹操達の目的は、京都とリンクしているこの疑似京都をレイラインに、龍王クラスの力をもって京都と密接に繋がっている八坂姫を龍王の代わりにして、グレートレッドが呼び出せるかテストをする事である。

他の存在が足元にも及ばないレベルの最強ゆえに、データを取りたくても迂闊に取りに行けない存在。少し解析するだけでも価値がある。

それに、対龍の切り札である龍ドラゴン・ライダー喰者が龍神クラスに通用するかどうか試すのも、超常の存在を倒す方法を探る英雄派の目的に合致している。

なので、グレートレッドの情報はある程度は持っている。

あれは典型的な西洋型のドラゴンだ。大きな翼を持ち、そして蜥蜴のような体をしている。

だが、あれはむしろ蛇のようなドラゴンだ。完膚なきまでに東洋タイプである。というより、サイズも小さい。

そこまで考えて、曹操はその正体に思い至った。

「違う！ あれは西海龍童、玉龍か！」

「おいおいおい！ ここまで来て大外れかよ?!」

「あれ、もう引退してたんじゃなかったの!?!」

ヘラクレスとジャンヌが驚く中、玉龍は明らかに面倒くさそうにため息を吐きながら、即座に匙と交戦している暴走状態の八坂姫へと向かう。

『よう聖槍の坊主!! めんどくせえが邪魔させてもらうぜい!!』

「やらせないよ。ちようどいいから手土産に首をもらおうかな?」

そう言いながらジークが魔劍の切っ先を向け――

「こつちがやらせないよ。君が俺達の手柄になつてくれないかな?」

その切っ先を、井草の墮天使の翼が叩き落した。

そして即座の回し蹴りが、ジークをとっさに行つたガードごと弾き飛ばす。

「井草!」

「井草さん!!」

リムとニングが歓喜の声を上げる中、井草は瞬時に辺りを見渡すと、状況を把握する。

「とりあえず、八坂姫がどうにかなるまで凌ぐよ!! 魔劍使イいは俺イが相手するから、三人はアーシアちゃん達のカバーに入って!!」

そう言いながら振り返る井草に、ジークが六本の伝説の剣を引き抜きながら迫る。

その速度は、下手をすれば吹き飛ばされた時よりも早い。

そして、真つ先にノートウングの刃が振るわれる。

それは勢いよく振るわれ、切断力で井草を両断せんと迫るが――

『シヤーク』

「甘いあふあい」

よりにもよって、歯で噛んで受け止められた。

「……嘘だろ?」

「んなわけないじゃんか」

そして唾然となるジークの顔面に拳を叩き込む。

これまた魔劍でガードするが、しかしこれまた吹き飛ばされる。

そして五十メートルぐらい打ち上げられたジークだが、一瞬で引き戻される。

見れば、魔劍に糸がついて、井草はそれを引っ張っていた。

そして井草はトールセイバーを構え、同時に4対の翼を広げる。

墮天使の翼は接近戦にも運用する事が可能である。コカピエルのような最上級の墮

天使ともなれば、その性能は聖魔剣にすら匹敵する。

要は簡単だ。

「切り合いを挑んでくれるとは嬉しいねえ!!」

「そっちの方が手っ取り早そうだからね!!」

そしてグラムとトールセイバーが呪いと雷撃を放つながらぶつかり合い、大きな衝撃波がぶつかり合う。

同時に剣と翼が高速で振るわれ、超速の多連続攻撃が交錯し合う。

普通なら井草ほどの墮天使でも伝説の魔剣を翼で防ぐのは困難だ。しかし、今のイツ化している状況なら、一回一回はかすり傷でどうにかできる。

だから、ここでどうにかする事を考えて――

「おっぱい」

――突然聞こえた声に、ジークと共に思わず動きが止まった。

どうやら幻聴が聞こえたらしい。色々ストレスやショックが積み重なる半日だから、無理もない。

首を慌てて振りながら距離を取り、仕切り直しを行おうとして――

「おっぱい」

「おっぱい」

松田もいるんだろうなあ。そんな事を考えた井草は、ふと気づいた。だが、これはチャンスだ。

「とにかく時間を稼ぐから、すぐに至って!!」

「……あ、なんか歴代が変な事言ってる!!」

すぐに戦いに戻ろうとしたら、すぐにイツセーが変な事を言ってきた。

「今度などんな現象が起こるのですか?」

もはや虚無の感情すら見せながら、ニングがしかし話を進める為に聞いてきた。

イツセーも戸惑いながら、しかしちゃんと答えてくれた。

「お、俺だけのおっぱいだってさ」

……一同が、脳裏に部活の部長を思い浮かべたのは悪くない。

そして、気づけばゾンビ達は魔法陣になってリアスを召喚していた。

ついでに言うのと、下着姿だった。

「え、あれ? ここ、京都!? っていうかイツセー!?!」

「さ、さすがの俺も鼻の下を伸ばせねえ!!」

「だろうね……」

イツセーがエロ暴走できないほど、状況は暴走していた。

井草も何とも言えない表情でそれを見ていたが、しかしすぐに目がふさがれた。

「見てはダメなのです!!」

言われてみれば下着姿である。それも、事実上他人の女である。

ニングの対応は確かに正しいのだが、しかし戦闘中である。

「うっひょー。私は女も相手できるようになってますが、ああいうナイスバディとお相手しやがりたかったですなあ!!」

「だったら見てはダメなのです!!」

リムが悪ふざけをしてニングに怒られているが、戦闘中である。

そして最悪なことに、この流れでは何が起るかなど決まり切っている。

「ぶ、部長！ 俺も良くわからないけど、乳をつつかせてください!!」

満面の笑顔でそんなことをのたまっているイツセーという名のバカがいる。

おそらく、つつけと歴代から指示が来たのだろう。そして戦闘中だろうと何だろうと、乳首をつつくチャンスを逃せるイツセーではないだろう。大義名分まであるのだからなおさらだ。

まあ、普通なら絶対に首を縦に振ったりはしないのだろうが――

「全くよくわからないけど、わかっているわ。スイッチを押さない!!」

――しかし以上に慣れているリアスはすでに普通ではなかった。恋は盲目ともいう。

そして英雄派も面白がってるやら呆れてるやらで、手を出してこない。

そしてそのまま乳首がぼちつと押され―

「ああん!!」

そんな喘ぎこと共に、神々しい輝きに包まれながら、リアスは消えていった。

「……イツセー。リアスちゃんは？」

「……役目が終わったから帰ったって、歴代の人が」

もう何も言えない展開だった。

「あと、歴代の人成仏する前に、「ぼちつとぼちつとずむずむいやーん」って、満面の笑顔で言ってきたんだけど」

下手な慰めは返って傷つける気がするので、何もできない。

「おいおい。歴代赤龍帝はみんな変態なのかい？」

「ちよつと黙っててくれやせんかい？」

曹操のあまりの物言いに、リムがダメもとで叱責を投げかけるぐらいにはシユールだった。

—どうせ、俺も変態ですよ。

そんなやけっぱちな感想を思い描きながら、イツセーは力を解放させる。

体力はそこを突きかけている。戦力差は圧倒的だ。

だが、逆転の目は見えた。

そしてそれを実行に移そうとし—

—いや、待てよ？

イツセーはふと気づいた。

今覚醒しようとする力は、確かに効果的だ。

悪魔の駒プロモーションの昇格を参考に、赤龍帝の鎧を昇格した駒の特性に合わせて変更させる。

それぞれにおいて弱点はできるが、しかし長所を伸ばすという自分達グレモリー眷属に向いている方法だろう。

だが、それで曹操に通用するのか。

初見殺しで叩き込めたとして、二戦目は、三戦目はどうなるのか？

そう考えた時、ふと視線が井草に向かう。

機動力、近接戦闘、異能戦闘。全てにおいて高水準でまとまっている、井草・ダウン
フォー。

曹操のようなタイプにとってやりづらいのは、むしろ井草の方なのではないか？

そう考えた瞬間、イツセーは一つの思い付きに至る。

生物などを封印し、その力を具現化する封印系神器。なら、これを使う事でより強大な力を具現化する事は出来るのではないだろうか。

『面白い事を考えるな、相棒。出来る出来ないで言うなら出来るかもしれない』

—そっか。だったら、そうするしかねえよな。

『いいのか？ 出来る事ならお前が仲間の無念を晴らしたいだろうに』

—確かにそうだけどさ、でもそれ、井草さんも同じだろうしさ？ それに……

イツセーは、ふと思いついた事がある。

この思い付きが実行に移されれば—

—木場やゼノヴィア達もお礼参りとかできそうじゃん？

『なるほど、違うない』

その返答に、ドライグは苦笑した。

13話

「井草さん、受け取ってくれ!!」

言うなりイツセーがいきなり手を伸ばして来て、井草は反射的にその手を取った。その瞬間、赤龍帝の鎧の隙間から、赤い光が漏れ出てくる。

「え、なに? なになに!?!」

慌てて目を見開くと、今度は鎧が分割される。

驚くべき事に、赤龍帝の鎧の中にはイツセーの姿がなかった。

それに驚いているうちに、赤龍帝の鎧は変形しながら井草の全身に装着される。

赤龍帝の鎧の力が、井草の力を、墮天使の力を、レセプターイツの力を増幅させ、そしてオーラとなつて全身から漏れ出させる。

「……なにこれえ!?!」

思わずびつくりしたのも仕方がないだろう。

「……グレート合体方式、だとお!?!」

曹操も流石に想定外だったのか、目を見開いている。

「なんで知ってるのかな、ほんと!!」

そう言うなり、井草は光の槍を斉射した。

赤龍帝の力が一体化しているがゆえに、その光は赤く染まり、そして勢いよく放たれる。

「上等、防いでやら—」

「受けるな避ける!!」

真正面からぶつかろうとしたヘラクレスを、曹操が蹴り飛ばす。

そして自分も慌てて伏せると、そのまま直進した光の槍は、二条城は愚かまっすぐに疑似京都を破壊して、山脈部分すらごっそり削って吹き飛ばしていく。

放った自分も少しびっくりしているレベルだ。当然、周りのニング達は目を見開いてる。

「ここ、この空間もつのですか?」

「もたねえ、でしようねえ」

引き気味のリムの意見ももつともである。

しかし、こんなものは序の口ですらなかった。

「……じゃあ、第二射」

「『第二射?!』」

英雄派が絶叫したのも無理はない。

今の一撃は魔王クラスにすら通用する火力だった。非戦闘系の下位の神なら、喰らう前に降参する事すら考えるだろう。

そんなものを何の気負いもなく第二射と発言する。

単純に言つて狂気ではない。

「おいおい何発撃てるんだよお前は!!」

「合計30発ぐらいは撃てそうかな?」

疲労感で推測して答えれば、怒鳴ったヘラクレスは絶句した。

当然だろう。いくらなんでも大火力すぎる。

冗談抜きでこの疑似京都が崩壊するレベルだった。

「ちよつとまズくない!? そんなに撃たれたら、私達がやられるより先にこの疑似京都が壊れるわよ!」

「だろうな、接近戦で抑え込むしか—」

ジャンヌに同意しながら、曹操は素早く聖槍を構え—

「じゃあ接近戦で叩き潰すよ」

—そんな事は分かっているといわんばかりに、井草は先に接近した。

その勢いを利用した蹴りこそガードされたが、その上で曹操は吹き飛ばされる。

そして瞬時に光の槍を二本生成すると、ジャンヌとヘラクレスに投擲し―
「させると思うかい?」

その砲撃を、魔帝剣グラムが両断する。

神クラスにすら届きかねな威力の投げ槍を、二本同時に切り捨てる。

ある意味で神業としか言いようがない。否、神ですらできる方が少数派だろう。

それを成し遂げるのが魔帝剣グラム。最強の魔剣にして、伝説の龍殺し。

その現代の担い手であるジークは、更に伝説の魔剣を四本保有。そのうえでイーツと化し、更に聖剣すら疑似的に保有する。

明らかに強敵だ。加えていえば、今の井草はイツセーと合体した影響で龍の一種と化している。

龍殺しの魔剣であるグラムと、龍殺しの聖剣であるアスカロン。この二本を同時に受ければ、致命傷とは言わなくても戦闘は不可能だろう。

アーシアに即座に回復してもらえばいいかもしれないが、ジャンヌとヘラクレスが妨害してくるのは間違いない。曹操だってそろそろ復帰してくるはずだ。

間違いない状況は不利なのだが―

『大丈夫です、井草さん!!』

イツセーの声に頷き、井草は素早く左腕を構える。

同時に右腕にはトールセイバーを握る。こちらはグラムとまともに撃ち合える武器である事は証明済み。グラムはこれで止めればいい。

そしてアスカロンは――

『アスカロン!!』

『BLADE!!』

――オリジナルで迎撃すればいいだけの話である。

「チイツー！」

ジークが舌打ちするのも当然だろう。

イツセーの持つアスカロンは、正真正銘オリジナルのアスカロン。イツの力で具現化した紛い物ではない。

加えて、ただのアスカロンでもない。赤龍帝の籠手と基本的に合一化しているこのアスカロンは、赤龍帝のオーラを帯びている。二天龍と龍殺しの矛盾したコラボレーションは、アスカロンを元の時より強大な聖剣として具現化させていた。

ゆえに、ジークの持つアスカロンより性能では上。

むろんジークは教会でも最高峰の剣の使い手だ、同年代では勝てる者などいないだろう。年齢による区別を抜きにしても、確実に勝てるといえるのは、生きた伝説二人ぐらいだ。

だが――

「モードケンゴウ!!」

草刷が展開され、一気に井草の動きが変わる。

歴戦の剣豪のような卓越した剣技を、井草自身の戦闘経験で補正する事で借り物のそれではなくして戦う。

その結果、ジークと井草の戦いは、一瞬で井草の有利になる。

如何にイツクといえど、井草は墮天使であり、赤龍帝の力まで保有している。

単純に基礎性能が圧倒的に違う。本来なら技術や作戦でそれをカバーするのが英雄派の戦いなのだろうが、今回に至っては井草の技術力とイツセー達のサポートによってそれすら超えていた。

「くそー！ 新世代の英雄である、この僕が……」

「英雄を名乗るは勝手だけどさあー」

そして四本の魔剣による迎撃を翼で防ぎ――

「殺し合いで名を上げたいなら、志半ばで死ぬ覚悟はしてからくるんだったね!!」

――至近距離から光の槍を二本叩き込んだ。

その絶大な火力が、ジークを軽く数百メートルは弾き飛ばす。

そして速やかに止めを刺すべく、井草は光力の槍を一斉に展開し――

「まずは一人!!」

一気に五本全部斉射して―

「いや、させねえからよつと!!」

合計八本の砲撃でかき消された。

「なっ!?!」

『嘘だろ!?! あれをあつさり!?!』

井草もイツセーも、思わぬ乱入者に一瞬虚を突かれる。

そしてその瞬間—

『前だ、井草・ダウンフォール!!』

—ドライブグの言葉に反応した井草がとつた防御ごと、その拳は井草を弾き飛ばした。

一気に五十メートルは吹き飛ばされ、井草はしかし着地すると、反撃の光の槍を一本叩き付ける。

しかしそれを、まるで蛇とタコのキメラと形容するべき下手人のイツは拳を構え—

「おらあ!!」

気合を入れた拳で真正面から叩き壊す。

『いきなり突破されたのかよ!?!』

「みただね。しかも、一番嫌な奴に……っ」

驚愕するイツセーに、井草は奥歯を噛み締めながら相手を睨み付ける。

先ほどは蛇とタコのキメラと形容したそのイツは、しかしもう一つ意匠があつた。

そう、それは蟻。

そして、蟻のイツとして何度か姿を現し、本来の姿すら現して此方の神経を逆なで

してきた悪鬼を、井草はよく知っている。

「重役出勤とはいいご身分だね、ナイアル!!」

「いや、場外乱闘から逃げてきたんだよ、マジで大変だったぜ」

そのため息交じりで告げるナイアルは、拳を構えて井草をけん制しながら視線を向けずに曹操に告げる。

「撤収だ。須弥山の連中、西遊記の妖怪どもはもとより、自前の四天王すら送り込んできやがった。割とマジでこつちの首を狙ってるぜ?」

「……あの柴又の神様は、口封じでもする気なのかな? まあ、逃げるけどさ」
ため息をついた曹操はそう言っただけで肩をすくめる。

出来れば意趣返しを一発ぐらい叩き込みたいが、しかしそのチャンスがあるかどうか。

明らかに敵は強敵だ。ナイアルの戦闘能力はシャレにならないし、曹操達もナイアルの片手間に片づけられるほど楽な相手ではないだろう。

つまりここは見逃すしかない――

『いや、まだだ!!』

そのイツセーの言葉と共に、最後の策が脳裏に贈られる。

それに対して井草は瞬時に動いた。

「流石に無傷で帰らせるわけにはいかないね!!」

『散々好き勝手しといて、ただで帰れると思ってるんじゃない!!』

数百の光の槍と砲撃を斉射する。

それに対し、ナイアルは自分の体から太い蛇のような部分を一つ動かす。

そして口が開くと共に、一斉に大出力のエネルギーが放出された。

「馬鹿か。魔王クラス程度で俺と砲撃戦ができるかよ」

ため息交じりのその言葉の通り、放った砲撃は立った一発の砲撃でかき消される。

だが、一発だけ違った。

『……そいつは罠だ!』

「あん……曹操!!」

イツセーの言葉に察したナイアルが曹操に叫ぶ。

それに気づいた曹操は咄嗟に上を振り仰ぎ――

「がっ!」

その右目を、低出力のドラゴンショットが抉り取った。

種は非常に簡単である。大出力の砲撃と光の槍を目くらましに使用し、それとはまったく別の方向に、対人なら十分なレベルのドラゴンショットを放つ。

そしてナイアルが砲撃で相殺している隙に捻じ曲げて、そのまま真上から曹操を強襲

する。

この一体化形態は悪魔の駒の昇格と、赤龍帝の籠手の譲渡を併用した形態だ。

井草はとっさに僧侶の駒の特性で装着した。大火力砲撃が可能なのはその一環である。自分の戦闘スタイルで、比較的レベルが低い砲撃戦闘能力の強化に運用したのだ。

だからこそその作戦は的確にはまり――

「ふ、ふふふ……」

――それを喰らった曹操は、怒りとも喜びともとれる激しい表情を浮かべていた。

「眼が……赤龍帝にダウンフオールうううううう!!」

そして興奮状態になると、聖槍を構え――

「落ち着け馬鹿」

――ナイアルの裏拳を喰らってもんどりうって倒れた。

盛大に後頭部を地面に強打する曹操を半目で見ながら、ナイアルはため息をつく。

「流石に覇トウルース・イデア輝はねえだろうがよ。考えて使え」

「痛いな全く。……まあ確かに、ちよつと興奮していたね」

たつたそれだけで冷静さを取り戻したのか、曹操は不敵な笑みを浮かべると、井草とイツセーに視線を向ける。

「今回は花を持たせてあげるよ。俺達の作戦も失敗したしね。……ゲオルクー」

「はいはい」

ゲオルクがため息交じりに霧を展開しつつ、撤退準備を始める。

追撃したいがそれも難しいだろう。敵は正真正銘強敵であり、これ以上の戦闘は体力がもたない。死者も出る。

元より八坂姫を救出できたのならそれでいいのが今回の作戦だ。匙と玉龍によつて八坂姫は沈黙化しており、とりあえず目的は達成できている。

散々ボコられた借りもしつかり返せたし、これ以上無理をする必要はないだろう。

なのであえて見逃す体制をとると、霧に完全に包み込まれる前に曹操は最後の言葉を告げる。

「次は俺も禁バランス・ブレイカー 手をお披露目しよう。是非その時までにもっと強くなっていてくれ」

その言葉と共に曹操達は姿を消し、井草もイツセーとの合一化を解除する。

「井草さんー！」

「ニング！ 無事で良かった」

感極まつて抱き着いてきたニングを抱きしめ返しながら、井草は笑顔を返す。

そしてそれを苦笑に買えると、片手を広げてリムに視線を向ける。

……その意図を察して、リムは顔を赤くしながらちよつとおろおろし――

「い、井草あ……なんちゃって」

「はいはい。リムも頑張ったね〜」

そのまま二人を抱きしめながら、井草は何となくほつとする。

二人が無事で良かった。イツセーも強くなつて良かった。仲間達も、ダメージこそあれど生きていて良かった。

そして五十鈴も助けに来てくれて嬉しかった。伊予も、闘戦勝仏が相手では捕縛されるしかないだろう。

諸問題は立て続けに残っているだろうが、しかし、嬉しい事も立て続けに発生したものだ。

「うん、とりあえず今回は素直に喜びますか」

そう呟き、井草は愛する二人をしっかりと抱きしめた。

14話

「に、逃げられたあああああああああ!？」

本来の京都の二条城に戻ってきた時、その衝撃の事実には井草は啞然となった。

明らかに愕然となり衝撃を受けているその姿に、流星の闘戦勝仏も気まずいのか、サングラス越しに視線を少し逸らしている。

だが、残酷だが事実だ。

「すまんかったの。あのバイアクヘーイーツ……とか言うの、倒したらでかい爆発が起きるようになってしまったみたいでのお。被害が出んよう抑え込んでるうちに二人ともいなくなつとつたわ」

どうやら、緊急用の情報秘匿装置の類が設置されていたらしい。

もしくはナイアルの部下達には強制的に付けられていた可能性もある。それぐらいには品がなく、問題児確定だった。

そして、その隙について伊予と五十鈴は逃走。行方をくらましていたという事だ。

おそらく伊予はゲオルクの霧で回収されているだろう。五十鈴は速度が速いので、ま

だ戦闘が終了していない状況で見切りを付けられたのなら、即座に離脱されているはずだ。

つまり、伊予と五十鈴に関してはまだ決着を付けられそうにないという事だ。

井草はそれを感じ取り、がっくりと肩を落として落ち込んだ。

「まあまあ。今夜はゆっくり慰めてあげやすから、元氣出しなせえ」

ほんほんとりムがそう言っつて背中を叩いて慰めてくれるが、しかしシヨックではある。

あと、それをするとな度はロスヴァイセに朝まで説教コースがありそうである。

「すまんかったのお。儂のところの連中も、ナタクまで出張つたのにナイアルを取り逃がしちまったからな」

「まあ、サーゼクス様とアザゼル先生が手段を択ばず挑んでなお逃げられる相手なのですよ。神クラス三柱でも厳しいと思うのです」

ナイアルの脅威をより分かりやすい形で知った闘戦勝仏に、ニングはうんうんと頷いた。

龍王の力を装備として身に纏った墮天使総督と、最強の魔王。双方ともに下手な神なら返り討ちに合うだけの戦闘能力があるだろう。ナイアルはそんな強敵と戦って生き残っているのである。

あのまま戦いを続けていたら、下手をすれば死人が出ていただろう。いや、出ていなかったことが奇跡といってもいい。

「聖槍の坊主たちは基本的に「人間」に拘つとるところがあるからの。イーツになりたがるのは少数派じゃつたのが功を奏した。全員イーツだつたなら、一人ぐらい死んでたわい。運が良いぞ、おぬしら」

「全くなのです。あのカオスエッジがイーツになつてたのは大変だつたのですよ」

ジーク一人であなのだ。もし英雄派の幹部全員がイーツになつていたらと思ひ、二ングはゾツとする。

ジーク一人でオカルト研究部二年生組は全滅の可能性もあつた。一人も死者が出ていないのは、ジークが遊びで挑んできたからだといつてもいい。

赤龍帝の力を強化したうえで丸乗せされた井草ですら、それなりにてこずつたのだ。それだけの力を持っている者が大量に出れば、全滅してない方がどうかしているだろう。

同年代にすら格上がごろごろいる状況に、イッセー達のやる気というか精神が心配である。

「まあ、今回はこつちの勝ちじゃしの。素直に喜んでおればええわい」

だが、闘戦勝仏の言う通り勝利を掴んだのは井草達だ。

英雄派のメンツは何人もボコボコにされた。ついでに言えば、本来の目的であるグレートレッド召喚は失敗している。

そのうえで、少なくともオカルト研究部と生徒会は死者はゼロ。そこだけ見ればどちらかといえば勝ちではある。

それに――

「母上ええええええええ!!」

「まったく。九重は泣き虫じやのう」

――歓喜の涙を垂れ流しながら、回復した八坂姫に抱き着く九重の姿を見れば、達成感の一つぐらいは湧いて出るものだ。

「これが乳語翻訳バイリンガルのたまものだったのが酷い話なんだけどね」

「それは言わねえお約束ってやつですぜ、井草」

複雑な事を言つてのけた井草に、リムのツツコミが響いた。

『と、そんな事があつたのですよ』

「あのねえ。できればもつと早くに伝えてほしかったわ。……色々な意味で」

ニングからの電話連絡を受けて、リアスは軽く頭を抱える。

冥界でトラブルが起きて鎮圧する為に出動。そして一仕事終えた感覚でシャワーを浴びようとしたら、いきなり京都に転移された。

そしてスイッチをつつかれたと思つたら力が流れ込み、気づいたら元の場所に戻つていた。

はつきり言つて訳が分からなさすぎる。正直、電話連絡を受けるまで普通に混乱していたし、一緒に服を脱いでいた朱乃と小猫も唖然となつていた。

そしてニングから連絡がきたと思つたら、「京都で英雄派と一戦交えた」である。

正直怒鳴りたい。

「教えてくれてもいいじゃない。私達は仲間でしょうに」

『アザゼル先生に口止めされていたのです。流石に英雄派が接触してきてからは連絡する事になったのですが、その頃にはほら、そちらの方が……』

実にタイミングが悪い展開だったという事だろう。

こと冥界でのデモやクーデターは頻発している。

純血下級悪魔が、大魔王派につつかれて暴発するといった形でのトラブルは数多い。転生悪魔制度の導入で冥界は力を取り戻してきていたが、このような形で弊害が出るとは想定外だった。

良くも悪くも悪魔を特別視しない、サーゼクス達現魔王の善良さでは読み切れなかった事態だろう。そういう意味では、一般市民の悪意を増幅したビルデは優秀だ。

これはそろそろ本気で事態の解決に動くべきである。
しかし、それは大変だろう。

悪魔も人間と同じく、善も悪もある一つの種族だとするサーゼクス。悪魔も人間と同じく、自分の我欲の為に他者を利用する邪悪だとするビルデ。

その在り方は正反対であり、そして同時に明確な側面である。

相容れる事はない。ゆえに、争うほかない。

故にこそ、今冥界には新しい風が必要なのだ。

そして、その方法の一つは明確にこちらにある。

だが、それを行う事に躊躇を感じ――

『リアス部長。お話があるのです』

— ニング、プルガトリオは聡かった。

それだけで、リアスは彼女の意図を知る。

「……本当にいいの？」

今明確に対策になるのは、一つだ。

ルシファーの血を継ぐ者だとほかならぬ大魔王派が認めているニング・プルガトリオ。彼女を正当たる魔王の末裔として現政権が迎え入れる事だ。

大魔王派であるビルデも、旧魔王血族のうち三人を引き入れている。正統な魔王の末裔が認めている事が大義名分の一つなのだ。なら、こちらと同じ事をすれば心理的な駆け引きを行なう事もできるだろう。

だが、それはニングに重いものを背負わせる事に繋がるのだ。

リアスはよく知っている。特別な家系の出であるという事は、誇らしくもあり煩わしくもあるのだ。

一信徒として生きてきたニングには、重荷になるのではないのだろうか。

『心遣いはいがたいのですが、大丈夫なのです』

だが、どうも見透かされていたらしい。

電話越しの声には覚悟があり、しかしどこか軽い雰囲気があった。

『サーゼクス様達も普段は軽いですし、プライベートがきちんとあるのなら、息抜きぐら

いはできるのです。なら、きつとやれると思うのですよ』

「それはそうだけど……」

だが、まだニングは17である。

できればもう少し子供でいさせてあげたいという意見も、特にサーゼクス達と思想が近いものからは出てきているのだが――

『それに、お願いしたい事もあるので』

その言葉に、リアスは何事かと思いつながら聞いてみて――

「……………もう。あなたは本当にいい子なんだから」

――その本命の目的を聞いて、苦笑するしかなかったりする。

「くつそー！　うちの連中が結構やられちまったぜ!!　あの妖怪三羽ガラスめ、覚えてやがれ」

「ナイアル殿。奴らの中には一人とて鳥類はいないのだが」

「例えだつての。天然ボケはしなくていいからな？」

「ふむ。それはともかく、ホテツプ殿に頼んでいた件は大丈夫だろうか？」

「ああ？ サイラオーグ・バアルとリアス・グレモリーをできる限り目立つ形で潰すつてやつか？」

「むろん。我々大魔王派幹部最大の欠点は、若手で構成されている事だからな。時には成果を出さねばなるまいて」

「スリエールの奴が表に出てくりやそれで済むんだろが、奴さんが出てくるとヴァーリがうるせえからな。追放するにしても、オーフィスが気に入ってるからしづれえしな」

ドラゴン・インター
「龍喰者を使う相手は、グレートレッドではなくなりそうだな」

「ま、その辺に関しちや安心しろ。スパイがおもしれえ情報を掴んできやがった」
「というと？」

「グレモリーとバアルのレーティングゲームはするそうだ。それも、若手の注目株同士の試合つて事で各神話体系からも観戦者がごろごろ出てくる。……ホテツプが直々に姿を現すらしいぜ？」

「ほお。先遣艦隊最高のEEレベル保有者にして、本艦隊を含めても頂点を争う彼女が」
「そういうわけだ。俺も出張る事が確定してな。いやあ、忙しくて涙が出るぜ!!」

「いいだろう。では我々も人員を派遣しよう。王の駒キングの使用者も選定を終え、母体リリースの駒

と貴族ノウブルの駒の質も、必要レベルには到達したのでな

「おっほー！ つーことは？ 結構な人数がごろごろ出てくるのかよ!! ドンぐらいだ？」

「上級クラス五百人、中級クラス一万人、最上級クラスも……五十人ほど投入するつもりだ。それぐらいあれば、お披露目には十分だろうて」

「ハッハー！ こりや神クラスとか殺しまくれるんじゃねえか？ 楽しみだな、オイ!!」

「ああ、我が勝ち組になるのも……もうすぐだ」

そんな悪党どもの会話もつゆ知らず、井草達はついに帰る日になった。

最初から最後までトラブル続きだったが、それはあくまで偉業側の話。

表の学生達はトラブルに巻き込まれる事もほぼなく、楽しい思い出を作りながら戻る事になっていた。

そして井草達は……。

「痛い。痛いから！ 悪かったから!!」

「ふあふあふあふあふあ!!!」

……訂正。井草は九重に嘸み付かれていた。

「井草さん。流石にあれは井草さんが悪いって」

イツセーも止めずに、むしろ当然と言わんばかりの表情を浮かべている。

それもそうだ。原因は昨夜の戦いにある。

ディメンション・ロスト

絶　霧による転移で置いてけぼりにされた井草だが、その後即座に二条城に急行した。

……その際、井草は意図してなかったが結果的に九重をぶん投げる形になったのである。

思いつきり壁に頭をぶつけたらしい。全てが終わった後に、気づいたアーシアに治してもらうまで、タンコブが誰が見ても分かるぐらい大きくできていたとか。

なので井草も怒るに怒れないとか怒る資格がないので、こうして嘸み付かれているのである。

「……ふはっ！　よし、これで勘弁してやる。二度とするでないぞ?」

「はい。流石にあれは俺が悪かったです」

九重に怒る時はしっかりと怒った井草なので、怒られる時はしっかりと怒られ、そして謝らなければ筋が通らない。

以後気を付けようと覚悟し、しつかりと頭を下げる。

「……まあ、色々あったけど修学旅行も終わりかあ」

「ほんと、忙しかったですよね」

井草とイツセーは顔を見合わせて苦笑する。

英雄派にムートロンまで出てくる大騒ぎだったが、結果的には何とか潜り抜ける事ができた。

更にはイツセーの力が覚醒したのも朗報だろう。全員無事に生き残る事もできたので、リアス達にはいい報告ができると思う。

「まあ、イツセーはリアスちゃんに謝った方がいいと思うけどね」

「んな事言っちゃって仕方ないじゃないですか!! 俺だってあんな事になるだなんて思っ
てませんよ!!」

軽く茶化してはいるが、そこに関しては井草も同意である。

どこをどうすれば痴漢を大量に増やして、つくく為の乳を召喚するという強化手段が
発生するのだろうか。転移術式なんて普通に存在する異形社会、どう考えてもコストパ
フォーマンスが悪すぎる。

このままだと、最終的に母乳を静脈注射して覚醒などという異常事態が勃発しそうで
怖い。井草は割と本気で心配している。

「イツセー！ 井草さん、そろそろ出発するぞ！」

「早くしないと乗り遅れちゃうわよ〜！」

と、ゼノヴィアとイリナの声が届く。

「どうやらもう出発時刻のようだ。時間が経つのは早い時はどこまでも早いものである。」

「よし！ んじゃ、また会おうな、九重」

「うむ！ 今度来た時も京都を案内してやるぞ！」

「楽しみに待ってるぜ！」

別れの挨拶を交わすイツセーと九重を微笑まし気に見ながら、井草は八坂に一礼を返す。

「和平に対する助力、感謝いたします。これからも堕天使と京の妖怪が連携を取り、共に発展できる事を祈っています」

「うむ。おぬし達には世話になったからな。この礼はいつか返させてもらおう」

若干事務的だが、しかし本心からの言葉を交わし、井草もまた新幹線に乗り込む。

そして、視線を席の方へと向ける。

「いや〜。京都限定のお菓子とかたつぷり買っちゃいましたぜ」

「無駄遣いはいけないのですよ。これからは気を付けるのです」

などと言葉を交わしているリムとニング。そして、クラスメイト達が集まって会話を始めていく。

その楽しい気な光景を見て、井草は心から二人が駒王学園に来た事は良い事だと確信し

『あ、井草君勝手に私のお菓子食べないでよ〜!』

『あ、間違えた。お、俺のお菓子食べるか!』

『何やってんだか。あんた達、もうちよつと中学生だからってTPOをわきまえなふあ
い……もぐもぐ』

『ちやつかり自分も食べてる!?!』

……昔、中学生の時の修学旅行を思い出し、井草は肩を震わせる。

そして動き出した新幹線の中で、井草は静かに目を伏せる。

タガを外し、変わり果てた伊予。

道を踏み外し、戻ろうとしない五十鈴。

止めねばならないし、殺し合いになるかもしれない。

だけど、それでも……。

「あの頃は、確かにあったんだよなあ」

笑うべきか泣くべきか。

どっちにすればいいか分からない複雑な感情を抱えながら、井草・ダウンフォールは、京都から駒王町へと戻る新幹線に揺られるのであった。

学園祭のライオンハート

1話

「どうしたおっぱいドラゴン！ スイッチ姫の力がなければこの程度か！」

イツセー扮する乳龍帝おっぱいドラゴンを圧倒する、木場祐斗扮するダークネスナイト・ファンゲ。

その後ろではリアスが扮するスイッチ姫が、宙づりになっていた。

「お、おっぱいどらごーん。がくんばってー」

的確に棒読みであるが、これに関しては仕方があるまい。

別に俳優でも何でもないリアスに、乗り気でないスイッチ姫の演技をプロ並みにしろというのが無理だ。難題すぎる。

……とまあ、今イツセー達は「乳龍帝おっぱいドラゴン」のショーをやる事になっている。

色々と面倒な事になっている冥界の不安定な情勢。それは時として、子供達にも悪影響を与えるのだ。

子供は大人の事情など理解しないとは決して言えない。時にはその直感で、大人の雰

困気を読んでしまう事もある。社会全体の暗さを感じてしまう事もあるだろう。

だからこそ、明るいイベントを時には行つて晴れにする事が重要なのだ。少なくとも、サーゼクス達四大魔王はそう考えている。

故に子供達（一部大きなお友達含む）が見守る中、おっぱいドラゴンのショーを時々本人達で行っているのである。

「負けるものか！ 冥界の子供達が、そしてスイッチ姫が見守っている中で、負けるわけにはいかないんだ!!」

そしてイツセーは意外とある演技力で、ふらつきながら立ち上がる。

だが、それはあまりに遅く、ダークネスナイト・ファングには隙だらけにしか見えな
い。

祐斗は子供達にも見える速度で迫ると、手に持っている剣を振りかぶる。

「終わりだ、おっぱいドラゴン!!」

そして、その件が振り下ろされようとした、その瞬間。

「そうはいかない!!」

ステージの上の方から、誰かが飛び降りた。

青を基調とし、両肩に円錐状のパーツがついた、おっぱいドラゴンと比べてスタイリッシュな形状の戦士。

彼はダークネスナイト・ファンングを蹴り飛ばすと、おっぱいドラゴンに手を伸ばす。
 「さあ立つんだ、おっぱいドラゴン」

「お、お前は！ 仮面ファイターレセプター!! どうしてここに?」

仮面ファイターレセプター。イツサーが乳龍帝おっぱいドラゴンのモデルになったように、井草・ダウンフォールがモデルになったヒーローである。

冥界版VシネであるDシネマのヒーローで、具体的には牙〇とか的なダークな側面もあるヒーローものではあるが、そのヒロイックなデザインが受けている事もあり、こうしてコラボ企画が舞い込んできたのだ。

なので、井草も今回はセットを着用して参加している。

「闇の世界の住人だからこそ、光が闇に侵されるのを見過ごせないのさ。さあ、今回は特別に共闘しよう!!」

「すまない、仮面ファイターレセプター! 力を借りる!!」

「気に入るな、共に戦おう、おっぱいドラゴン!!」

そして二人が同時に構えをとると、ダークネスナイト・ファンングの周りに戦闘員が現れる。

「一人が二人になった程度で何ができる!! ゆけえ! あの二人の首をとれ!!」

「AAAAAAAAAAアイアイサー!!」

そして、二人のヒーローによる大立ち回りが巻き起こり、子供達（何割か大人）の歓声が響き渡った。

そしてシヨールはつつがなく終了し、井草はスーツを脱いでシャワーを浴びてから外の空気を吸っていた。

普通に変身してシヨールをする事も考えられたのだが、それだと井草やイツセーの身体能力が高くなりすぎてセットが壊れる恐れがあったのでこうなったのだ。

スーツアクターの苦労が身に染みて分かった。今度機会があつたら、菓子折りでも送るとしよう。井草はそう思う。

そして井草は外を見ると、ふとため息をつく。

……最近、ニングは別件で休みがちだ。

大魔王派に対抗する為、ニングはルシファーとして公言される事が決定されていた。

既に残された遺伝子情報からルシファーの末裔である事は確定している為、そこに關しては問題がない。

旧魔王派や大魔王派の一部は、正当な魔王の決闘の持ち主の命令だからこそ従っている者も多い。実際、旧魔王派の中にはそういうのに興味が薄いヴァーリを新たな指導者に据える事を目論んでいた者もいたらしい。

なので、正当なルシファアの末裔であるニングが表舞台に立てば、今の情勢に楔を打ち込む事ができるかもしれない。

それは分かっている。それが必要なのも分かっている。それを否定するのは、墮天使という組織の都合と世界の安定を守る事にも繋がる以上、神の子を見張る者の一員である井草がどうこう言う事はない。

だが、井草・ダウンフォールという個人としては、ちょっとだけ止めたくなるのも事実なのだ。

ニングのことを思い、彼女との短いけど濃密な思い出を思い返す。

初めて会った時の可憐な姿。コカピエル達に果敢に立ち向かう強い姿。そして、井草を許してくれたあの優しさ。

井草・ダウンフォールはニング・プルガトリオのことが大好きだ。そこに偽りな何も
ない。

だからだろう、神の子を見張る者の一因ではなく、私人としての井草・ダウンフォールはそれが気になってしまっただけで仕方がない。

魔王ルシファアの血統を堂々と飾る事になれば、ニングは今よりは自由がなくなってしまうのだから。

高校生として学生生活を楽しんでいるニングが、それが難しくなる事になるかもしれない。

それが、どうしても気になってしまう。

「……はあ。自分でも何言ってるんだろうって思うんだけどなあ」

そう言い聞かせるように呟きながら、井草はふと空を見上げる。

人間界の空に慣れている井草としては、どうも紫の空は時々違和感を覚えてしまう。墮天使としても冥界ではなく地球で活動しているので、慣れないのだ。

何というか紫の空にほっとできない自分に困っている、その時。

「あらあ。悩んでるのお?」

むにゅつと柔らかい感触と共に、後ろから抱きしめられた。

「ピス姉さん? どうしてここに?」

井草は全然慌てない自分に内心で苦笑しながら、当然の質問をする。

最近ピスとは顔を合わせていない。なので久々な所為か、最近味わってないピスの体の感触がむしろ懐かしくて心地いい。

そしてピスも同感なのか、ほっこりした表情を浮かべて、井草をぎゅつと抱きしめ直

す。

「ようやく暇ができたからあ、井草のカッコいいところを見に来たのよお？ もちろん子供達と一緒におっぱいドラゴンに声援も送ったのよお？」

「は、恥ずかしいやら嬉しいやら」

苦笑しながら、しかし井草はそこまで言うほど恥ずかしいとは思っていなかった。

思えば、ピスにはそれ以上に恥ずかしい姿を何度も見られているのだ。

泣いているところも、落ち込んでいるところも、無気力なところも、色々見せた。

ついでに言うところも、性的関係を何度も結んでいる相手なので、そういう意味でも恥ずかしい事には慣れている。

そう。ピスには色んな情けない姿を見せていた。

「……ごめんね、ピス姉さん。ずっと心配かけた」

井草は、本心からそう謝った。

そして言葉をどう続ければいいか考えている時だ。

「……よかったわあ」

ピスは、涙ぐみながら井草に微笑む。

それにちよつと面食らった井草に、ピスは心から安堵したものの表情を浮かべる。

「ずっと、井草は自分のことを底辺においてたからあ。そういう風に、自分のことを大事

に思ってくれてる事を認められるようになって、嬉しいわあ」

その言葉に、井草ははっとする。

そういえばそうだろう。井草はあの日からずっと、自分のことが大嫌いだった。

だから、ピスが心配してくれている事に気付いたとしても、自分なんかを心配させてしまっていることが情けなくなるだけで、心配されるだけの価値があるような言い方はしなかっただろう。

そう、ピスはずっと井草のことを心配してくれた。

アザゼルから井草の親代わりを命じられてから、十年以上井草と一緒に過ごしてきたのがピスだ。

最初は命令だからかかもしれない。だけど、いつかは絆ができた。

だから、井草はちゃんとと言わないといけない事がある事に気づいた。

「ピス姉さん。本当に、ゴメン」

「ん〜?」

ピスは、あえて深く聞かずに井草を抱きしめる事で促す。

「ずっと心配かけてゴメン。心配される価値がないだなんて思い続けてきてゴメン。その所為で、ずっとピス姉さんに苦勞させてきたと思う」

ああ、そうだろう。

ずっとずっと大切な家族が、自分を屑だという前提のもと、死に場所を探すような生き方をしてきたのだ。

見ていてつらかっただろう。見放した方が楽だっただろう。

だから、まずは謝る。

そして、次に言うべき事は決まっている。

「そしてありがとう。ずっと一緒にいてくれなかったら、俺はきつと、前を向けなかった」

あの手この手で井草を前向きにしようとしてくれた。それができなくても、決して見放したりしなかった。

それがあつたからこそ、ニングとリムが間に合ったのだ。その言葉が届く程度には、井草は自分を追い詰めきれなかったのだろう。

だから、お礼を言う。

そして、最後に言う事は決まっている。

「だから、もう大丈夫」

そう、その今までがあつたからこそ、今がある。

ピスが支えてくれたからこそ、ニングとリムに許されるまで心が持った。

救う一撃を叩き込んだのは二人だが、それまで奮戦し続けてきたのは、ピスなのだ。

だから、もう大丈夫だと伝えよう。

それが、きつと恩返しだから。

「例え五十鈴^二や伊予^人と悲劇に終わつたとしても、俺はきつと前を向ける。ピス姉さんが支えてくれて、リムとニングが引き上げてくれて、そしてイツセー達と一緒にいてくれる、この道を進んで見せる」

振り向いて、抱きしめ返して、そして告げる。

「もう大丈夫。俺は、ちゃんと歩いて行ける」

その宣言に――

「そっか、安心したわあ」

ピスは、心から可憐な花のように微笑んだ。

「うん、井草はもう大丈夫う。本当に、よかつたわあ」

その笑顔は、きつと報われた者だけが見せれる笑顔なのだろう。

2 話

井草・ダウンフオールは何だかんだで色々と出来る人物だ。

半分一人暮らしみたいな状況が長かったし、授業は家庭科であろうと真面目に受けるので、家事は一通りこなせる。

神の子を見張る者としての報告業務などをこなしているので、事務作業や書類仕事も普通の会社員程度には出来る。

そして、いわゆるDIY日曜大工もそこそここなせる。自分なんか金が使つて家具を何度も購入するわけにはいかないという後ろ向き自虐思考によつたものではあるが。

なので、オカルト研究部の学園祭準備において結構活躍していた。

「イツセー、次の板持つてきて。祐斗くんは釘が少なくなつてきたから新しいのをお願い」

「はー」

素早く手際よく作業を終わらせ、しかし一人で全部やるのではなくイツセーや祐斗も有効活用する適格ぶりを発揮して、作業を急速に終わらせる。

しかしこれでも忙しい。何故なら、今回のオカルト研究部は手広くやっているからだ。

内容は「オカルトの館」。喫茶店からお化け屋敷、展示発表と色々やる出し物だ。

旧校舎を丸ごと使用できる利点を最大限に生かしたが、15名程度の文科系としては比較的多いほう程度の部活動では少々難易度が高い部類だった。

この辺、二足三足の草鞋を履く事が珍しくない上級悪魔業界の悪癖が出てないだろうかと井草は思う。

まあ、井草も学生とエージェントの二足の草鞋は履いているので人のことは言えないのだが。

不幸中の幸いは、新しい部員が一人入った事で多少は労働力が増えている事だ。

レイヴェル・フェニックス。フェニックス家の長女であり、かつては兄であるライザー・フェニックスの僧侶を務めていた少女。

なんでもライザーがイツサーに負けて引き籠っている間に空いている母親の駒とトリードして、現在はフリーになっているらしい。

とはいえよく知らない人物だ。それなりに知識を入れてから失礼の内容に対応するべきだろうと思う。

「そういえばレイヴェルちゃんって娘、どんな感じ?」

「ああ。それが結構苦勞してるみたいなんですよ」

と、イツセーは苦笑しながらそう答える。

詳しく聞くと、なんでも学生生活に戸惑っているところもあるらしい。

更にどうも小猫と仲が悪いようだ。一戦交えた事があるからかもしれないが、なんとなくか毒舌が普段より切れ味が増しているらしい。

「ふくん。でも、フェニックス家つてリアスちゃんとの婚約関係で揉めたんだよね？ ラ

イザーつて人を叩き潰したイツセーのことに敵意向けてるの？」

なら小猫の態度も少しは理解できる。

だが、それならそもそもリアスが駒王学園に転校する事を許さないだろう。

首を傾げていると、イツセーも首を傾げる。

「そっぴや変なんだよなあ。レーティングゲームであった時にはこっちのこと馬鹿にした感じだったのに、次に会った時に名前でもいいって言ったら様付けで呼ばれるようになった……っていかそこそに拘ってたし。それからもケーキ作ってくれるって言った、本当に作ってくれたりするし……」

その言葉に、井草は何かに気づいた。

そして、ハンドサインで祐斗を呼び出すと、適当な言い訳を作って一旦離れる。

「……フォーリンラブ？」

「みたいですね」

どうやら、同年代の泥棒猫ならぬ泥棒鳥に嫉妬しているのも原因の一つらしい。

主やら先輩やらで強気に出れないところがある分、同年代には過激になるようだ。

「……あ、木場に井草さん、ちよつといいですか?」

と、そこでイツセーが顔を覗かせる。

振り返るとイツセーは困り顔になっていた。

「なんか、バアル家の人に呼び出されたんですけどどうしましょう?」

意味不明だった。

よく分からないが、どうもバアルはバアルで色々とあるらしい。

そんなある日、井草は珍しく外食をする事にした。

ピスと二人暮らしの時は、ピスが不在の時もあるので外食の経験もないではない。なんとというか久しぶりにラーメンが食べたくなったので、数日前から許可を取って、一人外食をしに来たのだ。

ついでにビールと餃子も頼もうと思いなから店に入る。

と、そこで以外……でもない人物と顔を合わせた。

「お、井草じゃねえか？」

「アザゼル先生」

どうやらアザゼルもラーメンを食べに来たらしい。意外なタイミングである。

組織のトップであり学校の教師にして、部活の顧問。三つの意味で上役である。

既にビールをジョッキ何杯も飲んでいるらしく、顔が少し赤くなっている。どうやら帰りに寄ってそのまま飲んでいるらしい。

「よっしゃー！ 奢ってやるからこっちに座れ！ 店員さん！ こいつ俺の連れだから領収書一緒にでなー！」

なんかいきなり奢られる流れになった。普通に給料をもらっているから問題ないのだが、まあいいだろう。

なにせ相手は国家元首クラスの人物である。研究者としても様々な技術を開発しており、異形社会で特許を取ってもいる。金はあるのだから、少し位奢ってもらっても罰は当たらないだろう。

まあ、勝手に組織の金を横領して自分の趣味の研究をする人だが。

……まあいいだろう。井草はそう言い聞かせる。

深入りするのには頭痛の素だと判断して、井草は席に座る。

「面白いやこういった奢りをした事って……ピスと一緒にの時ぐらいか」

「あく、面白いえばそうですなえ」

井草はそういえばそうだと思います。

何故かちよくちよく顔を出すアザゼルは、ピスと井草を連れて何度も奢ってくれていてた。

井草が伊予と五十鈴の件で大きな失敗をした時も、よく面倒を見てくれた。

今なら分かる。死にたがりだった自分を生かす為に、どれだけ心を砕いてくれたかを。

……だからこそ、それが気になった。

とりあえずは取り留めのない会話をしながら酒飲みをしていたが、しかしいい機会だし聞いてみるのもいいかもしれない。

「……先生、ちよつと聞きたいんですけど」

「なんだ？ 言つとくが機密事項は言えないわけでー」

「なんで、俺のことそんなに気にかけてくれるんですか？」

その言葉に、アザゼルは一瞬硬直する。

井草はそこで何かあると確信しながらも、あえて踏み込んだ。

「俺の親についてはもうどうでもいいんですけど、総督がそこまで気にかけてくれる理由が分からないんです。墮天使のハーフなんて結構多いし、新規だつてぶっちゃけ比較的ありふれてるし……」

「……そうだな。いい加減、話した方がいいのかもしれないな」

アザゼルはそう言うと、少しだけ考えて首を振った。

「いや、酔ってる時に話す事じゃねえし、俺もちよつと心の準備がいる」

その言葉に、井草は思った以上に深い話な気がして、息をのむ。

そして、ふと嫌な予感を覚えた。

「まさか、酔った勢いでスワッピングプレ〇した時にできた子供で、それが父さんと母さんが色々あつた原因……?」

「違うわ! 天然でなんツーこと言ってるんだ、お前!!」

真面目に考えたらツツコミが入った。

それは良かった。そんな理由で両親が問題を抱えていたら流石にアザゼルを殴りたくなる。というより醜聞以外の何物でもない、墮天使全体の格が下がる。

だが、だとするのならどういう事なのだろうか。井草にはそれが分からない。

しかし、どうもアザゼルは今この段階で言うつもりはなさそうだった。

「あ………つたく。よし、じゃあこうするか」

髪をぼりぼりかきながらアザゼルは唸ると、意を決したかのように頷いた。

そして、井草に指を突きつけると宣言する。

「枢五十鈴と行人伊予としつかりケリをつけてこい。そしたら教えてやる!!」

凄まじい事を言ってきた。

……だが、望むところである。

「了解です。しつかりきつかり決着をつけて見せますよ」

どちらにしてもつけなくてはならない決着だ。きつかけにするには十分だろう。

なら、それでいい。

どうせ気になっていると言ってもそこまで深く考えているわけではないのだ。なら、

それぐらいのご褒美でちようどいい。

そう判断して、井草はちよつと本格的に飲む事にする。

こういう時は気分転換で飲みまくるのが一番だ。

「お姉さん! 瓶ビール三本追加で!!」

「お前、二十歳と言っても学生だろうが! 飲みすぎじゃね?」

アザゼルから普段の生活関係でのツツコミを入れられるとは思わなかった。

……そして、盛大に飲みすぎて盛大に二日酔いになったのは余談である。

ちなみにアザゼルと一緒に飲んだ事もばれて、アザゼルが監督責任と問われるものの、井草は二十歳なので自己責任とアザゼルは徹底抗戦の構えを見せている。まあ、それも余談である。

3話

「でいやあああああああ!!」

「はあああああああつ!!」

ぶつかり合う、聖なる大剣と神なる大剣。

正教会の錬金術によって、エクスカリバーを鞘として纏う事で制御力の向上が図られたデュランダル。エクス・デュランダル。

悪神ロキが開発したミヨルニルレプリカであるムジヨルニアを剣に打ち直した新たなトルハンマー。トルルセイバー。

それぞれゼノヴィアと井草の新兵器であり、その能力をより引き出す為、いつもの訓練の過程で模擬戦を行なうのは当然の帰結だった。

オカルト研究部は、もはや三大勢力の特殊部隊一步手前だ。

英雄派曰く「既に現役の上級悪魔眷属と大差ない」と称される實力は、本格的に現役になつていない若手悪魔としては異例の實力である。

更には戦闘経験の豊富さも若手としては異例だろう。

ただ数の多さで競うのならば大抵の現役上級悪魔の方が多いが、質においては大半の上級悪魔の追隨を許さない。こと墮天使筆頭格の一人であるコカビエルと、旧魔王末裔三人との戦いなど、かつての戦争の時期から生き残っている悪魔でもそうはない。それを全員が生き残つてもなれば、もはや絶滅危惧種と言つても過言ではない希少さだろう。

それらの経験が完全に合致すれば、その能力は更に大幅に高まるだろう。いずれは最上級悪魔の眷属にも引けを取らない精鋭になる事は確定ともいえる。

だが、そこに胡坐をかくような精神性を彼らは持ち合わせていない。

元々の資質もあるが、それ以上にその戦闘経験の質が要因だろう。

何せ、それだけの実力と経験を保持しながらも、全員生存が奇跡に近い強敵達の戦いを経験してきたのだ。怠慢は死に繋がるし誰もが本能で察している。元から努力してきたからこそその生存であることも、身にしみて分かっている。

だからこそ、オカルト研究部は皆が毎日のトレーニングを欠かさない。それも、常に前日より高水準になるような勤勉かつ貪欲なトレーニングをだ。

その一環としてこそ、新兵器の習熟と洗練を兼ねた二人の特訓は真剣だ。

そしてその特訓も終え、二人は水分を補給しながら感想を言い合う。

「レプリカとはいえミヨルニルというだけある破壊力だ。とはいえ、ロキが使っていた

時よりは出力が低下しているようだけどね」

「腐つても神なだけはあるね。まあ、まだまだ伸びしろがあると前向きに捉える事にするよ」

ゼノヴィアの感想に、井草もまた前向きに受け取りながら同意する。

トールセイバーの出力は絶大で、既に魔王クラスに匹敵するだろう。

だが、ロキがトールイーツの力で使用したときは文字通りの神クラス、それも上位のものだった。

それに比べればまだまだ使いこなせてない。裏を返せば、使いこなせれば確実に上位の神にも通用するということだ。

未熟ではあるが、ゆえにこそ伸びしろがある。そういう捉え方をして、より成長に貪欲になる方向性を井草は選んでいた。

そして、未熟を指摘するのは井草もだ。

「でもゼノヴィアちゃんの場合、流石に破壊エクスカリバー・デイストラクシオンの聖剣だけ活かすつてのももつたいな

くない？」

「ふむ、私はやはり破壊力こそが持ち味な気がするんだけどね」

実際問題、エクス・デュランダルは多機能性と大火力を併せ持った聖剣だ。

ゼノヴィアは元から攻撃力特化の思考と適正を持つているが、そういう意味では気質

に合っていない。

とはいえそれは井草も同じ。レセプターイーツは取り込んだ他のイーツの特性を使う事ができる、拡張性の高さこそが持ち味だ。攻撃力編重は方向性としてはまっすぐゆえに逆に捻った方向性だろう。

だが、井草はそれもまた一つの方向性だと理解している。

魔王クラス神クラスの領域に到達している幹部クラスのアウターイーツを相手にするには、突き抜けた武器というものも必要だろう。

その絶大な威力をツールセイバーに頼り、そこに至るまでの道筋をレセプターイーツの拡張性に求める。

そういう意味でなら、ゼノヴィアは逆の方向性を選んだ方がいいだろう。

彼女の火力はグレモリー眷属でも飛び抜けている。単純近接攻撃力なら、裏エースの祐斗を圧倒し、表エースのイツセーすら僅かに凌ぐだろう。

だが、絶大極まりない禍の団の幹部格を相手にするには、それだけでは捌かれる恐れがある。

それに対抗する為には、エクス・デュランダルの多機能性が必要ではないだろうか？

「ふむ、私としてはグレモリー眷属のテクニック担当は木場で十分だと思うのだが」

「祐斗君泣くよ？ いや、何も色んな能力を多角的に運用しろって言ってるんじゃない

んだよ」

ゼノヴィアの開き直り発言に苦笑しながらも、井草は決して祐斗になれなどとは言わない。

人には向き不向きがあり、気質がある。それを無視した多様性重視の思考は、机上の空論であり人を見ていないだろう。

ゼノヴィアはエクスカリバー使いとして、破壊力一点特化の典型的パワータイプ向きである破壊の聖剣を宛がわれたものだ。その気質は攻撃力にこそ発揮される。下手な小細工は持ち味を殺すだろう。

とはいえ、それだけではあまりに愚直。一手間加えるだけで大きくその攻撃力を更に活かせるだろう。

「例えば、透明の聖剣を全身に使えるようになって不意打ちを仕掛けるとか、天閃の聖剣で速度を上げるだけでも躲しづらくなるよ?」

「ふむ、確かに、動きが速くなれば相手が反応するより早く絶大なパワーを叩き込めるな」

井草の意見にゼノヴィアも一瞬思索する。

それを微笑ましく見ながら、井草はやんわりとゼノヴィアの背中を押す。

「ちよつと一工夫加えるだけでも大違いだよ。ゼノヴィアちゃんは凄くパワーに長けて

るんだから、複雑な手順を踏む必要はない。料理で例えるなら一つまみの隠し味だね」
そう、それは井草も同じ事だ。

井草・ダウンフォールは決して火力編重方ではない。むしろバランス型と言ってもいい。そして、最大の力であるレセプターイーツもまた、拡張性特化型のイーツだ。

なら、その拡張性をたった一つに割り振るのは悪手だろう。

井草の火力は当面ツールセイバーに集中する。ゼノヴィアも持ち札を増やすのは組み合わせではなく一つ追加する程度にする。

二兎追うものは一兎も得ず。船頭多くして船山に上る。欲張りすぎてリソースが分散化すれば、それこそ敵には届かない。

そこまで分かっているからこそその、ゼノヴィアに対するアドバイスだった。

「じゃあ、そういう事でまずはシンプルな天閃から行ってみようか」

「了解だ。速度で木場に追いつけるほどにまで高めれば、あとは寄って切るだけな分岐向きだしな」

そう判断して二人で新たに特訓を開始しようとして――

「ハイそこまで。今日はそろそろ休んでもらわないとこっちが困るわ」

――リアスがそこで待ったをかける。

そう言われて、井草はふと思い出した。

明日は特に用事はないが、それは井草だけの事。リアス達グレモリー眷属は、ちょっと大事な予定が入っていた。

「ああ、そういうえばレーティングゲーム前のインタビューが入ってるんだっけ？」

そう、今回のレーティングゲームは特別なイベントごとになっていった。

なにせ大魔王派の暴挙によって、悪魔は二分されたといってもいい。その影響で悪魔全体のダウンナー状態だ。

それに対する一種のハレのイベントとして、若手悪魔のエースであり、悪神ロキすら退けた立役者達のレーティングゲームに白羽の矢が立った。

すなわち、バアル義勇軍の中核であるサイラオーグ・バアル眷属と、それ以外にも数多くの三大勢力絡みに近年の戦いで成果を上げたりアス・グレモリー眷属である。

その為手下なプロのレーティングゲームよりも注目が集まっており、一種の合同インタビューが行われるのである。

「お疲れ様。人気者はつらいね」

「ええ。でも、これが冥界の為になるのならやつて見せてこそそのグレモリー次期当主だわ」

そういうリアスは、しかし一瞬だけ暗い顔をする。

その視線が一瞬だけ向いた先では、イツセーと祐斗が今後の強化の方針について、レ

イヴェルとともに話を弾ませていた。

「……………」

何か嫌な予感を感じながらも、井草はそれがどういう事なのかが少しだけ分からなかった。

そしてインタビュー会はあくまで悪魔のイベントなので、井草は再び居残っていた。だが……。

「寂しい」

インタビュースタッフは生中継なので見ようとしている井草だが、一人では少し寂しかった。少し前なら気にする事もなかった事だが、これを弱くなったと取るか人として成長したと取るべきかは、文字通り人それぞれだろう。

とはいえ、最近両サイドを固めるリムとニングがない事は、とても寂しい。

最近二人は色々忙しいようだ。まず間違いなくルシファー末裔として名乗りを上

げる準備だと思われる。

その必要性も価値も理解しているので文句は言わないし言えない。ただ、とても寂しい。

「……あゝ寂しい」

一言でいうのなら、こういう事だろう。

人恋しい。

欠けていた物を取り戻していたというべきか、それとも荷物が増えたというべきか。何事も良い事と悪い事があるという事だろう。

仕方なくやけ酒としてビールを飲みながら、インタビューに集中しようとして――

『それで、今度もおっぱいをつつくのでしょうか?』

――記者の一人の質問に、井草は勢いよくビールを拭いた。

炭酸が鼻の穴に入って悶絶する。

何とか平静を取り戻してテレビに意識を向けてみれば――

『ぶちゆう!!? 今度は吸うんですか!?!』

――更なる発言に井草は脱力して顔面を強打した。

何がどうしてこうなった。あとたぶん、それは部長と言おうとして噛んだんだと思う。

そんな事思いながら、そして冥界の報道業界について不安を覚えながら、井草はどうやって収集を付けるのか心配になった。

明らかにどいつもこいつも数という誤解に意識が集中している。普通なら炎上したり罵倒が飛びそうなのだが、むしろ期待に満ちている辺り、人間とは文化が違う気がする。

『サイラオーグ選手はどうお考えですか?!』

そつちに振るな。おそらくイツセーと井草の心の中が一致した瞬間である。

これは返答に困るというか、むしろ怒るのではないだろうかなどと思ったのだが――
『ふむ、兵藤一誠がリアス・グレモリーの乳を吸ったら、それは恐ろしい力を発揮しそうだな』

まさか乗つかるとは思わず、井草はもう一度脱力して顔面を強打した。

そういえば、サイラオーグ・バアルはあのサーゼクス・ルシファアの親族だった。

井草はそれを思い知り、軽く頭痛を感じて頭に手をやる。

もはや、この会見はおっぱいで埋め尽くされていた。

間違いなく明日のニュースは「おっぱいドラゴン、次は吸う!？」とかになるに違いない。

リアスに心から同乗して、井草は何かやけ食い用のお菓子でも買ってきてあげようと

コンビニに向かう事を決定した。

4 話

そして、次の日。井草は一仕事会って部活の会議に遅れてしまった。

トイレによってから向かっていたら生徒同士の喧嘩を目撃して、仲裁に回っていたのだ。

なんでも二人は二股をかけられていたらしく、それで喧嘩をしていたらしい。

事情を聞き出すまでに三十分ぐらい掛かって、「とりあえず二股かけた女の方を怒りなさい」と説得するのに更に三十分掛かった。

これはリアスに怒られそうである。

部活動は事実上サイラオグとのレーティングゲームのミーティングになる予定なので参加しない井草は問題ないが、その前後は学園祭の準備をする事になっているのである。

しかし実際問題、このイベントは重要だろう。

そろそろリアス達も知る事になるだろうが、井草は墮天使側のパイプで既に知っている事がある。

英雄派の活動の成果である、バランス・プレイヤー 禁手に至った者の大量発現。それによるノウハウは、人工的な禁手の至り方に到達している可能性があった。

本来なら独占する事で、禍の団の技術的優位を高めるのが普通だろう。こと神器研究の最先端である神の子を見張る者に把握されれば即座に流用されると危険視するはずだ。

だが、英雄派は一味違った。

既に技術は広く知られている。それも流出ではなく、流布だ。意図的にばらまいている。

だが、そのばらまいている相手が問題だ。

具体的には、異能側の勢力に所属していなかったり、現政権の転生悪魔の保有者などに知らせているのだ。

現実問題、その手の類の神器保有者には現状に不満を持っている者も多い。

異端を排斥したがる人間は、異能保有者を排斥する事が多い。実際問題、イツセーと戦った英雄派の中堅メンバーは排斥されていた事を告白している。

また、悪魔の中には詐欺一步手前の不平等契約を結ぶ者も多い。和平が結ばれた事でサーゼクスだけではなく他の勢力からの目も入ってくる為契約を更新している者もいるが、そうでない者もいる。リアスのような好待遇かつ善良な主はそう多いわけではない。

いのだ。

そういう手合いが急激に力を付ければ、当然如く使うだろう。

溜まつている鬱憤を晴らす方法が手に入った。これまで泣き寝入りするしかない脅威に対抗する力が手に入った。それほどの力を手に入れてしまえば、振るつてしまうのはおかしい話ではない。

強大な力はそれだけで人を狂わせる。そこに酷い境遇が加われば、そうなくてもおかしくないのだ。

「色々面倒な事になってるよね、現状」

まったくもって面倒な話だ。

和平によってより良くなっているところはあるが、それ以上に情勢の変化の方が早い。漸く改善できるようになっても、それより先に暴走が起きれば意味がない。

そして、それらの事件が増えれば民衆の心は沈んでいく。兵士達の士気も下がっていくだろう。

だからこそ、こういったイベントで発散し、心を和ませる必要がある。

旧魔王派に大打撃を与えたりアス・グレモリー眷属と、バアル義勇軍の中核であるサイラオーグ・バアル眷属。

この民衆に人気の二大眷属が競い合うレーティングゲームは、実に民衆を熱狂させる

だろう。

「リアスちゃんには。パフォーマンスを考慮してもらおうべきかなあ」

だがそれで負けるのは残念だ。サイラオーグには悪いが、オカルト研究部の一員として、リアス達にはぜひ勝ってほしい。

しかし盛り上がりがない試合では、金をかけた意味もないだろう。ヤマのない試合は一般市民には受けが悪いものだ。

世の中難しいものと、色んな意味で思いながら扉を開けようとして――

「……馬鹿っ!!」

「ふぶあっ!!」

いきなり開いたドアに顔を強打して、井草はもんどりうった。

そして勢いよく開けたリアスは、そのまま井草に気づかず全力で走り去る。

「はうお!!」

……鳩尾を踏んづけて。

「リアスお姉さま、待つてください!!」

「ほぐあっ!!」

とどめに、リアスを追いかけたアーシアには股間を踏まれて、井草は失神した。

「……で、何があつたのさ？」

数分後に意識を取り戻した井草は、とりあえず事情を問い質す。

しかし何故かイツセーはいない。

気絶している間に朱乃が追い払つたといつたらしい。しかも、リアスを追いかけるのではなくリアスから引き離す方向でだ。

何か前にも似たような事があつたよなあと思いながらの井草の目の前で、イリナが額に青筋を浮かべそうな勢いで声を張り上げる。

「簡単よ！ イツセー君が酷いの!!」

「い、いえイリナさん。お母さまが原因といえば原因ですし……」

そうレイヴェルはイリナに物申すが、しかし其の場いた全員が首を横に振る。

「いや、確かにきつかけではあるが、とどめを刺したのは完全にイツセーだ」

そう言い切るゼノヴィアに、小猫も同意する。

「……流石に看過できません」

「確かに、ちよつと同意見だね」

と、祐斗もそういうと、眉間にしわを寄せる。

「流石にイツセー先輩をフォローできないですう」

「同感ですわ。リアスが爆発するのも当然です」

こういう時フォローしたりする側である朱乃や、基本振り回されて意見具申できないタイプのギヤスパーすらこうだ。

どうやら、余程の事をイツセーはしでかしたらしい。

「で、具体的に何があったのか、俺に教えてくれない？」

とりあえず、イツセーをフォローするにしてもイツセーに駄目だしするにしても事情を知らねばならない。

そう判断し、井草は事情を聞き出す。

ことの発端はレーティングゲームのミーティングが終了した後。教師としての職務がある為、教師側であるアザゼルとロスヴァイセが退室してからだ。

そのまま学園祭の準備をしようとした一同の目の前で、フェニックス家夫人……つまりレイヴェルの母が通信を繋げてきたのだ。

問題は、その内容だった。

会話の内容はどんどんレイヴェルに対する指導的な内容に変化。具体的にはリアスを立てろなどといった内容である。何というか、正室をたてる側室の心得的な。

そしてイツセーに「レイヴェルは事実上フリー」である事を念入りに伝えた。

……どうやら、フェニックス家は娘を赤龍帝に輿入れさせたらしい。息子の結婚を台無しにされた割には好意的である。

だが、ここで問題が発生する。

なにせ相手はイツセーである。ゼノヴィアはともかく、不倫という相手が結婚する事を前提としている朱乃や、あからさまに告白しているようなものであるアーシアの恋愛感情にすら気づいていないイツセーである。

当然の如くそこにも気づいていない。

だがしかし、そろそろいい加減限界になっていた。

婚約者の試練すら乗り越えたにも関わらず、未だにリアスの好意を「下僕に向けるもの」と認識しているイツセーに、リアスがいい加減ストレスを爆発させかけたのだ。

それでも気分転換のつもりか黙って外に出る程度だったのに、そこでイツセーが声をかけたのがまずかった。

リアスは我慢しきれずこう聞いたのだ。

「あなたにとつて私は何？」と。

そして、イツセーはそこに至つてなお鈍感だった。

「部長は部長」そう答えたらしい。

流石にこれでは脈無しと思ってもおかしくない。

恋する乙女としてはイラつきもするだろう。

だがしかし、井草は怒る気になれなかった。

「……五十鈴の件があるから、俺からはイツセーには何も言えないかなあ」

ある意味もつと酷い真似をしているからである。

「いや、あれは枢五十鈴にも問題があると思うんだが」

「まあ、枢五十鈴の側からすれば、結構傷ついてもおかしくないわよねえ」

「彼女の方が問題が多いとはいえ、確かにデリカシーにかけている対応はしていましたものね」

「……実は同類？」

ゼノヴィアとイリナと朱乃が反応に困り、小猫に至っては割と容赦がない。

だが、ある側面においては事実であるのは確かである。井草の発言にも問題はあったので、そこそのものは否定できない。

とはいえ、内容が内容なのであって口にするのとはばかられる。

だが、知らない者がいる状況下では一人困惑する事もあるだろう。

「……あの、井草さんは何をなさったのですか？ わたくし、その辺りは聞いてなくて

……」

その辺りについて詳しくないレイヴエルが、隣にいたギヤスパーに質問する。
これにはギヤスパーは大弱りだ。

なにせ内容がないようである。とても話が長くなるし、簡単にまとめると井草の評価が地に落ちかねない。とはいえムートロン絡みの情報はオカルト研究部に属する以上、ある程度は知らせる必要もある。

だがしかし、それをコミュ力の低いギヤスパーに聞いたのはレイヴエルのミスである。

「え、あ、井草さんは以前ちよつと色々あつて、自己嫌悪が酷くて自己評価が最悪で……つてそこは重要じゃないか？ えと、その……ね？」

と、しどろもどろになるギヤスパーは、かなり最初の方から説明を開始しかけてしま
い――

「「「……あ、」」」

その言葉で、約四名がふと気づいた。

具体的には、イツセーが入る前のオカルト研究部メンバーにして、イツセーが入つてからの三大勢力の共闘じみた揉め事に関わつた井草達四人である。

井草・ダウンフォールは自己嫌悪と自己最低評価の塊だった。

人からどれだけ褒められても、自分のようなものが褒められている事があり得ない

し、褒めさせてしまっている事を申し訳なく思うような人物だった。

それは過去のトラウマによるもので、これがまた根深かった。

そう、トラウマによる歪みは、基本的に根深いのだ。

「誠に申し訳ありません!! 神の子を見張る者の失態です!!」

井草は速攻で土下座をぶちかました。

「……盲点でした」

小猫は珍しく愕然とした表情を浮かべるが、これは仕方がない。

今から思えばあの戦いは、悪神や神殺しや魔王末裔などといった格の違いすぎる存在との闘いを経験しすぎたグレモリー眷属からすればとるに足らない戦いだっただからだ。

だが、しかし何事も最初は絶大である。

「そう、イツセー君、時々私達を怖がってるような目で見ていた気がしたけど……」

朱乃の言う通りなのだろう。

それだけの傷をイツセーは負っていたのだ。

下手に井草の傷が深すぎる所為で、それも目くらましになっていっただろう。

実際井草に比べれば軽傷ではある。

だがそれは比較でしかない。おそらく傷の深さは十分重症といって過言ではない。

「そうか、確かにそうなってもおかしくない……」

祐斗は友の傷に気づかなかった事に後悔する。

そう、トラウマになってもおかしくないのだ。

そういう人物だからこそ、皆は兵藤一誠という男のことが大好きなのだから。

そして、井草はリアスを屋上で見つけた。

「探したよ、リアスちゃん」

「……井草」

腫れた目を向けるリアスに微笑むと、井草は缶ジュースを手渡す。

そして自分は缶コーヒーのふたを開けると、そのまま隣に腰を落とした。

「……なんで、気づいてくれないのかしらね」

リアスはそうぽつりと漏らす。

「……そりゃ、目を逸らしてるからだよ」

そして、井草の答えに目を開く。

「嫌われてるのかしら?」

「ないない。むしろ逆さ」

井草はリアスの勘違いをまず否定すると、空を見上げる。

まったくもって気づかなかった事が情けない。

おそらく、この駒王学園で最もイツセーの傷に気が付くべきなのは、類似性から言っても立ち位置から言っても井草であるべきだったのにな。

「……俺の場合は「自分は屑だ」という前提があったから、どれだけ褒められても認められてもそれを受け入れられなかった」

「確かにそうだけど、それは今言う話なの？」

リアスの疑問ももつともだが、しかし今言う話である。

「そりゃ、イツセーも広義。的には似たようなものさ」

そういうと、静かに顔をうつむける。

「違うのは、俺の場合は自分にも責任があつて、イツセーの場合は自分には責任はない事だね」

そう、イツセーには責任はないだろう。

しいて言うなら迂闊だが、それは詐欺の被害者に「騙されたお前が悪い」というようなものだ。

より正確に言うなら、「運が悪かった」というべきで、責められるとするならば神の子

を見張る者の任命責任だ。

「女絡みのトラウマは、男にとって絶大なんだよ。……しかも文字通り殺されてるなら、ね」

「……………っ」

その言葉に、リアスも事情を理解する。

墮天使レイナーレ。

ただの一般人であるがゆえに神器を暴走させる危険性があつたイツセーを調べ、結論次第では殺す任務を受けた神の子を見張る者の部隊のリーダーである、中級墮天使。

そして、兵藤一誠という男を弄んで殺した、墮天使の面汚しの1人。

冷静に考えれば当然だ。嘘の告白をされて弄ばれたあげく、一度殺されたのだ。トラウマになってないわけがない。

「まあ仕方がない。だってイツセーはスケベなまんまだし」

これが目くらましになっていた。

普通女関係でトラウマになっているのなら、女性恐怖症の類も発生するし、苦手意識も持つだろう。

だがイツセーは常人が正気を失うほどの煩惱が飛んで行ってもなお普通に覗きを敢行する剛の者だ。これまで起こしてきた煩惱による異形の数々を考えれば、常識で考え

てはいけなかった。

きわめて単純な事だったのだ。イツセーがここまで鈍感なのは――

「心的外傷による無自覚な恋愛恐怖症。そりや殺されてるんだからなつてもおかしくな
いわけだよ」

「……………私は、主失格ね」

リアスはへたり込むとうつむくが、それは違うだろう。

「小猫ちゃんの時にも言ったけど、リアスちゃんは頑張ってる。それにこれは、元を正せば俺達墮天使側の過失さ」

実際問題レイナーレの所業は神の子を見張る者でも問題視された事だ。

井草が事情を説明しただけで、脅しとはいえ査問会をちらつかせるほどの事だ。それほどまでにレイナーレの所業は悪質だった。

「それに、これも言ったけど、これは本来上が対処する事だよ。怒られるべきは墮天使側で、リアスちゃんの責任じゃない」

「……………優しいのね、井草は」

リアスはそう言うと、空を見上げる。

「待つしか、無いのかしら?」

「カウンセラーの手配は先生に言っておくよ。ドライグの方で手配をしてるらしいし、

ついでにしてもらおう」

墮天使のトップなのだから、墮天使側の責任問題には手伝ってもらおう。

井草はそう判断すると、リアスに苦笑を向ける。

「まあ、俺の時よりは大丈夫だよ」

「……根拠は？」

どうしても気になるリアスだが、井草は笑って断言した。

「リアスちゃん達がいるからだよ。愛は全てを救うのさ、俺のようにね」

そう茶化して言うと、リアスは漸く本心からクスリと笑う。

その笑顔はきつとイツセーを癒すと、井草は心からそう思った。

そして、ふとうつむくとブルーになる。

「……でも最近ニングとリムは忙しくて会えないんだよねえ。俺、愛想つかされるんじゃないだろうか？」

「カウンセラーが必要なのはあなたもね」

半分冗談だから勘弁してほしいと、井草は思った。

5 話

そして数日後、ついにリアスとサイラオーグのレーティングゲームが開始される事となった。

舞台となるのはアガレス領に存在する浮遊島アグレアス。

大昔の遺跡もあり、レーティングゲームの聖地でもあるという、観光名所である。

……ちなみにアガレス領になったのは魔王派と大王派が余計な諍いをしたからだが、その辺はどうでもいい。

無駄に金が動くは各勢力の注目を集めるはそれぞれ魔王と大王の肉親が戦うは神滅具同士の激突もあるはで、色々と影響力が多いのも問題である。

とはいえ、この戦いはお互いの夢もかけた戦いだ。そう簡単に譲る事はできないだろう。

そしてイツセーとサイラオーグは、どちらも神に届くだけの牙を持った実力者。

断言しよう。この戦いはまず間違いなく熾烈な争いになる。

「……なのにリムとニングにはまだ会えない!! デートしたかった」

そして、井草は凹むどころか一周回って激昂していた。

大王派からしても現魔王派からしても、旧ルシファーの末裔を迎え入れる事は大きな意味がある。

なので最近忙しいが、しかしこんな時まで忙しくなくてもいいだろう。

とりあえずメールで「試合中には合流できる」とは言っていたが、できればもつと早く合流したい。

いい加減二人のぬくもりに飢えている。涙すら出てきそうだ。

「よし、やけ食いやけ酒で発散しよう」

本当にやけである。

故に井草は速攻で屋台に突撃をかまそうとし――

「何やってるのよお、井草あ?」

その後頭部に、柔らかいおっぱいの感触を味わう事となった。

そしてその感触で誰か分かる辺り、井草は自分でもどうかと思うぐらいスケベだなあと思ってしまう。

「あの、恥ずかしいからやめてくれない、ピス姉さん」

「いいじゃない。墮天使らしいでしょお?」

そう茶化すように言うピスは、微笑みながら井草をぎゅつと抱きしめる。

非常に美人かつグラマラスなピスと、普通に美男子の範疇である井草のそんな光景に

注目が集まる。

しかし井草もモデルではあるが特撮関係者だ。イツセーほどではないが知名度はあ

る。……というより、ナイアルが過去話をばらまかれたとしてもフォローできるようなする側面が仮面ファイターレセプターにはある為、井草の知名度が上がらないと困るのだが。

とはいえニングやリムとできている井草からすれば、ここでスキャンダルが流れる事はまずい。

新たなルシファアの恋人が、ここで色ぼけていたら第三次な可能性がある。

炎上騒動だけは勘弁だ。井草はともかくニングがまずい。

「ピス姉さん!! ちょっとほんとに勘弁して!! ニング的な意味で!!」

「いいじゃない。冥界はハーレムOKなんだから、いつそのこと「ルシファアすら射止めたハーレム墮天使」とか名乗れるようになってみたらあ?」

平然とそんな事まで言ってきた。

それはそれで魅力的かもしれないが、まずはニングとリムの許可を得るべきだろう。

……それさえあればピスとそういう関係になってもいいという事であり、それに気づ

いた井草は自分で戸惑ったが。

「……ピス姉さんのことは大好きだけど、物事には順序つてものがね?」
「そうだねー。あとTPOとかも大事だねえ」

と、そこで後ろから伸びた手が、ピスを井草から引きはがす。

視線を向ければ、そこにはデュリオがいた。

「あれ? デュリオさんが何でここに?」

「デュリオでいいよ井草君。いやあ、冥界の美味しいものを味わおうと思っていたら、そのピスさんに誘いを受けてね。何人か転生天使や墮天使側の人も来てるよ?」

どうやら、ピスは色々と交友関係を広げているらしい。

昔から意外とできる女性だと思っていたが、ここでも力を発揮しているらしい。

「相変わらず、ピス姉さんは凄いね」

「ふふうん。もつと褒めて惚れ直していいのよお?」

などと得意げに言うが、そんな事をするまでもない。

「いやいや、ピス姉さんのこと、俺はかなり好きだよ?」

「………わあ」

なんか赤面された。

「いやあ、井草君もやるねえ?」

デュリオはそう言うてからかかってくるが、しかし、府と何かに気づくと、真剣な表情

を浮かべる。

「そーいや、君には謝った方がいいかもしれないね」

「へ？」

何かされた事があつただろうか。

言つては何だが付き合ひは薄い方だ。というか、出会つた事が一度ぐらいしかない。

その一度で命がけの共闘をした仲だ。彼がいなければシャルバ達は倒せなかつたし、礼を言うことこそあれ詫びられる事はない。

なので首を傾げていると、デュリオは苦笑した。

「俺の虹色の希望だよ。あの時枢五十鈴つて子に使つたじゃん」

その言葉で井草は思い出す。

そうだ。デュリオはその結果をもつて、五十鈴は救えないと判断した。

だが、それは謝られるような事じゃない。

「いや、デュリオは悪くないよ。いっちゃなんだけど、あれは俺や五十鈴が悪い」

実際そうである。

ことの発端は井草に責任があり、それが複雑に絡まつた結果、五十鈴が暴走したようなものだ。

普通、愛する男の思い出を強く持つているからこそ彼に恨まれる存在でい続ける為

テロリストをやり続けるなどしない。想像できないし、想定できない。

デュリオは断じて悪くない。ナイアルが元凶で井草がきつかけであり、五十鈴がやった事だ。考えすぎである。

「……むしろ俺達の因縁に巻き込んで悪かったよ。謝るのはこっちの方さ」

「まあ、井草も問題あったものねえ」

ピスもそう苦笑すると、デュリオが持っていた唐揚げをひよいとつまむ。

そして三口で飲み込むと、そのままポンと二人の肩を叩いた。

「まあ、あまり気にしすぎたら駄目よお？ 此処はお互い悪いところがあつたって事に
して、どうするか考えましょお？」

そういうピスに、二人は苦笑を浮かべた。

「……年長者に言われると、従うしかないねえ」

「そうだね。まったくだ」

そう井草とデュリオは苦笑し――

「……………な!?! ちよつと待ってえ!!」

「ぐぐふう!?!」

いきなり走り出したピスに首根っこを掴まれて、ぐきつという音を鳴らした。

アグレアスの街並みを直感で走り、そして後ろを振り返ると、五十鈴は息を吐いた。

……京都から逃走してはや数日。隠れる為にムートロンで習得した知識をフルに使った結果、気づけば冥界まで来てしまっていた。

そしてグレモリーとバアルのレーティングゲームが開かれるアグレアスまで流れ着き、冥途の土産に一大イベントを見ていこうかとしたら、寄りにもよって井草とピスに、以前やりあったデュリオとか言う転生天使を見かけてしまう。

冷静に考えれば井草は居て当然だ。彼はグレモリー眷属と共に行動する仲間なのだから、観戦に来ても何らおかしくはない。

どうも死期が近づいて色々と低下しているらしい。判断力と想像力が低下しすぎている気がして、頭痛すら感じてきた。

これは考え直した方がいいだろう。これ以上此処にいと、見つかる恐れがある。下手に暴れてこのレーティングゲームを台無しにするわけにもいかない。そんな事になっても賠償責任を果たせない。

そう判断し、五十鈴はすぐに離れようと足を動かそうとし――

「――捕まえた」

――優しく、しかし力強く井草に抱きしめられる。

「……………え？」

困惑する五十鈴の視界が暗くなる。

一瞬これが死ぬ直前かと思つたが、ただ影が差したただけだった。

「全くもお。逃げ足が速くて焦つたわよお？」

「いやあ、追跡が速すぎてこっちの首が折れかけたけどね」

そう苦笑するピスとデュリオが舞い降りる、完全に囲まれる。

逃げ場がない。そう察して、五十鈴はどうしたものかと思つてしまう。

だがどうしようもなく、五十鈴は選択肢がない現状に困り果てた。

逃げ場はない。だが、合わせる顔だつてない。今更どうしようもない。

どうしろというのだ。どうしようもないというのに、いったいどうすればいいというのだ。

そう思い、五十鈴は俯こうとし――

「……五十鈴」

静かに井草はそう言うのと、更に深く強く……しかし優しく五十鈴を抱きしめ直す。

それを肌で感じて、五十鈴は涙をこぼす。

泣く資格もない。そんな事は分かっている。

だがそれでも、井草に抱きしめられて、優しく想いを形で示されて、喜んでいる自分がいた。

……もうごまかせない。

五十鈴は全身から力が抜け、そのまま井草に身を任せる。

ちなみにデュリオとピスは逃げ出されないように警戒こそしているが、しかし後ろを向いている。

「ごめんね、五十鈴。……自分の気持ちに気づかず、五十鈴の想いにも気づかなくて、本当にゴメン」

井草は心から謝る。

彼にとつて自分がどれだけ大事な存在かを自覚せず、自分が彼のことをどう思っているかも気付かなかつた。その所為で、五十鈴の道を踏み外させてしまった事を謝る。

「そしてありがとう。そんな俺のことを、今でも想っていてくれて、本当に嬉しい」

井草は心から感謝する。

そんな男のことをいまだ愛して、そして彼の為になる事をやり方はどうあれ血を吐くほどに努力してくれた事を、感謝する。

「だけど駄目だよ。俺は五十鈴のことが大好きだから、五十鈴が傷つくだけなのは見られない。そんなつらい事はやめてくれ」

井草は心から怒って心から悲しむ。

そんな五十鈴がずっと血に汚れる道を進み、そして井草から離れようとする事が、許せず、そして嘆いている。

その本心からの言葉に、五十鈴はついに折れた。

「い、くや」

名前を呼ぶ。

それだけで、心が温かくなる。

「……井草あ」

名前を呼ぶ。

それだけで、涙が出るほど嬉しくなる。

そして、それだけでは我慢できない。

「井草。私、井草のことが大好き。惚れ直した。昔よりも、愛してる」

心から、井草に対する想いを告げる。

昔の、ほっとけなかつた幼馴染が好きだった事を思い出す。

そして、カツコツケで、しかしどこか自分達とは違う側面を見せていた少年が眩しく思えた事を思い出す。

なにより、最低の裏切りをした自分を、それでも大事だと言ってくれる井草・ダウン・フォールに対する恋心を改めて自覚する。

だからこそ、五十鈴は井草の体温が愛おしい。抱きしめられている事ありがたい。彼が自分のことを想っていてくれる事が、幸せで幸せで仕方ない。

「……俺は、ニングを裏切れない」

それはそうだろう。

裏切られた苦しみを知っている彼が、今愛する少女を裏切る事などできはしない。

だが、井草はそれでも五十鈴を離さない。

「……でも、五十鈴も伊予もリムもピス姉さんも大事だ。そこにも嘘はつきたくない」
恐ろしいほど恥ずかしそうに、最低な事を言っていると自分を恥じながら、井草はしかしはつきりと言う。

そして、不安に震えながらも、井草ははつきり言いきった。

「だから、せめて……もう逃げないでくれ……五十鈴」

ぎゅつと抱きしめながら、井草は五十鈴に懇願する。

「俺は、五十鈴と一緒にいたい。恋人でなくても幼馴染のままでもいい。もう去らないでくれ、五十鈴……っ」

その言葉が、嬉しくて嬉しくて堪らない。

一夫一妻が基本の日本人の感覚からすれば、ふざけるなだろう。昔の自分なら、一発殴り飛ばしていたかもしれない。少なくとも素直に受け入れるのは難しい。

だが、幸か不幸か五十鈴は既に壊れてしまっている。

ナイアルに玩具にされた事が、こんな事で有利に働くとは思わなかった。

……素直に嬉しい。心からそうでいたい。

「うん。私も、そうしたいなあ……」

だから、それがしたくてしたくてたまらなくて――

「……………死にたくないよお、井草……………」

――それができない事に、涙が止まらなかつた。

6 話

「……………死にたくないよお、井草……………」

五十鈴がふり絞ったその言葉に、井草は決意を固める。

公私混同は覚悟の上だ。それでも、これだけは意地でも叶える。

「分かった。今からすぐにアザゼル先生達に連絡を取るよ。大丈夫、死刑だけは意地でも——」

「……………ううん。違うの」

井草をさえぎって、五十鈴は首を横に振る。

そして、うつむいたまま——

「私は……………もう、一か月も生きれない」

——残酷な真実を、口にした。

モウ、イツカゲツモイキレナイ

その言葉が一瞬理解できず、井草は思考を停止させる。

そして、その所為で力が緩んだのにも関わらず五十鈴は逃げない。

そのまま脱力してへたり込むと、涙をこぼしながら肩を震わせる。

「五十鈴ちゃん!? ど、どういうことお!?」

そして愕然としながらも、ピスは五十鈴の肩を掴んで問い質す。

そんなピスに涙をこぼしたまま、五十鈴は自嘲の笑みを浮かべる。

「E E レベル1, 0を6, 0にまで強制的に引き上げる為に、私の体はもうボロボロ。投薬と外科処置を続けても30までは生きれないし、薬の補充は一月分を切ってるから、私の寿命はそこまでしかない」

……当然といえば、当然だった。

E E レベル6, 0。最上級悪魔のそのまた上位に相当するE E レベルは、あまりにも高すぎる。

魔王サーゼクス・ルシファーとすら渡り合えるナイフアーザー達精鋭で6, 5。そのレベル以上の者は、本場ともいえるムートロンですら四桁程度。

おかしいのだ。いくら何でも、高すぎる。

「本当は何十世代もかけての時間をかけてゆつくりとする遺伝子調整や強化改造、そして受精段階での調整や品種改良の応用の世代の積み重ねが必須なE E レベルの上昇。それをたった数年で追い越した私の体は、ムートロンでしか生成できない最先端工ボリユーシオンエキス技術の塊である薬がないと生きていけない」

ムートロンは神々に滅ぼされた超古代文明の生き残りだ。

少なくとも見積もつても数千年間の積み重ねがある。そしてその積み重ねをもつても6, 0のEEレベルは少数派。

それを強引に引き上げた代償が、安いわけがない。

冷静に考えればすぐに分かる事だった。

抜群に相性のいい神器を持つて、高位墮天使クラスの基礎能力を持つ井草とすら、五十鈴は性能で渡り合っている。エボリユーシヨンエキスの性能が大きいとはいえ、自然なのだ。

その対価は絶大だろう。当然の事なのだ。

井草は目の前が真っ暗になって崩れ落ちそうになり、しかしデュリオに支えられる。

「しっかりしろ、井草くん!! キミがここで倒れたらダメだろ!」

いつものひょうひょうとした調子を捨て去りながら、デュリオは呆然とする井草を叱咤する。

「一番つらいのは五十鈴ちゃんだろ!! キミがそんな調子でどうするんだ!!」

「……あ」

その激に、井草は我に返る。

そうだ。そうだろう。

そも、五十鈴がここまでショックを隠せてないのは、井草があんな事を言ったからだ。もうすぐ死ぬと諦観して、それでいいと覚悟していた相手に、もつと生きていたいと強く思わせる事を言った。

そんな事を、知らないとはいえ残酷な事をしてしまった自分が、五十鈴よりショックを受ける資格なんてありはしない。

ふと、視線を何とかして五十鈴に戻す。

「死にたくない……しにたく、ない……資格なんてないけど、まだ、死にたくないよお……っ」

「五十鈴ちゃん……!!」

泣きじゃくる五十鈴を抱きしめながら、ピスもまた涙を目に浮かべている。

……この光景は、ある意味で井草が作ったようなものだ。

砕け散りそうになるほど奥歯を噛み締める。爪が皮膚を突き破るほど、拳を握り締める。

そしてそれでも抑えきれない激高を井草は吠えようとして――

『諸君、大いなるハレの日を台無しにする無礼、あえて謝罪はしない』

『いやっほーい！ 大イベントだぜ面白そうだなあ、おい!!』

――少しだけ聞いているビルデの声と、それに続く怨敵の声が、アグレアスのスタジオア

ムから聞こえてきた。

時刻は少し前にさかのぼる。

会場の観客達は、誰もがその光景を待ち望んでいた。

『さあ、ついに始まりますは、冥界の若き英雄達同士の激突です!!』

司会であるガウド・ナミジンが声を張り上げ、そして魔法技術を利用したスポ Trot ライトが点灯される。

『東口ゲートから入場しますは、被災の身に生まれながらも絶対的な努力で圧倒的な実力を手にし、この冥界の危機に対してバアル義勇軍を率いる、次期大王！ サイラオーグ・バアル率いるバアル眷属!!』

『『『『『『わあああああああああ!!』』』』』』』

サイラオーグ率いるバアル眷属の入場と共に、大音響という言葉すら生ぬるいほどの歓声が鳴り響く。

そして、次にスポットライトが真逆のゲートに向けられると共に、音楽が鳴り響く。

放送設備をジャックして、アグレアス中に聞こえるように声が鳴り響く。

そして霧が会場中を多い、そして消え去った時には大きな変化が生まれていた。

スタジアムの外周部分と試合会場である内周部分を取り囲むように、大きな物体が鎮座している。

同時に、グレモリー眷属とバアル眷属を同時に見れる位置に、十人ほどの人影がそこに立っていた。

その姿を認め、サイラオーグとイツセーは目を見開いて声を張り上げる。

「ビルデ・グラシヤラボラス・サタン!!」

「てめえ、ナイアル!!」

その声を受け止め、ビルデとナイアルは悠然と視線も受け止める。

「よつす赤龍帝!! 井草・ダウンフォールは元氣してるか?」

「久しいな、諸君。サイラオーグはともかく、リアス・グレモリーとはあの会合以来か」
双方ともに余裕の表情を浮かべながら視線を受け止めると、ビルデが一步前に出て周りに視線を向ける。

「悪魔という種の在り方を捨てた愚か者の諸君!! 今日という久しぶりの気晴らしを台無しにする事、詫びるつもりは一切ない」

悪意が込められたその言葉と共に、ビルデは一度息をすうと、はつきりと宣言する。

「今日は諸君らの心を更にどん底に沈めるべく、そして我々ビルデ・グラシヤラボラス・サタン眷属の力がどれほどかを伝えるべく、ここにはせ参じた!!」

「……冥界の者達が心から待ち望んでいたこの一戦を。そして、俺達とリアス達の夢をかけたぶつかり合いを台無しにするとは、いい度胸だな、ビルデ!!」

本気の怒りをにじませたサイラオーグの怒声に、ビルデは悠然と微笑む。

その気負いは一切ない。恐怖も緊張もなく、市全体と言っても過言ではない。

そしてサイラオーグは迂闊に突撃する愚だけは犯さない。

気づいているのだ。今の状況は既におかしい事に。

そして、リアスもまたそれに気づいていた。

「……未だお兄様もゲストとして来られている神達も乱入してこない。何をしたの、ビルデ!!」

そう、明らかにおかしい。

禍の団の大勢力であるムートロンと大魔王派。その最強格と指導者が、寄りにもよつてこんなところに出てきたのだ。

当然、本来なら即座に迎撃部隊が出て来てもおかしくない。

そもロキとの一戦で大活躍をしたサイラオーグとイツセーがぶつかるこの試合。そ

の注目は絶大で、直接見物に來た者達も数多い。主神クラスも二桁に届く勢いで見に來ている。

北歐アースガルズからは主神オーディン。中国須弥山からはインドラこと帝釈天。ギリシャオリュンポスからは主神ゼウスとその兄弟であるポセイドンとハーデスが來ている。

三大勢力を嫌っているハーデスすら見に來たこの一戦。台無しにするような真似を見逃せば、当然の如く沽券に係わる。

ましてや喧嘩を盛大に売られている神々も見過ごすどおりはないだろう。即座に戦闘が開始されてもおかしくないのだ。

だが、ビルデは余裕の態度を崩さない。

「神々の援護を求めているなら無駄だ。今回ゲオルクに用意してもらった結界装置は特別製でね。二時間しか発動する事はできないが、二時間の間はオーフィスすら破るのに苦勞する代物となっている」

「ついでに言うとい!! 対神迎撃用に大魔王派からは大部隊が出撃だ!! 中級クラス以上の悪魔を、一万ちよつと投入させてもらったぜ!! 最上級クラスは五十人だったっけか?」

ナイアルが追加する言葉に、誰もが息を呑む。

おかしい。あり得ない。

最上級クラスを五十人も用意するなど、できるわけがない。

合流した旧魔王派と現政権から裏切った者達を含めても、総力に匹敵するような人員だ。そんな事をすれば、戦線が瓦解すると言ってもいい。

その事実にも誰もが驚愕と疑念を同時に抱き、しかしリアスはふとビルデの演説の内容を思い出し、正体に勘付く。

「……まさか、王の駒という、あれ!？」

「ほう、聡いな。その通りだ」

ビルデはそういうと、一つの悪魔の駒を取り出す。

それは上級悪魔が普通に与えられる駒とは全く異なるものだった。

「これが王の駒の現物だ。能力は、適合した悪魔の能力を数十倍から数百倍に強化するというものだ」

そう告げるビルデは、それと同時にエボリューションエキスを取り出すと変身する。

『コピー』

その言葉共に変化したビルデは静かに自嘲するかのようなトーンで告げる。

「正直に告白しよう。私は王の駒を材料を利用してコピーする事は出来ても、正真正銘新造する事は出来ない」

そして、その視線を映像機器に向けると、今度は皮肉の色を込める。

この意味が分かっているという事がどういふ事か、ここにはいないアジュカ・ベルゼブブに告げるかのように。

「つまり、一から本当に意味で作れる者が新造すれば情勢はさつさとひっくりかえせるのだ」

「……愚かな。その意味が本当に分かっているのか？」

サイラオグはその言葉に静かに首を振る。

「安易に手にした力は暴走を引き起こしかねん。王の駒を安易に大量生産すれば、待っているのは三大勢力の戦争すら超える神話を巻き込んだ大戦争だぞ？」

「それこそ望むところだろうに」

それに真つ向からビルデは異を唱える。

そののどに問題があるのかと、ビルデは言外に言いきった。

「勝利とは戦って勝ち取る物。栄光とはすなわち敗者の血と痛みと嘆きによって作られるものだ。弱肉強食は自然の理である以上、勝者になる為に強者になるのは当然の帰結だろう？」

何を言っているのだ馬鹿がと言わんばかりに、ビルデは心の底から断言する。

そして、サイラオグに心底から嫌味な視線を向けて、言い切った。

「マグダランの地位をその拳で奪い取ったのは貴様だろう？　血を分けた弟相手に我が言葉を実践した男が、偉そうに異を唱えるなど笑わせる」

そして真つ向から視線をぶつけ合うと、そして肩をすくめて周りを見渡す。

「一応言うが、ナイアル殿はあくまでイレギュラーが発生した時の保険だ。余興の為のゲストは用意しているが、グレモリー眷属とバル眷属は我がサタン眷属でお相手する……が」

そこでビルデは一つ言葉を切る。

そして、眷属達と共に立っているフードの者達に視線を向ける。

「……女王のスリエールと戦車のエウクレイテスは所用により欠席で、兵士の親衛隊小隊長達はアグレアスの衛兵用に差し向けた。ゆえに今回はゲストで代行する事を許してほしい」

「ゲストだって？」

警戒する祐斗に頷いて、ビルデは指を鳴らす。

「そう、中々面白い顔ぶれだと思っぞぞ？」

そして、フードが投げ捨てられ……。

「……まさか、貴方が出てくるとは」

「ふむ、まあ私が若手に牙をむくのはいじめかもしれないな」

サイラオグを睥目させるは、ビイディゼ・アバドン。

王の駒を使用した者達の1人にして、レーティングゲーム三位にまで到達した、魔王クラスの領域に到達した実力者。

「……まさか、アーシアの前にこのこと現れる度胸があるとはね……っ!!」

「当然だろう。僕は彼女を穢したくて穢したくて堪らないんだから」

リアスに殺意を抱かせるは、ディオドラ・アスタロト。

徹底的に叩き潰されてなお行動するその悪意には呆れを通り越して感心させる。

「まさか、君が悪魔と手を組むなんてね」

「ですよー。でも、それ以上に君達への思いが僕ちんを突き動かすのデス！ そう、これはまさしく愛……いや、憎悪SA!!」

祐斗に呆れを抱かせるのは、はぐれ悪魔払いだった男、フリード・セルゼン。

悪魔を毛嫌いしていたかれがこの状況下で出てくる事に一周回って感心すら抱かせる。

それほどまでに、人生のけちのつけはじめだったグレモリー眷属が嫌いだという事なのかもしれない。

そして――

「……………嘘、だろ？」

「ううん、嘘じゃないよ、イツセイ君♪」

顔を真っ青にして汗を流し、震えすら見せるイツセイに、彼女は満面の笑顔を浮かべて弾んだ声を出す。

その可憐な表情は間違いなく美しいが、しかし同時に底なしの悪意を感じさせた。

そして、それは間違いなく事実である。

神の子を見張る者の総督であるアザゼルが、脅し目的とは言え査問会を起こす時まで告げた相手だ。相応に問題のある性格をしており、彼女を知るグレモリー眷属は一斉に敵意を向ける。

そして、それを楽しそうに受け止めながら、彼女は表情を一変させる。

「腐り果てた悪魔のクソガキに復讐する為に、こうして悪魔なんかに頭を下げてリベンジしに来てあげたわよ!!」

墮天使レイナーレ。

過ぎさった悪夢が、再び舞い降りた。

7 話

一方その頃、ドーム外側では既に激戦が勃発していた。

襲い掛かる数十人の最上級悪魔と、バイアクヘーイツ数十名。

中にはナイフアーザーなどの魔王クラスまで存在しており、神クラスを相手に最低でもツーマンセルで遅滞戦闘を行っている為、戦線は膠着していた。

そして、最大の問題が再び来た事に気が付いて、アザゼルは舌打ちする。

「……砲撃来るぞ!! 全員、防壁を展開しろ!!」

アザゼルの指示に従い、結界を張る事ができる防衛部隊が一斉に防御障壁を展開。同時にアザゼルが力を籠め、その防衛出力を大幅に強化する。

その瞬間、神クラスの全力に匹敵する砲撃が軽く十数発は放たれ、ぶつかり合う。

……帝釈天が連れてきた四天王も防壁側に回っている為何とか防げているが、これが定期的に来る所為で、防衛側であるアザゼル達は敵部隊の迎撃に集中できない。

かといって、敵の実力者は隙あらば殺しに来ている。それも、普段は足止めを徹しておきながら、一瞬でも強引に振り切ろうとすれば全力の殺意と共に攻撃を叩き込んでく

るのだ。

これによつて大会を見学に来ていた神クラスすら動きが封じられている。

オーディンやハーデス、サーゼクスなどに至つては片手が埋まる数で攻撃を仕掛けてきている為動きたくても動けないのが実情だ。アザゼルが指揮に意識を向ける事ができているのが奇跡に近い。

そして、そんな戦闘を行つている理由も簡単だ。

彼らはこちらを殺す気が薄いのだ。

おそらくこの作戦はテストが半分。来るべきムートロ本艦隊が到着した後、そして王の駒による強化悪魔が一定数を超えた後の為だ。その為の事前データ収集こそが目的なのだ。

そう、対神戦闘のノウハウや、精鋭達がどれぐらい戦えるのかを知る為のテスト。それがこの作戦の目的の半分だ。

そして、もう半分も明白。

「……本気でビルデがイツセー達を殺せると確信してやがるつてわけか!!」

今回の作戦の一つは、間違いなくビルデによるサイラオーグとリアスの蹂躪。可能ならば殺す事だ。

冥界の陰鬱なムードを払拭する為のこのイベント、台無しにするだけで現政権側の士

気は更に落ち込む事が断言できる。

ましてや若手悪魔の二強が撃ち滅ぼされれば、現魔王派は大魔王派に勝てないという印象が強まる。そうなれば大魔王派に流れる悪魔は更に増えるだろう。

そうなれば、少なくとも悪魔は終わる。現政権側の中核である三大勢力の一角が終われば、その影響は甚大だろう。

むろん、それはビルデがリアスとサイラオーグを眷属ごと撃ち滅ぼす事ができればの話である。

それ以外の目的はもちろんある。だが、それでもこのタイミングでやるという事は、それだけの確証があるという事だ。

「ビルデ、奴はどこまでできるんだよ……っ」

アザゼルが歯噛みしたその時、墮天使の一人がアザゼルに近づきながら大声を張り上げる。

「アザゼル総督！ 敵の砲撃の地点判明しました!!」

「マジか！ 誰がぶっ放してやがる!!」

周囲の攻撃を警戒しながら振り向いた先、墮天使が見せた映像に、アザゼルは目を見開き……納得した。

そこにあるのは、流線型のボディをした巨大な物体。

少なく見積もっても400mはあるであろう事が、周辺の環境との比較で分かる。そして物体は少なく見積もっても片手が埋まる数存在し、砲撃を叩き込んでいる。だが、それがムートロンが出どころだと考えれば驚きは少なくなる。

なにせ相手は、外宇宙に進出して戻ってきた存在だ。それも、神々を相手に殲滅すると断言するような者達だ。

考えればすぐに分かるはずだ。化学兵器による戦争とは、白兵戦だけで決着がつくものではない。

宇宙空間に進出するような存在が、その為の機会を使用しないわけがない。

そう、あれは――

「宇宙戦艦まで投入たあ、この作戦の本気度がよく分かるぜ、ナイアル……っ!!」
――外宇宙航行を可能とする、戦闘航宙艦艇である。

「HHHHHHHHH! まさかただの機械で神クラスの力を発揮するとはなあ!!
流星に驚いたぜ、オイ!!」

体中から血を流しながら、その情報を受け取った帝釈天は高笑いをする。

ぶったちちやけ、黄昏の聖槍を持つ曹操の存在を早期に知りながら秘匿していた彼は問題児だが、しかしムートロンに対する警戒だけはしていたつもりだ。

曹操を利用して情報を探るつもりだった。流石にムートロンはまずいと判断して、京都の一件で関与が疑われた時点で自慢の四天王すら送り込んだ。

だが、どうもそれでも足りなかったようだ。

まさか純粹な機械で神クラスの火力を発揮する存在を投入するとは思わなかった。しかも、前座の部隊で複数機も投入できるほどの余力を持っている。

「和乎とか正直むかついてる連中も、これには度肝を抜かれたらうぜ!! 今頃泡くつてるんじゃないか!?!」

本気で笑える事態になっているが、しかしそんな事ができるのはバトルジャンキーの気質がある彼のような主神クラスぐらいだろう。

実際、同じ主神であるゼウスは半目を向けている。

「言つとる場合か! ワシらすら全員苦戦してるだらうに!!」

ゼウスがそう文句を言ったその瞬間、一人先行していたツールが弾き飛ばされる。

そしてその瞬間、荷電粒子砲が一気に三つ、それぞれの神に対して放たれた。

「おっと!!」

そして帝釈天はヴァジュラを放つ。

ゼウスもケラウノスを叩き込み、トールはミヨルニルを勢いよく叩き付ける。

そして十数秒の拮抗ののち、その砲撃を何とか相殺する。

それは本来あり得ない事だ。

中国神話体系の長にである、帝釈天ことインドラ。ギリシャ神話体系オリュポスの主神であるゼウス。そして北欧神話体系の戦神筆頭であるトール。

彼らはそれぞれ雷の神。そして主神もしくはは主神に並び立つ者だ。

その絶大な力を前に、あろうことか彼らの土俵である雷撃で渡り合っている。そんな事が可能な存在など、この地球には存在しないと云つてもいい。龍神クラスですら多少難儀するレベルだ。

だがしかし、それをなしている存在が目の前にいた。

「……流石雷を司る主神クラス。流石に一人で戦うのは無謀だったか」

肩で息をし、血を流しながらそう漏らすは、ムートロン先遣艦隊司令であるホテツプである。

その前身は淡いオーラのようなもので包まれ、肉体そのものは黒を基調として黄色の模様が刻まれたイーツと化している。

その両手に持つのは、装飾が施された一对のトンファー。そこからまた雷撃が放た

れ、その余波だけで近くにいた上級悪魔が一瞬で消し飛ばされる。

その激戦で、帝釈天は相手の力の一部を見抜いていた。

「サンダーイーツってところか？　で、持つてるのはミヨルニルを参考にした装備なん
だろ？　先遣艦隊司令さんよお？」

「正解だ」

帝釈天のカマかけに、しかしホテツプは分かたうえでそれに答える。

元より隠す必要はない。それほどまでに自分の力は隙が突かれにくいものだ。それ
に、技術者としては自分の持つ技術を誇示したいというものである。

「私のデフォルティーツはサンダーイーツで相違なく、これはロキ一派に潜りこませた
スパイが入手した技術をもとに作ったツールトンファーだ。そして――」

『アザトース』

その合成音声とともに、オーラが更に濃くなる。

「我がアウターイーツはアザトースイーツ。能力は、宇宙全体の流れからエネルギーを
抽出する事だ」

アザトース。クトゥルフ神話において、世界とは彼が見る夢にすぎないとすら称され
る邪神の一角。

そしてその言葉を聞いて、帝釈天はある事に気づいてため息をついた。

「……クトゥルフ神話の原型は、お前らが接触した宇宙生命体か」

「しかり。一部のバカが夢の形で発信したそうさ。……それがここまで有名になるとは思わなかったが」

思わぬ真実もあつたものである。帝釈天は呆れてため息をついた。

だが、それで読めた事もある。

「……アザトースイーツで引き出したエネルギーをサンダーイーツで雷撃に変換し、更にそれで制御して効率的に運用するのがお前の戦闘スタイルってか？」

「ああ、アザトースイーツだけではエネルギーを引き出す事はできても、制御に難があつてな。サンダーイーツの力で制御を容易くする事で、効率が9割ほど上昇する」

その言葉と共に、ホテツプはトールトンファアを構える。

同時に、何体かのバイアクヘーイーツが周囲を取り囲むと、一斉に専用の装備を構える。

「精製したオリハルコンをコアとするムートウエポンシリーズ。その技術も含めて開発したトールトンファア。そして……」

そして周囲から一斉に殺意が叩き付けられ、帝釈天は流石に身構える。

面白い。素直にそう思う。

流石に鬱陶しいを通り越して脅威だが、戦いとはこうでなくてはならない。

シヴァといつか決着をつけるまで死ぬ気はない。そして、こいつらを乗り越える事ができれば、それに一步近づくと確信する。

そんな帝釈天の考えを知ってか知らずか、ホテツプは静かに身構え―

「外宇宙白兵戦闘用強化システム、エボリューションエキスの最先端であるアウター
イーツの力を知るのがいい」

……主神クラス三名と、それを殺しうる戦力による激突は、文字通り世界を揺るがした。

8話

そしてその激戦の中、ある意味で本命であるコロシウムで、ビルデは悠然と微笑んだ。即座にリアス・グレモリーとサイラオーグ・バアルが眷属とともに襲い掛かりかねない状況下で、しかしビルデは仕掛けない。

「まあ待て。まだゲストが来ていない」

そう告げると、ビルデは静かにナイアルに視線を向ける。

そも、主神クラスの力を発揮するナイアルがいるのなら、勝算は莫大に大きい。

それほどまでの力を持っているからこそ、彼はだいたいぶ好き勝手に行動できた。最低ともいえる人格を補うほどまでに、彼は優れた力を持っているからだ。

だが、ビルデに彼を使ってリアスとサイラオーグを眷属ごと始末する気はない。

それはさつきも明言している。

ナイアルは、イレギュラーが起きた時の保険だと。

そして、イレギュラーでない戦力はまだ揃っていない。

「……よし。ゲストも到着したようだ」

その言葉共に、空間が切り裂かれる。

その一は、ビルデ、リアス、サイラオーグをそれぞれ頂点とする三角形で例えるなら、リアスとサイラオーグを結ぶ直線のちょうど真ん中。ビルデを睨みつける立ち位置だった。

そして切り裂かれた空間から、白い鎧が姿を現し、更に数人の人物が姿を覗かせる。

「……ビルデ。君がここまで愚かだとは思わなかったよ」

その名は、ヴァーリ・ルシファー。

白龍皇にして魔王末裔。未来永劫歴代最強の白龍皇になると、かの墮天使総督アザゼルから太鼓判を押された逸材中の逸材。

そして、禍の団の独立部隊である、ヴァーリチームのリーダー。

闘戦勝仏とも呼ばれる孫悟空の子孫である美候。

SSランクのはぐれ悪魔である黒歌。

北欧神話最強の魔獣であるフェンリル。

古の古代文明が開発した超兵器であるゴグマゴグ。

そしてイギリスの由緒正しき裏の名門であるペンドラゴン家。その下方であるコーブルランドを受け継ぎし兄アーサー・ペンドラゴンに、黄金ゴールドの夜明けドーンの若き天才魔法使いの妹ルフェイ・ペンドラゴン。

一人一人が最上級悪魔クラスに届き、そして超えるだろう実力者達。そんな者達が集まった、禍の団でも質においては最高峰の勢力。

その彼らが、まるでリアスやサイラオーグと並び立つかのように、ビルデと相対した。

「……ヴァーリ！ まさか、助けに来てくれたのか？」

「当然だ。今回の奴らの行動には、俺も腹を立てていてね」

イツセーにそう答えるヴァーリは、鋭しい視線をビルデに向ける。

そして、真正面から最大級の殺意と敵意と怒気を叩き付けた。

そして、ビルデもまたそれを悠然と受け流し、真正面からその視線に向き直る。

逃げたくても逃げられない状況に見守るしかなかった観客の中には、失神する者まで

出始めるほどの睨み合いが勃発した。

「……どういうつもりだ、ビルデ？ 俺はちゃんと「このレーティングゲームに妨害する

という事は、白龍皇を敵に回すと思え」と言っただが？」

そう、ヴァーリはこのレーティングゲームを楽しみにしていた。

ロキとの戦いでは共闘し、そして力を示して見せたグレモリーとバアルの若き次期当

主候補。

そのぶつかり合いを心から楽しみにしていたのだ。

故に警告はきちんとしていた。その旨をアザゼルにも伝えていた。ゆえにアザゼル

も禍の団が襲撃してくる可能性は低いと踏んでいた。

それら全てを、ビルデは鼻で笑って一蹴する。

「下らん。そもそも貴様らの行動が禍の団にとつてマイナスなのだ。処罰されるべきは貴様らであり、貴様らの意見が優先される事などありえない」

はつきりと断言すると、ビルデは心底からの蔑みの視線をヴァーリに向ける。

「魔王末裔がその程度の事も理解できんとは、蜥蜴の力を宿して明星の血筋は穢れ果てたらしい。嘆かわしい事だ」

その言葉二、ヴァーリから何かが切れる音が響き渡る。

奥歯をかみ締め、歯軋りを鳴らし、ヴァーリ・ルシファーは血走った目をビルデに向ける。

そこには本気の殺意があった。正真正銘の、相手を一分一秒たりとも生かしておけないという渴望があった。

誇りですらある白龍皇を蜥蜴と蔑み、並び立つ誇りである自分の中に流れるルシファーの血を穢れているとすら断言した。ヴァーリ・ルシファーの誇りをどこまでもコケにした。その男であるビルデ・グラシヤラボラス・サタンはそも大魔王などと名乗り、四大魔王より上になったなどと不遜する男だ。

断言できる。その存在は、問号ことなく万死に値すると。

「アルビオン。 ジャガーノート・ドライブ 覇龍を使う。この男は全力を持つて蹂躪しなければ耐えられん」

『同感だ。われら二天龍を愚弄した報い、万死に値する』

ジャガーノート・ドライブ
覇龍。それは、二天龍の力を持つ者の最終手段。

普通に使えば寿命を急激に消耗する絶大な力。ヴァーリ・ルシファーは魔王由来の莫大な魔力を代用品にするが、それでも暴走のリスクと消耗の高さゆえに、長時間は使用できない。

だがしかし、その力は魔王クラスを遥かに凌ぐ絶大な力。文字通り覇をなす龍と化するその力の具現は、主神クラスですら単独で挑むのは困難な化け物である。

その絶大な力の発動をする。それはまず間違ひなく処刑宣告だ。

だがしかし、その絶望的な力の発動宣言の前に、ビルデは一步前に出た。

「いいだろう。では、私が相手をしようではないか。……諸君らは手を出すな」

その言葉に、イツセー達は目を見張る。

覇龍はイツセーも使った事があるからよく分かる。厳密には不完全な暴発ともいえるものだが、ゆえにこそそれ以上の力を持つ真の覇龍の恐ろしさは想定できる。

先代魔王を超える力にした、シャルバ達旧魔王末裔三人。更には、シャルバは龍の天敵であるアスカロンの力を揮うゲオルグウスイーツを宿す。そのうえで、イツセーはシャルバ相手のに直角以上に渡り合つてのけた。

それより上の力が具現されれば、戦闘は一瞬で決着がついてしまふかもしれない。だがしかし、ビルデは真正銘一人でヴァーリへと歩み寄る。

「……一応断つておこう。私は貴様の戦闘能力の高さはきちんと認めているし、そこに至るまでの努力と、至らせるだけの才能の高さも認識している」

そう言いながら、ビルデは懐から、オオカミの顔を模したバックルと取り出す。

「だがしかし、貴様は己の才能に溺れ、技術と才能を磨く事に固執し上乘せするという手段を得なかった」

そしてバックルは腰に振れ、そしてベルトを展開するとビルデに装着される。

「そして指導者である私が戦場でする事は戦意高揚のみ。必要以上のリスクを負うべきではないし、何より捕縛される事や倒される事こそを避けるべき立場だ」

そして立ち止まり、ヴァーリを見据える。

「……言いたい事は分かるな？」

そしてヴァーリもビルデに視線を向けなおし、静かにほほ笑んだ。

彼は答えを分かっている。それほどまでには聡い。

そう、ビルデは言外にこう言ったのだ。

—お前程度に倒される事はありません。

……笑うという事は、本来威圧的なものであるという言葉がある。

そして、人間は怒りが一周回るレベルに到達すると、逆に笑う事がある。

そして、ヴァーリ・ルシファーは半分は人間である。

……一言で言おう。怒髪天である。

「……………灰燼すら残さん……………っ!!」

「出来ない事を言わない方がいい。安く見えるぞ?」

返答は、嘲笑だった。

「我、目覚めるは——」

放たれるオーラを前に、しかしビルデは悠然と微笑むと、構えをとる。

「たまには外連味というものを聞かせようか」

静かにゆつくりと構えを取り、そして一気に動く。

「……………変身」

その瞬間、バックルから絶大な白龍皇のオーラすらかき消す方向が鳴り響く。

「汝を無垢の極限へと誘おう——っ!!」

その瞬間、ヴァーリの覇龍は完了し、そして瞬時に突撃する。

既に警戒の為に鎧を展開したイツセーですら反応できない絶大な瞬発力。

その火力のままにヴァーリは拳をふるい——

「——この程度か」

―それをかいくぐったビルデに肘が、ヴァーリの鳩尾に叩き込まれた。

サイラオーグ・バアルの攻撃を全て捌く圧倒的な技術の技量。そのポテンシャルを魔王血族を従えるに相応しい、既に最上級悪魔クラスにまで到達した魔力で肉体強化したうえでの一撃。この時点で魔王クラスにすら届く打撃を放った事は明白である。

しかし、それだけでは魔王クラスを圧倒する天龍には届かない。

それをなすのは、ビルデの右腕全体を覆った青紫の装甲。

それらは速やかに全身すら覆っていき、そして変身は完了する。

そしてその瞬間、戦闘の趨勢は決定した。

「我が戦装束、ヴォルフズ・フランクメイル双狼の神喰鎧のお披露目には不十分だな」

そして一瞬でその姿がぶれると同時、ヴァーリの覇の鎧が一瞬で切り刻まれる。

コンマ一秒で全身のあらゆる箇所が破損し、修復そ億度を圧倒する速さで攻撃が振られる。

「……………なめるなあ!!」

そしてようやく我に帰ったヴァーリは、即座に反撃を開始する。

絶大な力を持つ両手両足をふるい、そして速やかに魔力砲撃を連射する。

その一撃は絶大極まりない。一発一発が最上級悪魔クラスですらタメが必要な一撃。

それを連発するその力は、まさに天龍の恐ろしさを体現する。

だが、その全てをビルデは躲しいなす。

振るわれる拳を引き付けてから瞬時にかわし、砲撃に至っては側面に回り込みながら打撃を叩き込んで、その全てを真上に弾き飛ばす。

「疑似霸獣も試すか」

そして次の瞬間、その上で攻撃密度が完全に元通りになる。

全ての攻撃を捌きながら、攻撃が放たれる前と同等の攻撃密度を再び発動。更に威力は絶大で、鎧が欠けるどころか粉碎され、鮮血が飛び散る。

その絶大な攻撃力を前にヴァーリの反撃する余力は失われて行き。攻防の成立は成り立たない。

僅か一分足らずで、その戦いは一方的な蹂躪へと変貌し――

「……近年は残虐な公開処刑は支持が下がるからな。終われ」

その言葉と共に、霸の出力で強化された貫手がヴァーリの鳩尾に叩き込まれる。

衝撃波だけで反対側のコロシアムの結界装置が揺るがされ、轟音で強制的に観戦させられたいたものたちの何人かが悶絶する。

それだけの打撃を受けて、耐えられるほどヴァーリは超越していなかった。

「が……っは!?!」

次の瞬間、ヴァーリは結界へと叩き付けられる。

衝撃のあまり両手両足が胴体に遅れ叩き付けられ、磔の如く一瞬動けなくなる。

そしてそれを見ることなくビルデは振り返ると、そのまま眷属達の下へと向かう。

その隙だらけともとれる後ろ姿に、しかしヴァーリは反撃を叩き込む事すらできない。

白目をむき、ヴァーリ・ルシファーは意識を失いかけていたのだから。

「……………え？」

その光景に、ヴァーリチームは誰もが目を疑った。

現在過去未来において、最強の白龍皇になる男。明けの明星の血を継いだ男。自分達を率いるに値する、明星の白龍皇ヴァーリ・ルシファー。

その絶大な力の持ち主が、一分そこらでぼろ雑巾のように叩きのめされた。

その事実を受け入れることができず、ヴァーリチームは呆然と立ち尽くし――

「……………ヴァーリさん、しっかりしてください!!」

――慌てて回復のオーラをかけるアシアの行動で、我に返った。

「はっ! てめえ、俺っち達の事は無視するってのかよ!!」

「舐めてくれてるわねえ!!」

美候と黒歌が戦闘態勢をとるが、しかしビルデはそのまま異空間から玉座を呼び出す

と、どっかりと座り込む。

仮面越しでも分かるぐらい、その目はヴァーリチームに興味の欠片も向けてはいなかった。

「白龍皇の腰巾着になど興味はない。私は敵最強戦力を倒して十分な戦意高揚をした。これ以上戦闘する必要もない」

そう告げると、そのまま戦闘を開始しようとするビーディゼ達を手で制し、そして告げる。

「双狼の神喰鎧はあくまで私の護身用だ。そも我が戦闘スタンスは戦意高揚の象徴として生き残ること。我が鎧は神喰狼のコピーをコアとしているがゆえに神殺しの爪を持つが、能力の9割は装甲と機動力に割り振っている」

それはつまり、その絶大な攻撃力はビルデ本来の力があって初めて機能するという事。

防速に特化したその鎧を前に一方的になぶり殺されたという事実は、純粋な素体としての能力でヴァーリがビルデに劣っている事を物語っていた。

そして同時に、ビルデは心底から呆れ果てた目で倒れ伏すヴァーリに視線を向ける。

「全ては天賦の才に目がくらみ、それを磨く事だけしかしてこなかったそ奴の怠慢にある。兵藤一誠がミヨルニルのレプリカを貸与してもらった時に、ロキとフェンリルを相手にする事を盾に武器の一つでも貰えば、もう少し善戦できただろう」

確かに、ヴァーリはそれをしなかった。

天龍の力を高める事に意識を向けていると言っていたヴァーリは、余分な物を取るつもりがないとして、アザベルの似た提案を断ったのだ。

ビルデはそこまで知る由はない。だがしかし、そうでなかったとしても強化装備を手に入れる機会はあつただらう。

それをしない事を、ビルデは怠慢と断じる。

「そ奴は半分は人間だろう。人間は基礎性能でこそ異形は愚か野生動物にも劣るが、ゆえにこそそれを補う道具を作り出す事には長けている。人間の開発した技術は我ら悪魔の日常すら彩り、核の脅威は最上級クラスにすら牙を届かせる」

そう告げるビルデは、この光景に恐れおののく民草を見渡す。

そして、言い聞かせるように告げた。

「技術力による上乘せが可能ならば、上乘せすればいいのだ。我らは悪徳を担う存在ではあるが、能力が足りないゆえにできないことを、技術によつて補うことは悪ですらないのだから、尚更問題ない事だ」

そして、視線をビィディゼに向ける。

そこには、明確な称賛の色があつた。

「彼は足りぬ力を技術で補った事で魔王クラスの領域へと至つた。彼こそは新たな悪魔

の先駆者となる存在。王の駒使用者の筆頭格として、称えられる者達だ」

「当然だとも。金と権力で足りぬものを補う。そこに恥じるものなど何もない」

ビィディゼはそう胸すら張るが、ビルデはあえてスルーすると、動揺しながらも構えをとっているイツセーに視線を向ける。

「兵藤一誠。汝もそうだ。まがい物であるがゆえに悪魔としては一切認めんが、戦士としてはヴァーリやサイラオグより遥かに素晴らしいと思っている」

「……二人とも俺より強いだろうに」

イツセーはそう心底から言うが、ビルデはしかし首を振る。

「強さではなく心意気の問題だ。足りぬ事を自覚しているがゆえに鍛錬を欠かさず、そしてそれだけにとどまらずアスカロンという強化装備や、悪魔の駒のリミッターイiwイル・ピース解除などを行った。それがいい」

「……努力だけで追いつけなかっただけだよ」

ビルデの心からの称賛に、イツセーはそう反論する。

本当に強いのなら、その素質があるのなら、そんな事をする必要はないのだ。

ましてやサイラオグは才能がないにも関わらず鍛錬だけで今だイツセーを超える領域に至っている。

それに比べれば、武器を集めたり強化施術をしているイツセーは見劣りする。

だが、ビルデは首を横に振った。

「いや、ヴァーリやサイラオーグは君より意識が低い。まあ、それはビイディゼ殿もだが」

「……ビルデ殿。それはどういう意味ですか？」

むつとなるビイディゼに苦笑を向けると、ビルデは静かにヴァーリを見る。

そこには、軽蔑と同時に確かな畏怖があった。

「強くなるのに才能は重要なファクターだ。それは当然の事実である」

そして、次にサイラオーグを見る。

そこには、侮蔑と同時に確かな敬意があった。

「そして努力でそれを補う事もある程度は可能だ。泥団子も磨けば光るし、そも才能も錬磨を怠れば曇り、磨けばより輝くものだ」

そして、再びイツセーを見る。

そこには心からの称賛があった。

「そして、技術は最も重要だ。人間の戦争は兵器の歴史、兵器の新旧と優劣こそが最重要で、人間個人の武力など使い手としての副次要素だ」

そして、ビルデは聴衆を見渡すとはつきりと告げる。

「人間が我らと同じ悪性である以上、我ら悪魔は人間に倣うべき箇所は習うべきだ。そ

う、技術の発展こそが強者になる道しるべだという事実を受け入れる事から悪魔は始まる」

そして一度立ち上がると、拳を握る。

民草を聞いてくれ。それこそが君達の為にもなると、心から信じるその言葉が響き渡る。

「努力に意味はある。才能に価値はある。だがそれだけでは時代遅れだ。技術の発展こそが強者に至る重要な方法である!!」

そして、遠く離れた戦場に侮蔑の視線を向ける。

そこにいるのはビルデの敵達。

天賦の才を持つ神々。更に収れんで磨き上げたサーゼクス達。そう、それゆえに技術の発達による強化に否定的感情を向ける者。この期に及んで王の駒の量産を行わない、上乗せに抵抗を示す愚者。

「今彼らと戦っているのは、私が模倣した王の駒による最上級悪魔50名。我らが悪魔の母リリースを調べ上げて私自ら作り出した母体リリースの駒によつて生産された中級相当の兵士達一万人。そして王の駒を参考に私自ら作り出した、貴族ノブブルの駒による上級悪魔五百人!! 彼らはムートロンとの共闘ではあるが、現政権の時代に取り残された愚か者達相手に渡り合っている!!」

それこそが、大魔王派の技術力が高い事の証明。

悪魔を悪魔を作り出す存在へと作り変える、母体リリスの駒。

王の駒に比べれば大きく劣るが、女王の駒を遥かに超える強化を与える貴族ノウブルの駒。

そして、コピーキップという形ではあるが確かに数十個一階の作戦で投入できるだけの生産速度を持つ王の駒。

その大魔王派の保有する新たな駒の数々は、神々との戦争すら可能とした。

「技術こそが力だ！ 強化こそが成長だ!! それを否定する現魔王派に未来はない!!」
 そしてビルデは宣言する。

「個々の才能に驕り、それを磨く事だけに囚われる愚者に我らは負けぬ。ムートロンの技術を取り込み、独自の技術を磨き、我らは勝利の道を進む!!」

そして見据えるは、そんな現政権の者達に従う若手の精鋭。

自分達が乗り越えるべき、忌まわしき怨敵。

「来るがいい、遺物に従う愚か者よ。我が眷属は貴様ら如きにかできる、弱者でない事を思い知るがいい!!」

9話

そして、ついにビルデの眷属達が動いた。

「んじゃ、齒応えのある蹂躪を楽しむとすつか!!」

ビルデの騎士、二駒を必要とするベルゼブブ末裔、オギア・ベルゼブブが、やけにサイバーチックな剣を軽く振りながら、一步前が出る。

「そうね。漸く乳龍帝に私の研究が成功するか試せるわね」

ビルデの僧侶、同じく二駒使ったレヴィアタン末裔であるディナ・レヴィアタンが、魔法陣を展開しながらそれに続く。

「ふん。ビルデ殿の酔狂には困ったものだが、あの方の代役を頼まれた以上動かねばならないか」

ビルデの女王スリエールの代役、王の駒の力を使い、レーティングゲームランキング3位にまで輝いた猛者、ビィディゼ・アバドンがつまらなさそうに前に出る。

「いいね。じゃあ、アーシアを今度こそ僕のものにしようとするかな?」

ビルデの戦車エウクレイテスの代理、イツセー達にとつても因縁のある相手、ディオ

ドラ・アスタロトが口元を歪ませて力を籠める。

「では、我ら大魔王派の誇るアーマーボデイのデモンストレーションをするとしよう。」

ビルデ・バアル・サタンの戦車のもう片方、魔王アスモデウスの直系にして、起動兵器アーマーボデイを開発したラウバレル・アスモデウスが、専用に開発されたと思しき両肩のバインダーが目を引くアーマーボデイに搭乗する。

「糞悪魔なんかに従うのは最悪だけど、めっちゃ糞悪魔をぶち殺せるってんなら最高だぜえ!!」

ビルデの兵士四名の代役、二度に渡ってグレモリー眷属と殺し合いをしたはぐれ悪魔払い、フリード・セルゼンが剣と銃を構えて戦列に加わる。

「糞悪魔の赤龍帝に復讐できる!! 思えば、貴方に関わってから人生にケチが付きっぱなしだったもの!!」

ビルデの兵士四名の代役、兵藤一誠のこの激戦だらけの物語の始まりとなった女、墮天使レイナールが狂笑を浮かべながら、戦意に燃える。

「いやっほおう! 手に汗握るスリリングな激戦が始まりそうだぜ!」

そして愉快そうにポップコーンを口に放り込みながら、ナイアルは傍に侍らせた女性に目を向ける。

「どうよ? っこういうのも乙なもんだろ?」

「うん。確かにこれって楽しいかも?」

そう告げながら、その女性は……行仁伊予は頬を赤らめながらその光景を見る。そしてその情勢の中、激戦が勃発しようとしていた。

「一番やりたたくぜえ!!」

そう言いながら剣を片手に切りかかるは、オギア・ベルゼブブ。

彼は魔力でハエを作り出してかく乱の攻撃を叩き込むと、その勢いで、ヴァーリへと踏み込む。

「ヒーラー潰すぜえ!!」

そして本命は、そのヴァーリの治療に意識を傾けているアーシア・アルジェント。

回復役という、悪魔同士の戦闘で本来あり得ない存在は脅威以外の何物でもない。加えていえば、戦闘能力が低く殺す事そのものは比較的容易。

故に狙わない理由が存在しない。

ましてや、敵の最強戦力であるヴァーリ・ルシファーを回復しているのだ。最優先殲

滅対象といつても過言ではなく―

「アースアに―」

「―何しやがる!!!」

それを見逃すゼノヴィアとイツサーでもない。

赤龍帝の推進力と天閃エクスカリパー！ラビッドリの聖剣の瞬発力で割って入り、そしてアスカロンとエクス・

デュランダルによる同時斬撃が迫る。

並みの悪魔なら蒸発するレベルの攻撃力。如何に魔王血族といえど、未だ若手であるオギアにとつても致命傷確実の刃であり―

「おおっと」

―それをどうにかできる技術を、オギアもまた保有していた。

赤龍帝の加護を宿したアスカロンと、最強格が融合したエクス・デュランダル。

その同時斬撃を、オギアは両手で構えた一振りの剣で完全に受け止める。

そしてその瞬間、その聖なるオーラは瞬く間に激減した。

「なっ?!」

「隙ありい!」

一瞬だがその驚愕するべき事実_に虚を突かれ、その瞬間にオギアの魔力砲撃が放たれる。

かろうじて躲す事に成功するが、しかし余波で二人揃って弾き飛ばされる。

上級クラスが悪魔や吸血鬼すら滅ぼし、更にその上の領域に到達し始めているイツセーとゼノヴィアを、余波で弾き飛ばす魔力砲撃。

相手の虚を突いた抜き打ちでありながら、その火力は並みの上級悪魔の最大出力すら超える。

更に、その反動を利用してオギアはアーシアに迫り――

「首もらいー！」

「させません」

薙ぎ払おうとした瞬間、アーサーのコールブランドが空間を切り裂いて突き出される。

その不意打ちを回避して一瞬速度が緩んだオギアに、今度は祐斗が追い付き聖魔剣の斬撃が迫る。

それを剣で迎撃するオギアだが、今度は祐斗が明確に押されているが、しかし弾き飛ばされずに拮抗する。

「……っ？」

「チッ！ 切り殺しに拘るのは間違いか!!」

速やかに惨殺を諦め砲撃に移ったオギアだが、その砲撃が届く頃にはアーシアと

ヴァーリは馬を駆る騎士に拾われ、安全圏へと対比された。

「ベルーガ！ そのままヴァーリ・ルシファーとアーシア・アルジェントをカバーしろ！！」

「承知しました、サイラオグ様！！」

サイラオグの指示に従い距離をとるベルーガの追撃をオギアは考えるが、しかしすぐに無理だと悟る。

瞬時に祐斗が回り込み、そして素早く斬撃を振るう。

再びかろうじて拮抗する刃のぶつかり合いだが、しかしその瞬間に祐斗は驚異的な事実が付いた。

「……そういう事か！」

「あ、気づいた？」

種に勤付かれたオギアは面白そうに笑うが、その眼前に今度はアーサーが迫った。

「ヴァーリはやらせませんよ？」

アーサーはこの場において剣士としては最強格。そして、振るう聖剣もまた最強格。

最強のエクスカリバーである、エクスカリバールサーの支配の聖剣。そして空間すら切り裂く最強の聖剣、

聖王剣コールブランド。

その斬撃は間違いない魔王にすら届くが、しかしそのアーサーの耳に祐斗の静止の声

が響く。

「駄目だ！ 奴の剣に聖剣は効かない!!」

その言葉通りに、オギアの剣はあっさりとコールブランドを弾き飛ばす。

そしてその空いた腹に魔力砲撃を叩き込もうとしたオギアは、しかし祐斗が投擲したナイフ形の魔剣を回避する為に中断する。

一旦距離をとって仕切り治した祐斗とアーサー。そしてオギアもアーシアの追撃を諦めたのか、剣を構えると、二人に意識を集中する。

それを油断なく構えながら、アーサーは祐斗に尋ねる。

「先ほど、聖剣は効かないと言いましたが、どういう事ですか？」

「聖魔剣は威力に勝負ではエクス・デユランダルに劣るのに、しかしオギアの剣とのぶつかり合いで僕の方が拮抗できた。単純な攻撃力で僕はゼノヴィアに大きく劣るののだ」

そこから発想を得た祐斗は、それを確信に変えるべく賭けに出る。

「……聖剣ではなく魔剣で切り結んでも結果は同じだった。なら、相手の剣は対聖剣の力を持つと考えるべきだ」

「正解。これが、ムートロンと大魔王派が開発して俺が適合した魔剣、パールゼブルだ」
祐斗の言葉を肯定しながら、オギアは不敵に笑いながら魔剣を構える。

「……厳密には聖なる存在を侵すオーラを放つ魔剣だ。だから、聖剣だろうが天使だろうが、聖なる存在は俺には脆い」

それは、これまでの常識を超える最悪の装備。

天使は強い欲を持つ事が出来ない存在だ。しかし、それは先進的な問題点であり、肉体的な問題点は墮天使と同じでほぼなかった。

そして聖剣は優れた装備だ。一定以上の性能を持つ聖剣は聖剣因子などの要素がなければ使いこなせないが、しかしそれ以外の弱点がほぼ存在しない巨力な武器だ。

……パールゼブルはそこに一石を投じる剣だった。

天使と聖剣。その力に対する特攻存在。聖域を犯す魔の侵略。

それなすは、大魔王派とムートロンの技術の結晶。

「んじゃ、そろそろ派手に殺し合おうかあ！」

その言葉と共に、オギアは大量のハエを具現化する。

ハエの魔力を具現化し、そしてオールレンジ攻撃を行うはベルゼブブの特性。単純な数だけならシャルバの方が上だが、それはシャルバより彼の方が弱い事には繋がらない。

一体一体が的確に砲撃で自滅しない位置に陣取る完全包围。それを何の気負いも無しにやってのける精密制御は、シャルバを超えるだろう。

そして、彼らがムートロンと手を組んでいるというのなら――

「そろそろエキスいくぜえ!!」

『ホッパー』

――当然の如く、イーツとしての力も運用するのだ。

瞬時に変態するはバツタを擬人化したかのような外見のイーツ。

その姿に警戒心を強める祐斗とアーサーだが、しかしその警戒は足りていなかった。

……バツタとは、優れた脚力を持つ生物である。

ゆえに跳躍力を当然の如く警戒した二人だが、それはあまりにも軽い判断だと言わざるを得ない。

ゆえに、オギアがいきなり二人な間にぼんとボールゼブルを投げた事で、反応が遅れた。

そして、それが致命的だった。

具体的には――

「んじゃ、そろそろ潰すつてな」

――その跳躍力を蹴りに転用した際の威力の想定が足りていなかった。

思考上の空白を具現化されての不意打ちに、二人は回避ではなく防御を選択するほかになく。してそんなものは織り込み済みで放たれた蹴りである以上。

「俺が血と武器頼りって思われたら困るぜ？」

優れた鍛錬を積んだとしか思えない制度の蹴りに、二人は一気に50メートルは吹っ飛ばされた。

オギアはその流れでボールゼブルを回収。更にそのタイミングでハエ達と共に一誠に魔力砲撃をついでに放つ。

蹴りの威力に対応が遅れた祐斗達では会費が追い付かず、しかも一発一発が人間程度なら跡形もなく吹き飛ばされる威力。

人間でしかないアーサーはもちろん、防御力を捨てた戦闘スタイルをとっている祐斗にとってもこれは致命的で――

「きついで耐えろ!!」

――しかし急激に体が重くなると、そのまま二人は瞬間的に地面に叩き付けられる。

その結果、砲撃はそのまま素通りして、激痛を引き換えに二人は辛くも難を逃れる形になった。

「……味方に使うような神器じゃないんだがな、俺の魔眼グラヴィティ・ジェイルが生む枷は」

そう苦笑するは、サイラオーグのもう一人の騎士ナイトであるリーバン・クロセル。

その姿を認めて、オギアは面白そうにクククと笑いだす。

「いいねえ。歯応えの有りそうなのがより取り見取りってか？」

「……あまり、コールブランドと私を舐めないでほしいですね」

「全くだね。それに、イーツ化したジークの方の方が若干上みたいだし、負けるわけにはいかないか」

重力偏重にふらつきながら、しかしアーサーと祐斗も立ち上がり、剣を構える。

それを見て、オギアはあえてハエを数を減らす。

敵の技量は非常に優れている。なら、制御できない数を出しても攻撃は荒くなり弹幕ごと吹き飛ばされて無駄に消耗するのみ。数を減らして敵の攻撃を回避できるようにした方がいい。

その判断を理解し、祐斗達は更に警戒の度合いを強める。

そして祐斗は観念したかのように息を吐いた。

「……出し惜しみをしている余裕はない、か」

そして祐斗は聖魔剣を消して魔剣にすると、ひと呼吸を置いて宣言する。

バランス・ブレイク
「禁手化」

「……っ!?!」

三者三葉に驚く中、具現化されるは聖なるオーラを纏った騎士団。

聖剣を手を持った聖騎士団は、まるで聖剣創造の正当禁手である聖輝の騎士団を思わ

せる。

そして、それだけでオギアは種に気づいた。

「……あく。聖劍因子の影響で、お宅は聖劍創造も合わせて持つちゃってるとてわけか」
「その通りさ。この聖覇グロリー、ドラグ、トルーパーの龍騎士団は聖劍創造の亜種禁手さ」

そう静かに告げる祐斗に対し、オギアもまた苦笑したかのように肩をすくめる。

「むろん、貴方の魔剣には雑魚以下だ」

「だが、俺の蠅相手なら関係ねえか。つたく、俺は勝ち目が高い戦いで歯応えのあるのが大好きなんだがねえ」

ある意味最低な事を告げるオギアは、しかしそれゆえに敵を評価している。

今の発言は裏を返せば、勝てるかどうか分からない戦いになっているという事を告げているようなものなのだから。

そしてその推測通りに、3人の騎士を同時に相手取るオギアは、文字通りの命がけの激戦を強いられる事になった。

10話

吹っ飛ばされたイツセーは何とか態勢を立て直し――

「あ」

「あだだだだだだだだだだ!!」

いきなり大量の魔力砲撃をたたきつけられた。

思わず悶絶するが、面制圧をもくろんだ弾幕だったおかげで鎧でだいたいの防ぎきれた。生身だったら死んでいたかもしれないが、そんなことは今更である。

しかしこの状況下で攻撃されて、黙っていられるイツセーではない。

ついでにいうと相手はダイナ・レヴィアタンだった。レヴィアタンの末裔の女悪魔である。そう、少女である。

つまり、イツセーのカモである。

「やってくれたなお前ら!! まずはおんたから片付けてやる!!」

その言葉に嘘偽りはない。

アーシアはサイラオーグの騎士が助け出してくれている。そのままアーシアとヴァーリーの安全確保に意識を向けており、戦闘には参加していないが、だからこそそう

簡単に突破されることはないと思える。

オギアはオギアで祐斗たちが相手をしている。どうも天使や聖遺物特化の武装を持つているようだが、祐斗は魔剣に切り替えている。アーサーも戦闘技術と剣の特性でぶつけ合うことを避けて立ち回っているし、聖剣の類を使わないサイラオーグのもう一人の戦車も協力している。当分は大丈夫だろう。

ならば、個々は確実に敵を減らす。

兵藤一誠は、女相手なら無敵といっても過言ではない圧倒的な戦闘能力を發揮する。

その根幹は、彼独自の執念と努力で編み出した二つの魔力運用法。そう、洋服崩壊とドレス・ブレイク乳語バイリンガル翻訳である。

全裸を求める執念を込めた魔力を流し込むことにより、衣服を文字通り崩壊させる洋服崩壊。それは意外と応用が利き、赤龍帝の力と併用することで、上位神滅具の禁手である霧の中の理想郷で作られた結界装置すら破壊した。

乳に触れられない環境から、乳と会話したいという狂気によって生み出された乳語翻訳。文字通り乳と対話するその能力は、心を読まないため読心術対策では意味がなく、圧倒的な効果を發揮する。

この二つによる圧倒的な優位性は絶対的である。二つを連携して使用して、女性相手にてこずったことなど一切ない。英雄派の幹部であるジークに至っては「恥辱に耐える

鋼のごとき精神力がなければ戦うことすらできない」とすら称した。圧倒的な力である。

ゆえに、イツセーは遠慮なくそれを使い――

「ハイお姉さん!! 今何を考えてるのか教えながら全裸になれええええ!!」

「……ふむ、やってみなさい」

――それをあえて、ディナは一切の抵抗をせずに受け止める。

それに違和感を覚えながら、イツセーは洋服崩壊を起動。そして同時に乳の声に耳を傾ける。

兵藤一誠の対女性必勝パターンは構築された。よって、普通ならこれで確実に勝ちが確定する。

……ただし、相手は一切普通ではなかった。

「あら、72人分も必要なの? 意外と多いわね」

「き、聞こえない!? 壊せない!」

意外とすごいとでも言いたげなディナの声と、狼狽するイツセーの絶叫が重なり合う。

そして、関心と狼狽では圧倒的に前者のほうが復帰は早かった。

気づいた瞬間には、蛇をもした訪問が形成され、イツセーの至近距離に展開される。

「じゃ、もういいわよ」

その言葉とともに砲撃が放たれー

「イツセー先輩!!」

ーギヤスパーの声とともに、1秒だけ砲撃は進行を止める。

たった一秒。だがしかし、1人で人間の兵隊なら数百人を圧倒しうる化け物たちの戦いにおいて、それは十分すぎる時間。

その瞬間にゼノヴィアがイツセーをかつきらい、そして動きを再開した砲撃が通り過ぎる。

むろんそれにデイナは対応して魔力砲撃を放とうとするが、一瞬その力が霧散する。

瞬時に再構成を試みるが、しかしそのすきについて多種多様な魔力による攻撃が叩き込まれた。

「……あら、なかなか」

しかし、デイナはそれを耐える。

魔王血族の名は伊達ではない。そのポテンシャルはすでに最上級悪魔の領域へと達し、はつきり言つてリアス達より数段上の力を持っている。

だがしかし、その時すでにデイナは霧に包まれていた。

それもただの霧ではない。特殊な術式によって作られたきりは、感覚器官に干渉する

特別製。

妖術と魔力、更には仙術まで混ぜ込んだ、SSランクはぐれ悪魔である黒歌特性の逸品である。

「ふふん♪ もうあなたは私たちを感知できないわよ?」

得意げな黒歌の声もかく乱されるかのように全方位から聞こえてくる。

だがしかし、デイナはその声の本来の方向をある程度つかむことに成功していた。

「……ああ、三時の方向ね?」

「……………え?」

信じられないと言わんばかりに上ずった声が響き、完璧にそれが本当であることを黒歌は証明してしまった。

その爪の悪さに嘲笑を浮かべながら、デイナは手元に魔方陣を具現化する。

家系の特性による砲撃が最も効率がいいが、しかし大体の位置しかつかめていないながらもつといい方法がある。

「雑に吹き飛ばすなら、雷撃の方が有効ね」

そして遠慮なく雷撃が放たれ—

「黒歌! あなた自信満々にやってそれはないでしょう!!」

リアスが叱責の声とともに放った消滅の魔力が、それを相殺する。

ディナは少しだけ舌打ちする。

これならかわされるリスクをのんで本来の特性便りの砲撃をする方がよかったか。少なくとも、準魔法力量ならリアスを超えている自分なら、突破して痛打を与えられた可能性はある。

そう思った瞬間、莫大な聖なるオーラを肌で感じて、ディナはとつさに魔法陣を展開する。

具現化するのは莫大な暴風の具現化。聖剣による攻撃なら振るいてごと接近している可能性が高く、ならば担い手を遠距離に弾き飛ばせば攻撃は当たらない。

実際、斬撃は空振りした。

「やってくれるな！」

体勢を崩したゼノヴィアが吠え、更にディナは追撃を放つ。

黒歌の気がそれたことと暴風によって晴れた霧。そこには異能の棺とかいう能力を封印させる神器を使った反動でよろめいているサイラオーグの僧侶が、もう一人の僧侶にカバーされていた。

そして黒歌とリアスの姿も見えている。

……まとめて吹き飛ばそう。

そう判断し、そして実行。全方位に蛇の顔を向け、一斉に上級悪魔クラスの砲撃を叩

き込もうとして―

「させるかあ!!」

その瞬間、とつさに真下に砲門を一斉集中して砲撃を叩き込む。

放たれた莫大なドラゴンのオーラを飲み込んだ砲撃は、しかし威力が大幅にそがれていた。

そして、それを強引に突っ切ってイツセーがアスカロンを引き抜く。

「べつに洋服崩壊と乳語翻訳がなくなつて、俺は戦えるぜ!!」

「それは知ってるわよ!!」

『シーリング』

さすがになりふり構ってられないとイツツに変身。イツセーのアスカロンを魔力結界で防御する。

そして同時にアスカロンから聖なる輝きが消え去った。

「何しやがった!?!」

「文字通り封印したのよ。そういう能力のイツツだからね!!」

いうが早いのか、ディナは魔力砲撃を連続で叩き込んでイツセーを引きはがす。

そして同時に得意げな表情を浮かべて手元からネックレスを具現化する。

「……女性108人を転生悪魔化して封印したこのネックレス。まさか六割以上使うこ

とになるとは思わなかったわね」

「あなた！　なんてことをしているの!？」

リアスは非道を働いたと判断して非難するが、それは勘違いだ。

少なくとも、自分は無理やりやったわけではない。悪魔として契約ぐらいはきちんと守る程度のプライドはある。

「失礼ね。強姦痴漢盗撮などの被害を受けてPTSDを発症してる女性に、「私の力になる代わりに、永久に冷めない夢を見せてあげる」と交渉を持ち掛けただけよ？　足元を見たのは認めるけど、誘拐した風にみられるのはゴメンだわ？」

「いや、なんでそれで俺の洋服崩壊が無効化されるんだよ!!　乳語翻訳も!!」

イツセーがその説明に首をかしげるが、しかしそんなことは単純だ。

「あら、いやらしいことに対する渴望で魔力を制御した技なら、いやらしことに対する拒絶心を利用して魔力を制御すれば相殺できると思わない」

正論すぎて誰もが沈黙した。

むしろ、重度のトラウマに由来する強い方向性を持った魔力を108人分用意して、六割も使わねば相殺できないイツセーの煩惱の方が問題かもしれない。

京都で人格に何の影響もない程度の煩惱が飛んで行っただけで、数百人を超える人間を胸をもむことしか考えられない存在にするだけのことにはある。

恐るべし、おっぱいドラゴン。恐るべし、兵藤一誠。恐るべし、乳龍帝。

一瞬本気でギャラリーの何割かがそう思った。

「悪を辞任する私たちが言うことじゃないけど、ハイスクールの学生が覗きをするのはまずいわよ？ さすがに子供の悪ふざけじゃすまないわよ」

「失礼な!! 井草さんのおかげで足は洗ってるぜ!!」

イツセーの反論は飛ぶが、高校一年生の時点で大問題である。

まあいい。よくはないがデйнаからすればどうでもいい。

「まあ、最近の研究はとりあえず形になったから良しとしましょう。ちなみに、フィールド展開型だから他の女性にも通用しないわよ?」

「え? ……あ、ほんとだ! 部長のお乳もしゃべってくれない!!」

言われてイツセーが試してみるが、なぜ味方で試すとツツコミを入れたくなったディナは悪くない。

それよりも、とっておきの敵がすぐ近くに來ているというのに。

「じゃあ、赤龍帝はもう任せるわ。レイナーレちゃん?」

「百年も生きてない糞悪魔がちゃん付けしないで頂戴」

明らかに不満そうな表情を浮かべながら、彼女はついに動き出す。

そして、イツセーは肩を震わせる。

戦意はある。仲間を守りたいという思いもある。だから、戦える。

だが、それでも思わず震えてしまうほどに、彼女の再開は兵藤一誠の傷をえぐつていった。

「イツセー。ここは私が―」

リアスもそれを察しているのか動こうとするが、しかしそれより先にイツセーは前に出る。

「大丈夫です。ここは、俺がやります!!」

そうだ。いつまでも逃げ続けるわけにはいかない。傷をほつたらかしにするわけにはいかない。

乗り越えるべきだ。妥当するべきだ。克服するべきだ。

だから、自分の手で終わらせる。

「……レイナーレええええええええええ!!」

「いいわ、いいわよイツセー君!! その恐怖がにじみ出る声が聴きたかったわ!!」

そしてレイナーレは愉快そうに嗤いながら、エボリューションエキスを叩き込む。

『バラキエル』

そして五対の墮天使の翼をはやしたレイナーレに、イツセーは攻撃を開始した。

11話

魔力運用を主体とする者達がデイナと戦う。その横では、イツセーがトラウマを押し殺してレイナーレと激突する。

ゼノヴィアは一瞬どちらを援護するか悩む。

レイナーレについては聞いている。

イツセーの神セイクリッド・ギア器を危険視して、暗殺すら考慮して送り込まれた調査部隊の長。そ

してイツセーを悪辣な方法で殺した悪女。挙句の果てに神の子ゴを見張る者リに黙ってアーシアを取り込み、権威向上の為にアーシアを殺して神器を奪おうとした毒婦。

実に殺意がわく相手だが、しかしたかが中級墮天使であるレイナーレがイーツになつたところで、イツセーが負けるとも思えない。

ならば魔王末裔と戦いを繰り広げているリアスをカバーするべきかと思つたが、しかしこちらは数で圧倒している。ある意味で大丈夫かと思いたくなる割合はこつちの方が多し。

故に一瞬だけが迷い――

「ヒヤッハーリベンジだぜクソアマあ!!」

—その隙について、フリードがカトラスを構えて切りかかってきた。とっさに飛びのいて攻撃を躲すが、その瞬間に銃を突きつけられる。

「永遠にお休み!!」

「させませんわ!!」

そして撃たれた弾丸は、しかし朱乃の雷光によって吹き飛ばされる。

「ゼノヴィアちゃん！ 大丈夫ですか？」

「すまない、朱乃副部长。手間をかける!!」

素早く正しい前衛後衛の立ち位置に戻りながら、ゼノヴィアは即座にエクス・デユランダルの全力を開放する。

同時に朱乃も全力で雷光を開放。渾身の力を込めて攻撃を叩き込んだ。

「うおっ、まぶしー!」

などと戯言を言ったフリードは、それをもろに受ける。

一瞬で強化されているはずのフィールドが吹き飛び、大きなクレーターが誕生する。

普通なら、確実に死体も残らない。

何故ならフリードは人間だからだ。上級悪魔すら瞬時に消し飛びかねないこの力を喰らって、原形が残る事の方が問題だろう。

だが、英雄派という人間の極みがこのデユランダル砲をあつさりしのいだ事を知って

いるゼノヴィアは、警戒を怠らない。

朱乃もまた警戒をきちんとしていた。それほどまでに、この戦いが並大抵のものでない事を痛感している。

そして、事実フリードは死んでいない。

『エドワード・ティーチ』

その合成音声と共に、フリード・セルゼンは起き上がる。

全身は焼けただれ、そしてズタボロ。死んでいないのがおかしいぐらいだ。

だがしかし、それもまた一瞬の事だった。

僅か数秒で、逆再生されたかの如く急速に体が元に戻る。

その、修復という言葉すら生ぬるい回復にゼノヴィアも朱乃も呆然となる。

「どよ、凄いつしよ？ エドワード・ティーチはセフィロト・グラール幽世の聖杯を持つてたらしいんだけど、

その情報を劣化再現してるんだよねえ」

そういうフリードの発言は軽いが、内容は決して軽くない。むしろ絶大なまでに思
い。

海賊黒髭の異名を持つ、エドワード・ティーチが神滅具を持っている事はいい。

彼は跳ね飛ばされた首が数日間跳ね飛ばした者の船を追いかけたという逸話があるのだ。それぐらい持っていたとしても驚かない。

問題は、その力が神滅具である事にある。

神器の人工的な再現は、未だアザベルがある程度形にしたただけだ。禁手の再現は不完全で、一部人工神器が事実上の暴走状態にしているだけ。神滅具クラスの具現化は全くできていない。

そも、神滅具そのものの再現など、創造の埒外である。

もはや言葉もない。朱乃のゼノヴィアも啞然となるほかなかった。

その表情を見て、フリードはさも面白そうに笑う。

むかつかせてくれる相手が、これでもかというぐらい間抜け面を晒している事が愉快でたまらない。

そして、フリードはカトラスとプリントロツクを構えて一步を踏み出す。

「それじゃKillKillぶっ殺しタイム!! フリード・セルゼン! パイレーツのレベル2なエドワード・ティーチイーツ、いつきまーす!!」

そして、狂戦士の猛攻が始まる。

そして、ラウバレル・アスモデウスもまた猛攻を繰り広げていた。

放たれる大量の魔法攻撃を片方のシールド型自立誘導端末、シールドスレイブで受け止めながら、そこに隠れるようにして立ち回る。

巨体に見合った怪力を見せるサイラオーグの戦車であるガンドラ・バラムをその巨体からくる馬力をもつてして圧倒する。

龍種に変態するという荒業を成し遂げたラードラ・ブネも、疑似オリハルコン装備精製能力「オリハルコン・クリエイター」で精製したメイスで薙ぎ払う。

怪力とは見合わぬ小柄ゆえに攻撃の当てずらい塔城小猫に対しては、胸部に搭載した四連拡散プラズマ砲「ジェノサイド・サーカス」で迎撃する。

巨体と性能で蹂躞戦とする、ヴァーリチームのゴグマゴグすら、起動性能ともう片方のシールドスレイブで叩きのめす。

このラウバレル専用のアーマーボディ、スコープオンキングは強大な機体だ。

ラウバレル本人の絶大な魔力量を、更にリアクターイーツの力で増大化。この時点で魔王クラスを超える出力を發揮。加えて本体とシールドスレイブに魔法によって小型化に成功した核融合炉を搭載する。

その出力は好意の神クラスにも匹敵。未だそれを完全に有効活用はできていないが、それを含めても圧倒的な性能を發揮できる。

少なくとも、今この場にいる悪魔達に引けを取るほどの危険はなかった。

「苛立たしいかね？　これが兵器の力だよ」

ラウバレルは、圧倒的な火力で敵を蹂躪しながらそう告げる。

「私は体が比較的弱く、魔王としての特性を得れなくてね。それを補う手段を常に模索していた」

「それが、その技術ですか……っ！」

撃ち合いで押されかけながらのロスヴァイセの言葉に、ラウバレルはコックピット越しで見えないのを承知の上で頷く。

「いくつかはムートロンの技術も利用した。だが、ここまで実用化させたのは私だ」

それが誇りで堪らない。

アーマーボディアの技術により、冥界はより強大な力を発揮するだろう。悪魔という種族は兵器という力で強大な能力を手にしたのだ。

何よりこの技術はまだまだ発展する事ができる。その先が見たくて堪らない。

そして、そのためには戦争という技術発展の絶対条件が必要不可欠。

ゆえに、ラウバレルはビルデに就く事に何の反論もない。

一体一体が上級悪魔の上クラスになる兵器。更には、この力は悪魔だけが使用する事ができる。

「アーマーボディは悪魔の体を拡張発展させたもの。正真正銘悪魔だけが使用する事のできる、悪魔の力。……私は、この技術を突き詰めたい!!」

その言葉と共に、ラウバレルの攻撃は熾烈を極める。

そう、ラウバレルは研究者だ。

アーマーボディという技術を極める事を目的とする、狂気の技術者だ。

ゆえにこそ、この戦いでアーマーボディの力を見せつける。

より多くの悪魔に自発的かつ積極的に支援を引き出させる為に。それによってアーマーボディの技術開発を更に進める為に。

「我が技術開発の礎となれ、敗北者となる事であら!!」

その絶大な砲撃が、一気に小猫達に襲い掛かった。

そして、サイラオグと彼の女王であるクイーシャ・アバドンは圧倒されていた。

サイラオグは獅子の鎧すら具現化して対抗している。その戦闘能力は、近接打撃戦に限定すればヴァーリにも匹敵するだろう。

更に美候とフェンリルもまた共闘の態勢を取り、徹底的な包囲網を形成した。にもかかわらず、圧倒されている。

彼らは弱くない。それどころか、この場でビルデに立ち向かう者達の中でも、高水準の者達だ。フェンリルとサイラオーグに至ってはヴァーリのすぐ下の猟奇に到達しているだろう。

だが、届かない。

「私も穴は使えるのに……！」

「下らん。王の駒で強化された私と、貴様程度が並び立てると思われては困るというものだ」

クイーシャにそう断ずるビーディゼには傷一つない。

王の駒によるドーピングによるものとはいえ、彼は魔王クラスの実力を持った猛者。数多くのレーティングゲームで鍛えられた戦術眼は本物であり、そう簡単に太刀打ちできる者では断じてなかった。

「まあ若手の中では有数な部類だろう。正直本腰を入れる事になるとは思っていないかつたとも、見事だ」

ビーディゼは特に気負うことはなく、平然とそう言い切る。

冗談でもない。皮肉でもない。負ける事がないという余裕が生んでいるとはいえ、

ビーディゼは心からサイラオーグ達を評価していた。

「だが無駄だ。王の駒による強化はそれほどまでに大きな断絶がある。ビルデ殿には悪いが、努力などという才無きものすがる幻想などで、この明確な差は覆らない」

そうはつきりと断言し、ビーディゼは更にエボリューションエキスを取り出す。

「そして、王の駒に並び立つ技術により強化されれば、私に一欠けらの敗北も、ない」

その言葉と共に、ビーディゼは躊躇なくエボリューションエキスを注入する。

『フェニックス』

火の鳥を思わせる意匠のイーツと化し、そしてビーディゼは灼熱を放つ。

全方位から放たれる灼熱は穴に吸い込まれ、その穴はサイラオーグ達を囲む。

そして、魔王クラスすら超える出力と化した灼熱が、サイラオーグ達に襲い掛かった。

そして、兵藤一誠は圧倒的な絶不調で戦うこととなっていた。

生きていることは知っていた。もしかしたら戦うことになるとも思っていた。

だが、いざ戦うとなれば心が締め付けられて思うように戦えない。

神器は思いの力で具現化するものだ。ゆえに、精神状態が大きく左右される。

今の絶不調な状態のイツセーでは、レイナーレを倒すことができない。

レイナーレ自身がE Eレベルを上昇させている。さらにドレス・ブレイクデイナによつて洋服崩壊とバイリンガル乳語翻訳も無効化されている。

そして何より、レイナーレの力は増幅されている。

『バラキエル』

その合成音声とともに強化されたレイナーレは、最上級クラスの力を発揮した。

さらに朱乃のごとき雷光を具現化させ、朱乃以上の出力でたたきつけてくる。

「くそっ！ それは、バラキエルさんの力だぞ!!」

「違うわ！ 私はバラキエル様の力を手にしたのよ!!」

レイナーレはイツセーにそう反論し、そして襲い掛かる。

雷光の一撃一撃がイツセーの体を麻痺させ、そして体をむしばんでいく。

だがそれ以上に、イツセーの心がレイナーレという存在にむしばまれていた。

克服できている自信はなかった。

そもそも自覚できたのがつい先日のことだ。朱乃たちが本気で向き合ってくれたからだ。いぶ楽になったが、その傷は居間もくつきりと残っている。

兵藤一誠は女性が怖い。厳密に言えば、恋愛関係を求めて手のひらを返されるのが怖

い。

その根幹となるのがレイナーレ。兵藤一誠を調べるためにうその告白をして、あざ笑って殺した女。

その思い出がまざまざと蘇り、イツセーを傷つけていく。

恐怖がよみがえる。絶望がよみがえる。絶望がよみがえる。

それらすべてがイツセーの体を縛り、心を縛り、焦燥感を増し、冷静さを欠かせ―

「う、うあああああああああ!!!」

恐怖のあまり、イツセーは火力重視で切れのない力任せの一撃を繰り返し―

「そんな攻撃じゃ私は倒せないのよ、ガキンチョがあ!!」

カウンターの雷光を喰らい、意識を吹き飛ばした。

12話

全方位から襲い掛かる灼熱。

痛烈なカウンターで叩き込まれる雷光。

その一撃をもってサイラオーグ達とイツセーは吹き飛ばされ、その多くが動かなくなる。

かろうじて動けるのはフェンリルと美候のみ。しかも彼らもまた重症だ。

そして他のメンバーも刻一刻とポロポロになり、迂闊に動けない。

アーシアが回復のオーラを連続で放っているからかろうじて拮抗しているが、しかしそれもいつか限界が訪れるだろう。

それを見て、ビルデは嘆息した。

「もう少し粘ると思ったのだが、この程度か」

心底落胆した。期待外れだった。

ビルデはもう少し苦戦すると思っていた。

勝ち目はある。十全にある。よほど油断しなければ、間違いなく勝てるど踏んでいた。

だが、ここまでストレートに勝てるとは思っていなかった。

「イツセーさま!! しっかりしてくださいまし!!」

「イツセーくん!! ああもう、砕けなさいよ、この結界!!」

見ればフェニックス家の長女とミカエルの転生天使が結界をこじ開けようとしているが、それも難しいだろう。

当面は持つのでこれもまた問題ない。

ビルデはそう結論付けると、頬杖をつけて目を閉じる。

難敵だと思っていた。少なくとも、油断すれば喰らいつかれる危険性を考慮していた。

だが結果はこれだ。本来の眷属より弱い者達で構成された代役で圧倒されるという現状に、ビルデは落胆していた。

「所詮は鍛錬を妄信するような連中か。その努力を技術の取り込みに向ければ、話は変わっていただろうに」

そう告げると、ビルデは立ち上がろうとする。

このまま情けないところを見るのもあれだ。いつそ解釈してやった方が慈悲だし、此方にとつてもストレスがない。

そして再び双狼の神喰鎧を具現化しようとした、その時――

「――そうはいかないわね」

一瞬。僅か数秒程度の時間だった。

その数秒間、外部からの結界が僅かに切り裂かれた。

そして、墜落するように十名強の戦士達が舞い降りる。

それを率いるのは、桃色の髪を持ち、角を生やした一人の女性悪魔。

その姿を認め、ビーディゼは舌打ちする。

「ここで貴様が来るか……っ！」

「ええ。流石にこれは見過ごせないわ」

そう返答する女性悪魔は、一歩前に出ると、一礼する。

「お初にお目にかかります、旧魔王血族の方々。私はロイガン・ベルフェゴールと申します」

「あん？　なんでこんなところに元2位が……おおっと！」

視線を逸らした瞬間にコールブランドが襲い掛かり、オギアは思わず声を上げる。

これでは魔王血族は動けないと判断して、ビルデが対応する事を決める。

「さて、見過ごせないとは何の事かね？」

心底からそう思い、そして聞く。

何故か彼女は、王の駒が発表された後の大魔王派の誘いに乗らなかつた。

大魔王派への亡命を断り、その使いを捕縛すると現魔王側に献上。そしてそれを交渉材料に使う事なく、王の駒の使用を素直に認めて今は事実上の謹慎状態だ。

そして、間違いなく強大な敵意を自分達に向けている。

それが分からない。

自分は間違いなく相応の待遇を示した。それだけの實力を持つている事は認められるし、技術による底上げを認めているビルデは、ドーピングだろうと何だろうとそれに見合う實力を手にかけているのなら気にしない。むしろ足りないものを補った者として評価するのだ。

なのに、あえて地位を捨ててまで現政権側についている理由が読めない。

「レーティングゲームなどという戯れをしなくても相応の地位につけるのに、それを蹴って名誉を失墜する事を認めた。そのうえで、この戦場に割って入った理由を伺いたい」

心底からの質問だったが、その瞬間に、心からの敵意が込められた視線を向けられる。そしてその瞬間悟った。

この女は、ビィディゼ達とは根本が異なっている。

「……私はレーティングゲームが好きだった。そして、好きだからこそ高みで戦いたくて、王の駒に手を出したわ」

静かに一歩前に出て、ロイガンは告げる。

「そこに後悔はないけど、馬鹿な事をしてる自覚はあるの。そして、若手達がそんな事をしなくても私の高みに来れるかもしれない事が嬉しかった。リアス・グレモリーとサイラオーグ・バアルはその筆頭よ」

その言葉と共に、ロイガンは真正面からビルデと対峙する。

「人のことは言えないけど、その最高のレーティングゲームを汚されて、黙っているわけにはいかないわね」

「なるほど。誰にでも譲れぬ物はあるか。理解した。卿の聖域を土足で穢し、怒りを買ったは認めよう」

そう告げ、そしてビルデは戦闘態勢を取ろうとし――

「おいおい落ち着けよ。そもそもイレギュラーは俺の担当だろ?」

その言葉と共に、ナイアルが前に出る。

傍にはフードを取った伊予がおり、完全な戦意を向けていた。

「凄いねナイアルさんっ。こんなにくさんの人が見てる前で、戦えるんだっ」

「ああ。一般人には一生できねえ非日常だ。思いっきり楽しめよ」

うきうきする伊予のそう告げながら、ナイアルは首をコキコキと慣らしながらロイガ
ンを見据える。

そしてロイガンも怒りを抑えて戦闘態勢をとる。

断言していい。彼は先ほど鎧を纏ったビルデに匹敵……否、凌ぐ存在だ。

感情に吞まれればすぐに終わる。相手は間違はなく主神クラスなのだ判断するほ
かない。

『クトウグア』

『アント、レベル2 クイーンアント』

その言葉と共に、二人の姿が変化する。

二体のイーツと化した二人はそのまま攻撃を仕掛けようとして――

「……………ろ…す……………」

その、殺意と憎悪にまみれ切った声に、誰もが一瞬動きを止めた。

どす黒い、などという言葉すら生ぬるいほどの憎悪の念が、これでもかといわんばか
りに聞こえてくる。

そして、その声の先では空間が割けていた。

リアス達がきよんとする中、ビルデとナイアルはハタと手を打った。

「ああ、忘れていたがついでに裏切り者もおびき寄せると言っていたのだな」

「ん、ああ。緊急用の転送コードを此処だけそのままにしてたんだよ。ま、入ったら出れねえように仕掛けてるがな」

ビルデにそう答えたナイアルは、そして面白そうに肩を震わせる。

「一応何人かは入れるようにしてたんだが、さてどんな傭兵でも」
連れてきた。という言葉は言えなかった。

その顔を、蒼い装甲を纏った拳が叩き付ける事で塞がれたからだ。

衝撃波と轟音がコロシウム中を揺らす。その勢いは絶大で、ビルデがヴァーリを叩きのめした時を遥かに凌ぐほどだ。

それだけの衝撃を受けたナイアルは、しかし不敵に笑うとフックを放つ。

全く聞いていない、そう言わんばかりの反撃を、しかしその青い装甲は意に介さない。喰らつてのけぞりながらも、しかし強引に態勢を整えると再び攻撃を再開する。

殴る、殴る、殴る。

殴る殴る、殴る殴る。

殴る殴る殴る。

戦術も駆け引きも一切なく、感情に任せて殴られながらも一切気圧される事なくナイアルを殴る。

もうという悪意がアースシアにすら分かってしまう。そんな百パーセントの遊びでの打撃戦だった。

「井草さん？ 一体、どうして……？」

それが分からない。

確かに、ナイアルは井草にとって怨敵だ。その理由は分かっているし、そこを否定する気もない。

だが、そういうレベルを超越し、井草は暴走していた。

最大火力であるツールセイバーも、自身の持ち味である多様性も活かしていない。完全に頭に血が上って暴れているだけだ。

彼はそういうタイプではない。もっと冷静に立ち回れる男だったはずだ。

それが、いったいどうして――

「見つけたわよ、ナイアルう!!!」

そして、新たなる攻撃が叩き込まれる。

現れたのはピス・ダウンフォール。確か井草絡みで駒王会談に関わっていた女墮天使だ。

彼女は龍を模した大砲を具現化すると、特攻とでもいうべき速度でナイアルにぶつかり、そして砲撃を叩き込む。

上級クラスのそのまた上位ともいえる砲撃にナイアルは飲み込まれ、しかしあっさり
とそこから出てくると拳を構える。

「足りねえなあ、おい!!」

そして渾身の憩いで拳を放つが、それはピスの雷撃を纏った右腕でいなされる。

そして蹴りすら交えた乱打が新たに加わった。

「……………くそ! もう始まつちやつたか!!」

「……………井草……………ピス姉さん……………っ」

そして、隣からは声が聞こえてくる。

振り返れば、そこには意外な組み合わせが来ていた。

「デュリオさんに……………五十鈴さん!?!」

流石にこの取り合わせには驚くしかない。

何がどうなればこんな事になるのか、流石に一瞬理解が追い付かない。

そして、理解する事すらアーシアは放棄した。

五十鈴は明らかに泣きはらした顔をしている。それに、憔悴しきっている。

何かがあつたのだ。そして、きつとそれが井草とピスが冷静さを失っている事とも繋

がっている。

それを問い質す余裕は、五十鈴が与えてくれなかった。

「……アーシア・アルジェントだっけ？　これ、持ってきてくれないかしら？」
そう言つて、五十鈴は一シート分の錠剤をアーシアに手渡す。

それを受け取つたアーシアは、しかしそれが何なのかは理解できない。
たぶん薬だろう。だが、何の薬なのだろうか？

そもそも五十鈴はなんで薬なんて持つているのか。もしかしたら持病があるのかも
しれないが、井草からはそんな話は聞いていない。それにアーシアに渡す理由が分から
ない。

「あの、これは？」

「E E レベルを無理やり上げた奴が飲まなきゃならない劇薬よ」

その言葉に、アーシアは絶句する。

強いとは思っていたが、そんな事をして得ていた強さだったとは思っていなかった。

「それがあれば、神の子を見張る者ならE E レベルの技術を大幅に進める事ができるか
もしれない。流石に渡す度胸はなかったけど、こつちも覚悟が決まったわ」

そういうと、更にピケースを取り出すと、その中身の錠剤を全部掌に出す。

「……水が欲しいわね」

「あ、じゃあこれ使いなよ」

ちよつと困り顔の五十鈴の横に、水の塊が宙に浮かぶ。

それをなしたデユリオに、五十鈴は首を傾げる。

「……止めないの？」

「止めたいさ。だけど、俺じゃあ君は止められそうにない」

そう辛そうに言うのと、しかしデユリオは前をまっすぐ見る。

「変わりにあの子を止めるよ。最も、色々大変な事になるだろうけど、さ」

「……あまりお勧めしないわよ。効いたら効いたで、あの子の為になるとも思えないけど」

五十鈴は何かを察してそう言うが、デユリオは静かに首を振る。

「俺の覚悟の問題さ。試してからじゃないと、禁手を使う気にはなれなくてね」

「……難儀な性分ね」

五十鈴はそう苦笑すると、浮いていた水の塊から水を吸い込み、そして錠剤を飲み込んだ。

「ありがとう。じゃ、最後に一花咲かせて来るわ」

「ああ。頑張りな」

13話

「んじゃそろそろ本気出すかあ!!」

その言葉と共に、ナイアルの動きが一気に変わる。

打撃の速度も、重さも、正確さも。

全てが先ほどまでとは段違いに優れたものへと変化する。

その乱打の前には、先ほどまでかろうじて打撃戦の形を維持していた井草とピスも、一気に殴られるだけに変わっていく。

「いっつう……!」

「さっきまで遊びなのか!!」

それに気づいた二人は、心の底から齒噛みする。

恨めしい、憎らしい。とにかく死んでほしいほどにまで憎悪に燃える。

後一月も生きられない。枢五十鈴の体は既にポロポロ。

その事実が、ここまで憤怒の感情を引き出させるとは思っていなかった。

許せない。許せない。断じて一切許せない。

樞五十鈴も、行人伊予も、普通に生きていたのならここまで成り果てる事はなかっただろう。

井草との関係は終わっていたかもしれないが、それでもよくある悲恋話だ。すれ違いの結果の破綻という、いつか苦笑して話せる程度の出来事だった。

そう、それで終わっていたはずなのだ。そして新しい出会いを経験して、新しい関係を構築して、そして新しい人生を進んでいく。それだけのはずだったのだ。

それがたった一人のナイアル外道の所為でこれだ。

五十鈴も伊予も何百人も殺しただろう。その手は血でまみれ、殺された者達の憎悪を浴びる事になる。その事実だけは一生消えはしない。

そしてとどめにもうこれ以上生きれないという事実だ。

五十鈴は後一月ほどで死ぬ。よしんば凌いでも、三十ほどが限界だ。

伊予もそうだろう。五十鈴と同様の処置を受けているのだから、薬の供給ができるといっただけで、それ以外は大差ないはずだ。

ふざけるな。彼女達が何をした。

五十鈴は確かに拗らせていて、それが巡り巡って自家中毒すら起こしていただろう。伊予は確かに夢見がちで、一歩間違えた結果こうなってしまうほどに危険な側面を持っていただろう。

だが、あの時の彼女達は普通の少女だったのだ。

断じてこんな血生臭い戦場を渡り歩かなければならないような境遇ではない。平和な日本で生まれ、よほどの不運がなければ真つ当に人生を全うできるはずだったのだ。

それが、壮絶な殺し合いを繰り返す毎日を過ごし、拳銃の果てに十年生きれるかも分からない？

許せない。二人の心は一つだった。

「ナイアルうううううううう!!!」

二人は激情にかられながらも、抜群の連携でナイアルに襲い掛かる。

サイラオーグだろうと叩きのめせるだろう。ビーディゼでも苦戦必須だろう。ヴァーリにすら届くだろう。イッサーですら乳技を発動させなければ確実に敗北するだろう。

だが、ナイアルにはそこまでの連携でも通用しなかった。

「お、やるう！俺じゃあ本気出すまでもねえけどな!!」

一瞬で大量の打撃が、わざとこちらの攻撃を横から当てて逸らしながら放たれる。

その片手だけでもガトリングガン並みの連発速度で放たれる拳が、容赦なく井草とピスを滅多打ちにして、弾き飛ばす。

「んじゃあ、そろそろ一人くたばってくれや!!」

その言葉とともに、ナイアルは一丁のライフルを井草に向ける。

「ムートライフル!! くだばれヤア!!」

そして放たれた射撃は、むしろ砲撃と言っても過言ではない。

絶大なオーラの本流は、魔王クラスの威力を込められていた。

直撃すれば戦闘不能は免れない。

それを井草は意地で回避しようとするが、打撃の衝撃で体が思うように動かない。

そしてピスも打撃の衝撃で即座に動く事はできず、ゆえに砲撃は直撃する。

「……井草!!」

—横からかつさろう、新しい増援がなければ。

「五十鈴!?!」

「五十鈴ちゃん!?!」

ハストウールイーツと化した五十鈴の姿を認めて、二人は驚いた。

既に彼女の体はボロボロだ。本人が言った通り、薬があつても十年持たず、薬がろく
にない現状では一月が限界だろう。

そんな状態でイーツに変身する。悪影響が普通に懸念される状態だ。

それをすぐに止めようとして—

「デュリオ・ジュズアルド!」

「ああ!!」

その井草とピスに、虹色の希望が触れる。

そして怒気を鎮静化させた井草とピスを見て、五十鈴は心からほっとした。

二人に怒りに吞まれる姿は似合わない。少なくとも、五十鈴としてはもっと違った二人が見たい。

だから、それにほっとしながら五十鈴は微笑んだ。

「まったくもう。井草もピス姉さんも、普段激怒しない分怒ると手が付けられないんだから」

そう言いながら肩をすくめると、五十鈴はナイアルに向き直る。

顔はできるだけ見せない。

イーツの状態なら、まあ表情を判断する事はできないだろう。だがしかし気分の問題だ。勘付かたたくないなら顔を見られたくないだろう。

今、自分は笑ってるだろうか？ それとも泣いているだろうか？

自分でも、よく分からない。

死ぬのが怖くて怖くて堪らない。何とか自分の心すら取り繕っていたのに、ピスの追撃と井草の抱擁の所為でそれができなくなってしまった。

死にたくない。生きていたい。出来る事なら、人生をやり直したい。

だが、それは叶わない夢だ。

ならせめて、井草達の為に死のう。

そんな気持ちだが、自然と湧いてくる。

死ぬのは怖いはまだ。気を抜けば震えてしまいそうだ。

だけど、戦える。

「五十鈴……その」

「大丈夫、なのお？」

不安げな二人の声を聴いて、五十鈴はあえて胸を張った。

「大丈夫じゃないけど、大丈夫よ!!」

そしてまっすぐに、ナイアルに向かって指を突きつける。

「ナイアル!! 悪いけど、あんたには一発かまさないと気が済まないわ!! ここで、ぶちのめす!!」

それと同時に放たれるオーラに、誰もが一瞬目を奪われる。

そのオーラは、最上級悪魔クラスなどというレベルではない。魔王クラスを超えて、神クラスの領域に届いていた。

その絶大なオーラを前に、ナイアルは呆れ半分の表情を浮かべる。

「おいおい、薬を過剰服用したのかよ。……効果が切れるの滅茶苦茶早いし、何より切れたらすぐ死ぬぜ？」

「!!!!!!!!!!!!!!」

その言葉に誰もが驚く中、五十鈴は何を言っているんだとばかりに、鼻で笑う。

「はんっ！ どうせ死ぬなら少し位かっこつけて死にたいだけよ。だってそうでしょう？」

そして、その視線がちらりと井草に向けられる。

もう想いが色々とばれてしまった彼。

その思いが成就する事はないけれど、それでも受け止めようとしてくれた事には感謝している。

枢五十鈴は、井草・ダウンフォールが大好きだ。

枢五十鈴は、行人伊予のことを友達だと思っている。

枢五十鈴は、ピス・ダウンフォールを姉のように慕っている。

そこに嘘は何もない。それをちゃんと思い出している。心の中にあつた事を、今ならしっかりと断言できる。

くだらない嫉妬も、しょうもない見栄も。

今は全てを投げ捨てて戦おう。

「死ぬ時ぐらい、好きな男の前でかっこつけたいのよ」

そして、はつきりこの場で言つてやろう。

きつとスカツとする。恥ずかしいが、それ以上に気持ちいいはずだ。

死に花ぐらい派手に咲かせよう。

そう、はつきりと断言する。

「枢五十鈴は井草・ダウンフォールのことを愛してる!! だから、井草の為に死んであげるわ!!」

そして、その僅かな時間で隙は十分に作れた。

「くたばりなさい、ナイアル!!」

その言葉と共に、最後の圧縮を加速させる。

そして加速された大気圧縮は、一気にプラスマ球を形成。一斉にナイアルに向かって突撃する。

一発一発が核攻撃クラス。それが外連味を聞かせて合計13発。

一発一発が神にすら痛打を与える威力を、神滅具一セット分叩き込んだ。

発生する大爆発。それを、観客達は目に焼き付ける。

トップランカー同士のレーティングゲームでもそうは見ない大破壊。結界がなければ、自分達も巻き込まれていただろう。

こんなものを喰らえばただでは済まない。少なくとも、神にも届くと思わせる攻撃だった。

誰もが度肝を抜かれているだろうと思う、そんな時だ。

「ふむ、命の灯は消える寸前が最も美しいか。確かにな」

そう簡単の声を漏らすは、ビルデ・グラシヤラボラス・サタン。

心から感心するその男に、焦りの色は見えなかった。

そして、それに懸念の声を誰かが漏らすより早く、五十鈴は頷いた。

「まあ、文字通り決死モードだし？ そりゃ生存諦めてるからその分輝くわよ」

何の気負いも無しに告げる五十鈴の言葉に、ビルデも頷く。

「見事だ。推定E Eレベルは7，0といったところか。もはや生半な神や魔王なら力押しだけでも勝ちの目は大きいだろう」

そう告げるビルデは、しかし憐れみをその顔に浮かべる。

そして、それを当然の如く五十鈴も肩をすくめて受け入れる。

その意味が分からない大衆の前で、ビルデは言い切った。

「だが、0，5の差は大きいな。……なあ、ナイアル殿」

その言葉と共に、プラズマ爆発の余波が吹き飛ばされる。

灼熱が粉々になる。光熱が拳で碎かれる。命を燃やして生み出されたプラズマが、拳によつて粉碎される。

そして、それをなしたナイアルは、一歩前に踏み出しながら、はつきりと告げた。

「効かねえなあ。ああ、お前じゃ俺には、勝てねえよ」

その言葉と共に、ナイアルは初めて腰を落とす――

「ええ、そんなの分かつてたわよ」

その瞬間、五十鈴の声が途切れると同時に間合いに踏み込んだ。

まるで駒送りでもしたかのように、一瞬で間合いに踏み込んだ。

それに対して五十鈴は反応して防御態勢をとるが、しかしナイアルは意に介さない。

そのガードを強引に押し飛ばし、拳で五十鈴を吹き飛ばす。

五十鈴もまた、大気流を操作したジェット噴射で強引に速度を殺すが、しかし殺しきれず壁に叩き付けられる。

そして、その瞬間に数百の竜巻がナイアルを取り囲んだ。

「甘いって」

裏拳でかき消される。

その瞬間、相転移現象で形成された固体化した大気の剣を持って、五十鈴はナイアルの間合いに踏み込んだ。

そして超高速で周囲を移動しながら、連続で切りかかる。

だが届かない。

ナイアルは足裁きと平手でそれを全ていなす。

「いや、流石に最高速度とかじゃ負けるぜ？ 俺、パワー特化型のアウトターとデフォルトだよ？」

そう告げるナイアルは、しかし余裕だった。

油断では断じてない。必要なレベルの警戒心を持ち、しかしその上で何があっても対応できる余力を残したまま対応する。真正正銘の余裕。

それは全て技術によるものだ。

ステップと重心移動。更に動きの無駄の少なさで、ナイアルは五十鈴の高速起動に完全に対応している。

EEレベルは7，5を超えるのは、ムートロンでも27人いる。そして、ナイアルは序列でいうなら20位だ。しかしEEレベルは7，5である。

自分と同レベルのEEレベルの持ち主があと最低七人いる状況下で、彼が20位なのはそれだけの技量を持ち合わせているからに他ならない。

その優れた技量が、枢五十鈴と自分の間にある断絶を更に深くしている。

それら全ての差からくる余裕が、ナイアルに危機意識を抱かせていない。

他のメンバーが動けないのはそれに気づいているからだ。

ビルデとその眷属が動く可能性もある。そしてそれを潜り抜けたとしても即座に迎撃される。下手をすればピンボールのように五十鈴に向けて弾き飛ばされる可能性がある。ある。

だから、動きたくても動けない。

そもそも、大半の者達が五十鈴と連携を取れない。

彼女の動きに連携を取るだけの経験がない。だから、迂闊に入れば邪魔になる事が分かっている。

だから、五十鈴の戦いを見守るだけしかできず――

「五十鈴!!」

—それができる者が、二人だけいた。

戦闘の連携など初めてだ。五十鈴の戦い方など把握できてはいない。

だが、彼女のリズムは、生き方は、その癖は分かっている。

だからこそ、井草・ダウンフォールとピス・ダウンフォールの二人の墮天使は連携をおこなうことができた。

明確なタイミングで井草はトールセイバーを構えて突撃し、ピスは牽制の砲撃を放つ。

それをナイアルは、しかし迎撃する。

何らかのタイミングで攻撃密度が増える事だけは分かっていた。このまままだ舞って指をくわえて見ているだけの連中ばかりじゃない事は分かっていた。その筆頭候補が井草である事も分かっていた。

だから、その攻撃すら捌き切る。

しかし、そこから連携は追加される。

「……井草あつ!」

「五十鈴……っ!」

その瞬間、井草と五十鈴は共にトールセイバーを取った。

五十鈴は知っている。トールセイバーは井草の持つ最大火力であり、莫大な雷撃を纏うという事を。

井草は知っている。ハストウィルイツは大気操作能力を保有し、その応用で雷すら放てるという事を。

そして、二人は知っている。

「……閃光オパールロード・メモリーズの超人、発動お!!」

ピス・ダウンフォールという女性は、必ず自分達を助けてくれるという事を。

その瞬間、ナイアルの腕はピスによって掴まれた。

「マジか!？」

ナイアルの表情が初めて危険性を認識したそれになる。

閃光の超人。それはピスが委嘱した神器の一つ。

能力は一分間に限定して身体能力を大幅に向上させるというもの。ピスが使用すれば、そのポテンシャルはヴァーリすら手も足も出ない。彼女を「限定条件下で墮天使最強」に高める奥の手中の奥の手。

この瞬間、その力が一分間だけナイアルに拮抗させる。

「やっぱやばいと思ってたんだよ、ほんと!!」

「その時殺さなかった事を悔やみなさあ!!」

ワンハンドシエクデスマッチを敢行しながら、ナイアルとピスは吠える。奇しくも、二人は同じ失態を悔いていた。

度合いは違う。方向性も違う。だがしかし、その出来事は同じだ。

井草・ダウンフオールがレセプターイーツになるあの日、お互いがお互いにあの場で相手を殺しておかなかった事は失敗だった。

むろん、ナイアルからしてみればまだ勝ち目は十分にある。

なにせ閃光の超人は一分間しか連続使用ができない。短時間でインターバルを挟めばまた別だが、それでも回復速度の関係から言って一時間も使えるような代物ではない。

だがしかし、この大技のチャージ中に一分間も足止めされるのは流石にまずい。

「は！ な！ せっ！」

「い！ や！ よお!!」

このままいけば一分間ぐらいは持ち応えられる。というより、数十分は凌げるだろう。

だがそれでは意味がない。それでは駄目なのだ。

だからナイアルは全力を出して殴り飛ばし――

「……はい、一分経過あ」

―ピスによって、それが時間切れである事を思い知らされる。

とっさにナイアルは回避を選択しようとし―

「おっと、させられないね」

その瞬間、足下が凍り付いた。

「俺も事情は知ってるからさ。墮天しそうならいには結構イラついてるんだよねえ……っ」

その視線の先には、怒りの表情を浮かべたデュリオ・ジユズアルドの姿があった。

「じよおおおおおかああああああああああ!!」

そして吠えるが、それがいけなかった。

「ナイアルうううううううう!!!」

その絶叫に、ナイアルは振り返り―

「く! ら! ええええええええええええ!!」

文字通り主神クラスの全力の一撃を、ナイアルは文字通りもろに喰らい、吹き飛ばされた。

14話

鮮血がほとぼしり、骨が碎ける音が聞こえる。

そして何より、壁に叩き付けられた轟音が、そのダメージを物語っている。

まず間違いなく、明確に。ナイアルは大きなダメージを受けている。

それを確信して、五十鈴は崩れ落ちた。

「……五十鈴!!」

とつさに井草が受け止めるが、しかし五十鈴は首を振る。

「ゴメン。もう、時間切れ」

その言葉と共に変身が解ける。

人間の姿に戻り、そして力も抜ける。

分かり切っていた事だ。何度も聞かされているので、いやというほど知っている。

薬の過剰服用による適正の疑似上昇。その代償は寿命の急激な浪費だと。

もう、五十鈴は時間切れだ。

「五十鈴! 五十鈴しっかり!」

「井草、まだ終わってないわ」

肩を揺すろうとする井草を制し、五十鈴は井草の油断をたしなめる。

そう、まだ戦いは終わってわけではない。

ビルデ・グラシヤラボラス・サタンは健在。彼らの眷属や代理も健在。この時点で難敵が揃っている。

そして何より、ナイアルは終わっていない。

「母体^{リリス}の駒とフェニックスエキスの合わせ技で、フェニックスの涙は作れるの。ナイアルは確実に一つは持つてる」

そう、井草はこれで倒せたつもりかもしれないが、ナイアルはそう甘くはない。

ムートロン先遣艦隊の最高戦力の一角であるナイアルに、フェニックスの涙を渡さない理由はない。そも、あの一撃で戦闘不能になっているとも思えない。まだ続くのだ、戦いは。

五十鈴は最初から命を懸けて、相手の回復リソースを奪う事だけを考えていた。

それすらできるか分からない戦いだ。無駄死にと言われてもおかしくない結果になる事を覚悟した。

だが、井草とピスのおかげで何とか一つは減らせたはずだ。

そして、もう一つの功労者に顔を向ける。

「悪いわね。散々ボコったのに助けてもらっちゃって」

「いや、俺も君のことを見誤っていたからね、お相子だよ」
デュリオ・ジズアルドはそう言うのと苦笑する。

かつて旧魔王派の作戦に関与した時には、殺し合いをした仲だ。

それが二回目に会った時には共闘する事になった。運命とはどういうものなのか不思議なものだ。

そう思うとおかしくなって、五十鈴は苦笑する。

「五十鈴ちゃん……」

そして、ふらつきながらもピスが五十鈴の下に屈み込む。

「……ピス姉さん。井草のこと、お願いね」

「うん。分かっているわあ……分かっているわよ……」

流石に苦しいが言葉を紡ぐと、ピスは涙ぐみながらも頷いた。

彼女には本当に感謝しても足りない。

井草が終わり切らなかつたのは、彼女がいたからだ。彼女が支えてくれたからこそ、なんとかギリギリ踏み留まっていたのだ。

昔からたまにだが面倒を見てくれたピス・ダウンフォール。彼女にそんな顔をさせてしまう事が悲しいが、そんな事を言う権利もないだろう。

「ごめんね。そして、ありがとう」

「うん……うんっ」

ぼろぼろ涙を零すピスに微笑んで、五十鈴は最後の力を振り絞る。

既に視界も暗くなってきた、体に力も入らない。

だが、まだするべき事が残っている。

五十鈴は、何より大事な男に、目を向ける。

「……………五十鈴」

「井草……………」

何も言えなくなっている井草に、五十鈴は微笑んだ。

死ぬのは怖い。覚悟していたが、やはり実際に死が迫ると恐怖を感じてしまう。

何より井草ともう会えないのが悲しい。

やりたいことも色々あった。償わなければならぬ事もたくさんある。出来る事な

らやり直したいと思つた事もいっぱいある。

だが、それもここまでだ。

だから、最後に伝えよう。

愛の言葉ではない。そんな事を言う資格は、間違いなく自分にはない。それに、もう

勢い任せで伝えている。

だから、最後に言う事は――

「伊予、の……こと、まかせた……わよ」

その言葉を何とか言い切ると同時に、意識が一気に暗くなる。

恐怖はある。悲嘆もある。

だが、それでも出来る事は全部やった。

なら、あとは任せよう。

そう、井草のことは大丈夫だ。

井草・ダウンフオールは一人ではない。ピス・ダウンフオールがいる。赤龍帝達仲間

達もたくさんいる。

そして、彼女達がいる。

―任せるわよ、プルガトリオのコンピさん達。

そう脳内で思ったのを最後に、五十鈴の意識は闇の中へと沈んでいった。

「……感動的な場面っていうのかねえ？」

五十鈴が動かなくなつてから、土煙の中から声が響く。

そしてゆつたりとした歩みで、ナイアルは土煙をかき分けて姿を現した。

既に負傷は完全に修復され、ナイアルの手には小さな小瓶が握られている。

五十鈴の推測通り、中身は間違いなくフェニツクスの涙だろう。ゆえに、傷が完全に回復しているはずだ。

そして明らかに不快そうな表情を浮かべ、ナイアルは歯ぎしりすらする。

「まさかイレギュラーに対する保険の俺が、更に保険のフェニツクスの涙を使う事になるとわねえ。こりゃ手柄の一つでも立てないと、流星に始末書じゃ済まねえわな」

そう言いながら頭をかくと、ナイアルは静かに拳を構える。

そこには今までよりも遥かに繊細な意識の使い方がある。間違いなく、ナイアルはこちらに対する警戒の度合いを数段上げている。

「断言しよう。確かに五十鈴の命を捨てた戦いは成果を上げたが、それと同時に難易度を上げていたと。」

本来なら、倒れた五十鈴を無視して追撃を行うぐらいでちょうど良かったのだ。そうであれば、戦闘不能にする事も不可能ではなかったはずだ。

だが、五十鈴は死にピスは戦闘続行が不可能な程に消耗している。井草だつて精神状態は明らかに悪いだろう。リアス達もまた、ビルデ眷属との戦いで消耗している。最強

戦力であろうベルフェゴール眷属も、主神クラスのナイアルが相手では苦戦は必須だ。

反面、ビルデ眷属はまだ余裕を残している。その上フェニックスの涙も何人が持っているか分かったものではない。

このままでは、まずい。

それが分かっているからこそ、ナイアルも真剣ではあるが余裕を残していた。

そして、彼らにはまだ人員でも余裕が残っている。

「伊予！　そろそろお前にも働いてもらおうぜ？」

ナイアルは伊予に戦闘参加を指示する。

実際問題、龍王クラスであるタンニーンに匹敵する火力を持つ伊予は絶大な戦力だ。数の差をしのぐ程の質が集まっているビルデ眷属とナイアルに一人増えるだけでも厄介なのに、この火力は大きな脅威となる。それこそ、十分こちらを全滅させかねない程に。

その事実を理解し、リアス達は齒噛みする。

その様子を見て、ナイアルは得意げに嘲笑う。

そして皆の視線が伊予へと向かい――

「……ホント、俺たちは、ぶつかる相手を間違えたよねえ」

……その自虐的なデュリオの言葉とともに、異常に気が付いた。

「……………伊予？」

ナイアルと井草が同時にぼつりと言葉を漏らす。

そして、その声に、伊予は一切気づかない。

ただ、伊予はプルプルと震えている。五十鈴を見て、周りを見て、そして自分を見て、ぶるぶると震え出す。

その感情が恐怖と絶望である事に気付く者は、多かつた。

「あ……………ああ……………ああああああ……………つ」

力が抜けたかのように膝をつき、変身すら解いた。

そして、その表所を見た井草は愕然とする。

その表情を、井草はよく知っている。

四年前からずっと、井草の人生は大半がその感情と共にあった。それ以外の感情を内心で抱いていた事の方が稀で、余計な揉め事を避ける為に隠す事はあっても、それを捨てる事すら問題だとすら思っていた。

かつての自分が苛まれ、今彼女苛まれている感情。これほどまでに分かり易いモノはないと判断できるだけの、強い感情。

それは――

「……………いめん、なさい」

そう言い合う二人の間に敵意がみなぎり、そしてそれだけで誰も理解する。デュリオが何かしたのだ。

そしてその結果、伊予は戦闘どころか行動すらできる状態ではなくなった。それどころか、正気すら失いかけている。

否、これは――

「正気に、戻った?」

井草はそう思いたかった。

退屈な日常を内心で疎み、非日常を与えてくれたナイアルに傾倒した伊予。それに関してはどこか納得できるし、洗脳をされているのなら、そもそも五十鈴も同じようにされていなければおかしかった。

だが、それでもあの心優しく大人しい少女だった伊予が、そんな風に変貌する事にとこかで違和感を覚えていたのは事実だ。

だから、この反応を見て正気になったと考えたいのが、井草の本音だった。だが、それにしたってなんで急になったのか。

そこを疑問に思い、そして井草はすぐに気が付いた。

「まさか、スベラツァ・ボツラ・ディ・サボネ虹色の希望とかいう?」

「ああ、前に五十鈴ちゃんに使って、見事に空回りしたアレを使ったのさ」

井草の問いに、デュリオはそう答える。

虹色の希望。あらゆる属性を支配する神滅具、ゼニス・テンベスト煌天雷獄の応用で形成されるシャボン玉。

攻撃力そのものは一切ないが、特筆すべきはその特殊性。

触れた相手の精神に作用し、大切な思い出や大切なものを思い出させる作用を持つ。その特性上、激情に吞まれて冷静さを失っている相手を我に返らせるには十分すぎる能力を持ち、無力化においては一定の効果を持つ。

もちろん欠点もある。大切な事や物を思い出させるといふ事は、そもそもない相手や覚えている相手には大した効果が見込めない。それに無人兵器などにも意味はないだろう。

まともな精神の相手が常軌を逸した行動を取っている時には非常に有効ではある。しかし、まともな精神性を持っていない相手や常軌を逸した理屈で動く相手には意味がない。デュリオのいう禁手を使う対象―すなわちろくでなしや人でなしの類―には効かない能力だと言つてもいい。

五十鈴の場合もそうだ。彼女の場合は大切な思い出を思い出しているからこそ悪逆に身を墮としていた。明後日の方向に全力で突っ走っており、その原動力が大切な思い出である井草なのだから、思い出させる力しかない虹色の希望では効果がない。

その為、旧魔王派の大規模作戦の時に使用した際、デュリオはそんな明後日の方向の暴走を想像できず、五十鈴を人でなしの類だと誤解した。当然の判断である。

だが、ゆえにこそイツセーの乳語翻訳バイリンガルで似たような反応をした伊予にも使う事を無駄と判断していた。

「……イツセーどんの乳語翻訳が五十鈴ちゃんに意味があつたのなら、俺の虹色の希望は伊予ちゃんに効果があるかもしれない。だからさつき君達を止める時に、ついでに当たんだよ」

そのデュリオの結果が、これである。

誰もが分かる。誰もが察する。誰もが理解し、想像できる。

……行仁伊予は、何かされたのだ。

「……………ナイアルっ！ 伊予に、一体、何をした!!」

井草はツールセイバーを構え、何時でも伊予に駆け付けられるように踏み込みながら、ナイアルの吠える。

そしてナイアルも面倒くさそうにため息を付きながら、静かにそれをけん制する。

「別に伊予だけにしたわけじゃねえよ。五十鈴にもきちんとしたんだがよ?」

そう返答するナイアルが、しかしそれ以上続けず踏み込もうとした時――

「唾液か何かを飲ませた、といったところでしょうか?」

―声が、響いた。

そこにいたのは、メイド服を着た女性だった。

何故ここにメイドが、などという疑問も出そうだが、戦闘を行っている者達は全員がそれ以上のとある疑問を抱いた。

今この戦闘空間は、特殊な結界によって封じられている。

そして同時に外側では大絶賛神話クラスの戦闘が起きている状態であり、余程の事がなければ戦力はそっちに向けなければいけない状況化である。

そして何より、この結界は転移妨害も兼ねており、特定条件がなければ入る事はできないようになっていいる。

ゆえに疑問の内容を簡潔にまとめるのなら、それは彼女が誰だという事ではない。

どこから入ってきた、この女。

「いや、あんた誰？」

ナイアルの当然の疑問に、メイドは会釈を返す。

「お初にお目にかかります。私は先日までグレモリー家のメイドをしておりました、シアリー・ルキフグスと申します」

「……ルキフグスって、確か現政権にはグレイフィア・ルキフグスしかいないんじゃないかなかったですか？」

ナイアルが言う通りのはずだが、シアリーと名乗ったメイドは、自嘲の笑みを浮かべながら首を横を縦に振る。

「直系はそうです。私は人間との某流で、かつ先祖返りした身ですので、数には入れないでいただきたいく存じます」

「どうやら、色々と大変な事情らしい。」

だが、問題はそこではない。

ナイアルは静かに警戒の色を強くし、攻撃態勢すら取る。

そしてビルデも興味深げな視線を向け、方盾を上げた。

「……それで、シアリーとやら。どうやってこの結界を突破してきたのかね？ 見たところ、上級悪魔に届くかどうか程度の魔力だが、それではこの結界を通る事はできないだろう」

当然の疑問だが、シアリーはそれに対して自分の目を指さす。

「私は人間からの先祖返りです。……敵にはこれで十分でしょう」

「なるほど。神セイクリッド・ギア器か」

その一言で得心が言ったのか、ビルデは頷く。

それで十分と判断したのか、シアリーは視線をナイアルに戻した。

「それでは、答え合わせと行きましようか」

「……ああ、言ってみろよ」

ナイアルの返答を受けて、シアリーは指を一本立てる。

「まず前提としますが、かつてサーゼクス様と戦った時に、貴方は「クトウルフイーツ」と「クイーンアントイーツ」の二つの力を使いました。そして、その前にサーゼクス様と戦ったナイファアザーという人は「バイアクヘーイーツ」と「フェニックスイーツ」の二つのイーツを使いました」

その通りだ。それについてはよく知っている者も多い。

そしてその前提とまず掲げ、シアリーは続ける。

「以上の事から、ムートロンの戦闘員には二種類のイーツを併用できる者がいる事が推測できます。また枢五十鈴嬢の提供なされた情報で、ムートロンの一部メンバーには「デフォルトイーツ」という、人の姿のままでイーツの力をほぼ使える者がいるとか」「やっぱ流されてたか」

これもまた、ナイアルはあっさりとは肯定する。

そして、シアリーは更に続ける。

「そしてイーツの能力は大抵名前前で推測できるのが特徴です。フェニックスイーツなら再生能力、ゲオルグウスイーツなら龍殺しの聖剣の具現化と使用……といった具合に」
そこまで言うてから、シアリーは小首を傾げた。

「では質問なのですが、「クイーンアント」はどのような能力を持っているのでしょうか？」

「……………いいところに気づいたな」

ナイアルは、にたりと嗤った。

それに多くの物が寒気を覚えながら、シアリーは続ける。

「「アント」ではなく「クイーンアント」だというのなら、そこにはただの蟻ではなく女王蟻でなければ保有できない能力があるのでしょうか。具体的には……………」

フェロモン、とか。

15話

フェロモン。

その言葉に、ナイアルは嗤いをより深くする。

そして、その言葉に井草は何か寒気すら感じる。

「……シアリーさん？ それって、どういうう？」

井草の言葉に、シアリーは一瞬だけ目を伏せながら、しかしはつきりと告げる。

「蟻の中には女王蟻のフェロモンを利用してコロニーを形成する種別があります。デフォルトイーツが人間のままでも能力を発揮できるのなら、人間にも効果があるフェロモンを保有している可能性はあるかと」

その言葉に、井草は凍り付く。

井草だけではない。リアス達もまた、その言葉に伊予へと視線を向ける。

「ああ……ああ……ああああああ……」

今でも震えながらうつむきが見込んでいる伊予をいて、正気でないというものもあるだろう。

だが、それを返せばそもそもあの彼女もまた正気とは言い難い。

井草・ダウンフォールから伝え聞く彼女と、リアス達を知る彼女との間には大きな変化がある。

そして、そこから急激に発生したこの変化。

いくらデュリオの虹色の希望で大切なものを思い出したにしろ、ここまでの変化は大きすぎるのではないか。そも、あそこまで変わり果てていて大切なものを思い出しても、その大切なもの自体が変化している方が当然ではないか。

だが――

「因みに蟻のフェロモンは唾液に含まれている事があります。……確か、枢五十鈴嬢はナイアルに迫った時に即座にキスされていたとか」

そうだ。伊予もまた言っていた。

キスをした時に、井草と五十鈴のことを忘れたと。

井草は震えながら、ナイアルに目を向ける。

今ばかりはナイアルに心から願いたいことがあった。

否定してほしい。見当違いだとシアリーを嘲笑ってほしい。馬鹿にしてほしい。

そんな懇願すら視線に込めてしまうほどに動揺した井草の前で、ナイアルはポリポリと頭を掻き――

「まあ、90点ぐらいかねえ」

その瞬間、井草は再びキレた。

「ナイアルうああああああああ!!!」

全身全霊のトールセイバーをたたきつける。

それを、ナイアルは即座に拳をもって迎撃する。

神格クラスの雷撃を纏った斬撃を、側面を殴るだけでいなすナイアルは、しかし肩をすくめながら首を振る。

「勘違いすんなよ？ 蟻と人間じゃあいろいろ性能が違う。俺のフェロモンは酒に酔わすよりは効果靦面だが、麻薬みたいに人格を崩壊させるには一歩足りねえ」

そして、飽きたのか井草を殴り飛ばすと、即座にムートウエポンによる攻撃を放つ。

それを光の槍で迎撃する井草に、今度はナイアルが接近戦を仕掛ける。

「だから、突き落とせる相手を見つけないと必要なんだよ。……具体的には、現状に不満を持っていて、そいつの現状の反対側に俺らがいるやつとかがいい」

そしてボディブローを叩き込み、井草を壁にたたきつけると、その顔面にケリを叩き込む。

「そういう意味じゃあ、むしろ素面になれた伊予と五十鈴はすげえわなあ。普通はここまで落ちたら最後まで落ちっぱなしじゃぜ？」

「ふざ……けるなあああああ!!!」

心からの関心が込められたナイアルのセリフに、井草は激情とともに魔力を全方位に放つ。

取り込んだデビルイーツの力を使い、井草はナイアルを強引に引きはがすと、そのままトールセイバーを振り下ろす。

躲される。薙ぎ払う。

避けられる。振り回す。

当たらない。それでも切りかかる。

「お前が！ お前が！！ お前があ！！」

「いいねえ！ そういう奴とかに突つかからせるのも面白い。たまにやる分には結構楽しいんだよなあ」

そして大降りになった隙につき、ナイアルは井草を殴り飛ばす。

追撃しようとした瞬間、莫大な雷光がほとぼしり、ナイアルはそれを迎撃する。

そして同時に、多様な種類の攻撃がナイアルに向かって放たれる。

「この外道……っ！！ 許しませんわ！！」

憤怒の感情にかられるグレモリー眷属。イツセーのカバーに入っている以外のメンバー全員が、朱乃を筆頭に全力の攻撃を叩き込む。

ロイガンの眷属がビルデの眷属をけん制しているからこそできる真似だが、しかしナ

イアルは動揺しない。

冷静にシールドユニットを展開すると、防御フィールドを展開して受け流す。

「いや、マジで結構面白くてついついやりすぎちまうんだよ。ロキの時もアスクってやつ
の女寝とつたときに井草と同じまねしててな？」

アスク。その言葉にバアル眷属もグレモリー眷属も思い出す。

たしか、ロキと共に襲撃を仕掛けてきたイーツ使いの1人だ。

ロキがどうやって詳細なエポリューションエキスの技術を入手したのかは疑問だった。思わぬところからその答えが出てきてしまったものだ。

そして、それだけにさらに怒りに燃え上がる。

それに気づいたのか、ナイアルは少しだけ驚いた表情を見せる。

「敵の強化しちまったのは悪かったな。ま、迎撃戦力は俺が送り込んだからそこは許してくれや」

そうにつかり笑って片手を上げて謝るナイアルの左右を、祐斗とゼノヴィアが挟み込む。

「そういう……問題だと——」

「——思っているところが!!」

聖魔剣とエクス・デュランダルの一撃を、ナイアルは左右同時に放ったジャブで弾き

飛ばす。

そこに大量の聖剣の龍騎士が多しかかるが、その瞬間ナイアルの周囲に蟻を模した怪人が同数現れ、それを一瞬で粉碎する。

「クイーンアントイーツのもう一つの能力だ。一部のイーツにやあレベル2つていう次があるんだよ。俺とかそちらの助っ人三人が、それな？」

そう茶化して言うナイアルに、二人はさらに切りかかる。

「罪もない少女を、それも思い人のいる少女を!!」

「外道が!! 井草さんのためにも、お前はここで切り殺す!!」

怒りに燃える祐斗とゼノヴィアの剣がオーラを放つ。

だが、それはまったく同質のオーラが横から飛んできたことで相殺された。

「ふむ、まあ趣味がいいとはいいがたいがな」

そのオーラを放ったのは、コピーイーツと化したビルデ。

その両手には、消えていく聖魔剣とエクス・デュランダルの姿があった。

あまりの事態に目を見開く二人に、ビルデはさほど得意げにもならない。

「……コピーイーツは本来こう使うのだ。まあ、材料と現物無しでは陽炎しか作れんのだがな」

そう告げるナイアルに意識を取られた瞬間、ナイアルが拳をふるう。

そして、それによって生まれた衝撃波が二人のあばらを砕き、弾き飛ばした。

「こんなもんか。じゃ、そろそろ終わらせるかねえ？」

そして、起き上がろうとする井草に向けてムートライフルを構え――

「じゃ、五十鈴の後を追いかけな!!」

――躊躇なく、引き金を引いた。

起き上がろうとする。間に合わない。

相打ちを狙おうとする。そんな余裕はない。

つまりは、詰んだ。

井草は冷静にそれを認識する。

もはや心の中には絶望しかない。

目の前の男が許せない。殺せるものなら殺してやりたい。その為なら命ぐらい捧げてもいいとすら思う。

だが、それができない事もかろうじて自覚している。

そうだ。それではニングとリムが悲しんでしまう。

伊予通と五十鈴去だけではないのだ。井草にはニング現とリム在もあり、そしてこれから《未来》に繋がっているのだから。

だから、ここで死ぬわけにはいかない。なんとしても、生きなければならない。

だが、それも届かない。

激情にかられすぎた。その所為で痛烈な一撃をもらった。

主神クラスに匹敵するナイアルの拳は、最上級クラスに届く井草にとつても致命傷寸前だ。ダメージが大きすぎて動く事ができない。此処から一撃もらえば確実に死ぬ。

それだけの威力の攻撃で、しかし躲す余裕がない。防ぐ事もできない。

詰みだ。井草・ダウンフォールは、既に詰んでいる。

許せない男が目の前にいる。その男の所為で大切な過去が傷つけられた。そして、その男に殺される事で大事な人達が曇ってしまう。

分かっているのに。しかし届かない。

「……………ちく、しょう」

最後の最後で、八つ当たり気味にそれだけ振り絞る。

そして、せめてこの男の心まで屈してなるものかと、最後の意地で井草はナイアルを睨みつける。

放たれる砲撃越しにその殺意の籠った視線を向け――

「そこは「ゴメン」とかの方が嬉しかったですよ」

「まったくですねえ。井草は空気を読んでくれねえですぜ」

――振るわれた斬撃が、その砲撃を十字で切り裂き、

「まあまあ。その辺にしておいてあげなさい」

「その通りだ。井草がそう言いたくなるぐらいには、この男はあまりに外道だからな」
大量の光が、ナイアルを叩きのめした。

その光景に、井草は目をぼかんとするほかなかった。

声の主は分かる。ニングとリムだ。ついでといわんばかりにナイアルを吹き飛ばしたの、バラキエルとミカエルである。

だが、問題はその姿だ。

バラキエルとミカエルは問題ない。問題なのはニングとリムである。

なんとというか、強化外骨格とでもいうべき鎧に包まれていて、二人の顔が見えない。

近未来的なワードスーツと言った方がいいのだろうか？ とにかく、なんかファンタジーバトル作品的な今の現状と合致していない。

なので、井草は一応聞いてみた。

「えつと……リムにニング？」

「はいなのです」

「持ちですぜ♪」

そう言いながら、二人は頭部のアーマーを解除する。

確かにそうだ。よく見覚えのある二人の顔だ。

だが、だからこそ聞きたい。

「……何それ？」

その言葉に答えるのは、バラキエルだった。

「新兵器だ。枢五十鈴のおかげで間に合った、我々の切り札さ」

その言葉に真つ先に反応したのは、ナイアルだ。

ナイアルは目を見開くと、起き上がるのも一瞬忘れて冷や汗を流す。

五十鈴が何かしらの横流しをしていたのは気づいていた。おそらくエボリユーションエキスだとも思っていた。

だが、まさか――

「疑似的なイーツなのか、それは!？」

「その通りです。人工神器技術と併用して、完成に漕ぎ付けました」

そう告げるミカエルは、光の剣を具現化しながらにつこりとナイアルにはほほ笑んだ。

味方によつては慈愛の微笑みだが、誰がどう見ても皮肉でしかなかった。

実際そうだろう。相当の激情に駆られていたのか、一瞬だけ翼が黒くなりかけていた。

「人工神器技術を併用して開発した、イミテーションイーツ「ジエーム」だ」

バラキエルはそう告げると、殺意を込めた視線を叩き付ける。

「外道が。朱乃の目の前で井草を使って最低最悪の余興をした報いを受けてもらうぞ」

「同感です。我らが主は裁きも担当します。今日は私が代行いたしましょう」

相当の怒りを覚えているのか、絶対零度の視線をバラキエルとミカエルはナイアルに向ける。

そして、そこにロイガンもまた並び立った。

「じゃあ手伝わせてもらうわ。……ゲームをこんな外道に悪辣な穢され方をされたら、私も黙っていられないもの」

魔王クラス三人による、怒りによる同盟成立。

和平を結んだ三大勢力という、ムートロン最大級の敵の代名詞レベルに、流石のナイアルも頬を引くつかせた。

「待ってください！ そいつは、俺がー」

井草はそういつて割って入ろうとするが、しかしバラキエルは手で制する。

「……今の君では勝てん。此処は私たちに任せたまえ」

「だけど！ あいつは五十鈴を死に追いやって、伊予も!!」

当然井草は食い下がる。当たり前だ。

大事なものを汚され、そして目の前の男のせいで死んでしまった。

それ相応の報いを与えなければ、我慢できない。

勝てないのは分かっている。だが、それとこれとは別なのだ。

そんな井草の渾身の言葉に、バラキエルはしかし首を振る。

「井草。お前は一つ勘違いしている」

「役に立たないのは分かっています!! だけど、だけどこで動かなかつたら、俺は俺を一生許せない!!」

井草はふらつきながらも、それでも食い下がる。

「あの……井草」

「五十鈴の想いに気づかず、五十鈴を追い詰めて、そして結局彼女を救えなかつた!!」

「そ、その……ね?」

「お願いします!! もう肉の盾でも何でもいいから貢献させてください!! 絶対死にませんから、ニングとリムが悲しむし!!」

「井草? その決意は……いいんだけど……」

「お願いです!! 俺に、俺に五十鈴の仇を討たせてください!!」

後ろで何か聞こえるが、しかし耳に入らない。

なんとしても食い下がろうとする井草は、目の前でナイアルが目を見開いていることにも気づかない。

というか、もう空気がそんな状態でないことに、井草だけが気づいてない。

「一発入れさせろとは言わない。一発入れるまでのフアクターに入れてくれるだけでいい!! だから、俺に、五十鈴の、仇を!!」

「井草あ、ちよつと?」

「あの、井草さん?」

「お〜い、井草〜?」

「ピス姉さんもニングもりムも!! お願いだからせめて貢献をさせてくれ!!」

愛すべき三人に声をかけられるし、彼女たちを悲しませたくない者事実だ。

だがしかし、それでもせめてひとかけらでも刻み込みみたいことがある。

「五十鈴の仇討ちも何もできなかったら、伊予を汚したアイツに何かかきなけりや、俺は俺が幸せになることを認められない!! 五十鈴に何か貢献させてくれ!!」

「あの、井草さん! ちよつと大きな問題が!!」

「井草さん。それ以上言うと後で自分が恥ずかしくなるぞ!!」

「井草先輩! あの、周りを見てください!!」

「……現在進行形で大恥です」

なぜか焦っている悠斗を筆頭に、ゼノヴィアもギヤスパーの小猫も井草を止める。

「気持ちわかるけど、それ以上は言わない方がいいですわ!!」

「いや、その……すつごくありがたんだけどね？」

そこには一人の二十歳の女性が、顔を赤くして立っていた。

もはや表情は泣き笑いというか、すごく複雑である。

嬉しいのだが恥ずかしい。そもそも凄くいたたまれない。なんていうか謝りたくて堪らない。

そんな表情で

「……死にぞこないました。……ごめんなさい」

――樞五十鈴が井草に謝った。

確かに大恥である。

生きている五十鈴の仇を討ちたいなどと、もはや泣きわめく一步手前のレベルで言っていたのだ。

それも、五十鈴の目の前で。

もはやコントである。新喜劇である

「…………ちよつと待つて？　ねえ、ちよつと待つて？」

そりやそうだろう。

この流れはおかしい。

「あの、ナイアル？　過剰服用で死ぬとか言つてなかった？」

思わずナイアルに真剣に訪ねてしまった。もはや別の意味で冷静さを失っている。

そしてナイアルもぶんぶんと首を横に振った。あり得ないと言いたげな表情に、此方も想定外であるという事がよく分かる。

「いや死ぬぞ!?　間違いなく死ぬぞ!?　それぐらい強化されてたぞ!?」

ナイアルも想定外らしい。かなり驚いている。

「ど、どどどどという事ですかこれえ!？」

もはや誰に言うべきか分からず、井草は絶叫するしかなかった。

「ふむ、最初から説明しよう」

と、バラキエルがコホンと咳払いしてから告げる。

「簡単に言えばこういう事だ。……アザゼルはこれを予期していた」

と、真つ先に告げる。

「捕捉しましょう。アザゼル総督はナイアルのクイーンアントイツの能力と、枢五十鈴と行仁伊予の極度の寿命の削減を推測していました。その為、推測時点で対抗策の研究をしていたのです」

シアリーがそう補足して、そしてタブレットを取り出すとそこに映像を浮かべる。

そこには悪魔イヴイル・ピースの駒の強化案といえる、設計図のようなものが書かれている。

「アザゼル総督は悪魔の駒による人間の寿命の拡大に目を付け、駒をそれに特化して再調整する事を提案。二人の体細胞を入手して、駒を専用調整しました」

そして、五十鈴の肩に手を置く。

「変異の駒の機能を二つ組み合わせてですが、これにより寿命の拡大を強制させました。……なにぶん初のケースですので今後の検査などは必須ですが、当面は大丈夫です」

そして、はつきり井草に告げた。

「当面寿命では死にません。これに関しては確約いたします」

井草は脱力して崩れ落ちた。

もはや笑う気にもなれない。

なんというか、凄く精神的に疲れている。一瞬本気で帰って寝たくなつた。

「まあ、現存の悪魔の駒の流用によるテスト段階ですので色々ロスは多いですが。変異の駒化させたうえで二駒使用して漸く足りるというのも問題ですね」

シアリーがそう言いながら肩をすくめると、ニングもまた苦笑する。

「騎士の駒を二駒使つたのです。変異の駒化させて調整してこれなのは大変だったのですよ」

「いや、それだけの価値があつてほしいですなあ、こりやあ」

と、リムが笑いながらばんばんと五十鈴の背中を叩く。

それを甘んじて受けながらも、五十鈴は井草に申し訳ないやら同情するやらの視線を向けるだけで、何も言えない。

というより、事実上、こつちも恥ずかしさのあまり死にそうなのだろう。

完全に死んだつもりだったら、気が付いたら井草が激昂してナイアルに殴られているところを目の当たりにした。

で、井草は井草で五十鈴に対する胸の内を告白しながら、仇討ちをしたいと吠えている。

これは色々な意味で恥ずかしい。

「で、でもなんで……既存の駒で？」

井草はそこが気になった。

態々既存の駒を改良する方針で行かなくても、新しく設計した方が安上がりかつ効率も良いと思える。

その答えを告げたのはニングだ。

「それは私の眷属にするからなのです。既存の駒をベースにしないと、レーティングゲームに参加させられないのですよ？」

きよとんとそう告げるニングだが、そこにツツコミが重なった。

「いやなんで？」

井草と五十鈴の同時ツツコミである。

ニングがルシファーを受け入れる事は知っている。そうなれば、15個の悪魔の駒を手にする事も想定できる。これはいい。

だが、態々五十鈴を眷属悪魔にする意味が分からない。

井草の為なのは分かる。だが、彼女を眷属悪魔にする事はデメリットが大きいだろ

う。

ムートロンの精銳戦力であつた過去は大きい。それまでに、理由はともかく自分の意志でテロをしていた罪も重い。そんな彼女を眷属悪魔にすれば、ニングの将来に負担があるのは明白だ。

だから、それが分からない。

しかし、ニングは微笑むと静かに首を振る。

「当然なのです。しっかりと働いてしっかりと出世してしっかりとお金を稼がなければ、賠償金が払えないのですよ」

そう告げるニングは、一枚の紙を見せつけた。

そこには、日本円換算でも一千万に届く桁の金額が書かれていた。ちなみに\$になつており、百倍ぐらいになるはずだ。

「賠償金はいったん神の子を見張る者が立て替えてくれたのです。無利子だそうなので、一生懸命働いて返すのです。とりあえず、シアリーさんのところでメイド業務に参加してもらおうのですよ」

「要領が良い事は窺つております。研修期間は一か月で、魔王末裔直属のメイド部隊という事で、月給はこれぐらいになります」

と、シアリーが示した額を見て、五十鈴は眼を見開いた。

「……日給二万円相当!? 高くない!?!」

「真なるルシファアの末裔にお仕えするメイドとしてはむしろ安いでしょう。ちなみに給金の九割は賠償金の返済に充てる契約ですので、一日に使えるお金は二万円相当ですが、そこはご容赦ください」

度肝を抜かれる五十鈴に、シアリーはそうさりと告げる。

つまりお小遣い有りである。逆にドン引きするレベルだ。

「因みにこれは最低賃金です。今後の仕事の成果や悪魔としての昇格などで更に給金は増える事を約束しますが、元テロリストという立場なので昇格難易度は大きい事を理解しなさい」

それでも十分すぎるとしか言いようがない。

10億円以上の賠償金を請求されているが、一日に18000円近い金額を悪魔が弁償するのなら、十分返せる宛てはある。

だいたい152年もあれば返済可能だ。悪魔の寿命なら十分余裕の年数である。

流石に電卓がない状況下でそこまで計算はできていないが、それでも生きている間に返せる可能性がある事には五十鈴も気づいた。

その視線が向けられたニングは、にっこりとほほ笑む。

「ボーナスは全額返済に充てますが、生活費は事実上の寮暮らしなのでサービスなので

す」

「ちなみに、井草達がおたくに何か買つてやる分には何も言いませんぜ？　あ、なんならたまに奢つてやつてもいいですけど、後輩転生悪魔の枢五十鈴さん？」

そういつて、リムは悪魔の翼を生やしてにやにや笑う。

どうやら既に転生していたらしい。

そして、それらについて理解が追い付くにつれて、五十鈴は戸惑う。

「な、なんで、そこまでして……」

「別に、貴方だけが特別というわけではないのです」

そう告げると、ニングは周りを見渡して宣言する。

「お初にお目にかかるのです。私はニング・プルガトリオ・ルシファー。正当たるルシファーの血を継ぐ者なのですよ」

その宣言に、観客の悪魔達が目を見張る。

ルシファーと人間の混血たる末裔が見つかった事は、既に知っている者も多かった。

だが、それがこんなところに出てくる事など予想外だろう。

そしてビルデもナイアルも、状況が読めないのか様子見に徹している。

それを好都合とニングは判断。そして一步前に出ると胸に手を当てて言葉を紡ぐ。

「私は象徴としてルシファーになる立場ですが、しかし現状の窮地には心を痛めている

のです。特に、ムートロンを筆頭とする禍の団との闘いで、冥界の民が傷つく事は魔王の血統として看過して良い事ではないのです」

その目を伏せて告げたニングは、静かに首を垂れると、そのままさらに言葉を放つ。

「ゆえに、ルシファアの血を引く者として、対抗策として一つの政策を魔王様に要求し、それは受理されたのです。これはその前座ともいえるのですよ」

そう告げるニングの声に反応するかのようには、シアリーが一枚の大きな羊皮紙を取り出す。

それをシアリーが掲げると同時、リムが魔道具を取り出し、それを神器で強化して、映像として映し出す。

そこに書かれた文字が、大きく浮かび上がった。

懲罰部隊、

D ディアボロス・ダウンフォール・ボトム
D B。

厳選たる審査を潜り抜けた罪人を構成員とする、三大勢力の特殊部隊。

危険任務を引き受けることから、給料は日給二万円から。ただしその九割を損害賠償として費やすことになっている部隊。また、戦闘任務がない状況下では奉仕活動と訓練を日課として過ごす。

そして主な任務はムー同盟と国連所属国家の国境線上の警備や、テロが発生した際の対応などといった危険な任務。

むろん懲罰部隊であるがゆえに脱走防止の為に多数の術式をかける事は前提。任務も危険なものであり、事実上正規軍の弾除けや露払いになるだろう。

だが、所属に関しては辞退の権利を認めている。上記の通り給金はいい。加えて所属と引き換えに罪状は賠償金の支払いになり、所属中は給金から引かれる為自動的にどんどん減っていく。

ついでに言うとう当然の如く一日三食。定期的な健康診断はできるし、金さえ払えるのならゲームを買って遊んでもいいと書かれている。寮の写真も写っているが、プライベートもある程度配慮できる個室が一人一人に与えられている。

ちなみに審査基準も一部示されているが、戦闘能力は低くても中級の上が前提。バアル義勇軍より平均的な実力では上のレベルが最低条件となっている。これならそう簡単には死なないだろう。

井草は心から思った。罪人の待遇じゃない。

「……待遇良すぎない?」

「スウェーデンの刑務所よりは悪いのです。それに事実上の従軍任務なのですよ?」

ニングは井草にそう返すが、それは比較対象が悪いのではないだろうか?

とにかく、そんな懲罰部隊を新たに結成したニングは、ちよつと胸を張る。

その文字を背にしながら、ニングは告げる。

「魔王末裔である私の許可を得た者に限るのですが、実力がある罪人を戦力として運用し、各種敵勢力を倒すための矛にして、民を守る盾として運用する懲罰部隊、
ディアボロス・ダウンプォール・ボトム
 D D B をルシファアの名の下に結成する事を、正式発表前ではあるのです

が、ここに宣言するのです!!」

そう告げるニングは、しかしすぐに照れ臭そうに微笑する。

「……まあ、井草さんの心の傷を癒すのもついでにするのは、ルシファアとしての特権として許してもらいたいのですよ」

その言葉に、井草は全てを理解する。

三大勢力の事を考えてはいる。この政策もその一環でもある。

だが、それだけではない。

井草が五十鈴と伊予のことを心から悔やんでいる事を理解していて、その為にもやったのだ。

いや、それだけではないだろう。

冥界の古い悪魔の都合によって苦しんでいる転生悪魔などに対する配慮もあるのだろう。

……本当に、彼女は優しすぎる。

「ニング、君は、本当に優しすぎるよ」

「これでも厳しくしたつもりなのです。なにせ、死地に罪人を送り込むのですから」

ニングは井草にそう反論し、そして五十鈴に向き直る。

「五十鈴さん。理由はどうかあれ、自分の意志でテロをしたあなたは罪を償うべきなのです」

「ええ、でもこれは……」

まだ戸惑う五十鈴だが、ニングは真つ直ぐ鋭い視線を向けると、五十鈴の手を取る。

「私達がしたのは死刑にせず、払う当てを作る事だけ。きちんと働いて賠償金を払い、償うのです」

そう言い切ったニングは、しかしゆっくりと微笑んだ。

「そして何より、井草さんに償う為にも、生きるのですよ？」

「あ……………っ」

その言葉に五十鈴は震え、井草に視線を向ける。

それが何となくおかしくなって、井草は微笑んだ。

「まあ、テロつつつてもテロリスト同士の潰し合いが殆どでしたからねえ。出なけりや桁が一つぐらい上がってましたぜえ？」

「サーゼクス様達は、事情がある方々には温情をくださるのです。そこに感謝なさるよ
うに」

リムとシアリーがそう告げる中、五十鈴は肩を震わせる。

そして、ニングはしつかりと背を伸ばして五十鈴につけた。

「あなたの命は私がもらうのです。井草・ダウンフォールの為生き、このニング・プルガトリオ・ルシファアの為に戦いなさい。それがあなたの贖罪なのです」

それは、とてもつらくて優しい罰。

それを理解して、五十鈴は涙をこぼしながら跪いて首を垂れる。

「……かしこまりました、お嬢様。この命、井草とあなたの為に捧げます」

その言葉を聞いて、ニングは満面の笑みを浮かべて微笑んだ。

その視線を井草に向け、ちよつと胸を張ってみたりする。

「本妻の面目躍如なのです」

それに、井草は苦笑するほかない。

心からの感謝と安堵、そして一抹の呆れを込めて、井草は微笑んだ。

「参りました、こりや尻に敷かれるなあ」

井草はそういうほか無かつたりする。

その弛緩した空気を引き締めるように、拍手の音が響く。

パチ、パチ、パチ。

パチパチパチパチ。

その二種類の拍手を鳴らすのは、ビルデとナイアルだった。

「感動的……と言っておこう。それに敵に対抗する為の罪人の有効利用、術式による犯行防止ができる我々異形ならではの方法だ」

心からそれだけだと思っているビルデは、そう関心の表情を向ける。

ニングはそれを見て不快気な表情を浮かべると、エクストラカリーバーの切っ先を向ける。

「他に何か言う事はないのですか？ 甘い、とか」

「特にはないな。罪人を利用して民衆や兵士の損耗率を下げる。十分あり得るとも。我々も捕縛した敵を母体リリスの駒の被使用者にしているし、状況次第で奴隷制度の復活も視野に入れていいるからな」

ビルデは素直にそう言う。

そこに疑問も皮肉も何も無い、心から真実だけを言っている。

そう、気づいていないのだ。

ニングが記述してはいないとはいえ、ディアボロス・ダウンフォール・ボトム D D B の選定基準は、五十鈴のケース

を考えればすぐに想像できる。

それは、現冥界の不都合によって発生した被害者の救済の一環と言ってもいい。

五十鈴のように悪意に翻弄されて罪を重ねた者。旧家の悪魔達によつて虐げられ、我慢できず罪を犯してしまつた者。そういった、罪を犯してはいるが、同情の余地がある存在。

そういった者達の力を利用する代わりに、少しでもマシな生活を提供する。そういった目論見があるのだろう。

そんな事、五十鈴を考慮すれば分かる事だ。ただの弾除けでいいのなら、戦闘能力に基準値を設けたりなどしない。弾除けは多い方がいいのだから、雑魚でも何でも用意すればいい。

そこにビルデは気づかない。

そこに、彼の人間性の欠落が確かにあつた。

「私はあなたが嫌いなのです。初代バアルの方ですら皮肉ぐらいは言つたのですよ?」
「そこまで言う事でもないだろうに。この状況下で貴重な貴族を守る肉盾を欲するのは、旧家なら当然ではないか」

ビルデは旧家の頑迷さを皮肉るように笑うが、ニングからすれば彼らはまだまともだ。

正直うつとおしいであろう転生悪魔の、それも主に牙をむく類に温情を与えるなど、本意ではないだろう。

それをニングの機嫌取りと現状の対応策として認可する。あれだけの老獪がいるのなら、サーゼクス達の改革が進まないのも当然だ。

そして、その老害ですら皮肉を返せる程度には即座に気づく事が出来た事に気づかない。

目の前の男は、ある意味で老害以上に冥界の害になりかねない。

「ルシファアの末裔として、貴方を放置する事はできない。……そう確信したのです」「望むところ。こちららも敵対勢力に旧魔王血統がいる事実は看過しづらい」

その言葉と共に、ビルデは立ち上がる。

そして、爪を構え戦闘態勢をとる。

一触即発の状況化に、井草と五十鈴は即座にイーツになりながら庇おうとし――

「そこ、違うのです」

「全くでさあ。此処は私らにまかせなせえ」

――それを追い越して、ニングとリムは前に出ると、ジエームシリーズの装甲を頭部に展開する。

「ニングもリムも！ そいつ、いくら何でもヤバイ!!」

「そうよお嬢様！ ここは私達に――」

井草も五十鈴も即座に止めようとするが、しかしニングは首を振ると、エクストラカ

リバーの切っ先をあらぬ方に向ける。

そして、はつきりと言い放った。

「二人はやる事があるのです。大事なことを忘れてはいけませんのですよ?」

その言葉に、井草も五十鈴も我に返る。

そうだ。なんで忘れていた。

あまりに事態が急転化しすぎて忘れていた。それがあまりにも罪深く、二人は眉すらしかめる。

そう、奇跡が起きた事で忘れていた。五十鈴が救われた事で気を取られていた。

……救わなければならぬのは、もう一人いる。

「行きやがりなさい。目の前の男は、当分こっちで抑えときませぬ」

そのリムの言葉に背を押され、二人は前に入る。

そして、いまだうつむいている行仁伊予の前に立った。

「……伊予」

少し戸惑い、躊躇しながら、二人は同時に伊予の名前を呼ぶ。

その声に、厳密には五十鈴の声に伊予は反応した。

伊予もまた、半狂乱になったことで五十鈴が蘇生したことに気づいていなかった。それに気づく余裕がないほどに、伊予は心から追い詰められていた。

「……五十鈴、ちゃん？」

そして挙げられた顔を見て、井草も五十鈴も肩を震わせる。

その顔は、まるで幽鬼のようだった。

精神的に一気に追い詰められ、強い罪悪感にさいなまれ、そして大切な幼馴染が死に、今まで苦しめてきた事実を思い知って苦しんだ。

それほどまでに、五十鈴はようやく罪悪感という感情を取り戻したのだ。

失っていた理由はわかる。シアリーの言っていたナイアルのフェロモンだろう。

五十鈴も伊予もナイアルのフェロモンを受けていた。そして、それが明確に精神に影響を与えていた。

五十鈴の場合はタガを外すことだろう。理性のタガを緩め、ナイアルが方向を調整する。それによって五十鈴は悪い方向に加速し、その結果があつた悲劇だ。

だが、五十鈴はそれでストレスの類を発散してしまつたのだろう。だから、殺戮による別方向のストレスで正気に戻つた。

伊予の場合は違う。彼女の場合は罪悪感の解放という形で背中を押されたのだろう。

それによって非日常を求める感情が止められなくなり、そしてことを起こしても罪悪感によるストレスがたまらない。そのため、五十鈴と違って殺戮のストレスがたまらず、死の恐怖すら非日常のスパイスとして受け止め、そして行き着いてしまつた。

その果てに、大切なものを見失っていた。目の前の非日常に気を取られ、本当の意味で認識できなかった。

だから、デュリオの虹色の希望を受けて正気に戻ったのだ。

だから苦しい。彼女自身の優しさが取り戻されたから。

だから辛い。彼女は罪悪感を取り戻してしまったから。

そして、だから救える。彼女はまだ、本当の意味ですべてを捨て去ったわけではないのだから。

「五十鈴ちゃん……ごめー」

「私に謝らないで」

五十鈴は、謝ろうとする伊予にピシヤリと断った。

伊予が謝ろうとすることは予想できた。だから、先に先手を打つ。

そこで謝ってしまえば、彼女は自家中毒でまた心を引きこもらせてしまう。

何より、伊予に謝られる資格を五十鈴は持つてない。

「謝らないで。少なくとも、四年前の一件においてあなたは純然たる被害者よ」

そう、ナイアルは「復讐すればいい」と背中を押した共犯者でしかない。計画を立て、井草をそのかし、そして実行に移した計画反にして主犯格は五十鈴なのだ。

五十鈴ははつきりとそういうと、頭を下げる。

「私が勝手に嫉妬して、勝手に逆恨みしたのが悪いの」

「そう、そして俺も悪い」

そして、井草もまた頭を下げる。

「恋愛と性欲の区別もつかず、一時の情欲に任せて君を犯した。俺に、君に謝られる資格はない」

二人は心から頭を下げる。

四年前、三人の関係が崩れるきっかけになったあの一件。行仁伊予だけは、純然たる被害者だった。

ナイアルにかどわかされ、惑わされた伊予は、あの一件において純然たる被害者だ。ナイアルにタガを外され背中を押されたとはいえ、一から十まで計画を練った五十鈴と、その手で転がされたとはいえ、正真正銘伊予をおかした井草に、伊予に謝られる資格はない。

「許してくれなんて言えないのは分かってる」

井草はそれを理解している。

「一生恨まれたって文句は言わない」

五十鈴はそれを痛感している。

「ただ、それでも――」

「でも、もし許してくれるならー」

二人は、その手を伊予に差し出し、ぎこちなく微笑む。

「また、三人で一緒に笑おう?」

「……駄目だよ、それは、駄目だよ」

伊予は震えながら、首を振る。

「何人も殺しちゃった。何人も傷つけちゃった。それも、楽しんで楽しんで楽しんでー」
「それはナイアルのせいでしょ? 少なくとも日^{私たちの国}本じゃ心神喪失で無罪が成立するわう
お……ねえ?」

「まあ、冥界的にはさすがに罰を受ける必要はあるけどさ? そこはほら、ニングやアザ
ゼル先生がいろいろ手をつくしてくれたし……ねえ?」

そういつて五十鈴も井草も顔を見合わせて苦笑すると、かがみこ見込んで、照れ臭そ
うに笑う。

「俺の好きな人が俺のために頑張ってくれたから、俺に悪いと思ってるなら、この手を
取ってくれると嬉しい」

「私に悪いと思ってるならなおさらよ。だって、伊予がひどい目に合うなら私はもつと
ひどい罰を受けないといけないもの。伊予には私より軽い罰を受けてもらわなくちゃ
困るわ」

その言葉に、伊代は肩を震わせて涙を流す。

二人は決して無罪放免を言い渡しに来たわけではない。

罪業はある。それを償うときは必要だ。そして、それはきつとかなり長くなるだろう。

だが、償う方法は提示された。

そのニング・プルガトリオ・ルシファアの手を取ってくれないと、大事な井草と五十鈴が困ってしまう。

だから、手を握ってほしいといつてきた。

ずるい話だ、とてもずるい。

なぜなら、そんなこと言われてしまったら断れない。

二人が大事だと今更ながらに本心から思い出した伊予は、二人が傷つくことを望めない。自分のせいでさらに傷つくなんて、もう最悪だ。絶対に認められないことをしない限り、この手を取らないことはできないのだから。

「……もう。ずるいよ二人とも」

だから、伊予はその手を伸ばし――

「ところがどっこい。そうはいかねえ」

悪鬼はそう簡単に救済を許さない。

「——あつ?」

伸ばした手が、ビクンと震える。

行人伊予は震えだし、そしてエボリューションエキスが起動する。それを見て、ナイアルと包囲していたバラキエルが何かに気づく。

「貴様! まさか読んでいたのか!」

「いや？ ホテツプから二度目を出さねえように指示されただけだよ」
放たれる雷光を全力の拳で弾き飛ばしながら、ナイアルはそう嘯く。

そう、簡単な事だ。

一度失態で情婦の1人に様々なものを持ち逃げされたナイアルは、ホテツ^上プの命令を断れない。

万一二度目が発生した時の為に、緊急用のシステムを情婦に仕込む。その命令に素直に従っただけだ。

「薬の過剰投入と、精神干渉による狂戦士化。まあ、技量は低下するが、元々伊予はぶっぱ専門だから強くなるぜ？ それも、目に映る連中をぶっ殺すだけの戦闘マシーンだ」

その言葉と共に、伊予の変化が完了する。

そこにいるのは、文字通りの灼熱の獣だ。

四肢も胴体も頭部もまさしく獣のそれ。唯一、コアとなっているのか伊予の体が獣の額に磔のように浮き出ている。

それを見て、ナイアルは愉快そうに嗤う。

感動のタイミングを一気に絶望に突き落とす。これは実にする側としては面白い。

「じゃあ、そのまま伊予に殺されとけよ!! 周りの連中は俺が止めるしよお!!」

『クトウルフ』

その瞬間、クトウルフイーツの力を具現化したナイアルは砲撃でバラキエル達を足止めする。

その砲撃は全てが足止めを狙いとした拡散砲撃。そしてそれゆえにバラキエル達は足止めされる。

「……外道め。ここで私達を足止めする気ですか!!」

「まずいわね。これだと彼らのところに向かえない……!」

ミカエルとロイガンが歯噛みするのも当然だ。

ビィディゼ達の妨害で、リアス達は動けない。

イツセーもサイラオーグもヴァーリも倒れ伏している。

暴走状態になった伊予は、おそらく五十鈴が過剰投与したのと同様に7，0のEEレベルだろう。その戦闘能力は神クラスだ。

技量が足りてない暴走状態とはいえど、今の彼女を殺さずに取り押さえられるのは魔王クラスですら難しい。できれば二人ほしいところだ。

それがナイアルによってできない。これは窮地であり――

「……………井草、聞こえるか?」

バラキエルは、何時の間にか冷静さを取り戻していた。

それは、井草の目を一瞬見る事ができたからだ。

「……………うん、まあこうなるよね」

「……………まあ、そりや二度目はないわよね」

井草も五十鈴も、特に動揺はしていなかった。

それどころか、心から納得すらしていた。

「……………おい。普通そこは動揺するだろうか？」

思わずナイアルがツツコミを入れるが、しかし井草も五十鈴も肩をすくめた。

「コラ、その外道。俺達がお前が外道なのにも気づいていないと思つてたの？」

「そんな事だろうと思つてたのよ。仕込みは想定範囲内」

そう告げると、二人は笑みすら浮かべて一歩前が出る。

『レセプター』

『ハストウール』

そしてイーツに変じると共に、むしろ笑みすら浮かべて見せた。

「シンプリイズベストだよ。とりあえず戦闘不能してから処置をする。そこまでの腹はくくつてるさ」

「覚悟はあるわ。蘇生するとはいえ、伊予を一度殺す覚悟は」

そして、胸を張つて吠えた。

天に届けよこの想い。今度こそ自分達は間違えない。

「ナイアル！ 伊予は殺してでも取り戻す!!」

その宣言と共に、二人は突撃を敢行する。

「私達が、今度こそ幼馴染でいる為に!!」

「この戦い、意地でも俺達が勝たせてもらおう!!」

その宣言を受け、誰もが一瞬あつげにとられ―

「……行ってこい、井草!! こいつは私達で足止めする!! ……お前の四年間を、無駄にするな!!」

「はい!! 最高の結末を届けて見せます!!」

バラキエルの激励を受け、井草・ダウンフォールと枢五十鈴は突撃する。

16話

一方その頃、イツセーは意識を取り戻していた。

レイナーレにボコボコにされて意識を飛ばしていた事に気づいたイツセーだが、しかし状況の変化に一瞬戸惑う。

そこは真つ白な空間。

そして、イツセーはその場所を知っている。

ここは、赤龍帝の中の空間。歴代の赤龍帝の残留思念が残っている、思念の空間だ。

「あ、あれ？ こんな事してる暇はないってのに……」

レイナーレに叩きのめされて動揺したが、しかしそんな場合でもない。

意識を取り戻したのならすぐに戦わなければ。今でも仲間達は戦っているはずなのだから。

だが、その時気づいた事がある。

歴代赤龍帝達が、どこか楽しそうな表情を浮かべてイツセーに視線を向けていた。

いつも無表情で無反応で無関心だった歴代の残留思念が、一斉にイツセーに視線を向

けている。

それに一瞬気を取られた時、声が響いた。

『ジャガーノート・ドレイフ
覇 龍 を使うのだ』

その言葉と同時に、映像が映る。

そこには激戦の様子が映し出されたいた。

何時の間にかナイアルまでもが戦いに参加している。そこはいい。

何故か井草にデュリオにバラキエルにミカエルまで参加し、見覚えがあまりない悪魔

や、枢五十鈴までもが戦列に加わっている。

そして、その中で一人の戦士が猛威を振るっていた。

『この程度か！ ルシファーといえど血が薄くては!!』

『クツ！ 井草さんの邪魔はさせないのです!!』

『つつても量産型じゃあ相手になってねえですぞ、ニング!!』

ボロボロになりながらも戦うニングとリムを相手取るは、ビルデ・グラシヤラボラス・

サタン。

それは圧倒的に不利な戦いだ。

覇龍を発動させたヴァーリすら蹂躪したビルデ相手では、二人ではあまりにも荷が重

い。

そして、歴代はそれを見ながら怨嗟のオーラを上げる。

『奴を倒すには覇龍しかあるまい』

『身も心も委ねた覇龍でなければ、奴には届かない……』

その言葉の意味はイツセーも理解できる。

ヴァーリですら覇龍を使つて倒されたのだ。イツセーがビルデに勝つには、それこそ覇龍を使わなければ話にならないだろう。

そして、周りでも仲間達が苦戦を強いられている。

魔王血族を筆頭とするビルデの眷属達によつて、リアス達が血を流しながら戦っている。

リアスはイツセーを庇いながら、その体を傷だらけにしていた。

『覇龍』

『覇龍だ』

『覇龍を使うほかない』

『ああ、それだけが勝機だ』

その言葉と共にオーラが増幅し、イツセーと共鳴する。

「ぐ……ああああ!？」

その瞬間、イツセーの脳裏に憎悪の感情が灯る。

ビルデが、ナイアルが、オギアが、ディナが、ラウバレルが、敵が憎い。

歴代赤龍帝のどす黒い怨嗟の思念がイツセーに流れ込み、兵藤一誠という精神を憎悪で侵食していく。

それを、イツセーは何とか抑え込もうと試みる。

「違う……！ エルシャさんが、ベルザードさんが託してくれたのは、こんな事じゃない……！」

二人は凄まじく別の意味で悲しくなる去り方をしたが、しかし希望に満ちて逝ったのだ。

それは、この赤龍帝の怨念をイツセーが乗り越えると確信したからだ。断じて、飲み込まれる事を察して失意のうちに去ったのではない。

そして、声が聞こえる。

『おっぱいドラゴン！ おっぱいドラゴンー！』

『おっぱいドラゴンが死んじゃうよー!!』

『うわーん!!』

子供達の泣き声に、イツセーは悲しくなる。

子供達は乳龍帝がピンチを乗り越えるところを見て、勇気づけられてきた。その勧善懲悪の物語に、元気づけられてきたのだ。

それがこんなところで無様をさらす、しかも憎悪に飲み込まれそうになっていく。それが悲しくて堪らなく、しかし抵抗が追い付かなくなり――

『泣いちゃダメー!!』

声が、響いた。

『おっぱいドラゴンが言ってたんだ、男の子は、泣いちゃだめだって!!』

その子との事を、思い出した。

『男の子はつらいことや悲しいことがあっても、強くならなくちやいけないって!!』

そうだ、確かあの子は先日のイベントで泣いていた男の子。

スタッフに怒られたが、それでもイツセーは男の子にサインを上げて、そう言ったのだ。

『それで……それで女の子を守れるぐらいに強くならなくちやいけないんだ!!』

そう、そう伝えたのだ。

そして、覇龍に吞まれてはそれはできない。

アーシアが悲しむ。朱乃が悲しむ。小猫が悲しむ。ゼノヴィアが悲しむ。イリナが

悲しむ。レイヴェルが悲しむ。

そして何より、リアスが悲しむ。

見れば、子供達は立ち上がっていた。

『そうだ！ おっぱいドラゴンがあんな奴に泣けるもんかー!!』

「おっぱいどらごーん！ 頑張つてー!」

『ちちりゆうてー!!』

その声が、イツセーに元気をくれる。

こぶしを握る。そして、声が聞こえた。

『そうだよ！ イッセー君は、おっぱいドラゴンはどんな時でも立ち上がつて勝つてきたもの!! だから応援しよう!! 信じよう、みんな!!』

イリナが、泣き出しながらも子供達に、大人達に訴える。

『みんなー！ おっぱいドラゴンは大好きー?』

『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』』』』

イリナに応えるように、子ども達の声が響く。

力を籠める、そして、声が聞こえる。

『私も大好きよ！ スケベすぎてダメダメなところもあるけど、努力して、頑張つて、諦めなくて、大好きな人達の為に戦える人だから!! みんなも知つてるよね!!』

『『『『『『『知つてるー!!』』』』』』』』』』

子供達の声に頷く。そして、声が聞こえる。

『だったら応援するわよ！ イッセー君は、おっぱいドラゴンは色んな世界に人々の為

に頑張ってるんだから、一人ぼっちにしちゃいけないの!! さあ、一緒にい—」
『おっぱい!!』

声は届いた。もう、憎悪には飲み込まれない。

涙すらこぼれる。嬉しさが止まらない。

こんなにも自分を求めてくれる人達がいる。自分を応援してくれる者がいる。自分を信じてくれる人達がいる。

そして、最愛の声が聞こえる。

『そうよね。あなたはいつだってそうだった……』

リアスはボロボロになりながらも、イツセーに微笑みながら立ち上がる。

『みんなあなたを求めている。私もあなたを求めている。だって、私はあなたのことを—』

みなまで言うな。もう大丈夫。

そして、気配が変わったイツセーを見て、歴代の一人が何を勘違いしたのか声をかける。

『さあ、今代よ。霸道極めし霸王となるために、覇龍を—』

「すつこんでろ」

一蹴した。そして、負のオーラを無視して歩き出す。

『—なんだ?』

「子供達の声が聞こえる。みんなの声が聞こえる。そして部長のーリアスの声が聞こえる」

そう、その声は、誰一人として覇など求めていない。

「霸道なんかいらねえ、霸王になんてならない。俺は、ただのスケベで、いやらしい、ハーレム王になる男だからな!!」

その言葉に、歴代達は一様に動揺する。

『何を言う。天龍は霸王になるのが本来の道程だぞ』

「そんでもってみんなを巻き込んで滅びるってか? ごめんだね」

そして、一歩を進む。

しかし一瞬ふらつくが、その手を取る者がいた。

『ふふ。エルシャとベルザードが君に託した気持ち分かる気がするよ』

その声と同時に、憎悪のオーラが文字通り半減する。

イツセーは顔を上げてその顔を見るが、しかし見覚えがない

「……あの、どちら様で?」

『ああ、僕は歴代白龍皇の一人さ。君がヴァーリ・ルシファーから宝玉を奪った時に人格がコピーされたんだ』

なんか凄い事になってきた。

「……………なんか、ごめんなさい?」

なんとなく謝るが、先代白龍皇は微笑んで首を振る。

『いや、良いものが見れた。だから気に力を貸す。僕が怨嗟の念を抑え込んでいるうちに行くんだ』

その言葉に、イツセーは頷いた。

「俺は、おっぱいに救われた。そして、俺はこれからも求め続ける」

そして、イツセーは、振り返る。

「ここに誓うぜ! 俺は、リアスに、仲間達に、子供達に、そして歴代のみんなに、真紅に光り輝く未来を見せる!!」

その言葉に、憎悪の念に包まれていた歴代が動きを止める。

『……………未来、だど?』

面食らった表情になる歴代達に、イツセーは二カツと笑う。

「ああ! 一緒に見ようぜ! 俺と一緒に、みんなと一緒に!! 友達に仲間先輩に、そして子供達と愛する友達に!! 俺達赤龍帝が未来を見せるんだ!!」

そして、イツセーは前を向く。

「……………そうさ、俺達ならできる。行くぜ先輩達!! 俺は、赤龍帝で乳龍帝!! リアス・

グレモリーに惚れたおっぱいドラゴン!! 兵藤一誠だあああああ!!!」

そして、兵藤一誠は飛翔する。

赤き龍の天道を、今こそここに示す為に。

意識が朦朧とする中、それでもサイラオーグは前に進もうとしていた。

苦しい事など何度もあった。血にまみれた事など数えきれない。苦汁を舐めた事など幾多もある。

だが、それでも諦める理由にはならない。

しかし、サイラオーグは動けなかった。

意識すら朦朧で、自分が何でこんな事になっていたのかもよく分からない。

そのまま意識が眠りに落ちそうになり――

――……ラ……ーグ

声が、聞こえた。

聞き覚えのある声で、もう何年も聞いてなかった声だ。

— ……サイラオーグ

それは、母の声だ。

自分という欠陥品を生んでしまったがゆえに、つらい目に遭わせてしまった母。

眠りの病に侵され、何年も眠り続け弱っていった母親。

その声が懐かしくなり、サイラオーグはまどろみの中で微笑みそうになり—

— 立ちなさい、サイラオーグ

声は、厳しくサイラオーグを叱咤した。

その声に、サイラオーグはハツとなる。

— 冥界の未来の為に、自分が味わったものを後世に残さない為に、貴方は拳を握りし

めたのでしょうか？

その声に、サイラオーグは拳を握る。

— 生まれに関わらず、その能力に値する活躍を約束される世界。それを …… 作るの

しように？

そうだ、此処で倒れているわけにはいかない。

目の前には、冥界の未来を暗くする者がいるのだ。

彼らが作る未来を、断じて受け入れられないと思つたはずだ。

そして、声が聞こえる。

『サイラオーグ様を守れ!!』

『そうだ、サイラオーグ様は必ず立ち上がる!!』

『それまで俺達が凌ぐんだ!!』

—共に戦う者達も頑張っています。此処で眠っている暇はありませんよ。

その声に従い、サイラオーグは全身に力を取り戻す。

そして、最後の声が聞こえた。

—頑張るなさい。あなたは、私の自慢の息子なのだから。

その声を生きて聞く為にも、ここで倒れるわけにはいかない。

サイラオーグは立ち上がる。

金剛に輝く大王として、冥界の未来を切り開く為に。

17話

「うおおおおおおお!!!」

ビルデはその時声を聞いた。

否、それは声なんていう生易しいものではない。

闘志に満ちた雄叫びだ。

「ビルデ・グラシヤラボラス・サタン!!」

血まみれになりながら、普通なら死んでもおかしくないダメージを受けながら、しかしヴァーリ・ルシファアとサイラオーグ・バアルは、立ち上がった。

「やられっぱなしは性に合わない。それにニングルシファアがいいところを見せたんだ。ルシファア他もそれなりに意地を通さないとな」

ヴァーリは闘志を燃やしながら、同時にニングに対する対抗心を燃やす。

喪失しかけていた意識で、しかし聞こえていた。

この大一番でとんでもない事をしてかしたニングに、ヴァーリは同じルシファアとして対抗心を燃やす。

少なくとも、ビルデにやられたままでは格好がつかない。ルシファーとして格付けがされてしまう。

「ビルデ！ お前の言う未来に冥界の輝きはない！！ 俺は、母上に誓った未来の為に、お前の好きにはさせん！！」

サイラオグは闘志を燃やしながら、そして決意を新たに決めていた。

母の言葉が聞こえた。母の叱咤激励が聞こえた。

そして、その言葉を聞こえさせるまで頑張ってきた眷属達の戦いも見た。

なればこそ、ここで倒れるという選択肢だけはない。

しかし、それに対してビルデは吠える。

貴様ら程度がそんな事をなそうなど言語道断。千年早いと知るがいい。

「ぬかすがいい！ 貴様らの実力は見切っている。既に負傷し疲労困憊の貴様らでは、私に勝てん」

それは油断ではなく余裕でもなく確信だった。

かつてのサイラオグとの闘いと、ロキと戦ったサイラオグの情報がある。禍の団で調べていた白龍皇の情報と、先ほど一蹴した時のヴァーリとの戦いの感覚がある。

それが全てあれば、相手の実力を測る事は十分だ。

ヴォルズ・ファング・メイル
双狼の神喰鎧の性能と自身の技量があれば負ける事はまずない。

故に警戒こそしているが、それを脅威と認識する事は一切ない。

だが、サイラオグもヴァーリもそれを見て失笑する。

「……なんだ？ 何か失念したかね？」

「ああ、とても大事なことを失念している」

くつくつくとヴァーリはそう笑いながらビルデに答え、そしてサイラオグも肩を震わせる。

ああ、お前は大事なことを何も分かっていない。

あの男を直接拳を交えてないがゆえに、あの男がどういう男かを理解できていないのだ。

「……そろそろ起きろ。俺達の出番だぞ？」

そのサイラオグの言葉と共に、赤が目覚める。

「我、目覚めるは……」

ふらりと、兵藤一誠が立ち上がる。

ふらつきながら、しかし祝詞を上げる。

それを見てビルデは僅かに距離を取ると構え直す。

「ここで赤龍帝が覇龍か！ なるほど、ここまで読んでいたか」

当然覇を使うものだと考えていた。それ以外に手はないと考えていた。

覇を使ったヴァーリすら蹂躪した自分を相手にするなら、彼はヴァーリより弱いからこそ、尚更覇龍を使うほかない。当然の判断であり、普通に考えられる事だった。

「—王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり!!」

ゆえにビルデは瞠目する。

「無限の希望と不滅の夢を抱いて王道を往く」

そう、彼は理解をしていなかった。

「我、紅き龍の帝王と成りて—」

兵藤一誠という男は—

「—汝を真紅に光り輝く天道へと導こうっ!!」

—断じて普通の言葉で片付けていい存在などではない事を。

その祝詞と共に、兵藤一誠の体とリアス・グレモリーの乳が紅に輝く。

そして、その光を浴びた赤龍帝の鎧は生まれ変わっていた。

「イツセー、あなた、その鎧の色は……?」

リアスの言葉に、イツセーは軽く自分の体を確かめる。

そう、その鎧の最大の特徴は、形成色の変化だろう。

赤ではなく紅に変わったその鎧は、まるでリアスの髪の色を映したかのように美しいストロベリーブロンドだった。

「……惚れた女のイメージカラー、か」

「……………え!?!」

ぼつりとつぶやいたイツセーの言葉にリアスが度肝を抜かれるが、そんな事をしてい
る場合でもなかった。

『おい相棒! 大丈夫なのか?! 意識が神器の最奥にまで飛ばされたあげく、怨念達が
濃くなって手が付けられなかったんだが』

ドライグがそう心配する声を上げるが、そこに関しては何の問題もない。

「ああ! 歴代のアルビオンの一人が助けてくれたんだ」

『アルビオンの? 歴代赤龍帝達の怨嗟の呪いが消失して、しかも女王クイーンに昇格している
が』

言われてみて、イツセーは漸く自分が女王に昇格している事に気が付いた。

そんな事をした意識はないのだが、意外な展開ではある。

「いいね。覇を凌駕するどころか克服するとは。俺の宿命のライバルは予想外の塊だ」

ヴァーリはとて嬉しそうに笑うと、イツセーに並び立つ。

カティナル・クリムゾン・プロモーション
「真紅の赫龍帝といったところか。リアスと同じ色だな」

サイラオーグも感心しながら、反対側に並び立つ。

「ヴァーリ、大丈夫なのか？ それにサイラオーグさんも」

二人ともかなりやられていたはずだが、大丈夫なのだろうか。

しかし、そんな心配をされた二人は異口同音に苦笑した。

「こちらのセリフだ」

言われてみれば、イツセー自身ボロボロにされていたのを忘れていた。

なんとなく馬鹿らしくなって、苦笑してしまう。

そして、それを収めると一歩前に出る。

ここではプロテクターに身を包んだニングとリムがビルデと向き合っていた。

プロテクターの性能はそこまで高くないようだ。今のビルデ相手に食い下がったのは心から凄いと思うが、流石に荷が重い。

だから、イツセーは二人の肩に手を置くと下がらせる。

「待たせたな、二人とも。……あとは任せろ！」

イツセーは真紅の鎧の調子を確認しながら、そう発現する。

「リアス・グレモリーを見ているといい。真のルシファアの戦いを享受してやろう」
ヴァーリル・ルシファアは治療された身体に満足しながら、そう宣言する。

「後はこちらの役目だ。このレーティングゲームを汚した報い、俺達が味合わせなければならぬからな」

サイラオーグ・バルは拳を握り締めて決意を込めながら、そう断言した。

その三つの言葉を受け、ビルデは静かに一歩前に出る。

「よかろう。手負いの獣ほど恐ろしいものはないという。蜥蜴と小猫がどれほど恐ろしくなるのか、私に享受してくれたまえ」

この状況下ですら、ビルデは余裕。

それは厳然たる戦力差を把握しているからであり、しかし油断だけは一切ない。

構えに一切隙はない。真剣という言葉がにじみ出るほどに、ビルデはイツセー達を敵として認識している。

体術では圧倒。魔力でも苦戦。そして何より、装備によつてその差は大きく引き離されている。

神滅具三種を同時に相手取つてなお勝てると豪語するその妄言ともとれる言葉は、しかし虚言でも何でもない。

その圧倒的強者の宣言を前に、しかしイツセーは怯まない。

「舐めんなよ、ビルデ」

もはや彼に怯えはない。

圧倒的脅威を前にして、一欠けらの恐怖もないとは言いい切れない。それだけの相手であり断言できるほどの勝機を持っているわけでもない。

しかし、イツセーはあえてビルデから視線を逸らして一人の少年に親指を立てる。

「ありがとうな、リレンクス!! キミの声、心強かったぜ!!」

「……………っ! ……おっばいドラゴン、がんばれー!!」

そのリレンクスの感極まった声とともに、一斉に観客席中から声援が届く。

『『『『『『『『『『『おっばいドラゴン! おっばいドラゴン!! おっばいドラゴン!!! おっばいドラゴン!!!』』』』』』』』』』』

いドラゴン!!!』』』』』』』』』』

その声援に加護はない。だが、願いはある。

ゆえに、気力は十分だ。

「任せてくれ、みんな!! 惚れた女のイメージジカラー背負ってんだ、こんなところで負けたらしねえよ!!」

そう、イツセーははっきり言った。

誰もが退避するほどに似通っているリアスの髪と同じ紅を、惚れた女のイメージジカラーだと。

そして、はつきり宣言する。

「ビルデ・グラシヤラボラス・サタン!!」

指を突きつけ、イツセーははつきりと宣戦布告する。

「俺を求める冥界の子供たちと、惚れた女の目の前でお前をぶつ飛ばす!! 俺の夢のため、子供たちの夢のため、そしてリアス・グレモリーの、俺の惚れた女の夢のため!!」

俺はお前を告白ついでにぶつ飛ばす!! 俺は、リアス・グレモリーが、大好きだああああああ!!!」

公開告白。

今までのため込んでいた者が、色々と高まり切ったテンションと共に開放した。

あまりに全方位告白に、観客のテンションまで暴走寸前にまで高まる。ついでにリアスの顔も赤面という言葉が生ぬるいほどに赤くなっている。

「ふははははははははははは!!!」

ヴァーリもサイラオーグも思いつきり笑い出した。

「こ、これは凄い事になってしまったのです!」

「うっひょー。井草もこれぐらいする度胸があつてほしいですなあ、……いやちよつと恥ずかしいかも」

ニンゲもドキドキしながら様子を三目、リムは流星に我に返ったのか、ちよつと恥ず

かしそうにしている。

「ついに告白したか、いいだろう。なら俺は従妹の恋愛成就に力を貸そうか」
「君は本当に面白い。なら、俺は君の成長祝いに勝利をあげるとしようか」

そして、三人の視線はビルデに向けられる。

そこに込められた莫大な戦意に、ビルデもまた不敵な笑みを浮かべて向き直った。

「よかろう。この大魔王サタンの首、告白祝いに取れるのなら取ってみるがよい!! 私
は逆に君達の首をもって、大魔王派の民に祝いの品をふるまうとしよう!!」

そして、大魔王に向き合う悪魔達の、激戦の幕は切つて落とされた。

18話

「開幕速攻！ クリムゾンブラスター!!」

イツセーは速攻でキャノン砲を展開すると、大出力のオーラの砲撃を放つ。

その威力はドラゴンショットの比ではない。直撃すれば並みの上級悪魔なら一発で消滅させれるだろう破壊力が込められていた。

疑似京都で井草が放った光の槍よりも威力は大きいだろう。あちらは連発できるから更に格上だが、イツセーが単独で放てるか力という意味では十分規格外だ。

「誰が当たるか」

それをビルデは呆れながら回避する。

いきなりこんな溜めのある砲撃を放たれても、そんなものを喰らうほど間抜けなつもりはない。

喰らったところで致命傷にはならない自信はあるが、必要以上の負傷をする気は欠片もなかった。

ゆえにその砲撃はかすりもせず――

「ああ、ここまでは想定範囲内だ」

——二段目の矢であるサイラオーグの拳を、ビルデは素早く受け止める。

あり得ない。そう判断し、そして何かあると結論した。

獅子の鎧を具現化したサイラオーグの能力は既に把握している。ロキとの闘いより更に強く硬く素早くなっているが、しかしそれも既に見た。

本来なら余裕をもって躲けた。そのはずが、防御を必要としてしまった。

そう。今サイラオーグは明確に強くなっている。計算が狂ったのはその為だ。

「何をした？」

「貴様が行った事を参考にしたのさ。すなわち、戦争の為の技術だ」

その瞬間、サイラオーグではなくサイラオーグが纏う鎧と化したレグルスから、力の奔流が流れる。

そして、その瞬間ビルデは全てを察した。

「……レグルスの駒の昇格を、自身に適用させているのか！」

「そうだ！ 金獅子の大魔帝^{レグルス、ゼブ、プロモーション}。レグルスの駒のリミッターを解除し、魔力を持たない俺のために調整された専用の昇格^{プロモーション}形態だ」

これこそがサイラオーグの奥の手。

仕組みそのものはイツセーの真紅の赫龍帝と大差ないが、よりひと手間くわえる必要

はあった。

なにせサイラオーグには魔力が一欠けらもない。ゆえに僧侶と女王ではロスがある。

そのため、騎士と戦車の同時発動で強化を行う事を前提としている。そのアンバランスをどうにかする為に様々な技術も取り込んでいる。

「試合では断じて使えん力。しかし、貴様達との戦争戦いは確かに、取れる手段は取らねば後悔するからな」

そして、空中で打撃戦が展開される。

「これが、俺の覚悟だ!!」

「やればできるではないか!!」

そして空中で打撃戦が展開される。

その身体能力の強化度合いは、赫龍帝に匹敵する程にまで高まっている。

故にこそ短時間ならビルデにも通用する。

だが、短時間しか通用しない。

覇を発動させたヴァーリすら圧倒したビルデを突破するには、これでもまだ足りない。

「まずは一人——」

そう言いながら貫手の構えを見せた、その瞬間。

「いや、そうはいかない」

空間が圧縮され、ビルデの動きが僅かに乱れる。

「—まだジャガーノート・ドライブ覇龍ジャガーノート・ドライブが使えたのか!？」

ビルデが驚きながら視線を向ける先、覇龍を発動させたヴァーリはその力全てを空間圧縮に向けていた。

ビルデが疑似覇獣を使っていなかったからこそその隙。だが、その隙は明確な好機となる。

「—捕まえたぞ、ビルデ」

ビルデが疑似覇獣を発動させるその直前に、サイラオーグはビルデに組み付くと動きを封じる。

疑似覇獣の出力は絶大だ。その力があれば、サイラオーグを振りほどく事は十分可能。ヴァーリの空間圧縮から逃れる事も十分可能。

だが、同時に仕掛けられればすぐには逃げられない。

そして、それはあまりにも致命的だった。

「獅子王こいっが飛び道具に耐性があるのは知っているな?」

「—ッ!!」

その言葉に背筋が寒くなったのは、当然だろう。

そして、目の前に紅が映り込んだ。

「……なあ、ビルデ？ お前は算数の計算を間違えたんだ」

最大出力のクリムゾンブラスターを溜めながら、イツセーは告げる。

一対一なら誰か相手でも一蹴されていただろう。三連戦の形では絶対に勝つ事などできなかっただろう。

だがしかし、戦争という手段を選びにくい状況において、強敵相手の三対一など、自分達でも十分とってきた手段である。

「1と3なら俺達³が！ でかいんだよおおおおおおお!!!」

渾身の力が込められたクリムゾンブラスターが、ビルデ・グラシヤラボラス・サタンを弾き飛ばした。

一方その頃、井草と五十鈴は数も出力も絶大な砲撃網をしのいでいた。

「多い！ 多い多い!!」

「ごめん、私出力落ちてるから躲さないと死ぬ!!」

トールセイバーで井草が強引に弾き飛ばすが、それでも数が多すぎる。五十鈴に至ってはEレベルが弱体化したのか、性能が低下して迎撃が困難な状態だった。

逆に、行仁伊予は桁違いに強化されている。

五十鈴が行ったのと同様の過剰投棄によるオーバードーズ。それによって疑似的に7,0にまで引き上げられたEレベルは、神クラスの領域へと五十鈴を至らせていた。力任せの砲撃しかしてこないから何とかなっているが、しかしそれだけで圧倒的に強いのがクトウグアイーツの利点。一種のミスで灼熱の大瀑布に飲み込まれ、跡形もなく焼き尽くされるだろう事は間違いない。

だがそんな中、五十鈴は気づいていた事がある。

「な、なんか速さだけは低下してないんだけど！ どういう事？」

「あ、転生悪魔になったからじゃないかな！ 騎士ナイトの駒はスピードが強化されるから!!」
忘れられがちではあるが、騎士の駒で転生する者は足が速い者が選ばれるというの勘違いだ。

長所を伸ばす為には選ばれる事も多いが、短所をカバーする為に騎士の駒を宛がわれる事だつてある。

ちなみにシアリーの場合は非戦闘要員ゆえに生存力を上げる為に、頑丈な戦車の駒が宛がわれている。

五十鈴が騎士の駒を宛がわれたのは、高速機動戦闘をとっていたので、その長所を伸ばす為という側面だ。

何をどうするかはやり方次第。そういう事である。

そして、それゆえに何とか戦線は膠着していたが、そうも言ってもらえない。

「あの出力で薬が切れたら、余熱で伊予の体が燃え尽きるかもしれない！ 急いで、井草！！」

「分かってる!! だけど・・・」

想像以上に砲撃に密度が大きい。

五十鈴の会費も井草の迎撃も拮抗状態に持ち込むのが限界だ。このままでは間に合わない。

その事実には歯噛みしー

「そーゆーことなら増援参上ですぜえ?」

「待たせたのです、井草さん!!」

ーそんな井草の力になってくれるものは、すぐ近くにいます。

「ニング、リム!!」

「お嬢様達!! ああ、ビルデは?」

井草と五十鈴の懸念は、リムが首を振ってあっさり解決させる。

「こつち側の三強が抑えてまさあ。今はこつちですぜ」

そう言うなり、リムは一振りの魔剣を引き抜く。

そして同時に、ニングもまた同じ魔剣を構える。

その魔剣の名は、エクストラカリバー。

ニング・プルガトリオ・ルシファーの禁手によって生み出される魔剣。

ソード、パース、サクリフ、アイズ
干将莫邪の如し魔剣によって、過去の記憶と子宮の機能を代償にして創り出された、伝説にも届く魔剣。

それが、ニングだけでなくリムの手にもあつた。

「……井草さんをこれ以上悲しませるわけにはいかないので、禁手を仕立て直したので
す」

今凄い事をさらりと言われた気がする。

一応神の子を見張る者側である井草としては、刃スラッシュドック 狗ドックという虎の子が似たような事

をしたのは知っている。

知っているが、自分の婚約者が同じ事するとか想定外だ。

「縁ある物にエクストラカリバーを与える亜種禁手、下賜する騎士の為の魔剣。今はリム専用なのですが、いつか増やしたいのですよ」

「ふっふっふ。このエクストラカリバーこそ、ニング・プルガトリオ・ルシファーの盟友

の証ですぜ!! 大活躍ですぜ!!」

そんな事を言いながら、放たれる砲撃を切り裂き躲し迎撃する。

そしてかろうじて距離が縮む。数メートル程度だが、確かに距離が縮んだのだ。それを理解してニングははつきりと言いつつ切った。

「一発勝負です。道は切り開くので、井草さんと五十鈴さんは伊予さんを助けるのです!!」

「しつかりエスコートしてやがるんですから、助けやがって見せなせえよ!!」
「……了解!!」

そして、五十鈴は井草を抱えると、最大出力で突撃する。

井草もまたツールセイバーを盾にし、自分の推進力も併せて一気に飛ぶ。

そして、その突出した敵に向かってクトウグアイーツの砲撃が集中し――

「支配!!」
ルーラー

リムとニングの力が、その砲撃を強引に捻じ曲げる。

捻じ曲げた時間は僅か数秒。

だが、その数秒が一気に距離を詰める。

超音速の加速が距離を詰める。

物理的な距離を詰める。

そして、心の距離を詰める為に二人は手を伸ばし―

「いや、あまいつて」

そのナイアルの嘲笑と共に、クトウグアイーツは動く。

獣としての前足を動かし、二人を叩き落す動きを取る。

クトウグアイーツの力は砲撃戦だけにあらず。

その圧倒的な灼熱を叩き付ける方法はぶつ放すだけではない。纏って叩き付ける事でも、その威力は絶大になっているのだ。

そして、攻撃の種類が全く違うがゆえに支配の力も通用しない。

「井草！ 五十鈴!!」

「二人とも!!」

リムとニングの悲鳴が飛び、そして両足は振り下ろされ―

「――女は度胸よお!!」

その両足に、ピスの砲撃が直撃する。

龍のオーラと光力が混ざり合ったそれは、神クラスの砲撃としてクトウグアイーツを弾き飛ばした。

そう、そしてそれをなすピスの姿はいつもと違う。

ドラグレイ・カノン
龍の咆哮。

封印系神器の一つ。日本に住む龍種の中でも高位に属する八面王を封印したそれは、最上級クラスに匹敵する火力を放つ事ができる、絶大な力だ。

そしてその正当禁手、ドラグレイ・カノン・カーニバル八面龍の咆哮。八門のフレキシブルキャノンを展開し、それを運用する禁手。

そして、ピスはそれに自身の光力を閃光の超人すら上乗せして放つ。

……否。

ピス・ダウンフォールは、この奇跡に全てを賭けた。

その結果、彼女は数段飛ばしでついに覚醒する。

そう、この土壇場で………彼女は神器を二つも禁手に覚醒させていた。

オーバーロード・フィニッシュ・モーション閃光の一撃。瞬間的に限界を圧倒する能力を発動する、オーバーロード・モーション閃光の超人の禁手

をここに至らせる。

全ては奇跡を掴む為。失われたあの日々に、ほんの少しでも近づく為。

あの井草達が仲睦まじかった頃を、ほんの一欠けらでも戻らせる為に、ピス・ダウン
フオールは全力を出す。

「……………行けええええええええ!!」

「―勿論っ!!」

そして、井草と五十鈴はクトウグアイーツに組み付いた。

振りほどこうと暴れるクトウグアイーツにしがみつきながら、五十鈴は磔になつてい
る行仁伊予を抱きしめる。

今度こそ、大事なものを間違えない。

その決意で焼かれながらも、五十鈴は伊予を抱きしめる。

「伊予。あなたは本当に優しすぎるわ。ナイアルに背中を押されたにしても、自発的に
井草とあなたを裏切った私を憎まないんだもの」

伊予が聞こえているかは分からない。

だけど告げる。それがケジメだと信じて。

「だけど、だから生きて。私が生きる事を許されたのなら、貴方はもつと許されないとダ
メなんだから。出ないと……………井草も笑えない」

全身を焼かれながらも、そんな激痛は無視する。

こんなもの、一気に襲い掛かってきて苦しんでいる伊予に比べれば軽いものだ。散々

悪として生きてきた自分が背負うのは当然の苦しみでもある。

そして、苦しいだけじゃない。

これからは、井草と一緒に生きていける。そんな最高の報酬があるのなら、罪人としての罰ぐらい受けてたとう。

そして、それは伊予にだって許されるはずだ。だから、彼女は救われるべきなのだ。虚ろな伊予の目を覗き込みながら、五十鈴は本心から涙をこぼしながら微笑んだ。

「一緒に帰ろう、伊予」

「……………た……………い……………お」

ぼつりと、伊予が言葉を漏らす。

そして涙を零しながら、目に光を取り戻し、心からの願いを口にする。

「また……………一緒に、生きていたいよお、五十鈴ちゃん……………井草君っ!!」

その涙に、答える者はここにいる。

「……………うん、任せて」

今ここに、決意はなつた。

お膳立ては整えられた。

諸問題に楔は打たれた。

居場所もちゃんと作られた。

あとは、そこに彼女を連れて行くだけだ。

そして、それをなす剣に五十鈴が手を添える。

弱体化しても、その能力が使える事には変わりない。圧倒的な出力に対抗する為には、それが必要で頼もしい。

「やろう、井草」

「うん、五十鈴」

そして、井草と五十鈴は心からの全力を振り絞る。

「井草さん！」

「井草ー！」

「井草あ、五十鈴ちゃあん!!」

ニングが、リムが、ピスが声を飛ばす。それが力になってくれる。

そして、ぼろぼろと涙をこぼす伊予の言葉が、二人に飛ぶ。

「……助けて、二人とも!!」

今ここに、二人の勝利が確定した。

「任せて、伊予!!」

その瞬間、過去最大の出力を發揮したツールセイバーが、クトウグアイーツを真っ向から両断した。

19話

爆発を突き破り、井草と五十鈴がニングの下へと滑り込むように飛び込む。

勢い余って地面に叩き付けられながら、二人は命の灯を消した直後の伊予を庇い、そして辿り着いた。

「ニング！ 頼む!!」

「任せるのです!!」

井草の頼みに即座に頷き、ニングが悪魔の駒を取り出す。

取り出したのは僧侶の駒二つ。五十鈴を騎士の駒で蘇生させた時のように、変異の駒かさせたうえで寿命回復特化に調整した特性品だ。

そしてそれをもってして蘇生が行われる中、井草はふらつきながらもツールセイバーを持って、立ち上がる。

「井草?」

「五十鈴、ニングと伊予を頼む」

五十鈴にそう言うと、井草は一步前に入る。

そして、その隣にリムとピスが並び立った。

三人ともに満身創痍。だが、ここで戦いを中断するわけにもいかない。何故ならば、敵はまだ一人として倒れていない。

「……こりやちよつと失態が酷過ぎるかねえ」

「……とんだ茶番劇だ。我々の猛威が前座になってしまったではないか」

魔王クラス三人の攻撃を相殺したナイアルと、土煙の中から歩き出てきたビルデがそう不機嫌としか形容できない声を出す。

バラキエル、ミカエル、そしてロイガンの三人を相手にしてなお生存しているナイアル。

イツセー、ヴァーリ、サイラオーグの渾身の力で一矢報いられながらも、いまだ健在のビルデ。

この二人がいる限り、状況の危険性は変わらない。

ならば戦うしかない。行仁伊予と枢五十鈴を救うには、彼らを退ける他ないのだから。

「リム、ピス姉さん、みんな。……力を、貸してくれ」

巻き込んでしまったて申し訳ないとは思うが、しかし井草は頼むしかない。

もう二人を見捨てる選択肢はない。それを選ぶのは、井草・ダウンフォールには不可

能だ。

そこに罪悪感を感じながら、しかしその後頭部が軽く小突かれる。

「まったくもう。困った年上の後輩ね」

小突いたリアスはそう言うのと、不敵な表情を浮かべて魔力を手に宿す。

そして、圧倒的な力を発揮するビルデ達に真つ向から向き合うと、後ろにいる仲間達に告げる。

「私の可愛い下僕達！ 私達の大切な仲間が、ついに本願を果たしたわ！ なら、私達にする事は一つよ!!」

その宣言と共に、イツセーもまた井草を庇う様に前に出る。

既に真紅の鎧は解除されている。その鎧をもつてしても、ビルデに一矢報いるのが限界だった。

だがしかし、彼の眼に絶望に二文字はない。

「勿論です！ 惚れた女と恩人の為だ、意地でも全員生存してやりますよ!!」

その言葉に勇気づけられるように、グレモリー眷属達は戦意を漲らせて並び立つ。

「全くだ。ここまで来たのなら最後を汚すわけにはいかんというものだ。……何としても撃退するぞ」

「俺としてはどうでもいいが、しかしここまで盛り返して負けるといいうのも味気ないし

ね。最後まで付き合おうじゃないか」

サイラオグとヴァーリもまた意気揚々とイツセーに並び立ち、それに率いられバアル眷属とヴァーリチームも戦闘態勢を取り直す。

「ふっ。私達の長年の悩みが解決したのだ。此処が頑張りどころといったところか」
「祝福されるべき奇跡が起きたのです。天使としては大縁談で絞めなければいけませんね」

「そうね。此処まで来て結局敗北なんて、ゲームでもブーイングが起こっちゃうわ」
「全くだね。俺ももうひと踏ん張りするとしますか」

バラキエルも、ミカエルも、ロイガンも、そしてデュリオも、一歩も引かぬ決意でオーラを放ちながら戦意を向ける。

それに対し、ビルデ達もまた態勢を整え直して戦闘態勢をとる。

「上等だ。全員殺せばミスも帳消しだろうしなあ!!」

「塗り替え直させてもらう。今度は再びこちらのターンだ」

ナイアルが吠え、ビルデが反撃を宣言する。

そしてそのままに激突が再開しようとし――

『いや、スマンが今すぐ撤収してくれ』

それに水を差す、ホテップの声が響いた。

思わず全員がつんのめりかける。

悪い意味でタイミングが良すぎる。此処までタイミングが良すぎる水入りもそうはないだろう。

なんとなく空気が弛緩し、誰もが思わず投げ槍になる。

「ホテップ？ こっちは色々と大失態しちまつてるんだが。汚名返上の機会ぐらいくれば、まだ余裕あるだろ？」

「流石に承諾しきれん。まだ損害は軽微ではないか。まさか、我々が負けると？」

明らかに不満を魅せるナイアルに、ビルデも懸念を浮かべる。

当然だろう。この作戦、ムードだけで見るのなら禍の団側の敗北だ。

確かに圧倒的な力を見せつけてはいるが、現段階においては一矢報いられている。この流れで離脱してしまえば、誰もが実態はともかくビルデ達は撃退されたと認識するだろう。

ナイアルに至っては五十鈴に続いて伊予まで離反されてしまったのだ。拳句の果てに放っておけば死ぬかと思ったら延命に成功されている。このまま何もしないで帰還すれば、処罰が重くなるのは明白だ。余裕があるうちに手柄を上げて、それでできる限り相殺したい。

それに実際問題、戦力的に有利なのはビルデ達である。

このままいけば先にリアス達を何名か殺す事もできるだろう。そうなるから離脱した方があらゆる意味で得なのだ。

だが、それは現状が想定範囲内だった時の話である。

『……シヴァが動いた。マハーバリ達阿修羅神族を率いてアグレアスに向かっている』
「マジか!?!」

「チッ!」

ナイアルが驚き、ビルデも舌打ちする。

インド神話の破壊神、シヴァ。

インドラと並び立つ最強の神であり、状況次第ならオーフィスすら退けかねない化物中の化け物。

それが武闘派ぞろいの阿修羅神族と共にアグレアスに向かっている。到着すれば趨勢が一気に不利になるのは明白で、犠牲者は大きくなるだろう。

速やかに撤退しなければならない。それが嫌というほどよく分かり、ナイアルもビルデも納得するしかなかった。

「だああああ!! これ減給じや済まねえだろオイ!! 結果的にこっち損しかしてねえじやねえか畜生!!」

「……まあ、グレモリー・バアル眷属とヴァーリチームをまとめて相手取って我らの眷属

は優勢に立ち回った。大魔王派は最低限の目標は達したとみるべきか」

頭を抱えて絶叫するナイアルと、ため息を付きながらも納得するビルデを中心に、黒い霧が現れ襲撃者達を包み込む。

デイモン・ジョン・ロスト
絶　霧による転移。どうやら英雄派も撤退支援を行っているらしい。

「……逃げる気か、ナイアル!!」

井草はツールセイバーを突き付けながら吠えるが、しかしナイアルは肩をすくめると皮肉気な視線を向ける。

「逃げるっての。お前殺してたらシヴァに殺されるからよ。流石にこの戦力であいつらとやりあうほど馬鹿じゃねえよ」

ナイアルの言葉は正論だ。死ぬと分かっているのなら逃げるのは当然の判断だろう。そして井草と戦えば、逃げるのが間に合わなくなるまで決着が長引く。ならばここで決着は避けるのが無難。ナイアルは外道であるがゆえにそういう判断を下す男である。

そこまで粘られる難敵認識だと前向きに受け取りたいが、しよせんその程度の相手だと馬鹿にされているのは明白であり、井草は齒噛みする。

だが、実際問題井草達も満身創痍。此処での戦闘はデメリットの方が遥かに大きい。故に誰もが苛立ちながらも転移を見逃し、そして霧が全員を包み込む。

そして霧が消える直前。ビルデの声が響く。

「次に全力で相まみえる時は、今度こそ決着を付けよう。我々は精進を続けるがゆえ、そちらも心構えを見直して力を得る事をお勧めする。……でなければ、死ぬぞ？」

ただ聞けば負け惜しみとしか取れない言葉。

だが、それは間違いのない真実だ。

もしロイガン・ベルフエゴールが救援に来なければ、いったい何人死んでいたか分からない。

その事実を噛み締め、屈辱の判定勝ちをあえて皆は受け入れるのだった。

そして霧が晴れた時、何時の間にもやらヴァーリチームもいなくなっていた。

「……まあ、ここまで助けてもらって捕まえるのも気が引けるか。今回は見逃しとけば、粛正する時に後ろめたくないし」

「ヴァーリ達には遠慮がないな、井草」

複雑な表情でそういう井草に、バラキエルは少し苦笑する。

現実問題テロリストであるがゆえに当然だが、この場のメンツの中では特に井草はヴァーリチームに対する辺りがきつい傾向にあった。

かつて過去盛大にやらかして悔恨している事もあるのだろう。三大勢力の趨勢を決める会谈に敵を手引きして寝返った上に、恥じる事なく堂々と「共闘するか三つ巴か選べ」と言ってくるところが不快感を覚えているに違いないと、バラキエルは判断している。

おそらく、ヴァーリチームと決着をつける時は、ヴァーリの相手は赤龍帝の兵藤一誠ではなく井草が挑むのではないか。井草は兵藤一誠を友人として大事にしているし尚更介入してくるだろう。そんな想像すらしている神の子を見張る者の幹部は多い。

グレモリー眷属の大半が、敵というカテゴリーでヴァーリチームを括らなくなっている状況下で、井草はヴァーリのことを「恥知らずの裏切り者」という認識で一切変えていなかった。

そしてそれを不安視している者が多い事に気づかず、井草は息を吐くと視線を逸らす。

既に結界は解除され、救護部隊がコロシウムに突入している。

アグレアスを襲撃してきた部隊も撤退を開始している。元々ビルデがリアス達を殺

す事をサポートし、神と戦う為のデータを取るのが目的だったようで、ダメーჯ覚悟の戦闘を取らず、足止めに徹していたのが功をそうしたようだ。結果的にお互いに大した被害は発生していない。

そして、意識を失った伊予が担架で運ばれていくのを、井草は見送った。

少し離れたところでは、一応の拘束術式をかけられている五十鈴も同じように見送っている。

できる事なら一緒について行きたい。そして、眠っていても語り掛けて、思い出話に花を咲かせたい。

だが駄目だ。上から命令が出て、ついて行かないように言われている。それも、井草達の安全を考慮した結果だ。

今回の伊予の暴走は、ムートロンによる伊予の脱走阻止が目的で仕掛けられていたものだ。

五十鈴の離反と共に情報が洩れ、それなりの数のムートロンと繋がっていた者が叩き潰された。ムートロン側のマイナスこと軽微だが、現政権側のプラスは莫大だ。

ことジエームの開発が出来た事は僥倖だろう。エボリユーシヨンエキスに対抗できる、同種の技術が開発された。これによって生まれるメリットは莫大だ。

ムートロンに何度も煮え湯を飲まされている現政権にとって、大きな朗報なのは明白

だ。この公表によって沈みがちだった全体の雰囲気は上がっていくだろう。戦力としてどこまで通用するかはともかく、アザゼル達が開発した新兵器というだけでだいぶ変わるはずだ。

どこまで予期していたのかは分からないが、二度目は看過する気はない。それがムートロンの決断だった。

だから、伊予に何が仕込まれているか分からない。もしかしたら生還した事を考慮したトラップが仕掛けられている可能性もあり、それについて専門家による精密検査が必須の状況となっている。

だから、井草達の安全の為に一緒にいるわけにはいかない。

井草も五十鈴も分かっている。これで伊予に仕込まれている術式が原因で二人に何かあれば、一番傷つくのは伊予なのだから。

だから井草は精神を切り替えて、ニングのことに意識を向ける。

「……ニング」

「井草さん、お疲れ様なのですよ」

ニングはそう言って微笑み、井草はその頬を撫でる。

取り乱すでもなく、しかし僅かに頬を赤らめた。そんな反応が可愛らしい。

そして、そんな彼女に無理をさせてしまった。

ルシファーになる事にはいくつも理由があつただろう。

現魔王派の活性化によつて大魔王派をけん制し、それによつて教会に理をもたらし事。そも、井草と付き合つてゐる教会の戦士であるニングがルシファーを受け入れれば、三大勢力の和平の象徴にもなり、士気も上がる。その影響は計り知れない。

更に ディアボロス・ダウンフォール・ボトム D D B だ。これにより、これまでの旧家悪魔達の事情などで冷遇されて

いた者達にも新たな居場所ができるだろう。追いつまれて犯罪に走つた者達が世界に貢献し、そして贖罪ができる場所を作る事も、ニングの目的の一つだつたに違いない。もちろん懲罰部隊という都合上死の危険はあるが、それでも長い年月を幽閉されるだけよりはましだと判断する者も多い。ニングに限つて使い捨ての盾にする為に適当に集める事はないだろう。生き残れる可能性がある物を厳選して結成するはずだ。

そして、特注の悪魔の駒。これもまた、重要な目的だつたに違いない。

D D B のメンバーの一人として、そしてルシファーの眷属悪魔として五十鈴と伊予を迎え入れる事で、事実上の減刑嘆願をニングは行つたのだ。

魔王血族がゴロゴロと出てきてムートロンと手を組み、更には現政権から多くの民衆が流れ出ている現状だ。多少の我儘を聞いてでも、ルシファーの血を取り込む意味はある。旧家の者達もやれやれと思ひながらもそこまで反論はしなかつたに違いない。

罪は償わなければならない。麻薬生産組織などといった、悪党同士の殺し合いといえ

どだ。それを罪だと五十鈴も伊予も認識しているのだし、現政権にも牙をむいた。償う必要はあるし、二人自身が自分を許さない。

遺族には恨まれるだろう。これを不満に思う者もいるだろう。これ見よがしに敵はそれを突き付けて、二人は苦しむ事になるだろう。

それでも、彼女達が死刑になる事はない。

そして、また会う事ができるのだ。

それをなしてくれたニンングに、井草は謝るわけにはいかない。苦しむわけにもいかない。

——色々なくしてまで守りたかったものが曇ったら、私が馬鹿みたいなのですよ。

かつて、子供を産む事が出来なくなった時、彼女はこう言った。

もう一度言わせるわけにはいかないだろう。

だから、こういうべきだ。

「ありがとう、ニンング。俺はニンングが胸を張れる自慢の男になって見せる」

そう、せめてその価値を証明しよう。

一緒にいる事を諦めたくない少女。そんな彼女が、色々なものを指す出すだけの価値がある男である事を証明しよう。

今はまだまだだろう。なら、これからなって見せるだけだ。

そう、しいて言うなら――

「冥界の英雄でも目指してみるかな？ それぐらいあれば、明星の夫には相応しい箔だよね？」

そう茶化すと、ニングはクスリと笑った。

「ええ。やっぱり井草さんは笑顔の方が素敵なのですよ」

「君もだよ、ニング」

そして井草とニングは口づけをかわす。

ちなみに、色々あったり結界の解除関係のごたごたで民間人の避難は進んでいないというより、報道関係は半ばややくそで生中継をぶちかましている。

当然二人とも気づいていたが、もう見せつける事にした。

隠し立てする事は欠片もない。それぐらいでなければ決意表明には程遠い。

そして井草はもう少し続けていようと、しかし唇に指を押し付けられて放される。

「あ、流石に恥ずかしくなってきた？」

「それはどうでもいいのですが、井草さんにはやる事があるのですよ？」

そういうと、ニングは苦笑を浮かべながら人差し指を軽く振る。

できの悪い子を叱るように、ニングは井草にこう言った。

「井草さんを大事に思っている人達は他にもいるのです。本妻としてそこは指摘するのですよ」

……敵わない。

そう思いながら、井草は頷いた。

何よりするべき事の為に歩き出す井草に、リムとピスが歩み寄る。

二人ともボロボロだが、しかし傷は既がない。

アシアの回復フィールドを存分に使用できる為、服の損傷などといった治癒が効かない部分しかもう戦闘の後は残っていない。

それに安心して、井草は微笑んだ。

「二人のきれいな肌に傷が残らなくてよかったよ」

心からの本音だった。

「ふふうん。井草つてばスケコマシ度合いが上がってやがりますなあ」

リムはそう茶化し、しかしとてもうれしそうにすると井草にすり寄る。

となればピスも連携をとってきそうだ。はつきり言つて、リムとピスは相性がいいと井草は思っている。語感も似てるからなおさらだと思つている。

だが、なぜかすり寄つてこない。

なんでだと思つてみてみれば――

「……うう〜」

――なんかすごい顔を真つ赤にしている美女がいた。

あれ？ 何この可愛い生き物。

井草は心からそう思う。思わぬギャップ萌えに、井草は姉貴分の新たな側面というものを感じ取つた。

そしてすり寄っているリムの体温も心地よい、微笑みながら井草は抱き寄せる。

しかし、ここでリムから軽くチョップが入つた。

「井草？ やること忘れてますぜ？」

「おっと」

ニングに言われてすぐにいきなり忘れてしまった。

井草は少し反省するが、これは男なら仕方がないだろう。イツセー辺りは理解してくれそうだ。

「二人がかわいかったから、つい」

「ふぬあああああ!」

なんかピスが悶絶している。

そしてそんな姿も何というか、意外性があつてみてて楽しい。

しかしそこで再びリムからチョップが入った。

「そのスケコマシ。優先順位をわきまえなせえ」

「了解。じゃ、行つてくるよ」

確かにそうだと反省して、井草は本命のところへと向かう。

その背中に、二人の声が届いた。

「今度は、手放したらいけねえですぜ」

「ちゃんと抱きしめてあげなさい」

その言葉を、ちゃんと形にして見せよう。

そして、井草はたどり着いた。

拘束のための術式をしつかりかけられて、事情聴取のために連行されそうになってい

た五十鈴のもとに。

「すみません。十分ぐらいいいですか?」

「ああ、まあ逃げ出す気もなさそうだし、構わないよ。……先に手続きを済ませるぞ」

サーゼクスが手配してくれたのか、話が一瞬で通ってしまった。いわゆるドアインザフェイスのつもりだったのだが、どうしたものか。

まあいい。全部終わってから抱きしめ続けられただけの話だ。ラッキーだと考えよう。

井草はそう割り切り、五十鈴に苦笑する。

「……お帰り、五十鈴」

「………た、ただいま」

五十鈴は顔を赤らめながら、そっぽを向く。

どうやら恥ずかしいらしい。まあ、それもそうだと納得する。

数えきれないほどの罪を犯し、そもそも井草を裏切った。そして井草に対する罪滅ぼしを考えて、井草から恨まれる存在になろうと迷走。間違っていたと分かったときには寿命もあとわずかで、だからこそ逃げ出した。

それが死んでから生き返って、しかも長生き確定だ。これは冷静になると恥ずかしい。

とはいえー

「五十鈴の顔が見たいから、そつぽ向かないでくれると嬉しい」

「……井草、アンタ変わったところは変わったわね、マジで」

マジ顔になって振り向かれた。

まあ確かに、そうだろう。

どちらかといえばお調子者でハイテンションな性格かつムードメーカー。それが昔の井草だ。

それが抑え役で基本落ち着いている、場の調停役といった感じになっている。

明らかに方向性が真逆である。跡形もないといっても過言ではない。昔の写真を見たことはあるが、もう魔改造といってもいい領域だろう。

自分でも納得者だ。そして、それゆえにどうしても不安になることもある。

五十鈴の知る井草と、今の井草は大きく変わっている。それはもう、自分でも断言できるほどに変わり果てていると断言できる。

だから、不安になる。

「今の俺じゃあ、いやかな？」

かつて、枢五十鈴は井草・ダウンフォールのが好きだった。

だが、かつての井草と今の井草は大きく違う。

かつての井草が好きだった五十鈴にとって、今の井草は違和感があるのではないかと
思い――

「――馬鹿ね」

五十鈴は、呆れた顔になると、両手で井草の顔を挟むとまっすぐに見つめる。

顔が少し赤いが、しかしどこかそれすら喜びにして、五十鈴は井草に微笑んだ。

「ナイアルの襲撃の直前に言ったこと忘れたの？ 私のせいだからとやかく言わないけど、そういう自分に自信のないところは改良必須ね」

そういつて自戒の表情を浮かべるのも、一瞬だった。

華やいだほほえみを取り戻すと、五十鈴はもう一度本音を口にする。

泣きたくなるほど悲しかったあの時とは違う。心からの喜びを温かさを胸に、もう一度はつきりという。

「井草。私、井草のことが大好き。惚れ直した。昔よりも、愛してる」

その言葉に、井草は涙をポロリとこぼす。

その言葉がとても嬉しい。

昔愛してくれていた事が嬉しい。そして、傷つけたのにも関わらず、もつと愛してくれている事がとても嬉しい。

だから、井草は五十鈴を抱きしめる。

「井草……」

五十鈴は抵抗しない。井草に身も心も委ねて、そして抱きしめられる。

罪悪感はお互いに今でもある。そして、下手をすれば一生背負い続けるだろう。

特に五十鈴は何百人も殺している。その咎は一生背負い続けなければならない。

だからこそ、井草は告げる。

「……肩を貸すよ。だから、ずっと一緒にいてほしい」

「他の女侍はならせて言うことじゃないわよ、ホント」

五十鈴はそう苦笑するが、しかし素直に体を預ける。

それでいい。十分だ。

かつて罪を犯した自分が、盛大に井草を裏切った自分が、井草と愛し合える。十分すぎる事だ。

それに、自分の為に不利益を背負ってくれた主が本妻ならむしろ上等だ。はつきり言つて、自分一人よりも井草を幸せにしてくれるだろう。

そして、なにより――

「その言葉、伊予にもちやんと言つてあげてよ」

「ああ、分かつてる」

――それが聞ければ十分だ。

かつてくだらない嫉妬で妬み、そして裏切った幼馴染。

だけど、二人と一緒にいた時間は五十鈴にとってかけがえないものだった。それが今ならとても分かる。

それが、更に大きくなって帰ってくるのなら――

「……一緒にいてあげるから、時々肩を貸してよねっ」

――それは、立った二人で添い遂げるよりある意味で幸せな事なのだろう。

満面の笑顔と愛の言葉を組み合わせながら、五十鈴は心からそう思い、井草に口づけた。

20話

……と、ここで終われば完璧だったのだがそうもいかない。

「……はふう」

「つてきやあああああ!? 井草が倒れたあ!?」

しかしそれで井草が限界だった。

具体的には精神的な疲労と肉体的な疲労が堪り過ぎて失神した。

「ううくん」

「イツセー先輩まで倒れましたあああああ!?」

そしてギヤスパアの目の前でイツセーが気絶した。

こちら一度半殺しにされている。しかも新技を使って体力の消耗も激しい。当然である。

「……すまん、俺も……だ」

そしてサイラオーグも限界だった。

こちらもビイディゼ・アバドンに叩きのめされたうえで、更にビルデと初使用の新技

で戦ったのである。当然の疲労だ。

一気に三人も気絶した事で、凄まじい勢いで混乱が生じたが、幸い禍の団は既に撤収していたので間隙を突かれる事はなかったのが幸いである。

そして次元の狭間でも。

「……かはっ」

「おおいヴァーリ!? しっかりしろ!!」

「美候、慌てないでとりあえず足を持ってください。ルフエイは頭をお願いします。私はコールブランドで空間を切り裂く必要がありますので」

「わ、分かりましたお兄様!!」

「……ねえ、あのシスターちゃんに治してからもらってから撤収したら良かったんじゃない?」

ヴァーリも限界を超えて意識を失ったが、これに関しては些細な事であり、誰もこの後口にしなかったので知られる事はなかった。

「……おい帝釈天」

「なんだよ、アザ坊」

そんな騒ぎが起きている頃、アザゼルは一人の神と対面していた。

その名は帝釈天。インドラとも呼ばれる中国神話組織「須弥山」のトップである。

今回の襲撃ではツールやゼウスと共に、ムートロン先遣艦隊の最強戦力であるホテツプを迎撃。

新技術と圧倒的なE Eレベルによって苦戦を強いられながらも、しかし護衛の増援まで喰らったにも関わらず生き残った、生粋の実力者である。

だが、アザゼルに敬意はない。

元より神であろうと台頭に接する男ではあるが、しかし今回は敵意の方が強い。

「単刀直入に聞く。曹操のことを他の勢力に隠してたな？」

「素直に白状するぜ。闘戦勝仏が見つけてたのを隠してたのは事実だ」

その言葉に、アザゼルは青筋すら浮かべる。

しかし帝釈天は堂々としている。

この事実が下手に知られればややこしい事になるのは確実だ。こと禍の団は各勢力にとつて最大レベルの問題。その幹部にして神の天敵を匿っていたと言ってもいいのだから、須弥山そのものが世界を敵に回しかねない。

しかし、帝釈天は余裕の表情だった。

「そこまで言う事かよ。程度はともかく似たような事は大抵の神話勢力はやってるだろうよ」

帝釈天はそう嘯く。

実際問題、和平に心から賛同している神は、残念ながら少ない。

他の神話体系が滅びてくれれば都合がいいと思っている神々は多いだろう。しかし人類を巻き込んだり下手な事をして自分達が滅びては損だから、それもできない。ましてやムートロンという魔王クラスを千人以上保有している存在がいるのなら、ロキのよくな切り札を持っていない限り共闘するしか選択肢がない。

しかし、中には上手く立ち回ろうと禍の団に接触している神もいるだろう。下手に帝釈天を公然と非難すれば、その神々が焦って余計な事をする可能性がある。

だからされないと確信して、帝釈天は安心している。

「まあ、それについては流石に悪かった。黙っててくれるってなら、ちつとばかり貴重な仙丹を分けてやってもいいから勘弁してくれや」

「おいおい、やけに下出に出てるなインドラ。……ホテツプの奴にビビったか？」

思ったより交渉の態度を示してきた帝釈天に、アザゼルの嫌味が飛ぶ。

下手にプライドの高い神なら即座に襲い掛かりそうな発言だが、帝釈天は嗤って流す。

「H H H H H A！　むしろ滾ってきたぜ？　最近は戦争がなくなつて退屈だったからな。

ああいう奴らと戦える機会がすぐそこつてのは、ちよつと楽しいもんだ」

「ヴァーリにしる英雄派にしるコカビエルにしる、バトルジャンキーに迷惑かけられっぱなしだな、俺は」

「対価をくれてやるだけ俺の方がましだろ？」

ため息を付くアザゼルに、帝釈天はそう冗談をかましてくる。

しかし、帝釈天は表情を改めると空を見上げる。

彼が見ているのは冥界の空ではない。地球ならその先に存在するもの、宇宙である。

「しつかし宇宙は広いもんだ。調子ぶつこいてた地方のヤンキーみたいな連中が、数年かけたとはいえ俺らとまともにやりあえる勢力になつて帰つてきたんだからよ。

……須弥山も宇宙開発に乗り出すべきか？」

割と真剣に考えているようだった。

それを見て、アザゼルは更にため息を付いた。

「技術開発で神の子を見張る者を出し抜くんじゃねえよ……。ま、そつちに関しちやイミテーションイーツがあるからだいぶ差は縮まったがな」

イミテーションイーツの完成は、大きな飛躍になるだろう。

武器ではなく兵器としての力。人間が地球上でもっとも優秀な生物と化した根源である、軍事力の根幹。

それらの新たな領域となるこの力があれば、おそらくイーツにもだいぶ対抗できるはずだ。

「ちようどいい、あれを俺らにも一枚かませろよ。金ぐらいは払ってやるからよ？」
帝釈天はそう言つて、即座に小切手をちらつかせる。

シヴァに先を越される前にこちら側に技術を流してもらいたいのだろうか、その心配は無用だ。

「……何言つてやがる？ お前、なんか勘違いしてるぞ？」
まったくおかしな話だ。笑つてしまう。

イーツに対抗する為に新たな力。そして、近い将来必ず来るムートロンの本艦隊。それらに対抗する為のイミテーションイーツなのだから――

「国連加盟国も含めた全勢力に無償で提供するに決まつてるだろ。既に日本とアメリカじゃ独自研究も始まつてるぜ？」

「……………マジか」

思わず目が点になる帝釈天を見て、アザゼルは辞意に愉悦を覚えた。

「どうやら意趣返しぐらいはできたらしい。これは幹部達に良い土産話ができた。」

「そう、土産話といえば――」

「……………まあいいさ。俺は今日機嫌が良いから、ヒマしてんなら神の子を見張る者が出店したアグレアスの酒場に來な。特別サービスで本日無料で酒飲み放題サービス中だ」

「……………何か良い事あったのかよ？」

「そりやあもう。俺のここ数年の悩みの種が、一気に解決に向かったんでな」

――最高の土産話をバラキエルが既に持ち帰っている事だろう。

本部に帰つたらもみくちやにされそうなので、今日は別の形で羽目を外す事にする。

ついでに帝釈天を二日酔いにしてやろうと思いつつながら、アザゼルはふつと笑った。

「……………こつから先も大変だが、ま、今日ぐらいは幸せを甘受しろよ、井草」

その直後、井草がひっくり返った事を知ってアゼルが大慌てするまで、あと五分。

「……あれ？」

ふと目覚めると、医務室だった。

井草は目を覚まして胴体を起こすと、その衣擦れの音に気付いて三人ほど顔を向けてきた。

「お前も起きたか、井草・ダウンフォール」

「井草さん！ 大丈夫ですか？」

「やあ、よく眠れたようだね」

サイラオーグが、イツセーが、そしてサーゼクスにそう言われて、井草は一気に記憶を取り戻した。

「……五十鈴はどうなりますか、サーゼクスさん」

真つ先にサーゼクスに聞くのはそこだ。

なにせ五十鈴は色々とやらかしている。その辺がふと不安になった。

しかし、サーゼクスはにこやかな表情を浮かべると安心させるように井草の肩に手を置いた。

「大丈夫。彼女は多大な貢献をしてくれたのだ、賠償金も神の子を見張る者が立て替え
たし、何より新たななるルシファーであるニング君の眷属がそう簡単に処罰される事はな
いさ」

「そうですね。良かった……」

サーゼクスが確約した事で、現実味がとても濃くなった。

その所為か脱力して、井草は再びベッドに倒れこむ。

枢五十鈴にはちゃんと会える。これからも一緒にいる事ができる。

ちよつと図々しいとは思う。彼女がやってしまった事を考えれば、いい顔をしない者
も多いだろう。

だが、それを背負つてでも五十鈴はちゃんと前に進める。少なくとも、その機会は与
えられた。

それが、凄く嬉しい。

「良かったですね、井草さん！」

「まあ、ロキとの一件で彼女には同情していたからな。俺からもおめでとうと言わせてもらおう」

イツセーとサイラオーグにもそう言われ、井草は本当にこれが現実なのだど理解する。

目の前が涙でにじんで見えなくなる。

四年間、四年間の間、五十鈴と伊予は暗闇の中にいた。

支えてくれる者がいた井草よりも大変だったろう。五十鈴は文字通りたった一人で頑張り続けてきたのだ。伊予に至っては、暗闇であった事すら気づかないほどに精神が汚染されていた。

だが、これからは違う。

井草も、五十鈴も、伊予も。三人が再び一緒に入れる。それに、ニングヤリムも一緒に、よりよぎやかになる。

ある意味とても妬まれそうな井草の立ち位置だが、もうその辺りは覚悟しよう。

四人がそれで幸せだと、心から言えるぐらい井草は頑張る。どうせ冥界では合法なのだから、羨ましがられるのは諦めても文句については一切聞かない。

その決意を込めて、井草は拳を握り締めた。

その光景を優しく見守りながら、サーゼクスはイツセーに向き直る。

「そうそう。井草君が起きたので言いそびれていたけど、イツセー君には伝えておく事があつたんだ」

「はい?」

イツセーが首を傾げると、サーゼクスは居住まいを少し正す。

それだけの事があるのだと判断して、井草とサイラオーグもなんとなく沈黙する。

そして、サーゼクスはにっこりと微笑んだ。

「イツセーくん。君に昇格の話が来ている」

「おお!」

それはめでたいと、サイラオーグも井草も声を上げる。

逆に、イツセーはよく理解できないのか少しぼかんとしている。

それに苦笑しながら、サーゼクスは更に付け加えた。

「より正確に言うなら、君と木場くと朱乃くんに、中級悪魔昇格試験の受験資格が与えられた」

悪魔の昇格は普通にある事である。

転生悪魔が上級に昇格し、そして眷属を得る。ここまで至る転生悪魔は確かに少ないが、しかし確かに存在している。

その権利を上層部が認めているからこそ、転生悪魔になりたがる者達も多数存在して

いる。そして旧家としては面白くないだろうが、他種族からの転生悪魔でも成果次第で上級悪魔にする事例はきちんと出さねばならない。そうでなければ支持率に響いてしまう。

そして、兵藤一誠は冥界の窮地ともいえる戦いで成果を上げてきた若手の期待のホープだ。

対をなす白龍皇と圧倒的不利な状況で渡り合った。

エボリユーションエキスとオフィスの蛇で強化された、魔王末裔三人と戦い、捕縛または撃退に成功した。

悪神ロキとの戦いにおいても、ロキの捕縛に大きく貢献している。

京都においては神滅具保有者達を複数人相手にして、一矢報いた。

そして、このレーティングゲームに襲撃を仕掛けた大魔王派盟主ビルデに一発かました。

本来なら数十年数百年かけても獲得できるか分からないのが中級昇格資格だが、一年足らずのこの激戦と成果はそれだけのものだった。

「確かにまだまだ未熟なところもあるが、あれだけの成果を出した君達は昇格の資格があるべきだ。将来性も込みの判断だね」

サーゼクスにそう言われて、イツセーはちらりと井草達の方を見る。

意見を求めているのだろうか、これに関しては言うまでもない事だ。

「問題ないんじゃないかい？」

「ああ、受けるべきだな」

井草もサイラオーグもそこに関して異論はない。

「まあ前代未聞の速さだけど、それだけの危機を潜り抜けてるんだから当然の報酬だよ」
「冥界の英雄になるべき男が、いつまでも下級悪魔でいいわけがないだろうしな」

井草もサイラオーグもイツセーが昇格して当然だと、続けざまに言い切った。

間違いないそれだけの事をしてのけている。

資格を飛ばして昇格確定というわけではないのだから、後ろめたく感じる必要もないだろう

サーゼクスも頷き、そして少し茶目っ気のある笑顔を浮かべる。

「それにリアスと婚約してもらおうからには、色々と拘りのある旧家達に言い訳する為にも上級に放つてもらわないと困るからね」

「ああ、確かに」

そこも重要だと、井草もサイラオーグも納得する。

できる限り純血を維持し、できなくても相応の立ち位置の物を配偶者に求める旧家達だ。如何にグレモリー家の儀式を潜り抜けたとしても、イツセーがリアスの婚約者にな

る事に否を言いたいだろう。

最低限黙らせる為にも、イツセーには冥界の英雄だけでなく貴族になつてもらいたいところではあるのだろう。

冗談半分だが半分は本気、そんな感じの声色だった。

だが、そこでイツセーは明らかに挙動不審になる。

「…………お、俺、自信もつていいんでしようか？」

イツセーは勢い余つて、戦鬪の真つ最中にリアスに対して愛を叫んでしまった。

ちなみに自棄を起こした報道陣によつて、戦鬪中であるにも関わらず生中継である。最低でも数百万人は聞いているだろう。

冷静に考えると暴挙である。割と一般人の感性を持つているイツセーからすれば、不安になつてもおかしくない。

「まあ、あんなタイミングでやると色々とあれではあるよねえ」

井草がそんな事を言うが、完璧におまいう案件である。

告白しただけのイツセーより、キスマで交わしている井草の方が凄まじいだろう。それも二回でもある。

「なら簡単だ。もう一度想いを改めて伝えればいいだろう」

と、サイラオーグが助け舟を出した。

確かに、どきどき紛れの告白より、改めて告白し直した方がムード的には抜群にいいだろう。

お互いに冷静になってからすれば、それだけで価値も変わるはずである。イツセーは頷きかけて、しかしあわあわしだす。

「じ、じ、自信もつていいんですかね?」

顔が赤くなっているし、明らかに呼吸も荒くなっている。

まだ告白していないのに緊張している証拠だった。

それを見て、サーゼクスもサイラオーグも井草も微笑んだ。

「君は既にグレモリーの婿になる試験をクリアしている。大丈夫だよ」

「駄目なら俺のところに来い。慰めのコーヒーぐらいは出してやる」

サーゼクスもサイラオーグもイツセーの背中を押す。

そして、井草もにつこり微笑んでイツセーを応援する。

「大丈夫だよ。君は、それだけのものを積み上げてきた。きっと上手く行くさ」

そう、井草はこの中で一番イツセーを見てきている。

一時期まで覗きをやめられなかった下変態だが、しかしとてもまつすぐな好青年だ。彼がリアス達の心を掴むだけの事をしてきた事を、井草はずっと見てきた。

だから大丈夫。上手くないわけではない。

「頑張れイツセー。勢いよく、本音でぶつかってくるといいよ」
「……………はいつ!!」

21話

そして、駒王学園の学園祭が開催された。

オカルト研究部が行うのは、部室として使っている旧校舎を思いつき使った「オカルトの館」

喫茶店あり、お化け屋敷、展示発表ありの何でもあり。中には朱乃や小猫の技能を生かしたお祓いや占いなどもあり、非常に多角的に動いていた。

正直な話、文科系の部活とすれば人員が多いとはいえず、教師込みで二十に届かない部員数でやるような事でもない。この辺り、二足三足のわらじを履く事が多い異形社会の価値観が影響しているだろう。負の側面である。

ゆえに井草も色々と忙しかった。

「はいそこ。まだ何もやってない相手をボコボコにするのはただの暴行罪だからね？」

武器使つての集団リンチも普通は犯罪だからね？ イッセー、覗きはもうやめてるから穏便にね？」

いまだ多少は残っているイッセー憎しの女生徒達をなだめたりー

「はい！ ホットケーキ三人前にミックスジュースお待たせしました!!」

時に忙しくなってきた喫茶店コーナリーの調理を担当しー

「そうですね。この辺りは俺達二年生が修学旅行で京都に行った時に、現地の情報を元にデザイン委修正をかけたものでー」

また、展示物の簡単な説明を流暢に行う。

オカルト研究部部長最年長として相応しい、八面六臂の大活躍だった。

いずれは自分の二足三足の草鞋を履いて本格的に仕事をする墮天使の一人である。ましてや、すでに学生とエージェントと緊急対策班の三足の草鞋を履いているともいえる。

学園祭の出し物を何とかするぐらい、やってのけなければならぬだろう。

そう思いながら井草は一旦小休止で旧校舎の外に出る。

そして飲み物を買うに行こうかとしたその時、スポーツドリンクが差し出された。

「よっ。ご苦労さん」

「アザゼル先生」

アザゼルからスポーツドリンクを受け取りながら、井草は軽くにじんでいた汗をぬぐう。

それを見てアザゼルは苦笑し、そして自分もコーヒーをふたを開けると一口飲む。

多少沈黙が続くが、アザゼルはほっとしたかのように息を吐いた。

「行仁伊予の検査は終わった。今はまだ眠ってるが、命に別状はねえし何らかの精神干渉を受けた可能性もねえ。反逆防止の術式もかけたし、もう大丈夫だ」

「そうですか……よかったです」

その言葉に、井草も心から安心する。

これで何かしらの反応があつて、隔離などといった話になったら目も当てられない。そこだけは不安だった。

なにせ相手はナイアルだ。生粋の外道であるあの男なら、仕込みをするのならとんでもない仕込みをしてもおかしくない。

過剰投薬させればほぼ確実に死亡するというのは本当だったらしい。だからこそ、ホテツプなどの油断しにくいタイプもナイアルにそれ以上の仕込みをさせる必要はないと判断したのだろう。

そして、その間隙を突いた打開策を行ったのは、アザゼル達である。

「……ありがとうございます、先生」

井草は涙ぐみながらアザゼルに頭を下げる。

本当に感謝してもし足りない。

アザゼル達が展開を予見し対策を用意してなければ、五十鈴も伊予も助からなかつ

た。

本当に、アザゼル達には助けられればなしである。

そんな井草の頭をポンポンと叩きながら、アザゼルは微笑する。

「気にすんなよ。ま、駒を作ってどうするかが問題だったが、ニングがルシファーを引き受けてくれたからこそその辺の手間がなくなつて間に合つたしな」

「……はい。俺にはもつたないぐらいのいい女……つと駄目だ駄目だ」

ついそんな自虐を仕掛けて、井草は慌てて頭を振る。

それでは駄目だ。

自分にはもつたないぐらいの素晴らしい女性達だと思つているが、しかしそれではいけない。

そう、こう言い直すべきだ。

「彼女達の自慢の男になる為に、もっと頑張りたいと思わせてくれる、とつても魅力的な女性達です」

その言い直し方を聞いて、アザゼルは感慨深げな表情になる。

「……ああ、安心したぜ」

そして、井草の頭をわしゃわしゃと撫でると、にかつと笑つて見せた。

「その様子ならもう大丈夫だ。お前はそのまま頑張れよ」

「……………はいっ！」

その本心からの安堵の声に、井草もまた元気よく頷いた。

そして文化祭も終わり、フオークダンスが行われる駒王学園高等部。

その様子を見ながら、井草は駒王学園の屋上でコーヒーを飲んでた。

今頃イツセーはリアスに告白している事だろう。下手に旧校舎に居て、邪魔になったらいけない筈だ。

適当に時間を潰してから合流しよう。きっとみんなも同じ気持ちのはずだ。

……実際のところ、オカルト研究部の過半数が覗き見の態勢をとっている事を井草は知らない。

気を利かせているのは井草だけである。知らずにみんなで打ち上げをする為のケーキを焼いているレイヴエルは、悪魔どころかむしろ天使かもしれない。

とはいえあまり長時間いないと心配されるかもしれない。

このコーヒーを飲み終えたら、そろそろ旧校舎に戻ってもいいだろう。

井草はそう判断し、フォークダンスを眺める。

正直に言うのと、あれをしたいという気持ちはないでもない。

両想いの好きな人がいるのだ。もう見せつける勢いでやってみたいというちよつとした欲もある。

だが、日本は一夫一妻制の国家だ。二股通り越して四股は流石にまずい。

加えて、ピスの様子もアレである。下手をすると五又になるかもしれない。

井草とピスは墮天使でニングは魔王血族、五十鈴や伊予、リムは転生悪魔になったのだから問題ないが、それら事情を知らない駒王学園の生徒の前で、あまりそういう事をするわけにはいかないだろう。

ややこしい事になるのは確定だ。そこは心から気を付けよう。

故に、ちよつとだけ寂しく思いながら空を見上げる。

そこに、足音が響いた。

「あ、井草さんいたのです」

「探しましたぜ、井草」

「ニングにリムも。何でここに？」

てつきり旧校舎の方に居るかと思つたのだが、意外だった。

そして井草の反応に、二人は心外だと言わんばかり少しだけむつととして見せる。

「なについて、私ら付き合つてんでしようが。こういう時こそ一緒にいるもんじゃねえんですかい？」

リムに言われれば確かにそうなのだが、しかし三人一緒というのは別の意味であれだろう。

日本の風俗的な意味で、ちよつとよろしくない。後々ややこしい事になる可能性がそこそこある。

とはいえそれは分かっているのか、ニングは苦笑しながらフオークダンスを寂しげに見る。

「確かに、あの場には参加できないのが残念なのです」

ニングはそう言う、しかし井草の手を取った。

そして、リムももう片方の手を取る。

「だからここで踊るのですよ」

「そういうこと。三人だけの秘密の時間つてやつですなあ」

「あ、そういう事」

すつかり納得して、井草は二人に引つ張られるように踊り出す。

最も三人一緒なので、適当にリズムを付けて回るだけだ。流石に組体操のようなレベルのダンスを即興でできる能力はない。

ただ、それだけで十分なぐらい楽しかった。

そして校庭から聞こえる音楽に乗って、三人は楽し気に踊り続ける。

今頃イツセーは告白を成功させて、浮かれている頃だろう。

そんな中、自分達は自分達で一緒に浮かれている。

そんな相似性が、なんとなく楽しかった。

「……二人とも、改めて言いたい事がある」

「なんですかい？」

井草が言いたい事は分かっている。

だけど、あえて聞いてくれる二人がありがたい。

「ありがとう。ほんと、この言葉しか思いつかない」

二人が許してくれたからこそ、井草は前を向く事ができた。

二人が助けてくれたからこそ、井草は今まで生き残ってこれた。

そして、ニングの決断とリムがそれを支えたからこそ、井草は大切な伊予通と五十鈴去を

取り戻す事ができた。

心からそれに感謝する。

リム・プルガトリオとニング・プルガトリオ・ルシファー。二人の悪魔払いとの出会いが、井草の枷を解き放ってくれたのだ。

だから、井草は今ここにいる。

今、ここで笑えている。

「本当にありがとう。俺、二人のことが大好きだ」

そう、だからこんないい笑顔を浮かべる事ができるのだ。

その笑顔を受け止めて、二人もまたとても可憐な笑顔で返してくれた。

「どういたしまして」

それから十分ぐらい、三人は笑いながら踊り続ける。

満天の星空が、まるでそれを祝福するかのように輝いていた。

「それで総督う？ 何とかなっちゃってんですけど、言うんですかあ？」

「まあな。約束しちまったんだから、そりや言わなきやダメだろ」

「本人忘れてるみたいですし、誤魔化してもいいんですよお？」

「……」

「井草だって、そこまで本気で両親の事を知りたいわけじゃないでしょうしい、総督の気

まぐれだつてそんなに珍しわけでもないしい」

「ピス」

「っ」

「だからこそだ。井草が両親の事を「そういうもんだ」と見放してる事こそ、俺は看過するわけにはいかねえだろ」

「……………ですけどお、総督だつてあんなもの、どうしようもないじゃないですかあ」

「ああ、そうだな」

「……………言つても、聞かないんですねえ」

「ああ。井草は約束通り、伊予や五十鈴と決着ケリを付けて見せた。だからこそ、今ならあいつも受け止められる。…………俺が恨まれるのはまあ仕方ねえだろ」

「別に恨まないと思えますよお。井草の性格もそうですけどお、総督にどこまで責任があるかつてのもあれですしい」

「だといいがな。ま、何時かはきちんと話すべきだった事だ。遅いぐらいさ」

「…………了解です。ただ、私も立ち会いますからねえ」

「お前が立ち会えるの、何週間後だよ？ 週単位で仕事溜まつてるだろ？」

「それぐらいの心の準備は必要でしょうにい」

22話

そして、夜が明けて次の日。

「……………え？　昨日は楽しまなかったの？」

井草は教室でイツセーから詳しく話を聞いて、目を丸くした。

告白に関しては当然のごとく成功。その後みんなでお祝いもした。

井草はてつきりそのあとイツセーとリアスが初夜を迎えたものだとはかり思っていたのだが、どうも違うらしい。

「いや、昨日はいつも通りリアスにアーシアと一緒に寝たけど？　アーシアもせがんできたし」

などときよとんとして言うイツセーに、井草はため息を付く。

そして、アーシアにもジト目を向ける。

「アーシアちゃん。そこは譲ってあげようよ」

「だめです！　イツセーさんのベッドは私とリアスお姉さまと一緒に温めるんです！」

アーシアとしてはそこは譲れないらしい。まあ、リアスも留めなかったようなのでま

あいいのだろう。

しかし、そこで食って掛かる物もいる。

「までアーシア！ たまには私とイリナに譲ってくれてもいいじゃないか!!」

「え、私も!? あ、でもそうなれば主とミカエル様のためにもなるし……バツチ来いよ!!」

ゼノヴィアとイリナがそんなことを言ってくるが、しかしアーシアも譲らない。

即座にイツセーに抱き着くと、ぶんぶんと頭を振った。

「だめですう！ ベッドは私とリアスお姉さまの物なんですう!!」

徹底抗戦の構えである。自分の領域が侵されることには、誰しも拒否感を覚えるものであった。

なお、イツセーがリアスやアーシアと寢床を共にしている事実を聞いたクラスメイトが混乱を期待しているが、これどうしたものかと井草は記憶操作すら視野に入れ始めている。

しかも取り合いが勃発しているのまで知られたのはまずい。これは早く対処しなければ学園中に広まって大混乱だろう。

松田と元浜に至っては失神しかけるほどショックな様子だ。死ぬんじゃないかと本気で心配になってきた。

「はいはいとりあえず落ち着きやがりなさい。TPOをわきまえて喋りなせえ」

見かねたリムが止めに入るなか、イツセーは困り顔でしかし笑っている。

「ははは。ったく、モテる男はつらいってか?」

その声は調子に乗っている風にも見えるが、しかし事実をきちんと認識している。

どうやら、告白に成功したことで恋愛恐怖症をある程度払しょくできたようだ。

少し前なら、ただ女子がなぜか集まっているだけでモテているなどは考えなかっただろう。行為を向けられているという自覚すらなかったはずだ。

それが改善しただけでもいいことだ。やはり、トラウマの克服は同系統のプラスで相殺するのがいいのだろうか。

……いや、性的なトラウマをS○Xの経験で解決するのは良くないような気がする。

イツセーには自分の荷の轍は踏んでほしくないのです、ピスにはくぎを刺しておこう。

井草はそう決意した。

「……あ、なのです!!」

と、そこでニングがかばんを除いて声を上げた。

割と切羽詰まっている表情に、井草たちは何事かと警戒する。

まさか、禍の団がこっそり侵入して脅迫状でも仕掛けたのだろうか?

だとするなら大問題だ。すぐにでもアザゼルやリアスに連絡しなければならぬ状

「……学食で、食べるか」

「そうだねえ……」

苦笑いしながら、イツセーと井草が顔を見合わせたその時――

「――その心配には及びません」

と、教室のドアが開くと同時にメイド服が現れる。

「……メイドさん!？」

「メイドさんだと!? まさか、メイドカフェによる宅配サービスか!？」

「んなもんあるか! あったとしても学校で頼むか!!」

「つていうか、タイミング的に井草さん関係?」

クラス中が騒がしくなるが、そのメイドは半ば無視してニングのもとに近づくと、一

礼した。

「失礼しますお嬢様。昼食をお忘れになっていたので、お届けに参りました」

「ありがとうございます、シアリー」

恭しく一礼するメイドと、それをにこやかに受け止めるニング。

その光景に、誰もが目を見開く。

そして、集めまくっている視線を受け止めながら、そのメイド――シアリー・ルキフグ

スが一礼した。

「お初にお目にかかります。私はニング・プルガトリオ・ルシファー様付きのメイド、シアリー・ルキフグスと申します」

「『……………はい!?!』」

当然教室が大混乱になるが、しかし状況はさらに続く。

シアリーは軽いため息を付きながら扉の方に鋭い視線を向ける。

「むろん、お嬢様以外の方の昼食も届けに来ております。……五十鈴、早く入って配りなさい」

「は、……………はこ」

と、そこからさらに入ってくる人物。

軽く外にはねた、肩にかからない程度の髪を持つ、二十歳程度の女性。ついでに言う
と、当然のごとくメイド服を着ている。因みに弁当を満載した袋を手に持っていた。

単刀直入に言おう。恥ずかしそうに入ってきたのは五十鈴だった。

「『……………さくら』」

イツセーが思わず見とれる。微妙なギャップが逆に萌える感じだった。

絶望に沈んでいた松田と元浜も思わず見とれる形だった。下手にメイドとしてしつくり来ているシアリーではこの味は出せない。

だが、それがとあると男の逆鱗に触れる。

「普通のダンスです!! ニングと一緒だったし!!」

状況がやばくなる前に真実を暴露するが、しかし状況はさらに悪化する。

シアリーが何を言っているのかと小首をかしげ、しらっと告げる。

「問題ないではありませんか。サーゼクス様からは「立场上これは譲らせられない」とお嬢様を正室にすることは絶対条件としていますが、そもお嬢様がルシファーを受け入れたのは五十鈴とリムさんをあなたの妻に迎えられるようにするためなのですから」

「メイド長! (こ)日本! 一夫一妻が前提!!」

慌てた五十鈴が大声を出す、しかしもう遅い。

『……………へ?』

沈黙がいたい。

だが、もはや隠すことはできない。

というより、そもそもシアリーは隠す気が無いようだった。

「……ああ、そういうことですか」

しかしすれ違いの原因を理解したのか、はたと手を打った。

「説明いたしました。ニングさまはこちらの学生であるリアス・グレモリー様の故郷の国の王族の血を継いでいるのですが、わが国は一定の実力があれば一夫多妻も一妻多夫も認められています。ニングさまはルシファーを受け入れる条件として、此方の五十

鈴を身元保護を、私の以前の主であり、リアス・グレモリー様の兄君であるサーゼクス様に要求なされ、それは政府運営陣から了承されました」

……勘違いの方向性が見当外れだったが。

「あ、あはは……。ニングお嬢様のメイドとして更生活動中の枢五十鈴っていうの。井草・ダウンフォールとは幼馴染なので、以後よろしく……。――」

もうヤケクソ一步手前の表情で、五十鈴も一礼した。

それでも沈黙が響く。

「……シアリー。あとでジャパニーズセイザなのです。説教なのです」

「……何か失敗をしてしまったようですね。申し訳ありません、お嬢様」

後ろではニングがシアリーを正座させているが、もはや手遅れである。

そして、井草も腹をくくった。

「……王族に入り婿がほぼ確定の上に、ニング婚約者からハーレム結成の許可どころか下準備までされました。ニングもリムも大事にするし、五十鈴とはいちやつつもりなので今後ともよろしく」

否、これは自棄という。

「い、いいい井草!!? あの、ちよつと人前!!」

五十鈴は顔を真っ赤にしてしどろもどろだが、しかしそんな事をする資格もない。

ため息交じりに、リムがその肩に手を置いた。

「……数万人規模の見ている前でキスまでしといて何を今更ですかい」

「ああ、あれはなんていうか感動で涙出たなあ」

イツセーまで乗った。

……この後、流石にまづいので記憶操作がある程度なされたのは言うまでもない。

ロスヴァイセとリアスから説教された事も、分かり切っているが一応伝えておく。

「……で？ 俺に新しい仕事ってなんだよ、ホテップ」

「感謝しろ、ナイアル。汚名返上の機会だからな」

「ああ。任務にかこつけた処刑とかじゃねえといいんだがよ」

「それは安心しろ、お前は確かにオフェンスの一角だが、今回の作戦は大規模だ。お前はあくまで敵主力を抑え込んでくれればそれでいい」

「具体的に誰だよ」

「ああ、最上級死神プルートとタナトスを抑えろ。可能なら殺して構わんが、足止めができればそれでいい」

「……何する気だ？ ハーデスは曹操が話付けたんじやねえのかよ？」

「それがどうもキナ臭くてな。ハーデスはどうもそこからツテを得て、他の派閥と接触を行っているようだ」

「正気かよあの爺。ばれたら殺されても文句言えねえぜ？」

「現政権では難しいだろう。あの老人は冥府の神、迂闊に滅ぼせば人間界は大いに混乱する」

「自分の立場を的確に盾にする老害つて始末におねえなあ。俺が言う事でもねえけどよ」

「そういう事だ、だから、現政権にある意味で恩を売れるかもしれない」

「どの口が言うんだか。マジギレされるのが目に見えてるじやねえか」

「だが橋頭保確保という本命に成功しているとはいえ、このままイミテーションとやらで盛り上げ返されてもたままるまい？ それなりに冷や水をかける程度はしなくてはな」

「了解。で、いつ動くんだ？」

「まだ気を見計らっている状態だ。何分誰をどうそそのかしたのかも分からんのでな。だが――」

「そそのかされたバカが動いた時点で、ハーデスには報復の名目でこの世から退場してもらおう。6, 5以上のレベル到達者を総動員するぞ。準備だけは万端にしておけ」
「了解だ、司令官。しつかり手柄を上げて失態分を取り戻すとするぜ」

進級試験のウロボロス

1話

ニング・プルガトリオ・ルシファー付きのメイド見習い、枢五十鈴の朝は早いなにせ更生活動にして贖罪も兼ねてのメイドである。早朝から動くことになる。

今朝も日の出前に起きて庭と屋上、そして玄関前の掃除を行っている。

メイド長であるシアリーも共に掃除しているが、やはり年季の差があり要領よく自分の担当区域を終えている。こればかりは何年間も並び立てる気がしない。

それでも自分の仕事はかなり楽だろう。

本来なら、メイドがいるのなら家事はメイドなどの使用人が担当するものだ。趣味の範疇内ならともかく、普通のレベルで家事はしない。

だがしかし、兵藤夫人はもちろん、ニングやリアスも家事に関しては協力する方針を譲らなかった。

シアリーは多少難色を示したが、これも人柄だと判断して割と早めに折れてくれた。最もその分普通の家レベルの家事からさらにグレードアップし、グレードアップ分を二

人が担当する形になった。プライベートに関与しない共用スペースはシアリーと五十鈴によって毎日掃除するといった形だ。

しかしそれでも大変ではある。

なにせ兵藤邸は事実上のビルディングである。地方都市である駒王町では、駅前ビルやマンションでもここまでの階数はないだろう。必然的に面積もかなりある。

これだけの建物を家人だけでやっているのもすごいことだ。実際掃除だけでもかなり時間がかかる。清掃業者かというぐらいやってる。

それに人数も多いので、食事の下ごしらえなどでも時間もかかる。ぶっちゃけあの人数をメイド二人でやる方が問題だろう。そも五十鈴はメイド見習いである。

結果的にいいバランスになっただろう。伊予も目が覚めたら眷属悪魔兼メイド見習いになることが確定なので、仕事の数も減ってバランスも良くなるはずだ。

そして、なんだかんだでこの仕事はやりがいがある。

そして、五十鈴は伸びをして空を見上げる。

玄関前の掃除を完遂することには、太陽もそこそこ上っていた。

「うん、とてもいい朝ね」

兵藤邸での生活は、普通のメイド業務とは大きく違う。

というより、基本一般市民の出である一誠の両親にある程度合わせて、シアリーが妥協した形である。

具体的には、基本的に朝食と夕食はみなと一緒に取ることだ。

「……すいません、おかわり」

そして五十鈴はご飯のおかわりを求めた。

さすがにメイドとしてアレである。ちなみに五十鈴は懲罰活動としてメイドしているので、面の皮が厚く見える。

だがしかし、どうしても食べる量が多くなってしまふ。

「はっはっは。どんどん食べていいよ五十鈴さん。いつも掃除とか下ごしらえとかやってくれてるんだからね」

「そうそう。今までの分、思う存分おいしく食べてね」

兵藤夫妻はむしろそれすら求めている節がある。メイドとしての最低限の品格は求めるシアリーも止めたりしなかった。

「……五十鈴、おいしい?」

「おいしいけど、井草が言うことじゃないんじゃない？」

井草ににこにこことほほ笑まれながら見られると、さすがに気恥ずかしい。

というより、気づけば全員からにこにこ笑顔を向けられている。

気分は親兄弟に可愛がられる最年少だ。ぶつちやけ未成年だらけの兵藤邸において、自分とは上位同率四位の二十歳組なのでちよつと恥ずかしい。

だがしかし、居心地が悪いわけではない。

というより、この家はとても居心地がいい。

『なんていうかね？ やっぱりご飯は一緒に食べたほうがおいしいじゃない？』

『正論なのです。此処にいる時ぐらいいは一緒に食べるのですよ。……命令ということ』

などと兵藤夫人に言われてニングが納得したことで、ニング専属のメイド見習いとして兵藤亭の家事を手伝って数日で食事を同じ時間に取りようになつた。

そして、五十鈴は久しぶりに手料理というものを食べた。

味の記憶を残すことができなほどに、あつたかかったことばかりが記憶に残っている。

食べ物の温度のことではない。心のぬくもりだ。

特にその日の食事は、兵藤夫人が五十鈴たちが気に入るように丹精込めて作ったそう

だ。

思いやりがこもっていた。喜んでもらえるようにという心遣いがこもっていた。新しい家族に対する歓迎の気持ちがかももっていた。

だからだろう。五十鈴はボロボロと涙をこぼしてしまった。

人としてのぬくもりがかももった食事。家族に対する愛情がかももった食事。そんなものは四年ぶりだった。

その四年間、五十鈴は人としての情など向けられない世界で、悪として恨まれるためだけに生きてきた。

だから、心のぬくもりなど与えられたことはない。食事だって、そもそも楽しむことろくにできない。楽しんだり味わったりなど、形だけだ。

脱走後は食事を楽しんだこともあるが、それだって店舗での食事だ。こうして、家族として食卓を囲んで食べたことはなかった。

だから、心に沁みてしまった。

涙をこぼしながら、ガツガツと掻き込んだことを覚えている。味わうためではなく、感じ入るために何杯もおかわりしてしまったことを覚えている。

それのようすだけで、兵藤夫妻は何かを察してくれたのだろう。事情を知っている井草たちはもちろん理解している。

それ以来、五十鈴はおかわりを止められないし、しないとむしろ心配されてしまう。それにメイドの仕事は結構ハードだ。朝からガツツリ食べておかないと体がもたない。言い訳とかではなく本当におなかがすいてしまうのだ。

心と体の二重の意味で、この食事はとても抗いがたい魅力を持っていた。

「やつぱり若い子は元気が一番ね。たくさん食べて大きくなつてね？」

「いえ、あの奥様、私もう成長期は過ぎてますから」

さすがに今から急成長は無理だと思ふ。

そう兵藤夫人に一応行つてみるが、しかし夫人はにやりと笑うと井草の方をちらりと見てから、五十鈴を見る。

「いやねえ。胸の話よ」

「……ふぐおっ！」

むせた。思いつきりむせた。

かろうじて米粒を吐き出すのだけは根性で耐える。しかしそのせいで気管に入りまくった。

かろうじて耐えてお茶を飲んで人心地付くと、怒るに怒れないので一誠に視線を向ける。

むろん、ジト目である。

「……アンタのご両親なのが、すごく納得できたわ」
「うん。俺も時々血を自覚する」

慌てるなり怒るなりするかと思っただが、納得された。

むしろ少し遠い目をしている節がある。どうやら彼自身思うところがあるようだ。

しかし一瞬自分の胸を見ながら、考える。

自分は胸は人並み以上にある方だろう。だが、もつと大きくなる可能性はあるかもしれない。

というより、相対的に見て兵藤邸では比較的小さい気がする。Cは確実にあるはずなのだが、それでも足りない。貧乳に錯覚してしまう。

というか、巨乳が多すぎるのだ。何だこのバスト頂上決戦邸宅はとツツコミを入れたい。

リアス・グレモリーに姫島朱乃、ロスヴァイセなどの三強には勝ち目がない。さらに中堅どころのも普通に大きい部類だろう。小さい組はそもそも体格からして小ぶりなので、そもそも問題にならない。

……なんだろう、一人女として損している気がしてきた。

ちらりと、井草を見る。

「井草は、大きい方がいい？」

「大小の問題じゃない。持ち主のことを俺が好きかという問題だよ」

即答ですごいセリフが来た。

真顔でとんでもない発言だった。しかも真面目にかつ、さらに続ける気なのか、箸をおいた。

そして井草は、一度うなづいてから五十鈴をまつすぐ見直す。

「好きな女の子の胸のサイズが好きな胸だね。つまり、俺は胸のストライクゾーンが広い」

「いやあん」

リムがわざとらしくうれしがるが、そこはあえてスルーする。

たしかに、ニングとリムは体格通りの小ぶりの胸だ。しかし伊予は四年前から今の五十鈴より大きかった。ピスに至ってはこの場で一番大きい朱乃より大きいかもしれない。

つまり、食事中に言う言い方ではないが相手の胸には反応できるということだ。

そして、井草は五十鈴の手を取ってさらに告げる。

「だから、五十鈴の胸も大好きだよ」

それは五十鈴のことが大好きだということの裏返しである。

真顔ですごいこと言ってるのけている。とんだジゴロもいたものだ。

思わず一同全員真顔になった。此処まで真顔で惚れ気を語れる男もそうはいないだろう。ホームステイ先でやっているということを考えれば、むしろ厚かましいほどだ。

というか、概要だけ説明すればホームステイ先で婚約者のメイドをセクハラじみた発言で口説いているようなものだ。此処だけ聞けば最低一步手前の発言である。

おこるべきか照れるべきか一瞬悩むが、しかしそれより先にニングがほほ笑んだ。

「よかつたのですね、五十鈴」

「お、お嬢様？　いま、私はお嬢様の彼氏に言い寄られてるんですけど？」

すさまじく起こるところではないだろうか。

だが、ニングはむしろ嬉しそうだった。

「井草さんが五十鈴と幸せそうにしてるのなら、ルシファーを受け入れたかいはあるのですよ」

裏のない笑顔で言われれば、反論もできない。

このいい人すぎる少女が、暗部出身だとは信じられない。さらには王族の責務を背負うのは大変だろう。

それを、それだけではないといえど五十鈴と伊予を救うために背負う覚悟を決めたのだ、彼女は。

そのおかげで自分はここにいます。井草と一緒に食事をするだなんて、幸せなことがで

きている。

……仕えるに値する主人を持ったと、五十鈴は胸が熱くなる。

「あらあら、お熱いことね」

と、その様子を見ていたリアスが苦笑した。

そして一誠の隣に座ると、そのまま弁当箱を手渡す。

「はいイツセー。あなたのお弁当ね」

「助かります、リアス」

こっちはこっちでいちやつき始めている。

自分が生き返った直後ぐらいのタイミングで、こっちはこっちで大告白をぶちかまして。そうだ。

因みにその次の日の新聞やメディアは、大体四種類に区分けされている。

一つはニングのルシファー就任および、彼女の政策である ディアボロス・ダウンフォール・ボトム D B について。

一つは、井草とニングの堂々としたいちやつきからくるスキャンダルのなもの。

一つはイツセーによるリアスの告白という、「リアルでおっぱいドラゴンとスイッチ姫がくつついた」というスキャンダルのなもの。

そして最後が、井草と五十鈴の愛の告白である。

乱入時の流れからすぐく勢いで注目を浴びており、更には最後の最後で思いつきり抱き合つてキスマまで交わしたのである。そりや注目されると自分でも納得だ。

その前に井草はニングとキスをしているが、しかしこちらは事後処理がまだ白熱していて、そちらに気を取られている者も多かつた。ちやつかりそちらもテレビに取られていて番組で引つ張りだではある。

しかし大トリを飾つた自分の方が注目されている。ニングに仕える眷属としては、見せ場を奪つて申し訳ないと思うべきか、それとも恥を持つてやったことを誇るべきか、マジモードに入るぐらい考えこむ。

話を戻そう。とりあえず、兵藤一誠の愛の告白は、その後改めて行われて成立したらしい。

まあ、禍の団でも「こいつらくつついてるだろ」と思われていたので、むしろまだ告白してない事実逆に驚いたが。

それ以来一時的にリアスのターンになっているらしく、一誠のお弁当はリアスの手製になっている。それまでは主体的に料理ができるメンバーが交代で作っていたらしいので、割と優遇されているだろう。

それを見ていると、なんだかほっこりする。

こういう関係は、いい関係のまま続けばいいとしみじみ思う。

「井草」

「うん」

井草も同意見だったのか、同じく言葉少なくなつていた。

これは、守られるべきものだ。

少なくとも、ナイアルのような外道が触れていいものではない。

「頑張つて守らないとね。こんな風景はさ」

「ああ。俺たちみたいにさせちゃ、いけないよね」

二人は同時に決意すると、そう頷きあつた。

「そういえばイツセー？ 孫はいつ見れるのかしら？」

「奥様!! さつきもそうでしたが結構下世話ですよ!」

いや、守らなくてもいいものも混ざっているかもしれない。

五十鈴はそんなことを思うが、居心地がいいのもまた事実。

あと数年ぐらいこの家で暮らしたいと、心からそう思った。

2 話

そして、枢五十鈴はトレーニングを積んでいる。

一通りの掃除が完了して、ある程度空いた時間ができたからだ。

忘れてはならないが五十鈴は罪人である。メイド業務とそれで稼いだ給金による賠償金支払いで罪を償っているのだ。

彼女はニング・プルガトリオ・ルシファアの眷属悪魔だが、同時に罪人。ニングの運営する懲罰部隊 ディアボロス・ダウンフォール・ルシファア D D B のメンバーである。大絶賛、刑罰執行中である。

なので、一般人と同様の自由を与えるわけにはいかない。それはもはや罪人ではない。

とはいえこれが懲罰になるのかといえれば疑問も残る。

なにせ彼女は、ある意味では広義のグレモリー眷属として活動している。

日中は学生として活動し、昼はリアス・グレモリー眷属の活動と混合されているといつてもいいオカルト研究部。そして夜は悪魔としての活動を行っている、リアス・グレモリー眷属の外部メンバー扱いである。立ち位置としては堕天使側所属の監視員である井草・ダウンフォールや、天界・教会からの派遣スタッフである紫藤イリナやリム・

プルガトリオに近い。

そして、彼女たちは空いた時間で、己の高める訓練を欠かさない勤勉な者たちである。流れるに、五十鈴もまた特訓で時間をつぶすことになるのは懲罰とはいいいがたい気もする。

「……お願い……マッスル……筋肉に……相談だ……っ」

「やるわね五十鈴！ 私も負けてられないわ！」

なので筋トレである。因みに今日はリアスもしていた。

基礎体力は重要である。あつて役に立たないことはないし、戦闘を行う職業なら、むしろ必須な能力といってもいい。

なのでオカルト研究部員はみな鍛えている。彼女たちはこう言った鍛錬を恒常的に積んでいるのだ。

因みに、井草たちは重りを身につけた状態でランニングをしている。

へたな学生の短距離走を超える速さで走っている。これを恒常的に行えるというだけで、基礎体力の高さがよくわかるというものだ。

五十鈴は感心しながら、とりあえず腕立て伏せを続ける。

「リアス様？ 悪魔的に……この地道な……訓練って……どうなんですか……？」

「あら？ こういう、トレーニングが、勝敗を、分けるんじゃないっ」

嫌味を言ってみたつもりだったが、通用しない。

こういう地道な積み重ねを怠らないからこそその強さだと自負しているリアスからしてみれば、こんなものは当然だ。

だからこそ生き残ってきた。だからこそ勝ち残ってきた。だからこそ、栄光をつかんできた。

その自覚があるからこそ、日常の鍛錬をおろそかにする気などかけらもなかった。

「健全な精神は健全な体に宿るって言うでしょう？　そういうものよ」

「それ誤用です、リアス様」

一応相手は貴族なので敬語を使う五十鈴だが、間違っているところはしっかりと告げる。

とはいえ、悪い生活では断じてない。

そう、悪くないのだ、こういう生活も。

「……昔、努力ってカッコ悪いって思っていました」

五十鈴はかつてそう考えていた。

才能がないものがすぎる、泥臭い不器用な生き方。そう思っていた。

だからこそ、隠していた。だからこそ、ばれたくなかった。

だけど、井草はそれを知っても五十鈴をバカにしなかった。

だからだろう。堂々と人前で努力しているのに、五十鈴は悪い気がしていない。そんな五十鈴に、リアスは何を言っているのかといった表情を浮かべる。

「……一生懸命頑張っている人は、すてきだと思っただけれど？」

五十鈴が道を誤ったと自覚していることを知っているから強い語彙ではないが、しかしそこは譲れないとばかりにはつきり言った。

ああ、そうだろう。

彼女たちはそうだからこそ、まっすぐいきれたのだ。

そんな彼女達が井草の傍に居てくれて、本当に良かった。

そう思い、五十鈴は苦笑する。

「……今なら、本心からそう思えます」

その苦笑は、本人が思うよりかはよっぽど素敵な笑顔だった。

「はい！ それじゃあ、アウトアイツについて説明するわよ！」

と、トレーニングで疲れた体を休めている間に、五十鈴が講義する。

講義の内容はシンプル。イーツとアウターイーツの違いについてだ。

「イーツの上位互換がアウターイーツ。これはもう想像できているわね？」

ムートロンからかすめ取った、五十鈴が知りうる限りのイーツに関する知識。それを五十鈴は井草達に伝える。

それが将来の戦いの役に立つと、心から思っているからだ。

「じゃあ聞くけど、バイアクヘーイーツのアウターイーツでの立ち位置は何だと思う？」
その言葉に、イッサーが勢いよく手を上げる。

「はい！ 量産型だと思えます!!」

「正解！ だけどたぶん勘違いしてるわ」

そう、その考え方は間違っていない。

だが、同時にどこまでも間違っている。

この勘違いはアニメ文化に慣れているからこそだろう。量産型という意味そのものを勘違いして言うのだ。だから勘違いにも気づかない

なので、五十鈴はその勘違いを質す事を目指す。

「たぶんだけど、量産型って言葉のイメージが間違ってると思うわね」

「どうしてですか？ 実際、バイアクヘーイーツはE Eレベルが6，5の人達が多用して
ますよ?」

ギヤスパ―が首を傾げるが、五十鈴はそれに対して首を振る。

まあ、やはり勘違いしているようだ。この勘違いはいつか致命傷になりかねない。なので、五十鈴は自分を指さして問いかける。

「じゃあ聞くけど、私がバイアクヘーイーツじゃなくてハストウールイーツなのはどうして?」

「……ハストウールイーツがバイアクヘーイーツの更に下位互換だからじゃないんですか?」

理知的な木場祐斗ですらこれだ。どうやら勘違いは大きいようだ。

早いうちに是正できるチャンスが巡って来て良かった。下手をすれば、この精神的な間隙を突かれて大打撃を受けていたかもしれない。

なので、五十鈴は指を立てる。

その勘違いは是正しなければならない。

バイアクヘーイーツは決して弱いアウトアイーツではない。もちろん、ハストウールイーツやクトウグアイーツも弱くない。クトウルフイーツやアザトースイーツがそれらより強いわけでもない。

それを、教え込まねばならない。

「私のハストウールイーツは大気圏内の万能性じゃあバイアクヘーイーツより上よ。な

にせ大気を操作できるもの。大気のあるところじゃ汎用性が絶大」

「確かに、何でもありの多種多様な手段でしたわね」

「……万能」

姫島朱乃と塔城小猫がそれに気づく。

そう、そこに気づいてくれたのは僥倖だ。

「アグレアスでナイアルも言ってたでしよう？ 早さならハストウール私イーツの方が上つて。あれはクトウルファイツが砲撃戦闘特化な事もあるけどね」

そう前置きしてから、五十鈴は続ける。

「そしてアザトースイーツはエネルギー精製能力に特化してるの。クトウグアイーツは単純なパワーね」

そう説明する五十鈴は、そこでまっすぐに全員を見渡して告げた。

「じゃあ質問。兵器に必要なのはいったい何かしら？」

まずそれを聞き、そして返答を待たずに続ける。

「圧倒的な火力？ 真似できない特殊能力？ それとも、多種多様な武器？」

その言葉に、何人かはそのどれかを想像した。

確かにそれは仕方がない。それは、自分達や敵―すなわち強者―の持つ強みに一つだからだ。

だからこそ、その勘違いに気づいたのは、そうではない人物だった。

「……なるほどな。そういう事か」

アザゼルが、納得いったかのように頷いた。

その視線を集めながら、アザゼルは目を閉じる。

「……それらはあくまで「強い」からこそ意味がある。ムートロンはそう結論したのか」
その言葉に、五十鈴は頷く。

「絶大な火力は、当てられる腕がなければ意味がない。真似できない特殊能力もそれを生かす技量がなければただの手品。多種多様な手札も、それを運用できる判断力がなければ役立たず。……ムートロンはそう考えたわ」

そう告げ、五十鈴はムートロンの考え方を告げる。

「強者の武器に最も必要なのは、使用者の実力を最大限発揮する事ができる基本性能。そして、広大な空間戦闘では機動力こそが必須。……それがバイアクヘーイツが最も数多い理由よ」

そう、バイアクヘーイツは決して弱くない。

むしろ兵器として優秀だからこそ選ばれたのだ。それが大量生産された最大の理由である。

攻撃力はムートウエポンで対応すればいい。基本的に強ければ、特殊能力などという

手品に頼る必要もない。多種多様な手札がなくても、普通に強ければ十分勝てるのだ。兵器に必要なのは生産性・信頼性・操作性・安定性。そして空間戦闘に重要なのは大きな宇宙空間に対応できる機動力。

それこそが、ムートロンの結論である。

大量生産される兵器は決して性能が低いのではない。むしろ兵器として優秀でなければ、大量生産など基本はされないのである。

ガンダ○で例えるならザ○Ⅱだ。ザク○ヤノンやゴ○グなどの局地戦用兵器は、F型やJ型ほど生産されてない。それが答えだろう。

「私の権限外だから詳しくは知らないけど、ナイアル以上の戦闘能力を持つ序列19位以上にも、バイアクヘーイーツの使い手はいるわ。そこは勘違いしないように」

五十鈴の言葉に、井草も納得した。

「納得だよ。コカビエルさんも特種能力とかないけど、普通に墮天使最強格だからね」
「あー……。確かにコカビエルって強かったよなあ」

イツセーも納得したかのように頷くと、ふと気づいた

「あ、つまりアウターイーツって太陽○搭載機みたいなもんで、バイアクヘーイーツはGN○Xみたいな感じ？」

「……的確な例えね。メタだけど」

ちやうどその世代だったので、五十鈴は理解できてしまった。

それぞれが役目を持ち得意とする戦闘スタイルを持つていたソレスタルオーイングの○ンダム相手に、基本性能においては同等という稀有な量産機だったGN〇X。しかも操縦性や生産性においてはむしろ格上といってもいいところがあった。

「……ロボットアニメとか、見てみた方がいいのかしら？」

ついていないリアスがそう聞くが、井草はその肩に手を置いた。

「迂闊に踏み込まない方がいいよ。あそこ、ブラックホール並みに吸引力がある時あるから」

のちにとあるマニアによって結局引きずり込まれる事を悟っていない、虚しい発言である。

そしてトレーニングも終わった深夜。

食器洗いなども終えた五十鈴は、自室で黙々と作業を行っている。

具体的にはペタペタと値札シールを張っている。
はつきり言おう。内職である。

「お疲れ様、五十鈴」

そんな五十鈴にお茶を持ってきながら、井草はニコニコと微笑んだ。

そんな井草に、五十鈴は苦笑しながら微笑む。

「残業している妻を支える主夫みたいね」

「それはそれでいいね。俺、家事は人並みにできるし」

そんな事を言い合いながら、五十鈴は井草からもらったお茶を飲んで一息つく。

一時間ほど内職をしていたが、しかしメイド業務と訓練を積んだ上なので、ちよつと疲れる。

こういった一息つく時間帯が、とても心安らぐリラックスタイムだ。

「ありがとう、井草」

「どういたしまして」

たがいに微笑みあう二人は、そのままお茶の入った湯飲みを片手に隣り合って座る。

あまりしゃべらない。その必要もない。

二人でいる時間。それだけでも、二人にとって価値があった。

そして、静かにお茶をすすりながらまつたりし、五十鈴は井草の肩にこてんともたれ

かかる。

井草がそれを嬉しそうに受け入れてくれたことがうれしくて、五十鈴もにっこりと笑ってしまふ。

「頑張ってるよね、五十鈴」

「まあ、罪人の自覚はあるもの。罪滅ぼしはしないとね」

そう、この内職は小遣い稼ぎのためではない。

この内職で稼いだ資金は、禍の団の活動で損害を受けた様々な場所に復興支援金として届けられる。

これまで井草が恨んでくれるように頑張り、テロに関わってきた五十鈴なりの贖罪だった。

「……偽善かしら?」

「それでも、やるんでしょ?」

短く沿う言葉を交わすと、そのまま無言で時間を楽しむ。

……五十鈴にとって、この時間は癒しだった。

井草・ダウンフールという愛する男性が受け入れてくれている。そんな時間がある事が嬉しい。

そしてまったりしていると、コンコンとドアがノックされる。

そして入ってきたのは、主であるニングと同僚であるリムだった。

「あ、井草さんいたのです!」

「やっぱりこつちでやしたねえ。……五十鈴、ずるいですぜ!!」

そんなことを言い合いながら、二人は犯しを片手に部屋に乗り込む。

どうやら内職をしている時間ではなくなったようだ。まあ、過去のような自家中毒を避ける為にも、息抜きする時間は必須なのでいいだろう。

そんな事を思っていたら、なんか大型の狗っぽいのがニングに寄り添って入ってくる。

よく見ると見覚えがある。具体的には、サイズが遥かに大きいのと、かつて殺しあった事があるような気がする。

「ほら、スコルにハティも挨拶するのです」

……まさにそのものだった。

「ワン!」

「バウ!」

元氣よく挨拶された。

五秒ぐらい思考が停止しかけたが、とりあえず冷静さを取り戻して片手をあげて質問の態勢をとる。

「お嬢様？ そいつら、なんでいるんです？」

五十鈴からすれば当然の疑問だったが、ニングは首を傾げた。

「従えたのなら面倒を見るのです。当然の義務なのでは？」

「……あ、私、同じ扱いですか？」

狼扱いされている事にショックを受けるべきか、主の懐の深さに感動するべきか。

井草とリムはちよつと苦笑していたが、しかし深く踏み込んだりはしなかった。

「ルシファーを継いだので使い魔という認定なのです。今日から兵藤邸の番犬なのです
よ」

「メイドとドーベルマンが追加とか、本当に豪邸と化してきましたねえ、ここ」

一般気質の兵藤夫妻は大丈夫だろうか。などとなんとなく思ってしまう。

そんな事を思っていたら、今度はシアリーまで入ってきた。

「お嬢様。お茶会でしたら呼んでくださいませ」

「……シアリーは混ぜてくれないので居心地が悪いのですよ」

「……………そういう事でしたら、まあ、少し嗜むぐらいは」

そんな会話をしている主従を見ていたら、井草の膝の上にリムが乗った。

そして、井草と五十鈴の視線を浴びながら、にっこりと笑う。

「ルシファー眷属とその旦那とで、困らんでもしまししょうや。今グレモリー眷属はベッ

ドの取り合いをしてやがりますしね」

その言葉に、井草は苦笑してリムを抱きしめる。

「なるほど。じゃあ、徹底的にいちゃつこうか」

そんな二人の周りを、スコルとハティが小走りで回る。

そんな光景を見て、五十鈴は自然と笑みがこぼれた。

……罪人とは思えないぐらい幸せな日々。こんな日々が何時までも続いてほしいとは思わない。

何故なら、ここには伊予がいないから。

行仁伊予と含めたうえで、思う存分楽しみたいと五十鈴は心からそう思った。

3話

そしてそんな日が続いたある日の深夜。

現悪魔政権の魔王である、サーゼクス・ルシファーが兵藤邸に妻であるグレイファイアを連れて訪問してきた。

オカルト研究部のメンバーは全員集合。離れたマンションで生活している祐斗とギヤスパーも来ての体制だ。

そして皆が集まってから、サーゼクスは切り出した。

「さて。以前にも説明したが、イツセイ君達に昇格の話が出た」

そう、今回は基本的にその話である。

赤龍帝、兵藤一誠。聖魔剣、木場祐斗。雷光の巫女、姫島朱乃。

グレモリー眷属からこの三名が、中級昇格試験の受講資格を得たのだ。

まだ未成年の上級悪魔の眷属としては異例の事態と言ってもいい。そもそも中級に昇格できる悪魔がそこまで多い方でない事を考えれば、奇跡と言っても過言ではないだろう。

だが、同時に当然と言ってもいい。

神の子を見張る者の幹部、コカビエル。

歴代最強になると言われる白龍皇、ヴァーリ・ルシファー。

禍の団主力派閥だった旧魔王派の運営人、先代魔王末裔三名。

アースガルドの過激派勢力、悪神ロキと神喰狼フェンリル。

神滅具を多数保有する、禍の団の英雄派。

規模だけなら現魔王派すら超える、ビルデ率いる大魔王派。

そして、外宇宙から舞い戻ってきた、主神クラスすら保有するムートロン。

その数々と激戦を潜り抜け、そして生き残り勝ち星すら上げた事もある。

そのグレモリー眷属が昇格する。これは当然と言えば当然と言っていい褒章だった。

「本来ならイツセー君達は上級悪魔の試験すら受けてもいいのだが、一応規則なので、中

級悪魔からという事だ」

「ま、近いうちに他の連中も中級昇格試験ぐらいは受けれるようになるだろうさ」

サーゼクスとアザゼルがそう告げ、そして井草達も頷く。

「まあ、龍王^{エレベル6,0}クラスの私や五十鈴相手に戦闘を成立させてるんだもの。全員上級扱いで

も妥当なぐらいね」

かつて敵対していた観点から、五十鈴もそう認定する。

しかし、イツセーは少しまだ戸惑っていた。

「でも試験があるんでしよう？ 落ちたら資格取り消しとかありそうで怖いんですけど……」

「それは大丈夫、余程の事がなければ再受講はできるよ。イツセー君のような人柄なら受験資格を奪われる事はないだろう」

サーゼクスはそう太鼓判を押すが、イツセーはまだちよつと心配そうだ。

悪魔になつてから一年足らずの新米悪魔。そんな自己認識がイツセーにあるからだろう。不安というか実感が湧いていないのだ。

それに気づいているのか、サーゼクスはにこやかにイツセーの肩に手を置く。

「大丈夫だ。冥界のヒーローであるおっぱいドラゴンである君は、十分昇格の資格がある。胸を張り給え」

逆にイツセーは遠い目をした。

特撮番組のモデルになつているのが、昇格資格に関わっている。その辺が想像できていないのだと思われた。

流石は多芸なものが多い上級悪魔業界。芸能人としての実績も昇格に必要なだとはちよつと驚きかもしれない。

井草は苦笑しながら、イツセーの肩に手を置く。

「大丈夫だよ。イツセーは上級墮天使墮とまともに戦えるんだから。むしろ下級のままで色々困る人が多いと思うよ？」

「そ、そうですか？」

イツセーはそう答えるが、しかしそうだろう。

今だ血統主義が運びついているとはいえ、能力主義も同時に併発しているのが悪魔業界だ。

そこに、ライザー・フェニックスやデオドラ・アスタロトなどの上級悪魔を撃破してきたイツセーだ。しかも魔王クラスに届いたシャルバ・ベルゼブブなども撃退している。

いつまでも下級悪魔のままだと、逆に政権がたたかれる恐れだつてある。

普通に上級昇格になつてもおかしくないが、そこはまあ規律である。

特例や横紙破りは最小限に抑えなければ、法治国家と同等の勢力である悪魔社会がうまく機能しない。おそらく短時間で上級昇格試験の受験資格を貰えるだろう。

すでに単純戦闘能力なら最上級クラスに届くのだ。そんな存在を下級悪魔にしたままというのも非難されかねない。

ましてやあのビルデ・グラシヤラボラス・サタンに一発かましたのだ。そんな英雄をふさわしい地位につけるのは、血統主義の大王派もそこまで躊躇はしないだろう。

リアスも心から当然と思っているのか、微笑みながらイツセーの手を取り、朱乃と祐斗にも笑顔をむける。

「昇格推薦おめでどう、三人とも。私も主として鼻が高いわ」

その言葉に引つ張られるように、次々とオカルト研究部の仲間達はイツセー達を褒め称える。

「……イツセー先輩なら、当然」

小猫もそう褒めるが、どこか様子がおかしい気がする。

井草とイツセーはふと気になるが、しかしサーゼクスは苦笑しながらイツセーに告げる。

「悪魔になりたてのイツセー君が不安を覚えるのも分かる。だけど、おっぱいドラゴンである君の昇格は、冥界の未来を明るくすると思っっている」

そう告げ、そしてサーゼクスはまっすぐにイツセーを見つめる。

「早すぎると思うが、君なら中級悪魔としての責務をこなせると信じている」

「——っ」

イツセーは息をのむ。

最強の魔王。現ルシファー。

そんな立場のサーゼクスが、イツセーにそこまで期待を見せている。

それを受け止めて、イツセーは覚悟を決めて頷いた。

「わ、分かりました！ 俺、中級昇格試験を受けてみます！」

その言葉に、その場にいた皆が微笑んだ。

「ま、そう言うと思ってたぜ。で、朱乃と木場はどうするんだ？」

そうアザゼルが聞くと、二人はむしろ気負ったところを見せずに平然と頷いた。

「リアス・グレモリー眷属の騎士ナイトとして、謹んでお受けいたします」

「私もグレモリー眷属の女王クイーンとして、お受けいたしますわ」

この反応にイツセーがこっそり安堵している。一人で試験を受けるのは不安だったらしい。

「おう。じゃ、来週冥界で昇格試験な」

「早っ!？」

アザゼルが告げた内容にイツセーが驚いた。

まあ、昇格資格を得て次の週にいきなり試験は人間界では少ないだろう。

この辺、冥界と人間界の文化の違いがつけて見える。

ちなみに、駒王学園の中間テストも目前に迫っている。もうすぐテスト週間だ。

とはいえ、二足三足の草鞋を履く事など異形社会では珍しくない。この程度やってのければ、上級悪魔など夢のまた夢なのも事実だ。

「確か、中級昇格試験は実技と座学とレポートでしたわね」

「実技はともかく、レポートに時間がとられそうですね」

朱乃と祐斗がそう言葉を交わし、イツセーは首を捻る。

「じゃあ実技を頑張らないとですね！俺達、一番点が取れそうですね!!」

沈黙が響いた。

「いや、いらねえだろ」

アザゼルがそう言い切る。

イツセーはどうも驚いているようだ。

しかし全員同意見だ。もちろん、アザゼルにである。

ことイツセーにおいては実技試験の練習は不要だろう。必要がないというか、どう考えても筆記とレポートに時間を割くべきである。

なにせイツセーは既に最上級悪魔クラスの戦闘能力を發揮できる。ともに戦えばオカルト研究部関係でも最強だろう。単純性能で張り合えるのは、井草ぐらいで、それでも一段劣っている。

そんなイツセーなら実技は確実に成果を上げれる。なら、慣れていない筆記などに時間を割くべきだ。

「イツセー。中間テストもあるんだからね？」

「はい！ だからこそ点が取れる実技に時間を割きたいです!!」

井草の意見に的外れな返答が返ってきた。

……流石に冗談のセンスがなさすぎではないだろうか？

井草達は苦笑するが、イツセーはきよんとした表情を浮かべていた。

さて、そんな異形活動とは別に日常を送るのも井草達である。

そして、そんな中でも皆が強くなる為の訓練も欠かさないのが井草達である。

例えば、ロスヴァイセは戦車^{ルック}としての特性を高める為、アースガルズに防御魔法を習得するべく一旦戻っていった。

ちなみに中間テストの準備は万端である。流石は才媛。

朱乃は墮天使の特性を高める為の装備を用意しようとしている。

墮天使に対する翻意を乗り越えた朱乃だからこそできる事だ。彼女の成長がうかがえる。

ギヤスパーもまた、仲間達と共に肩を並べる為に朝練をこなしている。

これまた、神の子を見張る者に中級昇格試験前後に向かう予定だ。彼もまた人間的に成長しているようだ。

そして、イツセーにはレイヴェルがマネージャーとして付く事になった。

これまではグレイフィアがグレモリー眷属のスケジュール管理をしていたが、専属マネージャーがついた形だ。リアス達にも専属につける話はあるが、イツセーの場合は「おっぱいドラゴン」の業務がある為、優先順位が上になるという事だろう。

「……私でいうシアリーみたいなのですかね」

「みたいだね。まあ、忙しいならマネージャーは必須だもんね」

と、井草はニングと共に屋上で昼食を食べながら、そうまとめる。

ちなみにリムはいない。明日はリムと二人で昼食を食べる予定だが、順番は形式上の主を立てたらしい。

「でも、ジエームシリーズには驚いたよ。まさかエボリューションエキスの疑似量産に成功するなんてね」

井草はそう苦笑する。

エボリューションエキスの研究が一気に進んだ事は知っていた。

五十鈴が脱走時に横流ししたエキスによって、研究が大幅に進んでいたのだ。いずれ時間をかければ三大勢力でも実用化されるのは予期していた。

だが、流石に五十鈴が脱走してから一か月経たずに完成するとは思わなかった。ニングはくすくす笑うと、変身のイミテーションエクスを見せる。

「あくまで疑似再現なのですけどね。人工神器の技術の併用しているのですよ」
そう言いながら取り出すのは、バックルのついたベルトだ。

まるで特撮の変身ベルトのような形状をしている。そして、笑える事に機能がまさにそれなのだ。

「このレセプタードライバーと組み合わせる事を前提に使用するイミテーションエクスで、戦闘能力を底上げするのがジエームの基本設計なのですよ」

エボリユーシオンエクスを参考に、強化外骨格として再設計したのがジエームシリーズだ。

受容の器のデータを基にして開発されたレセプタードライバー。それにイミテーションエクスを挿入し変身するのがイミテーションイーツにしてジエームシリーズ。

特殊能力などはないが、その分戦闘能力に特化し、更にレセプタードライバーとの連携が前提なのでEレベルも一定値までなら疑似的に高められる。

そのEレベルは五十鈴が言うにはムートロン全体の平均値である3, 0。ムートロンの軍人は4, 0以上が基本値なのでまだ低いし、しかも戦闘要員と成ればもつと高いが、それでもだいたい追いついた。禍の団やムートン同盟のイーツ変身者全体とほぼ互角だろ

う。

コストパフォーマンスでは大きく劣るが、それでもだいたいぶ対抗できるだろう。軍事兵器として運用するなら、高くなるのもある程度は許容できる。

「近い将来起こるムートロンの本格侵攻までには、国連加盟国に一定数以上配備する準備は進めているのです。私とリムはプルガトリオ機関の任務でテスターをやっていたのですよ」

「ニング、何気に何足も草鞋履いてるよね」

教会暗部。ルシファアの末裔。そして学生。

三足も草鞋を履いている。十代の少女にしては大変だろう。

とはいえ、おかげで助かった。

「うん。俺も負けないように頑張らないとね」

「なら、まずはお互いに労わるとするのですよ」

そう微笑み合い、井草達は食べさせ愛をしながらしつかりと昼食を楽しんだ。

一方その頃、イツセーは心を病み始めたドライグに薬を投与しつつ、自分のおっぱい好きに苦しむ相棒に涙していた。

4話

そんな事が続いた夜。井草と五十鈴は冥界の病院に居た。

墮天使側の領地内の、医療施設。最近では医療の進んでいるシトリー領との技術交流も発達し、大幅に進んでいる。

その病室の一角で、行仁伊予は眠っている。

「伊予、今日も来たわよ」

五十鈴は眠り続ける伊予の手を取り、そして寂しげに微笑んだ。

井草も、手を重ねて苦笑を浮かべる。

「もう術式の解除も終わったそうだね。できれば早く目覚めてほしいかな?」

「ほんとよ。メイド長は結構厳しいから、なまる前に目覚めないとリハビリも含めてハードな仕事よ?」

伊予が答えないのは分かっている。意識を取り戻していないのだから尚更だ。

それでも、どうしてもついついしゃべってしまう。

いつかは起きる。それも、何年もかかったりはしない。そんな事は分かっている。

四年かかった。四年間の苦しみを乗り越えて、三人はまた一緒に暮らせる可能性をその手に掴んだ。

あとは時間の問題だ。だから、心配する事はない。

分かっているが、やっぱり少しつらいのだ。

「待ってるからさ？ それまでに、少しでも教えられるように頑張るから……」

「みんな良い人だよ。きつと、伊予も受け入れてくれるから……」

二人は微笑みながら、少しだけ心の痛みを感じながら――

「……早く起きて、伊予」

――そう、どうしても願ってしまう。

「でもまあ、やっぱり世界がへだつてると毎日はいけないわよね」

病院内の喫茶店コーナーで、五十鈴は紅茶を飲みながら苦笑する。

井草も全く持って同感だ。ここに来るのも数日ぶりである。

墮天使側の最も医療の発達している施設に伊予が運び込まれて、はや数週間。

最新技術をふんだんに使って調べ上げ、安全を確保した状態でこうして伊予は治療を受けている。

ルシフ^ニア^ング^グの眷属である以上、悪魔領で治療を受ける事もできただろう。だが、悪魔領は大魔王派との睨み合いもあって、危険性が多少高い。

それにエポリユーションエキスの研究は、五十鈴からエキスの提供を受けた墮天使側が最も進んでいる。エポリユーションエキスによる影響も懸念されているのなら、墮天使側の方が都合が良かった。

なので、伊予は墮天使側の施設で入院治療中だ。とはいえ治療も検査もほぼ終わっているのも、意識が回復次第、兵藤邸でメイドをする事になる。

「生き物って筋肉使わないと弱るしね。早く起きないと本当にハードな事になるかも」
「あの家、面積広いから掃除大変なのよ。伊予、リハビリとメイド稼業同時にできるかしら」

そんな事を言いながら、二人はお茶を飲む。

正直に言う、凄く心配である。

大丈夫だと安心したい。というより、アザゼルが本腰を入れてくれているのだから、安心しなければ失礼だ。

しかし、こういうものは理屈ではないのである。

「……気分切り替えよう。伊予以外の話をしないと」

井草はそう判断し、そして五十鈴はふと気づいた。

「そういえば、ちよつと伊予が残るけど聞いていい?」

「ん? なにかな?」

五十鈴は井草に小首を傾げて、事情を知ってからふと気になった事を聞く。

「言っちゃなんだけど、アザゼル総督ってなんで井草のこと気にかけてるの?」

……そこはよく気になっている事だった。

井草があんな事になった後、親身になったのがアザゼル総督である。というか、厳密にはその前からちよくちよく関わっていた。

「いや、そこが疑問なんだよねえ。そりやあの人基本お人好しでお節介なところあるから、近しい人物には気を遣うけどー」

アザゼルは井草の言う通りの人物である。

だが、それでもおかしなところはある。

「……そもそもなんで井草を近しい立場に置いているのかしらねえ」

五十鈴の疑問はもつともである。

アザゼルの人格なら、身内があんな事になれば気を遣うだろう。なので、井草にした対応そのものについては疑問を挟まない。

だが、そもそも井草は先祖返りのハーフ墮天使で、アザゼルとの接点はそこまでない。幼馴染と離れたくないという我儘を聞く。死に急ぎまくっている井草が納得しそうな安全牌の任務をあてがう。そもそも、神にすら届く精鋭を親代わりに派遣する。

親しい人物にならそこまですてもおかしくない人物だ。問題はなんでそこまで親しく扱ってくれるのかである。

あれで組織の長として、ドライになるべきところはきちんとドライにやれる人物だ。でなければイツセーの暗殺などを承したりはしないだろう。汚れ仕事にもきっちり理解を示す人物なのだ。

たかがハーフ墮天使ごときに、何故そこまで親身になるのか。きつかけさえあればなるだろうが、そのきつかけを井草は知らなかった。

「そういえば、伊予と五十鈴の件が解決したらそこについて話してくれるって言うけど、色々あつて忘れてた」

「……今更聞くのも恥ずかしいわね、それ」
当分聞けそうにない気がする。

なんというか、完璧に時機を逸している。改めて聞くのは何というか気恥ずかしい。

二人は顔を見合わせて唸ると、結論を先延ばしにする事にした。

「……伊予が起きたら聞きましよう」

「そうだね。それがタイミング的にいいよね」

井草と意見を一致させて、五十鈴は紅茶がまだ残っているカップに視線を向ける。

少しの間黙っていたが、五十鈴はカップに視線を向けたまま告げる。

「……この前、両親に手紙を送ったわ」

「……え？」

正直少し驚いた。

なにせ五十鈴の場合は、四年間が四年間で、そのきっかけも問題だらけだ。

はつきり言って合わせる顔もないだろう。というより、井草もどうしたものかと思つて考へる。

事情はしつかり説明しているので、墮天使や悪魔などの裏事情もある程度は知られている。

だがしかし、井草の場合は幼馴染相手の事実上の強姦行為である。当然殴られているし、彼らも顔を合わせたくないだろう。

そしてその計画犯人は五十鈴である。しかもその後テロリストと殺し合いをする毎日である。計画を立てた時は心神喪失が適用されるが、正気になった後の暴走テロ行為はあれである。

はつきり言つて、五十鈴の両親はもちろん、伊予の両親に至つては目の前で死んで詫

びるぐらいの事をした方がいい気もしないではない。

「……まだ、返事は返ってない」

五十鈴はそう言つて、カッパから視線を逸らさない。

それは当然だろう。五十鈴はそれだけの事をしてしまった。罪があまりに重いだらう。

両親からしても、どう返事をしていいかが分からないはずだ。縁を切る選択肢を相手がつたとしても、文句を言える状態でもない。

それが分かるから、井草も何も言えず――

「……井草、携帯鳴ってる」

その空気をぶち壊す携帯のバイブレーションに、五十鈴が反応した。

危ないところだった。喫茶店スペースは電源を入れていいので問題ないが、他の場所だったら響聲を買っていたかもしれない。

そして慌てて確認すると、リアスからだった。

「……どうしたの？」

『あ、井草？ まだ病院にいるかしら？』

「うん。何かあった？」

この時間、日本は深夜である。

それがどうしたのかと思い――

『……猫又の発情期を抑える薬とか、貰ってきてくれない?』

「……はい?」

訳が分からなかった。

「小猫ちゃんが発情期?」

最新技術の薬を貰って帰ってきた井草と五十鈴に、アザゼルはそう説明した。

なんでも、小猫が発情期を起こしてイツセーに迫ったらしい。

いつもなら発見され次第大揉めになるのがこの家の基本パターンだが、流石に異常を察したりアスは、駒王学園に在学しているその手の事に詳しい人物に相談したそうだ。

その結果が、発情期。

「……まあ、高校一年生って立派な思春期だものね。そんな歳の猫又なら……盛つても当然?」

「五十鈴、言い方」

確かにそうだが、言い方があれなので井草は一応たしなめる。

とはいえ、疑念もある。

「……言い方あれだけど、小猫ちゃんって体格的に未成熟ですよ？ なるんですか？」
「普通はならん。っていうか、今の段階で妊娠及び出産をしたら高確率で死ぬからならぬ筈なんだがなあ」

井草の質問にそう言いながら、アザゼルはぼりぼりと頭をかく。

そして、一緒に井草達が帰ってくるのを待っていたニングもため息を付く。

「リアスさんとイツセーさんの仲睦まじい様子を見て、どうも対抗意識が芽生えたのではないかという意見があるのです」

「最近はみんな微笑ましく見守ってると思ってるが、思わぬところから火種が出てきやしたねえ」

リムがそういうが、確かにそうだ。

イツセーとリアスは最近特にいちやついている。

イツセーの鈍感の原因が判明してある程度克服され、更にイツセーがリアスに告白したのが原因だ。

漸く恋が成就した事もあり、リアスは今まで以上にイツセーにかまっている。それは

もう、ハタから見ていて苦笑するレベルにだ。

普段は取り合いに発展するメンバーも、基本的にはリアスに關しては別格扱いで当面見守る方針だった。当然、比較的冷静な小猫も表向きはそういう体制だった。

だが、本能は別だったらしい。

肉体の問題を超えるほどにまでイツセーを恋慕していたという事だろう。冗談交じりに恐るべしおっぱいドラゴンというべきなのかもしれない。

「……で、どうするんです？」

井草はその辺をどうしたものか聞く。

イツセーはなんだかんだで男を見せるタイプだ。覗きを何度も行うほどにはスケベだが、しかし最低限の一戦は守る。朱乃に迫られた時も、そのタイミングで致せば朱乃の為にならないと渾身の精神力で抑え込んだそうだ。

だが、それでも限界はあるだろう。恒常的に迫られれば、我慢の限界を超えるかもしれない。

アザゼルもその辺は同感なのか、これまた首を捻りながら困った表情を浮かべている。

「ああ。薬で抑え込んだら今度は大人になつても発情期にならないとかもあるからな。イツセーが我慢する以外の手はないが、それでも対処策を考えた方がいいかもしれん」

「……欲情した童貞って、未経験だからこそ始末に負えないからなあ」

経験論で井草は相談するが、その両肩にニングとリムの手が乗った。

「井草さん。自虐は自嘲するのです」

「五十鈴死んでますぜ」

「……ああ!?! ゴメン!!」

「い、いいのよ。……全部私が悪いし」

微妙にシユールなコントになったが、しかしアザゼルが咳払いをして空気を換える。

「……話は変わるが、実は明日この家に来客が来る」

「来客? 墮天使側から話は聞いてませんか?」

井草は首を傾げるが、アザゼルはまっすぐにその目を見つめながら続けた。

「色々あつてな。……で、だ」

そう一度切つてから、アザゼルははつきりと言った。

「絶対に敵意や殺意の類を抱く相手だが、こつちから仕掛ける事だけはするな」

……この言葉に、嫌な予感を覚えた井草と五十鈴の勘はとも正しい。

リムとニングも先に聞いていたが、しかし嫌な予感を覚えている。

どうもヴァーリチームが関わっているようだが、それだけでもないらしい。アザゼル曰く半分正解だという事だ。

確かに半分正解だが、戦力的には一パーセント正解だと言って欲しかったと、のちに井草は語ったと言う。

5話

明朝。何やら緊張感すら漂わせるアザゼルとともに、井草たちは兵藤邸の玄関に集まっていた。

そしてノックが鳴ってからドアが開く。

そこにいたのは、露出度の高い黒のゴシックロリータに身を包んだ、小柄な少女。

外見年齢は小学生程度だろう。年齢より小柄な小猫やリムにニングよりも小さく、京都で出会った九重と同じくらいだ。

だがしかし、彼女は断じて幼女の類として語っていい相手ではなかった。

「ドライグ、久しい」

と、簡潔にイツセーに挨拶するその存在は、世界最強である。

というか、オーフィスである。

「うええええええええええええ!?!」

イツセーが五歩ぐらい下がったが当然だ。

来客があると言われたら、寄りにもよって世界最強の存在だった。ちなみにテロリス

トの親玉でもあった。

普通に狼狽ものだろう。むしろ、その程度で収まっていることが奇跡に近いといってもいい。

「何で……!!? くそ、まさかここまで警戒されてたなんて!!」

井草は速攻でレセプターーツに変身し、ツールセイバーすら構える。

これでも全く足りないなんて気だ。なにせ、主神クラスですら戦闘能力の桁が足りないとはいってもいいほどの強敵なのだから。

まさか神話の最終決戦やインフレ極まるタイプの物語のラスボスを張るような存在が、こんなところに出てくるとは想定外だ。

いくらここには魔王の妹や墮天使の総督や天使長の直属がいるとはいえ、堂々と朝っぱらから一般市民が大量にいる地方都市の住宅街に出現である。

そういえば魔王の末裔すらいたのだった。ある意味で重要拠点であることを改めて思い出し、井草は歯噛みする。

「……………ふうっ」

「五十鈴う!? しつかりするのです!!」

五十鈴に至っては失神し、ニングに介抱されている。

当然だろう。一か月ほど前に禍の団を離反した彼女は、オーフィスから見れば裏切り

者である。それも、つい先日禍の団の主力構成組織であるムートロン及び大魔王派と大立ち回りをしたところである。

普通に考えれば肅正の可能性も考慮に入れる。心臓に悪すぎる。

「ひ、避難誘導うううううう!!」

リムもさすがに狼狽しているが当たり前だ。

まさに一触即発、すぐにでも攻撃を開始しなければならぬ。

そのタイミングで、アザゼルが割って入った。

「だからやめろって昨日言っただろ!! それに俺らが総力でも勝てねえからよ!!」

そんな問題ではない。

ヴァーリチームがらみでだれか来るとは聞いていたが、敵の首魁が来るなどとは想定外だ。

意図的に情報を出し渋っていたとしか思えない。当然、知られていられれば誰だって反対するにきまっているとはいえ、さすがに大問題だ。

当然、この地の管理官として派遣されている立場のリアスからすれば激怒案件である。当たり前の如く激高している。

「アザゼル!! そのドラゴンは禍の団の首魁よ! 世界に多大な損害を与えている仇敵

を、同盟の重要地区となつてゐるこの場所に招き入れるだなんて――」

「ていうか先生。いやな予感がするんですけど」

リアスの言葉をさえぎつて、井草はふと湧いた嫌な予感を言葉にする。

この地の監督を任されている悪魔のリアスが、詳細を利かされていない。

井草も知らない。この地に最も詳しい堕天使である、井草も聞かされてないのは疑問だった。

そしてイリナも動揺している。おそらく、ミカエルからも何の連絡もなかったのだらう。

「……まさかと思いますが、俺たち以外の誰にもこのことを伝えてないんじゃないでしょうね？」

疑問符ではあるが、確信できる。

この地はなんだかんだで重要地域だ。三大勢力の和平会談という、同盟の足掛かりとなつた出来事のおきた地である。加えて、魔王の妹と堕天使総督と天使長直属が住んでいるという意味でも、重要地域だ。

状況次第ではほかの勢力との交渉や、歓迎などにも使われる。

それゆえに、この地域には三大勢力のスタッフは何人もいるのだ。それぐらい重要な地域と化している。具体的にはシトリー眷属などだ。

当然、相応の監視網も敷かれている。普通なら、オーフィスクラスの力の持ち主がこんな無造作に入ってきて気づかれないわけがない。

つまり、スタツフに話を通っているか、関係者がこっそり招き入れるかしているのだ。そして、イリナも井草もリアスもアザゼル以外から何も聞いていない。オーフィスなどという超大物が来るなら、一言では済まないはずなのだ。

リアスもそこに思い至り、魔力を垂れ流して怒りの視線をアザゼルに向ける。

「……協定違反よアザゼルッ!! 魔王様や熾天使に糾弾されても当然のレベルの背信行為だわ!!」

「正気ですか総督?! 同盟の全勢力から墮天使が攻撃されますよ!!」

当然井草も大声を出す。

和平から墮天使側がはじき出されても文句が言えない事態だ。墮天使側と親しいもたちが所属勢力から冷遇されてもおかしくない横暴である。

へたをすればニングやリムにまで被害が及ぶ。井草としては激怒案件でしかない。

「いくら何でも勝手がすぎます!! この場で俺は責任をもって、貴方を肅正することだつて視野に入れますよ……っ」

半ば本気でその覚悟を井草はしかねないレベルで追い詰められている。

なにせ、そんなことになればニングとリムは間違いなく不利な状況に置かれる。眷属

悪魔になっていえるうえに、基本罪人である五十鈴や伊予にも被害が及ぶ。

その前にアザゼルを肅正しなくてはならないのか。それは心が痛むがそうしなければ四人が大変なことになる。

精神的に板挟みになるが、そのかたをシアリーがつかんで止める。

「お気を確かに持つてください、井草様。リアス様も、だからこそ……とかんがえてくださいまし」

その言葉に、リアスは激高していた精神を急激に沈める。

リアス・グレモリーは聡い女性だ。付き合いもそこそこあるからこそ、アザゼルの性格や人となりもある程度理解している。

だからこそ、落ち着けた。

「……それだけの価値が、あるっていうのね？」

アザゼルは各勢力の協力を強く訴えていた。三大勢力の和平を最も最初に提案したのもアザゼルだ。この同盟の中心人物といっても過言ではない。

だからこそ、そんな人物がこんなことをしたのならなにか理由があるはずだ。

そして、アザゼルは静かにうなづいた。

「ああ。俺の首が物理的に飛ぶ覚悟はしてる。だが、オーフェイスの願いは禍の団の存在自体に影響するほどのものだと思っただ。流れる血を減らすためにも、必要だと判断

した」

アザゼルは聡明だ。

彼がそう判断したのなら、それだけのものが本当にあるのだろう。

そして、アザゼルは誠実に頭を下げる。

「全責任は俺がとる。だから、話だけでも聞いてやってくれないか？」

沈黙が、場を支配する。

そして、一同の視線が何となくイツセーに向けられる。

「じゃ、じゃあ……話だけなら……いいですか？」

そして、リアスに話を振ってきた。

リアスも苦笑すると、肩をすくめる。

「仕方ないわね。……それで、ヴァーリチームがかかわってるんじゃないのかしら？」

その事実上の了承に、魔法陣が玄関前に出現することで返答がなされる。

そこから現れるのは、学生服のような私服に魔法使いのテンプレート的な三角帽子をかぶった少女。そして、灰色の毛皮を纏った狼が一匹。

地味にこちららも面倒な獣である。はつきり言って全滅の危険すらあった。

その事実にも井草が頬を引くつかせるなか、オオカミを連れた少女がペコンとお辞儀を

する。

「ごきげんよう、皆さん。ルフェイ・ペンドラゴンです。フェンリルちゃんともどもお世話になります」

「……どちら様？」

井草は面識がないので、少女にちよつとぽかんとした。

いや、冷静に思い返すとどこかで見たような記憶がある。

たしかつい先日ナイアルとやりあった時に姿を見たような記憶がある。あの時はそれどころではなかったので全然意識してなかった。

「ヴァーリチームにいるアーサー・ペンドラゴンの妹だよ」

祐斗が丁寧に教えてくれて、とりあえず戦は納得する。

「……ふむ。なら丁寧な対応をするべきなのです」

と、ニングは指笛をいきなり吹いた。

いきなり何をしたのかと多くのものたちが首をかしげると、すぐに理由が判明する。

「バウワウ！」

「ワンワン！」

と、庭からスコルとハティが表れて、フェンリルにじやれ付いた。

フェンリルはプライドが高いのか対応に困っていたが、とりあえず素直にそれを受け

れている。

「あ、フェンリルちゃんのお子さんですね！ 可愛がられているみたいで何よりです！」
「主として当然なのです。毎日お風呂で洗っているのです」

などとペット談議が始まってしまった。

伝説の狼とその子供を飼い犬扱いである。フェンリルはどう思っているのか、少し不安になった。

そして、さらに魔法陣が展開すると今度は黒歌が姿を現す。

「やつほー！ 赤龍帝ちゃん、元氣してたー？」

「うっひよおっぱい！……っってお前かよー！」

抱き着かれてイツセーが理性を失いかけるが、そんなイツセーにジーツと視線を向けるのがオーフィスである。

はつきり言って、何を考えているのかわからないオーフィスが一番怖い。戦闘能力的にも、何をするのかわからない敵にもだ。

「我、話、したい」

その言葉に、アザゼルがポリポリと頭をかく。

「とりあえず、お茶でもしてやってくれ。このセツティングに俺は命かけてるんだ。ほかの勢力までだましにだましてるから、ほんとに成果を出させてくれねえか？」

そのオーフィスの言葉で、井草たちは五十鈴がいまだに失神してゐることに気が付いた。

「というか、オーフィス的には五十鈴は眼中にもなかつたらしい。」

そして、VIPルームにオーフィスを招いた。

小猫と五十鈴は部屋で休んでいる（五十鈴は寝込んでいるともいう）が、とりあえず貴族であるリアスとニングが、イツセーを中心にする形で座り、それに向き合う形でオーフィスが来客席に座っている。

「イツセー？ ニングの肩に手を回したりしたら怒るからね？」

「井草、そんなこと言つてる場合じゃねえですぜ？」

この状況下で嫉妬心に意識を向ける井草に、リムは一周回つた感じの感心すら向けている。全員微妙に引いていた。

そしてそれをスルーして、本職メイドのシアリーはオーフィスにお茶とお茶菓子を差し出す。

「どうぞ、ダージリンとミルクレープです」

「……………うまうま」

はむはむと頬を膨らませながら食べる姿はほっこりするが、相手が相手なのでほっこりしきれない。

というか、その上で視線をイツセーにまっすぐ向けているのでシユールだ。

口元も食べかすがたっぷりついている。服は露出度が高いので、微妙な状況になっている。

この状況下で重要な会話をしても、集中できそうにない。

「……………とりあえず拭こうか」

井草はため息を付くと、ウェットティッシュを取り出して汚れた部分をふく。

そして一瞬考えこみ、まだ緊張感が維持できると判断してキッチンに行つてナプキンを持つてきて、オフィスの首に巻いた。

「ほら、汚れるからこれ使つてね？」

「……………ふあかった」

食べながら返事をしないでほしい。

本当に世界最強のドラゴンとか、テロリストの親玉なのだろうか？

井草は一瞬本気で考えてしまう。頭痛を少し感じ始めてきた。

とはいえ、ミルクレープをオーフィスが食べ切ったタイミングを見計らって、イツセーはとりあえず切り出した。

「で、話って何……ですか？」

すぐく当たり障りがないが、仕方がない。

一瞬でも対応を間違えれば。冗談抜きで駒王町が地図から消える。それこそ戦略核の方がまだましな惨状になるだろう。

なので慎重に対応するほかない。

そして、オーフィスは、小首をかしげた。

「ドライグ、天龍をやめる？」

……意味が分からなかった。

「えっと、質問の意味が分からないです」

「今代のドライグ、いままでと違う成長をしている。我、とても不思議」

どうやら、イツセーに相当興味をひかれたらしい。

「今までの天龍と違う。ヴァーリも同じ。とても不思議」

イツセーとヴァーリの成長。

確かに、資料で見る限りの歴代の二天龍とは、イツセーもヴァーリも異なっているだろう。

そもそもお互いがお互いを敵視して決着をつけるために暴走するレベルだったという歴代に比べて、イツセーとヴァーリはむしろ協調している節がある。

少なくとも、歴代が共闘したことはあまりないだろう。普通ならみつどもえになつていてもおかしくないのが、資料から読み解ける二天龍である。

赤は女を、白は強者を。

アザゼルはそうイツセーとヴァーリを称した。実際問題、会えば即激突とまで言われる二天龍のはずが、他のことに興味があるので優先順位が下がっているレベルだ。イツセーに至つては結構な間、「戦わずに済むならそれでいい。決着なんて興味ない」といった対応だった。

それが、気になつたということだろうか。

「我、これまでの戦い見ていた。ドライグ、ビルデとの戦いで紅になつた。我の知つてる限り、初めてのこと」

真女王については知られているようだ。

もつとも、ビルデとの戦いで至つた形態だ。彼の性格ならほかの派閥にも伝えて、対抗策を考えているだろう。オーフィスの耳に届いても不思議ではない。

そして、オーフィスはさらに続ける。

「だから訊きたい。ドライグ、なんになる？」

と、首をかしげながら聞いてくる。

といつても、イツセーも答えようがないだろう。

ここで「ハーレム王に、俺はなる!!」とか答えるのもアレだ、イツセーもそれぐらいは理解しているだろう。

ここは助け舟を出すべきかと思つたが、それより先にオーフィスは続けた。

「ドライグ、乳龍帝になる? 赤じゃなくて乳になると、天龍、超えられる?」

ドライグが発狂寸前になつたので、この話はお開きになつた。

結果として、オーフィスおよびルフェイ&黒歌は当分兵藤邸に居つくことになる。

ちなみにフェンリルはスコルやハティと一緒だ。さすがに犬小屋はかわいそうなので、兵藤夫妻にニングが頼み込んで家の中に入れてもらった。

フェンリルから感謝の念らしきものが浴びせられるとはニングの弁である。誇り高い神喰狼は、礼をきちんとする性分らしい。

6 話

とはいえ、イツセー達は色々大変な身の上だ。

なにせ中間テストと中級試験が同時にやってきているのだ。必然的にやる事は多い。特にイツセーは元々学力がそこまで高い方ではない。入学する時でも、偏差値が足りなかったのをスケベ根性による執念で無理やり底上げしたようなものなのだ。

如何に駒王学園が素質のあるもの以外を振り落とすタイプの学校でないと言っても、割と進学校である為難易度は高めだ。

目的意識があればしつかりと頑張れ、そして努力家であると同時に吸収率も高いイツセーだ。最近はリアス達が強さを教えている事もあり、成績そのものは上がっている。中間テストは曹操のことがなければ大丈夫だろう。

中級昇格試験もだ。筆記試験は調べてみると広く浅く色々なジャンルから出題されるので少し苦戦しそうだが、なんだかんだで経験が濃いので、赤点を取る事はないだろう。実技試験においては言うまでもなく、今の時点で最上級クラスに喧嘩を売れそうなお实力を持っているイツセーが中級候補如きに負けるとは到底思えない。むしろ模擬戦

の相手になった悪魔が秒殺されてポイントを稼げない可能性の方が心配だ。

とはいえ、もしかしたらという事もある。

いかに多芸が基本の節がある悪魔業界といえど、参入して老年目のイツセーに過負荷を押させるのもアレだろう。減らせる負担は減らしてあげるのも先達の務めだ。

こと今回は学生と悪魔の二足の草鞋でそこそこ重要度が高い試験である。少し位サポートしても罰は当たらないだろう。

と、言う事で――

「……はい、これがイツセーの真女王こと、カレディナル・クリムゾン・プロモーション真紅の赫龍帝と俺が模擬戦した時の記録映像」

「覇龍より弱いけど、全く暴走してない」

――頑張って気を引いて、井草がオーフィス相手に時間稼ぎを敢行していた。

はつきり言って心臓に悪い状況だ。

なにせ相手は世界最強。単純戦闘能力ならば、グレートレッドと唯一の同格。主神クラスですら、戦闘能力の桁で負けている化け物中の化け物である。

一瞬でも隙を見せれば、その瞬間に塵になりかねないのだが――

「んまんま」

――ポップコーンを見ながらモグモグと戦闘映像を見ているその姿は、まったく威厳を

感じない。

心の底から思う。むしろシユールだ。

「………で？ 何か分かった？」

「ん。とても不思議。あとおかわり」

おかわりを要求された。余裕でどうこうできる状況とはいえ、緊張感がなさすぎる。

「はいはい。コーラとポップコーンのおかわりお持ちしましたーっと」

そして、この緊張感のなさにいい加減慣れた五十鈴もまた、なんとというかだれた態度でおかわりを持ってきた。

「はい。こぼさず食べなさい」

「ん。……モグモグ」

メイド服でコーラとポップコーンというのもいかなものか。

井草はそんな場違いな事を思いながら、改めて記録映像を確認する。

ちようどいい機会なので、自分で復習するのもありだろう。そう考えて、マジマジと見直してみる。

実際問題、真女王の戦闘能力向上率は目を見張るものがある。

これまではレセプターイーツと赤龍帝の鎧の性能差は、そこまで大きなものではなかった。

少なくとも、これまでは十分立ち回りようはあった。数多くの敵を撃破したレセプターイーツの特性ゆえに手札の数と、井草自身の数年間に及ぶ自分を苛め抜いた訓練による技量が、十分カバーしてくれた。

アスカロンとデビルイーツの噛み合わせの悪さで苦戦を強いられているが、しかしそれでも大差はなかったのだ。

しかし、真女王を発動できればそれもひっくり返る。

それほどまでの性能の向上率だ。これまでも要所要所では最上級悪魔クラスに届いてたイッサーではある。それが、真女王の発動中は完全に最上級悪魔の領域だった。

パワータイプが悪魔としてはかなり上位だろう。単純火力なら魔王クラス相手に食いつかる事だつてできるはずだ。この時点で、戦い方次第なら下位の神を足止めできるものを持っている。

むろん井草もツールセイバーがあるから攻撃力では負けていない。それに、イッサーのもう一つの奥の手である合体モードなどがある以上、井草が弱いという事ではないだろう。

しかし、明確にオカルト研究部最強は誰かと成れば、間違いなくイッサーになる。

真女王の持続時間は初期の禁手より少ない時もある。だが、発動させれば間違いなくオカルト研究部最強だ。基本性能で他のメンバーを押し切れるだろう。

追隨できるとするのなら、新技を開発中の祐斗だろうか。こちらもまた二つの禁手という反則級の力によって化けており、イツセーとは別の意味で手に負えなくなってきた。いる。

「……とはいえ、これ以上イーツの力を取り込むのもなあ」

そう、井草はほつりと呟く。

現実問題、これ以上他のイーツの力を取り込んでも、その本領を發揮できるとも思えない。

単純問題手札が多すぎて、井草の判断能力を超える恐れがあるのだ。それに、デビルイーツなど取り込んだ結果弱点ができるという問題もある。墮天使というシンブルが弱点の少ない種族の利点を殺してまで、多種多様な手札を集める意義も薄かった。

イミテーションイーツ研究の応用で、レセプターイーツが持つこの特性の抑制が可能になっている。これにより、本来に必要な手札以外は取り込みを抑制する事も可能になった。

また、アウトアイーツはレセプターイーツでは取り込み不可能だという事も判明している。単純に格上で吸収しきれないとのことだ。

何かしらのパワーアップは必要だが、それはイーツの撃破による取り込みだけに頼っては頭打ちになるだろう。

なにせ、手札とは有効なものを瞬時に取捨選択出来て初めて意味があるのだ。多ければいいというものでは断じてなく、選択肢が多すぎると選択に時間がかかり即応性が欠けることもある。そして必ずしも有効な選択しを選べるという確証もない。

当人の判断能力に見合った数の選択肢。結局はその中でその選択肢の力を高めるのが最も有効なのである。

そういう意味では、結局は地道なトレーニングが必要不可欠ではある。

だが、同時に何らかのブレイクスルーがなければおいて行かれかねないのも確かだ。なにせイツセーは禁手のその先という、新たな次元に到達している。これは前代未聞の領域であり、覇の克服という歴代二天龍でもあり得ない偉業だ。その分絶大な力を秘めている。

そしてもう一人のエースである祐斗も逸材だ。禁手そのものがイレギュラーであった事もあるが、それによって二つの禁手を保有している規格外である。

オカルト研究部の二大エースは双方ともに化け物といっても過言ではない。いずれ冥界の歴史に名を遺す存在となるのは明白である。

そして、その二人が同時に仕掛けてもナイアルの壁は厚く高い。

EEレベル7, 5。主神クラスの領域に対抗するには、これをもつてもなお難しい問題である。

そのナイアルを倒すには、今のままでは絶対に足りない。

「……ねえオーフィス。物事には対価つてもものが必要だよ?」

「どういう、意味?」

小首をかしげるオーフィスに、井草は冗談を言ってみる。

「アザゼル先生が自分の命を懸けて会談をセッティングしたんだから、それ相応の対価は払うべきだって話。具体的には君の蛇とか」

本気で冗談である。

いくらなんでもそんなものを敵に寄越すわけがない。

対策がそれで立てられれば、その時点で状況が大きく変わる。それほどまでにオーフィスの蛇は禍の団にとって大きなアドバンテージだ。

井草としても本気ではない。打開策が見えない現状に対するいら立ちが、なんとなく冗談という形で発散されただけであるのだが――

「……正論。はい」

――ほんと、手の上に蛇が置かれた。

一分ぐらい、井草と五十鈴は沈黙した。

「……ええええええ!!」

驚いてひっくり返ったのも当然である。

五分後、井草と五十鈴は冷静さを取り戻した。

「……オーフィス。ストップ、いったん返す」

「??? 欲しいといったの、そっち」

蛇を井草から返されて、オーフィスは首を傾げた。

その姿はかわいらしいが、しかし井草からすれば冷静ではいられない状況だ。

とりあえず深呼吸指摘を落ち着かせると、オーフィスに向き直る。

「オーフィス。俺たちがどういう立場かわかっているのかな?」

「??? ドライグの、同胞」

そう答えるが、そういう問題ではない。

井草はこんなことをいうのも馬鹿らしいとは思いますが、しかしこみあげてくるものに耐え切れず、とりあえず懇切丁寧に教えることにする。

「うん。そして、ドライグは禍の団と敵対している三大勢力の側にいる。此処まではいね?」

「それで？」

「こゝまで言つてわからないのか。」

一瞬本気で呆れかえるが、何かしらの嫌な予感を覚えたので、井草は肩をつかんではつきりという。

「敵に切り札の横流しをするんじゃないやありません。ビルデとかホテップとか、怒るよ？」

「なんで？」

小首をかしげられた。

真剣に頭痛を感じ始めるが、しかし井草はあきらめない。

どうすればわかつてもらえるのかと考えて、とりあえず懇切丁寧に説明する。

「君が作る蛇は禍の団のアドバンテージ。それを勝手に敵勢力に流したら、禍の団が困るよ？」 禍の団の盟主である君も困るんじゃないかい？」

「確かにシャルバ達、蛇を欲しがってた。でも、汝も欲しがってる。いらぬ？」

「興味はあるけどね？ だけどね、物事には道理つてものがあつてね？」

どう説明すれば分かつてもらえるのだろうか。井草は真剣に考えて頭を抱える。

この天然ぶりはどうかした方がいい。いつか大きな問題が起きるかもしれない。

などと思ひ説得方法を考え、井草はとにかく冷静に告げる。

「いいかいオーフィス。君たち禍カオス・ブリゲードの団は、善悪はこの際置いといても、現政権側にとつ

ては迷惑なことをしてくるテロリストなわけだよ」

「?」でも、グレートレッド、倒したい。シャルバたち、蛇くれば協力するといった」
本当に協力するかどうかすごく疑問である。

というより、もしかしてこれ、だまされているだけではないだろうかと思おう。

オーフィスの目的は次元の狭間に居座っているグレートレッドを倒すこととは聞いている。次元の狭間にいる邪魔になつていると。

だが、オーフィスが次元の狭間を独占されると禍の団にとって困るのではないだろうか。

一瞬本気で考えるが、しかしだましてメリットがあるとも思えない。

騙していた事が知られれば、オーフィスの怒りを買ってもおかしくない。そうなれば確実にオーフィスと禍の団が全面戦争だ。

そんな事になつても、禍の団は誰も得しないだろう。

などと思考が脱線していると、オーフィスは飽きたのか、視線をずらす。

その視線が、テーブルの上にある物を見て止まった。

「……あれ、なに?」

「ん?」

視線に二人が顔を向けてみると、そこにあつたのは絵の具とバーコードシールの山

だ。

配膳役をすることになった五十鈴が、敵相手に真剣みを出してもしようがないと内職をするために持ってきたのである。

あと少しなのだが期日が迫っているので、割と忙しいのだ。

「絵具と、それに貼るバーコードシールよ」

「シール張る？　なんで？」

「バーコードつてのはこの国で売り物にするために必要な時があるからよ。私の副業……って言うってわかる？　お仕事の一つで、お金を稼ぐの」

五十鈴が丁寧に教えると、オーフィスはうんうんうなづいてから首をひねった。

「お金は知ってる。お金、足りない？」

「……お小遣いは足りてるわよ。内職あれは復興支援金に当てるの」

「復興支援金？　なんの？」

「……ムートロンに所属していた時に迷惑かけた地域に送るためのよ」

「……なんで、そんなことする？」

その言葉に、五十鈴は苦笑しながらはつきり言った。

「ムートロンにいたときにしたことが悪いことだと思ってるからよ。悪いことしたらお詫びするのは当然でしょ？」

その言葉に、オーフィスはきよとんとしなから五十鈴を見つめる。

「お詫び、必要?」

「賠償金は払ってるけどね。まあ、金で何でも解決つてもアレだけど……ね」

そう苦笑する五十鈴に、オーフィスは首をかしげる。

「……………ムートロン、悪いことしてる?」

「ええ。少なくとも、同盟側からすれば悪いことね。つていうか禍の団の行動が基本悪いことね」

「禍の団、悪いことしてる……。なら、お金払わないといけない?」

「……………いや、金払えばいいってもんでもないけど……………」

返答に詰まる五十鈴だが、しかしオーフィスは首をかしげる。

「我、次元の狭間で静寂を得たい。それ、悪いこと?」

それは無表情だが、真剣みがあった。

だから、井草はそれに真剣に答える。

「難しい内容だね。だけど、同盟としてはそれをされると迷惑で、他のことで解決できるならそうしてほしい」

正直に言えば、オーフィスからすれば理不尽な側面はあるかもしれない。だが、それをさせるわけにはいかないというのが実情だった。

だからこそ、井草はあえて悪いこととは言わない。

そして、井草はあえて遠回しに交渉を求めた言葉を紡いだ。

「……困った。我、静寂を得たい」

オーフィスは無表情に首をかしげるが、しかしどこか困っているようだった。

その様子を見て、井草と五十鈴は顔を見合わせる。

どうも、オーフィスは少しだけだが本気で困っているようだ。こちら側の「オーフィスの目的は困る」という言葉をまじめに受け取ったらしい。

しかも「悪いこと」という言葉にも反応した。どうも、今まで悪行をしているという意識がかけらもなかったみたいにも受け止められる。

……もしかしたら、自分達は何か勘違いしているのかもしれない。

そう思うが、しかし迂闊につくのは自分達の立場だと難しくもあり――

「……よくわからない。とりあえず、それ、すればいい?」

と、視線が五十鈴の内職に向けられたので、話を逸らすことにする。

「……手伝ってくれるなら、まあいいけど」

「あ、じゃあ俺も手伝うよ」

テロリストのボスが、テロリストをやめた女性の内職を、その女性の彼氏とともに手伝う。

はたから見ると、実にシユールな光景だった。

「……オーフィス！　そこはバーコードを張る場所じゃないから！！　お金貰えないから！！」

「あとシールを破かないでね？　いや、予備はきちんともらってるけど、破かないに越したことないからね？」

「ん、ゴメン。我、気を付ける」

……バーコード張りに苦勞する世界最強の存在。

実にシユールな光景であった。

7 話

そしてそんな日々が少しだけ続き、中級昇格試験当日。

「……少し緊張してきた」

「イツセー。万が一落ちても再試験は受けれるから」

イツセーの肩に手を置きながら、井草は苦笑する。

昇格試験といえは緊張するかもしれないが、しかしそこまで緊張する事もないだろう。

なにせ、一回や二回おいても受講資格を失ったりはしないのだ。考えようによつては気楽に受ける事もできるというものである。

そこまで緊張する事もないと、井草はそう肩を叩く。

「問題は試験を終えてからさ。なにせ、サーゼクスさんのところにオーフィスを連れて行くんだから」

「あ、そつちもかあ……」

井草の指摘に、イツセーはつとなつて頭をかく。

そう、アザゼルは内密にサーゼクスにだけはのちに事情を話したのだ。

そして、今日試験が終わってから時間をとって、会談する事が決定された。

オーフィスはオーフィスで「ドライグが一緒なら」とあつさり承諾している。これも意外である。

「なんていうか意外でしたよね。あつさり承諾するんだから」

イツセーがそう言うのも無理はないだろう。

敵対している勢力のトップ相手に、テロリストの親玉が普通に会談に臨む。

確かにイメージしづらいだろう。テロリストというのは暴力で解決するイメージが強い。あつさり了承されるのは意外なイメージがあつた。

それに、イツセーからすれば意外なイメージが強いのだろう。

アーシアがお茶を出したらあつさり受け取ったり、イリナがトランプに誘ったらこれもまたあつさり承諾したりしている。

なんというか、普通断るだろうという事もあつさりしている。

ちなみに、黒歌とルフェイは兵藤邸の地下にあるプールで遊んでいる。観光かトツコミを入れたいものが多数いたが、揉めると面倒なので承諾した形だ。

こんな様子を見てみると、イツセー達からすればテロリストのイメージを持てなくなるかもしれない。

「……はつきり言つて、外見があれだから子供かと思つたりしますね」
イツセーがそんな事を言うのは、否定してもらいたいからだろう。

気が緩んでいるから、それを引き締める為にもそれを指摘してほしい。人から言われる事で引き締まる事もあるのだ。

だが、井草はそれをする気にはなれなかつた。

「案外、そうなのかもね」

と、井草は言う他なかつた。

数日前の夜。五十鈴の復興支援金稼ぎの為の内職に興味を示したオフィス。その反応がよみがえる。

もしかしたら、彼女は悪い事をしているつもりがないから禍の団に協力できているのだけではないか。

もし静寂を得る事が悪い事だと教え込んだら、案外素直に手を引くのかもかもしれない。

あくまでこちらの都合でしかないのです。ここでやる気はなかつたが、もし井草がもう少し自分達の都合を押し付けるタイプなら、話はすぐに――

「井草様」

と、そのタイミングでシアリーが一步前が出る。

「私達メイドは家事がありますので、付いていきません。お嬢様とリム様はサーゼクス

様と共に冥界のイベントに参加してから、会談時に合流となります」

「分かったよ。……五十鈴は？」

そういう姿が見えない。

すると、シアリーはさらりと言った。

「オーフィスに気が逸れているようなので、買い物に行かせました。この時間帯限定のスイーツを、奥様に届けさせると言っておきました」

「ああ。お昼の空いている人限定のスイーツってあるよねえ」

「因みに奥様にお伝えしたところ、「チーズケーキだからイツセーの分も」とご要望がありました」

その説明にイツセーに視線を向けると、イツセーは少し嬉しそうだった。

「好物です!!」

「意外とおしゃれなものが好みなんだね」

意外と付き合いがあっても知らない事が多い者である。

「因みに俺は鮎ずしが好物だよ。あれ、ウオツシユタイプのチーズと似たにいらしいね」

「……渋いですね、井草さん」

「こちらにも意外な趣味だと思われているようだ。正論なので文句は言わない。」

だが、チーズのお菓子とチーズに似たにおいのおつまみ。

もしかしたら、ブランドー入りの紅茶で楽しむという事もできるかもしれない。などと井草は思った。

「井草様。変な想像はしないでください」

……婚約者のメイドは辛らつであつた。

「……むぐ。寂しい」

「井草、貴方意外と寂しがり屋なのね」

寂しさのあまりやけ酒を足さない井草に、リアスが苦笑する。

今現在、井草達はホテルのレストランを貸し切つて待機中だ。

イツセー達が試験を終えたら、一旦打ち上げをしてからサーゼクスと合流する予定である。それぐらいの時間が余っているのだ。

なのでその暇な時間を潰しているのだが――

「美味しいですか、オーフィスさま」

「うん。うまうま」

……ルフェイ達と共にモグモグと食事を食べているオフィスを見ていると、なんと
うかがいがほぐれる。

オフィスは禍の団の盟主ではなくマスコットなのではないだろうか。そんな事を
一瞬思ってしまう程度には可愛かった。

だが、可愛いとはいえ相手は禍の団の盟主にして、世界最強の存在である。

本来敵対勢力の長であり、そんな存在を都市のど真ん中に連れて行くなど、危険行為
である。

間違いなく上手くいかなかったりしたら大問題だ。アザゼルの首が物理的に飛ぶ。

……墮天使全体の同盟内での地位を揺るがしかねないと思うと、酔いが醒めた。

「なんか、寂しさとは別の意味で酔い潰れなくなってきた。今すぐ飲み直していいかな
？」

「今更よ。悪酔いはしないでね」

と、リアスがお酌してくれた。

……三秒後、井草は更に酔いが醒める。

「不倫扱いされたらやだからやめて？」

「……このぐらいの茶目っ気でそこまで言わなくても……」

三秒後、リアスは酒瓶から手を放した。

「イツセーは落ち込みそうね。やめておくわ」

「うん。それがいいよ」

ちよつと緊張感でおかしくなっていたようだ。リアスもまだ十代の少女なのだから当然ではある。

イツセーの中級昇格試験がやはり気になるらしい。恋する乙女としても主としても心配にはなるだろう。

実技に関しては何の問題もないと思われるが、しかし悪魔になってまだ一年も経っていないのだから、筆記では何かあるかもしれない。

落ちて受検資格を剥奪されたりなどされないとはいえ、流石に気にはなるものである。

「まあ、イツセーはモチベーションがあれば集中するし吸収もするからそう酷い点は取らないでしょ。……流石に冥界のテレビ番組とかあまり見ないものが設問に出てくれば分からないけど」

「……以前、セラフオール様の番組が設問で出された事があつたわ」

……とたんに不安になってきた。どうやら冥界は本当に多芸である事が求められるらしい。

とりあえず気を取り直そうとして、井草はふと思いついた事を告げる。

「そう言えば、リアスちゃんは今後のトレーニングの方針とか決めてる？」

「そうね。やっぱり足手まといにはなりたくないから強くなりたいたいけど、どう強くなればいいのかっていうのが問題ね」

リアスとしては、前回のビルデ色々と思うところがあるようだ。

結果的に凌ぐ事はできたが、それは数多くの増援の突入と、シヴァ神の気まぐれによるところが非常に大きい。あのまま戦っていれば、相当の被害が発生していた事は想像に難しくなかった。

それだけの戦闘能力を、鍛錬と技術開発と強化装備によって成し遂げた、ビルデ・グラシャラボラス・サタン。そして、その更に上をいく主神クラスである、ムートロンのナイアル。

外部で戦闘をしていたホテップに至っては、主神を複数相手にしてなお立ち回るといふ異常とも言える力を発揮している。その戦闘能力の高さは正直強硬だろう。

そして恐ろしいのは、ナイアルはムートロンで上から数えて二十番目程度の实力で、ホテップですら一番強いというわけではないという事だ。

主神クラスであるEレベ7, 5以上。それが五十鈴曰く27人いるのがムートロンド。更にロキの技術を取り込んだ事で、より強大になる可能性すら示された。神の子

を見張る者などの異形組織から流出した技術を併用すれば、事になりかねない。

これに対抗する為には、どうしても強くなる必要がある。

なので、井草としても強くなりたいのだ。

「せめてナイアルを一発ぶん殴れる力が欲しいよ、俺も」

「それ、神や魔王の領域に到達するって事なのだけれど？」

いくら何でも求めすぎだろうと思うリアスだが、しかし必要だと井草は思っている。

なにせ禍の団の有力派閥と、オカルト研究部は何度も激突している。

ムートロンの魔王クラス以上の実力者とは何人も出くわしている。旧魔王幹部との激闘は死闘といってよかった。大魔王派や英雄派にはターゲットの一つとして認識されている節がある。

そして、ムートロンの本艦隊と激突すれば壮絶な戦いが始まるだろう。本格的な戦争に突入するはずだ。

どうしても強くなる必要はある。少なくとも、魔王クラスが複数人投入された戦場で生き残るぐらいの力は必須だろう。

その辺を考えると、とにかく力が欲しくなる時期ではあるのだが――

「……リアスはそこまで気にする事はないんじゃないか？」

と、そこで井草と同様に酒を飲んでいたアザゼルが、そんな事を告げてきた。

「アザゼル？ どういうことかしら？」

リアスは怪訝な表情をするが、アザゼルは苦笑すら浮かべている。

「ライザー・フェニックスが言ってる？ お前の最大の持ち味は、その巡り合わせの才能だ」

そう告げるアザゼルは、試験会場がある方向や、このレストランで食事をとっている者達を見る。

その目には親のような慈愛の感情があり、更には凄まじいものを見る畏敬の念があった。

「イツセー達は全員凄まじい才能の持ち主だ。普通、こんなレベルの金の卵を眷属にするなんてできねえんだぞ？」

教会の非合法実験からの逃亡者という、普通悪魔が接触できるわけがない立場の木場祐斗。

墮天使最高幹部の一人と、日本異能者の末裔から生まれたサラブレッドの姫島朱乃。絶滅危惧種レベルの妖怪である、塔城小猫。

世界に一つしかない伝説の聖剣の使い手、ゼノヴィア。

北欧アースガルズで主神のお付きをしていた才媛、ロスヴァイセ。

聖女とまで呼ばれ、悪魔すら癒せる神器を持つ、アーシア・アルジェント。

「デイトライトウオーカーの名門の血筋で、更に高位神器すら保有している、ギヤスパーク・ヴァラディ。」

そして、神滅具が一角、赤龍帝の籠手を保有する、兵藤一誠。

眷属だけでこのそうそうたる面子だ。同格レベルが一人眷属に迎え入れただけで、その上級悪魔は将来注目され成果を上げる事ができるだろう。そんなレベルである。

それらを率いる主こそが、リアス・グレモリー。

この天運だけは、努力だけでは手に入らない。

「お前は王だ。その王として間違いなく素晴らしい才能を持っている。だから無理して個人戦力を鍛える必要はない。やるなら味方との連携で光る能力を目指すべきだな」

そう告げるアザゼルは、そして視線を井草に向ける。

「あと、井草もじきに禁手には到達するだろう。これに関しては確信レベルで断言できる」

と、神器研究者であるアザゼルは、はつきりと言い切った。

「……根拠は何です、先生？」

「簡単だよ。お前、一気に精神的な問題が解決しただろう？」

そう告げるアザゼルは、くしゃくしゃと井草の頭をなでると、ほっこりした表情を浮かべた。

「五十鈴と伊代を引つ張り戻して、お前もだいぶ吹っ切れただろ？　あとは伊予が目を覚ませば、お前は自然に至ると思ってるよ」

その発言は確信に満ちており、間違いないと断言する勢이었다。

その言葉に井草は、かつてピスが向けていて今は向けていない感情を思い浮かべる。

なんというか、井草を男として見るようになってきたピスが、昔のようには決して出せない感情だった。

そう、それは――

「……むう」

――まるで親の視線のようで、男からのそういつた視線になれてない井草は、なんとなく顔を逸らしてしまった。

8話

そして、イツセー達がレストランに合流したが、笑うに笑いづらいミスを犯していた。筆記試験は何とか頑張れたのだが、問題は完璧にこなせるとすら思われていた実技試験である。

……割と本気で相手を殴ってしまったらしい。

兵藤一誠は、今は下級悪魔である。

だが、その戦闘能力は凄まじい。

不完全な禁手ですら、若手のエリートとすら称されたライザー・フェニックスを相手に立ち回った。旧魔王派の一大作戦においては、魔王末裔にすら牙を届かせた。更には神や神殺しを相手に大立ち回りを演じ、大魔王派とムートロンの合同作戦においても、覇龍を一蹴したビルデ相手に、覇を克服した力によつて一矢報いるという大戦果を挙げている。

彼と共に戦う仲間達は、誰もが断言するだろう。

兵藤一誠は、最上級悪魔にも届く戦闘能力を持つ冥界の英雄である。

というより、最上級悪魔クラスでなければ、史上最強の白龍皇ヴァーリ・ルシファーすら圧倒したビルデに一発かませるわけがない。普通に考えれば当然の結論である。

なので、イツセー以外の誰もがこの実技試験で無様をさらす可能性など考慮していなかった。というより、一段下の祐斗と朱乃でも余裕で対処できる程度の難易度が平均だろう。実技で高評価をとるのは確定事項だった。

それが、イツセーだけは「上手く行くか分からない」という不安を持っていたのだ。サーゼクスたちと話していた時の発言は、冗談でも何でもなかったのである。

結果、対戦相手は思いつきり殴られて失神。イツセーはあまりの圧勝ぶりに拍子抜けしてぼかんとしたという。ちなみに外野は恐れおののいていたりしていた者すらいたという。下手をすれば自分がぶつかっていたのかもしれないのだから当然である。

井草は心からその対戦相手に同情した。むしろ生きている事を素直に称賛できるレベルだ。死んでない事が幸運である。

「……何やってるんだか、ほんとにもう」

自分がどれだけ実力があるか認識が足りていないイツセーに、井草はため息を付きながら用を足していた。

一歩間違えれば死人が出ていた。その悪魔は昇格資格を与えてもいいだろう。実に頑丈だ。

そして、井草はそんな事を思いながら天井を見上げる。

そろそろ時間だと思うが、さて、どうしたものか。

ニングはサーゼクスと共にルシファーとして準備を終えているのだろう。リムも珍しく正装で迎えてくれるかもしれない。

伊予はそろそろ目覚めてくれてもいいのではないだろうか。五十鈴は、掃除が忙しくて大変かもしれない。

そんな事を苦笑しながら思いながら、井草は考える。

……強く、なりたい。

守るべきものが増えた。一緒に添い遂げたい女性が何人もいる。

ハーレムなどというのは、男の側に財力・体力・器量が必須で、かつそれなりの実力を持つているからこそ認められるものだ。

財力は、そこそこある。

体力は、同格以上ある。

器量はちよつと自信がないが、それでも少しは成長したと思っている。

そして、実力は足りているのだろうか。

井草・ダウンフォールは確かに強い。上級墮天使クラスのポテンシャルはある。レセブターイーツになれば、その戦闘能力は間違いなく最上級クラスに届く。

だが、それでも超えたい相手にはまだ届かない。

ナイアルは強敵だ。主神クラスの実力はまさに絶大で、墮天使最強格のバラキエルが、並び立てる実力者であるミカエルやロイガン・ベルフェゴールとともに挑んでも倒しきれなかったほどだ。

ムートロン先遣艦隊では準最強。ムートロン全体で見ても、上から数えて二十番目の規格外の化け物。そのポテンシャルは、文字通り神の頂に立ち、更にその上位にいる。

その領域に立ち向かうには、今のままでは足りないのだ。少なくとも、最上級のそのまた上位ぐらいは進まなければ、太刀打ちする事はできないだろう。

力が欲しいと願ってしまう。強くなりたいと願ってしまう。

心も、体も、強くなりたい。

昔よりは成長できた。だが、それだけでは決して届かない高みに手を伸ばしたい。牙を届かせたい。

井草・ダウンフォールはナイアルを倒したいと、心から願っている。

井草・ダウンフォールは伊予や五十鈴、リムやピスを守る男になりたいと思っ
てい
る。

井草・ダウンフォールはニング・プルガトリオ・ルシファアの夫として恥じない冥界の英雄でありたいと、魂から望んでいる。

だから、せめてまずは禁手に至りたい。

「……ま、なろうと思つてなれるほど甘くないか」

いつそのこと、英雄派の研究データが手に入ればいいのに。そんなことを願いながら、井草は用を足し終え――

「……うえっぶ」

――飲みすぎて吐いた。

そして十分ぐらいかけて完全にすつきりして、井草は今度こそトイレのドアを開け――

「さて、それじゃあそろそろ無限を墮とすでしょう」

――その体が霧に包まれた。

気づいた時には、誰もいないホテルの中に立っていた。

状況が全く分からないわけではない。幸い、想定できるものが一つはある。

ディメンション・ロスト
絶霧。

上位神滅具の一角である、最強の結界系神器。そして、転移系神器。その能力で転移させられたのだと、すぐに理解できた。

井草自身がこれで転移したのは今回が初めてだが、しかしすぐに状況は理解できる。

英雄派が、仕掛けてきたのだ。

そして、井草は首を傾げながらもしかしすぐに対応する。

「……とりあえず、イツセー達と合流しないと!!」

仲間達と合流しなければ、各個撃破される可能性がある。

英雄派は無謀な挑戦ではなく、勝てる方法を見極めて戦う戦術をとっている。戦略的にも情勢を混乱化させて、仕掛けるチャンスを用意的に増やす傾向が強い。

同時に若さゆえに過ちか、油断しやすい傾向もある。なら、合流する隙ぐらいは作れ

るはず。

どちらにしても単独で行動している井草が一番危険なのだ。合流は理に適っており

「…………ゼノヴィア!!」

その声に、井草は想像以上に状況がまずい事を理解した。

声のする方に駆け出し、そして辿り着く。

そして、意外な顔をした青年の姿を確認した。

「やあ、井草・ダウンフォール。合流が遅れるとは思わなかったよ」

一度だけ会った事がある、英雄派の首魁。曹操孟徳の末裔である、聖槍使い。

井草はその姿を確認して、即座にレセプターイツへと変身すると、躊躇なく両手両足を狙って光力の槍を放つ。

既に血まみれになっているゼノヴィアの姿も見えている。

彼は敵だ、間違いなく。

「……………どういう事だい、黒歌？ 流石にタイミングが妙だし、これが狙いだとは思わないけど!!」

そう言いながら、井草は光力の剣を展開すると、槍を迎撃した曹操に肉薄する。

そして、黒歌が何か言うよりも早く曹操が嗤う。

「いや、ちよつとオーフィスのご機嫌をうかがうのも面倒になってきたんでね。オーフィスをどうにかしようとか禍の団が動いてただけけど」

「あたし達が妨害してたってわけだにゃん♪」

曹操の言葉を引き継いだ黒歌が、即座に呪術攻撃を放つ。

連続で放たれたそれを、曹操は周囲に浮かんでいた球体を操って破壊した。

見るだけで強大な攻撃力を持っている事が分かる。これは明らかに曹操の能力だとも分かった。

故に、その正体にもすぐに察しが付く。

「それが君の禁^{バランス・ブレイカー} 手か！」

「正解さー！」

そして回し蹴りを回避した井草から距離を取り、曹操は素早く球体の一つを差し向ける。

それに対して井草はトールセイバーを展開。フルスイングでのカウンターを狙う。

比較的広いロビーであるがゆえに即座の判断。下手に躲して被害が発生することを警戒しての判断だったが一

「駄目だ、井草さん!!」

イツセーの声が響き、しかし手遅れだった。

「かかったな」

曹操のしてやったりといった声が響き、その瞬間、トールセイバーにひびが入る。

瞬間、球体の形状が変化して井草を刺し殺しにかかるが、井草はとっさにトールセイバーを放して上体逸らしてギリギリ回避する。

だが、これでツールセイバーは当分使えない。

とつきに光の剣を精製しながら、井草は舌打ちした。

「そういう禁手か！」

「いや、違う」

即座に魔力弾を牽制で放ちながら、ヴァーリがそう訂正をする。

「奴はそれ以外にも三つの能力をあの禁手で使っていた。おそらく、球体の数だけ能力があると考えるべきだ」

その言葉に、井草は曹操を観察し直す。

背中から後光を添加していると同時に、七つの球体が浮かんでいる。

それらがオールレンジ攻撃をしてくるといっただけでも厄介なのに、それぞれが特殊能力を保有する。

しかも、最低でもその一つはツールセイバーすら損傷させる能力。他が同格の能力をまた別種で持っているとするのなら、把握しなければ厄介以外の何物でもない。

「ヴァーリ！ 知ってる能力を即座に説明!!」

「……雑兵の生産と飛行能力、あと桁違いの攻撃を放つというものだ」

十分脅威である。

空を飛べない人間という種族である曹操が飛べるといっただけで、警戒度合いは大幅に

上昇する。

ただでさえ攻撃力は高い部類だというのに、それをヴァーリが桁違いというだけでも難易度が大幅に上昇する。

そして、雑兵とはいえど神滅具の禁手で生み出される雑兵は、間違いなく難敵である。そしてトールセイバーすら破壊する特殊攻撃。そしてあと三つは同格の能力を保有している。

……一言言うべきだろう。

「……反則だ」

「多種多様な能力を運用する君が言うかい？」

曹操はそう苦笑するが、出力が違う。

そう文句を言うよりも早く、再び曹操は戦闘態勢をとる。

ここで、新たな悪夢が始まった。

9話

一方その頃、この緊急事態はサーゼクス達も把握していた。

「……それで、井草さんはまだ見つからないのですか!？」

「残念だがそうだ。リアス達も含めて、誰一人として見つかっていない」

顔面蒼白のニングを落ち着かせるように、サーゼクスは目を伏せて告げる。

その表情を見て、ニングもひと呼吸開けて冷静さを取り戻す。

目に入れてもいたくないほどに溺愛しているリアスが行方不明。シスコン極まりないサーゼクスからすれば、今すぐにでも暴れ出したいだろう。

愛する井草が行方不明のニングもつらい。だが、妹が将来の義弟と共に行方不明のサーゼクスもつらいのだ。

それを思い出し、ニングは冷静さを強引にでも取り戻す。

自分は既にルシファアを背負った身である。愛する者が危険に巻き込まれていようと、狂乱することは許されない。それをサーゼクスは体現している。

象徴としてのルシファアと実験保有者としてのルシファア。違いはあれどルシ

フアーという重荷を背負う事を決めた者同士なのだ。

「……失礼しましたのです」

「いや、当然の反応だよ」

ニングをそう慰めると、サーゼクスは同時に視線を外に向ける。

その目には、明らかな警戒の色が浮かんでいた。

「おそらくだが、今回の事件は禍の団は関わっているがオーフィスは関与してない。彼女は巻き込まれた側だろう」

その言葉に、ニングは怪訝な表情を浮かべる。

確かにオーフィスは大組織である禍の団のトップだ。そして、大組織とは末端の行動をトップが完全に把握できないものだ。

なのでオーフィスが小規模作戦を把握していない事はいい。

だが、今回はオーフィスが接触したイツセー達が巻き込まれている。それも、オーフィスがすぐ目の前で関わっている時にだ。

流星に一言いふべきではないだろうか。下手をすればオーフィスから叱責される可能性もある。

それを問い質そうとしたが、そんなニングを制するようにサーゼクスは口開いた。

「そもそも、オーフィスの目的であるグレートレッドの打倒は、禍の団としてそこまでメ

リットのある行動ではない」

「それは……分かるのです」

実際そうだ。

グレートレッドほど強大な存在はオフィスぐらいしかないが、しかしグレートレッドはかなり危険性が低い存在だ。

基本的に次元の狭間を気ままに漂っているだけで、此方から接触してこない限り、向こうからアクションをとってくる事はない。生態が把握できない不気味さはあるが、現状積極的に排除する理由はないのだ。

冥界の覇権を狙う旧魔王派や、地球を制圧したうえでの宇宙開拓時代を作ろうとする大魔王派、それに加えて神々がターゲットであるムートロンなどの大派閥からすれば優先順位ははっきり言って低い。強者との闘いを目的としている英雄派からしても、まずは神々を先に狙うべきだろう。

はつきり言って、オフィスの言う事を聞くメリットはあってもオフィスの願いをかなえる積極的理由は、禍の団にはない。

しかし、そこには大きな問題が存在する。

「かと言って、オフィスを倒す必要があるのですか？」

ニングの懸念はもつともだ。

オーフィスは強大すぎる存在だ。それこそ、グレートレッドのと同格と判断されている。

一神話体系が総力を挙げてでも返り討ちにあいかねない。少なくとも、禍の団の脅威度を数段跳ね上げている存在ではあるのだ。

態々彼女を裏切つて敵対するのも、デメリットが大きいはずだ。

そのニングの懸念はもつともであり、しかしサーゼクス達の警戒はその上を行っている。

「気持ちには分かる。だが、禍の団にとつてもオーフィスのメリットは蛇と象徴の二つだ。その二つ以外は禍の団の視点から見てもデメリットが大きい」

サーゼクスは、そう告げる。

「何を考えているのか分からず、覇権を獲得した後は明確なデメリットになる次元の狭間の独占を願っている。はつきり言えば、グレートレッドよりは餌で釣れる可能性が確認できるが、グレートレッドより面倒な存在でもある」

その言葉は、真実だ。

ある程度願望が把握できているから、グレートレッドよりは交渉のテーブルにつきやすい。だがしかし、グレートレッドより積極的である為に、グレートレッドより小隊的な敵になりやすい存在でもある。

勝ち目はなく、利益をくれるが、しかし将来目障りになる。そんな面倒な存在が、オーフィスだった。

「……同盟の諜報組織が、龍喰^{ドラゴン・イーター}者なるコードネームを英雄派絡みで聞いているそうだ。おそらく対龍に特化した禁手保有者で、更に対龍特化のイーツでもあるのではないかという推測が出ている」

その言葉に、ニングは寒気を感じた。

禁手は強大だ。特に限定特価型の禁手ともなれば、下手をすれば神滅具の禁手すら超える成果を上げかねない。

イーツは強大だ。高いE Eレベルと特化型の能力があれば、神滅具の禁手すら超える能力を発揮できる。

もしその二つが対龍という属性でかみ合えば――

「……目下敵にならないグレートレッドより、将来邪魔になるオーフィスを倒した方が得だと言うのですか？」

「初見とはそれだけで脅威だよ。こちらに妨害されない最大効率の一手をどちらに叩き付けるのかは、向こうとしても考えただろう」

ニングにそう答えるサーゼクスは、しかしその答えを確信しているのだろう。

そもそもおかしかったのだ。

禍の団でも目障りになっていて、同盟側の目に見える形で二度も主流派と衝突していたヴァーリチーム。

そのヴァーリチームにオフィスの護衛を任せるのも、おかしな話だ。

もしや、オフィスの接触の手引きはヴァーリチームの独断だったのではないか。

それどころか、禍の団はオフィスの愛想が尽きたのではないか？

その可能性を把握すると同時、どたばたと廊下から足音が聞こえてくる。

「ニング！ サージェクス様!! 大変ですぜ!!」

ドアを蹴り開け、リムが部屋に突入する。

そしてその首根っこをつかみ。グレイファイアもまた姿を現す。

「落ち着きなさいニングさん。……サージェクス様、ヴァーリチームのアーサー・ペンドラ

ゴンから通信が届きました」

「内容を手短に説明してくれ」

サージェクスの簡潔な指示に、グレイファイアは頷いた。

「ヴァーリ・ルシファーとフェンリルの交換転送を確認した。おそらく英雄派が

龍^{ドラゴン}喰者のコードネームを持つ存在を使ってオフィスの排除を目論んでいる……と

の事です」

その言葉に、サージェクスもニングも息を呑む。

間違いない、事態は大きく動き出している。

敵を調べて戦術を練るのが英雄派。加えて、オーフィスの強大さは禍の団が一番よく知っているはず。

その禍の団がオーフィスと敵対。間違いない、それだけの切り札を持っている事に他ならない。

「……井草さん……っ」

ニングは肩を震わせる。

「信じましょう。井草さんは、そう簡単にやられやしません」

その肩に手を置きながら、リムもまた、顔色を悪くしながらニングを諭した。

それでも、寒気という名の嫌な予感がぬぐえなかった。

実際、既に全滅一步手前の状況だった。

リアスと朱乃は力を封じられた。

ゼノヴィアはエクス・デユランダルを破壊されたうえで戦闘不能。

黒歌はヴァーリーの転移された砲撃から子猫を庇って戦闘不能。

そして、今更に新たに仲間が倒れ伏す。

「がはっ」

「……………ぐ……………あ……………っ」

曹操の聖槍に貫かれ、アザゼル及び、イツセーと合一化した井草が倒れ伏す。

それを見下ろしながら、曹操は静かに告げた。

「全身鎧型の禁手は、オーラが強大すぎる所為で動きが先読みできる。更に赤龍帝と合一化するその技は、二人羽織りゆえに動きがぎこちない。ある程度動きを調べていれば、俺なら簡単に避けられるんだよ」

龍の鎧を纏ったアザゼルも、赤龍帝との合一化で挑んだ井草も一蹴された。

そして、それをなした曹操は静かに告げる。

「黄金龍君を封印した鎧と赤龍帝の合一化。その二つの欠点は、完全な個人個人の調整ができない事だ。俺みたいなタイプからすれば、初見でなければいなしやすい」

「やってくれるな……………曹操……………っ」

アザエルは血を吐きながらそう告げるが、曹操は静かに首を振った。

「いやいや。これは第二ラウンドゆえの不意を付けたからで、こんなものは馳ごっこで

すよ、総督殿。三戦目は逆にこちらが不利ですので、できれば新たな手札を編み出すまでは避けたいのが本音です」

そうアザゼルを評価する曹操に、ヴァーリの拳が迫る。

「曹操！ よくも!!」

それを回避しながら、曹操はあざ笑うかのようにヴァーリに聖槍を向ける。

「総督をやられて怒っているのか？ 親から恐怖すらされたと聞いているが、アザゼル総督を父のように思っているようだね？ しかも、自分の攻撃で仲間をやられた事も根に持っているらしい」

放たれる全ての攻撃を絶妙なタイミングでかわしながら、曹操はそう告げる。

全身鎧型の禁手はオーラの動きで先読みができる。

そう告げたとおりに、動きを先読みしているからこそできる反応で曹操は攻撃を全て回避する。

「いつから二天龍はそんなに甘くなつた？ そこで無様に転がる赤龍帝のように、仲間に対して情が深すぎるぞ？」

「……よほど殺されたいらしいな……っ！」

挑発を受け流す余裕は、ヴァーリにはなかった。

激昂すると同時に、ヴァーリはオーラをほとばしらせる。

誰が見ても分かる。ヴァーリ・ルシファーは怒りのあまり ジャガーノート・ドライブ 龍を解放しようとしている。

だがしかし、相手の弱点を突くのが英雄派のやり口。

そんなものを、あえて見逃す道理はない。

「……冷静になるんだ、ヴァーリ・ルシファー!!」

「ゲオルク！ 流石にこれは結界がもたないから任せる!!」

井草の叱責と曹操の指示はほぼ同時だった。

ゆえに、頭に血が上っているヴァーリより、曹操の指示を冷静に聞いていたゲオルク

の方が遥かに反応は早い。

そして、英雄派には切り札があった。

ドラゴンイーター
龍喰者、サマエル。

アダムとイブに知恵の実を食べるように諭した、蛇にして龍。

そのサマエルは異例ともいえる聖書の神の怒りと怨念を浴び、それゆえに同種の存在の毒となった。

結果として、サマエルという存在はドラゴン及び蛇に対する猛毒として機能すると、英雄は突き止めたのだ。

そして英雄派は、サマエルと封印している冥府と交渉し、一度だけ使用の許可を得た。

その結果、オーフィスは完全に封じられ、未だに動きが取れない。

そのサマエルを制御している英雄は相手に、大技の隙を見せるのは致命傷以外の何物でもなかった。

一瞬。一瞬だった。

一瞬だけ、サマエルはオーフィスだけでなく、ヴァーリにも敵意を向け、攻撃を行った。

そして、その瞬間に勝敗は決する。

「……が……あ……っ!？」

その瞬間に、ヴァーリ・ルシファーは一撃で戦闘不能になった。

「危ない危ない。だが、これでほぼ詰みだね」

曹操はそう断言し、そしてそれは正しかった。

グレモリー眷属とヴァーリチーム。

若手悪魔の中でも最高峰の実力者。全メンバーが揃ってと言うわけではないが、それでも主力陣が集結しているこの現状。

それを、たった二人に圧倒されて敗北する。

眷属を引き連れたビルデと比較しても、遜色ない成果を、曹操は叩き出してのけたのだ。

それを認識すると同時、井草は意識を喪失した。

10話

そして目を覚ました井草は、視線を横に向ける。

そこはホテルの一室らしく、ドアが開いていた。

そして、ちょうどそのタイミングでオフィスが通りがかった。

「あ、起きた」

「……おはよう」

意外と無事な様子のオフィスを見て、井草はどうしたものかと考える。

確か、ドラゴンに対する絶対的な天敵によって緊急事態になっていたのではないだろうか。

「言い方悪いけど、なんで無事なの？」

皮肉でも何でもないが、疑問は出る。

しかし、オフィスは静かに首を横に振る。

「無事じゃない。曹操達に、我の力ごとそり奪われた」

そう告げるオフィスは無表情だが、彼女がごとそりというのならそれは相当だろ

う。

なにせ主神クラスを十人以上は投入して勝負になるような存在だ。その力が「ごっすり」奪われたのなら、奪われた力は主神クラスが片手が埋まるほど動員しても勝てないようなほどにレベルだろう。

グレートレッドが出てくれば話は別だが、グレートレッドは中立と言っている。なので、敵は強大かつ自由に使える力を手にしたのだ。

「それで、どれぐらい奪われたの？」

「半分ぐらい奪われた。今の我、全盛期の二天龍の二回りぐらい」

それで大幅に奪われたと納得できるのだから、オーフィスの強大きに嫌となる。

状況は気絶している間にも進んでいるらしい。それを把握しなければ判断できない事も多いだろう。

それにアザゼルとリアスがいるのなら、そちらの判断を優先するべきだ。あの二人の方が人を率いる立場である以上、井草は最低限の方針ぐらいは聞いておくべきである。

なので立ち上がりながら、井草はオーフィスにとりあえず聞く事を聞く。

「で、何してるのさ？」

「曹操達に奪われてる間に、我、蛇の形で力を逃がした。今、それを回収した帰り」
つまり、本来ならもっと奪われていた可能性があるという事らしい。

不幸中の幸いというべきだろうか。少なくとも、禍の団がオーフィスから奪った力を口くな事に使わないのは確定なので、まあ最悪ではないのだろう。

だが、オーフィスが危険因子であるのは変わらない。

次元の狭間を独占する事を考えているオーフィスは、同盟側にとって不利益極まりない。更にはオーフィスの変質も警戒するべきであり、次元の狭間に長居されると何が起こるか分からないのが同盟側の見解だ。

必然的に、現時点でも桁違いの力をオーフィスが持っているのは問題だったが。

「……一つ、聞いていいかな？」

「なに？」

小首を傾げるオーフィスに、井草は一つ聞く。

「オーフィス。ちよつと聞きた事があつただけだ」

井草は一つ聞きたい事があつた。

「……別に静寂を得たいだけなら、次元の狭間じゃなくてもいいんじゃないかい？」

その言葉に、オーフィスは首を傾げる。

「どういう意味？」

「いや、言っちゃ悪いけど、次元の狭間じゃなくても辺境とかに引き込まつて「立ち入り禁止」とか言つとけば、君の実力なら関わってくる奴とかほほいなくない？」

実際問題、オーフィスは強力すぎる。

ただ静寂が得たいなら、生物がほばいような場所に引き籠ったうえで「関わるな」と宣言すればいいのだ。

同盟側としても、ある程度配慮したうえで関与しない事を願っているのなら、ある程度は妥協するだろう。

むやみやたらに敵対する必要はない。むしろ、明確なデメリットがないのなら手出ししない方が無難な相手である。それだけの力を今でも持っている。

何故態々グレートレッドと揉めるなどのデメリットが多い次元の狭間に拘るのか。そこが聞きたかった。

そして、オーフィスははっきり言った。

「……盲点」

沈黙が、響いた。

そして、井草はなんとなく思った事がある。

あれ？ もしかしてこれ、デイスコミニケーションしてただけ？

……とりあえず脱出してから、アザゼルに相談しよう。

井草はそう結論付けた。

そう、今はそれをしていく余裕はない。欠片もない。

井草の感覚が危険を告げている。

間違いなく、この部屋の周囲は包囲されていた。

「じゃあ、とりあえず現状の説明と俺らの対応を説明する」

井草が合流してから、ヴァーリ達を含めた全員が合流してから、アザゼルが状況をまとめ上げる。

「まず、俺達は完全に包囲されている。それはいいな？」

そこがまず問題だった。

英雄派にサマエルを提供した、ハーデス達冥府の死神陣営。

彼らは曹操達と繋がっており、曹操がここから離脱すると同時に一齐に押し寄せてきた。

下級はもちろん中級以上も存在し、立て籠る為に一フロア丸ごとに展開した結界の外側を包囲している。

死神は種族としては悪魔より戦闘能力が高い。下級死神と言っても中級クラスはあり、最上級ともなれば、魔王や半端な神とも戦えるだろう。

それらに完全に包囲された現状で、撤退は困難だ。

なら転移で逃げればいいかといえ、そんな甘い真似を英雄派も許しはしない。

英雄派の魔法使いゲオルクによる結界空間は強力で、加えてヴァーリの転送で警戒されている為一度だけ三人転移させるのが限界。加えて、転移担当のルフェイが必須なので、離脱できるのは二人までだ。

更にオーフィスは不可能。今回は対オーフィス用に特化した結界空間のようで、弱体化したオーフィスではどうあがいても不可能な設計になっているようだ。最優先すべき対象をよく理解していると言っている。

その為天界に事情を説明する役としてイリナが選ばれ、エクス・デュランダルが大きくダメージを受けたゼノヴィアが護衛として付く事になった。

客分であるレイヴェルを選択する案もあったが、しかしこちらはレイヴェルが辞退した事もあって、イリナが選ばれた形になる。

ついでに、ルフェイから支配エクスカーバー、ゲイラーの聖剣を預かっている。最強格の魔獣を使役する事に成功した為、必要性がなくなつたらしい。気前のいい話である。

そして、残存メンバーは増援が来るか結界空間の要を吹き飛ばすかする必要がある。

その為の作戦は決定した。リアスによるイツセーを見てきたからこそできる、凄まじい作戦だったが、グレモリー眷属らしい作戦でもある。

とはいえ、それでも確実とは言い難い。

現状は、ヴァーリチームは完全に禍の団から追放された形だ。しかも、オーフィスは英雄派が奪った力がそうだとする事にされている。

遠慮なく禍の団も戦力を送り込めるといふ事だ。ゲオルクが交換転送術を真似たらしく、最低でも曹操の代わりにジークが来る事が確定している。

ヴァーリ・ルシファアはサマエルの呪いを受けて絶不調。加えて、黒歌を含めて殆どのメンバーが消耗している。

確実と言っているほどに不利な状況だ。此処で余計な証拠を残すのも得策ではないし、過剰戦力で潰しにかかってくる可能性も大きい。

ムートロンか大魔王派から戦力が送られる可能性を考慮すれば、危険きわなりないと言う他ない。

だがしかし――

「お前ら、いいか?」

アザゼルは、応急処置の済んだダウンフォール・ドラゴン・スベテ堕天龍の閃光槍を構えながら宣言する。

オギアがいるから処刑しておいても良かったのだが、参加した旧魔王派関係者の意見を取り入れたのが悪かったようだな」

「そりや大変だ。……だが、これももしかするとあれか?」

「と言うと?」

「いや、ハーデスが英雄派を出し抜いた可能性があつてな? てつきり人類選別機関か

絶対正義団の連中に接触したんだと思つてたんだが、まさかあいつかあ。そんな価値合つたのかあ」

「担ぎやすい馬鹿ではあるから、ありうるか。……人類選別機関も絶対正義団も確固たる信念で動いているから、確かにシャルバよりは動かしにくいだろう」

「完全に切り捨て担当の手駒扱いつてか? 氣づいてねえだろうシャルバはホント馬鹿だったんだなあ」

「……さて、英雄派に筋を通す為にも、搜索部隊を派遣したいが、しかしそんな余裕もないか」

「なんでだよ? あいつ蛇なくしてるから、ビーディゼ辺り送ればイッパツじゃね?」

「そうもいかない。精神病棟に叩き込む必要があるぐらい荒れていてな、しかもオギアまで敵視しているという報告がある。……勢い余つてこちらに喧嘩を売りかねない」

「返り討ち確定じゃね?」

「流石に何かしらの手段はあるだろう。ハーデス辺りが入れ知恵をしている可能性はある。ある程度の防備は固めておき、想定外の事態に動かし余力も用意しなければ」
「……しゃあねえ。他の連中にも報告するか。誰か手が空いてる奴は――」

「ほお？ 何やら面白い事を話しているな」

「「コカビエル？」」

11話

結界空間での激戦は、死闘というほかなかった。

大出力砲撃で結界のかなめの内、二つを破壊することには成功。残り一つを破壊すれば、何とか脱出できる余力はある。

だがしかし、その余力をひねり出すのが厄介だった。

イツセーと井草の合一形態。コードーネーム、ウエルシユ・ボゼツシヨウ・プロモーション憑依せし赤龍帝。

プロモーションと譲渡と封印系神器の特性を併用し、指定対象と一体化することで能力を向上させる、真女王と並ぶイツセーの新たな力。

曹操相手には動きが荒くなるという欠点を付かれて敗北したが、中級悪魔程度の有象無象を吹き飛ばす分には問題ない。性能が違いすぎるのだ。

加えて、井草との合一形態では僧侶の力を利用する。このため、砲撃戦闘ではめつぱう強い。

将来的には戦車と騎士の駒に相当する形態も具現化したい。だが、それは生き残ってからだ。

そして、井草たちは大暴れしていた。

「イツセーキばって!!　ここが踏ん張りどころだよ!!」

『はい!　根性だけならまだあります!!』

井草にイツセーはそう答えるが、しかし疲労は隠せない。

最初の大量砲撃でガス欠気味だ。これ以上の砲撃は困難だろう。

しかも死神たちは最上級クラスのプルートを投入。そして曹操の宣言通り、ジークフリートも参戦してきた。

いまプルートはアザゼルが抑え、ジークフリートには祐斗が一矢報いた。

聖魔剣の龍殺しを作れるようになった木場祐斗の刃は、龍の力を神器で持っているジークフリートにとって脅威である。

だが、それでも難敵がそろっている。

ジークフリートはイツツと化して猛攻を開始し、祐斗をカバーするために戦力を大量に投入する必要になっている。

アザゼルは墮天龍の鎧を全力で使うが、相手が強いうえに大ダメージを追っているため苦戦中。

その上、死神の数があまりに多い。

砲撃ができない現状では、押し切られてもおかしくない。

しかもオーフィスが役に立たない。

力を奪われた影響で、加減が聞かないらしい。ちよつと支援したつもりで味方が巻き込まれた。

はつきり言つて、戦力差が大きい。室ならともかく数では圧倒的に不利だ。

せめて絶大な火力をあと数十発発射できれば。

そう考へて、それは攻め手とは言わないと考へ直す。

そんな絶大な火力をどうやって賄えというのか。

普通に無理だ。絶対無理だ。

そう思つたその瞬間――

『やあ、今代。苦戦しているようだね』

脳裏に、言葉が響いた。

幻聴かと思つたが、イツセーが驚きをあらわにする。

『れ、歴代の人たち!』

「ああ。そういえば残留思念がいたね」

井草も納得して、意識をそちらに向ける。

一言で言おう。とても変なことになっていた。

具体的に言おうと、タキシードにワイングラスを持った状態という、ツツコミどころだらけの姿で統一されていた。

「帰ってください。余裕ないんで」

井草がそういうのも無理はないだろう。

今余裕はかけらもない。漫才をする暇はかけらもなかった。

しかし、ワイングラスを中身がないのに揺らす歴代たちは、不敵な笑みを浮かべていた。

『気持ちわかる。死神はとても厄介だからね』

『だからこそ、私たちは君たちに助言をしに来たのだ』

助言。

その言葉に飛びつきたくなるが、しかし不安もある。

歴代赤龍帝はあの手の手で覇龍を使わせたがる。今回もその可能性があった。

今そんな余力はない。イツセーの寿命が今度こそ尽きるのは確定だ。

井草は気づけば、合一化を本能で解除していた。

「おいどうした！ 気張ってくれ、今が踏ん張りどころなんだぞ！」

器用にプルートと戦いながらアザゼルが言うが、井草はとりあえず吠える。

「先生！ 歴代赤龍帝がトチ狂いました!!」

「先生！ 歴代がリアスのお乳に譲渡しようとか言ってます!!」

井草に続いてイツセーが歴代からの意見を告げる。

合一化を解除してよかったと、井草は心から思う。

真面目に聞いていたら失神していた可能性がある。それはあまりにも致命的だ。

だが、その瞬間、歓喜と戦慄が走る。

味方は歓喜し、敵は戦慄した。

「いよつしやあああああああ！ グレモリー眷属の必勝パターン来たあああああああ

あ!!!」

「……最、悪だ……っ！ ここまで来て!!」

アザゼルが歓喜の雄たけびを上げ、ジークフリートは戦慄のあまりイーツ化が一瞬解

除される。

確かに定番パターンの逆転フラグだが、他に何かないのだろうか？

思考が一瞬停止した井草は、そして気づいた瞬間にすごいことになっていた。

具体的には、リアスの乳が縮むことでイツセーの砲撃が連発できるようになった。

……エネルギー保存の法則とかどこ行っただと思っただが、これは好機だ。

凄まじい勢いで死神たちが駆逐されていく。蒸発とっていい勢いで消し飛ばされる。見ていてすぐスカツとする光景だ。

そして、それを阻止するべき当然敵も戦力を差し向けるが、それをグレモリー眷属は必死になって阻止する。

井草も気合を入れ、とにかくこのチャンスを逃さんと死神たちを迎撃した。

そして十分後、リアスの乳と有象無象の死神たちは無と化した。

一瞬イツセーがホテルとリアスに視線を交互に向け、小猫からソファアを投擲される。同格となった乳を見比べていたらしい。確かに平坦さは似ている。

その瞬間、後頭部に冷蔵庫がたたきつけられたが、小猫は読心術でも持っているのだろうかと井草は思う。

とりあえず言うべきことは言っておこう。

「イツセー。愛する女の乳こそ至高と思うべきだよ」

「……でも、でも、おっぱいが……おっぱいが……っ」

イツセーは滝のように涙を流すが、しかしそれを突っ込む余裕はない。

というより、井草もいろいろとツッコミどころだらけだった。

「まあいい。これで形勢逆転、チエックメイトだ」

アザゼルは勝利を確信し、光の槍を向ける。

残存する敵勢力は、ゲオルクとジークフリート、そしてブルートのみ。今のグレモリー眷属たちなら、数で押し切れる戦力だ。

結界装置も壊れる寸前。むしろ、絶大なエネルギー供給にものを言わせたイツセーの砲撃を雨あられと受け、まだ持ちこたえていることを称賛するべきだろう。ゲオルクは見事である。

「これが、グレモリー眷属の爆発力か……」

ゲオルクが肩で息をしながら、感心と戦慄を織り交ぜた声を出す。

これなら強引に脱出するのも、このまま敵を全滅させることも不可能ではない。

井草はそう判断し、気を取り直して戦闘をおこなおうとし――

「フフフフフ。存外に苦戦しているようだな、英雄派の諸君」

そして、事態はさらに変貌する。

12話

転移魔方阵が展開され、一人の男性悪魔が姿を現す。

どこかやんだ雰囲気を漂わせるその悪魔の姿は、その倍居る誰もが見おぼえがあった。

英雄派は一応同胞なので当然知っている。そして、井草たちも殺しあつた仲なので当然覚えている。

代表する形で、ゲオルクがげんなりした表情を浮かべる。

「シャルバか。独断で動いているとは聞いてたが、なぜここに？」

シャルバ・ベルゼブブ。大魔王派に吸収されたかつての派閥、真なる魔王の一族こと旧魔王派の幹部だった男だ。

英雄派と協力しての大規模作戦を引き起こすも失敗。自身も同胞であるクルゼレイやカテレアとともにその原因となった井草たちを殺そうとするが、イツセーの覇龍発動などの要因が重なり敗北。捕縛されたカテレアやクルゼレイとは違い逃亡に成功するも、魔王血族三名に支持されるビルデに実験を奪われ、権限が大幅に削減された男だ。

その男が、ここにきて単独で姿を現している。

それが気になり警戒心をあらわにするイツセーたちを無視するように、シャルバは愉快そうな表情を英雄派に向ける。

「ああ、諸君らのおかげで傷も癒えたのでな。蛇もエキスも失ったが、それでも魔王の血を継ぐ私なら相応に動くことはできる」

そう告げるシャルバに、ジークフリートは警戒心を浮かべた表情を見せる。

「それで？ 助けに来てくれた風でもなさそうだけど、何をしに来たんだい？」

その言葉に、シャルバは実に醜悪な笑顔を浮かべた。

「なあに、ちよつとした戦線布告だよ」

その言葉とともに、シャルバはマントを翻す。

そして、そこから術式に操られていると思しき、子供が姿を現した。

その姿を見て、ゲオルクとジークフリートは息をのむ。

そして、イツセーたちも表情を切り替えた。

ただし、井草はよくわからない。

おそらくは英雄派の構成員なのだろう。可能性としては、京都で英雄派がイツセーたちに宣戦布告しに来た時のメンバーと思われる。

そしてただのメンバーというわけでもないだろう。シャルバのようなタイプがわざ

わざと連れてきたのだ。ジークフリートやゲオルクが驚いているのだ。イツセーたちも反応する以上、相応の能力を持っている可能性が高い。

「……簡潔に説明して。彼は一体？」

「一言で言つてやる。魔獣創造の保有者だ」

井草の質問にアザゼルが答え、そしてシャルバもまたうなづいた。

「そう。上位神滅具ロンギヌスの一つ、魔獣創造の保有者の少年だ」

「シャルバ！ 何でレオナルドがここにいる!? そもそも、彼は別の作戦に参加していません!!」

ジークフリートはグラムの切っ先を突き付けて、シャルバに聞いた。だす。

うすうす井草も勘付いていたが、どうやらこの少年の登場は想定外らしい。

シャルバが独断で動いていると聞いていたことも考えれば、彼が連れ出したと考えるべきだ。

そして、それを肯定するかのようシャルバは胸を張り、魔法陣を具現化する。

「こうするためだ」

その瞬間、レオナルドと呼ばれた少年から、絶大なオーラが放たれる。

……断言してもいい、明らかにまともなことを考えていない。

「うあああああああああ!!」

レオナルドは絶叫し、そしてその体がぐらぐら広がる。

それらは次第に魔獣の姿をとってくるが、実際のところ大きな問題が勃発していた。

……一言で言おう、大きすぎる。

200メートルを超える巨体が一体。さらに、十体以上の一回り小さい個体が生み出されていく。

大きいことと戦闘能力はカナはずしも直結しないのがこの世界の業界だが、しかし巨体の存在で下級以下の実力などというものも存在しない。

これだけの巨体の魔獣、戦闘能力も大きさに比例すると考えるべきである。

そして、空に浮かび上がったシャルバは高笑いをした。

「フハハハハハハハハハハ！ 魔獣創造はとても理想的な能力だ！ しかも彼はアンチモンスターへの創造に特化しているそうじゃないか！ 君たちの行動を調べ上げ、彼を拉致させてもらったよ!! 邪魔した別動隊の物は殺させてもらったがね!!」

明らかに暴走しているといわんばかりの内容に、井草たちはもちろん英雄派も苦虫をかみつぶした表情を浮かべる。

それを愉快気に見下ろしながら、シャルバは宣言した。

「さあ見るがいい！ 魔獣創造の禁手によって生まれる、冥界を滅ぼすための怪物を!!」
その言葉とともに、巨大な魔獣たちは魔法陣に包まれる。

「冥界全土にこ奴らを転移させてもらう。この規模の悪魔用のアンチモンスターなら、忌々しいビルデヤサーゼクスたちの子飼いどもを滅ぼしてくれるだろうさ！」

そう断言するシャルバに、ほぼ全員が表情を引くつかせる。

神滅具の禁手は絶大な力を発揮するのは、誰もが知っている。

しかもまともな方法を使っていない発動だ。覇龍クラスの絶大な力を持っていると考えていい。レオナルドを使い捨てにするつもりで発動したとしか考えられない。

それだけの力を、シャルバは敵であるサーゼクスたち現魔王派だけでなく、味方のはずのビルデ達大魔王派の悪魔たちすら殺すために使うといったのだ。

「ゲオルク！ 結界を!!」

「協力しろ、グレモリー!」

ジークフリートの言葉にうなづきながら、ゲオルクはリアス達にも協力を要請する。

シャルバの発言が本当ならば、もはやあの魔獣は現政権にとつても、禍の団にとつても脅威だ。

リアス達もすぐにそれをさっして一斉攻撃を放つが、しかし魔獣たちは意にも介さない。

ゲオルクの結界も強引に突破し、そして一体ずつ確実に転移していく。

「やらせるか!」

井草はとつさに飛び出そうとするが、カウンターで大量の魔力砲撃をたたきつけられる。

すでにかかなりのダメージを受けていたこともあり、不意打ちで喰らった攻撃に井草は吹き飛ばされる。

そして次の瞬間、最後の一体も転移してしまった。

「……まずいぞ、あんな化け物がもし市街地に転移したら……っ!!」

アザゼルが歯噛みするなか、ゲオルクたちはすぐに割り切ったのかレオナルドを回収する。

「引くぞ、ジークフリート。シャルバがレオナルドのキャパシティを超える力を発動させた余波で、この空間も持たない」

その言葉お通り、白い空に断裂が生まれ、空間のきしむ音が響く。

激戦でただでさえ近かった結界空間の限界が、今の力の発動で一気に到達したのだ。

ジークフリートもそれを理解して、ため息を付いた。

「頃合いのようだね。プルート、貴方も引いた方が——」

ジークフリートはそう言って振り返るが、すでにプルートは姿を消している。

その瞬間、英雄派は何か気づいた表情を浮かべる。

「……あの骸骨神、シャルバを支援していたのか。くそ、レオナルドの力はゆつくり高め

ようとしていたのに、これでは……」

そうジークフリートは漏らしながら、英雄派は霧に包まれて離脱する。

……敵は撤退した。だが、状況はさらに悪化している。

冥界に大いなる危機が迫ろうとしている。その事実には、井草は寒気すら感じていた。

そして、次の瞬間シャルバは魔力砲撃を後衛に向かつて放つ。

とつさに迎撃態勢をとる後衛だが、消耗の激しいヴァーリは攻撃を集中されていたこともあつて大きくダメージを受けて崩れ落ちた。

「どうした？　ご自慢の魔力と白龍皇はどこに消えた!!　初戦真なる魔王に混じり物は勝てないということだなあ!!」

総統うつぶんがたまっていたのか、シャルバは心から愉快そうに高笑いをする。

「……他者の力を借りてまで魔王を名乗る貴様に言われる筋合いはない」

ヴァーリはダメージを受けながらもそう切り捨てるが、シャルバは愉快そうにそれを見下して嘲笑う。

「だから貴様はビルデごとき若造に、公衆の面前で一蹴されるのだ!　覇龍まで使つて蹂躪された貴様はとても愉快だったぞ!!」

そう告げるシャルバに、今度はイツセーの砲撃が放たれる。

「人のライバルを馬鹿にしてんじゃねえ!　つていうか、ビルデは少なくともお前より

頑張ってるよ!!」

イツセーはそう断言してシャルバを糾弾するが、そんなイツセーにシャルバは指を突きつけると狂気に満ちた目を見せる。

「下賤な転生悪魔の宿敵にはふさわしい評価だろうか？ 私を崇めぬ腐敗した悪魔の餓鬼どもに慕われる貴様にはな！」

そしてその狂気が伝染したかのように、表情もさらに狂気に満ちたものになる。

「ついでだ！ 貴様の守る冥界の子供たちは、わが呪いで滅ぼしてやろう!! せめてもの情けだ、差別のない平等な冥界とやらを、下級中級上級の区別なくわが呪いで絶息させることで実現してやろう!!」

そして、シャルバは周りが見えていないのか、声を荒げる。

「これは呪いだ！ この私を拒絶する冥界を私自身が毒となつて滅ぼしてくれる!! このシャルバ・ベルゼブブ、最期の力で忌々しい存在へとなった冥界を滅ぼしつくしてくれるわ!!」

「……そんなロクデナシだからお前は崇められないんだよ!!」

さすがに切れそうになり、井草は光力を放つ。

腐つても魔王なのかそれをさらりと回避したシャルバは、ふと何かを思い出したかのように視線をさまよわせる。

そして、オーフィスを見つけるとにたりと笑った。

「おっと、忘れていた!!」

瞬時にシャルバは捕縛の魔法陣を展開させる。

その瞬間、オーフィスは魔力の拘束具で動きを封じられた。

「パワーダウンを補うためにも蛇は必要なのでな! それに、私に協力してくれたもの

たちへの土産も必要だというものだろう? 弱体化で捕縛できたのは僥倖だ!!」

そう言いながらオーフィスを引き寄せるシャルバ。

そして、その間も空間の崩壊は進み、開いた穴から瓦礫が吸い込まれ始める。

このままだと、時間が無い。

「このままだとまずいじゃん! これなら転移できるから、逃げるわよ!!」

「急いで集まって、みんな!」

黒歌とリアスの大声を聞いて、皆が黒歌の展開する魔方陣へと集まっていく。

井草もそれに続くこうとして、しかしイツセーが動かないのに気付いた。

「イツセー! 急ぐよ!!」

「……いや、俺はいきません」

思わず、耳を疑った。

イツセーの視線は、シャルバと彼がとらえるオーフィスに注がれている。

その意味に気づいて、井草はすべてを察した。

「……イツセー。オーフィスは禍の団の親玉で、俺たちは内輪もめに巻き込まれたただだ。わかってる？」

「そんなことは、どうでもいいです」

その返答は、遠回しな井草の質問に対する雄弁な答えだった。

イツセーは、シャルバからオーフィスを救い出すつもりなのだ。

「オーフィスはイリナとアーシアを助けてくれた。シャルバは冥界の子供たちまで巻き込もうとしている。……どっちも見過ぎることなんて、俺にはできません!!」

これは言っても聞かない。そして強引に連れ戻して揉める時間もない。

井草はあきらめ――

「わかった。さっさと終わらせるよ」

――仕方ないので協力することにする。

「先生！ イツセーは俺が見てます!! 転移してから引き戻し準備をお願いします!!」

「おい正気か!?!」

速攻でアザゼルからツツコミが来るが、しかしこれはもう仕方がない。

「いつてもイツセー聞きませんよこれは! ほら、俺は次元の狭間の探索任務に志願したこともあったから、短時間なら持つ術式は習得してます!!」

「ヴァーリが次元の狭間で活動できてたんなら、赤龍帝の俺だって少しはいけるはずです!! 先生たちは急いでこのことをサーゼクス様たちに伝えてください!!」

何の根拠もなく次元の狭間という危険地帯に行くわけではない。それを二人とも伝える。

イツセーも多少は考えているようで、少しは安心した。

とにかく、イツセーはこうと決めたら何でも動かないタイプだ。こういうところは欠点でもあるが、ただの我儘じゃなくて人のために動くこともあるから責めるに攻めきれない。

ならばサポートできるものがするしかないだろう。そして、それができるのは井草ぐらいだ。

今のシャルバなら、憑依せし赤龍帝を使えば確実に勝てる。いや、真女王があれば負けることはまずないだろう。

あとは井草がサポートすればそれでいい。外部からの転送魔方陣で転移することはできるだろうし、とりあえずシャルバはここで倒しておこう。

井草は冷静にそう判断すると、静かに光の槍を形成する。

「ヴァーリ! おまえの分もあのバカ殴ってくる!!」

イツセーはヴァーリにそう告げると、拳を構える。

「……イツセー!!」

転移の光がアザゼル達を包み込むその瞬間、リアスが声を上げた。

「必ず帰ってきて!!」

「勿論です、リアス!!」

そしてその言葉とともに戦闘が開始され――

「ほお。どうやら余興が楽しめそうだ」

想定外の方向から、大量の光の槍が放たれた。

13話

条件反射レベルで、井草はイツセーを蹴り飛ばした。

デビルイーツの特性があるといえど、基本的には墮天使なので井草の方が光力に耐性がある。それだけの理由だ。

そして攻撃を何発か喰らいながら、井草は速やかにそちらに突撃する。

「井草さん!？」

「イツセーはシャルバを！ 伏兵は俺が引き受ける!!」

イツセーに目的を思い出させながら、井草は槍が放たれる方向に向かって突撃する。いくつかの攻撃を喰らいながら、しかし大半を迎撃しつつ井草は突貫する。

そして、その敵手の姿を正確に把握して、井草は舌打ちした。

「ここで来ますか、コカビエルさん!!」

「ああ、そうだ！ 暇つぶしにシャルバを探していたらいいものが見れた!!」

光力の刃同士がぶつかり合い、光の粒子が飛び散る。

そのままつばぜり合いをおこないながら、井草は全力でこかびえるを押しつける。

幸か不幸か、コカビエルが使った転移魔方陣はまだ残っている。うまくすれば利用でききる。

今この状況下で混乱が起きるのだけは避けなければならない。

イツセーにはシャルバに集中してもらおう必要があった。

故に、井草は術式を起動しながら転移魔方陣に体当たりを敢行する。

その瞬間、転移魔方陣が暴走した。

弾き飛ばされた空間は、不幸中の幸いか冥界だった。

黒歌たちによる転移術式に引き寄せられたのだろう。遠くには井草たちが転移に巻き込まれたホテルが見える。

幸か不幸か脱出できた。これはいい。

イツセーが残されているが、今は気にしている余裕がない。かれには彼で頑張ってもらうしかなかった。

流れ弾で都市に被害が生まれかねないという厄介な事実の方が重要だ。

井草はわざと都市から離れ、コカビエルに上空を取らせながら戦闘を行う。

これならコカビエルの攻撃が都市に届くことはない井草の攻撃が当たることもない。

それを理解しながら、コカビエルもあえてその戦法に乗る。

そちらの方が面白いと判断したのだろう。

「いいぞー！ しばらく見ないうちに強くなったようだ!!」

「激戦と訓練の毎日ですからねー」

近接戦闘や遠距離戦闘を織り交ぜながら、コカビエルと井草は激突を繰り返す。

コカビエルはまだイーツになっていない。

だが、コカビエルは変身前から墮天使でも上位一桁に入る強者だ。そのままでも並み

の最上級悪魔よりはるかに強い。

そして井草はイーツ状態で最上級墮天使クラス。それもまだ上が多く存在するレベ

ルだ。

断言してもいい。イーツになられたら勝ち目がない。

アザゼル達がこの転移に気づいて増援を送ってくれる可能性に期待し、それまで凌ぐ

覚悟を決める。

死ぬ気はない。そんなつもりはかけらもない。

意地でも生き残る。その決意を決め、井草は剣を握り締める。

「まだ戦争をするつもりですか、貴方は!!」

「勿論だとも! 望んだものとは形は違うが、これまででない大規模な戦争だ! これを楽しまなくて何が堕天使か!」

「色事とかに夢中になってください!!」

ぶつかり合い、撃ち合いながら井草とコカビエルは高速で飛翔する。

音速すら超える速度のドッグファイト。街中で起きれば衝撃波で大きな被害が生まれていただろう。

振るわれる攻撃をしのぎながら、井草は状況の不利を痛感する。

性能で劣る。経験で劣る。技量で劣る。残存体力で劣る。とにかく劣る部分が多い。手札の数で勝るが、それだけだ。

曹操に叩きのめされ、更に死神たちと激戦を繰り広げた。はつきり言つてそろそろ限界に近い。

それでも、それで心が折れれば死ぬ。

それがわかつているから、井草は戦闘に全力を尽くした。

そして、その渾身の戦いをコカビエルは心底から嬉しそうに嗤つて認める。

「本当に強くなった! 素質はあったがこの短期間で伸びるとはな!!」

戦闘狂に強さを褒められれば、間違いなくそれは強くなったであろう。

だが、喜んでいる暇はかけらもないので意識を戦闘に集中し――

「さすがはアザゼルの血を継ぐものだ!!」

――思考が止まり、カウンターの攻撃が井草を大きく切り裂いた。

「……………は？」

ダメージを感じる余力もなく、井草はぼつりと声を漏らす。

その光景と思わぬラッキーヒット。二つの出来事にコカビエルがぼかんとした表情を浮かべた。

まるで、まだ知らなかったのかお前とでも言いたかった表情だ。

そのまま崩れ落ちる井草を見下ろしながら、コカビエルは、はつきりと告げた。

「ああ。お前はアザゼルの血を引いている。……………まだ聞かされてなかったのか？」

その表情は本心からの驚きが見えており、嘘でないことがすぐにわかった。

というより、余計なことを言って滾る戦いを阻害してしまったことに精神的ダメージ

すら受けている節がある。これは確実に真実だ。

「……………どういう、ことですか……………!?」俺は、上級墮天使と人間のハーフか何かだとばかり……………?」

井草はそうだと思っていた。そうだとばかり思っていた。

それを聞いて、コカビエルは静かに肩をすくめる。

「いや、貴様はニング・プルガトリオ・ルシファーと同じ先祖返りだ。……………昔俺がアザゼルと一緒に閔ヶ原の戦いを見物した帰りにあのバカがはしゃいでな。しかも酔った勢いでそのことを忘れていたらしい」

あきれ顔で告げるコカビエルは、遠い目をしていた。

「酒の席でたまたま告げてそれが発覚してな。調べてみたら、先祖返りのお前が見つかったというわけだ」

そして、コカビエルは憐憫の視線を井草に向ける。

「大変だったらしいぞ?」なにせ異形を知らない家系でいきなり墮天使の翼だからな。俺は触りしか知らないが、無理心中が起こつたらしい」

……………井草は、親のことを深く考えたことはなかった。

親戚からはたらいまわしにされていた。だから、両親には問題があるのだとも思っていた。

だが、真実は逆だった。

井草・ダウンフオールこそが、家族を苦しめていたのだ。

「全く下らん連中だ。これだけの力を秘めた先祖返りを恐れるのだから、人間とは度し難いと思わんか？」

そう告げるコカビエルは、翼を広げると飛び上がる

「……見逃す、気ですか……？」

「ああ。こんな決着は興ざめだ。お前はもう少し伸びそうだからな、そのあとのほうが狩りがいいがあるというものだろう？」

にやりと笑いながら、コカビエルはそのまま飛び去ろうとし、そして井草に振り替える。

「ああそうだ。兵藤一誠ではなくお前が俺にぶつかったのは失策だったな」

「シャルバはサマエルの毒をもっている。兵藤一誠は死んだかもしれんぞ？」

最大級の爆弾を投下しながら、コカビエルはそのまま飛び去って行った。

そして、気づくと、涙が頬にあった。

井草自身の涙ではない。井草に縫りつく、ニングの涙だった。

悲しみではなく安堵の涙をこぼしながら、ニングはほお、と息を吐く。

「……おはようなのです、井草さん」

「ニング……？」

どうやら気絶していたらしい。気づけば病室のベッドに寝かされていた。

そして、不意打ちの如く体当たりされた。

「井草！ 井草井草井草!!」

「起きやがりましたか、井草!!」

涙目の五十鈴とリムに抱き着かれて、井草は心配をかけていたことを自覚する。

まあ、いきなり行方不明になるはコカビエルに殺されかかるはと大変だったのだ。心配されても当然だろう。

「……ごめんね、みんな。心配かけた」

井草はそういうと、五十鈴とリムの頭をなでる。

そして、ニングにはほほ笑むと手招きした。

ニングは少しだけ周りを確認して、誰もないことを把握してから、すつと寄り添う。

「起きるまで心配だったのです」

「うん。心配してくれてありがとう」

そしてニングの頭をなでながら、井草は静かに苦笑し――

「いい雰囲気のところ申し訳ありませんが、状況は刻一刻を争います」

――いきなり現れたシアリーに、全員が度肝を抜かれた。

「うひゃあ?!」

「メメメメイド長!?!」

井草と五十鈴がドギマギするが、シアリーは何言ってるんだお前的な顔をする。

「数万以上の衆人環視で接吻をするような方々が、この程度であわてないでください」
 「まあ、ムードつてありやすからねえ」

シアリーをそうたしなめるリムも、少し顔が赤かったりする。

ニングもニングで顔がほんのり染まっていたが、すぐに咳払いをすると真剣な表情を取り戻す。

「……シアリー。状況の説明をお願いするのです」

「かしこまりました。では手身近に説明させていただきます」

ニングの指示に従い、シアリーが現状を説明する。

すでに丸一日警戒しており、現在冥界は非常事態宣言状態。

シャルバ・ベルゼブブによつて強制的に至つた魔獣創造の禁手によつて生まれた超巨大魔獣は、超獣鬼^{ジャバウオツク}および業獣鬼^{バンダースナッチ}と名付けられ、冥界の各都市に向かつて侵攻している。

迎撃部隊は現状足止めしかできず、定期的に獣鬼が生み出す小型魔獣が近辺を荒らすこともあつて、そちらの対処に回ることもあつて対策は容易ではない。

さらにシャルバが発言していた通り、獣鬼たちは大魔王派側にも侵攻を開始。禍の団も迎撃作戦をとっているが、此方も苦戦しているとのことだ。

シャルバはどうやら本気で自分を崇めない悪魔全てを滅ぼすつもりらしい。迷惑極まりない。

不幸中の幸いは、結果的にこれで同盟側が警戒しなければならぬ獣鬼の数は約半分だということである。

しかし、神殺しの槍を持つ曹操を警戒しなければならぬため神々が動けないことがネックで、迎撃作戦は遅々として進んでいない。

そして、冥界全体での問題と同様に、オカルト研究部にとっての問題も浮上していた。

「……現時点において、明確な被害者が生まれませんでした」

静かにシアリーはそう告げ、そしてニングたちは目を伏せる。

井草もまた、それが誰なのかを理解した。

理解したからこそ、奥歯をかみしめ、拳を震わせる。

「……コカビエルさんが言っていたよ。シャルバはサマエルの毒をもっていたって」

井草の言葉にシアリーはうなづいた。

「……兵藤一誠様は駒だけがご帰還なされました。これまでの前例から考えて、一誠様の死亡は確定的かと思われます」

それは、最悪の打撃だった。

補習授業のヒーローズ

1 話

「……先生。コカビエルさんから聞きました」

病院の屋上で、井草は通信を繋いでいた。

通話の相手はアザゼルだ。

とりあえず復帰の報告をする事もそうだが、コカビエルの言った事の真相を確かめる事も考慮していた。

あれが口から出まかせだとは思わないが、一応裏は取っておくべきだ。実は違いましてでは恥ずかしくて死ねる。

そして、アザゼルの沈黙は雄弁な答えだった。

「……本当に、そうなんですネ？」

『……ああ。割とマジで後悔しててな』

通信越しのアザゼルは、どこか遠い目をしているような声色だった。

『子供の顔も知らないんだぜ、俺？ コカビエルが酒の席で話題に出すまで、日本でんな事してた事すら忘れてたんだから笑いもんだ』

そういうアザゼルは、しかし欠片も笑っていないかった。

井草もまた、笑えない。

笑って流そうとしたが、そう簡単にはいいかなかった。

アザゼルからすれば、自分の失態で余計な悲劇が起きたのだから笑えない。

井草からすれば、両親の死の原因が自分にあるともとれるので、これまた笑えない。

二人は沈黙していたが、井草は意を決して話を進める。

「……」先祖様。これからどうするんですか？」

『その呼び方やめろ。くすぐりたいといふかなんつか』

真剣に考えた結果だが、どうやらアザゼルは一種の冗談と受け取ったらしい。

結果として、井草側も少し気分が晴れた。

「……まあ、今更ですよ。先考えましよう」

『そうだな。……もう俺ら、仲良いしな』

そう。もう過ぎた事だ。

結局井草は両親の顔も知らない。親代わりなのはピスとアザゼルだ。

アザゼルからしても今更過ぎるトラブルだろう。むしろ気にかけてくれたアザゼルの善良さが身に染みるぐらいだと、井草は考え直す。

「……全部終わったら墓参りするんで、場所教えてください。あ、親族に知られるとやや

「こしいからその辺サポートください」

『ああ。その辺はしっかりやっつくぜ』

一度墓参りに行くでしょう。

そして、今まで無関心だったことを謝ろう。

それをもってして区切りとする。今はそれで十分だ。

そして、今は――

「……先生、イツセーは……死んだんですか？」

少なくとも、生存は絶望的だろう。

生きているなら龍^{ドラゴン・ゲート} 門で帰還できている。そも死亡したうえでの変更が起きた場合

以外に前例がない駒のみの帰還など起きるはずがない。連絡が未だにないのも、彼の性格から考えて不自然だ。

生きているなら性格上何かしらのアクションを起こしているので、シャルバを倒した可能性はある。だが、その後力尽きたと考えるべきだろう。

コカビエルの発言と踏まえて考えるのなら、シャルバが追い詰められてサマエルの毒を叩き込んだが、イツセーが根性でシャルバを倒すまで持ち堪えた……といったところか。

オーフィスがどうなったのかがよく分からない。そこだけは懸念材料だ。

「……帰って来いと言われてないから戻ってないとかそんな感じかもしれないけど」
『お前、オーフィスのことなんだと思ってるんだ？』

「オーフィスはなんていうか、素直だけと知識が足りない子供みたいなどころありましてから」

少なからずオーフィスと接触した井草は、オーフィスが邪悪ではない事だけは確信していた。

なんというか、「悪い事だからやめよう」と強く戒めていれば素直に我慢してくれてい
たかもしれない。

ある程度のペナルティは課すべきだが、いつそのこと ディアボロス・ダウンフォール・ボトム D B に所属させる
という方向でもいいかもしれない。

罰は受けるべきだが、利用されているだけでも言えるのだからそれ相応の情状酌量で
十分だろう。同盟の最終兵器として奪われたオーフィスの力に対するカウンターにす
るのなら、存在価値も絶大だ。

「と、話がそれました。……イツセーの性格からいって、未だに何も連絡がないなら、生
きている可能性は——」

『まあ、絶望的ではあるだろうな』

アザゼルも、そこは否定しない。

『だが、絶望が確定したわけでもない』

—しかし、断定はしなかった。

「……先生、何か心当たりが？」

『ちよつとした懸念材料がある程度だがな。なにせ、駒から検出されたのは、サマエルの毒じゃなくてオーラだ』

その言葉は、言葉遊びのようでそうじゃなかった。

毒そのものと、存在のオーラ。それらは同じでは断じてない。

希望とまでは言えない。だが、何かがおかしいと思えるのは間違いない。

『そういうわけで、ちよつとグレイフィアに頼んで一仕事してもらってる。アイツも超獣鬼対策で動く必要があるから、お前、ちよつとグレモリーの城に行ってリアス達の

引率をしてやれ』

「引率？ そりやイツセーがほぼ死亡してるなら大打撃でしょうけど……そこまでひどいんですか？」

『ああ。まともに動けそうなのは木場ぐらいだ』

予想の数倍ひどい状況だ。

精神的なダメージは非常に大きいだろう。それぐらいは予想できていたが、まさかそこまでとは。

井草はリアス達がどんな状態になっているのか不安だったが、しかしそうも言つてられない。

ニングたちは冥界の民を精神的に鼓舞するために忙しい。井草の看病で時間を取っていた以上、ここからかなり巻き返さなければならぬだろう。

動けるのは、井草だけかもしれない。

『ピスは業獣^{バンダーズナッチ}鬼の対策で忙しい。悪いが、リアス達の面倒を頼んだぜ』

「了解です。……ちよつと、不安ですけどね」

半端な希望は打ち砕かれた時の反動が大きいものだ。

もしこれで「やつぱり駄目だった」などと成つたら、確実にリアス達は折れるだろう。

そうならない事を願いたい、しかしそうなる可能性の方が遥かに大きい。

井草は不安を覚えながら、しかしそれでも動かなければならないとも思い直す。

「……で、何をしてもらつてるんです？」

『世界で最も悪魔イーヴィル・ピースの駒に詳しい男、アジユカ・ベルゼブブとの謁見の機会を作ってもらつてゐる』

そして、人間界で井草はリアス達と合流した。
見るも無残。そう形容したくなるほどの憔悴具合だ。

「……これは、酷いね」

「これでも、だいぶマシになつたんですけどね」

思わず目を伏せる井草に、祐斗は苦笑交じりに返答する。

リアス達はまさに崩れ落ちかねないほどだ。

殆どが泣きはらしていると云つてもいい表情で、一部に至つては泣く事すら出来なかつたと言つてもいいほどである。

可愛らしい顔が台無しだ。それほどまでに、精神的ショックを受けている。

それほどまでにイツセーの存在は大きかつたと、井草は痛感しなす。

場合によつては半殺しにしても止めるべきだつたかと後悔じみた勘定を覚えなが

ら、井草は静かに目的地を見据えた。

駒王町から数駅ほど離れたビル。そこが、シャルバ・ベルゼブブの人間界での拠点の一つだった。

そこに入つてみると、ロビーには何人もの人達がたむろしていた。

怪訝な表情を浮かべる彼らは、何故か携帯やスマートフォンをこちらに向けている。

マナーが悪いと注意するべきかと考えた井草だが、それより先に人間達は同様の表情を浮かべる。

「……おい、なんだこのランクは!？」

「つていうか殆ど悪魔だぞ?」

「一番年上つばいのは墮天使だな。……赤毛の悪魔の女に匹敵するランクだぞ」

……何やら解析されているようだが、この様子では戦つても負けそうになさそうだ。

井草はそう解析しながら一応警戒するが、そこに一人の悪魔がやってきた。

「申し訳ありません。このフロアは私共が運営するゲームのロビーの一つとなっております
まして……」

その女性はお詫びの言葉を述べてから、奥にあるエレベーターに手を向ける。

「どうぞこちらへ。屋上でアジユカ様がお待ちです」

「分かりました。……さて、鬼が出るか蛇が出るか」

正直期待薄の感情を浮かべながら、井草たちは屋上へと向かう。

……その屋上は、もはや空中庭園といって差し支えない状態だった。

そしてその先に、アジュカ・ベルゼブブは待つていた。

「やあ、話は聞いているよ。相変わらず大変な目に巻き込まれたようだね」

「こんな時間に申し訳ありません。ですが、どうしても早急に調べていただきたいものがあります」

祐斗が代表してアジュカにそう告げ、駒を取り出そうとしたその時だ。

アジュカは苦笑を浮かべると、手を前に出してそれを制する。

そして、視線をあらぬ方に向けた。

「すまない。どうやら来客らしい」

その言葉共に、その方向から転移魔方陣が展開される。

そして、そこから現れたのは巨大な人型の機械だった。

機体の形状などはかなり兵器然とした武骨なものだが、しかしおおまかな形状とサイズから、大魔王派が運用する起動兵器、アーマーボデー A・Bと思われる。

特徴的なのは脚部が簡略化されている事だ。足首が存在せず、歩行などには大きくデメリットがある形状だ。

怪訝な表情を浮かべる井草と祐斗に、アジュカは感心した表情で告げる。

「空中戦闘主体の異形戦闘に割り切った形態のようだ。確かアグレアスではビルデの親衛隊が使用していた機体だね」

「……その通り。ラウバレルが開発した親衛隊用A B、ロディナムと言うそうだよ」

そして、その陰から姿を現したのは、英雄派の幹部であるジークフリートだった。

彼は井草達に一瞬視線を向けるが、すぐにあつさりアジュカに視線を戻す。

祐斗は怒りを覚えるが、井草はそれを肩に手を乗せて制する。

「当然の判断だよ。俺達全員よりアジュカさんの方が強いだろうしね」

「井草さん……… そういう問題では——」

祐斗が激高しかけるが、井草の表情を見てそれを抑える。

……どうやら相当イラついた表情をしているらしい。冷静でいるつもりだが、やはり不快感は隠せないようだ。

散々してやられた上に、間接的にだがイツセーを死に追いやった者達の一人だ。意趣返しぐらいはしたいとは思ってしまふ。

後ろでは、リアス達も強い殺気を浮かべている。アーシアだけはイツセーの死の理不尽さに涙を流しているが、こればかりは気性の差だろう。

とはいえ、この状況は少々警戒に値する内容ではある。

戦闘態勢を取りながら井草は見守り、ジークフリートはアジュカに向き直った。

「始めまして、魔王ベルゼブブ。僕は英雄派のジークフリート。彼らは僕の護衛として派遣されたビルデの護衛です」

「教会のエクソシストでも危険度ランキング上位の常連の護衛に、大魔王の親衛隊か。禍の団は意外と連携をとっているようだね」

「シャルバが馬鹿なだけですよ。……で、本題ですが」

そしてジークフリートは一息溜め―

「……我々と組みませんか、アジユカ・ベルゼブブ」

その言葉に、井草達は警戒心を露わにする。

旧魔王派を組み込んでいる大魔王派が、英雄派を使者とするとはいえ現魔王と組み込もうとする。それも、アジユカ・ベルゼブブという個人を狙ってだ。

「あなたは現四大魔王の一員でありながらサーゼクス・ルシファーとは違う思想を持っている。独自の権限も保有し、技術と研究はアザゼル総督に匹敵。更にサーゼクス派の議員数に匹敵する協力者も得られると、組めばこちらにとって良い事尽くめです」

四大魔王は基本仲が良いが、政治的な事になるとどうしても現魔王派の中でも派閥ができる。ルシファーであるサーゼクスの派閥が一番多いが、アジユカの派閥はそれに次ぐレベルだ。

大局的な流れでは連携は取れている。だが細かいところでは個性的な魔王達それぞれ

れについている悪魔達は揉める事もある。こと、技術体系においては意見が割れる事も多い。

それを理解しての接触と判断して、アジユカは興味深そうな表情を見せた。

「確かに、俺は現魔王でありながら個人的に動いているし、サーゼクスの言う事をはねつけたりにしている。俺とあいつが対立している風に見えるのも無理はない」

「なので、前々から打診していました。無改造の純血悪魔でサーゼクス・ルシファーに対抗できるのは、貴方ともう一人しかいない。……王の駒を模倣ではなく独自生産できる唯一のあなたがこちらにつけば、現魔王派は完全に終わりだ」

その言葉に、祐斗達とは違い井草は違和感を覚える。

サーゼクス・ルシファーに対抗できる純血悪魔は、どうやらアジユカ以外にもう一人いるらしい。

だが、アジユカさえ取り込めれば現魔王派は潰せるとジークフリートは言った。

その一人の存在を危険視していない発言だ。その残る一人がサーゼクスの側に立てば、そう簡単にはいかないだろうに。

そこまで考えて、井草是最悪の想像に思い至り――

「……なるほど、あの男は禍の団についていたのか。無気力の塊みたいな男だったんだけどね」

「ええ。ビルデの女王クイーンのスリエールとかいう仮面の男がいたでしょう？　「君らの前で素知らぬ顔するのは楽しかったZ E ♪」と伝えてほしいとのことですよ」

—事態は想像の斜め上をいった。

ビルデが最近になって取り込みで成功したのが最悪の可能性だったが、それどころかもっと前から取り込みで成功しているとは、凄まじい。

その事実はアジユカも驚きだったのか、僅かに目を見開いている。

「なるほど、ヴァーリ・ルシファーの目を欺いたのか。確かにあの男が表舞台に出れば、ニング・プルガトリオ・ルシファーで盛り返した勢いが逆転しかねない」

「でしよう？　だから見切りをつけた方が得です。もちろん対価として、此方の保有している技術も提供しましょう。神器技術はもちろん、ムートロンからも共同研究という条件でなら技術提供をしてもいいとのことですよ」

更に餌までぶら下げてきた。

そして、アジユカは興味深そうな表情を浮かべている。

……なんか嫌な予感を覚える。

「それは魅力的だ。外宇宙にまで進出した者達の技術。俺のインスピレーションは火が付くどころか一瞬で燃え盛るだろう」

井草は本気でアジユカにまず切りかかるべきか思案をしてみよう。

何というか、ここまでの流れだと「では協力しよう」とか言い出しかねない。

そしてアジユカは一度瞑目し――

「こういう時に言ってみたかった日本の名言がある。――だが断る」
そうはつきりと拒絶した。

そして、相手側からは特に反応はなかった。

大魔王派からはもう「だろうなー」的な感情が浮かんでいる。

そんな中、ジークフリートは興味深そうな表情を浮かべた。

「ふむ、できれば長話をしたいですが、色々あるので簡単に説明してほしいです」

「簡単だよ。俺はあいつとの友情を裏切るつもりはない。俺が魔王をやっているのはあいつが魔王をやっているからだけだし、俺が趣味に没頭できるのは、サーゼクスが俺の意志を全て汲んでくれるからだ」

そう告げるアジユカは、微笑すら浮かべながら断言する。

「俺はサーゼクスとの友情を裏切るつもりはない。少なくとも、その程度の不利と餌で揺らぐほどの関係だと俺は思っていない」

「なるほど。友情というのは理解しがたいですが、そういう理由で断るのは納得です」

そしてその言葉と同時に、周囲から一斉に魔力砲撃が放たれた。

どうやら別動隊として潜伏していたらしい。まったく気づかなかつたのは不覚だが、

暗殺専門の舞台ということだろうか。

とはいえ殺気をこちらに向けていなかったとはいえ、仙術を習得している小猫ですら気づかなかったのはまずい。

ここまでダメージが大きいのは

そしてその瞬間、アジユカは魔法陣を展開すると苦笑した。

「流石に奴はこの流れを読んでいたみたいだが――」

そしてその瞬間、全ての魔力砲撃は機動を変え、しかも出力を大幅に向上させてカウンターとして敵を貫いた。

「流石に舐められているな。俺の覇軍カンカラー・フォーミュラの方程式はこの程度では突破できない」

一瞬だった。一瞬で勝負がついた。

ジークフリート達が用意した伏兵は、一瞬で全滅した。

この世のすべてを数式で理解し、そしてそれに干渉することで操作する。

アジユカ・ベルゼブブの得意とする能力、覇軍の方程式。

超越者とすら称される、サーゼクス・ルシファーに並ぶ最強の魔王。その力の片鱗の片鱗というべきレベルでこれだった。

それを見たジークフリートは肩をすくめ、そして親衛隊のA Bは静かに戦闘態勢をとる。

「……撤退は切り札を使ってからにしようかな？」

『それでも不利な気はすると推測する。伏札を見せるのはまずくないか？』

「手柄なしだとヘラクレスやジャンヌに笑われそうだね。それはとても嫌なんだよ」
『なるほど。イーツを忌避する彼らは君と折り合いがつかなかったな』

そう会話をするジークフリート達を興味深げに見ながら、しかしアジュカは視線を井草達に向ける。

「……そのグレモリーの騎士^{ナイト}君に、墮天使君。さきほどから彼らにいい殺気を放っているようだけど、俺の代わりに戦ってみるかい？」

その提案に、井草は思案する。

……意趣返しはしたいが、現実性を求めるならアジュカに任せるのが無難だろう。

そもそも、グレモリー眷属が本領を發揮できるかはなはだ疑問だ。それほどまでにバッドコンディションだと言っている。

精神面での絶不調は肉体のポテンシャルを著しく阻害する。イツセーという支柱を失った事で、その影響は絶大だ。本領を發揮できるとは思えない。

祐斗、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセの四人を同時に相手をして一蹴したジークフリート。^{ウエルシュ・ボゼッション・プロモーション}憑依せし赤龍帝を使って漸く立ち回れたのだ。

この絶不調状態での戦闘は、できれば避けるのが無難な選択だが――

「……部長、井草さん。すいませんが、僕は行きます」

—残念だが、流石に我慢の限界でもあるのだろう。

祐斗は聖魔剣を一振り生み出し、ジークフリードに突きつける。

「お前達のくだらない実験の所為で、イツセー君は帰って来なかった。友人の敵討ちは殺されるに十分な理由だろう?」

「なるほど。これもまた友情の一つの形か」

『ゲオルギウス』

そして、ジークフリードも魔剣を取り出すと、イツへと変身する。

「貴方達は帰っていいよ。切り札を使うに値する相手だし、切り札を使えば勝ち目は十分にある」

『……死んでも恨まないでくれよ』

その言葉と共に、親衛隊機はスラストターをふかしてこの場を離脱していく。

そして、その轟音と共に戦闘は開始された。

2 話

「遠慮なく龍殺しの聖魔剣を使って切りかかる祐斗の支援をするべく、井草もレセプターイーツになりながら光力の剣を展開する。

少々不利な事に、現在トールセイバーは修復中で間に合っていない。まさか魔王のお膝元でこんな戦いになる可能性は低いと踏んでいたが、このタイミングで勧誘に来るとは想定外だ。

ゲオルグウスイーツとなつているジークは強敵だ。祐斗は強くなつてはいえ、それでも苦戦必須の相手だろう。

できれば上手く立ち回って撤退に持ち込みたいところだ。アジュカがいるという事実がある以上、ジークフリートもむやみやたらに消耗する事を選ぶとも思い難い。

だが――

「どうにかできるなら、どうにかしたいね」

――こちらも、英雄派に対して敵意は強い。

何度も何度も煮え湯を飲まされている。しかも、親しい友人であるイツセーを失った

事でこちらも色々とストレスが溜まっている。

彼らが直接殺したわけではない。八つ当たり一步手前の行動かもしれない。だが、テロリストであり元凶であるシャルバが所属していた組織の幹部である以上、容赦する義理もない。

「一応言うけど、投降するなら命は取らないけど……つと!!」

「お氣遣い無用! どうせ勝つしね!!」

そう言いながら、ジークは魔剣をふるい、祐斗と井草の攻撃を捌く。

しかし、急成長を遂げた祐斗と、元からイツセーに次ぐ性能を發揮する戦の相手は苦勞するのか、多少は手傷を負っている。

龍殺しの力を警戒して、祐斗の攻撃は全て捌いている。だが、その分井草の攻撃に対して意識を割き切る事ができず、苦戦している状況だ。

これなら、撤退させる事はできるか?

そう考えた瞬間、ジークは魔剣全てのオーラを全開放して、二人の接近を阻む。

長時間続く真似ではない。実際、二人が大勢を取り直した時にはオーラの噴出は止まっている。

そして、ジークの体には負傷が生まれていた。

「……困ったものだと思わないかい? グラムは僕の体に遠慮をしてくれないんだ。赤

龍帝のアスカロンが羨ましいよ」

その言葉に、井草はすぐに理由を察した。

ジークフリートは優れた存在だ。

英雄シグルドの末裔。魔帝剣グラムを筆頭とする、五本の魔剣に選ばれた。イーツとしてもポテンシャルは、地球人では高い。そして神器まで持っている。

あらゆる才能に恵まれ、そしてそれを高めてきている勤勉な神童だ。これで強くなれない方がどうかしているだろう。

だが――

「残念だったね。イッセー君はそういう意味では君よりスペシャルらしい」

前にジークが、イッセーに曹操のことをスペシャルと形容した事からくる意趣返し。

それを、祐斗は言い放つ。

それに対して、ジークは苦笑する。自分が行った事を思い出したのだろう。

イッセーとジークはある意味で似ている。

ともに龍に関する神器を持ち、龍殺しの剣を持っている。

神器と剣の性能の比率なら、相対的だろう。本人の戦闘センスなら、ジークが上だろう。

だが、相性という点ではイッセーが遥かに優れている。

様々な勢力が手伝い、赤龍帝の力が特別だからだろう。イツセーはアスカロンの龍殺しで悪影響を受けてはいない。それどころか、アスカロンは赤龍帝の力で強化されている節がある。

だが、無名のドラゴンを封印した龍トウワイス・クリティカルの手であるジークは、そんな影響を受けない。そも、グラムの方がその辺りの気を使わないようだ。そういう意味ではジークがイツセーを羨むのも当然だろう。

それを自嘲したジークは、しかしどこからともなく注射器を取り出した。……凄まじく嫌な予感を覚えた井草だが、しかしジークは邪魔をさせるようなへまはしなかった。

一瞬で、躊躇なく、邪魔される隙すら作らず、注射器を首筋に差し込む。

「……僕ら英雄派は、一つの研究を行っていた」

そう言いながら、ジークの体は震える。

「テーマは簡単だ。魔王と神という相反する存在の力を複合させたらどうなるか。……すなわち、聖書の神が作りし神器に、魔王の血を混ぜ込んだらどうなるか」

そして、ジークの体が膨れ上がる。

「膨大な実験と犠牲の末に、それは形となった。……神器のドーピング剤が出来上がったのさ、こんな風にね」

声の質すら変えながら、ジークフリートは一体の異形へと変化を遂げる。そしてその瞬間、ジークの腕がぶれた。

これまでの経験則から、井草はとっさに伏せて攻撃を回避する。その瞬間、空間が割けた。

絶大な切れ味を発揮したグラムが、空間すら切り裂いたのだ。

その瞬間、井草は判断する。

これは、今のままでは手に負えない。

「……アジユカさん！ ちょっと交代してくれませんか!？」

「いや、そういうわけにはいかない!!」

祐斗は意地になったのか、強引に突撃を刊行する。

強大な力を手にして若干の慢心が生まれたのだろう。ジークの攻撃には一瞬の穴が開き、そこに祐斗はボロボロになりながらも滑り込む。

そして、龍殺しの聖魔剣が付きこまれ――

『―残念だけど、イーツとこの業魔人カオス・ドライヴを併用した僕には届かない』

―その聖魔剣は、砕け散った。

「凄まじい力だ。やはり人間という種族は可能性の結晶だと思うね」

「感心してる場合ですか！ 祐斗くん!!」

とつさにとどめの攻撃から、背中に糸を付けて引つ張る事で避けさせる井草だが、しかしそれでもジークの動きが速い。

完全には避け切れず、腕の一本が切り裂かれた。

感性の法則と剣圧に従い、腕と祐斗は別々の方向に弾き飛ばされる。

井草は即座に割って入るが、しかしジークは呆れ顔だ。

『しかしまあ、あのグレモリー眷属が堕ちたものだ』

その目には失望すら浮かび、リアス達に視線が向けられる。

その瞬間放たれた攻撃を、ジークフリートは防御も回避もしようとしない。

それほどまでに、その攻撃は軽かった。

「く……イッセー……っ」

リアスは思わずイッセーに使われていた駒を握り締めるが、しかしそれは何の意味もない。

それを見て、ジークフリートは心底からため息を付いた。

「赤龍帝一人死んだだけでこの様、友情とは枷にもなれば重荷にもなるという事か」

「……君、ちよつと黙れ」

流星に怒りが限界を超えかけて、井草は光の剣を作り出し切りかかる。

瞬時に振るわれる反撃の刃をしのぎながら、井草は心底から怒りに満ちた声を上げ

る。

「確かに、愛情にしる友情にしる、それは掛け違えれば毒になる。だけど、かみ合えばそれは不屈の心を生む糧になる……!」

斬撃を受けて鮮血をまき散らしながら、井草は一気に踏み込んだ。

殺意と激怒を込めた目でジークを睨み付け、蜘蛛の糸で足を止めて、後退を許さない。

そして、渾身の力で拳を握り締め――

「あまり馬鹿にするなよ、この野郎!!」

――顔面に拳を叩きつける。

轟音が響き、そしてイーツの力が爆散し――

「だけど、その情の力をもつてしても君は勝てない」

――カウンターのグラムが、井草の胴体を深く切り裂いた。

その余波で弾き飛ばされながら、井草は着地を試みる。

しかし、深手を負った事で力が入らず、そのまま地面に転がってしまふ。

『まさかイーツが破壊されるなんてね。これは、そろそろ撤退した方がいいかな?』

そう嘯きながら、しかしジークは余裕の表情を浮かべ、そしてすぐに失望の表情を浮かべる。

『シャルバがサマエルの毒を持っている事は分かっていた。アイツが生きてるならこの

状況下で犯行声明ぐらい出している。そして、赤龍帝が生きていたとしても、この状況下で出てこないなんてありえないだろう』

敵ながら、イツセーのことを相応に調べているのがよく分かる。

そして、だからこそジークフリートはイツセーの死を確信しているようだ。

そして、この期に及んでまともな戦闘行動をとる事もできないリアス達を見て、ため息を付いた。

『オーフィスはともかく、シャルバは後でも倒せた。にも関わらず一人で相討ちをし、更には仲間達をこうも落ちぶれさせる。……兵藤一誠は無駄死にだよ』

「言って……くれるね……っ」

流石に怒りが込み上げてくるが、ダメージも深く井草は動けない。

だが、それでも無理やり立ち上がる。

そして、同じように立ち上がる者がいる。

「……ふざけ、るな……っ」

祐斗もまた、その兵藤一誠をさげすむ男に渾身の怒りを込めて立ち上がる。

「確かに彼は考えなしで変態だ。人によつてはとても好感が抱けない、一点特化型の致命的欠点持ちだとも。……だけど!!」

渾身の力で光力の刃を具現化させながら、井草はその切っ先をジークフリートに突き

つける。

「彼はあなた程度が愚弄できる男じゃない！ 僕達の仲間を馬鹿にするな!!」

そして祐斗もまた、聖魔剣を形成して切っ先を突きつける。

その状況で、しかしジークは余裕の表情を浮かべる。

『無駄だよ！ 井草・ダウンフォールはともかく、人間ベースの木場祐斗では、その傷での戦闘は不可能だ！ 強みの回復役が役に立たない現状で、どう戦う!!』

その宣言と共に、ジークは魔剣を構えて突撃を敢行する。

更に手にはもう一つのイミテーションイーツがあり、即座に新たにゲオルギウスイーツへと変身する。

しかし井草も怯まない。

アジユカに速攻で助けを求めろ事を考えるべきだが、しかしもう一発は入れないと気が済まない。

だからこそ、渾身の力で前に一步を踏み出し――

—いつもありがとうございます。リアス達のこと、頼みますよ！

3 話

その言葉に、思わず足を止めた。

そして気づいた。

後ろから、赤い輝きが放たれている。

そしてその輝きを浴びた者達が、悲しみではなく喜びの涙を流す。

そう。そのオーラは、その言葉は――

『馬鹿な！ 赤龍帝のオーラだと!?!』

狼狽するジークフリートの目の前で、更なる異常現象が巻き起こる。

リアスの手の中にあつた悪魔イヴイルヒースの駒が輝き、そして祐斗へと飛んでいく。

「……ああ、そうだ。行こう、イツセー君!!」

そして、一瞬の輝きと共に、祐斗の全身は赤い軽装鎧に包まれ、その右手には聖剣が宿る。

ウエルシュ・ボゼツション・プロモーション ナイト
「憑依せし赤龍帝、騎士仕様、起動!!」

赤い龍の鎧に身を包んだ祐斗が、手に持つアスカロンの切っ先をジークに向ける。

「赤龍帝は、兵藤一誠は、死んだ程度では僕達の中から消えたりしない!!」

それは、極大なオーラだった。

真なるアスカロンが、赤龍帝の力を宿した龍殺しが、そのオーラがジークの全身を焼き、怯ませる。

そしてその隙を突いた斬撃が、ジークの体に明確な負傷を作り出す。

「これは……真なる、アスカロン!?!」

「みたいだね!!」

そして井草が素早く蹴りを叩き込み、ジークを蹴り飛ばす。

イツ化と業魔人の使用で頑丈なジークはそれでも即座に態勢と整えるが、しかし異変が起きる。

ジークが右手に持つ魔帝剣グラムが、そのオーラを増大化させる。

一瞬警戒する井草達だが、しかし異変をきたしたのはジークも同様だった。

そのオーラは、ジークの全身を焼き始める。業魔人はグラムを全力で扱う為にジークが使用しているというのだ。

『これは!?! まさか、業魔人カオス・ドレイブによる業魔化カオス・ブレイクの弊害なのか!?!』

明らかに動揺を見せるジークの手から、グラムが飛んでいく。

そして、その切っ先は祐斗の足元に突き立った。

「……力を、貸してくれるのかい？」

その祐斗の言葉にグラムはオーラを注ぐだけだ。

それこそ雄弁な答えだろう。魔帝剣グラムは、ジークを見限り祐斗に力を貸す決心をしたのだ。

だが問題は、今の祐斗は腕を切り落とされて片腕だという事だ。

……どうしたものか。

そう井草と祐斗が思慮した瞬間、何時の間にか動いていた者達がいた。

小猫が祐斗の腕を回収し、レイヴェルが祐斗のふらつく背中を支え、そしてアーシアが回復させる。

『持ち直した!? させるかっ!!』

流石に妨害を試みるジークだが、それをさせるほど井草も愚かではない。

速やかに剣を構えると、魔剣とぶつかり合う。

『ふざけるな! 何だその訳の分からない奇跡は!!』

「そこは同情するよ。だけど、なんで今起きたのかは分かる!!」

激昂するジークに、井草もまた吠える。

これはジークには分かるまい。そして、井草にも完璧に分かるわけではない。

だが、それでも、今起きたのかだけは分かる。

「兵藤一誠という男は、仲間が絶望しているところを黙って見ている様な男じゃない！
彼は気持ちのいいバカだからね！」

「ええ、その通りよ！」

その言葉に応えるように、左右から雷光と魔力がジークに襲い掛かる。

それを四本の魔剣の力で相殺するが、しかしその相手にジークは舌打ちする。

明確に目に炎を灯したりアスと朱乃が、それぞれ悪魔と墮天使の翼を広げながら戦闘態勢をとっていた。

そのオーラは、先ほどまでの弱ったものでは断じてない。

「悪かったわね、ジークフリート。……でも、ここからは楽しませてあげるわ」

そう皮肉気に宣言し、リアスは声を張り上げる。

「さあ、私の可愛い下僕達！ グレモリー眷属として、目の前の敵を消し飛ばしてあげましょう!!」

「了解です、部長!!」

その言葉と共に、祐斗は一瞬でジークに接近する。

それを四本の魔剣とゲオルギウスイーツによる疑似アスカロンで迎撃するジークだが、祐斗はそれに当たらない。

龍殺しの魔剣と聖剣をふるい、全ての攻撃をいなし躲す。

そして次の瞬間、ジークの背中に井草が迫る。

「……ちようどいい。ヴァーリ対策にアスカロンを貰っておくよ！」

組み付き、そして躊躇なく光力を叩き込む体制をとる。

そしてそれと同じタイミングで、祐斗はジークの懐に飛び込んだ。

そして左右からはリアスと朱乃が最大出力の攻撃態勢をとる。

「さあー、これでー」

リアスの言葉を無視して、ジークは魔剣で防御を試みるが、しかし足りない。

井草は翼まで使つての高く攻撃を行っている。広範囲攻撃できる魔剣を使つても二

本いる。

リアスと朱乃の攻撃力は絶大だ。こちらも二人合わせて二本いる。

そして、アスカロンとグラムは一本ずつ必要だ。

そして、今のジークには、防御に使えるレベルの剣は五本しかなかった。

その事実を叩き付ける様に、祐斗と井草がリアスの言葉を継いだ。

「詰 チエツクメイト みだ!!」

ジークフリートという男に、致命傷を叩き込んだ。

そして、ジークフリートは苦笑する。

「……殺しても脅威とは、今代の赤龍帝は、本当に曹操以上のスペシャルだね」

そう言いながら、ジークフリートは自分を貫くグラムをなでる。

グラムはそれを受け入れない。敵意のあるオーラを放って、ジークフリートのその手を焼く。

その事実を見て、ジークフリートは苦笑を深めた。

「……フェニックスの涙は、持ってないのかい？」

井草はそう聞く。

フェニックスの涙の生産体制は、禍の団でも確立されている。既に幹部クラスなら確実に確保できるはずだ。

それを使わない。使わせる気もないが、使う気配もないのは違和感があった。

「……業魔人カオス・ドラゴンを使った状態を業魔化カオス・ブレイクというのだけれど、この状態はフェニックスの涙が意味をなさなくてね。まだまだ研究途上のさ」

つまり、業魔人を使わせれば回復は気にしなくていいという事だろう。

危険な切り札ではあるが、しかし付け入るスキはあるという事のようにだ。

井草がこの事実を報告する為に脳内で纏める中、ジークフリートは空を見上げる。

その体はボロボロと崩れつつあり、確実な死を予期させた。

「……まあ、こういう終わりか。所詮フリードにしる僕にしる、シグルド機関の出身は、ロクな死に方をしないのさ……」

その言葉を辞世の句に、ジークフリートは完全にチリとなる。

ここに、英雄派の最高幹部の一角は撃破された。

そしておそらく、これこそが魔獣騒動と称される一連の事件の趨勢が変化した瞬間なのだろう。

ここから、自他は一気に解決に向かう事となる。

4 話

「いや、面白い現象を見させてもらった。実に興味深い」

そう告げるアジユカは、元に戻ったイツセーの悪魔の駒を興味深そうに見る。

「それで、調べてほしいのはこれかな？」

「その通りです。この駒の持ち主が今どうなっているか、それを知りたいのです」

「いいだろう。ついでに調べたい事もいくつもあるし、ちよつと時間をもらおう」

そう言うってから数分間、アジユカは駒に魔方陣を近づけて色々と調べていた。

「……八駒中四駒が変異ミューテーション・ピースの駒になっているな。なるほど、あの変化の影響か……」

そうぶつぶつ呟いていたアジユカだが、しかし満足したのかいい表情でこちらに視線を向ける。

「とりあえず、君達が聞きたい事だけは伝えよう。……兵藤一誠は、魂だけで現存できるのなら生きている可能性がある」

……またよく分からない状況になった。

異形は基本的に、死亡したら魂も消滅する。

なので、魂まで滅びてないのなら手の施しようはあるのかもしれない。かもしれないが――

「それ、死んでるのと同義では？」

「確かにそうだが、駒の最終記録は「死」と示していない。肉体は崩壊したが魂が消滅した可能性は低い。もしかしたら次元の狭間に漂っている可能性はあるだろう」

……つまり、リアスの乳を露出して次元の狭間を漂っていればいずれで会える。

そう考えた井草は、自分が疲れているのだと思った。

「うわあああああん!!」

「イツセー……よかった……あつ」

アーシアとリアスは感激のあまり涙すら流しているが、しかしちよつとシユールな光景でもある。

苦笑する井草は、しかしどうしたものかと考える。

……今、次元の狭間を探索する余裕はないだろう。

なにせ自分達は実力者だ。精神的な問題点が解決した以上、解決に尽力しなければならぬ。

放っている間に魂が次元の狭間の無に当てられて消滅……などという事にならなければいいのだが――

「まあ、それは俺が手を回しておこう」

と、アジユカは先手を打つように告げる。

「超巨大魔獣用の術式は完成した。まあ、それ以外にもやる事はあるが、冥界はサーゼクスや君達が最終的に救ってこそ上手く回る。俺の派閥は深入りしない方がいいだろうしな」

そう告げ、アジユカは転送魔方阵を展開する。

「グレモリーの城に繋げておいた。さあ、冥界の英雄達はこういう時こそ動くべきだ」

そして、気分が僅かながらに晴れた井草達は、グレモリーの城に帰還した。

井草は軽くシャワーを浴びて、気分を切り替えてから皆と合流する為にロビーへと向かう。

そろそろ本格的に動くべきだ。こういう時に動かなければ、アザゼルの血を継ぐ者にして神の子を見張る者のエージェントとして失格だろう。

とはいえ、少し気分は晴れた。

イツセーが必ず生きているとは言えない。なにせ次元の狭間とサマエルの毒である。半端な希望は返って事態を絶望に導く事もある。駒だけが帰還した後に死亡した可能性もあるのだ。そも、体が滅びた後で靈魂だけが無事というのも難しいだろう。

しかし、同時に兵藤一誠はそういう一パーセントの可能性を勝ち取る事ができる猛者でもある。

だから、今はできる事をしよう。そうするべきなのだ。

そしてリアス達が集合している部屋に着くと、そこにはギヤスパー以外のオカルト研究部員が集合していた。

「イリナちゃんにゼノヴィアちゃん！ ロスヴァイセ先生も！」

「やつほー井草さん！ お互い無事で何よりね！」

イリナが真つ先に井草に反応して、片手を振る。

そして、ゼノヴィアとロスヴァイセも頷いた。

「イツセーのことは聞いている。私達の乳を恋しがっている頃だろうね」

「そうですね。まあ、死んでないなら生きて帰ってくるでしょう」

その信頼っぷりに、井草は苦笑した。

「……それで、状況は？」

「いい感じね。アジユカ様とファルビウム様のおかげで、事態はだいぶ解決に進んでる

わ

リアスがそう言いながらテレビに視線を向ける。

井草も、そちらに目を向けた。

確かに情勢は好転している。

「対抗術式と対抗戦術が編み出された事。各勢力からの増援部隊が派遣された事。更に冥界の最強戦力である魔王までもが動き始めている事。

それら三つの追加要素によつて、超巨大魔獣も豪獣バンダースナッチ鬼はどうかできている。一部では撃破に成功した場所もあり、情勢はこちら側に動いているようだ。

「……既に大魔王派側の領地の豪獣鬼も、何体か撃破されているようですわ」
朱乃がそう告げるように、既に大魔王派も対抗策を講じたようだ。

「どうやら、シャルバの怨念は大した結果を残さずに終わりそうである。物的被害は甚大だろう。だが、幸いにして人命に関してはそこまで酷くない。なら、きつと復興できる。きつと立ち直れる。」

井草はそう確信した。

「じゃあ、俺達はどうする？」

「そうですね。まだ超獣鬼ジャバウオツクに関しては五分五分といった状態だそうです」

そう祐斗が告げる。

最強の獣鬼にして、最大の獣鬼であろう超獣鬼。

これに関してだけは、いまだゆっくりとだが進行しているらしい。

今はルシファー眷属が総力を挙げて対応している。だが、それでもしぶとく前進しているようだ。

超巨大魔獣に対する対抗戦術と対抗術式。それを持った最強格の眷属悪魔が総力をあげて、なお苦戦。

それだけの存在ともなれば、最終的に同盟の部隊は総力を挙げてそれを潰す事になる。

おそらく、その後詰めをする事になるのだろうか――

「皆様！　大変ですわ！」

そこに、レイヴェルが血相を変えて飛び込んできた。

「避難活動が進んでいる現魔王派首都リスに、多数の禍の団の部隊が確認されました！　今、避難誘導の為に派遣されたソーナ様達若手悪魔達と戦闘中とのことですよ!!」

……どうやら、やるべき事は決まったらしい。

速やかに転移した井草達は、ルシファードの各地から戦闘の音が聞こえてくる事に気づいて、眉をしかめる。

「確か、避難がほぼ完了していた企業の近くで確認されてるんだっけ？」

「……間違いなく、火事場泥棒ですね」

井草にそう答える小猫は、呆れ半分といった表情だった。

どうやら禍の団は、首都という、悪魔関係の大手企業がビルを構えている場所で避難が起きているのを良い事に、記録媒体の類をかすめ取れないか考えたらしい。

動いているのは末端の組織が中心との事だが、どうも英雄派の構成員が確認されてもいるらしい。

実に面倒な事だ。可能な限り速やかに撃破するべきだろう。

「とりあえず、私達はソーナと合流しましょう。……確か、子供達の避難の護衛を担当していると聞いたけれどー」

リアスがそう言つて辺りを見渡した時だ。

「り、リアス部長うううううー！」

聞きなれた声が聞こえた。

振り向けば、そこにはギヤスパアの姿があった。

「ギヤスパア！ あなたも来ていたのね？」

「はい。此処に行けば部長達に会えると、神の子を見張る者の方に言われて……」
そう告げるギヤスパアに、リアスは微笑んだ。

「神の子を見張る者で得たもの、ここで発揮してもらおうわ。期待してるわね？」

その言葉に、ギヤスパアは肩をびくりと震わせる。

「は、はい……」

その姿に、井草は一瞬だけ違和感を覚えた。

気弱でよく振るえるのはいつもの事だが、最近は大いぶ根性がついてきているのが

ギヤスパアだ。

リアスに期待されて、気合を入れてない様子なのには違和感がある。

見れば他のメンバーの中にも違和感を覚えている者がいるようだ。

だが、それについて指摘するより先にギヤスパアは首を傾げる。

「あれ？ イッセー先輩は……？」

その言葉に、イッセーの事情が説明されていない事を全員が理解した。

さて、どこから説明したらいいものかと、皆が考え――

『緊急連絡！』

無差別連絡魔方阵が展開し、慌てている悪魔の声が響く。

『ソーナ・シトリ様とその眷属から増援要請！ 敵は英雄派幹部の、ゲオルク、ジャンヌ・ダルク、ヘラクレスです!!』

その言葉に、井草達はすぐに顔を見合わせると頷く。

「どうやら話をしている時間がない。そう考えた井草達はすぐにでも助けに行こうと
して—

「見つけたぞ！ グレモリー眷属だ!!」

—それより先に、魔法使いの一団がこちらに敵意を込めた声と視線を向けて接近してきた。

その状況に、井草はすぐに判断する。

「先に行つて！ こいつらは俺が片付ける!!」

敵の戦力は大した事はないが、しかし数が多い。

「いちいち相手をしていたら時間がかかる。無視してソーナ達のところに行つても、敵をソーナ達のところ—すなわち避難民—に誘き寄せただけだ。

故に、倒せるだけの戦闘能力を持った者が一人残つて殲滅する。それが一番手っ取り早い。

合理的な判断を井草はして、リアス達も頷いた。

「すぐに追いついてきなさい！」

「任せましたよ、井草さん！」

リアスと祐斗の声に、井草は振り返らない。

ただ、親指を上げてそれに答えた。

5話

そして五分で、井草は敵を殲滅した。

思った以上に簡単に倒せた。というより、齒応えがないと言つてもいい。

どうやら、井草達は思った以上に強くなつていたようだ。半端な通常戦力では足止めにもならないだろう。

流石はアザゼルの血を継ぐ先祖返り。自分つて、努力する天才だったんだなあ。

などと井草は自画自賛ともいえる感想を抱き、すぐに振り返る。

「さて、時間ないから急いで助けに行かないと!!」

そして井草は振り返り――

「……いや、そうはいかん!」

――その声に、井草は遠慮なく光力の槍を叩き込む。

敵は難敵だ。それだけは分かる。

間違いない魔王クラス。あの最強の魔王であるサーゼクスを真正面から蹴り飛ばし、その攻撃を前に凌ぎ切った、強大な戦士だ。

そう、敵は強大。

Eレベル6，5。バイアクヘーイーツの使い手の1人にして、フェニックスイーツをデフォルトで運用する化け物。

「ナイフアーザー……だっけか!」

「その通り! 偉大なるムートロンの戦士、ナイフアーザーだ!!」

そう宣言しながら、ナイフアーザーは槍の雨あられを素早く回避しながら井草にナイフを突き出す。

再生能力を持つフェニックスイーツでありながら、しかし無駄にダメージを食うつもりはないと攻撃を回避する。

そこには「下等な存在に触れられたくない」という傲慢がある。初見殺しに対する警戒がある。攻撃を受けずに倒してこそ強者だという自負がある。

そして、厄介な事に全てを持っていておかしくないほどに、ナイフアーザーは難敵だ。そのナイフを回避しきれず、井草の肌には切り傷が入る。

レセプターイーツになった事で頑丈ではあるが、ナイフアーザーの装備はムートウエボン。

オリハルコンを使用する特殊武装。伝説クラスの武器とも真正面から撃ち合える、最高性能を持つ武器。ムートロンの技術が詰まった、超高性能の武器である。

「くそー！ こいつをリアスちゃん達に引き合わせるわけには!!」

「ふははははは！ 本命前に体を温めようと来てみれば、まさか大物が出てくるとはな
！」

攻防を繰り返しながら、井草とナイフアーザーはルシファードの上空を舞う。

ビルの谷間を潜り抜けながら攻撃を躲し合うが、それらはナイフアーザーの方が間違
いなく有利だった。

ナイフアーザーは無傷でありながら、井草は少しずつ明確に負傷が積み重なってい
る。

明確に、確実に、正確に、井草はナイフアーザーに劣っている。その証左だった。

多種多様な能力がある。圧倒的な寿命がある。素体の性能では超えている。

だが、E Eレベルではナイフアーザーの方が上で、実際の戦闘経験や訓練の長さでも
ナイフアーザーの方が上で。戦士としての力量でナイフアーザーの方が上だった。

上述の利点など、本当に強いのならひっくり返せて当然。それを、ナイフアーザーは
見事に証明して見せた。

これがE Eレベル6, 5。これが、魔王クラス。これが、ムートロンのアウターイ
ツ。これが、サーゼクス・ルシファア達が揃う駒王会談に差し向けられた、ムートロン
の一番槍。

そのポテンシャルを、ナイフアーザーはこれでもかといわんばかりに叩き付ける。

「さあ、死ぬがいい!! ものども、仕掛けるぞ!!」

更に、ナイフアーザーの命令に従い、八名のバイアクヘーイーツが迫りくる。

「ここに来てダメ押し!?!」

「相手より多くの戦力を投入するは戦いの基本! 私の指揮下の分隊で、貴様らを蹂躪してくれるわ!!」

その数と質の猛威が、井草に一斉に襲い掛かった。

一方その頃、リアス達は窮地に追い込まれていた。

敵密に言えば、戦闘そのものはこちらに優位に進んでいる。

英雄派幹部である、ゲオルク、ジャンヌ・ダルク、ヘラクレスと接敵したりアス達は、最高の増援を手にしたからだ。

サイラオーグによってヘラクレスは一蹴。此処までいい。

その後、イツセーの死という誤情報を知らされたギヤスパーは、謎の闇の獣となって、ゲオルクを蹂躪。ゲオルクは匙の意地の反撃を喰らい、闇に飲み込まれて生死不明だ。

ここまでではない。だが、ここに来てジャンヌが凶行に及ぶ。

追い込まれたジャンヌは、逃げ遅れた子供を人質に時間稼ぎを敢行したのだ。

「……卑劣な手段をとってくれる」

「貴方なら言いそうだけど、悪魔が言う事でもないわね」

サイラオオグの素直な言葉に、ジャンヌは平然としたものだ。

とはいえ、これでは迂闊に攻め込む事ができない。

ジャンヌの戦闘能力は高いのだ。実際、墮天使の力を活性化した朱乃、新たにエクスカリバー・ルースラー支配の聖剣を組み込んだエクス・デュランダルを使うゼノヴィア、量産型とはいえ聖魔剣を手にしたイリナの三人を相手に立ち回ったのだから。

迂闊に踏み込めば、子供が殺される。

そう警戒した、その時だった。

「いえ、これで終わりなのです」

その言葉と共に、音が鳴る。

「跪くのです」

その言葉と共に、全ての決着がついた。

ジャンヌは、一瞬で跪き、子供を放す。

「……な、体が……!?!」

訳が分からないといった表情を浮かべるジャンヌだが、その瞬間、彼女の肩に何か突き刺さる。

そして、ジャンヌは意識を失って倒れ伏した。

見れば、それは針の付いた注射器のようなもの。そう、麻酔弾だ。呆気なく終わった戦いに、誰もが思わず目を見張る。

「どうやら、いいタイミングだったようなのですよ」

そして、ニングが苦笑しながらリムを引き連れて歩み寄った。

「ニング！ 来てくれたのね？」

「ハイなのです。避難民の誘導というか、慰問の為に来ていたらこの騒ぎなので、強引に駆けつけたのですよ」

「ふふーん。ま、いいタイミングだったのは間違いないですねえですなあ」

そう言いながら猟銃を肩に乗せるリムは、子供に歩み寄ると頭をなでる。

「もう大丈夫ですぜ？ ちよつとぐらい泣いて問題ねえでさあ」

気を使った言葉だったが、しかし少年は平気な顔をしている。

「だいじょうぶ！ ほんとうにピンチの時は、おっぱいドラゴンが助けてくれるって信

じてたもん！」

その言葉に、誰もが苦笑する。

子供達はイツセーが大変な事になっている事を知らない。

サーゼクス達が情報を伏せているからだ。この状況下で子供達のヒーローであるイツセーが死んでいるなどという情報を公開できなかった。確実に恐慌ものである。

とはいえ、生存の可能性が出てきたのも事実。ギヤスパーにも後で教えておかなければならない。

リアスがニングの視線を向けると、どうやらニングも知っていたらしい。苦笑している。

「おっばいドラゴンじゃなくてすいやせん。ま、とりあえず安全なところに——」

そう、リムが告げたその瞬間だった。

「……何か来るぞ!!」

サイラオーグが真っ先に気づいたその時だった。

カツ、カツ、カツと足音が響く。

そして、八人ほどのバイアクヘーイーツと、五十人以上の通常イーツを引き連れ、ナイアルが姿を現した。

「おいおい。ウォーミングアップがてらにちよつと遊びに来て見りや、なんかすげえ事

になつてゐるな、オイ」

「ナイアル……っ！」

リアス達が心から敵意を向けながら、一斉にナイアルを睨む。

それを愉快そうに受け止めながら、ナイアルは首をコキコキと慣らした。

「ちようどいい。ちよつとばかしアグレアスじゃムカつかせてくれたからな。……ここ
で捻つとくか」

そうにやりと笑い、ナイアルはリムがカバーの体制に入っている子供に目を向ける。

「悪いな坊主。巻き込みまくっちゃうが、ま、運が悪いと思つてあきらめな」

性格の悪さが透けて見える行為だが、しかし子供はそんな事を意にも介さなかつた。

「ふーんだ！ おっぱいドラゴンが助けに来てくれるもん!! 問題ないね!!」

その言葉に、ナイアルは可哀想なものを見る目を向けた。

どうやら、ナイアルも英雄派と情報を共有していたらしい。

「残念だが、赤龍帝はよくて戦闘不能で悪くて死亡だ。うちのところのバカが猛毒を叩き込んだらしくてよ？ ま、この状況下でグレモリー眷属で唯一いないって事は、最低でもベッドから出れないってところか？」

ナイアルは意外と理知的なようだ。死亡をほぼ確信しながらも、万が一の可能性を考慮している。

まあ、体そのものは滅びている可能性がある以上、当然といえば当然だ。

同時に、イツセーの性格で未だに動いていないのはおかしいとも思っているのだろう。それぐらいにはイツセーのプロファイリングも進んでいるらしい。

……ここで生存の可能性がある事を告げたら、驚くのではないだろうか。

ふとそんな意趣返しを考え付くりアスだが、それより先に子供は首を傾げた。

「え、違うよ？ 怖くて眠ってた時、夢でおっぱいドラゴンが元気づけてくれたもん。悪い人はやつつけてくれるんだって」

そういうと、子供は両手の人差し指を突き出して、おっぱいドラゴンの歌を歌いだした。

その時、空が割けた。

その日にもたらされた情報は、ぜひ空前絶後であってほしいと様々な勢力が告げた。

なにせ、生態がほぼ解析されていないグレートレッドの情報なのに、はつきり言っ

面倒といつていい展開なのだから。

具体的に言うと、変人の類確定と認識されたのが、実に大きい。

6話

吹き飛ばされる井草は、しかし追撃の手が緩んだ事に気が付いた。

「分隊長！ あれを！」

「—なんだ？ 次元が大規模に割け……グレートレッドだど!?!」

その狼狽した隙について、井草は反撃を試みようとし—

「甘いわあ！」

—此方に視線も向けずに放たれた、ナイフアーザーの射撃で動きが止まる。

そして次の瞬間、バイアクヘーイツ二人に組み付かれた。

とつさに魔力を放出して振り払いを試みるが、瞬時に銃口が突きつけられる。

「—動くな劣等種族。死にたいのなら別だがな」

ナイフアーザー含めた九人のバイアクヘーイツが、一斉に銃口を向けていた。

……敵は推定E Eレベル5，0以上のバイアクヘーイツ九人。うち一人は、よりにもよつてサーゼクスとまともに渡り合ったナイフアーザー。

口は軽く挑発に激高する小物っぽいところはあがあるが、それでも魔王クラスの實力者

だ。更に、デフォルトイーツがフェニックスである為非常にしぶとい。

このままでは勝てない。それが嫌というほど分かってしまう。

このままはいそうですかと捕まる気はない。だが、迂闊に動けば確実に死ぬ。

どうしようもない状況下になるか、それとも一瞬の隙を見つけるか。そのどちらかでなければ動けない。

……だが、後者は予想を遥かに上回るほどに難しい。

間違はなく、敵は絶大な実力者だ。駒王会談での醜態で小物に見えるが、戦闘能力は正真正銘絶大である。

このままでは、連れていかれる。

だが、無謀な特攻はできない。

そんな事になれば、悲しむ者が多すぎる。

イツセー達が悲しむ。

ピスが悲しむ。

リムが悲しむ。

伊予が悲しむ。

五十鈴が悲しむ。

ニングが悲しむ。

故に、一瞬の隙を何としても探るべく、井草はこれまでになく集中し――

「ふむ、気絶させた方が速そうだな」

――それを見抜ける程度には、ナイフアーザーは優秀だった。

「絞め落とせ」

「クツ！」

どうやら、無謀な賭けに出るしかない。

井草は相手がちちらを気絶させる前に戦闘を開始しようとし――

「……井草ああああああ!!」

――その声を、聞いた。

「――五十鈴?!」

顔を向ければ、そこには既にハストウールイツとなつてゐる五十鈴が、こちらに向かつて突貫してきていた。

「第二班は後退! 第一班は弾幕を張れ!」

ナイフアーザーは即座に指示を出すと、迂回するようにして五十鈴に接近する。

そして井草を拘束している四人が後退し、残り四人が小銃を構えて弾幕を張る。

幹部用でない為性能は大幅に落ちているが、上級悪魔を損傷させうる弾幕が、一斉に放たれた。

距離が離れている為五十鈴は躲す事に成功するが、しかしその隙についてナイフアーザーが迫る。

—その真下から、一斉に光力の槍が襲い掛かった。

「チッ！ 伏兵とは味な真似を!!」

瞬時に躲しながら、ナイフアーザーはムートライフルで射撃手を迎撃。

それを雷撃を纏った腕で弾き飛ばしながら、伏兵であるピス・ダウンフォールが突撃する。

「五十鈴ちゃん!」

「分かつてる、ピス姉さん!!」

「チッ! 炸裂弾を近接信管で放て!!」

連携を仕掛ける二人を防ぐべく、ナイフアーザーは即座に攻撃の手段を変更させる。

炸裂弾による爆発が広範囲に巻き起こり、二人の接近を阻害。

そして、その爆発の影響をフェニックススイーツの力で強引に無視して、ナイフアーザーが二人を蹴り飛ばす。

「五十鈴! ピス姉さん!!」

「第二班ぼさつとするな!! 早くそいつを絞め落として連れていけ!!」

井草が吠えたことでナイフアーザーが激を飛ばす。

そして、それに反応して捕縛しているバイアクヘーイーツ達が井草を絞め落とそうと
して――

「……かかったわね、馬あ鹿!!」

五十鈴は、勝ちを確信して吠えた。

そして次の瞬間――

「任せて、五十鈴ちゃん!!」

真下からの灼熱が、井草ごとバイアクヘーイーツを吹っ飛ばした。

「熱い!?!」

「耐えなさい、男でしょ!」

五十鈴が無茶ぶりをしてきた。

だがしかし、攻撃で纏めて吹っ飛ばされた事で、拘束から解放された事もまた事実。即座に井草は空中で態勢を立て直し、しかし敵も見逃さない。

「させるか!」

「レセプターイーツと受容レセプター・カプコの器の同時保有サンプル、見過ごせん!!」

即座に捕縛の為に、体勢を立て直したバイアクヘーイーツが仕掛ける。

だがしかし、そこに割って入る赤いイーツがいた。

灼熱を思わせるカラーリング。全身にまとわれるのは毛皮のような装飾。そして、その身から放たれる灼熱。

クトウグアイーツが割って入り、迎撃のプラズマを放つ。

その砲撃に相手が警戒する中、井草はそれがまったく目に入らなかった。

「……う、よっ。」

思わず、ぼかんとしてしまった。

そして、その言葉に気づいたクトウグアイーツ一行仁伊予が、振り返る。

「うん。ごめんね、待たせちゃった」

イーツになってなければ涙をこぼしていた。

起きてくれた。

目を覚ましてくれた。

意識を、取り戻してくれた。

「……でも、起きてすぐで大丈夫!？」

「えっと、正直全然状況とか分かってないんだけど……ね？」

あはは……と苦笑いしながら、伊予はしかしすぐに我に返ると敵に向き直る。

「色々大変で、だから力になりたいの」

静かにプラズマを迸らせながら、伊予はまっすぐに敵を見据える。

「今までずっと間違えてきたから、その分頑張りたいの」

そして、ぎこちなく、まったくセンスがない構えを取る。

「だって……だって……だって……」

そして、心の底から言い切った。

「まだ、井草君や五十鈴ちゃんと一緒にいたいから!!」

そう言ってくれるのか。

あんな事をした自分や、それを仕向けた五十鈴に、そう言ってくれるのか。
井草はその事が心から嬉しい。

ああ、死を選ばなくて良かった。頑張つて生き残つて良かった。

心の中の枷が、解放されるのを感じる。

罪悪感は胸にある。後悔は、薄れる事はあっても消える事は生涯ないだろう。この傷は、決して癒し切つてはいけないものだ。

だが、しかし、それでも。

また、一緒にいる事を彼女は望んでいる。

「ああ……ああ……ああ……あ……つ」

何度も何度も頷いて、井草は決心する。

ニングと共に、リムと共に、五十鈴と共に、ピスと共に。

そして、伊予と共に。

仲間と一緒に生き抜こう。その為に、矛盾した言い方だが命を懸けて頑張ろう。

少なくとも、仲間達はそれを許してくれるのだから。

今まで以上にそれを望む心が強くなり、そして井草は壁を超える。

心が、世界の流れに逆らうほどにまで高まった時、神器使いは究極の領域に至る。

それこそが、神器の禁じ手。

それこそが、神器の究極系。

それこそが、神器使いの新たな次元。

「………禁手化!!」

バランス・ブレイク

それこそが、バランス・ブレイカー禁手。

神器使いの禁じられた手段。

井草・ダウンフォールは、今ここに新たなる領域へと突入した。

7 話

そして、井草の姿は変化する。

これまでのような、全身そのものが変異していたレセプターイーツとは違う。駒王学園の学生服を纏った、いつもの姿とも違う。

例えて言うのなら、青と水色を組み合わせた、ボディスーツとプロテクター。

頭部は井草自身の姿が出されているが、特徴としては髪が金色のメッシュ以外は水色になっっている事だろう。

レセプターイーツの受容体を模した円錐に近いパーツは健在。だがしかし、その姿はイーツとは言い難く、かと言ってデフォルトイーツとは違って肉体が変化している。

その姿を見て、ナイフアーザーは警戒の色を濃くした。

「……禁 バランス・ブレイカー 手になつたことで、レセプターエキスとの一体化が進んだのか！」

その警戒が籠った声に、井草は静かに頷いた。

焦りはない。

恐怖はない。

困惑もない。

「ああ、そうだ。これが、レセプターカーゴ受容の器の亜種禁手。名付けて、カーゴ・レセプター・エボリューション進化せし受容体」

その声は、どことなく冷静だった。

高揚はない。

狂喜もない。

興奮もない。

あるのは、ただ一段進んだという自覚と、その能力による軽い頭痛。

それらは、この力によって扱いが難しくなつた事と、これでもまだナイアルには届かないと冷静に把握できた事が理由だ。

「目指した果てには未だ届かず……か」

そう苦笑し、しかし井草は静かに拳を構える。

まず狙うは、井草達を狙うナイファーズの分隊の第二班。

彼らと向き合う伊予の肩に手を置き、井草は前に出る。

「任せて。ちよつと慣らし運転がてらに叩き潰してくる」

「……え、あ、うん」

その大人の様子に、伊予は少し顔を赤くして頷いた。

それに微笑み――

「モードムサシ。そして、モードフェニックス」

井草・ダウンフォールは一気に突貫する。

「舐めるな！」

「撃ち落とす!!」

遠慮なく、正確に、第二班は攻撃を叩き込む。

その射撃は正確かつ若干のゆとりがあり、回避が困難なレベルだった。だがしかし、そもそも井草は回避しない。

遠慮の躊躇も微塵もなく、井草は弾丸を受け止め――

「フェニックスって言ったよね！」

――その傷を、噴出する炎と共に回復させて無効化する。

「捕縛戦術に移行」

「囲んで仕留める」

それに対して敵は瞬時に戦術を変更。近接戦闘での捕縛を選ぶ。

しかし、それを容易くさせるほど、今の井草は甘くない。

「ムサシとも言ったはずだよ！」

瞬時に二つの光剣を具現化すると、素早く連続で切り結ぶ。

とつさに近接装備に変更したバイアクヘーイーツは凌ぐが、完全には凌ぎきれず裂傷

を刻み込まれる。

そして、それに気が逸れた瞬間を井草は見逃さない。

「モードホオジロザメ！」

光の剣をかき消した井草は、最も近くにいる敵に接近。

状況の変化に戸惑った敵は、ブレードでの接近戦を試みるが――

「遅い！」

それを、井草は噛み砕いた。

「馬鹿な!? 大量生産仕様とはいえ、オリハルコンすら使用している我らがムートウエ
ポンを――」

「ぼさつとするな馬鹿者!!」

井草がとどめの光力攻撃を放つ瞬間、狼狽した部下をナイフアーザーは蹴り飛ばして
回避させる。

更に振り返り様にブレードを一閃して井草を切るが、井草はそれを再生させながら再
び噛みつき攻撃を放つ。

しかし、噛みつかれた瞬間にナイフアーザーは強引に肉を引きちぎらせながら離脱。
炎と共に回復した。

「一端離脱！　そして集合しろ!!」

「「「「「はっ！」「」」」」」」

ナイフアーザーの指示に従い、分隊は速やかに散会して距離をとってから、ナイフアーザーを中心に陣形をとる。

そして、井草はそれらと睨み合いながら、自分の力を確信する。

「E Eレベルの向上及び、肉体との合一化の補強。そして、保有するエキスのレベル2化……か」

歯噛みする他ない。

ただでさえ多様性強化が本質であるレセプターイーツ。それを禁手がさらに進化発展させたのだから。

「レセプターイーツだけではレベル2まではできんと結論が出ていたはずだ。……特化した禁手になる事で、それを保全するとは……っ」

「手札が多すぎて選ぶのも大変だけどね」

歯噛みするナイフアーザーに、井草は苦笑を返す他ない。

多様性がありすぎて困っているところをこれだ。禁手も意外と融通が利かないようだ。

だが、確かに新たな力は手に入った。そして、それは確かに使える能力だ。

この力、ものにして見せる他ない。

「うわ、まさかここで覚醒とか惚れ直すわね。……井草、アンタ恰好つけすぎじゃない？」

「うわあ。井草、貴方つて凄い事するわねえ」

顔を少し赤くしながら、五十鈴とピスは感心しつつ、井草に並ぶ。

そして、ちよつと遅れながら伊予も並び立った。

「……あの、井草君……」

「伊予」

何か言いたげな伊予を遮り、井草は微笑んだ。

きつとためらいがあるのだろう。

だけど、その必要はない。

何故なら――

「皆良い人達なんだ。きつと、歓迎してくれるよ」

――ニングもリムもイツセー達も、伊予のことを心配してくれたのだから。

その言葉に、伊予は僅かに涙を浮かべ――

「……うん。分かったっ！」

満面の、笑顔を浮かべてくれた。

「さつきから黙ってれば、この状況下で睦言をするか！」

頬を引くつかせながら、ナイフアーザーは歯ぎしりする。

そして、散弾銃型のムートウエポンを構えながら、殺意を叩き付ける。

「総員戦闘再開！ 嘗められたままで終わらせるな!!」

「「「「了解!!」」」」」

全員が戦闘態勢をとる中、井草もまた光力の剣を構える。

ナイフアーザー達の好きにさせる気は、欠片もない。

何故なら、これは中盤でも終盤でもないからだ。

間違はなく序盤だ。これは、始まったばかりなのだ。

井草・ダウンフォールの物語は、漸くここから始まるのだ。

まず五十鈴がいる。

伊予がいる。

ピスがいる。

リムがいる。

そしてニングがいる。

そして、イツセーヤリアス達仲間達もまた、そこにいる。

そんな物語は、ここから始まるのだ。

そんな始まったばかりの物語を、いきなり死別で陰らせる気は、欠片もない。

ゆえに遠慮は必要ない。此処ではつきり宣言する。

「ナイフアーザー！ 選んでもらう!!」

「何だ？ 貴様の投降か戦死なら、選ぶのは貴様の方だぞ？」

肩をプルプルと震わせるナイフアーザーに、井草は挑発も兼ねて笑みを浮かべる。

「投降か戦死か捕縛か敗走か！ 好きな選択肢を取らせてあげるよ!! 自分達で選べ

!!」

その言葉に、ナイフアーザーが切れたのが分かった。

「未だ恒星系の惑星開拓すらろくにできん未発達文明如きが……よくほざいた!!」

そして、ブレードを引き抜いて一気に接近する。

「実験動物として飼いで殺しにしてくれるわ!!」

「いいだろう。神の子を見張る者の実験施設に叩き込んでやる!!」

そして、ムートウエポンと光力の激突が切つて落とされた。

一方その頃、イツセーは帰還して一暴れを済ませていた。

グレートレッドとの共闘で超獣鬼ジャバウオツクを撃破したイツセーは、とりあえず疲れた。精神的に。

なにせ、グレートレッドがしゃべったかと思えば――

「ぼちつとぼちつと、ずむずむいやーん」

――である。

ドライグはもはや現実逃避すらしている。流石のイツセーも頭が痛くなる。

赤い伝説のドラゴンの関係者は、おっぱいドラゴンの歌が好きになる呪いでもかかっているのだろうか？

隣でオーフィスまでもが歌っているが、これに関してはもう無視だ。

とにかく意識を切り替えて、どうしたものかと考えれば――

「イツセー様、よくご無事でしたね」

と、グレイフィアが降り立って苦笑を浮かべる。

「あ、はい！ 兵藤一誠、ただいま戻りました!!」

「グレートレッドに乗って戻ってくるなど想定外です。生存の可能性はアジュカ様から聞いていましたが、本当に驚かせてくれますね、貴方は」

そう苦笑するグレイフィアに、イツセーも苦笑するしかない。

というか死んだと思われるにいたらしい。驚きである。

「酷いですよ！ 俺、一生懸命頑張つて何とか生き残つたのに！」

「これまで死亡以外の前例のない事態が起きて、サマエルのオーラまで検出されては仕方がないでしょう。お嬢様方もたいそう気落ちなされてましたよ？」

その言葉に、イツセーはびっくりする。

変な夢を見た時沈んでいたのは覚えているが、まさかアレ、本当にあつた事なのだろうか？

グレートレッドの能力的にありえそうだ。戦闘中だつた事を考えると、もしかしたら大変な事になっているのではないだろうか？

「あの、それでリアス達は大丈夫なんですか!？」

「分かりません。私共は先ほどまで、あの超獣鬼と命名された超巨大魔獣との闘いで一杯でしたので」

どうやら想像以上に大変な事態なようだ。

イツセーはリアス達のことか心配になる。

井草のことも心配だ。

なにせ、いきなり現れた敵を引き受けて、そのまま転移してしまつたのだから。

「あの、そう言えば井草さんは——」

そつちに関してだけでも聞いておきたいとイツセーは問いかけるが——

『いや、どうやらそつちは大丈夫そうだぞ』
と、ドライグがそう言い切る。

そして、何やら面白そうな気配を見せた。

『街の方から気配を感じる。それに、これは……ククク』

楽しそうな声を上げるドライグは、イツセーに発破をかけるように声を出した。

『気合を入れ直した方がいい。井草・ダウンフォールの奴、どうやらついに至つたよう
だ』

「え、マジで!？」

「……なるほど。では、彼女と合流したようですね」

グレイフィアはそう告げると、笑みを浮かべた。

「いい知らせもあります。……行仁伊予の意識が戻りました。どうやらそれを知つたよ
うですね」

その言葉に、イツセーはほっとした。

一時期は見放した事もあるあの女性だが、それでも井草の大切な幼馴染。それに、そ
れにも理由があつた。

その彼女が起きたことに関しては、井草だけではなくリアス達も喜ぶだろう。

そんな彼女との再会が起きれば、勢い余つて禁手に目覚めてもおかしくない。

そう、それはきつとー

「俺がリアスの乳首をつついた時のような感動があるに決まってる……！」

「『いや、その例えは……』」

何故かドライグとグレイフィアの両方から言葉を濁された。

誠に遺憾である。イツセーはそう思ったが、しかし現実問題井草も突っ込みを入れたくなる内容ではあるのだった。

8話

そして、半目でナイアルは先ほどの砲撃を確認した。

「……帰るか」

「ナイアルの旦那、流石にそれは不真面目すぎねえっすか？」

舎弟の一人がそう言うが、しかしこれは言いたくもなる。

「冷静に考えろや。グレートレッドが参戦してんだぞ？ 勝ち目ねえだろ」

ナイアルはそう告げるが、事実正論だ。

彼我戦力差を考慮して、勝ち目がある戦いだからこそ戦うのが基本中の基本。勝ち目がないのに勝負を挑むのは無謀以外の何物でもない。

必然的に、勝ち目がなくなつたと判断したのなら見切りをつけて逃げるのも立派な戦術である。三十六計逃げるに如かずという格言があるぐらいだ。

如何にナイアルが主神クラスの実力者だといえど、龍神クラスに単独で挑むなど愚行の極み。よほど対ドラゴンに特化してない限り勝てるわけがない。文字通り桁違いの相手なのだから。

英雄派が龍の天敵であるサマエルを運用できたからこそ初めて弱体化させる事ができたのが、龍神という規格外の領域なのだ。

勝ち目がないから逃げる。ごく当たり前の判断である。

「そもそも俺らは「ウォーミングアップがてらに火事場泥棒してこい」って事で動いてきたんだろ？ それで龍神と仕掛けて死んだら意味ねえだろうが」

「言ってくれるな。俺達は眼中にない？」

睨み合う形になつたサイラオーグがそう言い放つが、ナイアルは肩をすくめる。

「そりゃそうだろ。お前らぶつ殺すのは余裕だしな」

さらりと即答し、そしてナイアルは拳を構える。

「何なら殴り掛かるか？ カウンター当てて潰してや」

そう言いかけたその瞬間だった。

ナイアルは即座に手近な部下を掴むと、即座に飛び退る。

「散開しろ!!」

「へ……つとお?」

慌てて舎弟達が散る中、勢いよく地面に激突するバイアクヘーイーツが出た。

そして直後、青い髪の青年が地面に叩き付けられる。

「……つたあ! まだ慣れてないか!」

「三下の捨て台詞だな!!」

起き上がった青年に、炎を撒き散らすバイアクヘーイーツが襲い掛かる。

だが、真後ろから仕掛けてきた見覚えのある墮天使が回し蹴りを叩き込んでそれを妨害した。

「させると思おう! ……井草、無事い!?!」

「勿論!!」

そう返答した青年—井草・ダウンフォール—は、そしてすぐに気が付いた。

「あ、ニング、リム!」

「井草!」

「井草さん!!」

タイミングのいい増援に感謝しながら、リムもニングも声を上げる。

そしてすぐに、その変化した姿に軽く驚いた。

しかし、誰もがすぐにその原因に思い至る。

そう、彼は至ったのだ。

そして、その切っ掛けもすぐに分かった。

「待ってピス姉さん! こっちのフォローもお願い!!」

「うわーん! E Eレベルが下がってるからのげない!」

そう泣き言を漏らしながら、バイアクヘーイーツから逃げるようにハストウールイーツとクトウグアイーツが更に追いついた。

そして、クトウグアイーツの方が僅かに肩を揺らす。

「あ……その……」

それですぐにわかる。

彼女たちは五十鈴と伊予だ。

伊予からすれば、散々酷い事をやってきたうえで、今更戻りしてきたようなものだ。思うところはあろう。

だが、それを見て真つ先に動いた者がいた。

「目が覚めたのね。それは良かったわ」

リアス・グレモリーは心からほっとして微笑んだ。

それに思わずぼかんとした伊予に、リアスは宣言する。

「新しい見習いメイドの参加は歓迎するわ。……自分がしてきた事が罪だというのなら、これからの行動で贖罪しなさい。その場所はニングが用意したでしょう?」

「全くなのです」

リアスの言葉に続き、ニングもまたそう言い切る。

「貴方の命は私がもらっているのです。罪を償う気があるのなら、井草・ダウンフォール

の為に生きて、このニング・プルガトリオ・ルシファアの為に戦うのですよ」

その言葉に、伊予は一度変身を解く。

そして、涙を浮かべながら頷いた。

「……かしこまりました、お嬢様っ！」

「……とんだ茶番を見せられてる気がするな、オイ」

そして、ナイアルはそれを見て苛立ちすら浮かべる。

ナイアルの立場と価値観からすれば、当然だろう。

だが、井草達の価値観と立場からすれば、実に「お前にだけは言われたくない」だ。苛立ちどころか殺意が浮かぶ。

「……まさかここでナイアルにまで遭うとはね。流石に、ちよつと厳しいか」

「ちよつとじゃねえよ絶望だよ。おいナイファーザー！ お前も手柄立ててえならさっ

さと起き上がって援護しろや！」

「貴様に言われたくはない。……まあいい、とにかくここでこいつらを潰せば、それ相応の戦果にはなるか」

井草が警戒し、ナイアルが吠え、そしてナイファーザーが復帰する。

緊張感が復帰し、そして激突が始まろうとして――

「あ、リアス！ アーシア！ みんなー！」

―信じられない人物が、姿を現した。

具体的にいうと、オーフィスを背中に乗せた赤龍帝の鎧である。

神滅具は世界に一つしかない、真正正銘のオンリーワン。なので、その持ち主は現状一人しか考えられない。

だがしかし、彼は体が消滅しているはずである。そも、次元の狭間に漂っているはずである。

というか、本人なのか？

などというわけのわからない思考停止が始まるが、イツセーは鎧の頭部を外してぎこちない表情で片手を上げた。

「えーと、おっばい！ グレートレッドの力を借りて帰ってきましたー！」

この瞬間、誰もが確信した。

あ、こいつイツセーだ。

「イツセー！」

「イツセーさん！」

真つ先に二大巨頭であるリアスとアーシアが歓喜の表情を浮かべて理解し、そして皆も続く。

「……馬鹿な!? 龍種に対する絶対の天敵であるサマエルの毒を浴びて、ただで済むわ

けがない!!」

「当たらなかつたのか? つつても、こいつらの性格だと出待ちとかしねえと思うんだけどよ……」

ナイフアーザーが愕然とし、そしてナイアルも怪訝な表情を浮かべた。

プロファイリングなどは済んでいる。兵藤一誠という男は、直情的で真つ直ぐな性格で、かつ善良だ。絡め手には基本的に向いていない。

だから、この冥界の危機に真つ先に動かないのはおかしい。よしんば上が止めたとしても、何らかの形でおっぱいドラゴンという立場を生かしてもいいはずだ。

ましてやグレモリー眷属は全体的にその傾向がある。だから何かあればなにかしらのアクションは必ず見せるはずだ。それが無いのはそれ相応の理由があつて、すぐには動けない時以外に考えられない。

だからこそ、ムートロンは兵藤一誠はサマエルの毒で死亡、もしくは重体と判断。グレモリー眷属は精神的支柱を失つた事で、すぐには動けない状態だと判断していた。それが、ピンピンして来訪というのも意外である。当然の判断だろう。

「無事だったか、兵藤一誠。流石は俺の見込んだ男だ」

「……流石に驚いたよ。つていうか、体あるんだ」

サイラオーグが感心し、井草は苦笑いしている。

この様子を見るに、どうやら井草達にとつてもこのタイミングのイツセーの来訪は予想外だったらしい。

「おい、ナイフアーザー。これやばくね?」

「同感だな。流れが明らかに傾いているうえに、どうやら理解しがたい事象が起こっている」と見るべきだ」

ナイアルとナイフアーザーは同じ結論に至る。

すなわち——また何かやらかしやがったなこのおっぱいドラゴン——だ。

この男が計算外の何かを引き出す事はもはや確定事項だ。

おっぱいが減ると聞いて格上をフルボッコにする。乳首をつついて覚醒する。生乳に触れて暴走状態から正気に戻る。ここまでは心の影響を受ける神器の機構上まあいいだろう。前代未聞ではあるが、言われればシステム上納得できなくもない。

だが、異世界から乳を司る神が救いの手を差し伸べるとか想定外すぎる。

京都では、謎のおっぱい召喚現象を引き起こした。これまた意味不明すぎる。

そして、乳の光を浴びて前代未聞の進化を遂げた。もはや異常事態と言つても過言ではない。

科学技術という、「理屈」で発達してきたムートロンからすれば、この意味不明な奇跡のつるべ打ちは警戒対象だ。現時点で法則が読めないがゆえに、対応が困難だと言つて

もいい。

しかも今回は特にきつい。

本来すぐに動いてもいいこの状況下で動かなかった上に、グレートレッドの反応が出たと共に参上した。

これはもう、グレートレッドの参戦そのものに何かしらの関与があるという根拠になっただけとも言える。

「グレートレッドは貴様が動かしたのか？ 生態も性格も分からんから、それができたとしてもある意味納得だが」

「っていうか、動きから見てその体、今までとは違うな。グレートレッドから力貰って、それに慣れてないって感じか？」

グレートレッドが何らかの形でイツセーに関与したと、ナイフアーザーもナイアルも確信していた。

このタイミングがあまりにも良すぎるのだ。今までのイツセーの想像の斜め上を回転しながらカツ飛んでいく行動から見ても、それぐらいはあっても驚かない。

「ん？ ああ。サマエルの毒で体が滅んだんでさ。グレートレッドとオーフィスの細胞で、オーフィスとドライグが作ってくれたんだよ」

……だがしかし、これは予想外だ。

誰もが一瞬思考停止と沈黙をする中、真つ先に復帰したのがナイアルとナイファー。ザーなのは意外だったかもしれない。

二人は目配せをすると、頷いて結論した。

「よし。お前ここでぶつ殺す。なんかもう、危険すぎて油断できねえ」

「そうだな。殺して死体を回収するか。それが一番な気がしてきたぞ」

こいつは危険だ。二人はそう確信する。

もはや意味不明にして理解不能。なにか明らかにこちらの常識や理論を無視した何かを持っているとしか思えない。

殺せるうちに殺しておくべきだろう。二人はそう判断した。

ナイアルとナイファーの部下達もそれに納得し、全員が我に返ると戦闘態勢をとる。

それに呼応するかのよう、井草達もまた、戸惑いながらも戦闘態勢をとった。

「つていうか井草さん。もしかして禁手ですか?」

「まあね。伊予が起きた事でほんとに至っちゃったよ。愛つて凄いい」

「い、井草君!?! その、ちよつと恥ずかしいけど……」

「貴様ら真面目にやれえつ!」

イツセーが余計な事を言つて井草と伊予の夫婦漫才が始まりかけ、最終的にナイ

フアーザーがキレた。

そして、勢いよく激戦が始まりかけ――

『おや。念の為に来てみれば、想定外の事態が起きているようですね』
――空間が歪み、そして新たなる乱入者が姿を現す。

9話

空間を歪ませ姿を現す、新たな乱入者達。

そこには、道化師の仮面をつけた死神が、複数体の死神を連れて転移して来ていた。

「……あ、ブルート!?!」

「おいおい、ここに来てるかよ」

イツセーが驚き、ナイアルがため息を付く。

ハーデスの戦力である、死神達。その中でも最高峰の力を持つ、最上級死神の一角、ブルート。

ここにきて第三勢力の登場に、誰もがマイナスの感情を抱いた。

後ろの死神も全員上級である。この面子を相手にしても戦えるであろう、実力者の群れであった。

タイミングがいいのか悪いのか分からない登場に、ナイアルは嫌そうにしながらも一応詰問する。

「で、何の用だよ死神さんよ?」

『勿論オーフィスです。ハーデス様から、確認したら是が非でも奪取するよう命じられておりますので』

さらりと告げられた言葉に、イツセーは静かに拳を構えて腰を落とした。

「……俺の友達に手を出そうつてなら、こつちも容赦しねえぞ」

『無限の龍神を友と呼ぶとは、剛毅な者もいたものですね』

プルートのそう告げながら、死神の鎌を軽く振るい、戦闘態勢をとる。

そして、三つ巴になったことで新たなる緊張感が生まれ――

「いや、そいつは譲れないな」

更に、新たなる参入者が生まれる。

そこに現れるは白。明星の輝きをもたらす白龍皇。

史上最強の白龍皇となる男。ヴァーリ・ルシファーがそこに現れた。

「……ここでお前まで出てくるのかよ」

げんなりしなつがらナイアルはため息を漏らし、ヴァーリは不敵な笑みを浮かべる。

「当然だ。やられっぱなしは性に合わなくてね」

そう告げるヴァーリは、しかし苦笑を浮かべながら辺りを見渡した。

「だが、シャルバは既に兵藤一誠が倒してしまった。英雄派も何時の間にか壊滅状態。ハーデス達は美候達に譲った。……そういうわけで、プルートぐらいしかぶつけ先がな

いんだよ」

『ついで見えた扱いになるとは。私も落ちぶれたものですね』

そう苦笑の声を漏らす。プルートの、ヴァーリは静かに戦意を向ける。

最上級死神相手に、ヴァーリはしかし余裕を見せていた。

そして、プルートも戦意を向けながら高揚する。

『白龍皇との激突とは、流石に少し楽しみです』

「高ぶっているところすまないが、まとめて一瞬で消し飛ばしてやろう」

プルートに呼応するかのようには、しかしそつげなくヴァーリは告げた。

そして、一瞬だがヴァーリはイツセーに視線を向ける。

「……兵藤一誠は覇を克服したが、俺は凌駕する事で新たな力を編み出させてもらった」

そう宣言し、そしてヴァーリはオーラを開放する。

「我、目覚めるは一律の絶対を闇に落とす白龍皇なり」

それは、覇を凌駕する更なる覇道。

「無限の破滅と黎明の夢を穿ちて、覇道を往く」

それは、覇を克服した新女王とは真逆の、覇の新たな領域。

「我、無垢なる龍の皇帝と成りて——」

それは、極めの領域に到達した、明星の頂に浮かぶ天龍。

「汝を白銀の幻想と魔導の極致へと従えよう——っ！」

それは、白銀に輝く、新たなるヴァーリ・ルシファアの力の具現。

『白銀の極 覇 龍。これが、俺の新たなる力だ』
エンレネオジヤガーノートオハートドファイ

そう宣言するヴァーリのオーラは、覇龍すら超えている。

それに誰もが目を見開く中、ヴァーリは静かに宣言した。

「覇龍はリスクが高すぎたのでね。それらの危険性をできる限りそぎ落として、更に伸びしろもある進化系を作らせてもらった」

「……オイオイオイオイ。マジかマジかよマジですか」

思わず、ナイアルは呆れ果てた表情を浮かべてしまった。

それほどまでに、ヴァーリのオーラは強大で、かつ安定している。

出力だけなら覇龍と同等だろう。だが、暴走の可能性を欠片も感じない安定したオーラは、操作性と安定性においては桁違いだ。命を削っている様子もなく、安全性においても格上だろう。

その絶大な力を放ち、ヴァーリは宣言する。

「はい。お前達は俺が滅ぼす」

『面白〜！』

その言葉に呼応するように、プルートは神速で迫ると鎌を振るう。

大半の者達が残像程度しか認識できない攻撃速度。むしろ全員が残像は認識できるというだけでも、この場の者達の戦闘能力の高さが判別できる。それほどまでの力。

これが、最上級の死神。

これが、神の名を冠す種族の最高峰。

これが、魔王にすら届く力の持ち主。

これが、ハーデス直属の精鋭の一人の力。

それはまさに神の頂であり、戦闘を司っていない大半の神なら苦戦するどころか敗北すらありうる難敵だろう。アザゼルが龍王を鎧として身に纏って苦戦しただけの事はある。

「油断しすぎだ、つまらない」

だが、それは今のヴァーリには一切通用していなかった。

軽く振った拳で、その鎌は砕け散った。

特に本気を出しているわけでもない。渾身とか必死とか全力とか言う言葉からほど遠い、雑な攻撃だったとも言える。

それで、最上級死神の鎌があっさりと砕かれた。

『何?』

『馬鹿な、悪魔ごときに!?』

上級死神たちは狼狽し恐怖するが、しかしどうすることもできなかった。

『こ、こんなことが……これが、魔王と白龍皇の……力……っ!?』

「……滅べ」

プルートのすら狼狽する他なく、そしてヴァーリは躊躇なく言い捨てる。

そして、視認する事すらできないレベルに圧縮されたプルート達は、この世から完全に消滅した。

ナイフアーザーすら目を見張るほどの、圧倒的な力。

あまりの力に数分ほど誰もが沈黙する間、ヴァーリは鎧を解除して肩で息をしていた。

思わず井草達はイツセーに視線を向ける。

イツセーが至った真紅カーディナルの赫クリムゾン龍プロモーション帝より強大だ。圧倒的な力の差があると言って

もいい。

もちろん、燃費という意味では莫大すぎて、比べるべくもないだろう。安定性と持続力が課題のイツセーの真女王ですらあれなのに、通常の覇龍すらしのぐ消耗速度なのだ。防戦に徹すればしのげるだろう。

だが、防御する間もない短期決戦なら敗北する可能性は絶大だ。そも、通常の禁手でもヴァーリはイツセー真女王と戦えるだろう事を考えれば、短期決戦特化の切り札があるという時点でアドバンテージはヴァーリが上だ。

「……井草さん。俺、あんなのに勝たなきゃならないんですか？」
「大丈夫だよ。俺も手伝うから」

井草はそういうが、その肩に五十鈴と伊予が手を置いた。

「危ないからやめて」

「うん、お願いやめて」

涙目でプルプル首を振る二人の気持ち痛みほど分かる者も多いだろう。

あの力は間違いなく主神クラスの領域だ。全盛期の天龍に匹敵する領域なのではないだろうか。

そんな化け物と戦って井草が死ぬところを見たくない。そんな感情がこれでもかた込められていた。

だが、そんな二人の肩をニングとリムがポンと叩く。

「無理なのです。とうるかー」

「目の前の馬鹿が主神クラスだから、結局似たようなもんでさあ」

そう言う二人の視線は、ナイアルに注ぎ込まれている。

そう。井草・ダウンフォールはヴァーリのこの絶大な力に驚いても、恐れおののいてはいない。

初戦は短時間しか運用できない主神クラスだ。普通に主神クラスの戦闘能力を發揮できるナイアル相手では、ガス欠になってやられるのが目に見えている。

なら、その程度はいつかできるようにならなくては意味がない。

実際、ナイアルは驚いてはいるが、狼狽はしていなかった。

「……やるじゃねえか。今のは俺も本気出さねえと大怪我しそうだな、ああ」

そう拍手すらしながら評価するナイアルは、しかしはつきりと断言する。

「だが、たかが一分足らずでへばるようじゃあ主神クラスは倒せねえよ。一瞬だけEレベル7，4相当ってところだろうしな」

「ああ、だが……極覇龍をなめるなよ？」

その事実を認めながら、ヴァーリはしかし不敵に笑う。

「先ほども言ったが、これは覇龍と違って伸びしろがある。曹操を恨むんだな。倒せる

時に俺を倒せなかったのは、奴の最大の失態だ」

そう言い放つヴァーリーに、ナイアルは肩をすくめてあらぬ方向を向いた。

「……んなこと言われてるぜ、曹操？」

その言葉に、多くの者達がナイアルを警戒しながらも後ろを振り返る。

そこには、眉間にしわを寄せた曹操が姿を現していた。

「まさか、ジークフリートを含めて全滅するとはね。驚くべきはグレモリー眷属の成長率か……」

戦闘の後を見て、曹操は全てを把握したらしい。

そう、英雄派の幹部達はことごとく撃破された。

ジークフリートは戦死。ヘラクレスとジャンヌ・ダルクは戦闘不能で気絶。ゲオルクも生死不明。

井草達を知る限りの英雄派の幹部は全滅だ。レオナルドも当面は復帰できないだろう。

その事実には戦慄しながら、曹操はその視線をイツサーに向ける。

「一つ確認したい。……兵藤一誠、君は何者だ？」

その目には、興味を通り越して畏怖の感情が浮かんでいた。

イツサーは首を捻るが、曹操もまた首を捻る。

「やはりおかしすぎる。今の君は天龍どころではないし、かといって龍神とも違う。君は一体なんだ、なんなんだ？」

当然の感想といえば当然だろう。

異次元というべきわけの分からない超常現象が頻発しまくっているのだ。それをなしているイツセーに対して、「お前何なんだよ!」と言いたくなるのは当たり前だろう。

だがしかし、兵藤一誠はこういう時馬鹿になる。

「ならおっぱいドラゴンでいいじゃねえか」

「ふざけるなあ!」

その返答に、ナイフアーマーはマジギレした。

今にも失神しそうなほどブルブル震えながら、指を突き付ける。

変身していない時なら、唾をまき散らしていただろう。そのレベルでブちぎれている。

「貴様はどれだけ異常な事をしているのか自覚しているのか! 現象とは原因とイコールなのに、それがさっぱり想定できんだぞ!」それを、「おっぱいドラゴン」だから!?

少しは考えたらどうだ、貴様あ!!」

根本的に技術を極めて魔王にすら届くようになったムートロンからすれば、激高ものだろう。

だが、イツセーからすればどうでもよかった。

「馬鹿な俺がそんな事分かるかよ。そんなもんはアザゼル先生達が考えることだし、俺にはどうでもいい」

そう言い切り、イツセーもまた指をナイフアーザーに突きつけた。

そこには、明確な怒りがある。

「そんな事より、お前達が冥界の子供達を怖がらせてる事の方が重要なんだよ、この悪党ども!!」

その宣言に、ナイアルは怒りのあまりがくがくと振動し――

「……………ふうっ」

――限界を超えて失神した。

「……………馬鹿は考えてくれねえから困るって知つとけよ」

呆れ半分同情半分の視線でそれを見たナイアルは、肩をすくめてナイフアーザーを部下に渡す。

「そいつ連れて下がってろ。此処は俺が適当に時間稼いでやる」

「りよ、了解しました!」

その言葉に従って離脱するナイフアーザーの分隊をしり目に、ナイアルは愉快そうに嗤いながら「ぐぶしを握る。」

「まあいい。ぶっ殺して死体を調べりゃ少しくらい分かるだろ」

「確かに、そつちの方が分かり易い」

曹操もまたため息を付くと、聖槍を構えて苦笑する。

「さてナイアル。俺は誰を相手にすればいい？ サイラオーグ・バアルに井草・ダウン
フオール、更には赤龍帝の兵藤一誠とより取り見取りだが――」

「リアス」

曹操の言葉を遮って、イツセーはリアスの前に出る。

「曹操は俺が倒します。だから、その前に俺を再びあなたの眷属にしてください」

その言葉にリアスは苦笑しながら微笑んだ。

「ええ、私の為に生きなさい」

その言葉とともに、兵藤一誠は再び悪魔へと転生する。

そしてその喜びと共に、イツセーは曹操へと向き直った。

「借りは返すぜ、曹操」

「いいだろう。楽しんでくれて、兵藤一誠」

そう返答し、曹操は禁手を発動させる。

その後光を浴びながら、イツセーもまた本領を発揮する。

ウエルシュンゴツシヨンプロモーション
憑依せし赤龍帝が効かないなら、真女王を使う他ない。

「我、目覚めるは――王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり!!」

歴代の赤龍帝達の犠牲の果てに、魂を守り切った。

「無限の希望と不滅の夢を抱いて、王道を往く」

そして、切り札は手に入っている。

「我、紅き龍の帝王と成りて――」

だから、曹操の相手は自分だ。

「――汝を真紅に光り輝く天道へと導こうっ!!」

――ここで、必ず倒す。

真紅に輝く真女王へと昇格し、兵藤一誠は仲間達に吠える。

「みんな！ 曹操は俺が必ずぶちのめす!! だから……ナイアルは任せた!!」

その言葉に、真っ先に答えるのは当然一人。

「任せた！ ナイアルは俺が一発ぶん殴る!!」

井草・ダウンフォールが、その言葉に全力で答える。

そして、真正面から向き合って、井草はナイアルに指を突きつける。

「この力の使い方は分かってきた。俺は、お前を、一発、ぶん殴る!!」

「上等だ」

その言葉に、ナイアルは不敵な笑みを浮かべながら拳を構える。

「データぐらいは取らねえとなあ？ ウォーミングアップに付き合ってもらうぜ、井

草あ!!」

その言葉と共に、双方ともに全力で激突した。

10話

イツセーと曹操が激突を開始すると同時に、井草もまた動く。

狙うはただ一人。

ムートロンの最精鋭の1人。怨敵、ナイアル。

届くとは思っていない。今の井草のE Eレベルは5，5だが、ナイアルは7，5もあるのだから。2，0の差は桁違いと言つても過言ではない戦闘能力の差を生み出している。

だがしかし、それでも我慢できない事がある。

自分が酷い目に遭つたのはいい。それは、自分の未熟さが招いた事で、一生背負つていかなければならない事だろう。

五十鈴のことも攻めきれない。五十鈴のあの精神状態なら、いつかは似たような事をしていただろう。むしろ、ナイアルの介入で暴走したからこそ、許される可能性が出てきたと言つてもいい。

だがしかし、伊予の件だけは話が別だ。

断じて許さない。絶対に見逃さない。彼女だけは純然な被害者であるがゆえに、井草・ダウンフォールは彼女の被害だけは見過ごさない。

そして、ナイアルは墮天使陣営は愚か、同盟全体に戦争を仕掛けているムートロンの一員であり、精鋭戦力だ。

彼を殺す理由は、それだけあれば十分だ。

「ナイアル……覚悟!!」

「いや無理。だつて負けようがねえし?」

振るわれる連続攻撃をナイアルは片手で全て捌く。

それを理解しつつ、井草は瞬時に戦闘タイプを変化した。

「モードバアル!!」

放たれるは消滅の魔力。触れただけで物体を消滅させる、バアル家に由来する力。

絶大な対物理能力を持つそれは、ナイアルが如何に最強格のムートロンであろうと、当たれば負傷は避けられない。

だから、ナイアルは即座に対応を変える。

「おっとー!」

迎撃で放たれるは、クトウルフィーツが展開する、フレキシブルキャノン。

八つあるその一つが具現化し、拡散砲撃を放つ。

それは最上級クラスに届く消滅の魔力を逆に消し飛ばし、井草に襲い掛かった。「モードベリアル!」

井草はそれをベリアルの特性で無価値にし、そして突貫する。

「モードバラム!!」

そして次に放つは強大な怪力。

絶大な筋力から放たれる拳は、間違いなくタングステン鉋すら砕くだろう。

だが、ナイアルはその程度では倒せない。

「甘いつつの一!」

ナイアルはその拳に対して、冷静にカウンターを叩き込む。

一発一発の威力も、高いEEレベルに裏打ちされたアントイツの怪力によって、凌がれる。

これが、主神クラス。これが、EEレベル7, 5。これが、ムートロン最精鋭の一角。ナイアルにとって、今の井草は面倒で手応えのある敵だが、しかしそれだけでしかない。

そして、リアス達も舎弟達が押さえ込んでいたので、尚更余裕を持って対応できる。突破できるのは精々数名。そして、数名突破された程度では窮地に陥る要素すらなく

「井草―」

「井草君!!」

突破して助けに来そうな輩は、大した事がない。

枢五十鈴と行人伊予。井草を想うがゆえに、罪悪感を持つがゆえに助ける為に全力を尽くしてしまう女二人。

だが、彼女達が二人掛かりで援護しようと、ナイアルは突破できない。

追加でいえば、E Eレベルが1も低下している今の二人なら、倍の人数で来ても余裕でしのげる。

想いを糧に突破してきたのは素直に凄いと褒めてやるが、しかしゆえに心配はない。

「伊予……五十鈴……」

そして、井草もまた顔を伏せ―

「……二人の命を、俺に預けてくれないか?」

―そこで、まだ伏札がある事に気が付いた。

迎撃の為に攻撃を放つが、読まれていたのかバックステップで回避され、距離を取られる。

そして、井草の言葉に二人は一瞬だけ思案し―

「……預ける!!」

—しかし、すぐに覚悟を決める。

井草もそれに一瞬だけ迷いを見せながら、しかしすぐに決意を決めた表情を浮かべた。

「……行くぞナイアル！　これが、レセプターエボリューションの奥の手だ!!」

その瞬間、レセプターエボリューションがレセプターイーツに退化する。

しかし同時に、レセプターイーツから莫大なオーラが放出。それが、イーツ状態の伊予と五十鈴を包み込む。

そして、伊予と五十鈴の姿がかき消えると共に、レセプターイーツの外観が変化する。色が黄色に変わり、そして毛皮と外套を身に纏った、奇抜な姿へと変貌する。

問題なのは、その力が絶大なレベルにまで高まっている事である。

「これが、レセプターエボリューションの裏技にして奥の手、レセプタートリニティだ!!」

その瞬間、井草は一瞬で距離を詰めると、ナイアルに拳を放つ。

それに対してナイアルは迎撃ではなく反撃を選択した。

それは余裕の表れでは、断じてない。

むしろその逆。回避できないと判断したからこそ、即座の反撃でせめて条件を同格にする事を選んだのだ。

そして轟音が響き、双方が共に吹き飛んだ。

瞬間、即座に再起して再び打撃戦を開始する。

圧倒的な技術と打撃力を基にするナイアル。そして、圧縮された灼熱のプラズマによる威力向上で食い下がるレセプタートリニティ。

その打撃戦は、主神クラスの頂と言っても過言ではない。

神すら殺せる壮絶な打撃戦が、冥界の首都リリスにて巻き起こった。

『い、いいい井草や伊予と一緒になってる!?!』

『うわ、うわ、うわあ!?!』

困惑する五十鈴と伊代の声を受けながら、井草は吠えた。

「力を借りるよ二人とも！俺は、二人と一緒に戦いたい!!」

心からの願いを告げながら、井草は打撃戦を繰り広げる。

実際問題、これでもなおナイアルの方が有利である。

近接戦闘なら渡り合える領域に到達しただろう。加えて、相手の精神的動揺を生み出した事でその差は更に縮まっている。

だが、冷静になつて砲撃戦闘まで組み込まれたら状況は一変する。

相手が近接戦闘に意識を向けている間に決着を付けなければ、こっちが負ける。

だが、それでも勝ち目が普通に見えただけでも僥倖だろう。

アウターイーツの力を取り込む。普通なら、レセプターイーツでは処理要領を超える為不可能だ。

だが、バランス・ブレイカー 禁手に至つた事で、限定的に可能になつた。

それは、伊予と五十鈴に限定して、まとめて取り込む事による能力向上だ。

愛の力と吠えたいところだが、ニングヤリムの場合はできないと思われるので、それは言わない。

しかし、それでも凄い事だ。アウターイーツの力を取り込んだ事で、勝機が大幅に向上した。

「伊予、五十鈴。……ありがとう」

これは、伊予と五十鈴が井草に命を預けてくれているからこそできる事だ。

井草の心に神器が答えたからこそその形態だ。

あの三人で一緒だったあの頃への渴望。失つた四年間の分、それをより取り戻したい

と思つた事から生まれた、一種の反動。そして大人になつたがゆえに、その先への願望。その結果が、二人を取り込んでの上位形態。身も心も一つになる、上位形態の變化だつた。

歪んだ願いの成就だと、自虐はする。

だが、同時に感謝しよう。

この力の大幅な増大があるからこそ、今ナイアルに勝機が見えたのだ。

『仕方ないわね。井草、ナイアルをボコるわよ!!』

『うん、私も一回ぐらい怒つてもいいと思うから!!』

二人の意識がナイアル打倒に向けられた事もあり、より戦闘駆動が容易くなる。

そして、動きに対応し始めたナイアルに追いつがる。

「ありかよ畜生が! そんな奇跡のバーゲンセールはお呼びじゃねえ!!」

「地が出てきたね! ああ、実に小物らしいよ、下衆が!!」

流石に状況が大きく変動しすぎて余裕を失っているナイアルに、井草は吠える。

……思えば、ナイアルがいなくてもいつかは崩れていただろう。

井草・ダウンフオールは馬鹿だつた。自分の特殊性に目が暗み、大切なものを本当の意味で見えていなかった。

枢五十鈴はどうしようもなかった。若いがゆえに努力に苦しみ、それゆえの逆恨みで

人生を転げ落ちた。

行仁伊予は愚かだった。子供じみた夢想家ゆえに悪鬼にあつさり絡め捕られ、無邪気ゆえに惨劇を引き起こし、血にまみれた。

三人とも幼かったのだ。そして、それゆえに大きな歪みが関係性に生まれていた。ナイアルがいなくても、いつか破綻していただろう。

下手をしなくても、そのまま関係が修復しなかった事もあるだろう。その可能性の方が大きい以上、三人が関係性を修復できたのは、三人だけの限定した視点ならマシなのかもしれない。

だが、そんな言葉で済まされていいはずがない。

目の前の男の悪意によって、三人が引き裂かれたのは事実。

結果、伊予と五十鈴は何百を超える命を奪うという、一生背負っていかねばならない業と罪を背負い込んだ。

井草もまた、四年間もの長い期間を自罰の感情に吞まれて過ごしてきた。

結果的に三人にとって好都合になったからと言って、それを許していいわけではない。

何より、この男をそのままにしておけば同じ悲劇は必ず起きる。

五十鈴も伊予も、決して特別に選ばれたナイアルのお気に入りなどでは断じてない。立った二人だけの被害者などというわけではない。

他にも何人も、同様の手法で堕ちた情婦はいるのだ。そして、その過程に何人もの井草・ダウンフォールがいる事だろう。

だから、倒せる機会を見過ごせるわけがない。

『『ナイアルうううううううう!!』』

「おいおい勘弁してくれや!!」

その攻撃をしのぐナイアルがぼやくが、そんなものは意に介さない。

圧縮灼熱の拳を纏ったレセプターエポリューションは、近接打撃でナイアルに迫いする。

後先を半ば考えていないからこそできる出力で、井草達はナイアルにその牙を食らいつかせていた。

「熱ちちちちちい! ……あ、これ距離取れば一発で終わりじゃね?」

「させるか!!」

気づいてはいけない事に気づいたナイアルだが、しかしそれを見過ごすつもりはない。

プラズマの収束をワザと乱して推進力へと変換し、一気にスピードを上昇。攻撃力は低下したが、これで距離を取られる事はない。

そしてその打撃力により、ナイアルと極限の接近戦を展開する。

届け。

届け。

届け。

あの日々を。あの輝きを。あの絆を。

大切だったあの頃を、奪った男を決して許すな。

その願いを込め、井草達は心一つにして、そしてナイアルに怒りを叩き付ける。

そして、その拳がナイアルを揺るがした。

「が!？」

ラツキーパンチと言ってもいいだろう。運よく急所に当たっただけだ。

だが、実戦を重ねていた井草達は、それに戸惑う事なく、一気に畳みかける。

拳が、蹴りが、頭突きが、ナイアルに叩き込まれ、更に揺るがした。

「やべ、脳が……揺れた……っ」

どうやら軽度の脳震盪を起こしているらしい。明らかに動きが悪くなっており、明確な隙が生じている。

このチャンスは逃せない。此処を逃せば、勝ち目がなくなるかもしれない。

だから逃さない。

故に勝って見せる。

『勝つわよ、井草!!』

『行くよ、井草君!!』

「分かつてるさ、五十鈴、伊予!!」

三人の気持ちは一つになり、そして拳に力が籠る。

そう、ナイアルはこれ以上見逃せない。

同じ悲劇は生み出させない。

だから、ここで、倒す。

「『もらったああああああ!!』』」

そして、脳震盪が回復しきっていないナイアルに、レセプタートリニティは拳を構え

て突撃し――

「……………え？」

その変身が、一瞬で解除された。

「……うおっしやあ?」

「舐めるな!」

その好機を得ようとしたナイアルの拳を回避しながら、井草はギリギリで伊予と五十鈴を拾い上げて距離をとる。

砲撃を喰らう可能性こそあるが、今の状態でナイアルとの近接戦闘は危険である。

そして、井草はとっさに着地しようとして――

「……が……っ!」

――血を吐き、そして地面に膝をつく。

激痛が走り、そして文字通り体中が傷ついている。

この様子では内臓にもダメージが入っている。血管や筋線維も断裂し、内出血などの

ダメージで物理的に動きが阻害された。

「井草!? ちょっと……な……に……っ?」

「五十鈴ちゃん……あうっ!」

五十鈴と伊予も、体中から血を流しながら、激痛に顔を歪めて崩れ落ちる。

そして、その理由をナイアルは即座に把握した。

「どうやら、合一はできても負担はでかいようだな。……おかげで助かったぜ」

安堵の息を付きながら、ナイアルは体の調子を確かめながら戦闘態勢を取り直す。

それを見ながら、井草は己の迂闊さを恥じた。

ただでさえ土壇場で覚醒したばかりの禁手。しかも、その裏技とも言えるレセプター

トリニティ。

デメリットを調べる暇もなかった。そもそも、その力の強さに目を奪われて、デメ

リットの可能性に思い至らなかつた。

まずい。

まずい。

まずいまずいまずい。

激痛は無視できる。オカルト研究部の根性は伊達ではない。短時間ならショック死物の激痛に耐えることもできるだろう。

だが、肉体の損壊ゆえに動けないのはどうしようもない。根性論以前に、そもそも物理的に動く事ができないのではどうしようもない。

まずい。

駄目だ。

ふざけるな。

五十鈴は漸く日常に慣れてきたのだ。伊予に至つては意識を漸く取り戻したばかりで、日常に戻るとつかかりができてきてもいないのだ。

それなのに、ここで全てなくなるなど、あつてはならない。

「ぐ……させる、か……あ!!」

井草は全力で光力の槍を具現化して、一斉に放出する。

だが足りない。ナイアルはそれを拳でやすやすと破壊すると、フレキシブルキャノンを向ける。

そこからくる絶大な火力は、最上級悪魔クラス。

一発一発がクリムゾンプラスターにも匹敵するだろう。それが、二つも放たれようとしている。

「一時はどうなるかと思つたが、ま、ここでやつといた方が良さそうだな」

冷徹な視線をナイアルは向ける。

そこにはい相手を殺すという意志が込められ、そして井草達を確実に殺す砲撃を準備していた。

「まず………！ 井草、伊予………っ！」

「二人とも、逃げ………て………っ！」

五十鈴も伊予も、自分よりも二人のことを考えて、せめて盾になろうと動く。

二人とも激痛に苛まれているだろうに、それでも動こうと努力している。

だが、足りない。

時間も足りなければ、そもそもこの状況下ではまとめて吹き飛ばされる事は確定だ。

まったく意味がないと言っている。

「くそ………っ！ させて………たまるか………！」

井草もまた動こうとする。

ここでこんな結末だけは認められない。

二人はこれから取り戻すのだ。漸くその機会が巡ってきたのだ。そのチャンスを手にする事ができたのだ。

それが、こんなところで、井草の判断ミスによって台無しになる。

そんな事は、断じて認められない。

「させるかあああああああ!!」

「いや、無理だね!!」

井草の叫びを叩き切り、ナイアルは砲撃を叩き込んだ。

11話

放たれる砲撃はまさに絶大。

兵藤一誠の真女王が放つ、クリムゾンブラスターすら超えるする火力の砲撃が、二つも放たれた。

常識的に考えて過剰攻撃だろう。全力からはまったくもって遠く離れているが、しかし確殺を期した攻撃だった。

実際問題、井草たちはろくに動ける状態ではない。

交わされる可能性は絶無。防がれる可能性も皆無。耐えられる可能性はかけらも無い。

故にこの攻撃はまさに必殺であり――

「そうはいくかよお!!」

――だがしかし、状況はそれを許しはしない。

割って入るように放たれた砲撃がその絶大な火力をもつて、ナイアルの砲撃を半減させる。

さらに割って入った獅子と魔剣が、絶大な威力をもってそれを相殺した。

さらに、四方八方から押し寄せる攻撃が、ナイアルに襲い掛かる。

魔力、光力、闘気に魔法。

様々な異能の力が、ナイアルを包围して撃破せんと襲い掛かった。

それをナイアルは巧みな機動で完全に回避するが、しかし状況の変化ゆえに舌打ちする。

「抜かれたのか?! あいつらは、E Eレベルが5，0以上の連中だらけなんだぞ!!」

「ええ。でも、最上級クラスが複数人来てくれればしのげるわ」

ナイアルにそう宣言するリアスは、大火力の消滅の魔力を放ってナイアルに攻撃する。

それを速射で相殺するナイアルだが、しかしすぐにどういふことか勘付いた。

「……ルシファー眷属か! チツ! もう来やがったか!!」

「それだけじゃない。俺やシーグヴァイラの眷属、それにソーナたちも協力してくれたからな」

そう言い放つサイラオーグは接近し、そしてナイアルに殴り掛かる。

いなすナイアルは反撃の拳をふるうが、瞬時に対象を変化させて魔剣グラムを迎撃。

即座に分身のアントイツを精製して、その絶大な馬力で聖剣の龍騎士を破壊する。

だが、それでも数が多い。

グレモリー眷属の総攻撃に、ナイアルは確かに一瞬動きを阻害されていた。

「皆……?」

「はい、みんな追いつきました」

井草にそう告げ、アーシアが回復フィールドで井草たちの負傷を即座に癒す。

「ありがとう。おかげでまだ戦えるよ」

井草はそう礼を言うと、すぐにでもナイアルに追撃をせんと立ち上がる。

ナイアルを許すわけにはいかない。ナイアルを逃がすわけにはいかない。ナイアルを見過ごすわけにはいかない。

何としてもナイアルを倒さんと、井草は走り出そうとし――

「井草さん」

その襟首を、イツセーが勢いよくつかむ。

ものすごい勢いで加速していたため、首を思いつきり痛めた。

ゴキヤ……という音が鳴り響き、井草が一瞬硬直するぐらいだ。

即座にアーシアが治療するが、しかし命の危険もある行動である。

「ちよ、イツセー!?!」

「井草さん、頭に血が上りすぎです!」

井草が文句を言うより早く、イツセーは井草ににじり寄るとそう告げる。

「だけど、ここでナイアルを見逃すわけには—」

井草としてはそこは譲れない。

この四年間、伊予と五十鈴は罪にまみれてきた。

結果として三人の絆が残ったのはナイアルの行動の成果かもしれないが、それは許す理由にはならない。

だから、ここでナイアルを倒さねばならず—

「井草さん！ あんた大事なことを忘れてます!!」

—イツセーは、はつきりと井草の失念を指摘する。

「あいつは、井草さんより強いです!!」

—そう、ナイアルは主神クラスの化け物だ。

わかっているつもりだった。それでも届く切り札があったのだ。

だが、イツセーはそれを否定する。

「俺が曹操に勝てたのは、勝てる切り札があったからです」

真剣にそう告げ、イツセーは井草を諭す。

「井草さんの勝てる切り札は、時間切れです。……どうしても井草さんの手で決着をつきたいのはわかりますけど、落ち着いてください」

「……………」

そんなつもりはなかった。

少なくとも、意識はしていなかった。

だが、無意識に思っていたとしてもおかしくないだろう。

井草にとって、四年前の一件は自分にも責任があると思っていた。

そうだろう。諭されての準強姦行為。それが罪であることはだれが否定しようと井草だけは否定しない。

やらかしたのは自分なのだ。それは一因でしかないかもしれないが、それでも一因なのだ。

だからこそ、最大の悪意であるナイアルを見過ごせない。

自分の手で決着をつけたい。そう願っていたのを、井草は察する。

「一人で……いや、五十鈴さんや伊予さんの力を借りたからそれは変だけど、とにかく背負い込まないでください。俺だって、曹操相手にはリアスのおっぱいを借りました。いろいろと」

また何かやったのかと思つたが、それはこの際放しておく。

しかし、イツセーは切り札を用意したうえで、それでもリアス達の力を借りる必要があつた。

それほどまでに曹操は難敵だった。最強の人間になりうる絶大な力の持ち主は、それだけの強敵だったのだ。

そして、ナイアルはそれを超える。少なくとも、現状では曹操よりはるかに上の戦闘能力を保有している。

……わかつて、いるのだ。

あの過去の清算を、過去を背負ったものたちで解決したいと願ってしまった。

結果、性質を把握しきっていない能力で自爆し、三人もろとも死ぬところだった。それでも、井草は……。

「井草さん」

その背中に、柔らかい感触が触れる。

「井草っ」

そして、バンと肩をたたかれる。

「ニング、リム……」

振り返る井草の目に映るのは、二人の愛する少女たち。

二人は、苦笑を浮かべながら、少し不満があるのか、むつとした目を向ける。

「愛する人の重荷ぐらい、少しは背負わせてほしいのです」

「そうそう。こっちの重荷を背負いたがるなら、こっちにも背負わせやがりなせえ」

その言葉に、井草はふと視線をそらし――

「こつち向くのです」

と、エクストラカリバーで首を固定された。

物理的に逃げられなくなり、井草はどうしたものかと思うが、ニングはそれを意に介さない。

「じゃあ、トリをさせてもらおうのです」

「よっしゃあー！ 一番やり貫いでさあー！」

と、ニングの言葉にリムがガッツポーズをし――

「……ん」

――井草と、唇を重ねる。

……一瞬でいろいろと思考が真っ白になった。

そして、若干頬を赤らめたリムは、照れ笑いを浮かべながらはつきりという。

「一緒に支えあつていきましようぜ？ 私らぐらいにやさせて下せえよ」

その笑顔とともに告げられた言葉に、井草は顔を赤くしながら、しかし胸に届くものを感じた。

ニング・プルガトリオ・ルシファーとリム・プルガトリオは、井草が愛する少女たちだ。

井草を認め、許し、そしてともに居たいと願つてくれる。

そんな彼女たちが、井草が一人で苦勞をしい込むことを認めるだろうか。

そして、二人が苦しむ理由を作る自分がいていいのだろうか。

結論は一瞬で出る。

あり得ない。あるはずがない。認められるわけがない。

そして、井草は負けを認める。

「参つた、これは降参だ」

そうだ、難敵との闘いぐらい、少しは頼るべきだった。

イツセーがいる、リアス達がいる。サイラオーグたちまで協力してくれている。

そして、愛する者たちがいる。

五十鈴がいる。

伊予がいる。

リムがいる。

ニングがいる。

きつとピスもここにいたら協力してくれるだろう。乱戦の影響ではぐれているが、それぐらいには力を貸してくれる女性だと、井草は確信している。

………少し、一人で背負い込みたがりすぎたようだ。

「降参だよ、うん、力を借りるところだよね、ここは」

そう苦笑すると、井草は振り返る。

そこには、治療が終わり立ち上がった伊予と五十鈴がいる。

「ゴメン。言い換える」

そう、ここは言い換えよう。

二人の命を預かるのは、井草ではない。

「二人の命、俺達に預けてくれないかな？」

井草たちだ。

その発言に、五十鈴は肩をすめながら苦笑する。

「微妙に締まらないセリフだけど……ま、さつきよりは頼れるかしらね」

そう言い切り、五十鈴は井草の前に立つ。

そして、苦笑しながら顔を寄せる。

「一番背負うのは井草だからね。そこ、譲らないですよ？」

「わかつてる。そこは譲れないね」

そして、口づけをかわす。

十秒ぐらい口づけを続けた五十鈴は、苦笑しながら伊予に振り返る。

「で、伊予はどうするの？」

五十鈴にそう言われた伊予は、あたふたとしながら、しかし井草に近づいた。

「あのね？ その……私は、まだよくわかってないことが多いけど……」

伊予の意見はもつともだろう。

伊予はナイアルと殺戮しか見えていなかった。他を四年間全く省みなかつただろう。だから、イツセーたちを判断することは難しい。それだけの判断材料を、伊予は持つていないのだから。

だが、それでもわかることが伊予にはあった。

「だけど、井草君の大事な仲間たちなんだよね？」

「うん。俺がその絆にふさわしい者になりたいぐらいには、立派で大事な仲間たちだよ」

それは、井草はあの四年前から成長を遂げたということ。

それは、井草の過去を知って受け止めて、そして井草がかけがえのないものだと思信している者たちだということ。

なら、きつと信じていい人だ。

「井草君が信じる人たちだから、私も信じるよ」

そして、伊予は井草にすり寄る。

伊予は、井草の顔をまっすぐにみつめ、そして告げる。

「……井草君、私は、前を向いていいのかな？」

「当然だよ」

はつきりと、井草は断言する。

「そのために俺の大事な人が苦勞をしい込んでくれたんだ。だから、しっかりと前に進んでくれると俺はうれしい」

井草はそう願う。

ニング・プルガトリオ・ルシファアの献身を無駄にしないでほしい。

行仁伊予が、前を向いて明るいところに踏み出せる世界になってほしい。

そして、伊予が過去を受け止めながらも前を勧める人になってほしい。

だから、井草は伊予を抱きしめる。

「大好きだ、伊予」

「うん。私も、井草君のことが、大好き」

そして、誓いの接吻をかわす。

しっかりと愛をかわしながら、しかし伊予も決心したかのように離れる。

そして、井草の背中を押した。

「じゃ、ちゃんとしっかりしてね、井草君」

「全くできあ。大トリを忘れちゃいけないぜ？」

「お待たせしましたお嬢様ってね」

リムと五十鈴も背中を押し、井草は彼女の前に立つ。

「ニング……」

「ハイなのです」

長く言葉が続けるのも野暮だろう。というより、戦闘中なのでこれ以上長く続けるのも問題だ。

なので、しっかりととはつきりと手短かに告げる。

「ありがとう。君の献身に報いることができる俺になって見せる」

「気長に待っているのですよ。私の愛しい井草さん」

そして、しっかりとキスをかわす。

さあ、準備は完了だ。

勝機はあるかどうかわからない。

すでにナイアルは優勢に立ち回っており、此方に対する警戒も強い。

だが、それでも勝利をつかもう。

新しい力がある。

愛する女性たちがいる。

そして何より、頼りになる仲間たちがいる。

まずは一泡吹かせて見せる。まずは、そこからだ。

「行こうか皆。ナイアルを、ぶっ飛ばす!!」

12話

「んじゃあそろそろぶっ潰そうかあ！」

攻撃のことごとくを弾き飛ばし迎撃したナイアルは、反撃体制に移る余裕を得た。

そして、E Eレベル7，5とクトウルフイーツの本領を發揮する。

八門のフレキシブルキャノンが一齐に別々の方向へと向けられ、そして一齐に砲撃が放たれた。

一発一発がクリムゾンブラスターにも匹敵する大火力。それを、クリムゾンブラスターより遙かに短い、速射と言つてもいい速度で放たれる。

全員が回避に全力を傾け、そして何とか攻撃を回避する事に成功する。

だがしかし、ナイアルはその時点で距離をとる事に成功していた。

そして本領を發揮する。

砲撃戦闘特化型アウターイーツ、クトウルフイーツ。

主神クラスの領域に到達した事を示す、E Eレベル7，5。

その二つの力の組み合わせで放たれる、絶技が一気に放たれる。

八門のフレキシブルキャノンが円を描くように展開し、そしてその中心部に莫大な力が籠められる。

誰もが一瞬で理解した。

その火力は、絶大極まりないと。

「砕け散りな。ク・リトル・リトル・ブラスター!!」

その瞬間、絶大極まりない火力が放たれ――

「そうはいきません」

その瞬間、新たな増援が姿を現した。

真後ろから井草を伴って現れるは、メイド服に身を包んだ銀髪の女性。

シアリー・ルキフグスが、転移してナイアルに迫る。

彼女はほぼ人間の状態から先祖返りした彼女は、その特性ゆえに神器を持つ。

持つ神器はイヴイライアイ・ゲート扉作る邪視。直接視界で認識した地点と足元に転移ゲートを形成。それ

による短距離空間転移を可能とする神器。

精密な認識が必要になる為、転移可能距離はそこまで高いわけではない。有効射程は1 kmにも届かない。

反面、それさえできるのなら転移そのものは絶大というレベルで可能とする。アグレアスでの戦いで、高度な結界を設けられたのにも関わらずニングとリムを連れて転移し

たのは、彼女なのだ。

戦闘能力こそ上級悪魔の領域程度でしかないが、しかしその能力は確かに一級品。彼女はメイドとしての能力や、ニングに近い来歴からくる親近感で選ばただけではない。確固たる能力を持っているからこそその選抜なのだ。

そして、ゆえにこそ井草の突撃は成功する。

「ナイアル!!」

「チー!」

井草の攻撃はナイアルをずらし、仲間達から射線をずらす。

そしてその瞬間、ク・リトル・リトル・ブラスターが放たれた。

既に避難は大幅に進んでいるからこそ、人的被害はゼロ。それは後に確認される。

だがしかし、その絶大な物的損害は、ムートロンの底力を見せつけるには十分極まらない。

たった一撃。たった一撃の砲撃。

それだけで、悪魔の首都リリスの2割が消滅した。

「しぶといんだよ、クソガキ!」

「お前に言われたくない、糞野郎!!」

そして、井草とナイアルは再び打撃戦を開始する。

だが、その戦闘は明らかにナイアルが上。

元々レセプタートリニティだからこそ拮抗できた戦いだ。その性能差がもろに出るのは明白。

そして、ナイアルも本腰を入れ始めている。そこからくるナイアル側の能力向上も残酷な現実。

そして何より、井草の消耗も激しい。

レセプタートリニティによって発生した損壊は、アジアによって癒された。だが、それは傷の治療で会って体力の回復ではない。

消耗は絶大。明らかに負担も大きい。

ゆえに、井草だけではナイアルに勝つ事はできず――

『おいナイアル!!』

「俺たちを忘れるなよ!!」

――そもそも、そんな気はもう既に井草にもない

仲間に頼るべきところは頼る。それを受け入れた井草は、あくまで時間稼ぎとメイン戦闘を担当するだけだ。

そして、振り返ったナイアルはギリギリでその拳を受け止め――

「うおおおおお!!」

―立った一発、それも防いだ拳で100メートルは吹き飛ばされた。

それをなしたのは、兵藤一誠とサイラオーグ・バアルの連携。

ウエルンユ、ボゼツシヨシ、テロモイシヨシ

憑依せし赤龍帝によつて、戦車の駒で合一化したサイラオーグの拳が、ナイアルを叩きのめす。

そして、そこから井草達の反撃は本腰に入る。

「援護する。行け、井草・ダウンフォール!!」

「メイン盾よろしく、サイラオーグくん!!」

真正面から攻撃を敢行するサイラオーグと、正面戦闘をサイラオーグに任せた、井草による四方八方からの攻撃。

それらに対処しながら、ナイアルは舌打ちする。

どうやら面倒極まりない状況かだ。

正面からの殴り合いにおいては、既にサイラオーグは天龍クラスに届く力を發揮している。

足を止めての殴り合いでは、此方とほぼ互角と言ったところだろう。覇を使わずにここまでできた事には驚く他ない。

そして、それを利用して井草は妨害戦術に特化する。

足と止めての殴り合いなら互角のサイラオーグとイツセーの組み合わせに正面戦闘

これがお前への罰だと言わんばかりに、魂すら込めてニングは吠える。

「これは、遊び半分にも他者を苦しめてきた、貴方に対する怒りと知るのです!!」

その宣言と共に、攻撃が密度を増し―

「なるほどなあ……だが甘い!!」

それら全てを下らないと言うかのように、ナイアルが吠える。

その瞬間、ナイアルは分身を大量生産。

その数合計18体。Eレベル5，0相当の戦闘能力を持ったアントイツ達が、隙を作るべく行動を開始する。

戦闘能力はそこまで高い方ではない。だが、それはナイアルと比べての話であり、並みの上級悪魔なら殺しうるだけの力を秘めている存在だ。

それらを集中投入する対象は、ニング・プルガトリオ・ルシファー。

井草にとって大事な女性を狙う。これによって井草の集中力を阻害し、まず一端仕切り直す。

あくどい手段ではあるが、戦場において相手の嫌がる事をに徹するのは常套手段。戦争という人道が軽視される環境においてそれは当然の判断でもある。

ゆえにこそ、井草も表情を決して憎悪に歪めたりはしない。

何より、意識を先頭に集中する為に、吠える。

「皆、カバーお願い!!」

「任せてえ!!」

そして、その言葉に真つ先に答えたのはピス・ダウンフオール。

戦闘の状況ゆえにはぐれていた彼女が、その戦火から即座に位置を把握して、駆けつけてくれた。

光力の槍の群れと、龍のオーラの砲撃によって、アントイツ達は接近が不可能になる。

そしてピスはすれ違うように井草に向かって飛び―

「頑張つてねえ、井草あ」

「OK、ピス姉さん」

―一瞬だけの口づけを交わす。

そして、形勢は覆らずに戦闘が続行される。

ナイアルの奇襲は即座に迎撃された。そして、状況は更に拮抗し―

『つていうか、ナチュラルにキスするのやめてください! 照れる羨ましい妬ましい微笑ましいとか混ざり合つてどう反応したらいいか!!』

「イツセーもしたらどうかかな? ハーレム王ならそれぐらいの甲斐性は必要だと思っけどつと!!」

「この状況下で漫才してんじゃねええええ!!」

思わぬ会話に思わずブちぎれた。

そして、ナイアルも判断を改める。

どうやら軽傷での打倒は困難だ。多少の手傷は覚悟しなければ、この状況をひっくり返せないだろう。

なのでこちらも覚悟を決める。

どうやら今後戦う時は、本格的に特務中隊を下部組織も含めて総動員した方が良さそうだ。それぐらいしなければ大打撃を受けるのはこちらになる。

とりあえず、現状はここをしのぐことだけを考えるべきだろう。そうしなければ後の勝利すらない。

ゆえにナイアルは遠慮なく敵の砲撃を無視する。

元より近距離からの殴り合いの真つ最中だ。向こうも下手な攻撃は避けるだろう。こちらが迎撃しないと判断したのなら、同士討ちを恐れて攻撃頻度が下がると判断。

如何に獅子の鎧を纏い、砲撃に対する耐性が上がっているサイラオーグが主体とはいえ、人情が邪魔をすると考えたナイアルは、確かに間違っていないかった。

事実攻撃に密度は下がり、そしてナイアルは反撃に転じる。

フレキシブルキャノンの攻撃を井草とサイラオーグに集中。まず二人を撃破してか

ら各個撃破を狙い――

「かかったな、ナイアル」

その瞬間、サイラオーグはナイアルに突貫する。

これまでの打撃戦から打って変わり、一気に組み付きを狙い動きを封じる。それに対してナイアルは砲撃の狙いを集中させる。

八門のクリムゾンブラスタークラスの砲撃の連射は、魔王クラスすら容易に削り取るだろう。

アグレアスの戦いではそれを警戒したバラキエル達がそれなりの動きを見せた為に行きなかつた。だが、この完全に打ちまくれる状況下なら話は別だ。

故に何の遠慮もなく、ナイアルは砲撃を試み――

『今だ、井草さん!!』

「ああ、ここで決める!!」

――その瞬間、とつさに狙いを集中しすぎた。

気づいた時には、井草はナイアルの真後ろに突貫していた。

「チィー！ させるか!」

即座にフレキシブルキャノンを向けようとするが、サイラオーグはそれを打撃で妨害する。

しかしナイアルは一門向ける事に成功した。

そして、魔王クラスの領域であるレセプターエボリューション相手ならそれで十分。この一撃で確実に時間を稼げる。

ナイアルはそう判断し――

「モードアシダカグモ!!」

――しかし、甘かった。

モード2にすら移行するレセプターエボリューションの本領は、未だ完全に発現していない。

それゆえに井草からすれば手札が増えすぎて混乱するが、かみ合う事さえできればそれは一気に化ける。

アシダカグモ。蜘蛛の中でも最高レベルの瞬発力を発揮する、ゴキブリの天敵。

その力をもってして、井草は砲撃に真っ向から対抗する。

即座にドロップキックの態勢を取り、そして砲撃に真っ向から激突。競り合うかと思われた次の瞬間、井草は続けざまの行動に出た。

そのまま躊躇なく、連続蹴りを敢行。その勢いをもって砲撃を削り取り、更にナイアルに突貫する。

「有りかオイ!?!」

「有りだ馬鹿!!」

その一瞬の動揺を見せたナイアルと、躊躇せず突貫した井草。難敵である事は分かっている。無謀である事も分かっている。

だがしかし、その猛威に対して無謀とも言える意地を見せて踏み込んだ井草は、少なくともその時だけはナイアルに届いていた。

その瞬間、秒で数十を超える連続蹴りがナイアルに叩き込まれる。

とつさに糸を出して捕縛し、ナイアルが逃げられないようにするという芸当までしっかりと出した連続攻撃。

衝撃でサイラオーグが弾き飛ばされるほどの威力が、一瞬で叩き込まれ、そしてトドメが入る。

「合計72発——」

そして糸が限界を超えてちぎれ——

「——この連撃が、お前への裁きだ!!」

——勢いよく、ナイアルは地面へと叩き付けられた。

井草はその時、緊張の糸が途切れて崩れ落ちた。

ようやくだ。ようやくだった。

今まで圧倒され続けてきた。間違いなく格上の存在だった。

その怨敵ナイアルに、今明確な痛打を与えた。

五十鈴との連携はカウントに入らない。あれは五十鈴の命を燃やし尽くしたからからこそなのだから、五十鈴のカウントに入れるべきだ。

井草の力で叩き潰したのは、きつと今回が初めてだろう。

仲間の力をたくさん借りた。それでもトドメはさせていない。

だがそれでも、確かにこの攻撃はナイアルに届いたのだ。

その事実が、井草の張りつめた糸を切り、そして井草は崩れ落ちる。

元よりアシダカグモは持久力に欠ける短期決戦仕様だ。必然的に消耗が激しい。

これからも必殺技的な運用になるだろう。使いどころを間違えれば、ガス欠で戦闘不能になる諸刃の剣だ。気を付けなければ。

とはいえ、今回は消耗しすぎた事もあつてのものだ。これからは体力中心で鍛えていこう。そうすればもう少しは運用できるようになるはずだ。

そして、井草は膝をつき―

「兄貴！」

後ろから突撃してきたバイアクヘーイツを、そのまま見送るしかなかった。

「離脱しやすぜ！ これから一仕事あるから急げってホテップ司令が!!」

「人使い荒いだろあの幼馴染は!!」

絶叫しながらナイアルはその手を掴み、そして一気に離脱する。

「逃げるな、ナイアル!!」

「う、撃ち落とすのです!!」

リアスとニングがとっさに反応して、その指示に従い砲撃が放たれる。

それを掻い潜りながら、ナイアル達は離脱していった。

どうやら戦闘不能には一歩足りなかつたらしい。いや、あの様子ではすぐに回復して全力戦闘が可能だろう。

次からは三桁は連撃を叩き込んだ方がいいようだ。こちらも要精進である。

「……はあ。疲れたあ」

そして、井草は背中から地面に倒れこんだ。

「お疲れ、井草さん」

イツセーもまた疲れた顔でそこに並び、腰を落とす。

二人して、紫の冥界の空を見上げた。

「……人間界暮らしが長いから、違和感あるんだよね、俺」

「あゝ。俺も最初に冥界来た時は特に印象深かったです」

そう言いながら、二人はぼんやりと空を見上げる。

「取り逃がしちゃいましたね、ナイアルの奴」

「まあ、パワーアップの噛ませ犬で死ぬほど甘い相手じゃないからねえ」

井草はそう軽く返答すると、しかしすぐに笑う。

「次はもつとボコるさ。そして、いつか必ず勝つ」

そう、それでいい。

禁手に至り、仲間と共に、なんとか殴り倒せるところにまでは到達した。

ならば、これから禁手になれて極めればいいだけだ。何なら人工神器の類を用意して

もらうのもいい。

それに、井草一人で強くなる必要もない。

情けない話かもしれないが、一人で意固地になるよりかはずつといい。

少なくとも、言わなくても力を貸そうとしてくれる者の力ぐらいは頼るべきだと、そ

う思う。

「イツセー。これからも、ナイアルと戦う時は力を貸してくれるかい？」

「当たり前ですよ。あの女の敵、絶対許せねえし！」

腕をしっかりと握りしめて、イツセーはそう答える。

それに井草は素直にほほ笑む。

そう、井草は一人ではない。

仲間がいる。

家族がいる。

そして、愛する者達がいる。

だから、力を借りる時は素直に借りよう。そして、その上で井草自身も力を貸すべき時は素直に貸そう。それでいい。

そう、その上で――

「次はもつとぎゃふんと言わせてやる。覚悟しなよ、ナイアル」

聞こえてないのは分かっているが、井草はそう告げた。

13話

一方その頃、アザゼルとサーゼクスは冥府から帰還していた。

「ったく。あの骸骨爺は面倒極まりねえ」

「過去の遺恨は確かにあるとはいえ、それを若者達に向けられるのは遺憾という他ない。困ったものだ」

そのため息をつきあつたアザゼルとサーゼクスは、しかし笑みを浮かべる。確かに大変な事態だったが、しかし良いニュースもいくつか出てきている。

三大勢力内部の裏切り者のあぶり出しは、ほぼ成功した事が一つ。中堅どころの墮天使や天使が内通していたが、目立つところは全て捕縛もしくは追放に成功した。

まだ教会や末端の組織など、警戒するべきところはある。新たに勧誘を受けて裏切る者が出る可能性もある。だが、今までよりかは情報が漏れにくくなる可能性は大きい。

悪魔側はビルデのクーデターで目立つところが一斉に離反している為、此方に関しては問題ない。最も、派閥争いなどがある為面倒なのは変わらないのだが。

しかし、シャルバが見境なくて良かったぜ。大魔王派の連中にも向けられてたから、

こっちは意外と負担が少なかつたしな」

「そうだな。現魔王派（こちら側）は超獣鬼（ジヤバウオツク）がいたとはいえ、数は半分だったのだから僥倖だ」

超大型魔獣についても大方片が付いたのが一つ。

悪魔だけではまだかかったかもしれないが、各勢力から戦力が来てくれた事で、だいぶはかどった。

これも和平の成果の一つだと考えれば、間違いなく良いニュースだ。今後の和平活動も進むだろう。

そして――

「つていうか、グレートレッドに乗って参上とか、イツセーの奴、外連味効きすぎだろ。なんだ、出待ちしてたのか？」

「なにせ彼はおっぱいドラゴンだからね。そういう星の下に生まれついているのかもしれない。まさしく冥界の英雄に相応しい少年だよ」

更にイツセーの無事が確認されたのも一つ。

よもやグレートレッドと合体して超獣鬼をせん滅するとは想定外だった。流石に全てをそのまま公開するのは難しいが、ある程度はばらした方が後が混乱を起こさなくていいだろう。

グレートレッドにしても愉快的な性分である事が判明したのも僥倖かもしれない。少

なくとも、今後交渉する機会があつた時には少しは役に立つだろう。細胞を採取される事を許容した当たり、話せば意外と分かつてくれるかもしれない。

オーフィスもイツセーと行動を共にしており、無事が確認。これで一安心といえは一安心だろう。

そして、サーゼクスはアザゼルを労わる様に微笑んだ。

「そして井草君も一皮むけたようだ。先祖としては一安心かな？」
「うっせえ。ま、安心したのはその通りだがな」

そして井草もまた、一皮むけた。

伊予が目覚めた事で禁手に目覚め、その上で一皮むけた事でナイアルに一泡吹かせたのだ。

色々となれな過去を知られた時は少し不安だったが、どうやら無事なようで何よりだ。

アザゼルは息を吐くと、そのまま肩をコキコキと慣らす。

「ま、俺も総督を辞任するし、当分あいつの周りに集中するのも良いかもな」

「確かにその通りだ。彼には母親代わりはいても父親に相当する人物がいなかった。それをあなたが代行するのが、彼に対する贖罪にもなるだろう」

サーゼクスはそう返すが、アザゼルはそれに半目を向ける。

「馬鹿かお前は。そんなんじゃねえよ」

「む？　なら？？」

「親代わりをするのは贖罪の為じゃねえ。アイツが俺の息子同然だからだ」

その言葉に、サーゼクスは納得すると微笑んだ。

「正論だ。その方が井草君も喜ぶだろう」

その言葉を適当に聞き流しながら、アザゼルは思考を始める。

イツセーの体と井草の禁手。どちらも特殊な事例であり、興味もあれば必要性もある研究になるだろう。

無限と夢幻の肉体で構成された体を持ったイツセーは、もはや異次元のデータと言っても過言ではないほどの価値を持っている。

ただでさえ研究中で調べるべきところが豊富なイツツ関係。それに特化した進化を遂げた、井草の禁手。まさかイツツの能力を進化させる事に特化した禁手になるなど、神器については世界で一番詳しいといえるかもしれないアザゼルでも想定外の埒外だ。イツセーの体に匹敵するレベルで興味がわく。

聖書の神は、一体どれだけのポテンシャルを神器に込めたのだろうか。亜種禁手の独自性に関して言えば、間違ひなく慮外面の禁手といえるだろう。

イツセーの神滅具も、二体の龍神の影響でどんな進化を遂げるか分かったものではな

い。そういう意味では、研究者としての興味も尽きない。

そして、それ以上に井草のことだ。

……真実を知られ、これから少しきこちなくなるかもしれない。

なにせ、両親の死の遠因はアザゼルが何の対応もしてなかったからといっていい。勿論知らなかったのだから、どうしようもない。とはいえ、それで片付けていいことでもないだろう。

だが、贖罪として親のように接するのも間違っている。

アザゼルが井草に親代わりになるとして、それは贖罪だからではない。断じてない。だから、基本的にはピスに任せていた。

するならば、それはアザゼルが井草のことを気に入っているからだ。そして、養子にするにしても井草の許可を得るべきだろう。

「……もし親代わりになったら、俺はルシファーの親代わりにもなるのか。そのうえで義理の娘が三人も追加され……ピスまでなるかもしれないねえ」

「色々大変だね。まあ、それが親の苦勞というものだよ」

訳知り顔で行ってくるサーゼクスを殴りたくなつたアザゼルだが、しかしここは悪魔領なのでぐつと堪える。

とはいえ、これで何とかこの戦いも終了し――

「サーゼクス様！ 大変です!!」

突如、泡を食った顔で悪魔の一人が駆けつける。

「どうした？ 一体何があった？」

サーゼクスがそう促すと、その悪魔は顔を真っ青にしながら声を上げる。

「はっ！ 現在、ムートロンの艦隊によつて冥府が攻撃を受けております!! 既に神殿

内部に深く入り込まれており、オリュンポスは各勢力に救援を要請しました!!」

……どうやら、ムートロンもただで転ぶ気は欠片もなかったようだ。

「ざまあと言つてやりてえが、流星にサマエルを奪われるのはまずい!!」

「動ける部隊を全員招集して送り込むんだ。急げ!!」

どうやら、まだまだ忙しい時間帯になるらしい。

『が……あ』

倒れ伏すハーデスを見下ろし、ホテップは肩で息をしながら一安心する。

ナイアルが井草・ダウンフォールに一矢報いられた時は戦力計算が一気に狂うかと

思ったが、すぐに復帰してくれた。

大魔王派の協力でフェニックスの涙の増産ができたのが大きい。技術供与の見返りに、一定の割合をもらえるようにして正解だった。

おかげで難敵であるタナトスとオルクスを抑え込む事ができた。彼らがハーデスの護衛として付けば、流石に状況が分からなくなっていただろう。

とはいえ、今の段階では生産速度にも限界がある。そろそろ新しいアプローチを用意したいところであった。

「ホテツプ様」

そこに、カルネテルがバイアクヘーイーツの姿で歩み寄る。

彼女には、今後の活動において重要になるカウンターとして、どうしても確保しておきたかったものを確保する為に部隊を率いてもらっていた。

そして、ここに戻ってきたという事は――

「サマエルの毒の抽出、現在10リットルまで完了しました」

「分かった。まずはそれを運び出せ。……いや、どうやらここまでだな」

何かに気づき、ホテツプは外に目を向ける。

そこでは、先ほどまでの死神の攻撃を遥かに凌ぐ種類の攻撃が放たれ、戦闘が激化していた。

そして、外で大暴れしているはずのナイアルからの緊急通信が送られる。

『おいホテツプ！ サージェクス・ルシファーが来やがったぞ！ しかもなんか、いきなりマジモードになって無双してるんだけどよ！』

「撤退の為の支援砲撃の準備まで殿を頼む。大丈夫だ、お前ならできる」

『無茶ぶり!! 俺ボロボロなんだぞ!! せめて他の7, 0以上の連中を呼んできてくれ——』

通信を速攻で切ると、ホテツプは肩をすくめてハーデスを見下ろす。

「運が良かったな。此処で貴様を殺す余裕はなさそうだ」

『……貴様……っ』

屈辱極まりない状況にハーデスは睨みを利かせるが、しかしホテツプは意にも介さない。

「今後貴様らの接触はできないよう、徹底的に監視させてもらう。あと英雄派が壊滅したので、彼らとの交渉の記録も流しておこう。……今後の活動には大きな制約がつくと考えるといい」

そう言い放つと、ホテツプはそのままカルネテルを連れて去っていき——

『……クカカ。気づいてないようだな』

——ハーデスは、ほくそ笑んだ。

屈辱を味わったのは認めよう。大きな被害を受けた事も認めよう。ブルートを失っただけでも痛手なのに、それ以外でも大きな被害を受けたのだ。これは本当に大打撃である。

だが、ハーデスとて長き時を生きた最高位の神の一柱。

万が一に備えた保険は、すっかりとしていたのだ。

英雄派や旧魔王派は御しやすいが、それに乗じて動けば大魔王派やムートロンが何かする可能性は考慮していた。

あの二勢力は警戒に値する。何かしらの意趣返しだけは考慮していた。

『……儂だ。データは取れたか?』

「はっ! 敵戦艦に侵入した者達が、データを持ち帰りました。……恐ろしいデータままでありましたが、これがあれば、我々もロキ神のようにイーツを開発できるはずです!」

『そうか、被害は?』

「船の爆発に巻き込まれて、三割が殉職しました」

『そうか。そ奴らの犠牲に見合った勝利を得ねばならぬじやろうな』

ハーデスもまた、暗躍の一つや二つはできる。

ムートロンの唯一にして最大の失敗は、艦隊を派遣するだけの大規模襲撃を仕掛けた事だ。

これだけの規模の襲撃ともなれば、他の勢力も大慌てで援軍を派遣したがる。サマエルの効果を考慮すれば、グレートレッドや味方側のドラゴンの安全を考慮する為にも、助けに行かねばならないのだ。

故に、今回の戦闘ではそれに賭けた。

潜入工作に長けた者を総動員して、陽動作戦まで敢行して敵の船に侵入。データの奪取を行った。

その船は潜入部隊が逃げ遅れる事を覚悟のうえで集中攻撃を行い、徹底的に破壊している。これならゼウス達にも勘付かれにくいだろう。

そして、サマエルそのものの奪取だけは阻止する為に徹底的に術式による防御を行った。

毒そのものは多少奪われても問題ない。うつとおしいドラゴン^斬は将来的に敵になる以上、ムートロンが多少片付けてくれるのならそれに越した事はないのだ。現時点での敵と将来的な敵が潰し合ってくれる分には好都合である。

そして大きな被害は受けたが、致命傷には程遠い。そういう戦い方をした。

ホテップとナイアルの戦闘能力を警戒して、ホテップは自分が受け持ち、最上級死神の中でも有数の実力者であるタナトスとオルクスをナイアルの妨害に徹させた。

読みが甘く死にかけたが、しかし生き残ったのなら逆転の芽はある。

『舐めるなよ、出戻り風情が。……貴様らが忌々しい三大勢力と潰し合ってくれるのなら、それに越した事はない』

ロキは迂闊に動きすぎた。

気持ちには分かる。そして、切り札があつた事も認める。

だが、あまりにも性急すぎたのだ。

自分は違う。準備は念入りに行い、相応のタイミングを見計らつて動かせてもらう。

臥薪嘗胆。今まで屈辱を味わつてきたのだ。勝機が見えたのなら、それを最大限に生かせるチャンスまで耐え忍ぶのみ。

今後に備えた動きに徹する事にしよう。具体的には、他の神々に協力体制を取り付けるのだ。

同盟に対して不満を抱く神々は少なからず存在する。彼らと連携を取れば、相応の規模の勢力になるだろう。

そのうえで、今回手に入ったイーツの技術をものにする事ができれば、同盟や禍の団に拮抗する大勢力にする事も可能はずだ。

その時までには雌伏の時だ。当面は居心地の悪い思いも我慢するべきだろう。それぐらゐの覚悟は必要経費だ。

『精々潰し合っているがいい。最後に笑うのが儂らだとは断言できんが、貴様らの思い

通りに動くほど、神は甘い存在ではないと知るがいい』

切り札とも言える技術を手にした事で、ハーデスは余裕すら取り戻していた。

そしてその頃、須弥山から一つの通達が同盟の各勢力に送られる。

英雄派の神滅具保有者を捕縛する事に成功したとの事だ。

ストレスの溜まっているハーデスのご機嫌取りの為に、冥府に叩き込む事を宣言。聖槍に関しては一時的にだが保有する事も告げていた。

イツセー達から手柄をかすめ取った形ではあるが、しかし実際に捕縛してしまった以上、文句が言いだしづらい状況だ。

混乱する世界情勢を暗示させるかのように、数多くの勢力がそれぞれの判断で動き出している。

何が起ころのか、それを全て予期できる者は誰一人としていない。

断言できるのは、これからの戦いは世界でも類を見ない大規模な争いになるという、ただ一点だけだった。

「……そんでビルデくん？ おじさんまで投入して何とか一体捕まえたけど、業獣バンダースナッチ鬼な
んでどうするのさ？」

「むろん研究に使うとも。これだけの強大な禁手による創造物は類を見ない。データを徹底的に採取するだけでも、アザゼル総督の人工神器研究に並ぶ成果を上げれそうだとは思わないかね？」

「なるほどねー。ま、暴走してもおじさんが出張ればすぐに終わるし、そこは安心してちよ♪」

「期待しているとも、スリエール。だが、吸血鬼の方はいいのか？」

「そつちはひと段落澄んだところだよ。とりあえず、復活させる奴らのデータとかを探さないとなつて感じかねえ」

「なるほど。労力や負担もあるし、有象無象を復活させても意味はないか」

「そゆこと！ 魂とかが特にしぶとい、ドラゴン系統からやってみるべきだつて結論だ

ねえ」

「問題は、果たして言う事を聞いてくれるのか……と言ったところだが、その辺りは？」
「ま、復活させてくれた恩とか、その復活に制約を付けるとかで何とかなるっしょ。無理だとしてもサーゼクス君達と組むような手合いは選ぶ気ないしねえ」

「なら、まあいいか。……とはいえ、アジユカ・ベルゼブブの協力が得られない以上、そろそろあなたにも表舞台に出てきてもらおう事になりそうだ」

「OK OK。今まで楽しさせてもらったからね。ここからは俺ちゃんも出張とするぜ」

「期待しているぞ、我が女王、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー？」
「ご期待に応えるぜ、我が王、ビルデ・グラシヤラボラス・サタン？」

14話

「はむ……ぐすつ……もぐ……ひつぐ……」

数日後の夜、行仁伊予は涙を流してご飯を食っていた。

より正確に言うと、起きた後の検査を終え、安全が断言できる状態となつて、メイドとして兵藤邸に派遣された日の夕食である。

ポロポロと涙が零れるのを止める事ができない。

そして、食事を口に運ぶ事も止められない。

なんというか、温かい食事だった。

食事そのものの温度ではない。食事に込められた真心の温かさだ。

こういったものが込められた食事を食べたのは、いつ頃だろうか？

心に染み入るその温かさに、伊予は涙を止める事なくご飯を掻き込む。

そして、それを見ながら、イツセーの母親である三希は、井草と五十鈴に苦笑を浮かべる。

「この子も大変な目に合つてきたのねえ。おばさん詳しく聞かないけど、もっと作つた

方が良かったかしら?」

「あゝ。その、ある意味五十鈴より大変だったというか」

「……ごめんなさい奥様、おかわり用意していただけると嬉しいですよ」

事情を詳しく言うわけにはいかないが、しかし多少は察してくれているようで助かって入る。

井草も五十鈴も苦笑いしながら、しかしほっこりと形容するべき感情で、伊予の喰いつぶりを見つめていた。

「伊予さん? 良ければこれも食べますか?」

「……うん」

アーシアにおかずを勧められて、伊予は漸く我に返る。

ちなみに、彼女の格好は五十鈴と同じくメイド服だ。

まかり間違つても、その格好で家人の目の前で家人よりがつつり食べるような恰好ではない。

思わず顔を赤くする伊予だったが、その目の前にご飯がよそわれたお茶碗が置かれる。

「え?」

「あら、食べないの?」

三希はそう首を傾げ、そしてにつこりと笑う。

「貴方若いんだから、たくさん食べるぐらいでちょうどいいわ。ご飯ならまた炊けばいいんだし」

「え、でも……」

思わず伊予は戸惑った。

なにせ伊予の立場はメイドである。

五十鈴と同じく、ニングの眷属悪魔に転生する事で罪業を賠償金で支払う形にし、神の子を見張る者がそれを無利子で立て替えている。そして、ニングの眷属悪魔兼直属メイドとして活動する事で、その給金の八割を返済に充てるという形だ。

メイドなのだ。普通はご飯をよそう側である。

そして彼女達はニングが間借りしている家の家主であり、普通に考えるとご飯をよそつてもらうのではなく、ご飯をよそつてあげなければいけない側だ。

冷静に考えて、もの凄いまずい事をしているのではないだろうか？

そこまで考えた伊予だったが、イツセーの父である五朗も、ニコニコしながら伊予を促す。

「ほら、今日ぐらいは素直に食べたいだけ食べていいんだよ。一日ドカ食いたぐらいで太ったりしないさ」

そして、五朗は五十鈴に視線を向けた。

「五十鈴ちゃんもここにきて最初のご飯の時は、君みたいにボロボロ泣きながら美味しく食べたしね、気にしなくていいよ」

「だ、旦那様あ!?! それ言っちゃいますか普通!?!」

五十鈴が大慌てするが、それをスルーして、五朗は伊予につこり微笑む。

「君も五十鈴ちゃんも、詳しく知らないけど大変な思いをしたのだけは分かったよ」

そして、伊予の肩に手を置いて、ゆつくりと頷いた。

「だから、おかわりぐらいは一杯していいんだ。それぐらいのことで文句なんて言わないさ」

その言葉と笑顔が、本当裏のない事である事を理解させてくれる。

それを受け入れて、伊予はボロボロと涙をこぼした。

「……良い人達でしょ、本当にさ」

五十鈴は伊予の背中をさすりながら、涙目で微笑んだ。

そう、この人達は、本当に優しく、器の大きい人達だ。

彼らのような人達を迎え入れてもらう事が、本当に素晴らし事だと断言できる。

「……」から、一緒にやり直そう?」

「……うん。うん………」

その光景を見て、井草もまた微笑んだ。

二人は本当に良い人達に出会えた。

ナイアルに出会つてからの四年間の出遅れも、きつとこれから取り戻す事ができるだろう。それだけの何かが、この家にはある。

「イツセー」

「は、はい」

井草は、イツセーに苦笑を向ける。

「ちゃんと親孝行しなよ？　こんな良い両親なんて、きつと滅多にいないんだから」
「……うっすー！」

親絡みで色々あつた井草に言われて、イツセーは少し気合を入れ直した。

今度、おっぱいドラゴンで稼いだお金で何か買ってあげよう。親には財布を拾つて届けたら、一割貰つたとしても言つてごまかそう。

そして夕食後、祐斗とギヤスパーを連れて、アザゼルが状況説明にやつてきた。

「……で、責任を取って総督を表向き更迭で自主退職した、と」

井草が簡単にまとめると、ため息を付いた。

「公的資金の着服の罪で追放されるとばかり思ってたら、これは想定外だね、ご先祖様」
「こそばゆいからご先祖様言うな。っていうかお前そんなこと思ってたのか」

アザゼルの半目が突き刺さるが、井草は無視した。

とはいえ、アザゼルの更迭は仕方ない事だろう。

なにせ、テロリストの親玉を同盟の重要地域に潜り込ませたのだ。結果的にオーフィスを引き込む事に成功し、更に彼女が変な連中に利用される事を阻止する事になったが、結果オーライで済ませていい事ではない。

ケジメとして更迭というのは、まあ妥当な案件だろう。

とはいえ、そんな相手に酷い事を言った井草に、伊予が目を見開いた。

そしてプルプルと震えると涙を流す。

「ど、どうしよう五十鈴ちゃん……！ 私たちがナイアルに引つかかって暴走したせいで、井草君が意外とグレてた!!」

涙目でそんな事を言う伊予の方に、リアスが手を置く。

そして視線が向けられてから、静かに笑顔を浮かべた。

「安心して。アザゼルはこれまでに何度も自分の組織の資金を着服して怒られてるか

ら。井草の冗談も当たり前のことよ」

「え、マジですかリアス様」

むしろ五十鈴がぎよつとなるが、皆が一斉に頷いた。

イツセーに至つては遠い目をしている。

「俺、純然たる被害者なのに女の裸を向いた悪党にされてボコボコにされたよ。……真女王で殴りたい」

ふるふる拳を震わせるイツセーの意見ももつともである。

それ以外にも色々と思ひ付きでイツセーが酷い目にあつているのも事実。しかも、その思ひ付きを実現しているから始末に負えない。とどめに神の子を見張る者の資金を横領してやる事も多々あるのだ。

むしろなぜ今まで更迭されなかつたのだろう。伊予と五十鈴の心は一つになった。

異形社会は平和である。人間達との間に一線を引いている理由が分かるといふものだ。

「あの、こんなノリで人間界と共同戦線とれるんですか？ イツセー、アンタは悪魔歴短いけど、どう思つてんの？」

思わず、比較的染まつてないであろうイツセーに、五十鈴は質問してみる。

エロス関係においては暴走特急な側面を持つイツセーだが、しかし根は意外と常識的

だ。エロさえ絡まなければ良識も常識もわきまえている。それも人間世界よりのだ。

裏社会にどっぷり染まっていた自分よりもまともな側かもしれないので、素直に聞いてみた。

答えは、遠い目が全てを物語っている。

「おっぱいドラゴンとか、日本じゃ子供にはやらないと思う」

「ああ〜」

伊予と一緒に納得してしまった。

確かにあれはやりづらい。主にPTAとかがマジギレしてクレームをつけてきそうだ。

異形社会のノリは人間界とは違う。これに関して一発で分かる例えが出てくるとは思わなかった。

乳龍帝おっぱいドラゴン。異形社会の風土ゆえにはやった、伝説の作品である。

と、そこまで言つてアザゼルが咳払いをして話を戻す。

「話を戻すぞ。で、今の俺の役職は三大勢力重要拠点のこの駒王町周辺の監督だ。神の子を見張る者での役職は特別技術顧問ってところだ」

「因みに総督は繰り上がり人事で副総督だったシエムハザさん。副総督はバラキエルさんだよ」

井草がそう続けて言っている間に、アザゼルは明らかにほくそ笑む感じだった。

「ふっふっふ。ま、結果的に俺は趣味に没頭できる。面倒くさい業務から解放されてほっとしたぜ」

その態度と言葉に、イツセー達は不安を覚える。

冷静に考えると、組織のトップであるという自覚は一種の枷になる。少なくともアザゼルはそういうタイプだろう。それでもあれだが。

そのトラブルメーカー気質のアザゼルが、組織のトップから降りて自由度の高い立ち位置についた。それも、趣味と実益が一緒になった役職だ。

何かやらかすだろ、こいつ。

皆の心がだいたいこんな感じになった。

「あ、先生。ちなみに俺の役職は特別技術顧問監視役が追加されたから。何かあつたらレセプターエボリューションになってどついでいいってさ」

「嘘だろ!?! シェムハザの野郎、覚えてやがれ!!」

そして一応対策はされていた。

この場において真女王に匹敵し、手札の数では上回る戦力であるレセプターエボリューション。

それを鎮圧に使う許可が出ているのなら、指す釘としては十分だろう。

……最も、痛い目にあつても懲りないダメな大人なので、あまり効果はないかもしれないが。

まあそれで総督更迭については終わったのか、アザゼルは三枚の紙を取り出す。

「で、本題だが昇格試験の結果が発表された。サーゼクスは色々忙しいから、暇になつた俺が代理で告げる」

その言葉に、イツセーが特に緊張感を露わにする。

まあ、事前連絡も無しにいきなり合否発表とかされれば、戸惑うのも仕方がないだろう。

「まず木場だが、合格だ。授与式は後日だが、今日から中級悪魔だぜ」

「ありがとうございます」

と、あっさりりと合否発表がなされていく。

そしてできる男、木場祐斗はあっさり合格だった。

そして祐斗に書類を渡したアザゼルは、次に朱乃に向き直る。

「で、朱乃も合格だ！ 先にバラキエルに伝えたんだが、あいつ男泣きしてやがったぞ」「バラキエルさんらしい。朱乃ちゃん、後でからかったりしないように」

「もう、父様つたら……」

井草の苦笑に、朱乃は赤面しながら書類を受け取る。

「最後にイツセー」

「は、はい!!」

そして、イツセーは背筋をピンと伸ばしてドキドキしながらそれを待っている。

合格できているかどうかマジ不安。そんな思考がもろばれだった。

「イツセーって最上級悪魔クラスの強さよね？ 合格余裕じゃないの？」

その緊張っぷりに、五十鈴が首を傾げる。

ちなみに、五十鈴はレストランにいなかったし、その後超巨大魔獣絡みで色々あったので、イツセーが実技試験で本気殴りをぶちかましてワンパンで試験を終わらせた事を知らない。

「……なり立てなので筆記が気になります。あと、実技もやりすぎているところがありますので、そこも気になるのかと」

小猫がそれを察してそれとなく伝えると、呆れた視線が向けられた。

「E E レベル換算6，0以上は確実のスペックが、なにやってるんだか」

「なんでみんな俺の実力を俺以上に正確に把握してるんですか!! 五十鈴さんはそもそもムートロンでしょ!?!」

「え？」

五十鈴に対するイツセーの文句に、伊予が首を傾げた。

「イツセー君、ムートロンの警戒対象リストの上位にいたはずだよ？ 確か若手悪魔の中じゃ「戦闘能力が高いうえに、何しでかす分からない」って理由で凄く危険視された気がするけど？」

……ムートロンの方が、イツセー自身よりもほどイツセーの危険性を分かっているようだ。

「そんなリストまで出回ってるの？」

「いえ、私が抜けたのは発表前なんで、詳しくは……」

リアスにそう返答する五十鈴はちらりと伊予を見るが、しかしすぐに肩をすくめた。「……伊予がそんなのに注目してるわけないか」

「うう。ゴメンなさい」

伊予がシユンとなるが、しかしその長い脱線はイツセーの緊張を更に高める。

汗まで書いている姿に皆が苦笑し、視線をアザゼルに向ける。

「もういい加減話してやったらどうだ、先生？」

「そうね。イツセー君気絶しそうだわ」

ゼノヴィアとイリナにそう言われて、アザゼルはちよつと残念そうに紙を見せる。

もつと引つ張つてから買ったがつているようだ。鬼畜である。

とはいえ、その書面に書かれている文字は――

「ま、お前も無事に合格だ」

「……………いよつしやあ!!」

イツセーも勢いよくガッツポーズをする。

念願の上級悪魔へのステップが、一段進んだのだから当然だろう。

アーシアも我が事のように感激し、涙を浮かべてイツセーに抱き着いた。

「おめでとうございます、イツセーさん!」

「ありがとうアーシア! やった、俺、中級悪魔だ!!」

イツセーもアーシアを抱きしめ返し、感激に振るえる。

「流石はイツセーだわ」

「私がマネージャーをしたのですから当然のことですわ! で、でもおめでとうござい

ますわ!」

リアスが褒め称え、レイヴェルもツンデレ成分を見せながら褒め称える。

そして次々に賛辞の言葉が飛び交う中、アザゼルはイツセーの肩に手を置いた。

「ま、お前のことだから上級悪魔も案外すぐだろうな」

「マジっすか!?!」

驚くイツセーに、アザゼルは軽く笑いながら頷いた。

実際問題、イツセーの戦闘能力はこの場のメンツの中でも最高格。真女王になれば、

砲撃戦闘ならレセプターエボリューションを超える最大火力だ。

総合性能なら同格で、手札の数ならレセプターエボリューションの方が上。しかし、シンプルな勝負なら真女王の方が僅かに凌ぐだろう。味方のサポートという面でも、赤龍帝の籠手は譲渡があるので、そこそこ渡り合えるはずだ。

既に戦闘能力なら最上級クラス。魔王クラスとも真つ向勝負ができるだろうそのポテンシャルは、力量に限定すれば全く問題がない。

実績を更に積めば、確実に昇格できるはずだ。

「ま、そういうわけだ。これからちよつとお祝いするぞ!! 酒持ってきた!!」

「先生! イッセー達は未成年だからね! 教師が未成年飲酒を勧めたらいけないでしょ!」

速攻で井草が踵落としを叩き込んで鎮圧したが。

そして、その光景を見てイッセー達も苦笑する。

「あらあら。正式に親族として認められた事もあって、気の置けない関係になりましたわね」

「あまりからかわないでよ、朱乃ちゃん」

井草がむつとした目を向けるが、事実である。

既にイッセー達には、アザゼルと井草の血縁関係については説明している。

最初は色々と混乱されたが、しかし当人達が結構軽く流している事もあって、すぐに収まった。

とはいえ、変化はきつちりあるのだ。

「……それで、総督更迭を気にダウンフォール性を追加ですか」

「そうだよ小猫。ま、人間世界には遠縁の親戚って事で通すがな。駒王学園でもそういう事にするから、フォローがいる時はよろしくな」

アザゼルはそう言いながら、更新した免許証を見せる。

そこにはしっかりと「アザゼル・ダウンフォール」の文字が書かれていた。

「つてことは、対外的にはピス姉さんの親戚って事にもなるのですか、アザゼル……元総督？」

五十鈴がふと気になった事を聞くが、それ以上にアザゼルをどう呼ぶかで一瞬混乱する。

それを笑って流しながら、アザゼルは五十鈴の頭をなでる。

「アザゼル先生で通しとけ。ま、井草の嫁の一人だから、親のように接してくれても構わねえぜ？」 伊予もな」

「あ、あう……」

伊予がいきなり振られた事もあり、顔を真っ赤にしてうつむく。

ちなみに、五十鈴もそっぽを向いているが顔が真っ赤であった。

「ですが、これから色々忙しい事もありますよね」

と、ロスヴァイセが緩み切った空気を引き締めるように、あえて言った。

「そろそろ魔法使いとの契約も迫っています。また、ギヤスパ―君に謎が生まれたタイミングで、吸血鬼がこちらに接触を試みているとか」

そう、なかなか問題も数多い。

そろそろ若手悪魔が魔法使いと契約を行う時期が迫っている。

何分若手の化け物が集まっているグレモリー眷属だ。募集をかけたら凄数数の応募が届くだろう。そこから選りすぐるのも大変である。

吸血鬼に関しても問題だ。

ギヤスパ―がゲオルクを圧倒した、謎の闇の力。そこに關しては不明な点が数多い。

そこに来て、未だに和平にテーブルに乗っかりもしなかった吸血鬼が交渉を求めてきた。

タイミング的には完璧に偶然だろうが、しかし何か嫌な予感を覚えるだろうか。

「あう。すいません、僕のことでなんか大変な事に……」

「いやいや、ギヤスパ―の所為じゃねえでしょう。神の子を見張る者でも分からねえんですから、落ち込むのはやめなせえ」

そう言つてギヤスパーをリムが慰めるが、確かにひと悶着起こりそうではある。

「そうなのです。冥府もムートロンに襲撃を受けたそうですし、これからも大変な事は多いのですね」

と、ニングはそういうと、イツセーと井草にまつすぐに目を向ける。

「……お二人のこと、頼りにさせてもらうのです」

「分かつてる」

井草はそう言つて決意を新たにす。

逆に、イツセーはちよつと戸惑つていた。

「お、俺としてはもうちよつと平和に生きたいんだけどなあ」

「当分無理だな」

と、アザゼルがバツサリ切つた。

「まあ確かに、ムートロンの本艦隊はあと一年もせずに来ますからね」

と、ロスヴァイセもそれに同意し、小猫も頷いた。

「……ある意味、そこからが本番」

「そうですね。禍の団も本来はそこまで戦力を温存する気でしょうし、そつからが本格的な戦争ですなあ」

リムもそう言い切るが、しかしアザゼルは意外と気にしてない感じだった。

そして、イツセーの方を見ながら、にやりと笑う。

「俺としてはお前らが何とかしそうな気がしてきたな。なんつーか、俺達おっさんがどうにかするより、お前達若い奴らを主軸に据えた方がいいんじゃないかねえかって思ってきたぜ」

「先生、俺達学生なんだけど？」

もうちよつと大人の責務を果たしてくれと言いたげに、井草が釘を刺す。

だが、アザゼルは静かに首を振った。

「いや、どつちにしても禍の団はお前らに寄ってくる。そしてお前らに叩き潰される。旧魔王派や英雄派が壊滅的打撃を喰らったようにな」

確かにその通りな気がするのが、難点である。

実際問題トラブルの方が寄ってきて、結果的に叩き潰しているのが基本傾向だ。

旧魔王派も英雄派も、それで壊滅的打撃を受けた。ムートロンや大魔王派も痛い目を見ている。普通にあり得る展開だ。

「襲ってくるなら叩き潰す。これがグレモリー眷属の鉄則ですね」

「出世の種が向こうからやってくる。前向きに考えるとここまで手柄を立てやすい環境もそうはないですね」

などと、小猫とロスヴァイセは物騒な事まで言ってきた。

そして、ゴホンと咳払いをしてニングは周りを見渡す。

「まあ、結局やる事は一緒なのです。……毎日を楽しく生きて、そしてそれを害する者達を撃退するだけなのですな」

「なるほど、そういう意味ではいつもと変りないわね」

と、リアスも同意する。

そう、やる事は結局いつもと変わらない。

日常を穏やかに過ごす。

悪魔は悪魔の稼業もしっかりとこなす。

そして、将来を生き残る為に毎日トレーニングを積む。

たまに外敵が襲い掛かってきた時は、一致団結して立ち向かう。

やる事は何も変わらない。欠片も何も変わらない。

「……凄いとこでメイドするのよねえ、私達」

「うん、なんか不安になってきたかも」

五十鈴と伊予は苦笑を交わし合うが、しかしこれも運命と割り切ってもらう他ない。

井草はそう諦め、そして言い切る。

「ま、今日ぐらいい思いつきり羽目を外そうか、……オーフィスもいいかな？」

「ん。我、ドライグの友達。遊ぶし食べる」

と、そこで沈黙していたオーフィスがそう告げる。

結局のところ、オーフィスの扱いは実に難儀した。

テロリストの親玉だが、いつの間にもやら切り捨てられ、弱体化。しかし弱体化しても同盟の誰よりも強い存在である。

結果として、多重封印をかけたうえでイツセー達が監視する形になった。

誰かの後ろをちよこちよこことついて行ったり、家事の手伝いをしたりしている。もはやマスコットのノリである。

「我、ドライグの友達」

「あの、イツセーって呼んでくれないか？ 友達は何のこと、そう呼ぶんだよ」

「それにドライグだとかんがらがるよ？ 赤龍帝ドライグと兵藤一誠は別個の存在なんだから、紛らわしいのはダメだと思うね」

「分かった。我、イツセーの友達」

イツセーと井草の言葉に、オーフィスは素直にそう答えた。

きわめて素直である。純粹すぎる良い子でしかない。

これがテロリストに利用されて強化手段になっていたのだから、同情するべきではある。

と、そこで五十鈴がふと気づいてオーフィスに近づいた。

「あ、オーフィス？　そういえば今日の内職は終わった？」

「バーコード500枚張った。今日のノルマ終了」

と、オーフィスは親指を立てる。

ちなみに、五十鈴がやっている復興支援金捻出の為の内職を、地味にオーフィスもやっている。

事情はあれどテロに加担した以上、封印措置と名目上の監視を付けているとはいえず、それとは別にケジメもいるのではないかと進めてみたら、あっさり承諾された。

ここまで素直だと逆に気が引けるが、まあ、色々と考えた上である。

複雑な事情なので、オーフィスはここにいないという事になっている。だが、万が一
ばれる可能性はある。

その際、程度はともかくケジメはつけているという言い訳があつた方がいいというわけだ。

それを確認して、五十鈴はにっこりと微笑んだ。

突撃訪問をされたときは失神までしたが、既に姉貴分である。

「そっか。ま、私も今日はやったんだけどね」

「あれ？　私は明日からだけど……オーフィスが先輩？」

ふと伊予が気づいてはいけない事に気が付いたが、そこは皆がスルーする。

そして、マスコットを加えたオカルト研究部は活気づいて少しだけお祝いをして、リアス達は悪魔家業に出発する。

ニングはアザゼルと共に今後の慰問関係で少し話をすると言って、外に出て行った。リムはリムで、ピスと何か話があるとの事で、外に出ていく。

そして、井草達は改めて集まる事になる。

15話

兵藤邸にある、井草・ダウンフォールの部屋。

超豪邸と化した兵藤邸の一室なだけあり、12条はあるその部屋には、大きめのベッドがある。

最近になって入れ替えたそれは、主にニングヤリムと一緒に眠る時がある、キングサイズのベッドだ。

つまりそういう事である。R—18なのである。

それはさておき、そのベッドの上で、井草と伊予と五十鈴は正座して俯いていた。なんでこんな事になったのか。

理由は簡単だ。ニング達がいらない気を回したという一点に尽きるだろう。

ベッドの片隅は避妊具が数種類置かれている。用意した覚えのないものまであるのだ。誰かがいらぬ気を回したらしい。アフターピルまで用意してある念の入りようだ。

余計なお世話と言いたい気分ではあるが、しかしこうでもしないと事に至らないとい

うのもまた事実。

四年前の一件において、三人が三人ともに負い目を持つているのが実情だ。誰かがお膳立てしなければ、下手したら数千年かけてもそういう事にならない可能性すらあり得る。

傍から見れば実に面倒くさい事だろう。お膳立てを整える程度の事はされても文句が言えない。

何しろ、こういう事では嫉妬深いイツセーですら「頑張ってください井草さん！」などとエールを送ってきたのだ。

あのイツセーがである。そこまで思われるほどに、問題だと判断されたという事だ。もはや苦笑いする他ない。笑うしかないだろう此畜生がという井草の精神状態だった。

「も、もうイツセーにしろニングにしろ下世話な事する事もあるもんだよねえ。あはははは……」

井草はそうから笑いするが、五十鈴も伊予も沈黙する。

「「……」」

沈黙が、響いた。

一応断言してもいい。井草達もそうする事に異論はない。

井草・ダウンフォールは、枢五十鈴と行人伊予を愛している。五十鈴も伊予も、少なくとも現状はそれに応えてくれていた。そういう意味では問題はない。

そもそも三人とも性的経験はある。ありまくる。

伊予と五十鈴の場合はかなり暗くなるが、それでも経験豊富なのは事実だ。井草もピスによるトラウマ克服の過程で、数多くの美女美少女と突きまくり搾り取られまくっている。そういう意味では、今更恥じらう必要性がない。

ただし、凄まじく三人がともに不安視している事がある。

—上手いかなかったらどうしよう………っ!!!

三人の懸念というか、恐怖はそこだった。

こと、井草の初体験は最悪である。

ナイアルの所為でタガが外れた五十鈴の提案で、目隠しをした伊予相手に井草がいたすという事をしたのだ。

ちなみに、ナイアルにすっかり開発されていた伊予相手に、童貞極まりない井草が行けるわけがない。少なくとも、この時点での伊予は童貞がりなどを楽しめるような調教を受けてないのである。必然的に情けない結果になった。

そういう経験がある井草と伊代はもちろん、それを鬱憤晴らしにすっかり見ていた五十鈴も、ほぼ同様のことを考えていた。

簡単に言えばこうである。

井草が二人を感じさせられなかったでしょう。

そういう性交渉の不一致が関係をギクシャクさせて、最終的に破局するという話はそこそこある。死後といっても過言ではない成田離婚の原因の何割かはそれであるという話もある。夜の生活の適合は、男女関係をの円滑化に必要な不可欠なのだ。

なので、完全に三人そろってビビっている。

「べ、別に今日しなくてもいいわよね、うん」

五十鈴が、顔を真っ赤にしながらそうそっぽを向く。

「そ、そうだよね。べ、べべ別にいつでもできるし、今日じゃなくてもいいよね！」

それに乗乗するかのように、伊予もどもりながら何度もうなづいた。

「……うん。そうだね！　なんていうか、この状況下ですと、絶対冷やかされるもんね！！」

井草も乗乗して、速攻で酒を取り出す。

部屋に念のために常備しているビールだ。念には念を入れて三人分確認していたのだ。

とにかく気分を変えよう。そしてまた次の機会に使用。

完全に不安なことを後に回す愚策だが、三人はとりあえずそういうことにしようと結

論する。

「そ、そうよね。そもそもプラトニツクな恋愛だってあるもの。別にS E Oしなくても恋愛はできるっての！」

「うんうん。五十鈴ちゃんいいこと言うね！」

「じゃ、じゃあとりあえず、伊予のメイド就職祝いで乾杯しようか」

五十鈴の照れ隠しの言葉に便乗して、三人と展開をピンク色から遠ざけようとする。

そして、井草は二人にビールの缶を渡して、ぎこちない笑顔を浮かべる。

「じゃ、伊予のメイド業務がうまくいくことを祈って!!」

「乾杯!!」

そして勢いよくプルを開け、そのまま勢いに任せるように一気飲みし――

「ん…………あ…………」

「あ…………う…………」

「う…………ん…………」

三人が我に返り、顔を見合わせる。

「「……………あれ？」」

おかしい。確か自分達は、ビールを飲んで――

――井草のことも伊予のことも大好き！　ぎゅーってするー!!――

――ううううううう！　伊予も五十鈴もやわらかいなあ、うあ、高ぶってきたあ――

――えへへえ。二人ともいい匂いがするう。あうく、いい気分――

――などという展開になったことを思い出した。

そして、今井草たちは素っ裸である。

いろいろと下半身が濡れていて、三人の舌は三人の唾液の味を鮮明に覚えている。

つまり、そういうことだ。

「ビール一缶で何してんだ俺はあああああ!!」

井草は頭を抱えてベッドから転がり落ちた。

一時の情欲に任せて人生最大の傷を負った井草が、酒に酔った勢いで暴走して二人とエロいことするとか、反省の色がないだろう。

井草は久しぶりにすさまじい自己嫌悪にさいなまれた。真剣に死にたくなかったが、二人はもちろんニングとリムも沈むので、気合で我慢する。

そして五十鈴もまた、ベッドの上でもだえ苦しんでいた。

『井草っクス最高井草っクス最高井草っクス超最高』って何を連呼してるのよ私いいいい!! 語呂がいいのが我ながら恥ずかしいいいいい!!』

ベッドの上で一番とろけていたのは五十鈴である。完全に前後不覚で、責められるがままにとろけていた。新感覚の造語まで作っている。

この三人でのエロ案件で諸悪の根源である自分が、寄りにもよって一番色欲にのまれるなど最悪である。冗談抜きで死にたくなつたが、もはや自分の命は自分の物でないため根性で我慢する。

それはともかく自分に腹が立つ。此処は経験豊富で知識があることを利用して、二人の性交渉のお膳立てというかサポートに回るべきだろう。

むしろ伊予に手玉に取られていた気がする。井草に酔いしれてしまっていたので、その辺の余裕がなかった。冗談抜きで恥ずかしさで悶死しそうである。

そして盛大に十分ぐらいいもだえ苦しんでから、二人は我に返る。というか、大事なことに気が付いた。

勢いに任せてエロいことをしてしまつたが、その最後の一人が黙つたままだ。

恐る恐る二人は起き上がり振り返ると、伊予はうつむいて肩を震わせている。

……伊予が泣いている。

顔面蒼白になり、絶望すら感じたのも無理はない。

四年前の一件において、伊予だけは間違ひなく被害者だ。少なくとも、伊予は井草と五十鈴を訴えてもいいだろう。

その伊予を、更になかせてしまった。

二人は顔を見合わせると勢いよく土下座態勢に入り――

「……った」

――その体制ゆえに、伊予の表情を見ることができた。

伊予は確かに泣いていた。だが、それは悲しみでも苦しみでも痛みでもない。

「……よかったよお……っ」

安堵の感情で、伊予は泣いていた。

ぼろぼろと涙をこぼしながら、不安から解放された表情で、伊予は井草と五十鈴に泣きながら微笑みかける。

「気持ちよかったよ。井草君も、五十鈴ちゃんも……っ」

その泣き笑いの表情を見て、二人は痛感する。

――本当にごめんね？ 井草君、初めてだったんだからもっと感じた声を上げればよかったですよね？――

再開したその時、伊予はそう井草に言い放った。

ナイアルのフェロモンで様々なものを失っていた状態での言葉だったが、しかし伊予

はその時の心からの本音を語っていた。

ずっと、気にしていたのだ。

だから、不安だったのだ。

それに気づいて、井草も五十鈴も伊予を抱きしめる。

「本当に、ゴメン」

「もう。いいって言ってるのに」

涙を浮かべながら謝罪する二人に、伊予は笑みを浮かべながら抱きしめ返す。

そしてポンポンとなだめるように背中をたたきながら、伊予は二人の体温をしつかりと感ずる。

「大丈夫。感じれるから。二人のこと、大好きだから」

そして、涙目の二人を見返しながら、微笑んだ。

「だから、あんまり謝らないで？」

その言葉に、井草も五十鈴も思わず見とれる。

それをおかしそうに見ながら、伊予はベッドサイドにある小箱を手取る。

その小箱を、避妊具の箱で口元を隠しながら、伊予は照れ臭そうに上目遣いになった。

「だから……もつと、しよっ！」

「はい！ 言質とりやしたぜ！！」

「休憩タイム中に私たち登場よお！！」

最悪のタイミングで淫魔^{バカ}二人が突入してきた。

「リムにピス姉さん!?!」

ぎよつとして井草は振り返り、そして気づいた。

あ、下手人こいつらだな。

酒をある程度飲みなれてている井草が、ビール一缶で暴走するわけがない。そして、伊予と五十鈴もいくら何でも暴走しすぎだ。ナイアルが相当楽しませていたはずである。

そもそも、酔った勢いで暴走したにしては記憶がはつきりしすぎている。

正気を失いながらも、しかし前後不覚になつてない。まるで理性のタガだけが外れたかのような精神状態であり、そんなものは普通に酔っぱらっただけではならないだろう。

「これが、墮天使驚異の技術力と指導力よお!!」

「ナイスですぜピス姉さん! いやあ、井草がすごいのは確信してやしたが、それをぶっけに行けずへタれるのは読めてましたからなあ!!」

そしてこちらが何か言うより早く全てばらした。

真剣にキレそうになった。怒りのあまりレセプターエボリューションになりかけた。

そのタイミングで井草はふと気づいたことがあるが、しかしそれはまだ置いておこう。

これの開放はまだ待つべきだ。今はまだ機ではない

「ふふふふ。墮天使驚異の指導力はどうだったかしらあ?」

と、ピスはドヤ顔を浮かべながら伊予と五十鈴に詰め寄った。

「数百年生きて色事にかまけた麗しき墮天使たちによるたたき上げの技術は、ナイアルにだって引けを取らないでしょお？ 墮天使は色ボケが多いからそういうの得意なのよお？」

「それ以前に、弟分と妹分に薬盛る普通!?!」

五十鈴のツツコミはもつともだが、ピスは聞いちゃいない。

「ふふうん。やるどころまでいけばうまくいくと思つてたのよお」

「ピス姉さんナイス！ そこにしびれて憧れやすぜ!! 井草はテクもタフさもすごいっすからねえ!!」

持ち上げるピスに乗つかるように、ピスは胸を張った。

「私たちが育てましたあ!! と、言うことで!!」

そう言つて、ピスは服を脱ぎ始める。

「ちよ、ピス姉さん!?! り、リムも止めてー」

慌てて増援を求める井草だが、救援を求める対象が明らかに間違っている。

気づけば、すでに半裸になったリムが井草に抱き着いていた。

しかも、一瞬のスキについて五十鈴も引き寄せる。

「ふふうん」

「ちよ、どこ触つ……ひゃん!」

絶妙な手つきで五十鈴の胸を起用に片手でまさぐるリムは、一瞬真顔になった。

「やべ、これすげえいい弾力。……井草ずるいですぜ、私にも分けて下せえ」

「リム、バイだったの!」

そういうえば、どさくさに紛れてニングをいじっていたような気もする。

そう思った井草の目の前で、リムはきよとんとした。

「そういう設計で作られてますぜ、私は」

へビーすぎる事実を思い出した。

リムはセクサロイド目的で製作されたデザイナーナースチャイルドだった。完全に失念していた。

「っていうか、どういうつもり!」

思わずハモってツツコミを入れる井草と五十鈴だが、ピスもリムもきよとんとした。

「はい? だつて私ら仲間でしょうが。……混ぜやがりなせえ」

「そうよお。邪魔しそうなニングちゃんはアザゼル監督が連れ出してくれたし、このチャンスは逃せないわあ。一緒に仲良くしましよお?」

「あのバカご先祖!! 後でシバく!!」

井草は速攻で新たな仕事である技術顧問の監視役としての権限を使用する決意をし

た。

断じて許さんあの駄天使。どうせ薬の用意もしたのだろうし、後でつぶす。井草はそう決意をし、そして戸惑いながら五十鈴と伊予に視線を向ける。

「……で、どうする?」

「え、えつと……伊予?」

速攻で五十鈴は及び腰になって伊予に目を向ける。

その困り顔に、伊予はぷつと噴出した。

「もお二人とも。さつきまで三人でしてたのに、いまさら五人になっただけで慌てすぎだよお」

「うう……」

正論なのだが、しかしちよつとは反論したい。

幼馴染同士という状況と、更に二人増えるのはまた別の流れではないだろうか。

などと思つたが、伊予は微笑を浮かべながら、再び避妊具の箱を取り出す。

「……私もすつかり四年間でエッチになつちやつたし、井草君もすつかり上手になつたもん。だったら、楽しんだ方がいいと思うし……」

そこまで言つて、伊予は顔を赤くして避妊具の箱で顔を隠す。

そして五秒間ぐらい沈黙し――

「——それに、もっとしたいし」

——殺し文句が叩き込まれた。

「井草、気合入れなさい」

「了解、さつき思いついた奥の手を使ってみる」

「あつさりスイッチ入りやしたな。意外と乗せやすい？」

「伊予ちゃんに弱いつて言った方がいいわねえ」

外野であるリムとピスがうるさいが、五十鈴も井草も完全に無視する。

というか、井草は開き直った。

ベッドの上でいろいろ喘がせて泣かせて謝らせてやる。あとで後悔して求めてやらない。

その決意とともに、新たな力を開放する。

「レセプターエボリューション……つと」

「「「え？」」」

思わぬ全力戦闘形態の発動に、女性陣が面食らった。

だが、井草の体は髪が青くなる意外に変化しない。

そして、調子を確かめながら井草はにやりと笑う。

「よし。全裸でやれば格好も全裸のままだ。……これならいける」

「あの……何がですかい？」

代表してリムが質問すると、井草はふふんと笑う。

「ほら、前に英雄派と戦った時にインキュバススーツ取り込んだよね？ あれ、そういうこと特化型みたいなんだけど、変身するからあまり役に立たなかつたじゃん」

そこまで言われて、リム達はハタと気づいた。

レセプター・カーゴ 受容の器の亜種禁手である、カーゴ・レセプター・エボリュション 進化せし受容体。その効果は、レセプタースーツの

能力を発展させる事と言つてもいい。

その結果として、井草は疑似的なデフォルトスーツのような状態になる。髪の色の変化などといった多少の変化は入るが、墮天使の姿のままスーツの力を使う事もできる。真の力は各種スーツのレベル2化などといったところにあるが、そこは今どうでもいい。

つまり、井草は人の姿のままスーツを使えるというわけだ。

そして、淫魔の力を使えるベッドマフィア。今までは使つてないという事は、答えは一つである。

「「「うわあ……」」」

その漏れた声は、呆れなのか期待なのか。

とにかく言える事はただ一つ。

「じゃあ、トレーニングもかけてここからが本番だね。……寝かす気はないからその辺よろしく」

ここからは、殆ど全員が喘がされる事になるという事だ。

「なんか置いてけぼりにされた気がするのです!?!」

明朝、真相を知ったニングによるジャパニーズセイザが敢行される事になるが、それはまた別の話。